『これが私の世界だから』

カオリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『これが私の世界だから』

【Ｎコード】
Ｎ２３７１Ｂ

【作者名】
カオリ

【あらすじ】
どうして自分はここに来たのだろうか。どうしてあの日、父を、母を、その手に掛けてしまったのか――――犯罪シンジケートに身を置く少女の物語、最終章突入。ついに明かされる呪われた血、黒沼の真実。陰に潜む“オミナエシ”とは何なのか。そして組織首領・ロヴの本当の目的は？（シリアス長編、ＳＦ要素有り・流血描写注意）アンケートご協力ありがとうございました！

プロローグ（前書き）

本作品には流血表現等が含まれます。苦手な方はご注意下さい。

プロローグ

「迎えに来たわ」と彼女は言った。

黒く巨大な門が轟音と共に開かれた。その先には明かりなど無く、ただ真直ぐな道が続いているだけ。まるで地獄の入り口のようだ、とぼんやりと少女は思う。

「さぁ、」

行きましょう。

立ち尽くす少女の背を促すように柔らかい掌が押した。響いたその声は優しく、まだ幼さすら孕んでいる。門の隙間を吹き抜ける風の冷たさに一瞬躊躇した後、少女はゆっくりと一歩を踏み出した。

何故だか漠然とわかっていた。もう自分には、前に進むより他に道は残されていないのだ。

「……ようこそ」

黒髪の『彼女』が少女の横で笑う。

ようこそ、　ここが　これから　あなたが　いきていく　せかい。

『これが私の世界だから』

第一章《始動》：終わりの日

そう、その日は唐突にやってきた。

黒沼家には、古からの習わしが廃れることなく受け継がれている。先祖は一体何をしていたのだろうか、一族は昔から武道を嗜み、一家の長男もしくは長女は剣技を習得し、常に剣客であれ、というのが代々の教えであった。故にこの家に生まれた子供たちは、幼いときから両親や祖父母にスパルタじみた訓練を受けて育つ。また、この家に産まれた子供が男児なら「剣」、女児なら「瀬」の字を名前に与えるのがもう一つの習わしである。真意の程はわからないが、黒沼家の人々はその掟を忠実に守って現代まで暮らしてきた。

『チトセ』と名付けられたこの家の次女は、剣技の才なしと判断された姉に代わり毎日を父との修業にあてていた。彼女の名もまた古くからの風習に則り、祖母・瀬津が考えたものである。

黒沼千瀬（くろぬまちとせ）は、三日後に十四の誕生日を迎えようとしていた。

＊

うちは、普通じゃない。

そう思い始めたのはいつからだっただろう？

一族のなかでは『出来損ない』だった自分が、実の妹に剣技の継承資格を奪われてしまった日だろうか。

否、と彼女は思う。

彼女にとって一家の伝統などは別段どうだって良いことだったし、むしろ自分の身代わりにされてしまった妹を不憫に感じているくらいだ。

問題はそこではない。けれど。

「……セ、モモセってば！　ちょっとぉ聞いてる？」

「……え、あ、ごめん恵子。何？」

「もぉ。妹の誕生日近いんでしょ？　って聞いたのよ。何か買ってかないの？」

「……そうだね」

いい店知ってるんだ、と満面の笑みを浮かべた友に引きずられるようにして彼女は一軒の雑貨屋へ入っていく。

恵子はこの辺りにひどく詳しい。逆らう理由は見つからなかったのだ。

彼女――百瀬（ももせ）の妹は特異だった。彼女の一族自身が、妹をその環境へ追いやったのだ。

一族の期待を一身に背負った少女は来る日も来る日も真剣を片手に父親と戦っている。まだ十三歳だが学校へもろくに通っていない。

本当ならばその『役』は百瀬が負うべきものだったのだが、彼女は刀に興味を示すことができないばかりか厭うてさえいた。妹が代りに選ばれた原因は百瀬にあると言ってもおかしくはない。

かわいそうな、わたしのいもうと。

地方の高校で寮生活をしていた百瀬は明日、一年ぶりに実家に帰る。

妹の誕生日を祝うためだ。

常に重苦しい妙な空気の漂うあの家に帰る理由なんて他に無い。
はやく妹に会って、ただいまと言ってやろう。それから、ごめんねと言おう。

そのとき既に百瀬の胸には、えも知れぬ不穏な気配が渦巻いていたのだ。

――この忌まわしい風習が一族を滅ぼすことになったのだと、この時誰が知り得ただろう。

千瀬（ちとせ）にとって、姉の百瀬（ももせ）は特別な人間だった。
親類の期待を一身に背負いながら一日の殆どを道場で過ごしていた彼女には友達もいなかったし、大人達は皆、千瀬に一人前であることを要求する。そんな中で、百瀬だけが自分を年相応に扱ってくれた。

歳の差は三つしかなかったけれど、彼女の大人びた笑顔が好きだった。毎年彼女が欠かさずくれる、誕生日プレゼントが楽しみだった。
……けれど、今年はもらえないかもしれない。

少女はそっと息を吐いた。憂いを含んだそれは誰に知られることもなく空気に溶けて消える。
大好きな姉。今の千瀬にとって、一番大切な存在。

――姉さん。

灰色の空を見つめながら、千瀬は重い足取りで道場へ向かう。頭に浮かぶのは父との会話だ。

昨日父が彼女に、廃れてしまった黒沼の伝統を復活させる話を持ちかけたのである。

死合（しあい）、だ。

もともと黒沼の剣技は、最後に真剣を使用し師と弟子で命懸けの試合を行なっていた。そこで弟子が生き残れば、晴れて免許皆伝である。

時には死者を出すことのあったこの最終試験はずいぶん前に廃止されていた。現代の日本で行おうものなら、即刻警察が出動するだろう。ただでさえ千瀬の修行は一族しか知らない、極秘のものであったのに。

その試験をもう一度執り行うことが、先日の親族での話し合いで決まったらしい。

黒沼の一族の家は、どういうわけなのかこの区域に密集していた。千瀬の従兄の家は三軒先に建っているし、祖父母が暮らすのはすぐ裏手だ。

そのせいなのか、親類を集めて各家庭の近況報告などをしあう『親族会議』が頻繁に催される。

会議を主催するのは、たいてい一族の伝統を重んじる年寄り達なのだが、最近の話題は千瀬の剣技についてがほとんどであった。千瀬は、女児にして稀に見る傑士なのだ、それ故に一族の期待も大きい。

なぜそんなことをするのだと、質問する権利は少女には与えられな

かった。黒沼の一族はただひたすらに掟を遂行することを考えている――まるで何かに取り憑かれてしまったかのように。

お前なら生き残れるだろうと笑った父の顔が、ただ少女の胸にのしかかる。

姉さん。

あたし今日、死ぬかもしれない。

道場では既に父が装束を纏って待っていた。

……それで。あたし、この後どうしたんだっけ。

＊

全てが崩れたのはいつかと考えれば、もうとっくに崩れていたのかもしれない。

胸騒ぎを感じて急いで家路に着いた百瀬を初めに出迎えたのは、玄関に満ちていだ怖気のするほどに生暖かい空気だった。次いで濃厚

な鉄の香りと、僅かな腐臭。
床には綺麗に生けてあったはずの百合の花が、無残に散らばっている。
百瀬は鞄を玄関に投げ捨てると、その花を踏み越えて居間へ向かった。

鉄の香りが強まる。嗅いだことのある臭い。
嗚呼、血だ。

そう思った瞬間、百瀬の目の前に赤が広がった。彼岸花のように弧を描き壁を染め上げる大輪の花。白塗りだったはずの壁一面を濡らしたその赤は、てらてらと光沢を放つ。

百瀬はゆっくりと手を伸ばす。目の前光景が信じがたかったのだ。
少し触れればどろりとした雫が垂れて、思わず一歩退いた。

――ごとん。

退がった拍子に何かに躓く。こんなところに、なにかあっただろうか。
頭がぼんやりしてしまってうまく考えられない。踵に触れている物を確認するために、百瀬はゆっくりと体を捻った。

「……嗚呼、」

どうして、叫ばないでいられたのだろう。
ただ少女は、自分の体温が静かに下がってゆくのを感じていた。

焦点の定まらぬまま、見開かれた目。
散らばっているこれは髪か。
僅かに濡れる半開きの口からは乾いた舌が覗いていた。
『そこ』から下に、あるべきはずのものがない。

母の首が、彼女を見ていた。首から下を切り離されて。

「……姉さん」

聞き慣れた、けれど懐かしい声がした。百瀬は声のほうへゆっくりと振り返る。
彼女は現れた妹をただ見ていた。喉の奥に声が張り付いてしまったかのように何も言うことができない。口を開いても漏れるのは呼吸の音だけだ。それがはっきり聞こえるほどに、今この家の中は静まり返っている。

悲しそうな目で、ごめんなさい、と呟く妹。彼女が着ているものは深紅の浴衣――否。【死合】を執り行う際に着用する、死に装束を模した衣裳だ。純白だったはずの、それ。
血糊でべっとりと頬に貼りついた髪や赤く染まった着物を見れば、何が起こったのかは知らざるをえなかった。
けれどそれを既に享受してしまっている自分がいることに気が付いて、百瀬はふいに笑いたい気分になる。

何故だろう。いつかこういう日が来るとわかっていた気がした。
たぶん、ずっと前から。

千瀬が今握っているのは、刃渡り僅か１０センチほどの果物ナイフである。そんなもので母の首を刎ねることができたのだろうかと、百瀬はぼんやり考えた。ナイフから滴る雫は、悲しいほどに赤い。百瀬ははっきりと悟っていた。自分は今この瞬間に失ったのだと。家族のみならず、おそらく親類全てを。そして、自分達の生きてきた世界を。

「姉さん……ごめんなさい、ごめんなさい……」

自分も死ぬのかなと、少女は静かに思う。妹に殺されるのなら受け入れられるような気がした。不思議だ、どうしてこんなに穏やかでいられるのだろう。

「ごめんなさい、姉さん…あたし、行くね」
「……え？」

「お話は終わった？」

突如、朗々とした声が響く。百瀬は目を見開いた。何時の間にか、千瀬の後ろに二人の人間が立っていたのだ。
いったいどこからやってきたのか。

そんな疑問が浮かぶ前にまず、その二人の容姿に目を奪われる。

一人はすらりと背の高い女だった。少女というには大人びているかもしれないが、女性と形容するにはやや幼い。鮮やかな金の髪が、真っ黒なスーツによく映えている。マリンブルーの瞳はどこを見つめているのかわからない、不思議な色を湛えていた。

もう一人は腰まである真直ぐな黒髪の少女で、今百瀬たちに声を掛けたのはこちらのようだった。小柄で華奢な体つきをしている。二人ともまだ十代、顔立ちからして日本人ではないのだろう。

彼女達はこの部屋の惨状を気にも止めず、悠然とそこに存在していた。

黒髪の少女が、大きな漆黒の瞳で百瀬を見つめて言う。

「ごめんね。もうこの子、連れて行く時間だから」

少女の声は、柔らかなソプラノ。

何処に、とは聞けない気がして、代わりに百瀬は少女に問う。

「あなたは、だれ？」

自分でも声が擦れているのがわかった。

少女は物音をたてずに千瀬のそばへ歩み寄ると、その腕で後ろから千瀬を抱擁する。ふわりと黒髪が揺れた。

「――私は、ルカ」

ルカは、笑った。

「チトセを迎えにきたわ」

それは全ての終わりの日、そして全てが始まる日。
この日この瞬間、世界から二人の少女が消えた。

第一章《始動》：-Ｌｕｃｉｆｅｒ-

少しも覚えていないと言えば嘘になる。血に塗れた着物を脱がされ体を拭われた感覚や耳元に聞こえていた声は微かだが記憶にあったし、何よりもその手にはまだ刀の感触が残っていた。刀が人間の体を貫いた、生温かい手応え。

ただ、その後のことを少女は全く思い出せないのだった。気が付いたら門の前に立たされていて、たった今彼女はそれを通り抜けたところだ。

姉はどうなったのだろう。あの家はこれからどうなるのだろう。なぜ自分はあんなことをしたのだろう……いくら考えても、わからない。少女は前を行く二人をぼんやりと眺める。この二人が他でもない、彼女をこの場所へ連れてきた張本人。

「ルシファーの建物はすごく広いんだけど、すぐ慣れるから大丈夫よチトセ」

黒髪のほうが少女、千瀬（ちとせ）を振り返って言う。千瀬は確かめるかのように口の中で小さくルシファー、と繰り返した。

――“ルシファー”は多数の構成員より成る大規模な犯罪組織である。けして表には出せないような取引や盗みに至るまでを堂々と行い、また他の組織との勢力争いも激しく殺し合いも頻繁に行なわれる。裏社会で今、最も勢いと権力のある一団。

これが、千瀬が黒髪の少女――ルカから説明されたこの組織の概要だった。そしてそれは、これから千瀬が所属することになる組織である。

マフィアなのかと尋ねたら、ルカはそのようなものだと言って笑った。

「正確には、シンジケートって感じね」

裏の世界に名を馳せる、この世の犯罪を支配するギャング団。この二人はその一味から千瀬を迎えにやって来たのだという。

金の髪をしたほうは『ミク』だと名乗った。ミクもルカもそんな世界で生きているとは到底思い難かったが、現に自分がその世界に踏み込もうとしている今、千瀬には事実を受け入れる他無かった。

近ごろは犯罪組織といっても様々で、厳重な情報管理やネットワークを駆使した組織態勢がとられていることが多い。しかし結局のところ武力重視なのは昔から変わらない、不変の事実である。

そしてその『武力』を手に入れるために――この組織では、ある特殊な試みが行なわれていた。これが彼女達が千瀬を迎えに来た、たった一つの理由。

――ルシファーは、“殺人者”を集めていたのである。

集められた者達は、敵対するシンジケートやマフィアとの戦いに使用される。必要なのは絶対的な力、殺しの能力。

「あたし達が必要としているのは、“分別ある殺戮者”」

ミクがその碧い瞳を千瀬に向けて言った。

「単なる快楽殺人者とか、無差別殺人するような馬鹿はいらないの。しっかりと我を保ち、論理的に物事を考え、なおかつ冷静に迷いなく殺人できる――そういうやつを、集めてるのよ。世の中の警察の手に渡る前にね」

「……あなたは選ばれたの、チトセ」

ルカが柔らかく笑んだ。どこまでも優しいその声に、千瀬はやはり夢を見ているような気持ちになる。自分が犯してしまったこともこんな組織が存在することも、嘘のようだ。本当の自分は寝室で夢を見ていて、姉の帰りを待っているのではないか。

――少女の思考はそこで途切れた。突如目の前に巨大な建物が現れたのである。門を抜けてから数分、霧に覆われ視界の悪い道のせいで気が付かなかったが、少女達は着実にこの建物を目指して歩いていたのだ。

……とにかく大きい。一見して洋館のようだが、その奥には古びたビルやシェルターのようなものまでが見える。

「ルシファーへようこそ」

ルカが分厚い扉を押し開けた。組織本部の入り口だというのに警備員はおらず、いささか不用心な印象を受ける。中に入るとまずホールのような場所へ通された。

――広い。少女は瞠目する。一面に敷かれた深紅の絨毯は毛羽立ち埃が積もっていたが、天井のシャンデリアは知識のない千瀬にさえその価値が見て取れる。

ホールの端にには立派な螺旋階段が備え付けられていた。二人に続いて千瀬もそれを上がっていく。ミクの履いていたヒールがかつん、かつんと音を鳴らし、静寂に溶けて行く様が不思議な気持ちにさせた。

「それじゃあ、後は説明したとおりだから。あの部屋に入ってね。あなたのことは知らせてあるわ」

階段をのぼりきったところでルカが告げた。行く手には鉄製の扉が一枚あって、そこのことを言っているのだろうと少女は思う。

「あの……ルカさん」
「ルカでいいよ。何？」
「……姉さんは、どうなったんですか」

千瀬はどうしても気になっていたことを口に出した。人々が死に絶えたあの家で、姉はどうすればいいのだろう。殺人鬼と化した自分を恨むだろうか。それとも――まさか自分はあの後、姉を殺してしまったのだろうか。
覚えていないことが恐かった。思わず俯いた少女の頭を柔らかな手が撫でる。

「安心して。『学園』に入ってるから」

世間的には死んだことになってるけどね、と付け足してルカは笑う。その笑顔に、なんだかひどく千瀬は安堵した。

「さあチトセ、行ってらっしゃい。今日から貴女は“ルシファー”の一員よ」

背中に温かな声を聞きながら、少女はゆっくりと鉄の扉に手を掛けた。

第一章《始動》：ＥＰＰＣ（１）

微かな黴の臭いが鼻についた。重たい扉を開いたその奥は薄暗く、空気も心なしか淀んでいるように感じる。
千瀬は小さく息を吸い込むと、ゆっくりと部屋の中へ体を滑り込ませた。

「あなたがチトセ？」

突如耳元で聞こえた声に千瀬は体を強ばらせる。恐る恐る横に目をやれば、一人の少女が千瀬を見つめているのだった。
――近い。少女の鼻先から千瀬の顔まで、僅か十センチ程の隙間しか開いてない。少女の気配を全く感じなかったことに驚いた千瀬が目を丸くすると、相手は人好きのする笑みをにこりと浮かべてみせた。

「シュン！　早くっ！！　チトセが来たよ」

少女は後方へ向かってそう叫ぶと千瀬の手を握る。白くて華奢な指先が遠慮なく千瀬の掌を包み込み、そのまま勢い良くぶんぶんと振られる。

「あたしは、ロザリー・エレクトラ・ウィルヘルム。皆はローザって呼ぶよ」

よろしくね、と少女――ロザリーは屈託のない笑みを浮かべた。高い位置でツインテールにされたプラチナブロンドの髪がふわふわと揺れる。同じ色の睫毛に縁取られた大きな瞳は薄い青、肌は抜けるように白い。しかしどこからどう見ても西洋人の彼女から紡がれた

言葉は流暢な日本語で、千瀬は再び目を見開く。

「で、あっちがシュン」

息つく間もなく喋り続ける少女の指差したほうを見ると、緩慢な動きで一人の少年がやってきた。

「どーも。武藤　駿デス」

シュンと呼ばれた彼は無造作に伸ばされた黒髪を掻き上げながら欠伸を一つ零した。さして興味もない様子でに千瀬の事を見下ろしながら、お前が新入りかと尋ねる。
千瀬が小さく頷いたのを見ると、駿はその場にあぐらをかいて座り込んだ。

「ふぅん。で、お前は何したわけ？」
「ちょっとぉ、シュンってばいきなりー」

手を伸ばして咎めるロザリーを欝陶しそうに避けながら、駿は目だけで千瀬に答えを促した。質問の意図がわかってしまった千瀬は、それを躊躇う事無く口にする。

「……殺し」
「だろーな。センコー？　ダチ？　親か？」
「親類……ほぼ全部」

千瀬が静かに答えると、駿はそうかと頷いて笑う。それがかひどく真直ぐな笑みで、なんだか千瀬は彼から目が離せなかった。

「《スローター》へようこそ、黒沼千瀬。俺たちがお前の当座の教

育係だ」

ぱちぱちと、隣でロザリーが無邪気に拍手を送っていた。スロータ
ー？　と首を傾げた千瀬に、あとで教えてやるよと駿が言う。

「お前、歳いくつ？」
「十三……違う、十四」
「あたしと同じだぁ！」

嬉しそうにはしゃぐロザリーを駿が押さえ付けて黙らせる。聞けば
彼のほうは十七歳、歳が近いからこそ二人が千瀬の教育係に選ばれ
たのだろう。
教育、といっても千瀬には何を教わるのか皆目見当が付かなかった
のだが。

「じゃあまず、面子の紹介からいこうか」

駿が部屋の奥に視線を向ける。千瀬は今になってはじめて、この部
屋の中に他にも人間がいることに気付いた。

少女達が今いるこの場所は四方から灰色の壁に囲まれ、天窓が一つ
しかない。全体を見ればかなりの空間があるのだが、酷く圧迫感が
あった。部屋と言うのにもいささか語弊があるかもしれない――ま
るで、牢獄のようなのだ。
全ての壁の前には大量のガラクタ（一見して粗大ゴミのようだ）が
積み上げてあり、それに紛れてしっかりしたベッドやソファーが置
かれている。

そのソファーや、ベッドや、あるいはガラクタの山の上。めいめい
に腰掛けている、いくつかの人影に千瀬は気が付いたのである。

第一章《始動》：ＥＰＰＣ（２）

「紹介っつっても、今はこれしかいないんだけどな」

ごほん、と勿体付けるように咳を一つ。駿は体を強ばらせた千瀬に笑いかけ、俺たちの仲間だと囁いた。

「まずはシアン」

少女の視界の中で一人の人間が立ち上がる。年は二十代半ばだろう、薄いブラウンの髪と同じ色の瞳を持った“彼女”はこちらに手を振った。

「はじめまして、シアン・エルフィールよ」

よろしくね、と笑うシアンはイタリア出身なのだと横でロザリーが説明する。

千瀬は挨拶を返しながら、ここの人間は皆日本語が喋れるのだろうかと首を傾げた。少女にとってはありがたい話だが、何だか妙な気分にさせられる。

「そっちがサンドラ・ジョーンズ」

駿の示した先、ロザリーの向こう側にいたのは豊かなブロンドの髪を胸の前に垂らした紫の瞳の女であった。少女と目が合うとサンドラはふわりと笑む。次いで優雅な動作で礼をした彼女に、思わず千瀬は見惚れてしまった。

身に纏った黒のロングドレスから覗いた手足のラインが艶めかしくさえある。自分が何をしているのかを忘れかけた千瀬は慌てて礼を

返した。

「――で、そいつがレックスだ」

レックスと呼ばれた大男が片手を挙げて笑う。会釈を返した千瀬は、壁に積まれた瓦礫に座り込んでいる彼の体の大きさに目を見開いた。着古された衣服越しにもわかる腕の太さ、逞しい筋肉。何よりもその身長は、傍に寄れば大岩のように感じるに違いない。東洋人の少女にとって彼のスケールは驚異だった。何を食べているんだろう、と場違いなことを考えてしまう。

「あれ？　おい、オミは？」

「今日は見てないわよ」

駿の言葉に答えたのはシアンだ。オミ、というのもきっとここで生活する人間の名なのだろう。

「じゃあ後で良いか、他の連中は出掛けてるしな」

今のうちに覚えておけと促され、千瀬は心の中で目の前の人物の名を繰り返した。駿とロザリー、シアン、サンドラ、それからレックス。いったいあと何人いるのだろうか。

「お前には覚えてもらわなきゃなんないことがたくさんあんだよ」

千瀬の心を見透かしたかのような駿の発言に、少女は僅かにどきりとする。

「さて、じゃーまずルシファーの構造から説明すっかなぁ」

面倒臭いんだよこれ。
そう言って嘆息した駿の頭をぺしりとロザリーが叩いた。

「命令なんだからしょうがないでしょー、文句言わないっ」
「でも何で俺なんだよ、俺が細かいの嫌いだってあいつ知ってんのに」
「だからでしょ」
「畜生、ロヴのやつ」

眉根を寄せて顔をしかめながら、駿はどこかから一枚の紙を取り出した。そこに鉛筆で書いては消し、書いては消しながら何かを作成していく。

「シュン、線曲がってる」
「うっせェ！」

少年は細かい作業を心の底から嫌っているらしく、はた目から見てもストレスが募っているのは明白だった。千瀬には彼が何を書いているのかはわからない。
作業を続けている間にも駿の口からは激しい悪態が飛び出していたが、どうやらそれは『ロヴ』なる人物に宛てられたものらしい。

「ロヴのサド！　鬼畜！」
「シュンをいじめるのが楽しいんだよきっとー」
「変人め！」
「あははっ言えてる」
「……あの」

話の全く見えない千瀬は恐る恐る口を開いた。このまま彼らのやりとりを眺めていても良かったのだが、聞きたいことが出来てしまっ

たからだ。

「ロヴって？」

「俺たちのボス」

え、と一声あげるなり硬直してしまった少女を見ながら、何だよお前まだロヴに会ってなかったのかと駿が言う。

彼らが散々暴言を撒き散らしていた相手は、あろうことかこの組織の首領であったらしい。

「――と、完成！」

一度しか言わねぇからよく聞けよぉ、とぼやきながら駿は紙を広げてみせた。

見れば家系図のようなものが完成している。消し跡と歪んだ線で構成された、若干いびつな出来ではあったが。

「うちの組織図」

そういうと駿は図の一番上の指差して見せる。《ＨＥＡＤ》と書かれたその場所が何を意味しているのかは明白だった。

「《ヘッド》、首領のことだ。この組織のトップにあたる男――ロヴ・ハーキンズ」

千瀬はまだ見ぬ首領に思いを馳せた。彼女を迎えにきたルカとミクもこの男の命で動いていたのだろう。ならば千瀬をこの組織へ迎え入れた本当の張本人は、彼なのだから。

本人は変人、と渋い顔で駿は付け足した。

「《ヘッド》には《エイド》って呼ばれる補佐がついてる。こいつも男。その下に《テトラコマンダー》っていう大まかな仕事の司令塔となるやつが全部で四人」

ここね、ロザリーが指差したところを見れば、なるほど確かに図もそうなっている。上から順に樹系図のように枝分かれしたその先がどんどん複雑になっていることに気が付いて、思わず千瀬は身構えた。

「コマンダーは各々に《ポート》ってよばれる十人から二十人くらいの部下を所有してるんだ。情報収集や事故処理を請け負うポートが二グループ。残り二つは現場組だ。この二つのポートの配下に《パース》って呼ばれるやつらがいる。シンジケートの末端構成員だな。こいつらは何人いるのか、俺にもわからない」

とりあえず沢山いると思っとけ。そう言った駿の口調は何だか投げ遣りである。

図の最下部の、ごちゃごちゃしている部分――これがおそらく《パース》を示すのだろう。

「……と、これが大体の組織構成。ここまでの内容で質問は？」

「う」

千瀬の口から情けない呻き声が漏れた。質問するも何も、話が大きすぎて理解できないのである。とりあえず千瀬は、素直に一番の疑問を口にした。

「あたし達は、どこの所属なの？」

「――俺たちは別格」

駿は勿体ぶるようににんまりと笑った。細められた目が猫のようだ。

「俺たちの所属は、ポート以上のヤツにしか存在を知られてない機密機関だ」

少年の言葉にロザリーが続く。秘密を分かち合う瞬間のように声を潜め、いたずらに笑いながら。

「《ヘッド》直属の配下にあたるわ。地位は《テトラコマンダー》と同等かそれ以上よ」

千瀬は彼女の唇からその名が紡がれるのを聞いた。それは、少女が生きる新たな世界を知った瞬間。

「《特別戦闘能力保持部隊“ＥＰＰＣ”》通称、虐殺隊（スローター）」

駿は鉛筆を取ると、図の首領を示す文字のすぐ下にもう一本ラインを書き足した。

記されたその文字は【ＥＰＰＣ】――ロザリーがその横にさらさらとアルファベットを書き込んでいく。Ｅｓｐｅｃｉａｌ、Ｐｏｔｅｎｔｉａｌ、Ｐｒｅｓｅｒｖａｔｉｏｎ、そしてＣｏｍｂａｔ――各頭文字に丸を付けられたその単語は筆記体の上、ろくに学校にも通っていなかった千瀬には意味などわからなかったけれど。

第一章《始動》：ＥＰＰＣ（３）

「ＥＰＰＣ、俺たちの所属部隊。“分別ある殺戮者”を意図的に保護・所有した、対マフィア間抗争等に使用する人間兵器の集団だ。ここに来るときに言われたろう？」

「つまりあたしたちは、殺しの専門要員なの」

千瀬の頭の中でミクの言葉が反芻した。分別ある殺戮者――自分の組み込まれた、犯罪者と言う名のカテゴリー。

でも、と少女は思う。自分は本当に『分別ある』殺戮者なのだろうか？　どうしてあんなことをしてしまったのか、今だに思い出せていないというのに。

「で、この《ＥＰＰＣ》トップにあたるのがお前を連れて来たルカだ――ルカ・ハーベント。その次がエヴィル・ブルータス。こいつらが〈ハングマン〉」

……今この少年は、一体何と言った？

ハングマンってのはＥＰＰＣの中での階級な、付け加えた駿の言葉は千瀬には届いていなかった。少女は目を見開いたまま、本日何度目になるかわからない驚きの音が口から零れ落ちる。

「え、」

あの少女がトップだなんて、ありえるのだろうか。千瀬の姉とそう年令が離れているように見えない彼女がこの組織の――さらに言うならばこの曲者だらけの集団の――トップだなんて。

思わず千瀬は首を傾げた。一体ルカは何者なのだろう？

「その下が、ＥＰＰＣ版テトラコマンダーの四人。〈マーダラー〉って呼ばれるな。で、さらにその配下が俺たちスカウト組だ。チトセを入れて十三人。哀れな〈ソルジャー〉さ」

「……こんな感じかな？　わかる？」

笑顔で尋ねるロザリーに、千瀬はゆるゆると首を横に振った。詰め込まれた膨大な量の情報が音を立てて頭の中を渦巻いている。聞き慣れぬ単語も複雑な組織構造も、すんなりと覚えられるものではない。

「あんまり……」

そうだよね、とロザリーは笑った。仕方ないことだ、現に彼女も駿も、組織の構造を把握するのには時間を要したのだから。

「ゆっくり覚えればいいよ。あたし達が教えてあげるものね、シュン。……シュン？」

駿は何かを思案しているように見えた――“これ”も教えておくべきか、否か。

そして迷った末、彼が口に出した言葉は。

「なぁお前、超能力って信じるか」

「チョーノーリョク？」

少女の頭上を疑問符が飛んだ。突拍子のない質問に困惑を隠せない千瀬だが、それでもどうにかその言葉の意味を記憶から手繰り寄せてみる。そして、一つの答えに辿り着いた。

「す、スプーン曲げ？」

「……お前って天然？」

駿は脱力しきっている。が、気を取り直したのだろう。すぐに姿勢を正すと教え甲斐があるな、と笑ってみせた。

「スプーン曲げじゃ人は殺せねぇだろ。……まぁ俺も全部理解してるわけじゃないんだけどさ、“人間の進化型”だってあいつは言ってた。俺からすれば突然変異、ってイメージだけど」

「あいつ？」

「ロヴ・ハーキンズ」

駿がちらりと横目でロザリーを見やると、彼女は黙って続きを促す。周りで話の成り行きに耳を傾けていたメンバーも、千瀬にこのことを伝えることに依存はないらしい。

それを悟った駿は再び口を開いた。

「ロヴは、能力者だ」

「……能力、者」

ぼんやりと繰り返す少女はきっと言葉の意味が飲み込めていないのだろう。無理もない、と駿は思う。彼だって信じられなかったのだ、こうして体験するまでは。

「どうしてあいつが、俺たちみたいな危険人物集団を統治できてると思う？　あいつのカリスマ性にはだれもが一目置いてる。でも、それだけじゃない」

千瀬は黙って耳を傾けた。学校にも満足に通わず家で刀と共に過ごしていた少女は、同年代の子供なら誰もが経験してきたような娯楽を知らない。映画や漫画、小説といったＳＦ的考えに触れたことも

なければ、そのものに対する知識さえあやふやなのだ。どうしてもイメージが湧かない。湧かない、けれど。

「ロヴには力がある。俺たちを楽々越えていくような、巨大な力が」

駿が千瀬を真直ぐに見つめる。少女は彼の瞳の奥に、これから自分を飲み込んでゆく闇が見えた気がした。踏み入れた世界の入り口が、ここにある。

「とは言っても」

重い空気を吹き飛ばすかのように明るい声が割って入った。ロザリーはにこやかに千瀬の顔を覗き込む。

「あたし達もロヴが戦うところ見たことないから、実際は具体的にどんなことができるのか……全部は知らないんだけどねー」

千瀬の緊張を解すように肩を叩きながら駿も笑った。

「まぁロヴの能力なら、お前もすぐわかると思うぜ。意外と近くで体験してるわけだし？」

何かを含んだ駿の笑みに千瀬は首を傾げる。しかし少年のその笑顔は長持ちしなかった。

「そうだ、これは噂だけど」

彼は眉をひそめる。急に下がった声のトーンに合わせるように、自然と千瀬は体を駿のほうへ傾けた。

「俺らＥＰＰＣの連中でも〈マーダラー〉以上の奴らは全員能力者だって話がある。スローターの中でお前みたいに“迎え”が来るのは主に俺たち〈ソルジャー〉なんだけど、その上の階級は違う。ずいぶんな古株も交じってるって話だし、それにあいつら変人だ」

変人。それは首領・ロヴへの形容詞のはずだった。変人＝能力者という妙な方程式が少年の頭の中で構築されているようである。

「それ、あたしも聞いたけど……本当かな」

小首を傾げるロザリーに、考えても見ろ、と駿は言う。彼曰く、いくつかの根拠はあるらしい。

「神出鬼没。いつも登場の仕方が明らかにおかしい。めったに会わないくせに俺たちの行動を把握してるし、何より強い。むちゃくちゃ強い。ありゃ反則だ、ありえねぇ」

普通の人間に太刀打ちできるわけないだろ！　と熱弁する駿には何か嫌な思い出があるのだろうか、終始眉間に皺が寄っていた。こんな場所にいる時点ですでに『普通』ではないことを、どうやら彼は忘れているらしい。

「ほんとに……？」

「そりゃ、確証はないさ。でも可能性は高い。もしそうならよっぽど殺しに長けた力があるんだろーな、とくにルカは――いいか、チトセ。何があっても、あいつにだけは逆らうなよ」

大袈裟だと笑うロザリーを無視しながら、駿は真剣な顔でその後も念を押した。千瀬はそれに頷いてもう一度紙へと目を落とす。

少女は長い間、完成した組織図を見つめていた。

彼女が踏み入れた世界の縮図を、これから彼女の生きる道を。

第一章《始動》：罪と禁忌（1）

「質問、あるか？」

ここでの規則を一通り説明し終えた駿は、真剣な様子で話を聞いていた少女を見下ろして尋ねた。

彼の語った内容は、食事、清掃、その他の日常生活についてエトセトラ。

千瀬は言われたことを頭に詰め込んでしまおうと、ゆっくりと頭の中でそれを繰り返した。（だが実際は必死だ、量が多すぎるのである。）

……ＥＰＰＣ内では原則としてファーストネームで呼び合うこと。

仕事の際もコードネームは特になし――顔を見られた相手は殺してしまうのだから、名前を隠す必要などないからだという。そして武器の持ち込みは自由。

ＥＰＰＣ内での階級分けは実力順であり権力に大きな差はないこと。

（ただし逆らわないほうが身の為であること。）それから、

「ロヴ・ハーキンズには絶対服従――裏切りは、死罪」

全てを反復し終えた千瀬は横で見守っていた駿に『大丈夫』と頷いてみせた。正直な話、頭は破裂寸前だったのだが。

用があるのだと言っては少し前に席を外していたロザリーに代わり、説明を手伝ったのはサンドラだった。彼女は千瀬の真っ黒な髪や瞳を見て、小さな頃のルカに似ていると笑う。

千瀬にはいくつかの衣服と古びたソファーが与えられた。しっかり

としたそれは体の小さな少女が眠るには申し分ないサイズである。風呂やトイレはこことは別に用意してあるようだった。

「俺たちはこの組織内じゃＶＩＰなんだけどな。まぁ、こればっかりは仕方ないんだ。この建物には他に生活できるようなスペースがないし」

叩けば埃の舞うソファーを眺めて彼は言う。この圧迫感のある部屋は、ＥＰＰＣの中でも〈ソルジャー〉の為に割り当てられた居住スペースなのだった。“監獄”――そう呼ばれる部屋。犯罪者の俺たちは、ここでしか生きていけないから。そう言って駿は自虐的な笑みを浮かべた。

「ああ、最後に大事なこと教えとくぜ。俺ら仲間同士での殺し合いはタブーだ。〈ハングマン〉が制裁にやって来る」

千瀬は覚えたての知識を思い浮べた。ハングマン、ＥＰＰＣの中では最上の階級だ。そして、ルカの役職。

「……制裁にあったら、どうなるの？」

「跡形もなく消される」

絶句した少女の肩を叩きながら、命は大切に、と駿が笑う。あら心にも無いくせにシュンったら、と優雅に笑みを返すサンドラを千瀬は茫然と見つめることしかできなかった。

――やがて駿が立ち上がる。漸く全て説明し終えたということなのだろう、『それじゃあこんなもんで』と言って立ち去ろうとした駿を、咄嗟に千瀬は引き止めた。

「ごめんなさい、最後に一つだけ。『学園』って何？」

瞬間、駿の動きが停止した。沈黙が重い。何かまずいことを言ったかと後悔したその時、少年の唇が動く。

「……お前も、誰かを『学園』に預けたのか？」

＊

学園、と呼ばれる場所がある。正式名称はわからない。半世紀以上昔の話になるだろうか、当時そこには《学校》と呼ばれるものが建っていた。名も無き孤島を丸ごと一つ使って建てられたそれは、実は軍事施設であったという。

――学校の目的は、軍人の育成。

しかし歴史が流れるにつれ、その孤島からは軍人育成という名目が廃れ、最期には『学校』という容器だけが残ることとなる。使用目的の消えた『学校』が破棄されるのは、時間の問題であった。

「ある時、その島をある人物が買い取り全寮制の学校として再起動させた。――それが、『学園』だ」

駿は再びその場に座り込むとゆっくりと言葉を紡いだ。何時の間にやらシアンがサンドラの隣に座り込み、一緒になって耳を傾けはじめる。私この話初耳なの、と嬉しそうに笑って。駿は増えてしまった聴衆に苦笑しつつ続きを語った。

「その人物ってのが、ロヴの義理の祖父――親父だっけ……忘れたけどどっちかだったらしい。当時からしたらものすごい金持ちで、

趣味で始めたらしいんだが」
「詳しいわねー」
シアンの賛辞に駿は微妙な顔つきを見せる。
どうやらルシファーのヘッド、ロヴ・ハーキンズは大富豪の子息であったらしい。義理、と言っていたので養子なのかもしれないが。
だからあいつ金遣いが荒いんだな、と駿は一人で納得していた。
「そいつは初代理事長を務めて、死ぬ前に学園の全所有権をロヴに譲った。だから今学園は、正確にはロヴのものだ」
実際のところ彼は経営を第三者に任せて、自分は犯罪に勤しんでいるわけなのだが。
今や学園は多数の生徒を抱えている。初代理事長の意志を継いでなのか、自由な校風が売りで入学方法も様々。入学してからも、自分の得意な分野だけを伸ばしたり、進学をめざしたりといった個人別のカリキュラムを組む、一風変わった制度を実施しているらしい。
「それで、ここからが本題。『学園』は裏ではほとんどうちの金で動いてるから、入学も退学もルシファーの思いのままだ」
駿は声を潜めた。そうしたところで誰かが盗み聞きしているわけでもないとわかっていたけれど。
「だから時々うちは、学園にワケアリの人間を《預ける》んだよ」
「……さっきも言ってたけど、《預ける》ってどういうこと？　あたしが預けたってどういう意味？」
ええと、と困ったように駿は頭を掻いた。説明という作業は思いのほか大変だと思い知らされる。

「そうだなぁ……。お前が殺人犯だと知ってるのに、まだ生きてる人間はいるか？」

千瀬はわずかに目を見開いた。確かにいるのである。たった一人だけ、だが。

「……姉さん」

「お前、迎えが来た時どうだった？　そいつと一緒にいたか、そいつの身を心配したか――なんかあっただろ」

少女は目を伏せた。僅かに濡れた黒い瞳に睫毛が覆いかぶさる。

「――あの時」

第一章《始動》：罪と禁忌（2）

少女の頭の中であの時の光景がゆるゆると呼び起こされる。

切っ掛けは思い出せないけれど、確かに自分は親族を殺した。殺そうと思って、やったのだ。日本刀が父の心臓を貫いた時も、小さなナイフで母の首を刎ねた時も、迷いはなかった。

何故だろう、そうするべきだと思ったのだ。まるで体中の細胞が自らの血を絶つことを望んでいたかのように。

「――気付いたらもう、ルカが後ろに立ってた」

迎えに来たのだと微笑んだ彼女。抱擁されたその手の温もりは覚えている。自分が犯した罪を受けとめて、この腕についていくのだと思った。

ああ、確かその瞬間だ。

「姉さんが目の前に立ってた。後ろの壁は真っ赤だった。……あたし、姉さんに謝らなくちゃって。そしたら、何だか急に」

姉を殺したくなった。

殺したく、ない。

姉さんは、殺したくない

「あたし、姉さんを失うのが怖かった……」

嗚呼、と少女は思う。姉が目に入った瞬間に酷く腕が疼いたのだ。握っていたナイフの切っ先を百瀬に向けてしまいたい、衝動。同時にとてつもない恐怖に襲われた。血塗れの身体でルカに縋って、姉を殺したくないのだと訴えた。唇から零れ落ちたのは姉への謝罪と懇願のみ。どうして、忘れていたのだろう。

「……迎えがルカでよかったな」

駿は少女の頭を撫でながら、暗黙の掟を思い浮べる。組織を表へ出さないために、『スカウト』の際の目撃者は原則として皆殺し――それがＥＰＰＣの、そしてルシファーのルールだ。けれど稀に例外がある。それこそが、まさに《迎えがルカだった場合》なのだ。

「ルカは目撃者を殺さずに、学園に送ることが多い。学園に生徒として入学させ、寮生活をさせるんだ。あいつにはそれだけの地位と権力がある」

エヴィルだったら問答無用で即殺害だけどな、と彼は笑った。

「……エヴィルって、誰だっけ」

「もう一人の〈ハングマン〉。ルカの相棒だと思っとけばいい」

キレやすいから気を付けろ、と駿は囁く。横でシアンが神妙な顔つきで頷いていた。千瀬の中に、エヴィルという人間が『怒らせてはならない人物』としてインプットされる。

「……で、続きな。学園の入学年令は一応一般の高校程度を目安と

してるが、年令が適応してなくても別に構わない。“特例”として突っ込むんだ。飛び級、特技、コネ……理由は何だって良い」

ただし、世間では死んだことになる。組織が情報や死体を偽造して、死亡届けを出してしまうのだ。

もう二度と、今までの日常には帰れない。今まで生きてきた世界にさよならを告げ、この場所で生きていくだけ。

「学園に送られたヤツは、卒業する年になったらまた入学し直すんだ。入学と卒業を繰り返して、表向きは生徒を演じ続ける。さすがに“生徒”じゃ誤魔化しのきかない歳になったら、学園の運営に回される」

千瀬は口を開くことができなかった。強ばった背中をサンドラが撫でていてくれたことにさえ、しばらくの間気付けずに。

「……そんな顔するなよ、死ぬよりましだ。俺は人殺しなのに、カズサが死ぬのは恐い」

カズサ、という音を愛しげに呟いた駿は俯くと大きく息を吐き出した。

――ああ、俺の妹だよ。年はお前の一つ上、学園で暮らしてもう二年か。誰だシスコンつったやつ、出てこい殺す！

ひとしきり騒いだあと、笑顔を取り戻した駿は深く息を吸い込んだ。千瀬に、自分自身に、それを言い聞かせるように。

「こうやって苦しむのが俺たちの罰だ。仕方ねぇよな、俺たちは裁かれて当然なわけだし？」

下手すりゃ俺もお前もここの奴みんな、今頃本物の“監獄”生活だろー。そう言って笑う少年を、千瀬は黙って見つめていた。

「ずっとあの孤島で生き続けるんだ。お前の姉も、ローザの姉も、俺の妹も――俺たちの、任期が終わるまで」

任期が終われば一緒に暮らせるらしいぞ、と彼は軽い調子で言った。

「……任期なんて、あるの？」

「あるとも」

駿は眉根に皺を寄せながら笑う。なんだか滑稽な表情になった。なんだか泣きそうな表情に、千瀬には見えてしまった。

「ロヴ・ハーキンズの命日までさ」

途端、サンドラがクスリと笑う。黙って事の成り行きを見ていたレックスも『違いねェ』と豪快な笑い声をあげた。

何が可笑しいのかさっぱりわからない千瀬に向かって、辛気臭い話は終わり、と駿も快活な笑みを浮かべる。

「しかしお前って珍しいタイプだよなー。むしろ変？」

「え、どうして？」

「だってお前の話を聞いた限りじゃ、チトセが親類殺しをやった直後にはもう迎えが行ってたってことだろ？」

そうだけど、と千瀬は頷く。それの一体何が変だというのだろう？

駿はさも当たり前、と言うように言葉を続けた。

「だって普通、犯罪が起こってから迎えを出すんだから結構時間が

かかるもんだろ？　俺の時は一週間かかった。人生で一番長い一週間だったな、あれ」

からからと笑う少年の言葉に、千瀬はただただ首を傾げるだけだった。

「まるでお前が殺人事件を起こすこと、ルシファーが予測してたみたいだな」

その言葉の重要性に、その時まだ少女は気付かない。

第一章《始動》：対面（1）

ぱたぱたと軽快な足音が響き渡る。だんだんと近づいてくるそれに千瀬が耳を澄ませた次の瞬間、勢い良く扉が開いた。

「チトセ！」

鉄製であることを忘れさせるようなスピードで開け放たれた扉が軋む。そこからぴょこりと顔を覗かせたのは、どこかへ行っていたはずのロザリーだった。予程急いでやって来たのか、頬がほんのりと赤く染まっている。

「ロヴが呼んでるよー」
「お、いよいよご対面だな。我らがボスに」

駿は軽く千瀬の背を押した。ロザリーがその腕をとり、案内するからと笑う。
千瀬は二、三度目を瞬かせ、それから小さく頷いた。

「ああ、おい、チトセ」

扉が閉まる寸前、部屋を出ていく少女達の後ろから駿の声が追い掛ける。少年は片手を振りながらにこやかに言い放った。

「間違っても、ロヴを殺ろうなんて考えるなよー」

目を見開いた少女前で、扉は閉まる。

＊

「……えっと、ローザ？」
「なぁに？」

一定のリズムを崩すこと無く歩いていたロザリーは、小さな呼び掛けに反応すると顔だけを千瀬に向ける。千瀬は彼女の大きな瞳を見つめながら、躊躇いがちにその口を開いた。

「ローザにもお姉さんがいるの？」

ロザリーが僅かに目を見開いたが、すぐに柔らかな笑顔を浮かべる。そうだよ、と答えるその声は明るい。

「今は学園に入ってるの。年はあたしの三つ上でねー、」

駿と同い年だね、と少女は笑った。自慢のお姉ちゃんなのだと嬉しそうに。
千瀬は自分の姉――百瀬も同じ十七歳であることに気が付いて小さく苦笑を洩らした。皮肉めいた表情だと自覚したが、ロザリーもそれに気が付いたのだろう、どうしたのかと首を傾げている。
なんでもない、と千瀬は首を横に振った。

「シュンに聞いたのかな？　シュンってばシスコンだからねー。妹さんが心配でしょうがないのよ。意外でしょ？」

あたしのお姉ちゃんは、しっかりしてるから大丈夫だもん。そう言ってロザリーは笑んだ。

「……そうだね」

ここには自分と同じような境遇の人間がいるのだ、と少女は思う。きっと、まだ他にも。

「ロヴさんのところまではどのくらい？」

千瀬は話題を変えることにした。もうずいぶん歩いている気がする。二人は今終わりの見えぬ程長い廊下を進んでいた。レトロな空気を漂わせる廊下の装飾は壁に備え付けられた銀の燭台、その上で揺らめく蝋燭のみである。薄暗い中を二人はただ淡々と歩いていく。時間の感覚が無くなりそうだ、と千瀬は思った。

「もうちょっとだよ。こっち」

漸く現れた廊下の突き当たりを左に曲がると、銀白色のドアが見えた。無機質な冷たい光沢を放つそれには中心に一本の境目が走り、横の壁には埋め込まれたボタン。いささか場違いな気はするが、どうやらエレベーターのようだ。

「ここから先はね、テトラコマンダー以上の地位の人しか通れないんだよ」

千瀬は《テトラコマンダー》という地位を思い出そうと眉を寄せる。上の方、だった気はするのだけれど。

千瀬はてっきり上階へ昇るのだと思っていたのだが、ロザリーが押したのは“ＤＯＷＮ”のボタンだった。そもそも今居る場所は何階なのかも知らないことに今更ながら少女は気が付く。

二人がエレベーターに乗り込むと自動的にドアが閉まった。その動

きは存外滑らかなものである。
次いで、居心地の悪い浮遊感。少女達を収容した箱はゆっくりと下降を開始した。そのまま暫し待てばエレベーターは一番下の階である“Ｂ３”に止まり、出口が開く。

「ローザ？」

千瀬が困惑の声を上げる。扉が開いたというのに、ロザリーは一向動こうとしないのだ。千瀬が戸惑っているうちに再び扉は閉じてしまった。
一体どうしたというのだろう？

「どうしたの、ろ……」

千瀬の言葉は続かなかった。――消えた、のだ。エレベーターの床が。
……否、『消えた』と言うには語弊があるだろうか。正確には床の中心に一本の亀裂が入って、そこを境に床が二手にわかれて開いたのである。丁度、外開きの観音扉のように。

ぱっくりと大口を開けた穴へ、千瀬は我ながら奇妙だと感じる叫び声をあげて落下した。叫んだのは久しぶりだと、ぼんやり思う。覚悟していた着地の衝撃はいたく軽いものであった。

「大丈夫……？　ごめんね、驚かせようと思ったんだけど……」
「だ、だいじょーぶ……」

顔を上げれば、ロザリーがバツの悪そうな顔で千瀬を覗き込んでいた。千瀬もろとも落下したはずの彼女は軽やかに着地を決め、座り込んだ千瀬に謝罪の言葉を掛ける。どうやらロザリーの小さな出来

心に、千瀬は見事かかったらしい。
落下距離は大したことはなく、着地する地点にはこれを見越しての事だろうか、衝撃を緩和するためのマットレスが敷かれていたので怪我もない。
立ち上がろうとした千瀬はふと、違和感に気が付いて辺りを見回した。――そして硬直。

「やぁ。ご機嫌如何かな、お嬢さん」

不様な落下後の態勢のままであった少女に降り注ぐ男の声。それは柔らかく快活、どこか笑いを堪えているような響きの。

「あ、ロヴ。連れてきたよー」

千瀬はあんぐりと口を開けた。……こんなに恥ずかしい思いをしたのも久しぶりだったのだ。
エレベーターの穴は、どうやら《ヘッド》の部屋に直結だったらしい。少女が部屋へ落下してくるまでの一部始終を眺めていた彼は、さも愉快そうに笑い声を上げた。

「ようこそ、チトセ・クロヌマ」

ロヴ・ハーキンズはにこやかに、茫然と座り込んでいる少女の手を握ったのであった。

第一章《始動》：対面（2）

＊

温かい湯気と茶葉の良い香が鼻を擽る。それを吸い込み、ほぅと溜め息を吐きながら、少女は自らの置かれた状況を分析してみることにした。

「別に用があって呼んだわけじゃないんだが、一応顔を見ておこうと思ってね」

男はのんびりとティーポットにお湯を注ぐと、茶葉を蒸らす間にテーブルに焼き菓子を並べ始める。甘味が薫り空間を満たせば、そこはもう素敵なティータイムであった。

「やったぁ、あたしそのお菓子大好き」

ロザリーが千瀬の腕を引いて躊躇うことなく席に着く。柔らかな椅子にふかふかと体を沈め、ロザリーは早速焼き菓子に手を伸ばした。

「……あの、これは一体」

「嫌いかい？」

「いえ……」

千瀬は満足気に微笑む彼にそっと目をやる。

ロヴ・ハーキンズは背の高い細身の男だが、服から覗く腕にはバランスの良い筋肉がついていた。

耳より少し下まである真直ぐな髪は黒みを帯びたブラウン。半月型の目は眠たそうに見えるだけで、何を考えているのかさっぱりわか

らない……とにかくお茶の準備をしていることだけは確かなのだが。男は千瀬の想像よりもずっと若いようだった。どうみても三十路を過ぎているようには見えず、楽しげに紅茶を注ぐその様は彼を一層幼く見せる。ほんとに首領ですか、と尋ねたくなっても無理はない。

「どうぞ？」

「……いただきます」

ロヴはきっかり三人分の紅茶を入れると、自分は千瀬の向かいの席に着いた。ゆったりと足を伸ばして腕を組み、笑みを浮かべたままで千瀬の観察を開始する。

それきり誰も話さなくなった空間で沈黙だけが少女の耳に響いた。男に穴の開くほど見つめられた状態で悠長に紅茶など飲んでいられるはずもない。

助けを求めて横目でロザリーを見れば、彼女は幸せそうに菓子を頬張っているところ。ロヴは今だに、ただ千瀬のことを観察している。

「……何でしょうか」

沈黙とロヴの視線に堪えかねてとうとう千瀬は口を開いた。それを聞いた彼は幼い子供のような、無邪気な笑顔を少女に向ける。

「うん、良いね……気に入ったよ」

「？」

疑問符を浮かべる少女に、男はこっちの話、と笑ってみせた。

――良いものを見つけた、と思う。目の前で困惑している幼い日本人は、もちろん彼が迎えを差し向け連れてきた者だ。切り揃えられた艶やかな黒髪も世界を憂いているような伏せがちの目も、純粋に

良いなと思った。この小さな少女の生き様は自分と仲間を満たしてくれるに違いない――これは予感に似た、けれど確信。

……本当は、理由はもう一つあるのだが。

漸く食べおわったらしく、几帳面に包み紙を畳んでいるロザリーを見てロヴは立ち上がった。

「俺のことはロヴで良い。最近はわりと平和でね、新しくどこか大手の企業をジャックしようかと思ってるんだ」

どう思う？　と笑うロヴに、良いんじゃない？　と返すロザリー。二人のやり取りを千瀬はただ目で追うだけである。

――その時だった。けたたましい音が鳴り響く。鼓膜を揺るがせるそれは甲高い警報のベルに似ていた。同時に、ロヴが壁に掛けられていた黒い物体を手にとって耳に当てる。きっと無線か何かなのだろう。ロヴは二、三言なにか呟くと、コードによって何処かと繋がれているその物体を壁に戻した。

少女達が黙って見守る中、男は薄く笑う。その表情を目にした瞬間、千瀬は背筋が冷えてゆくような気がした。
その瞳の奥を少女は知っている。冷たく残忍さを帯びているその色は、闇で生きる人間のものだった。同時に感じてしまった既視感に眩暈を覚える。くらくら、する。

「ロザリー、近々仕事が入るかもしれない。戻ったら伝えておいてくれ」
「はぁい。じゃあ、今日はもう帰るね」

ご馳走様、と笑いながらロザリーは椅子から飛び降りた。それを見て千瀬も席を立つ。

――帰り道はどうするのだろう。まさか先刻の穴を這い上がるのだろうか？

千瀬は思考を巡らせたが、それは杞憂であることがすぐに判明した。広い部屋の隅では重たげなドアが存在を主張している。ロザリーが迷わずそのドアノブに手を掛けた。

「ああ、チトセ」

「はい？」

続いて部屋を出ようとした少女を呼び止める声。振り返った千瀬に、ロヴは真顔で言い放った。

「菓子、持って帰るだろ？」

――少女が絶句したことは言うまでもない。

＊

「よぉ、遅かったな」

監獄と呼ばれる部屋に帰ると、少女達を駿が笑って出迎えた。

「どうだった。ロヴって変なヤツだろう？」

「……ものすごく」

からからと笑う彼の声を背中に聞きながら、千瀬はそのままソファーに倒れこんだ。体がゆっくりと沈み込むのに合わせるように、意識もゆるゆると墜落していく。

（疲れ、た）

彼女の長い一日が、終わろうとしている。

第一章《始動》：間話

薄暗い地下室に集まった人影は全部で五つ。《彼ら》は慣れた様子で好き勝手に腰をおろし、“会談”の開始を待っていた。
組織の上層の人間のみで行なわれるこの会合がある時は、たいてい何かの『動き』が生じる前触れだ。

「――“敵対者”との関係が悪化した。近々、波が来る」

突如そこに、淡々とした男の声が響いた。それは全ての開始の合図。彼らはようやく登場した男の声に耳を傾ける。

「《パース》にうちの情報を外部へ流した奴がいるらしい。おかげで金で押さえ付けてた連中が調子付いてな……武力行使で来るそうだ」
「……馬鹿じゃないの。急造の戦闘チームがうちに適うわけ無いじゃない」

呆れたように紡がれた少女の言葉に、男は喉の奥でくつくつと笑った。所詮この程度の相手、自分達の敵ではないのだ。暇つぶし程度にはなるだろうが。

「これだから末端は信用がおけないな」

誰かがそう言ったが、心なしかその声は楽しげであった。皆考えていることは同じなのだろう。

「じゃあ、俺たちの出番ってわけ？」

その場にいた一人の青年が問うと、男――ロヴは腕を組んで考えるような素振りを見せる。

「……そのことなんだがな、キョーゴ。今回の相手は〈ソルジャー〉の練習用に回そうかと思うんだ」

キョーゴと呼ばれた青年はロヴの言葉を聞いても、さして興味もなさそうに『別に良いんじゃない？』と返しただけだった。しかし次の瞬間、部屋いっぱいに甲高い声が響き渡る。

「ええぇ～っ！？」

不満そうな声をあげたのはまだ幼い少年だった。第三者が見たら、なぜこんな所にいるのかと疑問に思うに違いない。遊び盛りの少年は座っていた椅子から飛び降りるやいなや、ロヴに向かって声を荒げた。

「なんで！？　つまんないっ！！　オレ達にやらせてよぉ」

「お前達がわざわざ出るような相手じゃないんだ。な？」

苦笑を浮かべながらロヴは少年を宥めるが、全く効き目はない。彼の言い分はもっともなのだ。最近の外部の連中は手応えが無く、金さえあれば抑圧は容易。そのため武力戦はほとんど起こらなかったので、ルシファーの戦闘部隊に出番は無かったのである。……戦闘の前線に立つことを好む少年にとっては、『お預け』状態が続いていたのだ。

「それでなんで〈ソルジャー〉なんだよ、あいつらじゃ時間が掛かるだけじゃないか！」

「……あ、いや……だからその、訓練の場にしようかなって」

たじろぐ男に詰め寄る少年。少年の背丈はロヴの半分ほどしかないのだから、傍から見れば何とも滑稽な図である。

「……ロヴ、子供に口で負けてんじゃないわよ」

心底呆れ返ったように言ったのはミクだった。彼女の金髪は、暗がりでも僅かな光を反射して輝いている。その感情の薄い目で一瞥されれば、少年のほうが諦めたように悪態を吐いた。

「じゃあさ、いっそルカ姉が一人で片付けちまえばいいんだ。そしたら一瞬だろ？」

「……少し黙ってろ、ルード」

「うひっ」

冷たい低音が空気を震わせた。唸るような響きのその声に、言われた少年――ルードはこそこそとルカの背中に逃げ込む。黒髪の少女は苦笑しながら、

「死んでも知らないよ？」

と、さらりと爆弾を投下した。

少年の体温は心なしか一気に低下する。死ぬってどうしてか、そんなの決まっている。ルードを叱った目の前の青年は容赦なく他人の命を摘んでしまうのだ。

「こっ、怖ぇよエヴィル……絶対視線だけで人殺せるって」

ルードの暴走に終止符を打ったエヴィルは、その三白眼で少年を睨み付けた。

恐い、マジ恐い。俺死ぬときは絶対エヴィルに殺されるときだぁ、という少年の嘆きは誰の気に止められることもなく。

「ルカ。“チトセ”は使えそうか？」

片手にティーポットを持ったロヴが尋ねた。いつの間にやら一人で全員分の紅茶を入れている。が、それはもう馴染みの光景なので誰も驚くことはない。

「実力はあるけど……まだ、早いんじゃないかしら」

「ちょうど良いじゃないか。デビュー戦ってことで」

ロヴはもう決めてしまったらしい。満足気な笑みを浮かべる彼の顔を、ルードが下から覗き込んだ。

「俺、見に行きたいんだけど。“チトセ”ちゃん」

にこにこと笑う少年を見て、直感的にルカは思う。何かを企んでいる顔だ。この少年は常にそうである……気を付けねばならないのは、少年は周囲の予想の斜め上を行く点だった。

「ルード。あんたは黙ってなさい」

「あだっ」

ルードにミクの鉄槌が下ったのが視界の端に映ったが、ルカは見なかったことにする。彼女にとってそれは、余りにも見慣れた光景だったから。

「……ロヴ」

エヴィルが口を開いた。彼の僅かにウェーブがかかった銀髪は、肩に触れるか触れないかの長さで揺れている。顔立ちの整った青年は常に触れただけで相手を切り裂いてしまいそうな気配を纏い、金色の鋭い瞳が彼という人物をまさに象徴するかのようであった。

「情報を横流しした裏切り者はどうする」

《ハングマン》である青年の言葉に、決まってるだろうとロヴは笑う。

「始末しろ」

第二章《模索》：神出鬼没（1）

――ほら、こんなにも簡単！

『これが私の世界だから』2

だって
舞落ちる雪より儚く
人の命は散るものだから。

＊

「おぉい、チィ。こっち来て手伝ってくれよぉ」

「あ、はぁい」

呼び声に振り返れば、少女の目に手を振る人影が映る。
彼こと〈ソルジャー〉の一人であるレックスは、身長二メートル四十センチの巨漢であった。喋り方も立ち振る舞いも全てのスケールが桁外れ。千瀬が此処に来てからは、レックスは彼女のことを日本人形のようだと言って可愛がっていた。彼が千瀬を“チィ”と呼ぶのは、ちとせ、という音が発音し辛いからだという。
レックスに頭を撫でられるたびに千瀬の首は折れそうになったが、彼の豪快さは見ているのが心地よいほどであった。
――太古の世界に君臨していた大型肉食動物、ティラノサウルス＝レックスを彷彿とさせるかのような。まさに彼は、“Ｒｅｘ”の名にふさわしい人物だと千瀬は思う。

「こっちだ、こっち」

そのレックスに呼ばれるままに彼のもとへ向かうと、彼は屈み込んである場所を指差した。いくら座っていたとしても、彼の体躯は千瀬と同じくらいの高さがあるのだが。

彼女達が生活している部屋の壁を覆うように積もったガラクタの山。彼が示したのは、その粗大ゴミ（ゴミかどうかは定かではないが）の隙間である。

千瀬がそこを覗き込むと、隙間の奥にに小さなものが落ちているのが見えた。

「大事なもんを落としちまったんだ。取れるか？」

体を捻れば肩ぐらいまでは入れそうだ。千瀬は頷くと、早速隙間の

なかに手を伸ばす。なるほど、どうやら彼の太い腕ではここまで届かなかったらしい。
少女は腕を伸ばして中をゆっくりと探ってみる。指先に冷たい感触。

「……あ、取れた。これ何？」

千瀬が手を開くと、掌に乗っている丸みを帯びた深緑色の物体がころころと揺れた。どこかで見たことがあるな、と少女は思う。何だっただろうか。

（あぁ、そうだ……確か、）

――手榴弾？

「……え、わ、うわっ」
「こらこら。落とすなよぉ」

答えに行き着いた瞬間少女はその物体を投げ出してしまいそうになったが、その行為の危険性に気付き慌ててそれを握り締める。
あたふたと落ち着かないその様子を見たレックスは、笑って千瀬の手から手榴弾を取り出した。

「ありがとな」
「何でそんな物持ってるの？　この前聞いた時は――」

千瀬は眉を寄せながら笑う男を見つめ返し、先日のやりとりを回想した。そう、その会話をしたのはほんの数日前のことだ。

――その日、千瀬はサンドラからナイフを貰い受けた。ここ数日の間に駿とロザリーにルシファーの建物内を連れ回され、ようやくこの中での生活に慣れてきた千瀬であるが、身を守るものを何一つ持っていなかったのだ。
そのことに気付いたサンドラが彼女の使っている物を分け与えたのである。使い古された柄の部分が手に良く馴染む、コンバットナイフ。

「例えこの建物の中でもね、気を抜いてはダメなのよ。特に一人で出歩くときは」

お古で悪いんだけど。彼女はそう言って、ナイフを千瀬に握らせた。

その後だ。そのまま場の話題が武器の話になり、各々が自分がよく使用する物は何かを千瀬に教えることになったのである。
ロザリーは銃が多いと言っていたし、サンドラは千瀬に渡したような刃物をたくさん持っている。千瀬も尋ねられたので、日本刀なら多少は使えると答えておいた。

……そしてその時レックスは？

「武器なんて使わないって言ってなかったっけ」
「おう、言ったな」

俺は拳が武器だからな、と。その時レックスは、そう言って笑ったのだ。

「何に使うの？　手榴弾」

レックスの手に納まっていると、まるで亀の子のようなそれ。千瀬

が手榴弾を見つめると、彼は豪快な笑い声をあげた。

「なぁに。俺が建物の中で仕事をするときは、こいつで俺が通る為の隙間を開けてから始めるのさ」

呆気に取られた千瀬を見て再びレックスは笑う。確かにその体の大きさでは、規格サイズのドアは通れないだろう。だからと言って、いちいち爆破するのも随分とはた迷惑な話だが。

千瀬達の過ごすこの“監獄”のドアも、よくよく見れば通常よりかなり大きい。（まさか彼の為に特注、なんてことがあるのだろうか。あるかもしれない）

千瀬が妙に納得しかけた、その時である。

「アレキサンダー」

響いた声は柔らかなテノール、若い男を想像させるそれ。一体何処からと探す間もなく、《彼》は少女の目の前に舞い降りた。……舞い、降りた？

千瀬は目を見開いた。

ふわり、と。文字通り、人間が上から『降りてきた』のだから。

第二章《模索》：神出鬼没（2）

やぁ、と彼は笑った。
二十代半ばぐらいだろうか、繊細な印象の青年である。襟足の長い髪は黒、肌の色は黄色人種を表す千瀬には見慣れた色だ。彼は色の濃いスーツを着流し、上品な微笑みを湛えたままちらりと千瀬を見下ろした。

「アレキサンダー、ちびちゃんが居なくなっちゃってね」

青年は困ったように笑みを浮かべると、躊躇いなくレックスの巨体に触れた。そのままレックスの背中を勢い良く覗き込む。うーむ残念、と声。

「君には懐いてるからここにいるかと思ったんだけどね……違ったみたい」

彼は大袈裟に首を竦めてみせると、お邪魔しました、と素早く踵を返そうとした。刹那呆気にとられる千瀬の後ろから、青年に向かって駿が大声を浴びせる。

「おい、イチハラ！　ドアから入って来いっていつも言ってんだろっ」
「シュン君が気付かなかっただけじゃない？　ちゃんと、ドアから入ったかもしれないよ」

ね？　と首を傾げながら青年はにこりと笑う。気持ち悪いと叫ぶ駿の言葉は彼の耳には届いていないらしい。

「じゃあ、もしルードが来たら教えて。……あ、そうそう」

青年はその場でぽんと手を叩いた。軽やかにUターンすると、茫然とする千瀬に向かって手を突きだす。そのまま半ば強引に握手。

「よろしくー。俺は市原　恭吾。キョーゴって呼んで」

シュン君みたいにファミリーネームの呼び捨てはやめてね、シュン君ってば俺には冷たいんだよ傷つくよねー。

目を瞬かせる千瀬に言うだけ言うと、恭吾は満足したようにゆっくり歩いて部屋を出ていった。

ひらひらと、それは爽やかに手を振りながら。

「……俺、あいつだけは苦手だ」

虫が合わないとか性格が違うとかそれ以前の問題だ、と虚しそうな声で駿は呟く。それから深い溜め息。

「あの人、上から降ってきた」

千瀬が言うと、少年は腕を組んで頷いた。

「だよなぁ。いつもそうなんだ、あいつ。突然現れてさ。絶対ドアからは入ってねぇんだ。ここの天窓は小さすぎるし……やっぱりマジかもな」

「何が？」

「〈マーダラー〉以上は全員能力者、って話が」

千瀬は目を見開いた。確かにその話には覚えがあったが、でも。

「あの人〈マーダラー〉なの？　〈ソルジャー〉じゃなくて？」

マーダラーとは千瀬の所属するＥＰＰＣの、千瀬達より一つ上の階級のことである。マーダラーの人々をもっと年配の屈強な男性（いかにも、という風体の）と想像していた千瀬にとって、恭吾は余りにもそのイメージとかけ離れた存在だった。

ロヴといいルカといい、この組織の人間は皆常識からにずれているように感じる。（あくまでも少女の中での常識、だが）

「どちらかといえば上品そうなのに」

「……上品？　冗談だろ！」

少女の独り言に反応した駿が、あいつの腹は真っ黒だと吐き捨てた。では以前駿が言っていた『神出鬼没』は恭吾のことなのだ、とぼんやり千瀬は思う。

「〈マーダラー〉ってことは仮にも上司なのに」

今だに恭吾への悪罵を吐き出し続ける駿を見やって千瀬は呟く。階級内の権力に差は無いとはいえ、一応の敬意は払うべきではないのだろうか。

――そこまで考えて少女は思考を諦めた。彼が首領にでさえそうだったのを思い出したからだ。

「なに、かまやしないさ」

駿の代わりに答えたのはレックスだった。千瀬は振り返り、彼の目を真直ぐに見つめる。その揺るぎない視線に思わず大男はたじろいだ。

「……レックス」
「お、おう」
「“アレキサンダー”って誰」
「……俺」
レックス――否、アレキサンダーは苦笑した。

＊

名前が嫌だったんだ、と彼は語る。
「昔から思ってたんだよ、俺には合わねぇって。そしたらな、ルカがこのあだ名を考えてきた」
まだガキの頃の話だと彼は笑った。目を懐かしそうに細め、ひどく楽しそうに。
「チトセはレックスって呼んでくれよ。キョーゴが本名を呼ぶのはただの嫌がらせだ」
そういうと、レックスは何か書いたメモを千瀬に見せる。彼が持っていると、標準サイズの鉛筆も竹串のようだ。
千瀬はメモに書かれているアルファベットを目で追った。
（Ａｌｅｘａｎｄｅｒ、Ａｌｅｘ、Ｌｅｘ……Ｒｅｘ）

どうやらこのニックネームは、連想ゲームの様な過程を経て完成したらしい。それにしても随分と手の込んだ。ルカが考えたということは、ルカとレックスは幼い頃からの知り合いなのだろうか。

「ガキが考えたにしちゃ上出来だろう？」

レックスは満足気に笑む。アレキサンダーと言う名はこの組織に入るとき捨てたようなもので、彼はもう『レックス』と言う存在なのだ。恭吾はわざわざ掘り返して楽しんでいるけれど。

アレキサンダーと言う名の何が嫌だったのかはわからない。尋ねようとして少女は僅かに迷った。……立ち入ったことを無闇に聞いてはいけない。

「そう言えばチィ、お前は」

「え？」

「お前の名前さ。俺には漢字はわからないが、どういう意味があるんだ？」

日本人はその漢字一文字に意味を込めるらしいな、と男は言う。それは純粋な好奇心、詮索などではない。――けれど少女は答えに窮してしまった。

「あたしの、名前？」

この『瀬』という字を名に使うのが習わしだったと言えば男は納得するだろう。納得できないのは千瀬のほうだ。

意味。この名の意味なんて知らない。気付いたらそう、何時の間にか――――――

少女の思考はそこまでで中断された。聞こえたのは、耳を抉るようなけたたましい音。彼らが監獄と呼ぶこの部屋いっぱいに、甲高いサイレンが響き渡ったのである。

「……仕事だぜ」

駿が静かに立ち上がった。

第二章《模索》：赤い手（1）

黒沼千瀬にとって初めての『召集』だった。

彼女達が集められた場所は、千瀬が最初にここへ来た日に通った巨大なホールの一角である。一歩進む毎に埃が舞い、床に立ちこめるひんやりとした冷気が足を伝った。駿に示された場所に立ち止まれば、そこからはホール中央に位置する重々しい階段が見える。――あの頂上から見下ろせば、きっとこの空間一帯を一望することができるのだろう。

今回召集がかかったのは〈ソルジャー〉だけであるらしい。しかし周りを見まわしてみれば、十三人いるはずのメンバーの中で来ているのは千瀬と駿、ロザリー、サンドラとレックス。遅れてやって来たシアンの後ろに、見知らぬ少女がいるだけであった。

「――正直、そんなに大変な相手じゃない」

突如、聞き覚えのある声が響く。ホールの奥、先刻少女の見つめていた階段の上から現れたロヴ・ハーキンズは二人の人間を従えていた。

一人は長い黒髪を持つ少女――言わずもがな、ルカである。もう一人は白銀の髪をした青年で、鋭い目が金色に輝いていた。三人は漆黒の衣服に身を包み、その一角だけが何か異彩を放っているように感じられる。

「……あいつがエヴィルだ」

銀髪の青年を見て首を傾げた千瀬を横目で確認し、駿は素早く囁いた。ロヴは二人を従えたままゆっくりと階段を下り、千瀬達の前ま

で来ると足を止める。

「ここにいる人数で十分にやれるだろう。とくに注意事項もない。いつも通りだ」

ロヴはその瞳でぐるりと〈ソルジャー〉を見渡した。焼き菓子を振る舞っていた時とは違う彼の双眸は、誰一人として動くことを許さないかのような圧力を持っている。

「緊急時のみこちらから〈ハングマン〉を送ろう。詳しい出撃の日程は後から追って連絡する」

――じゃ、解散。そういうとロヴは背を向けた。その場の空気が僅かに弛む。なんだかやけに短い集会だった、とぼんやり千瀬は思った。

……出撃、と彼は言った。つまりそれは、少女達に課せられた仕事を意味しているのだろう。千瀬がここでやるべき、たった一つの仕事。たった一つの理由。

ロヴがホールから姿を消したのを確認し、集まった面々も次々とその場を後にしはじめた。それを見た駿が帰るか、と呟く。次の瞬間だった。

「シュン、ローザ」

静かな声が聞こえた。呼ばれた二人が後ろを振り返ると、靡く黒髪が眼に映る。

「ルカ」

千瀬は目を瞬いた。てっきりルカは、ロヴやエヴィル一緒に居なくなったものだと思っていたのだ。現に立ち去る背中を見たような気がする。

「二人とも、このあとチトセをつれて“廃棄場”よ」

駿とロザリーは顔を見合わせると小さく頷いた。二人の間で交わされた僅かな目配せを、千瀬は知らない。

それだけを告げると、今度こそルカは少女達に背を向けた。背中を滑る絹糸のように細く長い髪は、凝縮した闇を紡いだようだと千瀬は思う。千瀬と同じ黒、けれど違う黒。

＊

「廃棄場、って何？」

「……その名の通りだな」

ルカが立ち去ったのを見届けた後、駿とロザリーは千瀬を連れてホールの外へ出た。二人は千瀬を挟むようにして何処かへと歩いている。部屋には帰らずそのまま目的地へ向かうのだ、と駿は言った。

「こんな所があったんだ……」

組織の建物の内部は複雑に入り組んでいる。外敵からの侵入を拒むのには適しているのかもしれないが、おかげで千瀬は今だに全ての道を把握しきれていない。

細い通路を抜けると見たことがない場所に出た。どうやら建物の裏手についたようで、辺り一面が背の高い植物に被われている。――まるで、何かを隠すかのように。

「“ルシファー”にとって不必要だと判断されたものを”廃棄”する、ゴミ捨て場のことだ……ほら」

駿が指差したほうを向くと、薄汚れた鉄の板が植物の合間から露出しているのが見えた。……否、それはただの鉄板ではない。植物に隠れて全貌はわからないが――そこにある《何か》を覆っているシェルターの一部なのだ。

千瀬は初めてこの組織にきた日、外からこのシェルターが見えていたことを思い出した。

立ち止まる少女に向かい、来いよ、と駿が手招きする。此処で自分達が何をするのか尋ねたが、ロザリーは曖昧に笑っただけだった。

「お前、自分の仕事はわかってるだろ」

駿がシェルターの扉を開く。錆びた鉄の扉が擦れ合い、ギィと悲鳴を上げた。

「ゴミ処理を、するのさ」

彼らはその暗闇の中へ、ゆっくりと足を踏み入れる。

＊

中には殆ど光が入っていなかった。古びた鉄に混じった臭いばかりが気になって、方向感覚を失いそうになる。黴と枯死した植物と、それから。

（腐臭……？）

「大丈夫？　ここちょっと臭いからねー」

ロザリーが顔をしかめた千瀬の手を取り先導する。二人は慣れているのか、明かりの無い中で躓くこともなく淡々と進んでいった。

――そして《それ》は、唐突に現れる。

突如目の前に人工的な明るさが広がった。眼が慣れてくると、そこにだけ照明が備え付けてあるのだとわかる。剥き出しになった電球の刺すような光が目に染みて、思わず少女は目蓋を閉じた。

次に見えたのは金属製の柵だ。何かを囲むように大きな円を描いて立ち並ぶそれの中を覗いてみるように促され、千瀬は柵に手を掛ける。

――少女は息を呑んだ。呑まずには、いられなかった。

……日本には『蟻地獄』と呼ばれる虫がいる。乾いた土の中で生活する、ウスバカゲロウの幼虫だ。それは土にすり鉢状の穴を掘り、その中心部で蟻等の獲物となる虫が落ちてくるのを待っている。

《それ》は、その蟻地獄の巣に酷く似ていた。

「……何で」

柵の内側は大きなすり鉢状の穴。深く抉られた地面、整えられた斜面、鉄柵から伸びるたった一本の梯子。

まるで黄泉への入り口のようなその深穴の底に居たのは――紛れもなく、“人間”だったのだ。

第二章《模索》：赤い手（2）（前書き）

やや残酷な描写な含まれますのでご注意ください。

第二章《模索》：赤い手（2）

「……どうして!?」

「言っただろ。《ゴミ処理》だよ」

ひゅう、と千瀬の喉から擦れた呼吸音が漏れた。目の前の光景に頭のほうがついていかない。

全部で六人、だ。確認できる限りでは女も一人混じっている。彼らの手や足は数本の太い鎖によって絡めとられ、その先は全て穴の縁に立つ合金の柱に繋がっていた。

「これが……不必要なモノってこと…？　《処理》って……」

そういうことなのか、と。少女は唐突に悟った。組織にとって不要だと判断された人間達。不必要な、モノ。

「重大な失敗か、裏切りかはわかんねぇけど……俺たちが今回選ばれたのは、《コレ》を他でもないお前に経験させるためだ」

時々こうして《ゴミ処理》の役が回ってくるのだと駿は言う。千瀬は声を出すことも忘れ、ただ穴中の人間達を見つめていた。

――此処からでもわかる。あれは、死を待つ人間の顔だ。畏怖と懇願、それ以外の表情など持ち合わせていない。迫り来る恐怖に抗う術を持たぬ、ヒトの顔。

「……お前からやるか？」

駿が千瀬に握らせたのは中型のピストルであった。黒い鉄の固まりが鈍く光る。掌にずしりと沈んだ重みに、少女の体が強ばった。

「サンドラが渡したナイフは持ってるんだろーけど……いちいち下まで降りねぇといけないから。これは初心者向けだ。照準を合わせればガキにでも使える」

安全装置はもう外したから、と。そう言う駿の表情に色はない。

「こいつで殺せ」

「……待って……」

声が震えた。やるべきことはわかっていたし、自分の仕事も役割も何度も繰り返し言い聞かせてきたはずだった。

千瀬にとって想定外のことがあるとすれば、相手が無抵抗であること。それだけだ、それだけなのに。

駿の瞳が千瀬を射ぬくように見つめていた。口を開いても零れるのは、躊躇いの言葉と呼吸音ばかり。ひゅう、ひゅう。

「……チトセ、」

ロザリーの声が聞こえた気がした。その諭すような響きに、少女は再び震える。二人はただ千瀬が《彼ら》に手を下すのを見ているだけだ。千瀬が自らの意志で動かない限り、二人もまた動かないだろう。

（忘れてなんてなかったのに）

優しい同胞達に囲まれて、自分の居場所を見つけた気分になって。
――そんなこと、許されるはずはなかった。

（わかってたのに）

アタシハ　モウ、殺人者　ナノニ。

千瀬は簡易な造りのピストルを握り締めた。力を込めた端から指が、腕が、震える。

「……どうしよう」

擦れた声が千瀬の喉を削った。
どうしても力が入らないのだ。引き金は重く、全く動こうとしない。
脳から指先へ繋がる神経が切断されてしまったかのように。

「殺せ」

駿が短く告げる。
彼は千瀬に、これからの為の一歩を踏み出させようとしているのだ。
千瀬もそれはわかっている。来るべき《初仕事》を前に、たったこれだけの人間を殺せなくてどうするのだ。

「……殺せ！」

わかってるのに。引き金を引くだけ、簡単だ。できるはずじゃないか。今更何を！
殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ――――――

弾丸が爆ぜた。パァン、という乾いた音の余韻が空気を震わせる。
火薬の匂いが辺り一帯に満ちてゆく。
千瀬が気が付いた時には、穴中の人間のうち一人の男が眉間から血を流して死んでいた。息絶えた男を見て、すぐ傍に繋がれていた女が金切り声をあげる。

――鳴ったのは、千瀬の銃口ではなかった。

千瀬の隣で引き金を引いたロザリーは無表情で、彼女の持っている銀の拳銃を静かに下ろす。僅かな白煙を吐き出しているそれから放たれた銃弾が、いとも容易く男の命を散らしたのだ。

「ぁ……」

千瀬の足から急速に力が抜ける。そのまま彼女は崩れるように床に座り込んだ。掌からするりと滑り落ちたピストル、それが地面とぶつかる音。下手をすれば暴発してしまうだろうその行為に、千瀬は気付くことさえできない。

「これがあたし達の、お仕事だから」

ロザリーは淋しそうに笑うと、どうする？　と駿を振り返る。プラチナブロンドの髪が人工の光を反射して煌めいた。その光だけが千瀬の目に、浮かび上がるように映る。
腕を組んで後ろから一部始終を眺めていた駿は千瀬の前に屈み込む

と――そのまま千瀬の頬に一発、平手を食らわせた。

「――シュン！？」

パシ、という音が聞こえて千瀬が眼を見開く。駿は少女の瞳を正面から見据え、低く告げた。

「立てよ、千瀬。これはお前には必要だ」

駿は千瀬の腕を掴むと、勢い良く引き上げる。

――まだたった十四歳、彼だってこの少女が迷わずに引き金を引けるとは思っていなかった。けれどここで生きていく以上、甘えや妥協は許されない。これから放り出される戦場で、迷い躊躇いは命取りとなる。

「お前、俺たちが一部の連中からなんて呼ばれてるか知ってるか」

千瀬は首を横に振った。少年の眼が、僅かに切なげに歪む。千瀬が彼の表情の真意をはかりかねていると、その唇が薄く開いた。

「“Ｒｅｄ　Ｈａｎｄｓ”――意味は自分で考えろ。いいか、俺たちに選択肢なんてないんだ。腹括れよ」

今になって疼き始めた頬の痛みに、だんだんと視界がはっきりしてくるのを感じる。千瀬は僅かに腫れた頬に手を当てた。冷えきった掌が痛みと同化する。駿の言葉を噛み締めるように、そのまま大きく息を吸い込んだ。

「逃げられねぇよ。殺すしか、ないんだ」

千瀬は再びピストルを手に取る。今度は自分の意志で。それを見た駿が淡く笑んで、千瀬の隣で自らの銃を構える。カチャリと無機質な音がした。

――響いた銃声は全部で五発。

家族の命を奪った日とは違うクリアな視界と思考の中で、彼女の放った銃弾はいとも容易く、『ゴミ』達を『処分』していった。

第二章《模索》：赤い手（2）（後書き）

【補足】“ｒｅｄ　ｈａｎｄ”……元は文字通り《赤い手》→《血塗れの手》の意味だったのが転じて、現在では“ｒｅｄ　ｈａｎｄｅｄ”……《現行犯の》　の意味で使用されている。本文中では前者の意味で使っています。

第二章《模索》：間話

ぶらぶらと。特に行くあてもないまま建物の中を彷徨っていた千瀬の眼に、鮮やかな金の髪の女が映った。遠くを歩いているので顔は見えないが、サンドラは“監獄”に居たはずなのでミクだろうと思う。

彼女と千瀬は、少女がはじめて此処に日以来顔を会わせていなかった。

千瀬は挨拶をしようとして諦める。如何せん、声をかけるにしては距離がありすぎるのだ。

「みーっけ」

その時である。突然肩を掴まれたかと思うと、千瀬はL字に曲がった廊下の陰に勢い良く引きずり込まれた。声を上げる暇もなく慣性に負けた体がぐわんと傾ぐ。

――眼を白黒させる彼女の目の前に立っていたのは、満面の笑みを浮かべた少年。彼は人差し指を唇に当て、しぃ、と言ってみせた。

「あんたがチトセでしょ？　やっと会えた」

少年はにかっと歯を見せて再度笑む。悪戯っぽく細められた大きな瞳の色は焦茶、大きく跳ねた癖のある赤毛が彼の性格を象徴しているかのようだ。

「あなたは……？」

「ルード」

彼は至極明るく答える。年令は千瀬と同じぐらいだろうか。

「本当はオレに名前なんてないんだ。でも皆が無礼者（ルード）って呼ぶから、今は“ルード・エンデバー”って名乗ることにしてる」

彼は無理矢理に千瀬と握手をした。ぶんぶんと勢い良く振られたお陰で肩が軋む。なんでこんな場所に子供がと尋ねたくなったが、他でもない千瀬自身も子供の為何も言えない。

「廃棄場、行ったんだろ？　どうだった、初めて人間を殺した感想は」

唐突な質問に千瀬は僅かに震えた。少年は依然として笑顔のまま。

「初めてじゃ、ないわ」

冷静を装い、押し殺した声での返答。少女の瞳の僅かな変化に――その鋭さに、少年は容易く気が付いてしまったが。

「“人間”だと思って殺ったのは、初めてだったんじゃない？」

「……どういう意味」

ルードは再び口を開きかけたが、突如その動きを止めた。フリーズ。訝しむ千瀬の前で二、三度口をぱくぱくと開閉させると、『やべ』と呟いてそのまま少女に背を向ける。

「じゃ、じゃあな！　チトセ。また会いにくるよ」

「え、ちょっと待っ……」

一方的に現れてハイさようなら、なんて納得できるわけが無い。酷

く慌てた様子のルードを引き止めようと千瀬は咄嗟に腕を伸ばした。
――瞬間、背後から声。

「あれ？　チトセじゃない」

突如聞こえたそれミクのものだった。後ろを振り返り、彼女の姿をみとめた千瀬はぱちぱちと瞬きを繰り返す。

「びっくり、した……お久しぶりです」

彼女が先刻まで遠くにいたことを思い出した千瀬は二度驚いた。それともあれは別人だったのだろうか。
ミクは一度だけ笑みを浮かべると、途端無表情になる。まるで人形のようだ、と千瀬は思った。

「おかしいわね……今ここにルードの気配がしてたのに」

ミクは僅かに眉を寄せ唸るように呟いた。逃げられたか、とその形の良い唇が動く。

「え、その人なら今……」

千瀬は体を反転させ――我が目を疑った。
彼女がルードと出会った場所にはもうそれ以上の曲がり角はなく、ひたすら直進する廊下が広がるだけである。しかし今その空間一帯には人影一つ見当たらない。
……少年は、忽然と姿を消してしまっていたのだ。

第二章《模索》：ＴＨＥ　ＴＯＷＥＲ　ＯＦ　ＢＡＢＥＬ（１）

――その頃、人々は皆、一つの同じ言葉を話していた。人々は東の方からやってきて、シナルの地に住み着いた――

＊

「ルードに会ったぁ！？」

素っ頓狂な声を上げたのは駿である。彼の横ではレックスが身を乗り出し、サンドラは自らのブロンドに指を絡めながら『困った子』と呟いた。

千瀬の出会った謎の少年、“ルード”の正体を知るのは容易かった。皆の話を照合してみると、どうやら彼はＥＰＰＣ内一番の問題児として有名らしい。あの少年には放浪癖があるようで、今現在も行方を眩ましている真っ最中だ。彼が消える度に〈マーダラー〉は血眼になって彼を捜索している。

……そうなのだ、ルードは――最年少〈マーダラー〉なのだという。

「信じられない」

噛み締めるようにそう吐いた千瀬に、まぁそう言うなとレックスが

笑う。あの少年の実力は確かなものらしい。ただほんの少し――否、かなり――その他の面で問題があるだけ。

「この間ここに来たやつ、覚えてるか」
「えぇと……キョーゴ、だっけ？」
「あぁ、あいつもルードを探しに来てたのさ」

レックスが苦笑いを浮かべた。ルードは放っておけば一、二週間は普通に行方を眩ませている。召集が掛かろうが仕事が入ろうがお構いなしだ。しかしあの少年は、それが許される立場の人間ではない。――遊びたい盛りだから仕方はないんだが、とレックスは嘆息する。逃げ足が速く悪知恵ばかり働く分、一介の子供より数段タチが悪い。

「みんな～！　“指令書”もらって来たよっ」

明るい声が響くと同時、鉄の扉を押し開けてロザリーが部屋に入ってきた。彼女は手に一枚の紙をもっている。

「おかえり、ローザ」

サンドラが柔らかく笑んでその用紙を受け取った。
ロザリーの持って来た物は、ＥＰＰＣが出動する際の注意事項と今回の任務内容が書かれている『指令書』である。毎回任務に就くにあたってはロヴからこれを受け取ることになっているらしい。

サンドラが指令書を読み上げた。《“ルシファー”本部の護衛ならびに敵の排除》――即ち、今回の任務内容である。
わかりきっていることだったが、こうして文章になると気が引き締まると駿は笑った。

「注意事項は……」
「“いつも通り”なんだろう？」
サンドラの声を遮り、レックスが体を揺すりながら笑う。サンドラもそれに微笑んで肯定の意を示した。
「いつも通りって？」
そう尋ねた千瀬に、レックスは冗談めいたウインクをしてみせる。見かけによらず器用らしい。
「ロヴからの注意はいつも同じだ。『死ぬな』――それだけさ」
それだけ？　と少女は首を傾げた。何にどう注意すれば良いのかまったく不明瞭である。
千瀬が呆気にとられていると、駿が後ろから指令書を覗き込んで大声をあげた。
「あーっ。ロヴの奴、またやりやがった」
「何がだ」
「これだよ、これ」
駿は指令書の下端を指差した。それは今回の出動人数が書かれている筈の場所。見れば数値は6となっていた。
「今回の出動は俺とローザとチトセ、レックスとサンドラ、シアンにオミで七人だ。あいつ、また間違えてる」
……また、ということは。どうやら頻繁にある事らしい。
“オミ”と言うのが召集時にシアンと一緒にいた少女の名だ。黒目

がちの大きな瞳が印象的で、冗談みたいに鮮やかな浅葱色の髪をしている。（地毛なのか染めたものなのかは千瀬には判別できなかった。）口数が少なく、千瀬とは召集後に一度挨拶を交わしただけである。

「ロヴって頭が良いのに、どういうわけだか抜けてるのよね……」

サンドラの言葉に全員が頷く。馬鹿と天才は紙一重というが彼の場合はそうではなく、単にやる気の問題であった。やはり今回の《相手》はとるに足らない、そういうことなのだろう。

「指令書は後で《テトラコマンダー》にも回さないといけないんだから、間違ってると面倒臭いことが起こるぞ……」

レックスは大袈裟に顔をしかめた。何故かちっとも困っているように見えなかったのだが。

しかし《テトラコマンダー》とはルシファーの事務も情報処理も兼ねた連絡の中枢、誤報を伝えてしまえば確かに面倒なことになるだろう。

「じゃあ、あたしロヴの所に行って訂正してもらってくるよ」

千瀬は指令書を受け取ると、軽やかに立ち上がった。

＊

息を吸い込む。溜息。周りを見渡す。また、溜息。嗚呼、これは

（……迷った）

千瀬は半ば諦めかけていた。先日ロザリーと通った道を確実に辿ってきたはずなのに、何時の間にやら見たことのない場所へ来てしまっている。

周りには猫の子一匹見当たらない。猫がいるはずはないが。

少女は己の腑甲斐なさに再び溜息を落とした。何故迷った、何故迷えた、と不毛な疑問が脳内をぐるぐる駆け巡る。まだ日は浅いとはいえ、この建物にも慣れたはずだったのに。

正確にはわからないが、もうずいぶんな時間が経っているはずだ。

（――とりあえず、あのエレベーターを探さないと）

彼女は自分を勇気づけると再び歩みだす。止まっていても助けは来ないだろうし（来たら来たで恥ずかしいし、）何よりも戻る道すらあやふやだった。よって、後ろは振り返らないことにする。どうにかなるだろう、と根拠のない自信でひたすら足を動かした。

「……あ、あの。すみません」

ほどなくして、千瀬は漸く自分以外の人間を発見した。巡回中らしいその男の背中を叩く。背が高くてガタイも良い彼は、犯罪組織に属するにはこれ以上になく適した人材に見えた。

――案の定、振り返った男の風貌はいくつもの死線を潜り抜けていそうである。

（……ちょっと恐い）

千瀬は強ばった体を奮い立たせ再び口を開いた。今このチャンスを逃せば、一生この建物を彷徨わなければならないような危機感に囚われていたからだ。

「あの……」
「……れ、」
「れ？」

男の鋭い表情は、千瀬と目が合った瞬間大きく歪んだ。まるで何かを恐れているかのようにその瞳が揺れる。どうしたのかと少女が眉を潜めた瞬間、男が叫んだ。

「レッド・ハンズ……！」

少女は瞠目した。男は声を張り上げるやいなや、あろうことか千瀬に銃を向けたのである。レボルバーの回るがちゃりと言う音が空間に落ちた。――本物の拳銃だ、弾は間違いなく入っている。

「ち、ちょっと……！　待ってください！！」

わけが分からず千瀬も叫び返した。男の腕は哀れなほどに震え、今にも発砲してしまいそうだ。そんな状態で男は何事かを喚き散らしながらじりりと一歩退いた。まさかとは思ったが間違いないだろう。怯えているのだ、千瀬に。

「違うんです。道を聞きたくて……何もしないから！」

突き付けられた銃口の圧迫感に千瀬の背から嫌な汗が流れた。再び男が声を荒げる。
――しかしその時、千瀬はあることに気が付いた。

「何……？」

千瀬には、分からなかったのだ。

『レッド・ハンズ』――そう叫んだ後の男の言葉や意味が何一つ。

……何を喋っているのか、全く。

第二章《模索》：THE TOWER OF BABEL（2）

――同時刻、ロヴ・ハーキンズの私室にて。

「……マジで？」

あまりにも帰りが遅い千瀬を心配して迎えに行った駿とロザリーは、ロヴに彼女が来ていないことを告げられ愕然とした。二人の顔色が目に見えて悪くなったのを面白く思いながら、首領の男はゆっくり頷く。嘘は付いていなかった。

「何やっているんだ、あいつは……」

ロヴの部屋を慌てて飛び出した二人が捜し回ること約十分。彼らの目に映ったのは、廊下の真ん中で対峙したまま動かない男と少女である。

男は少女に銃口を向けているし、少女は背中に回した手の先で僅かにコンバットナイフの柄に触れていた。

ひくり、と震える駿の口元。安堵と呆れと怒りで笑みが引きつる。

（つーか何してんのマジで）

――殺るか殺られるかの空気が流れている。

思わず遠い目をした駿は我に返ると、少女を救済すべく声を掛けることにした。

「チトセっ！　何やってんだお前！」

「し、シュン……！」

千瀬は困惑仕切った様子だった。迷子になった挙げ句こんなことになっているのだから無理もないのだが。

「何で迷えるんだ」

「だ、だって……」

情けない表情で必死に弁明する少女を見つめながら、こいつ実は馬鹿なんじゃないかと少年は思う。迷うなら最初から行くなんて言わなければ良かったのに。

（それとも大丈夫だと思ってたのか）

……天然ならなお質が悪い。

はぁ、と少年は溜息を溢した。所属早々、先の思いやられることだ。まだ少女は初任務にさえ出ていないのだから。

「……で、」

そいつ何、と駿は目線だけで回答を促す。そいつとは勿論、千瀬に銃口を突き付けたまま硬直している男。

「道、聞きたかっただけなのに……っ！　理由を話そうとしても言葉がわかんなくって……」

いきなりこんな状況に、と弱々しく千瀬は吐いた。駿は男の襟元についている瑠璃色の紋章に目を止めると軽く舌打ちをする。

「こいつ、《ポート》か……」

厄介だなと呟いて、駿は隣にいるロザリーに耳打ちした。

「……ローザ。シアンを呼んで来い」

シアン・エルフィール。〈ソルジャー〉所属のイタリア人だ。千瀬にはなぜシアンを呼ぶ必要があるのかわからなかったし、彼女がこの緊迫した状況の打開を助けてくれるとも思えなかったのだが、おとなしく事の成り行きを見守ることにする。

駿に言われて身を翻したロザリーは、ほんの数分の間にシアンを連れて戻ってきた。（つまりこの場所は“監獄”からほんの数分しか離れていないということなのだが。）現れたシアンは堂々として見えたので、千瀬は僅かに安心する。

「……つーわけなんだ。悪いな」

「いいわよ」

シアンは快活な笑みを浮かべる。

問題の男は平静を取り戻しつつあったが、次々と集まる虐殺隊（スローター）のメンバーを前に顔色は蒼白であった。見た目こそ女子供ばかりのようだが、今彼を取り囲んでいる人間達は組織最高峰の戦闘部隊、その所属員だ。ＥＰＰＣに逆らえばどうなるかは明白、彼らは人の命に無頓着――それゆえの、“レッド・ハンズ”なのである。

……だからこそ、男は千瀬に銃を向けてしまったのだが。

「もう大丈夫だよー」

ロザリーか千瀬に微笑みかけた。何だかわからないが、とりあえずは助かりそうだと千瀬は思う。あのまま我を忘れた男に襲われたら、どうしても戦わざるをえなかった。……千瀬は、戦うつもりだった。

（だって、決めたから）

――少女には、廃棄場の一件を通して心に誓ったことがある。それは酷く曖昧な形をしていて、目標として言葉にするのは難しい。仮に名を付けるならば、『生き延びる決意』。

きっと少女は、この先たくさんの人間を殺すだろう。重ねるのは罪ばかりだろう。それでも、生き残ると決めた。

（殺した命を背負って、生きていく）

それは小さな、けれども精一杯の誓いだ。自分が巻き込んだ最愛の姉を迎えに行って、もう一度謝ることのできるその時まで、千瀬は死ぬわけにはいかない。

（この、場所で）

任せなさい、と笑ったシアンの顔が姉と重なって見えた。百瀬。少女のたった一人の肉親は、今もこの世界の何処かで生きている。

――その時シアンの後ろからそろりと顔を出した人物と目が合って、千瀬は目を見開いた。オミだ。

毛先をざっくりと切り揃え浅葱色の髪、それを耳上の高い位置で結いあげた独特のヘアスタイル。

オミは一見して千瀬よりも年下のようだが、真実の程はわからない。彼女は一言も発せず真直ぐに千瀬を見つめていた。その目に全てを見透かされているようで、思わず千瀬は顔を逸らしてしまう。

刹那、千瀬の耳に声が飛び込んできた。シアンが男との対話を開始したのだ。

彼女は強い調子で男に告げる。

「銃を下げなさい。貴方に危害を加えるつもりはない」

シアンに返答するかのように男は何かを呟いた。彼の言葉はやはり千瀬には理解できない。ノイズがかかったように聞こえるわけではなく、ただわからないだけ。――異国語、なのだ。

「……わかってるわ。けれど一人で狼狽して銃を構えるなんて恥を晒したことを考えなさい。勘違い、じゃ済まされないでしょう？貴方が銃を向けた相手はロヴ・ハーキンズ直属の戦闘員よ。本来なら首領（ヘッド）に連絡を取るところを見逃してやろうって言ってるの」

シアンの強い調子に怖気付いたのか、男は今やすっかりおとなしくなってしまった。彼は神妙な顔つきで頷くと懐に銃をしまう。そしてまた少し言葉を発した。

（ちょっと待って）

ここにきて初めて千瀬は異変に気が付いた。思わず我が目を疑う。何故、シアンと男の会話が成立している？

「実際の発砲はなかったようだし、チトセに免じて今回の件は不問とするわ。この子に感謝するのね」

シアンがそう言い終わるやいなや、男は一礼するとそそくさとその場を退散した。その背を最後まで見届けてから、シアンがこちらを振り返り笑う。

「はい、解決！」

「お疲れさんっスー」

「チトセに殺されるかと思っちゃったみたいね、あいつ」
「チキンめ」

千瀬はシアンと、彼女に労いの言葉を掛ける駿を交互に見比べた。
頭が上手く回らない。混乱。
……シアンの喋っている言葉は日本語で、あの男は異国語を喋っていて、だからわからなくて、シアンの言葉は通じていてでも日本語であれ？

「どうして……？」

千瀬にもわかる言葉で喋っていたシアンと、わからない言葉の男。
何故その二人の会話が成り立ったのだ。
破裂しそうな頭を抱えて千瀬は呻いた。それを見たシアンが返答に困っていると、後ろから声。

「あー、チトセ。俺が説明省いてたんだ。悪かったよ」

駿が申し訳なさそうな顔で千瀬を見つめる。こめかみの辺りを指で掻きながら、どうやって説明しようかと考えあぐねているようだった。

「まぁ簡単に言っちまうと……シアンとさっきの男の会話だけど」
「うん」
「あれ全部イタリア語だから」
「……はい？」

ルシファーは犯罪シンジケートである。マフィアでもなければ暴力団でもない。かといって、一般的な企業とはまったく異なる活動をしている。

――あえてあげるならば、マフィアに近いのかもしれないと駿は言った。

「……よくわかんない」

「適当に流せ。実は俺もよくわかってねぇんだから……そもそもマフィアってのはイタリアのほうを中心に活動するらしくてな」

「なんで？」

「何でってそりゃお前……えーと……そんなイメージじゃん」

駿がしどろもどろになったところで、周囲から笑い声があがった。シュンってばお馬鹿さんだよねー、と笑って殴られているロザリーを横目に、シアンが続きを語る。

――そもそも“マフィア”というものはシチリアを中心に活動していた犯罪組織の総称で、現在はイタリア系の人間で組織されているグループが多い。ここルシファーでもＥＰＰＣ内は様々な国籍の人間が集まっているように見えるが、《ポート》以下の構成員はほとんどイタリア系の人間を採用しているのである。（次に多いのはアメリカ人だ。）中には本当にマフィアの一派から引き抜かれた者までいるらしい。

「でね、さっきの男も例に漏れずイタリア出身だったわけ」

つまりあれはイタリア語だったということだ。何となく英語ではない気がしていたが、満足に学校にも通っていなかった千瀬にはその判別すら難しかった。

「……そこまでは、わかったけど」

千瀬の目の前で笑みを浮かべるシアン・エルフィールはイタリア出身の女性である。イタリア語は母国語だ。

――だから、何だというのだ。千瀬が一番知りたい核心の部分には、まだ何も触れていない。

少女の顔に不服が滲み出ていたのだろう、駿が苦笑を洩らした。

「ここからが本題。いいかチトセ、よく聞け。俺が省いた『暗黙の了解』の内容だ。――“ＥＰＰＣのメンバー同士は、いかなる場合でも言葉が通じるようになっている”」

「……どういうこと？」

「そのまんまさ。シアンの話したイタリア語が、お前には日本語に聞こえてたってこと」

駿は静かに言葉を続ける。にやりと口元を歪めると、内緒話をする時のように囁いてみせた。

「ロヴが能力者だって話は、前にしたな？」

「聞いたけど……」

それが何、と続こうとした千瀬の言葉が不意に途切れる。一瞬とてつもなく突飛な想像が頭を掠めていった為だ。自分はこんなに想像力豊かだっただろうかと苦笑しそうになる。……そんなの、冗談に決まってる。

「まさか、」

まさかそんなこと。

「――これが、ロヴの力だ」

……ありえない。

＊

テレパシーって聞いたことあるだろと尋ねる駿に、千瀬は見開いた目を向けることしかできなかった。

「それに近いらしい。ただあいつの場合は自分の声を相手に伝えるんじゃなくて、他人と他人の言葉を繋いでる。自分以外の者の意志を、もう一方に伝えることができるんだ」

信じられない本当の話、と少年は笑う。彼がこれを千瀬に言わなかったのは、そのほうが面白いからだ。黙っていてもいつか気が付くことなのだから、その時の反応を楽しむつもりだった（けして説明が面倒だったからではない、ないはずだ）。

――その前にこんな事態を引き起こしてしまったのだから、それは説明を怠った駿の落ち度である。

千瀬に対して申し訳ないことをしたという気持ちは多少あったので、駿は出来うる限り細かく説明してやることにした。

「あいつの力が及ぶ領域（テリトリー）があるらしいけど、少なくともそこから出ない限りは俺たちは言語には不自由しない。色んな人種が混じって生活してるからな、そうでなきゃ不便だろ？」
「けっこう広範囲に使用できるんだって。それで、」
「――その力をＥＰＰＣ内に使ってるってこと？」

ロザリーの言葉を遮って千瀬が尋ねる。その通り、と駿は笑った。

「翻訳、全自動の通訳……トランスか。まぁそんなふうに思っとけば良い」

イチハラは《ホンヤクコンニャク効果》って言ってたけど。そう呟いた駿の言葉に千瀬は首を傾げた。何で蒟蒻？
シアンが続いて口を開いたので、少女の疑問は一瞬で流れ消えてしまう。

「私はここに来てから、英語とイタリア語しか話したことはないわ。千瀬の話す言葉はね、私にはイタリア語に聞こえるの」
「……ほんとに？」
「本当に。私たちの脳は、ロヴの力によって聞こえてくる声を会話の相手本人のものだと勘違いするんですって。――そういうふうに、ロヴが操作してるのよ」

不思議なんだけど信じるしかないのよねー、だって実際そうなんだもん。
からからと笑うシアンを唖然として千瀬は見つめた。どうやら皆、この現象にすっかり適応しているようだ。
ただし、と駿が言う。

「ロヴの力が働いてるのは俺たち特戦隊……ＥＰＰＣの連中と、あとは《テトラコマンダー》だけだ。だからさっきのおっさんみたいな《ポート》以下の連中とは、元からそいつらと同じ言語を話す奴しか会話できない」

――信じられない話だった。だがそれ以外にこの現象を説明することはできないのだと、漸く千瀬は悟る。半ば無理矢理自らを納得させた。

（……あたしって馬鹿）

何故気付かなかったのだろうと千瀬は自分の単純さを恨む。明らかに日本人ではない人間がこれだけいるのに、全員が日本語で会話しているはずないではないか。

「……ねぇチトセ。“バベルの塔”って知ってる？」

ロザリーの質問に千瀬は首を横に振った。聞いたこともない。そもそも彼女の育った環境では、子供に昔話や神話の類を語り聞かせるといった習慣は存在していなかったのだ。

「……聖書に書かれている話」

口を開いたのはオミだったので千瀬は驚く。そういえば彼女は今日一度も言葉を発していなかった。

「全ての人間が同じ言葉を話していたとき、人間は天に届く巨大な塔を造ろうとして神の怒りに触れ、神は人々の言語を乱してしまった。その塔が神話に残る乱れ（バベル）の塔」

物語の粗筋を丸暗記したような簡潔な説明が、すらすらとオミの唇から紡がれた。何故そんなことを知っているのか聞きたいのを飲み込んで、千瀬はおとなしく耳を傾ける。
オミの解説にロザリーが頷いた。

「言葉を乱され――つまり、今まで傍にいた相手と意志疎通のできなくなってしまった人間達は、同じ言葉を話す者同士で集まって他の土地へ移っていくの。……今のあたし達にとって、ルシファーは“シナルの地”なんだよ」

しなるのち。聞き慣れぬ言葉を繰り返した千瀬は、銀髪の少女の瞳が憂いを含んでいたのに気が付いて口をつぐむ。

「差し詰め俺たちは、塔を造り上げている人間達ってところだ」

人間って言えるかは微妙だけど。と駿は笑った。

「ローザは英語とロシア語を喋ってる。ロヴはああ見えて博識でな、様々な言語を習得してるらしいぜ。ルカもあいつの影響で何ヶ国語かは話せるが、残りの連中は母国語のみだ。俺も含めて」
「……だからあたしたちは、もしロヴの能力が無くなったらバラバラになってしまう。“バベルの塔”の話みたいに」

ロザリーがぽつりと零した言葉には、淋しさが滲みだしていた。このまま泣いてしまうんじゃないかと千瀬は思う。そんなことはなかったのだけれど。

「俺たちの任期がロヴの命日までってのは、そういう意味だ。あいつが死んだら、俺たちは全員で英語でも勉強し直さなきゃならない。言っとくが、俺はそんなのごめんだ」

駿は天井を見上げた。そのさらに上にある、空を睨み付けている。
少年は言う。俺たちって中途半端なんだよな。犯罪者で人間だけど、他の奴らから見れば化け物だ。組織で地位を持った残酷な殺人鬼。でも俺はそれでいい。無力な人間より、ここで化け物でありたい。
……だけどそれでも。

「俺達のやっていることがいつか神とやらの怒りに触れて、ロヴが死んだときは」

彼はゆっくり目を閉じた。その言葉を、なぜか千瀬は聞きたくないような気がした。

「化け物の俺たちは、何もできない哀れな“人間”に戻るんだよ」

第二章《模索》：初陣（1）

千瀬は夢を見ていた。夢だとすぐわかるほどに明確で、矛盾した、リアルな映像。いつも夢見ていた光景。

寮生活の姉が、千瀬の誕生日の数日前になると必ず家に帰ってくる。そんな、少女の大好きな場面だった。片手に千瀬へのプレゼントを持った姉――百瀬は、千瀬と目が合うとくしゃりと笑む。

『姉さん』

声が反響する。ひどく静かなのだ。千瀬は自分によく似た面立ちの姉が笑う度に、自分にもそんな優しい顔ができるのかと不思議に思う。目に映る、いつも綺麗な姉の制服。

『あたしも、姉さんの高校に行きたいの』

『行けるわよ』

いつか。いつかきっとね。

百瀬は千瀬に優しかった。家の外の世界のことを、千瀬は全て姉から学んだ。千瀬はもっと知りたかったが、それは一族の鎖に邪魔されて叶わなかった。

『いつかこの家から、出してあげるから』

大好きな姉の声。そう言って、泣きそうな笑顔を浮かべたのはいつ？

触れた手は温かかった。――なんてひどい夢だろう。愛しくて悲し

いのは、もう手に入らないことを知っているからだ。……だから、

『殺したのね、チトセ』

（これは、夢だ）

少女は墜落してゆく感覚に目眩を覚えた。
視界が暗転する。映像が歪んで消える。赤と黒が目の端を掠めた。
音がうねる。ぴちゃ。ぽたり。ぴちゃ。涙の音？　血痕、誰かの手、
堕ちる、どこに。血涙、回る、声、

『あたしのことも、殺したのね』

姉の顔。歪む、視界が。

（ダメ、）

血に濡れた壁、染まる、ナイフは何処？　刀を。刀を頂戴。
嗚呼、ほら見て。真っ赤に、紅に転がった。あれは何。

――――――姉さんの、首。

『黒沼の血を絶やせ』
『忘れるものか』

『忘れさせまいぞ』

「おい起きろ、チトセ」

千瀬を覗き込んでいる駿が眠たそうに一つ欠伸を零した。目の前の顔に少女は瞠目する。ぼやける眼で辺りを見回して、漸く千瀬は自分が眠っていたことに気が付いた。

「ここ、どこ」

「あ？　何言ってんだ」

寝呆けんな馬鹿、と少年は千瀬の頭に一発喝を入れる。ぱしりと良い音が響き渡った。痛い、と少女から呻き声。

「目ェ覚めたか」

「はい……」

気恥ずかしくなった千瀬は駿から視線を逸らす。起き抜けの醜態を曝してしまった。夢まで見ていたというのに。寝ている間に変なこ

とを口走りでもしていたら、恥曝しも良いところだ。
そこまで考えて、ふと千瀬の中に疑問が生まれる。

「ねぇ、あたしを起こす前にシュン何か喋ってた？」
「……あん？　いや、何も」
「……そう」

もはや少女の中で夢はその断片しか残っていなかったが、それでもその中に——恐らく目が覚めるほんの少し前に——声が聞こえた気がした。
姉のものでも、千瀬自身の声でもなく。母でも父でもなかった。祖父祖母従兄、全て違う。それなのに、聞いたことがあるような。

（何て、言ってたんだろう）

千瀬は首を傾げる。おぼろに霞む夢の破片からはその内容を拾いあげることはできなかった。きっと二、三日もすれば、夢を見たことさえ忘れてしまうに違いない。

「……そういえば、どうしたのシュン」
「何が」

まだ外は暗い。惰眠を貪っていても誰にも文句を言われない時間のはずである。
何で起こしたの、と千瀬が尋ねた瞬間、駿は大袈裟に溜め息ついてみせた。

「お前、よくこの騒音の中で寝てられるよな」
「え……？　あ、あぁ」

漸く千瀬は合点がいった。金属のぶつかり合うような甲高い音が、部屋一杯に満ちていることに気が付いたのだ。そういえば耳が痛いような気もしていた――今更、だが。

――時刻は午前二時十七分。

「ほら、出るぜ」

召集を受けてから四日目。“監獄”の中に、《仕事》を知らせるサイレンが再び鳴り響いた。

＊

夜の風を正面から受け闇の中を疾走するのは、コンテナーを積んだ一台のトラック。それは少々乱暴に街の中を走り抜けると寂れた路地に入り込み、静かに停車した。

「こんな街中でやるの？」

「ああ。わざわざ戦の場所なんか選ばねぇよ。どこであろうと仕事が入ればそこが戦場、ってな」

千瀬はコンテナーの窓から外の様子を伺う。名も知らぬ街はひっそりと眠りについていた。遠くに見える微かなネオンは歓楽街のものだ。他には何の明かりも見えない。月さえ、無い。

「こんなところに来るなんて」

小さな街だった。ルシファー本部でトラックに乗せられてから、ほんの一時間ほどしか走らなかったように思う。こんな場所で、今からたくさん人が死ぬ。

「この街を通ってルシファーに攻め入ろうって魂胆だろ。だから、その前に俺たちが潰すんだ」

あのサイレンが鳴ってすぐに集合したＥＰＰＣの面々は、ロヴから直接戦いの開始を告げられた。敵対者側がやっと動いてくれた、と彼は笑っていて。

敵はルシファーの傘下にあったはずのとある裏組織であった。ルシファー抹消を目論み、数十人の手練を送り込んできたらしい。深夜時間帯であるのは、こちらと同じく“犯罪者”である敵が警察の眼を避けて行動を起こしたからだ。

ロヴはわざわざ向こうからやって来てくれるのを待っていたのだと言う。喧嘩は買い取り倍返し――それが首領たる彼の主義だ。そしてこういう時こそその力量を発揮するのが《特別戦闘能力保持部隊“ＥＰＰＣ”》、まさに千瀬達の出番なのだとロヴは笑った。

――虐殺隊（スローター）の二つ名を欲しいままにする彼らが動く時。それは、“犯罪シンジケート”ルシファーが最もマフィアに近い行動を取る瞬間だろう。

「準備は」

「大丈夫」

千瀬は周囲を見渡した。今此処にいるのは、ジャンケンに負けたシ

アンとレックスを除いた五人である（この期に及んでジャンケン、髄分と呑気なものだ）。
残された二人は、街で始末し損ねてルシファーに潜入した敵を排除するために本部に残されていた。

『あーあ。折角久々の仕事だってのに、一番暇な役に当たっちまった』

千瀬は心底つまらなそうにそう言ったレックスの声を思い出す。居残りが決定した瞬間、彼はまるで子供のように不平不満を零していた。

どうして暇なの？　そう尋ねた千瀬に向かってレックスは笑った。
千瀬からすれば、たった二人でルシファー内部を警備するほうがよほど骨が折れるように思える。
それを告げると、千瀬の耳元に向かって小さく体を屈めながら彼は言った。

『――ルシファーに侵入した奴を俺たちが見つけるより、それに気付いた〈ハングマン〉が始末しちまうほうが早い。今回の任務は〈ソルジャー〉用だから〈マーダラー〉の連中は手を出さないが、〈ハングマン〉はな……』

すげぇんだ、あいつら。そう呟いて彼は笑った。
凄いって、なにがどう？　首を傾げた千瀬に、今にわかるとレックスは言っただけ。

――ＥＰＣのトップに君臨する〈ハングマン〉、ルカとエヴィルの持つ力はどれほどのものなのか。その時の千瀬には、まだ何一つわかっていなかったのだ。

第二章《模索》：初陣（2）（前書き）

※これより先は流血表現等、残酷な描写が含まれます。

第二章《模索》：初陣（2）

――ねぇレックス。
千瀬は問い掛けたその言葉を思い出す。ねぇ、どうしてロヴは敵がこの街に来ることを知ってるの。

『――“わかる奴”が、いるのさ』

「ぼーっとするなよ、チトセ」

駿が顔をしかめながら千瀬を見ていた。彼の手には数本のナイフと手榴弾が一つ。

「死んだら終わりだぜ。俺たちは仲間の死体を担いで帰るようなことはしない。放置！」

少年はそう言い切ると、勢い良くナイフを床に突き刺した。ざくり、コンテナーの底に無残な穴が開く。
ルシファーに来た時点で墓石を背負っているようなものだ、と駿は言った。自分達に墓は与えられない。
野晒しの死体はいずれ、民間人や慈善事業者の手で始末されるのだろう。噂によればルシファーの傘下には死体掃除専門の業者もいるらしいので、彼らも一枚噛んでいるかもしれないが。

「警察に見つかってもアウトだぞ。俺達は死刑なんかじゃぬるいぐらいのことやってんだから……どうせ死ぬなら、俺は仕事中に死にたいけどな」

「またシュンってば、そんなこと言って」

ロザリーが駿の頭をぺしりと叩いた。彼女のプラチナブロンドは黒い服に良く映える――今千瀬が着ているものは、スモーキーグレーのカッターシャツに黒のネクタイ、黒のフレアスカートに黒ブーツとものの見事に黒尽くしであった。さらに言うならば千瀬は髪まで黒だ。

ロザリーの格好もほぼ同じ、ただしスカートはフレアでなくキュロットである。駿の場合はシャツの他に黒いズボンと革靴だった。ネクタイは取ってしまったのだろうか、胸元は開いた状態だ。

――通常仕事の際はスーツを着用するのが普通らしいのだが（ますますマフィアみたいだと駿は言う）子供に合うようなサイズはないし何よりも動き辛い。少女達がスカートをはいているのは、そのような理由を考慮した上での妥協案であった。

しかしサンドラなどは黒のトレンチコートにハイヒールという出で立ちだったので、かえって動きにくいのではないかと千瀬は思ってしまう。

「心配なんて無いよ。でも、気を付けて」

黙り込んだ千瀬を心配したのか、ロザリーがそちらに笑いかけた。

「――それじゃあ、確認するわね」

サンドラが静かに口を開き、それを合図に皆は姿勢を正す。今此処にいる中で最年長の彼女は、ロヴに今回の仕事の指揮を執るよう言

われていた。

「目標は《敵対者》である組織員のみ。確実に始末すること。警察が出てくると厄介だから、極力目立つ行動は止め民間人との接触も避けましょう。ただし――目撃者は全て消すように」

その静かな言葉に皆は小さく頷いた。さぁ、長い夜が始まる。

「日が昇る頃までには、ここにもう一度集まりましょう。来ない者は死んだとみなすわ。それじゃあ――解散」

＊

千瀬は暗闇の中に降り立った。サンドラに貰ったコンバットナイフはしっかりと右手に握っている。身を守るものも、ひいては敵の命を奪うことができるものもこれ一つだった。

その他のメンバーも順にコンテナーから出て行く。そこからあとは各自の判断だった。待機も良し、わざわざ相手を探すも良し。敵の殲滅、その目的さえ果たせれば過程などどうでも良いのである。

一番始めに姿が見えなくなったのはオミだった。彼女は地に足を着けるやいなや身を翻し、街の中心部を目がけて走り出したのだ。その背は瞬く間に闇の中に溶けていく。

「さて、どこから行こうか」

駿が千瀬の右隣に立った。左にはロザリーが並ぶ。不慣れな千瀬のことを考慮して三人は一緒に行動することにしたのだ。
サンドラがオミの反対方向に消えたのを確認して、彼らはネオンの輝くほうへと足を踏みだした。

「……誰もいないね」
「はじめはな」
「いつもこんな感じ？」
「場合によりけり」

不気味なほど静かである。路上に反響するのは三人の靴音だけ。
首筋を撫でていく冷たい風に体を竦ませながら千瀬は、見えない敵に不安を感じるより先に、上着を羽織ってこなかったことを後悔した。

「……いないねぇ」

ロザリーが呟く。ちょっと遅くない？　暇だよね。

「そうだな。もうとっくに出てきたって構わねぇのに……。警戒されてるのか、俺たちが早すぎたのか」

駿が欠伸を堪えて空を仰いだ。夜の帳に包まれた辺り一帯は黒に染め上げられ、街灯と月明かりだけが辺りを照らす。星は見えなかった。綺麗な空なのに、と千瀬は残念に思う。

――その時だった。
突如轟いたのは、幾重にも聞こえる銃声。空気の振動が鼓膜を打った。ここからは遠いが、確かに連続した発砲がなされている音だ。

「――サブマシンガンだ。気合い入ってるじゃねェか」

音から判断したのだろうか、駿が短く囁いた。彼は酷薄な笑みを浮かべる。相手はしっかり機関銃を用意しているようだ。対するこちらは専ら肉弾戦、所持している銃器は拳銃程度である。――そんなこと、彼らには関係ない。

「オミが向かった方向だわ」
「ああ。来やがったな」

千瀬にはその音が、戦いの始まりを告げているように聞こえた。ぎゅっとナイフの柄を握り締める。感覚が研ぎ澄まされる――刹那、千瀬は目を見開いた。

（いる）

ぞくりとした感覚に体が震える。脈打つ心臓、体の中でざわざわと何かが騒ぐ。
途端、ロザリーが叫び声をあげた。彼女もまた忍び寄っていた気配に気が付いたのだ。

「――シュン！」

そう、塞は疾うに投げられていた。切って落とされた戦いの火蓋、瞬く間に広がる戦慄、辺り一面は阿鼻叫喚の巷と化していたのだ。
――駿の背後から背の高い男が飛び出してきたのと、ロザリーが銀の拳銃をホルスターから引き抜いたのはほぼ同時。男がピストルを駿に向けた。引き金に指。
瞬間、轟いた発砲音と同時に一体の骸が地に伏した。男が引き金を

引く前に、ロザリーの放った弾丸が男の眉間を貫いたのである。
死体と化した男を踏み越えて、駿が振り向きざまに現れたもう一人を薙ぎ倒す。
少年の手にはバタフライナイフが握られていた。倒されると同時に首を掻き切られた男から、吹き出した血が噴水のように弧を描いて地に落ちる。

「う、ぁ、あぁあぁぁッ」

瞬く間に屍になってしまった仲間を見た者は、千瀬達に背を向けると奇声を発しながら逃げ出した。数人がかりで子供にすら敵わないなど、微塵にも思っていなかったに違い無い。
駿はズボンでナイフを拭うと軽やかに死体を飛び越える。

「――行くぞ。逃がすかよ」

第二章《模索》：初陣（3）

千瀬は走りだした駿とロザリーの背を追った。鮮やかに事を行なった二人は手慣れたもので、迷う事無く一定方向へ――騒ぎの渦中、人間の気配の色濃く渦巻くほうへと進んで行く。
たった今目の前で失われた命には、何の感慨も呼び起こされなかった。

「チトセ。お前、殺せるよな」

念を押すような響き。かなりのスピードで駆けながら、息切らすこともなく少年は言う。追い付いた千瀬はしっかりと頷いて見せた。

「大丈夫だよ、シュン」

これは本当だ。心配ない、そう言い切れる。体内の冷めた血は滾るような事もなく、淡々と現実を見つめていた。『大丈夫だ』と、他でもない自分の身体が教えてくれるのだ。
……あたしのやるべきこと。少女はゆっくりとそれを反芻する。ヒトゴロシのあたしの、仕事。

「――そうか。さぁ、団体さんのお出迎えだぜ」

殺し損ねた男を追った先に数多の人影が現れた。もう相手は逃げも隠れもする気はないようで、全員が何らかの武器を持っているのがこちらにもわかる。
千瀬は集団の中心に居る人物が構えている物体を見て首を傾げた。

初めて見る物だったのだ。大きな筒状のそれに触れていた敵の男が薄ら笑いを浮かべる。
携帯式対戦車ロケット砲――所謂、バズーカ砲だ。千瀬にその名はわからなかったが、それがこちらに照準を当てていることははっきりとわかった。
思い通りにさせてたまるか、と妙な闘争心が沸き上がる。

「Ａｌｌ' ａｒｍｅ！」

群れの先頭に立つ人間の口が動く。何かを叫んだが、異国の言葉であるそれを理解することは千瀬には叶わなかった。
瞬間、耳を劈くような爆音が響き渡る。びりびりと泣きながら揺れる地面。

（撃ってきた）

ぼんやりとそんなことを考えた。身体は脳が指令を出すより早く行動を起こす。千瀬は素早く道の端へ飛び退るとナイフを逆手に握った。火薬と血の匂いが立ちこめていて視界はすこぶる悪い。そのまま少女は土煙の中、敵の一団に向かって駆け出した。

「チトセ！」

駿は新人の少女が動いたのを目の端で捉えながら、自らも目標めがけて走る。こちらは三人、相手の数は数えるのも面倒臭い。飛びかう銃弾にのみ注意を払って、出会った端から昏倒させた。一撃で刺し貫いてしまいたいがそうもいかない。刃物とは面倒なもので、下手に乱用しているとあっという間に切れ味を欠いてしまうからだ。
発砲音が鳴り響いて、駿に掴み掛かろうとしていた人間が崩れ落ち

た。ロザリーが射撃を開始したらしい。
少年は前を見据えた。躊躇う理由など、もとより存在しないのだ。

一方の千瀬は群れなす人間達の、端の一角に飛び込んだ。叫び声をあげる人間達の間を縫うように動くと、敵が動揺して統率が効かなくなっていくのがわかる。辺りが崩れるのに時間は掛からなかった。大振りのコンバットナイフは殺傷能力に長けていて、目標の後ろへ回りこみナイフで頸椎を突くだけであっさりと死んでいく。

（なんか、）

拍子抜けだ。不謹慎にもそんなことを思いながら、少女はまた一人を地に落とした。
使い慣れていた日本刀ならばいざ知らず、使い勝手のわからないナイフでは（同じ刃物とはいえ）苦戦するだろうと思っていたのだ。それがどうだ、実際相手は図体ばかり大きくてこと肉弾戦に関してはお話にならない。多少の心得がある者を連れてきたのだろうが、少女にしてみれば素人同然だ。誰も彼も動きが鈍い。実家での修業のほうが、数段苦しかったような気がする。

（そういえば、死ぬかと思ってたな、あの日）

千瀬は我を忘れた人間から順番にどんどん切り崩していく。
――トン、トン、トン。
命を奪う音は、千瀬の耳にそんな風に聞こえた。

＊

殺せ、早く殺せ、何をしている、殺せ、逃げるな、殺せ。
狂ったように叫んでいた男は、突如自分の周囲の人垣が崩れ落ちたのを見て唖然とした。死んでいるのだ、倒れた人間全てが。
ぽかんと口を開けていた彼の目の前でまた一つ人垣が割れ、飛び出してきたのはまだ幼さの残る少女だった。
黒髪黒目、衣服も一式黒色の彼女は東洋人特有の顔立ちをしている。
黒目がちの大きな瞳が男とかち合った。同時、少女の小さな唇が動く。

「　　」

紡がれたはずの言葉は理解ができなくて、ああ自分とは人種が違うのだと男は笑った。こんな小さな子供がこんな場所で何をしている。
祖国は遥か彼方だろうに。
男は呑気な思考を巡らせながら、迫り来る少女に向かってお飾り程度に銃を構えた。さぁ、来いよお嬢ちゃん。

――彼は諦めていたのだ。少女の持つコンバットナイフの刀身が、真っ赤に染まっているのを目にした瞬間に、全てを。

＊

殺した人間の足元に数本、スローイングナイフが落ちているのを見つけた。千瀬は僅かに悩んでからそれを拝借することにする。コンバットナイフだけで十分に事足りていたのだが、まぁ何かの役には

立つかもしれない。薄っぺらい妙な形状のそれを暫らく眺めてから、千瀬は自分の身につけていたホルダーに差し込んだ。
ここら一帯の敵はあらかた排除し終えたらしい。とはいえ、駿やロザリーのいるであろう方向では未だに爆音と怒声が渦巻いていた。
次の目標に狙いを定め、少女は力強く地を蹴る。後には物言わぬ肉塊だけが残された。

「キリがねぇな」

殺しても殺しても向かってくる人間達を見て、駿はひとりごちる。
全て始末しなければならないのだから、逃げられるよりはましなのだが。
彼の心配していた新入りの少女は、思いの外うまく初仕事をこなしているらしい。駿は安堵して敵の一団に突っ込んだ。雑念は仕事の敵だ、今は目の前に集中しようと思う。

と、少年の視界に黒髪の少女が躍り出た。千瀬はぽんと跳躍すると相手の背後に周り、擦れ違いざまに首に一撃を落とす。一人、二人、三人、みるみる崩れる男達とそれに振り返りもしない少女に、ぴゅうと駿は口笛を吹いた。
鮮やかな身のこなしだ、何分いつもぽけらとしていることが多い印象だったので（迷子になるし寝呆けるし）正直ここまで動けるとは思っていなかったのだが。

駿が安心してそちらから目を離そうとした瞬間、千瀬の動きが停止した。響いたのはガチ、という鈍い音。死体に馬乗りになったまま動かない少女に、駿は眉を潜める。

「あ」

千瀬は小さく声をあげた。順調に仕事は進んでいたというのに、ここにきて思わぬことが起こってしまったのである。

「チトセ？」

異変に気が付いたのだろう、ロザリーが千瀬に駆け寄ろうとする。しかし彼女の小さな身体は、立ち塞がる敵の群れにあっという間に飲み込まれてしまった。

同時にロザリーの拳銃から発砲音。火を吹いたそれは男たちを僅かに怯ませただけで、敵を全て始末するには足りない。すぐ傍の人間が殺されて発狂した者、余計に血気付いた者。全てが彼女に向かって行く。この空間は狂っている。

その群れの中から四人、進路を変えた者がいた。狙いは千瀬だ。誰の目から見てもそれはあからさまにわかる。――しかし、千瀬は動くことができなかった。

最後に殺した男の骨と骨の間にナイフが引っ掛かり、抜けなくなってしまったのである。

「うわ、大変大変」

少女の声に切迫感はなかったが、それは紛うことなき命の危機だった。通常、密林の草葉を断つのに役立つ軍用ナイフの形状――刀身の根元に鋭い凹凸が付いている――が仇となったのだろうか、しっかりと食い込んだそれは幾ら引いてもびくともしない。

拾ったスローイングナイフの存在覚えていたが、千瀬にはとうてい使い方などわからなかった。

「――チトセ！」

その時横の人垣を割って駿が転がり出してきた。安心した途端この様だ、と内心呆れ返っていた駿であるが、今は小言を言う間も惜しい。現に敵の握った刃物の切っ先が、着実に千瀬に近づいていたのだから。

少年は立ちはだかる人間の喉元に一撃を入れると、それの握っていた大刀を鞘ごと奪い取り千瀬に向かって放り投げる。それは乱雑な弧を描き、巧い具合に少女の頭上めがけて落下して。我ながらナイスコントロール、と自画自賛したい気分であった。

――その時少女の目付きが僅かに変わったのを、駿は見逃さなかった。

彼が投げた刃物は長さが一メートル弱、刀身が少しだけ反った形状である。明らかに西洋のデザインではあったが――ここにあるどの刃物よりも、“日本刀”に良く似た形のそれ。

千瀬は右手を伸ばし、投げられた剣の柄を直接握った。そのまま親指で鞘を弾き飛ばす。すらりとした刀身が白銀に輝いた。

ヒュ、と。風を切る音がする。……おそらく男達には、何が起こったのかさえわからなかったに違いない。

少女は左足を軸にして体を捻るとそのままの勢いで、一気に四人の首を刎ね飛ばしたのである。

第二章《模索》：初陣（4）

曲線を描いて弾け飛ぶ塊、次いで紅の雫が吹き上がる。飛び散った血の海の中に、変貌を遂げた男達の身体が音を立てて沈んだ。

（――っ、こいつ）

駿は瞠目する。信じられないものを目の当たりにしているようだ。――彼には千瀬の操る得物の動きが、全く見えていなかったのである。

ごとん、という音と共に落下した首。頭蓋の転がった地面の先で、切り離された身体の残りが僅かに痙攣していた。

千瀬は返り血を浴びる前に首の消えた人間の間を走り抜け、更に迫り来る敵の首を落とした。再びの早業に、駿の目は少女の動きをまたしても追いきれない。

（くそ、）

その残像さえも捕まえられない自らの目に心中で悪態を吐いた。なんだか悔しいと思ってしまう自分自身に苦笑を一つ零し、少年は再び千瀬の動きに目をやる。

少女の駆け抜けた後にはいっそ見事なまでの骸の山が積みあがった。日本刀なら扱える、と言っていた彼女の言葉は間違っていなかったのだ。

「……ったく、すげぇや」

千瀬は次々と敵を薙払ってゆく。剣が血脂で汚れていることが嘘の

ような切れ味だ。音速の斬撃。何かを超越したその動きを保ったまま、少女は敵が群れなしている一角へ突っ込んだ。
懐に飛び込まれた者が喚き散らす。相手を見失い恐慌状態に陥る人間、喚声、悲鳴。
瞬間、胴体と切り離された二つの首が空を舞う。

「わぁ！」

場違いに朗らかな声が響いた。
千瀬の快進撃に気が付いたロザリーが手を叩いている。彼女の周りは粗方片付いたようで、あとは僅かな残党を排除するのみだ。だからといって呑気に観戦している場合ではないのは百も承知であったが、それにしても千瀬の動きには目を見張るものがある。人のことを言えない駿は、はしゃぐロザリーを黙認した。

一塵の風と共に少女が刀を振るい、同時にまたいくつかの首が舞った。速い。
乱れ飛んだ首に揺れる長い髪の存在で、そのうち一つが女であったことを知る。

「――？　おい、」

異変が訪れたのは唐突だった。駿が戸惑ったように声を上げる。刎ね上げた屈強な女の首が目の前に落ちてきた瞬間、千瀬の動きが突如停止してしまったのだ。
切り離された首からほとばしった血潮を避けることができずに、少女はそれを勢い良く頭から被った。ぽた、彼女の髪から深紅の雫が滴れ、頬を伝って地に落ちる。

「ち、とせ」

少年の声は千瀬に届く前に霧散した。少女は刀を握り締めたまま虚ろに空を見つめる。否、性格には今しがた殺した女を。

（血、が）

千瀬はそのまま目を瞑った。瞑ってしまったことに、気が付かなかった。

体中の血液が逆流している気がする。今、あたしは何をしていたんだっけ？

（これは）

ぐわん。視界が揺れた。同じような感覚をつい最近味わったような気がする。夢だ、あの夢。目蓋の裏に色が爆ぜる。たった一色。

（あか）

綺麗な赤。白い百合と装束が、染められていって。あたしを見ている。首――母さんの、首。

この光景を知っている。あの日、否、あれよりずっとずっと前から。

前、から？

――――――――――――忘レヌゾ。ケシテ忘レサセマイゾ、黒沼。

「――ばか、やろっ！」

そう千瀬に叫ぶやいなや、駿は後ろから彼女の首を掴むとそのまま力任せに引き倒した。力失く背から地面に倒れこんだ千瀬の真上を、彼女を狙った銃弾がかすめる。

少女は目を見開いた。永遠のように感じたあれは一瞬の出来事だったのだ。

駿は千瀬のホルダーからスローイングナイフを引き抜くと銃弾の主へ続け様に二撃、さらに背後に現れた敵の頸動脈を後ろ手に断ち切り、怒鳴る。

「ぼーっとしやがって、何考えてんだ！　殺られる前に殺れっ！！　死にたいのか！？」

派手に飛び散った血糊を頭から被っていた千瀬は、むせかえるような鉄の臭いを吸い込む。目の前が深紅に染まって、瞬きを繰り返す。やってしまった、と少女は眉根を寄せた。こんな時に。

「……ごめんなさい……」

気付けば周囲の敵は殆ど残っていなかった。最後の数人の命は今まさに、ロザリーの銃によって散らされようとしている。ぱぁん、乾いた音。

千瀬は手の甲で頬の返り血を拭う。駿が憮然とした表情を浮かべながら、転がっている先程の男の死体に足を掛けた。千瀬のナイフが刺さって抜けない、あの男である。力を込めれば、ゴキ、と何かが鳴ってずるりとナイフは抜けた。死体の頸椎から飛び出した不自然な白いモノ。ナイフに引っ掛かり、引き摺りだしてしまったのだろう。

「ほらよ、」
「ありがとう」

少年が投げてよこしたコンバットナイフを千瀬は丁寧に拭う。刃先に付着した血糊は固まってしまっていたが、それでも幾分かはましになった。

「どうしたんだよお前、いきなり止まったりして。……ホントさ、危ねぇよ、あーいうの」
「ごめん……でも、」

遠くから二人を呼ぶ声がした。ロザリーが手を振っている。もうこの場所に用はない、移動しようということなのだろう。

「思い出せそうだったのに」
「……あぁ？」

何が、と尋ねる駿に少女は力無く首を横に振った。千瀬自身、わからなかったのだ。

――夜明けはまだ遠い。

＊

サンドラがジャックナイフを振り下ろすと、そこから放射状に血の雫が飛び散った。そうしたナイフにはまだ脂質が残っていて、それが鈍色に光を放つ。

（……五本目）

サンドラは軽い溜め息を吐くと、ナイフを転がっている死体の背に投げ捨てた。人間の血脂というのは厄介なもので、それがこびり付いた刃物は直ぐに切れ味を失い使えなくなってしまう。故に、サンドラが用いているジャックナイフも消耗品だった。

……殺人以外の目的で使用すれば、せめてもう少しは保つのだろうが。

「あ、あ、ぁあぁあぁあッ！」

訳の分からない叫び声をあげながら突進してくるこの男が、この辺りでは最後の生存者だろうか。

サンドラは男の足を払うと、右肘と左腕を使って彼を地に組み伏せる。これ以上ナイフは使いたくなかったので、考えた末に彼女は――ハイヒールの踵、その細いピンで勢い良く男の首を踏み抜いた。

鈍い音が空気に落ちた。男の首に、美しいほどの円形の穴が開く。ごぽり、男の口から血とも臓器ともわからぬ物が吐き出される。

その一瞬で、最後の生者は最後の死者へと変貌を遂げた。

……一点に全体重がかかれば、ヒールも立派な凶器になるのか。妙

なことに感心して彼女はその場を後にする。

「……貴方達は、運が良い」

累々たる死骸に向けてサンドラは呟いた。――“今の”彼女であれば、少なくとも一撃で死を与える道を選ぶから。それは相手にとっては細やかな幸運のはずである。

それは独り言も同然だった。生きている者などいないのだから。

（……最後の彼は少々苦しんだかもしれないけれど）

前を向いたサンドラの目に浅葱色が飛び込んだ。現れた少女は軽快な足取りでサンドラのほうへやって来る。

「オミ、どう？」

「……終わり」

汚れ一つ着いていないオミの服に目をやって、毎度のことながらサンドラは感心した。まぁ、当たり前と言えば当たり前。若干十五歳にも満たないであろう少女は、この道の“エリート”なのだから（オミの実年令は十三ほどであった、とサンドラは記憶している）。

ああそうだ、とサンドラは笑った。

（あそこも、ロヴのお陰で随分変わった）

コートに付いた埃を払って空を見上げる。肉の感触が残っている靴のおかげであまり気分は良くなかったが、そうも言っていられなかった。

「……チトセ達は大丈夫かしら」

万に一つも、命を落としているようなことはないだろう。――ただ、この仕事は引き際が肝心である。

そろそろ警察が出てくる時間なのだ。結局今回も銃声やら爆音やら派手にやってしまったので、間違いなくこの争いは警察の耳に入っているはずだ。

それでも今まで警察が姿を現していないのは、マフィア抗争に巻き込まれることを連中が恐れているからに他ならない。

……銃声が鳴り止んで、街に静けさが戻るこの時こそが。警察と出くわしてしまう確立が、一番高いのだ。

「行きましょう、オミ」

サンドラは集合場所へと歩きだした。信じてもいない神に、仲間の無事を願う。

第二章《模索》：間話-ある男の話-

＊

ある男の話をしよう。
モーガン・ウィッグワードは某裏組織の一構成員である。モーガンは本日行なわれる《ある作戦》を実行する為、組織の中から極秘に《特別戦闘員》として選抜されたのだった。

引き抜きの話が彼のもとに舞い込んだのは、今から約二週間前のこと。しがない末端構成員の自分に昇格のチャンス、そう思った彼はこの話を二つ返事で引き受けた。
モーガン持ちかけられた話の内容とは、新しく組まれる戦闘チームの一員となり、ある組織の掃討に参加するというものである。

『犯罪シンジケート“ルシファー”』――これが、今回作戦のターゲットとなった組織の名だった。
ルシファーとは一人の男が十代のうちに結成した犯罪組織である。瞬く間に力をつけ、所謂“裏”の世界をのし上がってきた強者。
現在所有している金は裏社会でも一、二を争うほどで、財力、権力、それを含めた他組織への影響力と統括力に於いては現段階で右に出るものはない。

モーガンの所属している組織（名を明かす必要はないので、仮に組織αと呼ぶことにする）は今までルシファーに財力面から押さえ付けられ、表向きは従う形をとらざるをえなかった。αはルシファーの傘下にあるわけではない、独立した一組織だ。それが新参相手（そう、ルシファーには古い歴史があるわけではなかった）に良いよ

うにされていたのだから、なけなしのプライドも大いに傷つけられてきたのである。

さて、そんな彼の組織にとって最大の好機が訪れる。

ある日突然、ルシファーの支配している企業や取引の内部事情、及びその他の詳細情報が何者かの手によって流出したのだ。このチャンスを逃す手はなかった。

組織αはこれを切っ掛けにルシファーの支配から逃れようと、組織にとって最も邪魔な存在――ルシファーそのものの排除を計画したのである。方法は単純明快、武力行使だ。裏世界の住人は例外なく力技を好む（理由は定かではないが）。モーガンの組織もその例に漏れなかった、それだけの話である。

――ルシファーに戦闘専門要員がいるという情報が入ってきたのは、彼らがルシファー殲滅の日取りを決定した翌日のこと。モーガンがチームに組み込まれてからは一週間が経過していた。

戦闘専門？　馬鹿馬鹿しい、大袈裟だ、と。モーガンはそんなこと歯牙にもかけないでいた。それを言うならばこちらだって、特別選抜の戦闘チームなのだから。

話によれば、ルシファーの戦闘員にはまだ十代の者も多く存在すると言うではないか。今年四十になるモーガンにとって十代は『餓鬼・お子ちゃま』呼ばわりしたくなるような年代であり、そんなルシファーの戦闘員など怖るるに足りない。そう、それは至極当然な考えである……常識的に言えば。

簡単に片付けてしまう予定だったのだ。赤子の手を捻るように、なのに。

「……どういうことだ、これは」

常識の範疇で処理しきれない事態が起こっていることは明白だった。意気揚揚と繰り出した戦場で、モーガン・ウィッグワードは我が目を疑いそうになる。

組織αからルシファー抹消のために送り込まれた人間は九十。六人×十のチーム編成に加え、後援として三十人。それだけの（やや多すぎると感じてしまうほどの）人数が戦地に向かったはずだった。

「おい、聞こえるか」

『―ぁ、……――!』

トランシーバーから流れ出るノイズは無残に鳴り割れ、時折不気味な音を響かせる。もはやこれは、通信手段としての機能を失ってしまっているのだ。

「……くそっ」

雑音、騒音、微弱に聞こえる声らしきもの。ノイズ、ノイズ、ノイズ、喚声、悲鳴、またノイズ。

このちっぽけな街に入り、ルシファー抹消のためチームごとに行動を開始してから僅か四十五分。

モーガンが事の重大さに気が付いたときには、既に十チーム中、七チームとの連絡が取れなくなっていた。

＊

『……ガン、モーガン！　聞こえるか』
「……アッシュか？」
突如、トランシーバーが雑音の中から一つの声を拾いあげた。ざぁざぁと鳴く砂嵐の音に混じり、モーガンにとっては聞き慣れた仲間の声が擦れて届く。
『俺たちのチームはもうダメだ。あっという間に四人、殺られちまった』
緊迫した声に滲み出ているのは諦めか嘲笑か。モーガンがそれを考える前に、無線の向こうの相手は語る。
『俺とカールは予定を繰り上げて、もうルシファーの本部に向かうぜ。ここにいても無駄死にしちまうだけだ。お前はどこにいる？』
「……奇遇だな。俺のチームも残り二人……先に行って待ってるぜ。もう目の前だ」
モーガンは笑う。
何だか夢を見ているようだ。否、夢なら良かったものを。なんて酷い夢だろう！
彼のチームは街で戦うのではなく、はじめからルシファーを目指して進んでいた特異な組であった。街での騒ぎに目が眩んでいる隙に懐に打撃を与えよう、という安直な考えのもとでの実行だ。しかし快調に目的地に向かえていたのは途中まで。ロシア語を話す少女と遭遇してしまった瞬間に四人死んだ。
銀の拳銃を使って、確実に一人ずつ殺していった少女。生き残った

のは集合に遅れたモーガンと、隠れていたチームメイトであるラリーだけ。
自分達が残されたのは神の気紛れに他ならないのだと彼らは知っている。嗚呼ジーザス、少女の拳銃は、一度に六発の弾を装填するタイプだった……。
モーガンは顔一面に皮肉るような笑みを浮かばせた。あのツインテールの少女がわざと自分達を見逃したことに気付かぬ程、間抜けではない。

「――プラチナブロンドの天使には気を付けて来いよ」

可愛い顔してたのにな、と彼は自虐的に笑う。そのまま無線を切れば、ぶつり、世界の遮断された音が響く。

（嗚呼ジーザス、糞くらえ）

呆気なく辿り着いた目的地。ルシファーの入口である大きな黒い門は、今まさに彼の目の前に聳え立っている。

＊

ルシファーの警備は手薄で、モーガンとラリーは難なく建物内に侵入することができた。――否、警備は全くされていなかったのだ。
いっそ不用心だと感じるほどに。
モーガンはかつてこれほどまでに巨大な建物を見たことがなかった。
この施設を隠しておくことなど地球上では不可能だろうし、実際に

裏の界隈ではルシファー本部の所在地を知っている者も多い。
……では何故、所在の割れたこの組織がここまでのうのうと、しかも警備もせずに生き延びていられるか。

「じゃあな、ラリー。生き残れよ」

二人は銃を片手に構えると、各自別々の方向へと歩き出した。これが今生の別れになるかもしれない、そんなことはわかっている。しかし今更引き返せもしない。これは最後の意地だった。

――ルシファーという組織に潜入を試みて生還したものは、未だ誰一人として存在しない。アンダーグラウンドではあまりにも有名な話だ。

（狙うは首領の首、か）

モーガンはそっと息を吐く。口が淋しかったが一服、というわけにもいかなかった。
この際何か功績を残し、生きて帰れさえすれば良い。例え首領に逃げられたとしても情報や金を奪って火でも放ち、ルシファーを再起不能にしてしまえば自分達勝ち。勝てなくともダメージを与えられれば、その功績が認められれば、モーガンのその後は安泰だ。報酬、昇格、全て手に入る。

さて何からはじめたものか、とモーガンは思考を巡らせた。首領の居場所に手っ取り早く辿り着ければ一番良いのだが、そう簡単にいく分けもない。まずは小手調べ、様子見から……そう思って彼がある一つの部屋のドアを開けようとした、その時であった。

（しまった）

声が聞こえたのだ。慌てて耳をそばだてれば、その声の主がこちらに近づいてくるのがわかる。物陰に隠れて息を潜め、視線をそっと奥へやれば、巨大な男と茶髪の女がゆっくりとこちらへ歩いてくるのが見えた。

話の内容は聞き取れないが、このままでは間違いなく見つかってしまう。モーガンは先程まで手を掛けていたドアを思い切って開けると、部屋に誰も居ないことを確認して中へ飛び込んだ。

ドアの隙間から見える影で二人が通り過ぎたことを確認。ほっと胸を撫で下ろす。情けないことに、これだけで心臓が早鐘のように脈打った。――どうやら、見つからずに済んだらしい。

（助かった）

あれがルシファー専属の戦闘員か只の警備員なのかはわからないが、この段階で見つかってしまっては話にならない。ラリーはうまくやっているだろうか。

当たり前ではあるが、入った部屋が見事に首領の自室だった、ということもなく。のんびりするわけにもいかないので、モーガンは（部屋の中に何か目ぼしい物はないか確認してから）さっさと出て行く事にした。しかし探索開始、と振り返った先。彼の思考はそのまま停止する。

――部屋の中央には小綺麗な椅子。いつからそこにいたのか、ちょこんと腰掛けている少女の黒髪は腰の位置よりも長く、風も吹かないのにさらりと揺れる。

少女は漆黒の瞳でモーガンを見つめ、桃色の唇で囁いた。

「こんにちは、おじさん」

年の頃は十七、八ぐらいだろうか。辺りを取り巻く空気のせいか、それ以上にも以下にも見える。闇から切り取られて浮き上がったように存在する少女を形容するならば、幻のようだと言いたい。透き通るような肌が髪の毛の黒に映えて、幻想的だと彼は思った。

（やあ、お嬢ちゃん。こんなところで何してるんだい？）

モーガンが心の中でシュミレートした言葉は、どうやっても口からは出てこなかった。出るのはだくだくと流れる気持ちの悪い汗ばかり。

少女がこちらを見ている。闇を凝縮した瞳で。その深い色で。

モーガンは息を吐く。吐いた、つもり。――嗚呼、なんてことだ。

（俺が、）

（この俺が）

（こんな小娘に、畏怖の念を抱いているなんて）

凍結した男の前で、少女がにこりと微笑んだ。柔らかい、優しい、愛らしい笑みだった。

それから少女はその表情で、朗らかに言葉を紡ぐのだ。

「さよなら」

――ある男の話をしよう。モーガン・ウィッグワードの話をしよう。彼の断末魔を聞いたものは誰もいない。誰の耳にも、届かなかったのだ。

第二章《模索》：帰還

「……おい。ローザの奴、どこ行った？」

生温い風が流れる。それに流された汗を拭いながら、銀髪の少女が忽然と姿を消していることに気が付いた駿が顔をしかめた。それを受けた千瀬は刃物の血痕を拭いつつ、しかしのんびりと答える。

「ルシファーの方面を一応見てくるって。行ったのはもう随分前だけど」

そうか、と少年が胸を撫で下ろした。うっかりはぐれていたりしたのならたまったものじゃない。彼の横の日本人ではあるまいし、場数を踏んだロザリーが迷うことなどないだろうが。

さて、と駿は辺りを見渡した。今この場で生きて地を踏みしめているのは千瀬と彼の二人のみである。

駿は屍の山から使えそうな武器を拾い集め、予め用意していた革製の袋に詰め込んでいた。

武器は消耗品だ、と古株のサンドラが良く口にする。

駿はそれに倣って、例え敵の持ち物であろうと再利用できるものは拝借――もとい強奪――することにしていた。ルシファーで武器の調達を行なうのはたいていロヴ・ハーキンズ本人である。ロヴの命を受けて部下が動くこともあるが、どっちにしろ気紛れなあの男の行動を待つだけでは、必要な時にこと足りているほうが少ないのだ。確保できるときにできるだけ。これが少年の中での鉄則である。

「それじゃーまぁ、ローザは後で合流するだろ。……なぁ、チトセ」

失礼しやーす、と小声で呟いてから元・人間の体をゆっくりと転がす。その下から現れた、弾の切れたピストルを物色しつつ駿が言った。

「お前ロヴに頼んでさ、日本刀手に入れてもらえよ。な？」

少年の行動を黙って、しかし興味深そうに眺めていた千瀬は小首を傾げた。中々肝が座っている、と少年は思う。

「何で？」

「何でって」

ふいに駿は口籠もる。ナイフでも結構いけたけど、となおも続ける千瀬に半端で歯切れの悪い相槌を返した。そりゃ、そうなんだけど。

「そう、なんだけどさ……お前、自覚無いのか？」

「何の自覚？」

決まっている。千瀬の殺傷能力は、日本刀を使用している時に最も高まるということ。その時に限ってならば、他のソルジャーのメンバーを遥かに凌ぐ実力かもしれない——この、殺人集団の、だ。それほどの能力をたかが十四の少女が持っているなんて、信じ難い話ではあるが。

「得意な物を使うべきだって言ってんだよ」

「ふぅん」

まぁいいや、と駿は立ち上がる。自分が余計な世話を焼かなくとも、きっと誰かが気付くだろう。千瀬がここにいる、その事実こそが既に、何者かが彼女の秘めた力に気付いている証拠かもしれない。

（大方、ロヴやルカあたりか）

少年はつかつかと歩み寄ると、きょとんとする千瀬の手を乱暴に引いた。

「帰るぞ、あいつらが待ってる」

＊

「チトセ！」

プラチナブロンドのツインテールを揺らし、ロザリーが駆けてくる。集合場所であるコンテナーを積んだトラックが停車している路地の、少し手前。

「ローザ！　もう来てたんだね」

再会を果たした少女達は無邪気な子供のように手を取り合った。否、もとより子供なのだから年相応の行動である。千瀬が浮かべる笑顔は若干ぎこちないものであったが、それでも駿はその顔に安堵した。来たばかりの頃などは、千瀬は常にぼうっと夢を見ているような瞳をしていたと思う。何かを諦めたような、憂いを知っているような、とにかくその年令には不釣り合いな――本人に言ったことは、なかったけれど。

（ぼーっとしてんのは今も変わんないか。やっぱ天然かねこいつ）

しかも命のやり取りの最中に、と。少年の独白は薄明るくなってきた空に掻き消される。日の出まではもう少しあるだろうか。

千瀬がロザリーに手を引かれ、それに続くように駿も路地へ向かう。

そこでは既にサンドラとオミが待っていた。

コンテナーの入り口に腰掛けたサンドラは、千瀬を見つけると柔らかく笑う。

「おかえり、チトセ」

良かった、ともう一度笑みを浮かべる女に二、三度の瞬きを返し、それから慌てたように千瀬は返事を返した。

（おかあさん、みたいだ）

不意に沸き上がった感情。まだ母と呼ばれるには若いサンドラに対していささか失礼な気がしてしまうが、それでも少女はそう思わずにはいられなかった。それは自分の実の母ではなく、世間一般に――少女自身が描き続けた、母親のイメージ。

……何故だか、わからないけれど。その時駆られた酷く切ない気持ちを、千瀬はそっと押し込める。

「おぅあぁ～っ！　終わったぁ」

駿が大きな伸びをして奇妙に叫ぶ。欠伸が混じっていたのだろう、その間抜けな響きにロザリーがくすりと笑った。

「笑うな。……予定時間通り、バッチリだな」

駿が未だ薄暗い空を見上げた。彼らの仕事はほとんど、日の昇る前に終わってしまうのだという。
民間人の活動が停止しているこの時間帯がベストなのだ。今回もまた然り。

家に、帰りましょう。サンドラがそう呟いて、メンバーは順にコンテナーの中に乗り込んでゆく。
朝日が昇る瞬間を見られなかったことを、千瀬は少しだけ淋しく思った。きっともう暫らくは日の出を見ることもないのだろう――少なくとも、仕事中には。

（……家？）

コンテナーの扉が閉じると同時にトラックが発車する。運転手は末端組織員・パースの中から適当に選ばれた人間らしく、彼はひたすら前を向いて運転を続けていた。ハンドルを握る手に汗が滲んでいたのは見ないことにする。

おうちにかえろー、まってるひとがいるよ。
突如小声で不思議なリズムを口ずさむロザリーを見て、千瀬は首を傾げた。聞いたことがある歌のような気がした。歌なんて、ほとんど知らないのに。

おうち、に。ロザリーに倣うようにして呟いてみる。僅かな既視感と違和感。ああそうか、と少女は一人納得した。お家に帰る、なんて言葉を口にしたことが無かったのだ。家から出ることが無かったから。
あの場所は確かに家だった。千瀬が自ら失ってしまったあそこは、帰る場所ではなく待つ場所だった。たった一人の姉の帰りを。

「ルシファーは、もうお前の家だぜ」
「……え？」
不意に投げ掛けられた声に驚いて顔を上げる。千瀬の目に移ったのは、どこかそっぽを向いた駿の横顔。
「俺らの帰る場所は一つしかねぇだろ。例えそこが“監獄”でも、俺たちの家には違いない」
「……家、」
千瀬は目を伏せる。ぼんやりと唇に乗せた言葉に実感は沸かなかった。帰る場所、待っている人、ただいまとおかえり。当の昔に無くした、否、持っていた記憶さえ無かったものだ。家族と名の付くものでさえ、この手で。
「ねぇチトセ、知ってる？」
サンドラが指を使い、千瀬の血で固まった髪を梳き始めた。おかあさん、みたい。もう一度そう思う。実母の手の温もりなんて覚えていないのだけれど。
「アメリカンでもイタリアンでも、とにかく一般的なマフィアってね、組織の一団のことを“ファミリー”って呼ぶんですって」
素敵だと思わない？
ブロンドの髪がふわりと揺れて、深紫の瞳が細められる。サンドラの笑顔は何故だろう、どこか千瀬に郷愁の念を抱かせた。懐かしむものは無いのに。あの国でさえ、帰りたいとは思わないのに。
「私達はマフィアじゃないけれど……ＥＰＰＣは、唯一の解り合え

る仲間じゃない？　私達は“家族”なのよ」

血は繋がってないけどね、と。サンドラはくしゃりと千瀬の頭を撫でる。だからね、と優しい声が続いて。

「ルシファーに帰ったら、暇を持て余してるレックス達に、一緒に『ただいま』って言いましょうね」

千瀬が僅かに目を見開いた先で金髪の女が微笑む。

レックスったら悔しがってるだろうね、とロザリーが楽しげに呟いた。自慢してやろう、と彼女が続ければ、何をだよと駿が笑う。それにつられて千瀬も笑った。

「――うん」

サンドラに一拍遅れた返答を返して。笑った自分に千瀬は少し驚いた。本当はわかっていたのだと思う。知らないふりをしていたけれど、こういうのがずっと欲しかった。そんな、気がして。

千瀬は理解していた。自らの踏み込んだ道は大きく歪んでいることはわかっていたのに、それでも。

（ごめん、なさい）

心の底から、全てがたまらなく愛しいと思った。

挿話

（ある少年の独白）

――突然だけど、オレは今すごく困ってる。
口煩い連中から逃げ出して早一週間と三日、これまで地道に貯えては消費してきた食料が底をついたからだ。今までは食料庫や食堂のキッチンから人目を盗んで拝借していたのだけれど、ここ数日の間に突然それが出来なくなった。それは何故か？
……警備が強化されたせいだ。いきなり。これって間違いなくオレへの対策。オレを捕まえようとしてるんだ、あいつらが。

自己紹介が遅れた。オレは名をルード・エンデバーという。ルード、なんて正直言って酷い名前だ。まぁ本名じゃないんだけど（本名なんて無いんだ、実は）
年齢は十三。誕生日はよくわかんないけど、たぶんもうすぐ十四歳。
この犯罪シンジケートの組織員で、階級は〈マーダラー〉という。
……実はなかなか偉い立場なんだなぁ、これが。

ここに来たのは三年か、それよりもう少し前。その頃のオレは今よりもっとガキで（認めたくないけど今だってガキだ）それでもその時から〈マーダラー〉だった。それは一重に、オレの能力が買われてるからだと思う。

オレがルシファーにやって来たのは全くの不本意だった。こんな所、来る気はなかった。じゃあ何でここにいるのかと聞かれれば、のっぴきならない事情があるからだ。深い深い理由が。これはオレのな

けなしのプライドをひどく傷つける話なので、これ以上は言わないけれど。

とにかく、オレはこの場所が苦手だ。組織として縛られるのがすごく嫌だ。まだ遊びたいし、自由が欲しい。だから逃げる。そういうお年頃なわけ、わかる？

……そう、オレがこうして仕事をエスケープして行方を眩ませるのは今回が初めてじゃない。むしろ常習犯だ、申し訳ないことに（悪いことをしてる自覚はあるんだよ、やめらんないだけ）

本当ならこんなふうに組織本部をこそこそ逃げ回るんじゃなくて、外に出られるのが一番良い。けれどそれが出来ないのは、オレがこのルシファーの建物の所在地を知らないからだ。敷地から出れば迷子確定、マジ笑えない。

え？　って思うだろう。でも本当だ。オレは今自分がいるこの場所が、どの国のどの場所にあるのかわからない。極端な話、地球上にあるという確信さえ持てない。冗談なんかじゃないさ。そうでなきゃこんなとこ！

……一応言っておくけれど、これを知らないのはオレだけじゃない。外部から組織の一員となった奴、要はＥＰＰＣのメンバーなんかはルシファーの所在地を知らされないんだ。スカウトされて連れてこられて、あとはここに従事するだけ。最近連れてこられた新入りの女の子（名前は確かチトセ、といった）も例外ではなくて、ここはどこなのかわかっていないと思う。たぶん母国（日本かな？）でないことだけは漠然と感じるんだろうけど。

で、問題は何でルシファーがこんなことをするか。仮にも仲間なのに秘密主義。まるで幽閉。でも、答えはすごくシンプルだ。――裏切らせない、為。裏切り者を逃がさない為。

ＥＰＰＣほどの実力を持つ奴が反乱分子になればそれはせれは厄介だろう。それを未然に防ぐための作戦だ。組織の裏切りは死罪、それを誰もがわかっているから、ＥＰＰＣの中にこの場所を突き止めようとする奴はいない。本当はロヴに聞けば教えてくれるかもしれないけれど、それでもダメだ。暗黙の了解なんだ。オレ達の生きるのはこういう世界。

と、いうわけで。話を戻そう、斯くしてオレは組織の建物の中を逃げ回っている。何度目の逃亡かなんてとっくに忘れたけれど、自由を求めることは子供の権利だと思う。正当防衛だ！

……と、毎度主張してみるわけだけどあっと言う間に追っ手が来る。オレと同じ〈マーダラー〉のやつが躍起になってオレを捕まえようとするからだ。最近ではオレも相手も自棄になって追いかけっこ。食料庫の警備だって、きっとあいつの差し金に違い無い。

――ミク・ロヴナス。

オレは最近あの女を天敵と認識した。年は（たぶん）十九かそこら、黙っていれば美人の部類だと思う。黙っていれば、だ。性格はキツいし容赦ないし、女のくせ言うことはえげつない上に力もある（ああでもこれはこの組織のやつは皆だけど。）そう心で思っても、恐いからけして口には出さない。逆らうと怖い、ホントに恐いんだ。

否、この際はっきり言うと恐いのはミクじゃない。

確かに捕まれば鉄拳は飛んでくるだろうし罰も与えられるけど（ミクは何故か脱走したオレに罰則を科す権限を持っている。同じ階級なのに！）何よりも、どういうわけだか、あいつはやたら〈ハングマン〉と仲が良い。もし、もしもだ。オレへの“お仕置き”にハングマンが乗り出したりしたら。……うわ、ちょ、寒気が！　ちょっと自分の最後が見えた。

〈ハングマン〉の一人、エヴィル・ブルータスはこの組織一番の危険人物だと思う。終始不機嫌なオーラが辺りに漂ってるし、切れ長の目はその恐ろしい空気を増長させている。まだ若いってのに、常に眉間に皺寄ってるし。

恐いのは見た目だけじゃない。何にも動じないくせにキレやすい性格と残虐性。気に食わないコトがあるとすぐ手を出す、タチの悪い子供みたいだ。……子供ならまだ可愛げがあるのに。

エヴィルの怒りを買ってしまった人間は、みーんな死んでしまう。

手を出す、っていうか手に掛けるって感じ？

現にオレはエヴィルを怒らせて不幸にもさっくり殺されてしまったやつを何人か見てきた。仕事に失敗したとか、勤務中にくだらないことを話してたとか。エヴィルがハングマンだと知らずに（組織の幹部が末端構成員の前に現れることは珍しいからだ）うっかり若造呼ばわり、なんて無礼極まりないやつもいた気がする。あれは死んでも仕方ない……じゃなくって、何話してんだろうオレ。

そういえば。

冷酷無慈悲なエヴィルだけれど、ルカやミクには気を許しているみたいだった。コイビトってやつとも違うみたいだけど（相手二人だし）、なんだか妙に仲が良い気がする。あの三人で一緒になって、良くロヴに絡んでるから。ルシファーの幹部が団体で集まってるのを見るとちょっと胃が痛くなるんですけど。だって恐い、いろんな意味で。

泣く子も黙る幹部の奴らに対して例外がいる。不思議なことに、〈ソルジャー〉のレックスやサンドラはこの面子に臆する事無く話し掛けてた。レックスがエヴィルの頭を掻き回していたのを見た日には、ちょっぴり泣きそうになった。ちょっとだけ。

話がまた逸れた。
とにかく、オレはミクに見つかってはいけない。
万が一捕まったら、潔く諦めなければいけない。もし無駄に歯向かったりしてオレのことがエヴィルの勘に触ったら――エヴィルが、オレを邪魔だと判断すれば。次の瞬間、ルード・エンデバーはこの世に別れを告げてるんだろうから。（オレの脱走はすでにエヴィルの耳に入ってるに違い無いから、今までこうして生きてるのだって奇跡かも）

そんな危険を犯すならおとなしくしてれば良いんだけれど、残念なことにオレの体はこのスリルの味をしめてしまった。
一度枷が外れたらエヴィルは止まらないし、止められないし、誰も止めない。唯一彼と対抗できるロヴやルカは傍観を決め込んでいるから、オレに生きる道はないだろう。ここはそういう場所だから。

こうして考えてみると、ルシファーの人間は皆どこか狂ってると思う。何かが欠落してる。裏組織なんて全部そうなのかも知れないけど。普通とは違う、足りない、トンでるものがある。……そう、オレも、含めて。

実は、知っている。ミクの気の強さが、自分がいまいち戦闘に向いていないことを認めたくない為の虚勢だとか（常人に比べりゃ十分なんだけど）、エヴィルが部下を殺っちまう理由の大半が、そいつの首領への不服や陰口であることとか。
人一倍無邪気な笑顔を浮かべてたまにオレの悪ふざけに付き合ってくれるルカが、組織で一番手を血で染めていることも。悪名高いうちの首領（ボス）が、オレを含めた配下を信じられないくらい気に掛けてるってコトも知ってる。

……もう一度言おう。オレはこの場所が嫌いだ。所属という名の束縛で、オレから自由を奪った薄暗い組織が大嫌いだ。

――でも、正直、ここの連中は嫌いになれない。

ここがどこだかわからないから、なんて。本当はそんなの理由にならないんだろう。出たければ出れば良い。オレはきっとこれを理由にして、もうすこし楽しんでいたいんだ。

……なんて、認めるのは悔しいから。

さぁ作戦を考えよう。とりあえずこの空腹を誤魔化すべく、警備のスキを付いて冷蔵庫のプリンをくすねてこようか！

第三章《はじまり》：Crescent

さぁ皆様、お手を拝借。

幕間劇を演じまするは
空から墜ちた反逆者、
ギニョルの墓場に捨てられた
マリオネットが踊ります。
冴えた満月の嘲笑浴びて、
聞こえるでしょう
母喰い鳥の子守唄。

（絡んだ糸は　もう手遅れ）

ほら、堕天使は悪魔に近いのよ。

『これが私の世界だから』3

――満月の夢を見た。星一つ見えない漆黒にぽっかり浮かぶ、大きな月の夢だった。静かで、綺麗で、少し悲しくて、それから彼女のことを思い出した。

「おはよう、チトセ」

少女はゆっくりと目蓋を持ち上げる。外気の刺激で痛む眼球を薄い涙の膜が包み、おかげで視界はひどくぼやけていた。
目の端にちらりと映った金髪で、漸く声の相手を認識。

「おはよ……う、サンドラ」

サンドラは未だ寝呆け眼の千瀬にくすりと笑みを零した。眠たそうに目蓋を擦る少女は年相応に幼く見える。それはどう考えても、大きな死線を一つ潜り抜けた人間の様子とは思えぬほどであった。

「悪い夢は見なかった？」

あんな仕事の後だから、と言外に滲ませる女の問いに少女は小さく笑う。確かにあの凄惨な光景を目にしてしまっては、悪夢の一つや二つ見ても無理はないだろう。
平気だと返しながら、我ながら図太い神経の持ち主だと千瀬は思う。悪夢どころか懐かしい夢を見てしまった。ここしばらくは思い出す機会のなかった、もう昔のこと。

（悪夢、なのかな）

綺麗な思い出だった。でも、後悔の念の強い記憶だと思う。あの家で過ごしていた時間の中では唯一鮮明な色の付いていた出来事だったのでなおさら。

思考のベクトルがあらぬ方向に拡散してしまったせいか、ふいに黙り込む千瀬にサンドラは首を傾げる。どうもこの少女は突然意識が逸れる癖があるらしい。任務中も危なかったのだと、少女の教育係を命ぜられた少年がぼやいていたのを思い出す。

「チトセー？」

「……ぇ、あ、はい！」

まだ夢でも見ていたのだろうか。弾かれたように顔を上げて辺りを見回す少女の動きは実に滑稽である。どうにか我に返った千瀬を笑いを堪えて見つめながら、サンドラは少女に声を掛けた目的を思い出した。

任務報告に付き合わないか。そう尋ねれば、千瀬はぱちぱちと瞬きを繰り返す。

「……任務報告？」

「そうよ。チトセはまだ経験ないでしょう？」

サンドラは微笑んだ。彼女率いる〈ソルジャー〉の隊員が仕事を終えてから――つまり、千瀬が初めての任務を経験してからもう二日が経つ。

「ロヴには当日に報告してなかった？」

「ええ。でも今回は≪テトラコマンダー≫への報告よ。ちゃんと書

類を作成して……色々と手続きも必要だわ」

教えてあげるからついてらっしゃいな、とサンドラは言う。

〈テトラコマンダー〉はルシファー内の情報処理の要だ。戦闘専門であるＥＰＰＣの仕事にもきっと大きく関わっているのだろう。

「わかった。行く」

頷いた千瀬の腕を、サンドラの柔らかな手が握った。

＊

カツン、カツンと廊下に響くのはサンドラのヒールの音、それに続くように少女の足音が調和する。

手を引かれるままに千瀬がやってきたのは、離れのような一角であった。位置的にはあの“廃棄場”の少し奥だろうか、つくづくルシファーという組織の建物は奇怪だと思う。このような場所があるなどとは、千瀬は全く知らなかった。

今度こそ忘れないようにしようと、千瀬は道順をしっかり頭に叩き込む。迷子は御免だ、もう二度と。

「テトラコマンダー、って何をする人？」

「主に組織の運営に携わってるかしら。ロヴが面倒くさがりだから」

漠然としていた知識を確かなものにしようとして少女が問えば、サンドラは快活に笑ってみせた。

彼女達の絶対の主君であるロヴ・ハーキンズは、実に奇妙な人物で

ある。この不思議な建物の造りはまるで彼を象徴しているかのようだ。

人好きのする笑みを浮かべたかと思えば冷徹な態度で仕事に望み、堂々たる風格を見せ付けておきながら部下に紅茶を振る舞ったりする。殺人を命じた口で冗談を言い、敵組織の殲滅を目論む脳が時々酷く抜けていることもある。変人、そう言いだしたのは誰だったか。部下から多大な信頼を寄せられるその男は、同時にその一部の部下――主にＥＰＰＣの面々――から激しく貶されたりしていた。

理由はわからないが、特にサンドラとレックスはロヴのことを常に気に掛け、彼の奇怪な行動にはいちいち口を出しているようだ。まるで保護者だと千瀬は思う。首領であるロヴに対しそういう対応をとる彼女らは少々間違っているのかもしれないが、全ては強い絆故なのだろう。（少女はそう信じたかった、そうでなければあんまりだ。）

何故ならば。これほどまでにあつい信頼を寄せられている人間を、千瀬は見たことがなかったから。

「見てごらんなさい、チトセ」

不意にサンドラが指差したほうを見ると、隠されたように暗い廊下の突き当たりに六つの扉が並んでいた。扉の形状は、全て同じ。

「覚えておいてね。左から二番目が、テトラコマンダーのオフィスよ」

言うやいなや、サンドラは鈍色のドアノブを掴むとそれを強く引いた。がこ、と妙な音。ノブが外れて後にぽっかりと穴が開く。

そんなことをして平気なのかと口を開き掛けた千瀬だが、それが只の穴ではないことに気が付いて瞠目した。

外されたドアノブの跡部。其処にあるのは小型のディスプレイと熱感知式のタッチボタン――電子ロックだ。

「コマンダーはうちの幹部だから、普通の組織員はこの中には入れないのよ。私達は出入り自由だけど、毎回ここを開けなくちゃいけないの。解除コードは〈冥界の番人〉……“ＨＡＤＥＳ（ハデス）”よ」

コードを打ち込む電子音が響き渡る。サンドラの白い指が慣れたようにキーを叩くのを、千瀬は神妙な面持ちで眺めていた。

がちゃり、重たい金属音。解除された砦の入り口。扉が、開く。

第三章《はじまり》：Ｆｉｒｓｔ　ｑｕａｒｔｅｒ

あの頃と同じ空、同じ月、同じ世界？
変わったのは私か貴方か、それとも世界か。

＊

冥界、とは正に言い得て妙であった。地獄に続く闇を抜けている感覚、他に音はない。真直ぐ立っているのかもわからない、それ程までにこの空間は暗いのだ。
壁に掛けられた無数のキャンドルホルダーと差し込まれた蝋燭。その中のいくつかにだけ灯された明かりがゆらゆらと揺れて、幻のように輝いた。唯一の明かりだ。だが高い位置に備え付けられているせいか、千瀬の前方を照らすには全く役立っていない。
これはきっと道しるべなのだ、目的地まで点々と続く。

「あ……」

千瀬は不意に声を上げる。火のついている蝋燭の数が急激に増えたかと思うと、彼女達の目の前に紅色が広がったのだ。それまで無言で少女を先導していたサンドラが小さな笑みを浮かべ、その色を目がけて歩んでゆく。
紅の正体は巨大なカーテンであった。高い天井から真直ぐに吊り下

ろされ、その奥の《何か》を覆っている。幾枚か張り巡らされたレース、その上に輝くのは艶やか光沢をもつ深紅のベロア。

その幾重ものカーテンの傍までやってくると、照明は既に蝋燭だけではなくなっていた。どこから差し込んでいるのかわからない、月光を思わせる青白いライトがそこ一帯を照らしている。その場所だけが、闇の中に浮かび上がっているようだ。

もう一歩近づこうとした刹那、ぴたりと千瀬は動きを止める。見開いた瞳の奥に映りこんだのは、突如レースの奥に現れた人影。コントラストの強い照明のせいかシルエットが良くわかる。千瀬は僅かに首を傾げながらも、長い髪と滑らかな体のラインから女性だろうと予想をつけた。

「あら、ラッキーね。待たずに会えたわ」

忙しい人達だからいつもこうはいかない、そうサンドラは笑うともう一歩カーテンのほうへ踏み出す。

瞬間、床を踏んだサンドラの足が発光した――否、光を発したのは床そのものだ。サンドラが立ったその場所に何があると言うのだろうか、千瀬が目を白黒させている間に辺りから不穏な音が鳴り響く。ヴゥン、と低い音――機械の起動音に酷く似ていた――が空間に反響し、次の瞬間それはバン、ともガン、とも形容しがたいブレーカーの落ちたような激しい音に取って代わった。

「……う、わ」

千瀬は思わず目を瞑る。ブレーカーは落ちたのではない、上がったのだ。今や冥界と称された空間は幾千もの白光に照らしだされていた。闇に慣れ切った瞳が痛い。

漸く薄らと目蓋を開けられた千瀬は、レースから透ける女性の髪の

色が金に輝いたのを見て小さく呟く。

「ミク……？」

「あら、違うわ。ミクは〈マーダラー〉よ、知らなかった？」

知らなかった、と千瀬は頷いた。なるほど、それで彼女はよくルードなる放浪少年を捜索しているのだ。

サンドラが一人納得する千瀬の腕を引き、二人は漸く全貌が明らかになったカーテンの前へ並び立った。どうやらこの分厚い布の向こうには別の部屋か、もしくはそれに似た隔離空間があるらしい。

「あそこにいるのは〈テトラコマンダー〉の中でも代表格ね。話が早いから助かるわ」

テトラコマンダーは四人と聞く。その中でも上下関係が生まれているのだろうか。

組織って難しい、と他人事のように考えていた千瀬は、突如響き渡った凛とした声に意識を引き戻される。

「任務報告ですね、サンドラ」

女性特有の柔らかな、しかし芯の通った声だった。レース越しのシルエットが動く。

千瀬の耳には日本語に聞こえて、ふとこれもロヴの能力の効果なのかと思った。シルエットは分厚いカーテンを割り、布の隙間から白く細い腕が現れる。陶器のように滑らかな肌に包まれたその腕は、そのままカーテンをゆるりとスライドさせた。

（綺麗、）

千瀬はカーテンが開き切る様を息を呑んで見つめていた。何故だろう、胸の奥が疼くような気持ちになる。
奥から現れた女性は俯いているので顔は見えない。
黒いドレスに身を包んだ彼女が一歩こちらに近づく度に、ミクのものだと思っていた金の髪がさらさらと揺れた。日本人の千瀬とは異なる色。肩までのストレートは、まるで月の光を帯びているかのようだ。

（――月、みたいだ）

ジリジリと音をたてていた蝋燭が一本、燃え尽きて消える。胸の奥が疼いて少女は思わず手を当てる。その、月の色。

（……あ、れ？）

頭の隅を何かが過ったような気がした。息が詰まる。この光景を、千瀬は知っている。
女性は真直ぐにこちらへ歩み寄ってきていた。ドレスに付けられた紋章は、彼女が≪テトラコマンダー≫であることを示す銀白色。それに反射する光。きらきら。歩調にあわせて揺れる月色のブロンド。時折、青白い光を放って。

刹那、千瀬のもう一度脳裏を何かが掠める。
少女は目を見開いた。それは紛れもなく、彼女自身が今日目覚める前に見ていた夢だった。
胸が疼く。疼いて痛む。蝋燭がまた一本、消えた。

「……う、そ」

意図せず零れ落ちた言葉は、幸いにもサンドラには聞こえていない

ようだった。嘘だ、と少女は思う。まさか、そんなはずない。あんなに探したのに。あんなに悔しかったのに。

……胸の痛みの理由に気が付いた。この光景を、知っていたわけじゃない。焦がれていたのだ、ずっとずっと、願っていた。

嘘だ。これは夢だ。もう一度思う。けれど千瀬はその瞬間、全てを悟っていたのだった。

（満月の夢を、見た）

ゆっくりと顔をあげた女性の双眸が千瀬を捉える。金糸の髪の隙間から覗く真直ぐな瞳は、左右で異なる色合いをしていた。淡碧と琥珀のオッド・アイ。それがヘテロクロミアと呼ばれることを、千瀬は知らない。

けれどその姿が、一般に言う『普通』とは違うことを千瀬は知っていた。

――だって、彼女は日本人なのだ。千瀬はそれを知っていたのだ。

「――――ツキハ、さん」

ぽつりと呟いた声は空気に溶ける。隣に立っていたサンドラが驚いたように、千瀬の顔を覗き込んだ。

――満月の夢を見た。

けれど今宵は上弦の月が輝くだろう、あの日のように。

『姉さん、あのね。あたし、お月さまに会ったの』

第三章《はじまり》：月と邂逅（1）

『つきは』。千瀬がその名を口にした瞬間、その場の空気が大きく揺らいだ。呼ばれた女は微動だにせず、その長い月色の睫毛を僅かに伏せるだけ。
瞠目したサンドラは弾かれたように少女を振り返る。

「え……？　あら、何？　チトセったら、ツキハのこと知ってたの？」

疑問符だらけの問い掛けに千瀬はどうにか頷こうとしたが、その首は思うように動いてはくれなかった。少女は目の前のテトラコマンダーから視線を外せぬまま、沈黙のみが流れる。

「そういえばツキハも日本人だものね。知り合いでも不思議はないのかしら……」

一人納得したふうなサンドラ（無理矢理に、だが）だけがその空気の中で話を続ける。千瀬は何とか場を取り持とうとしている彼女の努力をひしひしと感じていた。何か言わなければ、と思う。言わなければならないことが、言いたいことが、たくさんあるのに。

「ツキハは日本人にしては珍しい容姿でしょ？　髪とか目とか。彼女が日本人だって知ったときは驚いたのよ、私……どうしたの、チトセ」
「……ツキハ、さんは」

サンドラが千瀬の顔を覗き込んだ。少女は半ば無意識のうちに動きだした唇に言葉を乗せる。

「ツキハさんは、うちの近くに住んでて……あたし、まだ小さくて」

ツキハを見た瞬間に流れ込んできた記憶の渦が痛い。フラッシュバックするかのように断片的に、けれどそれよりずっと明るく鮮明に。

千瀬は洋服の裾を握り締める。そうしないと、何かが出ていってしまいそうだった。

思い出したのだ、あの日のこと。無力だった自分。

（そうだ、あたしは、）

あの出来事を、ずっとずっと悔やんで生きてきたはずだった。片時も忘れたことなど、なかったのに。どうして、どうして。

（どうして、忘れてた？）

千瀬は自らの頭を殴り付けたいような衝動に駆られた。覚えていたはずの彼女を、彼女と過ごした記憶を、一時期でも忘れていたことに気が付いて愕然とする。確かにずっと記憶に刻まれていたはずのことを、何故かここ最近――否、ルシファーに来てからずっと。昨晩夢に見るまで、思い出しもしなかったのだ。

……少女の記憶が途切れたのは、間違いなくあの日だ。千瀬自身が父を殺し、母を殺し、祖父母を、従兄を、伯父伯母を殺した日。少女は漠然と、自分に残されたのは姉の存在と奪った命の重みだけだと思い込んでいたのだが、本当はまだあったのだ。祖国への未練や忘れられない思い出、忘れてはいけないことが。……他にもまだ、あるのかもしれない。

親族を殺したあの時――そう、切っ掛けさえも未だ思い出せない――唐突に体内へ落とされた重たい蓋が、千瀬の記憶を今も混乱させている。

「あたし、ずっとずっと、捜してたのに……」

どうして。

そう呟いた少女の問い掛けは、はたしてどちらへ向けられたものなのだろう。

僅かな間にでも彼女を忘れていた自分へか、それとも、

「捜して、たんです……」

――あの日、消えた彼女に対してか。

ツキハはもう一度僅かに目を伏せると、サンドラの手から書類（任務の報告書である）を抜き取り何も言わずにカーテンの向こうへと去っていった。一度も後ろを振り返らずに。

「ツキハさん、待って……！」

受け取られることのない少女の言葉は、空気に吸い込まれて静かに消えた。

ツキハが奥へと姿を消した瞬間、再びブレーカーの落ちるような音が辺り一帯に響き渡る。同時に空間を照らしていた光がみるみる消え、主人の消えた部屋には再び漆黒と蝋燭の明かりだけが残された。暗くなった視界の中で、サンドラは俯いた千瀬の頭をゆるゆるとあやすように撫でる。

「チトセ、ツキハのこと知りたい？」

千瀬は仄かに赤くなった目でサンドラを見つめた。その視線の先、金髪の女は優しく笑う。闇にも浮かぶその髪色はツキハとは違う金色だ。暖かい、太陽のような色。深い紫の瞳を細めて女は言った。

「少し、昔話をしましょうか」

＊

昔――そう、もうずっと前の話になる。それはまだ彼女が幼い“黒沼　千瀬”であった頃。
少女はある日、月に出会った。少女は彼女のことを、お月さまだと称した――それは、千瀬と百瀬だけの秘密。
『ナナミさん』の家があったのは、千瀬の祖母宅の向かいだった。
――七見月葉（ななみつきは）。

それは子供のないはずの七見家の、隠された長女の名前。
この邂逅は必然だったのだと、あの時誰もが信じていた。

……消えたくないと、言っていたのに。

「ツキハさんを初めて見たのは、祖父母の家で剣技の初稽古を行なった日」

千瀬とサンドラはゆっくり話をできる場所を求め、ルシファーのディレクターズキッチン――要は上位組織員専用の喫茶店――へ移動した。サンドラがコーヒーを注文し、何でも構わないと答えた千瀬の為に温かいココアを追加する。

「そのすぐ側に“ナナミ”っていう家があって。あたしは祖父に用事を頼まれて、ナナミさんの家に荷物を届けるところだった」

祖父――当時は師範や師父と呼んでいた――の家に通うのは少女の義務であった。あれは姉の百瀬から妹である千瀬に、黒沼の剣技伝承権が移されて間もない頃。

その頃から人一倍人間の気配に聡かった千瀬が《それ》の存在に気付いたのは、きっと必然だった。

「人の気配がしてた。ナナミさんのご夫妻とは違う、すごく微かなもの」

七見家に子供がいないのは同時周知の話で。けれどその日その家にいたのは、世間から隔離されて生きる一人の少女だった。

――否、正確には家の裏の“小屋”に、だ。少女は偶然に、そして必然的に、彼女を見つけることになる。

「あたし、その日からずっとツキハさんのところに通ってた。両親と七見さんの目を盗んで、時々姉さんを連れて」

月葉、と名乗った少女は百瀬よりも僅かに年上で、右は淡い碧色、左は深い橙色の瞳をしていた。こういう色を琥珀色というのだ、と教えてくれたのは姉だったと思う。

暗い小屋のなかでも輝いていた月色の髪、美しい瞳、生きた宝石のような少女。

けれど月葉はいつも淋しそうに笑っていた。その儚い笑顔の理由は理解できなかったけれど、それはただ幼い千瀬の胸に突き刺さり、なおさら少女を月葉のもとへと通わせることになる。どうしようもなくその存在に引かれていた。淋しさを、共有していた。

『――こんなの、大嫌いよ』

そう呟いた彼女の声を千瀬は思い出す。あたしは見た目がこんなのだから。普通じゃないから、と。

（その月はいつから、この凍える空に浮かんでいたの）
（お願い、誰か、捕まえてあげて。）

第三章《はじまり》：月と邂逅（2）

注文した飲み物がウェイトレスに運ばれてやってくる。ここの従業員も一応ルシファーの組織員なのだろうか、と千瀬は首を傾げた。サンドラに促されるままに、ぽつりぽつりと過去を零し始めた少女はどこか物憂げな表情をしている。サンドラはそれを気遣って無理はしなくていいと声を掛けたのだが、千瀬はただ首を横に振った。

――サンドラが心配しているように、過去を思い出すのが辛いというわけではない。千瀬が本当に不安なのは、自らの記憶に抜け落ちた部分があるという点だった。自分自身でさえよくわかっていない現象なのに、それをサンドラに告げることができるはずもない。

――これは記憶喪失ではないのだ、と千瀬には何故か自信があった。無理矢理覆い隠されてしまったかのような過去の断片は、喪失ではなく塞がれているだけ。どこかに、きっと。

「……ツキハさんは、七見家の長女でした。近所の人がツキハさんの存在を知らなかったのは、ご両親が、一度もツキハさんを外に出していなかったから」

千瀬は言葉を続け、過去の月葉に思いを馳せた。

――娘の容姿をありのままに受け入れることができなかった七見家の人々。存在を隠されて、ひっそりと生きてきた月葉。それでも、気丈だった彼女。

普通じゃない、それは、どんな気持ちだっただろう？

同年代の子供のなかでは『普通』ではなかった千瀬だが、それでも一般の教養はそれなりに身につけて育っていた。四六時中刀を握っていたことを除けば自由に外にも出られたし、それが千瀬への期待の表れだったとしても、親族は少女に優しかったのである。

出会った月葉からこの場所から出たことがないのだと言われたとき、外の様子を尋ねられたとき、少女の心に渦巻いた気持ちは今となっては表現できない。

「……。」

物思いに耽ってしまったのか、すっかり黙り込んだ千瀬にココアが冷めると忠告し、今度はサンドラが静かに口を開く。

「さっきも言ったけど、ツキハは〈テトラコマンダー〉よ。組織の運営をやって、彼女の場合は“スカウト”の管理もしているわ。スカウトは……ほら、あなたみたいな、迎えが行くタイプ。ＥＰＰＣに日本人が多いのは日本に詳しいツキハがいるからね、きっと」

サンドラはコーヒーにミルクを入れるとくるくるとかき回す。美しいラインを描きながら溶解する乳白色を、ぼうっと千瀬は見つめていた。

「あの子はあんな目立つ容姿をしているから、今まで苦労はしてきたみたいね」

千瀬は目を伏せ、カップにゆっくりと口をつけた。甘やかなカカオの香りと僅かな苦み。僅かに温くなっていたけれど、体を暖めるには十分である。

日本で暮らしていたはずの月葉がどういう経緯を経てこの組織にやってきたのか、聞くのは少し恐かった。幼いながらにも“あの別れ”を経験した千瀬にとっては、その後の月葉の運命はぼんやりと想像できてしまうものだったのだ。

「ツキハがルシファーに来たのは今から六年ぐらい前になるかしら。

組織が本格的に始動してから三年目の春だった」

サンドラは首を傾けながら懐かしむような口調で語る。

「十九才だったロヴが『十代のうちに何かやりたい』って馬鹿みたいなことを言い出して、何をするのかと思ったら突然女の子を一人連れて来たのよ。嘘みたいに綺麗な容姿でびっくりしたわ。日本人だっていうし。それからルシファーの内部の構造をロヴが整えはじめて……」

「馬鹿みたいとは心外だな。それに“連れて”来たんじゃなくて、正確には“盗んで”来たんだ」

あら、とサンドラが笑う。いきなり割り込んだ声に、千瀬はあんぐりと口を開け目を瞬かせた。

「身売りのリストで見て気に入ったもんだから」

突然あらわれて、恐ろしいことをサラリと言い放つ彼。この組織は大丈夫なのだろうか。トップの人間が、こんなところで優雅にティータイムを楽しんでいて。

頭を抱えそうになる少女の前に、彼は悠々と歩み寄る。ハローハロー、チトセ。元気かい？

「お茶菓子はどうだい？」

飛びっきりのを用意させよう、と。ロヴ・ハーキンズは快活な笑みを浮かべたのだった。

＊

「ツキハは此処にくる前は誰も殺してないよ。〈ソルジャー〉みたいな戦闘員として連れてきたわけじゃないからな」

君とはまた別ルートでここに至ったのさ、と。朗らかにそう言いながら、ちゃっかりと千瀬の向かいに陣取りお茶を楽しむロヴ。

そんな彼を当たり前のように受け入れるサンドラと目を白黒させてばかりの千瀬を、気のせいか店員が遠巻きにしているようだった。

「えぇと……六年って、ツキハさんが来てからそんなに経つんですか」

そんな状況でも、千瀬の中では話を聞きたい気持ちが勝っていて。意を決して話を元に戻せば、サンドラではなくロヴから返答が返ってくる。

「俺がルシファーを創設してから九年経つんだ。そうすると、ツキハは結構な古株だな」

「え、ちょっと待って。九年って……ロヴ、今何歳？」

「二十五だけど？」

千瀬は驚愕した。

そういえばさっきサンドラがそんなことを（組織始動三年目で十九歳、だとかなんとか）言っていたが、月葉のことが気になって聞き流してしまったのだ。

千瀬は頭の中で久しく引き算を実行する。彼らの話を総合すると、つまり。

「ルシファーを創設したの……十六歳の時……？」
「ご名答」

ロヴが朗らかな笑みを浮かべた。じゅうろく、と言ったきり硬直する千瀬を不思議そうに眺め、どうした？　と男は聞く。なんかおかしくないですか、とは聞けない。聞けるはずが無い。

「おや、そこってびっくりする所なのかい？　驚くのはまだ早いぞ。サンドラ、初期メンバーで一番小さかったのはどいつだっけ？」
「ルカ」

にべもなく即答したサンドラが、普通忘れないわよ、とロヴを小突いた。あいた、とオーバーな仕草で突かれた腕を押さえてみせるロヴにサンドラは呆れたような笑みを浮かべる。
なにしてるんだろうこのひとたち。未だ目を見開いたまま、ぼんやりと千瀬は考えた。

「あぁ、そうだそうだ。ルカ！　あいつはその時まだ九歳だった」
「き……」

九歳？
今度こそおかしい、確かにおかしいと千瀬は思った。十六とか、九とか、それは独立して犯罪シンジケートを組織するような年令なのだろうか。そんなはず無い。断言できる。

「でもルカは正確な生年月日がわかってないから、もう少し下だったかもしれないわ」
「あぁ。あいつ見るからに幼かったしな」

楽しそうに、懐かしむように笑い合うロヴとサンドラ。なんだかとんでもないことを聞いてしまったと少女は思う。
――それに、よく考えれば気になることがもう一つ。サンドラだ。一組織員にしては余りにも、詳しすぎはしないだろうか。

「……あの、初期メンバーって？」
「なんだ、知らなかったのか？」

千瀬は頷く。駿もロザリーも、それは教えてくれなかった。教えなかったのではなく、知らないのかもしれない。彼らだって、千瀬のようにスカウトでやってきたのだから。

「そもそもルシファーは」

ロヴは紅茶のカップから手を離し、その指を折ってゆっくりと数えはじめた。

「ルカ、エヴィル、ミク。サンドラとレックス、それに俺で六人だ。これがはじまりだった」
「――サンドラと……レックスも？」

サンドラが微笑む。それは肯定の意。
すとん、と千瀬の心に何かが落下して納まった。唐突に納得したような気がする。レックスというニックネームを考えたのがルカであることや、誰もが近付きがたく感じるエヴィルにレックスがちょっかいをかけることがあること、サンドラがルカやロヴの母親のような振る舞いを見せること。千瀬を迎えにきたとき、ルカはミクと一緒だった。

「俺達の出会いはもっとガキの頃だったけどな」

ロヴがウェイターに持ってこさせた茶菓子を一つ口へと放り込み、千瀬もそれに倣って食べてみる。彼ご贔屓の洋菓子店から直輸入したというそれは、ひどく上品で、甘くて、でもどこか庶民的な懐かしさを感じさせる味だった。

第三章《はじまり》：盤上に駒を並べて（1）

（この人たちは、ずっと昔から一緒だったんだ）

ロヴとサンドラの話を聞くうち、千瀬はだんだんと彼らの関係が見えたような気分になった。立場上サンドラはロヴの部下であるが、きっとそれは形式だけなのだ。

古くからお互いを知る彼らを、少女はほんの少し羨ましいと思う。

ロヴは大層寛いだ様子で二杯目の紅茶に手を伸ばし、なおもその続きを語ってみせた。

「俺やルカはもともと戦争孤児でね。チトセは知ってるかい？　今の世でも戦争や内乱の絶えない国は数えきれないほど有ってな」

せんそうこじ。聞いたことがある、けれどいまいちピンとこない単語に千瀬は首を傾げた。そもそも彼女の暮らしていた島国は、戦争や内乱とは無縁の場所である。もちろんそれは“現在は”の話であるが。

「そういうところの子供ってのは――俺達の生まれた国では、新生児だろうが何だろうが生み捨てられた後は、施設とは名ばかりの廃屋に集められて放置でね。食物もない、衛生状態は最悪。人格崩壊や脳に障害をきたすやつがほとんどだった」

施設に入るのと、そのまま野たれ死ぬのとで二通りか。そう呟いた男に、少女は思わず表情を曇らせた。正直実感の沸く話ではないが、軽く聞き流せるような内容でもない。しかしロヴは可愛らしいお伽話を語るかのように、ゆったりとした口調を崩さなかった。

「俺達はまぁ、ちょっとした例外でね。施設から生きて出ることができた――出ざるを得なかったんだけれど。その後は……チトセの想像に任せるけど、色々やったよ。最初は生きるために、あとは俺の趣味とかで」

趣味、とに口にしたロヴはにんまりと笑う。至極楽しげなその表情の裏で、一体彼は何を考えているのだろうか。

「何時の間にやら俺達に通り名が付いててな――」

「お喋りが過ぎてるわ、ロヴ」

突如サンドラとは別の、澄んだ女の声が響き渡る。ロヴの話を遮って現れた金髪の少女――少女と言うにはやや大人びているが――に驚いて、千瀬は目を瞬いた。

「あら、ミク」

サンドラがひらひらと手を振る。ミク・ロヴナスはちょうど今し方話題になっていた初期メンバーのうちの一人だ。噂をすればなんとやら、である。

なんだか今日は予想外の人物によく遭遇する日だ、とぼんやり千瀬は考えた。

立ったままのミクに気を遣い、千瀬は荷物を積んであった隣の席を空けたが、彼女は緩やかに首を振る。

「ティータイムの邪魔して悪いんだけど――“遠征組”が戻ってくるわよ」

彼女の知らせにロヴは一言、そうかと笑う。読めない笑顔だ、とまた千瀬は思った。

＊

「チトセ！　こっちだ、こっち」

早く来い、と手招き。

“監獄”と呼ばれる拠点に戻って早々、千瀬は何故か急いた様子の駿に捕まった。横には妙に興奮した様子で飛び跳ねているロザリー。はて、何があったのだろうと千瀬は首を傾げる。

「遅かったな、お前。何してたんだよ」

「お茶……してた。サンドラとロヴと」

「はぁ？」

組織の建物内にディレクターズキッチンがあることは駿も知っていたが、（何せ古びた洋館風の建物の中で、あれがある区間はやたらと近未来的で目立つのだ）なぜそこでロヴが出るのかわけが分からないといった様子である。自分を見つめる駿に何から説明したものかと考えあぐねていると、そんなことはお構いなしにロザリーが千瀬の腕を引っ張った。

「チトセ、遠征してた人が帰ってくるんだって。会いにいこう？　紹介するから」

千瀬は再び首を傾げた。遠征組？　そういえば先刻、ミクが同じようなことを言っていた気がする。

「遠征ってのはな、ルシファーから離れて泊まり込みの別任務をすることを言うんだ。今回の遠征組は半年近く行ってたぜ」

駿は千瀬に向かって笑いかける。にやり、と言う音が聞こえそうなほど口角が吊り上がった。

「言っただろ？　お前を入れて十三人、って」

「……それじゃあ」

少女はそれを思い出して目を見開いた。

つまり、漸くご対面ということなのだろう。まだ見ぬ、我らが〈ソルジャー〉の残りの面々。千瀬達の、唯一無二の同胞に。

＊

ブレーキと共に巻き上がる土煙。ルシファー本部の門前に同時に三台、黒塗りのリムジンが停車する。

高級車のドアが静かに開くと、そこからすらりとした細い脚が覗いた。女性特有の柔らかいライン、色は柔らかな白だ。ゆっくりと車から降りた彼女の足が地を踏みしめ、ジャリ、と砂が鳴く。

外へと直々に彼らを迎えに出た首領の男（酷使した部下を労うのは義務だ、と彼は思っているのだ）は、彼女を見ると朗らかに笑った。

「おかえり、シュンレン」

呼ばれた彼女の名は、李　春憐という。シュンレン、と言う名は聞いてもわかるとおり、彼女の母国での本来の音ではなく極東の島国――日本風に読ませた音であった。

彼女がここでそう名乗る理由は誰も知らない。仲間に日本人が多いことを考慮に入れた上でのことなのかもしれないし、他に理由があるのやもしれなかった。

春憐はロヴを見つけると、その腰までの長い茶髪を垂らして一礼する。黒のチャイニーズドレスがよく似合う、若い女であった。

「アサミはいないのかい？」

「車に乗ってるわ」

彼女のその言葉を聞いてか、バタン、という音と共にもう一人が車から降り立つ。現れたのは鋭い目をした青年だ。朝深（あさみ）、が彼の名前である――少なくともここではそう呼ばれていた。姓なのか名なのかは定かではない。茶色い短髪は襟足だけが長く、赤に染められていた。

「おかえり、アサミ。君がいない間にまた日本人が入ってね……なかなか興味深い子だよ。会っておくといい」

「それ、マジな話？」

ロヴに一瞥をくれただけで視線を逸らした朝深とは別に、快活な声が上がる。それは、春憐と朝深とは別の車に乗っていた少年のもの。外見は十八歳程だろうか。彼は大きな伸びを一つすると、煙草をふかしロヴのほうへ歩いてくる。

「やぁ、ハル」

君の国では未成年の喫煙は禁止じゃなかったかな？　そう呟いたロ

ヴにハルと呼ばれた彼はコロコロと笑い声を上げ、見逃してよボス、と片手をあげてみせた。そのまま少年は一足先に、つかつかと建物の中に消えてゆく。

「ツバキ、ハルを見張っておいて」
「はい」

ロヴは車の中に残っている少女に声をかけた。椿と呼ばれた幼い娘は短く返事をすると、無駄のない動作で車から飛び降りハルに続く。終始無表情であった椿の後ろ姿を眺めながら、ジャパンのシノビは身のこなしが流石だなぁ、とロヴは独りごちた。

「さて、後は」

首領の男が首を巡らせれば、ちょうど残る一台のリムジンからそろりと這い出した見慣れぬ少女が心細げに辺りを見回したところであった。少女はロヴと目が合った瞬間びくりと震える。

「君がスミレだね。俺はロヴ」

スミレは組織からのスカウトを受けてすぐ本部とは別の任地に赴いていた少女で、本部にやって来たのは今日が初めてだった。ロヴ本人とも初対面だ。君とはまた後で話そう、と男は少女に笑いかける。少女が会釈して建物に向かったのを見届けてから、そのままロヴは未だスミレの乗っていた車に居座っている青年に声を掛けた。

「おかえり、ツヅリ。疲れたかい？」
「そう見える？」
「言ってみただけだ」

ツヅリ、と呼ばれた彼は静かに笑みを浮かべる。車から降りて扉を閉めれば、それを合図に三台のリムジンはどこかへ走り去った。
それを黙って見届けるロヴに、ツヅリは訝しげな視線を送る。

「あれ。運転手、殺らなくて良いの？　建物の場所覚えられてるけど」
「ご心配には及ばないよ」

刹那、遠くから激しい爆音が響き渡った。良く見ればそれは車の走り去った方角で、火柱と煙が立ち上っているのが見える。炎上した車の形は視力の良いツヅリにさえ、原型を見いだすことはできなかった。

「性格悪いねー」

軽口を叩く青年にロヴは笑う。運転手はルシファーの組織員ではなかったのだ。敵が雇われドライバーになりすましているなんて、良くある話。

「さて、ツヅリ。君も広間に向かいたまえ。報告を聞かせてもらおうか」
「――Ｙｅｓ，ｓｉｒ．」

門を潜ってゆくツヅリの後ろ姿を眺めながら、ロヴは一人微笑んだ。
これで全ての兵士（ソルジャー）が揃った、と。
来るべき日の為には、動かせる駒は整えておかねばならない。

「――何を企んでるの、ロヴ？」

何処から現れたのだろうか。長い黒髪を風に遊ばせて、少女は男の

後ろに立っていた。ロヴは薄らと笑うと、ルカの頭に軽く手を乗せる。

「――行こう」

第三章《はじまり》：盤上に駒を並べて（2）

「日本人……？」
「そのとーり」

手を引かれるままにやってきたのは見覚えのある広間であった。千瀬も召集されたことのある、あのホールだ。そこには既に先客がいて、千瀬と駿、ロザリーはそれを後方から覗き見る形になった。集まっていたのは千瀬の見知らぬ六人の男女だ。彼らは予め用意された椅子にきちんと腰掛けている。それからロヴ、彼の後ろにルカとエヴィル。
これからこの場で行なわれるのは遠征任務の報告会なのだという。千瀬達はホール脇にある螺旋階段の陰にそっと身を潜ませた。こんな覗くようなまねをしていいのかと千瀬が尋ねれば、バレなきゃ良いんだと駿は言い切る。

「お前だって気になるだろ」
「それは、まぁ、そうだけど」

会話は勿論小声だ。千瀬の返答に満足気に頷くと、ほら、と駿は前方を指差した。言われるままにもう一度集まった面々に視線を向ける。
……男と女がちょうど三人ずつ。その全てが千瀬に馴染みのある――所謂アジア人の顔立ちであった。

「あ、でもあいつは違うぜ。あの端にいる……長い茶髪の女」
「違うって？」

何が、と尋ねる前にロザリーが口を開く。彼女はこの状況をかくれんぼか何かと勘違いしているのか、ひどく楽しそうだ。

「あの子はシュンレン！　生まれは中国だよー」

「ば……っ」

思いのほか大きかったロザリー声。焦った駿があわててその口を塞いだ。かくれんぼ、にさえなっていない。

千瀬は“シュンレン”と言うらしい女を見つめた。東洋の美、とでも言おうか。白い肌や長い髪が、西洋人とは違った美しさをもっている。よくよく見れば、彼女の来ているのは黒のチャイナドレスのようである。なるほど、と少女は独りごちた。

「で、だ。驚くべきことに、シュンレン以外の五人は全員日本人」

「ほんとに……？」

「あぁ。ツキハの仕事の成果か、ソルジャーは圧倒的に日本人の割合が多いんだぜ」

月葉。その名に千瀬は目を見開いた。そうだ、やはり彼女はここにいるのだと思う。思ってみても実感が沸かなかった。長い間探し続けた結果の、余りにも短い邂逅だったのだ。そして余りにも皮肉な再会だった。こんな、ところで。

「……シュンは」

「ん？」

「ツキハさんを、知ってるの」

疑問なのに語尾が上がらない、妙な問い掛けだった。言われた駿は眉を潜める。知っているに決まっているではないか、だからこそ話題に出したのに。

（なにこいつ、また天然発揮？）

どう答えたものか。そんなふうに悶々と悩む駿のことなど気にも掛けず、明るくロザリーが割って入る。今度は声のトーンを押さえていたが。

「ツキハさん、って七見女史のことでしょー？　テトラコマンダーのリーダーだよね」

ななみじょし、と千瀬が小さく繰り返した、その時だった。静寂を割って凛としたロヴの声が響き渡る。空気が変わった。どうやら遠征の報告が始まったらしい。

「……じゃー、俺から。結果から言うと、ツネヒコの足取りは掴めなかった」

千瀬達の見守る前で一人の少年が椅子から立ち上がり、おもむろに話をはじめる。声は周りが静かなせいか、こちらまで良く聞こえた。明らかに未成年の彼は煙草をくわえながら、ばたばたと報告書を振る。

薄い栗色の髪。少年が動く度に耳のピアスが小さく輝いた。

「今喋ってる不良がハル。日向ハル」

駿が少年の名を告げた。

日向（ひゅうが）ハル、まごうことなき日本人である。髪は脱色してあるのだろう。駿曰く不良、の彼は至極マイペースで報告を続けている。

「俺とツバキで日本中を調べ尽くしたんだ。が、ツネヒコの野郎が

いた形跡はこれっぽっちも出てこなかったぜ。……それどころか、ツネヒコが自殺した可能性が出てきた」

「……自殺か」

ロヴが不敵に笑う。集まった者の前に立つ彼は首領の風格を存分に醸し出していた。これが先刻まで一緒にティータイムを満喫していた相手なのかと思うと、もう目で見たものを信じることはできないんじゃないかという気が千瀬にはする。

（ツネヒコ、って誰だろう。日本人の名前？）

「俺からは以上ー。ほい、」

ハルは報告書の束をロヴに放り投げると、欠伸をしながら後ろの方に退った。ロヴは笑ってそれを受けとめる。

「ご苦労、ハル。ツバキは何かあるか？」

「……ない」

ツバキと呼ばれた少女はそれだけ言うと、ハルの後を追うように踵を返した。日本人にしてはやや赤みを帯びた髪を高い位置で結い上げた少女が自分と同じぐらいの年頃であることに千瀬は気が付く。駿に目線を送れば、彼女の名は華京院（かきょういん）椿だと告げられた。随分と厳かな名だ。丈の短い着物という変わった出で立ちの椿は、ロヴに話し掛けられてもニコリともしない。

「シュンレンの隣にいるのがアサミ」

ロザリーが囁き示した所にいたのは、細い釣り目の男。背が高く、黙っているだけでも威圧感がある。

彼はロヴに報告書だけを渡して、さっさと自分の席に戻っていった。

「朝、深、って書く。あいつは謎だらけだよ。名前も本名なんだか」

ハルの手から癖の強そうな煙草を一本引き抜き火を灯した朝深を見て、駿が僅かに渋い顔をした。

「ちなみに、あそこの二人とも未成年。よくあんなもん吸う気になるよな」

「え」

「あの二人、っていうか皆まだ十代じゃない？」

「え？」

タバコって美味しいのかな、と呟くロザリーの横で千瀬は目を瞬いた。あそこに集まった者達の纏う空気はどう見ても——明らかに幼いとわかる者を除けば——十代、という様子ではなかったのだ。春憐などはすっかり大人の女性の色香を漂わせている。

「ちなみにハルと駿は同いどしー。朝深は一つ上？　二つだっけ？」

「……そんなふうに見えない……」

「……おい。それはあいつらが老けてるのか？　俺がガキ臭いって言いたいのか？」

「えっと……」

悩むのかよ！　と叫びだしそうになる駿をロザリーが宥めるうちに、次の人間が立ち上がった。彼はツヅリと呼ばれる青年（とはいえやはり未成年なのだろうが、少年よりは青年と形容するに相応しいだろう）である。あいつも偽名疑惑だ、と駿が呟いた。

長めの黒髪に数ヶ所のメッシュ。彼は、隣に座っていた少女を連れてロヴの前にやってきた。んん？　と妙な唸り声を上げたのは駿だ。

「あれ、あいつは……？」

駿が小首を傾げた。現れた少女、に全く見覚えがなかったのである。

第三章《はじまり》：盤上に駒を並べて（3）

見慣れぬ少女に訝しげな視線を送り付けながら駿は首を傾げる。それを暫らく眺めていたロザリーが、ふいにぽんと掌を合わせた。

「わかった。あの子がスミレじゃない？」

「……ああ、そっか」

「スミレって？」

きっとあの少女のことを指しているのだろうと思いながら、千瀬は小声で問い掛ける。見つめられた駿はぶっきらぼうに、くりはら、と答えた——栗原、すみれ。名前の字は草花の菫と同じなのだろう（駿はたぶん、と言っただけなので当てにならないが）。

彼女がルシファーに入ったのは千瀬よりも前だが、理由有って今まで北アメリカでの任務に就いていたらしい。本部にやって来たのは今回が初めてで、駿もロザリーも彼女とは初対面なのだという。

北アメリカで何をしていたのかは知らないが、自分と同じ年頃の少女が長期任務をこなしていたことに千瀬は素直に感心した。同時に首をもたげる、ほんの少しの興味。スミレは緊張しているのか常に俯いたままで、若干この場の空気には溶け込めていないように感じられた。

（普通の、おんなのこ）

この組織の持つ空気には、全く似付かわしくないような。内気そうな少女を見つめながら千瀬は、なぜスミレはルシファーに所属することになったのかと思いを巡らせた。そんなこと、わかるはずがないのだけれど。

「北アメリカ滞在中はスミレの面倒はツヅリが見てたのよ」

そう言って笑うロザリーに、なるほどと相槌を打つ。どうりで心なしか、ツヅリには懐いているように見えるわけだ。

「……本当に、日本人ばっかり」

改めて驚愕を露に千瀬は呟く。

こんな所にこんなに沢山の同人種が集まっているなんて、確率としては天文学的数値を叩き出すのではないだろうか。同じ血を分けた人間達。極東の、ちっぽけな島国の。

「だからそー言ってんだろ。今回の遠征任務は全部日本関係だったらしい。だから〈ソルジャー〉の中から日本人が多く選ばれて行ったんだよ、男女一人ずつのペアが二組と北アメリカから帰ってきた二人」

「男女比の関係で、シュンは置いていかれたのよねーっ」

「うるせーよ」

ロザリーがくすくすと笑う。つられて千瀬も小さく笑った。不貞腐れたようにそっぽを向く駿に、これではどっちが年上だかわからないとこっそり思う。

「皆、ご苦労だった。こちらからも紹介しておきたい」

再びロヴの声が響いた。集会が終わりに近づいているのだろう。見つかる前に帰ったほうが良いのでは、と千瀬が駿に目線を送れば、それを察して彼も頷いた。未だにロヴの声が聞こえている——紹介しよう、あれが、

「先々月入隊したクロヌマ　チトセ」
「……え？」

思わず千瀬が声を出してしまうと、六人が一斉にこちらを振り返った。ロザリーが目を見開く。駿が硬直する。ロヴが笑う。

「お前達の、十三番目の仲間だ」

三人は渋々階段の影から這い出した。気付いてたのかよ、と悪態を吐く少年に、シュンの声が大きかったのよとロザリー顔をしかめる。――いや、それ違ェよ、煩かったのはお前だよ。何言ってるのシュンのせいだよー。いやいやお前が何言ってんの？　背後で緩やかな口論が勃発しかけていることを感じ取りながら、千瀬にそれを止める気は起きなかった。それよりも。

「……黒……沼？」

その場にいた誰かがぽつりと呟いたその言葉が、やけに千瀬の耳に残って仕方がなかったのだ。

＊

「おいこらチトセ！　何処行くんだよ？」
「えーと、ちょっと忘れ物」
「お前最初から手ブラだったじゃん……おい待て！」

駿の声を背中に感じながら、それを無視して千瀬は走りだした。集会のあったホールから監獄までの帰り道を逆走する。

――集会が終わった後、千瀬は〈ソルジャー〉の残りのメンバーだという春憐以外の五人の日本人の前で挨拶をすることとなった。彼らは意外にも気さくに千瀬と握手を交わし（朝深と椿は表情を崩さぬままだったが）千瀬はほっと息を吐いたのだった。同時に心の中でぐるぐると何かが渦巻くのを止められずに、あ、まただ、と千瀬は思う。

これは少女の悪い癖だった。一つのことをしている間に、つい別のことを考えてしまうのだ（今回もまた然り）。そしてこれが、千瀬に今の行動――駿を振り切って一人駆け出した――をさせている原因である。

彼らと僅かながらも言葉を交わすうちに、体内の渦はより大きくなっていった。ロヴの能力を通さずとも理解できる言葉や、日本人特有の雰囲気が懐かしくて仕方なくて。日本人同士だから。それはこじつけかもしれないけれど。

（それでも）

確かに感じたのだ。例え全員が犯罪者でも、変わらないものはあるのだと。赤の他人でさえ、こうやって繋がりを感じることができる。それを嬉しく感じると同時に、“彼女”を想った。また、何かが渦巻いた。

「えっと……こっちかな」

今千瀬が目指しているのは“冥界”である。そう、彼女に会うためだ。

たくさんの日本人に触れるうち、その懐かしさを感じるうち、千瀬

の体内でむくりと鎌首をもたげたのはやはり月葉への念だったのだ。
未練がましいだろうか。本当ならこうして出会えたことだけで十分だと、詮索などせぬべきなのだろう。
それでも、どうしても気掛かりで仕方なくなってしまった。素直に再会を喜べないことが、月葉が自分を知らぬような素振りを見せたことが、千瀬には淋しかったのだ。

（子供だ、あたし）

それでも、と千瀬は思う。
あの日の出来事に、けりをつけないと。

「……ツキハさんに、会わないと」

あたしは前に、進めない。

第三章《はじまり》：a night with a hazy moon

（――ねぇ、ほんとはね）

（私、怖いんだ。）

（このまま私の存在が、なかったことにされちゃうんじゃないかって）

（私なんて、最初からいなかったって、そんなの）

（いや、だ。）

（嫌だよ、）

（消えたくないよ、ちぃちゃん……！）

＊　＊　＊

月の満ち欠けをいくつも遡った、それは遠い昔の話。遥かな過去の、

けれど確かなある日の話。

少女は小さな町に住んでいた。視界の端には常に山野の深緑が映る閑かな場所で、古びた神社と学校と寂れた工場、後は簡素な住宅が立ち並ぶだけである。そんな辺鄙な所にも関わらず、少女の家族は一族代々そこに住み着いていたのだった。その地の名を、上水流（かみずる）という。

黒沼千瀬は一族の例に漏れず、この町で生まれこの町で育った。少女はまだ小学生であったが、上水流町内で彼女に知らない場所は無い。

それは場所でなくとも同じことで、例えば誰の家がどこにあり、住人は何人居るか、といったことは全て把握していた。

それはけして少女が特別だったわけではない。上水流という町では、あの家には何人子供がいて誰それはもう時期何歳の誕生日を迎えるだとか、この家とあの家は親戚だ、などという情報が住人間で筒抜けていたのである。――小さい町だった。本当に、小さかったのだ。

その日も千瀬は祖父母の自宅で剣術の稽古に勤しんでいた。千瀬は稽古に熱心だったが、合間を見計らって家を抜け出し、祖父母宅のすぐ裏の家へ向かうことが当時の日課に成りつつあった。

それは少女にとって、生まれて初めての秘め事。行き先を問われて誤魔化すためについた小さな嘘も、千瀬には初めての経験だったのだ。

当時そこには『七見』という表札を掲げた家が立っていた。住人は二人、この家に住む若い夫婦のみである。……それが、上水流町における七見家の見解であった。

千瀬は足音を忍ばせてその家に入ってゆく。それは列記とした不法侵入なのだが、それを咎めるものはいない。（誰にも気付かれてい

なかったのだ。）

七見家の敷地は広く、家の影に隠れた庭の一部に小さな木製の小屋が建てられていた。小屋の裏手にまわり込むと、そこには子供一人どうにか通れそうな出窓がある。

幼い彼女は小さな体を十分に使って、軽々と窓に向かって飛び上がった。器用に桟に掴まりバランスをとってから、遠慮がちに三度のノック。これが、彼女達の秘密の合図だった。

「ちぃちゃん、」

窓の向こうから聞こえた声は硝子越しでくぐもっていたが、千瀬は表情を綻ばせる。

待っててね。中からもう一度小さな声がして、同時にカチリ、という開錠の音。

「ツキハさん、今日はね、桜とお団子持ってきたんだよ。お花見しよう？」

「おはなみ？」

「うん」

迎え入れてくれた年上の少女に笑いかけ、千瀬は小さな窓からするりと小屋のなかに侵入した。

――黒沼　千瀬、七歳の春。

まだ少女は、彼女の犯す罪を知らない。

第三章《はじまり》：月蝕

侵入者を迎え入れ、色素の薄い髪をした少女が笑った。彼女はこの小屋唯一の住人で、千瀬はこの少女に会う為だけにここへ通っている。稽古の片手間に来ていたはずが、最近ではこちらが本命になりつつあった。いつも何かを手土産に、時々は姉も連れて。この頃は姉も小学生で、まだ千瀬と同じ屋根の下で生活していたのだ。

「今日はモモちゃん、一緒じゃないんだね？」
「うん。姉さんは学校だから」
「そっか」
ふわりと笑ったその少女の名を、七見　月葉という。年は千瀬より、そして百瀬よりも僅かに上のようだったが詳しくはわからない。その髪は名前通りの月色、そして左右異なった色の瞳を持っていた。
……それが異質であるということには、千瀬はとうに気が付いていた。
千瀬が彼女に出会ってここに通うようになってからもうどれだけ経つだろうか、数えるのはもう止めてしまった。ただここにいるだけで、千瀬は満足だったのだ。

「ちぃちゃん学校は？」
「今日は良いんだ。お稽古の日だから」

千瀬は姉の百瀬とは違う町外の小学校に通っていた。とは言っても、許された時間の殆どを剣術の修業にあてる毎日である。学校に行ったのは数えるほどしかない。
そんな状況でもちろん友達など出来なかったし、先日久しぶりに行った学校ではあまりにも幼稚なクラスメートに愕然とさせられた。
千瀬はこの年頃の子供と比べれば、体力も知性も抜きんでていたの

である。

（つまらなかった）

剣に没頭するのも、親類の期待に応えるのも、彼女を取り巻く世界も。

そんな千瀬であるが、月葉に初めて出会った時嬉しかったのを覚えている。月葉が何かを変えてくれる、そんな気がしたのだ。

「綺麗ー」

月葉はその日千瀬の持ち込んだ桜の枝に目を細めた。白い指でその花弁を慈しむように撫でながら、触ったの初めて、と嬉しそうにはにかんで。

「外はもっとすごいよ。満開……って言ったらわかるかなぁ。この花がね、枝一面にくっついてるの。桜の木が、大きな桃色の塊になって……」

「へぇ……」

千瀬の手折った桜の枝には八つの花が付いていた。月葉はそれにひどく感動したようである。千瀬はそんな彼女を見つめながら、ちくりとどこかが痛んだのを感じた。

――月葉は、この小屋から出られない。

人間という生き物は“異常”敏感だ。自分達とは違うものを遠ざけ、排除しようとする。それは人間の本能だ。歴史に刻まれた多くの過ちも然り、それは人間に許された防衛の手段なのである。月葉の両親も例外ではなかった、それだけのこと。

ブロンドにオッドアイ。そんな月葉の見た目を“普通じゃない”と判断した彼女の両親は、娘の存在を世間から隠し、この小屋から出

さずに育ててきたのだ。訪問客などめったにない、小さな静かな町だった。だからこそ、それが可能だった。

千瀬が月葉のもとに通う理由を同情かと問われたら、少女は間違いなく、迷いようもなく否と答えただろう。

幼い彼女が月葉に抱いた感情は哀れみではなく、むしろ同族への思慕と愛惜であった。少女は月葉を、仲間だと思ったのだ。

（……そう、ひとりで、勝手に）

上水流は小さな町だった。住人はお互いを良く知り、千瀬もまた、ここに住む人々を細かく把握していた。

――けれど。千瀬の存在を知る者は、この町でもごく僅かだったのである。

住民間の情報が筒抜ける上水流の地で、唯一その詳細を語られない家が有った――それが黒沼だ。

古くから一族ぐるみでここに住んでいるということ以外、家族構成や職業もわからない未知の一家。

その中でも特に千瀬は家から出ることが少なかった。たまに学校に行っても周囲の子供は彼女に近づこうとせず（町内の学校ではなかったのでなおさらだ。地元には知り合いなどできなかった）常に少女を遠巻きにしていた。子供達にとって、黒沼千瀬は得体の知れない存在だったのだ。この時すでに千瀬は十分、“普通ではない”子供だった。

恵まれない環境で育ったにも関わらず月葉は気の強い性格で、千瀬が隠れて訪れるようになってからは、外の様子を聞きたがった。聞いたところで見るのは叶わないのだから、実のところはきっと余計辛くなるだけだっただろう。

……彼女は気を強くもつことで自分を勇気づけていたのかもしれないと、後になって千瀬は思う。

千瀬も率先して、彼女に色々な話をした。自らに課せられた役目を外部の人間に語ったのは月葉が初めてだ。

その日もそうやって、他愛もない話と幸せな時間を繰り返すつもりだった。そう、思っていたのに。

「桜ってさ、すぐ散っちゃうんでしょう？」

外に出たことのない月葉は、それでも知識が豊富だった。たくさんの本を読んで過ごしているからか、多くのことを知っている。（時には千瀬が知る以上のことを問われて困ってしまったものだ。）桜という植物の有り様もまた、彼女の脳に知識として収納されていたのだった。

「そうだね。でも、すっごく綺麗だよ」

散りゆく桜の美を、はたしてあの日千瀬は上手く伝えられたのだろうか。懸命に身振り手振りで説明しようとする少女を、彼女は笑って見ていたように思う。

窓一つしかない質素な小屋で、あの頃月葉は何を考えて生きていたのだろうか。

月葉の生きる世界は、千瀬には酷く淋しく感じていた。

小屋が常に暗かったのは、もしかすると彼女に若干の色素欠乏があったからかも知れない。

（そういう者は日光に弱い体質であることが多いからだ）（だとすればそれは月葉の両親の、愛の形だったのかもしれない）しかし幼い千瀬にはそんなことわかるはずもなく、どうしていつもこの場所は暗いのだろうと思い続けていた。それを月葉に問うことができな

かった代わりに、幸せだとは言えない環境で生きる彼女を強い人間だと思い込んだ。
強い、そう、思っていた。

「……ねぇ、ちぃちゃん」

そう思い込みたかったのだ。あの日もあのままで、あの他愛もない話と幸せな時間を繰り返すつもりだった。強く生きる月葉に憧れながら、千瀬はどうにか毎日を生き抜こうとしていた。

「消えるのって、どんな気分かな」

月葉がぽつりとそう言ったその日、何かがおかしいとすぐに思うべきだったのだ。思ったその後、何か、せめて何かするべきだった。真直ぐだった彼女の目があまりにも儚くて、千瀬は体の奥底に震えを感じた。悟ったときには、遅い。

「桜みたいに、誰かが見ててくれれば散るのも素敵。でも、誰にも知られずに居なくなるのは悲しいよね。誰にも、ここに在ったことにさえ気付いてもらえずに、そんなの、」
「ツキハ、さん?」

あたりまえのことだった。たった一人の、他人より孤独を知るだけの少女が強いはずなどなかったのだ。強くあれと願っていたのは他でもない千瀬自身、己を彼女に重ねながら生きていく夢を見ていた。少しずつ崩れていた何かに、本当は気が付いていたのかもしれない。それでも見なくなかったのだ。気が付いてしまったときは手遅れで、千瀬はただ無力だった。

「最近、お母さんが会いにきてくれなくなった。お父さんも帰って

こない。代わりに、知らない男の人が、頻繁にあたしを見にくるようになった……」

嫌だよ、ちぃちゃん、怖い。怖いよ。

そう言って震える月葉の肩を、千瀬はただ抱いていた。そうすることしか、出来なかったのだ。

一回り体の小さい千瀬の肩に顔を埋め、消えたくないと彼女は泣いた。繰り返し繰り返し言葉を吐き出しながら流された涙は白い頬を伝って、千瀬にはそれを受けとめることさえできなかった。

その日唯一いつも通りだったのは、時間の流れだけである。無常にも訪れた別れの時に、月葉は赤くなった目を細めて手を振った。

それが、最後。

千瀬が再び七見家を訪れた翌日の夕刻には、もう全てが終わった後だった。

胸騒ぎを感じた千瀬が小屋で見たものは、踏み散らかされた桜の花。ただ、それだけ。

たった二十四時間だった。それだけの間に七見月葉という人間は、まるではじめからそこにはなかったかのように忽然と姿を消したのだ。

千瀬は百瀬とともに月葉を探して回ったが、やはり子供の手が届く範囲などたかが知れていたのだろう。わかってはいたことだったが、結局彼女を見つけることは叶わなかった。

――月葉の消えた理由を耳にしたのは、それから一月も後のことだ。その頃にはもう、上水流町内には七見家に子供がいたことが知れ渡っていた。というのも、七見家に最近妙な人間が出入りしていたという目撃証言が相次ぎ、そこから判明したことらしい。

『七見の娘は、身売りにあったんだと』

人身売買。それはあまりにもあっけなく残酷な選択だった。月葉はその珍しい容姿を理由にして、両親によって高値で専門の業者に売り払われたのである。七見の家に出入りしていた男達はその下請けであった。少女の値段を見極めるために、何度も家に足を運んでいたということ。

上水流の住人は皆違法に手を染めた七見夫妻を罵ったが、売られた娘については表面上の哀れみを述べただけだった。結局のところ、見ず知らずの他人に感傷的になれるのはせいぜい数日である。やがて七見夫妻は町を出ていき、誰もが彼らを忘れようとしていた。後に、どこか遠くの地で夫妻は逮捕されたらしいと風の噂が流れたが真偽のほどはわからない。

百瀬は泣いていた。千瀬は月葉を捜し続けた。姉が全寮制の高校に行くことになった後も、刀の稽古が本格化した後も、ただ一人で外に出てはあの月色の髪を探し続けた。

それでも結局、千瀬は月葉に何もできなかったのだ。短い時間を共有し、醜いエゴを押しつけただけ。謝ることさえしなかった、幼い自分。

（嗚呼、そうだ。思い出した。）

（あたしはあの日、わかってしまったんだ。）

（世界はなんて、汚いんだろうって。）

（ツキハさんは、あんなに綺麗だったのに。）

第三章《はじまり》：Ｌａｓｔ　ｑｕａｒｔｅｒ

過去の一場面が鮮明に思い出されてゆく中、足を止めなかった千瀬の前に似通った扉が現れる。
今度は迷わなかったらしい。そのことに安堵するのも忘れて、辿り着くやいなや千瀬はドアノブを引き抜いた。勢い余ってよろめいたが、気にしている余裕はない。

「Ｈ…Ａ…」

サンドラに教わった解除コードを打ち込んでゆく。間違えたらどうなるのかは聞かなかったが、この組織のことだ、何か面倒な事態になるのは避けられまい。慎重に、と自らに言い聞かせる。

――Ｄ、Ｅ、

ここに来るまでに何度も唱えた五つのアルファベット。単調に入力するその指は震えていた。
入力失敗を恐れて緊張するほど、千瀬は繊細ではなかった。今更、だ。それでも体が震えるのは、きっとあの頃を思い出したせい。

（会って、どうする？）

会わなければならないと思った。ずっと捜していたから。何故、捜していた？

「……Ｓ」

最後の一文字を打ち込むと同時、カチリと小さな音がする。次いで

落とされた重々しい金属音。体内に沈んだその音色に、千瀬の意識が浮上した。

（謝りたいと、思ってた）

許してほしかったのだ。何も出来なかった過去の自分と、こんなところに居る今の自分。月葉をこんな道に引きずり込んだのは自分だと、何故かそう思った。

――冥界への扉は、開いている。

＊

蝋燭の灯りを頼りに壁を伝って前へと進む。月葉がいるのはもっと奥だろうか。あの、カーテンのあった場所。

（――急がないと）

月葉は逃げも隠れもしないだろう。けれど気持ちばかりが急いてしまい、無性に焦りを感じる。きっとそれは、再会を果たした時の彼女の態度だ。千瀬は未だにあれだけは釈然としない。

一つ息を吐いて少女は歩調を速めた。走るには、此処は暗すぎるのだ。彼女の所に辿り着いたらどうしよう、とぼんやり考える。先刻サンドラがどのように明かりを灯したのか、千瀬は覚えていなかった。暗いままでは、話すらままならないかもしれないというのに。

思考を巡らしながら歩を進めるうち、ふと千瀬は違和感に気が付い

た。奥が明るい。目指していたその場所に、既に照明が灯っている。
――刹那、二つの人影が視界に入った。

「……！」

咄嗟に千瀬は柱の陰に身を隠す。先客が居るらしい。隠れる理由など何処にもないのだが、どこか後ろめたい気持ちが拭えなかった。
意外と臆病な自分に気が付いて、そっと千瀬は嘆息する。

「……君が来てから六年」
「……そうですね」

突如耳に入った会話に千瀬は目を見開いた。ロヴの声だ。そして、応えたのはおそらく月葉。カーテンの奥の部屋から出てきている。
影の正体は間違いなく彼らだ。

「私は、ロヴさんには感謝してるんです。私に新しい世界をくれた」

千瀬は耳を澄ませた。久しぶりに聞く彼女の声は懐かしさを帯びたまま、どこか落ち着いたものがあった。
出て行くことが出来なくなって、千瀬は必死に息を殺す。

「俺のところに人身売買のリストが流れ着くことは珍しくなかったんだ。月葉のことは一目見て気に入ったなぁ……俺は昔から、欲しいものは力ずくでも手に入れる主義でね」
「そして当時最高値のついていた私は、まんまと“謎の犯罪組織”に盗みだされたってわけですね」

月葉が此処に来たときの話をしているのだとわかって、千瀬は耳をそばだてた。捜していた、空白の時間がここにはある。後悔し続け

た、長い過去。
身売りの話は本当だったのだと確信して、また千瀬は痛みを感じた。幼かった少女は月葉に何もしてやることはできなかったけれど、本当は、あの小屋から彼女を出そうと思えば出来たのだ。連れ出した後のことなど考えずに外に出してしまいさえすれば、売られることだけは避けられた。それなのに。
悲しいかな、千瀬というのは老成した子供だったのだ。月葉が外に出た後のことを考えた。現実を見すぎてしまった。子供らしくない目で世界を見据えていて、どうにもならないことを悟っていたのである。

「……私は親に売られたんだってわかって、全てがどうでも良かった。絶望してたの、この世界に」

月葉は外を見たいと言っていたが、一度も出たいとは言わなかった。そして千瀬も彼女に外に出たいかとは、一度たりとも訊ねなかった。そうして少女が自らの狡さに蓋をしているうちに、月葉は彼女の前から消えたのである。月葉はロヴの手を取って、もう一度千瀬の前に現れた。

（ごめんなさい）

あたしは、ずるい。
――その時、未だ後悔の念に苛まれている千瀬は気が付いていなかった。展開される会話の節々にクスクスと小さな笑みが含まれていることに。

「六年、経ったんですね。私は今、ここで自分という存在を確認できていることが何よりも嬉しいと思える」
「正真正銘、悪の道だけどな」

ついに月葉とロヴは声をあげて笑う。その幸せそうな声にはたと顔をあげた千瀬は、ぱちぱちとゆっくり瞬いた。
あれ、なんか、様子がおかしい。どうして楽しそうなんだろうこんな、こんなところで？
千瀬は柱の影からそっと顔を覗かせた。スーツを着流したロヴの横には、ずっと捜していた金の髪。すらりと背の伸びた彼女は片手を口元にあてて、さも楽しそうに笑っている。あんな顔、あの小屋でしたことがあっただろうか。

（――そうか、違うんだ）

唐突に千瀬は理解した。今まで漠然と、なぜ彼女がルシファーという組織に、この暗い世界に足を踏み入れなければいけなかったのかばかりを考えていたのに。身売りにあうことさえなければ、彼女は違う幸せに出会えたと信じて疑わなかったのに。
――けれど、違うのだ。千瀬がここに居場所を見つけてしまったように、月葉にとっても、ここは闇なんかじゃなくて。

（ツキハさんが本当に苦しかったのは――）

エゴと体裁で塗り固められた、あの表面の世界――あの小屋の、闇そのものだったのかもしれない。
彼女は望んでこの場所に踏み入った。歪んだ世界の中で月葉には、ロヴが一本の道のように見えたのである。自分に正直に生きる彼が、何よりも正しいもののように。

「この六年で一つだけ気掛かりだったのが、あの子達のことだったんです。色んなものを貰ったのに何も返せないまま、私はあの子の前から消えてしまった」

後悔してるんです、そう言って月葉は顔を上げた。彼女のブロンドがさらりと揺れる。煌めく瞳の色はあの頃のまま。ロヴは口元に柔らかな笑みを携えている。

「……だから、あなたを見たとき何も言えなかったの。顔を会わせる資格なんか、ないと思った。――でもやっぱり私は、あなたに伝えたい」

月葉の双眸の向けられた先がロヴではないことに気が付いた千瀬はぎょっとして身を強ばらせた。まさか、そんなはずがない。

「――とまぁ、こういうことだ。聞こえたろう？　チトセ」

ロヴが笑んだのは、まさに隠れている千瀬に向かってであった。少女は思わず瞠目する。暴れ回る心臓を必死に抑えつけ、観念したように影からそろりと這い出した。

「……いつから？」

いつから気付かれていたのか。大方この男のことだ、ずいぶん長い間知らぬふりをしていたに違いない。

少女の質問には答えずに、ロヴは千瀬を自分達の方へと手招きした。

「……久しぶり」

千瀬の見上げた先、月葉は笑った。少女だった彼女の、優しくて、気の強そうな面影はそのままだ。大人の女性に変貌を遂げた彼女は、やはりそれでも千瀬の知る月葉だった。

「七年、ぶりです」

堪えたつもりだったが、やはり千瀬の声は震える。七年。長いとは言えないけれども千瀬の人生の半分をかけて、ようやく果たした再会。

「モモちゃんは、一緒じゃないんだね？」

「……うん。姉さんは『学園』に」

「そっか」

ふわりと笑った月葉を見て、千瀬は胸が締め付けられそうになった。前もどこかで、こんな会話をしたのに。

あの時とはあまりにも変わってしまった、彼女達を取り巻く世界。どこから違ったのだろう。我武者羅にでもなく、ただあるがままに生きてきたはずだったのに。

「そっか……モモちゃん、生きてるんだね」

その呟きに千瀬は思わず両手で顔を覆うと、その場に崩れるように座り込んだ。頭の中で思い出が洪水のように押し寄せる。

千瀬と、百瀬と、月葉と。大人のエゴに飲まれそうになりながら、精一杯生きていた少女達。自らのそれに気付いてもひた隠しにしていた、幼かったあの頃。見たくなかった。汚いことは知りたくなかった。もう遅い、それでも。

「……よかっ、た」

千瀬の口から小さな言葉が零れ落ちる。月葉は表情を変えず、少女の傍に屈み込んだ。

「よかった……ツキハさんが生きててよかった……姉さんを殺さなくて、本当に、よかった……！」

自分を取り巻く世界を自らの手で壊したのだ。自分が一番汚れていると、千瀬は信じて疑わなかった。それでもまだ、良かったと思えることがある。

月葉の手が、千瀬の背中を緩やかに撫でた。

「ずっとずっと、探してたの。もしかしたらまた会えるかもしれないって」

必ず月葉に会いにいこう。そう姉と約束したのも、もう七年前のことだ。まだ百瀬は生きている。月葉もここにいる。たった一つの約束はまだ果たされていないが、これから、きっと果たすことが出来る。

幼くて無力だった自分を心の中で呪う傍ら、どうしても会って、伝えたいことがあったのだ。

大切なものを教えてくれた月葉に、ごめんなさいと、ありがとうを。

チィプなありふれた言葉でも、これ以上は他に何もない。

千瀬は息を吸い込んで、ゆっくりと顔を上げた。

「……ツキハさん、」

「ごめんね」

「……え、」

台詞を奪われた千瀬は口をぱくぱくさせながら、目を丸くして月葉を見やった。

だって、謝られることなど何もない。

「私の仕事ね、テトラコマンダーはＥＰＰＣのスカウトを行なうの。

日本の情報網を管理してたのも私。ちぃちゃんをこの世界に引きずり込んだのは、」

「――後悔なんて、してません！」

咄嗟に千瀬は大声をあげた。なんてことだ、それこそこちらの台詞だったはずなのに。

確かにこの組織は綺麗なものではなかった。迎えが来なければ、ここにいることもなかったのだろう。

けれど千瀬はどこかで自分が親族を殺めたということ、それだけは変わらなかったと思っている。未だ切っ掛けも思い出せない、なのに漠然と――けして言い訳をしたいのではないが、運命であったとさえ思っているのだ。

あたしが姉さんを殺さずに済んだのは――頭のどこかで姉さんと一緒にツキハさんに会いに行かなきゃって、ずっと思ってたからかもしれない、と。むしろそんなふうにさえ、思う。

なら、居場所をくれたのは。

「……ありがとう、ツキハさん」

「ちぃちゃん？」

「あたしに新しい世界をくれて、もう一度出会ってくれて。生きる理由をくれて、ありがとうございました。生きててくれて、ありがとうございました」

月葉と出会わせてくれたロヴにも礼を述べるべきか。見つめた先で彼はただ笑っていた。

ごめんなさいはまた今度にしよう、と思う。百瀬と共に月葉に再会することは、できなかったけれど。

「いつかあたし、必ず姉さんと一緒にツキハさんに会いにくるよ」

一緒にありがとうって、言いにくるよ。だから、今度は。
――少女は自らの右手を、真直ぐ月葉の前に伸ばした。

「三人で一緒に、お花見しようね」

差し出された千瀬の小指に、月葉は自分の小指を絡める。そして、
一度だけの指切りを。
そのあと重ねた掌の大きさは、少し千瀬が小さかった。それでも昔
ほどの差はない。
千瀬は腕を下ろすと、しっかり顔を上げて冥界の出口へ向かった。
あたしは、前を向いた。
誰にでもなく、そう語りかけて。

「ちぃちゃん」

月葉が千瀬の背中に声を掛ける。その声は凛と澄んで少女の鼓膜を
揺さ振った。

「私達、生きようね」

生きようね。生きていこうね。この世界で。
そしていつか、一緒に告げよう。

「――約束」

幼かった自分に、
弱かった自分に、
精一杯のさよならを。

第三章《はじまり》：ＣＡＴＣＨ！（１）（前書き）

前話の空気は忘れて読んでいただければ幸いです。

第三章《はじまり》：ＣＡＴＣＨ！（１）

（――なんで、俺がこんな目に？）

武藤　駿は頭を抱えて蹲った。目の前に立ちはだかるは鼻息荒々しい牡牛である。

鋼鉄の蹄で力強く地を掻き、今にも襲う気満々といった様子。その巨体からは威嚇を含んだ鋭いオーラが溢れ出さんとしていた。否、既に溢れているのか。

……殺られる。思った刹那、少年の喉がヒュウと不気味な音を立てた。

――もしかして俺って、結構ピンチなんじゃないのか。

（神様は信じない主義なんだけど）

この時ばかりは真剣に祈った。この状況から抜け出せるのならば、稿（わら）だろうが糸くずにだろうが縋ろうと思う。だって、何で、ウシ？

（ちょっと、いや、これは）

……マジで助けてください。

＊　＊　＊

話は三時間ほど前に遡る。

「……で。これは何なわけ？」

冷ややかな声でそう尋ねたのは、犯罪シンジケート・ルシファーの首領直属戦闘部隊、虐殺隊（スローター）こと《特別戦闘能力保持部隊ＥＰＰＣ》における〈マーダラー〉――その代表、ミク・ロヴナスであった。属に言う金髪碧目を実に良く体現した容姿の彼女は、その硝子玉のような目で周囲の者を鋭く射ぬく。

この状況にミクが怒りを覚えていることは一目瞭然だったので、見つめられた面々はおとなしく順序よく口を開いた。

「……牛だなぁ」

「牛ね」

「ウシ！」

「牛だろ」

「ウシ、です」

上から順に、レックス、サンドラ、ロザリー、駿、そして千瀬の言葉である。たぶんオス、と余計な解説まで付け加えた千瀬の言葉は問答無用でミクによって黙殺された。

行儀よく並んだこれら答えは、この幹部の少女の神経を逆撫でしただけであったらしい。ミクは眉間に一際大きな皺を刻むと、この事態の元凶に勢い良く指を突き付けた。

「そんなことはわかってるのよ！　ロヴ、これは何！？」

「牛だ」

瞬間、ガツンと鈍い音が響き渡った。ミクが蹴りをロヴの脛に打ち込んだのだ。光速だ。思わず千瀬は目を見開いて、患部を押さえて顔をしかめた我らがボス――あまり信じたくない気がしてきたが――

―を見つめた。

「あたた。酷いじゃないか」

言葉とは裏腹にへらりと笑ってみせるロヴの前でミクは激しく溜め息を吐く。幸せが大手を振って逃げていきそうだ。痛がる素振りも演技であることはわかっていたので、それ以上は誰もこの男を気に留めない。（首領であることさえ忘れそうだ。普通首領はこんな所に居ない）代わりにミクは、目の前に存在する巨大な生物を睨み付けた。

モゥ、なんて鳴かれなくともわかっている。これは紛うことなき牛だ。問題は、なぜこれが此処にいるかである。〈ソルジャー〉たちの生活スペース――“監獄”に。

――彼女のもとに《テトラコマンダー》代表、七見　月葉から連絡があったのはつい先刻のことだ。

それは《ポート》――つまりは彼女の部下、からの目撃情報なのだという。

連絡を受けたミクは思わず我が耳を疑った。

『ルシファー内に、牛がいると言うのですが』

彼女が稀にも見ないほどの間抜けな返答を帰してしまったとしても、それはミクのせいではない。

その後半信半疑で建物を捜索してみれば、なんとソレを“監獄”の中に発見してしまったのである。

そして何故か、当たり前のようにそこに居座っていた《ヘッド》――組織の首領たる男、ロヴ・ハーキンズを見つけたとき、ミクは全てを悟ったのだった。

この状況を見れば一目瞭然である。この男こそが騒ぎを起こした張

本人――否、これを見なくとも、こんなことをするのはロヴくらいのものなのだが。

「いや、実はな。ソルジャーの奴らに焼肉を振る舞ってやろうと思ったわけだ。この前の敵対者掃討戦の働きを労う意味で。あれ、チトセの初陣でもあったからな」

全ての元凶は悪怯れることもなくからからと笑う。

罪の意識は皆無だった。自らの行動が常識を激しく逸していることにさえ、気が付いてないに違いない。

「それと、帰還した遠征組の功労を讃えて」

「……へぇ。だからって、なんで生きたままの牛を連れ込むのかしら……？」

「肉は鮮度が命なんだろう？」

……この場で殺す気か。生肉即調理、獲りたて気分か。へぇ。

ミクは軽い頭痛と眩暈を感じながらも、ぐつぐつと煮えたぎる腹の中を必死で押さえ込んだ。

この男には常識というものが通用しない。長年の経験でそれはわかっていた。押さえろ、と自らに言い聞かせ、金髪の少女は引きつった笑みを浮かべる。牛をどうにかすることが先決であると思い出したのだ。

「ま、焼肉のやり方知らないんだけどね俺は」

「いっぺん死んでこい」

ミクの努力はものの二秒で崩れ去った。再び蹴り上げられた彼女の足、それを覆う黒いブーツがロヴの首筋を掠める。刹那ジャキリと音がしたかと思うと、その爪先から白銀の刃物が飛び出して空を一

閃した。
靴底に仕込んであったらしいナイフの刃先を予想していたのか、ロヴはそれさえも綺麗に避けてやんわり笑う。

（えぇえぇ……）

千瀬は一瞬の攻防に目を白黒させながら冷や汗をかいた。こんな場所で命懸け、え、靴に仕込みナイフって、え？　ていうかその人ボスなんじゃ？
思わず視線を彷徨わせれば、横に立っていた駿に『見るな。見なくていい』と頭を押さえ込まれた。

「とにかく！　どーにかしてよこの牛。ロヴが責任取りなさいよ」
「大丈夫、調理場に行けばシェフが教えてくれるさ」
「そっちじゃない！」

誰が食べ方の話をした。駄目だ、埒が開かない。ミクが額に手を押しあてて本日何度目になるかの溜め息を零したその時、彼女のスカートを控えめに引いた者がいた。

「……オミ？　どうしたの」

口数の少ないこの少女（お陰で存在感が希薄になってしまうことは否めない）が何か主張するのは珍しい事である。訝しんで顔を覗き込めば、オミはスカートを握ったまま、申し訳なさそうに呟いた。

「……牛、いなくなりましたが」
「……は」
「あれ、ホントだぁ」

ぽかんとミクが口を開けた横で、無邪気にロザリーが笑う。
ひくり。ミクのこめかみの辺りが引きつった、ような気がした。

「……冗談でしょ」

冗談ではなかった。まさに忽然と、何時の間にやら巨大な牡牛はその姿を消していたのである。
まさか自分が食べられる事を察知でもしたのか、そんなことはわからない。
何にしても、だ。これだけの手練が揃っていながら、誰も牛が逃走したことに気付かなかったなんて。

「逃げられたな」

あっけらかんと言い放つロヴの純粋な笑みが目に入った瞬間、ミクの怒りが沸点を大幅に越えてしまったとしても、それは自然現象だ。

「……なんで縄くらい付けとかなかったのよ、馬鹿ロヴ――ッ！！」

＊

「牛ィ。ウシ、うっしー。どーこでーすかー」

斯くして牡牛大捜索の幕は開始されたのである。ロザリーは『ウシ』コールを連発しながら千瀬の腕を取り、二人並んで出ていった。
サンドラはのんびりと中庭へ向かい、レックスは欠伸を一つ零して

それに続く。二人ともやる気は皆無の様子だが、動かねばならない――何故ならば唯一無二の主から命が落とされていたからである。牛の捜索に〈ソルジャー〉は全員参加するように、と。椿という少女は仕事が早い質らしく、とうに“監獄”を後にしていた。帰還したばかりの遠征組も、強制的に参加決定だったのだ。オミは嫌がるシアンを連れてルシファー内の巡回を開始。春憐は仕方ない、といった様子で牛探しに向かったが、朝深という男にいたっては全く動く気が無いようである。可哀想に、菫はこんなくだらないことがルシファー内での初任務になってしまった。

ツヅリは裏のある笑み――駿曰くいつものこと、なのだが――を浮かべながら出動したが、真面目に行動するかは疑わしい。不良少年・ハルは堂々とサボり宣言をし、部屋の隅で転寝を開始した。

総勢十三名――サボタージュ含む――導入の大捜索である。

あんた達でどうにかしなさいよ。そんな言葉を残してミクは早々に戦線離脱した。彼女は言うなれば被害者だ、責めるのはお門違いである。問題はその後だった。

――諸悪の根源ロヴ・ハーキンズが、最上級の笑顔と共に逃走したのだ。更には、『牛は殺さず生け捕りにして、厨房まで連れてくること』――そんな、無理難題を爽やかに置き去りにして。

「ふざけんなぁあぁあぁッ!!」

駿は全身全霊でそう叫ぶと“監獄”を飛び出した。悲しいかな、首領（ツド）の命令は彼らにとって絶対なのであった。……例えそれが、どんなに馬鹿馬鹿しいものだとしても。

――そして、話は冒頭に戻る。

＊

「マジ、勘弁してください……」

フー、フーッという獣独特の息遣いが廊下に響く。

牡牛を捜索しながらも、願わくば出てきませんように……などと調子の良いことを考えていた矢先だった。運命の悪戯は時に残酷である。それを今まさに駿は体感中であった。

……彼の置かれた状況を整理しよう。簡単に説明してしまえば、駿を乗せたエレベーターが四階に到着し、その扉が開いた瞬間――目の前に、牛（それ）がいただけのことである。言葉にするのは単純で良い。が、少年の現状はけして生易しいものではなかった。

「いや、あの、ちょ……」

エレベーターの中の人間を見つけて重々しく迫り来る牛。エレベーターから出るに出られない状況の駿。小さな箱の内と外で不毛な睨み合い――むしろ駿が睨まれっぱなしだが――を幾度か繰り返した後、ついに少年は決心した。動いてみなければはじまらない。

「と、とりあえず、さいならー」

……エレベーターの扉を閉めてみることにした。敵前逃亡は士道不覚悟だったっけか、とぼんやり考えたが、幸いなことにここは過去の日本でもなければ切腹の意味を知る上司もいない。ついでに駿は武士でもない。逃げも立派な戦術だと、無理矢理己を納得させた。ボタンを押せば金属の扉が機械音を立てながらスライドする。ウィ

ィィン、バンッ！

（……バン？）

予想外の音が響いたことに眉を止せ、少年は指で触れていたボタンから目を離す。顔をしかめて音の出所を見た瞬間、体中の血が逆流したような気がした。

「ぎゃあぁあぁあッ！　すんませんすんません！！」

閉まりかけた扉の隙間から巨大な頭が覗いていた。迫力満点だ。バン、とはエレベーターが閉じようとするのを、牛が自らの首を用いて阻んだ音であったらしい。頭を閉まる最中の扉の間に挟んだ、挟まってしまった、と言うべきか。

ちょっぴり痛い思いをした牛は、当然のごとく怒り狂うわけである。わかる、わかるけど。

「いや、でもそれ自分のせいだろ！」

駿の叫びを無視してエレベーターの個室の中へ上半身を捻込んで来る牛。感知機が重量オーバーを告げて、ビィビィとけたたましい警報が鳴る。

このままでは、この中で圧死しかねない。そんな間抜けな死に方はごめんだ、と半ば自棄になって少年は思った。角の部分をどうにか手で抑えつけ、それでも猛った獣が止まるわけはない。瞬く間に駿の視界は牛の体を染め上げる白と黒の毛色で一杯になった。

……ん、ちょっと待て、と朦朧とする意識のなか駿は思う。そう、牛は白黒なのだ。日本ではお馴染みのホルスタインだ。

（これ、乳牛じゃねぇかあぁあぁ！）

駿は力を振り絞る。こんな馬鹿馬鹿しいところで潰されてなるものか、と息を吸い込み、意を決して牛の脚の間を潜り抜け外へ脱出した。あわや踏み潰されそうになりながらも奇跡の生還を果たし、ゼィゼィと肩で息をする。

「焼肉ならせめて肉牛持って来いよ！　何で乳牛！　乳牛なのにオス!?　え、何乳牛のオスって食用なの」

最後のほうはわけがわからなくなりながら上司の無知っぷりに愚痴を零しても、誰も応える者はいない。もうやだ俺、と少年は嘆息する。

そもそも殺すな、という注文が無茶なのだ。そんなの無理に決まっている。

普通そういうことは、麻酔銃などの準備があって成功するものだ――それどころか今は、こちらの命が危ない。

駿は思わず天を仰いだ。柄にもなく呟いてみる。神様仏様、いてもいなくてもぶっちゃけどーでも良いですけどたまには助けてくださぁい。

「……あれぇ、シュン君じゃん」

第三章《はじまり》：ＣＡＴＣＨ！（２）

「……うげぇ」

突如聞こえた声に駿は思い切り顔をしかめた。心なしか鳥肌も立ったように思う。何があれぇ、だよと悪態を吐きつつ振り返れば、予想どおりの顔がそこにはある。正直、見たくなかった。

現れた青年は腕を組み、さも楽しそうに駿に笑いかける。その背後の牛を一瞥すると、なるほどね、と一人頷いた。

駿はこの青年が大の苦手である。今まで出会った人間の中でも三本の指に入るのではないだろうか。何でよりによってこいつ、と少年は嘆息した。神様はよほど自分のことが嫌いらしい。

（いや、信じてませんけどね）

登場したのは天の助けどころか悪魔だった。〈マーダラー〉、市原恭吾の降臨である。

とはいえ現在のこの状況、手段を選べるほど駿には余裕がなかった。突然の乱入者のお陰で様子を伺っていたらしい件の牡牛が、そろそろエンジンを再起動しようとしているのだ。この際助けてくれれば誰でも構わない。神様仏様市原様。半ば自棄になって思いながら駿は口を開いた。

「……見て分かると思うけど。頼むよ、この牛どーにかしてくれ。殺しちゃいけないんだ」

「んんー……」

顎にわざとらしく手を当て、恭吾はこくりと首を傾げた。駿の憔悴

した様子を楽しんでいることは間違いない。駿は募るストレスを必死に隠しもう一度、頼む、と告げる。瞬間青年の唇がにやりと弧を描いた。思わず駿の背中に悪寒が走る。

「……じゃあシュン君、俺のこと“イチハラ”じゃなくて、ちゃんと“キョーゴ”って呼ぶぅ？」

「え」

どこまで執念深いやつなんだ、だから嫌いなんだ！

駿は停止しかけた頭を揺さ振ってどうにか思考した。

繰り返すが、駿は恭吾が苦手なのだ。細かな理由が積もり重なり、気が付けばもう彼は近づきたくない存在と化していた。名前で呼び合ってフレンドリーな空気になるのなどごめんだと一度拒否した日から、執拗にそこに拘る恭吾から逃げ回るのは最早駿の意地だったのである。

……こんなことで従うのは己の負けを認めるようなものだ。それは彼のプライドが、少しばかり許さないわけで。

（うわーうわームカつくマジどうしよう、てかくだらねー）

意地とプライドか命か。天秤に掛けるものを間違っている駿はそれを理解しつつも、恭吾の手前あっさり条件を飲むわけにはいかないのだった。絶対俺こいつと前世で何かあったよ、唾み合う運命なんだよ、と少年は頭を掻く。（実のところは駿が一方的に嫌がっているだけなのだが）

唸り声を零しながら葛藤を続ける駿を恭吾は笑顔で眺めていたが、突然『あ』と声を出すと大袈裟にポンと手を打った。

「ごめーん。〈マーダラー〉は手出しするなって、ミクに言われてたんだった。駄目だ俺手伝えないやー」

「ふぅん。……はぁ！？」

だからシュン君頑張ってぇ、と笑顔で止めを刺してくる青年に駿は思わず食って掛かった。彼のなかでは今漸く、ここは一つ自分が折れて協力を得よう、という式が出来かかっていたのである。

「マジ？」
「まじー」
「ここで見捨てるか普通」
「人聞きが悪いねぇ。俺だってミクに怒られたくないし？」
「実はわかってたんだろこの腹黒！」
「そうだって言ったら？」
「悪魔！　鬼畜！」
「誉め言葉だ」
「犯罪者！」
「シュン君もじゃーん」
「……。」

恭吾はそのままそれじゃね、とひらひら手を振った。
おちょくられた。悟った駿は軽い吐き気を催した。爽やかな笑顔を浮かべ立ち去る背中に、地の底から響くような声を吐き付ける。

「しんでくんないかな、ほんとに」

少年は本気だった。

＊

李　春憐は先日ようやく遠征から帰ってきたところで、体を休める間もなく首領直々に入れられた今回の任務には少々不満を抱いていた――しかも、かなりくだらない。

何が楽しくて、本部内で牛と追いかけっこしなければならないのだろう。

もう切り上げて、シャワーを浴びにいこうか。そう思った瞬間、四階の廊下を歩いていた彼女の目の前を巨大な牡牛が全速力で駆け抜けた。

……正確には、牡牛に追い掛けられている駿が、である。

「……シュン？」

放ってはおけないのが、彼女の悲しい性だ。面倒見が良く、ゆえに貧乏くじを引く。溜息をひとつ零した春憐は、逃走すると本日最大の貧乏くじを引いたであろう駿の追跡を開始した。

＊

千瀬とロザリーの目の前に突然〈マーダラー〉の恭吾が現れ、牛は四階だと告げたのは十五分程前のことである。俺は牛を捜す暇があったらルードを捜さなきゃいけないから、と言って消えた彼であったが、そのわりにはしっかり牛の居所を把握していた点に大きな矛盾を感じた。

「またルード、逃げたんだねぇ」

笑ったロザリーに相槌を打つつ、千瀬はたった一度だけであった少年を思い浮べた。

最年少〈マーダラー〉にして最上級の問題児ルード・エンデバーは、本日も行方不明らしい。つまりは逃走中だ。この建物内という限られた範囲のなか、一体どうやって逃げおおせているのだろう？

――ともかく千瀬とロザリーは、恭吾の言った四階の廊下へと向かうことにした。一抹の不安を抱えて。

＊

「……だ、ダメだこれ！　とにかく牛を止めねェと……！」

「参ったわね……」

全力で牛から逃げる駿、彼と合流した春憐の背後から大きな獣の立てる地響きが追い掛ける。牛の勢いは止まらず、いつの間にやら春憐までが全力疾走を強いられていた。闘牛士も真っ青な勢いの中さすがは特戦隊と言うべきか、常人ならとっくに牛の餌食であっただろう。

「何で追いけられているの？」

「知るかぁ！」

駿は牛を追う側だったはずだと思いながら春憐は問うたが、返答は簡潔かつ無意味なものだった。

――このままでは自分達も時間の問題だ。そう判断した春憐は、服の懐を探ってる物を取り出す。

「……これで止まるかしら」

彼女はが取り出したのは投擲用の鈍器だった。重金属製の、中国古来の武器である。円形のそれは本来投げ飛ばして使うものだが、春憐の投擲は極めて殺傷能力の高い型だ。刃物が組み込まれているタイプの。

「いやいやいや！　それは死ぬだろ！　確かに止まるけど！！」

ロヴの命令はあくまでも生け捕りである。命令違反は死罪……だが、こんなアホらしいことで死罪ってどうなんだ。脱力した少年は思わず頭を抱える。ただし器用に走り続けたままだ。

（……殺しちまうか）

駿が本気でそう思いかけたその時、廊下の向こうから人影が現れた。サンドラとレックスだ。それに続き、千瀬とロザリーまでがひょこりと廊下に顔を出す。やばい。タイミングの悪さに駿は顔色を失った。

「わ……」
「わぁー」
「あら」
「げ」

牛に追われる二人を見て一様に声を上げる四人に、駿は大声を浴びせかけた。牛が迫っている、立ち止まることなんて出来ない。

「ちょ、どけ！　お前等ぁぁあぁ！！」

自然、駿と春憐が牛を引きつれたまま全速力で四人のもとに突っ込んでいく形になるのだが、どけ、と言われてもこの廊下に四人全員が牛の巨体を避けられるようなスペースはない。運命は確実に全員巻き添えの方向に動いていた。

「……仕方ないわね」

呟いたサンドラがロザリーの握っていた拳銃を取り、刹那響き渡る轟音。そのまま彼女は牛目がけて発砲したのである。

サンドラが狙ったのは牛の角だった。角を掠めた弾はキィンと音を鳴らし、跳弾したものが壁にめり込む。角から薄く剥がれた破片が地に落ちた。

「やった！」

牛が大きく首を捻り急ブレーキをかける。地響きと床が擦れる音、銃弾の効果は十分に発揮されたらしい。突然の発砲に牡牛は足を止め、結果春憐と駿を救出することに成功したのだから。

――しかし、平和はほんの僅かな間のことでしかなかったらしい。牛は激しく蹄で床を抉り息を鳴らすと、全力でその場をUターンしたのだ。

「やっべ！」

ここで逃げられては話にならない。駿の叫びに反応し咄嗟にレックスが手を伸ばすも、牡牛は既に勢い良くスタートを切ったところだった。逃げられる。誰もがそれを確認した刹那、牛の進行方向に二

つの人影が現れた。長い黒髪と銀髪の二人連れ、この組織では余りにも知られた幹部達である。

「あら、〈ハングマン〉だわ」

「おー、」

場違いなほど呑気に零したサンドラや応えたレックスとは相対して、残りの者は体を強ばらせた。駿は相次ぐタイミングの悪さに、千瀬は止まらぬ獣の猛威に。気の立った牡牛は現れた人間を見た瞬間、標的をそちらに定めたようだった。

危ない。声も出せぬまま千瀬は思わず目を瞑る。あんな勢いで走る牛が止まるわけないのだ。体の細いルカは当然、下手をすればエヴィルだって死んでしまう。

怒りで我を忘れた牡牛は真っすぐに〈ハングマン〉の二人目がけて突進して行き、エヴィルよりも少し前に出ているルカまで残り数メートルを切ろうとしていた。牡牛の角が的確にルカの細い体躯を狙う。

千瀬が悲鳴を上げそうになったその瞬間、轟音と共に何かが頭上を吹っ飛んでいった。

「え……？」

振り返った千瀬は我が目を疑った。吹き飛んだ物体の正体は、今まさに少女の前方にいたはずの牡牛だったのである。その巨体は廊下の逆端まで移動し、いつの間にそちらに現れたのかわからないエヴィルに易々と受けとめられ床に降ろされる。牡牛は一声悲しげに泣いてからその巨体を地に沈めた。

……何が起こった？

目を白黒させて千瀬が辺りを見回すと、目の合ったレックスがけらけら笑いながら『ルカが蹴った』と呟いた。

（蹴った!?）

「し、死んだか……？」

言われたことを理解できない千瀬をよそに、恐る恐る駿が尋ねる。今の一撃を見れば、誰もがそう思うだろう。

牛の体に隠されて背の小さな千瀬には見えていなかった、コンマ数秒の全貌。ルカの左足が牡牛の前脚を払った後、その巨体に第二撃を打ち込むまで。

駿の言葉にエヴィルが眉根を寄せ、僅かに首を傾げた。千瀬からすれば、この男の移動スピードも説明してほしいほどである。

「殺すわけないじゃないか。ロヴがそう命令したんだろう……？」

なぜそんなことを聞くのだと言わんばかりの表情のエヴィルの、その言葉を聞いたロザリーが牛の安否を確認し一際大きな声を上げた。

「うわぁ、ねぇ生きてるよ！」

「うえぇ、マジかよ!?」

「凄いわね……」

「全くだ」

「さすがだわ」

口々に感想を洩らしながら牡牛を覗き込む駿、春憐、レックス、サンドラ。それに笑顔で答えながら、骨の丈夫なところを狙ってやったから大丈夫でしょ？　とルカが問う。汗一つかいていない少女の髪が、さらりと音を立てて肩から滑り落ちた。

この面倒な一日から漸く脱出できることを皆が口々に喜ぶ中で、未だ千瀬は目の前で起こった事が未だに信じられずぼうっとそれを眺めていた。
牛が生きていたのも信じられない。廊下の向こう端にいたエヴィルが、一瞬で背後に現れたのも信じられない。そしてどうして、誰もルカの超人的な動きには一言も触れないのだろう？

「――あ。ロヴ」

ふいにルカが顔を上げた。
程なくして、廊下の角からロヴ・ハーキンズが現れる。その涼しい笑顔に駿の顔が引きつったが、背後からがっしりとレックスの腕に掴まれていたため殴りかかることは叶わなかった。

「やぁ諸君。牛捕獲、ご苦労だったね」

ロヴは満面の笑みを浮かべる。脳震盪を起こしたのかぐったりとしている牛に目を止めて、随分暴れてくれたと楽しげに呟いた。

「ところで、だ。さっき厨房に聞いてきたんだが、生きた牛をその場で調理するのは無理だと言われてしまった」
「――はぁァ！？」

あたりまえだろう、と呟くエヴィルの横で激昂する駿を止めるものは誰一人としていなかった。彼の苦労を思えば無理もない。そんな中でただ一人この一日を楽しんだロヴは、この上ない笑みを浮かべて悪怯れずに言い放った。

「仕方ない。皆で外に食いに行くか、焼肉」

――最初からからそうしろよ！
誰もが心の中でそう叫んでいたことは、言うまでもない。

この後。九死に一生を得た件の牡牛が秘密裏に組織内で飼育されることになるのだが、それはまた別の話。

第三章《はじまり》：間話

ざり、ざり。その空間の中にただ響くのは、人間の足が細かい砂利を踏みしめる音のみだった。それは一定の歩調ではなく、かといってリズムを刻んでいるわけでもなく。酷く静かで緩慢で、億劫な響きだ。

足音は僅かに入り乱れながら二人分。彼らはこの道上を、先刻からただひたすら歩んでいる。

「ねぇ、サブー。サブってば。ちょっと聞いてんの？　サブナック」

退屈に負けたのだろう、ついに口を開いた少年に、隣を歩んでいた青年は思わず眉を寄せた。珍しくおとなしくしていたかと思えばすぐこれだ。

「……名前を省略するな」

「なんでさ。ジャパニーズ・サムライみたいでちょっと格好良いじゃないか」

青年――名はサブナック、といった――がそれに無言で応えると、少年は不満だったのか不貞腐れたようにぷいと横を向いた。

少年は一見してかなり高貴な出で立ちをしている。胸元のスカーフや羽織った分厚い外套はまるで一昔前の貴族達のそれであった。

対する青年は黒のスーツと薄い藍色レンズのサングラス、耳元には銀のピアスが輝いていた。どう見てもつり合った二人連れだとは言い難い。こんな薄暗い、舗装もされていない路地裏を歩いているのだから尚更だ。

「……俺に何か用が有ったんじゃないのか」

「別にぃ。呼んでみただけ」

少年の返答に思わずサブナックは溜め息を吐いた。その際に横目でちらりと少年を盗み見れば、こちらに気付いて笑みを浮かべている。はぁ、ともう一度だけ溜め息。こんな少年が自分の上司にあたるのだから世も末だ、とサブナックは思う。

「……お前、そんなことで大丈夫なのか」

「何が？」

「冷静に仕事をこなせるのか、ってことだ。良いか、如何なる時も貫くは己が信念――」

「信ずるは己が正義、でしょ。馬鹿にしてんの、サブナック」

「……いや」

一瞬浮かんだ少年の目の色に僅かに青年はたじろいだ。そんな彼の様子を知ってか知らずか、次の瞬間『わかってるよ』と笑ってみせる少年は年令相応の無邪気さを見せる。

サブナックはこの幼く気難しい上司と対等の立場で仕事することを許された、希有な立場の人間だった。少年は一見サブナックに懐いているようだが、サブナック自身は常に彼に試されているような気分である。これはそういう少年だった。何を考えているのやら、全くその腹の中を見せようとしないのだ。

「心配しなくても、僕はやる気満々さ――正義は悪を倒すのがお仕事だろ。そして、正義は悪に勝つもんだよ」

楽しみ。そう呟いた少年に、サブナックは僅かに眉をひそめる。この少年が仕事熱心になる時ほどろくな事がないと、経験上わかっているからだ。

「……変なことはするなよ、ユリシーズ」

何のことかな？

そう言って破顔する少年の、その笑みの裏を知ることなど、青年には終ぞ叶わなかった。

第三章《はじまり》：彼らの日常Ａ

特別戦闘能力保持部隊、というものはそのお堅い名前に似合わず、酷く平和な職業だった（職業、と言い切るには些か疑問が生じるが。）無論それは出動命令がないときの話であるが、武力を用いた大きな争いを必要とする仕事は今日び少なくなってきているし、何よりルシファーという組織には、敵と呼べる敵が存在していなかったのだ。それは首領である青年が組織設立と同時に（その頃彼はまだ少年だった）同業者を尽く吸収し、掌握し、叩き潰してしまったからである。

「最終的に」

この組織はどこに向かおうとしているのか？

独り言のような千瀬の疑問に答える者はいなかった。少女は手持ち無沙汰で辺りを見回し、この微妙な面子はどうしたものかと思う。暇が暇を呼んだ結果だ。

千瀬を中心にべったりと廊下に座り込んでいるのは椿とオミ、菫である。何をどう間違ってこうなったのか、気が付いたときには四人の少女はまるで何かに取り残されたように廊下にぽつんと立っていた。こうも巧いこと年の近い娘たちが揃うのも珍しいので（そして何よりも暇だったので）誰からともなく腰を下ろし、さぁ何か語ってみようと思っても話すことがない。

（……気まずい）

千瀬はそっと溜め息を吐いた。勿論周りにはばれない程度に、だ。千瀬にはこれまで同年代の友達がいた例しがなかったので（悲しい

ことに）親しくなりたい気持ちは山々でも、話の切り出し方など皆目検討もつかないのだった。お喋り好きのロザリーはこういう時に限って現れない。彼女がいれば、この空気はもう少し穏やかなものだったかもしれないのに。

「……おまえ」

「はいっ」

おもむろに口を開いた椿の声に過剰反応。千瀬は思わず流れた冷や汗を押し込めながら、無理矢理笑顔を作ってそちらを向いた。華京院　椿と言うらしいこの少女は先日長い遠征から帰還したばかりで、どうも話し掛けるタイミングを見失いがちであった相手である。丈の短い奇妙な着物を好んで身に付けているし、全くの無表情であるせいか近寄りがたかった。その彼女に話し掛けられているのだと思うと、些か緊張する千瀬である。

「おまえ、七見女史の知り合いなんだってな」

「ななみ？　ああ、うん」

月葉の話だと悟った千瀬はこくりと頷いた。よく知ってるね、そう言ってみれば椿は淡々と、組織内ではもう有名な話になっているのだと告げる。

（そうなんだ……何時の間に？）

続いてさらりと紡がれた椿の言葉に、思わず千瀬はがっくりと首を垂れた。

「あの人とのコネクションは大切にしたほうがいい。仕事が楽になる」

「はぁ……」

そっちに来るとは思っても見なかった。確かにこの組織、大きな仕事を入れるのは勿論ロヴであるが、細かなものや仕事の分担を提示するのは《テトラコマンダー》、すなわち月葉の仕事であった。コマンダーは後三人いるはずで千瀬は会ったことはないが、それでも代表者は七見月葉なのである。

「おまえ、七見女史の紹介で入隊したのか？」

「えーと、どうなんだろ。スカウトってやつでルカが迎えに来たんだけど」

「ふぅん」

千瀬が月葉に再会したのはつい先日のことだ。彼女は仕事の一貫で日本の様子を見ていて、結果その網に千瀬がかかっただけの話である。迎えを出すよう手配したのは月葉だろうが、紹介というわけではないのだろうと千瀬は思った。

ここで、どうやら椿は無口ではないのだと気付く。必要最低限しか話さないし淡々とであるが、これなら話せないことはないと思えた。よって、今度は千瀬から口を開いてみることにする。

「椿……ちゃんは」

「椿でいい」

ばっさりと斬られて僅かにたじろぐ。が、千瀬はここにやってきてから諦めの悪さというものを学んでいた。受動ばかりで生きてきた幼少時代に比べれば大した進歩である。

「椿は、やっぱりスカウトでここに？」

「そう」

答えを貰えたことに安堵した。他人のプライベートを尋ねるのは憚られたが、いかんせん話題がないので仕方ない。このくらいならまぁ良いだろう、千瀬はそう思い込むことにした。

「実家で暗殺の仕事を請け負ってた。両親に毒を盛って家を出たのが二年前」

「毒って」

「家業用の」

何と答えれば良いのやら息詰まってしまった千瀬を気にもかけず、椿はつらつらとその時の様子を語ってきかせる。犯行は計画的で、ずっとこの家業を絶やしてやろうと思っていたのだとか。

それにしても二年前とは、また随分な話である。どう見ても椿は千瀬と同じ十四、五歳程で、この年代の二年間は心身ともに大きな差を作る。椿はそうとう幼い頃から“そういうこと”に慣れていたのだろうか。

考える千瀬を見透かしたように椿は言う。

「忍の仕事は九つから始まる」

「……しのび？」

しのび、しのびってなんだっけ。千瀬はうまく稼働しない頭に鞭打って知識をあさる。忍び、忍か。あれ、それって。

「それはつまり、椿は忍者なんですか」

思わず敬語になった。こっくりと頷いた少女を見て、千瀬はうわぁぁと叫びたいような気持ちになる。

確かに言われてみれば彼女はそれらしい。ものすごくらしい。尋ね

てみれば、着物を着るのは家業の名残で洋装に慣れていないからだと言う。

（本物はじめて見た！）

興奮冷めやらぬ千瀬は、見たことないのが普通だとは気が付かないのだった。

と、ここにきて初めてオミが口を開く。普段はひどく口数の少ない彼女も、椿の言う忍とやらに興味を持ったらしい。

「シノビ、とは日本の生き物ですか」

質問が少々ズレているような気がするが、あまり気に掛けないことにする。椿は首を傾げるオミに対して、もう廃れた、と簡潔な答えを述べた。

オミは不思議な女の子だと千瀬は思う。何を考えているのかいまいち良くわからないし（自分のことは棚に上げて）見た目は一番幼いのだが、誰よりもルシファーの構造に詳しかった。迷子になりかけた千瀬が二回ほど彼女に助けられていることは駿とロザリーには内緒である。

口数が少ないせいで話すこともあまりなく、彼女が敬語で喋るのだと千瀬が気付いたのは最近のこと。

「そういえば、オミって何歳？」

「オミは十三になります。こちらでは」

「ふーん……んん？」

何気なく尋ねてみたことにきわどい返答。千瀬はそれ以上の追求を諦めた。聞かないほうが平和な気がするのである。

「……そっちのおまえは？　いくつ」
「……あ、え、私？」
椿の見やった方向からか細い声が上がった。今まで無言を貫いていた菫である。姓は栗原だっただろうか、とぼんやり千瀬は考えた。どうやら菫は緊張していたらしい。身体が不自然に硬直している。本部にやってきたのは千瀬よりも後のことらしいので、無理もないのかもしれないが。
「私、は、十五歳。今年で」
「皆近いんだね、年」
オミはやや下であったが。
千瀬の言葉に安堵したように菫は小さく笑んだ。はて、と千瀬は違和感を感じる。前にも思ったことだが、面と向かってみるとなおさらだ。菫はあまりにも気弱そうで、とてもじゃないがここにいるような――人を殺すことを仕事とするような――人物には見えなかった。そしてその千瀬の勘は、数分後明確に示されることとなる。
「ちとせ、ちゃんだっけ」
「うん」
勇気を振り絞って口を開いたのは菫本人であった。どこかおどおどとしながら、それでも懸命にこちらを向こうとする彼女を千瀬はゆっくり待ってみる。
「チトセちゃんは、こっちでもうお仕事したの？」
千瀬は黙って頷いた。
千瀬が仕事らしい仕事に付いたのは（牛の捕獲騒動を除けば）あの

初陣と、視察とは名ばかりの巡回もどきに二、三度外へ連れ出されただけであったが、おそらく前者で良いのだろう。（後者はルシファーの外に出て建物周辺を駿やロザリーとぶらぶら回っただけである。遠くに見えた町並みに、ここは日本でないことだけを実感して終わった。）

「じゃあ、その、戦えるんだ」

「……一応は」

あれを戦いと呼ぶのならば。一方的な殺戮であったことは否めないが、千瀬は確かにあの日任務を全うしていた。

なぜそんなことを聞くのかと首を傾げると、菫は困ったように笑う。

「私ね、戦闘要員じゃないの」

「……？　どういう、」

「一応はＥＰＰＣのメンバーとして登録されてるけど、情報収集とか、そっちが専門職で」

「へぇ……」

そういうこともあるのか、と千瀬は目を見開いた。椿も初耳だったらしく、興味深げにこちらを見つめている。オミは無感動に、しかし話には耳を傾けているようだった。

「だから、殺したことないの、人」

そう申し訳なさそうに呟く少女は、確かにこの集団のなかでは異質なのかもしれなかった。軽蔑するか。そう問われている気がして、千瀬はそんなことはないと思う。菫が引け目を感じる理由はどこにもないのだと思ったとおりを口に出せば、そこで初めて菫が笑った。それまでの切なそうな笑みではなかったので、やはり彼女は気にし

ていたのだろう。

「頭使いそうだね、情報収集って」

「得意なの、コンピューターとか」

殺したことがない董を、羨ましいとは思わなかった。随分自分もこの空気に馴染んでいるなと千瀬は思う。董がデスクワークを得意とするように、自分からこれを取ってしまったら何も残らないからだ。

「私、本部にいるのは短いと思う。きっとすぐ別の仕事が入って、外からサポートする形になるんだ。ここにいても戦えないから」

せっかく出会えたのに。

千瀬はそれを、素直に淋しいと思った。

第三章《はじまり》：彼らの日常B

駿とハルは仲が良い。――と周囲からは思われているが、それは違うと本人達（主に駿）は思っている。
たまたま年令が近くて、性別と出身国が同じだっただけのことだ。
それならば朝深やツヅリもそうである。しかしここに入隊するまでは真面目に生きてきたつもりの駿とは違って、ハルは根っからの不良属性で、やたらと駿に絡みたがるのだった。今のように。

「で、どうなのよ」
「ンだよ」
「さっきから言ってんだろー、好みのタイプだよ、タ・イ・プ！」
「……ちょ、ハルお前マジ黙っててくんない」

わざわざ一言ずつ区切って発音する彼に、駿はげんなりとして溜め息を吐いた。
青少年なら誰しもが一度は語らう話題であったが、彼らの生活する環境には酷く不釣り合いだ。
この不良少年、どうやら真っ昼間から酔っているらしい。
顔色は普段と何ら変わらないが、ハルからはぷんぷんと酒の良い香が立ち上っていた。
長い遠征から解放されて一息つきたい気持ちはわからなくもなかったが、これでは行き過ぎだ（ハルの後方には遠征時に日本で買ってきたのだろう、某有名社のチューハイやらビールの空き缶、それからウイスキーの瓶が転がっていた。）日本では十九歳以下の男を“少年”と表すらしいのだが、これではまるで悪酔いしたオヤジのようだと駿は思う。未成年の飲酒については言及しなかった。何を隠そう、駿自身もわりと飲むので。

「つれねェなぁ、おい、しゅーん」
「あーあーもーお前、酒より煙草臭い。あっちいけ」

この酔っ払いをどうにかしようと視線を彷徨わせれば、部屋の端に人影を捉えることができた。それはツヅリと朝深であったのだが、二人とも我関せずといった様子でこちらを見もしない。朝深にいたっては何やら熱心に手持ちの刃物を研いでいて、下手に声をかけるとそれが飛んできそうな空気を発していた。
くそ、と駿が悪態を吐くと同時に酔っ払いが爆弾投下。

「あぁー、わかった。シュンは妹がタイプね、シスコンだもんな！」
「死ねェェェェ！」

この組織においての死刑宣告は冗談では済まされない。駿は半ば本気だったのだが、それはあるものに気を取られて未遂に終わる。彼が懐からナイフを取り出したのと、どこかで何かが破裂したような大きな音が聞こえたのは同時だった。

＊

――がしゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんん。

いっそ清々しいまでのドップラー効果を伴って、ルード・エンデバーの背後の窓が砕け散った。どちらかといえば破裂に近い。細かく割れた鋭利な硝子片が頬を掠めていったのにそれを気にする余裕もない。少年には今まさに命の危険が訪れていたのである。

窓硝子を砕いたのは、ルードの上司にあたる青年の足だった。青年は彼を見つけるやいなや小蝿を潰すがごとくその音速の足技を繰り出し、ルードが上体を反らすのが一瞬でも遅ければ、彼の顔には今頃巨大な風穴が穿たれていたに違いない。

ルードは硝子を蹴破った（正しくはルードを蹴破ろうとした）張本人、エヴィルを恐々と見上げる。銀髪の隙間から猛禽のような金の瞳が覗いていた。組織の幹部である彼が、なぜこんなところにいるのだろうか？　こんな――組織の建物に内蔵されたディレクターズキッチンの、小さなカフェテリアに。

「……ひっ」

ルードの背に戦慄が走った。咄嗟に逸らした頭のすぐ傍を青年の第二撃が突き抜ける。がしゃあぁあぁぁあぁん、二枚目の硝子が餌食になった。それと同時に、どこからか酷く冷めた声が聞こえる。

「エヴィー、そんなにほいほい硝子割らないでよ」

今月何枚目かわかってる？　淡々とそう告げたのはルードの天敵、（と彼が一方的に思っている）ミクであった。その姿を目にした瞬間、ルードはここ数週間の逃亡劇に強制的な幕引きがなされたことを悟る。

（ツイてない、）

少年がこの組織内で行方を眩ませ仕事から逃げているのは、もうルシファーでは有名な話である。こんなところで見つかってしまうとは思ってもみなかったと舌打ちをしたい気分に駆られたが、なんとか理性がそれを止めた。エヴィルがいたのでは、あまりにも分が悪

い。

「あんまり割るとグレッタが可哀相だわ」

そう言って近づいてくるミクの唇が不敵に吊り上がった。つかまえた。その唇の動きを読みとってから、ルードは渋々両手を上に挙げる。ホールドアップ、参りましたのポーズだ。（ちなみにグレッタとはルシファーの掃除婦長を務める老婆のことである。）

「あら、ミクも先週割ってたじゃない。ロヴが牛を連れ込んだ腹いせに」

「……。」

突如聞こえた別の声にルードは瞠目する。ミクを絶句させた軽やかなソプラノは少年のよく知る少女のものだったが、彼女もエヴィル同様、こんなところにいるはずのない人間だ。なんで、どうして。

「どうしたの、ルカ姉ェ……」

「うん？　今日はねー」

「俺もいるよー」

脱力しきった少年に答えた男の存在に、とうとうルードはがっくりと項垂れた。今日は運が無かったとしか言いようが無い。詰めが甘かった自分を恨むべきか。よりによってこんな、ロヴ・ハーキンズ率いる幹部集団の集いの最中に現れてしまうとは！

すっかり観念した様子のルードをひょいと小脇に抱え、エヴィルが残るメンバーの元へと歩いてゆく。ちらりとルードが首を上げた先で、ルカとロヴが優雅にお茶を嗜んでいた。再び脱力。何してんのこの人たち。

「やぁルード、久しぶりだ」

ロヴは子猫のように宙ぶらりんになった少年をみてからからと笑った。この男が、脱走したルードに対して弁明を求めたことは一度もない。代わりにミクにこってりと絞られるのはもうお馴染みのことだった。

どさりと乱暴に椅子の上に放り出されて少年は小さく呻く。が、これ以上は無駄な足掻きなのでおとなしくそのまま席に着いた。

それを見たミクとエヴィルも着席し、カフェテリアは束の間の平穏を取り戻したように見える。

（うわーめっちゃ見られてる……）

ルードは周囲に目をやって小さく溜め息を吐いた。

先刻まで繰り広げられていた暴動を目の当たりにした従業員（組織の末端から数人ずつ引き抜かれて当番制らしい）がこそこそとこちらの様子を伺っている。撒き散らかされた硝子は床に落ちたまま、どうやら片付けるタイミングに困っているようだった。本来いるはずのない幹部達を（しかもたった今まで少年が殺されかかっていた）目撃してしまったのだから、従業員達の困惑も無理はないのだが。

「やけに静かじゃない、ルード」

「いや、はい……すみませんでした」

ミクが首を傾げるが、ルートは本日はひたすら下手に出ることにした。何よりエヴィルが恐い。ボスよりも怖い。今日彼がルード捕獲に協力したのは気紛れにすぎなかったのだが、その殺人ギリギリの方法は少年に対して至極効果的であった。

「つーか、何で今日はこんなところに？」

揃いも揃って。威圧感抜群の面子を見回してルードが口にすると、当たり前だといわんばかりにロヴが答える。

「見てわからないかい、お茶さ」

「違うに決まってんでしょ」

首領のふざけた返答を一刀両断したミクは、その勢いに任せて紅茶に口をつけた。確かにティータイムを過ごしてはいるが、勿論本来は別の目的である。傘下の組織への視察割り当てのシフトと予算のプランを組むのに、ロヴが会議室に行くのを渋った結果がこれだった。

「まぁ結果オーライじゃないか。最終的に、迷子の保護に成功したわけだし」

「……捕獲、の間違いだろ」

ぼそりと零されたエヴィルの一言はあまりにも的確だったため、ルードはひたすら俯いてこの場をやり過ごすことにする。居心地が悪い、悪すぎるのだ。ルード自身が幹部といえばそうなのだが、このメンバーの中で少年は浮きすぎていた。

「それにしても派手に割ったわね」

未だ片付けのされない硝子片を眺めつつ、ミクがエヴィルをちらりと見やる。早く掃除しないと怪我人が出るかもしれない。視線を浴びた青年はそ知らぬ振りで、不可抗力だと呟いた。

「……とても意図的な不可抗力だこと」

「まぁまぁ、そう言うなよミク。グレッタの活躍の場が増えて良いじゃないか」
「ロヴー？　あんた掃除婦を何だと思ってるわけ」
妙な方向にマイペースを貫く我らがボスにミクは頭を抱えたくなる。が、抱えたところで無意味なのは彼女が一番良くわかっていた（長年の経験の賜物である。）
思考の方向を変えようと、彼女はルードに課す罰の内容を考えることにした。二度と逃げ出す気が起きないぐらい面倒な罰則を与えてやりたい、がなかなか上手く思いつかないものである（今までどんな罰を与えようとも、この子供は性懲りもなく脱走を繰り返しているからだ。）
さてどうするか。ミクがしきりに頭を捻っていたところで、ルカが彼女に話し掛けた。
「ねぇミク。ルードの罰則、私にやらせてくれない？」
えぇえぇ！？　少年から悲鳴じみた声が漏れる。が、ルカは楽しそうに笑って首を傾げた。
「いいけど」
ミクはあっさりと承諾する。どっちにせよ、自分で考える案はそろそろ限界だったのだし。
ミクの返答を聞いたルードは再び悲鳴を上げた。ルカの考えることは分からない。なまじ当人が（良い意味でも悪い意味でも）純粋な為に、裏も嫌味もなしでストレートに無理難題を吹っかけかねなかった。
少年の背を冷や汗が伝う。うわーやばいってこれどうしよう。

「いや、ルカ姉、マジ勘弁して……」

必死の形相のルードに、黒髪の少女は軽やかな笑みを浮かべてみせたのだった。

「――付き合ってもらうよ、ルード」

第三章《はじまり》：狂う歯車（1）

（今でもあたしはこの日のことを）
（繰り返し、繰り返し思い出す）
（未練がましく願うんだ。）
（――『あの日さえ無かったなら、今もきっと』）

＊

少女は薄らと目を開けた。いつも通りの起床、爽やかな朝。寝慣れたソファーから降りて、駿とロザリーと共に朝食をとる。
日本人が多かったせいか、遠征から帰ってきたメンバーとはだいぶ打ち解けた気がする。すれ違いざまに数人と挨拶を交わして、千瀬はそんなことを考えた。

少女がこの組織にやってきてからどれだけの日数が経過したのか、

正確には分からない。それでも千瀬が道に迷う回数は格段に減っていたし（減っただけで実はまだあるのだが）殺伐としている癖にアットホーム、という矛盾満載なここの空気や、奔放すぎる首領にも慣れた。細かい仕事にも順応できるようになったと思う。その仕事の一貫として本日千瀬は廃棄場の掃除当番にあたっていたので、同じく当番になったツヅリと廃棄場に向かった。

「慣れてきた？」

「はい」

「そ、良かった。……いつ来ても臭いなぁここ」

最初は未知の相手というカテゴリーに分類されていたツヅリも、ここ最近のやり取りで意外と気さくな人物であることが判明している。その青年と他愛のない話をし、手早く掃除をすませて（確かに彼の言うとおり異臭がするものだから）極力急いで元の道を帰った。通常どおり。犯罪組織にしては実に平和な一日の一コマである。しかし、少女の通常はここまでであった。“監獄”に帰った彼女を出迎えた者がいたからだ。それは千瀬の上司にあたる少女で、言うなればこの組織の幹部である。なんでこんなところに、そう尋ねるつもりで動かした口は半開きの状態で固定された。目の前の人物――ルカが、突拍子もないことを口にしたからだ。

「……え？　今なんて、」

思わず千瀬は瞠目した。千瀬のものよりもずっと深い黒色の長髪を揺らし、目の前の少女はコロコロと笑う。ルカは至極機嫌が良さそうで、普段よく目にするスーツ――幹部陣は礼装であることが多い――ではなく、ふわふわした軽い布地のスカートを履いていた。何だか普通の女の子に見えるな、と千瀬は不謹慎なことを考える。

「あは、そんなに驚かないで」

私とお買い物に行きましょう？

ルカは先刻発したのと同じ台詞を口にする。その意味を頭で咀嚼して、ますます千瀬は混乱した。

「買い物、って……」

なにをどうすると買い物になるんだ。困惑を色濃く浮かべる千瀬にの手のひらに、ルカ小さなメモを握らせる。わかりきっていたことだが、千瀬に拒否権はないらしい。

「それに書いてある時間になったら門に集合だよ。お昼ご飯は食べといてね」

「……はぁ」

そのままひらひらと手を振って、ルカは部屋から出ていった。千瀬は茫然とその後ろ姿を見送る。ルカ・ハーベントが組織内でロヴに次ぐマイペースであることを千瀬が悟るのはもう少しあとの話であるが、この時確かに少女はその片鱗を見せ付けられたのだった。

（買い物って。犯罪組織なのに？）

＊

「――うおぉ！　チトセちゃんじゃんっ、ラッキィ！！」

響き渡った声に千瀬は首を傾げた。時計の針は午後二時三十分を示している。
黒い門へと向かった少女の目に映ったのはルカではなく、癖の強い赤毛だったのだ。

「あなた……」

千瀬の姿を見るなり叫び声を上げた赤毛の少年は、猫のような目を細めてにかっと笑う。唇の隙間から白い歯が見えた。

「オレのこと、覚えてる？」
「……ルード」

小さく、けれど確信を持って千瀬はその名を呟いた。それを聞くやいなや少年――ルード・エンデバーは親指をぐっと力強く立てて笑みを浮かべる。

「イエス！」

千瀬が以前一度だけ会ったことのあるルード。彼はつい先日まで行方不明になっており、〈マーダラー〉が必死の捜索を続けていたはずである。そんな情報を頭から引き出して、千瀬はそっと呟いた。

「発見されたんだ……」

ぽつりと零された言葉を耳聡く拾ったルードはぎゅっと眉を寄せる。思い切りしかめっ面を作ったあと、鬱憤を吐き出すように低く唸った。

「一昨日ね……っとに、不覚だよ。ちょっと小腹が空いて厨房に忍び込もうとしたらさ、幹部の奴らがテーブル囲って茶ァしてやんの！」

信じらんねぇよ、ロヴまでいたんだぜ！　と苦々しげに訴える少年から千瀬は思わず顔を逸らした。千瀬自身、以前あの男とうっかりお茶を楽しんでしまった経験があるだけに何も言えない。

「オレを見つけた瞬間ミクの奴が血相変えてさ、そしたら隣に座ってたエヴィルが……うっ」

そこまで勢い良く語っていたルードが突然片手で顔を覆った。吐き気を堪えているのか真っ青である。少年に怪訝に思った千瀬がその顔色に驚愕し、思わず彼の背をさすってやろうと手を伸ばしている間、ルードはトラウマになりかけた思い出と戦っていたのだった。

「……と、とにかくそういうわけで捕獲されたわけデスヨ」

「……」

何があったのかは聞くまい。千瀬は固く心に誓った。

その捕獲されたルードがどうしてここにいるのかは分からないが、大方何か罰でも言い付けられたのだろう。しかしその罰と自分が買い物に付き合う理由が結び付かなくて、千瀬はしきりに首を傾げた。

「――あ、ちゃんと来てるね」

その時、どこからともなく二人を呼び出した張本人が現れる。全く気配を感じ取れていなかった千瀬はその声に身体を強ばらせた。ルカはそんな少女の様子を知ってか知らずか、一人楽しそうに笑みを浮かべる。

「あれ乗って」

ルカの指差した先には黒光りする胴長の車が待っていた。その名をリムジンと言うのだが千瀬は知らない。ただ、高級そうな雰囲気は嫌でも感じ取ることができた。

恐る恐る乗り込むと同時に扉が閉められ、一気に視界が暗転する。窓硝子に貼られた遮光シートとカーテンのせいで外は全く見えなくなった。

（……暗ッ！）

二人の子供は心の中で同時に叫ぶ。誘拐される人間って、きっとこんな感じだ。

＊

外の様子が全くわからぬまま車に三十分以上乗り続け、漸く空を拝めた時には見知らぬ町に着いていた。そこから更にレトロな列車に乗り込み二駅。

（うわぁ、ヨーロッパって感じ）

千瀬は立ち並ぶ町並みに目を細めた。少女の中でヨーロッパはこんなイメージである。見たことはないのであくまでも想像だが。

ルカの導くままにやって来たここ――“カルバラ”という――は、様々な種類の店が立ち並ぶ大きな街である。賑やかな商店はまさに

買い物にはうってつけだろう。

「何を買うの？」

「とりあえず、ロヴご贔屓の菓子工房に寄らなくちゃ」

買わずに帰ったら不機嫌になるんだよね、そう言ってルカは笑う。千瀬はますますわけがわからなくなって、考えるのを放棄した。何か仕事関連の買い物をするのかと思いきや、本当に私用で来たのかもしれない。そういうこともあるのだろう――たぶん。

ルカが向かったのは“ラ・パルタ”という名の菓子屋だった。数多の菓子や手作りのパンが並んでいて、中には以前千瀬がロヴに貰った茶菓子も売っている。

店から出た時にはルカと千瀬は手ぶらで、ルードだけが大振りの紙袋を提げて歩いていた。この段階で、本日のルードの役割が判明する。要は荷物持ちなのだ。

軽いけど嵩張るんだと、少年は何度も愚痴を零した。

続いてはどこに向かうのだろうと千瀬が想像を巡らせているうちに、ルカは真直ぐ何処かへと歩みだす。迷いのない足取りを見て行き先は決まっているのだろうと悟ったが、その背中が大通りから薄暗い路地に入っていったのを見て千瀬はぎょっとした。

「こっちよ、はぐれないでね」

長い黒髪を軽快に揺らしながら少女が進んでいくのを、千瀬とルードは急いで追い掛けた。置いていかれるなど冗談じゃない。

そうやって数分歩いたのち、最終的にルカが示したのはどっしりとした構えの年期の入った店であった。

「怪しい店」

小さく呟かれたルードの言葉を千瀬の耳が拾ったが、まさにその通りだ。こんな薄暗い辺鄙な場所に、ぽつりと一店だけ。古ぼけた看板は墨で書かれていたのか、擦れてしまってほとんど見えない。それでもなんとか千瀬が目を凝らすと、書かれていたらしき文字の形が読み取れた――否、なんと書いてあるかまでわかる。

「……刀鍛冶？」

「何、カタナカジ？」

ルードが突然奇妙な呪文を唱えた千瀬を訝しんで見つめる。もちろんそれは呪文などではなく、立派な日本語だったのだが。日本語が書いてある。それに酷く驚愕した千瀬がルカを見つめると、彼女はにこりと笑ってみせた。

「――ミスター・タカムラ、いますか？」

ルカは迷う事無く薄暗い店内へと入っていく。程なくして奥から出てきた不精髭の男は千瀬と目が合うと、すんと小さく鼻を鳴らした。日本人だ、と直感で千瀬は悟る。

「ハーキンズの名義で注文がいっているはずなのだけど」

ルカが一言そう言うと、その男――高村は奥から漆黒の刀を取り出した。重たいのだろうか、酷くゆっくりした動作で差し出された刀をルカが受け取ると、彼女はそのままそれを千瀬に手渡す。

（刀、だ）

実物に触るのは久しぶりだった。

鯉口を切れば、現れるのは白銀に輝くすらりとした刀身。漆黒の鞘と柄、艶やかな装飾の鍔も黒銀色の日本刀。ずっしりとしているはずのその重みは、不思議な程よく千瀬の手に馴染んだ。それを見てルカが淡く笑みを浮かべる。

「――ロヴからチトセ、あなたに」

千瀬は刀を握り締めた。強く、強く。

第三章《はじまり》：狂う歯車（2）

話によれば、高村という男はある理由あってロヴの古馴染みらしい。鍛冶の腕はすこぶる良いのだが、やはり犯罪シンジケートと関わりのある者などまっとうに生きているはずもないのか、高村の店をよくよく観察すれば随分と物騒な雰囲気を持っているのだった。

代金を払うついでに彼と話し込んでしまったルカを待つ間、子供二人はぶらぶらと他の店を見て回ることにする。千瀬は腕に抱いた刀の重みを感じながら、なるべくそれが目立たないようしっかりと抱え直した。こんな物を持ち歩いているのが見つかれば、銃刀法の施行されていた少女の祖国ならば現行犯逮捕は免れないだろう。この国はどうだか分からないが、目立たないに越したことはない。

高村の店があった路地よりも若干広い道に出れば人通りも賑やかさも戻ってきた。果物の屋台や地面にシートを広げる異国の商売方法が物珍しい。

少女がそれらに気を取られていると、突然ルードが山積みになっていた商品の果物から林檎を一つくすねて笑顔で千瀬にそれを渡した。うっかりそれを受け取ってしまってから、次の瞬間千瀬の頭がフリーズする。

「……な、何してるの！？」

「え、俺なんかした？」

少年はきょとんと首を傾げた。彼のしたことは立派な窃盗なのだが、ルードはそれを全く気に掛けていないようである。それどころか、次の瞬間には別の店からプラムを盗って口に放り込んだ。そのなんとも鮮やかな手際に、驚きと呆れが半々に押し寄せる。

「俺たちは一応犯罪シンジケート所属だぜ？　盗む奪うは常識でしょー。まともに買うほうが珍しいよ」
「……そういうもんかなぁ」

千瀬がルードの言い分を真面目に考えていると、突然ドンと肩に衝撃を感じた。驚いた拍子に日本刀を取り落とし、がちゃんと派手な音がする。
嗚呼、刀はデリケートなのに。千瀬が生家で教え込まれたことを思い出しながら慌ててそれを拾おうと手を伸ばすと、同時に頭上から何か早口でまくしたてる声がした。

「……あ、すみません」

見上げればそれは恰幅の良い男で、どうやら彼が千瀬と接触した相手らしい。いかにも人相の悪いその男は『この糞ガキ何処に目ェつけて歩いてやがる』とお決まりの捻りない文句を吐いたのだが、

（あー、言葉わかんないや）

千瀬はのんびりと、少し困ったように首を傾げてみせた。こういう事態にはいい加減慣れてきたので絶望は感じないが、面倒なことになったな、と他人事のように考える。
その、そらとぼけたような少女の様子は困ったことに男のお気に召さなかったらしい。

「え」

千瀬は自らの置かれた状況が飲み込めずにぽかんと口を開けた。何故見知らぬ男に首根っこを捕まれて、宙に浮かんでいなければなら

ないのか？

『嬢ちゃんどこから来た？』、そう問われても首を傾げることしかできない。何を言ってるのかさっぱりなのだから。せめて一番はじめに、アイムソーリーとでも言っておけば何かが変わっていたのかもしれないが。

洋服の首周りが引きつれて息苦しさを感じてもぼんやりしていた千瀬だったが、男の手が自分の抱えている刀に伸びたところで漸く危機感を感じた。

「……ちょっ、これはダメ！」

値の張りそうな一品に目を付けられたらしいが、取られるわけにはいかなかった。地に足は着いていなかったが、幸いにも両腕は自由である。民間人相手に抜くのは躊躇われるけれど、かくなる上は仕方ないかもしれない――脅す程度だ、と千瀬が覚悟を決めたとき、背後から飄々とした声が響いた。

「おっさーん。それ、離してくんなーい？」

ルードは何かを頬張った状態でもごもごと、千瀬を指差しながら言う。両頬が不自然に膨らんだ少年を、男は珍獣を見るかのような目付きで見下ろした。

「おっさーん。これとそいつ交換しようよ」

ごくりと最後の一欠片を嚥下した後、にやりと笑って少年は手に握った物を提示した。黒い、萎びた革のケースである。それを目にした瞬間、千瀬を掴んでいた男の表情が一変した。

「コレ、おっさんの財布でしょー」

いらないの？　ひらひらと財布を振ってみせるルードに、男が何事かを喚き散らした。はいはいだから早く交換しようぜー、そう言ってへらりと少年は笑う。どうやら彼と男の言語は共通のものらしかった。

次の瞬間、千瀬の首周りの重圧が消える。

「あ」

男がルードに殴りかかろうとするのを視界の端に捕らえた、それを最後に、千瀬の世界がぐるりと回転する。妙な浮遊感が体を取り巻き遠心力に脳が揺れた。あろうことか、男は千瀬を腕力に物言わせて投げ飛ばしたのである。

「チトセ！」

遠くでルードが叫んだのが聞こえた。軽々と飛ばされた千瀬の身体はぽーんと弧を描き、通りの端に沿って並んでいた店の陳列棚に勢い良く突っ込んだ。幸いにもそこは絨毯の展示場で衝撃も少なかったのだが、ほっと息を吐いた次の瞬間、それだけでは済まされなかったことを千瀬は悟る。

少女の落下した絨毯売場の隣店が、飾り用の刃物をすぐ傍で展示していたのだ。千瀬が派手に突っ込んだお陰で微妙な均衡を保っていた商品の位置がズレ込み、結果それは隣店にまで及んだらしい。（日本のフリーマーケットに良く似た出店形式なので、店と店の境界は無いに等しいのである。）

飾用とはいえ立派な刃物を積んだその棚が自分のほうへ倒れるのを見たとき、あ、コレは刺さるな、とぼんやり千瀬は思った。急所さ

え避ければ死ぬことはなかろうと腹を括る。こんな場面でさえ、少女の思考ベクトルはどこかあらぬ方向を向いていたのだ。

（お店の人になんて謝ろう……）

そう思った瞬間、千瀬の周囲に異変が起きた。生温い風が吹いたような、重力が変化したような、奇妙な感覚に囚われる。いつまでも訪れない痛みと余りの静けさを訝しんで、頭上を見た千瀬は目を見開いた。

「なにこれ」

ぴたり、と。落下を始めたはずの何本もの飾りナイフが、少女の頭上で静止していたのだ。まるで見えない釣り糸にぶら下げられているかのように宙に留まっている。

刹那、ルードが千瀬の腕を掴んで強く引いた。その勢いに流されるように、少女が空中に浮かぶ奇妙な状態のナイフ群下から脱出した瞬間、がちゃん！　と激しい音を立て数十個もの刃物が地に落ちる。あるものは衝撃で欠け、あるものは真直ぐに地面に刺さり、そうしてまた静寂だけが訪れた。

「逃げるぞ、チトセ」

ルードが千瀬の腕を掴んだまま、人気のないほうへ向かって走りだした。広い通りから再び狭い路地裏へ、暗いほうへ。

その道が何かを狂わせるということを、崩れる音がしていたことを、二人の子供はまだ知らない。

第三章《はじまり》：狂う歯車（3）

どれだけ走り続けただろう。時間にすれば短い間だったかもしれないが、全速力で駆け抜けた二人にとってそれは至極長いことのように感じた。

「……る、ルード！」
「おー」

逃げ込んだ先の路地裏、その壁に体をもたれ掛けさせながら千瀬は口を開く。息を整えるにはまだ時間が足りず、は、は、とお互いに荒い呼吸を繰り返しながらの会話はなかなかに滑稽で骨が折れた。

「……っ、さっきの、男の人は」
「鳩尾に一発入れてＫＯしてきた」
「財布は？」
「……返すの忘れた」

ああ、うっかりうっかり。そう言って少年のポケットから引っ張りだされた財布を前に、二人はくすくすと忍び笑いを洩らした。今頃あの男は泡を食って子供達を探しているに違いない。

「……いつ盗ったの」
「チトセにあいつがぶつかったのと同時」

悪怯れることないルードに苦笑を返しつつ、まぁ良いかと楽観的なことを千瀬は思う。彼の手癖の悪さが、結果的には千瀬をあの男から救ったのだから。
そこまでをゆっくり考えて、じゃあ、と少女は真剣な表情を浮かべ

た。ルードの猫のような瞳を真直ぐにみつめる。じゃあ、あれは、

「――“あれ”は、あなたなの？」

「……ん」

少年は肯定とも否定ともとれぬ声を発したが、その首がしっかりと縦に振られたのを千瀬は見た。

やはり“あれ”はこの少年の仕業だったのだ。信じがたいことだったが、少女は確かにそれを目にしたのである。

見られてなきゃ良いな、と小さくルードが呟いた。

「人間が多すぎた。みんな目の錯覚だと思ってくんねーかなぁ……どうしよ、ミクに叱られる……の前にまずルカ姉か……」

「……嘘みたい」

落下を止めた物体、宙に浮いたナイフ。重力の法則に逆らった数多の刃物。あの光景をもう一度思い浮べ唖然とする千瀬を見て、困ったように少年は笑った。

「あれ、知らない？　うちの組織、〈マーダラー〉以上の連中は皆何かしらの能力をもってんだよ」

ちょっと普通の人間とは違う感じのことができるんだよー。そう言う彼に、千瀬は曖昧に頷いてみせる。

知っているといえば知っていた話であった。そういう噂があると、いつだったか駿から聞かされていたのだから。

ただしそれを全て信じていたか、と問われれば答えは否である。信じられるはずがない。こうして体験した後でさえ、千瀬はまだ我が目を疑っているのだ。

「んで、たぶん一般的な人間が『これぞ超能力』みたいに思ってることが出来るのが、オレ」

物を浮かべてみるとか、手を使わないで動かすとか。そう言って幾つか例を挙げた後、スプーン曲げは得意だとルードは笑う。その顔があまりにも晴れ晴れとしていたので、千瀬には彼が嘘を言っているようには思えなかった。

「じゃあ、ホントにさっきのも」

「集中力がないから、ちょっとの間だけだけど」

何だか居心地が悪そうにちらりと千瀬を見やった後、ルードはぽりぽりと鼻の頭を掻いた。照れ隠しにも似たその動作を見つめていると、何かがすとんと千瀬の中に落下して納まった。不思議なことに、少女はすんなりとこの少年とその奇怪な能力を受け入れてしまったのである。

「ルード」

「……な、何？」

千瀬は少年に向き直り、満面の笑みを浮かべた。ルードがぎょっとして体を強ばらせる。

「ありがとう」

突然の言葉に面食らったルードは暫しの間ぱちぱちと瞬きを繰り返していたが、不意に俯くと恥ずかしそうに、水臭ェよ、と呟いた。その様子に千瀬が笑い声をあげる。笑うなよ、あははごめん、ルカ姉のとこに戻ろっか、そうだね。そう小声で会話を交わして二人が立ち上がったその時、背後から突然音が聞こえた。

ぱちぱちぱち。軽快な、拍手の音。

「……！？」

二人同時に勢い良く振り返ったその先に、小さな人影。ルカではない、そう悟った瞬間千瀬は息を詰まらせた。

暗がりの中で目を凝らすと、おぼろげだった相手の輪郭が見えてくる――少年、だった。色素の薄い巻毛に、奇妙な出で立ちをした。

その少年は千瀬と目が合うと、にっこりと笑みを返してくる。

「……へぇ、すごいね！　さっきの君なんだぁ、そっちの赤毛の君！」

見られていたのか。千瀬は思わず顔をしかめる。

聞こえた声は上品なアルトであった。僅かな街頭の明かりに照らされて、少年の瞳がコバルトブルーであることがわかる。限りなく銀に近い淡くて曖昧な金の髪が、上質な濃紺の上着に良く映えていた。胸元にはボリュームのある滑らかなスカーフ。千瀬には馴染みのない奇妙に膨らんだ形のズボンとブーツがやけに似合っている。

――おいおい、何処の貴族の坊っちゃんだよ？　小さく呟かれたルードの言葉に、心中で千瀬は同意した。

「あんた何、何か用？　こんな所で何してんの」

訝しげに、矢継ぎ早に質問を浴びせかけるルードに対してその少年は笑ってみせた。仕草の一つ一つが上品だ。気品が漂っている、そんな気がする。本当に貴族なのかもしれないと千瀬は思ったが、果たして今の時代にそんなことがあるのだろうか。

「別に怪しいモンじゃないよ、僕は連れを探してるだけ。迷子捜し

さ」

「……怪しい奴に限ってそう言うって知ってるか？　つーかあんたが迷子なんじゃねェの」

「……ふふ、言うねぇ」

細められた目の奥で何かが蠢いた気がして千瀬は眉をひそめた。しかしそれは一瞬のことで、何事もなかったかのように少年は話を続ける。

「それよりさ、赤毛の君こそ何者だい？　良かったら僕のチームに入らないか」

「チーム……？」

「そう！」

少年はさも楽しそうにくしゃりと顔を崩して笑う。知らぬ間に彼と自分達との距離が縮んでいることに千瀬は気付いたが、後退しようにも後ろは壁であった。

「――ここだけの話、僕は世界政府の認めた極秘の特殊機関に所属しててね。悪人を裁いてるんだよ、特に、普通は捕まえられないような強力な奴の。君の力は貴重だなぁ。ね、どう？」

正義の味方に興味ない？　さっきの動きも素晴らしかったし、君は強いだろう？　そう言って少年はルードを見つめた。口を挟む隙さえ与えない。

千瀬の背中を嫌な汗が伝った。この子は、まずい。

「……ルード、ルカのところに戻ろう？」

千瀬はルードの腕を力一杯掴んだ。

この少年は危険だ。明らかに千瀬達の敵の立場にあたる人間である。こちらのことを知られる前に、逃げなければならない。……それに、何よりも。

（――言葉が、）

千瀬には、この少年の言葉がわかるのだ。

明らかに日本人ではないのに。ロヴの力が及んだ、ルシファーの人間ではないのに。それが示すことの可能性に気が付いて、一気に体温が下降する。嫌な予感と胸騒ぎに襲われた。こういうのは、大抵当たる。

「……っ！？」

刹那、千瀬は僅かな目眩を感じた。何が起こったのかわからない。が、横に目をやればルードも同様、顔をしかめて額を軽く押さえている。

「ああ、ごめんね？　このやり方、あんまり慣れてなくて……」

ふらつく二人を前に、柔らかく少年は言った。言った、ように感じた。

千瀬は目を閉じる。脳が揺れている。ぐわん、ぐわん、耳鳴り。

「君たちの脳に直接信号を送ってるんだ。だからそっちの女の子も、僕の言ってることわかるでしょ？　君はジャパニーズだよねたぶん。……んん？　ねぇ聞いてる？　これ、対象者の負担が大きいのかな。頭、まだ痛い？」

ゾクリと背筋に戦慄が走る。薄目を開けた先で少年の笑みが歪んで

見えた。
離れなくては、と千瀬は思う。離れなくては、この少年から早く。

（動け、）

頭ではわかっているのに、一向に動かない足を叱責した。刀は確かに握っているのに感覚もない。
動かなきゃ。もう一度強く思う。

「――勧誘なら余所をあたってもらえます？」

その時後方から突然声が響いた。第三者の乱入に少年が瞠目したのが見える。現れた人物に気が付いて、千瀬は安堵のあまり体の力が抜け落ちた。

「ルカ姉……！」
「二人とも、捜したんだから。帰ろ」

驚いて声を上げたルードの頭を一つ撫で、ルカは千瀬の手を取った。そのままルードの背を押して彼女が歩みはじめたので、否が応にも二人の体は動きだす。
しかしそれを高貴な身なりの少年は柔らかい笑顔で、けれど強い声で押し止めた。

「嫌だなぁ、おねーさん。お話は未だ終わってないよ？」
「……あなたは、だれ？」

ルカは歩を止めるとくるりと振り返り、僅かに目を細めて少年を見据えた。
漆黒の瞳に見つめられた少年は首を竦めると、彼女に向けて恭しく

一礼する。

「僕は世界各国の首脳・政府によって選出された平和維持組織の一員で、対犯罪者用のチームに所属しています。簡単に言っちゃえば、正義の味方ってやつ」

「あらご苦労さま、私たちには縁が無いわね」

冗談めかして、しかし冷たく言い放ったルカに少年は笑って首を振る。喉の奥でくつくつと音を立てるその様を、千瀬は嫌な気持ちで見つめていた。

この少年は、無邪気なふりをしている。

「そっちには無くてもこっちには有るんだよ」

「……？」

僅かにルカが首を傾げる。一組織の幹部を務めるこの少女が、相手の危険性に気付いていないはずはなかった。興味のないふりをして相手の腹を探っている。

少年はそんなルカを見ると口元を歪め、酷く楽しそうに言葉を紡いだ。

「これは完全な僕個人の趣味なんだけどね……僕はある人間を探してたんだ。君たちは、“トリクオーテ”という小さな街を知ってる？」

少年はルードと千瀬の顔を交互に見つめた。急に話を振られた二人はことりと首を傾げることしかできない。千瀬にいたっては日本にいた頃から学校にはろくに通っていなかったので、世界地図を思い浮べることすら困難だった。

「トリクオーテを消した《悪魔の子》を探し当てるのが僕の夢だったんだよ、ずっと」

少年は真直ぐにルカを見つめる。ルカは微動だにせず少年を見つめ返す。そんな僅かな間も気の抜けない、不穏な空気が漂っていた。それが少年には心地良いのか、彼は至福の笑みを浮かべる。

「“ルキフージュ＝ロフォカレ”――僕ね、知ってるんだよ。《上級六大悪魔》のことも調べたんだ」

「……何、を」

思わず千瀬は声を上げた。何だ。一体、何を言おうとしている？少年が言葉を語る度に、じわじわと空気が重たくなってゆくのだ。千瀬には彼の発する単語は意味不明で、それでも何か穏やかでない話がなされようとしているのはわかる。

もうここから離れなくてはならない。再びそう思った瞬間少年の目が千瀬を捕え、身動きが出来なくなった。全ての音が消える。

（やめて。）

少女の懇願が言葉になることはなかった。そして誰一人動かない、時間の進みさえわからない静寂の中で、少年は高らかに叫んだのだ。

「――君が“ルキフージュ”なんだろう？　見つけたよ、ルカ・ハーベント！！」

第三章《はじまり》：狂う歯車（4）

辺りを取り巻く空気が凍結した。そう感じる程に重々しく、ピリリと音が聞こえるまでに張り詰めたそれの中でくすくすと笑い声が漏れる。色を無くした空間でただ一人、鮮やかなのは笑う少年。

「……ルキフージュ？」

恐々と呟かれたルードの声は黙殺される。四人の人間がいるはずのこの場所で、未だ忍び笑いを洩らす未知の少年のだけが圧倒的な存在感をもっていた。

傍にいるはずの、ルカの気配が感じられない。けれど首を捻ることさえできぬまま千瀬とルードは立ち尽くしている。

――刹那、二人は背後の空気が急激に変化したのを感じた。触れているだけで体温がどんどん下がってゆく、異様な気配を纏った何か。

「……その名前を」

それが、ルカから少年へと発せられる禍々しいほどの殺気だと気付いた瞬間、千瀬は体中の血液が逆流するかのような錯覚に囚われた。息が、くるしい。

「どこで、きいたの」

それは千瀬に向けられているものではないのに、彼女の足は竦んで言うことをきかなくなってしまう。止まる事無く少年へと溢れるそれが皮膚を打って痛い。憎悪と怨嗟と、そういうものが一緒になって混ざりあっているようだ。いつも笑みを浮かべている黒髪の少女がこんな感情を持っていることさえ、千瀬は知らなかった。

（ルカ、）

千瀬の声は届かない。きっと声を出すことにも失敗してしまったのだろうが、少女にはそれさえわからなかった。立っていられない、目を開けていられない、これは畏怖だ。

代わりに答えるかのように声をあげた少年を、顔を歪めてルードが睨む。

「……あは！　あはははははッ！！」

とうとう堪え切れなくなったのか、少年は狂ったように笑いだした。目に涙を浮かべ、この上ない行幸に巡り合ったかのような表情で体をくの字に折り曲げる。

「あはッ！　見つけた！！　本当にこいつだったよ！！！」

少年は腹に手を当てて笑い転げる。ひとしきりそうやってきゃらきゃらと騒いだ後、不意に真剣な表情を浮かべた。そして真直ぐにルカを見つめ、無垢な笑顔を作ってみせる。

「……僕の名前はユリシーズ。ギリシアの英雄の名を与えられた男です。って言っても、この名前はラテン語だけどね」

オデュッセウスって言ったほうがわかるかな？　言いながら、ユリシーズはゆっくりこちらへと歩み寄る。

そして無遠慮に、依然として殺気を放ち続けるルカの腕をとると芝居じみた仕草でその手の甲に口付けを落とした。

「貴女の大ファンです。ルキフージュ……いや、ルカ」

ルカがすんなりと少年――ユリシーズが身体に触れることを許したのに驚く千瀬の目の前で、次の瞬間パァンと乾いた音が反響した。少年の身体が大きく弾けた。牛を用意に蹴り飛ばすほどの力を持つルカの平手打ちが、ユリシーズの頬に打ち込まれたのだ。そのまま彼は勢い良く弾き飛ばされるが、体が地面に着く前に態勢を整えふわりと立ち上がる。そして、にこりと笑みを浮かべた。

「初めて君のことを知ったのは三年くらい前になるかな。組織の文献を漁ってたら、トリクオーテの消滅についてのレポートが出てきたんだ。十一、二年前の物だったかなぁ」

ちょっとこの辺の記憶は曖昧なんだけどねー。ユリシーズは片手でやんわりと頬を擦りながら、上機嫌で続ける。

「レポートを読んで驚いたよ！　トリクオーテを跡形もなく消滅させたのは、当時六歳ぐらいの女の子だって言うじゃないか！！」

じり、と再びにじり寄るユリシーズの動きに反応したのか、ルードが千瀬を庇うように一歩前に出た。

ルカはただ、少年を見つめたまま。千瀬はぼやけた視界を取り戻そうと瞬きを繰り返す。そうするうちに、なんとか腕中の刀の重みを思い出した。

「その日から僕は君の虜になったよ。絶対捜し出して、重犯罪者の君を僕が裁くんだ、って。それから二年かかって、当時その子がルキフージュと呼ばれていたことと、ルキフージュが今はどこかの犯罪組織に所属していることを突き止めた……貴女ほどの人がシンジケートの幹部に甘んじているなんて。今の貴女は、真の実力を隠してるんだ、そうでしょう……？」

悪魔の子、破滅の子、殺戮の申し子、なんて素敵！
指折り数えながらユリシーズはうっとりと喋り続ける。その目はどこか虚ろで、ドラッグの中毒症状を想起させた。

「……やっと。やっと会えた。僕らの言う“裁く”っていうのはね、世界に害をなす人間の抹消――文字通り、消すことなんだ」

ユリシーズは笑う。
そうさ、もうわかるだろう？　僕の夢は、

「僕の夢は――君を殺すことだよ、ルカ」

少年はうっとりと夢見心地でそう吐いた。同時に、千瀬の悪寒は確信へと変わる。
胸に抱いていた刀を掌に持ちかえ、そっと柄に触れた。馴れ親しんだ、鯉口を切る動作に時間は掛からない。
そんな千瀬の動きを見たルードが、口をあまり動かさずに囁いた。
――ギリギリまでやめとけ、お前はまだきっと、“こういう相手”に耐性がない。

臨戦体勢の子供二人にユリシーズは目を止め、しかしそれには気付かなかったように視線を逸らす。
彼が見ていたのはルカだけだった。追い求めた少女だけに向けて少年は笑う。嗤った、のだろうか。

「ねぇ、どうやったら貴女は本気になってくれる？」

恍惚。それはそう形容するのに相応しい表情だった。
次の瞬間彼は左手の指をパチンと慣らすと、二言、簡潔に言葉を言

い放つ。

「ダモン、ピュティアス」

それが人間の名前だとわかったのは、少年がそう言った途端千瀬達の目の前に二つの人影が躍り出たからだ。子供たちは咄嗟に身体を硬直させる。一体、どこから。

「ユリシーズ様」
「ご命令を」

黒のコートに身を包まれた二人組だった。声のトーンで一方は女であることがわかる。ユリシーズ本人よりもずっと背の高い彼らは地に跪いて首を垂れ、そして少年は現れた成人の男女に向けてにこやかに告げた。

「殺れ」

御意、と二人が呟いたのが聞こえたのと、ルードが動いたのはほぼ同時。一瞬の跳躍で土煙が舞う。
次の瞬間、ダモンと呼ばれた男が懐からジャックナイフを取り出した。

「オレがやる」
「ルード！」

ルカの制止には耳を傾けようともせず、ルードは一方向目がけて飛び出した。得物を構えた男には見向きもしない。ルードが狙うのは最初からただ一人、ユリシーズ本人だったのだ。
ルードが勢い良く腕を振るうと、服に仕込まれていたスローイング

ナイフが袖口から彼の手の中に滑り出す。少年は右手に握ったそれを、こちらに向かってきたダモンに投げ放った。続け様にもう一本、さらに一本。何処に隠していたのか、投擲したナイフは計七本にも及んだ。

相手の男が手持ちの得物でそれを弾くのを見計らって、ルードは更にもう三本スローイングナイフを取り出した。それらを構える間もなく男の死角から別の方向へ投げ飛ばす。手首のスナップのみで放たれたナイフのその先、狙いはユリシーズだ。

しかし完全に不意を突いた攻撃だったにも関わらず、ユリシーズは首を僅かに傾けただけで全てのナイフを避けてしまった。

「……ちぇ」

口惜しそうに顔を歪めるルードの背後に降り立ったダモンがナイフを構え直して再び彼と対峙する。

一瞬の攻防のうちに為されたそれらの動作、その早さに千瀬は目を見開いた。少女が動く間さえなかった。

投げられたナイフは未だ宙を舞ったまま。ルードはそれをちらりと確認すると開いていた右手の掌を男の前へ突き出し――ぎゅ、と拳を握り締める。

（また、）

空気の重みが変わった。千瀬が先刻経験した、重量の変化したような、磁場の狂うような妙な感覚に身体を擽られる。同時にユリシーズもそれを感じ取ったのか、ぴくりとその柳眉を寄せた。

ふと顔をあげたダモンが異変に気付く。

「ユリシーズ様、」

男は僅かに焦燥を滲ませた声で警告を発した。彼自身の受け流したものやユリシーズが避けたもの、全てのスローイングナイフが空中で静止していたのだ。刃物が宙を漂いながら煌めくその光景は異様としか言い様がない。ダモン自身の握っていたジャックナイフや辺りに散らばっていた小石、煉瓦片すら何時の間にかゆらりと宙を舞っている。

ユリシーズがすぅっと目を細めたのを見やり、ルードがにこりと笑った。

「お前が、消えちまえ」

吐き捨てるようにそう言った後、ルードは握りこぶしを作ったままその手首をくんと折り曲げた。

次の瞬間、全てのナイフが意志を持ったかのようにぐるりと向きを変える。それらは小刻みに震えた後、そのまま凄まじいスピードただ一点、ユリシーズ目がけて襲い掛った。飛行とも落下とも言い難い凶器の雨が土埃を上げる。そのあまりの勢いに、金属音に混じって爆音のようなものが鳴り響いた。

「馬ッ鹿じゃねェの、」

オレ達に喧嘩売るなんて。

宙に浮いていた全ての物が無くなったのを確認して、ルードはその場に背を向ける。

それは一連の幕引きに思えた。

「――ルード！」

瞬間千瀬は叫び声をあげた。土煙がおさまり、ユリシーズが居たは

ずの場に何もない――死体さえも、だ。
僅かに抉れた地面にナイフが突き刺さり、その周りに砕け散った無数の石片が落ちているだけ。

「どこに……!?」

刹那、千瀬は日本刀の鞘を抜いた。突然背後に現れた女の一撃を辛うじて防ぎ、相手の首を狙って太刀を振るう。
ヒュン、と風を切る音が空に響いた。刀は女――ピュティアスと呼ばれていた――の髪の毛を数本落としただけで、そのまま女は塀の上に跳躍する。

「あははっ！　皆なかなかやるんだぁ。そっちの女の子まで戦えるなんて、予想外」

声が聞こえた先を見やれば、呑気に頬杖をついたユリシーズが楽しそうに笑う。
彼は三メートル以上ある街灯の天辺に腰掛け、千瀬達を見下ろしていた。

「あいつ……！」

塀の上のピュティアスは灰色がかったの長髪をはためかせ、同じように下を見つめている。その横にはいつ移動したのか、背の高い男・ダモンが悠々と立っていた。先刻ルードの攻撃に巻き込まれていたにも関わらず、外傷はないに等しい。
二人はユリシーズの下僕なのだろうか。風に乗って流れてくる血の香りが彼らからだと気付いて、千瀬は眉をひそめた。

（……これが、“正義の味方”？）

仮に敵対する関係であることを除いても、千瀬には、自分達よりユリシーズのほうがよほど歪んでいるように思えてならない。
一体何者なのだろう、と少女が再び思考を巡らせる先で、うーん参ったなぁと当のユリシーズは小首を傾げていた。

「君達を殺せばルカが本気になってくれると思ったのに……一筋縄じゃいかないね」

再び首を傾ける少年の前に、とん、と影が降り立った。ユリシーズの座るものの、真向かいにある街灯の天辺。ふわりと広がった黒髪を見て少年が目を細める。ルカの重力を感じさせぬ動きに、千瀬は驚愕するしかなかった。

「私を殺したいの？」
「……とっても、とーってもね。でも、貴女の本当の力を知らないと殺せない。興味があるんだ。貴女の能力の謎を、真の力を、知りたい」

にこりと笑みを浮かべて答えるユリシーズに、知ってどうするのかとルカは問うた。
お互い口調だけは穏やかだ。けれど周囲を取り巻く空気が、それは見た目のみであることを告げている。

「さぁね、確かめたいことはあるけれど……とにかく好奇心さ。でも、その為には手段を選ばないよ。本気で――消しに行っちゃうよ？　君の大切なもの」

僕の所属する組織なんて関係なくとも、僕個人で、必ず。そう言って笑う少年を見つめながら、千瀬は全身の血が凍ってゆくのを感じ

た。

（狂ってる）

ユリシーズがルカに抱いているのは、愛情でも憎悪でも羨望でもなく、ただの所有欲だ。質の悪い、独占欲。

ねぇ、ねぇルカ。ユリシーズは歌うように語りかける。

「“あの場所”はどうだった？　僕に本当のことを教えてよ。《悪魔》と呼ばれる所以となった、あの――――」

「あなた、ユリシーズだっけ。……そろそろ」

ゾクリと千瀬の身体震えた。ルードもそれに気が付いたのか、二人の間に緊張が走る。ルカの顔から、表情が消えた。

「……死ぬ？」

第三章《はじまり》：狂う歯車（5）

ぴくりと少年が肩を震わせる。羽織った外套をはためかせ、座っていた場所から地面へと飛び降りたユリシーズは目を細めて黒髪の少女を見つめた。ルカもそれに合わせるかのように地上へと舞い降りる。双方足音もたてぬその動きは猫よりも身軽であった。

「……僕を、殺せるの」
「見たいの？」

少女がそう言うやいなや、確実にまた一つ空気が重量を増した。耳鳴りが酷い、千瀬とルードは圧迫感に思わず身を捩る。
潰れてしまう、と千瀬は思った。これは何なのだろう、ここにいるのは、だれ。
ユリシーズはそんな中で心地よさそうに目を細めていたが、その首筋に薄らと汗が浮かんでいるのを少女は見た。

（駄目だ）

何が駄目なのかはわからない。それでも何か、あってはならないことが今起ころうとしている。
刹那、めき、と何かに亀裂が入るような音が響き渡った。重圧に耐えかねた路地の壁が軋む音。足元から何かが這い上がるってくるような感覚に捉われて、千瀬は体を震わせた。

（何かいる）

ぞわりと蠢く何か。無音の気配が多数犇めきあい、沸き上がってくる。どこから、そう思って何とか首を捻った千瀬の瞳にルカの背が

映った。揺らめく黒髪に目を奪われた後、そのまま視線を彼女の足元に落とす。瞬間、千瀬は大きく目を見開いた。

「ルカ姉、止めろ！」

ルードが叫び声をあげたのと、“それ”が見えたのはどちらが先だったか。

ルカの足元が仄かに発光していた。煉瓦とコンクリート敷きの道しか無いはずの地面、そこに立つ少女の足元に円形に広がった影のような何かがごぽりと音を立てて泡立つ。千瀬は自分の目が信じられず、ただそれ一点を凝視することしかできなかった。一体あれは、

「――ルカ！」

もう一度叫ばれたルードの声、その切迫した響きに黒髪が揺れる。はっと顔を上げたルカの下から仄明るい光がさっと消え失せた。同時に千瀬の感じていた君の悪い気配も嘘のように消失し、身体も自由になる。

ぐらりと傾いだ身体を立て直し、千瀬は周囲に目を走らせた。地面の至る所に亀裂が入っている、それ以外に変わりはない。再び訪れる静寂。

「……どうして、」

どうしてやめるの。絶望的な響きを帯びたその声はユリシーズのものだった。少年は悲しそうに顔を歪め、どうして、ともう一度呟く。ルカはそんな彼からふいと目を逸らし、ゆるりと一つ頭を横に振った。

「――ユリシーズ様」

その時淡々とした声が割って入る。今までどこに控えていたのか、少年の二人の従者が地に膝を付いて頭を下げた。女がどこか遠くに視線を彷徨わせながら、ユリシーズに届くぎりぎりの声量で囁く。

「……サブナック様が。こちらに向かわれています」

「バレたか」

時間切れだ。苦々しげにそう吐き捨てると、淡い巻毛の少年はさっと踵を返した。それに男女の下僕が続く。

「……おい、テメェ！」

呆然とそれを眺めていたルードが思い出したように罵声を浴びせかけると、ユリシーズはその首だけをこちらに捻った。蒼い瞳が瞬いて、すっと細められる。

『――諦めないよ』

ぐわん、と響くような声が聞こえた。しかし上質な上着に覆われた肩越しに見える顔、少年の唇は固く閉ざされたまま。動かさない口からではなく、頭に直接言葉が聞こえる。諦めない、ユリシーズはもう一度そう告げた。

『きっと後悔する。今日ここで、僕を殺さなかったこと』

頭の芯を締め付けられるような痛みに千瀬は小さく呻いた。特異な能力を持つ少年。ルードや、そしてルカのように。

（……能力者）

千瀬の見つめているその先、ユリシーズの瞳の中でちらちらと火炎が踊っていたのは気のせいだろうか。

真偽のほどは終ぞわからなかった。千瀬が思わず瞬きをしたその一瞬で、少年とその従者は影も形もなく消え失せてしまったからである。一吹きの熱風と共に。

（何かが狂う音がした）

第三章《はじまり》：間話

仄暗い入り組んだ路地の中、少年の視線の先に人影が現れる。きっちりと黒のスーツを着込み、顔には薄藍のサングラス。足音は一定であったが、その大きさは苛立ちを隠し切れていなかった。仏頂面を引っ提げてこちらへ歩いてきた青年を見て、ユリシーズはそっと苦笑を洩らす。

「やぁ」

少年は誤魔化すように明るく言葉を発した。オプションで可愛らしく手を振ってみるが、所々にブロンドの混じるブラウンの髪を首の後ろで一つに括ったその青年の顔からは、不機嫌以外の何も読み取れない。

「よく此処がわかったね、サブナック」

「……何はぐれてるんだ、馬鹿たれ。あれほど身勝手な行動は慎めと言ったのに」

開口一番飛び出した罵倒を気にも止めず、ユリシーズは軽く首を傾げる。この少年のペースを崩すことができる相手は今のところただ一人しか確認されていないのだが、生憎それは青年――サブナックではない。

「え～？　先にはぐれたのはサブでしょー。僕にはダモンとピュティアスが一緒だったし。普通人数が少ないほうを“はぐれた”って言うんじゃない？」

飄々と吐かれたその言葉に、サブナックはこれ以上ないほどに顔を

しかめた。
議論するポイントを激しく間違っている。それに一々反応してしまう自分は、大概この少年に毒されているのだろうと思いながら。

「……ダモンとピュティアスはお前の随従だからノーカウントだ」
「え、そういうもの？」

まぁいっか、言ってユリシーズは自分より遥かに長身の相手を見上げる。サブナックは少年の柔らかそうな髪に視線を落としながら、この悪戯な子供が次に何を言い出すのかと考えを巡らせた。碌なことなどないのだろうが。
そんな青年の思考を知ってか知らずか、ユリシーズは目を細めてにこりと笑ってみせる。あのね、サブ。

「僕はルキフージュに会ってたんだ……って言ったら驚く？」

噛み締めるような少年の告白にぴくりと眉を寄せる。サブナックは何処かで聞いたその単語をゆるりと回想した。暫らく考えた末その正体に思い当たったところで、今度は思い切り顔をしかめてしまう。

「ルキフージュって……“ルキフージュ＝ロフォカレ”か。《トリクオーテの悪魔》の？」

うん、とさも嬉しそうに笑ったユリシーズの頭をサブナックは握り拳で思い切り殴りつけた。ゴン！　と響く鈍い音と、少年の短い悲鳴。
なにすんのさ！　と抗議の声が上がっても、青年はそ知らぬふりをする。

「痛いよサブ……」

しおらしく呟いてみても、全てサブナックの鋭い目付きで鎮圧される。
ユリシーズは瞳に薄らと涙を浮かべて青年を見上げた。まだ拳が握られている、あの中に石でも入ってやしないだろうか。（嘘泣きではない、本当に痛かったのだ）

「冗談は大概にしろ。はぐれた言い訳のつもりか？　どうせ出店でも見て回っていたんだろうが」
「ほ、ホントだってば！」

少年の抗議も虚しく、サブナックは話に飽いたようにくるりと踵を返してしまった。ユリシーズも慌ててそれに続く。目の前の男は足が長く、普通に歩く分ではリーチがだいぶ違った。気を抜けばあっという間に置いていかれてしまう。その時は、普通に歩かなければ良いだけの話なのだが。

「――お前があの話にお熱なのは周知の事だか、吐くならもうすこし現実味のある嘘にしろ。言うに事欠いてルキフージュなんて……」

あんな、伝説を。
そこまでを一気に言い切り、やれやれとサブナックは首を横に振った。

「行くぞユリシーズ。俺たちの今回の任務わかってるか？」
「はいはい、えぇと……この街に何か潜伏してるんでしょ？　能力者的な犯罪者が」
「……何でそんなに曖昧なんだ」

はぁ、と溜め息を吐く青年にユリシーズはコロコロと笑ってみせる。

大丈夫だよー、僕これでも君の上官なんだから。
そのけろりとした言い分に、これが上司だから困ってるんじゃないかと心中でサブナックはぼやいた。

「見つけるのはサブの仕事。後は僕に任せたら良い」
「……わかったから。それまでは静かにしていろ」
「灰にして良いよね？」
「本人確認が済んだらな」

頑張ろっと。機嫌良くユリシーズは呟く。
二つ並んだ影は段々と闇に溶けてゆく。路地から姿を消す寸前、くすりと少年が笑った。

（……また会おうね）

それはきっと、遠くはない未来の。

第三章《はじまり》：はじまりの寓話（1）

『自分の命を救おうと思うものはそれを失い、私のために自分の命を失う者は、それを救うのだ。人は、たとい全世界を手に入れても、自分自身を失い、損じたら、何の得がありましょう』

“命ずれば従うとは、この御方は何者であろうか。風も水も、仰せのままに統べることができたというよ”

――聖書“ＬＵＫＥ”……〈ルカによる副音書〉より抜粋――

厄介な事になった。この場に集まった誰しもがそれを自覚している。重たい空気の中で口火を切ったのは、組織の首領たる男であった。

「少々、まずい展開かもしれないな」

抑揚の無い声で反応を示し、ロヴはぐるりと一帯を見渡した。地下に存在する、隠されたロヴの部屋。そこに集まった顔触れで事態が急を要するものだと容易に想像できる。

首領ロヴ・ハーキンズを筆頭に、〈ハングマン〉エヴィル・ブルータス、〈マーダラー〉ミク・ロヴナス、そして七見月葉――テトラコマンダー代表である――が並んで席に着いていた。

そして話題の中心にあるのが、ルカ、千瀬、ルードの三人である。千瀬とルード以外のメンバーは、ルシファーに緊急事態が起こった場合のみに集められる代表者たち。彼らは皆落ち着いた様子で、しかし神経を張り巡らしながら三人の話を聞いていた。

「その、ユリシーズってのは何者なの？　平和維持組織って……」

形のよい唇を歪めながら、ミクが言う。それを受けたロヴは表情を変えぬまま、可能性だが、と言葉を続けた。

「――カーマロカ」

「何……？」

「《裏政府》管轄の極秘組織だ。お前も聞いたことぐらいはあるだろう」

まさか、とミクが小さな叫び声をあげる。普段冷静な彼女にしては珍しく、その表情には驚愕と焦燥が浮かんでいた。それまで口を閉ざしていたルカはロヴの言葉を受けて頷く。

「それしかないと思う。ユリシーズの特殊な力にも、彼等の戦闘経験にも納得がいくもの」

カーマロカ――それは、ルシファーとは相対する場所に位置する組

織の名である。
一般には存在すら知られていない、世界政府が極秘で生み出した特殊機関。主な任務は平和維持――そして、それに伴う障害の削除。正義の名の下に彼らは動く。
そして一握りの人間しか知りえないカーマロカ最大の特徴は、“裁き”を行うためだけに世界各国から実力者を召集しているということだった。『実力者』、それは一説には、奇妙かつ特異な能力を有する人間を指すのだと。

「カーマロカは能力者を保有している、そういう噂は聞いていたんだ。確証などどこにも無かったがな」

――そう、ルシファーのように。
それは誰も口には出さない、しかしあまりにも明確な彼らの共通点だった。敵になるとすれば“そういう者達”だと、心中では皆わかっていたのだ。

「都市伝説のようなものの類かと思っていたが。厄介と言えば厄介だ」

ロヴは薄ら笑いを浮かべる。存在は知っていた――不確定要素とはいえ、警戒はしていたのだ。見えなかった敵が見えるようになっただけの話である。強いて言うならば、これまで相手にしてきたどの組織よりも手強いであろうが。
“カーマロカ”とは、もとはギリシア語の煉獄――肉体から離れたばかりの魂を集め浄化を行う場所、を表す言葉である。それを教えられ、千瀬は小さく身震いした。正にルシファーとは対極ではないか。

（真逆、なのに）

相容れぬ善と悪、白と黒、光と闇の如く。
けれど、と千瀬は思う。少女にとっては、あの少年のほうがよほど闇の住人のように感じられた。

「あいつ……ユリシーズは」

ルードが真剣な面持ちで続きを語る。彼には似合わない、堅い表情。
こうしてみるとこの少年も組織の上層を担う幹部の一員である。千瀬は肩身の狭い思いだった。明らかに一人だけ、場違いなんじゃないか。

「あいつ、ルカ姉を殺すんだって言ってた」
「できるはずないわ！」

思わず声を荒げたミクをロヴが片手を挙げて制止した。ルードは気圧されたように一度下を向き、またおずおずと口を開く。

「んなことわかってるし、殺らせねーよ……でも、あいつは手段を選ばない。しかもルカ姉を本気にさせたがってる」

あいつのヤバさは会ってみなきゃわかんねぇよ、少年は深刻な面持ちで頷いた。千瀬も同意する。少女が思い出すたび、未だユリシーズの笑みは彼女の背筋を震わせていた。

「まぁ、ルシファーに攻撃を仕掛けてくる可能性はあるかもしれないな」

重大な発言を飄々とした口振りでロヴが言うのは、彼自身、実はその可能性は少ないと思っているからであった。話を聞くかぎり、ユ

リシーズなる少年の執着の先はルカであって、彼女の所属する組織ではないようだった。（そもそも本気で組織を潰す気があれば、帰還する三人に尾行でも付ければ良い。ルカが居たのでは成功する可能性は無に等しかっただろうが、それでもだ。）

かといって不安要素が無いとは言いきれないのだが（むしろ普通ならば狙われるルカ本人を気遣うところだ）ロヴにはこの黒髪の少女がむざむざやられるところなど、露ほどにも想像できないのである。彼の忠実な部下は、見た目とはかけ離れた実力を持っているのだから。

「……戦力を固めておく必要が、あるんじゃないですか？」

「俺もそう思うぜー。幸い〈ソルジャー〉はこの間帰ってきた奴で全部だし……とりあえず〈マーダラー〉は全員揃ってるべきだろ。それから《エイド》……“J”のおっさんも本部に呼び戻せよ、ロヴ」

小声で問い掛けた月葉にルードが賛同の意を示す。呑気な首領とは違い、彼女等は真剣に組織の防衛を考えたようだった。

千瀬は前に駿から教わった組織図を、頭の中でゆっくり思い浮かべる。

エイド。確か首領の補佐にあたる役職だったはずだ。ルシファーの副首領――千瀬は、まだ会ったことは無い。

しかしルードの言葉に答えたのは、ロヴではなくエヴィルであった。

「ルード。《エイド》はもういない」

「……？」

「“J”――いや。ジェイ・ハインリッヒは〈ハングマン〉が始末した。三週間前の話だ」

ルードの口がぽかんと開かれた。みるみるうちに表情が驚愕に染め

られる。

「な、んだって……？　どうして、」

「少し前にルシファーの情報が流出したこと、覚えてるか。当事者はとっくに消してあるが――廃棄場でアレの処分を任されたのはお前だったはずだ、チトセ」

黄金色の瞳に見つめられて、千瀬の脳裏に鮮明な映像が蘇った。ここに来てはじめて少女が殺した、あの。

（忘れるはずが、ない）

静かに頷いた千瀬を見やり、エヴィルが続ける。

「あれを裏で手引きしていたのがハインリッヒだ。ツヅリとスミレを北アメリカに派遣したのは、奴の身辺調査と反逆の裏づけをとるためだった」

聞けばハインリッヒという男は、千瀬がルシファーに所属する前から北アメリカに単独赴任していたらしい。彼の動向が怪しいと気が付いた時には、もうハインリッヒ本人は組織本部から遠く離れた地にいたのだ。

〈ソルジャー〉二名による長期の北アメリカ遠征――そして確証を得た、副首領の組織裏切りという紛れも無い事実。

淡々と語られる言葉を耳にしながら、俺は聞いてない、とルードが唸った。

「このことはまだロヴを初めとした幹部連中しか知らなかった。北アメリカ遠征の二人には知らせざるを得なかったがな。ルードに話が伝わらなかったのは、お前がしつこく脱走を繰り返していたから

だろう」

エヴィルの言葉に、そうだけど、でも、とルードはうなだれる。自分自身の非を理解している少年はそれ以上反論できず、ただ悔しそうに俯くことしかできなかった。

「……ジェイ・ハインリッヒという男はね。言ってみれば切れ者で、策略家だったわ」

未だ話を飲み込めずぼうっとしていた千瀬にルカが声をかける。彼女は下を向いたルードの頭に手を乗せてくしゃくしゃと撫でながら（ガキ扱いすんな、と少年が身を捩った）小さく笑ってみせた。

「ジェイにはＥＰＰＣとは違って際立った能力は無かったけれど、その知能と行動力だけでルシファーを上り詰めたの。《エイド》の地位を獲得してからは、彼は自分の頭脳を駆使して戦略を立て、《パース》からなる小隊の指揮も執っていた」

ＥＰＰＣを除けばルシファーの主戦力であった、【戦闘策略家】ジェイ・ハインリッヒ。『Ｊ』――それは、戦地での彼のコードネームのはずだった。

「……人間って、笑えちゃうくらい愚か」

彼は欲しいものを我慢できなかったのだ、そう言ってルカは僅かに空を睨む。それから肩の力を抜くと、くすりと笑みを零した。

「ジェイが次に〈ヘッド〉の座を狙おうとしたのは自然な流れだったのかもしれない。でも、私たちがそれを許すわけないじゃない」

だから殺したわ。少女はさらりと黒髪を揺らして呟いた。それが彼女の当たり前で、それが〈ハングマン〉の使命で、同時に存在理由（レゾンデートル）でもある。

「野心があるのは悪いことじゃない。だが、相手を選べないのはただの馬鹿だ」

吐き捨てるようにそう言って、エヴィルはルードに何か紙の束を渡した。投げた、と言ったほうが正確か。分厚いそれはバサリと音を立てて少年の頭上に落下する。

「危ねッ……これは？」

「ツヅリの作成したレポートだ。ジェイが外部に漏らしたルシファーの情報……これを見てみろ。特戦隊の個人情報まで流れ出た可能性がある」

そこに記されていたのは当時まだいなかった千瀬を除く〈ソルジャー〉十二人分に〈ハングマン〉と〈マーダラー〉の幹部格を加えた十八個のデータリストであった。さすがにロヴ本人のものは含まれていない。（存在するのかもわからないが。）自分のものを見つけてしまったのか、うぇ、とルードが声を洩らした。

「こんなデータいつとったの。細かすぎ」

これじゃ逆に危険なくらいだ、そうぼやいた少年を咎めるものはいない。実際、それがこんな事態を引き起こしているのだから。

「“ルキフージュ”の存在は当時一部の界隈じゃ有名だった。現在知っている奴がいても……まぁ、不思議ではない。ただしルカの名までユリシーズが知っていたとなれば——それはジェイの流した情

報を、カーマロカが受け取った可能性を示している。カーマロカ側は、こちらの手の内を知り尽くしているわけだ」

ロヴの言葉に、確かにそうだと千瀬は思う。そうでもなければ、ユリシーズが初対面のルカのフルネームを言いのけるなどという芸当ができるはずもない。

事態は最悪のシナリオに向かっているのでは、と千瀬は不安を掻き立てられた。こちらの情報は筒抜けで、相手の能力・人数は未知数。さらに現状において、ルシファーの《エイド》は空席――。

ロヴはルードの頭を優しく叩くと、後方に控えていた金髪の女性を振り返った。

「……万全を期すに越したことは無いか――ツキハ」

「はい」

「休暇は終わりだ、と。“ジェミニカ”を呼び戻す手続きを済ませておいてくれ。こっちから迎えは出す」

月葉は畏まると左右色の違う瞳を静かに伏せ、承諾の意を示した。

「わかりました」

返事に頷きロヴが周囲に目をやると、エヴィルとミクが黙って立ち上がる。会議が、終わろうとしているのだ。

しかし千瀬にはどうしても尋ねたいことがあり、悩んだ末に口を開いた。

「あの」

「どうした？」

千瀬は軽く息を吸い込んだ。言うか言うまいかもう一度だけ悩んだ

が、結局はその言葉を紡いでしまう。

「“ルキフージュ”って、何ですか？」

少しだけ。その時少しだけ、空気が揺らいだ。席を立った面々が動きを止める。やはりまずかったかと体を強ばらせた千瀬とは反対にルードが目を輝かせた。彼も気になっていたのだろう。

「ああ。君には聞く権利があるな」

ロヴは柔らかく笑ってみせた。それがあまりにも朗らかで、かえって千瀬は緊張してしまったのだが。

「昔話をしてあげよう。ルシファー設立よりもずっと前の、ね。どうぞ、座ったらどうだい？」

第三章《はじまり》：はじまりの寓話（2）

「俺達が戦争孤児だという話はしたよな？　今現在も内乱の絶えない国で、俺が物心ついた時には紛争が日常だったんだが」

もう何年前になるか、と男は笑む。再びしっかりと席に座りなおした面々をゆるりと眺め、一組織の首領は穏やかに回想に耽り始めた。彼が、彼らがまだ幼かったあの頃。誰にでも平等に訪れるはずの幼少期、そのはじまりの話だ。

（むかしむかし、）

ロヴと呼ばれた子供がいた。実際彼をそう呼ぶものは少なかったのだが、気が付いたときには彼はロヴという名を与えられた生き物で、それ以上でもそれ以下でもなかったのだ。

ロヴは大人に見捨てられた戦争孤児たちが集団で暮らす、ゴミ溜めのような建物で生活していた。生まれたからにはあるであろう誕生日も、親の顔も知らない。この国で生まれたのかでさえ定かではなかったが、彼がそれを気に掛けたことはなかった。ロヴの周りには同じような境遇の子供が溢れていたし、彼はそれを当たり前だと思っていた（なぜなら外を知らなかったからだ。）

ロヴ、という識別名称があっただけでも彼は恵まれていたといえる。彼の周りには、名を持たない子供も多くいたので。

「食べ物は無かったな。衛生状況は酷いなんてもんじゃない――餓鬼どもの吐瀉物や屎尿が床や寝床の上に散乱していたし、病気にかかれば医者も薬も無い。助けに来る大人もいない――あそこは子供を捨てるために存在していた場所だ。死んでいく奴は後を絶たなか

ったし、生きてる奴も脳に満足な栄養がいかない状態で、障害をきたしたり人格崩壊を起こす奴がほとんどだった」

あ、これは前も言ったっけ？　穏やかに首をかしげ、そこでロヴは一息吐いた。紅茶のカップに手を伸ばすとくつろいだ様子でそれを口に運ぶ。

それは、まるで御伽話を語り聞かせているような口調であった。話の内容と語り手の様子があまりにも不釣り合いで、千瀬はどうにも反応に困ってしまう。これはそんなに軽く聞き流していい話なのだろうか？

「俺が物心ついて暫らくしたある時、その建物の中で疫病が流行ってな。悪環境の引き起こした物だったのだろうが――収容されていたほとんどの子供達が死に絶えてしまった。そこで生き残ったのが俺とエヴィル、そして“テトラ”――後のルカだ。この三人だけだった」

こくりと音を立てて上品に飲み干された紅茶はすんなりと男の腹に納まった。そんな当たり前のことをひたすら目で追っていた千瀬は、ふと耳にした聞き慣れぬ単語に首を傾げる。

「テトラ？」

鸚鵡返しに発された声はルードのものだ。あれお前も知らなかったのか？　と僅かに驚いたロヴが小さく笑う。

「ギリシア数字の“４”だよ。テトラコマンダーのテトラも同じ意味だ、ほら四人いるだろ」

「はぁ」

「当時その場所にはギリシア数字をふった十の部屋に分けて子供が

収容されていて、ルカは四番目の部屋で生活していた。ルカにはその頃まだ名前が無くて、仮の名としてテトラと呼んだんだ」

モノ・ジ・トリ・テトラ・ペンタ……、指折り数えて示してみせる上司に、はぁ、とまた千瀬は曖昧な相槌を打った。

懐かしい、とルカが笑うが、千瀬の想像力はなかなか追い付くことができない。子供が収容されていて、でも殆ど死んでしまって。その中でたまたま生き残った三人？（そんなこと現実に起こり得るのだろうか。）

「つまり、ルカは小さい頃はテトラと呼ばれていたと」

「その通りだ。ちなみに、ルカと言う名は同名の聖職者がいるんだが、知ってるかい」

綴りは“ＬＵＫＥ”だと言って笑みを浮かべる男に、千瀬は正直に首を横に振った。

家柄上、仏教ならまだしもそちらの方面には疎い千瀬である。聖職者の名など一人も知らなかったし（キリストは名前を知っているだけだ）ルカというスペルを聞いてもピンと来なかった。あ、ローマ字綴りじゃない、やはり日本とは違うのだなぁとは思ったが。（ロヴのトランス能力は千瀬の脳裏から人種の壁を取り払いがちなのだ。）

「まぁ、この聖職者は直接はルカと関係ないんだが」

「？」

「話を戻そうか。ではチトセ、何故俺達だけ疫病で死ななかったと思う？」

……え？

突然の問いに困惑する少女に対し、ロヴは酷く楽しそうであった。

早く言えとルードに小突かれ、ようやく彼は口を開く。

「それはな、俺達が突然変異だったからだよ」

――極限の環境が生み出したのは、人知を超える力を持つ子供達だった。結果、彼らだけは病に侵されることなく外の世界を見ることになる。

死と隣り合わせの毎日が能力を開花させたのは、身を守ろうとする本能だったのかも知れない。気付いたときには共に在ったその力を、子供たちは当たり前のように受け入れた。それが普通ではないと気付いたのでさえ、もっと後。

「俺たちは生きていた」

偶然か必然か、こうして彼らは生き延び、出会った。手を取り合うのは自然なことだ。何よりも、本能が仲間だと告げていたから。

「屍累々の死んだ建物の中で、たった三人だったけれど」

祝福されぬ人生に訪れた、たった一つの邂逅の時。
その日生き残った少女は、生まれて初めて言葉を発した。
世界の最果てを、教えて。

（――それは、はじまりの物語）

第三章《はじまり》：はじまりの寓話 - episode. 0 -

月日は凡そ十五年ほど前に遡る。

ロヴという名前の子供がいた。少年は今年で十になる。彼は自らの生誕した日など知らなかったが、不思議と自分の年齢を把握することはできていた。それは勘や予想などではない、確信だ。何故わかるのだと問われても、返答に窮してしまうのだが。

ロヴは不思議な子供であった。実年齢より遥に老成したものの考え方をできるできる子供だ。そもそも少年の生活していたこの場所では、思考能力のある子供自体が珍しい存在だった。

この場所には子供が捨てられてゆく。ロヴ自身いつからここにいるのかは分からない。古い日本に在った子捨て寺に近い機能を果たす建物が、貧民窟（スラム）より遥に廃れた場所に建っていた。

奇跡に近い確率で手に入る食物を分け合い、時に奪い合いながらなんとか命を繋ぐ生活の中で十歳まで生き延びる子供は少ない。そんな厳しい環境の中で、何故だかロヴは死に直面した記憶もないままここまで成長した。飢えを感じることはしょっちゅうあるが、周りの子供が飢餓に倒れてゆく中でロヴだけは滞り無い成長を遂げたのである。少年の身体の栄養状態が十分だったとは、考え難いのだが。

ロヴはその建物から出たことはなかったが、外の世界があることを知っていた。大人に教わったわけではなく（少年はそれまで大人と話した経験が無かった）（内乱の最中を生き延びんとする兵士なら数回見かけた）ロヴにはいつも、音が聞こえていたのだった。

――命の消える音だ。瞳を閉じても、どんなに遠くのことであろうと、人が死ぬ時音がする。それは確かに音なのだが、蝋燭を吹き消

すイメージに酷く近かった。
はじめはロヴの暮らす建物の中から。子供が死ぬ時、それは確実に彼の耳に届く。徐々にそれが聞こえる範囲が広がり、その数が増えてゆくにつれ、自然と少年は外の存在を知った。
しかしこれが他の人間にも聞こえるものではないということに彼が気が付くのは、もっと後のことである。

エヴィルはその時五つだった。彼もまた幼いながらに自らの年齢を把握できていたし、周りの子供に比べてずっと成長が早かった。まだ周囲が四つん這いで地べたを移動しなければならなかった年齢で、既に二本の足で立ち上がって他人を見下ろしていた記憶が彼にはある。
エヴィルは一度だけ建物から出たことがあった。食物を求めに行ったのか、何処かへ逃げ出したかったのかは覚えていない。ただその時外へ出たのは彼だけではなかったことは確かだ。
その日、建物の外は戦場だった。銃弾飛び交う紛争の真っ最中にふらふらと外を歩いていた子供達は一人残らず打ち殺されてしまったのだが、エヴィルだけは死ななかった。彼の腹には弾の貫通した穴があり、そこからは致死量の血液が失われていたというのに。

エヴィル達の暮らしていた建物は檻であったが、同時に唯一の安全地帯だったのだ。ただしどちらにしても死の匂いは漂っていたように思う。子供達を待ち構えていたのは、中でじわじわと餓死を待つか外で戦火に巻き込まれて死ぬかの二択だったのだから。
エヴィルはそれ以後――疫病で周りの子供が死に絶えたその日まで、だが――は一度たりとも外に出ていない。彼の身体の傷の治りが異常に早いということに、当時エヴィルはまだ気が付いていなかった。

ロヴが十歳、エヴィルが五歳になったとき、黒髪黒目の少女は三歳だったと予想される。

彼女は幼すぎたのだろう、自分の年齢を数えることなど考えもつかなかったし、自分に名が無いことさえ気にしていなかった。ただし、自分が普通ではないことだけはわかっている。

少女は知っていた。この世に産み落とされた瞬間から、自分という存在が異端であることを。

彼女もまた他の二人同様、精神的にも肉体的にも通常の数倍早い成長を遂げていた。

ここで言う肉体とは背丈やがたいの話ではなく、あくまでも身体機能のことである。少女は小さな身体に似合わないほどの脚力で駆け回ることができたし――実はその能力は既に成人男性をもゆうに凌いでいた――冷静に周囲を見据えることも可能だ。言葉も達者だったが、喋ろうと思ったことはなかった。同じ年齢の子供は皆成長の具合がすこぶる悪く、会話など望めない状態だったので。

三人は同じ建物内で生活していながら、それまでは一切接触を持ったことが無かった。他の子供たちが全て病に倒れ、生存者が残り三人となったその日が彼らの初対面である。

一目見た瞬間わかった。自分達は、同胞なのだと。

＊

三人の中で、外の世界の様子を知っていたのはロヴだけだ。エヴィルの知る僅かな“外”は戦場だったし、名無しの少女にいたっては生活していた建物の、その中のたった一室から出たことが無かったのだから。

一番年長でもあったロヴに、残る二人がついて行く形になったのは

自然な流れだっただろう。ロヴは黒髪の少女に“テトラ”という仮の呼び名を与えると同時に、その日まで生活してきた建物に火を放った。

（何も残らなければ良い）

少年は立ち上る赤にそっと目を伏せる。彼らは今日、再び生まれた。紛争が始まる前は病院だったというその廃墟は、病魔に蝕まれた子供達の遺体と共にみるみるうちに灰になってゆく。エヴィルも、テトラと名付けられた少女も、その光景には何の感慨も呼び起こされなかった。

どれだけそれを眺めていたのだろうか。気が付いたときには建物は跡形も無くなっていた。

焼け跡には灰白色の砂と黒く酸化した鉄骨だけが残り、時折何かがぱちぱちと音を立てる。

「おやすみ」

そう呟いた少女の声を、二人の少年はきっと忘れないだろう。

灰の中から出てきた小指ほどの細い骨を、真っ白なそれをテトラが拾ってポケットに入れるのを、二人は目に焼き付けていた。

＊

ロヴの行動は迅速だった。

生き残った子供の年齢を全員分足しても成人に達することはないかわり、三人の能力は常人を遥かに凌駕している。
生まれて初めて、支え合うことを知った。まだ幼い彼らが世界に及ぼした影響を、誰が予測できただろう？

ロヴが世界の中心だった廃墟を燃やしてから十日後、当時その国で勃発していた紛争のうち二つが集結した。集結、せざるをえなかったのだ。
その日、内乱の主軸となっていた過激派の活動本部が何者かの手によって壊滅状態に陥れられる。同時刻、それと激しい争いを繰り広げていたテログループも三つ消えた。
それらが全てこの戦争の犠牲となって生きてきた、たった三人の子供の仕業であることを知るものはいない。この世には、いない。

ロヴが二人を率いて最初に行ったこと、それは大人たちへの報復であった。自分達をあの場所へ押し込め放置し、身勝手な理由で多くの命を奪った連中。
死んでいった子供の仇を討ちたかったわけではない。ただ、少年はその汚さが気に入らなかったのだ。
ロヴの思考は、この時ばかりは単純かつ短絡的だった。（気に食わないなら消してしまえ。そうして、目にもの見せてやれたらいい）
愚かな子供っぽい考えだと、笑うものもいるだろう。しかしロヴは正真正銘の子供であり、幸か不幸か、彼には力があったのだった。

一度計画を立ててしまえば、後はトントン拍子に事が進んだ。彼のサポートにあたる少年少女は優秀で、その外見から彼らが事の首謀者だと疑うものなど存在しない。
子供たちは人間を殺めることに無頓着だった。彼らの日常にはいつも傍らに誰かの遺体があったし、銃声と爆音は生まれたその日に聞

いた。
誰が彼らに、いのちのたいせつさ、など教えられただろう。

＊

ロヴはその国の戦火の元を、手当たりしだいに破壊していった。残る二人は常にそれに従った。子供たちの行っているのは雑草の葉だけを毟り取る行為に似ていて、争いの根本となる部分の除去などはできていない。そういうのは大人同士の問題だ、政府でも何でも出てくれば良い。
ロヴは見せしめがしたかっただけだ。この国から戦争意識を消し去りたかったわけではないし興味もない。だからあと一つ、あと一つだけ潰して終わりにしようと思っていた。少年はそれで満足だった。三人だった仲間が四人になるのは、それから少し後のことである。

「テトラ！　何だ、それ？」

その日、最後に消していこうと白羽の矢が立ったテログループのアジトに偵察として向かったのはテトラ一人だった。少女の外見はあまりにも幼かったが、この時すでにこれ程度は完遂できるほどの力量を持っていたので問題はない。
問題はない、が、テトラが連れ帰ってきたものを見てロヴは驚愕した。思わず素っ頓狂な声も出た。それは碧い瞳を持った、まだ幼い少女だったのである。薄汚れた金の髪は、洗えばさぞ綺麗に輝くだろうと彼は思った。

「ミク」

言って、テトラが笑う。名前を聞いたわけじゃない、とロヴはぼやきながら、それでもその金髪の少女を迎え入れた。

（同じ、）

そう、同じなのだ。どうやらこればかりは直感で分かるらしい。ミクと名乗る少女と自分達は仲間なのだと、ロヴは本能的に感じ取ったのである。テトラの話によれば、これから彼らの襲撃する予定の場所にはまだ他にも多くの人間がいるらしい。三分の一ほどは戦力とは無関係の捕虜、どういう経緯でそうなったのかはわからないが、ミクもそのうちの一人であった。

テトラがミクだけを連れ出した理由は、やはり彼女にもわかったのだろうとおもう。同胞の、匂い。

さて、“Ｍｉｃｋ”という言葉を聞いたことがあるだろうか。

この金髪碧目の少女はテロ組織の捕虜として監禁されていたアイルランド人で、“Ｍｉｃｋ”と呼ばれていたらしい。だからテトラに対しても、少女はそう名乗ったのだ。

――しかし真実はたいそう歪んでいる。“Ｍｉｃｋ”とはアイルランド人・ローマカトリック教徒を示す差別用語で、蔑む意味のその言葉を、ミクは自分の名として認識していたにすぎないのだから。

ロヴ達三人はその知能・身体能力ともに、同年代の子供に比べると遥かに優れた成長を遂げていた。

それはこの少女、ミクも同じである。

ミクはこの時、自分の意思でロヴ達についてゆくことを決めた。自分の他にも捕虜はいたが、助けなければならないという義務感には襲われなかった。

自分を取り巻いていた醜い世界の破片を、拾い集める必要がどこにある？

テログループの根城から火の手が上がったのは、その日の明け方近くであった。同時にその国の政府を吹き飛ばそうと思ったのは子供たちの気紛れだ。

それはこの世を腐らせた大人たちへの、ささやかな復讐。

翌日、ロヴはミクを加えた三人を連れて国を出奔した。もうその場所に国と呼べる機能が残っていたかどうかは定かでない。

（亡命という名の脱獄）

（世界という牢からの）

干からびた大地が血を吸った。生温い風が背を押した。

子供達は目的を決める。辿り着けるかは、わからないけれど。

「――行こう」

最後に見たのは荒れ果てた焦土だけ。

この世界には、未練など無い。

第三章《はじまり》：はじまりの寓話（3）

いつの間にか紅茶がすっかり冷めてしまって、千瀬は長い時間が経過していることに気がついた。
少女はロヴの語りが一区切りついた合間を見計らい、そっと周囲に視線を走らせる。ルカもミクも昔話――とはいえほんの十五年前だが――を懐かしそうに聞いていたし、エヴィルでさえも同様、心なしか楽しそうな表情を浮かべていた。
千瀬はぱちぱちと瞳を瞬かせる。今耳にした話は、けして幸せな思い出話だとは思えないのだけれど。

「疲れたかい？」

神妙な顔つきの子供二人を見て訊ねたロヴは笑顔であった。（月葉はもう退室していたので、実質この話を初めて耳にしているのは千瀬とルードの二人きりだ。）問われた二人はゆっくりと首を横に振る。

「……いえ」
「べつに……」

曖昧な返答が並ぶ。二人はけして話に疲れたわけではないし、ましてや飽きたわけでもないのだが、どうにもこの場の空気には溶け込みがたい。
ルードは今まで彼自身がともに行動してきた幹部の面々の過去に驚きを隠せないようだった。千瀬にいたっては、その壮絶さに思考がついていかないまま。まるで映画のようだ、と少女は思う。千瀬に映画鑑賞の経験は無かったので、あくまでも想像の範囲内だが。

（なんで、）

ロヴという男の幼少期の記憶は、不思議なほど鮮明だ。忘れようとしても忘れられぬものなのかもしれない、と千瀬は思った。ではなぜそれを、厭わずに受け入れているのだろう。苦しい経験をしたはずの張本人たちの様子に、ただ少女は首を傾げるばかりであった。

「続けても？」
「あ、はい」

お願いします。千瀬が言うとロヴは頷き、自らのカップに新しい紅茶を注ぐ。ついでに千瀬とルードのカップにも温かな液体を注ぎ足した。
温かい湯気が千瀬の鼻をくすぐる。ゴールデンドロップをぽとりと落とされ揺らめく褐色の水面にルカの横顔が映った。わらっている。

「……ありがとうございます」

カップに触れた人差し指が、温もりを取り戻して僅かに痺れた。
子供二人が肩の力を抜いたことを確認し、ロヴは再び口を開く。

「俺達がサンドラとレックスに出会うのは、それからもう少し先に話になる。一年……まぁ、その位後かな。俺達は一箇所に定住せずに、色んな国を転々としていた」
「そういえば、あればっちり不法入国だったのよね。気にしたことなかったけど」

コロコロと笑うルカに、何を今更と何でもないようにロヴが返す。
それにミクが加わって、しばし過去の旅話に花が咲いた。

金も何も無かったので、歩いて国境を突破したこと。追い剥ぎや盗賊に良く襲われたこと、幼い頃から血気盛んなエヴィルがそれを片っ端から返り討ちにしていたこと。

（こ、この人達は……）

今なら国境の一つや二つ、ジェット機でぽんぽん飛び越えるのになー。そう言ってロヴが笑った瞬間、千瀬は思わずこめかみを押さえてしまった。

住む世界が違う、今は同じはずなのに何かが違う。

困惑した少女がちらりと目をやれば首領の男がまた笑んで、ふと真剣な面持ちを浮かべた。

「……生きるためにはなんだってやった。どう足掻いても餓鬼は餓鬼、お世辞にもスマートな生き方とは言えないが」

食べるために盗んで、生きるために殺して。そういう生活を繰り返す中で、大人を憎んだのだとロヴは言う。不条理な世を作り出している政府を、ひいては作り出された世界そのものが嫌いだった。

「当時は俺たちもまだ思考回路が可愛らしくてね。“子供”を――俺たちと同じような境遇の奴がいるって国を探し出しては、出向いてそこの上層部を壊してやった。下層が犠牲になってる国に限って、政府の連中は裕福な生活を送っていたりしてな……それがどうにも気に食わなくて、皆殺しにしたこともある」

ロヴ率いる子供たちが一ヶ所に腰を落ち着けるようになるまでの数年間、この地球上では幾つかの村や国が崩壊し再構築を遂げている。一国の支配者暗殺や政府中枢へのテロは、歴史の流れの上では起こっても不自然ではない出来事だ。それをきっかけに革新を迎える所

も少なくはない。
ただしそれを暗に行っていたのがまだ年端も行かぬ子供であったなどと、誰か信じるだろう？（今でも幾つかの国の歴史では、彼らは“謎の暗殺者X”として語り継がれているに違いないのだ。）

正義を気取っていたわけじゃない。子供達は純粋に、嫌いなものを消していっただけだ。幼児の破壊衝動と、根本は同じ。
ロヴ達の行動は迅速かつ確実で、証拠を残したことは一度たりとも無かった。しかしいつの間にか彼らの存在は、“裏”と呼ばれるルートを辿って人々に語り継がれることになる。

「誰が言いだしたのかはわからない。気が付いたときには、俺達は“裏社会”で一躍有名になっていたようだ。情け容赦無い、餓鬼の犯罪集団――」

子供達は、その無邪気さと有り余る残虐性故にこう呼ばれた――“堕天使（ルシフェル）”、と。

「……ルシフェル？」

なんだか馴染みのある響きの単語に千瀬は首を傾げる。これに良く似た言葉を、すごく身近に知っている気がするのだが。

「神話の一つだよ。ルシフェルって言うのは天使の名でね、こいつは神に背いて地に堕とされ、後に地獄の“皇帝”として君臨する。《サタン》の異名だ。他には、ルキファーや“ルシファー”と呼ばれる」

あ、と声を上げた千瀬にロヴが笑って見せた。

「そうだ。我らが組織名“ルシファー”は、ここからとったものだよ」

一撃で気が付いても良さそうなものを、つい悩んでしまった自分に千瀬はばつの悪い思いをする。

幹部の面々の、幼き日々の痕跡を見つけると同時に、千瀬には何だか見えた気がした。初期メンバーの強い繋がり――サンドラが古い仲間のことを語るときに浮かべた表情や、そこから感じた絆、が。

そして、とロヴが続ける。

「文献にはこうある。面倒臭ければ聞き流していい――地獄の階級は、ルシフェルを筆頭にこう続くんだ」

ロヴは完全に暗記してしまっているそれを淀みなく紡いだ。地獄の階級と、悪魔の名前。

「【最高実力者】が皇帝ルシフェル、それから君主ベルゼビュート、大公爵アスタロト。その後に【上級悪魔】が続く」

ロヴは指を折りながら、六人の悪魔とその位を並べてみせた。その中の単語にぴくりとルードが反応を見せる。千瀬もそれは同じだった。

1、ルキフージュ＝ロフォカレ（宰相）
2、サタナキア（大将）
3、フルールティ（副将軍）
4、ネビロス（少将）
5、アガリアレプト（家老）

6、サルガタナス（旅団長）

「ルシフェルの配下に、六人の悪魔……」

――堕天使（ルシフェル）と呼ばれた子供達は、サンドラとレックスを入れて奇しくも六人。丁度、皇帝ルシフェルの従える悪魔と同じ数。

そして、ルシフェルと呼ばれた子供達の中で一番目立つ存在だった彼女に、その通り名がつけられるのは時間の問題であった。

千瀬はそっとその名を呟く。

「ルキフージュ＝ロフォカレ……」

「一般的には、ルシファージュやルキフゲ、ロフォカレルとも言われる。“テトラ”は俺達の中で最年少だったし、一番――殺傷能力が高かった。いつの間にか、世間からそう呼ばれてたんだよ」

世間と言っても裏で生きる一部の連中だが、とロヴは言う。

殺傷能力が高い、と言う言葉に千瀬は眉をひそめた。

まだ二十歳にも満たない少女とはいえ、ルカはエヴィル（副首領（エイド）不在の今となっては実質第二位だ。）曲者揃いである特戦隊のトップに君臨する彼女がそうとうの実力者であることは千瀬にもわかっていたが、そんな幼い頃からその力は健在だったのだろうか。

「そしてそれが、私の名前になったの」

「え……？」

黙っていたルカが口を開いた。ちょうど彼女のことを考えていた最中だったので驚き、ついでに話が飲み込めず（思考がそれていたせ

いだ）きょとんとする千瀬にロヴが言う。

「“ルカ”――この名は、エヴィルやミクと相談しながら俺が考えたものなんだ。いつまでも“４”じゃあ、なんだろう」

「ロヴ……が？」

“あの建物”の名残があるのも心地良いもんじゃなかったし、とロヴは独りごちる。

「“ルキフージュ”と“ロフォカレ”から、一つずつ音を拾ってな」

Ｌｕｃｉｆｕｇｅ＝Ｒｏｆｏｃａｌｅから、［Ｌｕ］と［Ｃａ］を。女の子らしい名の音の組み合わせにしないと駄目だってミクやサンドラに言われて大変だったんだ、と彼は笑う。

最年少の少女はさぞ仲間からも可愛がられていたのだろう。千瀬にはサンドラがルカの面倒を妹のように見てやる様子が想像できた。実際には、ルカは幼くとも一人で全てをこなせていたのだったが。

「はじめの方にした、聖職者の話を覚えてるかい」

「あ……“ルカ”、ですか？」

「そう――テトラの改名が済んでからしばらくして、ちょっと機会あって俺たちは聖書『ルカによる福音書』の存在を知った。皮肉だろう？　悪魔からとった名だったのに、同じ名前の聖職者がいたんだ」

その時のことを思い出したのか、初期メンバーの面々がくすくすと笑い合う。エヴィルが口元を綻ばしているのを見て、ルードはぎょっと体を強ばらせた。怖ぇーマジ怖ぇぇー、笑ってると逆に怖いよ。

「ロヴったら面白がっちゃって。あえて“ルカ”のスペルを、Ｌｕ

ｃａじゃなくてＬｕｋｅ……聖職者と同じ綴りにしちゃったの」

ルカ、と名付けられた少女が笑う。こうして彼女は生まれたのだと。そしてルカにとっては、ロヴこそが皇帝ルシフェル――忠誠を誓い、その身を捧げる相手なのだと千瀬は悟った。ルカだけではない、ここにいる誰もがこの首領の背を信じている。

「それじゃあ“ハーベント”の姓はどこから？」

もっともな千瀬の質問に、何故か苦笑を洩らすロヴ。彼の代わりに答えたのはルカだった。

「それはね、ロヴのお祖父さんが私に用意してくれた、偽造戸籍の名前なの」

「おじいさん？」

義理だ、とロヴが笑う。正確には義父に当たるんだが年が離れていたから、祖父と孫みたいなもんだった、と。

「ロヴが十三歳の時かな。ちょっと変り者で大富豪のおじーちゃんが、ロヴに養子の話を持ちかけたの」

それは六人が訪れた七つ目の国――それは誰もが知る大国アメリカだった――でいくつもの企業を営む、身寄りのない男だった。偶然出会ったロヴをいたく気に入ってしまい、ロヴに自分の養子になることを条件に、彼の全遺産相続を持ちかけたのである。

「グラモア・ウィル・ハーキンズ。あいつはちょっとどころじゃない、正真正銘の変人だ。素性のしれない餓鬼を養子にしたいなんて」

思い出すように吐き出されたエヴィルの言葉に全員が頷く。

「エヴィルやミクの姓も、グラモアが造ってくれたの。ロヴは私たちの為に、彼の養子になることを承諾したわ」

その頃彼らには目標があった。六人の居場所を作るけと。ルシファーを設立するという目的の為に、彼らには資金が必要だった。

「グラモアは、俺達が悪の道に遺産を利用しても構わないと言い切ったよ。俺達が人殺しなのも犯罪者なのにも気付いていたのに、な。本当に変な奴だった……」

懐かしそうにロヴは笑む。

『学園』の元持ち主でもあった、グラモア・ウィル・ハーキンズ。そして彼は、堕天使達がその死を悼んだ唯一の“大人”だったという。彼の病死後『学園』はロヴの物となり、同時に少年は犯罪シンジケート“ルシファー”を立ち上げた。ロヴ・ハーキンズ、十六歳のことである。

「ルキフージュがルカと名付けられたのを知っていたのはあたし達だけ。なのにユリシーズはルカの名を知っていた……やっぱりジェイの流した情報を受け取ってるのね」

そう言って、ミクが顔をしかめた。ジェイなる男の起こした波はまだこれからなのだろう。

それにしても、と悪魔の名を持つ少女は呟いた。

「ルキフージュとトリクオーテのレポートなんて物を“カーマロカ”が所持してたなんて。私、そっちのほうが驚き」

――ルキフージュを知ってる人間は、あの日に全部消したつもりだったのに――

そう呟いたルカの声を、千瀬は知らない。

挿話

青年は悩んでいた。

青年はとある組織にその身を置いている。組織は若干――否、かなり特別な環境下に置かれているため、平和維持を掲げて昼夜問わず活動しているのだが、その存在が表に出ることは無に等しかった。

青年はこの組織では幹部格にあたる。

幹部といえども一般企業などで展開されるようなデスクワークとは無縁だった。

この特別な環境では地位の高いものほどそれ相応の実力があることが常で、即ちフィールドワークに適していることを示す。それはここで言う“実力”が世間一般の意味とは違い、純粋に文字どおりの“力”――肉体を駆使する、暴力的な意味合いを兼ねて――であることが原因だろう。そう、ここはそういう“力”が必要な場所なのだ。

さてもうご理解戴けたことだろう、ここは普通の平和維持組織などではない。世界で唯一、武力によって世の中の不穏因子を抹消せんと日々活動している。普通の家庭に生まれて常識の範囲内で一生を終える人間には全く縁の無い、存在すら知られることの無い場所であった。名を、煉獄（カーマロカ）という。

さて幹部であるからには青年自身、それ相応の実力を有している。射撃の腕前や体力には自信もあるのだが、それはやはり“通常の人間と比べて”にすぎなかった。彼の上司には到底及ばない。

冒頭の通り、青年は悩んでいた。正確には悩まされていた。原因はただ一つ、まさにその上司にあたる少年のことである。

先日とある街で一仕事あって以来どうにも、様子がおかしい。恒常的に仕事意識の低い子供ではあったが、いざ本番となると嬉々として相手を追い詰めていたのに（それはそれで問題あるのだけれども）ここ数日はそれにさえ興味を失ったのか、本部である屋敷に籠もって出てこない。二人の従者をぴったり侍らせておきながら、当の本人は何をすることもなく窓の外を眺めていたりする。

どうにかせねばならない、と青年は思った。彼は真面目な性格ゆえ、自らの仕事には責任を持ち信じる正義を尊んでいる。彼の仕事には少年の力が必要不可欠なのだ、認めるのは癪だが。

「こんにちは、サブナック」

思考の海にどっぷり浸かっていた青年は、突如聞こえた声にぎょっと体を強ばらせた。何時の間にこんなところまで来ていたのか、少年を捜すうちに屋敷の奥まで入り込んでいたらしい。

「……ウォルディ閣下」

サブナックは渋々、目の前に立つ人物の名を口にした。無視するわけにもゆくまい、相手はサブナックよりひいては彼の上司――ユリシーズよりも更に高い地位につく者なのだから。

「久しぶりだね」

ウォルディと呼ばれた彼は小さな笑みを浮かべた。物腰柔らかな態度が親しみを覚えるが、やはりサブナックは緊張を解くことができずにいる。それはこのウォルディというまだ年若い少年の身分が、

あまりにも青年と違っているからだった。
――ウォルディ・レノ・ファンダルス、御歳十八。予定通りならば、この組織の次期当主である。

カーマロカにはある決まりごとがあり、組織内地位のピラミッドの天頂部のみ、その法則に則って構成されている。それ以下は先刻述べたとおりの実力順だ。
つまり天頂に組み込まれているウォルディとサブナックでは、生きる世界が違うのであった。

「ユリシーズを捜してるのかい」
「ええ、まぁ」

年齢に似付かわしくない落ち着いた声色でウォルディが問う。逆にサブナックは落ち着かぬ気持ちで視線を地に落としながら、心中でユリシーズに悪態を吐いた。
貴族のような衣服に身を包んだウォルディはさながら貴公子のようであったので、年中スーツのサブナックは余計肩身の狭い思いをする。

「ユリシーズならアイジャに捕まってる。当分は無理だよ」
「はぁ」

やんわりと追い返される形になりながら、はて、とサブナックは首を傾げた。
実力順で今の地位をもぎ取ったはずの恐るべし少年上司が、別世界の住人であるウォルディ閣下やアイジャ殿下とやけに親密なのはどういうわけか。

青年は悩んでいた。彼には、ユリシーズという少年のことが何一つ

わからなかったのである。

第四章《慟哭》：晩餐に祈る

この世の中は溢れるほどの不条理と、一握りの虚勢で出来ている。
幸せだと信じるそれは、きっと貴方の願望なのだ。

実は誰もが知っていた。
生き物は皆死に向かって時間を過ごし、歩いても辿り着けない場所があり、見えない何かに縋ってさえ、予感がしたときはもう手遅れ。

（知っていた）
（知らないふりをした）

パンドラの開けた空の箱に黄金の蝶を描いて、救いを求めた我々は
（本当は希望など残っていなかった。）
いつしかそれすら忘れて、偽善の中で生きるのでしょう！

（空を舞う天使の皆さん、その翼は本物ですか？）

さてここで言う者がある。
なら我々はせめて、世界を見返して逝こうじゃないか、と。

（他人の血糊で貼り付いていた偽りの翼なんぞ、剥がして捨てれば良いのです。）

“天に背け”　“神を欺け”
声高らかに復唱したら、ほうら行く先が見えませぬか。
堕ちるところまで墜ちて見るのも、これまた一興！

『これが私の世界だから』４

「乾杯！」

ぶつかり合うグラス、カラン、カランと氷の音。
ルシファー本部の中枢、ここ大広間には現在多くの組織員が集結している。今ここで催されているのは盛大なパーティであった。通称、“最後の晩餐”。
某有名絵画の名を拝借したこの会食は、この組織では頻繁に行われる催しの一つである。不吉な呼び名であることを気にする者は無い。
何故ならそれは整然たる事実だからだ。

「どの位留守に？」
「それぞれだけれど……私の場合は一ヵ月ってところかしら」
上質のワインを嚥下しながらサンドラが言う。質問の答えを得た千瀬はふぅんと一つ頷いて、長いテーブルに並べられた豪華な料理に目をやった。
次の任務が決まったのだ。今ここで行われているパーティは、これから遠征（本部外での長期任務）に向かう組織員を送り出すためのお決まり行事らしい。
全員が無事に帰って来られるかわからないから、“最後の”晩餐――などと、冗談にしては笑えない呼び名を考えだしたのは誰なのだろうか。
「チートセ！　お前も飲めよ」
ホールの端、壁にゆったりもたれながら駿が缶ビールを振る。隣にいるロザリーは早々に酔い潰れてしまったらしく（小さな体には酒の回りも早かったのだろう）すやすやと寝息を立てていた。
「未成年……」
「関係ねェ」
ここではロヴが法律だ、と十七歳の少年はアルコールをあおった。（この組織の首領は酒に滅法強い。）駿に勧められるままにビールを口にして、咄嗟に千瀬は眉を寄せた。
（……へんな味）
少女が酒を口にするのは実はこれが初めてである。日本という国の

決まりを考えればそれは当然だったが、彼女には一般家庭でしばし見られる、親が子に冗談半分味見させる――といった経験さえ皆無であった。
煙草は吸わないくせに酒には強い駿が、顔を顰めた千瀬を見て笑う。

「お子ちゃま」
「ウルサイ」

小さく丸まったロザリーに上着を掛けてやりながら、駿は三本目の缶を開けた。まだまだ余裕が見えているが、そんなペースで飲んでも平気なのかと千瀬は首を傾げた――今回の遠征には、駿も参加するのである。彼は春憐と組み、台湾に派遣されることになっていた。

今回遠征に向かうのは、駿と春憐の他にサンドラ、シアン、ツヅリ、ハルと朝深。うち四人は前回の任務に引き続いて二連続となる。ここにまだ日の浅い千瀬は居残りだ――とはいえもう仕事にも慣れていたし、それ相応の実力はあるのだが。
サンドラと朝深は単独任務で、他何組かは武器調達が目的と千瀬は聞いていた。
そして、菫（すみれ）は彼女本人の予想どおり、本日付けでまた別の地での勤務に移ることとなったらしい。情報処理に長けた少女は本部から離れたところで、影よりルシファーを支えることになるのだろう。

（後でお別れを言いに行かなきゃ）

淋しい、と思った。友達のいたことがなかった千瀬の人生で出会った、同じ年頃の女の子。菫が離れていってしまうことに感傷を覚えながら、しかし千瀬はそれで良かったと思う。
戦闘に不向きの彼女は、いつまでも前線にいるわけにはいかないのだ。きっとこの先、大きな仕事が待ち受けている。

〈ソルジャー〉による遠征とは別に、“ある仕事”に備える為に恭吾とルカも出掛けるのだという。千瀬はその仕事が“対カーマロカ戦”を示していることを知っていた。これを知っているのは未だ、〈ソルジャー〉の中では千瀬だけである。

（……ユリシーズ、）

千瀬の耳にはまだあの少年の声が残っている。耳元に直接囁かれる様な、寒気を伴う、あの声。

何だか嫌な感じだ、と千瀬は思った。あの少年の存在も、この晩餐会も。不吉な気配が拭えない。

「何だよ、お前。寂しいのかぁ？」

「……ばか」

黙りこくってしまった少女の顔を駿が覗き込む。憮然として返答を返しながら、その様子に笑った駿の顔を見て千瀬は無性に泣きたくなった。駿だけじゃない。ここの人々の笑顔は皆、千瀬の胸を締め付ける。

泣きたいだけで泣けないのが不思議だった。千瀬はもうずいぶん、泣くということをしなくなって久しい。

「――あらあら。どうしたのチトセ。酔っちゃったの？」

それともシュンにいじめられたのかしら、いじめてねぇよ。二人のやり取りを聞きながら、千瀬はくしゃりと顔を歪める。

これはなんだろう、と少女は考えた。優しく笑うサンドラを見ると、心の底から切なくなる。

「酔ってませーん。何でも、ないよ」

言いながら、千瀬はぎこちない笑顔を浮かべた。今自分は笑えているだろうか、考えながら目線をあげる。背の高い仲間の顔を覗き込んだ瞬間、上から何かが降ってきて千瀬の頭に着地した。それが駿の手だとわかったときには、滑らかな黒髪をくしゃくしゃと撫で回されていて。

「ほら、まだ夜は長いんだぜ？　次行くぞ、次」

切なさと愛しさで押し潰されそうになりながら千瀬は祈る。どうしよう、こんなにもう、大切になってしまった。

（嗚呼、みんな、大好きだよ）

あの少年の冷笑が消えない。嫌な寒気もしていた。千瀬がこれが予兆であったことに気付くのは、全てが終わった後の話になる。この二月後に失うものを知らない少女は、ただ願うことしかできなかったのだ。

（お願い。この安穏を、もう少しだけ）

第四章《慟哭》：少女と刀と（1）

ぴりりと感じる鈍い痛み、同時に頬に一筋の紅い線がひかれる。そこから流れ出した血を拭う間もないまま、千瀬は強く地面を蹴った。鯉口を切った刀は涼やかな音を鳴らし、引き抜けば煌めく銀の太刀。握りを僅かに変え、勢い良く後方へ刃を薙ぐ。

「……あれ」

しかし狙ったはずの場所に目標の首はなく、そのまま少女は動きを止めた。

確かに取ったと思ったのに。手応えはおろか擦った感触さえ無い。

「――何をしている？」

こっちだ、と声がした。千瀬がそちらを見れば、ターゲットであった筈のエヴィルが怪訝そうに顔をしかめる。

銀の髪をした青年は何時の間にやら、千瀬の遥か後方で退屈そうに胡坐をかいていた。猛禽のような目が細められ、その鋭い視線に千瀬は体を強ばらせてしまう。

エヴィルの片手には一丁の拳銃が小口を構えていて、それだけで少女は自身の命が現在進行形で彼の手に握られていることを知った。

「……本当に、俺を殺す気でやってるか？」

やりましたとも。声にならない声で呟いてから、千瀬は本日四度目の敗北宣言を口にする。参りました、と。

＊

遠征組を見送って暇を持て余していた千瀬のもとに、ミクとエヴィルが現れたのは、三日ほど前の話になる。

「訓練、ですか？」

「そ」

現れた幹部を前に千瀬は素っ頓狂な声を上げた。突然、稽古の場を設けるから参加しろと言う。驚く千瀬など気にもかけず、目の前に立つミクは事も無げに一つ頷いた。続いて口を開くのは無表情の青年。

「ロヴの配慮だ。お前は、実践経験が少ないから」

エヴィルの言葉に、はぁと千瀬は返事をするしかない。人工的な光を浴びて輝く青年の銀髪を間近で拝みながら、なんでわざわざ、と千瀬は考えた。

「あたし達が交互に相手をするわ。どう？」

獣を思わせるエヴィルの瞳はミクの髪と同じ色だ。階級の違う二人の組み合わせに少々の疑問を感じつつ、しかし千瀬はしっかりと首を縦に振った。

自分が暇であるということを除いたとしても、何時どう動いてくるのかさえわからない“カーマロカ”への不安を考えれば自ずと答え

は決まってくる。
第一上司直々の申し出を、断ることができようはずもないのだが。

「……お願いします」

その返事に気を良くしたのか、うん、とミクは笑った。
〈ハングマン〉と〈マーダラー〉の階級に君臨する者が、〈ソルジャー〉の実践訓練に動員される。
それが前例のない異例の待遇であることを、千瀬は知らない。

＊

斯くして千瀬の実践訓練は始められたのだったが、それは“訓練”と呼べるほど生易しいモノではなかった。この大変さは、千瀬の知っている言葉では形容し難い。

訓練内容は以下の通りである。千瀬は先日与えられた日本刀を片手にミクかエヴィル、どちらかとの真剣勝負を行う。一応殺しは無しで（一応、と言う点に激しく不安を覚えた）、動きを封じられた時点で敗け、というものだった。
一見して単純なこのルール、実はかなり酷な内容である。千瀬はこの三日間というもの、食事睡眠と僅かな休憩以外は動き通しであったし、何より実践の相手が桁外れに強かった。強いとしか言い様がない。
次元が違う、と何度心中で呟いたことか。証拠に、訓練を始めてから千瀬はまだ一度も相手へ満足にダメージを与えられていなかった

のである。

カルバラで高村という刀鍛冶から買い取った刀を使用する千瀬に対し、相手は二人とも素手であった。（しかしチェックメイトの瞬間にだけは、どこからともなく銃やナイフを取り出してくる。）

初めこそ丸腰相手に大怪我でもさせてしまったらどうしようかと思っていた千瀬であるが（刀の寸止めは苦手だったので）、それはものの数秒で杞憂に終わった。

殺す気で来ても構わないと軽く言い放った後、まだ躊躇する千瀬の頸動脈目がけて痺れを切らしたエヴィルのナイフが飛んで来たのはまだ記憶に新しい。その勢いは、彼のほうが千瀬を殺す気でいたのではないかと思うほどある。

以前駿からエヴィルの好戦的な性格について注意を受けていたことを思い出し、千瀬の体温は急激に低下した。

殺し無しのルールは千瀬の命を護る為だけに存在していたのだと、この瞬間少女は悟る。

半ば強制的に刀を抜かざるをえなくなった千瀬であるが、彼女の新しいパートナーとなった漆黒刀の切れ味には驚愕させられた。

あの日ピュティアスらと一戦交えた時には気が付かなかったのだが、かなりの名刀だ。何度エヴィルに吹き飛ばされようと、刃零れ一つしないのだから。

高村の打った刀は振るう毎に手に馴染み、真剣の重さなど感じさせぬ程に千瀬の意の儘に動いた。

千瀬自身にもわかるのだ、太刀の動きが、一振り毎に格段に速くなっていっていることが。それでもエヴィルとミクに傷を負わせることさえ叶わなかったのだが。

（……本当に強い、）

千瀬はそっと手元に視線を落とした。（一応）殺し無しとはいえ、本気を出さなければ殺られるかもしれない――それを感じ取った為、今や千瀬の攻撃は全力である。
にも関わらず、一時間ほど前に千瀬の放った渾身の一撃は――ミクの左胸を確実に捉えてしまったはずの一太刀は、彼女のブーツのヒールに刀ごと弾き飛ばされてしまったのだった。

「それじゃあ、休憩にする？」

そして冒頭の通り、またしてもエヴィルの動きを追いきれなかった千瀬はミクの声を耳にして肩の力を抜いた。本日初めての休息だが、昼食にはまだ少し早い。どうやらミクの気紛れらしいが、千瀬はありがたく頂戴することにする。そうでもないと体力が保たないのだ。

訓練は廃棄場を利用して行なわれていた。異臭にさえ慣れてしまえば（あまり喜ばしいことではないが）広いスペースを保持するこの場所は訓練には丁度良いのである。勿論、今ここに廃棄すべき“ゴミ”はない。
しかし時々箒を片手に、黒のゴミ袋を引っ提げた老婆がやって来るのだった。まさに、掃除婦のような出立ちの。

（……誰？）

質問のタイミングを逃した千瀬は首を傾げることしかできない。今度見かけたら聞いてみよう、と小さく心に誓った。

「差し入れ持ってきたぜぇ、チトセ」

突然上空から声が降った。どこからともなく現れたルードが、奇妙

な形の果実を持って隣に座り込む。偶然か、休憩時間ぴったりに合わせたような登場だ。
この少年はどこからか千瀬の訓練の話を聞き付け、こうして度々顔を出していた。
見学だけで帰る時もあれば、千瀬と一戦交える時もある。大抵はルードがお得意の“超能力”を使って勝負にならなくなってしまい、見かねたミクが止めに入るのだが。

差し入れ、と差し出された果物を目にした千瀬はぱちくりと瞬きを繰り返した。
どうしてこんなものが？

「これ、柘榴じゃない」
「へぇ、ザクロっていうんだ。ロヴに貰ったんだよ、珍しい食いもんだって」

言いながらルードが柘榴を口に放り込み、よくわかんねぇ味、と呟く。
千瀬は懐かしい日本の果物を手の中で転がしながらルードの隣に腰を下ろした。
柘榴の果実は人肉の味。そんな話を聞いたような気がしたが、隣の少年に言うのはやめておく。はたしてそれが本当に柘榴の話だったのか、千瀬の記憶は曖昧だった。
少女が日本にいた頃の思い出は日々薄れている。ここでの生活が積み重なっていくにつれ過去が流れてゆくのは自然なことなのだろうが、余りにも簡単に消えていく自分の記憶に千瀬は少々不安を覚えていた。

（あるつはいまー、とかだったりして）

悲しむべきは、不安に思うポイントがズレているのに本人が気付いていない点である。

「食わねぇの？」
「あ、いただきます」

ぷちりと口内で果実が弾ける。人肉の味なのかはわからなかった（人の肉など食べたことが無い、当たり前だ。）
千瀬は思い切り伸びをする。彼女はこの“休憩時間”が好きだった。それは体を休めることができるからではなく、様々な話を聞かせてもらえるからである。
ミクやルード、それから冷酷なイメージのあるエヴィルまでが、この時間中に色々なことを語ってくれるのだ。
千瀬の知らないルシファーについてや、彼らの過去の一ページを。

第四章《慟哭》：少女と刀と（2）

「あーあ、オレも修業すっかなぁ」

チトセと一緒にさ。

柘榴を完食したルードが掌に付着した果汁をぺろりと舐め取りながら言う。行動とは裏腹な真剣味を帯びた声に、千瀬は僅かに首を傾げた。

「？、どうして」

「ユリシーズ、だっけ。あいつを取り逃がした」

むかつく、と呟く少年に千瀬は苦笑を洩らす。あれは仕方の無かったことなのだが、ルードは納得がいかなかったらしい。

体が鈍ってたんだきっとそうだ、悔しそうに顔を歪めたまま彼は言葉を続ける。

「オレ、あの時けっこー真面目だったんだ。本気で、殺す気でやったのに……殺り損ねたの、人生で二人目」

それは相手が上だったんだろ。そう静かな声が聞こえてルードは頬を膨らませる。言ったエヴィルは床の上に腰を降ろしながら薄く笑ったので、ルードの機嫌は益々下降した。

ミクもエヴィルの隣に腰をおちつける。服が汚れるのを厭う様子もなく、どうやら本格的に休憩の態勢に入るらしい。

「……二人目？」

気になった単語を聞き返す千瀬に、ルードはぶつぶつ何かを呟きな

がら頷いた。

「そぉ、二人目。一人目は誰だと思う？」

「さぁ……。誰？」

くすりと笑い声が聞こえた。犯人はミクで、何が可笑しいのか彼女は目を細めながらルードを見つめている。気のせいか、隣のエヴィルまで楽しそうだ。

困惑する千瀬の前でルードがしまったという顔をした。説明を求める視線にハァと溜息を吐き、答えを告げる。

「――ルカ姉」

千瀬はぎょっとして目を見開いた。声を出さずに驚いた拍子、噛っていた柘榴の果汁が気管に入り込んでケホケホと咳き込んでしまう。むせる千瀬の背を軽く叩きながら、ホントだよ、とルードが笑った。

「な、なんでルカ……？」

「賭け、だったんだ」

賭け？

訳が分からない、といった様子で問い掛けた千瀬に応えたのはミクである。

金の髪を指にくるくると絡めながら、さも愉快そうに彼女は言葉を紡いだ。

「あの時のことは今でもルシファーで語り継がれてるわ。『無礼者伝説』ってね」

冗談めかした口調でそう言った彼女に、参ったなぁ、と苦笑するル

ードが可愛らしくてついつい千瀬も笑ってしまう。
笑われた少年はばつの悪そうな顔をつくった後、何かを誤魔化すようにぽりぽりと鼻の頭を掻いた。

「オレはさ、名前もない・家もない・金もないの三拍子揃ったどん底人生を送ってて。でも俺には“力”があったからどうにか一人で生きていけたし、そこそこに野良犬生活を楽しんでたんだ」

言外に、彼自身も“普通でない”タイプの子供だったのだ（それは今もだが）と告げて。
聞けばルードは東欧の貧民窟（スラム）の生まれで、窃盗や詐欺を始めに盗賊擬いの暮らしをしていたらしい。
捻くれた幼少期だったんだ、とルードは笑う。

「悪いことをしてる自覚はあったぜ。でもオレみたいなガキ、このくらいしか道はなかったし。何より、これで生きていける！　って自信があった。まぁアレだ、“チョーノーリョク”もあったわけだし？」

あっけらかんと言い放つルードに、はぁ、と千瀬は相づちをうつしかない。
どうもここのメンバーは、自分の過去の悲しみや苦しみに頓着しない傾向があるようだ。実はそれは千瀬自身にも当てはまるのだが、生憎とそれを指摘してくれる者などここにはいない。

「で、だ。そこにオレを迎えにきたのがルカ姉でさ」

つまりは、彼は“スカウト”でルシファーにやってきたと言うことだ。
何か嫌なことでも思い出したのか、ルードは軽く眉を寄せ思い切り

溜め息を吐いた。

「冗談じゃねぇ！　って思った。自由だってのがオレの人生唯一の売りだったのに、ワケわかんねー組織に縛られてたまるかって。オレ、相手は年上だけど女だったから……まぁ、ちょっと調子に乗って」

ああ、そう言えば、とミクが口を開く。

芝居じみた笑みを浮かべ、彼女はゆっくりと言葉を紡いだ。

「どこかにいたわね、愚かにもルカを殺そうと試みた子供が」

「……うわぁ」

呆れとも感嘆ともつかぬ声を上げた千瀬の横でルードが小さく呻いた。やめてくれ、と懇願するかのように手を挙げればミクが笑う。勘弁してよもう。困ったように眉を寄せれば、千瀬までが耐えきれなかったように笑いを漏らした。

「……今まで殺せなかった奴なんて一人もいなかったのに、ルカ姉には手も足も出なかった。それにあいつ、絶対本気じゃなかったんだ。ほんっとふざけてる――で、ルカ姉に惨敗した俺はルシファーに入って今に至る、と」

「後にも先にも、スカウトの時点で迎えを殺そうとしたのはあんただけだわ」

もう一度ミクが軽やかに笑った。止めを刺されたような気分になって、ルードは小さく項垂れる。自分からふってしまった話とはいえ、彼にしてみれば過去の大失態。それをこの新入りの日本人に知られることは、本意などではなかったのだから。

面白い子供を捕まえた。そう言って喜んだのはロヴだ。
名前の無かった少年は、後にこの話を聞いた他の初期メンバーから呼び名を贈呈されることになる。
――口の悪いおチビちゃん、“ＲＵＤＥ（無礼者）”と。

「ルカ姉がオレの生まれて初めて殺し損ねた相手ってのは、そういうこと。あんなやつ相手にするなんて、ユリシーズは自殺行為だ……いや、オレも大概馬鹿だったけど」

ルードは遠くを見つめ、ハァと再び息を吐いた。
何かを思い出していたのだろうが千瀬にはわからない。ただまた一つ、ここの人間の過去を知って共有させて貰えたような気分になった。

ルードは忘れない。あの日自分の吐いた暴言と、それを軽く受けとめてしまった黒髪の相手。
殺されたいのかよ、そう啖呵を切った少年に返ってきた言葉は『じゃあ殺してみる？』だ。

ルードは忘れない。
『私を殺せたら、この話無かったことにしてあげる』と、あの少女にそう言われた時点で負けは確定していたこと。今でもハメられたと思っている。
ルカの最後の一言にたまらなく戦慄した、あのぞくぞくする感じ。
恐怖と羨望を同時に見せ付けられ、名前と家まで強制的に与えられたあの日を、きっと少年は忘れない。

『それじゃ、遊ぼっか？』

第四章《慟哭》：少女と刀と（3）

千瀬はゆっくりと手足を伸ばした。爪先を反り返らせればふくらはぎの筋がぴんと張り、目が覚めるような気持ちになる。
ここ数日の経験上、そろそろ休息は終了のはずだった。ルードの話が一区切りついたところでエヴィルとミクが目配せをする、それは訓練再開の合図だ。

（さぁ、どうしようか）

千瀬は脇に置いた刀に目をやりながらふむと考え込む。次こそ一矢報いねば流石に悔しいものがあるのだ。どうにかして、人外の動きをやってのける二人に攻撃を当てなければならない。

（……フェイントとか？）

考えて、無理だと首を振る。そんなことをしても無駄なのはもう十分に理解しているのだ。
エヴィルは尋常ならざる反射神経の持ち主である。幼い頃からの環境がそうさせたのか、そのスピード自体が彼の“特殊能力”とやらなのかはわからない。
何にしろ、千瀬の攻撃があたらないことに変わりはなかった。
ミクの反応速度もかなりのものであったが、あたしのはただの勘よ、と彼女は言う。
何となく、この先に起こりそうなこと——例えば千瀬が今からどこに攻撃するかなど——がわかるのだと。

千瀬はそっと金髪の少女を盗み見る。ミクが〈ハングマン〉による〈ソルジャー〉のスカウトに同行する理由は（確かに千瀬の時もル

カと一緒であった）彼女が自分達の仲間となりうる者を見分ける力があるからだ、と教えてくれたのはルードだ。
それは“気配”に近い“匂い”の様なものだというが、説明されても千瀬にはさっぱり理解できなかった。

「さぁ、もう一頑張りしましょうか」

ミクに促されて立ち上がった千瀬は、今度こそと気合いを入れる。
次の休憩は昼食まで無いだろう。気合いを入れた傍から、お腹が空いたらどうしようかな、と不謹慎なことを考えてしまった。

「いけるか」
「はい。……今度は頑張りますよ、エヴィルの動きを追いきれるように」

千瀬が笑いかけて見れば、銀髪の青年は僅かに表情を和らげた。
エヴィルは怖い。無口だし無表情だし冷血だ、と見た目どおりのイメージをルードから刷り込まれていた千瀬であったが、この三日でそれは真実とは若干異なっていることがわかってきている。実は面倒見が良く、滅多に見せないが笑いもするのだ（多少凶悪な笑顔であったとしても。）

「……俺よりもルカのほうがずっと速いんだがな」
「え」

その、若干凶悪な笑みを薄らと浮かべながらエヴィルが吐いた言葉に千瀬は硬直した。
ルカって何者なんですか。何度も思ったこの疑問は、また千瀬の中に蓄積される。
その時、横にいたルードが素っ頓狂な声を上げた。

「な、なんだこれ！」
「何？」

見ればルードが持っているのは千瀬の日本刀で、（何時の間に、と少女は目を瞬いた）少年はそれを両手で支えながら驚愕の面持ちを浮かべている。
重すぎる。ルードは顔をしかめながら呟いた。

「お前、こんなモン振り回してんのかよ」

確かに真剣とは重たいものだ。規格のサイズでも重さは約一キロ強。千瀬が実家で練習に使用していたものなどは、生身で１４８０グラムと聞いていた。それに鞘の分と、使用する際は長さの比重がかなり加わる。
とても子供の、ましてや女児の細腕で使いこなせる代物ではない。
――しかし、

「え、そうかな……？」

千瀬はことりと首を傾げてみせた。それは決して強がり等ではなく。
――少女は、今までそれを重いと感じたことが無かったのである。
ましてや、重すぎて使えないと思ったことなんて一度も。

千瀬はルードから刀を受け取ると、片手でひょいと振ってみせた。
うげ、馬鹿力！　叫び声を上げた少年を失礼な、と睨み付ける。重たくなんてない、刀に関しては、重いと感じたことなどない。それはもうずっと昔からだ。
刀を手にするとそれが一本の腕のように感じられて、苦もなく刀を振るうことができた。幼い頃から片手で扱うことなど容易く、今で

は呼吸に等しい感覚でさえある。

「ルードの腕力が足りないんじゃない」

冗談を含ませながら小さく笑ってやると、ルードがぷうと頬を膨らませた。

オレ、チトセよりは力あるとおもうんだけどなぁ。少年はそうぼやくが、事実彼にはこの刀を振るうことはできそうになかった。

千瀬は漆黒の鞘に視線を落とす。

（別に、フツーだよね……？）

やはり重くはない。柄を握っている感覚と、冷たい存在感だけがそこにある。

もしや自分はとんでもない力持ちだったのだろうか、いやそんなはずは、と少女は思考を巡らせた。

子供たちの様子を黙ってみていたエヴィルがとんでもない事を口にしたのは、その次の瞬間である。

「……その刀、ロヴがタカムラに打たせた特注品だろう？」

「あ、はい。そうですけど」

「そいつの重さは、従来の五倍だったはずだ」

千瀬はぱちぱちと瞬きを繰り返した。いま、なんて。

追い付かない思考を示すかのように、ワンテンポ遅れて間抜けな声が出る。

「……はい？」

どーりで重たいと思った、と納得するルードをよそに、千瀬は一人

首を傾げた。待て待て、それはおかしいんじゃないか。自問自答を繰り返しながら、手中の日本刀を持ち上げ下から覗き込む。

（重い？）

本当に、これが？

刹那、その異常さに気が付いた千瀬は背筋が冷たくなる感覚に襲われた。おかしいじゃないか、これが本当に従来品より重たいならば、どうしてわからなかった？

千瀬は昔稽古に使用していた、一キロ強の刀の重みを思い浮べる。あの感じを忘れたわけではなかったが、今持っている漆黒との違いがわからない。

――おかしいのは、あたし、だ。

「気付いて、なかったのか」

「……はい」

黒沼千瀬は剣技の才に愛された子供だった。少なくとも、彼女の一族ではそう言われていた。

千瀬はけして力の強い子供ではないし、発育が良いわけでもない。どちらかといえば小柄であったし、腕の筋肉も必要最低限しかついていないのである。

それでも千瀬は特別だった。刀を扱うことに関してだけ、特別な才を発揮していたのだ。

（あたし、は）

千瀬は目を細めて思考に沈む。

幼い頃から苦もなく刀を扱うことができた。大人でさえ簡単にはいかない真剣を軽々と振ることのできたその日に、黒沼の伝統継承権

は姉から実妹へと移行したのだ。
千瀬がそれを疑問に思ったことは一度もない。単に自分は剣に向いているのだと、だからこそ自分は選ばれたのだと自らを納得させて。

「あたしって、変なんですか？」

無意識に口をついた疑問にはっと体を強ばらせる。声に出してしまった瞬間、それは確信にかわった。

（……なにか）

何か、忘れている気がする。
千瀬は刀を握り締め眉を寄せた。自分は刀を扱えて当たり前なのだ。重みなど感じなくて当然なのだ。どうして当然なのだろう？
なにか、なにか。忘れていること。忘れちゃ、いけなかったこと。

「……訓練は終わりよ、チトセ」

ぐるぐると堂々巡りの考えに囚われていると、静かな声が降ってくる。それがミクのものだということに気が付いて、千瀬はぽかんと口を開けた。

「……え、えぇ？　なんでですか？」

もう一頑張り、と。先刻言ったばかりではないか。
疑問に溢れた少女の顔を一瞥し、エヴィルが低く言葉を紡ぐ。

「この訓練の目的の大半は、お前にこの刀の重さを慣れさせるためだった。どうやらもう必要ない……それに、こちらの目的も遂げた」

銀髪の青年はすっと目を細める。千瀬を見つめながら、何かを考えるような素振りをみせた。
数秒の後、くるりとこちらに背を向けてエヴィルは廃棄場の外へ向かってしまう。

（――“こちらの目的”？）

最後に残された気になる言葉の意味を尋ねる間もないまま、ミクもエヴィルに続いて行ってしまった。
あっと言う間の出来事に千瀬はただ茫然とするしかない。

「……な、」

なんで？
物言いたげに口をぱくぱくさせる少女に、困ったようにルードが笑いかけた。

「終わりだってよ、ごくろーさん」

あいつらって我が道をゆくタイプだから気にすんな、そう言って千瀬の肩を叩く。
そうは言われても納得などできようはずもなかったが、上司の背を追い掛ける勇気は千瀬にはなかった。残されたのは、釈然としない妙な気持ちだけ。
斯くしてあっさりと、千瀬の訓練は終わりを迎えてしまったのである。

＊

青年は連れ立っていた金髪の少女と別れ、単身組織の深部へ向かう。ここにあるのは巨大な通信機だ。幹部の人間にしか扱えない、ルシファーの建物内全てを瞬時に繋いでみせる電子機器。

青年は乱暴に機械のパネルを開けると暗証番号をたたき込んだ。すぐに反応音がして、冷たい電子の声が響き渡る。

《暗証番号、指紋、確認しました。照合済みです。回線解除に入ります》

Ｅｖｉｌｌ　Ｂｒｕｔｕｓ.

使用者の欄に照合された名前が浮かび上がる。それをちらりと確認した後コードを告げ、繋げ、と小さく吐いた。

《声紋確認しました。お待ち下さい》

暫しして、プツ、と回線の繋がった音が響き渡った。瞬間青年の聞き慣れた、低く穏やかな声がスピーカーを介して聞こえてくる。

『俺だ』

「チトセの訓練を終了した。結果はお前の読み通りだ」

いきなり用件を告げるが、相手は驚いた様子もない。この男は自分の性格さえも熟知しているに違いない、とエヴィルは思う。それだけの時間を、共に過ごしてきた。

『……そうか。チトセは気付いていたのか？』

「――いや、全く。訓練中も刀を操るスピードは上がり続けた。重

さを苦にする様子もない」
『やはりな。エヴィル、お前はどう思う』
その問うような声音に、エヴィルは迷わず答えを告げる。疑いが確信に変わるにはまだ早い、しかし可能性は極めて高い。
「――本物かもしれない、と」
そうか、と答える声がした。もちろん顔は見えないが、エヴィルには相手の表情が手に取るようにわかる。
きっとこの男は笑っているのだ。自らの読みが当たったときの、悪戯に成功した瞬間の、あの顔。
「ああ。お前の言っていたとおり――チトセは、本当に“黒沼”の可能性がある」
『――“オミナエシ”が動くかどうか』
楽しそうな声色にエヴィルは小さく息を吐いた。また、何か企んでいるのか。
「どうする気だ？　ロヴ」
『アサミに策を聞いてみようか。アジアの魔女を拝めるかもしれないぞ』
「……知らないからな。どうなっても」
ロヴ・ハーキンズのすることに間違いはないのだ。エヴィルはそれを十二分に承知していた。
地の果てまでも、自分は彼について行くだろうと思う。あの新入りの日本人についても、ロヴの考えを邪魔立てする理由はない。

『それより――気になる情報が入ってな』
「……？、どうした」
ふいに落とされた声にエヴィルは眉を寄せた。良くない知らせだと直感で理解する。血生臭い、避けられぬ気配と影。
『遠征に同行させた《パース》と《ポート》に死者が出ている。何者かに襲われたらしいが』
「……どこだ？　派遣したソルジャーに連絡は。確か二人、シュンとシュンレンは台湾に行っているな。残りは確か全員――」
ああまた、血の匂いがする。
通信を断つ寸前、エヴィルは確かにその香りを感じていた。
『――日本だ』

第四章《慟哭》：間話

ごぽり、とそれの口から溢れ出した血液を見て自然と口元が弛んだ。
もう少し、もう少し見ていたい。生命の消えゆく瞬間などもう見慣れたものだったが、今日は妙に気分が高揚をしてしまう。否、今日だけじゃない、ここ数日ずっと。

衝動が抑えきれなくなって、手当たり次第に手にかけてみたのがつい先刻。殺したばかりのそれの腹部に手を捻じ込んで掻き回せば、ぐしゅりと滑稽な音がした。
内臓とは案外温かい物らしい。そこから湯気が立ち上っているのを見て、思わずほくそ笑んでしまう。

（嗚呼、）

返り血を指先で掬い取って舐めると、ほろ苦い鉄の味。それがこの上なく芳しく感じてしまって、どうにもならない。
――先日“あれ”と接触してから自分はどうにもおかしい、とぼんやり《それ》は考えた。殺人衝動が溢れて、溢れて、仕方がない。

（まるで、昔みたいだ）

昔のように。それが存在理由だったあの頃のように。
《それ》はこくりと首を傾げた。妙な気分である。自分は自分なのに自分じゃない、自分のなかに、もう一人いる感じだ。
今まで表で生きていた自分は、今は静かに眠っているのだろう。眠

らされている、というべきか。他でもない、今表に出ている自分のせい。

（これは自由、だ！）

《それ》は小さく笑った。

隠してきた殺人衝動が今の自分となったに違いない。ようやく形になったのだ。

いつかこうなることはわかっていたが、きっかけは間違いなく“あれ”だろう。

嗚呼、苦心して押さえ込んできたのに。嗚呼、可哀想な“自分”！

気付けば周囲に生きている者はいなくて少しだけ落胆する。もっと、もっと。血肉が欲しい。

次の獲物を定める前に、ちらりと“あの子”の顔が頭を過ぎった。

ごめん。

ごめん。

ごめん。

でも、もう止まらない。

（従えない、従いたい、それはア・プリオリ！）

第四章《慟哭》：血涙カタルシス（1）

胸の辺りがざわつく、いやな感じがする。何故だろう、血の臭いがする、と千瀬はふいに思った。

（集中しなくちゃ）

千瀬は今現在単独任務の真っ最中である。駿やロザリーといったお目付け役（もとい教育係）から離しても問題がないと判断されるまでに、ようやく少女は時間と場数を踏んだのだった。

とはいえ、まだまだ新米の千瀬に重要難解な仕事は与えられない。今回の任務も極々簡単なものである。

「黒沼さん、準備は宜しいですか」

「あ、はい」

黒塗りのリムジンの扉を厳かに開けられて面食らった。千瀬に声を掛けたのは屈強な西洋人の男で、彼は今回の仕事で千瀬のサポートに回る人物である。要は千瀬に与えられた部下だ。

ジャッカ・ロッソと言うらしいその男は《ポート》所属の人間で、さらにＥＰＰＣの所在を知る数少ないうちの一人である。階級的にも〈ソルジャー〉である千瀬に従って当然の相手だったが、どうにも千瀬はそれに慣れなかった。

自分より遥かに年上の男が腰を低くし、さらには頭を下げたりする。やはり違和感は拭えない。

「出発します」

千瀬は無言で頷いた。黒のカッターシャツにネクタイを締め、スカ

ートとブーツを合わせている。あの初陣と同じ格好だ。違うのは、少女の腰に差された一振りの得物。
ジャッカの他にも数人の男が千瀬の任務に同行するが、その全ての人間にロヴの“トランス能力”が施されていた。無論、ジャッカ等はそれを知らない。千瀬のほうが男たちと同じ言葉を喋っていると信じて疑わないだろう。

（便利だなぁ、）

すっかりこの不思議な現象に慣れてしまった千瀬は、のんびりと支給された飲み物のボトルに手を伸ばした。
相変わらずリムジンの窓は遮光フィルターで真っ黒である。勿論外は見えないし、目的地も知らされていなかった。ただ一つ、わかることは。
これから千瀬は、人を斬りに行く。

＊

車に揺られて着いた先、千瀬が降り立ったのは豪奢なホテルの前であった。白塗りの壁が美しい巨大な建物に息を呑む。ロビーに入れば大理石の床に目を奪われた。ジャッカが先にフロントに向かい、幾つか言葉を交わしてカードキーを受け取ってくる。
ここが今回千瀬に与えられた待機場所だった。宿泊するのは千瀬だけ、部下にあたる面々は傍の別宅とロビーとに待機することになるらしい。

余りの待遇の良さに千瀬は辟易しつつ、いつぞや駿の言っていたＶＩＰという言葉を思い出した。

（……なるほど。）

ルシファー本部では一部屋に押し込められている分、外で羽を伸ばせと言うことらしい。千瀬からすればこんな豪華な空間、なんだか落ち着かないのだが。

「チトセちゃ～ん。コーラとオレンジジュースどっちが良いっスか？」

千瀬がロビーのソファーにぼんやり沈んでいると、突如背後から快活な声がした。千瀬はそれに笑って、オレンジ、と小さく答える。はいどーぞ、千瀬にグラスを手渡しながら声の主はどっかり隣に腰掛けた。

「一人の任務は初めてでしょう？　怖くない？　その刀使えるんスか？」

矢継ぎ早に質問を浴びせかける相手に、千瀬はやんわりと苦笑を浮かべた。質問に答える隙がないではないか。

親しげに語り掛けるこの青年は名をデューイと言う。年は二十を少し越えたばかりで、ジャッカと同じ《ポート》の人間だった。デューイ程の年齢でここまでの昇格は難しいので、余程彼は優秀なのだろう（ちなみにジャッカ・ロッソはもうじき四十になる。）

千瀬がデューイに頼まれて刀を見せていると――勿論触らせはしなかったが――突如後ろから怒号が響いた。

「マクスウェル！」

ジャッカの声だった。呼ばれたデューイ・マクスウェルはうへっと首を竦めてみせる。

「言葉遣いを慎めと言ったはずだ！　馴々しく話し掛けるんじゃない」

「へぇ、すんません」

ですがねぇロッソさん、デューイは悪戯っぽく千瀬に目をやりながら口を綻ばせる。千瀬は目線でそれに答えながらジャッカの顔色を伺った。

「チトセちゃん、まだ十四ですよ。話し相手がいないのは淋しいかと思いまして」

「その呼び方を改めろ！」

無礼をお許しください黒沼さん、そう言って頭を下げるジャッカに千瀬は慌てて両手を振った。堅苦しいのは嫌いだ、例え上司と部下だとしても。千瀬はデューイが気さくに話し掛けてくれることが嬉しかったし、咎める気など全くなかった。

ジャッカについても、はじめ黒沼“様”と呼ばれたのをどうにか“さん”で妥協してもらったのである。

「マクスウェル、黒沼さんをお部屋にご案内しろ」

「へぃ」

すまし顔でカードキーを受け取ったデューイにおとなしく千瀬は着いて行く。エレベーターに乗ったところで、堪えきれなかったように青年が吹き出した。千瀬も釣られて笑ってしまう。

「まったく、ロッソさんは頭が堅くていけねーや。ねぇ？」
「あたし嫌ですよ、あんな良い大人の男の人に頭下げられるの。極道みたい」
「ゴクドー？」

首を傾げた青年に、何でもないと千瀬は笑う。デューイは片手でカードキーを弄びながら、まぁ、と口を開いた。エレベーターが最上階に停止する。

「実際無礼者は俺なんスけどねー。チトセちゃんは正真正銘、俺らの上司だし」
「……別に、気にしなくて良いのに」
「組織ってのはそうもいかねーんですよ。ケジメってもんがあるんでしょ」

ふぅん、と少女は相槌を打った。いまいち、彼らが自分の部下という実感が沸かない。
千瀬は子供で、デューイやジャッカは大人だった。いくら千瀬に特戦隊（ＥＰＰＣ）所属の肩書きがあるとはいえ、ビジュアル的にはどうにも不釣り合いなのだ。そもそも子供がこんな所にいる時点で、一般常識からは逸脱していたのだが。

「チトセちゃんは今回の任務、俺らの指揮官かつ最終兵器ですからね。丁重におもてなししねーと」

神妙に頷くデューイに曖昧な笑いを返す。青年の言うことは半分本当で、半分は嘘だった。
任務の指揮をとるのは階級の都合上、表向きは千瀬だ。しかし実際はジャッカが代理で行うことになっている。
今回の仕事内容はルシファーのシマ――と言うと聞こえが悪いが、

要は縄張り――の巡察かつ不穏分子の排除だ。傘下に入れている組織の懐まで入り込み、身勝手な行動を牽制する。政治的な意味合いも兼ねたこの任務に、千瀬のような子供の出る幕はない。
千瀬の役目はただ一つ、武力による制圧である。千瀬は兵器だ、それも極秘の。

「俺ね、虐殺隊（スローター）の人と仕事すんのはじめてなんスよ。だから舞い上がっちまって」

至極嬉しそうに、そして誇らしげにデューイは言う。
“スローター”とは特戦隊の異名だ。漢字を当てると恐ろしいが、“Ｒｅｄ　Ｈａｎｄｓ”よりは幾分聞こえが良い気がする。

「知ってます？　スローターと仕事ができんのは昇進の証なんスよ。うちの組織は階級がわりとはっきりしてて、一番下層の《パース》連中はスローター……ＥＰＰＣの存在を知らない。俺たち《ポート》にも幾つかグループがあるんスけど、その内の上部幾つかしかＥＰＰＣと関わりを持てねーんです」

機関銃のように喋り続けるデューイの横に並んで歩きながら、ああ誰かそんなことを言っていた気がする、と千瀬は思った。
同じ組織内の人間にさえ知らされることのない、首領直属戦闘部隊。そこに位置するのが千瀬なのだ。

「俺やロッソさんの所属グループは七見女史の直轄でね、お陰でちょっと上を覗けるわけですよ」
「ああ、月葉さんの」
月葉は《テトラコマンダー》の代表者なのだと聞いている。確かに《ポート》はその配下だった。

俺たちは運が良い、そういってデューイは笑う。

「ＥＰＰＣの噂は《ポート》に昇格した頃から聞いてたんスよ。若い精鋭だとは言われてたけど、こんな女の子がいるなんてなぁ」

おっと失礼と慌てて青年が姿勢を正すが、余りにも感心したように言うので千瀬は笑いを禁じえない。

それは驚くだろう、組織の戦闘部隊がこんな子供だ。千瀬が刀を抜くのを見れば、さらに驚くに違いない。

「俺、まだ〈ハングマン〉は見たことないんスよ。反則みたいに強いらしいって噂だけ――いったいどんな強面なんだか」

巌のように屈強な男を想像しているらしいデューイに、千瀬は心中で吹き出した。

反則並みの強さを誇る〈ハングマン〉の正体が、まだ幼さを残す十代の少女と（見た目だけは）線の細い青年だと知ったらデューイはなんというのだろうか。

「あ、でも〈マーダラー〉はお一人だけ見たことがありますよ、偶然スけど」

「誰？」

ミクかルードか、はたまた恭吾か。ルードならばまたさぞかし驚いたんだろうな、そう思った千瀬が耳にしたのはしかし、全く聞き覚えのない名であった。

「アルファーナさんですよ。あの人外回りが多いらしいから、その時に偶々」

「……？、」

首を傾げた千瀬の前に、巨大な扉が立ちふさがった。金渕と同じ色の把手が金のかかり具合を示しているようで恐ろしい。

「さ、ここがチトセちゃんの部屋っスよー」

「……。」

扉を開いた瞬間目に入ったのは深紅の絨毯。高級革ソファーとシャンデリア、ガラス張りのバスルーム、挙げ句の果てにはワインセラーまである。

最上階のスウィートをあてがわれた少女は、一人無言で途方に暮れた。

＊＊＊

同時刻。東洋に浮かぶ小さな島国の一角で、静かに、しかし確実に異変が起こっていた。

……ずっ。　……ず、　……ずる。

《それ》は微笑みを浮かべた。最高の気分だ。まだ温かいものを引きずって、歩く、歩く、歩く。

地面と擦れた部分に、ざらつく血痕。紅の絵の具で線を描いているみたいだ、と恍惚に染まった頭の端で思う。

楽しい、楽しい。もっと絵を描こう。

昼間仕事をこなしていた自分と日が落ちた後の自分の違いは、いまや《それ》自身判別ができていなかった。数日前は確かな異変を感じていたのに、今は何も解らない。
夜の間に自分が何をしていたか、朝が来れば忘れてしまうのである。

（おもて、の自分は何もわかっていない。いま、の自分も、何をしたか、も。）
（おもて、はダレ？　今はドチラ？　自分は、自分、は、）

狂っていく。少しずつ、確実に。
ゴキンと音がした。死体の首を持って動かしていたために、根元から折れたのだ。
不自然な方向に曲がった首から白いモノが飛び出してしまったので、道端に投げ捨てる。
壊れた玩具の襟元には、アルファベットの刻まれた瑠璃色の紋章が付けられていた。

――――“ＰＯＲＴ（ポート）”

第四章《慟哭》：血涙カタルシス（2）

ぐしゃり、響いた水音が心地良い。生温くむせ返るような臭気に浸りながら、《それ》はただ口角を上げる。
微笑みの形に唇が凝固してしまったらしい。楽しいのかそうでないのか、自分が何をしているのか。ワカラナイ、分からない、解らない、解らない。どんどんわからなくなってゆく。

「――お、お前……！」

口元を歪めて笑みを濃くする。突き刺したナイフを捻ると、溢れるのは鮮やかな赤だった。
綺麗だ。昔はずっとずっと、この色を追い掛けていたのに。

「ど……うし、て」

さぁ、どうしてだろう？
《それ》はゆるりと首を傾げた。今自分は何をしているんだろうか。目の前の死にかけた肉塊が答えを教えてくれそうで見つめてみるが、結局回答を得る前に事切れてしまった。

（つまらない）

朝目覚める。一日を過ごし、日が落ちる。その後記憶が飛んで、気が付けばこんな惨状が広がっている。きっと目が覚めれば、また自分は困惑するに違いない。このような惨状を作り上げている今この瞬間を、綺麗さっぱり忘れてしまって。
お前、は

俺、は
僕
私、
ワタシ　ハ　誰　？

考えるのは止めよう――《それ》はついと踵を返した。まだ体が血を欲している。まだ、足りないのだ。

――今はただ、血と涙と惨劇のカタルシスに溺れて。

＊＊＊

“ヴィンセント・ホープ”という名の企業がある。ヴィンセント財閥の起こした巨大な取引会社だ。裏で不法の取引を繰り返し莫大な利益を得、その界隈を瞬く間に伸し上がったそこはしかし、トップの座を掴むと同時にある組織に吸収された。
その組織名をルシファー、今やその世界では知らぬ者の無い、数多の触手を伸ばし続ける巨大企業――その正体は一人の青年の立ち上げた、犯罪シンジケートである。
ルシファーはヴィンセント・ホープをはじめとした多数の組織を傘下に入れていた。それはヴィンセントのような財閥から中小企業、はては血気盛んなマフィアの一団までに及ぶ。
吸収という名の制圧にあい影も形も無くなったグループもあれば、表向きは独立したままで生き残り、実際の利益は全てルシファーに献上する形をとらされている所もあった。ヴィンセント・ホープは後者である。そしてそのような境遇のグループは例外なく、傘下か

らの解放を虎視眈々と狙っているのだった。

「ヴィンセント・ホープ……」

ＨＯＰＥ、などと名乗っておきながら随分物騒なグループだな、と千瀬はぼんやり考えた。お喋り好きの部下デューイ・マクスウェルによる解説で漸く判明した、今回の仕事相手である。ヴィンセント・ホープはここ最近怪しい動きを繰り返しているのだった。利益の申告をあやふやにしつつ、どうも再独立の機会を探しているらしい。

一度気持ちの剥がれ落ちた相手を縛り付けるには、御灸を据えるのが一番効果的なのだと言う。しかしその“御灸”役が子供一人で、はたして効果は期待できるのだろうか。自分の幼い容姿を自覚している千瀬は小さく溜め息を吐いた。

「心配スか？　チトセちゃん」

尋ねられて首を横に振る。なめられるに決まってる、なんて言わなくてもきっとわかっているだろう。デューイは千瀬に笑いかけると目の前の建物を指差した。

――今二人は大きな屋敷の前に居る。昨晩あの高級ホテルで一泊した後、日の出と共に出発したのだった。目的地はまさにこの屋敷、ヴィンセント・ホープの本拠地。

ジャッカは残りのメンバーを引きつれ、一足先に屋敷に入っていったらしい。表向きは穏便な話し合い――こちらから注意を呼び掛けるだけという形を取るのだが、そう簡単に行くはずないのはわかっている。

「チトセちゃんは裏から入って、屋敷のＳＰ連中をサクッとのしてやってください。で、タイミング見計らってロッソさんと合流する。

俺は誰も逃げ出さねーように見張りを仰せつかってるんで」

ここのSPは鍛えられてるらしいから、きっと暇つぶしにはなりますよ。そう言って快活に笑うデューイは、一体自分のことをどう思っているのだろうか、と千瀬は考える。

この青年は虐殺隊（スローター）の力を過信しているのかもしれない。千瀬の戦闘を見たことなどないのに、その能力を信じて疑わないのだ。

無論千瀬とて、負けてやる気など微塵もなかったのだが。

時間です、と青年が表情を引き締める。

「ご武運を！」

「また後でね」

デューイの声に背中を押されて屋敷の垣根を飛び越える。裏口に鍵が掛かっているのを確認しそれを刀の切っ先で突き壊しながら、唐突に千瀬は思った。

（てゆーか、一番物騒なのってルシファーじゃん……）

＊

グレッグ・A・ヴィンセントは苛々していた。先刻からずっと目の前に腰を落ち着けている中年男の眉間を、懐の愛銃で打ち抜いてやりたくて仕方がないのだ。

名をジャッカ・なんたらと言うらしいその相手の男は（グレッグには覚える気すら起こらなかった）、先程からずっとこちらの――ヴ

ィンセント・ホープの最近の不手際についてを昏々と説いているのだった。

馬鹿め、とグレッグは思う。目の前の中年はこの会談で全てを丸く収めるつもりらしいのだが、ヴィンセント側はこの機会を狙い続けていたのである。使者の男など叩き潰して、それを気に一気に傘下脱却を図りたい。

（タイミングが肝心だ）

問題はいつ殺すかだと心中で独りごちて、グレッグは背後に視線を送る。彼の後ろには先日ヴィンセントで雇った、ボディーガード兼殺し屋の巨漢が控えていた。漆黒の衣服で身を固めたその男は、グレッグの指一本でルシファーからの使者を葬るだろう。

ジャッカを殺すのはまだ先だ。こちらがルシファーの要求を飲むように見せ掛けた、その後。落とすならば一番上まで持ち上げてから、というのがグレッグのポリシーである。言うまでもないが、彼の性格はひどく捻くれていた（それはもう裏組織には持って来いの人材だ。）

ジャッカ・ロッソは相手が自分の名を覚えていないことに気付かぬまま一通り喋り終えた後、その懐から一枚の証書を取り出した。“ヴィンセント・ホープ”が今後も“ルシファー”に従うことを書き記した誓約書である。

ついに来た、とグレッグは口角を上げた。ヴィンセントの一族が、ルシファーの若造に一泡吹かせてやるときが！

グレッグはしおらしく証書に手を伸ばし、卓上の朱肉を引き寄せた。判代わりに押すのは拇印である。グレッグはその親指をインクに浸すふりをしながら、もう一方の手で殺し屋にサインを送った。送った、はずだった。

（！？）

その異変に気が付いて、グレッグの背を嫌な汗が伝う。なぜだろう、ボディーガード兼殺し屋の件の男はこちらを見もしないのだ。意図的に無視しているようにさえ感じる。

「おい、ウォール。ウォール！」

グレッグは小声で素早く囁いた。しかしウォールと呼ばれたその巨漢は俯いたまま、ぴくりとも反応を返さない。まさか居眠りでもしているのだろうか？

――計画が。グレッグは焦りを感じた。このままではまずい。

「ウォール！」

「どうなさいました、ミスター・ヴィンセント？」

ジャッカがその不自然さに気付かぬはずはなかった。問われたグレッグは思わず舌打ちして、次の瞬間その失態に気が付く。今まで温厚に話をしていた目の前の男が、手首の先から拳銃を滑り出させたからだ。

「……印を頂戴しましょうか」

低くなった声のトーンに身震いする。流石は犯罪シンジケート、脅しには慣れているのだろうか。

グレッグは歯噛みしながら証書に目を落とした。これに判を押せば全て終わってしまう。ルシファーを潰す前に、また力を封じられてしまう。

「……ウォール！　貴様、」

「その男に何をさせるおつもりで？」

ごり、とグレッグの眉間に銃口が突き付けられた。頼みの綱はまだ無視を決め込んでいる。

ルシファー側ははじめからわかっていたのだと、ここではじめてグレッグは悟った。ヴィンセントがルシファーに歯向かう機会を伺っていたことなどとうに知られていたに違いない。

……気が付いたところで、もう遅かった。

「……う、わあぁあぁあッ！」

動揺したグレッグは自らの懐から銃を抜き取り、真っすぐジャッカに向ける。幸いなことにジャッカの銃が発砲されることは無かったが、それ以上ぴくりとも動くことはできない。

駄目だ駄目だ駄目だ、焦りばかりが渦巻いてゆく。

隠すことなどできまい。もう知ったことか、とグレッグは大声をあげた。

「ウォール！　こいつを殺せっ！！」

「その前にこちらが引き金をひきましょう」

「畜生、」

なぜ殺し屋は動かない？

全ての誤算はそこからはじまっていることを知っていても、もはやグレッグになす術はなかった。

例え彼が発砲してジャッカを殺しても、ジャッカの後ろにはルシファーからのその他の使者が控えている。勝ち目は、ない。

「畜生！　ＳＰはどうした！？　誰か、」

半ば錯乱した状態のグレッグだったが、屋敷に雇った要人警護の人間の存在を思い出し、必死の形相で声を荒げた。
瞬間、勢い良く彼のいる部屋の扉が開かれる。現れたのはＳＰの一人だった。それを見て直ぐ様グレッグは命令を下す。

「おい、こいつを取り――――、？」

押さえろ、と続くはずの言葉は宙に掻き消えた。ＳＰの男が無言のままどさりと崩れ落ちたのである。その背後から現れた人影に、グレッグの目は点になった。

「……な、」

あんぐりと口を開くことしかできない。
先刻までＳＰの居た場所に立っていたのは、一人の幼い少女だったのである。

第四章《慟哭》：血涙カタルシス（3）

グレッグの瞳に映し出された、黒髪黒目の東洋人。腰にぶら下げた細長い得物が、少女の華奢な体には不釣り合いだった。
倒れたＳＰの背中に鋭い刀傷を認めて、途端グレッグの表情が凍り付く。

「あれ？　もう着いちゃった」

黒髪の少女が言葉を発したが、それはグレッグには理解できなかった。日本語か中国語か、どちらにせよ少女の母国語なのだろうと思う。帯刀した小娘（にしかグレッグには見えなかった）は汗一つかいた様子もなく部屋の中を見渡していたが、グレッグとジャッカの向け合った銃口を見て初めて驚いたような顔をした。

「……この餓鬼は、なんだ、？」

絞りだしたグレッグの声は情けなく擦れていた。手元の拳銃もカタカタと震える。
そんな彼を一別し、ルシファーの使者は笑みを浮かべた。ジャッカはこの瞬間勝利を確信していたのだから当然だ。最早ヴィンセントに、逃げ場はない。

「お宅のＳＰは、その“餓鬼”に全てやられてしまったようですよ」
「……なに、を」

何を言っている？
グレッグの唇が恐怖から来る興奮でわなないた。顔面の筋肉がひくりと引きつる。

「嘘、だ。嘘だ！　こんな小娘に何ができる！？」

突然叫びだしたグレッグはそのまま半狂乱で両手を大きく振り回す。火事場の底力か、勢いのついた男の腕は目の前に居たジャッカの顔前を轟音と共に掠めていった。

使い方は間違っているが、この瞬間に拳銃も立派な鈍器と化す。金属の固まりは避けきれなかったジャッカの腕と接触し、衝撃でその手に握られていた銃は弾き飛ばされていった。

「――っ！？」

銃を奪われたジャッカの表情が焦燥に歪む。同時に笑ったのはグレッグだった。先刻までの様子は何処へやら、彼は悠然と拳銃を再び構え、丸腰と化した目の前の男に銃口を突き付ける。

それを見て漸く、小娘――もとい千瀬は場の切迫した様子に気が付いたようだった。

みすみすジャッカを打たれるわけにはいかない。千瀬は間合いを計りながら鯉口を切り、一足飛びに切り込んだ――切り込もうと、した。

「――まァまァ、熱くなりなさんな」

千瀬の行動はすんでのところで未遂に終わった。何故なら、千瀬よりも先にグレッグとジャッカの間には大きな腕が割り込んでいたのである。

その巨漢は飄々とグレッグの腕を抑えつけ、拳銃を取り上げるとそのまま捻り潰してしまった。へにゃりと歪んでしまった銃を目にしたグレッグが、蛙の潰れたような声を上げる。（ぐぇ！）

「気付かなかった時点でお前さんの負けだよ、ヴィンセント。死にたくなけりゃあ、おとなしくすることった」

あっけらかんと言い放ったのはジャッカでも――ましてや千瀬でもなく、何故かヴィンセントの雇った殺し屋の男であった。現状の飲み込めぬグレッグはぱくぱくと口の開閉を繰り返してしまう。

……ウォール、貴様どうして命令に従わない？　暫しの沈黙の後、グレッグが茫然と呟いた。

しかしこの状況に誰よりも驚いたのは千瀬だ。相手の雇われ殺し屋がどうやら寝返ったらしい、それだけならばまだ分かる。しかし少女には巨漢の殺し屋、その声と姿に覚えがありすぎたのだ。おまけに日本人でないはずのこの男の言葉が千瀬にわかるとあっては、理由は一つしか考えられない。

「……レックス……？」

千瀬は唯一思い当たるその名を静かに、しかし確信を持って呟く。瞬間、終始俯き加減であった大男がふっと声を漏らした。潰した拳銃をぽいと投げ捨て、千瀬に向かってにかりと白い歯を見せる。

「よぉ、チィ。お疲れさん」

「やっぱり……！」

レックスはきっちりと締めていたネクタイを緩めながら、がしがしと千瀬の頭を撫でる。（反動で千瀬の首が折れそうになった。）

その様子を眺めていたグレッグとジャッカはぽかんと間の抜けた顔をした後、双方正反対の表情を作り上げた。謎のボディーガード兼殺し屋が千瀬の仲間――つまりはＥＰＰＣであったことを悟ったジャッカと。自らの懐で敵を飼っていたことに気付いたグレッグと。

「その小娘の言う“レックス”はお前か？　ウォール……」

今やグレッグは顔面蒼白であった。怒りと恐怖と羞恥と、多くの感情に飲み込まれながら必死で虚勢を張っている。

よくも騙したな。低く呻くようなその声に、レックスは僅かに肩を竦めて見せた。

「何が殺し屋だ、アレキサンダー・ウォール？　蓋を開ければ只の鼠か！」

「俺ァ嘘はついてねぇよ」

本名だしな、と殺し本職のレックスは苦笑した。

グレッグは運が悪かったのだ。全てが彼の思うようにはいかず、全てはルシファーが――ロヴ・ハーキンズが、彼の上を行っていただけ。

「諦めろ。お前さんは最初から、ルシファーの手の上だった」

「――畜生！」

一声叫んだ後のグレッグの行動は早かった。彼は服の内ポケットに忍ばせておいた起爆装置――最終手段としてこの屋敷に仕掛けられていた爆弾の――を取出し、そのスイッチに手を掛けたのである。

レックスが瞠目し、ジャッカはひっと息を呑んだ。背後に控えていた《ポート》が慌てふためき、しかしなす術もなく。

その中で唯一動いたのが千瀬であった。少女は瞬間男達の側へと飛び込むと、グレッグの頭を鞘に覆われたままの刀で殴り付けたのである。問答無用の一撃を受けた男は無言で昏倒した。

その日、グレッグが命を失わなかったのは奇跡だといえる。

千瀬は咄嗟のことで手加減などできなかったし、自分の刀が通常の

五倍の重さだということなど、すっかり失念していたので。

＊

「ロヴの奴に言われてなァ。殺し屋でもボディーガードでもＳＰでも給仕でも、何でも構わないからヴィンセントの屋敷に忍び込めって」

「……へぇ」

「給仕は勘弁してくれって言ったんだが」

言いながらレックスは豪快に笑う。千瀬はそれを隣で聞きながら、彼女らの首領の強かさに舌を巻いた。

レックスが同乗しているお陰で、行きよりも格段に狭くなったリムジンの中。車の心地よい振動に眠気さえ襲ってくる。

レックスに与えられた今回の任務は極秘であった。相手組織に潜入し、敵の――ヴィンセントの様子を逐一報告していたのである。

千瀬もジャッカも知らされなかった、ロヴの冗談のようなこの仕事は想像以上の効果を発揮したらしい。レックスは雇われとしてヴィンセントに侵入した後、ものの二週間でグレッグの側近にまでこぎつけたのだから。

グレッグにジャッカ殺害の命令を出されたとき、正直彼は焦ったのだという。上手いタイミングで千瀬が乱入し、お陰でギリギリまで引き伸ばすことができたが。

「それにしてもロヴって頭良いね、今更だけど」

「考えて無ェようで、な」

二人は顔を見合わせて忍び笑いを漏らした。
レックスの仕事が無ければ、今この世にジャッカは居なかったかも知れない。それを考えると千瀬はぞっとする。

「ヴィンセントはどうなるの？」
「ルシファーに完全吸収。今度は形も残らねぇな」

ふぅん、と相槌を打ちながら千瀬は今回の顛末を思い起こす。
壊滅状態に陥った屋敷から千瀬がグレッグ・A・ヴィンセントを引き摺り出した後、デューイの行動は早かった。外で見張りに撤していた彼はその間に新しく書類を作り上げ、意識の無いグレッグの親指を引っ掴み無理矢理に押印してしまったのである。
その新たな書類とはヴィンセント・ホープ完全解体と、ヴィンセント財閥がルシファーへ永久の忠誠を誓うことへの同意書であった。
ジャッカが印を迫っていた物よりも三割増しで酷な内容だ。
あれこれって犯罪なんじゃ、千瀬は思っても口にしなかった。それこそ、今更なので。

「あの若いの、マクスウェルと言ったか。仕事が早いな、あの歳で昇進すんのも納得だ」

レックスはデューイを何度も誉めていた。本人の前で称賛を口にした時など、デューイは感動に震えていたように思う。（やはり彼はＥＰＰＣ信者らしい。）

「あいつァまた出世するかもな。近々動く」
「そうなの？」

レックスの言葉に千瀬は首を傾げた。デューイが《ポート》昇格したのは、そんなに昔の話では無いはずなのに。

「……今ちょいと、下がごたごたしてるって話があってな。人員の移動があるんだよ」

「ふーん……？」

レックスが僅かに表情を曇らせた、その理由は少女にはわからなかった。

レックスは千瀬に言えなかったのだ。この組織に今、異変が起こっていることを。初期メンバーである彼だからこそロヴから知らされた、不穏な影の話を。

『遠征先で《ポート》と《パース》が殺されてる。……人員の移動と補充が必要なくらいに、な』

そしてそれは奇しくも、千瀬の祖国で。

＊＊＊

目を覚ましたら、頬の辺りに血痕が付着していた。

身に覚えが無い、自分の血ではないと直感する。

（では、誰の血だ？）

ベッドの横に置いてあるナイフが、血脂で錆付いていた。

――おかしい。自分は、手入れを怠ったりしないから。昨日は仕事を終えて、早めに床についた――はずだ。
すぐに眠ってしまったのだろう、そこからあとの記憶はない。

（でも、その前にシャワーは浴びた）

首を傾げると同時に、コンコンとドアをノックする音が聞こえた。
沈黙でそれに答えれば、仕事に同行している部下の声がする。

「――――さん、おはようございます」

今行く、と声をかけて外に出た。一瞬頭の隅を何かが過ぎ去ったが、ほんの微かでわからない。
――わからなかったのだ、本当にその時、夜の記憶は失われていたのである。

煌めく朝日を浴びる代償に、奥底で嗤った《それ》には気付かぬまま。

（　――アア、　コイツ、も　　殺さな　クちゃ　。　）

第四章《慟哭》：夜風の行方

黒沼千瀬が初の単独任務（最終的には仲間と合流する形になったが）を終えた頃、イギリス南部の小さな街に突如一人の少女が現れた。この国では珍しい容貌をしたその彼女に、道行く人々が好奇の視線を送る。

少女は腰よりも長く伸びた髪を耳の下で緩く二つに束ね、その黒に映える純白のワンピースを身につけていた。（幸せな物語から抜け出したようなその格好に人々は目を奪われてばかりだ。）髪に合わせたような漆黒の瞳を巡らせて、少女は一心に何かを探している。

「……見つけた、」

暫し歩き回った後、そう呟いた少女の目の前にあったのはレンガ造りの小学校だった。建ってからの年月を感じさせる壁を一つ撫でて、少女はその門をくぐる。瞬間、彼女の目の前に見慣れぬ――“彼女にとっては”見慣れぬ光景が広がった。

そこは小さな校庭で、甲高い叫び声をあげながら走り回る子供達で埋め尽くされている。平凡で、幸せな。

黒髪の少女は酷く驚いた。こんなふうに、人間の子が生き生きとした様子を見ることなど日常の中ではまず無いのである。

（こんなところに、“彼女”は？）

少女は半ば信じられない気持ちで探し人の事を思う。楽しげな子供達を見つめているうちに、自分ばかりが異世界の住人のような気がした。否、実際そうなのだけれど。

（……？）

ふと少女は顔を上げる。何かが後方からこちらに近づいている気配を感じたからだ。

ある程度のスピードはあるが害意は――殺気はない。素早くそこまでを判断し、咄嗟に張り詰めていた気を緩めた。

暫くそのままでいると、少女の体にどん、と予想済みの衝撃が走る。

何かが腰の辺りに衝突したのだ。

「ごっ、ごめんなさい！」

まだ変声期を迎える前の、甲高い声が響き渡った。少女にぶつかった幼い少年は鬼ごっこの最中だったらしい。

「大丈夫？」

「うん。ごめんね、おねーさん」

焦ったように頭を下げる少年に、いいよ、と少女は笑う。すると相手も安心したのか、にこりと歳相応の笑みを返してきた。

この子供ならば知っているかもしれない――彼女は暫し考えて、ふわふわしたブロンドの髪の少年に尋ねることにする。

「あのね、きみ、ホーランドって人知らないかなぁ」

問われた少年はぱっと顔を輝かせた。当たり、だ。黒髪の少女は笑みを絶やさず、少年の言葉を待つ。

「シェラ・ホーランド先生のこと？」

「そう。どこにいるか、わかる？」

「連れていってあげるよ！」

こっちだよ、そう言うやいなや、返事も聞かずに幼い少年は少女の腕をとった。

彼はすっかり心を許してしまったのか、初対面である少女に楽しげに自己紹介をはじめる。

「僕はね、イワンだよ。おねーさんは？」

くすりと少女は笑みを零した。こんな閑かな空間で子供に手を引かれる自分が、余りにも場違いで可笑しい。

こうして名乗る行為でさえ、彼女にはめったにないことなのだ。

「ルカよ」

＊

鼻歌を歌いながらルカの手を引くイワンは、案内の片手間に様々なことを語って聞かせた。

彼の言う“シェラ先生”とはこの小学校で人気の高い女教師である。

子供を愛し、子供達から愛されている彼女がここに赴任してからはまだ一年ほどしか経っていない。しかしシェラはもう、この小学校の顔ともいうべき人間になっていたのだった。

――この学校から”シェラ・ホーランド先生”を奪ってしまうのは、正直気が引ける。

らしくないことを考えて、ルカは思わず自嘲した。どうも自分は子供には甘いらしい。
幸せな個人のそれを壊す理由など、別段彼女は持ち合わせていなかった。ただし仕事ならば話は別である。今も昔も、ルカにはロヴが全てだったので。

「シェラ先生ぇー」

かちゃり、と木製の扉が開く。所謂、職員室というところだろう。学校というものに通った経験のないルカには、ここがどういう場所なのかわからなかったのだが。
イワンがドアの隙間に顔を突っ込んで声を掛ける。同時に、中から明るい女性の話し声が聞こえた。

「どうしたの？」
「お客さまだよ」

イワンの言葉に承諾の返事が返ってくる。僅かな間があいて、ドアが内側から大きく開かれた。

「……！」

部屋の奥から出てきた女性の呼吸が、ルカを目にした瞬間止まる。
少女はそれに小さく笑って会釈を返してみせた。
僅かに目を見開いたものの、すぐに平静と変わらぬ表情を取り戻した“シェラ先生”が笑って言う。

「ありがとう、イワン。校庭で遊んでおいで」
「はぁーい」

じゃあね、ルカおねーさん。そう言ってイワンは元の道を戻っていった。その背を最後まで見送った後、女性とルカは部屋の中に入り扉を後ろ手に閉める。
ぱたん。余韻を残して締め切られた部屋の中に人気はなく、今はルカと彼女の二人きりしかいなかった。

ルカは目の前の、金髪に翠の瞳の美しい女教師へ静かな笑みを浮かべる。
シェラ・ホーランド――――否。

「迎えにきたわ、ジェミニカ・アルファーナ」

ぴりりと空気が張り詰めた。僅かな静寂、それに終止符を打つ嘆息音。はぁ、と言われた女が小さく息を吐いたのだ。
そして彼女――ジェミニカは大袈裟に顔をしかめてみせる。

「長期休暇を貰ったはずだったのに。早すぎない？」

不満を顕にする相手に、ごめんねとルカは苦笑を洩らす。文句を言われることは想定内だった。わかっていて、それでも迎えに来たのだから。

「ちょっとした緊急事態で。戦力の分散は防ぎたいのよね」
「あーあ。せっかく生徒が懐いてくれたのに」

こうなってしまっては、ジェミニカ・アルファーナに選択肢は無い。そもそも教師は彼女の副業であったので、いつでも心構えはできていたのだ。

「残念だけど本日付けで転勤よ、“シェラ先生”」

仕方ない、とジェミニカは呟いた。肩までの金髪に指を絡め、小さく肩を竦める。
彼女がルカに、ひいてはルシファーに逆らうメリットなど一つもないのだ。

「了解。仕事には責任を持つ主義だから――それがどんな仕事でもね」

その日、イギリス某所のある小学校から一人の女教師が姿を消した。
彼女の名はシェラ・ホーランド、わかっているのはそれだけだ。
子供達から高い支持を得ていたその教師がいたという証拠は、彼女が消えた後何処にも残されていなかったのである。机も書類も、名簿も、写真でさえも。

第四章《慟哭》：装填（1）

建物の中を生温い風が吹き抜けていた。嫌な空気だ、まだ夕刻に差し掛かったばかりだというのにすでにとっぷりと闇に浸ったこの組織、その薄暗い廊下で少女は思う。

ふと気配を感じて振り返れば、得物を片手にこちらへ走ってくる人影が見えた。この組織の、ルシファーの人間ではない。顔中を汗と涙でぐちゃぐちゃに汚し咆哮とも悲鳴ともとれる奇声を発しながら、その部外者は少女へ襲い掛かろうとしているようだった。

推定年令三十七歳、性別男。向かってくるそれを見やりながら、千瀬は酷く冷めた頭で考える。

（――うわぁ、可哀想。）

＊

ルカ・ハーベントがルシファーに帰還した。予定よりもずっと早く済んだらしい。これでやっと終わるね、そう言ってはしゃぐロザリーを前に千瀬は一人納得したのは朝の話だ。

（やっぱり）

組織の防衛を一身に担う〈ハングマン〉として、これ以上ルシファーを留守にするわけにはいかなかったのだろう。

ルカの選択は正しい。彼女が旅立った後――つまりはあの晩餐会の日以降――から今日までという短い期間に、ルシファーでは侵入者

騒ぎが既に二回も起こっていたのだから。

いったいどこから情報を仕入れてきたのやら、襲撃を仕掛けてきた近隣の敵対組織はこちらの主戦力ＥＰＰＣが一部遠征に出ていることを間違いなく知っていたようだ。（隙をつくのは正しい戦法に他ならない。姑息だとしても。）

二回の襲撃のうち片方は大手ユーロマフィアによる攻撃で、中々の戦闘力を誇る組織員がルシファーに潜入した。とはいってもそれは一般常識の範囲内での強さ、なのだが。

侵入者の話を最初に聞いたとき、千瀬はとても驚いた。それは襲撃に対してではなく、実はルシファーの本部所在地は“その道”の人間には良く知られているらしい、ということに。（千瀬本人が知らないのは滑稽としか言い様が無い。）

見張りに力を入れていないこの建物へ忍び込むのは簡単だ。ただしルシファーを知る人間の殆どは、この場所に足を踏み入れよう等とは考えない――そういう意味では今回は異例だったのだが。

自信があったのか過信していたのか、とにもかくにも、奇襲に出向いてきた相手はこの機会にルシファーを陥落させる気でいたのだろう。（〈ハングマン〉がもう一人残っていることは想定外だったようだが。）ロヴが命を狙われる側の人間だということを、千瀬はこの時改めて実感した。

無論千瀬はその襲撃において二回とも“掃除”の命を受けている。人数は減っていようとも絶対的な戦闘力を誇るＥＰＰＣだ、虐殺隊（スローター）の名は伊達ではない。

侵入した者達は居残っている〈ソルジャー〉や〈マーダラー〉、そして暇をもて余していたエヴィルにあっさりと始末され（ルードが嬉々として“掃除”に向かったのを千瀬は見た）、実際騒ぎはそれほど大きくはならなかった。末端の人間などはその出来事すら知ら

ないだろう。

――ただし、実際はそれはまだ終わっていない。

実は、先の侵入騒ぎには残党がいたのだった。もとより曖昧な警戒網と幹部の勘とで成り立つ警備態勢、それにロヴの妙なルーズさが加わって、ルシファーは侵入者の数など把握していなかったのだから当然なのだが。

つまりこの建物内には千瀬達の殺し損ねた（というよりは相手が逃げに撤した）者が未だ潜んでいることになる。

あまり気分の良いものではないが、それもルカが帰ってきた時点で終幕だった。噂によれば、ルカという少女は人間を察知する能力に驚くほど長けているらしい（これが警備の甘い一番の理由だ。）

うわぁ、可哀想。

だから――まさに今廊下を一人で歩いていた千瀬の目の前に一人の男が飛び出してきた瞬間、千瀬は彼を哀れに思ったのだ。

男はおそらく先の侵入騒ぎの生き残りだろう。仲間が全員死んでから数日潜んでいたのだろうが、とうとう限界を迎えてしまったらしい。

ルカが帰ってきた。隠れんぼはもう意味をなさない。せっかくここまで耐えたのであろう目の前の相手に（相手が明らかな殺意を持って向かってくるにもかかわらず）千瀬は同情を禁じ得なかった。

「うあぁぁぁぁぁ、っ！」

男が声を上げる。どうせなら忍んで近づけば良いものを、これではバレバレだ。（どちらにせよ殺気は隠せていなかったが。）

憔悴しきった顔に浮かんだ濃い隈の淵に沿う脂汗と涙で表情はほと

んどわからない。彼はせめてルシファーに一矢報いようと――情けない話ではあるが、せめてこの幼い少女の息の根だけでも止めようとしているのであった。

千瀬はちらりと自分の腰に目をやった。サンドラの忠告を守り、常に武器は携帯している。この場合は、例の訓練で鍛えた日本刀だ。あれのおかげで抜刀のスピードもずいぶん早くなったと思う。従来より遥かに重いそれの柄にそっと手を伸ばして触れた、少女の動作は淀みない。

千瀬には向かってくる男の動きがずいぶんとゆっくりに見えていた。スローモーションとコマ送りの世界だ。

千瀬は刹那に思考を巡らせる。今ここでこの男を見逃しても、確実にルカが仕留めるだろう。ならば自分が殺しても変わりはない。

少女は親指で鍔を押し上げる。刀の柄に手を掛けて抜こうとした、その瞬間だった。

（！）

千瀬が僅かに顔をしかめた。少女のすぐ後方、より近い位置からもう一人別の男が飛び出したのである。

二人いたのか、小さく呟いて千瀬は一歩身を退き視線を巡らせた。少女を挟むように向かってきた二人の男は、勝ち誇った笑みを浮かべる。一人はナイフを、一人は銃を片手に。

しかし人数が増えたからといって、千瀬が慌てたわけではない。瞬時に流れるような動作で刀を抜き、後方に振り抜いた刀身の先で後ろの男の銃を弾き飛ばした。

最初に現れたもう一人まではまだ距離があるし（どうやら足は余り

速くないらしい。思わず千瀬は苦笑した。）短いナイフでは自分まで届くまい――そう判断し、先に後ろ気にいたほうを始末しようと続けて切っ先を向ける。

しかし、その時千瀬の視界に予想外の光景が映り込んだ。先刻後方の敵から弾き飛ばした銃が弧を描いて宙を舞い、千瀬の頭上を越え――そのまま、前方の男の前に落下したのである。

「……やば、」

思わず千瀬は舌打ちをしたい衝動に駆られた。こんなことなら切り壊しておけば良かった、気付いても遅い。
スローモーションのように、男が銃を拾おうと手を伸ばす。

引き金を引かれるのと、自分が二人斬るのとどっちが速いだろう？
千瀬がそんなことを考えた刹那、バァン！！　という轟音と共に目の前で火柱が上がった。音源は銃に手を伸ばしていた男の、まさにその手の先。
何が起こったのかわからずに目を白黒させる男とは反対に、千瀬はそれを全て目で捉えていた。

（爆発した、）

男が落ちた銃に手を触れる寸前に、銃本体が吹き飛んだのである。
銃の暴発ではない。爆発だ、と何故か千瀬は確信を持つ。

「……あー。ちょっと強すぎたかなぁ」

奇妙に間延びした、場違いな明るさを持つ声が響き渡った。どこから、そしていつからいたのか。突如目の前に現れた女性に、今度は

千瀬が目を白黒させる。
金の短髪にエメラルドグリーンの瞳をもつ女は、未だ唖然と立ち尽くしていた男を手持ちのサバイバルナイフであっさりと刺殺した。
延髄を一突き、実に鮮やかである。
茫然とした表情を張りつかせたまま床に沈んだ男には目もくれず、女は千瀬に声を掛けた。

「ほら、そっちもさっさと片付けて」
「……あ、はい」

言われて敵の存在を思い出した千瀬は、同じように呆気にとられている男に刀を向ける。首を刎ねるのではなく心臓を突いたのは、少女なりの配慮だった。
ここは屋内だ、突きならば出血は少ない。

「んん？　見ない顔だねぇ、新入り？」

はじめましてー、そういって女はにこやかに笑った。細められた瞳に千瀬は安堵する。初対面だが漠然と、仲間だと悟った。

「はじめまして。えっと……？」

伸ばされた手に答えて握手をする。千瀬が遠慮がちに首を傾げると、女は心得たように軽やかな笑みを浮かべた。

「私はジェミニカよ。ジェミニカ・アルファーナ」

第四章《慟哭》：装填（2）

ジェミニカ・アルファーナ。名乗った女は身を屈めて千瀬に目線を合わせると、にこやかに手を握った。
千瀬はそれに会釈を返しつつ僅かに首を傾げる。

（アルファーナ？）

何処かで聞いた覚えのある音だ、と思った。はて、一体なんだったろう？
元来良くはない自らの記憶力を恨めしく思っていると、突如千瀬の背後から新たな声が聞こえた。

「あーあ……」

ふいに響いたその悲痛な音に振り返ってみれば、千瀬の目に入ったのは黒一色だった。アジア系のそれとは違う、深い黒を湛えた長い髪――言わずもがな、その持ち主はルカである。
ルカは骸と化した男をひらりと跨ぎ、先刻の銃の爆発現場を覗き込んだ。正確には一緒に爆ぜてしまった廊下を、だが。

「ジェミニカったら、室内でこれやるのはやめてって言ってたのに……」

もぉ、と冗談めかして頬を膨らませながら少女は言う。その様子に千瀬は目を瞠ってしまった。
ひび割れて僅かに落ち窪んだ廊下を撫でているルカに、女は――ジェミニカは、からからと笑ってみせた。

「人命最優先じゃない、ほら。まぁ困るのはグレッタぐらいだし、良いじゃない」
「そうだけど……」
「あ、もしかして知らない？　ミス・グレッタっていうのはうち専属の事務員よ。言わば掃除のオバサンね」

状況を飲み込めていない千瀬の様子を勘違いしたのか、ジェミニカがピント外れの説明を入れる。しかしそのお陰で、千瀬の抱く疑問のうち一つが解消されたのだった。
確かに千瀬は何度か、白髪の老婆が廊下を徘徊しているのを見たことがあった。あれがグレッタか、と一人納得する。

（いつも片手に箒を持ってて――じゃなくて、）

待て待て問題はそこではない、千瀬はズレかけた思考ベクトルを無理矢理修正する。
今最優先すべき事柄は、ジェミニカとは何者か、なのだから。

「あぁ、ジェミニカ。紹介するわね、この子がチトセよ」

思い出したようにルカがぽんと手を打った。
それを聞いたジェミニカは納得したように『あぁ』と呟く。

「噂の“クロヌマ”？　どーりで腕が良いと思ったんだ。大変ねぇ、まだ若いのに」
「？」

小首を傾げる千瀬に、ジェミニカは人好きのする笑みを浮かべてみせた。小さな子供にするように頭に手を乗せてられて、千瀬はくすぐったい思いをする。

「それからチトセ。この人はジェミニカ・アルファーナ。私が迎えに行ってきたの」

ルカが千瀬のほうに向き直る。次の瞬間、形の良い薄い桃色の唇が全ての答えを紡ぎ出した。

「〈マーダラー〉よ」

「……マ、」

千瀬はぽかんとジェミニカを仰ぎ見た。同時に、彼女の名を何処で聞いたのかを思い出す。

デューイだ、先日千瀬と行動を共にした《ポート》のデューイ・マクスウェル。彼の出会ったと言っていた――。

（――四人目、）

以前駿が、〈マーダラー〉は四人だと言っていたのを思い出す。ミクと恭吾とルードと。つまりこのジェミニカ・アルファーナが、四人目――最後の一人、ということなのだろう。

するとやはり先程の爆発は、このジェミニカの仕業なのかもしれないと千瀬は考えた。〈マーダラー〉の不思議な能力の存在に、もう十分に千瀬は順応しているのである。受け入れることは容易かった。

（これはきっとルードの存在が大きいのだろう。）

外回りの多い、四人目の〈マーダラー〉が帰還した。わざわざルカが迎えに出向いたのだという。――これが何を示すのか。

嫌な感じだ、と千瀬は思う。徐々に集結してゆく戦力は、装填されてゆく銃弾を連想させた。発射されるのは、いつ？

「ロヴが」

突如ルカが囁いた。丸い瞳を僅かに細め、何処か遠くを見つめるような仕草をする。

「――ロヴが呼んでる」

「え……？」

警報が鳴ったわけでも、無線のやりとりをしたわけでもない。千瀬はただ首を傾げた。

ルカの様子を無言で眺めていたジェミニカが一つ頷くと、ついと踵を返す。

「――行こう。チトセ、あなたもね」

最後に千瀬が振り返った先には、男達の死体を“掃除”しようと遠くからゆっくり歩んでくるグレッタの姿が見えた。

第四章《慟哭》：警告と睥睨（1）

（――戦いの準備を。賽は既に投げられた）

組織員召集を知らせる警笛が実際に鳴り響いたのは、千瀬がルカとジェミニカと共にロヴのもとへと（ルカが大広間だと言ったのでそれに従ったのだが）向かい始めてから十分も後のことだった。ルシファー内部は広い。未だ千瀬が把握し切れていないほどの空間を保持するこの建物は、移動の度に一苦労である。しかし十分に早いスタートを切っていた彼女達は、急なサイレンに慌てふためく組織員の間を擦り抜け別段急ぐこともなく廊下を移動していた。

（なんだろう、）

三人でホールへと歩むにつれ、千瀬はそわそわと落ち着かなくなってくる。人の気配がするのだ、それも未だ経験したことのない程の大人数。それがだんだんとこちらへ集まり増えてゆくのをひしひしと感じた。ＥＰＰＣではない、それにしては多すぎる。

「う、わ」

――大広間（ホール）の扉を開いた千瀬は思わず息を呑んだ。

目の前に広がっていたのは犇めく大量の黒い影。スーツを着込んだ

人間達が、床を埋め尽くすようにずらりと整列していた為である。
千瀬達が到着した後も次から次へと人が増え、その度に黒い塊が巨大になってゆくのがわかった。
男も居れば女も居る。しげしげとそれを眺める千瀬の目に、ホールの中心部に列をなす人間達の襟元が見えた――瑠璃色の紋章がついている。それは彼らが《ポート》であることの印であった。

階級区分のはっきりしたルシファーでは、構成員はその位に合わせた紋章を着用することが義務付けられていた。階級ごとにその色が異なり、唯一ＥＰＰＣだけが紋章を持たない。
千瀬はあまり気にしていなかったのだが、あのデューイやジャッカの胸元にも確かに《ポート》用の瑠璃色が輝いていたのである。

その《ポート》達の両サイドに整列した人間達の紋章は鮮やかな翡翠色だった。彼らは《パース》、いわば末端構成員である。
世界各国に無数に存在する彼らが全てこのホールに集結したとは考え難く、おそらくは一部が代表として召集に応じたのだろうということが想像できた。

「あ」

数多の人間たちの中から見知った顔を見つけた千瀬が声を上げた。
《ポート》、そして《パース》の前に椅子を並べる四人の人物。その胸には白銀の紋章が煌びやかな光沢を放っていた。
その中で最も手前に位置する椅子に腰掛け、毅然と顔を上げている女性を千瀬は知っていた――言うまでもなく月葉である。黒の礼服に月色の髪がはっとするほど美しく映えていた。
七見月葉が代表を務める《テトラコマンダー》、驚くべきことにその残りは全て男性だ。初めて目にする彼らを千瀬はまじまじと見つめてしまう。

そうこうするうちに、千瀬は漸くホールの高い位置――ルシファーのホールは立体構造で、二階席が存在する――にお馴染みの顔触れを発見した。ＥＰＰＣこと《特別戦闘能力保持部隊》の面々である。ただし遠征に出ている〈ソルジャー〉数人と、同じく遠征中の〈マーダラー〉恭吾の姿は勿論無い。

千瀬はルカに先導され二階席へと向かったが、必然的に一階に並ぶ人間達の目の前を横切る形になった。

そっと微笑みかけてくれた月葉に手を振ったその直後、千瀬の目は少々奇妙な光景を映し出すことになる。――ひそひそと囁き合い、こちらに好奇と疑念の入り交じった視線を寄越す組織員達。彼らは皆一様に千瀬達を不躾に眺めていた。

「気にしないの」

思わず足を止めた千瀬の背をジェミニカが優しく押し進める。千瀬は首を傾げながら、しかしおとなしくそれに従った。

――もしも組織員達の会話が日本語であったならば、千瀬は囁く声の内容までしっかりと聞き取れていたことだろう。

『何だ、この餓鬼は』などという疑問符に満ち溢れた彼らの会話を。本来ＥＰＰＣの存在は《パース》に所属する人間達には知らされず、《ポート》でも見たことがあるものは少ない。組織幹部の顔でさえわからないものが殆どであろう。（ロヴを直接見たことがある人間など、ルシファー構成員全体ではほんの一握りにすぎない。）

何故ここにこんな子供がいるのか――そんな彼らの疑問はもっともなのだ。彼らは千瀬のような子供がルシファーの戦闘員だとは、夢にも思っていないのだから。

無論、今し方自分達の目の前を通った長い黒髪の少女が組織第二位の地位を誇ることなど、知る由もないのである。

第四章《慟哭》：警告と睥睨（2）

千瀬が階段を上りきり、特戦隊のメンバーと合流したところでそれは起こった。

突如囁きが波打つように大きく広がると、次の瞬間沈黙と静寂が舞い降りる。好き好きに、けれども控えめに言葉を交わしていた数多の人間達は、先刻迄とは打って変わった硬い表情をずらりと並べた。

（……？）

会場の異変を感じ取った千瀬は一階を埋め尽くす人の群れを見下ろしてみる。

真っ黒に染め上げられた人間が蠢いているのは少々滑稽な光景であったが、静まり返った今は身じろぎ一つする者もない。そしてその人間達の視線はただ一点――ホール中央の階段へと注がれていた。

「……ロヴ」

その姿を認めた千瀬は小さく呟きをこぼす。――階段の最上部へ、ロヴ・ハーキンズが現れたのだ。

ホールに渦巻く空気がぴんと張り詰める。いつも笑顔で紅茶を入れている好青年と同一とは思えぬ空気を纏い、ロヴは悠然と部下達を見下ろした。

背筋を伸ばした月葉が立ち上がって一礼する。それに習い、他三人の《テトラコマンダー》が深く頭を下げる光景は厳粛かつ重々しい。その中でエヴィルとルカが二階の椅子に腰掛けたまま、頬杖をついてその様子を眺めているのを千瀬はぼんやりと見つめていた。あの二人はやはり別格だ、纏う空気が違う。

「――残念な知らせがある」

静寂を割って、突如ロヴが口を開いた。静かな、威厳ある声が響き渡る。マイクなど通していないはずのそれがホールに浸透し、緊迫した雰囲気が千瀬のもとまで伝染した。

「知っての通り、先日ルシファーから“遠征”として数十人の組織員を各地に派遣した。《ポート》や《パース》からも多くを動員したのだが」

ボスたる人間の存在感は恐ろしいのだと千瀬は実感する。何百人もいるであろう人間の誰もが微動だにせず首領の言葉に耳を傾けている様子は壮観だ。（ただし欠伸を噛み殺しているルードを除いて、だが。）

「今日集まってもらった理由はそれに大いに関係している。――簡潔に言おう、今回の遠征に参加した《ポート》と《パース》に、既に三十名を越える死者が出ている」

その言葉にざわざわと響動めきが広がった。明かされた緊急召集の理由に衝撃を受けた者達が口々に何かを囁き交わす。

しかし再びロヴが口を開いた瞬間、会場は一斉に静寂を取り戻した。

「全員即死だそうだ。相手は相当の手練と予想される」

千瀬の後ろに腰を下ろしたレックスが、興味深げにほぅ、と呟いた。彼のことだ、普段敵として排除している雑魚など――とはいっても、一般常識から述べれば強者の部類だろうが――を相手にすることに、飽いてしまっているのだろう。

しかし千瀬はこの話を楽しむ気にはなれなかった。何だか嫌な感じだ、いくらルシファーに敵が多いといえども。

「ここで知っておいて欲しいことがある。今回の遠征の主力は《ポート》でも《パース》でもない。パース諸君は初耳だろうが……《特別戦闘能力保持部隊・ＥＰＰＣ》だ。二階席を見てもらおうか」

ロヴが言い終えた次の瞬間、集結した人間全ての視線が一斉に千瀬達に向けて降り注いだ。

あまりの迫力に千瀬は息を呑む。うとうとと微睡んでいたルードが、ただならぬ気配を感じて飛び起きた。

「ちょ、え、なに？」

「慌てんな、ルード」

殺気を向けられたと勘違いして懐からナイフを取り出した少年をレックスがやんわりと押さえ付けた。（ルードは寝呆けていたらしい。）

視線が痛い、と千瀬は思う。とくにＥＰＰＣの存在をたった今知らされた末端（パース）の人間は、一様に珍獣を目の当たりにしたかのような表情を浮かべている。

「ＥＰＰＣはその名の通り、ルシファーの戦闘要員だ。他の組織の侵入・攻撃の九割を防いでいるのは彼らだということを心に留めておいてほしい」

ざわ、ざわ。ロヴの言葉に混乱した《パース》の人間が興奮仕切った様子で騒ぎ立てる。

信じられない、女子供まで混じってるぞ――何といっているかはわからないはずの言葉でさえ内容は予想できる。千瀬はそれらを耳に

しながら、ロヴが今更ＥＰＰＣを紹介している理由を考え込んだ。
今までは気にしていなかったのに、なぜ。

大人気なく喚き立てる部下を黙らせようと立ち上がった月葉を笑って制し、ロヴはさらに言葉を続ける。

「冗談だと思うか？　ここにいるのはメンバーの一部だが――君達全員を、五分以内に消すことができるだろう」

瞬間、更に増したどよめきが広間中に波紋のように広がった。これでは収集がつかない、と月葉が再度立ち上がる。
瞬間、ロヴは部下達に止めの一言を浴びせかけた。

「それじゃあ、試しに誰か死ぬか」

しん、と一瞬で静まり返る人々にロヴが笑い声を上げた。
千瀬には彼が部下をからかって遊んでいるように思われて仕方がない。あながち間違ってもいないだろう。
そりゃールカ姉がいればな、と呟いたルードの頭にミクの鉄槌が下ったのを目の端が捉えたが、千瀬はあえて見なかったことにしてしまった。
部下たちのやり取りを一通り楽しみ不敵な笑みを浮かべていたロヴが、ふいに声のトーンを落とす。

「さて、本題に入ろうか」

首領である男がゆっくりと階段を下りはじめた。彼が一歩降りるにつれ、麓の人間が緊張するのがわかる。その風格に息を呑む者、怯える者。ここにいる人間の命を握っているのは紛れもなくロヴだ。

「問題は犯人が全く判らない事と、着実に日々死者が増えている点。この戦闘のエキスパートであるＥＰＰＣが管轄している仕事にも関わらず、だ」

（そうか。）

唐突に千瀬は悟った。気付くのが遅すぎたとも言える。

普通ルシファーに敵なす相手は、早々にＥＰＰＣが始末してしまうはずである。そのＥＰＰＣの警戒を掻い潜り、なおかつルシファーの構成員を次々と殺害している『何者』か。今回の敵はそれなのだ。

（……一筋縄では、いかない）

「諸君等には厳戒体制を敷いてもらいたい。詳細がわかりしだい再度集会を開くつもりだが……前例の無い事態に陥っている事は、忘れるな」

ロヴは月葉に片手をあげて合図を送る。それを受けた月葉が静かに立ち上がり、部下を解散させた。

千瀬が毎度思うことであるが、この組織の集会の終わりはやけにあっさりとしている。《ポート》と《パース》の人々は列を乱さぬまま行進するかのようにホールを出て行き、その際に何人かがちらちらとこちらを盗み見ていたことに千瀬は気付いた。

瞬く間に広間はがらんとした空間を取り戻し、ロヴは黒服の集団が全て退席したのを見届けると、ホールの二階席へと向かった。

ＥＰＰＣメンバーの控える場所までゆっくりと歩んでくる彼の表情は千瀬の良く知った、おどけた青年のもの。

「ま、聞いてのとおりだ。お前達にとっても、少々厄介な事になっ

てしまった」
「殺って良い？」
暇つぶしを見つけたとでも思っているのだろう、興味津々で尋ねたルードにロヴは柔らかい笑みを浮かべる。
「まぁ、このままの状態が続くならいずれ、な。お前達にも警戒を強めてもらおう。武器の携帯は忘れるなよ――明後日から順次、遠征組が帰還する。彼らとも一度話し合って体制を整えよう」
言われて初めて千瀬は気が付いた。遠征組が旅立ってからもうそんなに時間が経ったらしい。
あっという間だった、と思いながら千瀬は喜ばしい気持ちで表情を弛ませた。この分では駿やサンドラも無事に帰ってくるのだろう、土産話を聞かせてもらえるのが楽しみだ。
（最後まで無事、なら。）
ちらりと浮かんだ演技でもない考えに千瀬は慌てて首を振る。
その後ロヴは簡単な事務連絡を告げると、ルカとエヴィルを連れ自室に戻っていった。千瀬が気付いたときにはジェミニカの姿もなく、何時の間にやらルードもミクと共にホールを出て行こうとしている。
（やっぱり、）
普段があんな風でもルードはマーダラーなのだと改めて考えると、千瀬には少し妙な感じがしてしまった。
組織の中では階級が違う。千瀬は今日集まった多くの人間よりもはるかに上の地位であるし、ルードはそのさらに上なのだ。

「行こ、チトセ」
「……うん」
千瀬はロザリーに手を引かれ、“監獄”へと歩きだした。

＊

「ロヴ」
エヴィルの声にロヴ・ハーキンズは歩を止めた。ルカも長い髪を揺らし、静かにエヴィルを振り返る。
「どうした？」
「……珍しいこともあるんだな。お前がすぐに『殺す』と言わなかった」
『殺って良い？』――エヴィルが言っているのは、ルードがそう尋ねた時の話だ。敵は直ぐ様始末するのが自分達のやり方である。特にロヴやエヴィルはその考え方が顕著で有名だ。
それを『いずれ』などという曖昧な言い方をした先刻のロヴを、エヴィルは訝しく思っていたのだった。
「やっぱりお前、わかってるんじゃないのか？　……それに、どうして〈ソルジャー〉の連中に告げなかった。“あの可能性”を――」
ロヴは僅かに目を伏せる。ふ、と静かに笑ったその表情は何かを悟

っているようだった。まだ若いこの青年には似合わぬ老成した空気を肌で感じながらエヴィルは思う。
昔から、こいつはこんな風だった。

「エヴィー。それは今現在考えられる最悪のパターンだよ。今は未だ、早い。」
「……だけれど」

親しみを込めた昔からの呼び名で呼ばれてエヴィルは悟る。ああ、やはり。

「その時の為に、お前達ハングマンがいる」

エヴィルは僅かに眉根を寄せた。
わかっていることだ。もうずっとそうやって生きてきたし、今更それを変える気はない。変えられるはずもない。自分達にはそれが全てだったのだから。
それでも、とエヴィルは思う。もし、“その時”が来たら、

「ああ、そうだ。でももしそうならその時……ルカは――」

彼にしては珍しく言い淀んで、ふと俯いていた顔を上げたエヴィルは目を瞬いた。次いでロヴも、驚いたように辺りを見回す。

「ルカ……？」

隣を歩いていたはずの少女が、忽然と姿を消していたのだ。狭く直線的な廊下の真ん中にあった人影が三から二になり、あの黒髪は視界の何処にも見当たらない。
ロヴは静かに瞳を閉じて彼女の行方を辿る。少女の燐片を、気配の

軌跡を。彼には“それ”が可能だった。
暫しの時間をかけた後、ロヴはゆるりと目蓋を持ち上げ淡く笑う。
隣で眉を寄せているエヴィルに語り聞かせるように、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「大丈夫だよ。あいつは、強い」

第四章《慟哭》：間話

「……ユー？　ユゥってばぁ、ねぇっ」

鈴を転がすような声がした。同時、幼い容貌の少女が眠たげな目を擦りながら部屋へと入ってくる。その部屋の主である少年は自らの髪――限りなく銀に近い、透けるような金色をした巻毛だ――をくるくるといじっていた指を止め、その目を少女に向けた。

「おじいさまが、お仕事に行きなさいってゆってるわ。えっと、ほら、ウォルディが追い掛けてた殺人鬼、いたでしょう？　今ね、近くにいるんだって」

たどたどしく言葉を切りながら喋る少女は見た目こそまだ十かそこらのようだが、実際は今年で十四になる。
幼い口調もそれに合わせたかのような見た目も、彼女の育った環境が全ての原因だ。要は箱入りなのである、それも生粋の。
そんな“生粋のお嬢様”を一瞥し、少年は冷たく言い放った。

「何で僕が」

嫌だよ、めんどくさい。少年がそう言ってそっぽを向くと少女はぷぅと頬を膨らませる。

「おじいさまは、最近あなたはお仕事に熱心じゃないって。悪い人は、全部やっつけないといけないんだよ？」

懸命な訴えに見向きもせず、少年はつまらなそうに一つ欠伸を零した。

彼は今そんなことにかまけている場合ではないのである。ただでさえ口煩い部下一人、撒くのに苦労しているというのに。

「……ロンドンの話だったらウォルディ一人で十分だろ。何ならアイジャ、お前が手伝ってやれば良い」

言われた言葉に肩がぴくりと震えた。アイジャと呼ばれた少女はその愛らしい顔を、これでもかというくらいに歪ませながら少年をねめつける。

「二十人もムサベツに殺しちゃってるひとに、あなたはたった二人で立ち向かえってゆうのね。相手はタイリョウサツジンハン、なのに！」

「僕が行ったって、たったの三人」

少年はしれっと少女の言葉を躱すとまたしても彼女から視線をそらす。

アイジャは怒りで僅かに頬を上気させながらその後も何事かを訴え続けたが、少年は全く聞く耳を持たない。

口に出すのを諦めた後暫らく少年を睨んでいた少女は、やがてスカートの裾をきゅっと掴んだ手を震わせながら泣きだしてしまった。

「うわぁぁあん、ユーの馬鹿ぁぁあぁ！」

「……ばっ、」

少年はぎょっと目を見開いた。屋敷全てに響くようなその泣き声に目をしばたたかせた後、慌ててアイジャの口を塞ぐ。

「馬鹿はお前だ！　“ドン・ファンダルス”に聞こえるだろ……！！」

この少年にしては珍しく崩れた表情で言われたアイジャはもごもごと口を動かすも、やがて諦めたように体から力を抜いた。
それを見てほっと口から手を離した少年を、恨むような目で少女は見上げる。

「うぅっ、ユーはアイジャが死んでも良いんだわ」
「何だよ、たかだか二十人じゃないか」

大袈裟だと溜め息を吐く少年にアイジャは目を見開いた。たかだか二十人？

「命を粗末にしちゃいけないって、おじいさまがゆってた」
「……いいかい、アイジャ。僕は今そんなやつ相手にしてられないくらい忙しいって、じいさんに言っといてよ」

アイジャはことりと首を傾げた。少年の言う意味が理解できなくて、ただ彼を怪訝そうに眺める。
「そんなレベルの殺人鬼とは比べものにならない大物相手に仕事をしてる最中なんだよ。もうすぐ片が付く」
「……ちゃんと、お仕事してたの？」
「巨大な犯罪シンジケートを内側から偵察中なんだよ。上手く行ったら……うん、僕の目的が達成できたら王手（チェック）はお前にかけさせてやっても良い。そしたら、世の中の犯罪はずっと少なくなるだろ」

僕の目的が済んだら、ね。
小さく呟かれた言葉は聞こえなかったのだろうか、少女がぱっと顔を輝かせた。

「わかるかい？」
「うん！　じゃあ、おじいさまにはアイジャがちゃんとご報告する。

ユリシーズはしっかりお仕事してますって」

アイジャはひらひらと手を振った。少女の桃色のスカートがドアの向こうに消えるのを少年は笑顔で見送り、ふぅと溜息を吐く。気付かなければ良かったと思ってももう遅い。ああ、面倒なのがもう一人。

「……盗み聞きとは感心しないな、ウォルディ」

少年――ユリシーズが言うやいなや、扉の影から人影が現れた。彼も気付かれていたのは承知の上だったのだろう、臆することなく堂々と中へ入ってくる。

「仕事してるって？　よく言う」

ウォルディは小さく笑ってみせた。ユリシーズよりも僅かに年上の彼はきっちりした貴族のような礼服に身を包み（それはユリシーズも同じなのであったが）視力に偏りがあるのか、右目にのみ片眼鏡を装着していた。
ジンジャーの直毛で僅かに隠された顔が柔らかな、しかしどこか冷たい表情をつくる。

「ここ数日お前がやってる事といったら、随従を野放しにして任務をサボるくらいだろ。サブナックが困ってるじゃないか」

「余計なお世話」

ユリシーズはぷいと視線を逸らす。簡単に言い包められるアイジャとは違い、ウォルディは厄介な相手だった。
ああめんどくさい、少年はもう一度思う。

「そう言うなって……なぁユリシーズ。お前一体、何しようとしてるの」
「……、」
無言でじろりと睨んでくる視線にウォルディは苦笑した。聞くな、ということか。わかっていても聞きたくなるのは彼の性である。
「お前の目的とやらと、“あれ”は関係あるのかな？」
「……無駄口叩いてる暇があったら、自分の職務を全うしたらどう」
噛み付くように言葉を紡いだユリシーズは座っていた革ソファーから勢い良く立ち上がり、つかつかとウォルディに歩み寄る。そのまま胸ぐらを掴もうとして、やめた。
ウォルディのほうが背が高いこの状況では無意味だ。違うほうの“力”で勝負すれば良いのだけれど、生憎気分ではない。
「僕が何をしようが君には関係ない。君は“来るべき日”に備えて、護身術でも身につけたらどう？　……僕は、」
ぎゅっと柳眉を寄せ、肩を荒げながらユリシーズは続ける。少年がここまで激昂するなど酷く珍しいことだった。
「僕はその日が来ても、君のことは護ってやれない。君の命は僕の管轄外だ」
「お前に護られるなんて考えたこともないよ、ユリシーズ。お前は自分の大切な“妹”の護衛に全力を捧げれば良い――首領（ドン）の仰せのままに」
「――ウォルディ！」
耐えかねたように少年が叫ぶのを見て、やりすぎたな、とウォルデ

ィは思う。
けれど彼は後悔などしていなかった。ユリシーズの逆鱗に触れるとわかっていて、敢えて言葉にしたのだ。
大人気ないことをしているのはわかっている。でも、こうでもしなければ遣り切れない。

「……わかってるよね、ウォルディ」
「……ああ」

ふいに声を潜めた少年の言いたいことは、ウォルディには十分すぎるほど理解できていた。
今この組織の中でユリシーズの気持ちを知っているのは彼だけだ。
ウォルディは少年の共犯者なのだ、もうずっと前から。彼が少年に加担するその理由は、もうずっと胸のうちにしまわれたままだけれど。

君には悪いと思ってるんだよ、と柄にもなくしおらしいことを言うユリシーズの頭を撫でてやる。血の繋がった肉親のように、弟のように。
――本当にそうなら、良かった。

「“継嗣”は君だよ、ウォルディ・レノ・ファンダルス」

呟いた少年の身体に、ファンダルスの純血は流れていない。

第四章《慟哭》：亡霊の足音（1）

「……おい、オイオイ。何だぁ、こりゃ」

久々の再会を果たした武藤　駿が開口一番に発した言葉はそれだった。帰還早々、例を見ないルシファーの厳戒体制の元身体チェックを受けるはめに陥った遠征組は疲労を隠し切れず、少々辟易さえしているようだ。

駿も例外ではなかった。漸く身体検査から解放されて“監獄”へ帰ってきてからは、ゴキゴキと首を鳴らしてばかりいる。

「それ、こっちの台詞……」

千瀬は駿に手渡された不気味な操り人形の腕を動かしながら呟いた。台湾土産だというその物体はおかしな方向に目が飛び出しているし、体中が麻糸の縫い目だらけで不恰好だ。色は濃い茶色。正直言って気味が悪い。

「魔除けらしいぜー。大事にしろよ」

そういって笑う駿の向こうでは、グロテスクな人形をやけに気に入ってしまったロザリーが上機嫌でそれと戯れていた。これ可愛いねぇ、と笑顔を浮かべる彼女の趣味はいまいち掴めないと千瀬は思う。

「で、だ。何でこんなことになってる？　天下のルシファーがこの警戒っぷり……何があった」

「あれ、シュンってば知らないんだ？」

千瀬は彼に事の成り行きを簡潔に説明した。春憐と共に台湾に派遣されていた駿の耳には、組織の構成員が殺害されている知らせは届いていなかったらしい。

「ふぅん」

駿は軽い相槌を打ち、首を傾げた。眉の根元が僅かに寄せられる。

「じゃあ、それ全部日本に行った奴が殺られたんだな」

「……そう」

千瀬は顔を曇らせた。駿と春憐以外の〈ソルジャー〉の派遣先が日本だったことを少女が知ったのはつい先刻のことである（事件の詳細がついに彼女達にも発表されたのだ。）そして殺害された組織員は全て日本での任務についていたとなれば、日本人としてあまり良い気はしない。

それは駿も同じだったのだろう、その顔には不快だとはっきり書かれていた。

（嫌な感じ）

もう同じことを何度思っただろう。

何者かがルシファーに関わる者を狙っているのは明らかだった。今までは末端構成員ばかりが犠牲になっていたが、今に遠征組の〈ソルジャー〉までもが襲われるかもしれない。

通常の“敵対者”ならば、自分達の相手ではないと千瀬は思っている。並以上には戦える自信があったし、それを裏付ける経験も積んできた。新入りの千瀬でさえこうなのだ、古株のメンバーならばもっと。

（……でも、もし、並以上の相手なら？）

最後の晩餐。その言葉を思い出し、思わず千瀬は眉を寄せた。

全く縁起でもない。

「あいつらなら大丈夫だよ。日本組は俺等より少し帰りが遅いってだけらしいから、そろそろ帰ってくるんじゃないか？」

笑いながら駿が千瀬の肩をぽんぽんと叩いた。

不気味な魔除けの人形を、少女はぎゅっと握り締める。

＊

駿の予想どおり、日本遠征組が帰還したのはそのすぐ翌日のことである。

彼らは通常どおりロヴのもとへ直行し任務報告を行なったのだが、今回ばかりはすぐ解散というわけにはいかなかった。

報告会はそのまま件の事件の緊急会議へと変貌する。ルシファーを襲った異変をひしひしと感じていた日本遠征組は、誰もがその異常さに気が付いていた。

メンバーの中には数人、直属の部下を殺された者も板らしい。戦闘のエキスパート達を出し抜いて事を進める今回の敵はやはり容易には始末できないだろう。

「ただいまぁー」

長い長い話し合いの末漸く遠征組が自らの寝床に帰還したときには、もう日付が変わろうとしていた。
はじめに“監獄”の扉を開け、疲れたように笑ったのはシアンである。やっぱりホームが一番ね、そう言って彼女は自分の住み慣れたスペースへと荷物を運び込んだ。
それから続々と入場したのが欠伸を連発するハルと仏頂面の朝深、無表情のツヅリ。その後ろから現れた金髪の女性を見つけ、思わず千瀬に笑顔が浮かんだ。

「おかえり、サンドラ」

よかった、と千瀬は呟く。当たり前のように全員が帰ってきたことが無性に嬉しかった。やはり全員が疲労の色を隠し切れていなかったが、それは仕方がないだろう。

「ただいま」

サンドラがふわりと笑う。柔らかく波打った髪が美しく揺れた。
それから一拍遅れて、よぅ、サンドラに声が掛けられる。レックスがこちらに向けて片手を上げていた、それに応えるように手を振り返す彼女を千瀬はぼんやりと見つめた。
この二人は本当に仲が良い。それが属に言う恋愛感情を介した物なのか、昔からの仲間としての繋がり故なのかはわからないが。
ただ確実に目に見える絆が、千瀬には美しく思える。

「サンドラ、これは何？」

千瀬と並んで遠征組を迎えていたロザリーが何かを指差した。皆の視線が集中する指の先に千瀬が目をやれば、サンドラの足元に転がるボストンバッグが見えた。

「ん……？」

千瀬は首を傾げた。ボストンバッグから、おかしな物体が飛び出しているのが見えたからである。

（――植物だ）

新聞紙に包まれたその根元にはしっかり水分が補給されているのだろう、見たところまだ瑞々しい。当たり前のように道端に生えていそうな、言うなれば雑草のように思える。

「ああ、これのこと？　えっと、なんて花だったかしら」

サンドラが引っ張りだしたその植物は花と言うよりも草なのだが、千瀬には見覚えがあった。他でもない、祖国の草花だ。放射状に広がった丸みのある葉に、小振りで穂型に重なってついている鮮やかな青紫の花。名前は、確か。

「……立浪草？」

「そうそう、それ。タツナミソウ。日本各地に分布してるらしいのよね。私は初めて見たんだけど、素敵な花言葉だったから持って帰ってきちゃったの」

観葉植物ではないけれど日持ちもするみたいだし、と嬉しそうに語るサンドラに、ただただ千瀬は首を傾げる。

「花言葉……？」

千瀬は家柄上、日本古来の文化には詳しいほうだった。植物の知識

もそのうちで、春や秋の七草などは覚えておくようにと言われたものだ。花言葉も教養の一つとして学んだことがある。
けれど立浪草の花言葉は何だったろうか、と千瀬は眉根を寄せた。あまりポピュラーな花ではないだけに、なかなか思い出すことができない。

「ルカにね、お土産が欲しいって言われて。あの子日本が好きなのよ」
「へぇ？」

言われて千瀬は酷く驚いた。ルカが日本を好いているという事実にもだが、何よりも彼女がお土産をねだったりするのだということに。ルカには神秘的なイメージが付きまとい、どうにも年相応の行動をとられると不思議な感じがしてしまう。小さく苦笑を洩らしながら、千瀬は話の続きを促した。

「だからこの花ね、ルカへのお土産なの。私からあの子へ贈るのに、ぴったりの花言葉」
「ルカ、に？」
「ええ」

サンドラは柔らかく目を伏せた。優しい瞳。彼女がルカを妹のように可愛がっていることは誰もが知っているが、きっと真実はそれほど単純ではないのかもしれない。
千瀬は彼女達の過去を知らなかった。ロヴにルシファー結成時の話を聞いたときも、サンドラがいつ彼らと出会ったのかは語られなかったのだ。
けれどきっと、簡単には語れないような深い繋がりがあるのだと千瀬は思っている。ここの人間は皆、そういう過去を抱えながら生きてきた。

「任務先にタチバナって日本人の案内役が居てね、空き時間に彼が詳しく教えてくれたの。ルカは花言葉なんか知らないから、もしチトセが思い出したときはあの子に教えてあげてちょうだい」

立浪草の意味をね。

サンドラが軽いウインクと共に言う。どうやら教えてくれるつもりはないらしい、千瀬は自力でその花言葉を思い出さねばならなかった。

「ああ、もう一つあるのよ」

思い出したように言うとサンドラはバッグの中からやや大降りの本を取り出す。それをぱたぱたと振ると、彼女の掌に二枚の紙が滑り落ちた。

「栞？」

「そう。これも日本の花でしょう？」

しおり、だった。まさに今彼女がしていたように、本に挟んで使うあの。

千瀬は手渡されたそれをしげしげと眺めた。和紙の上に鮮やかな絵の具で花が描かれている。その上から透明なフィルムを貼り、藍染の紐が結ばれていた。白い台紙の上に花火のように散った、細長い紅色の花片は確かに日本の――彼岸花、である。千瀬の家では、曼珠沙華と呼ぶ事が多かった。

「どう、懐かしい？」

「……すごく」

それはただの絵に過ぎなかったのだが、少女の記憶を酷く揺さ振った。

千瀬は家の裏手に生えていた花を思い出す。死人花などという呼び名のあるせいか、はたまた火事を呼ぶとされるからか。不吉なイメージの付き纏うこの花を、何故か幼い頃からずっと綺麗だと思っていた。華やかな紅に、哀愁に似た愛しさすら感じてしまって。千瀬の感性は当時にして、既に他人とずれてしまっていたのかもしれない。

「一枚はチトセにあげるわ」

サンドラは栞を千瀬の手に握らせた。千瀬はその笑顔を見ながら、きっともう一枚はルカに渡すのだろうと思う。

汚れのない曼珠沙華の紅は、ルカの黒髪にきっとよく似合うだろう。

（……この花には毒がある）

幼い頃教えられたことを思い出した。毒があるのは茎だったか、それとも根だっただろうか。

栞を光に透かしてみる千瀬の頭をサンドラが撫でる。

「ルカに渡しに行かないの？　日持ちするっていっても、早くしないと萎れちゃうよ」

千瀬は立浪草を指差した。サンドラは腕を組むと、僅かに考え込む素振りを見せる。

「……それが、しばらくは無理そうなのよね」

彼女はちらりと後方に目をやった。奥ではハルとツヅリが何やら深

刻そうに話し込んでいる。それを眺めているシアンの表情も暗い。朝深だけは一人部屋の隅で壁に寄り掛かり、ただ空を睨んでいた。彼らが何の話をしているのかは一目瞭然だ。暗い話題など、今は一つしかない。

「私の所も被害が酷かった。気付いたときには部下がどんどん死んでて――」

サンドラは口籠もり、苦しそうに眉根を寄せる。何か、酷く思い悩んでいるようだった。その苦悩は理解できたので、千瀬は何も言わずに彼女を見つめる。

「……特にアサミの所が一番多かったみたいだわ。皆、酷い殺され方をしていた」

朝深。呟いて千瀬は本人を盗み見る。殺された部下、なす術もなかった〈ソルジャー〉達。過剰なまでの身体検査と長引いた会議。

（嫌な、かんじ。）

千瀬が思っていたよりもずっと事態は深刻のようだった。そして何よりも、遠征に向かった組織員の精神的なダメージが大きい。同僚を殺戮された《ポート》や《パース》は勿論、惨劇を食い止められなかったＥＰＰＣの面々は皆自分の腑甲斐なさを責めているようだった。

「警戒が、続くから。暫くはルカに会えないわ」

〈ハングマン〉であるルカはこれから本格的に警備にあたるのだろう。彼女が忙しくなればなるほど、〈ソルジャー〉と〈ハングマン

〉の接触は減る。
千瀬は拳を握り締めた。自分達は常に死と隣り合わせなのだと、改めて思い知って。

（……あれ、）

ふと千瀬は違和感に気が付いた。
なぜルシファー本部までもがこんな厳戒体制を敷いているのだろう。構成員を殺した何者かは、日本にいたのではないのだろうか？
千瀬はこの話を聞いた時からずっと、敵は日本人または日本に潜伏するルシファーの“敵対者”、または殺し屋の部類だと思っていたのだ。
そうならば日本からメンバーが帰還した今、この体制はおかしすぎる。本部を固めても意味が無い、日本に人員を派遣して即刻敵を討つべきではないか？

「……、」

そこまで考えて息を呑んだ、少女の喉がひゅっと鳴る。千瀬は一つの考えに行き着いて身を震わせた。

（――これじゃあ、まるで）

……まるで。

第四章《慟哭》：亡霊の足音（2）

（亡者の足跡を見つけた。ねぇ、いなくなったのは誰？）

ルシファーに不穏な空気が流れていた。

日本遠征に向かったＥＰＰＣのメンバーが再び――今度は内密に――召集を受けたのは、彼らが帰還した数日後の事だった。内密、と言えども同じ〈ソルジャー〉である千瀬達には筒抜けだったのだが。（要は《ポート》等の一般組織員に知られなければかまわないのである。）

それは一度では収まることなどなく、以来遠征組は何度となく召集されて日本での任務状況を報告させられていた。呼び出しが掛かる度にハルは不機嫌になり、朝深はますます無口を貫くようになっている。それもそのはず、今彼らが直面しているものは『報告』などという生温い言葉では語れないようなものに成り果てていた。取り調べ、と言うのが正しいのだろうか。

（……まるで）

千瀬はぎゅっと下唇を噛み締める。居たたまれなくなって“監獄”

を出ると、駿とロザリーもついてきた。
少女は二人に未だこの不安を打ち明けられていない。千瀬は自分自身の勘など信用できないと思っていたし、何より憶測で事を荒立ててはならないと考えたからだ。

「あー……」

遠征組の纏うピリピリした空気に辟易していたのだろう、駿が思い切り伸びをした。いつもは彼とふざけあっている不良少年、ハルも今は事の渦中にいる。

「なんかヤだよなこの空気。俺、台湾組で良かったぁ」

監獄の扉が閉じ切ったことを確認して駿が言う。これで今部屋の中にいるのは遠征組だけ、しかしそのうち数人はまだ召集から戻ってきていない。
遠征に出た〈ソルジャー〉のうち召集・事情聴取を逃れていたのは、日本に向かわなかった駿と春憐のみである。こんな事態、誰も予測などしていなかった。

「……にしても、なんでこんなにしつこく調べるんだろうな。遠征組の話をもとにして作戦立てたら、うちの警備を強化しつつ日本に精鋭を送って敵を消して終わりだろう？」

はやくすりゃいいのに、と呟く声にロザリーが答える。

「日本にいる敵が誰でどんなヤツだかわからないからじゃない？」

三人は特に行く当てもないままぶらぶらと歩を進めた。あまり“監獄”から離れることはできない。ルシファーの警戒体制は異常な迄

に強まっていて、いつ出動呼び出しがかかるかわからないからだ。

「でもなあ。早く解放されたいぜ、この緊張状態。もしかしてもう日本にいないのかな、そいつ。で、ルシファーに侵入する可能性があるからこんなに警備が厳重とか」

「あー、なるほど」

暇を持て余して憶測を立てる駿とロザリーを千瀬はそっと盗み見た。考えすぎなのだろうか、でも。

「……チトセ？」

「どうした。お前今日やけにおとなしいじゃん」

「……あの」

少女の様子がおかしいことに気が付いたのだろう、二人に見つめられた千瀬は口を開いて、やめる。

千瀬には言えなかった。言いたくなかったのだ。今の状況がまるで、既にルシファーに殺人鬼が潜んでいるみたいだということ。まるでそれが遠征組の中に、遠征組を疑っているみたいに――――

「疑ってんだよ」

唐突に声が聞こえて千瀬の肩がびくりと跳ねた。弾かれたように顔を上げた三人の目の前に、小柄な少年の影が立つ。

「……ルード」

駿が呟いたその名に、向かいの少年が軽く肩を竦めた。どうしてこんなところに、小声で尋ねた疑問にルードが答えることはない。

「大正解だよ、チトセ」

柔らかく言ったルードの笑顔に今度こそ千瀬は震えた。ルードはわかっているのだ、千瀬が一人考えていたことを。どういう意味だ、と低く駿が唸った。

「もう皆気が付いてるさ。そうでしょ？　誰も口に出そうとしないだけ」

ルードがふいと視線をそらして俯いた。なおも食って掛かろうとする駿の腕を掴んで止めたのは、他ならぬ千瀬だ。駿は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべたあと、諦めたように肩の力を抜く。そんな様子を黙って眺めていたロザリーの顔は蒼白だった。

……嗚呼、と千瀬は思う。

（気付いてたんだ）

千瀬は浅はかな自分を恥じた。自分一人がそれに気が付いていたわけではなかったのだ、駿もロザリーも、気付いてそれを隠していた。そ知らぬふりをして明るく振る舞っていた二人は千瀬よりずっと頭が良い。

しらないふりをしていたのに。

もう誤魔化せなかった。正面から向き合ってしまったのだ。殺人鬼は、もしかして。

「……わかったら“監獄”に戻れよ」

「ルード……？」

「ここから先は通せない。今は、駄目。――これは命令だ」

褐色がかった猫のような瞳が、何も聞くなと言っていた。三人は上官である少年を無言で見つめ返したあと、小さく頷いて踵を返す。

（何もできない）

気が付いたところで無力だった。今はただその時を待つだけ。上層部は遠征組を調べているのだろう。調べて、それは真実かもしれないし何もないかもしれない。

（今は、まだ）

何も起こらなければ良いと千瀬は思う。これ以上、は。

＊

その部屋があったのは三人の〈ソルジャー〉の子供が進もうとしていた、まさにその先であった。

一見何の変哲もない個室の中、あるのは二つの人影。そのうちの一人、碧の瞳を持った少女が疲れたようにその金の髪を掻き上げた。少女は自分の掌を静かに見つめる。何の変哲も見られない白い手には、じっとりと汗が滲んでいた。

「終わったのか」

銀髪の青年が問う。彼の鋭い金の目が、僅かに少女を気遣う色を見せた。

「日本遠征組は一通り全員にやったわ……でも、『それ』の記憶がある人はいなかった」
金髪の少女――ミク・ロヴナスは静かに答える。
ミクがエヴィルの顔を見上げると、彼はただそうかとだけ呟いた。
程なくして扉の向こうから現れた二人の人間に、ミクはエヴィルに告げたのと同じ内容を繰り返すことになる。そのうちの背の高い青年が頷いたのを、その場に集まった六つの瞳が見つめていた。

「情報を誤魔化されている可能性は？」
「ないわ。あたしに“これ”が出来るのを知ってるのは初期メンバーだけだし、どっちにしろ記憶は隠せるものじゃない」
ロヴはミクの言葉を聞くと暫し考え込んだ。ミクは再び自分の掌を見つめる。

（――“これ”は、あまり気分の良いものじゃない）
小さく吐いた溜息に気付かないような者はこの場にはいない。誰も彼も、特殊な環境で力を培ってきた手練ばかりだ。

「夜は、どうだった」
ロヴが口を開いた。ミクは顔をあげ、わずかに首を傾げる。
「夜は皆一緒。眠っているだけ、つまり記憶は残った無いって意味だけど――あたしは夢の内容まではわからないから」
「……可能性は、あるな」
ロヴは腕を組むとゆっくりとソファーに腰を下ろした。その一挙一

動を見つめる彼の部下とは、もう十年以上の付き合いになる。彼らはロヴを信じていた。否、ロヴ以外のものを信じたことなどなかったのだ。

「無意識に行動していて覚えていないのか、何者かに操作されているのか。わからないが、可能性が高いのは夜だ。犠牲者が発見されたのはたいてい明け方だったと聞くしな」

「そんなことって……」

「ないとは言いきれないだろう」

操作ならば能力者が動いてることになる。自分達と同じような。言葉に詰まったミクの肩を、労うようにロヴが叩いた。暫しの沈黙が流れた後、おもむろにエヴィルが口を開く。

「……ロヴ。お前、この前は言っていたじゃないか。『それは最悪のパターンだ』と……どうして、現状であいつらを調べる必要がある？」

「状況が変わった」

訝しげなエヴィルを見やり、ロヴは表情を崩す事無く続ける。

「日本遠征が始まると同時に犠牲者が出た。初めは日本に敵が潜んでいたという見方が強かったが、日本から〈ソルジャー〉が撤退すると同時に犠牲はぴたりと止まった。……日本にはまだ、後始末をしている末端構成員が大勢残っているにもかかわらず、な。そういうことだ」

「そんな……！」

ミクが悲鳴に近い声をあげる。

「それじゃあロヴは、《それ》が彼らの中にいるっていうの？　本気でそう思ってるわけ！？」
「まだ決め付けたわけじゃない……だが戦闘能力から見ても、ＥＰＰＣである可能性は極めて高い」
だから調べているんだろう。言われた言葉にミクが唇を噛み締めた。
「……仲間を疑うなんて、あたしは嫌」
「そうだな」
軽い同意のあとロヴは淡々と言葉を紡ぐ。
「まだわからない。憶測にすぎない。だが、警戒は怠るな。夜の警備は特に、な」
エヴィルが眉を寄せた。あまり感情を顕にしない彼の眉間に、深い溝が刻まれる。
憶測にすぎない《それ》の存在が、本当に杞憂に終わる可能性は限りなくゼロに近かった。それでもこの男は笑うのだ。首領である彼が不安げな態度など、見せてはならないのだから。
「ねぇ、もしも。もしも、本当にあたし達のなかに《殺人鬼》がいたら……？」
「……裏切りは死罪」
ミクの言葉に答えたのは、ロヴではなくエヴィルだ。
「ＥＰＰＣに、理性を失って無差別な殺しをするような輩は必要ない。答えは一つだ……わかってる。お前もわかってるだろう？　その為に俺達がいる。その為のハングマンだ」

珍しく饒舌なエヴィルを前に、ミクはそれ以上何も言うことが出来なかった。

「もしその時がくれば……」

「――大丈夫」

今まで一言も喋らなかった黒髪の少女が静かに口を開いた。誰もが少女を見つめる。最後の決断を下すのは、彼女だから。

ルカは小さな声で、ゆっくりと呟いた。

「……大丈夫だよ。その時は、ちゃんと私が始末を付ける」

大丈夫だよ。だって私たち皆、殺人鬼だもの。

第四章《慟哭》：紅い夜明け

――まだ朝日が昇る気配もない、闇の刻。
千瀬はベッドの代わりに使用している大型のソファーの上で、ゆっくりと目蓋をもちあげた。古くなったスプリングがぎしりと鳴いて、それが少女の意識にかかった靄を払ってゆく。

（……あれ？）

どうして目が覚めたのだろうと、千瀬はこっくり首を傾げた。自慢にはならないが、けして彼女は寝起きの良いほうではない。どちらかといえば寝汚いし良く寝呆ける――それは少女自身も自覚済みだ。周りを見渡せば、他に“監獄”にいるのはロザリーとオミ、春憐、椿の女性陣のみであった。珍しいことではない。ＥＰＰＣは交代で睡眠をとることになっているので、夜中でも全員がこの場所にいることはめったにないのだ。特に今のような警戒体制の最中では、巡回として深夜でも皆駆り出される。

「……？」

違和感の無い光景だった。けれどどういうわけか釈然としない。――今日は、何か変だ。空気が騒つくような。
嫌だな、と千瀬は思う。これでは寝られない。野生動物がその勘を働かせているように、今やすっきり覚醒した身体が全神経をそばだてている。
――ぱちり。
千瀬が灯したランプのカバーガラスに、いつの間にか起き上がったオミの顔が逆さまになって映り込んでいた。薄明かりに照らされた少女たちの頬が陶器のように白い。

千瀬がちらりと目をやれば、オミの漆黒の瞳は千瀬を通り過ぎてずっと奥を見据えているのがわかった。

「オミ？」

寝呆けているわけではないだろう。（自分じゃあるまいし、と思って千瀬は虚しくなる。）

数秒の間の後、オミは俊敏な動作で鮮やかな浅葱色の髪を結い上げると千瀬に向けて小さな唇を動かした。

「――はじまった」

あかい、夜が。

＊

夜明けを迎えたルシファーは騒然としていた。

誰もが堅い表情を作り、忙しく動き回る。外部と連絡を取り合う者、武器庫に駆け込む者、ただ右往左往するだけの者。

その中でＥＰＰＣはロヴを中心に緊急集会を執り行い、各自臨戦態勢を余儀なくされた。たった一夜、ほんの数時間の間に、事態は悪い方向に急転したのである。

――発見された犠牲者は《パース》だった。

だったと推測される、と言うのが正しいだろう。人間だった“それ”は切り刻まれて、原型を留めてはいなかったのだ。傍に転がって

いた翡翠色の紋章が、唯一それが元は《パース》だったことを連想させた。

彼――彼女かもしれない――は先日の大集会で本部に呼ばれたうちの一人だったのだろう、通常ならば末端にあたる《パース》は本部になどいない。巡り合わせが悪かったとしか言い様が無かった。

死体の処理をした掃除婦グレッタの体にはおびただしい血痕と腐臭が付着していた。それだけで、その凄惨さは容易く見て取れるだろう。

千瀬は血に塗れたグレッタの有様を目の当たりしていた。嫌な胸騒ぎで眠れぬまま夜明けを待って監獄を出た、千瀬の前に一番はじめに現れた人物がこの老婆だったからである。

千瀬は息を吐く。それは嘆息ではない。少女は、理解したのだ。――終わってしまったのだ。唐突に、こんなに呆気なく。願い続けた小さな安穏は、もう戻らない。

（……あたし達は、戦わなければいけない）

だってそれが唯一の。

＊

「ふざけんな！！」

部屋一杯に少年の咆哮が反響する。ぐわん、と割れながら無機質な

石の壁に吸い込まれていった、それに答える声は無い。

「俺達じゃねぇ。何度言ったらわかるんだ……っ！」

言い終わるやいなや、バンッ！　という激しい音が“監獄”中に響き渡る。

日向ハルの左拳が監獄の壁を力の限り殴り付けたのだ。素手で攻撃された石の壁は漆喰が剥がれ落ち、パラパラと辺りに舞散った。

「ハル、よせ！」

「うるせェ、テメーは平和に台湾なんかに行ってたくせに」

「ンだと、」

ハルの胸ぐらを駿の腕が捕らえる。文句あんのかこのシスコン、喧嘩好きの不良少年はここぞとばかりに駿を煽った。

あわや乱闘になりかけた少年二人を、次の瞬間太く大きな腕が引き剥がす。

「落ち着くんだ、ハル」

諫めるレックスに攻撃的な視線を送ったハルは、肩を怒らせながら勢い良くその場に座り込んだ。

「どういうこと……？」

小声で尋ねた千瀬にロザリーは首を傾げた。二人はつい今し方『警戒強化』の名のもとにルシファー内の巡回を終えたところで、さっぱり状況が飲み込めなかったのだ。

“監獄”に帰還し扉を開けた二人の目に映ったのは、激昂するハルと止めるつもりが乗せられてしまった駿、それを宥めようとするレ

ックスと憮然とした表情を浮かべる日本遠征組。室内には物を投げ飛ばしたような跡があり、至る所に何かの破片が散乱している。

「さっきまた、僕等に召集がかかったんだよ」

いつのまにか千瀬とロザリーの後ろに立ったツヅリがゆっくりと言葉を吐いた。表情は柔らかいが読めない青年だ。感情が、見えない。

「昨晩（パース）が死んだだろ？　二人……三人かな。見たけど死体が混ざりあっちゃってわからなかった」

ツヅリはさらりと恐ろしいことを言ってのける。ハルの元を離れていつのまにかこちらにやって来ていた駿が、ぞんざいに顔をしかめてみせた。

「この際人数なんてどうでも良いんだけどね。問題は、日本遠征組にしつこく召集がかかる点だよ。おかしいと思わない？」

千瀬は首を縦に振ることが出来なかった。少女はもう気付いていたからだ、頻繁すぎる召集の意味に。

ロザリーがぴくりと震えて視線を逸らす。ルードに言われたことを当人達の前で言うことなど、できるはずもなかった。

「ハァ？　何が言いたいんだよ？」

意味わかんね。冗談めかしてその場を誤魔化そうとする駿の気持ちを知ってか知らずか、ツヅリは薄い笑みを浮かべた。

「ルシファー上層部は疑ってるんだ。この件の犯人がＥＰＰＣ内にいるって――」

「……ッ」

それは確かに笑顔だった。けれど目は前を見据えたまま、口元だけが笑っている。

三人は息を呑んだまま、ツヅリを見つめるだけだった。周りが自然と気が付いた事に当人達が気付かぬはずはなかったのだから、驚く必要はどこにもない。ないけれど、言葉が出てこないのだ。

「――否。殺人鬼は、日本遠征組の中にいるってね」

千瀬が聞きたくなかった言葉。けれど心の奥底で、誰もがそうではないかと考えていたこと。

ここ数日のルシファー上層の動きはおかしかった。明らかに、部下を調べるような活動をしていた。

（……やっぱり）

千瀬は確定した事実に、そしてツヅリの表面だけの笑顔に背筋を凍らせる。

「……気にしすぎじゃねぇの。そんなわけ」

「ないとは言いきれないだろ？」

なおも無理に言葉を繋げようとした駿の口を、ツヅリはやんわりと塞いだ。もはや気休めさえ言えない。諦めて、駿はその口をつぐむ。

「ここの連中は、誰もが何かしらの過去を抱えている。皆が殺しの経験を持っていて、一歩違えば刑務所行きだった。チトセもそうだろ？　シュン、君もね」

瞬間、ばっと勢い良く駿が視線を逸らした。千瀬は驚いて瞠目する。

「ここにいる誰もが殺人鬼になりうる。昔は皆、一度は殺人鬼だったんだから……ね？」

目の前で淡い微笑みを浮かべる青年を、ただ千瀬は見つめることしかできなかった。

ツヅリにもあるのだろうか、と千瀬は思う。人には言えない過去。千瀬と同じような、あるいはそれ以上の。

「僕のことは秘密だよ。そのほうが、世の為人の為になるからね」

千瀬の思考を読んだかのように。ツヅリは小さく呟いた。

第四章《慟哭》：間話 - 舞台裏（1） -

「……ねぇ、ピュティアス」

少年の声に瞬時に反応した、優秀な彼の下僕はすっと目を細めた。
主人の正面まで回り込んで片膝をつけば、相手が満足気に笑うのがわかる。
つまんないんだよ、呟いた少年が口の中にザッハトルテぐいと押し込んだ。甘い甘いチョコレートの味。僅かな苦みが隠されていることに気付いて、少年は唇の端を吊り上げる。

「もう暫くでございます、ユリシーズ様」
「んー、でもぐずぐずしてるとまたアイジャが……」

名をユリシーズというこの少年は、通常の任務の他に組織の首領（ドン）から極秘である役目を与えられている。アイジャ、とはその“役目”に深く関わる少女の名だった。
ユリシーズは我儘放題に育った娘を思い浮べると小さく溜め息を吐く。“こちらの問題”を片付けるには、まだ時期ではないのだ。

「申し訳ございません」
「やだなぁ。君はよくやってくれてるよ、ピュティアス。“あれ”がしぶといんだろう？」

あれ、とは少年が最近目を付けた玩具（おもちゃ）の事だ。脳裏に描いて自然と顔が弛んでしまう。“あれ”は彼にとって前座にすぎなかったが、楽しくて仕方がなかった。

「……ですが、わたくしの力不足です」

ピュティアスは己の主人を見つめる。歪んだ正義に囚われている、無垢な少年だ。

――なんて愛しい、小さな我が主。

「首尾はどうなんだい？　暇潰しに教えてよ、君の《催眠術》が今、何を引き起こしているところなのか」

にこりと笑んだ少年に、ピュティアスは『御意』と首を垂れた。彼女は自分が先日接触した、主人の玩具を思い浮べる。

「催眠術とは似て非なるものかと存じます。わたくしが行なったのは、内部からによる人格破壊」

ユリシーズは頬杖をつき、楽しそうに彼女の言葉に耳を傾ける。

「わたくしが選んだ人物は、過去に殺人中毒を起こしていたレベルの“殺人鬼”でした。血を糧として生きていたようです。何故かはわかりませんが現在は中毒から抜け出し、一犯罪者としてあの組織で生活しておりましたが……わたくしはその人物の記憶に歪みを生じさせ、過去の記憶を呼び起こしたのです。基本はそれだけなのですが」

“あれ”の過去を覗き見た時、ピュティアスは酷く驚愕したのだ。あんな過去を持ちながら、なぜあれは発狂せずに今まで生きてこれたのだろうと不思議に思う。

「はじめはその者自身も気付かぬ程の僅かな変化を起こします。本人が眠っている間に、過去の殺人鬼の人格が目を覚まし行動するよ

うに致しました。朝になれば本人は、夜間に自分が何をしていたのかなど覚えておりません。人工的に二重人格症を作り上げたようなものでしょうか……これにより、あの組織に殺人鬼の発見を遅らせました。自覚症状がありませんから、あの者が自白することはありえません」

「あったま良いー」

無邪気に笑うユリシーズを、女は愛しげに見つめた。

……この少年の為なら自分は死んでも構わないと思う。もとより、彼に出会わなければ無かった命だ。

「日が経つごとに殺人鬼は表の人格を侵食します。そろそろ表の人格が消え失せて、組織の人間を無差別に殺していることでしょう。……ルシファーの上層が気付いた頃にはもう手遅れです」

あの者は、血に飢えた亡霊と化しているでしょうから。

女が続けた言葉に、少年はコロコロと笑い転げた。愉しくて仕方がないのだ、本当に良いおもちゃを見つけたと思う。ラジコンにしては上出来だ。

「……ですがユリシーズ様、わたくしの“催眠”はここまでが限界です。このままあれを操作できるのは、保ってあと七日程かと。もう一度接触できれば……」

ピュティアスの術は万能ではない。それを完全なものにするには、最低二回の施術が必要だった。もう一度接触して《上書き》できなければ、“あれ”はじきに正気を取り戻すだろう。

「ああ、良いよ。そうなったら“あれ”は解放してやって、楽しませてくれたお礼に」

「ですが……！」

“あれ”と接触した日、ピュティアスは本人に姿を見られている。それを生かしたまま野放しにするということは、即ちユリシーズへの手掛かりをわざわざ撒くようなものなのだ。

あの組織に限ってそれは自殺行為である。ユリシーズがなんと言おうと、ピュティアスは彼を危険に曝すわけにはいかなかった。

「良いんだ、僕はあの子に気が付いてほしいだけ」

僕はここにいる。僕を敵と認識して、そうして恨んでくれれば良い。笑った少年の姿が儚く見えて、思わずピュティアスは立ち上がった。彼女にはわかってしまったのだ、ユリシーズの行動の意味が。

「お願い、ピュティアス」

「……御意」

ピュティアスは静かに首を垂れて目を瞑る。

嫌な予感がしていた。ユリシーズには告げなかったが、彼女は“あれ”に対し違和感を抱いていたのである。

この段階に至る過程だって、本当はもう少し早く済ませてしまえる予定だった。それが思いのほか遅れたのは、“あれ”が“殺人鬼”を深層心理で拒んだからだ。

今までこんなことは一度もなかった。相手が能力者ならいざ知らず、“あれ”は只の人間だ。

（……でも、）

命じられれば実行するまでである。ピュティアスにとって絶対なのは、ユリシーズただ一人。

（きっともうすぐ、終わりが来る）

＊＊＊

“殺人鬼”は獲物を探していた。

――日が沈み表の人格が眠りに就くと同時。それは体の内から沸き上がり、殻を食い破って現れる。

封じ込めていた性である自分が、染み付いた殺人衝動が、鬼となり動きだすのだ。

はじめは表の人格に拒まれて活動がままならなかったが、最近は楽に呼吸ができる。自由だ、と思った。同時に酷い喉の渇きを覚える。

朝目が覚めても、きっと《表の自分》はまた何も覚えてはいないだろう。最近は残された中核の精神さえ弱っているようだから、爪の間に入り込んだ血痕を訝しむこともないかもしれない。

今の状態の自分は狂っているのだと、心のどこかではわかっていた。これはきっと、表の《あいつ》に残された僅かな理性のせいだ。

（でも、もう）

夜中に目を覚ます度に感じるのだ。少しずつ、《夜の自分》と《昼間の自分》が混ざりあっていること。血に飢えた鬼である自分が表に出る時間が、少しずつ長くなっていること。

――もう逃れられない、と表の《あいつ》が叫ぶ。

――戻りたくない。

諦めれば良いと、自分は笑う。

手を血に染めるたびに、彼女の顔が頭を掠めるけれど。自分にはもう、関係ないのだ。

（喉が、乾いた）

活動場所が変わった。ここには楽しめる獲物がたくさんいるらしい。

今はただ血肉が欲しい。鮮血を、体中に。

欲しい。ほしい。ホシイ。あの赤。だらしなく流される血、血、……、

昔と同じ過ちを犯すのかと、《あいつ》が消えながら泣いていた。

そんなもの知らない。本能に忠実に生きて、何が悪い？

（狩りの時間だ、）

遠くから生き物の匂いがしている。温かい鮮血の香りが、“殺人鬼”の鼻を擽って流れてゆく。

くすくすと堪えきれなかった笑い声を零し、“殺人鬼”は恍惚の表情を浮かべた。

第四章《慟哭》：悲鳴の部屋（1）

刈り取られる鼓動が、摘まれてゆく命が、そして貴方の叫びが。

（この場所を深紅に染める）

＊

「……また？」

「今日は、六人」

“また、殺された”――はじめての犠牲者が出て以来、ルシファーは毎日必ず死者を出している。

犠牲者の出る時間は夜だった。夜が明けるたびに、必ず建物内のどこかで死体が発見されるのだ。

ＥＰＰＣをはじめとする面々は血眼になって夜の警備を行なったが、闇に潜む殺人鬼はそれを掻い潜り着実に殺しを遂行するのだった。

もはやルシファーに、心休まる場所はない。

それどころか、殺人鬼がどこに潜んでいるのか――無論、誰なのかわからない有様である。事態は予想されていたよりずっと深刻だった。

「昨日警備に着いてたポートは何してた？　役立たずめ……」

「そのボートが全員殺されている」
「……。マジか」

話し込むハルと朝深を見ながら千瀬は思う。
もしかしたら、あの二人のうちどちらかが殺人鬼かもしれない。二人共かもしれない――現状は、そういうことだ。

「……大丈夫か、チトセ」

突如名を呼ばれた千瀬はびくりと肩を震わせる。
彼女に声を掛けたのは華京院　椿だった。椿は怪訝な表情で千瀬を見つめていたが、やがて高い位置で結いあげた髪を揺すると千瀬に背を向ける。

「……巡回の時間。行くよ」
「あ、うん」

椿は必要最低限の言葉しか発しない。それはもう千瀬にもわかっていることだ。そんな椿が他人を気遣うような発言をしたことに内心驚きつつ、千瀬は彼女の後に続いた。
……椿が気にするほど自分はぼんやりしていたのか、と思うと笑えてしまう。

（もうこんな時間）

千瀬は今日、椿と共にルシファー内の巡回当番にあたっていた。もう一人の当番であるオミはすでに見回りに向かったようだ。
――時刻は午後十一時半。広いルシファーの構内をくまなく巡回するとなれば、三人で手分けしても一時間半はかかるだろう。
巡回の終わる午前一時。それはきっと、殺人鬼が目を覚ます時刻。

（……笑えない）

千瀬はランプに火を灯し、冷たい鉄の扉を押し開けて部屋から出た。
蒸し暑い風が髪をくすぐっていく。

――――さぁ、夜のはじまりだ。

＊

夜風が湿気を孕む、厭な晩だった。椿は湿って体にまとわりつく着物の袖を煩わしそうに払い除け、広い廊下を真直ぐに歩いて行く。寂寥感すら感じさせる静かな廊下だ。千瀬の好きな空間であるはずの場所なのに、なぜだか今晩は落ち着かない。
廊下に面した壁にはいくつもの扉が並んでいた。なぜこの建物にはこんな部屋があるのだろうと千瀬は首を傾げる。見回り当番に対する嫌がらせとしか思えない、実際使用していない部屋など大量にあるのだろうから。

「はじめるよ」
「うん」

仕事開始。千瀬は自らに向けて呟いた。
ギシリと軋む扉を次々に開け、千瀬と椿は部屋の中を確認していく。どの部屋も中は暗かった。大きな窓にかかる赤銅色のカーテンの合間から、青白い月明かりだけが差し込んでいる。

中に誰もいないことと不審な物が無いことを確認すると千瀬は扉を閉め、次の扉のドアノブに手を掛けた――その瞬間だ。
ガチャリ、と。突然、違和感に満ちた堅い音が響き渡った。

「――あれ？」

そのドアノブは僅かに回転しただけで、それ以上はどうしても動かない。千瀬は勢いを付けて扉を押してみたのだが、がちゃがちゃと派手な音が鳴るだけで開く気配は全くなかった。

「どうした？」

廊下の反対側に並ぶ部屋を点検していた椿が千瀬に声をかける。

「ドアが……鍵が掛かってるみたい」
「――貸して」

椿は千瀬にかわってその扉の前に立つと、腰に巻いた帯の隙間から何かを取り出した。
先端が細く尖った小型の刃物である。西洋製の物には見かけない特徴のある形で、柄の先には穴が開いていた。――クナイ、だ。

千瀬は目を瞬いた。いつだったか、椿は忍の家系の出だとは聞いた気がする。しかしこうしてその様を目の当たりにすると、やはり驚いてしまうのだ。

（しゅりけん、とか持ってるのかな）

千瀬が場違いな疑問を抱いている間に、椿はクナイに開いた穴に中指を差し込みくるりと回してからそれをしっかりと握り締めた。

「……ツバキ、何するの？」
「全ての部屋を確認しろというのが上からの司令」
刹那、ひゅ、と響く風を切る音――椿の振り下ろしたクナイの先端が、扉の鍵穴を突き壊した。
銀色の破片が辺り一面に飛び散る。咄嗟に首を傾けた千瀬の頬の傍を、鋭利な鉄片が掠めていった。
「……こ、」
壊しちゃった！
青ざめた顔で狼狽える千瀬を気にせず、椿がゆっくりと扉を押す。
地の底から聞こえるような重い音と共に、鍵を無くした入口が開いた。
金属の擦れる音が悲鳴のようだ。断末魔の叫び声。
「……赤錆の臭い」
吐き出すように椿が言う。続いて部屋に入った千瀬は、思わず服の袖で鼻を覆った。
――ひどく凄惨な光景だった。部屋の壁一面に、何かが付着した痕跡がある。開いた扉の内側にも、そして床にも広がったそれは乾燥し、黒く粉末状に剥がれていた。
明かりをつけなくとも、これが何なのかわかる。錆びた鉄と僅かな腐臭、嗅ぎ慣れた臭い。
（――血の匂いだ）
少女は唇をきゅっと噛み締める。もしここにある血が人間一人分の

ものなら、致死量などとうに越えているはずだった。

「何なの、ここ」

部屋には血痕が散らばるだけで他には何もない。あると予想される死体さえ、どこにも見当たらなかった。

千瀬は扉に目をやる。鍵穴があった場所には、大量の血液が付着し塗り込められていた。きっとこのせいで鍵が錆付き、ドアノブが回らなくなってしまったのだろう。

「……チトセ、ツバキ」

突如後ろから声が聞こえたのはその時だ。振り返ったそこにいたのはオミである。

オミは部屋の有様には目もくれず、真直ぐに千瀬と椿だけを見ていた。そして彼女にしては珍しく、焦ったように言葉を紡ぐ。

「殺人鬼は、ここじゃありません。急いでください」

オミの浅葱色の髪がオレンジの灯りと混ざり合い、鮮やかな萌黄色に見える。ランプの灯と共にゆらゆらと揺れるその色が、ひどく幻想的だった。

こんな部屋の中にいるにも関わらず何で自分は落ち着いているんだろうと、千瀬は自嘲気味に笑う。

「――どこに、急ぐの？」

千瀬の言葉にオミは目を閉じ、それからふるふると首を横に振った。

「わかりません。でも、ルカ様が」

「……ルカ“さま”？」
「ルカ様が急げと仰ったのです。今日は、死臭がするからって――」
「……！？」
――オミがそう言ったのと、甲高い叫び声が聞こえたのはほぼ同時。
悲鳴が、夜闇を切り裂いた。

第四章《慟哭》：悲鳴の部屋（2）

＊

巡回に出ていた少女たちが異変に気が付いた、それと同時刻。
絶望は彼女の目の前に広がっていた。

「……あ、あ……っ」

叫び声をあげたその女は、目の前に広がった赤から逃げるように身を捩る。その体は直ぐに壁へとぶつかり、それ以上の逃げ場はなくなってしまった。ずるり、と近寄る何かの影。

「やめ、て……来ないで……っ」

彼女は先日（ポート）に昇格したばかりの組織員だった。僻地での任務ばかりだった《パース》時代を過ごした彼女にとって、ルシファーの本部に勤務するのは初めてのことである。
自分が昇格した理由を彼女は知っていた。最近このシンジケートを脅かしている“ある事件”によって組織員が大幅に欠乏し、それにともない人員の移動と補充を行なったからだ。

（――組織員が減った理由）

気付いていた。この組織は今危機に曝されているのだと、誰もが。
彼女自身も例外ではない。

――でも、まさか、自分が、こんなことになるなんて。

「……嫌……っ」

死にたくない。

女はきつく目を瞑った。目の前では今、一緒に書類を取りに行ったはずの男が引き裂かれている。

ボトリ、と。何かが彼女の足元に落下した。同時に生暖かい液体を頭から被って、視界が深紅に染まる。至近距離まで来られたのがわかった、ふっ、と肌にかかる《それ》の息遣い。

（……嗚呼、）

彼女が最後に見たものは、血糊に汚れた白刃だった。

＊

「……酷い」

千瀬がその場所に辿り着いたときには、もう命あるものは何も残っていなかった。壮絶なまでの赤が一面に弾け飛び、壁を、床を染め抜いている。

椿は折り重なる肉塊に目をやると、躊躇う事無くその『人であったもの』に触れた。

「まだ温かい」

椿の白い指が深紅の臓器を撫でる。血濡れたそこから覗くのは、原型を留めぬ人間の一部だ。激しく破損し、混じり合い、元が何であったのか全くわからない。

「……死にたて？」

ぽつりと呟くオミに無表情で頷く椿は、千瀬の目にひどく幻想的に映った。

ランプの明かりがゆらゆらと揺れる赤い世界。血生臭いこの場所で、淡々と死体を調べていく少女達。それは、あの日自分が血に染めた家に悠然と入ったルカ、そしてミクを思い出させる。

（……なんだか）

懐かしい、と千瀬は思った。この光景に懐かしさを感じてしまう自分は、もう狂ってるのかもしれないと。

ここにある死体は二人分のようだった。一人は女で、手入れの行き届いたブラウンの髪がそうだと教えてくれる。もう一人は体中がバラバラになっているために性別がわからない。椿が親指だと思われる部位を拾い、その太さから男性ではないかと推測したが。

その時だった。ぴちゃ、と。後方から音がして、三人は咄嗟に振り返る。

「だれ」

鋭く問うた椿の声に、小さな音が帰ってくる。くすり、笑い声だ。それを聞いてようやく、気配を全く感じさせなかったその人物の正体に千瀬は気付く。

「あーあ。間に合わなかったねぇ……わりと急いで来たんだけどな」

血溜りをぱしゃぱしゃと踏む音。ゆっくりとこちらに近づいてきた青年は、シニカルな笑みを浮かべた。

「それに生臭い。もう腐敗が始まってるのかな？　みんな良く平気だねー」

「……キョーゴ。帰ってきてたの？」

目の前に現れた青年――〈マーダラー〉市原　恭吾は、日本遠征とほぼ同時期に単独の任務についていたはずだった。

任務内容は極秘。しかし今回千瀬は、恭吾の仕事目的を知っていたのだけれど。

――彼は“カーマロカ”について調べに行っていたのだ。ここに帰ってきたということは、何かしらの成果があったのだろうか。

「本部に戻ったのは一昨日だよ。……それにしても、ずいぶんやってくれる」

恭吾は辛うじて原型を止めている女の遺体に足をかけた。そのままそれを蹴り転がすと、死体はずるりと回転する。

「……な、」

なんてことを。思わず千瀬は叫びそうになったが、何とか言葉を飲み込んだ。

――ルシファーは弱者を切り捨てる。死んだらその場に置き去りだと千瀬に教えた、駿の言葉を思い出す。

「死体は蛻でしょ。ゴミと同じさ」

《ポート》なんて顔も覚えてないし。
千瀬の様子に気付いた恭吾が柔らかく告げる。だからといって何も足蹴にしなくても――少女はそう言おうとして、やめた。
死んだら終わり。彼が、否、ここにいる皆が、自分の死後をそうやって見据えていることに気付く度に千瀬は悲しくなる。

恭吾が蹴り動かした死体の下には鈍く輝く物が落ちていた。恭吾は血の池に手を沈めて、深紅に染められたそれを掬い上げる。濡れてらてらと光る、その物は。

「ナイフ……？」
「大切な凶器を忘れていっちゃったみたいだね。この血の量じゃ、指紋は出せないけど……でも」
恭吾は静かに笑う。地の底で何かが騒めいた、そんな気がした。
「――そろそろ、決戦が近いんじゃない？」

第四章《慟哭》：ラスト・ハント（1）

＊＊＊

……あれ、おかしいな。

《殺人鬼》はゆるりと首を傾げた。
何も考えられない。何もわからない。自分が何者で、今まで何をしていて、今どこにいるのか。
ただ一つだけわかっているのは、今から自分が何をするのか、だ。

（――さぁ、）

本能に忠実に。吊り上がった広角には赤色が散っていた。

（最後の狩りに出かけようか！）

＊

その日開かれた緊急集会に、日本遠征組は来なかった。
意図的に呼ばなかったのか、連絡がつかなかったのかはわからない。
実はハルあたりが、召集を拒んだのかもしれないと千瀬は思う。
千瀬と椿の発見した部屋は、後の調べで件の《殺人鬼》による狩り

の現場だということがわかった。恭吾が持ち帰った血液のサンプル（壁や床に付着していた血痕を彼が採集したのだ）が、一週間前に殺害された組織員の血液型と合致したからである。きっとあの部屋でじっくりとなぶり殺してから死体を別の場所へ運んだのだろう、というのが組織の見解だ。

『まるで、遊んだ跡みたいだね』

あの部屋を見てそう言ったのはジェミニカだった。千瀬達が報告にロヴのもとへ向かったあと、恭吾から話を聞いた〈マーダラー〉の面々も様子を見にやってきたのである。

ジェミニカは部屋の血の散布具合から、ひどく小さな子供を自由奔放に遊ばせておいたような印象を受けるのだと言った。言われてみれば確かにあの血痕は、真っ赤なペンキで落書きをしたように残っていたのだが。

（……それにしても）

あの惨状を一目でそんなふうに解釈できるなんて。

千瀬はジェミニカという女性のことがいまいち掴めないでいた。肝が据わっているというか、物事を卓越して見ているというか。やはり常人とは違う何かがある。

『こう見えても私、本職は教師だから。子供の行動パターンはよく見てて……って、こいつはそんな可愛いモンじゃないけど』

『……え？　教師？』

『そ。まぁ、色々と事情がね』

少女は数時間前にやりとりされた会話の内容を思い出す。

ジェミニカをまじまじと見つめる千瀬に、そう言って彼女は笑いか

けたのだった。

（……遊び。小さな子供がするような）

千瀬はきゅっと眉を寄せた。こうして集中しながら思考に沈むのは、もう少女の癖のようなものだ。

殺人鬼は、この殺戮を楽しんでいるらしい。遊戯のように感じている――でも、昨日殺された二人は何かが違ったと千瀬は思う。

死体は二人とも頸動脈を一掻きだった。散々弄ばれてから止めを刺され、その後に『遊ばれ』た――それこそ血で何かを描いたり――これまでの犠牲者とは違い、一撃で致死量の出血を与える方法だ。

（早く、殺したかったの？）

まるで焦っていたようだと思う。早く血が欲しくて、殺す過程を堪能する間もないままにめちゃめちゃに引き裂いて。

遊びに興じられるような一週間前の余裕は、昨日の殺人鬼にはなかったのだ。日本で犠牲者が出た頃は、もっと手の込んだ殺し方だったと聞く。

（余裕が、なくなってる）

日が経つごとに、我を忘れていっている？

「――以上だ。質問は？」

物思いに耽っていた千瀬は、突如現実に引き戻された。

静かな空間に響き渡るロヴの声。人々が息を呑む音。

「……今、ロヴ、何て？」

「何だよお前、聞いてなかったのか？」

駿は呆れたように笑いながら、千瀬の身長に合わせて背を屈める。

千瀬の耳元で彼はゆっくりと囁いた。

「決着をつけるんだとさ」

＊

――近いうちにけりがつくだろう、とロヴは言った。言ったらしい、が正しいか。千瀬はすっかり聞き逃してしまっていたのだから。

駿の話によれば、ロヴをはじめとする幹部の面々は殺人鬼の異変――日々殺しを急いでいるようなあの様子――にとうに気が付いていたらしい。

自分がようやく辿り着いた結論をあっさり突き付けられた千瀬は僅かな虚しさを感じつつも、ロヴが打ち立てた『計画』を聞いて驚愕した。

内容は単純明快。その名で一目瞭然。

（――囮作戦）

千瀬はその名を心中で反芻させた。

殺人鬼が活動を開始する時間を狙い、普段のように組織員を警備に配置する。ただしいつも四～六人行なっている団体警備ではない。各ポジションに、一人ないしは二人。殺人鬼にとっては、恰好の獲物だ。

――そして、その“囮”となる警備役を〈ソルジャー〉が全員で行なう。囮よりも寧ろ、餌と言うべきか。

「全員で、って……日本遠征組も？」

「だってさ。ロヴの考えはよくわかんねぇな」

理解できないと言うように駿が顔をしかめたが、千瀬は心のどこかで納得していた。もうこの方法しか残っていないのだ。

日本遠征組を監禁していたのでは殺人鬼を特定できないし、もしこの方法をとって殺人鬼が現れれば（もしそれが、ＥＰＰＣではなかったら）皆にかけられた疑いは晴れる――そんな、淡い希望を持てる唯一の方法。

それは絶望的な確率だと、理解していたけれど。

「……ん？　少人数態勢をとって殺人鬼が現れた時、他のメンバーに連絡はどうするの？　もしもあたし達じゃ歯が立たなかったら……」

「それが心配いらないらしいぜ。〈ハングマン〉や〈マーダラー〉には、この建物で戦闘があったらその場所が的確にわかるんだとさ。で、すぐあいつらが駆け付けるらしい」

「……うっそぉ」

どうすればそんなことができるというのだ、信じがたい話である。
珍しく気の抜けた声を発した千瀬に、駿は悪戯っぽい笑みを向けた。

「まぁ、ホラ。うちのお偉い方は俺達以上の“化け物”だし？」

そこはなんとかなるんじゃね？
笑って紡がれたその言葉に、千瀬は思わず首を横に振った。ほとんど無意識下の行動で、やってしまってから我に返る。なんだよ、と駿が訝しげな顔をして見ていた。

「え……と、」
「ん？」
「化け物じゃ、ないよ。あたしたちも、あの人たちも」
「へぇ。じゃあ何？」

面白そうにそう言った駿の唇の端が吊り上げられる。

「……超人？」
「アホか」

気合い入れろよ。そう言って千瀬の肩を叩いた駿は、何故だか晴れやかな笑みを浮かべていた。

――作戦の決行は、今夜。

＊

時間というものを気に掛けてはいけない。それは時に感覚を狂わせ、ひどく心を不安定にしてゆく。

夜まで何もすることがなかった、のがいけなかったと思う。

千瀬がはじめて時計を気にしたのは、まだ真昼のことだった。その後も焦りと不安と得体の知れない興奮に突き動かされて何度も時計を確認したが、時計の針は至極ゆっくりと進んでいた（ように思っただけだ、実際は。）

千瀬とロザリーで交互に時間を確認しては、『さっき確認してから十分しか経っていない』というのもしょっちゅうだった。その度に少女たちはばつの悪い思いをしながら笑い合い、ただ時間の経過を待って。

千瀬の時間感覚に大幅な変化が訪れたのは日が沈みはじめた頃である。

遠くから近づく暗やみを感じた瞬間から、千瀬達を取り巻く時間の流れは変わった。あくまでも、千瀬がそう感じただけのことだ。

「もう、夜……こんなに、早く？」

少女は驚愕した。先刻時計を確認したときは、まだ作戦決行まで数時間はあったのに。

心の準備ができてない、と呟いた千瀬を駿は思い切り笑う。

「ばーか。気にしすぎなんだよ、お前」

少年が取り出したナイフがカチャリと音を立てた。

それを合図にしたかのように〈ソルジャー〉達は各自の武器をとりあげる。その音に、千瀬は少しどきりとする。

（ああ、始まる）

日本遠征組はもう《監獄》を出ていったらしい。否、朝深だけが奥の方で武器の手入れをしていた。大小様々な銃と、ナイフの束。千瀬はとくに何も考える事無く、その多様な武器をゆっくりと目で追う。

ジャックナイフ。サバイバルナイフ。レイピア。スローイングナイフ。コンバットナイフ。バタフライナイフ――――瞬間、朝深と視線が交錯する。

思わず千瀬は目を逸らした。ここ二、三日の間、千瀬は日本遠征組と一度も会話を交わすことができていない。忙しかっただけではなく、日本遠征組が居残り組を避けているようで。特に朝深やハルはそれが顕著なのだ。

「準備完了ー」

ロザリーが銀の拳銃に弾丸を込めて立ち上がる。同時に、オミが千瀬の横を通り過ぎていった。椿があとに続く。春憐は片手に投擲を。レックスの拳が鳴り、それから駿の声。

「時間だ――行くぞ、チトセ」

千瀬は漆黒の鞘を持つ日本刀の柄を握る。使い込んだそれはしっかりと掌に馴染んだ。

時間というものを気に掛けてはいけない。それは時に不条理で、恐ろしいまでに冷酷だ。

感覚を狂わせ、心を弄び、突然現実を突きつけるから。

――獲物はここだよ、補食者の君。

第四章《慟哭》：ラスト・ハント（2）

広いルシファーの構内を、たかが十三人の〈ソルジャー〉のみで警備することは不可能だった。勿論今夜も“作戦”の実行中とはいえ、場所によっては《ポート》や《パース》が通常どおりの団体警備を続けている。

つまり千瀬達は可能な限り早く“殺人鬼”と出会う必要があった。少人数で行動しているＥＰＰＣのほうを狙ってくれる可能性はかなり高いが、万が一先に“殺人鬼”が《パース》等を発見してしまった場合また確実に犠牲者が出るだろう。それでは意味がない。

「だからって……」

廊下の中心にぽつりと佇む千瀬は嘆息する。

事前の打ち合せの結果、〈ソルジャー〉達は全員単独行動を選んだのだった。二人ペアで配置につく予定であった組も分割し、各自で“最も見つかりやすそうな位置”に待機しようと。こうすればより広範囲の警備も可能になるし、殺人鬼と出くわす可能性も高い。その結果、千瀬は今ただ一人。いくら目立つ位置が好ましいからといって、淋しい廊下のど真ん中を選ぶなど不自然極まりないのだが、生憎少女はそれに気が付いてはいなかった。

ただ待つのは気分の良いものではない、と千瀬は思う。

俎板上の魚、釣り針の先の餌。食い付かれ、料理されるのを待っている――そんな気分。

「あ、料理はされちゃダメ」

こんな淋しい空気の中では独り言も出るというものだ。小さく反響する自分の声がなんだか虚しくて、千瀬はその場に屈みこんだ。

時間だけが流れていく暗闇の中で、手にした蝋燭――銀の燭台に乗せられた、警備用に配布されたものだ――をゆらゆらと揺らしてみる。

（暗い……）

少女は小さく息を吐いた。普段の警備員達は、この暗闇の中でただ朝を待っていたのだろうか。

殺人鬼の恐怖に怯えながら闇に取り残された人々は、さぞかし恐ろしい思いをしたことだろう。犯罪シンジケートの一員とはいえ、ＥＰＰＣでもない彼らはただの常人。千瀬でさえ孤独や寂寥感を感じる――ここは、あまりにも静かだった。

どれくらいの間そうして蝋燭の灯を眺めていただろう。千瀬は幻想的に揺らぎ続ける淡い光と微かな温もりに、不覚にも眠気を誘われていた。

（……寝るな、馬鹿チトセ）

自らに喝を入れようにも思うように行かない。緊張感の欠けらもない自分に呆れながら、それでも目蓋は重みを増してゆく。

こんな場所で居眠りなどしようものなら、後から駿に何と言われるか。第一今は任務の真っ最中だ（それも命のかかった。）

寝るな寝るな。千瀬が声に出して呟いた、その時だった。

――ふっ、と突如蝋燭の灯が吹き消されたように絶える。同時に訪れる色濃く、さらに深い闇。

千瀬は目を瞬いた。光に慣れた瞳は突然の闇に対応できず、漆黒の中に閉じ込められる。

しかしそこで狼狽える千瀬ではない。素早く立ち上がると勘のみで壁際まで移動し、壁に背を預けて日本刀の柄に手を掛けた。

（消えた、）

未だ霞む目を瞬かせながら、どうして、と考える。まだ蝋燭は十分に残っていた。千瀬が誤って息を吹き掛けたわけでもない。

そこでふと、生温い風が千瀬の頬を撫でた。

（――そうか）

ここは風下なんだ、という結論に辿り着いて少女は小さく笑った。なぁんだ、と思う。驚き損だ。この建物は風通しが良いし、きっと風が蝋燭に、

「……っ！？」

突如千瀬の思考が途絶える。思わず両手で口を覆った。

それはほんの一瞬だったが間違いない。風と共に流れてくる、これは、

「血の、臭い……！」

＊

“それ”に気が付いた瞬間、駿は持っていた蝋燭の灯を自ら吹き消

した。
緊急時・戦闘時に備え、重たく嵩張る懐中電灯やランプではなく蝋燭を配布したロヴの選択は正しかったと駿は思う。明かりが無くとも、戦闘経験の豊富なＥＰＰＣならば闇に慣れるのに時間は掛からない。勘とスキルもある。

（……いやいや）

そこまで考えたことを打ち消すかのように駿は首を横に振った。少年は自分達の首領がどういう人間かを嫌というほど知っている。あのロヴのことだ、

「絶対何も考えてねェ」

彼はぼそりと呟くと、消した蝋燭を投げ捨て“それ”のもとへ――漂う不穏な臭いの根源へと駆け出した。

（……くそ、）

思わず舌打ちする。一歩進むたびに濃厚になっていく血の香りに、頭がおかしくなりそうだった。
いつの間に自分は、こんなに血に敏感に反応するようになったんだろう、考えてみて駿は自嘲の笑みを浮かべた。そんなの、もうとっくに――

「シュン！」

曲がりくねる廊下の角から何かが――否、誰かが弾かれたように飛び出した。駿は一瞬のうちにその声を脳内で検索する。ヒットしたその答えを口に出しながら、少年は酷く驚愕した。

「チトセ……！　早いな、お前」
「走ってきたから……」

少女の待機していた場所からここまでは些か距離があるはずだったので、随分なスピードだと駿は思う。
千瀬はもう暗闇に目が慣れているらしく、壁に助けを借りることも手探りをするようなこともなかった。
この臭い――そう言って問い掛ける少女に駿が無言で答える。何かが起こったことは明らかだった。

「この辺、臭いが強くなってきたね……誰か、まさか」
「……ここから先は《ポート》や《パース》も警備してるエリアだ。先に殺られちまったか」

まずい、な。そう言って駿は闇の先を睨み付ける。刹那、彼の袖を隣にいた少女がぐいと勢い良く引いた。

「？、どうした」
「ここから先を警備してるのは誰？」
「……あ？」

間抜けな声を発した駿に、千瀬はゆっくりと言葉を繰り返す。その表情に滲んだ微かな焦燥を見て取って、駿は言葉を詰まらせた。

「ここから先のエリアの警備に割り当てられた〈ソルジャー〉は、誰？」

はっと息を呑んだ駿の顔が驚愕と不安で歪む。間抜けなことに、“その可能性”を今まですっかり失念していたのだ。

「……ツヅリと、アサミ」

駿の唇から零れ落ちたのは、日本遠征組であった二人の名。
まさか、な。小さく吐かれた言葉と同時に二人は再び床を蹴る。闇のさらなる先、戦場へと。

＊

「……くしゅっ」

ロザリーは肌寒さを感じて鼻を擦る。彼女が配置されたのはルシファーの一番端で、昼夜問わず人通りの少ない位置だった。つまらないことこの上ない。

「……暇」

ひまひまひま、立て続けに呟いた後ロザリーはぺたりと床に座り込んだ。はぁ、と肩を落としても何の変化も訪れない。
少女にとって何もしない時間、とは苦痛の代表であった。社交的な正確は天性のもので、一人でじっとしていることは嫌いだ。（それでよく駿にちょっかいを出して怒鳴られる。）

ちゃり、と小さな金属音が響いて視線を落とすと、来ていたシャツの袖口から銀色のブレスレットがはみ出していた。いつも服に隠れていて見えないが、それはロザリーが常に身につけているものだ。

「……。」

少女は片手を目の位置まで引き上げて、ぼんやりとそのブレスレットを眺めはじめる。暇つぶしにはならないが、何もしないよりは良い。

それにこれをまじまじと見つめるのも久しぶりだった。

「……汚れてる」

純銀製のそれは僅かに黒く変色していた。磨くのをサボっていたせいでもあるし、何より度重なる仕事の際の返り血が原因だろう。

銀色の鎖の先にはころんとした同色の塊が付いていて、よく見ればそれは頭骸骨を模している。

初めてこれを見た駿は趣味が悪いと顔をしかめたが、ロザリーはそれが不思議だった。彼女にとっては全てが身の回りにあって当たり前の物だったのだ、人骨も臓物も毒草も烏の羽も。

（ヒトの臓器、は今もだけれど）

ちゃり、もう一度音を鳴らして腕を下ろした。視界から髑髏が消える。

今度は腰から拳銃を抜き出して一気にばらばらにした。パーツを指で掴んで組み立てれば、すぐに銃は形を取り戻す。

この作業にも慣れて久しい。けれど彼女が初めて拳銃に触れたのは、ルシファーに来た後のことだ。ロザリーには才能があった、それに最初に気が付いたのはロヴである。

（……あ、）

ふと、銃に触れていた指の動きが止まる。ロザリーはゆっくりと顔を上げた。
何かが始まったような気がした。直感でしかないそれはこの組織で少女が培ってきたものだ。信用には十分に足りる。
ざわざわと空気が揺れている、そんな感じ。

「……あっちかな？」

目を細める。全ての雑念を脳内から追い払って、目的だけに集中した。
ロザリーは拳銃の弾丸を確認しホルダーに収めた後、手首の銀色を丁寧に袖の中にしまい込む。けして見せたくないわけじゃない、けれどそれは隠す作業に似ていた。
ちゃり、小さな音が鳴ってブレスレットは完全に見えなくなる。

（――あたしがここにいることは、間違ってない。）

“ＥＬＥＫＴＲＡ．”――銀の髑髏に刻まれたその名を、少女は最後まで見ようとはしなかった。

（生きるということ）
（死ぬということ）
（朝日が昇るということ、それは）

第四章《慟哭》：硝子の微笑み（1）

（それは、ありのままを受け入れるということ）

＊

血の海、という言葉を。この地球上で一番最初に口に出した人物に問いたかった。貴方はそれを、見たことがあるのかと。海と呼ぶにはちょっと小規模かもな、と少年が言う。

「犠牲者はまだ少ないらしい」

はは、と乾いた声で笑った駿の顔色は心なしか悪かった。二人は血の匂いに導かれるままにこの場所へ辿り着いた。千瀬は目の前に広がる血溜りの廊下に眉をひそめる。これが血の海でなかったら、なんと言えば良いのだろう。凄惨で、恐ろしく美しい赤。その赤の中に沈む肉塊は生々しく輝き、現在も鮮血を吐き出し続けている。人間であったのかすら曖昧なそれ。

「……奥か」

血溜りが途切れた後も廊下の奥の方に血の跡が点々と続いているの

が見えていた。《それ》はさらなる獲物を求めて移動した、ということだろうか。

（……くそ、）

少年が小さく歯噛みして目を瞑る。生憎死者に哀悼の意を捧げられるような生き方はしていなかったし、何より今はそんな余裕などなかった。

これ以上奥に行かれては分が悪い――その果てを想像して、駿は嫌な汗を拭う。

血の後の続くここから先、いるのは《パース》だけなのだ。彼らでは襲われたらひとたまりもないことはもう十分過ぎるほどにわかっていた。

「シュン、誰か来る」

千瀬の言葉に駿ははっとして顔を上げる。彼はすぐにナイフを持つ手に力を込め壁に背をつけた。千瀬も同じく刀の柄を握り、それが来るのを待つ。

二人で息を潜めればすんなり闇と同化した。隙を見せてはならない、敵ならば、

（斬る）

千瀬が心に言葉を落としたその瞬間――廊下の曲がり角の奥から、巨大な影が現れた。

小さく鳴ったのは少女の刀か、少年のナイフか。

「……お、おいおい！　お前ら冗談はよせ、俺だよ！」

臨戦体勢の二人を包み込んだのは豪快な、それでいて少し焦ったような声だった。
その正体に気が付いて、千瀬は目を瞬かせる。

「――レックス？」

現れたレックスは大きな体を揺すり、慌てたように両手をあげていた。
なんだ、とナイフを下ろす駿の横で千瀬も胸を撫で下ろす。

「こっちは丸腰なんだぞ。そんなもんで切り付けられたらたまらん」

千瀬の日本刀を指差して大男（彼の武器は己の拳のみだ）は豪快に笑った。けれどその笑顔はすぐに消え、後には厳しい表情だけが残る。

「ひでぇな、こりゃ――まさかと思ったんだか……」

レックスは顔を大きく歪めながら血溜りを見つめた。
駿が相槌を打ちながら首を傾げる。よく気付いたな？

「お前が配置されたところはここから結構距離があっただろ？　この臭い、そこまで流れてるのかよ」

ルシファーの中はもう血の臭いだらけか、嫌そうに駿は続けた駿を見て千瀬も顔をしかめた。赤錆の腐臭に満ちた建物を想像して良い気分にはなれない。
しかしレックスは、ゆるゆると首を横に振った。

「俺は犬じゃねぇからな。そんなに鼻は良くない……臭いに気付い

たのはこっちに近づいてからだ」
「……どういうこと？」
千瀬が怪訝そうにレックスを見上げる。臭いに気付いたのでないなら、彼がここに向かった理由は何故だろう。
異変を感じたのでなければ、彼はまだ自分のポジションで警備を続けているはずなのだから。
「どういう意味だ、レックス」
駿が問い掛けても、レックスは眉を寄せて一点を見つめたまま。その様子にざわりと千瀬の背筋が粟立った。何か、良くないことが、
「レックス！」
「……連絡が、付かねぇんだ」
「――連絡？」
声を荒げた駿を宥めるように手を挙げながら、レックスは静かに頷くと重々しく口を開く。
「極秘だったが、今回の警備に付く際には日本遠征組にだけ小型の無線機が配られてたんだ。俺がその本体をミクから預かってた。何もなければ連絡なんぞ取り合わないんだが……」
レックスは懐から黒く輝く小型の機械を取出して二人に見せた。その表面には小さなランプが埋め込まれ、淡い緑色に光っている。
「ランプが光っているとこはな、この本体と通信できる無線小機の数を表してるらしい」

千瀬は少し背伸びして機械を覗き込む。ランプはちょうど、日本遠征組の人数分――だが。

「……一ヶ所、消えてる」

僅かに響いた息を呑む音は二人分。小さな震えを隠すことのできなかった子供たちに淡く笑ってみせながら、静かにゆっくりとレックスは頷いた。

その場を満たす淀んだ沈黙は、誰もに最悪の結末を想像させる。レックスの笑顔は直ぐに失敗してくしゃりと崩れたが、それを無言で見つめることしかできない。

「――誰の無線機だ？　その、連絡がつかないやつ」

駿の言葉にレックスは力なく答える。その声の悲壮さに、千瀬は耳を塞ぎたくなった。

「……アサミだよ。だから、俺はこのアサミの配置された場所まで来たんだぞ」

レックスが僅かに目を伏せた。危惧していたことが事実となって突き付けられる、その痛みに耐えるかのように。

「アサミが警備位置に付いたのを確認したやつはいるのか？」

駿は意を決したように声を出した。努めて明るい声で問おうとして失敗する、それに皆気付かないふりをする。

レックスまた静かに首を振った。

「……いや。“監獄”を出たのはあいつが最後だった」

「……そうか。ってチトセ？　何やってんだよ」

駿が目を丸くしたその先、千瀬は二人から離れると廊下に広がった血液の中へゆっくり入っていく。僅かに凝固が始まったそれを踏みしめながら中程まで進んだ後、少女は突然屈み込んだ。

「……おい！」

千瀬は血溜りの中に手を沈め、やがて何かを引き上げる。滴る血。その下から現れた、無残に破壊された黒い破片。脂に塗れて鈍く輝くそれが何であったかは想像に難くない。

「――アサミの無線機の残骸か」

茫然と呟くレックスの腰の辺りを駿は軽く叩いた。パシ、と鳴った軽快な音に大男は目をしばたたく。

「しっかりしようぜ。ここからだろ――決まったわけじゃない。どこで何があるかわからないから、他の連中はまだ呼び集めないほうがいいかもな」

頷いたレックスと千瀬を確認し、駿は己にも喝を入れる。この状況だけをみれば、朝深が《殺人鬼》に殺されてしまったというのも考えられるのだが。でもそれは無いと駿は思う。あの青年が簡単に死んでしまったなんて、信じたくない。

（……でも、）

朝深の死を否定する、それは同時に、彼自身が《殺人鬼》である可能性をも示しているのだ。

「――行くしかねぇな」

誰にともなく呟いた少年の言葉にいらえが二つ。

ルシファーの最奥に向けて、彼らは一歩を踏み出した。――夜明けはまだ遠い。

＊

「なんだって？」

ツヅリがらしくない大声で問い返す。

千瀬、駿、そしてレックスの進んだ先で忠実に警備を続けていた彼は、突然やってきた三人とそのただならぬ様子に目を丸くした。話を聞いてさらに驚愕する――どうやら今晩は、穏便に済みそうにない。

ツヅリの配置されたそこはルシファーの最奥に位置する場所であった。これ以上進んでも袋小路に閉じ込められてしまう。この先には、ロヴのみが使えるエレベーターだけ（どこに繋がっているのか誰も知らない）があるだけなのだ。

「ここ風上なんだよ。血の臭いも何も、まったく気が付かなかった」

「じゃあ、アサミには会ってないんだな？」

「もちろん。此処にきたのは君らが初めてだ」

ツヅリの言葉にレックスが首を傾げる。こりゃ参った、大男はその

太い腕を組みながら一人ごちた。

「てぇことは……ここに来る前に曲がったんだな」

「あ、さっきの別れ道？」

「たぶんな」

千瀬はここに辿り着く前に通り過ぎた、三方に別れる通路を思い出す。彼女達の追う者は、どうやらあっちに曲がっていたらしい。

「……本当に、アサミなのかい？」

ツヅリが小さく問う。駿はただ

「可能性だ」と呟いた。そう言う以外に無いのだ。

レックスはすでに向きを変え、今来た道を戻ろうとしている。次はあの別れ道に向かわなければならない。

「一緒にいこうか？」

ツヅリの申し出に、レックスはゆっくりと首を横に振った。

「いや。ここはまだそいつが戻ってくる可能性がある……警備がいなくちゃな。頼むよ」

「……わかった」

幸運を。そう呟いたツヅリの言葉を背に受け、三人は再び歩みだした。

なにが幸せなのか。どんな結果が幸福なのか。きっかけは何だったのか、わからなかったけれど。

（歯車が狂ったのは、いつ？）

この時少女達はまだ、全てが崩れた本当の瞬間を知らなかった。この闇の裏にある存在を、知らなかったのだ。

千瀬は目を伏せる。後戻りはできないことを知ったその足は、目的に向かってただ動いていた。

（――近付いているんだ、確実に）

手を伸ばした先に掴んだ答えが、けして望まれたものではなくとも。

＊

三人は進んできた道を戻り、先刻は通らなかった三叉路の入り口で歩みを止めた。

三方向にのびた廊下のその奥は、黒々とした闇を湛えて彼らを待ち構えている。《殺人鬼》がここまで来て、さらに先を行ったのは明白であった。命懸けの追い駆けっこの終わりはきっと近い。微かにだが、点々と残された血の跡がここで途切れていたのだから。

「まだまだ観察不足だなぁ、俺たちも」

洞察力に欠けてる、血痕を見つめて駿が呟いた。先にこれに気が付いていれば、わざわざ回り道をしなくても済んだのに。（その結果ツヅリの無実は証明されたわけだが。）

「さて、どうするか」

言いながらレックスはからからと笑う。彼らが今置かれている状況には似合わない、晴れやかな声だった。この状況を楽しんでいるのか、それとも。

千瀬は三つ又に別れた道を見つめる。辿ってきたはずの血痕は、ちょうど分岐点に差し掛かった辺りで途切れていた――つまり、《殺人鬼》が三本のうちどの道を行ったのかはわからない。

「道は三本。俺たちも三人。選択肢は二つ、だな。全員でどれか一つを選んで進むか、三人別の道を選ぶか。……全員で行ったほうが安全だろうけど？」

冗談めかした口調で駿が問う。千瀬はゆっくりと、大きく息を吸い込んだ。一呼吸の空白の後、響いた声は凛としていた。

「――別れて進む」

「本気かよ、チトセ」

顔を覗き込んできた駿の目が『お前が一番心配なんだけど』と告げている気がして、千瀬はわずかに頬を膨らませる。そんなことはわかっているのだ、でも。

「三人で同じ道を通ってハズレだったらどうするの？　そんなことしてる間にまた犠牲者が出たら！」

「まぁ、そうなんだけどさぁ……」

「チトセの言うとおりだな。諦めろやシュン」

レックスに勢い良く肩を叩かれたシュンは僅かによろめいて、（ついでに恨めしげにレックスを睨んだがさらりと無視された）それか

ら一つ溜め息を零す。

「仕方ねぇなぁ」

その言葉を合図に、三人はそれぞれ分岐点へと歩を進めた。左にレックスが。右に千瀬が。そして中央の道には駿が。

「それではお二人さん、ここでお別れです……これが永遠の別れになっちまったりして？」

芝居じみた言葉を紡ぐ駿に向かって、千瀬はからかうような笑みを浮かべる。

「シュンはオーバーだね。しかもネガティブ。幸せが逃げますよ、武藤さん」

にっと歯を見せながら（この少女には珍しい快活な笑顔だ）言われた駿はぽかんと呆けて、ぱちぱちと瞬きをする。次の瞬間思い切り眉根を寄せ、わざとらしく咳払いをした。

「……お前な。年上をナメんなよ。目上の人を敬いなさいって、学校で習わなかったか？」

「生憎、学校はほとんど行かなかったものですから」

千瀬は声をあげて笑った。静かな廊下には場違いな、明るく晴れやかな声が響き渡る。つられたレックスの笑い声が重なってやけに賑やかになった。

「……あたしは死なないよ。年下で新入りのあたしが生き延びてるのに、シュンは簡単に殺られちゃうつもり？　良いんですか先輩？」

「てめっ！　うーわぁムカつく。ぜってー死なねぇ……！！　そんなこと言っといてお前が先に殺られたらぶっ飛ばすかんな！」

そのあと超馬鹿にしてやる、そこまで一息に言い切った少年は意味のわからないことを言っているのに気が付かないらしい。
拳を振り上げるふりをした駿から逃げるように身を捩り、なおも千瀬は笑い続けた。

「どうぞー。シュンが生き残ればの話だけどねー」
「このやろっ」
「……言うようになったなぁ、チィ」

レックスはそう言うと、
「俺も負けてられんな」と姿勢を正す。

「約束だからね」

千瀬は駿の背を押し、もう一度自らの進む道へと向き直った。
長く続くその先を見据える。《殺人鬼》は、本当にこの闇のどこかに潜んでいるのだろうか。

「それじゃ行くぜ――当たりを引くのは誰かな」

少年の言葉が響くと同時。三人は各々の意志で、自らの選んだ道へと一歩を踏み出した。

（なんでだろう）
（笑いが止まらなかったんだ。）
（全ての言葉が、）
（その瞬間が、）
（愛しくて、仕方なくて）

笑いたかった。笑って、いたかった。

いつか迎える終焉に、気が付いていたから。

第四章《慟哭》：硝子の微笑み（2）

（当たりを引く確率は三分の一）

では、生き残る確率は？

細く、暗く、黴臭い。

陰気の象徴のような廊下を進みながら駿は不安に苛まれる。

――これでよかったのだろうか。気になってしまうのはやはり、力自慢の大男より年の頃が妹と近い少女のほうだった。

エゴだろうが過保護だろうがシスター・コンプレックスだと馬鹿にされようが、心配なものは仕方がない。彼女はまだ実践経験も少ないし、剣技に秀でているということを除いては普通の中学生――否、それよりもか弱く脆いただの少女だ。

（どうせ当たるなら）

自分かレックスなら良いのにと、駿は心底そう願う。彼にはどうしても、あの少女が殺人鬼に太刀打ちできるとは思えなかった。

それは実力の話ではなく精神面の問題だ。もし、仲間だと信じていた者が自分に牙を向いたら彼女は――――

「……俺だって」

冷静に戦える確証は無いのだけれど。
少年は垂れていた頭を上げてただ進む。三人が別れてから、十分が経過しようとしていた。

＊

かつん、かつんと鳴るのはブーツの靴底だ。小さかったはずの足音が幾重にも反響し、耳に届く頃にはとても大きく聞こえる。基本が裸足だった日本の家（特に少女の生家はそれが顕著だった）とは違う感覚にはもう大分慣れた。

千瀬は蝋燭の予備を持ってこなかった事を少しだけ後悔していた。この組織の建物の内部はどこか古くさい作りをしていて、内装も古風である。千瀬が見上げた先の壁にはアンティークな燭台が埋め込まれていて、そこに突き刺さっている蝋燭は今にも消えてしまいそうだった。
今時分、明かりに蝋燭を利用している建物など他にないだろう。これも組織の首領である彼の趣味とやらなのだろうか。

「……趣味悪いよロヴ」

千瀬は一人虚しく悪態をついた。吐き出された言葉は宙に融け、その静けさをより強く感じることになる。
やはり一人は寂しい。千瀬はまだたった十四なのだ。駿の手前強がってみたので、そんなこと口が裂けても言えないけれど。

（――おかしいな）

前は一人でも平気だったのに、と不思議に思う。あの家にいた頃のことを思い出そうとして、上手くいかないことに気が付いた。

あれ、おかしいな。千瀬は一人首を傾げる。

少女の視界に入る限りでは、壁の燭台はだいぶ離れた場所にぽつりともう一つあるだけだ。はじめに彼女が警備していた場所のように全く明かりの無い場所もあることだし、実はこの建物手抜き構造ではないかと疑ってしまう。

かと思えば信じられないほどに煌びやかな場所――それこそ派手な電飾や高価なシャンデリアが溢れているような――場所もあることに、つい最近千瀬は気が付いた。

（？）

今歩いている、ルシファーの中でも際立って見離されたようなこの空間で、次の瞬間ふと千瀬の目に映ったものがあった。まさに偶然としか言いようが無い。燭台に照らされたごく僅かな一角、その床に。

「……血の跡？」

本当に小さな血痕だった。たまたま蝋燭の明かりの及ぶ場所になければ、まず見つけることは不可能だっただろう。

触れれば僅かな湿り気を感じた。まだ新しい証拠だ。

「……あれ？　ってことは、もしかして」

千瀬はぼんやりと考える。ぐるぐると思考し、そして漸く疑いようの無い答えに辿り着いた。

「……あたし、大当たり？」

うわあぁあ、ビンゴだよ。少女は心の中で大仰に驚きながら、しかし表ではぱちぱちと瞬きを繰り返しただけだった。

運が良いのか悪いのか、この際それは問題ではないのだ。

少女は歩みを止めはしなかった。進むしかないことはわかっていたから。この先に捜し求めた相手がいる、それだけが事実として横たわっていた。

――やがて少女の前に、本日二度目の血の海が現れる。

「……っ」

千瀬は言葉を失った。

一面に散らばるおびただしい量の血液は、付着したばかりのようにぬらぬらと光沢を放っている。その鮮度を示すかのように満ち溢れる、むせ返るような鉄の生臭さ。この場所で、まさに今殺人が行なわれたばかりのような有様だった。

床よりも酷いのが壁だ。勢い良く飛び散った赤が白塗りの壁を染めていく。

巨大な花が咲いたような、そして散ったような。この凄惨で美しくさえある光景、これは。

（どこかで、）

嗚呼。呟いた声は意図せず零れ落ちたものだった。千瀬は無意識のうちに掌で自らの頬に触れる。

少女の脳裏を掠めたものは、あの時滅ぼした彼女の一族だった。あ

の日千瀬が深紅に染めた祖国の家。それが目の前の光景とゆっくり重なって、やがてぴたりと一致する。
瞬きをするのも忘れた。目を逸らすことが、できなかったのだ。
――少女は自分の壊した景色を、視ていた。
あの日、千瀬は花を咲かせた。断ち切った母の首の感触、噴水のように弧を描いた血潮。
白塗りの壁に咲かせた深紅の花からはとめどなく雫が滴り落ちた。
真っ白な着物が朱を吸い込んだ、あの重み。忘れてない。忘れていないのに。
（どうして）
きっかけを、どうしても思い出せないままだった。どうしてあの時父を殺してしまったのか（千瀬が生き残りさえすれば免許皆伝、師の屍など必要なかったのに）、どうしてそのまま母の所へ向かったのか（母は近所に華道の講師として向かうところだった）、どうして祖父の、祖母の、従兄の命まで摘み取らねばならなかったのか、どうして。
（どうし、て）
どうして覚えていないのだろう、家の間取りも近所の様子も――そこまで考えて、少女の思考がぴたりと止まった。
（そんな、まさか）
はっと口を押さえた両手の震えが現実を告げる。それに気が付いて愕然とした。

千瀬はもはや両親の顔さえも、思い出すことができなくなっていたのだ。

（こんなの、）

こんなのおかしい。おかしいのに。

「……行かなきゃ」

だめだ、と千瀬は首を横に振る。何か重大なことを忘れているような気がして小さく震えた、その体躯を気持ちだけで押さえ付けた。やらなければならないことがある。今、ここで。

「……？」

刹那、僅かな物音を少女の耳が捕らえた。今にも消え入りそうに微かなものであったが、千瀬は瞬時にそれを悟る。

何かと何かが擦れる音に聞こえた。言葉にするならば、しゅ、しゅ、と——きっと足音、だ。床に足を引きずっているような。

その音はここからさらに奥のに入った方から聞こえたようだった。これより先は廊下の幅が狭くなる。より入り組んだ構造になり、より暗闇と死角が増えるはずだ。

千瀬は躊躇う事無く歩を進めた。衣服が汚れることも意に介さずに血溜りの中をゆく。

次の瞬間彼女の耳に、どさり、という重たい音が届いた。はっきりとわかる程に近い。

千瀬は音の聞こえた方角に体を向け勢い良く床を蹴った。手は黒漆刀の柄に。身を低くし、そのまま音も無く駆ける。

直線的な廊下を一息に一区画分疾走するとL字に折れた角を右方向に曲がった。鯉口はとうに切られたまま。柄を握る手に力を込め、瞬間的に抜刀ができるよう構える。
しかし辿り着いた先には、一つの影すら見つけることができなかった。

「……何なの、」

物音を発した原因も千瀬が予想していた相手も見当たらなかったことに、やや気抜けしてしまう。
空耳だったのだろうか。

（確かに聞こえたのに。）

道を間違えたということもあるまい。千瀬は小さく息を吐きだした。
確かに聞こえた、あれは何だったのだろう。何かの気配も感じ取ったような気がしたのだ。
訝しんで首を傾げた、刹那。

――ぼとり、

鈍い音をすぐ傍で聞いた。同時に軽い衝撃を感じる。
千瀬の肩を何かが叩き、それはそのまま床に――少女の足元に転がったのだ。上から降ってきた、ようだった。

「……な……に、これ」

その《何か》が触れた体の部分に違和感を感じる。生温かい感覚がじわりと広がっていくような。
体に痛みはなかった。千瀬はゆっくりと肩に触れる。

ぬるりとした粘着質の液体が、少女の指に絡み付いた。

「……っ！」

咄嗟に掌を明かりの下にかざして確認すれば、肩に触れたはずの指先が深紅に染まり糸を引いているのが見えて。

そうなって漸く、千瀬は上から落ちてきた《何か》に目をやった。

――土気色の、細長く大きな塊。不恰好に折れ固まったその形。

思考が停止してしまい、それが何かを理解するのに時間がかかる。

茫然と呟いた少女の声は、酷く擦れていた。

「……人間の……腕……」

肩から下を切り落とされて。切り口の部分からどす黒い血液を吐き出し続ける左腕だけが、そこにはあったのだ。

急激に体温が下がってゆくのを千瀬は感じた。それは腕が落ちているという事自体への恐怖にではない。

（――どこから）

息を潜めて周りを見渡してもそれらしい影はない。

一体何処から腕が、この腕の主は、そしてこの腕をここに持ってきた者は何処にいるというのだ。

千瀬は踵を返し道を戻ろうとする。この先に生き物気配を感じることはなかったが、この辺りに潜んでいるのは確かだった。駿とレックスに知らせなければならない。

（……戻らなくちゃ。）

千瀬は廊下の角を曲がろうと一歩を踏み出す。

次の瞬間、千瀬は素早く刀を抜いた。同時に曲がり角の陰から何か大きな物体が現われ少女に向かって倒れかかってくる。
千瀬は斬ろうか斬るまいか一瞬だけ思考し、結局避ければそれは派手な音を立てて床に転がった。

「……酷い」

闇に沈んだその正体を知る。呟いた声はそれに聞こえないだろう。
――左腕を切断された男だった。青白い顔が出血量を物語っている。よく見れば、頸動脈のあたりも傷つけられているようだった。襟元にあるのは《ポート》を示す瑠璃の紋章。

（――おかしい）

違和感に気付いて刀を握り締めた。とうに息絶えて体の硬直が始まっているその死体がひとりでに倒れてきたなんて――つまり先刻まで立っていたなんて。
死体にそんなことできるはずかない。確信して、千瀬は眉をひそめた。

「……逃げられそうに、ないなぁ」

第一少女がここに来たときには、この場所に死体などなかったのだから。

――刹那、少女の背後で何かが動いた。
しまった、と思う。何時の間に背中をとられたのだろうか、千瀬が考える間に《それ》は鎌首をもだげるようにゆっくりと、音も無く立ち上がった。燭台の炎に照らされた二人分の影が揺らめく。それは千瀬自身のものと、もう一つ別の。

ご対面、というやつだ。笑い事ではない、命懸けの邂逅。既に抜刀していたことがせめてもの救いだと、何処か冷静に千瀬は思う。

「――――！」

空気が震えた。

背後の影が大きく腕を振り上げた瞬間、千瀬は呼吸を止め右足を半歩後ろに引いた。それを軸にそのまま大きく後方へ刀を薙ぐ。

キン、と甲高い金属音が交錯した。同時に千瀬の目に映ったのは、素早く跳躍した相手の影の端。咄嗟に手首を一閃し刀を旋回させれば、パシッという乾いた音と共に切っ先にほんの微かな手応えを感じた。服にでも擦ったのだろうか。

「……？」

第二撃に備えて刀を青眼に構えた、その態勢のまま少女は目を見開いた。

ひら、ひら。彼女の目の前に、ゆっくりと何かが舞落ちる。

先刻刀が掠めて弾き飛ばした物はこれなのだろうか、蝶のように可憐にさえ思える動きで落下していた。見れば薄い紙のようなもので、空気抵抗を受けながら浮き沈みを繰り返す。

「……な、に……これ」

ひらり、ひらり、

千瀬の目に最初にに映った色は白だった。それから時折ちらちらと舞うように覗く紅。

それの正体に気付いた瞬間、体の奥底がみしりと軋む。

「……どうして」

音が聞こえない。時間があまりにもゆっくりと流れていた。とん、と背後に降り立った気配がふらりと揺れる。
それと同時に目に入る、落下物に付いた藍染の紐。やがてそれは少女の足元に、静かにふわりと着地した。

――――曼珠沙華の、栞。

「……どうして、あなたなの」

血に濡れた髪の毛は本来の金色からだいぶ褪せた色で揺れていた。同じ色の睫毛の奥、瞳に宿る光は無い。
すらりと伸びた白い腕の掴んだナイフにおびただしい量の血糊が付着しているのを、真っ赤な舌が舐めとった。
どうしてなの、もう一度呟いた少女の声に答えるかのように、血に濡れた口角が上がる。

「サンドラ……！」

サンドラ・ジョーンズは静かな笑みを浮かべた。無機質な、硝子のように透明な微笑みを。

挿話

「ねぇ、しってる?」女の子は、言いました。

「こんなお話があったの」女の子は、言いました。

たとえば、せかいに、ぜつぼうしたとするの。
たべものがない、おようふくもない、おとーさんもいないおうちで、
わたしのくびをなきながらつかんだおかーさんは
めをあけたらちまみれでわらってしんでいた
わたしはおうちをでてひとりでみちをあるいている
おなかがすいてきもちわるくていきがすえなくて
たすけてって　でもこえがでなくてみちばたにころがってほっぺた
をじめんにつけた
わたしは　わたしはしあわせになりたかったからうまれたわけじゃ
ないの
だからふこうになったつもりもないのに
なぜかながれたなみだがさいご。ああ、わたしぜんぶなくしちゃっ
たのかなっておもうんだ

――女の子は、言いました。

めをとじるとまっくらになるの。
みみのおくがごぅごぅなってだんだんまわりのおとがきこえなくな
った
そしたらきこえてたわたしのしんぞうのおともわかんなくなっちゃ

ってきえちゃって
こわくて　いやだったのきえたくなかったの、もうなにもないのに
よぶなまえもないのに

――女の子は、言いました。

めを、あけたの。
そらをみあげたらとりがとんでてそのあおがきれいででもかなしくて　それからわかった
わたしにはなにもないけれど　それはぜろじゃなくてぜろはありえなかったのだって

――女の子は、言いました。

くるしくてもかなしくても　わたしにはなにもないとおもっても、
わたしがいまいるこのせかいだけは、ずっとわたしといっしょなの。
わたしはわたしのせかいでただそんざいしていてにげることなんてできないんだよ　ぜつぼうしてもきぼうをさがすのはこのせかいのなかだけでしかできないこと
それって　いまいきてるってことなんだよ

「ねぇ、しってた?」女の子は、笑いました。

第四章《慟哭》：Ｂｅｈｉｎｄ　ａ　ｍａｓｋ（１）

砕けたマスクのその奥に、私は気付かぬふりをして。
突き付けられた現実に、抗う術など存在しない。

少女は謳う。裸足で踊る。
飛び散った破片を両腕に抱き、貴方の血糊で接着しようと。

（けれど道化は知っていた）

もう元になんて、戻らない。

＊

口の端が吊り上がり、美しい弧を描く。唇に引かれたルージュの色は毒々しいまでの赤で、それはてらてらと輝き唇から零れ落ちて顎を伝った。鮮血の口紅。
光を宿さぬ深紫の瞳を伏せれば、長い睫毛が頬に影を落とす。胸元まで垂れた金糸の髪は薄汚れ、血に塗れた部分は凝固してしまっていた。
そんな自身の格好を全く気にかけていないのか、サンドラは胸の前に掲げたバタフライナイフをゆらゆらと弄びもう一度笑む。

「……サンドラ」

笑った頬は痩せて削げ落ちていた。その変わり果てた姿に千瀬は戦慄し、思わずぎゅっと目を瞑る。

細く肩で息を吸いながら《殺人鬼》は――彼女は、指に付着した血糊を幸せそうに舐めとった。舌だけが生気を帯びているかのように濡れ蠢いている。

「サンドラ」

ここ数日は会う機会が無かった。それでも彼女であるはずが無いと、千瀬はどこかで信じていたのだ。

少女は己の甘さを呪う。ルシファー創設時から所属しているサンドラが、ルカのことを愛しそうに千瀬に語った彼女が――組織との深い絆を持つ彼女が変貌を遂げている、それが事実だ。

美しかったサンドラは何かに取り憑かれたかのように見えて、それが一層現実に色を付けた。

サンドラを疑うことなど微塵も考え付かなかったはずなのに、瞬間千瀬は全てを悟る。享受してしまった自分に気が付いて激しい嫌悪と絶望に襲われた。

自分がしなければならないことが正確な文章となって、洪水のように脳内に押し寄せる。容赦無く氾濫し、渦巻き、拒否する心を押し潰した。

「やめて……」

千瀬は再び閉じそうになる瞳を堪える。相手から目を離してはいけないからだ。

そうしているうちに頭の中はその言葉に次々と侵食されてゆく。まわる。まわる。ぐるぐると。

使命が心を覆い隠す。

心が使命を拒絶する。

（――殺人鬼を見つけたら）

これ以上犠牲者を出さぬよう、あたし達が囮になる。

（見つけるんだ）

見つけなくちゃ。早く、これ以上、

（捕えろ）

裏切りは死罪だ。

（――ハングマンが）

どうして？
どうしてなの。

（始末、を）

殺人鬼を、始末しなければ。

（嫌だ……）

殺人鬼。殺人鬼がいるんだ。私たちの、組織の敵だ。

（さつじんき、）

ころさなくちゃ。
殺す、の。殺さなくちゃ。
（――殺、）
……サンドラなのに？
あの子はね、私の大切な。
笑ったサンドラの声が聞こえたような気がして、刹那千瀬の思考が停止する。
目の前のサンドラはけして言葉を口にしない。虚ろな目を少女に向け、ゆっくりと瞬いた。ふわりと微笑んだその手に持つ、血濡れのナイフを振り上げて。
「サン、ドラ……」
少女の視界が暗転した。
＊
耳に残響がこだまする。刃物同士のぶつかり合う金属音が壁を伝っ

て届いた瞬間少年は、しまった、と思った。遥か遠くのほうで聞こえたそれは、彼に血の気を失わせるのに十分な効力を発揮する。

（最悪だ、）

どうしてこんなものが聞こえるんだろう？　よりにもよって、あの少女の進んだ道の方から。

千瀬の運の無さ――マイナスのほうにツイていたとも言えるのだが――にほとほと呆れながら、駿は直ぐ様踵を返した。嫌な汗が背中を伝う。

「……くそ」

やはり別行動など、しなければよかった。駿はみすみす少女を行かせてしまった自分を呪う。こうなることは予想できていたのに。まだ死ぬなよ、呟いて少年は駆け出した。少女の無事を祈り、まだ見ぬ殺人鬼を想う。

結末はもう、すぐそこまで近づいていたのだ。

＊

振り下ろされるナイフを避けようと咄嗟に振り上げた刀の先が、壁の燭台を砕いた。立ち昇る煙と共に消えた炎が目蓋の裏に焼き付いて目が眩む。

一瞬の死角で千瀬はサンドラを見失った。刀を薙いでみても空を斬る感触しかない。

刹那、背後からふっと耳元に息を吹き掛けられる。千瀬の体がびくりと震えた。体の底から沸き上がる悪寒に襲われ、少女はつんのめるように一歩前へとよろめいた。

（どうすれば、）

体が思うように動かない。迷いが、悲しみが、千瀬自身を縛り付けて牙を向く。

少女が選択したのは真っ向からの戦いではなく、時間を稼ぐことだった。最終的な選択は、まだ千瀬には重すぎたのである。

第一撃はどうにか躱したものの、鈍い動きを繰り返すことしかできない千瀬には、まだ自分の命があることが不可思議だった。

相手は探し続けた殺人鬼。組織員を大量に殺し尽くした張本人だ。

普段のように戦えていない千瀬など、もうとっくに殺されていても不思議はない。

目の慣れてきた暗闇の中で、サンドラが笑っているのが見えた。彼女であって彼女ではない、そんな印象を抱かせるサンドラは片手にナイフを構えたまま、ぎこちなく不自然に動きを止めたりしている。遊んでいるつもりなのだろうか――その貼り付いたような笑みからは何も読み取ることができなかった。

「……っ」

再びサンドラがナイフを高く掲げる。緩慢な動きに含まれる確かな殺気に少女はただ佇む事しかできない。

わかっているのだ、答えははじめから一つしか用意されていないことなど。生きるには、この場を切り抜けるには、刀を握ってサンドラの急所を目がけて振りぬくしかない。それができない千瀬には、ただこれから起こることを傍観する以外に術はなかったのだ。

サンドラの握ったナイフがみしりと音を立てて軋んだ。それから笑った彼女を、千瀬は茫然と目に映す。

（――あたしを、殺すつもりだ）

肌に直接死の気配を感じた。サンドラ、呼ばう声にも彼女は反応しない。

これは一体誰だ。別人のような彼女を、その裏切りの行為を、千瀬は認めることができないまま。

サンドラが口元を歪めて酷く恍惚な、楽しそうな表情を浮かべる。その虚ろな深い紫の瞳から流れた一筋の涙に、まだ少女は気付かない。

“――サンドラを殺せるか？”

自身に問うてみても無駄だった。もう自分でも、わかりきっていた。千瀬の答えは、『否』なのだ。

（うた、を唄おう）

（出会ったあの日の雨のウタ。）

貴方の耳に届けたい、この凍えた唇で。

（嗚呼、雨の音が聞こえたんだ）

第四章《慟哭》：Ｂｅｈｉｎｄ　ａ　ｍａｓｋ（２）

あたしにサンドラは殺せない。悟った瞬間、その言葉は少女の小さな身体を締めあげた。
わかってしまったのだ、残された道などたった一つだけだということを。この世には、生きるか死ぬかの二択しか存在していない。

千瀬は静かに目を伏せる。死を覚悟したのは、父親と行なった剣技伝承の最終試験――死合、以来だった。それは祖国のあの家で、瀬が行なった最後のこと。

（――――姉さん）

す、と身体の温度が下がるような錯覚に捉われる。うるさく鳴っていた心臓の鼓動がぴたりと聞こえなくなった。ただ静かな空間に、少女とサンドラだけが対峙している。永遠にも似た沈黙が破れるのは、その次の瞬間だった。
動けずにいる千瀬に覆いかぶさるようにして、ナイフをこちらに向けたサンドラが身体ごと倒れてくるのが見えた。ゆっくりと、確実な狂気と殺気を帯びたその刃が迫ってくる。迫って、切っ先が、

（――嗚呼）

今更こんなことを考えるなんて、虫が良すぎる。
ナイフの切っ先を目に焼き付けながら、千瀬はぼんやりと思った。
実際は刹那の間、しかし少女には時が止まったような気さえした。

（殺して、来たのに）
（――これまであんなにたくさん）

（それでもサンドラは殺せないと思ってるのに）
（世界から逃げようと、してるのに）
（……なのに）

少女を濃い影が覆い、彼女の視界がもういちど闇に沈む。ぎゅっと握り締めた刀の柄が軋んだ悲鳴を上げた。

（――死にたく、ないなんて）

刹那、サンドラの身体が不自然な形に硬直した。
茫然としていた少女の目に映ったのは一対の腕だ。それは先刻見たような亡骸の一部では、ない。
突然の出来事に千瀬は目を瞬いた。それを繰り返して漸く、サンドラの身体を何者かが後ろから羽交い締めにしているということに気付く。

「……え？」

今にも千瀬の喉元に突き刺さりそうだったナイフは持ち主の身体と共に動きを止めて、小刻みにカタカタと鳴いている。それを確認した瞬間、少女の身体に急激な脱力感と震えが押し寄せた。
力の抜けた足を叱咤して体勢を立て直すと、千瀬はサンドラを押さえている腕の主を仰ぎ見る。人物を確認した瞬間、それまでとは違う驚きに少女の目が見開かれた。

「――何、してるんだ……！　殺せ！」
「アサミ……！！」

生きて、いたのか。現れた青年を見て千瀬は息を吐いた。赤のメッシュがあしらわれた特徴的な髪の襟足は見紛うはずもない。朝深は肩で荒く息をしながら、鋭く千瀬に言い放つ。

「わかってるだろう……！　こいつはもう《殺人鬼》なんだ……！」

「……でも！」

朝深は腕に僅かだが傷を負っているようだった。暗くて出血量は確認できない。それに気が付いた千瀬は咄嗟に刀を握り締めるも、やはりそれをサンドラに向けることができずにいる。

朝深に取り押さえられたサンドラは放心したようにしばらくされるがままだった。何かを考えているのか、彼女の瞳が自分を押さえている腕をぼんやりと眺める。

――次の瞬間、その表情が笑みに変わった。

サンドラは朝深の腕の中で器用にくるりと向きを変え、そのまま目にも止まらぬスピードで朝深の鳩尾に肘を叩き込んだ。青年の顔が苦痛に歪む間もないまま、千瀬の目の前で彼は壁に激しく打つけられる。

声にならない悲鳴が辺りに反響して、千瀬はそれを発したのが自分だということに気が付いた。ずるりと崩れ落ちた朝深の口から血が吐き出される。

「ア……サミ……っ」

そのままぴくりとも動かなくなった青年に、擦れた声を上げ駆け寄ろうとする千瀬の行く手をすらりとした白い手が塞ぐ。サンドラはナイフを掲げ、もういちど少女に狙いを定めた。その震える細い首に切っ先を向けて。

（こん、なの……）

突き付けられた刃を見つめながら、少女は初めて願った。これが夢であってほしいと。どんな悪夢でも、覚めるなら構わないのに。

「……こんなの、嫌だ……っ」

愚かな願いだとわかっていた。それでも、願わずにはいられなかったのだ。

サンドラの片手、ナイフを持たぬ方はずっと拳の形に握られたままだった。そこから歪な細い物体が覗いている。その手が握り締めていたのは、もうすっかり萎れてしまった立浪草だ。千瀬がはじめに叩き飛ばした曼珠沙華の栞も、おそらく彼女は大切に持ち歩いていたのだろう。

「どうするの、それ……っ」

サンドラは答えない。虚ろな笑みを張りつけたまま、声が届いている素振りも見せなかった。

「ルカに、渡しに行くんでしょ……！？」

どうして。彼女に何があったのかと、千瀬はそればかり考える。縋れるものが、救いが欲しかった。

「大切だって、言ってたじゃない……このままじゃなくなっちゃうよ、大切なもの……っ」

そう口にした刹那、少女ははっと身体を強ばらせた。頭の中をすさまじい勢いで何かが駆け抜けていく。それはデジャ・ヴに似ていた。

映像であり、言葉であり、色で、音で、波であり、そして光であり闇。
少女は自身に問い掛ける。今自分の言った言葉を、どこかで？
映像が万華鏡のように回る――小さな街の景色、列車の振動。煌めくガラスの破片、そらのあお、路地の匂い。

（……っ）

そして最後に残ったのは、忘れもしない少年の笑顔だった。声が聞こえる。あの日、彼は何て。

『やっと……やっと会えた』

それは、全てが崩れた瞬間の物語だった。

『消しにいっちゃうよ』
『――君の大切なもの』

歯車が狂ったのは、いつだ？
千瀬の体内で血液が逆流したかのようだった。自然と流された嫌な汗が体の熱を奪っていく。ほんの僅かなその可能性に少女の体は酷く震えた。そんなことがあるわけない。そう、言い切れるだろうか。

「……嘘、だ。……そんな……の……」

夢なら、良かったのに。
言葉が零れ落ちた瞬間、忘れていた立浪草の花言葉が少女の頭を掠めていった。現実が何よりも残酷だと、もう千瀬は知っている。

＊

「何なんだよ、これ……」

漸く辿り着いたその場所で駿が見たものは、深紅の海と浮かぶ肉塊、そしてその紅を纏う変わり果てた仲間の姿だった。
濃厚な腐臭の漂う空間で、少年の知る人間は計三人。うち一人は壁にもたれるように座り込んでいる。意識があるのか無いのか、生死さえ一目では判別できない。

「どうして、なんだよ……っ！」

二人目、彼が気に掛けていた少女はまだ生きているようだった。ただそうだというだけで、千瀬の瞳に生気は感じられない。硝子玉のようなその目に映されていたのは駿の想像だにしていなかった三人目の人物だ。
負傷した青年と力なく座り込んだ少女の視線の先。彼女は、笑う。

「何で……なん、で」

自分が何を言っているのか、最早少年にはわからなくなっていた。
サンドラ・ジョーンズ。駿が組織の一員となるずっと前からこの場所で生きてきた彼女は、彼にとって言葉では言い表わせない存在だった。
所属したばかりの頃から、彼女は駿を気に掛けよく面倒を見ていたのだ。もし駿が自分の母親のことを覚えていればその感情を——その温もりを、母の愛に似ていると感じることができたかもしれない。

そんな切なさにも似た感情の名を駿は知らなかった。ただその存在だけが、いつも。

（俺は、馬鹿だ）

駿はぎりりと唇を噛む。

殺人鬼が日本遠征組の中にいるという話が出たとき、漠然と彼女だけは違うと思っていた。彼女やレックスのようなルシファー創設からの組織員の裏切りなど、彼には想像できなかったのだ。

裏切り？　――そうだ、この光景を見た今でも。駿には、信じられない。

サンドラは千瀬のほうへゆっくりと歩を進める。ぼんやりとそれを見ている少女に、逃げろ、と叫んだ。けれどそれは声にならず、擦れた息を吐き出しただけとなる。

瞬間、駿の後ろから巨大な影が飛び出してサンドラに襲い掛かった。少年は目を見開く。彼に僅かに遅れてこの場所に辿り着いたレックスがすさまじいスピードで、殺人鬼と化した馴染みの人物に殴りかかったのだ。

「……っ、レックス！」

男の表情は駿からは見えない。サンドラはレックスに目を向けると無感動にその拳を避けた。

続け様に蹴上げられた彼女の足がレックスの腕を掠める。ハイヒールのピンが皮膚を削って僅かに鮮血が飛び散った。

「……何でだよ」

駿がもう一度吐き出した瞬間、彼女の視線が少年にぶつかる。笑顔

が仮面のように貼りついた、無機質なその表情。影を落とす金糸の睫毛。
そして駿は気が付いてしまうのだ。その深紫の瞳が、しっとりと濡れていることに。

「……なんで、泣いてるんだよ……」

弧を描いた形に固定された口元の横を、雫が流れ落ちるのは何故？
青ざめた頬を伝う涙が、ぽたぽたと床に吸い込まれてゆく。駿はただそれを見ていることしかできなかった。
少年にはわからなかったのだ。涙の理由も笑顔の訳も。彼には、わからない。彼女が殺人鬼だということも――――わかりたく、ない。

（人間なんて、無力だ）

化け物になりたかった少年は、己の非力を思い知って再確認する。
人間にしかなれなかった。醜くて汚い、人間を殺す人間だ。
レックスが腕に滲んだ血を拭い、小さな声で旧友の名を呼ぼう。その声に、けして彼女が応えることはない。

「――サンドラ」

その名を唇に乗せた後、大男の拳が力一杯握り締められた。震えたその手の意味に、男の覚悟に気付いた者はいない。
水気を孕んだ空気が廊下一帯に流れ込み駿の皮膚に触れた。次いで遠く聞こえる、ぱらぱらと小さな音――雨が、降りだしたらしい。

「サンドラ、お前ェ、タイムリミットが来ちまったのか……？」
「リ……ミット、？」

レックスの零した言葉の意味はわからなかった。呟くように問い掛けた駿の声は、誰にも届かぬまま床に吸い込まれてゆく。
全ての疑問に答えるかのように、生気を失った立浪草が彼女の掌からはらりと落ちた。

ぽたり、ぽたりと泣く雨が
赤い涙を恋しがる

ぽたり、ぽたりと泣く雨の
そうだ、あれは“唄”だった。

（はじまりの雨の話をしよう）

第四章《慟哭》：立浪草と曼珠沙華（1）

「女の子は、夢を見ました。しあわせな夢でした」

「女の子は、殺人鬼でした」

――いまも、むかしも。

＊　＊　＊

彼女の話をしようと思う。幸せで切なく、美しくて悲しい、雨と唄にまつわる小さな記憶の物語だ。

その出会いは、十四年前の雨の日だった。降りしきる雨が誰かの呼吸音に聞こえた、そんな日。

当時この世に生を受けていた無数の人間の中で、そのうち一人の少女が運命の分岐に立たされていた。彼女の名をサンドラという。それ以上でもそれ以下でもない、ただサンドラという存在だった。

少女にとってサンドラという名は、名前ではなく識別記号にすぎない。自分が最初の“サンドラ”なのかもしれなかったし、そうではないかもしれなかった。そんなことを気にしたことは、一度たりともなかったのだけれど。

この世に生を受けてから十年――この日彼女が出会った幼い子供は、後に悪魔と呼ばれることになる。

『 行こう 』

いつか必ず終わりが来ると知っていた、それでも構わなかったのだ。これはその、始まりの物語。

＊

サンドラには二十五人の兄弟がいた。しかしそれは名ばかりで、実際には血の繋がりなどない。

遥か昔から内乱が続くその国の極秘機関が集めた、二十六人の戦争孤児。サンドラはそのうちの一人である。子供達は、後に内乱に使用する為の兵として生かされていた。

非人道的なこの施設は無論違法のもとに成り立っていたが、この国にそれを気にする人間、ひいてはそれを取り締まる者などいなかったのだ。

過酷な訓練と度重なる人体実験の犠牲になりながら子供たちは生きていた。本当の世界を知らずに、人を殺すためだけに育てられていた、哀れな捨て駒として。

平和な世界を夢見ることのできる人間の殆どが、この話を信じることができないだろう。それと同じように、ここで生きる子供たちは平和という言葉を知らなかった。

人を人と見なさない、子供を生物と思わない、そんな場所なのだ。

この国に孤児は大勢いたが、それを利用しようと考えた場所はここ

だけであったらしい。

『殺戮用人材育成施設“Ｄｉａｂｏｌｉｓｍ”』――これが文字通り悪魔のような所業を続ける、けして表に出ることのないその場所の名だった。

収容されている子供達は二十六人。ちょうど、ＡからＺまでを順に頭文字にとる規則的な名前が与えられていた。

彼らは来る日も来る日も殺すことだけを教えられて過ごす。表沙汰になったことはないが（そもそも存在自体が極秘だったのだから）人を殺すことに対して抵抗を無くすような、洗脳等も行っていたらしい。死ぬまでは酷使し続けたし、子供が死ねば補充した。

ヒトの醜さが生んだ哀れな子供たちを、殺人鬼だとヒトは呼ぶ。

一人目はアンディ《Ａｎｄｙ》、二人目はベル《Ｂｅｌｌ》、三人目はキャロル《Ｃａｒｏｌ》、四人目はダニエル《Ｄａｎｉｅｌ》、五人目はエマ《Ｅｍａ》――つまりサンドラ、“Ｓ”ａｎｄｒａは十九人目の殺人鬼だったのだ。

毎日戦場やテロの現場に駆り出されては、人間を殺していく。殺すことだけを求められ、仕事に応じた僅かな食料が与えられた。

子供たちに罪はない。これが罪だというのならば、世界はもうすでに沈んでいたのだろう。

殺しが全てだった。殺しが存在理由だった。生きる理由を免罪符にして、そうして今日も殺戮を重ねた。

サンドラは望んで殺人鬼であったわけではない。けれどいつしか、殺さずにはいられなくなっていた。

泳ぎ続けないと死んでしまう魚のように、人間を殺して血を浴び続けないと、息ができなかったのだ。

その時既に、一種の洗脳が完了した状態にあったのだろう。それで

も子供たちは自分を縛る世界の中で、それだけを信じて生きていた。疑うことなど知りもしなかったのだ（他に、どうすればよかった？）。

殺しの行為が日常の一部となり、兄弟達が時折減っては新しく加わることにも慣れ、そして、体中に血の臭いが染み付いてとれなくなった頃。サンドラは、生まれて初めて仕事の最中に失態を犯した。些細なミスだ。目標の数を見誤り、潜伏していた相手に気付かなかった――結果サンドラは兄弟達と引き離され、追い詰められ、多数の大人に囲まれ集中攻撃を受けたのである。

まだ辛うじてサンドラの息があるうちに敵が引き上げたのは、彼女が子供だという油断故だったのだろうか。

少女は生死の境を彷徨いながら、荒れ果てた道端に捨て置かれた。

それが十四年前の、雨の日。

＊

ざぁ。

ざぁ、ざぁ、ざぁ。

雨が泣く。激しく咽ぶように、けれど静かに。

辺り一面の焦土、その片隅に、朽ちた布切れのようになって落ちていた少女は身動き一つすることもなく目を瞑った。死ぬのかな、と思う。思っただけで声にはならなかった。

（――――しぬ、の）

強さを増してゆく雨が幼い少女の体温を奪っていく。サンドラは地に臥したまま、朦朧とする頭で死を想った。

両足は折れているのだろうか、不可解な方向に捻曲がってしまっている。左手は使い物にならない。弾が貫通したはずの肩も、強打された後頭部も、血を失い続ける腹部も痛みは感じなかった。ただ刺すような雨だけが冷たい。

「……さむ……い」

漸く捻り出した声は擦れていて自嘲する。幼い容貌には似合わないその表情はサンドラを作り上げた環境の集大成だ。まだこの世に生を受けて十年と数か月、彼女の見てきた世界は隅から隅まで血の臭いがした。

今まで余りにも多くの命を摘んできたからだろうか、少女は自分に迫る死を明日を待つのに等しい感覚で受けとめている。

ただ死ぬ間際というのは体が暖かくなり、眠るように逝くのだとばかり思っていたサンドラは、自分の体が氷のように冷たくなっていくのを見てもう一度嗤った。こんなところに幻想を抱いていた自分が、あまりにも滑稽だったのだ。

少女はこの時既に、世の不条理を知っている。

自分が不幸だとは思わなかった。自らの流した血の海に沈んで終わることは、なんだか幸せな気さえした。

サンドラはゆっくりと目を閉じる。雨の音がだんだん小さくなり、終には聞こえなくなった。

体の輪郭が溶けていく感覚。密やかに消えようとする己の命を見つ

めているにも関わらず、心が満ちてゆく気がするのは何故だろう。
自分には勿体ないほどの、安らかな死だと思った。

（嗚呼、これが『おわり』）

これが、死なのか。
今まで数多の命を奪ってきた、その結末がこれならば。

（――――、？）

――意識が闇に飲まれる中で、唄が聞こえた気がした。

「死ぬの？」

サンドラは目を見開いた。何時の間に現れたのか、黒い小さな影が彼女を覆っている。雨の中倒れているサンドラを覗き込んだのは、まだ短い黒髪を揺らした少女だった。サンドラよりもずっと幼い。

次の瞬間、少女達の目がぴたりと合った。突然現れた小さな彼女の瞳は吸い込まれるような漆黒で、サンドラは思わず息を呑む。深い、深い色。まるでこの幼い少女の体の奥に、無限に広がる闇が湛えられているような。

「それとも、生きる？」

少女は小さな手を、サンドラに向けて差し伸べた。白くて細い、けれど温かな血の通った生きる者の手だ。

「生きるなら、行こう」

いっしょに、いこう。

迷い無く伸ばされた小さな手の眩しさに眩暈がしそうだった。その時まだ自分が生きたいと思っていた、それに彼女が気付くのはもう少し後の話。

サンドラがそれを掴んだその瞬間から、彼女達の物語は動きだす。

（――どうしてあの時ルカの手をとろうと思ったのか、サンドラにはわからない。ルカには彼女の持つ能力とは別に、何か不思議な力が有ったのだろうか）

（そうなのかも、しれない）

（殺人中毒者と化していたサンドラが、それ以後病的に血を求めることはなかったのだから）

彼女には忘れられない。闇の中で聞こえた、あの悲しく優しい旋律が。

雨の、うた。

第四章《慟哭》：立浪草と曼珠沙華（2）

「……、」

鼓膜が小さな音を拾って震えた。少女はそれにゆるりと閉じていた目蓋を押し上げる。自分を、呼ぶ声。

「サン」

どこにいるの？

柔らかい声がもう一度耳を擽って、少女――サンドラは小さく笑んだ。あの子がどうやら自分を探しているらしい。

「こっち。ここよ」

“あの日”から数か月。サンドラは、黒髪の少女テトラ（その後ルカと名付けられるのだが）とその仲間と行動を共にしていた。体中の傷が癒える迄には時間を要したが、幸いなことに後遺症は残っていない。

行幸だった、と思う。今時分が生きていることさえ、奇跡だと。

「こんなところにいた」

やっと見つけた、言いながら嬉しそうに駆け寄ってくる少女の頭をサンドラは優しく撫でる。まだ肩に届くか届かないかの位置で揺れる真直ぐな黒髪を梳いてやれば、気持ち良さそうに目を細めた。その表情に、なんだか心臓の辺りがもどかしくなる。

こういうのを《愛しい》というのだと、未だ彼女は知らない。仲間

を愛していた、その感情の名を知るのはもう少し後になってからだ。
サンドラはこれから後の人生で、多くの物を得るこてになる。

驚くべきことにその当時、つまりサンドラと出会った当初のルカ――テトラはまだたった四歳だった（推定年齢、であるが）。けれど他でもないこの少女に、サンドラは命を救われたのだ。
あの雨の日――黒髪の幼女がサンドラを連れ帰ったところに待っていたのは、ロヴ、エヴィル、そしてミクと言う名の子供だった。
サンドラがやってきた数週間後にアレキサンダーと言う名の大柄な少年が加わり、その後は六人で生活している。
はじめのうちサンドラは、いつまた自分の体が血を求め殺したくなるか――そしてその時、この少女をはじめとする新しい仲間を殺してしまわないかを怖れていた。

（どうして、かしら）

不思議なことに、結局それは杞憂に終わる。ルカに救われてからはそんな衝動に駆られることはなく、不安は形にならずじまいだったのだ。身を守りこそすれ、自分から殺しに出掛けることは完全に。

（まだ、気は抜けないけれど）

幼いサンドラは空を仰いだ（良い天気だ）。天上の青が眩しい。空がこんな色をしていることに気付かせてくれたのはこの子だ。自分を慕って笑顔を向ける、隣の少女。

「今日はねー、ロヴがご飯当番だから。きっとおいしいよ」

“テトラ”は屈託なく笑ってみせる。ロヴというのは彼女達のリーダーにあたる少年の名だった。年令はサンドラの一つ上で、信じら

れないほど頭の回転が速い。現に彼の知恵と策略は、子供達が生き延びるのに欠かせない物となっている。
少年ロヴはこの年にしてあまりにも大きな野望を持っていた。その実現の為だけに子供たちは活動していたし、誰もそのことについて疑問など抱かなかった。彼の作り上げる新しい世界こそが子供たちの希望であり、夢であり、少年の約束した“目的地”だけが生きる理由だったのだ。そしていつしかサンドラも、それを共に追いかけるようになる。

（……私は）

絶大な信頼とカリスマ性を持つロヴ。子供だけの生活が成り立っているのは、彼がいるからだとサンドラは思う。彼について行こう、何度も堅く誓った。それからあの子を守るのだ。自分に新しい世界と、手を差し伸べてくれた少女を。

仲間に出会ってからというもの、彼女の毎日は新鮮だった。
汚れたフィルターが、一枚ずつ剥がされていくような。こういうのを幸せと呼ぶのかもしれない。
この気持ちを、感謝を、仲間への愛を。
どう表せば良いのか、まだわからなかったけれど。

（幸せよりも美しく、優しさよりも悲しくて。愛しくて切ないそんな記憶を、『想い出』と誰かが言ったの）

＊

ルカ達と行動を共にするようになってから半年を過ぎた頃。サンドラは、新たな仲間を得て以来初めて人間を殺した。

生きるために様々なことをして生活していた子供たちは既に多くの犯罪に手を染めていた。夜盗に襲われる事も多々あり、相手の命を奪うのはもう当たり前のこと。身を守る手段はそれだけで、時にはこちらから先手を打ったこともある。

何度かそれを経験するうちにサンドラは、自分とレックス以外の四人が暴力的なまでの“何か”を持っていることに気が付いた（特にルカのそれが残る三人を凌駕していたことにも）。

彼女がそれに疑問を抱くことはなかったし、不気味にも思わなかったけれど。レックスもそうだ。何故だろう、すんなりと受け入れられてしまったのだ。

何が正しいのか正しくないのか、正常と異常の曖昧な混沌とした世界で彼らは仲間だった。それ以外に理由はいらない。

“その日”サンドラが殺したのは、彼女が収容されていたあの、悪魔の施設の監視役をしていた男だった。

気に入らない“世界”の“大人”と“政府”に制裁を加えることを活動の一つとしていたロヴが、あの施設をターゲットにしたのは全くの偶然である。サンドラが仲間達に、自分の出身がここだと打ち

明けたのは作戦を決めた翌日だ。そして彼女は、自らがこの施設を“潰す”最前線に立つことを望んだ。――施設の中には、彼女に代わる次の“サンドラ”がちゃんと補充されていた。

六人の“堕天使”達は収容されている子供たちに危害は加えず、上層の人間を全て始末し子供たちを解放した。実際は解放というより、無理矢理外の世界に放り出す形になったのだろう。

施設の支配から解き放たれた、彼らのその後はわからない。生き抜いた者も野垂れ死んだ者もいたかもしれないが、あのままよりは良いような気がした。それがエゴだと言うことも、子供たちは理解していた。

施設の建物は燃やさずに放置した。ロヴがそう希望したからだ。あの国の中では珍しくしっかりした造りをしていたからだろうか、ロヴはいつかあの建物を買い取って再利用するつもりなのだと言う。改善して新しい施設にしてやるよと、彼は笑っていた。

「“Ｄｉａｂｏｌｉｓｍ（悪魔主義）”なんて、俺たちにぴったりだろう？」

“悪魔の仕業”の名の如く、“神への冒涜”を心から。歌うように呟いた少年を微笑みながら見つめた少女たちはそれぞれ、聖人の名とカトリック教徒の侮蔑名を持っていた。

サンドラはその光景をはっきり覚えている。笑う子供達の背後に、血の花畑と死んだ建物。

（さよなら、十九人目の殺人鬼）

サンドラが殺した警備員は、ビリー・ジョーンズと言う名の男だった。

この日少女は誓う。この仲間と共に、仲間の為だけに生きていくこと。仲間の為に殺すこと。
ジョーンズの姓を名乗ることで、サンドラはそれを胸に刻んだ。

「ねぇ、生きるってどういうことかしら」
「さぁ、どうだろうな」
「だって今生きてるし」
「良いんじゃないのか、それで」
「そんなものよね」
「それだけで、良いんだよね」

（――曼珠沙華には、毒が有った。その狂おしいほどの恋しさに依存した）

（でもね、勘違いしないで）

（あれは、『悲しい想い出』なんかじゃないの）

「追憶」

ねぇルカ。私、時々思うの。

「なぁに？　サン」

私ね、あなたや皆のことが大好きなのよ。愛しい、って意味がやっとわかったの。私きっと、あなた達と一緒にいたいんだわ。ずっと、これからもずっとよ。

「私も大好きだよ」

それからね、ルカには感謝してるの。私に“生”をくれた。幸せをくれた。捨てかけた命を拾い上げてくれて、存在理由と世界をくれた。

生きてて良かった、そう思えたのは初めてだったの。毎日が殺し合いでも、全てが綺麗で幸せ。嬉しくて堪らなかった……だから、

「……サン？」

ルカの為なら死んでも良いな、ってずっと思ってた。あの日から決めてたのよ、私の命はあなたの為にあるの。あなたとあなたを取り巻く世界に私の命を捧げる。素敵だと思わない？

「私の為に死ぬの？」

そうよ。そして皆の為。

「ダメだよ。皆の為に死ぬのは私の役だもん」

あら、そうなの？

「そうだよ」

ふふ、ルカには敵わないわね。じゃあ私はどうすれば良いのかしら。

「じゃあ――皆の為に生きるのが、あなたの役目」

「……やだ、サンったら何て顔してるの」

ルカ。

一つだけ、お願いがあるの。あなたに頼みたいこと。あなたじゃなきゃ駄目なの、約束してくれる？

「……なぁに？」

私はね、怖いのよ。いつか突然殺人鬼に戻って、仲間に、あなたに刃を向けてしまったら

「サンドラ」

わかるのよ、だって私は人間には戻れない。いつか必ず終わりが来るの。

……それは、皆の為に生きてることにならないから。私が嫌なの。

私の自己満足の為の、お願い（貴女のせいじゃないから）。

「……うん」

我儘でごめんね。
ねぇルカ、その時は――

（その時はきっと――……）

第四章《慟哭》：最後の殺人鬼（1）

大好きだったと言えたなら、貴方は笑ってくれるかしら。

＊　＊　＊

小刻みに震えだしそうな拳をきつく握り締め、少年は目の前を見据える。掌に食い込む爪の痛みだけが現実を教えてくれた。
何もできない自分に反吐が出そうだ。なんだか本当に、

（吐き気がする……）

たまらず駿が壁に手を突いた瞬間、彼の耳を甲高い悲鳴がつんざいた。それは、駿が助けにきたはずの少女の。
朝深を助け起こそうと近寄った、レックスの体にナイフの雨が降り注いでいた。彼はその巨体で朝深を庇いながら大きく吠える。
それを見ていることしかできない千瀬と駿と、どちらも無力なことに変わりはない。
体を震わせてただ叫ぶ少女の、やめて、と言う声は状況を変えることなど一つもできなかった。
《彼女》は、サンドラはけしてその攻撃の手を休めない。瞳から涙を流したまま、その表情は変わらず楽しそうだった。

泣き笑いの張りついた顔が、仮面のように見える。
す、とサンドラは懐からコンバットナイフを取り出した。以前彼女が千瀬に渡した物と同型だ。
鈍く輝く切っ先が向けられているのは、既に数多の傷を負っているレックスの背。彼女は刃先にこびり付いた血痕を指で擦って口に含み、それから一層笑みを濃くした。ナイフを構え直したその動きは優雅にさえ見える。
たん、と軽やかな音を立ててサンドラは跳躍した。長い時を共にしたはずの彼の、息の根を止めるために。

刹那、千瀬が動いた。
少女は瞬時に二人の間に飛び込むと白銀の刃でナイフを弾く。響く金属音と共に力強い空気振動が発生し駿の頬を打った。少年はそれにはっとして目を見開く。
サンドラは少女の行動を面白そうに眺め、ついと矛先を千瀬へと切り替えた。
千瀬はそんな彼女を見つめると哀しげに瞳を歪ませ、そしてそのまま動きを止める。

「――チトセっ！！」

響き渡る駿の声に重なって一発の銃声が轟いた。爆ぜた銃弾はサンドラの手の甲を掠めて壁に突き刺さる。音の発生源を振り返れば、視界に銀色が散った。
突如現れた、プラチナブロンドの髪を持つ少女は標的の眉間に狙いを定め躊躇う事無く引き金を引く。放たれた二撃目は咄嗟に回避したサンドラの金髪の先を吹き飛ばし、辺りにぱらぱらと金糸が舞った。突然の乱入に誰もが瞠目する。

「ローザ……！　待って……っ」

制止の声をあげた千瀬に、ロザリーは静かな視線を送った。構え直された銃を支える腕から、ちゃり、小さく金属音が鳴る。

「仕方ないんだよ、チトセ」

言った少女の瞳に迷いはなかった。ただその目が深い悲しみの色を隠し切れていないことに、その場にいた誰もが気付く。

淡く揺れた銀の瞳は薄らと潤んでいた。月を映した水底のような光を湛える、それは小さな感情の色だ。

「サンドラは……っ」

千瀬の頭からはあの少年、ユリシーズの声が離れなかった。それは酷く嫌な“予感”に似ていて、根拠などどこにもないものだ。ただ漠然とそれを感じ、心の奥底で仮説が舞うだけ。『あの少年がこの件に絡んでいたとしたら』という、途方も無い。

「サンドラ、は……」

自分でも馬鹿げた考えだと思った。でも、もしも。

もしも、あの少年が裏で手を引いていたとして、これがサンドラの意志ではないとしたら。サンドラは《無意識》かつ《操られて》いる、そんな状態だとしたら。

……ふざけた話だ。でもそんな、まるでB級映画のような信じられないことが実際起こっているとしたら？　それがユリシーズには、可能だ。

――だったと、したら。

「こんな、の……望んでないのに……」

――それが、何だというのだ。

「チトセ」

わかってね。

誰も望んでいないのだと、ロザリーが小さく呟いた。少女の持つ拳銃はサンドラに向けられたまま。

千瀬は両手で顔を覆う。自分が一番わかっていた。この推測は憶測に過ぎず、願望の域を出ないことを。

例えどんなにあがいたとしても全てが無に帰すこの空間で、彼女達に許されるのは《受け入れる》ことだけなのだ。

「どうにも、ならないんだよ。仕方ないんだよ」

悲しみも苦しみも穢れもエゴも、全てを享受して。

それがこの世界の生き方だと、誰もがわかっていた。そうやって、生きてきたのだ。

「わかって、る。……ね？」

ロザリーは自らに言い聞かせるかのように、ゆっくりと言葉を紡ぐ。一言一言、その小さな唇を噛み締めながら。

「そうだよね？　ねぇ、レックス……」

刹那、少女の瞳からからぽろりと涙の粒が零れ落ちる。その雫の理由さえ問うてはならない、それが千瀬達の生きる世界の掟だった。

「……ああ。そうだ……」

レックスが手の甲でぐいと口の端の血を拭う。同時に、小さな呻き声と共に朝深が立ち上がった。よろめきながらもしっかりと地に足をつける青年をその瞳に映したあと、レックスはぐっと拳を握る。それから立ち尽くす駿に、俯いた千瀬に目をやり、そしてロザリーの涙を見つめて彼は呟いた。振り絞られた喉から決断を告げる声が響く。

「……ハングマンに、連絡を」

苦しそうに擦れたその声に、満ちていたのは一つの決意。
それはさざ波のように空間に浸透し、時間と音を飲み込んだ。

「　もう、来てるよ　」

突如、感情の籠もらない声が辺り一帯に反響する。しんと静まった空間を割ったその音に全員が目を見開いた。
サンドラの動きが停止する。ナイフを握った腕をぴたりと固めたまま、目蓋だけが震えてゆっくりと閉じたり開いたりを繰り返した。

その深紫の瞳の奥で何かが揺れる。
次いで彼女の表情に変化が現れた。正確にはその口元が――笑みの形に固定されていたそこが僅かに開いたのだ。漏れ出した微かな吐息に誰もがはっと息を呑む。
それは微かな、本当に微かな――小さな、声だったのだ。

「……ル、カ……」

夜明け前の静寂に溶けるかのように、柔くその音は零れ落ちる。ピリオドを穿つ悪魔の名を、その少女は持っていた。

ルカ・ハーベント。
彼女は全てを終わらせる、漆黒の“死刑執行人（ハングマン）”――――。

第四章《慟哭》：最後の殺人鬼（2）

物語に、終止符を。

長い黒髪が大きく靡く。無風の空間でその動きは一際目を引いた。
彼女は確実な“何か”を纏っているとぼんやり千瀬は思う。絶対的な“何か”が、目の前の少女にはある。
漆黒の瞳は瞬き一つせずに、無表情でこちらを見つめていた。ルカの白い肌と服が暗闇の中に淡く浮かび上がる。闇の色をした髪が少女の輪郭を曖昧にし、彼女が闇に溶けそうな——否、闇から生まれ出たような印象を与えていた。

「ルカ……！？」

どうして此処に、と呟いた朝深には答えずルカは真直ぐに歩を進めた。駿が何かを言いたげに唇を震わせたあと、飲み込むように押し黙る。少女が歩くたびに揺れる黒髪の残像が酷く幻想的で、誰もそれ以上の言葉を発することはできなかった。ただ、レックスだけが。

「……ごめんな」

ごめん。繰り返し零されたそれは誰への謝罪なのか、何への懺悔な

のだろうか。
その言葉にさえ反応を返さず、黒髪の少女はすっと視線を上げた。
その瞳に映り込む金色が仄かに揺らぐ。そうして、るか、と再び音を生み落とした。

「……ル、カ。ルカ……」

うわごとのように自分の名を呼ぶサンドラに、ルカは静かに笑む。
柔く曲線を描いた唇から穏やかな声音が響いた。

「――なぁに？　サン」

サンドラが無邪気に笑う。瞬間、周囲で息を呑む音がいくつも重なった。彼女の浮かべたのが今までの貼り付けられた仮面のような、偽物の道化のような笑みではなく――心底幸せそうな、幼い笑顔だったからだ。

「……う、た」

うたを、うたって。
切れ切れの単語をたどたどしく紡いだサンドラの、擦れた声が徐々に力を取り戻しはじめる。聞こえた言葉は懇願の響きを帯びていた。

「……うた、が、きこえたわ……あのひ、」

千瀬にはサンドラが何のことを話しているのかわからなかった。駿もロザリーも同じなのだろう、怪訝な表情を浮かべながら固唾を呑んで状況を見守っている。
ルカが来たことによって彼女に変化が訪れた、それは確かだった。
ただそれが良い方向になのかはわからない。

「うた、よ……雨の、あの夜の」

くすり、そこでふいにサンドラは笑い声を漏らした。幸せな夢を見ているかのように目を閉じる。

だんだんと紡がれる言葉がなめらかに長くなっていく、ルカを除く全員がそれを茫然と見つめていた。

「忘れられなかった……聞きたかった。もう、いちど……でもあなたは、教えて……くれなか、ったわね」

サンドラが幼い少女のようにクスクスと笑い声を上げる。熱に浮かされたように話し続ける彼女の言葉にルカは静かな笑みを浮かべたまま耳を傾けていたが、ふいにこちらも笑い声を零した。ふふ、と楽しそうに目を細めた後、何かに思いを馳せるように首を傾げる。

「だって。あの歌は私たちに似合わなかったんだもの」

親しい友人に語りかけるのと何ら変わらぬ口調のルカに、そうねとサンドラが頷いた。

それでもわたし、あのうたがすきだった。

「うたって……ほしかったけど。でもわたし、本当はすごく幸せで満ち足りてたから、わたし、わ……たし、ワタシ――」

異変が起こったのはその時だった。壊れたレコードのように同じフレーズを繰り返した後、突如サンドラの言葉が途切れる。

次いで彼女は目を見開いて両手で顔を覆った。血糊が顔に付着するのに頓着せず（そんな余裕は無いようにも見えた）しっかりと掌を顔に押しつける。指の合間から覗く瞳が小刻みに震えていた。

「――――私、誓ったのに」

見開いた、瞳。

「――っ！　サンドラ……！？」

咄嗟に千瀬が声を上げる。

聞こえたそれはサンドラの声だった。芯の強い、意志をもった響き。

紛れもなく、“千瀬の知っている”サンドラの声だったのだ。それが悲愴に染め上げられている。

「サンドラ……っ　しっかりし、」

千瀬が駆け寄ろうとした瞬間、がくんとサンドラの体が崩れ落ちた。

ゼンマイの切れた玩具のようにぎこちない動きを繰り返した後、肩で浅く息をしながら床に手を突く。

千瀬の体が硬直する。サンドラが俯いたまま、床に手を這わせるのが目に映ったからだ。何かを、探している。

「……ルカ」

サンドラの手が、落ちていた一本のナイフに触れた。先刻ロザリーが銃弾で、彼女の手から弾き落としたコンバットナイフだ。床を探っていた白い手が、ゆっくりとその柄を掴む。

「ルカ、どこにいるの？」

絶望の滲み出た空間の中でルカは静かに目を閉じた。少女の顔から、微笑みは消えていない。

「ここにいるよ、サン」

ぎゅ、とナイフを握り締めてサンドラは笑った。床に座り込んだまま持ち上げた視線がルカの漆黒と絡まる。それにもう一度笑みを濃くしてから、歌うような口調で彼女は問うた。

ねぇ、ルカ。

「ねぇルカ、覚えてる？　私たちの、最後の約束――」

刹那、ルカが僅かに震えた。少女の見せた初めての反応に、サンドラが穏やかな表情を見せる。絡んだままの視線が少しの間だけ沈黙を生みだした。

「――忘れて、ないよ」

少女のいらえにサンドラが破顔する。どうしてそんな無垢な笑顔を浮かべることができるのか、それほどに幸せそうな笑み。千瀬の大好きな、泣きたくなるようなあの笑顔だった。

そしてその表情のまま、サンドラはゆっくりと立ち上がる。覚束ない足と相反し、その手にはしっかりとナイフが握られていた。

「ごめんね、渡してあげたかったのに」

ふっと手足の力を抜いて、ルカが静かに目を閉じた。サンドラの言葉だけが淡々と響く。

「枯れちゃったの、立浪草」

我が儘で、ごめんね。

言い終わると同時にサンドラが跳躍した。左手に握ったコンバットナイフの切っ先を、真直ぐルカの心臓に向けて。
それはあまりに突然で、誰も動くことさえできなかった。例え反応が間に合ったとしても届かないであろうその距離の先。ただナイフが渾身の力でルカに振り下ろされる瞬間を、目を閉じる間もなく見ているだけしか許されなかったのだ。
あなたをあいしてた、そうサンドラの唇が動いたのも、ルカが薄く目を開けて笑ったのも、全ては一瞬。
――誰かが、ルカの名を叫んだような気がする。

刹那、

ルカの右腕が、サンドラの左胸を貫通した。

激しくほとばしった鮮血が少女の身体を紅く染める。弧を描いて飛び散った紅が花火のように暗闇を裂くその様子は、曼珠沙華の花弁にひどく似ていた。
サンドラの体は二、三度大きく脈打つと、次の瞬間には四肢が力を失い崩れ落ちる。弛緩した手足が、青ざめた肌が、ゆっくりと時を止めて。ぐらりと前のめりに倒れてきたそれを、ルカは全身で抱き留めた。

小さく動いた少女の唇が紡いだ言葉は、何だったのだろう。

二人を中心に、床に深紅の円がじわじわと広がってゆくのを千瀬は茫然と見つめていた。身じろぎ一つすることも叶わぬまま、停止した思考が言葉を連れてやってくる。辛うじて千瀬の理解できるそれは、ただ一つの事実。

――くしゃり、と。よろめいた千瀬の足に何かが触れる。ゆっくり視線を落としてその正体を知ると、少女はぎゅっと目を瞑った。

――サンドラの落とした立浪草だ。もうすっかり萎れて、端のほうが枯れてしまっていたけれど。

（……たつなみそう、の）

その瞬間千瀬は、曇っていた頭の奥が澄んでゆくような錯覚にとらわれた。

「……花……言葉」

千瀬は崩れるように床に座り込む。それが脳裏に浮かんだ瞬間、どうにもならなくなってしまったのだ。苦しくて、切なくて。

なんで。

だって、立浪草の花言葉は。

「……“私の命を捧げる”」

千瀬の呟いた声をすくい上げてレックスがはたと顔を上げる。反対に駿は、脱力したようにずるずると座り込んだ。時間だけが無情に流れ続けるこの空間で、息をするのが辛かった。悲しみも後悔も、胸に穴が開いた感覚に飲み込まれて消え失せてしまうのだ。

それきり誰も口を開くことができなくなる。闇が落ちて行く、音が

吸い込まれてゆく、そんな感覚の中で。

「……？」

千瀬が伏せていた目を上げる。何かが聞こえたのだ。時を止めてしまった世界の中で、ただ一つ残った音。

……Ｓａｌｕｔｅｍ　ｅｘ　ｉｎｉｍｉｃｉｓ　ｎｏｓｔｒｉｓ……
ｅｔ　ｄｅ　ｍａｎｕ　ｏｍｎｉｕｍ，　ｑｕｉ　ｏｄｅｒｕｎｔ
ｎｏｓ――

（これは、）

――うた、だった。

何を言っているのかはわからない、しかしルカの唇から紡がれたそれは確かに歌だった。悲しく美しい旋律が、途切れ途切れではあったけれど。

……ｐｒａｅｉｂｉｓ　ｅｎｉｍ　ａｎｔｅ　ｆａｃｉｅｍ　Ｄｏ
ｍｉｎｉ　ｐａｒａｒｅ　ｖｉａｓ　ｅｉｕｓ，
ａｄ　ｄａｎｄａｍ　ｓｃｉｅｎｔｉａｍ　ｓａｌｕｔｉｓ　ｐｌ
ｅｂｉ　ｅｉｕｓ――

ルカの右手は、未だ彼女の左胸を貫いたまま。
陶磁器のような白い肌の上を赤い雫が流れて落ちる。

「ルカ……」
「……in remissionem peccatorum eorum,」

レックスの呼び声に歌声で応えて、少女は血に濡れた腕でサンドラを抱き締めた。
強く、強く。
床一面に絨毯のように広がった血液と、その中心の一対の人影を、誰もが悲痛な面持ちで見つめていた。なす術をしらぬまま、立ち尽くすしか出来ずに。
千瀬の頭の中には、そのメロディーだけが響き続けていた。
いつまでも、ずっと。

――illuminare his, qui in tenebris et in umbra mortis sedent,
ad dirigendos pedes nostros in viam pacis.

（私たちの敵からの、私たちを憎む全ての者の手からの救いを）

（主の民に、彼らの罪の赦しによる、救いについての知恵を）

（闇と死の影のなかに座っている者たちを照らし、私たちの歩みを、
平和への道へと、真直ぐに向けるのでしょうか）

ねぇ、ルカ。

「その時は、私を殺してね」

お願い、　殺してね。

第四章《慟哭》：最後の殺人鬼（2）（後書き）

◆彼岸花（ひがんばな）：別名

◆立浪草（たつなみそう）…

【立浪草と曼珠沙華～最後の殺人鬼：補足】

『曼珠沙華（まんじゅしゃげ）』……花言葉《悲しい想い出》

…花言葉《私の命を捧げる》　※聖書“ルカ”

収録『ザカリアの讃歌』から本文・訳共に一部を抜粋。

第四章《慟哭》：間話 - 舞台裏（2） -

時間は少し前に遡る。
夜道を歩くのは顔の半分以上を黒のヴェールで覆った、奇妙な出で立ちの女だった。風に弄ばれることを気にすることもなく後方へ垂らした長髪は灰色にくすんでいる。それがなければ、誰も彼女が女だとは気付かないに違いない。
単調に歩を進めていた女が突然立ち止まる。何故か突然胸騒ぎを感じたからだ。否、それよりももっと具体的な、不穏の感覚。
ひそめられた形の良い眉がヴェールの隙間から覗く。咄嗟に脳裏に思い浮かんだのは、《あれ》に何かが起こったのではないかということだ。彼女の胸に渦巻くものは、彼女の意識と遥か彼方を繋ぐ回路とそのシグナルだから。

（おかしい、）

身体の中に巣食っていたのは黒い波、うねる闇のイメージだった。彼女の鼓動、呼吸、そして意志に応えて蠢いていたはずの“それ”の異変に気が付いた彼女は、胸を押さえてその場に立ち尽くす。

「どうかした？」

女の前方を歩いていた少年が振り向いて言う。少年は彼女が忠誠を誓った、ただ一人の主人だった。髪は柔らかな巻毛で、一見は美しい銀。ただし明かりに透かした部分だけはまばゆい金色に光る不思議な色合いを持っていた。
白い肌も、硝子のような瞳も、彼を構築する全てのものが美しいと女は思う。彼女にとって、少年は世界の全てだった。

「……いえ。何でもありません」

少年に微笑みかけた次の瞬間、女の表情が硬直する。違和感が不快感に変わる。胸が焼け付くように痛んだ。体内で何かが激しく回転しているような感覚。蝕まれる。侵食される。波が荒れ、蠢くものが女の身体を食い破って這い出そうと暴れていた。

「……な、に……」

「――ピュティアス？」

少年が無表情で女の傍に立ち、彼女の肩に手を置いた。瞬間、すっと女の顔が穏やかになる。荒い呼吸を繰り返していた彼女はゆっくりと息を吐けるようになった。

「申し訳、ありません。ユリシーズ様――」

「何があった」

少年は淡々と問う。女――ピュティアスは呼吸を整えながら、擦れた声で呟いた。

「“あれ”の様子が……。抵抗、でしょうか。いえ、司令通りに行動はしているのですが――何でしょう、何か」

「落ち着いて」

低い声で諫められて、女は肩の力を抜く。この感覚を言葉で示すのは難しい。人間の五感など、とうに超越したところにあるのだから。

「あいつ、がどうなったの。抵抗って？」

「――信じられません。もうとっくに自我は無くしていたはずです……ここ数日は《殺人鬼》としての人格塗り替えが完了し、自ら血

を求めて行動するように。なのに」

ユリシーズは目を細めた。この猫のような瞳の奥に隠された狡猾さにピュティアスは震える。なんて、なんて綺麗なのだろう。

「……“あっち”で何か起こったね。“あれ”が今何をしているか、わかるかい？」

「――調べます。お待ちを」

ピュティアスは目を閉じた。僅かに顎を上げ、遥か彼方に神経を集中させる。

――彼女は他人の意識に潜入・介入することのできる能力者だった。時にはその意識を強制的に塗り替え、操作することも可能だ。

ピュティアスは対象の脳に侵入し《記憶の層》の順番を入れ替えることによって、人格の歪みを生じさせる。そしてその歪みに乗じて人工的に新たな人格を作り出し、それをコントロールするのだ。不安定な人格の相手ほど操作しやすかったし、幼少時の悪環境、心的外傷を負った経験のある人間ほど人格は崩しやすかった。崩した人格は彼女が望めば、修復してやることもできる。

女の主である少年は彼女の能力を《催眠術》だと呼ぶが、実際はそれよりもずっと複雑なものだ。この世の言葉では説明などできない、人ならざる力。

けれど彼が催眠術だと言うならば、彼女にとってもこれは催眠術以外の何でもなかった。それで良いと、ピュティアスは思う。

ふ、と唇から吐息が漏れた。彼女の目蓋が僅かに震える。

「……“獲物”を狩っていました。組織の下層構成員です」

ピュティアスの意識が“それ”の意識と連結した。アクセス、とい

う表現に近いイメージだ。彼女の脳裏に操作対象の意識が、そしてヴィジョンが流れ込んでくる。

「それは君の命令した行動だよね？」

「はい。半ば自発的に行なっていますが」

ピュティアスは目を閉じ、さらに意識を彼方に集中する。神経を研ぎ澄ませれば、“それ”の体験している空気さえ肌に実感することができた。

暗い建物の中だ。腐臭と鉄錆の香りに満ちた。

「ちょうど今、新たな獲物を見つけて……少女です。黒髪の」

途端ユリシーズの口の端が釣り上がる。最初から彼の目当てはただ一人なのだから、愉しげにするのも当たり前だった。

「ルカ？」

「――いえ。ですが一度ユリシーズ様の会ってらっしゃる子供です」

「あぁ、あの女の子か。日本刀使いの」

少年は酷く愉快そうに笑う。僕も見たいな、謡うように呟いた彼の目が嬉しそうに細められた。

ユリシーズがピュティアスを側近に選んだのは、玩具（おもちゃ）を操作するコントローラーが欲しかったからだ。彼にとって他人はラジコンでしかなかったし、追従でさえ道具の一つでしかない。

けれどピュティアスは幸せだった。主人に与えられた命令を忠実に果たすべく、実況中継をするかのようにそれの様子を口にする。

「その少女に狙いを定めました。凶器はナイフです――ですが。……意志が、揺れています。私の操作からは抜け出せていませんが……

…深層心理に拒否の、破片が」
「ふぅん？」
何故、とピュティアスは眉をひそめる。彼女の操作は完璧だった。操作対象はこの上ないほどの適材。“彼女”の脳は脆く傷つきやすく、容易に侵入することが可能だったからだ。対象である“彼女”の凄惨な幼少時の体験が助けとなり、催眠をより強固なものにしていた。
なのに、何故。
（そういえば最初から、）
この女には違和感を感じていたのだ。
嫌な予感に捕われて、ピュティアスは薄く唇を噛み締める。
「……少女は“彼女”にとって、今まで獲物としてきた組織員より近い存在だったようです――」
「ねぇ」
話を遮るように猫のような声色で、甘く少年が女の名を呼んだ。ピュティアス、囁かれた響きに体が震える。何かよからぬことを考えている、そんな声だった。同時に、逆らえないと彼女は悟る。
「止めろ」
「……何を、仰います」
「“あれ”の支配を止めるんだ。やるなら今が一番良い」
そんなことをしたら。叫びだしそうになった女を少年は黙殺する。この子供は今、このタイミングで、玩具を自由にしろといったのだ。“あれ”の支配を解き放て、と。そんなことをして“あれ”が正気

に戻れば、ピュティアスはおろかユリシーズ本人も危険に曝されてしまう。ピュティアスは“あれ”に顔を見られていたし、あちらに彼女と同じような能力を有する者がいないとは限らなかった。調べられればすぐに“カーマロカ”に、そしてユリシーズに直結してしまう。

「危険です……！」
「良いから」

早くしろ。冷たく言い放たれて、ピュティアスはぎっと拳を握り締めた。主人が何を望んでいるかなどわかっている。この少年は見つけてもらいたがっているのだ、あの黒髪の悪魔に。
わかっては、いた。けれど主人を危険に曝すことなど、本意であろうはずが無い。
僅かな逡巡のあと、結局ピュティアスは少年の意に従った。腹を括るに近い、自分が守れば良いと決意して。しかし直ぐに彼女の体は不自然に硬直する。

「どうしたの」

異変に気付いた少年が眉を寄せた。それに答えることもできず、ピュティアスの肌に脂汗が浮かぶ。

「ピュティアス」
「……できません」
「僕に逆らう気？」
「いいえ！」

違うのだと、ピュティアスは強く首を横に振った。できない、のだ。何かに阻まれてしまっているように、“あれ”に掛けた支配を、操

作を止めることができない。

（違う……）

止められないんじゃない。

つ、と彼女の顔を汗が伝っていった。違和感の正体。嫌な予感。

あれはとっくに、自分の支配下からなど抜け出していたのだ。

「暴走、してます……！」

言うことをきかないラジコンの、コントローラーだけをピュティアスは持たされていた。暴走する本体の様子ばかりを見せ付けられる。どうして。考える間はない。

脳裏に浮かぶヴィジョンで“彼女”は少女にナイフを振るった。その動きに躊躇いはなかったが、体の中枢がひどく痛む。さらに鮮明なヴィジョンを求めて神経を集中させれば、目蓋の裏にいくつかの人影が現れた。これは“彼女”の見ている風景だ。

「少女を殺す前に、何人か別の……仲間でしょうか、彼女に何か話し掛けて――っ！！」

ピュティアスの表情が苦悶に歪む。胸に渦巻くものがキリキリと内蔵を締め付けた。痛みで呼吸がままならなくなる。

なんだ、これは。

今ピュティアスが体に感じるものは、イコールあちらの“彼女”の心身――特に精神の状態を体現したものだった。しかしピュティアスが操作を始めてから、いまだかつてこんなことが起こったことはない。今や“彼女”とは視界と精神の感覚ばかりを共有しているピュティアスにとって、この状態は負担にしかなりえなかった。

「――続けられそう？」

ピュティアスの背を少年が擦る。静かに頷いた彼女は唐突に、この痛みの名を悟った。

――これは、『感情』の痛みだ。

ピュティアスが塗り潰し、壊したはずの人格。その支配から外れて暴走したその奥で、表に出ることを許されない感情が藻掻いて爆ぜている。それはピュティアスが壊す前、つまり本来の“彼女”の感情だ。

サンドラ・ジョーンズという人間であったはずの、彼女の。

「……仲間を見て、酷く混乱しています――嵐のようなものが膨れて充満して。心の中で、もとの人格とあとの人格が傷付け合っている」

ピュティアスは自分の頬に濡れた雫の幻を見る。サンドラ・ジョーンズは――サンドラであった“彼女”は、泣いていた。

自らの罪に気付き、その咎に苦しみ、しかしもはや自分の意志では動かすことの叶わない体に涙しているのだ。仲間の命を摘むために動く体を精一杯拒否する、その内なる行動は、自らの体を傷付けて命を削ってゆく。膨れ上がった悲しみが全てを覆い隠し、暴走していた人格すら、崩してしまえるほどに。

「これ、は……」

それは唐突に訪れた。

激しい心中の葛藤の末に、“彼女”に異変が訪れたのである。爆発した感情が表に溢れだし、とうとう上辺の人格を押し潰す。

ぷつり、と何かが切れた。もともとはピュティアスが操っていたは

ずの、その人格が消されたことによる回線の切断。体に感じていた感覚が消失した。“彼女”の意識だけが辛うじてまだピュティアスと繋がっている。彼女の脳裏に、サンドラ・ジョーンズの見ている景色だけが鮮明な映像として映し出されていた。

「……ぁ、」

無意識に唇から音が零れ落ちる。ピュティアスが視たのは、黒髪の少女だった。

先刻まで“彼女”がナイフを向けていた日本人ではない。全てを吸い込んでしまいそうな漆黒の瞳。陶器のような白くて滑らかな肌にかかる長い髪は艶やかで、妖艶でさえあった。闇の中に淡く浮かび溶けて消えそうな儚さとは裏腹に、体の奥底に湛えられた強靱な何かを感じる。

悪魔の、少女。

「ルキフージュ＝ロフォカレ……」

少女がピュティアスに向かって微笑みかける。否、ピュティアスの侵入している意識の先にいる人物・サンドラに向かって。

少女のあまりにも優しい笑みが脳裏に焼き付いて離れなかった、それが、最後のヴィジョン。

――――――ぷつん。

ブラックアウト、する。漆黒に落ちた視界には、もう何も映らない。

ピュティアスはゆっくりと目蓋を持ち上げ、傍らの主人にそれを告げた。

「……サンドラ・ジョーンズが死にました」

「死んだ……？」

成り行きを黙って傍観していた少年が、ほんの少しだけ驚いたように眉を上げる。僅かに思考した後、そう、と彼は呟いた。

「それはちょっと、気の毒な事をした」

あれを死なせる気はなかったのに。

呟いた少年が心なしか沈んだ表情をするのに、ピュティアスは酷く驚いた。あんなものの命などで一喜一憂する子供では、ないはずなのに。一体何を考えているのか。

「……終わりはルキフージュが、その手で」

付け加えられた言葉に、少年は薄らと笑みを浮かべる。瞳の奥が、髪の先が、きらきらと月光を受けて反射していた。

「……ルカは、悲しんだかな？」

その声はうっとりと、夢を語るように。

「きっと僕の仕業だって気付いてくれるよね。彼女、怒るかな？」

ねぇ、と。ユリシーズは笑う。

嬉しいんだ。あれが死んでしまったのは不本意だけど、結果あの子が僕を恨んでくれるなら。

「ルカは来てくれるかな？　僕を殺しに」
「ユリシーズ様――」
声を上げたピュティアスに、冗談だよと少年は笑ってみせた。大袈裟な仕草で首を竦める、まるで悪戯が見つかった幼子のようだ。
「大丈夫……僕があの子を殺すんだから」
ピュティアスは眉を潜めた。少年の思考はあまりにも深く、不可解で。少年のとった行動は、相手を考えればあまりにも危険だ。
「……ユリシーズ様は、何故ルキフージュに固執なさるのですか」
言ってから、はたと口をつぐんだ女の顔を少年の猫のような瞳が見つめた。詮索は少年にとって鬼門だ――しまった、と思っても遅い。ピュティアスは深く頭を垂れる。
「……差し出たことを申し上げました。お許しを」
「――僕さ、」
少年がゆっくりと歩き始めた。ピュティアスは黙ってそれに続き、彼の言葉に耳を傾ける。お咎めは無しのようで、この少年の気紛れを不思議に思った。
「最初は嫉妬、だったんだ。はじめて存在を知った日から……あいつは“僕ら”と似てるのに、なのに翼を剥がされなかった」
ふと顔を上げたピュティアスは、少年の目の前に人影が現れたことに気付く。

大柄な人間の色濃い気配が二人分。少年は気に掛けることなく、真っすぐそちらに向かって歩き続ける。

「圧倒的な力を持ってるけど“悪”で。なのに、自分の生き方を知ってて……羨ましくて、嫉ましい。どうしてあの日――」

言い掛けてやめた言葉の先を尋ねる術を、ピュティアスは持っていなかった。ユリシーズは一つかぶりを振ると、現れた人間の前で立ち止まる。

その正体は屈強な男のようだった。燕尾服を着込み、黒のブーツと白蝶ネクタイ。それに仰々しいシルクハットを被った彼らは、この場所にいるにしてはどこか異質だ。

「――だから、憎かったんだよ」

男達は少年の認めると、シルクハットをとって深く一礼する。

「……お迎えに上がりました、ユリシーズ＝ルイン公」

「継嗣殿下がお呼びでございます――」

冷たい夜風が吹き抜けた。

漆黒の中に、人影が消える。

雨のうた。

十四年前の、ある日のことです。

少女は歌を聞きました。
その頃彼女の暮らしていた、枯れてしまった国の片隅にはひっそりと、寂れて崩れそうな教会があります。そこには希望を捨てきれない人々が隠れ集って、平和を夢見ながら歌をうたっていたのでした。
少女はそれまで歌と言うものを聞いたことも、もちろん歌ったこともなかったので、その旋律はとても不思議なもののように思えました。

少女の名はテトラと言います。
それは仮初めの名でしたが、彼女の大好きな人間がつけてくれた大切な呼び名でした。

テトラが聞いたそれは賛美歌で、後にそれと自分の生きる道との溝に笑いさえ込み上げることになるのですが、まだ幼かった彼女はそんなこと知りません。
テトラはその賛美歌が気に入ってしまったので、何度か通ううちにすっかり覚えてしまいました。
歌詞の意味はわかりませんでしたが（知らない国の言葉だったのですから）、気付けば口ずさむ事が多くなっていたのです。

そんなことが続いていたある雨の日、テトラは“彼女”に出会いました。正確には、テトラが彼女を見つけたのです。
テトラは彼女に問いました。共に生きる気はあるか、否か。

（テトラは不思議な子供だったのです。その幼さには似付かわしくないほど、世のことわりを知っていました。“彼女”を見つけたとき、そこに訪れる運命は生か死の二択であることを知っていたのです）

そして二人の少女は、同じ世界で生きてゆくことになりました。終止符が打たれるその瞬間まで、たった一つの約束を胸に秘めながら。

（この雨に、誓うよ）

第四章《慟哭》：パセティックの丘（1）

惨劇の夜が明ける。
世界はあまりにも無常だった。永遠にさえ感じられた闇を食い破るように昇った太陽が彼らを照らし、全ての終わりを告げ、そして新しい一日をはじめる。
地球は回り続けていた。たった一人の命など、この世界には何の影響ももたらさない。世界は、世界であり続けるのだ。

《パース》四十二人、《ポート》十五人。日本の任務先で関わった闇取引きの業者が二人。これが、今回の一件の犠牲者である。
犯罪シンジケート・ルシファーの下層部は激しく乱れ混乱したが、人員の補充や入れ替えの結果すぐに通常の均衡を取り戻した。詳しいことはまだ組織員に知らされていないが、空席だった副首領（エイド）にも新たな人間が就任することになるらしい。あのデューイ・マクスウェルは《ポート》のチームリーダーに昇格したらしいと、千瀬は聞いた。
この急な人員入れ替えに迅速な対応が可能だったのは、組織上層部にほとんど影響が出ていなかったからだ。幸いなことに《テトラコマンダー》からもＥＰＰＣからも、一人の死者も出なかった。

――ただ一人、サンドラ・ジョーンズを除いて。

＊

ガチャン。
大きな音を立てて倒れる日本刀が床にその身を投げ出して、けたたましい音を鳴らした。持ち主の少女はそれを拾うこともなく、ただ一点を凝視している。
千瀬の視線の先に一人の男がいた。相も変わらず考えを読ませない瞳で辺りを一瞥する、それはこの組織の首領である。腕を組み壁にもたれるようにした彼は、一人欠けた〈ソルジャー〉達にゆっくりと同じ言葉を吐き出した。
サンドラ・ジョーンズの遺体を調べた、と。
次いでロヴ・ハーキンズが語ったのは、事件の一連の詳細とその末路だった。そして、“殺人鬼”であった彼女のこと。

「遺体から“痕跡”が見つかった。どういうものかを説明してもお前たちには理解し難いだろうが――言うなれば、“能力者”の残した足跡のようなものだ」
「……能力者の、足跡？」
淡々と紡がれていた会話の途中で春憐が首を傾げた。それってどういう意味なの。問えばロヴは曖昧に笑う。

「“俺たち”のように特殊な能力を持つ者の中には様々なタイプがいるんだよ。その影響を直接相手に及ぼすこともあれば、間接的にしか作用しないものもある。能力の使用後には微かな気配が――“力”を使用した、その残滓のようなものが残ることがあるんだが、それを読み取る事に長けた能力者もいる」
「……で、それが何？」
回りくどい説明に厭きたのだろう、ハルが思い切り眉を寄せた。ただでさえ彼は重苦しい空気が嫌いなのだ。今回の件の重さを十二分

に理解しているだけに（そして逃げてはいけないのだともわかっているので）、彼の苛立ちはつのる一方だった。

「サンドラにその“残滓”とやらが見つかったから、だからなんだっつーの？　お前の“翻訳”だってかかってたんじゃねェか」

「……ロヴの“力”に、使用の証拠は残らない」

ぼんやりと、しかし何かに気付いたかのように呟いたのはレックスだった。長い年月を共にしてきた彼だからこそ、他のメンバーより知ることは多い。

“残滓”があるんなら、それはロヴじゃねェ。確認するようにゆっくりとレックスは唇を動かした。そこでようやく気が付いたのか、ハルがその目を見開く。

「……ンだよ、じゃあ」

誰がサンドラに、“力”を働かせたんだ？

少年の声に辺りが震撼した。ロヴだけが悠然と前を見据えたまま、一時の沈黙が流れる。

「“煉獄（カーマロカ）”、ということですか？」

「――！？」

静寂を打ち破った声はオミのもの。瞬間空気が凍り付いた。そこにいる者は皆、一度はその名を聞いたことがあったからだ。

特別な能力を持つ者達で構成された平和維持組織。彼らはその力を駆使し、自らの“正義”の名のもとに“悪”を狩りとらんとする。

ただしその存在は霧のような謎に包まれていた。聞いたことがあるばかりで確認のとれない、都市伝説のような。

仮に実在するとすれば、世の中の警察や敵対するマフィアなどより

ずっと、ルシファーにとって脅威となり得る存在である。今この状況から連想できる“敵”はただ一つ――この、“煉獄”だった。

「……待てよロヴ。そのカーマロカが、サンドラと何の関係があるんだ」

重く閉ざしていた口を開いた駿の問い掛けに、ロヴは薄く笑ってみせる。

「ない、だろうな」

「――あ？」

「サンドラとカーマロカに接点はない。可能性があるとすれば」

ルシファーを内側から崩す為の駒として、利用されたのだろう。平坦な声でそう言い切った、男に感情は見えない。何だよそれと表情を曇らせた駿はそのまま唇を噛み、今度は朝深がロヴに問いを発した。

「利用された？」

「まだ調査途中だが、どこかで接触はあったようだな。たまたま狙われたのがあいつだった……それだけだ」

良く意味がわからない。そう言って朝深は眉をひそめる。洋服の隙間からからのぞく真っ白な包帯が、彼の負った傷の度合いを示していた。

ロヴは直接的な言葉をさけるばかりで、結局どうしてサンドラがあんな行動を起こすに至ったのかはわからない。深い説明を求めようとする朝深を、やんわりとロヴが押さえ付ける。

「――サンドラの行為は裏切りだが、あいつ自身は反逆者ではなか

った」

それだけを覚えていてほしいと、男は言った。それにサンドラを弁護する意味はなく、彼は事実をただ伝えただけだ。

「こんな方法を使ったということは、相手はこの本部の場所を知っているわけではないらしい。本気で来るなら直に攻め込めば良いんだからな。それか、まだ様子を見ている段階なのか……」

「だからそれは、どういう……」

「――なぁ、ロヴ」

腕を組んで黙り込んでいたレックスが再び声を上げた。皆の視線が彼に集中する。体に巻かれた、血の滲んだ包帯の理由は誰もが知っていた。そして彼が誰よりもサンドラと親しかったことも。

レックスは、問う。

「……“お前達”みたいなやつの中に、他人を“操作”できるやつもいるのか？」

ロヴは確かないらえを返すことをせず、目を伏せただけだった。そうかと呟いたレックスを、不思議そうに駿が見つめる。

「操作……されて、た？」

突如零れた少女の声に一同が振り返った。僅かに震えた、小さな声。少女の足元の刀は倒れたまま、その漆黒を主張している。なんですか、それ。うわごとのようにぼんやりと繰り返した、その目は色を失っていた。

「チトセ……？」

怪訝に思ったロザリーが千瀬の顔を覗き込む。千瀬は緩慢な動作で刀を拾い上げると、その柄をぎゅうと握り締めた。ロヴを真直ぐに見上げた、その表情が瞬間くしゃりと歪む。

「どういう、ことですか。それって」
「チィ、よせ」
「そんなこと、できるんですか？」

宥めるように落とされたレックスの言葉は届くことなく、次の瞬間千瀬は声を張り上げた。

「あれは、サンドラの意志でやったんじゃない、って……それは、そういう意味ですか！？」
「――チトセ、お前何言ってんだよ？」

訝しげに名を呼んで駿が千瀬に近づいてくる。彼にはわからない。ここにいる誰もが知らないことを、千瀬だけが知っていた。ルシファーとカーマロカに接点が生まれた、唯一の日。

（――ユリシーズ）

その名を思い浮べて少女は戦慄する。彼の従者も彼自身も、不可能を可能にする能力を持っていた。
ロヴの言っていたことが、そういう意味なら。それが、千瀬の恐れていたことを指すとしたら。
予想が現実になっていた、それだけのことなのに千瀬は酷く衝撃を受けた。だってそうなら、止められたかもしれなかったのに。

「あの日……」

あの少年に出会ってさえいなければ。
あの路地に入らなければ。
人目を避ける必要がなければ。
ルードが能力を使わなければ。
――自分が、あんなへまをしなければ。

「……サンドラは、生きてたってことですか……？」
「……チトセ、」
「そう、なんですか……！？」

堰を切ったように千瀬は泣きだした。両親を殺したときにも、月葉と再会したときにも出なかった涙だった。
あの日千瀬が“煉獄”の使者と接触していたことを言わなかった、それはロヴの優しさだったのだろう。能力の残滓と言うものが本当にあるのなら、きっとルカは気付いたに違いない。それがあの少年と、その従者のものだということに。

「あたしのせいだ……」
「チトセ、」

少し躊躇った後、駿が千瀬の肩に手を置いた。それ以上どうすることもできず、困ったように少年は眉を寄せる。
ぱたぱたと溢れだす涙はとまらなかった。少女のそれを見つめながら、レックスが言葉を紡ぐ。

「チィ、お前のせいじゃない」
「……で、も！」
「サンドラはな、」

しゃくりあげる千瀬に小さく笑ってみせて、レックスは天井を見上げる。

「あいつァな、遅かれ早かれ、いつかはこうなることが決まってた」

「……どういうことだよ」

声を出して問うたのは駿だったが、全員がレックスに視線を注いでいた。千瀬も涙に瞳を濡らしたまま、その巨漢を見上げる。

注目をあびたレックスは一つ首を竦めた後、ゆっくりと口を開いた。

サンドラは俺より前にロヴに……正確にはルカに拾われたらしいから、詳しいことは知らねぇが。

「あいつはな、偶々その時ロヴ達が訪れた国の軍が秘密裏に行っていた、《人格改造プログラム》の被験者だ」

サンドラがそこに連れていかれたのは物心ついてからで、彼女には親の記憶もあったらしい。

ぽつりぽつりと語られる内容に誰もが息を呑んだ。今まで誰にも告げなかったのであろう、初期メンバーだけが知っていたサンドラの秘密。

「その当時の科学じゃな――まぁ今もかもしれねェが――人格改造なんて成功した試しがないんだと。成功してもそれは一時の話、最終的には皆壊れちまう」

「壊れる、って」

「ただの殺戮マシンになっちまうのさ」

サンドラには同じ境遇の“兄弟”がいたのだと、レックスは続けた。

行方知れずになっていた彼らの末路を調べることができたのは、このルシファーが軌道に乗ってからだ。

誰もが同じ末路を辿っていたのだという。意思を持たぬ殺人鬼と化す、その最後を。

「ロヴがな、ルシファーを設立してからもずっと打開策を探してたんだ。どうにかあいつを救ってやりたかったけど、でも駄目でなァ」

なぁ、ロヴ。

ふいに話し掛けられて、成り行きを見守っていたはずのロヴが面を上げる。レックスは問い掛けた。お前本当は、わかってんだろう？

「サンドラは確かに操作っつーのを、されてたのかもしれねェ。でも最後、あいつァ……」

「……やれやれ」

説明が面倒臭いから、黙ってるつもりだったのに。

小さく呟いてロヴが苦笑した。そうだよレックス、言って彼は笑う。お前の、予想通りだよ。

「サンドラが“操作”されていたのは間違いない。ただそれは始めのうちだけだ――無理な操作が、人格崩壊のきっかけになったんだろう。あいつの身体に巣食っていた“殺人鬼”を呼び出した」

一連の殺戮の大半は操作によるものでなく、殺人鬼と化したサンドラ自身の本能と望み故の行動だ。

ロヴが言い放つと同時にどよめきが走る。そんなことって、そう言ってシアンが口元を覆った。

「それでも俺は、サンドラは反逆者ではないと言うよ。“あれ”は俺達の知るあいつではなかった。コード“Ｓ”、“十九番目の殺人鬼”――」

「……？」

聞き慣れぬ言葉に皆首を傾げたが、ロヴはそれ以上を説明する気は無いようだった。

ふと息を吐いて再びレックスが唇を開く。

「あいつのリミットはいつ来てもおかしくなかった。ここまで保ったのも奇跡に近かったんだ……あいつも俺たちも、知ってて一緒に生きてきた」

いつかその日が来ることを、わかっていた。

「ルカがなぁ、サンドラと約束してたんだよ。その日が来たら、そん時は」

あいつを、その手で、ルカが殺してやること。

噛み締めるように言葉を吐き出した、レックスの唇は微かにわなないた。ルカとサンドラのやり取りを、立浪草の花言葉をもう一度思い出した千瀬の目が見開かれる。

（この人たちは、）

いつか必ず自分が殺す相手と。

いつか必ず自分を殺す相手と。

共に過ごし、共に生きた十四年。彼女達は一体何を見て、何を想って来たのだろうか。

嗚呼この人たちはこうして常に、生と死を見つめて教授してきたのだ。千瀬は悟って、その強さと悲しさに途方も無い想いを抱いた。

あいつは幸せだったよ。レックスが言う。約束が果たされて、あいつは幸せだった。

「だから、お前は泣くなよ」

そう言って、

「泣くなよ、チィ……」

レックスは泣いた。

千瀬はぎゅっと目を閉じる。駿がそっと頭を撫でてくれるのを感じながら、必死で涙を止めようとした。

彼女が幸せだったと、切に願う。己の無力を実感した子供でしかない千瀬には、全てを受け入れるのはまだ難しかった。

（だって、それでも）

考えて、しまうのだ。

あの日さえ無かったなら今もきっと、彼女はこの場所で笑ってた。

第四章《慟哭》：パセティックの丘（2）

（進み続ける。止まらない、この世界の中）

ロヴが選択したのは、現状の維持だった。

カーマロカは未知の組織だ。今回のことで存在こそ確認されたものの、本部の所在地も構成員も全て謎のままだった。

かたやルシファーは、一般にこそ知られていないが裏社会には広く名を馳せる巨大犯罪シンジケートである。

――カーマロカに報復を考えるにはあまりにリスクが高すぎた。彼らにとってルシファーは滅すべき明らかな“悪”であって、その気になれば合法的かつ暴力的にそれを絶やすことができる。こちらからその切っ掛けを与えること――つまりカーマロカに復讐という形をとること――は、ルシファーにとっては自殺行為だったのだ。

サンドラ・ジョーンズをはじめとする多数の組織員に犠牲が出ても、そして全ての起因であり首謀者がカーマロカに所属する、一人の少年だとわかっても――ロヴは“煉獄”に対しては何もしないことを

選んだ。

否、何もしなかったのではない。組織にとって最前の道を、首領として彼は選択したのである。

そうして世界はまた、新しい朝を連れてやって来た。

＊

「……あたし、馬鹿……」

鉄の扉の前で行ったり来たり。自分の考え無しな行動に嘆息しつつ、千瀬は一人呟いた。こんなところに来たところで、どうすればいいのかわからないのに。

この、少女の妙な行動を説明するには時を僅かに遡らなければならないだろう。

あの日からもう、数日が経過していた。

サンドラの葬儀は行なわれなかった。そもそもこの組織にそんな習慣はない。死んだらそれまでだと駿に聞かされていたし、現に今回の犠牲者を弔うようなことは一つもしていなかった（遺体が原型を留めていなかったのも、原因かもしれないが）。

重々承知してはいたのだ。しかし千瀬には、受け入れねばならないと自分に言い聞かせながらも、やはりどこか釈然としないものがあった。少なくともサンドラの体は残っていたし、組織の建物の中で命を終えた以上は通例の如く置き去りにできるはずもない。なのに葬儀を執り行うわけでもない――埋葬も、しないと聞いた。

サンドラの遺体はどうなるのか。レックスにそれとなく尋ねてみれば、彼は苦笑しながら千瀬にこの場所を教えてくれた。
千瀬はどうしても見届けたかったのだ。そうしなければ、前に進めない気がした。それは少女にとっては残酷な選択だったが、千瀬はそうせずにはいられなかった。サンドラが命を落とした責任を、少なからず感じ続けていたから。

そして千瀬は“ここ”へやってきた。来たからにはもう入るしかない、と少女は腹を括る。彼女にとってここは仕事や訓練ですっかりお馴染みの場所だったが、この空気はどこか苦手だ。黴びた天井も、血痕と赤錆の腐臭も。

――“廃棄場”。それは全てを還す場所。

＊

黴臭い。籠もった湿気が毒素を孕んでいるかのように気管に凍みて今にもむせてしまいそうになりながら、千瀬は目的の場所を目指した。
廃棄場にあるのはただ一つ、”処理”の場だけだ。シェルターの中心に据えられた巨大なクレーターと頑丈な柵。すり鉢状の形をしたその中央に一度入れば、上から梯子を降ろすより他に出る術はない。ここで千瀬が稽古を付けてもらってからずいぶん長い時間が経ったような気がする（もちろんそれは気のせいだが）。感傷的になってしまうのは、あの時はまだ彼女が生きていたことをわかっているか

らだ。
……そして此処は、千瀬が初めて自らの意志で他者の命を摘んだ場所。

まるで蟻地獄の巣ように落ち窪んだそこを照らすのは人工的な照明器具だけである。灯された心許ないライトが、薄淡く辺りを染めていた。そして穴の底にはただ一つ、あの訓練の時には無かった物が存在していた。

（……っ）

それを目にした瞬間、千瀬の胸が鈍い音を立てて痛む。
台の上に寝かされた彼女の遺体は黒い布に覆われ、ひっそりと眠っていた。僅かに覗いた腕が蝋のように白い。
ごめんなさい。
思わず零れ落ちた言葉は闇に溶けて消える。その体が冷たいことも、二度とその声を聞くことがないのもわかっていた。なのに。
目覚めて欲しいと少女は願う。もう一度あの笑みを浮かべて、それから。

「ごめんなさい……」

弱くてごめんなさい。無力でごめんなさい。何もできなくて、迷惑かけてばかりで、ごめんなさい。ごめんなさい。

決して叶わない願いだとわかっていた。
届くことのない懺悔を繰り返しながら千瀬は目を瞑る。遺体を恐いと思うはずもないのに体が震えて、サンドラの傍まで行くことはできなかった。

その時だ。
小さな足音と息遣いが聞こえる。誰かがこちらに近づいて来る気配に気付いた千瀬が咄嗟に屈んで身を潜めたのと、廃棄場のドアが開けられたのは同時だった。

（――ど、どうしよう）

特に後ろめたいことをしていたわけでもないのだが、今は誰にも会いたくない。そうこうしているうちに足音はすぐ近くまでやってきて、千瀬は完全に逃げるタイミングを失ってしまう。
柵の間からそっと覗けば、人物の姿が見えた。瞬間、ますます千瀬は体を縮こませる。

（――ルカだ）

気まずい。気まずいことこの上ない。
千瀬はあの日以来、一度もルカの姿を見かけていなかった。〈ソルジャー〉と〈ハングマン〉、仕事の場所も内容も違う彼女達は本来顔を会わせる機会のほうが少ないのだが、それでも不自然だったように思う。
――ルカがサンドラを殺したという事実を、彼女自身が気に掛けないはずがなかった。自分達の見ていない場所で彼女は苦しんでいたのではないかと思うと、千瀬にはルカに掛ける言葉が見つからないのだ。

「……いいのか、もう」

反響した声が聞こえたが、それはルカのものではなかった。恐る恐る、もう一度柵の隙間から覗いた千瀬の目に映ったのは煌めく銀色の髪――エヴィルだ。

よりにもよってハングマンが二人。見つかったが最後逃げ場はない（繰り返すが逃げる必要もない）。どうしよう、ともう一度千瀬は溜め息を吐く。

（……仕方ないや）

少女は意を決し、大胆にもぴょこりと柵から顔を覗かせた。……こうなったら見つかるまで、堂々と二人の様子を見ていようというわけである。

我ながら肝が座ったな、と呑気に思考を巡らせたりして。

千瀬の目の前で、ルカとエヴィルはすり鉢状の穴の中へと降りていった。もうが真上を向かない限りは、二人が千瀬を見つけることはないだろう。

――ほっと胸を撫で下ろした千瀬の呼吸が刹那、止まる。

穴の底に到着した二人が真っすぐに向かったのは、サンドラの横たわる台だった。そして着くやいなや、エヴィルが黒い布を――遺体を覆っていた布を、その手で引き剥がしたのである。

「……っ」

千瀬は必死に声を堪える。

思わず閉じてしまいそうになった目蓋の隙間から見たサンドラは、柔らかな表情を浮かべていた。

酷く静かだ。

サンドラの胸から下に依然として布が掛けられたままの理由はわかっていたが、それでもその顔は嘘のように綺麗で。

真っ白な頬を、色を失った唇を、ルカの細い指が滑るように撫でる。

――それは、祈る仕草に似ていた。

サンドラの金の髪を梳いているルカの、開いているはずの片手が。
エヴィルの服を握り締めていたことに千瀬は気が付く。
少女はさよならを、告げているのだ。約束を果たした、愛する仲間に。

（哀しい）

思わず千瀬が目を伏せた瞬間、ふと生温かい風が頬を掠めていった。
ざわ、り。
次いで感じる僅かな、べたつくような湿気。周囲の空気が明らかに変わる。地の底で何かが呻くような、気配。

（――何？）

異変に気が付いた千瀬が二人に視線を戻したときには、もう全てが終わっていた。
再び訪れた静寂の中で、穴の底に依然として寄り添うように立つルカとエヴィル。薄明かり、錆びた匂い、置かれた台と漆黒の布。
ただ一つ、違うのは。

「……な、んで」

――見つからないのだ。
サンドラの遺体が、何処にも。どこにも、ない。まるで初めからそうであったかのように、跡形も無く消失してしまっている。
質の悪いマジックショーを見せられているような気分になったが、そんなものではないと千瀬自身がその身に感じていた。あの気配を、前にも何処かで。

（――今、何が、）

少女の背を嫌な汗が伝う。細い足がいつもに増してたよりなく震える。
きっと今、見てはいけないものを見た。

「おい、」
「……！？」

突如後ろから声がして腕を捕まれる。真っ青になって振り返った千瀬の瞳に、癖のある赤毛と猫のような目が飛び込んだ。
しーっ、と口元に人差し指をあてながら、現れた少年は千瀬の腕を引く。

「いーからこっち来い、早く」

彼に言われるままに向かった先には、鉄の壁に同化するように建て付けられた一枚の開き戸があった。そこを開けて見れば、ちょうど一人通れるサイズの真っ黒な穴が開いているのがわかる。

「なに、」
「いーから」

どん。
勢い良く背中を叩いて、ルード・エンデバーは千瀬をその穴に押し込んだ。
ぐらり、少女の身体が斜めに傾ぐ。千瀬に続いて穴に身体を滑り込ませた少年が、何かに気付いたように声を上げた。

「あ。」
「〜〜〜〜〜っ！？」

床が、無い。

千瀬が体を入れた扉の奥にはぽっかりと深い穴が開いていて、二人の身体をたちまち飲み込んでゆく。その底は見えぬほどに深かった。

――この状況を、どうしろと？

浮遊感に包まれた千瀬の見開いた目に見つめられた、少年はあっけらかんとのたまった。

「……ワリ、忘れてた」

どうすることも出来ぬまま、少年と少女は落ちていく。穴の中を滑るように――奇妙な叫び声とともに。

第四章《慟哭》：パセティックの丘（3）

「ぶっ」
「ばへっ！」

ぼすん、という鈍い音と共に落下した先には枯草のようなものが沢山敷き詰められていた。これのお陰だろう、落下の衝撃は吸収され予想していた痛みもない。
ルシファーに来て間もない頃、ロヴの部屋に行こうとしてエレベーターの床が抜けたことを千瀬は思い出した。僅かに懐かしい、あの気持ちの悪い浮遊感がまだ胸の奥に渦巻いている。
あの時のロザリーは確信犯だったが、今千瀬の前方で潰れている少年――ルードは、冗談抜きでこの結果を予想していなかったらしい。予想していたにしては、落下態勢があまりにも不様である。

ここはどこだろう？
千瀬は辺りを見回した。どうやら廃棄場の外のようである。こんなところまで繋がっていたのか、と少女はひとりごちた。
あの穴は途中から急なトンネルのような作りになっていて、二人はそれを転がるようにしてここまで抜け出たのだ。
千瀬には何の為にあんな道（と言えるかどうかは定かではないが）があるのかはさっぱりわからなかった。つくづく、ルシファーの建物は奇妙な作りをしていると思う。
それにしても、と。思わず千瀬は半目になって、横でむせてしまっている少年に無言で訴えた。

「いや、だから悪かったって……げほッ」

埃でも吸い込んでしまったのだろうか、ルードは激しく咳き込んでいる。涙目になりながら必死に弁解を続ける彼はいつから廃棄場にいたのだろう。

……神出鬼没。まさに、だ。

「あそこは俺が良く使う逃走用の……じゃない、緊急用の抜け道でさ。一番早く外に出られるし、皆知らないし。逃げるとき――じゃない、何かあったときに便利だからさ」

明らかに気になる言葉が交じっていたがスルーすることにした。彼の日常を垣間見た、と千瀬は思う。

「中が穴になってたこと忘れてたんだ、ははは……でもまぁ、コレのお陰で平気だったっしょ？」

ルードは敷き詰められた枯草……の山を指差す。どうやらこれは彼が事前に用意していたものらしい。

周到というか、なんというか。それだけ沢山、この道を利用しているということだろう。この“逃走経路”を。

「……そんなに使ってるなら普通忘れないよね」

「気にしない、気にしない！　出られたんだからいいじゃん！」

少年の笑顔を見て、はぁ、と少女は溜息をこぼす。不思議そうに首を傾げるルードをちらりと見やって、千瀬は一つ苦笑を零した。

「きっと、バレちゃったなぁ……」

「んん？」

「あたしがあそこに居たってこと、ルカ達に」

千瀬はひりひりと痛む喉を擦る。落下の際、予想外の展開に思わず叫び声をあげてしまった。我ながらかなり間抜けな声だった、千瀬は思って溜め息を吐く。
ルードも同様に大声をあげていたし（どちらかと言えば楽しそうな声だったが）何にせよ、ルカ達の耳には届いてしまっただろう。

「てか、最初から気付いてたぜ？」
「――――ふぇ？」

少年の言葉が理解できず、またしても千瀬の口から間抜けな音が飛び出した。

「ルカ姉とエヴィル。あいつら最初から、チトセのことも俺が来たこともわかってるよ」
「……！？」

そんな馬鹿な。少なくとも自分が一人きりだった段階ではそんなことはなかったはずだ、と。
千瀬の顔にそう書いてあるのが読み取れたのだろう、ルードは小さく笑ってみせる。

「……俺、昔ルカ姉と隠れんぼしたことがある。買い出しの役割分担賭けて」
「……へ？」
「建物の端まで逃げたのに二分で見つかった。あんまり早いから聞いたんだ、気配がわかるのか、って」
「……うん」

犯罪シンジケートの幹部が呑気に何をやっていたのやら。心の中で小さくツッコミを入れつつ、千瀬は耳を傾ける。

「五キロ、だってさ」
「……？」
「自分を中心としたときに、意識してなくても半径五キロ以内の人間の位置がなんとなくわかるんだってさ、ルカ姉は。正しくは四キロと七百メートルとか言ってたけど……どっちにしろバレバレだよ、お前がいたこと」

超感覚って感じ。
言いながら、絶句した千瀬の肩をぽんと叩いて少年は笑う。

「チトセだって、何となく人の気配がわかったりするっしょー？ルカ姉のも似たようなもん。範囲が半端じゃないだけ」
「でも、」

まぁまぁ、信じられないのはわかるけどサ。
そう言ってルードは体に付いた埃を叩き落とす。あいつらには五感を超えたものがあるんだ、と笑った彼の顔を千瀬はまじまじと見つめた。
ルードは言う。俺にも似たような感覚はあるけど、ルカ姉は別格だよ。

「世の中信じらんないことなんて沢山あるんだぜー、例えば」

少年の猫のような瞳が、すっと細まった。

「……さっき、チトセが見たこととか？」
「……っ」

息を呑んだ千瀬の脳裏に、先刻の光景が一瞬で呼び戻される。消え

たサンドラの身体、湿り気を帯びた、あそこの空気。
もう千瀬にはわかっていた。ルードが千瀬を外に連れ出したのは、彼女が酷く動揺していたことに気が付いたからだ。あのままルカ達と対面することになっては千瀬が少なからず苦しむから。だから、助けてくれた。

「……聞かねぇの？　あそこで何が起こったのか」

千瀬はゆるゆると首を横に振る。よく、わからなかった。何だか見てはいけなかった、そんな気持ちだけが膨らむ。圧し掛かるモノに押しつぶされるようで、下を向くことしか出来ない。

「見ちゃいけなかったなんてことはない。だったら初めから、ルカはお前のことを外に追い出してるよ」

――心を、読まれたのかと思った。
驚いたように千瀬が顔を上げれば、図星？　と彼は笑んで。

「お前ってわかりやすー。言っとくけど、俺は読心術なんて出来ないから」

ミクじゃあるまいし。
続けられた少年の言葉の中に、千瀬も知る少女の名が突然落とされて目を見開く。ミクが何？　問い掛けてもルードはそ知らぬふりで話を再開した。
「お前、わかりやすいんだ」
「……もう聞いた」
「落ち込んでんだろ」
「……。」
「なぁ、仲間が死んだってのは辛いことだけど。わかるけど……な

んで、チトセはそんなに落ち込んでるわけ？」

ルードは再び俯いてしまった千瀬の顔を覗き込んだ。それでも少女が顔を上げることはなく、困ったように少年は隣に座り込む。沈黙を作りたいわけではなかった。千瀬は僅かに逡巡した後、小さくその唇を開く。

「……ルカ、泣いてた」

「……嘘ぉ～」

目を見開いてぽかんと口を開ける、ルードの顔はとてつもなく間抜けだ。なんだか千瀬は気が抜けてしまう。

「うそぉ、って何よ……うん、確かに涙が出てたとか、そういうわけじゃないけど……でも」

泣いていた。

震えていた白い手。サンドラの唇を撫でていた指。顔に掛かっていた揺らめく黒髪も、彼女を取り巻く空気も。

泣いていたと、思ったのだ。あの人はきっと涙を流さずに、泣くことができる。

「泣いてないじゃんそれ。……ルカ姉が泣くなんて信じらんねェって。見たことないもん」

「でも、そんな気がしたんだもん……あたし、」

少女は項垂れる。俯いた顔を膝に埋めれば黒い瞳はすっかり見えなくなった。さらりと流れた髪の隙間から見えるうなじは白く、細くて頼りない。

ルードが困ったように眉を寄せたが、千瀬がそれに気付くことはな

かった。

「サンドラを最初に見つけたのに、止められなくて。ユリシーズが関わってることも、そんな気がしてた。頭の中で警報が鳴ってたの、ずっと……ずっと前から。『最後の晩餐』のとき……あの時からもう、嫌な予感がしてたのに」

何もできなかった。

本当にあれは、“最後”の一時だったのだと、今になって悟る。

「ルカにサンドラを殺させたのは――」

――あたし、だ。

声にならない声が少女の唇から紡がれた。小さく震えた肩は、泣いているのかいないのかの判別を難しくさせる。

ルードが何かを考え込むように顔をしかめた。居心地の悪い静寂が辺りを包んでから、はたと少女は我に返る。

「……あ、ご、ごめん！　気にしないで、何であたしこんなこと言って」

「……ぷッ、プリンっっ！！」

千瀬の動きが停止した。

耳が、何だかおかしな単語がを拾ってしまったような気がする。

「……は？」

「プリン食べようプリン！　そーだ俺プリン持ってたんだよ、さっき厨房から盗んだヤツ！」

忘れてたぜ！
ルードは無駄に大声を上げながらポケットを探りはじめる。なんでプリンなんだとか、その前に盗んだのかとか、ポケットの中に入ってるのか、とか。ツッコミ所は多々あれど、千瀬はぽかんと少年を見つめることしか出来なかった。

「あったー！　さっきの落下でちょっと崩れてるかもしれないけど、ホイ！」

ばっと音がするほどの勢いと共に、少年は満面の笑みで千瀬にプリンを手渡した。
落下の衝撃のせいかやや上辺の変形した、しかしまごうことなきプリンである。綺麗に透明な容器に入れられたそれには蓋もされていたので零れてもいない。

「……どうも」

これは食べるべきかと千瀬が蓋を開ければ、ふわりとした甘さとカラメルの匂いが広がった。

（……何で食べればいいんだろ）

スプーンが無い。真面目に考え込んだ千瀬を見て、ルードはぽんと手を叩いた。ポケットからスプーンを取り出すとにこやかに手渡してくる。
その小さなポケットのどこにスプーンまで入っていたのか。何でも現れるポケットの構造に少々疑問を抱きつつ、千瀬はスプーンに手を伸ばした。
……その瞬間である。
くにゃり、と。スプーンの先が空中で、力無く折れ曲がったのだ。

「……あ」

一瞬何が起こったのかわからなかったが、笑みを浮かべるルードを見てすぐに千瀬は思い当たる言葉を見つけた。

――スプーン曲げ、少年の得意技だ。

「スプーンならまだあるぜー」

言うやいなや、ルードはポケットから次々とスプーンを取出し片っ端から曲げはじめた。

出しては曲げ、また出しては曲げを繰り返すうちに銀色の山が出来上がる。凄まじい早業だった。千瀬の祖国のテレビにでも出演すれば、一躍有名になってしまうに違いない。

くにゅ、くにゅと折れていくスプーンが二人の足元に溜まる様が滑稽で、そして何よりも、ルードがポケットに大量のスプーンを隠し持っていたという事実が可笑しくて（どうやって収納していたのか、まったくもって謎だ）。

「……ぷっ」

思わず吹き出した千瀬を見て漸くルードは手を止めた。それはちょうど、最後の一本を曲げ終わったのと同時。

これじゃプリンが食べられない、少女が笑えばルードは慌てて一本を元の形に戻してみせた。

「おいしい」

まともな形状を取り戻したスプーンで掬われた、プリンの柔らかな甘味が口内に広がった。口元を綻ばせた千瀬の顔を、ルードが下か

ら覗き込むようにする。

「……元気、でた？」

少年の突然の言葉に、千瀬は目をぱちくりさせた。これは、何だ。もしかして。

「もしかして……心配、してくれてた？」

意味不明なプリンの登場も、突然のスプーン曲げショーも。千瀬を元気づけようと、不器用な少年なりに頑張っていたのだろうか。

「な……っ！」

そうに違いない、と少女が確信した瞬間、凄まじい勢いでルードが立ち上がった。がちゃがちゃスプーンを踏み付けながらあたふたと二、三歩後退り、ぶんぶんと顔の前で両手を振る。

「ばっっ……か、ちげェよ!!　俺は別に、」

目線を泳がせたり歩き回ったりと、挙動不審という言葉がぴったりだ。いつもの余裕は何処へやら、その狼狽ぶりはいっそ可愛らしくもある。悪いとは思いながらも笑いを堪えきれなかった、千瀬はしばらく黙って少年を見つめていた。

「別にそんなんじゃなくて、ただ……」

「ただ？」

俯いたルードの声は最後のほうが小さくなってしまう。千瀬が耳を寄せると、渋々というように口を開いた。

「……ただ。“あれ”は……あの路地に逃げ込んだのは俺だし、騒ぎを起こしたのも俺だし――」

――ユリシーズと出会った、あの日の出来事。千瀬がそれを気にしていたことに、ルードは気付いていたのだ。この変に真面目な少女が、その責任を背負い込んでしまおうとすることに。

「あれは、お前のせいなんかじゃない、って……」

「ルード……」

千瀬とルードの視線が交錯した。目が合ったその瞬間、少年はばっと勢い良く顔を逸らす。

その後、呼び掛けに答えるかのようにちらりと千瀬を見やった。恥ずかしそうに赤く染まった耳は、幸か不幸か千瀬には見えていない。

「――ん？　そういや最初に喧嘩売ったのも俺だ。げ、俺やばっ」

言って、派手なリアクションをとるルードに思わず千瀬は笑ってしまった。ルードの気持ちが、素直に嬉しいと思う。

「……だからさ」

もう一度声のトーンを落としたルードに千瀬は向き合った。らしくない真面目な顔で、小さな声で、少年は言う。

「チトセが責任感じる必要なんて、ないんだ。仕方ないって言うのは逃げてるかもしれないけど……でもやっぱ、仕方なかったって思う」

「……うん」

「受けとめていくしかないんだよな。でも……でも。もしも苦しかったら、忘れたっていい。それはきっと、なんていうか――悲しい、ことかもしれないけど。さっき見たことだって忘れて、前だけ見て……だって、そうやって生きてくしかないから。俺たちは」

ああクソ、なんか上手く言えねェや。

顔をしかめるルードをしばらく見つめた後、千瀬はゆっくりと口を開いた。

「……あたしは、忘れないよ」

ルードが千瀬を見つめ返す。真直ぐに澄んだ少年の目の中に少女の姿が映り込んだ。

黒髪黒目の日本人。まだ十四の、いとけない少女だ。ルードの瞳に映った自分が、自分自身を真直ぐに射抜いている。その姿に、向き合った自分に、千瀬は誓おうと思った。

「――忘れない。悲しかったこと、後悔したこと、嬉しかったこと……あたし達の仕事に関わった全ての命も、思い出も全部含めて、」

千瀬は大きく息を吸った。言葉にしなければならないことがここにある。

「サンドラの声とか、笑顔とか。あたしに教えてくれたことも……死んで、しまったことも。……ううん、生きていたんだ、ってことを」

受けとめられるようになりたいと思った。そうしていつか、見つめることができたら良い。

「……こうして今ルードと喋ってる事も。忘れたく、ないなって」

ありがとうと千瀬が言えば、ばか、と小さくいらえが返った。
横を見れば、ルードは鼻の頭を掻きながら照れたように笑っている。

「――そういえば」
「何？」
「ルカが、そんなに広い範囲の気配を感じ取ることができるなら……」
「ん～？」
「ルードが行方不明になったとき、ルカが探せば一発なんじゃ」
「……それ、ミクには絶対言うなよ」

――前を向こう。生きていこう。
止まっていたって、きっと明日はやってくる。

後悔を糧にし、たくさんの懺悔と共に踏み越えた過去の先。

あの丘の向こうには、　きっとやるべきことがある。

（　さぁ、いくよ　）

第四章《慟哭》：間話-Ｐｕｒｇａｔｒｙ-

某国某所。一見冗談のような高さの崖の上、立ち聳える巨大な洋館に響く、声。

「いーやーだっっ！　行かないったら行かない」

柔らかなアルトは語尾を弾ませ、まるで幼い子供のようだった。事実彼は“子供”である。ただし、“普通の子”ではないのだが。

「……仕事なんだから仕方ないだろう。ガキかお前は」

「サブに比べればね！　ってわけで僕はガキだから、今日はこの部屋から一歩も出ないよ。人手が足りないならダモンかピュティアスを貸してあげるから」

しっしっ、少年が白い掌で追い払う仕草をする。手にした煙草をくゆらせながら青年は盛大な溜め息を吐いた。

まったく、こいつは。

「あいつらはお前の命令しか聞かないじゃないか――なんだ、今日は何かあるのか？」

問われて初めて、銀髪の少年はにこりと笑う。無垢な笑顔の裏に隠されたモノに気が付いて、青年は眉をひそめた。聞くんじゃなかった、思ってももう遅い。またこの子供は、碌でもないことを言いだすのだろう。

「待ち人が、いてさ。来てくれるかもしれないんだよ」

ふわりと笑った笑顔の奥でちらりと焔が揺れた。淡い髪の色とは正反対の深い漆黒に包まれた、細身の体躯が深紅のソファーに沈む。考えを読ませない、本音はけして語らない、強情な唇に執着の色だけをのせて。

＊

ユリシーズ＝ルインは彼にとって、手のかかる弟のような存在だった。

他者の目を引き付けて止まないその容姿は端麗、白人特有の透けるような肌に澄んだ碧の瞳がよく似合う。

その効果を発揮する時にしか見せない強かな笑みに、騙されている事を知りつつ見惚れる者は後を絶たなかった。いつもは銀色に煌めいているのに、太陽の光に照らされた場所だけはまばゆい金色を放つ柔らかな巻毛は今日もふわふわと風に揺れているだろう。はかなくさえ見える、天性の美しさを兼ね備えた少年は黙っていれば天使のように愛らしい――――黙っていれば、だ。

少年の、猫のような狡猾さを潜めた瞳に気が付いているのは現在この組織“カーマロカ”の中では彼――サブナックだけである。少なくとも彼本人は、そう思っていた。

サブナック、と言うのは彼の本名ではない。名などとうに捨てた――そう言えば聞こえは良いが、単にこれまで名前を必要とする暮らしをしていなかっただけである。彼が、この組織の一員となる前までは。

“サブナック”の呼び名はユリシーズが与えたものだ。名が無いの

は不便だろうと勝手に、本人の承諾も得ないままだった。ソロモン七十二柱の魔神の名から取ったのだと聞いた――が、そんなもの彼にとってはどうでもいいことだ。

「……だるい」

冒頭のユリシーズとの言い争いですっかりやる気を無くしたサブナックは、のろのろと単身で任地に赴いていた。

仕事の内容はマフィア間抗争の制圧と取引現場の差し押え。そんなものは世の警察にでも任せておけば良い気がするが、そうも行かない。上からの命令は絶対なのだ。

本来はユリシーズと二人でつく予定の仕事を一人で行なうのはかなり骨が折れるだろう、とサブナックは憂鬱になる。ユリシーズのような“力”が無い自分には、なおさら。

――カーマロカと言う名の平和維持組織は、特殊能力を持った人間によって構成されている。

世に流れる、“煉獄”についての唯一の情報はそれだった。しかし必ずしも噂は本当とは限らない。尾鰭が付いている可能性は限りなく高いし、カーマロカのような非現実的な物ならばなおのことである。

実際カーマロカの構成員の中で“能力”と呼べるような特異なものを持っているのはほんの一握りだ。そして彼らは通常、一般人の前になど現れない。

――“煉獄”創始者である《ファンダルス》の一族、その直系の血を引く者達は。

「それにしてもなんだっていうんだ。誰だ、待ち人って」

サブナックの声は虚しく空に吸い込まれる。時は夕刻を回り、そろ

そろ世の“悪”が活動をはじめるだろう。
よくよく考えてみれば、カーマロカの屋敷に一般の人間が尋ねてくるはずがない。それ以前に、ユリシーズに外の知り合いがいるとも思えなかった――ハメられたか、と青年はぼやく。

「ユリシーズのやつ、覚えてろ」

認めたくない話ではあったが、あの少年の力無しで任務を遂行するのが難しいのは事実だった。サブナックは戦闘技術に長けてこそいたものの、少年に比べれば所詮常人のレベルでしかない――そこまで考えて、彼はふと立ち止まる。

「……ユリシーズはドン＝ファンダルスの親族じゃないよな……？」

誰もが知っている、あの少年のファミリーネームはルイン、だ。青年は首を傾げた。
今この組織に所属するファンダルスの血を引く人間は、首領（ドン）の息子にして早々に戦いの前線から離脱している“ダンカ氏”、そしてその子供にあたる次期カーマロカ総裁“継嗣殿下”――つまりは後継者だ――のみのはずである。
実は表立っては知らされていない、ドンの寵愛する少女もこの屋敷で暮らしていることをサブナックは知っていたが、彼女がファンダルスの血縁であるのかまではわからなかった。

「……おかしいな、何であいつ」

何故今まで不思議に思わなかったのだろう。
もちろん遺伝で無くとも“能力”を持っている人間がいることは想像できる。ただしカーマロカに於いて、ファンダルスの血以外の“力”が内部にあることは考えられなかった。

――煉獄はファンダルスの独裁だ。全世界から集めた手練達を、ファンダルスの暴力的なまでの能力で抑えつけて統治している。ゆえにファンダルスの血を持つもの以外は、全て“ヒト”であると決まっているのだ。

「あいつめ……」

サブナックはあの少年の出生も、家族の有無も、正確な年齢さえ知らなかったことを今更痛感した。
何処までも謎な子供だ。ユリシーズの従者など、二人とも能力者ではなかったか？
あのガキ、サブナックは一人毒吐いた。あの少年はやはり、腹の中に何かを隠しているに違いない。

ユリシーズのカーマロカでの地位は高い。ファンダルスの一族とほぼ同じと言っても過言ではないかもしれない。
そんな少年にサブナックが対等な言葉を掛けられるのは、彼の戦闘のスキルが一目置かれていて、ユリシーズと同等の立場で任務を行なうことが多いからである。

（――力が全てだ）

この世界は、きっとどこへ行っても。
サブナックは懐から煙草を取り出した。火を灯し、紫煙をゆっくりと肺の奥に吸い込む。
息を吐きだしたのと、彼の目の前に一人の少女が現れたのは同時だった。

第四章《慟哭》：ＡＮＯＴＨＥＲ　ＳＩＤＥ（１）

「こんばんは、お兄さん」
「……あ？　ああ、どうも」

何時から目の前に立っていたのか、その人影にサブナックは目を見開いた。柔らかな高さの声に話し掛けられて胸中首を傾げる。こんな場所に、どうして。
年の頃は十八前後だろうか。この荒れた裏路地にいるにしては不自然な、綺麗な身なりの少女だった。全身黒で統一された服。長いコートもその下から覗くスカートも、飾り気の無いデザインながら質の良さが見て取れた。その上を流れる長い髪、瞳の色も共に漆黒。
このまま闇に溶けて消えてしまいそうだ。
まさか声を掛けられるとは思いもしなかった、まずいな、とサブナックは思う。仕事の時間が近付いているのに。

「ねぇ、少しお話しない？」

少女は一歩ずつ、ゆっくりと青年のほうへ歩んで来る。やがてその足は、彼まで十メートルほどの位置まで来るとぴたりと止まった。
妙に開いた距離に居心地の悪さを覚えるが、少女のほうは気にする様子もない。透けるような白い肌、それを佩した細い手足だけが夜闇の中で鮮やかだった。

「ここで、何をしてるの？」
「あ――……そうだな」

丸い瞳がゆるりと瞬く。言葉を紡ぐ小さな唇はどこか幼さを感じる

のに、その黒の奥ははっとするほど妖艶だった。
少女の問いに生返事をしながらサブナックは頭の隅で思考する。ここはもうじき戦場になるだろう。この辺りを根城にするマフィア（ギャング団と言うほうが適切かもしれない）同士の抗争が起こるのはずいぶん前からわかっていたことだ。彼はその現場を押さえるために来ているのであって、このような少女を、一般人を巻き込むわけにはいかないのである。

「……仕事、みたいなものだ。君こそ何してる」
「私？　――うん、私もお仕事……かな」

小さく笑みを浮かべながら少女は言う。
そうかと相槌を打ちながらサブナックは、それとなく彼女をこの場から引き離せないか試みることにした。迂闊に真実は告げられない。彼の任務も所属組織も、極秘のもとに在るのだから。

「この辺りには何もないぞ。物騒なだけだ――早いとこ帰ったほうがいい」
「でも私、お兄さんとお話がしたいの」

彼の言葉に、少女は可愛らしく笑うだけ。
なかなか肝の座ったお嬢さんだ、とサブナックはひとりごちる。しかし彼には本当に、彼女の相手をしている時間はない。

「あー、何ていうか、あれだ。ここ危ないんだよ。悪いこと言わないから帰ったほうが良い。お嬢さんみたいな一般人の来るところじゃない」

いつ銃撃戦が始まるかわからない。サブナックは焦りを感じながらも、平静を装って少女を諭した。下手に真実を教えてれば、余計な

不安をあおってしまう可能性もある。

「お兄さんは危なくないの？」

「俺は仕事だ。悪いが忙しくなるんだ――付き合ってる暇はない。わかるか」

けして気の長いほうではない彼が決断するのは早かった。これ以上少女が居座るようなら、力ずくでも追い払う。

一般人は巻き込まない、標的以外に危害は加えない、それがサブナックの主義であり正義だった。暴力的だとしても正義を語り続ける、青年のなけなしのプライドがかかっている。

多少荒っぽくても仕方がない。サブナックはそう心に決めて口調を強めた。

「帰れ」

「どうしてそんなに急いでるの？」

「どうしても、だ。いいから早く、」

「大丈夫よ」

「駄目だ」

さらり、首を傾げた少女の黒髪が揺れる。幼さを残した輪郭に黒檀の糸が流れ落ちた。ぬばたまの瞳が静かに、音もなくサブナックに向けられる。それに射抜かれた瞬間、青年の頭に何かが過ぎった。

（何だ？）

自分はこの目を知っている。それはデジャヴュに似た感覚だった。何か思い出しそうな、何か似たようなことが以前にも。

この目を、どこか、で、

「……マフィアなら、来ないわ」

サブナックの思考が停止した。

薄紅の唇から零された、言葉の意味を理解するのに時間が掛かる。

「……、お前……何で知ってる」

「言ったでしょう？　私もお仕事だ、って」

クスクスと笑う少女がただならぬ気配を持っていることに、サブナックはここで初めて気が付いた。最初から異質な空気を纏ってはいたが、これはそんなものではない――背筋が、凍り付くような。

漸く悟った、瞬間もう手遅れであることに気付いて青年は自嘲気味な笑みを浮かべる。

（……ああ、酷いな）

目の前の少女が纏う、これは殺気だ。

禍々しい怒気と怨嗟の念の収斂した、確かな色を持って。

「……何者だ、お前」

低く、唸るように発された彼の言葉に少女が答えることはない。行儀良く指先を重ねていた手をすっと下ろし、彼女は改めて青年に向き直った。

「――言付けを、お願いしたいんです」

言いながら少女が一歩前に出たが、サブナックは動かなかった。ほんの僅かに縮まった距離の分、空気の重みが増したような錯覚に捕われる。

「……質問に答えろ」
「伝えてほしいことがあるの」

柔らかな笑みを浮かべたまま、少女は言葉を繰り返す。青年の主張は受け入れない、それは無言の拒絶だった。
何故、最初に気が付かなかったのだろう――サブナックは己の甘さを呪った。
考えてみれば何もかもが不自然だ。こんな場所にたった一人で、仕事、なんて。可能性があるとすればそれは、同業か敵かに他ならない。

「答えろ……！」

サブナックが声を荒げた瞬間、ひゅ、と風を切るような音が聞こえた気がした。
微かな空気の振動が耳に伝わる。それにサブナックが目を見開いた、刹那前方にいたはずの少女が青年の視界から消え失せた。

「……死にたくなければ」
「――――！？」
「そのまま、聞いてください」

驚愕と混乱で時を止められる。気が付いた時には、長い黒髪が彼の視界の端で舞っているだけだった。
少女がサブナックの傍らに立っている。あの距離を一瞬で詰められた、そう悟ったときには全てが終わった後だ。少女は上着のポケットに突っ込まれていたサブナックの手を、彼が密かに握っていた拳銃ごと押さえ付けていて。

「……っ」

やられた、と思った。こんな小娘に。

靡いた黒髪の香りが青年の鼻を擽った。シャンプーだろうか、その柔らかな芳香に混じった火薬と血の残り香。それに気付いて眉をしかめたサブナックに、少女は小声で囁く。

「下は見ないで」

「何を……、……っ！？」

ごぽ、と水が溢れるような音が聞こえた。その異常な気配に全身が総毛立つ。――サブナックの足元に、《何か》が存在している。ごぽり、ごぽりと音を立てながら《それ》はゆっくりと彼の足元に絡み付いた。軟体動物に触れられているような、触手が這い上がって来るような感覚。ゲルのような曖昧な弾力と僅かな水分、無機質な冷たさ。

「動いたら、殺します」

《それ》がゆっくりと脈打っていることに気が付いたサブナックの、背中を生温い汗が流れていった。生き物のように蠢いてぎゅうと足を締め付けられる、こんなモノがこの世に存在して良いのだろうか。体を強ばらせたまま抵抗することを放棄した彼に、よく聞いてね？　と少女は無垢な笑みを向け首を傾げてみせる。可愛らしい仕草とは裏腹な彼女の声の冷たさに、サブナックが気付かぬはずはない。

「――私が、人間を殺すのは」

暫しの沈黙の後、少女が口火を切った。サブナックよりずっと背の低い彼女が彼に密着する形になれば、自然青年から少女の表情は見

えなくなってしまう。

「“仕事”の時だけなの。私はその為に、ロヴの夢と目的地の為だけに在るから」

黒髪の少女の口から零れた、その名は聞き覚えなど無いものだった。慈しむように唇に乗せられた様子から、彼女の身内か恋人なのかも知れない。

真実などわかるはずもなく、また思考する余裕さえも与えられていないサブナックはただ黙って続きを促した。少女に気圧されないように、暗に自らを叱咤しながら。

「前は違ったのだけど。本当ならね、他にもいっぱい殺してたわ。いつも、たくさん。今もそうしているはずだった」

「……何の、話だ」

昔話よ、言って少女は笑う。いらないものは全てこの手で消してしまえた、まだ幼かった頃のお話。

「……でもね、約束だから」

「約束……、？」

「私怨や癇癪や、気紛れではもう殺さないって」

「……？」

「グラモアとの約束だから、大切な……私、守らなくちゃいけない」

グラモア。再び耳に入った見知らぬ名前をサブナックは口の中で繰り返す。何故だろう、彼にはその響きに覚えがあった。

よくある名前だとは言い難いが、けして珍しいわけでもない。聞いただけでは姓なのか名なのかさえわからないが、それでも彼はこの音を知っているような気がした。

サブナックは眉を寄せて空を睨み付ける。くそ、なんだっていうんだ一体？

「――だから。だから私は、『貴方の前には現れない』って伝えてほしいの」

「……誰に、だ」

話が全く見えなかった。少女の話も意味も、彼女が言葉を伝えたい『貴方』とやらも。

（――こいつも、）

こいつも同類だ。

サブナックは唇を噛み締めた。あの少年と同じ空気を持っている。何を考えているのかまったくわからないのに、はっきり見えるその闇は色濃く深い。こんな幼さを失い切れていない少女が、そうやって……そうやって。

「……まさか、お前……？」

ふと沸き上がったモノに青年は眉をひそめた。

待ち人がいる、と言ったユリシーズ。駄々をこねたサブナックのパートナーが執着していたもの。そして今、少女は何と言ったか？

（……“貴方の前には現れない”？）

まさか、と彼は思う。嫌な予感ほど良く当たるとは言うが、これほどまでにハズレていることを願ったことは未だかつて無かった。同時に、やはり、という確信めいたものまで感じてしまう。ユリシーズの待ち人とは、まさか。

「それからもう一つ――」

少女の言葉に青年の思考は再び途切れた。残ったのは、脚にまとわりつく異物の不快感。

「――もしも貴方がつまらない私情なんかじゃなくて、最初から“私たちの敵”として現れていたら」

少女が頭をゆっくりと持ち上げる。さらりと流れる髪や頬に影を落とす睫毛に目を奪われた。刹那、視線が絡め獲られるような錯覚を覚える。闇を閉じ込めたような瞳がサブナックを捕らえていた。いとけなさを残す、けれど怜悧なかんばせが彼を仰ぎ見る。逃げられない。

「……出会った瞬間に、殺してた」

「……ッ！」

戦慄が走った。再び全身が総毛立つような感覚に襲われよろめいた青年の、胸の辺りを少女がトンと叩く。するとふっと空気が和らいで、にこりと少女は笑みを向ける。

「ごめんなさい。貴方を殺すなんて嘘」

彼女がゆるりと一歩退くと、青年の脚を締め付けていたものが僅かにゆるんだ。相変わらずの水音のようなものに混じり、時折聞こえるのはぐずぐずと何かが煮崩れる音。不安を掻き立てるようなそれに、サブナックはまだ一瞬の油断も許されなかった。

「私は此処に仕事で来たけれど、貴方との接触は個人の行動だから

――殺せないの、本当は」

でもこうしないと、お兄さんは話を聞いてくれないと思って。申し訳なさそうに首を竦めてみせながら少女は笑う。

先刻迄の殺気は嘘のように消え去り、そこにいるのは一見常人と何ら変わらぬ彼女の姿だけだ。ただ、嵐の前後の細波を見ているような焦燥感だけは拭い去れなかった。

「二度と現れない。会わない方が、良い。だってもしまた出会ってしまったら、何するかわからないもの。……私がね」

「……」

「――伝えて、くださいね」

「……待、て」

凪いだ声で告げた後自分に背を向けた少女を、サブナックはやっとの思いで引き止めた。絞りだした声は情けなく擦れていたが、少女はそれに応えるように足を止める。

「お前が何者なのかは知らない」

サブナックは再びポケットの中の拳銃を握り締めた。静かに呼吸を整えながら、弾丸が篭められていることを確認する。

「……だが、一つわかるのは――俺はお前を、見逃すわけには行かない立場の人間だということだ」

言動からして、少女は恐らく裏の連中と何らかの関わりがあるのだろう。今日ここに来るはずだったマフィアと『仕事』として関係をもっている、その可能性は高い。即ちそれは――排除すべき、悪なのだ。

「ああ、なるほど……お兄さんは私の敵ってことね？」

少女の声が響く。

無言で肯定しながら、マフィア達はどうなったのだろうとぼんやりサブナックは考えた。仕事としてこの少女と関わった後、予定していた取引や予想されていた抗争は止めて引き上げていったのだろうか？

少女がくるりと青年を振り返ったことによって、思考の海に沈んでいたサブナックは引き上げられた。

小首を傾げた少女の淡く開いた唇から落ちたのは、ぞっとするほどに感情を失った。

「じゃあ、死ぬ？」

冷たい、声。

第四章《慟哭》：ＡＮＯＴＨＥＲ　ＳＩＤＥ（２）

凍り付いたのは空気だろうか、時間だろうか。死んでみるか、そう動いた小さな唇は今日の天気を問うように軽い。
先に動いたのはサブナックだった。逡巡の後、ゆっくりと拳銃から手を離す。一瞬で自由の聞かなくなってしまった手足に、これ以上何を命じようとも無意味だったのだ。
彼はその一瞬で悟っていた。否、気付くのが遅すぎたのかもしれなかった。
敵う相手では、ない。

「冗談だよ……貴方を殺しちゃったら、伝言してくれるひとがいないじゃない」

笑った少女は酷く綺麗だった。その儚い笑みに再びサブナックは既視感を覚える。体を内側から押しつぶされるような、この感覚。もう忘れてしまった、忘れようとしていた昔に。

（ああ、そうか）

なんて巡り合わせだろう。静かに呟いてサブナックは目を伏せた。この世のなんて無情なことか。目の前にいる少女の力は、彼女自身を滅ぼしてしまう強さだ。そうをサブナックが感じ取れるのは、彼自身が少女のような人間を過去に見ていたからだった。
そのまま目を閉じて想う。こんな風に諸刃の剣を掲げていた人間を、俺は。

「……お前の生き方は、間違ってる」
「何故そう思うの？」

少女のいらえは心底不思議そうだった。切なげに眉根を寄せたサブナックは、思い浮かんだ過去に思いを馳せる。
――彼にもかつて、カーマロカ所属を決定づけた出来事があった。“あの日”以来ずっと、彼は己の正義を信じて生きてきたのだ。それは祈りにも近い、ただ一つの。

「人には、進まなければならない道が――踏み入ってはならない道があるんだ」

今日まで彼を突き動かしてきたのはその信念だけだった。正直な話、カーマロカという組織自体に彼が特別な思い入れを持っているわけではない。彼が組織の中で関係を持つ人間といえば、ユリシーズぐらいのものだからだ。
説得の効く相手ではないだろう。わかっていてもなお、サブナックは言葉を止められなかった。少女の声を聞く度、その目を見る度に、悔いたはずの過去や消えたはずの痛みが止まることなく甦ってくるのである。
それは贖罪か懺悔か、わからなかったけれど。この闇色の少女を救いたいと思っていることに、青年は気が付いた。

「……考えろ。お前の生きている道は、本当に正しいか？　人間として、」
「正しくなかったら」

少女の唇が、美しい弧を描いた。長い睫毛に縁取られた瞳がすっと細くなる。

「それが、何？」
「……っ！　お前は……！」

自分は何をしているのだろうと頭の隅で青年は思う。このまま会話を続けるのは危険だとわかっていた。いつ少女の気が変わって、彼の命を奪わんとするかもわからない。

しかし彼には少女をこのままにしては置けなかった。過去の経験が、彼を突き動かしてきた後悔の念が言葉を紡ぐ。少女の道を正せと、彼に命令するのだ。馬鹿げた行動をしていることぐらい、とうに気が付いていた。

（……させて、たまるか）

サブナックは声を荒げる。なんとしても少女に、自分の話に耳を傾けてほしかった。

“あいつ”の二の舞を、させてたまるか。

「もう止めろ。こんな生き方をしていたって、人間は幸せにはなれないんだ……！」

「人間じゃないって言ったら？」

「人間だ！！　お前はこのまま一生こうして過ごすのか？　光の下に、戻ろうともせずに、ずっと、」

「ひかり、」

ことりと首を傾げた少女の、動きが不意に止まる。闇色の瞳がぐらりとひとつ揺らいだのを見て、しまったと思ったときにはもう遅い。サブナックに向かって、刺すように少女の声が弾けた。

「――光なんて、最初から無かった……！！」

路地裏いっぱいに響き渡る悲鳴じみた音、びりびりと震える空気。余韻を存分に残したそれがおさまり始めた頃、少女がはっとして叫

び声をあげた自らの口を塞いた。
サブナックはそのまま俯いてしまった少女の方へ歩み寄る。声を荒げたことなど久しかったのだろう、黒髪を揺らしてただ佇む彼女は、脆く儚く見えた。

（……どうして）

青年の顔が痛ましげに歪む。こんな少女が、どうして。どうしてこんなふうに、こんな世界で。

「……来ないで」

震える声にサブナックは歩を止めた。視線を向ければ、少女はこちらに自虐的な笑みを浮かべる。それは彼女が初めて見せる、感情の色だった。

「せっかく、我慢してるのに。来たら本当に、殺しちゃうかもしれないじゃない……」
「お前――」
「……本当は」

少女は笑んだ。無理矢理笑顔を作っているのが痛い程にわかる。切なそうに歪められた瞳の奥だけが、笑顔と同化しきれていなかった。

「本当は、すぐにでも殺しに行きたかった。初めて出会ったときに殺しておくべきだった。……なのに私は古い約束に縛られて、今を失うのが恐くて――そして大切なものを奪われた」

少女はそっと目を伏せる。閉じられた目蓋が僅かに震えていた。泣くのだろうか、とサブナックは思う。けれどその瞳から雫が零れ落

ちることは、終ぞ無かった。

「恨んではいないわ、悔しいだけ。だって私が弱かったせいだもの」

悲しいっていうのは、よくわからなかった。

言いながら少女が果敢なく笑う。だってわたし、にんげんじゃないの。

「人間って酷い生物だと思わない？　狡くて汚くて、いつも自分が綺麗で可哀想だと思ってる。弱いくせに蔓延って、まるで世界の中心みたいに振る舞うのよ」

それでも、と。か細く消え入りそうな声で。

「ヒトであれたら良かったと、考えたこともあった……」

「――なんで、」

何でそんな切ない笑顔で、そんなことを言うのだと。サブナックは叫びだしたい衝動に駆られた。まるで自分は本当に人間ではないかのような、そんな言い方を何故。

同時に、あの少年と出会った日のことを思いだす。目の前少女は皮肉なほどに、ユリシーズと似ていた。

――ねぇ、お前は僕が人じゃなくても、傍にいてくれる？

「馬鹿だよね。もうとっくに受け入れたつもりでいたのに――約束に縋っていたかったの。きっとまだ私は、『ヒト』でありたかった」

失うまで忘れていたのだ、と少女は笑った。彼女は笑みを崩さぬまま語る。

わたしには　このせかいがあるだけで　しあわせだったのに。

「光なんて最初からなかった。私には仲間と過ごしてきた闇だけが全てだった。それは私にとって光より、ずっとずっと暖かくて」

喪くしたくなんて、なかった。

少女は祈るような仕草で胸に手を当てる。何かをひどく悔いているように青年には思えた。

――覚悟は、できていたのに。そう呟いた声はあまりにも小さくて、サブナックまでは届かなかったけれど。

サブナックが黙りこくっていると何を思ったのか、今日は反省を兼ねて一人で来たのだと少女は告げた。

それに苦い視線をやりながら、彼女をこんなにも追い詰めたものは何なのかと青年は思考を彷徨わせる。

答えなど出るはずはなかった。けれど何とかして、彼は少女を理解したかったのだ。

「お前の生き方は、いつか自分に牙を向く」

「構わない」

少女は頑なだった。なんて、歯痒い。サブナックは唇を噛み締めながら思う。

（……もし、）

もしも、だ。少女の伝言の先が仮にユリシーズだとしたら。あの少年は、彼女に何をしたとのだろう？　少女の逆鱗に触れるようなことを何か、しでかしたというのだろうか。

そこまで考えて青年は再び唇を噛んだ。ユリシーズならばやりかねないと気が付いてしまったのだ。

「何が、あったんだ」

切れてしまったのか血の味がする口内から出たのは、余りにも陳腐な問いかけだった。それに少女はゆるゆると、静かに首を横に振る。

「何も」

「じゃあ、どうして……！」

どうしてそんな生き方をするんだ、と。問い掛けたその先で微笑む少女は、ただ悲しい影を落とした。

「――何も。何もないわ。この世界を変えるようなことは、何一つ」

その自らを嘲るような笑みにサブナックの胸が鈍い音を立てて痛んだ。

底知れない闇と強さ、純粋な脆さ。アンバランスなこの少女は、壊れかけた世界の縮図のようだと思う。

サブナックは淡い笑みを浮かべ続ける少女に手を伸ばした。そうせずには、いられなかったのだ。

「……やめて、」

少女の表情が一変する。鋭い眼光の奥で何かが震えた。

「……殺しちゃうよ」

「できないんだろ」

青年はその動作を止めなかった。止められなかった。

彼女はあまりにも悲しく弱い存在だと、漠然と彼は思う。これが自

分のエゴだとしても救ってやりたかった。そして少女は、何よりも似ていたのだ。
サブナックが遠い昔に失った大切な――――たいせつだった、ただ一人の。

「……来ないでって」

青年の指先が、少女の白い頬に触れる。

「――――言ってる、じゃない……っ！！」

――瞬間、何かが爆ぜたような音が響き渡った。
サブナックは咄嗟に少女から手を離しその場を飛び退く。同時に目の前から映像が消え失せた。

「――っ！　何だ！？」

出所のわからない衝撃に体を襲われて鼓膜が震える。同じくびりびりと振動を伝える空気。少女が居るであろう場所から煙が立ち昇り、視界が白く霞んでいた。次いで、焼け付くような熱と湿気が青年の喉の奥まで流れ込む。煙に触れた体の部分が僅かな水気を帯びた。
……これは、

「水蒸気か――？」

少女は何処にいるのだろう。サブナックは遮られた視界の中で必死に目を凝らすが、すぐにそれは無駄な努力だと悟る。仕方なく掌で煙を扇ぎ、なんとか視界を取り戻そうと躍起になった。そうしているうちに白い煙――霧と言うべきかもしれない――は徐々に薄くなり、やがてはっきりと辺りの物を確認できるまでになる。

「……何なんだ、一体」

開けた視界の中で、サブナックは目を瞠った。

――爆心地に少女の姿はない。今だに僅かな熱と蒸気を吐き出すそこにあったのは、クレーターの様に大きく陥没したアスファルトの地面だったのだ。ぬらぬらと光沢を放つその場所はまるで溶解し、蒸発してしまったかのような。

＊

「くそ……っ！　どうなってる」

悪態を吐くのは本日何度目になるだろうか。

あの後サブナックはいなくなった少女の行方を探し続けたが、彼女の姿は一向に見つからなかった。まさに文字通り、消えてしまったのである。

その代わりのようにただ一つ、サブナックが見つけたものがあった。

それは。

「……やられた」

少女と彼が話していた場所から百メートルも離れていない場所だった。

サブナックの目の前には今数十人分の骸が転がっている。無残に散らばっている多数の銃器や刃物は、“これ”が今日サブナックが押

さえる予定だったマフィアの一味で間違いないだろうことを示していた。地面に臥している死体は、揃いも揃って綺麗に腰から上が存在していない――サブナックは我が目を疑った。
切り離された胴と頭はどこにも見つからない、完全なる消失。人間の為せる業では、ない。

「何の冗談だ……？」

腰から下だけになった大量の死体は、普通の殺戮現場を目にするより数段グロテスクで悪趣味だとサブナック思う。仕事柄、人の死を目にすることが多い彼でさえ辟易してしまいそうだった。体の切断面が溶かされたような光沢を放っていることに気が付いてぞっとする。この溶解したようなぬめりは、先刻までサブナックがいた場所の、成れの果てに良く似ていた。

『お仕事……かな』

まさか、あの少女。
思い出してサブナックが驚愕に目を見開いたのと同時、彼の背後から突如凛とした声が響き渡った。

「――――驚いた？」

澄んだ少女の声。
瞬時に振り返ったサブナックを、鋭く透明な瞳が捉える。

「はじめまして」
「お前、は……？」

サブナックの探していた黒髪の彼女では、ない。現れたのは美しい

ブロンドに碧い瞳をした少女だった。服だけは黒髪の方が着ていた物と同じ、全身黒で統一されていたのだが。
突然の来訪者にサブナックは眉を寄せる。次から次へと、今日という日は一体。

「貴方、お名前は？」
「……何故聞く」

別に、と少女は口元を弛める。大きな瞳を縁取る長い睫毛のせいか、その顔立ちはアンティークドールを連想させた。
形の良い唇がうっすらと開かれる。隙間から、白く並んだ歯列がちらりと覗いた。

「私は、ミク」

ブロンドの少女は唐突に名乗る。それに反応を返せないまま、黒髪の少女の名を聞かなかったことを今更サブナックは思い出した。

「Ｍ．Ｉ．Ｃ．Ｋ．で“ミク”よ」
「“Ｍｉｃｋ”……？」

呟いて、青年は僅かに眉を寄せた。次いで脳内の記憶に検索をかけてみる。もう久しく聞いていないが、それは差別用語ではなかっただろうか。何故そんな名を。

「ねぇ、名前教えて」
「……サブナック」
「あら」

聞くと少女――ミクは、素敵ねと笑みを浮かべた。丸い硝子玉のよ

うな目がすっと細められる、その表情はあの黒髪の娘に良く似てる。

「序列四十三番、地獄の大侯爵ね」

「……関係ない」

苦い顔で答えながら、しまったとサブナックは思った。相手が名乗った手前つい名を明かしたが、つまりはまんまと乗せられてしまったのだろう。悔やんでも時既に遅し、である。

「気付いてると思うけど“それ”、あの子が殺ったのよ」

ミクはサブナックの足元を指差した。足元に転がる数多の死体。あの子、が誰を指すのか、瞬時に青年は理解する。

「……お前、仲間か」

「そんな感じ」

少女のヒールがコツリと音を立てた。それは路地の壁に反響し、やがて闇に吸い込まれてゆく。

「お前達は何者だ？」

「教えると思うの？」

クスクスと笑い声を零しながらミクはゆっくりと青年に歩み寄る。またこのパターンだ。サブナックは憮然とした表情を浮かべてそれを見ていた。今日は厄日だ、と心で呟きながら。

「本当に厄日ね。同情しちゃう」

少女の言葉にサブナックはぎょっとする。知らぬ間に声に出してし

まっていたのだろうか？

「ここにいるマフィアね、私達の組織をしつこく狙ってたの。今日ここに集まるって聞いたから、なら消させてもらおうと思って」

教えない、と言っておきながらそんなことをさらりと言うミクに青年は目を白黒させる。

（――組織？）

やはり彼女達は裏社会の関係者なのか。確信を得たサブナックは真直ぐにミクを見据えた。

「ルカは強いよ。殺されなくて良かったわね？」

「――ルカ？」

問い掛けるとミクはにこりと笑った。この娘もまた十代なのだろう、いとけなさを残した無垢な笑顔で。

「あの子の名前。貴方、知りたかったんでしょ？　大切な人に雰囲気が似てた？　喪った人間の面影は追いかけたくなるものよね。でも意外とルカはお喋りだから、“彼女”とは少し違うかも」

「……何、を」

何を、言い出すのだ。

サブナックは突如饒舌になった目の前の少女を凝視した。

何故ミクはそんなことを言うのだろうか。そんな、誰も知らないはずのことを。彼女の口に出した事は、ユリシーズでさえ知らぬはずのサブナックの過去だったのだ。

「お前、一体――」
「ちゃんと伝えてね、ルカからのメッセージ」
ミクはもう一度サブナックに笑いかけると彼の腕に触れた。細い指が彼の皮膚を滑る。
来るなと言い放ったルカとは違う、積極的に近寄ってきた少女の眼には考えを読み取らせない碧が漂っていた。
「ねぇ、私の名前覚えてる？」
「……ミク、だろ」
一体何のつもりだ、サブナック言い掛けたのを遮ってミクは続ける。
彼女の表情が視界一杯に広がった瞬間、サブナックは眩暈を覚えた。
「　じゃあ、今から全て忘れてくれる？　」
ぐわん、と声がこだまする。周囲の景色がぐんにゃりと揺らいで回転した。
少女は笑って、わらっていて、
――――それから？
＊
青年は一人薄暗い路地を歩いていた。暫らくの間黙々と歩を進めていた彼は、突然はたと立ち止まる。

（……？）

おかしい、と呟いた。今まで自分が何をしていたのか、全く思い出せないのだ。

今日はどうしてここに来たのだろう？　任務が入っていた覚えはないし、ユリシーズに買い出しを頼まれたような記憶もない。

「……夢遊病か？」

言ってみてから馬鹿馬鹿しくなった青年は、自らの居場所へと帰ることにする。衣服のポケットから取り出した煙草の箱の中身が、気のせいか減っているような気がした。

「あぁそうだ、ユリシーズに伝言が」

――あったはずだった、と彼はひとりごちる。

その内容ははっきりと覚えているのに、『誰からの』伝言なのかは全く思い出せなかったけれど。

（誰も知らない邂逅が一つ、永遠に失われた）

第四章《慟哭》：レクイエム

（――大好きなあなたへ）

「何してんだ？」

突然の声に駿が振り返れば、後ろには不良少年。脱色された髪とピアス、着崩した服はいつものことだ。厄介な奴に絡まれた、駿は嘆息する。

「うわ、シケたツラしてんなぁ。寝不足？　女不足？」

「……言うに事欠いていきなりそれか、ハル」

思いきり顔をしかめた駿を見て、日向ハルは煙草を加えた唇をにかりと曲げてみせた。
それを見て唐突に、なんだか平和だと駿は思う。――ハルが日本遠征組の一員として“殺人鬼”の疑惑をかけられていたのは、もう一月も前の話だ。今やルシファーはその傷跡を感じさせる事無く、完全に復興を遂げている。進んだ、のだろう。今更確認するまでもなく。

「聞いたぜシュン。お前次の任務決まったんだろ」
「……まぁな」

同年代であるハルは駿にとって、“仲間”よりは“悪友”に近いカテゴリーに分類される人間である。任務が入ったからといって特に別れを惜しみあうような間柄ではないし、それが自分たちには合っていると思った。
駿は自らの足元を見下ろす。古びたトランクと散らばった服、それから任務の詳細書。彼は今まさに次の任地への荷造りをしていたのだった。

「ま、頑張れよー。せいぜい学の無さを曝さねぇように。むしろ曝せ」
「うっせ。中卒のお前には言われたくねぇよ」

憮然とする駿を見てハルはからからと笑う。次の任務に赴くのは、実は駿ではなくハルでも構わなかった。最終的な決め手となったのはハルが遠征続きになってしまうということと、ほんの少しの“学”の差だ。たといどんぐりの背比べであろうと、駿のほうが僅かに適応の可能性があったのである。

「シュンは高校中退だもんなー。俺よりゃマシか」

「……うるせェよ」

ハルはもう一度笑うと、懐から煙草を一箱取り出して駿の手に押しつけた。なんだよ、と駿が眉を寄せて首を傾げる。

「餞別」

「いらねー……」

「俺の元気のモトを分けてやるつってんだから。素直に受け取っとけ」

「……お前ぜってー肺癌になんぞ」

俺吸わないんだけど。

呟く駿の肩をぽんと叩き、ハルはそのまま背を向けた。駿に向かってひらひらと手を振りながら彼は言う。

「妹に会えると良いなー」

「……。」

言葉に詰まる彼を見て、ハルが内心ほくそ笑んだのは言うまでもない。これでまたしばらくはシスコンをネタにからかう事が出来るだろう。

駿が自らの失態に気が付いたときには、不良少年は既に部屋から出ていくところだった。

＊

「ねぇジェミニカ。ルカ、知らない？」
「さぁ……？」

問われたジェミニカはサバイバルナイフの手入れを止め、声の主を見やる。ミクは小さく溜め息を吐くと困ったように笑った。

「こんな時にどこ行っちゃったのかしらあの子。そろそろ――」
「……“学園”ね？」

ミクは小さく頷いた。察しの良い彼女は、ミクがみなまで告げずとも理解しているようだ。

「ようやく“ツネヒコ”を捕獲する算段が整ってね。やっとけりをつけられるわ」
「その話なら私にも来たけど。まさか学園だったとはね……」

灯台下暗し、なんて言葉がどこかの国にあったはずだとジェミニカは思う。長年ルシファーから逃げおおせてきた一人の男を誉めてやりたい気分だった――よくもまぁ何年もの間、身を潜めていられたものだ。

「まぁ、学園にいるのは本人じゃないかもしれないんだけど」
「あら、そうなの？」

外回りの多いジェミニカは最近本部に帰還したばかりで、幹部といえども詳しい事情には精通していなかった。実働派である彼女にとって、この際詳細はどうでも良い。きっちり仕事をこなせるか、が重要なのだ。

「頼りにしてるわ、ジェミニカ」
「了解……でも」
私本当は小学校の教師なのに。
ぼやくジェミニカに、仕事だものとミクは笑った。次の任地へはルシファーの主力を総動員する。それ程に重大なものを、“ツネヒコ”が握っているのだから。
取り返さなくては、ならない。
「そう言えば気になる噂を聞いたのだけれど」
「うん？」
ふとジェミニカが声のトーンを下げる。つられてミクも小声になった。
「――“オミナエシ”が出たって」
神妙な言葉にああ、とミクは頷いた。そちらもそろそろ片付けなければならない問題だ。相手の出方次第だが、ことによってはあのカーマロカ以上の脅威になり得るだろう。その為にも、ツネヒコの件は早く片付けてしまいたい。
「まだ確信はないけどね。動いただの覚醒しただの、噂だけは聞くようになったわ」
「……チトセちゃんは」
「本物ね。でも、本人は知らない」
可哀想な子、とジェミニカは呟いた。因果な娘だ。生まれながらにしてそれを背負っている。

（……黒沼）

まさかとは思っていたけれど。ひとりごちてジェミニカは眉を寄せた。あの子供がそうならば、あの土地の話も単なる伝説ではないということか。

「ロヴはオミナエシと片を付けたがってるから、現れてくれても問題はないわ」

「でも」

「大丈夫。――あの子を失う気なんて無い」

「……そう」

ジェミニカが安堵したように笑ったのを見て、ミクも小さく笑みを返す。やることは山積みだ。本当に、こんな時にルカはどこに行ってしまったのだろう。

「邪魔してごめんね、ありがとう」

「いえいえ」

ひらひらと手を振る、金髪の少女は気丈そのものだった。踵を返して立ち去るミクの後ろ姿に目をやって、ジェミニカは小さく呟く。

「……もう、仕事なのね」

ルシファー初期メンバーの女が死を迎えた出来事は、まだ記憶に新しい。

彼らの深い絆を知っているだけに、例の一件についてのあまりにも淡泊な対応は、ジェミニカにとって釈然としないものがあった。

でも、心のどこかではわかっているのだ。きっと、それは。

「どうした」
「ルカにちょっと、ね――いないわね……」

ジェミニカのいた部屋を後にしたミクは、〈ハングマン〉に与えられた私室へとやってきていた。しかしそこに居たのは僅かに驚いた様子のエヴィルだけで、ルカの姿はどこにもない。
一方通行だ、とミクは思う。ルカはいつも組織員全員の居場所を把握しているのに、当の本人は決して自分の居所を知らせようとしないのだ。
――いつか彼女は消えてしまうんじゃないだろうか。独りきりで、誰にも知られる事無く。
ふと浮かんだ嫌な考えを掻き消そうとミクは首を横に振る。疲れたようにソファーに腰を落とした彼女を、怪訝な目付きでエヴィルが眺めた。

「用なら俺が伝えておく」
「ううん。自分で言う」
「めずらしいな。いつも面倒臭がるくせに」

心底不思議そうな表情のエヴィルに、ミクは小さく笑う。どうも今日の自分は、らしくないことをしているようだ。

「心配してるのよ、これでも」

苦笑混じりに言えば、そうかとエヴィルのいらえが返った。何を、とは彼は聞かない。

「――ルカが接触した男の名は“サブナック”……十中八九、カーマロカの組織員だったわ」
「……ああ、お前も行ったのか」
「事後処理にね」

ソファーに身を沈めたままミクは頷いた。
ルカの仕事は確実だが荒い。一般的な常識や倫理道徳がやや欠落した彼女は、“仕事の証拠を残さない”という考えを持ち合わせていないのである。
事後処理と称してミクがルカについてまわるのは、そのほうがずっと後が楽だからだ。余計な敵を増やさずに穏便に事を終えるには、目立ったことはしないに限る――面倒事が起きたら起きたで、ルカにとっては何の問題もないのだけれど。

エヴィルはその話にさして興味を示していないようで、適当な相槌を打ちながらミクの隣に腰を下ろした。
お互いの顔が見えない、会話をするには不自然な位置関係だ。意図的なものなのか、そうでないのかはわからない。

「……ねぇ」
「なんだ」
「悲しい？」
「お前は？」

質問に質問で返されたミクは憮然とした顔で黙り込む。二人とも、何が悲しいかなんて、言わなくてもわかっているけれど。

「それは……まぁ。ユリシーズとやらがちょっかいかけてこなければ、サンドラはまだ大丈夫だったのよ。あれはサンドラの望んだこ

とじゃないって思ったら、悲しいじゃない」
「そうだな」
「……」

さらりと答えるエヴィルを迎え撃ったのは沈黙。確認せずともわかる、横の少女は今青年を睨み付けているに違いなかった。

「……悲しんでるように、見えないんですけど。死んだんだよ？」
「悲しいさ」
「見えない」

思わずハァと溜め息が零れた。この少女が何を言いたいのか、エヴィルにはさっぱりだったのだ。フェアじゃない、と青年は思う。ミクは望みさえすれば、相手の考えなど手に取るようにわかってしまうというのに。

「でも結末は、あいつの望んだ通りだろ」
「それでも」
「……」

お前な。

僅かな怒りを滲ませても少女は怯まない。それどころか断固とした気配を崩さないミクに面食らって、エヴィルは諦めたように呟いた。

「どうしたら悲しんでるように見えるんだ」
「……泣いてみれば？」
「お前は泣いたのか？」

再びの質問返し。黙り込んだ少女に青年がちらりと目をやれば、不貞腐れたように俯いてしまっていた。

エヴィルは小さく溜め息を落とす。泣く、なんて。

「……泣いて、ない」

そう、ぽつりと零した少女はいつもより数段幼く見えた。泣いてないんじゃない、泣けなかったのだとその横顔が告げている。

「悲しければ泣けばいい、なんて誰が言ったのかしら。泣き方がわかんなかったらどうすれば良いの？」

「俺に聞くな」

零された少女の吐息は憂いを含んでいた。この娘に、こんな表情は似合わない。

「あたしたち、いつからこんな風になっちゃったんだろう……」

「……最初からだ」

物心ついてから泣いたことが一度だってあっただろうか、とエヴィルは考える。

少なくともロヴと出会ってからは一度だって涙を流していなかったし、同時に仲間達のそれも見ていなかった。

「あたし、悲しいっていうより――悔しくて」

「……何故」

「どっちにしろ間に合わなかったかもしれないけれど。でももし、サンドラの異常にもっと早く気が付いてたら……あたし、だけだったのに……」

「――仕方ないだろう」

ミク、だけだったのだ。この組織の中で、サンドラを操作する力に

対抗する術を持っていた能力者は。他者の心や記憶に介入できる特異なモノ――ただしそれはまだ発展途上で不安定、実際に通用したかどうかもわからなかったけれど。
サンドラの“リミット”が来てしまえば、どちらにせよもう手遅れだった。それでも悔しいと、ミクは言うのだ。

「あたしにしか、できなかったのに……」
「ああ」
「……悔しい」
「そうだな」

もう、無力だった幼い自分達ではないはずだった。無作為に奪い奪われて生きていた過去とは違う、自らの周りの物ぐらい守れるだけの力を手に入れていた。手に入れていた、はずだった。
だから余計に悔しいのだとミクは思う。涙を流せない自分も、感情を出さない隣の青年も、何だか全てが腹ただしい。

「ロヴだって泣かないわ。馬鹿よね、誰よりも仲間のこと大切にしてたくせに。ルカだって――ルカ、だって」

握り締めた少女の拳が色を失っていた。力を入れすぎたのだろうか、血の気の無いそれは蝋のように白い。

「ルカが、きっと一番辛い」
「……そう、だな」

同じ返答しかできない自分に嫌気がさしながら、エヴィルはただミクの隣に座っていた。この少女がこんなことを言うのは珍しい。激昂することはあれど、その他の感情は滅多に表に出さないのが彼女なのだ。

「ルカもいつか、きっと消えてしまうの」

――ましてやこんな、弱音。

慰めたことなどないからやり方などわからない。ただ大丈夫だと、エヴィルは隣には目をやらずにミクの頭に手を乗せた。子供扱いしないで、と隣から抗議の声。

「大丈夫だ。あいつがグラモアとの約束を守っているうちは、まだ。――大丈夫だ」

「……“まだ”なのね。やっぱり」

影を落としてしまった少女の表情でエヴィルは自らの失言に気が付いた。やはり駄目なのだ、他人に気を遣うなど向いていない。ましてや慰めることなんてできるはずが。

「……あたし、知ってるんだからね。〈ハングマン〉は最後には――」

「……っ、もう、良い」

青年は少女の言葉を断ち切った。もうやめろと言ったその声音には懇願の色が交じっている。

彼らはまだ他人に踏み込まれてはならない領域を持っていた。幼い頃から時を共にした彼らだけがわかる、暗黙の了解だ。まだ知らなくていい。だってこの組織は、まだ進んでゆけるのだから。

なんて不器用なんだろうとエヴィルは思う。自分達は生きることがあまりにも下手だ。はじまりの時点から大きく道を間違っていたのだから当たり前なのだが、それにしても。まったく成長できていない気分になるのは何故だろうか。どうしてこんなに、無力な気がするのだろう。

「全くだわ」
「……読むなよ」
「ねぇエヴィル」
「無視か」

青年の隣で、少女が僅かに震えていた。エヴィルはミクを見ない。ミクもエヴィルを見ようとしない。けれどお互いの様子など、その場の空気でわかってしまう。

「……やっぱ、泣いて」
「……無茶を言うな」
「泣いて」
「無理だ」
「無理でも」
「お前な」
「――泣け！」

鈍い音を立ててエヴィルの脇腹に横から拳が打ち込まれた。青年が顔をしかめる。咄嗟に身構えたお陰で痛みはないがスピードは十分、常人なら悶絶するのではないだろうか。
理不尽な攻撃を繰り出したミクにガキかと呟く。それからエヴィルはもう一度、ミクの頭に手を乗せた。少女は今度は一言も喋らず、されるがままになる。エヴィルはそっと、ほんの少しだけの笑みを浮かべた。

「……なんだ、お前。泣けるんじゃないか」
「……」

エヴィルに頭をがしがしと掻き回されながら、ミクは黙って涙を流

していた。嗚咽を堪えて震える肩、ぱたぱたと落ちる雫。
言われたミクはぎゅうと目を閉じてみる。そっと自らの瞳に指先を当てて、水分を感じるとそのまま顔を歪めた。

「……ひどい、わ、」
「何がだ」

ひどい。もう一度少女は呟く。泣かなければいけないのだと、押し潰されそうな義務感を抱いていたのに。
それでも流されることの無かった涙が今こんなにもあっさりと溢れたことに、感じたのは酷い虚無感と無常だけだ。
なんて、ひどいんだろう。こんな、こんなの。

「こんなの、嫌」
「何が」
「こんな……っ、あんたも、泣いてくれないと」
「……あ？」
「あたしばっかり、弱い、みた、いじゃない！」

理不尽なことを言っているのは、自分でもわかっていたけれど。
泣くという行為がこんなに大変だなんて知らなかったと少女は思う。
溢れだした涙は止まる事無く、まるで気管にまで入り込んでしまったように呼吸の邪魔をしていた。止め方もわからない。
ミクは思い通りに行かない体に困惑しながら息を吸った。まるで自分の体じゃないみたいだ。頭の芯が熱を持って痺れている。

「……下手なんじゃないのか、泣き方」
「うるさいっ」

幼い子供のようにごしごしと目を擦り、ミクはエヴィルに背を向け

る。このままでは赤く腫れてしまうだろう。
情けない。恥ずかしい。そして悔しい。こんな自分を見せてしまったことも、やはりエヴィルが泣かないことも。代わりに泣いてあげられるような優しさも余裕も、今の自分が持ち合わせていないことはわかっていた。

「――弱いわけじゃ、ない」

青年の低い声。彼にしては珍しい穏やかな声音がミクの思考を途切れさせる。

「他人に弱さを見せられる奴は、本当は強い」

言ってエヴィルは思いを馳せる。例えば感受性に富んだあの大男は、仲間の前でも惜しげなく涙を流すことが出来るだろう。現にレックスはひとしきりサンドラの死を悼んだ後、誰よりも早く笑顔を見せた。あれは仮面ではない、彼の強さの証だ。
エヴィルはもう随分昔から彼のことを見てきている。レックスには青年のような特異な能力は無かったが、サンドラと共に彼らと生き抜いた力があった。自分にはないモノを持つ彼を羨んだこともある。それがある種の強さだと気が付いたのは、実は最近のことだった。

「お前は不器用なんだ」

それだけだ、と青年は呟いた。本当は目の前の少女より、ロヴやルカや自分自身のほうがずっと弱く臆病なのかもしれないと。
ミクは赤く充血した瞳でエヴィルを見つめる。冷酷無慈悲で残虐で、いつも無愛想なこの青年が優しいことを彼女は知っていた。本人がそれを自覚していないことも、自分が酷く悲しんでいることにさえ気付けていないことも。

「あんたのそういうところ、昔から大嫌いよ」
「そうか」

唇を噛み締めた少女の瞳からもう一度涙が零れた。小さな粒は重力に逆らう事無く床に落ち、深紅の絨毯に吸い込まれて消える。
濃い染みになって残ったその場所に二人はそっと目をやった。
サンドラの、ピアスの色。

「あたし、サンドラが大好きだった」
「ああ」
「大好き、よ。今も、ずっと」

お互いに力強く頷いた、それを合図に青年がソファーから立ち上がりミクの腕を掴んだ。そのまま力強く上に引き上げる。
部屋の中に、どこからか僅かな芳香が漂ってきている。微弱な気配にさえ聡い二人はそれにとうに気が付いていた。鼻先を擽るそれはきっと煙の香りだ。何だか無性に——言葉では言い表わせない、そんな気持ちにさせる。
道しるべ、この先の。

さぁ、進もうか。

＊

「……あれ？　ミク、エヴィル、何してるの？」

ルシファー本部の最上階から、渡廊下を越えて更に上へ。するとそこには『危険立入禁止』の屋上が広がっている。柵はなく、足を踏み外せばもれなくこの世に別れを告げることが出来る場所だ。
ここは初期メンバーである六人の憩いの場である。だった、というべきか。月を一望できるここに、昔はよく六人で何をするでもなく集まった。まだ幼かった彼らの拠り所は、時が経つにつれて忘れ去られてしまったけれど。ミクもエヴィルもこの場所に足を踏み入れるのは随分久しぶりのことである。
そして今そこには、長い黒髪を風に揺らす少女が一人立っていたのだった。

「こっちの台詞よ、何それ？」

探してたのよ、とぼやきながらミクは彼女へと歩み寄った。憮然とした表情になってしまうのは怒っているからではなく、先程までの自分の行為へのばつの悪さと、ルカが見つかったことへの安堵のせいだ。
ルカは手に持った細い棒のようなものに火を灯し、そこから生じる煙が風に乗って空気中へと流れていた。

「何って……えっと、お線香？」
「オセンコウ？」
「うん。何かね、日本にはこういう風習があるんだって」

一体誰に吹き込まれたのだろうか。ルカの行為は彼女達にとって到底馴染み無いものだった。恭吾か千瀬か、はたまた月葉か。ルシファーには多数の日本人が所属しているのでわからないが。
辺りには線香の不思議な芳香が満ちていた。何だか胸の奥が疼くような気がしてミクは眉を寄せる。腕を組んで後方から少女達を見て

いたエヴィルは静かに瞳を閉じた。酷く時間の流れがゆっくりだ。たまには、こういうのも悪くない。

「信じる神様なんていないけど」

ルカは線香を床に置いた瓶に差し入れる。柔らかな煙が強い風に吹かれて拡散した。火は消えていない。じりじりと、静かに燃える。

「サンドラが、迷わずに逝けるように」

ミクは空を仰いだ。もう一度涙が流れてくるのかと思ったが、その気配はすぐに消えていった。煙の行く先は見えない。ミクは手を握り締め、努めて明るい声をあげる。

「皆、どこに逝くのかな」

ルカがきょとんと目を開いた。死んだ後のことなど深く考えたことがなかったのだ。

けれど、“無”ではないと少女は思う。どこかに辿り着ければ良い。そうしなければ、もとより弔いなど意味をなさないのだ。

例え弔いが残された側を慰める為の行為だとしても、そんなもの彼女達には必要ないのだから。

「……天国、とか？」

「そんなところ逝けるのか、俺たち」

薄く目を開けて呟いたエヴィルに、あはは、とルカは笑いかける。それもそうだ。天国なんて似合わない。神なんて望まない。

「じゃあ、地獄が良い。皇帝ルシフェルが支配してるんだもの」

ルカはもう一本線香を取り出すと火を灯し、ふっと息を吹き掛けた。
途端に白い煙が立ち昇り、輪郭を崩して溶け消える。少女はそれを、屋上から下へと放物線状に投げ落とした。

「サンドラは待っててくれるよ」

それはみるみる小さくなった。ゆらゆらと溶解する、細い命にも似た糸を引いて。弧を描いた煙が見えなくなっても、その芳香はいつまでも辺りを漂っていた。

「私たちが、堕ちるまで」

ぬばたまの瞳がゆるりと瞬く、前を見据えたかんばせの、その先を知っていても。
最果ての夢を見たあの日から、目指す場所は変わらない。
ただ一つ、それだけを心に誓った。

（不器用に生き延びる私達から）
（この鎮魂歌を贈ります）

ありがとう、

ありがとう、

さよなら。

大好きなあなたへ。

第五章《迷霧》：孤島の檻（1）

朔月の晩だった。星の瞬きが僅かに届いて反射した、穏やかな波を一隻の船が割る。低いエンジンの唸りを上げて進む、それはまるで意志を持った生き物のようだ。

その甲板上にはいくつかの人影が点在していた。揃いの黒い衣服に身を包んだ彼らは、背丈だけはてんでばらばらである。そのうちの一人、まだ幼さを残した少女が困惑したような声を上げた。

「……なんですか、これ」

「制服」

答えた声は何故か憮然とした響きを帯びている。良いから持っとけ、言って声の主はそれを少女の腕に押し込んだ。それで何かを悟ったのだろう、少女が驚いたように目を見開く。

「む、無理！　聞いてない……！」

「文句ならロヴに言えよ」

「無理だってば！」

「……ねーまだ着かないのぉ？」

横から割って入った別の声に、制服の入った袋を押し付け合っていた二人ははたと顔を上げた。振り返れば銀色のツインテールが船の照明に照らされている。退屈そうな表情の目蓋は眠気のためか、半分落ちてしまっていた。

「お前はさっきからそればっかだな、ローザ」

「だって暇なんだもん」

ふわぁぁ、と大きな欠伸を零す少女に苦笑を洩らしながら、少年が一点を指差した。見てみろよ、そう言う彼の指先には果てしない水平線が美しく伸びている。しかしその中央に、今までは見えていなかったものが現れていた。
山のような形が浮かび上がる凹凸の影は、そこに陸がある証拠だ。水面から突き出した小さな島が、船の前方に浮かんでいる。

「……もう着くぜ」

彼らを乗せた船は、真直ぐに孤島を目指して進んでいた。

――エリニュエス＝グロリア。

誰も知らない、その場所の名。

（グローリア！　グローリア！）

（貴方の生と死に栄光を！）

朝日の匂い。
柔らかな陽光がカーテンの隙間から差し込んでいる。時計のアラーム、小鳥の囀り、ルームメイトのシャワーの音。何の変哲もない、いつも通りの朝だ。
体温でぬくまった心地よい布団の中で少女は身動ぐ。寝返りを打つのと同時に、古くなったベッドのスプリングがぎしりと軋んだ。薄めを開けて光を取り入れようとしたが、眩しさに負けて直ぐに閉じてしまう。
まだ、起きたくない。

「さなァァ！　シャワー壊れた！！」

ばたぁん、けたたましい音を立てて寝室に飛び込んできた相棒のお

陰で一気に目が覚めた。
え、ホントに？　寝呆けた声で問えば相手は勢い良く返答する。
「マジマジ、どうしよう水しか出てこないてか寒ィんだけど死ぬ！」
「服着れば……」
もそもそと布団の中で再び身体を捻って、それから思い切り伸びをした。今日もまた、同じ事を繰り返すばかりの一日がはじまるらしい。
賑やかなルームメイトに急き立てられるようにして、五十嵐（いがらし）沙南（さな）は起床した。

＊

シャワーの不調を知らせるべく訪ねた先で寮長は不在、仕方なく沙南はルームメイト――名を愛、という――と連れ立って朝食をとりにやって来た。
普段閑散としているはずの朝の食堂は、今日に限って賑わいを見せている。不思議に思って首を傾げた沙南の横で、あぁ、と愛が呟いた。
「今日って“入れ替え”の日なんじゃん？　ほら、寮長が集まってる」
「あー……」
そういうことか。沙南も頷いて席に着いた。

彼女達の通うこの“学園”は全寮制にも関わらず、人の出入りが酷く激しい。どんな時期でもどんなに複雑な事情を抱えていようとも、莫大な入学金さえ支払えば入学可能だということは誰もが知っている事実だった。三ヶ月に一度は今日のように、新入生を迎え入れる“入れ替え”の日がやってくる。勿論出ていくことだって可能だ。行き先があれば、の話だが。

「また入ってくるんだ」

「そーいや今回は多いって噂が」

「へぇ」

愛から与えられた情報に沙南は目を丸くした。今までは多くとも、一度に三人程度だったのに。

一言で言ってしまえば、“学園”は特殊だった。

頻繁な入れ替えのせいで全生徒数ははっきりしないが、三棟ずつの女子寮と男子寮からなる“箱庭”と学園の本校舎が学生達の生活の全てだ。沙南は場所を知らないが、何処かに教師用の宿泊施設もあるらしい。

生徒の年齢は主に十五歳から十八歳（高等学校生の一般年齢）だが稀に、そこに当てはまっていない者も存在する。下は十二から上は二十過ぎまでと様々だ。そのせいか学習カリキュラムも特異で、生徒は自ら学びたい授業を選択する形になっている。

入学方法は二種類――先ほど述べたように入学金を積む方法の他に、“特別選抜”と呼ばれるものがあった。実は沙南も愛も、この選抜生である。

言うなれば一芸入試だ。

こちらの枠で入学したものは、入学金授業料、寮での生活費その他諸々全てが免除になる。片親で金銭的に苦しく、進学を諦めていた沙南にとってこの話はありがたかった。大学受験に向けて勉強を進

めておけば、そちらの費用も学園が援助してくれるのだという。沙南がここに入学した理由など、ただそれだけなのだけれど。

「あ、うちの寮長みっけ」

愛が指差したほうを見れば確かに、見覚えのある顔が座っていた。寮長は各棟に一人ずつ、計六人存在する。沙南の所属する第四棟（前半三つは男子寮だ）の寮長は日本語の達者な外国人だ。銀色の髪が一際目を引いている。

――“学園”には様々な国籍の持ち主が在学しているが、約六割は日本人だ。よって日常会話も殆どが日本語である。

日本人が多いのは当たり前、何故なら“学園”の所在地は日本ということになっているからだ。けれど沙南は、それに疑いを持ち続けている。

こんな場所が、日本だなんて。

――この“学園”は、名も知れぬ海上に浮かぶ孤島の上に建っている。

否、正しくは、孤島そのものが“学園”なのだ。

電波が届かないからテレビも携帯電話も使えない。船が無ければ島を出ることさえ出来ない。申し訳程度に花は咲くが、四季を感じるほど温度の変化は訪れなかった。この島が日本の領地であると、誰が説明できるだろう？

「沙南、食べんの遅い」

「……ごめん」

食べかけになっていた朝食のメニュー、クロワッサンを喉の奥に押し込みながら沙南は思う。

この島は異空間なのだ。海に囲まれた孤島の中で、“学園”という一つの世界が完成している。
この檻の不自然さに気付かぬ者はいないだろう。けれどそれに異論を唱えたり、脱出を試みる人間が現れないのは、皆他人には言えない理由を持っているからだ。
たとえ軟禁状態であっても、外部との連絡が一切取れなくても。この場所がなくなっては、困る理由が。

「ほら、ロアのとこ行くよ」
「ん」

寮長の名を呟いて愛が立ち上がる。沙南はこのルームメイトについてでさえ、名前と年齢と特技くらいしか知らない。お互いの詮索は一切しない、それが此処の暗黙のルールだから。

（あと、一年ちょっと）

一般的な高校に通うのと同じように四月に入学した沙南は、三年経てば此処を出て日本の大学に進学する。入学してからもうすぐ二年になるが、卒業まではひたすらこの島で毎日を過ごさなければならない。

「……無事に過ごせるかな」
「何か言ったァ？」
「べっつにー」

退屈なだけならばまだ良い、平和な証拠だからだ。でもこの“学園”は、普通じゃない。
沙南はそっと息を吐いた。日頃から抱いていた嫌な予感が的中することを、この後彼女は知ることになる。

＊

東海林愛（しょうじあい）は類い稀なる運動神経をその身体に持ち合わせた、スポーツ万能の少女であった。特に力を発揮するのがバスケットボールで、この“学園”へもその腕だけで入学を決めたほどである。勿論この島にいるのだから、一筋縄ではいかない事情あって故の決断だ。

毎日の朝練をこなしている彼女は、練習後のシャワーも日課としている。本日はそのシャワーに謎のトラブルが発生した為にルームメイトを叩き起こす結果となったのだが、お陰で二人共いつもより早い朝食にありつくことができた。

よって今の愛は至極機嫌が良い。身体が資本だと公言して止まない彼女である、沙南が呆れたような目で見ていたが気になどしなかった。

「絹ちゃん発見！　モーニン！」

勢い良く開けた扉の先、一限の教室に見知った姿を見つけた愛がハイテンションで挨拶する。続いて扉をくぐった沙南もその目で相手を確認した。

並べられた椅子と机の中央辺り、行儀良く腰を下ろしている少女は半年前の“入れ替え”時に入学した生徒だ。名を、鮎村絹華（あゆむらきぬか）と言う。

黒目がちの瞳に白い肌、おかっぱ頭の組み合わせは今時珍しく、着物を着せてしまえば日本人形そのものだろう。

入学以来真面目に授業に出ている絹華は、すぐ愛や沙南と親しくな

った。固定のクラスを設けない“学園”では寮が一緒だったり、同じ授業に出ない限りは他人との交流が無い。そう言う意味で絹華は、二人の貴重な友人であると言えるのだ。

「ね、今日のお昼一緒に食べよ」

朝っぱらから昼食の話を振る愛に、沙南と絹華は苦笑を洩らす。うん、と頷きながら絹華はここには居ない者の名前を上げた。

「ミドリとカオルも来ると思うよ」

「あ、じゃあちょうど良いや。ロアも誘ったんだ」

シャワー壊れちゃってさぁ、さっき修理申請頼んできたんだよね。朝の顛末を説明しながら愛が笑う。それに相槌を打ちつつ沙南も口を開いた。

「じゃ、今日は“あれ”のメンバー揃うね。ロアがモモセを連れてくるって言ってたから」

「わぁ」

絹華がぱちぱち手を叩くのと同時、漸く始業のベルが鳴った。

第五章《迷霧》：孤島の檻（1）（後書き）

第五章突入です。もう暫らくのお付き合いをいただければ幸せに思います。

第五章《迷霧》：孤島の檻（2）

播磨亮平（はりま りょうへい）はぽかんと口を開けた。

寮の集合区“箱庭”の中央、事務連絡などが貼り出される掲示板の前である。いつものように朝食後、掲示を確認にやって来た彼はそこに“部屋替え”の知らせを見つけて驚愕した。

二人ないしは三人の形で相部屋となるこの寮では、部屋割りの変更は珍しいことではない。生活のリズム、性格面の問題など理由は様々だが、希望を出せば簡単に変更のきくシステムになっている。ただ、今回はその数が異常だった。

部屋割りが変更になる部屋は全部で二十五、亮平の所属する第二棟のほぼ全てだ。無論、亮平自身の部屋もルームメイトも変わっていた。その相手の名を読んだ彼は首を傾げる。

「……武藤？」

誰。

呟いて思わず眉を寄せた。亮平の知り合いに、武藤なんて人間はいない。同じ棟の者なら全て把握していたはずなのに。

「新入り……？」

しかし“武藤”が今回の“入れ替え”による新入生ならば、部屋に空きがある第三棟に組み込まれるのが普通だった。

おかしいな、と亮平は思う。この“学園”に謎が多いのは、今に始まったことではないけれど。

＊

「ミドリ！　カオル！」

こっちこっち。沙南が手招くと人の間を縫って、二人の少女がやってきた。

昼間のカフェテリアは酷く込みあうが、しっかり人数分の席は確保できている。少女達は示されるままに空き椅子に腰を下ろすと、同時に愛が大量のマフィンをトレイに乗せてやって来た。

「食べ過ぎ」

「まだ食べてないもーん」

沙南の突っ込みを愛がまぜっ返す、そのやり取りはもう見慣れたものだ。愛が腰を落ち着ければキープした席の全てが埋まる。

では始めましょうか、畏まって絹華が言った。

「第二回……三回だっけ？　“学園展”計画会議ィー」

芝居がかった調子で愛が続ければ、わぁー、だのイエーイだの、周りも乗って合いの手を入れる。

集まった少女たちは全部で七人だ。沙南、愛、絹華の他に四人。

ミドリとカオルは本当の名を翠子、薫子という一卵性双生児である。二人の見分けは現段階で唯一、髪の長さでしかつかない。その双子の正面には銀と黒の髪色のコントラストが出来ていた。

ひょんなことから繋がりを持った七人は、今は一つの目標に向かって団結している。あと二月程で行われる学園展に、共同課題を提出するという。

「とりあえず、課題の題材だけでも今日決めたいんだけど」

“学園展”とは定期的に催される、日頃の学習の成果を発表する場のことである。成果と言っても、小難しいレポートや論文を出せというわけではない。題材も発表方法も自由、共同作業も可。スポーツやダンスの実演でも構わない。要はマンネリ化しつつある学園生活にメリハリを付けるために何かやろう、ということだ。

「やっぱあたし、題材はアレが良いと思うんだけど」

「アレ？」

アレだよアレ。挙手しながら言う愛に沙南が首を傾げる。そのまま暫し、不毛な掛け合いが続いた。

アレって何。アレはアレさ。だからそのアレって。なんでわかんないかなぁアレだってば。わかんないわよ。だからァ。

「アレですよ……“学園の七不思議”」

「うっげ！」

途端嫌悪の色を浮かべた沙南とは正反対に、双子がぱっと顔を輝かせた。楽しそう。翠子と薫子の声が綺麗に重なる。

「そんな小学生みたいな題材……」

「良いじゃない、誰もやらなそうで」

「でしょ！？」

「私も賛成」

なおも渋る沙南などお構いなしに話は進んでゆく。止めに絹華までが賛同の意を示して、沙南はがっくりと項垂れた。

「“学園”に伝わってる話を片っ端から検証してくわけ。うちは寮長がいるから、深夜の外出も思いのまま。ね、ロア」

楽しそうに語る愛が話を振った先、プラチナブロンドがさらりと揺れた。薄い碧にも似た瞳がすっと細まる。ロアと呼ばれた第四棟寮長――正しい名はロアル、という――はにやりと笑ってみせた。

「寮長に規則違反の片棒を担がせようってわけね、アイ」

「お願い！」

ぱん、と両手を合わせて拝み倒す。愛の様子にひとしきり笑ったあと、とうとうロアルは頷いた。やったぁ、愛が声を上げるのを沙南は苦い顔で聞く。いよいよ敗戦濃厚だ。

「ね、モモセは？」

「――――良いよ」

決まり！

最後の一人が承諾して、愛が勝ち誇った声を上げた。自分の意見などとうに忘れ去られていることに気付いた沙南は、決め手の発言を落としたモモセに恨めしげな視線を送る。――送って、おや、と思った。

（……？）

黒沼百瀬（くろぬまももせ）。染色や脱色の目立つ髪色をした学生達の中で、彼女の長髪は潔いまでの漆黒だ。艶のあるそれと切り揃えられた前髪のせいか、女子高生、よりは女学生と言った風体である。

黒目の大きな瞳が印象的な整った顔立ちをしているが、それが何故

だろう、今はどかか浮かない表情であるように沙南には見えた。

どうしたんだろう。

首を傾げたところで、沙南の頭上のスピーカーが何か音を吐き出しはじめた。校内放送なのだろう、雑音の合間から何とか声を拾ってみる。

――新入生を迎え入れる関係で部屋割りの変更が行われました、掲示板にて確認してください。

「部屋割り変わったの？」

「大丈夫、四棟に変更はなかったから」

ロアルの言葉に全員胸を撫で下ろす。七人は全員が第四棟所属で、沙南と愛、翠子と薫子は同室だ。

（そっか、今日やっぱ“入れ替え”なんだ）

沙南は改めて確認して、それからふと思い出す。

この中で百瀬だけは、入学式でも“入れ替え”でもない中途半端な日に、突然やって来たことを。

＊

部屋割りが変更になった者は必ず、確認手続きの後新しいルームメイトと対面する。亮平は今まで生活していた部屋の荷物を纏めた後、寮全体を管理している窓口までやってきた。

同時に二十五部屋もの変更を行ったせいだろう、今日の窓口は人の列で溢れている。これでは相手を探すのも大変だろうと亮平がひとりごちたところで、

「……亮平、ってお前？」

声をかけられた。

「へ」

驚いて振り返った亮平の目の前に、同じ年頃の少年が何処か居心地悪そうに立っていた。白いワイシャツにネクタイの制服姿は、今亮平が着ているものと同じだ。

少し長く伸びた黒髪に手をやりながら、あーとかうーとか少年は言い淀んでいる。そこまで見て漸く、亮平の思考回路は追いつきを見せた。

「……“武藤”？」

「そ」

どこかほっとしたように言った、どうやら彼が“武藤”らしい。自分の新しいルームメイトだとわかって、慌てて亮平は手を差し出した。相手は不思議そうにそれを見ていたが、何を意図したものなのかわかったのだろう、同じように手を伸ばす。握手成立。

「そっかそっかー、よろしく。下の名前は何てーの？」

「駿」

「シュン、ね。知ってるだろうけど俺は播磨。播磨亮平」

「はりま？」

駿は首を傾げた後、ああ、と頷いた。

「はりま、って読むんだ。読めなかった」

自分の珍しい名字のことを言っているのだと悟って亮平は笑う。珍しいが、読めない字でもないのだけれど。

じゃあ、よろしく播磨。小さく笑って言った後、駿は亮平に背を向けて歩き出した。寮へ行くのだろう、気付いて亮平も後を追いかける。

「なぁおい、武藤！　待てよ！」

焦りを滲ませながら言えば駿はくるりと振り返る。なに？　唇の動きだけで問われて、ぐっと亮平は言葉に詰まる。

なにって。初対面でこれからルームメイトとしての生活が始まるのに。

（よろしく直後にサヨナラなんて）

そりゃねぇだろ、思いながら亮平は口を開く。どうもこの駿という少年は、人付き合いの何たるかを理解していないらしい。

「お前って今回の新入？」

「そうだけど」

「寮ン中案内してやろうか！」

「見取り図見てきた」

さらりと流されて会話は終わってしまう。見取り図なんて“箱庭”にあっただろうか？　考えながら亮平は、めげずに言葉を探した。

「じゃあ部活とかは？」
「やる気ねェし」
「つまんねーな。青春を謳歌できねーぞ！」
「……お前、何部なの」

漸く相手から会話らしい会話が帰ってきて、亮平は満足気に笑った。
駿は（かなり嫌々、だが）亮平の話に耳を傾ける気になったらしい。

「俺は剣道やってんの！　身体動かすのは基本的に好きだから、サッカーとバスケの助っ人にも少々」
「へぇ」
「運動得意？」
「まァ、そこそこ」
「じゃあ良いじゃん！」

何かやろうぜ！
そこまで言って、亮平の動きがはたと止まった。唐突に、ある疑問がぽんと浮かんでくる。
あれ？　言いながら亮平は首を傾げた。本当はこれ最初に聞くべきだったのに。あり得ないタイムラグに笑いさえ零れる。

「……何でお前、一目で俺のことわかったの？」

駿は亮平をちらりと一瞥した。ねェマジで何で、亮平は食い下がるように続ける。だっておかしいじゃないか、普通。

「……写真で」
「え？」
「何でもねェ」

行くぞ。
言い放ってそれっきり、駿が質問に答えることはなかった。初めて入ったはずの寮でも、駿は自分の部屋まで一度も道を誤ることなく辿り着いた。

第五章《迷霧》：嘘と噂と（1）

虫の声が聞こえる。
少女は軽い喉の渇きを覚えて目を覚ました。枕元の時計に目をやって、その後小さく息を吐く。――午前二時。丑三つ時、というやつだ。考えて思わず身震いする。
少女は夜の闇が苦手だったが、この“学園”で生活するようになって少しは慣れた。夜の孤島に届くのは星の明かりだけであったし、消灯時間を過ぎれば校舎には非常灯しか灯らない。こうして夜中に目を覚ましてしまえば、嫌でも暗さと向き合うことになった。

（喉が、渇いた）

もう一度思ってベッドを抜け出す。そっと覗き見た先ではルームメイトがすやすやと眠っていた。起こさないように気を付けて部屋から出る。寮の一階、あの自動販売機は深夜でも使えたはずだ。
……たん。たん。
階段を下ってゆくたびに自分の足音が反響した。二段下は見えない、その暗がりは居心地が悪い。懐中電灯を持ってくれば良かったと、少女は僅かに後悔する。
何とか無事に一階の床を踏みしめた時には思い切り安堵の息を吐いた。薄明かりが灯っているであろう自動販売機の在処まで、あと角を一つ残すだけとなる。

（……？）

しかしその瞬間、不意に少女の耳が音を拾い上げた。
話し声、だろうか。囁くように小さなそれは、彼女の目指す先から聞こえている――どうやら先客がいるらしい。

少女は角からそろりと顔を出してみた。会話の内容は聞こえないが、確かにいくつかの人影が照らしだされている。
誰だろう、思って少女は首を傾げた。同じ寮棟の人間ならば多少なりとも見覚えがあるはずなのに、目の前のシルエットは誰とも一致しない。

（……もう少し）

心持ち身体を前のめりにして、よくよく目を凝らしてみる。だいぶ闇に慣れた少女の瞳が、そこにいる人物をはっきりと捕らえた。
――初めて見る少女たち、だ。確認できたのは四人で、一人は金色、もう一人は銀色の髪をしていた。残る二人は恐らく黒で、うち片方はそれが腰よりも長く伸びている。
――だれ？
問い掛けた声は喉の奥に貼りついてしまった。その長い黒髪の少女が、音もなくゆっくりとこちらを振り返ったからだ。
真直ぐに絡み合う、視線と視線。闇より深い瞳の黒。肌は白く抜けるように、その唇が何かを。

「……アリサちゃん？」
「うひゃぁぁあぁぁあぁぁッ！？」

ぽん、と突如後ろから肩を叩かれて、少女は勢い良く声を上げた。悲鳴というよりは奇声に近い。
涙目になって振り返った彼女――亜梨沙の目の前に、柔らかな金色のウェーブが広がる。よく見ればそれは髪の毛であることがわかった。ぐっすり寝ていたはずの、亜梨沙のルームメイトの。

「ま、マリア……」
「どうしたんです？」

こんな時間にこんな場所で。言外にそう問われて、はたと亜梨沙は目的を思い出す。

「お茶買いたくて……そしたら、見たことない子がそこにいたもんだから」

「何処に？」

「……え？」

亜梨沙は目を瞠った。

慌てて視線を戻した先には自動販売機が無言で陳列している。薄明かりの輝くその空間には、誰一人として見当たらなかった。

＊

“学園”の制服はバリエーションが豊富である。自由を尊んだ学園創始者が、生徒に制服をも選択させようと考えたのが事の始まりらしい。

女子の制服は大まかにブレザーとセーラーの二種。その中にもデザインの違いがあり、上着が五種、セーラーも襟の型が三種、スカートも五種、リボンとタイは合わせて十種になる。その他数種ずつ存在する靴下とベスト、セーターの全ての組み合わせを考えれば、合計一万三千五百通りもの着方をすることが可能なのだ。

「……ンなに着るわけねーだろ！」

亮平の“制服談議”に付き合わされていた駿がとうとう突っ込みをいれた。与えられた部屋の中、荷物の整理はまだ終わっていない。疲れた様子の駿に亮平は首を傾げながら、あれそれって呆れるポイント？　などと呟いている。

「普通ヤローどもは喜ぶ場所だぜこれ。一つの学校で何種類もの制服を堪能できる、すごくね？」

「制服ごときに無駄な労力を使うことがすげェ」

駿は思わず半目になった。変な所ばっか金使いやがって、と心の中で上司をねめつける（これを考案したのは上司の義父だが）。事実“学園”で生活する生徒は多種多様な制服を身につけていて、全員が同じ学園に通っているとはとても思えない状況になっている。女子などはお洒落の感覚で制服の組み合わせを楽しんでいるようだが、全種類を着尽くす者などいないだろう。

（まァ、お陰でやりやすいんだけど）

駿は自分の着ているものを見下ろした。男子の制服も女子ほどでないにしろ、多数のパターンが存在する。何種類にもなる制服を見慣れている環境にあれば、多少の違いには皆気付かない――それが制服として登録されている物でなくても、だ。

駿は自分の付けているネクタイにそっと触れる。見た目は亮平の物に似せてあるが、実際は。

「制服好きには堪らない環境だろー」

「……暇なんだな」

「つーか娯楽が欲しいの。まっとうな青少年ですから」

腐ってんな青少年。小さく落とされた駿の言葉は届かなかったらし

い、亮平が上機嫌で続ける。その言葉に駿は今度こそ、思い切り脱力した。

「ってわけで今度お前も行くからな、女子寮潜入」
「何が“ってわけ”なんだ」
「男の園に娯楽を持ち帰ってこい」
「腐ってる……」

こいつの頭が。
露骨に嫌な顔をした駿を宥めるかのように亮平は笑う。逃げようったって駄目だぜ武藤、これは規則だから。

「規則？」
「そ！　うちの棟の伝統でな、新入りは皆やらされるわけ。洗礼みたいなもん」

実に不純な洗礼（バプテスマ）である。制服の似合う可愛い子と知り合ってこいよ、あっけらかんと言って亮平は笑った。
駿はそれに軽い頭痛を覚える。自分はここへ何をしに来たのか、あまりに馬鹿馬鹿しくて忘れそうだ。
こめかみを押さえれば本当にズキリと痛んだ。最悪。

「狙うなら第五棟かな。本当は四棟が人気なんだけど、あそこの寮長ガード固いんだ。ウィル……なんたらっていうんだけど」
「そりゃ普通はな……」
「寮長自身も綺麗な顔してるし、マリアって子は人形みたいに可愛いってんで俺の友達が狙ってる。元気なのがお好みなら東海林とか志田とか？　清楚な純和風なら黒沼と鮎村だな、あとは――」
「……黒沼？」

ふと聞こえた単語に駿の眉が動いた。
そう、くろぬま。亮平は繰り返して首を傾げる。それがどうかしたか？

「……いや」

なんでもねェ。
駿が首を横に振ったところで、部屋をノックする音がした。だれぇー？　間延びした声で応えた亮平の口が閉じる前に、ばたんと勢い良くドアが開く。

「亮平！　……と、悪ィ、誰？」

開け放たれたドアが可哀想な悲鳴をあげた。部屋の中に首を突っ込んだまま、来訪者が眉を寄せる。
自分と同じ年頃の少年だ。この寮の人間なのだろうと駿は思った。

「こいつ武藤。ルームメイト」
「あぁ、なーる。じゃあお前も来てよ」

サッカーの試合の人数が足りない。早口でまくしたてた少年に亮平もろとも部屋から引き摺り出されて、駿はぽかんと相手を見つめた。拒否する間もなく扉は閉じられる。がちゃん、心得たように鍵を掛けたのは亮平だ。

「何なんだよ一体……」

すっかり疲労困憊の駿を見て亮平が笑った。急げと言い捨てて走り出した、謎の少年は亮平の前のルームメイトらしい。あいつは山岡だよ、と亮平が説明する。

「あいつサッカー部。人数は常に足りてねぇんだ、手伝ってやってよ」
「マジかよ……俺、先に行きたいとこあんだけど」
「んー、わかった。サッカーグランドは中庭にあるから」
用が終わったら来いよ。
笑いながら言って、亮平も山岡とやらの背中を追い掛けていった。
駿はそれを最後まで見送って、すっと踵を返す。
周りに人がいないのを確認してから首元のネクタイに手をやった。
一見何の変哲もないそれは、よく見ると僅かに妙な厚みがある。裏返せば小さな穴が開いていて、スピーカーが覗いていた。

『……――シュン？』

カチリと音がしたのは、彼がそのスイッチを入れたからだ。途端に小さなノイズが零れ、それに混じって人間の声を吐き出す。

「ワリ、遅くなった」
『別に平気だけど。そっちはどう？』
「ちゃんと“生徒”をやってるさ。ご丁寧に登録までして、部屋まで割り当てられたぜ」
投げ遣りに言えば、小さな通信機の向こうからくすくすと声が漏れた。
笑いやがってと思っても言わない。我ながら滑稽だと、駿は自覚していたので。
「それより今夜も集まるんだろう、見つかるなよ」
『あー、それなんだけど』

実はもう見つかっちゃったんだよね。
相手の告白に駿は目を見開いた。通信機を片手に思わず声を荒げる。

「はぁァァ！？　いつ！！」

『昨日の夜……もう今日の朝、かな。一人起きてた子がいて。でも話の内容は聞かれてないし、たぶんあたし達のこと生徒だと思ってくれてるし』

だから大丈夫、と続けられた言葉に少年はほっと胸を撫で下ろした。“目眩まし”の自分が働く前に“実働部隊”が公になっては意味が無い。

「……今日は俺も行くから」

『場所は？』

「聖堂だって聞いてる。……ヘマすんなよ、チトセ」

ぷつり、と切断の音がした。ただのネクタイに戻ったそれを少年は整える。
ふと顔を上げれば、こちらに真直ぐ歩いてくる人影がみえた。駿は僅かに顔をしかめる。聞かれてはいなかったと、思うけれど。

「ねぇ、君」

相手は駿の前まで来てぴたりと止まった。話し掛けられているのは自分らしい、悟って駿は渋々視線を合わせる。
……妙な出で立ちの少年だった。老成した雰囲気があるので、青年にも見える。顔の輪郭を隠す柔らかな赤毛。小綺麗なシャツとネクタイは“学園”の制服だろうが、何故か片眼鏡を着用していた。

「中庭には何処から出られるか知ってる？」
「……あ？　もしかしてサッカーでもすんの？」
思い当たる節があって尋ねればビンゴだったらしい。相手はこくりと一つ頷いた。誘われたんだ、と彼は笑う。
「あー……。じゃ、ついて来れば。俺も行くし」
「本当かい？」
ありがとう。にっこり微笑まれて駿は面食らった。日本語は流暢だがどうもこの相手、空気がおっとりしている。いったいどの国のお坊っちゃんだ。
「君、名前は？」
「……武藤、駿」
「シュン、シュン君だね」
シュン君。その呼び方に大嫌いな男の顔が蘇って、思わず駿は顔を引きつらせた。こいつ、市原みてェだ。
（逃げたい……）
その反応は最早条件反射に近い。落ち着けコレは別人だ、言い聞かせる駿の目の前にすっと掌が差し出される。礼儀正しく一礼して、彼は駿に握手を求めた。
「俺はウォルディ。ウォルディ・レノ・ファンダルス」
よろしく。
にこりとウォルディは微笑みを浮かべた。

第五章《迷霧》：嘘と噂と（2）

“学園”を取り巻く伝説や怪談は、実は七つなどではおさまらない。創設されてからそこまでの年月を経ているわけでもないこの場所に噂話が蔓延するのは、孤島という特異な立地と閉鎖的な空間、そして何よりも謎に包まれた学園運営者の事が原因だろう。

“七不思議”という言葉は捨てたくない――そう希望した愛の言葉で結局、沙南をはじめとするメンバー達は他の生徒へ聞き込みをすることになった。調査内容は、『学園の噂と言えば何を思い浮べるか。』

“学園展”用のレポートには生徒が答えた話のうち、上位七つを取り上げようというわけである。

「……とは、言ってもねぇ」

沙南は人知れず溜息を吐いた。

聞き込みの後に実際噂の検証をしなければいけない事を考えると、“学園展”までに残された時間は少ない。それを良く理解しているメンバー達は授業の合間を利用して早速聞き込みを開始したのだが――その雲行きが、どうにも怪しかった。

「沙南、次行くよ」

「……うん」

調査自体は滞りなく、どちらかといえば予想よりスムーズに進んでいる。“学園の噂”に興味を持っている生徒は意外に多く、情報量も豊富であったからだ。

ルームメイトである二人が行動を共にする事は、自然と多くなり、実際今も愛は沙南を連れ回しながら呑気に聞き込みを続けている。

沙南は相棒の背を見つめた後、そっと手元に目を落とした。自分の握っているメモ帳の、剥き出しにされたページが見える。

（……何だか）

直観的に、嫌だ、と思う。

沙南の視線の先には自らの字で綴られた、噂話のタイトルが並んでいた。そのうち一つの横には、既に多くの正の字が鎮座している。調査の初期段階から凄まじい量の票を獲得しているこの噂は、沙南自身にも聞き覚えがあるものだった。ただ、調べるとなると話は違う。

「嫌だなァ……」

呟いた声は愛には届かなかったらしい。沙南はその文字に目をやったまま、そっと指先でなぞってみる。

（――“黒髪の少女の亡霊”）

この話には、深入りしないほうが良い気がするのに。

＊

ワッと大きな歓声が沸いた。散り散りになった人間の間を縫って少年が一人疾走する。足でボールを蹴りながらの動きとは思えない、その速度に皆目を見張った。曲芸師かよ、誰かが呟いた声は風に掻

き消される。
球を意のままに操っていた、その両足が不意にリズムを崩した。奪いに近付いていた相手の目の前でフェイントを一つ、二つ。するりと人の壁を抜ければ刹那、蹴り上げたボールが弧を描く。一点に向かってぐんと伸びたそれは吸い込まれるように――ゴールネットを揺らした。
瞬間沸き立つ観客の声。本日三度目の得点である。

「……武藤」
「あ？」

何時の間にやら集まっていた観客（と言っても全て生徒だが）の割れるような歓声の中、亮平はハットトリックを決めた相手に歩み寄る。一人で三点を叩き込んだ少年は軽い汗こそかいているものの、息切れ一つ起こしていない。

「お前……」
「……な、んだよ」

亮平の真剣な表情に怖気付いた、駿が僅かに身動いだ。ふらふらと近寄ってくる彼の顔色は心なしか青ざめていて、ますます駿は気味が悪くなる。
なに、なにこいつ。思っているうちに亮平は駿のすぐ目の前まで迫って、すぅと両手を伸ばしてくる。身構える間もないうちに、がっちりと両肩を捕まれた。

「ちょっ、」
「……お前、最ッ高――――！！」

言われたことがわからずに駿は目を白黒させた。

え、何、お前って？　お前ってお前か。いや俺のことか。俺が何だって？

「……はァ？」

間抜けな声を発した駿の肩を掴んだまま、亮平は勢い良くそれを揺さ振った。ガクガクと揺れる視界の中で何とか駿が確認したのは、きらきらと零れ落ちそうな笑みを浮かべた亮平の顔である。

（……えぇえぇ）

何コレ、この状況。

ますます駿は困惑したが、相手がそれに気付くことはないらしい。

「お前スゲーよ！　現役サッカー部に負けてない、てか勝ってる！」

「……どうも」

悪かったな負けてて！

後ろから叫んでいる山岡は完全に無視して亮平は続ける。もしかしてお前って選抜生？

「せんばつ？」

「うちの特待制度だよ。武藤、サッカー選抜ってわけじゃねェの？」

「いや、別に……」

そんなん知らねぇよ、と駿は心中で一人ごちる。詳しい“学園”の制度など一つも聞いていないのだ、話の合わせ辛さといったらない。

（教えとけよ馬鹿ロヴ……）

「じゃあサッカー以外も出来るんだな？」

「そりゃァ人並みには……って、え？」

しまったと思った時には亮平がにやりと笑った後だった。瞬間、墓穴を掘ったということを駿は悟る。それも超特大の。

「武藤、次はバレーな！」
「野球に来いよ」
「バスケが良いって」
「このままサッカーで決まりだろ？」
「フェンシングとかどう？」
「バレーだって。な、武藤」
「野球だよ。な、武藤」
「おい武藤、」
「武藤！」

それまで取り巻き見ているだけだった者に囲まれて、気付けば駿の周りでは武藤の大合唱になっていた。人垣に飲まれて何処へ消えたのやら、亮平の姿さえ見えない。
助けを求めて視線を彷徨わせると、遠くからこちらを眺める人物と目が合った。駿に気付いたのだろう、赤毛に片眼鏡の少年が手を振ってくる。

（あいつ……！）

苛立ちを極限まで募らせた駿は盛大に舌打ちをした。元はと言えばあいつのせいだ。
駿が先刻出会って道案内までしてやったウォルディとかいう少年は、サッカーの助っ人として召集されたにもかかわらず試合に加わらず見ていただけ。
実はサッカーって見たこともやったこともないんだよね――誰もが

驚愕する衝撃告白を落としたウォルディに、まさか試合に出ろとは言えない。彼を誘った山岡にとっても予想外の展開であったらしく、結局山岡のチームは――駿の所属したチームは、メンバー予定のだったウォルディを欠いた十人で臨むことになったのである。

（……どーしよ）

駿は深い溜息を吐いた。

チームの人数が少なければ当然プレーに無理が出る。開いた穴を埋めるには、その分誰かが動くしかなかった。

少年自身は気付いていなかったことだが、駿は一般男子高校生の平均と比べれば遥かに高い運動能力を持っている。ただのゲームだとわかっていても勝負事に力は抜けない、妙に不器用な駿だ――最終的に率先してプレーに加わってしまうことは自然の流れだったのだろう。目立つことはするまいと思っていた矢先にこの状況、それを作り出したのが自らのハットトリックなのだから本末転倒である。

「武藤！」

「頼むよ武藤ー」

「ハイハイ、そこまでェ」

駿が頭を抱えた瞬間、漸くストップの声がかかった。人波に流されていた亮平がそれを書き分けながら近付いてくる。

どうにか再び駿の傍までやってくると、亮平は片腕を伸ばして駿の首の後ろへと回した。肩を組んでいるような態勢になった後、亮平は取り巻きに向かってにかりと歯を見せる。

「悪ィけど、こいつは剣道部に入ることになったから」

「……はぁァ！？」

大声を上げた駿の周りから非難の声が飛ぶ。ずりィぞ播磨！
それを全て無視して亮平はにこにこと笑ってみせた。

「いや、ダイジョブ。武藤は剣道でいける」
「何が大丈夫なんだよ！」
「あのフットワークがあったら完璧だから。飯食ったら剣道場に案内するぜェ」
「勝手に話を進めんな！　だいたい、剣道なら俺より――」

半ば亮平に乗せられるようにして会話の応酬を続けていた、駿がはたと口を噛んだ。亮平が怪訝な面持ちで見つめてきたが、冷や汗を押さえるのに必死な駿にはそれを気にする余裕などなかった。心臓が嫌な音を立てて跳ねている。

（……あ、）

あっぶねェェェ！！
駿は声を出さずに絶叫した。ふと脳裏に浮かんだ“仕事仲間”である、あの少女の名を口にしてしまう所だったのだ。
名前程度ではわからないだろうが、下手に亮平の興味を刺激して調べられてはまずい。何せあっちは、正式な入学手続きをしていないのだから。

「俺より？」
「な、んでもねェよ！　……あれ？」

慌てて亮平から視線を逸らした、その先で駿は目を見開いた。先刻まで其処にいたはずの、ウォルディの姿がない。ぱちぱちと目を瞬いてもやはり、その景色は変わらなかった。何時の間に、と駿はひとりごちる。

「なぁ、あいつ……ウォルディとかいう。どこ行った？」
「え？　……あれ。マジだ、いねェ」

問いかければ亮平もきょろきょろと辺りを見回した。徐々に崩れてゆく人垣にも、帰ってゆく観客の中にもあの赤毛は発見できない。

「つーか、変な奴だよな。今時サッカー知らないって……」
「武藤、お前うちの噂知ってる？」
「ウワサ？」

首を傾げる駿に、そう、といらえを返す。亮平の顔は何故か真剣味を帯びていて、駿は僅かに眉を寄せた。

「わかると思うけど“学園”に来てる連中の身元ってさ、殆どの奴がはっきりしないんだ。俺たちはお互い詮索もしないし……だから」

とんでもない事情でここに来てる奴が、きっといるわけ。
言われた瞬間ひくりと口元を引きつらせた、駿の様子には気付かなかったらしい。亮平は冗談めいた笑みを浮かべた後言葉を続ける。

「俺が聞いたのだと、王家の隠し子とか。ここには色んな人種が集まるから、有名な情報屋が生徒に紛れ込んでデータ収集をしていくとか……犯罪者が身を隠してるって話まで」
「……へ、へぇ」

微妙に当たってるんですけどォォ……！
胸中に渦巻く焦りはおくびにも出さず駿は相槌を打つ。心なしか強ばった身体と上ずった声を聞けば、聡い者なら彼の変化に気付いただろうが。

「だからあいつ――ウォルディだっけか？　あーゆー世間知らずは、可能性高いかもな。良いトコの坊っちゃんぽくね？　なんかワケアリでここに来た……」

「ふぅん……」

この時駿は妙な引っ掛かりを感じていたことに、自分自身も気付いていなかった。

第五章《迷霧》：嘘と噂と（3）

どっさりと積み上がった資料の山に沙南は悲鳴を上げた。全ては彼女と愛の生活している相部屋に屯する、少女たちの持ち込んだものである。

二人部屋に七人はきつい。定員オーバーだとぼやく部屋主にはお構いなしで、メンバー達はこの部屋を“会議室”に認定してしまった。この二日間で集めた調査結果と共に全員が腰を下ろせば、足の踏み場など一つも残らない。

「……とりあえず、集計しようか」

恐々口を開いたのは双子の片割れだった。声だけでは判別できないが位置的に翠子のほうだろう、と沙南は思う。ちなみに髪の長いほうが薫子、短いほうが翠子だ。

翠子の案に賛成の意を示して、全員が手持ちの用紙に視線を落とした。これを全て数えるのは骨が折れるに違いない。まずは項目を書き出すところから始めなくてはならないだろう。

私が書くよ、言って絹華がペンを取る。持ち方に癖もない、丁寧な字を少女は書くのだ。それじゃあ、と愛が声を上げた。手に持った紙切れにメモされた調査結果を、ゆっくり読み上げてゆく。

「まず……“学園の創始者は人間ではない”」

「えぇ……」

「それはないでしょ……」

さらさらと書き付ける、絹華以外の全員が息を吐いた。いきなり突拍子もないものが来たな、と沙南も目を細める。

“学園のトイレの三番目に”……続いて愛が読み上げたのは日本の

小学生の間で流行した“花子さん”に酷くにていて、メンバーの間からは小さく笑いが零れた。絹華がペンを走らせる音が響く。

「“学園は昔軍事施設だった”――あ、これあたし知ってる」

「私も読むよ。“黒髪の少女の亡霊が現れる”」

時間短縮の為に参戦したロアルが読み上げた、それに沙南の身体がぴくりと震えた。それ、あたしのほうにもあるよ。翠子がそういうので探してみれば、他にも同じ内容を記されたものが幾つか見つかる。やはりこの怪談は多くの票数を獲得しているらしい。

「えぇと……“どこかの寮棟には開けられない部屋がある”」

「次ね、“出入り禁止の第三会議室はマフィアの会合に使われている”」

「“学園の生徒はみんな身元不明”……これ噂ってか事実じゃん」

「“第二図書室の閲覧禁止本棚には、学園の秘密を握る物が挟まった本がある”だって」

「挟まってんの？　本自体に何か書いてあるんじゃなくて？」

愛とロアルが交互に読むうちに、少しずつ資料の束は崩れていく。途中からは百瀬が絹華を手伝って書き取りに加わった為、作業もかなりスムーズになった。

進めていくうちに、中には伝説とはとうてい呼べないものまで混じっていた事が判明する。教師のプライベートに関するものが殆どで、恋人に関することや隠れた趣味を暴く話が多い。愛の読み上げた“物理教師のブリックマンはヅラ”という一文には、全員が腹を抱えるはめになった。

「あたたー！」

「あ、っはは……くるし、」

「ブリックマンってあの眼鏡でしょ？　あたし怪しいと思ってたんだよねぇ」

沙南や愛など、大学受験を目指す者なら一度は件の教師を目にしている。ここにいるメンバーは皆勉学を疎かにしてはいなかったので、全員があの違和感満載の頭に見覚えがあったのだ。

ひとしきり笑い転げた後、ロアルは腹をさすりながら次の用紙に手を伸ばした。笑いすぎた目尻には薄らと涙が浮かんでいる。

日本人にはない白さの指先が紙切れの端を掴んで、色素の薄い瞳の前にそれを運んだ。ゆるりと動いた眼球が書かれた文字をなぞった、しかしその瞬間、ロアルの動きが停止する。

「……ロア？」

「ううん……ちょっと……」

どうしたの？

訝しんで問い掛ける仲間の前で、ロアルは一人言葉を濁した。様子がおかしい、その原因が紙に書かれた内容にあることは明らかだ。嫌な気配を感じ取って沙南は、その手から用紙を抜き取った。そっと文字を覗き込んで、彼女もまたその身体を強ばらせる。しかし唇だけはしっかりと、その言葉を読み上げていた。

「……“入れ替え”の後には……」

入れ替え　の　あと　には　かならず　死人　が　でる　。

周囲が息を呑んだのがわかった。

奇妙に歪んだ文字で綴られていた、それを誰が書いたのかはわからない。はじめこそ生徒一人一人聞き込みを行っていた調査方法は、その効率の悪さから途中で変更になった。授業など人の多く集まる

場で無地の紙を配り、それに書いてもらって一度に大量回収する。
そうして得た調査結果、これはその内の一枚だったからだ。

「……何それ」

気味悪い。憮然として言い放った愛の傍らで、薫子が顔色を失っていた。つられたように白くなる翠子と並んで病人のようだ。

「“入れ替え”って、つい最近……」
「や、めてよ！」

冗談にもならないことを呟く薫子を、愛が慌てて制止する。
ただの噂だし、てゅーか悪戯かもしれないし！
懸命に場を和ませようとする愛のおかげで我に返った面々は、口々に同意を示しながらこの話は一旦保留にすることにした。この話題が一票だけなら――上位七つに含まれなければ、調べる必要はないのだ。忘れてしまえば良い。

「次は？」
「“学園の中には武器庫がある”」
「あとコレも。“学園は何かを隠すために存在する”……」

ロアルと愛が読み上げを再開して、書き取り組も再びペンを取る。
残りのメンバーは紙の山の運搬と整理だ。
地道な作業を続けた七人がついに解放されたのは、それからさらに一時間半ほど経過した後のことだった。書き上がった噂話のタイトル一覧、その横に書き込まれた票数を見て沙南はそっと息を吐く。
今度はこれを、検証しなくてはいけない。

「じゃ、選ばれた七つを発表しまーす」

明るい声で言い放った愛に全員が視線を送った。いよいよ、動きだすのだ。

「一、寮棟に開かずの部屋がある。二、学園は何かを隠している。三、食堂には学園運営者用の隠し通路がある。四、零時ジャストに見た人間が消える鏡がある。五、第二図書室の閲覧禁止本棚には学園の秘密が隠されている。六、夜中に悲鳴が聞こえる教室がある。そして七……、」

そこまでを一息に言い切った愛がすっと息を吸い込んだ。最後の一つをゆっくりと、告げる為に。

「――黒髪の少女の亡霊が、現れる」

瞬間、思わず息をついたのは沙南だけではなかった。ただし周りのそれは、沙南の行った意味合いとは異なっている。

やっとだね、と誰かが呟いた。ようやく形になった調査結果は、まだ始まりに過ぎない。

誰もが心配していたあの一件については、それ以上の票が集まらなかったために流されることになった。良かった、と心から沙南は思う。人が死ぬなんて話を立証したいはずがない。

「これからはこの七つに絞って、いよいよ検証開始。軽ーく分担決めとこうと思ったんだけど、希望あるぅ？」

勿論基本は皆で協力だけどと笑った愛の言葉に皆、僅かに逡巡したようだった。本音を言えば、一番調べやすく結果の出るものに当たりたいのである。沙南などはどうにも気になって仕方ないあの七つ目以外ならどうでも良かった。七不思議に七人、どうしても誰か一

人は当たってしまうのだが。

「……“亡霊”と“学園が隠してるモノ”は、私とモモセでやるわ」

沙南の思考を突然引き戻したのは酷く静かな声だった。断定の意を含んだ声音を落とした、少女の髪がさらりとゆれた。銀の色。

「ロア……！？」

がたんと音を立てて立ち上がったのは、名前を上げられた百瀬本人だった。黒い睫毛に縁取られた眼が大きく見開かれている様を見て、沙南までもが驚いてしまう。いつも何処か一線を引いている百瀬の、こんな表情は珍しい。

「何でそんな、」

「二人で二つよ？　問題ないじゃない」

「そうじゃないの！」

「……モモセ、」

あとで、はなしを。

声を出さずにゆっくりと動いたロアルの唇を見て、百瀬はぴたりと口を噛んで押し黙った。ロアルの口元が見えなかった沙南と、その他のメンバーはただ首を傾げるばかりである。何かを考える込むように眉を寄せた、絹華の顔がちらりと沙南の視界に映った。

「……え、と。良いの？　百瀬」

「……うん」

おずおずと愛に問われた、百瀬は小さく頷いた。決まりね、とロアルが笑みを浮かべる。

沙南は開け放した窓の外にそっと目をやった。新月の晩が過ぎ去り、今は薄い猫の爪のような月が浮かんでいる。さわさわと揺れる木々の音は、何処からきこえてくるのだろうか。

（……？）

窓の形に切り取られた景色の、闇中に人影が見えた気がして沙南は首を傾げる。

島を取り巻く生温い潮風が、静かに部屋の中に吹き込んでいた。

第五章《迷霧》：Ｓｃａｐｅｇｏａｔ（１）

彼女がそこに居合わせたのは、ただの偶然だった。

明日提出せねばならない課題のファイルを、一日の最後に使用した教室に忘れたらしい。それに彼女が気付いたのは夕食も済んだ、消灯時間寸前のことである。

今晩のうちに仕上げてしまいたい課題だっただけに状況は手痛い。彼女が夜の校舎に向かうことを決意したのは、ごく自然の流れだった。

幸い“学園”は全寮制の為か、しばしば夜にも利用者が現れるために教室に鍵はかかっていない。彼女はそれを知っていたので、ルームメイトに外出の旨を告げた後は真直ぐ目的地へ向かった。

ひんやりとどこからか冷気の流れ込む廊下を歩く。上履きのゴム底が床を擦る音だけが響いていた。静かな空間に心細さを感じた、彼女が“それ”を目撃したのはその時だ。

――Ｔの字を型取った廊下の先、彼女の目の前を小さな人影が横切ったのである。裸眼での視力１．０をキープしていた彼女には、その姿形が一瞬でもはっきり見えていた。

（女の子……？）

暗がりのせいではっきりした色はわからないが、おそらくは黒髪の。肩より僅かに長いそれを靡かせて疾走する、それは少女のようだった。身につけているカッターシャツとスカートは一見“学園”の指定制服に見えたが、多種多様のそれをすべて把握しているわけではない彼女に判別は付け難い。

細い足を覆っていたのは膝下までのブーツだったように思えた。それに彼女は首を傾げたが何よりも、少女の腰からぶら下がった棒状の物に目を引かれる。

（……え、）

それが“刀”だということに気付くまで時間はかからなかった。剣道部の持ち歩いている竹刀や、木刀とは違う。漆黒の鞘に白銀を覆われた、紛れもない真剣だ。

どうしてそんなものを――思うより先に身体が動く。彼女は弾かれたように少女の姿を追ったが、角を曲がったときにはもうその影さえ消え失せていた。

どこへ行ってしまったのだろう。彼女は見失った少女のことを思いながら再び首を捻る。途端、カタン、と背後から音がした。

「……！？」

いつから其処に立っていたのか。慌てて振り返った先には、すらりと一つ人影が伸びていた。しっかり床を踏みしめている足を確認して、一瞬幽霊の類いかと思ってしまった自分に喝を入れる。

そのまま、誰、と問おうとして彼女は身体を強ばらせた。さっと血の気が引いて、金縛りにあったように瞳ばかりが動く。目の前に立っている相手の手に、鈍く光る物が握られているのに気付いてしまったのだ。

「哀れな犠牲者（スケープ・ゴート）、貴女は運が悪かった……」

柔らかく子守歌を謡うように囁かれたその声音はしかし、ぞっとするほど無機質な冷たさを共に孕んでいた。

“それ”を握った手が、すっと持ち上げられる。彼女の方に真直ぐ

向けられた銃口の、ぽっかりと開いた穴がただ恐怖を呼んだ。

「や、めて……」

懇願した声は震え擦れていた。彼女に許されていたのは、ゆっくりと引き金にかかる指を見ていることだけ。

「――Ｒｅｑｕｉｅｓｃａｎｔ　ｉｎ　ｐａｃｅ（Ｒｅｓｔ　ｉｎ　ｐｅａｃｅ）．」

サイレンサーを備えた鈍色の奥で、静かに一つの火花が爆ぜた。紡がれた最後の言葉はもう、彼女の耳に届かない。

ＲＩＰ！

ＲＩＰ！

祭壇に山羊を！

密やかな終焉を、安らかな死を。

さぁ眠れクライスト、朽ちた聖母の腕（かいな）の中で！

第五章《迷霧》：Ｓｃａｐｅｇｏａｔ（２）

「――東海林（しょうじ）、」

愛は背後を振り返った。

僅かな熱気が立ちこめる朝の体育館に、開け放した窓から緩やかな風が吹き込んでいる。光沢を帯びた床を靴底で擦る高い音が響く中、その声は真直ぐに届いた。

愛は片手で叩いていたボールの動きを止める。自分を姓で呼ぶのは、この学校の中では教師を除いて一人しかいない。

「なぁに、志田」

首を廻らせた先に佇む背の高い少女は、愛と同じジャージの上下を身につけている。意志の強さを体現したはっきりした目鼻立ちと、大雑把に後ろで纏めた髪。

彼女は名を志田渚（しだなぎさ）といった。同じバスケットボール部に所属する、愛のチームメイトである。

「聞いたよ、面白いことやってんだって？」

「面白いことぉ？」

鸚鵡返しに聞き返せば渚が一つ頷いて、学園展、とキーワードを零す。そこで愛は漸く合点がいった。

おそらくは自分達の派手な聞き込みが、彼女の耳にも入ったのだろう――考えを巡らせてふと愛は眉を寄せる。

「悪いけど、もう人手は足りてんだよね……つーか定員オーバーみ

たいな。主にあたしの部屋が」
「あ？　違う違う、そーゆー意味ではないんだけどさ」
渚は笑って片手を振ってみせた。切れ長の目をすっと細めた、その何処か含みのある笑顔に愛は益々顔をしかめる。
「……“けど”？」
相手の表情を見て、瞬時に愛はまだ話が終わっていないことを悟っていた。渚との付き合いはそれなりに長い。チームメイトとして毎日顔を突き合わせていれば、それなりに考えを読めるようにもなるのだ。
「協力しないか、ってお誘い」
「……協力ぅ？」
愛からの胡散臭げな視線をさらりと躱し、渚は事の詳細を語り始める。頼んだわけでもないのにつらつらと語られるその言葉に、愛は渋々耳を傾けた。
聞き始めて直ぐに大体の内容は飲み込めてしまった。なんでも渚の所属する班が選んだ学園展への展示テーマが、愛達の“七不思議”と密接な関わりを持っているらしい。
「学園宝島計画、って呼んでんだけど」
「……はぁ、」
何だか嘘臭い響きである。
やる気なさげに相槌を打った愛が次に告げられたのは、その計画とやらの詳細であった。
志田渚と共に学園展への準備を進めるメンバーのうち数人は、映画

研究サークルに所属の人間らしい。そんな彼らが提案したのは、“学園”を舞台にした短編映画を撮って発表することだった。

“学園”の在るこの孤島に財宝が眠っているらしいことを知った生徒達が、それを探して冒険を展開する――というのが大まかなストーリーらしい。

「……それ、短編でおさまるわけ？」

「でさ、その“宝”を何にするかっつー話になったんだけど。やっぱリアリティーを追求したいじゃん？」

「聞けよ！」

だから。そこで渚は一呼吸つくと、にやりと笑った。

幸いにもこの“学園”には、様々な伝説の類が蔓延している。その中には確かに“学園”に何かが隠されているという話も含まれていた。

どーせアンタ達はそれも調べるんでしょ？　見透かしたように渚が言うので、愛は渋い顔をして頷いた。

「簡単に言っちゃうと東海林達に、映画のキャストになって欲しいわけ」

「……うっそーん」

「アンタ達が“噂”の真相を確かめるまでの過程を、“宝探し”の様子として撮影する。“学園の隠しているもの”がわかった場合は、それが財宝の正体だってオチ。何も出てこなかったらその時は、こっちでテキトーに財宝をでっち上げんの」

愛は絶句した。生徒の作成する拙い映像にしては、スケールが大き過ぎやしないだろうか。

何よりも問題なのは、自分達が映画の登場人物にされようとしている点である。愛達とてけして時間に余裕があるわけではないのだ。

それに正直、演技など出来るはずもない。

「こっちはその代わりに、映研の持ってる“学園”の見取り図と資料庫の鍵を貸してあげる。第二図書室の閲覧禁止棚、アレの入り方知りたくない？」

愛はぐっと言葉を詰まらせた。第二図書室の噂は検証予定に入っていたが、閲覧禁止の棚は部屋の更に奥、鍵の掛けられた個室の中にある。鍵を開けるか裏道でもない限り、あそこに入ることすら出来ないのだ。

「……本当に入れるの」

「決まりだね」

「人の話聞いてマスカー」

愛が詳細を追求しようとしたところで、遠くから聞こえた二人を呼ぶ声に遮られた。

志田さん、東海林さん、戻ってきなさい！

言われて振り返れば、体育館の入り口に一人の女性が立っている。

「あれ、クラリス？」

愛と渚は顔を見合わせた。現れたのはジュリアナ・クラリセージというアメリカ人教師で、バスケットボール部の顧問である。ちなみにクラリス、は彼女のニックネームだ。

顧問がこんな時間に姿を見せることは珍しい。二人は首を傾げると、ボールを持ったまま彼女のもとへ駆け寄った。

「どーしたんですか？」

問えば怜悧な顔立ちの女教師は、流暢な日本語で自室に戻るようにと囁く。その顔に微かな焦燥を見て取って、愛は再び首を傾げた。

「部屋に帰ったら連絡があるまで、絶対外には出てはいけないわ。良いですね？」

「え、何で？」

「……東海林」

戻ろう。

食い下がる愛の肩をぐいと掴んで、渚は静かに体育館を後にした。

＊

「冗談でしょ……？」

呟いた声は虚しく空中に霧散する。茫然と目を見開いたままの相手に、沙南はゆるゆると首を横に振ってみせた。つい先刻彼女が口にした“知らせ”は今、この学園内を騒めき立たせている。

――生徒が一人、死んだ。

清川芽衣子（きよかわめいこ）の遺体が発見された時、時刻は朝の七時を回ろうとしていた。第一発見者は野球部所属の少年である。彼は日課の朝練に向かう前に、一限で使用する教室の席を取りに行くつもりだったらしい。

自室に強制退却させられた愛が渚と別れ、部屋に着いた頃にはもう

“学園”全体にただならぬ空気が満ちていた。
待ち構えていたルームメイトに話を聞いた愛は、愕然した表情を浮かべその場に凍り付いた。それを告げた沙南もまた、心なしか顔色が悪い。

「清川って……何で……」
「第六棟の子だって」
「知ってる、志田のファンの子だ……」

愛は清川芽衣子を知っていた。直接面識があるわけではないが、よくバスケットボールの試合を見に来ていたのだ。身体も小さくおとなしい芽衣子は、男勝りでスポーツ万能の渚に細やかな憧れを抱いていた。
あの少女が、何故。

「なんで、死んだの？」
「……わかんない。事故なのか病気なのか――見つけた男子はショック受けて部屋に籠もっちゃってるみたいだし、清川さんのことは目撃者が増える前に先生達がどこかに運んだらしいから。それに自室待機命令でしょ、噂しか入ってこないんだよ」

言って沙南は唇を噛む。重たい沈黙が流れる中、二人の脳裏に浮かんでいたのは共通の一文だった。
“入れ替えの後には必ず死人が出る”――アンケートの中に紛れていた不吉な言葉。あれがこの事件を示しているというのは、はたして考えすぎなのだろうか。自分達はまだ何もしていないというのに、真っ先にあれが立証されてしまったとしたら？

「清川さんのルームメイト、今回の“入れ替え”で入ってきた子なんだって」

「……そう」

愛はシャワーも浴びぬままベッドに身体を投げ出した。時計の針が時を刻む、その音だけがやけに大きい。

第五章《迷霧》：アンダーグラウンド

「……どういうことだ？」

開口一番、少年は呻くように言葉を紡いだ。

夜の闇がすっかり落ちた頃、こうして彼らは本来の顔を覗かせる。

昼間に被っているのは表向きの、他人の目を欺き目立たぬことを目的とする姿だった。

偽物の制服に身を包んだまま駿は重たげに腕を組む。この服装のままでやってきたのは、万が一の事態に備えてだ。例えば運悪く、一般の生徒に目撃されてしまうだとか。

今少年の目の前には、二人の少女が立っていた。一人は肩まで伸びた漆黒の髪を持つ日本人、もう一人はそれとは対照的な、薄い銀色の髪をしている。

少女達は駿の所属する組織の一員、つまりは仕事仲間だった。巨大犯罪シンジケートの特殊部隊に所属する彼らは、普段は主に組織の敵との戦闘を請け負っている。今回この“学園”にやってきたのも任務のうちであったが、その目的はかなり奇異なものであると言えた。

「どう、って？」

問いながら、銀の輝きをツインテールに纏め上げた少女がことりと首を傾げる。おまけに一つ欠伸まで零したのは、こんな時間に呼び出されたことへの当て付けだろうか。黒髪のほうはおとなしく直立していたが、やはり少年の問いの意味をわかってはいないらしい。

今晩の駿はこの二人を、任務のうちとしての定期集会とは別用で呼び出していた。“学園”に生徒として潜入している駿とは違い、少

女たちは今回裏方にあたる。白昼堂々呼び出すわけにもいかず、こうして夜中を選んだのだ。

「しらばっくれんな。……生徒に死人が出ただろう」

駿は渋い顔をして声を潜めた。あの一件で教師側や生徒の警戒が強まり、うかつに単独行動を取れなくなってしまったのである。まったく、と少年は嘆息した。

「今回殺しは無しの予定だったろ。万が一そうせざるを得なくなったら連絡しろって、言ったじゃねーか」

「――それ、何の話？」

「……は」

少女の口から言い訳が飛び出すとばかり思っていた駿は、その余りにもきょとんとした様子に目を瞠った。

ちょっとまて。思って少年は少女の顔をまじまじと見つめたが、その目が嘘を言っている様子はない。

「え、マジ、……え？　ローザ、」

俺はてっきり、と駿は唇を噛んだ。彼にはあの生徒の死に関わったのが目の前にいる――ロザリーである、根拠があったのだ。

駿は清川芽衣子の遺体をその目で確認していた。教師がやってくる前に、単独でその死因を確かめていたのである。それが可能だったのは、芽衣子を発見した野球部員――不運な第一発見者となった彼が播磨亮平の友人であったからだ。

名を鹿島というその少年が清川芽衣子を見つけた後に向かった先は、教師でも警備員でも寮長の所でもなく、どうやら友達からは頼られるタイプらしい駿のルームメイトのもとだった。話を聞いた亮平が

教師の所に走っている間に、駿は単身現場へと向かったのである。

「お前じゃ、ないのか？」
「ひっど！　そんなわけないじゃんっ」
「……生徒が死んだのは知ってるけど」

憤慨した様子のロザリーの横で、もう一人の少女が口を開く。黒髪の彼女が身に纏っているのは普段の仕事着で、ここの制服とは違っていた。生徒に紛れて目立たないようにと渡していた擬似制服は、刀を提げられないという理由で結局着ていないらしい。腰に巻かれた帯刀用のベルトは、使いやすいように常着するスカートに縫い止めてあった。

「死因まではこっちに伝わってないよ。事故じゃなかったの？」
「……銃殺だ」

駿は低い声で呟いた。
清川芽衣子の胸には一つ、小さな穴が穿たれていたのである。直径は一般の拳銃の物と同等、弾はおそらく身体を突き抜けずに、ちょうど心臓の中程に食い込んだまま停止していた。
だからこそ駿は、その弾丸の主がロザリーだと思ったのである。安っぽい銃一つで距離と破壊力を的確に弾き出し、確実に一発で相手の息の根を止められる――そんな芸当が出来るのは、駿の知る限りこの少女だけだった。

「銃……」
「だからあたしってわけ？　シュンの単純。単純バカ！」
「だぁーッ！　わァったよ、悪かった！　……んでチトセ、お前その情報源は？」

ぶぅぶぅ文句を言うロザリーの頭をぞんざいに掻き混ぜながら、駿は黒髪の少女に問う。千瀬は二人の様子に笑いを堪えながら、淀み無く答えを口にした。

「ミクだけど」

「……そうか」

彼女の情報なら間違いはない、駿はそう一人ごちる。ミクさえ事件の詳細を知らないということは、“学園”の対応が予想以上に迅速であったのだろう。

“学園”の創始者はルシファー首領の義父、グラモア・ウィル・ハーキンズである。彼の死後その所有権はロヴに移ったが、けして運営の実権全てをルシファーが握っているわけではなかった。

“学園”には独自の運営団が存在し、ルシファーとは別の組織として活動している。ルシファーはそのうち幹部数人と繋がりを持っており、また莫大な経済援助も行っているため裏工作に有利ではあるのだが。

ルシファー側が自由に出来るのは、特定の生徒の出し入れと簡易な内部視察程度である。清川芽衣子の死因も、一度“学園”側に隠されてしまっては確認は難しい。

「ミク達に、教えてあげたほうが良いんじゃない？」

駿が思考に沈んでいると、小さくロザリーが意見を零した。それに少年も同意する。

一般の生徒は普通、銃など所持していないはずだ。何者かに殺された清川芽衣子、それが意味することは。

「……面倒くせェことになりそう」

＊

駿は少女たちの導くままに、“学園”の地下にある隠し部屋へと向かっていた。

“地下牢”の通り名で呼ばれるその場所は、“学園”側の人間にも殆ど知られていない。ロヴがグラモアから引き継いだ鍵をもってしか立ち入ることの出来ないそこはルシファーの任務における会議室の役割を果たしていたが、駿が足を踏み入れるのは今回が初めてである。

生徒としてこの地に潜入している駿は基本、その他のメンバーとは別行動だ。このような“緊急事態”に出くわしていなければ、通常連絡は無線と三日に一度の会合のみのはずだった。

「うへぇ」

その“地下牢”に続く通路の入り口を見た瞬間、駿は素っ頓狂な声を上げる。昼間は賑わいを見せる食堂の厨房、そこに立ち並んだ五台の大型冷蔵庫。その内一つが二十構造になっているなんて、一体誰が気付くだろうか。

冷蔵庫に三人もの人間が吸い込まれてゆく様は、傍から見ればホラーだと駿は思う。自分以外の面々が夜中にしか活動できないのはこういうわけか、と少年は一人ごちた。白昼堂々こんな場所から出入りなど出来るはずがない。

細く入り組んでいた通路は、やがてしっかりと開けて舗装された道になる。その先にあるのは全面がコンクリート壁に囲まれた“地下牢”そのものだ。雰囲気としてはルシファー本部にある〈ソルジャ

ー〉達の自室、“監獄”に少し似ていた。
同じ牢獄の名を持つ部屋であるが、“地下牢”の方は本物だ。正真正銘、この島が昔軍事施設であった頃の牢の名残である。

慣れた手つきで扉を開けたロザリーの後ろから、覗き込んで思わず駿は嘆息した。少年が初めて目にするその内部には革張りのソファーと起毛絨毯、天井から下げられたシャンデリアの煌めきが床まで零れ落ちている。所狭しと並べられた柔らかなクッションは、一体誰が持ち込んだのだろうか。外界からの光は届かないものの、それは一見高級ホテルのスイートと見間違えるほどだ。

「……どこが牢？」

金の無駄遣いだ。呟いて思わず目蓋を半分引き下ろした駿を見て、少女たちがくすくすと笑う。瞬間、三人に柔らかな声が掛けられた。

「おかえり」

駿が顔を上げたその先には碧い瞳を持った少女が立っている。金色の直毛は珍しく、今は後ろで一つに束ねられていた。
――ミク・ロヴナス。その若さとは相反して、犯罪シンジケート“ルシファー”の設立メンバーの一人である。そのまっさらな瞳に見つめられ、駿は些か居心地の悪さを感じた。
そのミクの後ろからひょこりと、今度は長い黒髪の少女が現れる。あら、シュンまで来てるわ。どこか楽しそうに呟いて彼女――ルカは、部屋の中に三人を招き入れた。

（どうにも、）

落ち着かねェな、と駿は思う。目の前に現れたこの二人と、自分が

同じ仕事現場にいるなんて。

――今回の“遠征”は今までに例を見ないほど特異な形態をとっていた。それを感じさせる最たる要因が、この任務に送り込まれた仰々しいまでの面子である。

目の前の二人は駿や千瀬、ロザリーをはじめとした実働部隊〈ソルジャー〉とは違う、幹部格の人間だ。幹部たちが直接仕事現場にやって来ることは、駿の知る限りこれまで一度もなかった。

さらに、今回この“学園”に送り込まれているのは今ここにいるメンバーだけではない。事前に聞いた話によれば外部からの応援も手配しているらしいし、ミクと同じ〈マーダラー〉に所属するジェミニカ・アルファーナは既に潜入済み。〈ソルジャー〉からは補助要因としてオミまでもが駆り出されていた。

（オミ、ねぇ）

派手な浅葱色の髪を黒に染められていた、あの姿を思い出して駿は一人笑う。オミの年齢は千瀬やロザリーより下だったが、今回は裏方ではなく生徒に扮する役割を担っていた。要は駿の同胞だ。

（だってチトセやローザは、）

彼女達は、迂闊に生徒と接触できない。それを思い返して駿は眉を潜める。自分だってけして、目立つ動きは出来ないのだけれど。

――さて、そこまでの人材を派遣してまで成し遂げようとする、問題はこの任務の目的である。“学園”にいることが不自然でない年齢の主だった戦力を総動員してまで、ルシファーが成し遂げたいこと――――それは、ルシファーに深く関与する“あるもの”の奪還であった。

“それ”の正体が何であるのか、駿は聞いていない。彼だけではな

い、千瀬もロザリーも、おそらくはオミだって知らないだろう。
事の詳細を知るのは幹部だけ、駿たち〈ソルジャー〉はそれのサポートとして動いている。一方は生徒の視点から、もう一方は裏側から。
ただし駿は、全てを知らないわけではない。この件に深く関わっている、日本人がいることを知っている。

――男の名は、ツネヒコと言った。

前回日本遠征に出ていた、日向ハルが椿とともに調べていた人間である。ルシファーはここ数年の間、血眼になって彼を探していた。
ハルがそれを駿に伝えたのは気紛れだったのだろう。けれどお陰で駿は、この遠征の目的を見失うことがなかった。

（ツネヒコは、ルシファーから“何か”を奪って行方を眩ませた）

そしてその逃走先が、この“学園”だとしたら。

「――何か話があるんでしょう？」

革のソファーに身体を沈めていた駿は、その声にはっと意識を取り戻す。気付けば目の前には紅茶の入ったカップが並んでいた。どこが牢なんだ、少年はもう一度思う。

「……あぁ。ちょっと、気になることがあんだけど」
「――メイコ・キヨカワのことね」

遺体を見たのね？
ミクに全てを見透かされていることを悟って、駿は小さく頷いた。
この少女はやけに勘が良い。もしかしたらそれはもう、勘の領域を

出ているのかもしれなかった。

「……アレは他殺だ。弾痕を見た」

「やっぱり――……」

「ウチの連中の仕業じゃないんだな？」

首を縦に振って、静かに肯定する。ミクの仕草を見て駿は嘆息した。嫌な予感程よく当たる。それは駿にとっても例外ではなかったらしい。マズイことになったんじゃねェの、そう呟いたのを聞き咎めたロザリーが首を傾げた。

「何がマズイの？」

「……お前のアタマ平和で良いなー」

めんどくせ。思いながらも銀色の輝きをぽかりと一発叩いた後、駿は再びその口を開く。

何だかんだ言って面倒見が良いのは彼の性分だ。横でつっ立っている千瀬も間違いなく、現状を理解していないのだろう。

「“学園”の規定で、生徒は武器凶器の類を一切持ってないはずだろ。武器持ってるのは潜入してる組織、俺たちルシファーくらいなもんだ。でも今回は俺たち以外に、殺しをやってのけるような奴が現れた――」

厄介な第三者が、潜んでいる。

その目的はわからないし、ルシファーの敵になりうる存在かも不明だ。ただ、見過ごすわけには行かないということは確かである。敵ならば敵と、早期に見分けなければならない。

「調べる必要が、ありそうね。まずはメイコ本人について」

じっと空中を見据え、何かを考え込みながらミクが呟く。
それまで微動だにせずその場を見守っていた、ルカが口を開いたのはその時だった。

「――チトセ」
「……は、はい！？」

突然声を掛けられて千瀬は仰天する。ルカは漆黒の瞳をすっと細めて笑った後、お願いがあるんだけど、と呟いた。

「お願い……？」
「殺されたメイコのルームメイトに接触して、彼女の話を聞いてきてほしいの。死ぬ前の行動や、最後に誰と会っていたか」

あたしですか！？　叫び声を上げた千瀬の訴えはさらりと流される。確かに千瀬は適任であると言えた。女子寮に駿が行くのは憚られるし、ロザリーでは日本語が喋れない。この学校は日本人の割合が高く、圧倒的に日本語が普及している。様々な国からやってきている生徒の殆どが、日本語を扱えるのだから。

「つい先日入学してきた子よ。“学園”は生徒のプライバシーを堅く守るシステムが確立されてるから、それ以上詳しい個人情報は引き出せなかった――ロヴが直談判してくれれば良いんだけど、そんな時間はないし」

言ってルカは千瀬に一枚のメモを手渡した。実に用意周到である、本当ははじめからそのつもりがあったのだろう。
つくづくルカの考えは読めないと、傍観に撤しながら駿は思った。

「よろしくね。その子の名前は“アイジャ”」

千瀬は握らされた紙切れに視線を落とした。清川芽衣子の部屋番号が、流れるような字で綴られている。

第五章《迷霧》：籠鳥（1）

「どの制服にしますかネ？　シャツにタイとベストでも爽やか！　ああ、でも清楚さを出すならセーラーにしてもらったほうが……」

目の前でぺらぺらとまくしたてる人間に隠れ、沙南はげんなりと息を吐いた。

沙南と愛の部屋に入り浸って制服談義を繰り広げる人物は、先刻から自分の脳内を言葉にするのに忙しい。沙南に白の眩しいセーラー服を投げ渡し、愛に臙脂と深緑のリボンを交互に当て、あーでもないこーでもないと唇をひっきりなしに動かしている。

逃げるように泳がせた沙南の視線は最終的に、部屋のドアで停止した。次の瞬間、絶妙なタイミングで扉が開く。

「沙南ー、例の鏡の話なんだけど」

「……あれ？」

がちゃり、音をさせて部屋に入ってきた双子が首を傾げた。翠子と薫子はそっくり同じ仕草をして目の前の珍人物を見た感想を述べる。だれ？　二つのソプラノは綺麗に重なった。

「まあまあ！　素敵なヒロイン達こんにちは！　申し遅れましたワタクシ、映画研究サークル映像監督の山口と申しマス！！」

よろしくネ！

語尾に星のマークが散りばめられそうな勢いで言い放った彼女は、まごうことなきこの“学園”の生徒である。

愛がバスケットボール部のチームメイト、志田渚と（半ば強引に）交わした契約は“あんな事件”が起こったにも関わらず実行される

ことになった。協力の報酬に提示されたもの――とくにあの、図書室の禁書庫について――の価値を思うと、無下に断るわけにも行かないというのが一番の要因だ。

全面的な協力を了承した翌日、愛たちメンバーのもとを訪れた渚は数人の新たな人間を引き連れていた。今ここにいる“自称”映像監督、山口女（やまぐち うるき）もその一人である。

平凡な姓に性別が一目瞭然の珍妙な名前を併せ持った、彼女もまた愛な沙南と同様“特別選抜”の生徒だ。ただし単純な一芸などではない――彼女はその頭脳を買われて入学した、正真正銘の天才だと言われていた（嘘っぽい、と愛は思っているのだが）。

“女”と書いて“うるき”と読む。字面があまり良くないことを気にしてか、姓と合わせても総数九画にしかならない単純な名を嫌ってか、本人が名を漢字で表記することは滅多にない。

この、自称映像監督と翠子達は今日が初対面だった（既に一度面通しは終えていたが、受けている授業が一人一人で違うため、全員が一度に顔を合わせることは難しかったのだ）。

素敵ツインズ！　とわけの解らないことを叫んだ後、うるきは二人に向かって何やら衣服を放り投げた。彼女の持ち込んだトランクは内部が四次元なのか無尽蔵なのか、とんでもない量の衣裳が詰め込まれているらしい。

ちなみに大した人数がいるわけでないこの映画研究サークルでは、映像監督がメイクと衣裳も同時担当しているのだった。

「――うるき、それもう良いから」

話が進まないんだけど。

気配が掻き消えてしまうほど静かに事の成り行きを傍観していた渚の一声によって、どうにか着せ替えショーには終止符が打たれた。

うるきは不満げに唇を尖らせた後、渋々衣裳（といっても制服だが）

を片付け始める。
と、そこに控えめなノックの音が鳴り響いた。愛がどうぞと声を掛ければ、開かれたドアの隙間からまばゆい金色の髪が覗く。

「わぉ、マリリン！」
「こんにちは、アリサちゃんつれてきました」

高らかに叫び両手を上げて迎えたうるきに、朗らかに笑いかけ少女が入室する。その丸い瞳は淡い紫がかった色をしていた。柔らかな金のウェーブをカチューシャで押さえ付けた、その容姿はどこか“不思議の国のアリス”を想像させる。――少女の名はマリア・ウィンチェスター、映画研究サークルの一員だ。マリリン、はうるきが勝手に命名した彼女の呼び名である。
次いでマリアの後ろから顔を覗かせて会釈した、こちらはそのルームメイトだ。アリサと呼ばれた彼女は今回、渚たちと同じ班で学園展への準備を進めることになっている。

「はじめまして、邑智亜梨沙（おおちありさ）です」

ぺこりと礼儀正しく頭を下げた亜梨沙に、つられるようにして愛たちもお辞儀を返した。お互い顔は知っていても、こうして話をするのは初めてだ。

「……じゃあ、面子揃ったからはじめようか」

立ち上がって言う渚に一同は頷いた。
これから始まる本格的な“調査”と、それを追う形になる“撮影”。
今日はそれに備え、お互いの交流を兼ねた打ち合せを行うのだ。
時間の都合で双方とも、メンバーが全員揃っているわけではない。
沙南たち“七不思議”班はロアルと百瀬、絹華を欠いた状態だし、

一方の“映画”班も渚とうるき、マリア、亜梨沙の他に残りメンバーが数人が控えているらしい。
各班の代表者は現段階で、愛と渚ということになっている。同じ部に所属するもの同士、連絡も取りやすいだろうという配慮からだった。

「とりあえず、ハイこれ」

言って渚が差し出したのは古びた大きめの茶封筒だ。愛は一つ首を傾げてからそれを受け取る。なにこれ、呟いて中身を覗き込んだ愛は次の瞬間目を見開いた。

「……これって」
「約束したでしょ」

愛が封筒から引き出した紙には、建物の見取り図が描かれていた。ここにいる誰もが見覚えのあるその造りは、間違いなくこの“学園”のものである。
うわぁ、と双子が揃って声を上げた。沙南もそっと息を呑む。こんなもの、いったい何処から。
――何故かは解らないが、この“学園”に見取り図は存在しない。教室の場所を示す案内図も、掲示板さえ見当たらないのだ。少なくとも、生徒の目に届く範囲には（だからこそ、何かが隠されているという噂が流れるのである）。
愛も同じ事を考えたのだろう、何処から手に入れたの、と硬い声色で問い掛けた。

「正確にはあたしのモノじゃなくて映研の――マリアが手に入れたやつだけど」

大したことなどないようにさらりと渚は言う。話を振られたマリアに視線が集まって、見つめられた本人は小さく笑った。

「なんでも、ないのですよ。前に図書室でたまたま、見つけて……コピー、しちゃいました。ひみつで」

にこりと笑った少女が首を傾けて、さらりとその金髪が揺れる。マリア・ウィンチェスターはどこかたどたどしい、敬語混じりの日本語を話す。母国語でないのを努力しているのからだろう、ひらがなで発音されるその様は彼女をどこか幼く見せていた。見た目も可憐なマリアであるが、性格のほうは多少大胆なようだ。無断コピーの告白をされ、愛は思わず封筒から手を離す。

「見取り図より、設計図って感じなんですよネ」

その紙をまじまじと検分していた、うるきが言いながらその一点を指し示した（うるきの口調はイントネーションがどこかおかしい。わざとらしい敬語が嘘っぽい、とまた愛は思う）。図の表面に薄らと引かれた鉛筆線。紙の端には筆記体で綴られた英語が這っていて、読めないが何かをメモしたもののようだ。

愛は紙の上部に視線を滑らせた。学舎の奥、第二図書室は容易に発見できる。そしてそこに描かれた、小部屋の存在も。

「この先“七不思議”組が調査に出る時は、ビデオカメラを扱える映研の誰かが必ず同行させてもらうから。うるきかマリアか……他のヤツかも知れないけど」

渚の言葉に頷きながら、愛は一つ首を傾げた。

「邑智さんは？」

「あ、あたし映研のメンバーじゃないから」

慌てたように亜梨沙が口を開く。

あたしのコトは亜梨沙で良いよ、そう愛に言った彼女は話によれば吹奏楽部に所属しているらしい。器材の扱いは専門外だと笑った後、亜梨沙はふと声を潜めた。

「……あのさ、東海林さん達は」

「呼び捨てで良いよー」

「じゃあ、お言葉に甘えて。愛たちが調べる噂の中に、女の子の話ってある？」

ぴくり、亜梨沙の言葉に反応を見せたのは愛ではなく沙南だった。息を詰めたのがわかったのだろうか、翠子が怪訝な面持ちで沙南を振り返る。

「一番有名なやつでしょ？　もちろんやるつもりだけど」

「……実は、その女の子なんだけどさ」

――見ちゃったかも、あたし。

落とされた亜梨沙の告白に一同は騒然とした。マジで！　叫んだ愛とは反対に、沙南は無言で唇を噛む。

「いつ！　どこで！」

「おとといの夜……四棟の自販機のとこ」

「四棟！？」

ここじゃん！

全員が揃って声を上げた。マリアと亜梨沙は沙南たちと同じ、ロア

ルを寮長とした第四棟所属の生徒である。ちなみに渚も同じ四棟、うるきはその隣の第五棟に部屋を持っている。

「アリサちゃんの言ってることは、たぶん、本当です。わたしもその場に行ったけど、もう誰もいなかったです」

続いたマリアの言葉に愛が小さく唸った。マジで幽霊なのかな、呟いた声は奇妙な沈黙に掻き消されてしまう。

「……でも、一人じゃなかった気がするんだよね。確かに長い黒髪の子はいたんだけど」

「……えぇえぇ？」

亜梨沙からさらなる情報を引き出そうとしている愛をよそに、沙南は眉を寄せて一人考えを巡らせた。

もとから触れたくない話題だったが、今はもっと不吉な予感がしている。亡霊と聞けば否応なしに、死んだ清川芽衣子を連想してしまうからだ。

この部屋に今はいない、ロアルと百瀬のことを沙南は考えた。わざわざこの噂の調査を選んだロアルと、百瀬の反応。

杞憂であれば良いのに、と沙南は思う。けれど自分の勘がなかなか馬鹿にはならないことを、長年の経験から少女は知っていた。

「調べるしか、ないんじゃないですかネ？」

そう楽しそうに零した、うるきの笑い声だけが響く。

第五章《迷霧》：籠鳥（2）

始業を告げるベルの音が響いている。同じメロディーを二度繰り返したそれの、ぼんやりとした余韻が溶けていくのを聞いていた。授業がはじまってしまった、少女はぼんやりと思う。教室に行かない自分達は、生徒としては間違った行為を行っていることになるのだろう。

けれど全く構わなかった。もとから生徒としては異端な存在である彼女は、いくら単位を落とそうとも退学することはない。逆に全ての単位を取り零すことがなかったとしても、卒業することはない。少女は“学園”という名の、籠の中にいるのだった。鍵は掛けられていない、扉は開いている。でも彼女には、羽ばたいてゆくことの出来る空がない。

「……ロア」

少女は共に授業をエスケープしている、銀髪の相手を見つめた。日本人のそれとは違うプラチナの輝きが陰の中でもまばゆい。同じ色の瞳は水銀のような輝きを隠して、今は伏せられてしまっている。彼女もまた、この籠で世界と隔絶された人間だった。

ロアル、と再び少女――百瀬は相手の名を呼んだ。授業をサボってまで百瀬をここに呼び出したのはロアル自身だというのに、いざ顔を合わせてみれば無言を貫いている。少し調子を強めて再度呼び掛ければ、やっとロアルは顔を上げた。

「……――モモセ、」

「話っていうのは」

例の噂についてでしょう？

先手を打って百瀬は、ゆっくりと言葉を唇に乗せた。静かに一つ頷いて肯定する、ロアルの顔が心なしか青白い。

百瀬とロアルが今回、東海林愛の率いる班に加わることになったのは偶然だった。その日その時間たまたまその場所にいて、たまたま持ち上がった“学園展”の話題に巻き込まれることになっただけ。ちょうどその場に集まっていた七人で班を結成した、その中に含まれただけの話だった。――それがこのような題材を選んでしまうなんて、一体誰が予想できただろう。

怖いもの見たさに行動を起こすことは、この年頃の少女ならば一度や二度あることだ。それでも百瀬には、“この話題”に気乗りできない理由があった。それはこの、ロアルもわかっていたはずなのに。

「……どうしてわざわざ、あの噂を選んだの」

百瀬は声を潜め、一番気になっていた点について言及した。

――この“学園”には以前から、“少女の亡霊”が現れるという怪談が伝えられている。腰まである長い黒髪を靡かせて校舎内を彷徨い歩く、生徒と同じ年頃の少女の話だ。噂の立つ頻度は数か月に一度。目撃情報は多いにもかかわらず、その詳細を知るものはいない。ただの噂話ならば構わなかった。百瀬がこの怪談に過剰な反応を示すのは、彼女に“亡霊”の心当たりがあったからである。

「“あの人達”と関係があったらどうする気？」

百瀬はたった一人だけ、長い黒髪の少女を知っていた。自分自身も艶やかな黒髪をしている百瀬であるが、“彼女”のそれとは違う。あれは闇をそのまま閉じ込めたような、不可侵の色をしていた。

“あの人達”と曖昧な表現をしたのは、百瀬が“彼女達”について詳しいことを何一つ知らなかったからだ。

――否、一つだけ。一人だけ、知っている人間もいる。

「亡霊なんかじゃ、ないんじゃないの？　もしここに“あの人達”が――」
「……来てるのよ」
静かに零された言葉を理解するのに時間が掛かった。しばし口を閉ざした百瀬は、漸くロアルの言わんとしていることを悟って目を見開く。
まさか。思わず言葉にしたそれは無意味だと、百瀬自身が一番良くわかっていた。嘘を吐く意味など、微塵にも存在しない。
「会ったの。会って、第四棟の鍵を開けておくように言われた――ルカ・ハーベント、本人が来てる」
「……開けたの？」
「ええ」
消灯時刻を過ぎれば、寮棟の入り口は翌日の朝まで鍵が掛けられる。その鍵の管理をしているのは各寮の寮長だ。
瞠目した百瀬の黒く濡れた瞳が微かに揺れた。動揺しているのはロアルも同じで、小さく無理な笑顔を作って息を吐く。
「四棟ってね、校舎に続く地下通路があるんですって。どうして“あの人達”が私をここの寮長に据えたのか、やっとわかった」
「地下通路なんて……ロア、」
あの人達は、何をしに来たの？
問えばロアルは目を伏せて、静かに首を横に振った。わからない、と銀髪の少女は言う。わからないけれど、でも。
「清川芽衣子を殺したのは、あの子かもしれない」

「……！？　そんな、」
「そんなことないなんて、言い切れる？」
ぐっと言葉に詰まった百瀬を、少女のやわい銀色の瞳が見つめる。
その目はけして悲しみを湛えているわけでも、怒りを帯びているわけでもない。ただあるがままの事実を懇々と諭す、それだけを目的としていた。
忘れてしまったの？　ロアルは百瀬に視線をやったまま、困ったように笑いかけた。責めるような声音ではなく、幼子を宥めるように。
「“あの組織”はね、犯罪シンジケートなのよ。犯罪者の集団が――殺人犯が、大勢集められている」
「……わかってる」
“あの日”百瀬が説明されたのは、たった今ロアルが語ったものと寸分違わぬ内容だった。たったそれだけの情報を持たされ、身一つでここにやって来たのだ。
わかってる。少女はもう一度呟いた。
「どうしてルカが学園（ここ）にいるのかは知らない。でも何かきっと、良くないことが起こるわ」
「……その始まりが、清川芽衣子……？」
「彼女は一般の入学生だった。“あの組織”とは、関係のない」
そこで何かを逡巡するようにロアルは言葉を切った。それを見て百瀬もふと眉をひそめる。
ここでの生活が長いロアルは、“あの組織”の伝で“学園”にやって来る生徒の殆どを把握していた。そもそも百瀬が彼女に出会うに至ったのも、それが関係してのことだ。
――無関係な一般の生徒に、被害が出ている。その事実の重大さに

気付いた途端百瀬は、血液が凍るような心地がした。

「噂の“亡霊”がルカかはわからないけれど……目撃情報のうちいくつかは必ず、あの子のことだわ」

「もし、そうなら」

「噂を調べて遡ったアイたちが、あの子に――“あの組織”に辿り着くのは危険なのよ」

ロア、あなたまさか。

目の前の少女は最初から、これを危惧していたのだ。漸くそれを悟って百瀬は声を上げる。

「皆に“あの組織”のことを、気付かせないために……？」

確信をもって問い掛ければ、ロアルは小さな微笑みを浮かべた。それからまた表情を引き締め、小声で告げる。

「これは私達だけの秘密にするつもり。ここには“あの組織”を恨んでいる子だっているわ、この話は伝わらないほうが良いと思うの。――“亡霊”についての噂は、私とモモセで何かでっち上げましょう」

「……わかった」

真相の捏造を承諾して百瀬もまた、かの組織に想いを馳せる。ただ一人の肉親は今、何処で何をしているのだろうか。

（……千瀬、）

百瀬は今も後悔している。

血筋の業を全て押しつけ、のうのうと生きていたあの日までの自分。

あの時全てを失くしたのは、自分ではなくあの子供だった。

百瀬は今も後悔している。

血に濡れた家の中で立ち尽くした最愛の妹の名を、あの日一度も呼んでやらなかったことを。

第五章《迷霧》：間話

少年は空を仰いだ。
誰かが締め損なった水道の、ひたひたと水滴れる音。少し太くなった鉤爪のような三日月が夜空に鎮座して、辺りを薄暗く照らしている。星も幾つか出ていたけれど、一つの星座も知らない彼には興味など沸かなかった。
時刻はもう深夜零時を回っていて、しまったな、と少年は思う。他寮の男子生徒と合同で新入生の歓迎会（という名目の馬鹿騒ぎ）を開いていたら、知らぬ間に消灯時間を過ぎてしまったのだ。
企画者の播磨亮平は最初からこれを予測していたのか、事前に自棟の寮長に交渉を済ませていたため何一つ問題なく部屋へ帰っていった。頭の良いヤツは狡い、少年はぼやきながら辺りを見回す。第三棟に所属している彼は寮長に連絡も出来ぬまま、こうして締め出しを食らっているのだ。

「勘弁してくれよー」

このままじゃプチ野宿だ。いや、それならまだ教室で寝たほうが。この“学園”は孤島の上に建っている為、生徒は誰一人として携帯電話を持っていない。友達に連絡を取ることすら叶わない彼は、独り悶々と思考を巡らせた。――そう、独り。どういうわけなのか、一緒に締め出された筈の少年のルームメイトが先刻から姿を消しているのである。

「おーい、ウォルディー。どこだよ」

時間を考慮しながら囁くようにその名を呼ぶ。
少年のルームメイト・ウォルディは、先日の“入れ替え”でやって

来た新入生だった。つまり催されていた“歓迎会”の主役の一人である。物腰の低く穏やかな少年で髪は柔らかな赤毛、育ってきた環境がよろしかったのだろうか、語学に達者で流暢な日本語を話す。しっかりした人間なのかと思えばそうでもなく、まだ慣れていない寮棟の中を一人フラフラと出歩く悪い癖を持っていた。頻繁に迷うウォルディから目を離さないようにしようと少年は誓っていた、のに。

「ウォルってばー……、ん？」

薄暗い中で目を凝らしていた少年の視界に、ふと人影が映り込んだ。ウォルディ、呼びかけて思い止まる。ルームメイトにしては些か、いやかなり小柄ではないだろうか。

こんな時間に誰だよ。自分のことはすっかり棚に上げて、少年はその人影の方へ歩み寄った。段々と鮮明になる相手の輪郭を確認しながら、一歩ずつ。

最初に見えたのは、瞳だった。白い肌から浮かび上がる黒い目が真直ぐ少年を捕らえている。次いで髪、色までは判らないブレザーとタイ、スカートの襞。

（……女の子？）

目の前に現れた少女は、少年よりもだいぶ頭が下のほうにある。見たことの無い生徒だな、ぼんやり少年は考えた。

見上げられる形になってようやく絡み合う視線は、一度捕まれば何故か逸らせなくなる。圧倒的な存在感を持つ長い黒髪が、さらりと揺れた。

「えっと……どしたの、こんな時間に」

その時少年はまだ、“学園”を騒がせている噂の存在を知らなかった。くだらない伝説や噂話になど興味がなく、極力耳に入れないように努めていたためだ。
話し掛けた少年の声に反応したのか、少女はその瞳をゆるりと二度瞬かせた。

「迷子？　……なんちゃって」
「――――、」
「あ、もしかして寮に帰り損ねた？　いや俺もさァ」
「……を、知らない？」
「……え？」

沈黙に耐えかねて口を動かし続けていた少年は、突如相手が声を発したことに目を見開いた。囁くような声がもう一度、少女の唇から零される。

「ツネヒコを、知らない？」
「つねひこ？」
「アサカ　ツネヒコ」

ぽかんとしてしまった少年はそれが人の名だとわかるまでに時間を要した。少女が一度も彼から視線を逸らさないので、その黒い瞳に吸い込まれそうな錯覚を覚える。それに少年は慌てて首を振り正気を保とうとした。

「生徒のこと？　それとも先生？」
「わからないの」
「……えぇえぇ。でもソイツ探してんでしょ？」
「探してるのは、鍵（キー）」

……わけがわかんねェ。
少年は頭を抱えた。この“学園”で鍵がかかる場所なんて寮の出入口くらいだ（無論他にも存在するが、少年は知らなかった）。

「……とりあえず、三棟にアサカって苗字の奴はいねーけど」
「……そう」

さして落胆する様子も見せず淡々と、少女は小さく呟いた。そのままくるりと背を向けられて少年は仰天する。
なにこれこの展開！　心の中で叫びながら彼は声を上げた。不可解なことが多すぎる今の状況で、このままこの少女を逃がしてはならないような気がしたのだ。何よりも少年自身が、少女に興味を持っていた。

「ちょっとまって！」
「……――君？」

しかしその瞬間背後から聞こえた第三者の声に、咄嗟に少年は振り返ってしまう。見れば彼の探していたルームメイトが夜を背負ってぼんやりと立っていた。

「ああ、やっぱり。トウゴ君だ」
「ウォルディ！　おっまえ、……あ、」

気付いた時にはもう遅かった。少女は跡形もなく消え失せて、後にはぽっかりとした暗闇だけがある。
歩いてこの場を去ったにしてはあまりにも早い。少年はしばし呆然とした後、悔しそうに唇を噛んだ。

「……ちくしょ、」

「……トウゴ君？　寮に入れないって言ったらね、シュン君達が二棟で匿ってくれるって。行くだろう？」
「あー、うん……」
うわの空の返答をしながら少年は消えた少女のことを想った。闇を凝縮したような黒い瞳と、絹糸のような同色の髪。瞼の裏にくっきりと焼き付いて忘れられない。忘れられる、はずがない。
少年はぎゅっと掌を握り締めた。こんな経験は初めてだ。あの数分の間に、少年の心は名も知らぬ少女にすっかり捕らわれてしまっていた。
（ぜってェ、見つけてやる）
傍らに佇むウォルディが凪いだ瞳で闇の中一点を――第四棟寮のほうを見つめていたことに、その時少年は気付かぬまま。

第五章《迷霧》：接触（1）

扉の前に佇む少女が一人。
学園指定の制服に身を包んだ彼女の、艶かな黒髪は肩より少し長い。俯いたせいで切り揃えた前髪が、同じ色の瞳を僅かに覆い隠していた。
少女はちらりと自分の衣服に視線を送る。いつも腰から下がっている黒鞘の姿はない。当たり前だが、刀など持ってくるわけにはいかなかったのだ。
ブーツに慣れた足を包むローファーも、ふくらはぎを隠している濃紺のソックスも、スカートのプリーツも。何だか落ち着かなくて、思わず少女は溜め息を吐いた。

（……６２４号室）

第六棟寮二階、廊下の奥に位置する部屋だった。この扉の前に立ってからもう数分が経とうとしている。
少女は今、一つの命にしたがってここへやってきた。６２４号室の住人と接触し、先日殺害された清川芽衣子についてリサーチすること。少女の所属する組織にとって重要な点は、清川芽衣子が一般の生徒か否か、だった。一般の生徒でない場合とはつまり、“学園”に潜入している“ルシファー”以外の組織の構成員である時のことを示す。
時刻はまだ昼過ぎ、このままでは他の生徒に見つかってしまう恐れもあるだろう。暫しの逡巡の後、ようやく少女は決意を固めた。
恐る恐る伸ばした拳で扉を叩く。コン、コン、響き渡る乾いたノックの音。

「――、」

部屋の中から微かないらえが返る。何と言ったのかはわからなかったがしかし、少女――千瀬はその声を合図にドアノブを握った。軽やかな音を立てて開いた扉の向こうに一つ、小さな人影。お邪魔しますと言い掛けた、その瞬間だった。

「――やっと入ってきたね」

開口一番、部屋の主の放った言葉に千瀬は目を見開いた。彼女が入室を躊躇っていたことを知っているようなその口振り。気配の断ち方には多少自信があっただけに、千瀬は酷く驚いた。そのまま硬直した少女の何を勘違いしたのか、相手は首を傾げてから小さく笑う。

「ニーハオ？　ニングイシン？」
「……へ、え？　ニン？　え？」

何、何!?
わけの解らないこと（それが中国語であるということさえ知らない）を突然口にされた千瀬は慌てふためく。それを見て気付いたらしい、なぁんだ、と部屋の主である少女は微笑んだ。

「やっぱり日本人なのね。喋らないから、日本語がわからないのかと思っちゃった」
「……すみません……」

出会って一分も経過していない相手にいきなり謝罪することになり、千瀬は心中で溜め息を吐いた。黙りこくって喋らない彼女を見て親切にも相手は、話し掛ける言語を変えてくれたらしい。
落ち着きを取り戻した千瀬はそこで漸く、相手の容姿を観察することができた。今はたった一人となってしまったこの部屋の主。清川

芽衣子のルームメイト、アイジャを。

「何かご用？」

美しい、少女だった。

淡い金の巻き毛はかなりの長さがあるのだろう、今は伸ばした前髪ごと耳の上で二つに束ねられている。その滑らかな光沢はどこか、スパニエル犬の毛並みを想像させた。

長い睫毛に縁取られた瞳の色は深い海の色だ。瑠璃にも似た輝きが瞬きの度に、宝石のように煌めきを帯びる。

ドレスを着せたらさぞ似合うだろうと、目を離せぬまま千瀬は思った。アイジャの細い体躯は他の生徒と同じ、多種多様なものから選ばれた制服の一つに包まれている。

「わたし、アイジャ。あなたのお名前は？」

「え、っと……」

本名を名乗るべきか否か、ほんの少し逡巡する。しかしそう気のきいた偽名を直ぐ様思いつくこともできず、結局千瀬はその名を口にした。

「……ちとせ、です」

ちとせ、ちとせ、ね。

嬉しそうに何度か口の中で呟いて、アイジャはにこりと笑ってみせた。おそらく千瀬と同年代であるはずの彼女だが、仕草が何処か幼い。

「それで、チトセはどうしたの？」

「清川芽衣子さんについて、聞きたいことがあるんです」

「メイコのこと？」
「芽衣子さんって、どんな子だった？」

世間話にしては、明らかに不自然な質問だった。千瀬は冷や汗をかきそうになりながら、何とか表面上は平静を装う。初対面の相手にこんなことを聞かれて不思議に思わないはずがないだろうに、思いの外アイジャは協力的だった。少女は小首を傾げ、ゆっくりと思いを巡らせるような素振りを見せる。

「メイコはとっても優しい子だったわ。アイジャに“学園（ここ）”のこと、たくさん教えてくれたもの。いつも一緒にいてくれた」

清川芽衣子は部活やサークル等には無所属だったと言う。進んで自分の面倒を見てくれたのだと、アイジャは自身の唇で語った。

「死ん……亡くなった日は、何かあった？」
「いいえ。メイコ、教室に忘れ物したって……それだけ」

ふとアイジャの表情が曇る。それを見て、千瀬もそっと眉を寄せた。アイジャの話が本当ならば、清川芽衣子が何者かと関わりを持っていたという線は薄い。入学したてのアイジャは確かに、誰かの手を借りなければ日常生活にさえ不便が生じる状態だったのだろう。“千瀬たち”のように所属する先のある人間ならば、四六時中アイジャと行動を共にするのは不可能なのだ。

（……やっぱり）

清川芽衣子はただの一般人。千瀬はそれを確信する。芽衣子はおそらく犠牲者なのだ——第一、そうでなければ無抵抗で銃殺などされはしない。

少女はそっと息を吐いた。清川芽衣子が万が一、一般の生徒でなか

った場合。千瀬に下されていた命令は、そのルームメイトであるアイジャまでもを調べることだった。そして“ルシファー”に敵なす組織の一員であった場合は、始末せよ、と。

「どうして皆、メイコのことを聞きたがるの？」

「……“みんな”？」

ぽつりと落とされた呟きを千瀬の耳が拾い上げた。その発言に僅かな違和感を感じて見やった先で、アイジャは小さく頷く。

「うん。昨日、話を聞きたいってゆう子が来たのよ。ナナフシギ、がなんとかって……」

「七不思議――？」

「その子、今日も確か来るって言――……」

アイジャの言葉が不自然に途切れた。瞬間、部屋の中にノックの音が響き渡る。

誰かが来た――それに気付いて千瀬は咄嗟に身を翻した。開きかけた扉の方へ、真直ぐに駆ける。

「アイジャ？　昨日話した東海林ですけ――うわッ！？」

来訪者と入れ替わるようにして身体を扉の隙間に滑り込ませる。そのまま千瀬は振り返ることなく寮を後にした。まだ日が沈んでいないから“地下牢”には帰れない。けれど何としてでも、仲間と連絡をとる必要があった。

しょうじ、そう名乗っていた声が頭に反響する。

（――清川芽衣子について調べてる人が、いる）

第五章《迷霧》：接触（2）

場所は変わって中庭。
広々とした芝生の広がるそこの端に、校舎や寮棟とは別の建物がある。四階建て、まだ新しさを残す綺麗なそれは近年改装されたばかりの部室棟だ。その名の通り、各部活動やサークルに一つずつ与えられている部屋の集合する建物である。

「でね、その時に中庭で男子がサッカーやってたんだけど。暇潰しに見てたら、超カッコ良い人がいてさぁ」
「名前、わからないんですか？」

映画研究サークルの部室にはその日も数人が集まって、熱心に映画について語――っていたわけではない。他愛もない話に花を咲かせているマリアと亜梨沙の横では、自称映像監督・うるきがテレビを見ながら手のひらでルービックキューブを転がしていた。ちなみに亜梨沙は映研の部員ではないのだが、基本この部屋は来るもの拒まずの状態である。

「見たことない人だったんだよねぇ……運動神経抜群で！　もぉ、うわぁって感じ！！」

目を煌めかせながら語る亜梨沙は、先日男子生徒によって行われたサッカーの試合を観戦した際に名も知らぬ少年の虜になってしまったらしい。所謂、一目惚れというやつだ。

「その男の子、今回の新入生、かな？」

首を傾げて相槌を打つマリアの横で、青春ですネェ、うるきがぼや

く。

しかしその穏やかな時間は次の瞬間、がたぁぁぁんというけたたましい音と共に消え去った。部屋の扉が吹っ飛んで（そんなふうに錯覚するほどの勢いだったのだが、実際は辛うじて蝶番に引き止められた）開いたそこから突然の来訪者が顔を出す。

「ちょっとお邪魔します！」

「ありゃ、沙南サン？」

うるきが驚いて目を見開いた先、五十嵐沙南が部屋の中へと歩を進めた。よく見れば沙南はその背後にもう一人を従えて――正確には東海林愛の二の腕を掴んでいて、ずるずると引き摺るように歩いている。

「うるき、どういうことか説明してもらいましょうか」

「……あちゃー」

ばつが悪そうに顔を背けている愛を見た瞬間、うるきは全てを悟っていた。ああこりゃバレたな、と。

愛が第六棟から出てくる所をたまたま沙南に見られたのは、不運としか言いようがなかった。清川芽衣子のルームメイト、アイジャとコンタクトをとることを企画したのはうるきである。反対されるのは目に見えていた故、これは愛とうるきだけの内密な行動だった。

「全部聞いたよ。清川さんについて調べて、どういうつもり？」

問い詰められてぐっと言葉を失う。沙南の剣幕は普段に比べれば凄まじい。うるきは暫し目を泳がせた後、観念したかのように息を吐いた。

「愛サンにですネ、こっそり教えてもらったのですよ。“入れ替え”の後に死人が出るって噂があるらしいって」
「……！　愛！？」
「うひゃッ」

顔を手でガードしながら縮こまる愛を見て、沙南は小さく溜め息を吐いた。何だかんだ言いつつ、やはりあの話を愛は気にしていたのだろう。
勿論、沙南だって気掛かりではあった。だからこそ触れないようにする、そこが彼女と愛の違いである。

「そんなお話聞いたら、調べたくなっちゃうじゃないですかァ。映研としても、私個人としてもネ。だからまず皆にはナイショで、私と愛サンだけで調べることに」
「……でも！　“学園”が清川さんのことについては一切の詮索を禁止にしたじゃない」
「校則なんて破ってなんぼ」
「……寮長だって何度も釘さしてた」
「第五棟の寮長はなんも言ってませんでしたヨー」

そうなの？　眉を寄せた沙南に、うるきは勢い良く頷いてみせる。確かに第四棟寮長・ロアルは清川芽衣子について、過剰とも言える反応を示していた。“学園”の規則は絶対だと言い張り、極力第六棟にも近付かないようにと呼び掛ける。七不思議を調べる沙南たちの班に寄せられたあの噂（気味が悪くて誰も触れようとしなかったが）のアンケート用紙も、最終的にはロアルの手によって処分されていた。
清川芽衣子については絶対に触れないで調査を続ける。七不思議班の中には、暗黙の了解が流れていたのである。だからこそ沙南は、愛がどこに行っていたかを知ったとき激昂したのだが。

「なんでか知りませんけど、四棟の寮長サンはやけに過敏になってますネ」
「それは……そうかもしれないけど。だって気味悪いし、あたしだって嫌だって思うよ」
「私、やっちゃダメって言われたことほどやりたくなっちゃうんですヨー」

あ、それはわかる。呟いたのは黙って成り行きを見守っていた亜梨沙だった。その隣、マリアは僅かに不安げな表情を浮かべる。
沙南がそれ以上反論できないのを見て取って、うるきは愛の方に視線を向けた。

「バレちゃあ仕方ない、堂々といきまショ。そんで愛サン、芽衣子サンのルームメイトには会えたんで？」
「あぁ、うん。それなんだけど……」

沙南に握られていた腕を漸く解放されて、愛はぐるりと部屋内を見渡した。少女は自分が第六棟を尋ねた、ほんの一時間ほど前のことを思い出す。

アイジャという少女にアポを取ったのは、その前日のことだった。清川芽衣子とその死について、より詳しいことを知りたい。七不思議との関連を説明すれば、アイジャはそれを快く承諾した。
愛が彼女の部屋を訪ねた時、そこには既に先客がいたらしい。しかし愛にその姿をはっきり確認する暇は与えられなかった。その先客は、愛が部屋に入るなり凄まじい勢いでその場を飛び出していったのである。
――今の子は？
問い掛けた愛に対して、アイジャはさぁ、と曖昧に笑っただけ。し

かし愛には一瞬すれ違った横顔が、どこか見覚えのあるもののような気がして仕方がなかったのだ。

「誰かが、いたんですか？」

マリアの疑問の声に、愛は説明を中断する。見ればうるきも興味津々といった様子でこちらを眺めていて、少女は小さく首を竦めた。

「うーん、なんか見たことあるような気がしたんだけどねぇ」

「四棟の生徒とは？」

「違うね。さすがにそれは見ればわかるし」

両目とも1．5の視力を誇る愛は自信を持って断言する。五棟と六棟の生徒までは全員を把握しているわけではないが、それでも知らない人間だと断言できた。

――知らないのに、見覚えがある。そんなことがありえるのだろうか。

「それで、アイジャ自身は清川さんについて何か言ってたわけ」

渋々話の続きを促しながら、沙南は頭の中で今後の予定を組み替えていた。きっと愛とうるきは、この“調査”を続けるに違いない。計画を知ってしまった以上、見ぬふりはできない性分だった。ロアルや百瀬、怖がりの双子には隠したほうが良いに違いない。口の堅い絹華はどうだろう。そして自分は、どうする？

「それがね、アイジャなんだけど……何か、変っていうか」

「変？」

「メイコが死んだのは自分のせいかも、とか言い出してさ。よくわかんなかった」

何かを思案しながら口にする、愛が全てを語ってはいないことを沙南はすぐに察した。やっぱりショックだったんじゃないですか？亜梨沙が平和的な見解を述べる。

「じゃあ収穫は特にナシ？」

「イイエー。いっこありますヨ。愛サンが見た、その“先客”とやら」

清川芽衣子殺しの関係者だったら、面白くないですかネ？爽やかに言い放ったうるきとは反対に、場の空気は凍り付いた。うっげ、マジで？　言いながら愛も顔を引きつらせる。

「まさかー。さすがにそれは……」

「犯人ってのは言いすぎかもしれないですけどネ、でもその“先客”サン、清川芽衣子について調べてたってことっショ？　私たちみたいにネ」

その子を探せば良いんじゃないですかネ。あっけらかんと言い放ったうるきに、ぎょっとして思わず沙南は口を開いた。

「……ちょ、ちょっと！　もう止めなよ、何かヤバいって絶対」

「沙南サン。“学園”が何を隠してるか、知りたくないですか？」

この“学園”は、おかしいんですヨ。

誰もが一度は感じたことをはっきりと言葉にし、うるきはにっこりと笑う。ころり、彼女の掌から見事に色の揃えられたルービックキューブが転がり落ちた。一度も手元を見なかったにも関わらず完成させられたそれの完璧な出来栄えに、沙南は一人息を呑む。

第五章《迷霧》：接触（3）

時は少し遡る。
一目散に飛び出してゆく後ろ姿を碧い瞳が見つめていた。何かを考えるようにすっと細められたそれを縁取る金の睫毛が、滑らかな頬に影を落とす。

「え、ちょ……何？」

自分と入れ違いになった相手に驚きを隠せぬまま、東海林　愛は口を開く。今この場にいるのは自分と、部屋主である少女のみだと思っていたのだ。

「今の子は……？」
「……さぁ」

にこり、アイジャは微笑んでそれ以上の言及を許さなかった。
愛は僅かに眉を寄せた後、去っていった後ろ姿を脳裏にもう一度思い描く。切り揃えられた黒髪と同じ色の瞳、一瞬見えた白い横顔が目蓋の裏にまだちらついていた。
何処かで、見たことがあるような。否、誰かに似ている？

「……今の人は、お客さま」
「友達、……じゃないんだ」
「貴女と同じよ。メイコのお客さま」

アイジャの言葉に驚愕して、愛は目を見開いた。メイコ――清川芽衣子は先日亡くなった、この“学園”の生徒である。“学園”側の対応によって死因は一切伝えられていない。

愛が今日この部屋を尋ねたのは、芽衣子のルームメイトであるアイジャから話を聞くためだ。詳しい話が聞けることなど期待していないがしかし、芽衣子の死について調べている自分たち以外の人間の存在は、愛にとって予想外のことだった。

「……アイジャ。さっきの子は、清川さんについて何か言ってた？」

早速、単刀直入に問い掛けて愛は相手の様子を伺う。アイジャは僅かな逡巡の後、とくになにも、といらえを返した。

聞いて愛は腕を組む。アイジャの曖昧な答えでは、真相に辿り着くのに骨が折れそうだった。自分の力でどうにか、核心に近付ける質問をぶつけるしかない。

――もしも今部屋を出ていった少女が、あの“噂”を知っていたら。その可能性を考えれば、無視はできなかった。

「……“入れ替え”の後には死人が出る、って噂があるの。知ってる？」

言外にその“死人”が誰かを滲ませれば、アイジャはすぐに悟ったようだった。真剣な面持ちの愛を真っすぐに見上げ（彼女は背が低い）、アイジャがその唇を開く。

「――メイコはその為に死んだっていうの？」

「それは……わからないけど」

「アイジャにメイコの事を聞くのは、その真偽を確かめたいからね」

「……うん、そう」

「……ねぇ貴女、真実が知りたい？」

アイジャを信じてくれる？

不意に声のトーンを落とした少女を訝しんで、けれど愛は頷いた。

アイジャの碧い目の奥で、一瞬ちらりと何かが揺れる。
内緒、内緒よ。アイジャと貴女の秘密。少女は言って、桃色の唇を震わせた。

「メイコが殺されたのは、きっと、そんな噂のせいじゃないわ」
「え……」
「アイジャのせいなのよ。お仕事、間に合わなかった」
「――ちょ、ちょっと待って！」

――殺された？
呟いて愛は瞠目した。清川芽衣子の死因は他の生徒に一切伝えられず、第一発見者の少年もまた塞ぎ込んだままのはずである。そんなことは初耳だった。何故知っているの、思わず語尾を荒げて愛は問い詰める。

「知らないわ。でもね、アイジャにはわかるの。メイコは殺された」
「……誰が、そんな」
「アイジャは、それを追い掛けてここに来たから」

意味がわからないと小さく唸って、愛は指先で頭を押さえた。ただ一つ確実なのはこのアイジャという名の少女が何かを知っていること、そして自分がとんでもないことに頭を突っ込んでしまったらしいということ。
ロアや沙南の注意を聞いとけばよかったかな。思っても、もう遅い。

「アイ・ショージ、貴女はメイコが死んだ理由に興味があるのね。でもね、真実はとっても危険なの」

全て忘れるのと、アイジャに協力するのと。どっちが良い？
選べと言われて初めて、愛はアイジャの考えに気が付いた。見ず知

らずの他人を部屋に迎え入れた瞬間から、アイジャはこれを見越していたのだ。即ち、協力者の確保。
差し出された手に視線をやって、酷く悩んで、ついに愛はその手をとった。一度首を突っ込んだことからは逃げ出さない、それが彼女のポリシーだったからである。
ぱしり、重なり合った手と手が軽快な音を立てた。

「契約成立ね」
「……あんた、フルネームは？」

問い掛ければ少女は金の髪をふわりと揺らし、柔らかな微笑みを浮かべる。

「――アイジャ・ラ・ファンダルス」

＊

第六棟寮を飛び出した千瀬が真直ぐ向かった先は、第二棟――武藤駿のいる男子寮だった。今すぐ仲間に報告しておきたい事ができたが、昼間から食堂の隠し通路を使うわけにはいかない。よって“生徒”として潜入している駿に、正面から接触を図ることにしたのだ。
幸いにも千瀬は今、学園内の生徒と寸分違わぬ制服を身につけている。刀だって持っていない。一人紛れ込んだ程度では、誰も気付かないだろうと踏んだのだ。

原則として男子は女子寮に、女子は男子寮に入れない。千瀬もまた例外ではなく、二棟の中まで入ることは叶わなかった。それでも此処へやってきたのは、駿に自分の存在を知らせるためである。

――ルシファー首領、ロヴ・ハーキンズから事前に配られた“擬似制服”には幾つかの仕掛けが施してあった。駿の身につけているネクタイは通信機を内蔵しているが、その他の機能として、同じ通信機を持つ仲間が半径七十メートル以内に居れば反応を示す造りになっている。

千瀬は第二棟の前まで来ると、駿のいる部屋の方角を考えて壁添いに立った。反応に気付いた彼がやって来てくれることを、後は待つだけ。

第五章《迷霧》：接触（4）

「――武藤？」

ぴくり、身体を震わせた少年の異変に気付いて亮平が声を掛ける。
駿はそれに曖昧な笑顔を返しつつ、何でもないと口にした。

「虫でもいた？　怖かった？」
「ンなことでビビんねーよ！　……次お前の番じゃねーの、播磨」
「え、俺か？」
「あ、ごめんこっちだ」

言いながら、駿と亮平の正面に腰掛けるウォルディが片手を上げる。
彼を始めとする全員の手には数枚のトランプ。少年たちは部屋で頭を寄せ合って、原始的なカードゲームに興じていたのだった。ちなみに、現在はババ抜き進行中である。

「はい次、トウゴ君」
「ほーい」

次にカードを引き抜いた少年は名を柳原冬吾（やなぎはらとうご）と言う、ウォルディのルームメイトだった。
冬吾とウォルディが亮平らの部屋に集まる形になって、他愛のない時間を過ごす。ウォルディが駿のことを妙に気に入ったのが切っ掛けで、これは最近彼等の日課になりつつあった。今日はカードを片手にしつつ、冬吾の持ってきた話に花を咲かせている。

「あ、俺あといちまーい。んで柳原、続きは？」

「させっか。……その女、どうしたって？」

冬吾が語っていたのは、彼が先日の晩出会ったという不思議な少女についてである。長い黒髪に同じ色の瞳、白く透けるような肌。何かを探していたのだというその言葉に、駿は内心冷や汗をかいていた。

……心当たりがありすぎる。一切顔には出さず話の続きを促す、駿はなかなかの役者である。

「あぁ。そしたらそん時ちょうどウォルと会ってさ。一瞬目ェ離したその隙に……」

「消えちゃったとか」

「大・正・解！」

「えぇー」

うっそくせー。マジだってば！

亮平と冬吾が言い合うのを横目に、駿はそっと眉を寄せた。こんな身近に“仕事”の目撃者がいるようではやりづらいことこの上ない。今回フォローに撤するのが役目の駿は、いかにこの場を切り抜けるかで頭が一杯だった。

（ルカのやつ……）

もうちょっと目立たないように行動してくれよ。

胸中で悪態を吐いた瞬間、再び駿はぴくりと身体を震わせた。首に結ばれているネクタイの、白いシャツに触れた部分。ある一点から身体へ、僅かな振動が伝わってくる。

一度目は気のせいかと思った。けれど、二度目は違う。

（……来てる）

駿はそっと辺りに視線を彷徨わせる。ネクタイに内蔵された小型のバイブレータが振動を起こす、これは合図なのだ。彼の“仲間”が傍に来ていることを知らせる電子信号。

（誰だ？　何かあったのか）

生徒として潜入している駿に、昼間仲間との接触は殆ど無い。あるとしてもそれは駿から連絡を入れて呼び出すか、事前に打ち合せを行っていた場合のみである。嫌な予感が胸を過って、駿は思わず指先でネクタイに触れた。それを見咎めたのだろう、ウォルディが訝しげな視線を送る。

「シュン君……？」

「あ、いや……悪ィ、俺ちょっと便所」

適当な言い訳を唇に乗せて駿は一人部屋を出る。後ろ手に扉を閉め、真直ぐ一階へ続く階段へ向かった。

ヴヴ、と小さな振動を再び感じる。階下へ向かうにつれて間隔の短くなる、それは相手との距離と比例しているのだろう。

「……チトセか？」

第二棟の出入口を抜けてすぐ小声で呼び掛けた。勿論、辺りに誰も居ないことを確認してからだ。

相手の確証は無かったが、どうやら当たりだったらしい。駿が声を掛けてすぐ、生け垣の陰からぴょこりと黒い頭が飛び出した。

「シュン！」

「おっまえなー、こんな所で……」

現れた少女は日本人特有の、烏の濡れ羽のような髪を持っていた。
綺麗に切り揃えられたそれがかかるのは駿の見慣れた制服だ。
黒沼千瀬というこの少女が駿の仲間になって、早一年が経過していた。背丈が少し伸びたからだろう、少女の童顔でも身につけた制服はなかなか様になっている。

「あのね、大変……かも」
「あぁ？」

相変わらずのぼんやりとした物言いに、思わず駿は頭を抱えそうになった。しかし気を取り直してよく見れば、些か焦燥を帯びたその顔に違和感を覚える。

「かも、じゃないや。やっぱ大変！」
「……話せよ。こっちもちょっと“大変”なんだ」

駿は千瀬の腕を掴んで寮棟の裏手へ回り込む。屈んで身長を合わせてやれば、千瀬は彼の耳元に唇を寄せた。

＊

（……やべーな）

去ってゆく少女の後ろ姿を見送って、駿は深い溜め息を吐く。
千瀬から聞き出した、事態は予想よりずっと深刻だった。ルシファ

ーから派遣された自分達の任務が、一筋縄ではいかなくなりそうなのだ。

――“学園”の異変に、気付いている者がいる。

千瀬の話を聞いた限りでは、それが一般生徒か否なのかは判別できなかった。生徒の“フリ”をしている自分の例もある。慎重にことを進めなければ、思わぬ所で障害が出るかもしれない。

今後の指針を考えつつ、部屋に戻ろうと少年は踵を返す。しかしその刹那、

「――シュン君」

自分を呼び止める声に駿は身体を強ばらせた。見開いた彼の目が映したものは見知った人物の顔だ。ただし、ここには居ないはずの。

「……ウォルディ」

押し殺した声で名を呼べば、相手はにこりと笑ってみせた。先刻まで駿たちと共にゲームに興じていた、今も部屋にいるはずの、ウォルディ・レノ・ファンダルス。

「……ンだよ、驚かせやがって――」

「今の子は、君の彼女かな？」

「ちっげぇよ！　……て……え？」

平静を装うはずだった駿の表情はあっけなく崩れ去った。そのまま笑みを浮かべたままのウォルディに、低く問い掛ける。

お前、どこから見てたんだ？

「……最初から」

クス。
細められた片眼鏡の奥、瞳が綺麗な半円を描いていた。絶句した駿の肩に手を置いて、ウォルディはそっと言葉を紡ぐ。

「綺麗な黒髪だったけど、トウゴと俺が見た子じゃなかった。ねぇ、トウゴが探してるあの子の正体、君は知ってるんでしょう」
「ウォル、ディ……お前……っ」

駿は目を見開いた。先刻冬吾が黒髪の少女――ルカの話をしていた時、ウォルディは彼女を見ていないと言ったのだ。
――彼は嘘を、吐いていた。そしてこの少年は、“一般生徒”ではない。

「……お前、何者だ」

悟って、駿はウォルディを正面から睨み付ける。制服に仕込んであるのは袖の中、スローイングナイフが一組だけだった。心許ないが、きっと戦える。

「俺もシュン君に、同じことを聞きたい」

ウォルディは再びにっこりと笑ってみせた。殺意も戦意さえも感じさせないその笑顔に、駿はどこか違和感を覚える。
秘め事を話す時のように人差し指を唇に当て、ウォルディは柔らかく囁いた。

「ねぇ、シュン君。ゲームをしないか？」

第五章《迷霧》：間話

＊　＊　＊

「アサカ　ツネヒコを知ってる？」

突然声を掛けられて振り返った、少年の目の前に金の髪が散る。真直ぐに流れ落ちるそれの隙間からは、硝子玉をはめ込んだような碧い眼が覗いていた。

少年はぎょっとして身体を強ばらせたが、三度息を吐くことでそれを隠した。涼やかな声のトーンとこの時間帯から一瞬、今話題になっている“少女の亡霊”が現れたのかと身構えたのだ（時刻は午前一時を回ったところだった）。

噂に聞いていたのは黒髪黒目、しかし目の前の彼女は違う。少年はゆっくりそれを確認して、それから漸くはっきりと面を上げた。

「誰だって？」

「ツネヒコ、よ。アサカ　ツネヒコ」

「……さぁ」

少年は首を捻る。彼は第一寮に所属していたが、生憎そんな名の生徒に覚えはなかった。教師にも、ツネヒコという名の人間はいない。

「それじゃあ――アサカ、という姓の子はいる？」

「ちょっと待てよ……ああ」

少年は続いた質問に逡巡したあと、今度は一つ答えを見つけた。

確か、数学のクラスが一緒だった奴が一人。
「安積直希（あさかなおき）って奴ならいたかも。三棟……かなぁ、よくわかんないけど」
「――そう。血縁者かもしれない」
ありがとう。
ふわりと微笑まれて少年の心臓は情けなく跳ね上がった。まるで人形のようだ、激しく血の巡ってぼんやりしはじめた頭で思う。
こんな子、この“学園”にいたっけ。

「貴方、名前は？」
「お、俺？　えと、佐々木です！」
「そう。私はね、ミクっていうの」

M、I、C、K、で“Mick”よ。
正面に立つ少女の唇が柔らかく動いて、呪文のようにそのアルファベットを紡いだ。
ミク、とつられて少年も口にする。忘れられない名になりそうだと、火照る頬を隠しながら思った。

「覚えた？」
「あ、うん」
「――それじゃあ、今から忘れてくれる？」

……え？
ぽかんと口を開けた少年が疑問の音を口にしたときには、少女の白く細い指が彼の額へ向けられていた。

＊　＊　＊

こんな時間にふらふらと出歩く影を見つければ、声を掛けずにはいられない。お節介で世話焼き、それが彼女の性だ。だからこそ第六棟寮の長を任されているのだと、本人は思っている。

「鍵（キー）を、探しているの」

声を掛けた相手はそう呟いた。長い黒髪を重力のままに流した、どこか浮世離れした少女である。

制服から細い手足の見える小柄な彼女は、六棟の所属ではなさそうだった。“入れ替え”による出入りの激しい第六棟であるが、寮長が生徒を見間違えることなどまずあり得ない。

「キーって鍵だよねぇ。家の鍵？　寮の鍵ならあたしが持ってるけど」

他棟の生徒だろうとあたりをつけて話し掛ければ、黒髪の少女はゆるゆると首を横に振った。

違うわ、と。穏やかな、しかしはっきりとした声で彼女は言う。

「“あそこ”の鍵なの。“あれ”が隠してある、場所」

「……宝探し？」

「鍵（キー）はツネヒコが持っている。“あれ”は他人の手に渡ってはいけないから、取り返すの。ツネヒコ、知ってる？」

少女が首を傾げれば、さらりと黒糸が頬を流れた。

質問の意図が全く掴めない。困って首を横に振れば、少女は哀しげ

な色を浮かべる。

「そう……貴女も知らないのね」

瞬間、生温い風が吹いた。

刹那の瞬きの合間に、黒髪の少女は消え失せていた。

＊　＊　＊

“学園”の至る所には、経営者側から派遣された警備員が控えている。彼らの活動は生徒達の安全と学園の秩序を守る為にあり、深夜の見回りもまたその一貫だった。

その警備員の前に“それ”が現れたのは突然である。いつもの巡回路をいつも通りに歩いていた、そんな彼の喉元に、突然白刃が突き付けられたのだ。

ひゅっと息を飲んだ警備員の、身動き一つとれないのを嘲笑うかのように“それ”は唇を歪ませた。そのまま彼の耳元に顔を寄せ、感情の欠落した声で“それ”は問う。

「《悪魔のデータ》は何処にある？」

そんな物、見たことも聞いたこともなかった。声を出さずにそれを伝えるべく（既に恐怖で彼の喉は凍り付いていた）、警備員は必死に首を横に振る。

その様を確認したのだろう、“それ”は至極つまらなそうに呟いた。

「そうか――残念だ」

手首を一閃する。切っ先が鈍く煌めく。

一本の斬撃を染め上げた、紅い飛沫は夜の闇へ。

第五章《迷霧》：屍の謳（1）

“学園”の警備員が一人、殺されたらしい。
その話が沙南のもとまで伝わってきた時には既に、殆どの生徒がそれを知っていた。清川芽衣子の時とは違い、学園正面エントランス前の廊下という目立つ場所で死んでいた警備員――初老の男性だった――は多くの人間に目撃され、“学園”側が戒厳令を布く間もなく詳細が広まったのである。

「見た子の話によると、首の辺りに切り傷みたいなんがズバっと走ってたって……」
「それで“殺された”って？」
「だって自殺はないでしょ？　いくらなんでも」

沙南の横を歩く亜梨沙は、ひとつ身体を震わせてから足を進める。本来ならばこの場所にいるのは彼女でなく愛であったのだが、当の本人は用があるからと姿を消してしまっていた。
連れ立って廊下を進む二人の目指す場所は、警備員の遺体が発見された例の正面エントランスだ。沙南達の手掛ける“七不思議”と今回の事件について、関わりがあるのかはわからない。現場を見たところでそれは判定など出来ないだろうが、それでも沙南はそこへ向かうことにした。万が一“七不思議”との関連性が見つかった場合は、もうやめよう、と皆に告げるために。

「殺人現場なんて撮りたくないなぁ……」

小さくぼやいて亜梨沙は手元に視線をやった。
吹奏楽部に所属しながら映研の助っ人をしている彼女は、今も片手に小型のビデオカメラを持っている。これは映像監督・うるきから

直々に手渡されたもので、映画に出演する（ことになっている）沙南の姿を収める為の物だった。

――二人目の死者を出した“学園”内は閑散としている。得体の知れない恐怖によって生徒達は皆、自分の寮から出ようとしなくなっていた。警察はきっと来ない。ここは世界から隔離された場所で、逃げ出すことさえ叶わないのだ。生徒は皆それを知っていて、だからこそ無駄な行動は起こさない。自分の身を守ることを考えて、傍観に撤して。

――この“学園”は、おかしいんですヨ。

うるきの声が頭を過る。彼女のように自ら“学園”の裏面を暴こうとする者は、これまで沙南の周りにはいなかった。きっと頭の良い彼女は、ずっとこの檻の違和感と戦っていたのだろう。これを機に枷を、外そうとしているのだ。

何て危険な行為だろう、と沙南は思う。そしてそれに、自分も巻き込まれようとしている。

（――うるきは、清川芽衣子も殺されたと思ってる）

死因の知らされていないあの女生徒について、“犯人”が存在するのだとうるきは言った。彼女の考えが未だ沙南には読めないが、もしも清川芽衣子が殺されたなら、その“犯人”が警備員の命をも奪ったのならどうだろう。考えて僅かに沙南は眉を寄せた。

この“学園”に、殺人鬼が潜んでいるということ。そんな噂話は良く聞くが、もし本当ならば笑い事ではない。うるきや愛を説得し、即刻七不思議の調査など中止にすべきだ。夜半過ぎに出歩く必要のある調査は、危険しか呼び込まないだろう。今だって沙南達は、外出を禁じようとする寮長の目を掻い潜ってここにいるのだから。

「あ、そこ曲がったとこだよ」

亜梨沙の声についと沙南は面を上げた。どうやら目的地に到着したらしい。広いエントランスは絨毯に血痕がこびり付いているため、今はシートが被せてあると聞いた。それを思い描きながら踏み込もうとして、ふと沙南は動きを止める。

「？、どしたの」

「しっ……」

ビデオカメラの電源を入れようとしていた亜梨沙を黙らせるように、自らの唇に人差し指を押しつけた。沙南の言わんとしていることに気付いて、亜梨沙もまた口を閉ざす。

――人が、いる。エントランスの端の方に、おそらくは二人。こちらが死角になっているからだろう、向こうが沙南達に気付いた様子はなかった。

（あれは……？）

学園指定の制服に身を包んだ、二人の少年。一人は黒髪、もう一人は柔らかな赤毛だった（おそらく日本人ではないのだろう）。二人は熱心に何かを話し込んでいるようだが、その声は途切れ途切れにしか聞き取れなかった。

「は……だ……て」

「……の、仕事……から」

（……仕事？）

辛うじて聞き取れた単語に沙南は首を傾げる。二人の少年の間には不穏な空気が流れるばかりで、とても友達同士だとは思えなかった。

「（あ、の、ひと！）」

ふいに少年たちを観察していた沙南の後ろで、声を殺しながら亜梨沙が叫んだ。何事かと振り返った沙南の目の前で、亜梨沙は真直ぐに腕を伸ばす。その指がぴたりと指したのは、黒髪のほうの少年だった。

「（み、見つけた！　サッカーの人だッ）」

「（ちょ、何の話？）」

こそこそと囁き合い話を聞けば、それが先日亜梨沙が見事な一目惚れをした相手だと知る。おそらく今回の“入れ替え”で入学した、新入生。

「（新入生……ね。……って、）」

あれ！？

思わず沙南は大声を上げた。嘘でしょ、呟いて真実だと知る。

二人の少年は姿を消してしまったのだった。少女たちが目を離した、一瞬の隙に。

動きだす、蠢きだす、それぞれの思惑。

さぁ耳を傾けよ、屍の謳！

第五章《迷霧》：屍の謳（2）

『ゲームをしないか？』

＊＊＊

ウォルディ・レノ・ファンダルスが少年に持ちかけた“ゲーム”とは、何の変哲もないチェスであった。

ウォルディは駿を部屋に招いて椅子をすすめた後、隅に置いてあった古いトランクから盤と駒を取り出す。負けたらペナルティーね、内容は勝者が決めよう。矢継ぎ早に言われることに無理矢理頷かされ、話の流れがとんと見えない駿は目を白黒させたまま、気付けば相手に乗せられ駒を手にとっていたのだ。

「――はい、チェックメイト」

ウォルディから晴れやかな声が零されたのは、ゲーム開始からものの十分も経たぬうちであった。無理もない、駿は生まれてこの方チェスなどというゲームに親しんだことのない――正真正銘の、初心者だったのだから。

「俺の勝ちだね、シュン君」

「……ちょ、ちょい待てェェェェ！！」

にこにこと柔らかい笑みを向けられて漸く、駿は自分の置かれた状況を思い出した。我に返った途端大声で叫べば、何どうしたの、と呑気な返答がある。

「どうしたの、じゃねェよ！　何これどーなってんだよ、何でさっきの話の流れからこうなるんだよ！？」

「えぇ？　ゲームをしようって誘ってチェス。何か問題でも？」

穏やかな、しかし底の知れぬ笑みを浮かべる相手をシュンは睨み付けた。

――ウォルディという少年は、“ただの生徒”ではない。それは駿とて同じことだ。お互いにそれを知った上で（駿の場合不本意ながら知られてしまったわけだが）向かい合っている今現在の状況は、駿にとって危険極まりなかった。

……こいつ、何を企んでいる？

予断を許さぬ事態に在りながら打開策を見つけられない、駿の葛藤を知ってか知らずか、ウォルディは愉しげに口を開く。

「ペナルティーは、そうだねぇ。俺の言うこと、シュン君には三つ聞いてもらおうかな」

「……てめェ、」

ハナっからその気だったのか？

低く唸るように言えば、とんでもないとウォルディは苦笑する。しかしそれは嘘だろう。彼は最初から、自分の勝利を確信していたに違いなかった。

（しかも三つかよ）

言うことを聞く、は言い足せば、“何でも”という言葉が来る。苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ、しかし駿はそれ以上異論を唱えなかった。

負けは敗け、一度受けた勝負に待ったはありえない。物事に真直ぐ体当たりでしか取り組めない少年の、哀れな性分だった。

「じゃあ、早速一つ目をお願いしようかな。……来てくれるよね、シュン君」

＊

ウォルディに連れられてやって来たその場所に、思わず駿は眉をひそめた。そんな彼にはお構い無しで、目の前の人物は飄々としたままである。

“学園”南方一階、正面エントランス。今やここの生徒誰もが知っている――昨晩、この場所で一人の男が死んだ。否、正確には“殺された”のだ。

「ここでの事件は聞いてるかな？」

「……皆、知ってんだろ」

死んだのは警備員であったという。遺体を目撃した者の話を照合すれば、死因はおそらく出血多量によるショック死だ。

大きなブルーシートで覆われている床は、本来なら起毛絨毯が艶やかな光沢を見せているはずだった。今はきっと、こびり付いた血痕

で汚れている。

「シュン君。警備員を殺した人物に、心当たりはないかな」

「……探偵の真似事でもしようっての？」

返す言葉を慎重に選ぶ。胸中の動揺を悟られぬようにしながら、駿は真直ぐウォルディを見据えた。

どこまで知っているのか、どこまで知られているのか、そして彼は何者か。ウォルディという人間に対する情報は、あまりにも少ない。

「シュン君、君は本来ここの生徒ではないようだけど」

隠しても無駄だとわかっていたので、その問いには頷いた。満足げに笑って、ウォルディは再び言葉を紡ぐ。

「少し前に死んだ、清川芽衣子という生徒がいたね。今回警備員を殺した奴と、彼女を殺した奴は同一だと思ってる」

「……清川の死因は生徒に隠されてたはずだぜ」

「ふふ、君がそれを言うの？　見に行ったくせに。射殺だったね」

――つけられていたのか。

ウォルディの言葉を聞いて駿は思い切り舌打ちをした。どうやらこの少年は駿が気付くよりずっと前に、駿についてかぎ回っていたらしい。それから一連の殺人についても。

（……マズイな）

駿の背を嫌な汗が伝っていった。ウォルディは駿や千瀬から、“ルシファー”という巨大犯罪シンジケートに辿り着いたのだろうか。

「正直に答えてほしいな。彼らを殺したのは、君の仲間かい？」
「……ちげェよ」

これは本当だ。清川芽衣子と警備員を殺したのは、少なくとも“ルシファー”ではなかった。犯人ならばこっちが知りたい、と駿は思う。
彼の返答に対してウォルディは、だろうと思った、と呟いただけだった。疑われているわけではないらしいと気付いて、駿は怪訝な面持ちを浮かべる。

「お前……？」
「俺は理由あって、ある犯罪者を追っている。清川芽衣子と警備員を手に掛けたのは、おそらくそいつだ」

――“オリビア”を知ってるかい？
問われた名に心当たりなどなく、正直に駿は否と答えた。片眼鏡の奥、ウォルディの瞳が深い色を帯びる。

「女の名前……？」
「女だ、と言われている。姿をはっきり見た者はいないらしいけれど――今回、それがこの“学園”に入ったとの情報を得た」
「何でここに、」
「言い伝えがあるそうだね。“学園”に隠されている“何か”――あながち、嘘ではないみたいだ」

オリビアの狙いはそれだよ。
やんわりと吐かれた言葉に駿は表情を曇らせた。“ルシファー”側の捜し求める“何か”と、“ツネヒコ”なる人物のことが頭を過る。
まさかそれと、関係が？

「一説によれば、オリビアは殺しのエキスパートだ。邪魔者は容赦なく排除する。生徒だろうが、教師だろうが、警備員だろうが」
「それって……！」
「もたもたしているうちに、二人も死者が出ちゃってね。捕らえて裁くのが俺たちの役目なのに」
「……俺“たち”？」

問えば、仲間がいるのだとウォルディは笑う。この学園内にいるのさ、君たちみたいにね。
ぐっと言葉を詰まらせた駿の肩を、ウォルディはぽんと叩いてみせた。

「シュン君達については、今のところ興味無いから心配しないで。もしかすると俺たちの敵かもしれないけれど、俺はここで任務を遂行するだけ」
「……お前は、何者なんだ？　任務って――」
「そこは黙秘しようかな。オリビアを裁くのが俺の仕事だから、ここに来たんだ。……まあこれは“表向き”だけど」

悪戯っぽい笑みを浮かべるウォルディのことが、ますます駿はわからなくなる。一先ず敵として、急を要するわけではなさそうだが。

「表向き……？」
「俺が“本当に戦わなくちゃならない相手”は、別にいるから」

おっと、お喋りが過ぎたね。
言ってウォルディは気を取り直すように正面を向いた。その目に駿を映し、有無を言わせぬ口調で告げる。

「もし君や君の仲間がオリビアについて情報を得たら、包み隠さず

俺に教えてほしい。これが、二つ目の“お願い”だよ」

「拒否権はない、ってか」

「真面目にやらないと“あいつ”が怒るんだ。正義感の固まりだから――」

言いながらウォルディがふと目線を横に流した。彼の見る先に何があるのか、駿も既に気付いている。

先刻からエントランスの陰に、人の気配を感じていた。おそらくは一般生徒だろうから、放っておいても害はない。しかしこれ以上この場で話を続けるのは憚られる。

「最後の一つは、然るべき時までとっておくことにするよ」

ウォルディのその言葉を最後に、駿はエントランスに背を向けた。

第五章《迷霧》：屍の謳（3）

「藤野さーん、倫理の課題やったぁ？」

呼ばれた共通の姓に双子は顔を上げる。教室の隅、いつも隣り合わせに席を構えている彼女達はその勤勉さ故に有名だ。所謂“ガリ勉”というタイプではないからだろう、こうして学友から頼られることも多い。

ちょっとノート見せてもらえないかなぁ、と拝む掌を快く受け入れて、薫子は自らのノートを差し出した。自分と同じ字で同じ観点からノートをとる片割れが彼女にはいるのだ、返却されるのが遅くても支障はない。

礼を言う声に応えながらふと視線をやれば、斜め後ろの方に物言わぬ人影が立っていた。二人はぎょっと目を見開く。話が終わるのを待っていたのだろうが、静かすぎて全く気が付かなかった。

「……き、絹華ぁ」

「びっくりした、声かけてくれれば良いのに」

口々に文句を言う双子たちに対し、鮎村絹華は困ったような笑みを浮かべた。

「ごめんね、ちょっと話があって。ミドリ、カオル、“調査”は進んでる？」

「例の鏡？　探してはいるんだけどね、何か“学園”って鏡自体少なくって」

「お風呂やトイレにはあるけど。流石にそれはないでしょー？」

それにちょっとやりづらいんだよね――二人の声が綺麗にシンクロする。きょろきょろと辺りを見回した後、翠子が身を屈めて手招きした。三人頭を寄せ合ってぼそりと呟く。あの、映画研究サークル。

「常に誰か傍にいてカメラ回してるじゃない？　なんか気分的に動きにくいってゆーか……」

「ああ……監視されてるみたいだもんね」

「されてるでしょ、実際」

どうにかなんないの、と薫子がぼやく。しかし実質のリーダーである愛が映研に友好的である以上、どうにもならないのが現実だった。“取引”も、成立してしまっている。

「我慢するしかないかぁ……で、絹ちゃん話ってこれ？」

「あ、うん……まぁ。あのね、」

そこで絹華は言葉を切り、一度人目を気にするような素振りを見せた。授業後の教室は閑散としていて、残っている生徒も少ない。それを確認し、また双子の元へと視線を戻す。

「私のルームメイトね、最近の“事件”ですっかり怖がっちゃって……部屋で一人にするのが可哀相なの」

「あぁ、あの子？」

「意外。……人が死んだもんね、怖いのは当たり前だけど……あの子は結構しっかりしてそうな感じなのに」

言って翠子は絹華の、気丈なイメージのあったルームメイトを思い浮べた。薫子も同じだったのだろう、不思議そうに首を傾げている。

「一緒に連れて歩けば？」

「部屋から出たくないんだって……だからしばらく私、班の集まりに参加するの控えようと思うの。ちゃんと自分の分担は間に合うようにするから、」

ごめんね、皆にも伝えてもらえるかな。

眉尻を下げて告げる絹華に、二人は神妙な面持ちを浮かべ頷いた。

＊

某国某所――。

その広大な建物の地下に造られた彼の部屋で、黒の無線機が哭き声を上げた。電波の届かぬ地中奥深くでさえ正確な音を拾い伝える、これは彼がその道のプロに特注で誂えさせたものだ。

部屋の主――ロヴ・ハーキンズは皮張りのソファーからゆっくりと腰を上げる。緩慢な動きで機械に手を伸ばし、世界を繋ぐボタンを押す。

電話の相手は既に判っていた。これを悟る能力（ちから）ならあるのだ、どうせならテレパシーでも身に付けられれば便利なのに。

「うん、今度練習してみようか」

『……何を？』

黒塗りのスピーカーの向こうから馴れ親しんだ声が聞こえた。疑問符を含むその調子に、何でもない、と笑って返す。

通話の相手は今現在、遠く離れた海に浮かぶ孤島にいた。ロヴの作り上げた組織に関わる最重要事項、それを片付ける為である。本来

ならば彼本人も参加するべき所だが（其れ程までに優先すべき仕事なのだ）、生憎と彼は今一組織の首領として三つの案件、それに纏わる十と四つの細事に力を注いでいた。
彼の配下にはロヴ・ハーキンズと言う人間をサボリ魔か何かと勘違いしている者がいるようだが、それは断じて違う。違う、と本人は思うことにしている。

「（やる時はやる、ってこと）」
『ロヴ？』
「いや――――見つかったか？」

す、と表情を入れ替える。浮かんだのは仕事をする時の男の顔だ。鋭くなった眼光を一つ瞬くことで押さえ、回線の向こうへ問い掛ける。

『……まだ。アサカって姓の生徒はいたけれど、確認してみたら字が違ったわ』

……日本語ってややこしくって嫌になる。
小さく落とされた声を拾い上げてロヴは笑う。この少女が愚痴を零すのはたいそう珍しいことだ。慣れない環境と進まぬ任務に、彼女といえど僅かな苛立ちを感じているのだろう。
――ルシファーの探す“アサカ”は“安積”ではなく、“朝霞”だ。

「苦労してるみたいだな」
『“学園”の情報保持が堅固過ぎるの、生徒のフルネームさえワンクッション入れないと外部からはわからない――出生や家族構成なんてもっと深いところに隠されてる』
「ツネヒコの親族を探すことは難しい、か……“学園”はそのガードの固さが売りだからな。仕方ないだろう」

“学園”の所有者はロヴである。しかしそれはあくまでも、土地と建物の持ち主という意味でだ。“学園”運営側の守る情報には、どうしても上辺にしか関与できない。

ロヴは“学園”に関してだけは、武力や金銭を用いて強行手段を取ることを考えていなかった。それが先代の所有者――グラモアの意志だからである。

「もう少し探して駄目なら、また“あれ”を使うんだな」

『……“ゾラ”を？　確かに情報は正確だけれど、リスクが高いと言ってなかった？』

「ツネヒコが“学園”に踏み込んだことを知らせてきたのも奴だろう。本人の行方は未だ不明だが、血縁者が入学したらしいとの情報をよこしたのも“ゾラ”だ。……なに、きっと引き受けてくれるさ」

うちの優秀な情報サポーターを、助手にやったんだからな。

ひとりごちてロヴは薄く笑う。また一波乱、呼び寄せてしまうことを予感しながら。

「お前の頼みなら聞くだろう、ルカ。俺はすっかり嫌われているが」

『ロヴがしつこく勧誘したせいじゃない』

「はは、手厳しいな。……急いだ方が良い。“あれ”をもう他の組織に渡すわけにはいかない」

『……“データ”を狙って他の組織が、“学園”に？』

生徒が死んだ話と何か、関係があるのか。言外にルカが問えば、念の為だとロヴは笑った。

念の為。最悪の事態を想定しての。

「死者に犯人を尋ねるわけにはいかないだろう。屍に触れられれば、

或いはミクなら何か読み取れるかも知れないが――“学園”がそんな隙は与えてくれない」

『……先回りでも、しないと』

「謳ってくれる屍を探すより、現場を押さえるほうが余程簡単だろうな」

ロヴの言わんとすることに気付いて、ルカは僅かに眉を寄せた。機械の向こう、相手はそれに気付いただろうか。

――気付いたかもしれない、彼ほどの男ならば。

『必然的に、生徒に私達の存在を知られちゃうわ』

「その時は構わんさ、いざとなれば“忘却”の能力がある」

『ミクが嫌がりそうね』

「面倒だろうが首領命令だと言っておけ――ただし、」

――生徒は選べよ、ルカ。

男の言葉を最後に、無線は何一つ音を発しなくなった。通話の断たれたことを確認し少女も機械から手を離す。孤島にあっても通信の可能なこれもまた、ロヴの作らせた特注品だ。

「――選ぶ、ね」

それなら、決まっている。

呟いてルカは小さく笑みを浮かべた。

第五章《迷霧》：播磨少年の青春（1）

播磨亮平（はりまりょうへい）は校内でも一、二を争う運動神経の持ち主であった。剣道部に所属しエースとして活躍しながら、他運動部の助っ人に加わっては日々好成績を残している。一つの得意種目に秀でている人間ならばごまんといる中、何でもそつなくこなす彼ほどの才に恵まれた者は、この“学園”にはいないだろうと噂されていた。

――ただしそれは、武藤駿が入学するまでの話である。

武藤は凄い。と、亮平は心の底から思った。自分より優れた者を目の当たりにした瞬間彼の身体を走ったのは悔しさや嫉みではなく、純粋な感動だったのである。

自らの青春の全てをスポーツに注ぎ込んできた、所謂熱血少年の亮平であるが、駿をライバル認定したというわけでもない。ただ亮平は、武藤駿という人間の底知れぬ実力に心底惚れ込んでしまったのだった（他人のプラス要素を真直ぐに受け止め讃える、これが亮平が学友たちから多大な人気を誇る所以でもある）。

「……と、いうわけで次はお待ちかねの剣道だぜー」

「待ってねェェェ！！」

何がどうなって『と、いうわけ』なのやらさっぱりの駿は、身体の底から大声を上げた。それはもう気持ち良く。

キィィィン、亮平の耳奥で駿の声が反響している。彼に叫ばれるのはもう慣れたものだったので、亮平はさして気にも止めずそのルームメイトの腕を引いた。

嫌だ嫌だと駄々をこねる子供のような有様の、駿の言い分は最もだった。この播磨という人間に目を付けられて以来、駿は既に五つもの運動部に体験入部させられている。と言うのも全ては亮平が駿の飛び抜けた運動センスを吹聴して歩いたせいで、亮平自身の目的だった剣道部に向かう迄に様々な部から声をかけられてしまったのだ。俺はどこにも入部しない。突っぱねる駿を亮平は毎度、いーじゃん一回だけ、という無責任極まりない言葉と共に放り込む。

「けっこー手間取ったなぁ、やっぱ入学初日から剣道に連れてくるべきだったか」
「誰のせいだ、誰の」

結局数日がかりになった他部への仮入部。あっけらかんと言い放つ亮平を横目で見やり、ただ駿は肩を落とす。体験した全ての部に丁重に断りを入れる作業はなかなか骨が折れた。この剣道部さえ躱し切れれば何とかなるか、と心中で溜息を吐く。

「俺はマジで本気で、武藤を尊敬してる。その才能生かさなくてどうすんだよー」
「へーへー、どうも」
「ってわけで、今日はうちの主将に相手してもらうように頼んどいたから」
「……はぁァァ！？」

思わず亮平の胸ぐらを掴みかける。寸でのところで止まって、けれど思い切り駿は相手を睨み付けた。
主将、と言うからには部のトップクラスの実力者、尚且つ年長者なのだろう。実力だけならばナンバーワンのエース・播磨亮平は学年の関係で副主将だと駿は聞いていた。

「ばっかじゃねーのお前、何でいきなり主将!?」
「武藤の実力を見極めたいって、本人が言ったから?」
「疑問系なのかよ!」

げんなりとした表情を浮かべた駿を見て何を勘違いしたのだろうか、だいじょーぶだよ袴と防具貸したげるから、とわけのわからないフォローをする。
制服のままここへやってきた駿は自分の姿を確認すると、ああケンドーってそんなスポーツだったか、と現実逃避を開始した。もうやだ逃げたい。

(……っ!?)

と、不意に感じた振動に駿は顔をしかめた。そっと胸の辺りに手を伸ばし、触れた先にはネクタイがある。身に付けっ放しにしている、通信機と“仲間感知センサー”内蔵のそれ。
近い――――思った瞬間に予想は現実の物となった。剣道場となっている建物の影から(何故そんな所から出てくるのかは甚だ疑問であるが)ひょこりと、余りにも見慣れた姿が現れたのである。

「あ、シュンみっけ」
「みっけじゃねェェェェ!」

ごつん。
現れた少女の頭に思わず駿が拳を落とし、鈍い音と犠牲者の悲鳴が重なる。ちょっと武藤、そんな可愛い子に何してんのォ!? 亮平が叫ぶのを全力で無視して、駿は少女に詰め寄った。

「チトセぇぇ! 何してんのお前!!」
「何って、シュンに会いに来たんだけど……」

「お前アホか！？　こんな真っ昼間に堂々と、しかも俺今一般のヤツといるだろが！」

小声ながらも凄まじい剣幕で言い募る駿に、千瀬はだってと唇を尖らせる。

「“学園”を調べてる生徒がいるかもって報告したら、出来るだけシュンと連絡を取り合うようにってルカが」

「無線使えよ……」

「直接のほうが良いって言われたんだもん。男子寮側ならあたしの姿見られても良いって。見慣れない女子生徒の一人や二人、居ても当然だから」

まぁそうだけど、呟いて漸く駿は落ち着きを取り戻した。千瀬が学園指定の制服を着ているのはそういうわけかと独りごちる。

「ルカが心配してた。シュン、余計なことに巻き込まれそうだって」

「なっ……」

言われて言葉を詰まらせた駿を不思議そうに千瀬は覗き込む。図星なの？　問われても、ハイ図星ですとは言えなかった。

――駿はまだウォルディという少年のことについて、上に報告を入れていなかったのである。

「とりあえず、これからあたしが時々来るから。たまにローザも」

「あー……、わかった」

「お二人さーん、俺のこと忘れてない？」

突然後ろから声が聞こえて、千瀬は飛び上がらんばかりに驚いた。駿と一緒にいるという安心感からか、周りへの注意を完全に怠って

いたのである。
それは駿も同じだったのか、ぎくりと身体を強ばらせた後引きつった笑みを浮かべた。忘れ去られていた播磨少年を宥めながら謝罪を述べる様子を見て、ふと千瀬は口元を緩める。
――なんだか本当の、友達みたい。

「ちぇ、二人でこそこそ楽しそうにさァ……何、武藤の彼女？」
「違うわァァ！！」

何で話の流れが皆すぐそこに行くのか、ウォルディにも同じことを言われたことを思い出して駿は溜息を吐いた。そうしてすぐ顔を引き締める。

（……そうだ、ウォルディ）

俺にはこんな所で剣道やってる暇はない。呟いて顔を上げた駿の前で、亮平が勝手に自己紹介をはじめていた。

「俺、播磨亮平ね」
「はりま、さん？」
「剣道部所属！　そーだ、女子部員も募集中何だけどさ、君やってみない？」
「オイちょっと待て」

何どさくさに紛れて勧誘してやがる。駿が手の皮を摘み捻れば、いててて！　と亮平は情けない声を上げた。
強制的にその話題から離れさせ、駿は一つ息を吐く。千瀬まで捕まっては話にならない。

「――あたし、剣道やってみたいな」

しかしその瞬間落とされた発言によって駿は思い切りむせる羽目になった。慌てる彼の前で亮平はきらりと瞳を輝かせ、爆弾を投下した本人はことりと首を傾げている。

「チトセッ！？　てめ、何考えてんだよ！！」
「え、楽しいかなーって……」
「だ・ま・れ！」

一気にまくし立てれば拗ねたように、冗談ですよぉだ、と少女が呟く。それにほっと胸を撫で下ろし――――そこでふと、駿は妙案を閃いた。

「……おい、チトセ。一回だけ剣道、やって来ていいぜ」
「シュン？」
「お、武藤ってばどーゆー風の吹き回し？」
「――播磨」

いいことかんがえた。口の中で呟いて、駿は唇の端を釣り上げる。正面から亮平を見据え、彼はゆっくりとその言葉を口にした。

「お前んトコの主将が千瀬（こいつ）に勝ったら、俺剣道部に入るわ」

第五章《迷霧》：播磨少年の青春（2）

お前んとこの主将がこいつに勝ったら、俺剣道部に入るわ。
少年の発言はその場にぽかんと間を空けた。あたし？　と目を瞬いた千瀬の横で、未だ話の飲み込めない亮平が口元を硬直させたままつっ立っている。

「……えーと、武藤クン？　誰が誰と、試合するって？」
「剣道部主将とコイツ」

びし、と千瀬を指差して駿は言い放つ。そこで漸くこの突飛な提案を理解したらしい、亮平は目を剥いて声を上げた。

「いや、ムリムリ！　それは無理だって！！」

播磨少年が初めて突っ込みを入れる側に回った、記念すべき瞬間である。
こう見えて亮平は常識人なので、素人の試合がどれだけ危険かを理解していた。しかも目の前にいる“コイツ”とやらは細くて背も低い、いかにもか弱そうな女子生徒である。加えて剣道部主将は何事にも厳格なことで有名な――手加減を知らない人物なのだった。

「マジで無理だってば、やめたほうが良いよ！　素人じゃなくても簡単にやり合える人じゃないんだからッ」
「へぇ、お前はそんなヤツと素人の俺を当てる気だったわけね」
「いやその、そうだけど武藤とはワケが違うじゃん！？」
「……まー良いから見てろや」

亮平言うことは正論で、勿論駿もそれを理解していた。全て理解し

た上での発言である。
だって駿は知っているのだ。黒沼千瀬は、ただの女子生徒ではない。

＊

千瀬が剣道部の主将に勝てば、駿の入部は白紙になる。部のトップが無名の、それも少女に負けたとなればそれを外に漏らすことも無いだろう。部の沽券とやらをせいぜい守ってくれれば良い。
そもそも入部を承諾した覚えなどない駿である。執拗に追い掛け回されるのもそろそろ勘弁してほしかったし、亮平を諦めさせるにはきっちりとした誓約の元で白黒付ける必要があった。

「うまくやれよチトセ。相手は良い感じにイラついてるし」
「えー」

涼やかな道場の隅に寄り、駿は少女に耳打ちする。それの反対側で竹刀を片手に正座する、剣道部主将はかなり体格が良い。
鴨田慎太郎というその男子生徒は亮平から話を聞くと、暫しの逡巡の後に試合を承諾した。持ちかけられた勝負から逃げるなど、彼にとっては有り得ないことなのである。表面上こそ主将らしく平静を装ってはいるが、内心は穏やかでないに違いない。剣道の実績があるわけでもない初対面の新入生とその連れの少女になめられたとあっては、冷静でいられほうがおかしな話だった。

（……それに）

白のカッターシャツに紺のベスト、リボン、プリーツスカートという軽装のままである千瀬を見て駿はそっと息を吐く。貸し出された防具をこの少女は、重そうという理由で身につけることを拒んだのだった。危険だからと説得されても聞く耳など持たず、以外と頑固者であることを今更駿は実感した。挙げ句、

「主将さんの竹刀に当たらなければ問題ないでしょ？」

という本日最大の爆弾発言を千瀬は落としていた。あの瞬間凍り付いた空気を、駿は忘れられそうにない。本人は至って本気、悪気など一ミリたりともない上での一言である。けれどそれは、鴨田主将を煽り闘争心に火を点けるには十分だった。

「……相手は女のお前に対しても本気で来そうな堅物だ。油断はすんな、でも本気は出すなよ」

「てゆーか、シュン。あたし剣道のルール知らないんだけど」

「……はッ！？」

マジで？　問いながら少女を見下ろしてみれば、冗談を言っている様子はない。駿は思わず頭を抱えた。ルールを知らないなんて論外だ。

「それに、竹刀使うのも初めて」

「嘘だろ、だってお前家で……」

「稽古は全部、木刀か真剣だったんだもん。うちに竹刀なんて無かったよ」

竹刀って意外と重さ有るんだねー、もっと軽いのかと思ってた。へにゃりと笑う少女はおそらく、自分の置かれた状況など気付いていないのだろう。コイツに任せた俺が馬鹿だった。思いながら駿は

取りあえず亮平に向かって声をかける。
千瀬がルールを知らないことを告げた瞬間、亮平は思い切り吹き出した。彼も漸く駿と千瀬というコンビの突飛さに耐性が付いてきたらしい。

「そういうことならちょうど良いよ、お前らにハンデやるべきだって鴨田さん言ってるし」

ハンデなどきっと必要ない。けれど駿はそれを言わず、亮平の言葉に頷いてみせる。

「細かいルールは一切なし。そっちの子は鴨田さんにどっか一撃でも入れられれば勝ちだ。鴨田さんのほうは絶対、面は狙わない……ほら、女の子だし」
「悪ィな」

本当は胴も危ないんだけど、と言い淀む亮平に気にするなと駿は笑う。普通の人間が防具も着けず、直に竹刀の衝撃を受ければ一溜まりもないだろう。それは千瀬とて同じだが、こちらから着用を拒んだのだ。何があっても自業自得である。

（それに、普通の人間の攻撃じゃあ）

心配はいらないな。
物珍しそうに竹刀を指で弾く少女を見やって、駿は小さく笑う。

「聞いたな？」
「うん、大丈夫」
「――チトセ、」

殺すなよ。
声を出さずに伝えれば、千瀬はほんの僅かに目を細めた。

「……それじゃ、互いに礼！」

ぺた、と剥き出しの足が木の床を踏みしめる。千瀬のほうは靴下のままで行儀良く礼をした。
審判を務めることになった亮平の隣、駿は腰を下ろして胡坐をかく。人払いした道場の中には、彼らと中央で向かい合う二人を除いて誰もいない。しんと静まった空間で呼吸を整えている、鴨田はやはり本気のようだった。
痛いほどの静寂が心地良くすらある。駿は腕を組んだまま、視線を少女の方へとやった。彼女の腕をじっくり拝むのは初めてだ。いつも共に戦うときは、そんな余裕などないから。

「――はじめ！」

亮平が高らかに宣言した瞬間、ぐっと鴨田が一歩を踏み出した。しかし様子見だったのだろう、それ以上距離が詰まることはない。千

瀬はといえば、竹刀を正眼に構えたままぴくりとも動かなかった。

「……武藤、あの子」

「ん？」

「いくら何でも、全くの初心者ってわけじゃあ無いだろう？」

「……さァな」

“剣道に関しては”初心者だと、口を開きかけてやめた。余計なことは言わないほうが良い。勿体ぶんなよと頬を膨らませる亮平を無視して試合に目を戻せば、駿の視界の中でまた鴨田が一歩前に出た。瞬間、千瀬も動く。相手の動作に合わせるように、きっちり一歩分後退したのだ。二人の距離は変わらない。

（……引いた？）

「武藤！　まさかあの子、」

「ンだよ」

「鴨田さんとの間合いを読んでんのか！？」

――間合い？

じっと駿は二人を見据える。刀の扱いに関して詳しくなどなかったが、それでもその重要性は知っていた。間合いを計るとは即ち、相手の攻撃範囲を見定めることに繋がる。腕の長さと竹刀の軌道、踏み込みの強さと跳躍力。全ての条件を統合してそれを読むことなど、一朝一夕に出来ることではない。

「あの子がいる位置さ、鴨田さんの初太刀が届くギリギリ外なんだ。あの人は間合いが広い――俺はアレ見極めんのに、一ヵ月かかったんだぜ」

「……偶然だろ」

口ではそういいながら、駿は偶然などと思っていなかった。他人との間合いを読み取る、あれは千瀬の身につけている技なのだろう。努力の末得たものか、天性のものかは不明だが。

駿はごくり、と息を呑んだ。

（――“静”の状態を見てはじめてわかる）

千瀬は相手の間合いを読めるのだ。読み取れている上で、普段の仕事ではそれを無視して飛び込んでいく。

（敵より速く、相手の懐に入れる自信があるんだ）

刹那、鴨田が動いた。

力強い音と共に二足分踏み込んだ彼の身体が前のめりになる。流れるような動作で一撃、振り下ろした先でパァンと高い音がした。瞬間に一歩を踏み出していた千瀬は初撃を竹刀の根元で受け止めた後、それを斜めにずらしてするりと抜け出る。

「止めた、」

亮平が擦れた声で呟いた。目を閉じる間もなく激しい打ち合いが始まる。間合いを計られたことに気付いたのだろう、鴨田はもう距離を取ることなく竹刀を振るった。

袈裟懸けに振り下ろされたのをひょいと横跳びに避ける少女を見て、遊んでやがるな、と駿は思う。千瀬は先刻から守りに入ってばかりで、一度たりとも攻撃を仕掛けていなかった。

「む、武藤～っ！　あの子何モンだよ！？」

「黙ってろって」

「だって身のこなしが半端じゃねーよ！」

打ち込みには行ってないけど、と。亮平が呟いたのとそれは同時だった。

一瞬身体を低くした鴨田が、足のバネに物を言わせて続け様に鋭い突きを繰り出したのである。あの人の十八番だ、と亮平が声を上げた（大人気ない！　とも）。上体を捻る事でそれを躱した千瀬は、そのままぽーんと後ろに跳躍して距離を取る。

「今の何!?　宙返りみたいなことやった!?」

「……目の錯覚だ」

目を白黒させる亮平を無理矢理誤魔化し黙らせれば、辺りはまた静寂に包まれていた。気付いて駿は目を細める。防戦に撤していた千瀬が、着地を決めた位置ですっと竹刀を構え直していた。

少女が立つのは先程彼女が計った鴨田の攻撃範囲より、かなり離れた位置になる。少女が何をする気なのか、亮平も、おそらく鴨田本人も気付いていなかっただろう。

駿だけはそれに気が付いた。気が付いた瞬間、マズイなと思う。黒沼千瀬の攻撃範囲は、その小柄な体躯からは想像できないほどに広い――無論、鴨田慎太郎よりも。

「チトセ、……！」

駿が注意を呼び掛けようとしたときにはもう遅かった。ぐ、と身体を沈めたかと思うと、瞬間凄まじいスピードで少女は標的に向かって飛び出してゆく。

軽やかに床を蹴った音が耳に届く頃には、千瀬の竹刀は鴨田の肩の辺りに振り下ろされていた。咄嗟に自らの竹刀を縦にした彼の反応は流石だろう。

ただし、少女のその一撃はフェイントに過ぎなかったのだ。

「――鴨田さん！」

亮平の声に、ゴッ！　という大きな濁音が重なった。相手の正面に飛び込むやいなや、今さっき見たばかりの鴨田の突きを今度は千瀬自信が打ち込んでいたのである。

びりびりと空気が切り裂かれて振動する。見様見真似で行ったそれは、少女の天賦の才と呼応して恐るべき威力を生み出していた。分厚く頑丈な防具で覆われた、胴に繰り出された一撃で鴨田の身体が宙に浮く。ぴしり、その場所に亀裂が入ったのを駿は見た。

「う、げ」

やりやがった……！

駿はひくりと口元を引きつらせた。身体ごと道場の端に吹っ飛んで投げ出された、鴨田を見て亮平は放心している。その頭を叩いて正気付かせると、駿は慌てて鴨田の安否の確認に向かった。

……どうやら目を回しているらしい。命に別状はなさそうでほっと息を吐きだした。目立った外傷が無いのは防具のお陰だろう。腹だけは、後で痣になるかもしれないが。

「……ってなわけで、」

あと、よろしくー。

苦い笑みを浮かべて言いながら亮平の肩を叩く。その場を彼に任せると、きょとんとした様子の千瀬を肩に担ぎ上げて駿はその場から逃走した。……脱兎の如く。

第五章《迷霧》：さがしもの（1）

ごく、り。

息を詰め空気を飲み込み、鳴った喉には妙な圧迫感が残る。無言で目の前の扉を見やった沙南の、視線の先で銀色が揺れていた。

映研側（主にうるきであるが）と手を組んで独自に調査を進め始めている愛は、用があると言って別行動を取っている。おそらくは今日もまたあの、死んだ清川芽衣子のルームメイトに会いに行っているのだろう。

――アイジャと愛の間で交わされた契約を、沙南は知らない。

誰もいなくなった閉館後の図書室で、沙南はそっと息を吐いた。共にこの場にいるロアル、百瀬と昼過ぎに忍び込み、司書が鍵を掛けるのを物陰に隠れてやり過ごしたのである。

今日の目的はただ一つ、この図書室の奥に隠された禁書庫であった。

（行きたくないなぁ）

この期に及んで気乗りしない、無駄な足掻きだとは知りつつも、閲覧禁止棚のある小部屋に近づく沙南の足取りは重たかった。しかし七不思議のうち“閲覧禁止本棚に隠された秘密”を担当することになったのは、他の誰でもなく沙南自身なのだ。

“零時に見た人間を消す鏡”と“夜中に悲鳴の聞こえる教室”の謎は藤野の双子が、“寮棟の開かずの部屋”は愛が担当になっている。“食堂の隠し通路”は絹華だ。“黒髪の少女”と“学園の隠しているもの”についてを引き受けているロアルと百瀬は、今後者について何か情報を得るために沙南と行動を共にしている。

愛が自分の担当とは別に“学園”を探っているということを、沙南はこの二人には知らせていなかった。二人だけではなく他のメンバーにも、だ。知っているのはあの日、映研の部室にいた人間だけ。

「行きましょうか」

ロアルの声に頷いた。第二図書室にのみ存在する、閲覧を禁止された本の眠る場所へと侵入を開始する。

堅く錠の掛かっていて入れないこの部屋には、実は抜け道が存在した。――普段司書の人間が座っているカウンター横に唯一ある、古びた本棚の裏。そこに入り口を置く細い通路は図書室の壁裏に沿うようにして、ぐるりと禁書庫の裏手まで通じていたのである。

それを教えてくれたのは、マリア――映研部員の一人だ――の持っていた見取り図だった。やはりこの“学園”には何かある。沙南は呟いて前を見据えた。

「黴臭いね」

「人が入った形跡がない」

ロアルの言葉に百瀬が応える、その後ろを沙南はついて歩いた。細い通路には明かりが無く、暗やみの中を壁伝いに進むしかない。指先に埃の固まりを感じ、少女たちは思わず眉を寄せた。

ふいに行く手に光が見えたのは直後のことである。細い隙間から洩れる赤みを帯びた色に、誰もが目的地への到達を予感した。禁書庫の裏手へ通じる扉が現れたのだ。

同時に、おかしい、と思う。なぜこの扉の先に光があるのだろうか？　人の居ないはずの、この小部屋に。

「……開けるよ」

百瀬の声と同時に開かれた扉は木製の、酷く簡素な造りをしていた。鈍い音をさせて押し開ければ、同時に埃が舞い上がる。

中にはぽっかりと暗闇を閉じ込めた空間が広がっていた。上方には火を灯し続けるランプが一つ。来客を、待ち望んでいたかのように。

＊

「――何だって!?」

少年の声が響き渡る。“地下牢”と呼ばれるこの部屋の壁に反響し、幾重にも音の波が広がった。

少年の目の前に行儀良く腰掛ける、少女の髪は長い漆黒である。癖一つないそれは彼女が首を傾げるのに合わせ、さらりと音を立てて流れた。

「聞こえなかった?」

「聞こえた!……けど、」

正気の沙汰とは思えない、と少年は唸る。引きずられるようにしてこの場にやってきた千瀬も驚愕に目を見開いていた。

「――生徒に協力を要請するなんて……!!」

一息に言い切って、駿は思い切り顔をしかめる。意志を込めて睨まれてもルカは顔色一つ変えない。それどころかやんわりと笑みを浮かべ、ミクとロヴは良いって言ったわ、と何でもないことのように続けた。

「……俺たちのことを、生徒にバラすってのか？」
「どっちにしろ隠し通すのも限界なんじゃない？　貴方たちも、派手に動いたみたいだし」

悪戯っぽい視線を送られて、駿はぐっと言葉を詰まらせる。
つい先刻、駿と千瀬は剣道部での出来事を報告したばかりだった。
少なくとも播磨亮平は、駿と千瀬の異常さに気が付いてしまっただろう。
それだけではない。剣道場から逃げ帰る際、二人はある女子生徒に姿を目撃されていた。千瀬はその相手に一度会ったことがある――清川芽衣子の生活していた、あの部屋で。
彼女の名は東海林　愛といった。二人はそれを、知らないけれど。

「……もういるのよ。私たちに、気付いてる生徒が」
「そうだとしても……」
「チトセからも報告が入ってたわね？」
「――はい」

かなり簡略化してはいたが、ウォルディの存在についても駿は報告を上げた。今のところ、彼については様子見ということになっている。
しかし、不穏分子が存在することだけは確か。

「敵がわからない状態での隠密活動には限界がある。私たちの“捜し物”も、予想より難航してるの……生徒達の情報網は利用価値があるわ」
「……無関係の奴を巻き込むのか？」
「もちろん相手は吟味して選ぶけれど」

渋顔を作る駿に、ルカは穏やかな声音で告げる。諭すようにはっき

りと、時間がないのだ、と。

「これ以上見つからなければ応援を呼ぶわ。生徒にだって協力してもらう。ぐずぐずしていられないの。“あれ”を早く取り返さなくちゃ――」

「……あのっ！」

黙って話を聞いていた千瀬が不意に声を上げる。振り返ったルカと視線を合わせ、僅かな逡巡の後に唇を開いた。

「……“あれ”って、何なんですか？」

僅かに躊躇って、けれど千瀬はその問いを口にした。知らされないまま任務に就いていたのだ、自分達が何をしようとしているのか。何の為にこの“学園”へ、何を探しにこの島へ？

「……俺も聞きたい。“ツネヒコ”って誰だよ？」

「それは……」

「――知りたい？」

割って入ったのはミクの声だった。現れた彼女は僅かに言い淀むルカと相反して、真直ぐな目をしている。

「教えてあげても良いんじゃないの、ルカ。この子達には」

「……そうね」

座ったら？

ミクにすすめられたソファーに、二人は無言で腰を下ろす。

第五章《迷霧》：さがしもの（2）

ここはルシファー本部でもなければ、首領ロヴ・ハーキンズの自室でもない。それでも目の前に並べられた紅茶は高級感溢れる上品な香りを湛えていて、千瀬はそっと笑みを零した。流石に長きを共にしただけのことはある。ルカもミクも、あの男のやり方にすっかり感化されてしまっているのだった。

「何から話せば、良いのかしら――」

黒に濡れた瞳をふと細め少女は何処か遠くを見つめた。優雅に腰掛けた椅子の上、長い髪が絹糸のような光沢を放つ。

「私の、私たちの、捜し物の話」

紅茶のカップを細い指に掛けた。そうしてルカは、少しずつ言葉を紡ぎはじめる。

十二年、いえ、もう三年かしら。言いながら懐かしむように口元を緩めた。もうそんなになるのね、と横で相槌を打つ、ミクもその目を伏せている。

「まだ、ルシファーができる前のことだった」

当時私たちが逗留していたある国にも、所謂“裏社会”と呼ばれるものが存在していたの。

人間たちの醜い部分を曝け出して、そのまま形にしたような世界。

私たちはその頃、そういうモノを壊して回る側だった。正義を振りかざしていたわけじゃなくて――たぶん人間を、恨んでいたの。嫌いなものを手っ取り早く消していく、そんなことを繰り返していた

だけ。標的として、“裏”の人間はちょうど良かった。

「チトセにはいつか、話したわね」

言葉を切るルカに、千瀬は黙って頷いた。忘れるはずが無い、ルシファー創立メンバー達の過去の物語。堕天使（ルシフェル）と呼ばれた幼い犯罪集団。その話を聞いた時はまだ、優しい金色を持つ彼女も生きていた。何だよそれ、聞いてねー。不貞腐れたように駿が言うのを笑って制し、ルカは言葉を続ける。

「その頃その国で、一番の勢力を誇っていた組織がある――“フィド＝ミノス”と名乗っていた彼らは千人にのぼる構成員と、けして表にその存在を公表することができない研究所を抱えていたわ」

私たちの次の狙いは、そこだった。ルカが不意に声のトーンを落とす。人体実験を行っていたのだと、その声で告げた。

「――トリクオーテという町の、地下で」

瞬間、千瀬の顔が強ばった。その町の名を覚えている。千瀬にそれを語り聞かせたのは、一度出会ったきりの少年だったはずだ。不思議な輝きを見せる銀色の巻き毛と、獣のように狡猾な瞳をしていた。貴族のような奇妙な身なりで、従者が二人。

（……ユリシーズ）

その名を心の中で呟いた、千瀬の瞳が動揺で揺れる。トリクオーテの悪魔と、彼は嗤ったのだ。

「トリクオーテの研究所では“フィド”による非道な行為が昼夜繰

り返されていた。当時の技術を思えば夢のまた夢だった、“超人”ミュータントの生成実験。最終目標は、人型の生物兵器を生み出すこと」

人間の力でそんなこと、できるはずが無い。しかし“フィド＝ミノス”は諦めなかった。実験を成功に導く為に、様々な方向から検証を続けた。

そしてある日ついに、奇跡とも言える貴重な生体サンプルの入手に成功したのである。“天然”の“兵器”を、見つけたのだ。

私たちは幼かった。ルカはそう、呟いた。

「何でも壊せると思っていたの。でも、子供だった」

囚われたの。そう告げたルカの声はぞっとする程に冷たく、千瀬の隣で駿が小さく息を呑んだ。

――消してしまうつもりだったのに、巧妙な罠を仕掛けられて。全く逆の立場になってしまった。全員、“フィド”に捕らえられてしまったのよ。堕天使（ルシフェル）と呼ばれた子供の集団はその頃もう、“裏”には知れ渡っていたのね。彼らは、私たちを手に入れる機会をずっと待っていた。

「研究材料に、されたってことかよ……？」

「ええ」

言ったきり言葉を失った駿に、いらえを返したのはミクである。千瀬も唇を開くことができなくなった。幼い子供たちの経験した、絶望。

――それは、子供たちに訪れた初めての危機だった。親など無く国籍も不明、しかし未知の可能性に溢れた能力を持つ子供たちは、“

フィド＝ミノス”にとって恰好の実験体だったのである。

「知っての通り、私やロヴは普通の人間とは少し違う。ミクも、エヴィルだってそうだった。だから生き延びてきたんだもの」

詳しいことは省略するけれど。言って、ルカは困ったような笑みを浮かべた。

「幼かった私たちは――特に私は、自分の力を持て余していた。コントロールする術を、まだ知らなかったの。それをあの研究所が……」

「……どうしたんだよ」

不自然に言葉を切るルカに続きを促しても、曖昧な笑みを浮かべるだけだった。駿が眉を寄せれば、代わりにミクがそっと息を吐きだす。

「――ルカの能力が、暴走したの。あいつらが無理矢理引き出したせいよ」

「暴走……！？」

「結果、“フィド”の研究所は消滅した。地上にあったトリクオーテの町も消し飛んだわ」

「……な、」

なんだって？

駿が目を見開いて硬直する。頭の中で何かが繋がったような気がして、千瀬は真直ぐルカを見つめていた。彼女の消した町。

「じゃあ、“トリクオーテのレポート”って？」

千瀬の問いに、今度はミクが目を見開いた。おまえ何の話してんの、言いながら駿も瞠目している。
その中で唯一、覚えてたのね、とルカだけが笑った。

「トリクオーテは消えた。関係者も全て。私たちは晴れて自由の身――でも、一つだけ誤算があったの」

ルカの唇がゆっくり動くのを、千瀬は黙ってみていた。私のデータと、トリクオーテ研究所に関するレポート。
――子供たちがその事実を知ったのは、もう少し後の話になる。“フィド＝ミノス”は集めた実験体の調査結果、特に破壊力に富んでいたルカの能力データを、当時彼らの兄弟勢力であったある組織に高値で譲っていたのである。そこには実験記録を事細かに記載した“レポート”も共に渡っていた。
それは、ルカがトリクオーテを消滅させる前日のこと。

“レポート”はその後紆余曲折を経て、あの平和維持組織“煉獄（カーマロカ）”に渡ったのだろう。どういう経緯でかはわからない。しかし何者かの手によって、トリクオーテが消滅したことを後に書き加えられていた。
そして、ルカの調査資料は――“ルキフージュ＝ロフォカレ”と呼ばれた、【悪魔のデータ】は。

「データを受け取ったその組織は“アドラ”と言う通り名で活動していた。名前は、わかったのに」
「あたし達は搾取されたルカのデータを必死で探したわ。でも、見つからなかった……何故かって、」

ミクの碧い瞳が二人を射ぬいた。駿も千瀬も、その視線だけを真摯に受けとめる。答えが近いことを、漠然と理解していた。

「当時データの隠匿隠蔽を命じられた“アドラ”の末端構成員が、その隠し場所のロックを解除する鍵（キー）ごと行方を眩ませたからよ」

ミクは語る。

多岐に渡る分野で活動をしていた“アドラ”には、今現在のルシファーのように様々な国籍を持つ人間が所属していたのだという。末端構成員であったその男は日本人だった。彼の名こそが。

「――朝霞恒彦（あさかつねひこ）」

第五章《迷霧》：さがしもの（3）

ルシファーが朝霞恒彦の姿を最後に確認したのは五年ほど前の事であった。シンジケート発足からは、実に八年。

当時のロヴ・ハーキンズは、そのカリスマ性を発揮し既に裏社会でかなりの地位を確立しつつあった。情報取得の為の様々な手段を駆使し、あのデータを持ち去った“アドラ”構成員の名前までを割り出していたのである。数年前の物ではあったが、顔写真も入手した。

それでも恒彦が見つからなかった理由の一つには、トリクオーテ消滅の半年後に“アドラ”が正式解散したことが挙げられる。“フィド＝ミノス”と提携していた彼らは、やはりその助けなしでは存続できなかったのだろう。

――そして何よりも“アドラ”は、【悪魔】の報復を恐れていた。

「もうそろそろ五年になる。軌道に乗ったルシファーは勢力の拡大を目的として、様々な他組織と取引を行っていたわ」

その日の取引相手は“鬼屋（たまほめや）”と名乗る、和製の密売組織だった。言って、ミクはすっとその目を細める。獲物を狩り取る補食者の眼だ、思って千瀬はそっと息を呑んだ。

「当時うちは“鬼屋”から商品を買い取って、然るべきルートから転売する仕事を請け負ってた。その日の品物は結構ランクが高くてね――“ダムダム弾”って知ってる？」

「だ……、むだむだ？」

首を傾げる千瀬の横で駿が思い切り吹き出した。むっと膨れて睨み付ければ、銃弾の一種だよと少年は笑う。

「ちょっと前に……イチハラのヤローに見せられたんだ。今は世界じゃ使用禁止になってるってゆー」

市原恭吾の名を口に出す瞬間だけ、駿の表情は嫌そうに歪められた。その通りよ、と笑んでミクが話を引き継ぐ。

「弾の実弾体か頭部に鉛の露出がある被甲弾でね、人体に着弾すると鉛が潰れて傷口がかなり大きくなるの。ほとんどが貫通せずに体内に留まるし、一撃で仕留められなくても鉛毒で傷は治り辛い――殺傷能力にはかなり、長けてるってこと」

「……イチハラの奴、ダース入りの箱で保存してるぜ」

取引の残りをロヴがあげたのよ、笑いながら言ったのはルカである。途端露骨に顔をしかめる駿を横目で見やりながら、千瀬は苦笑と共に話の続きを促した。

「……それでね、その“鬼屋”との取引現場に現れた運び屋が――ツネヒコ、だったわけ」

「一目でわかったんですか？」

「その頃は信用できる組織員が少なくてね、大切な取引はあたし達が直接出向いていたから。人相は頭に叩き込んでたもの、少し老けてはいたけれど」

わからない、はずがない。きっぱりと言い切って、しかしミクは僅かに眉を寄せた。

「でも、大事な取引の最中にツネヒコの身柄を押さえるわけにはいかなかった。仕事が終わってから追いかける予定が――」

逃げられたのだと、苦々しく。呟いて少女はぎゅっと拳を握り締め

た。
ツネヒコは私たちに気付いたの――ルカが静かに零す。成長した悪魔の少女とその仲間の存在に、彼は気が付いてしまったのだと。
“鬼屋”との仕事が後処理まで片付いた時、朝霞恒彦の消息は完全に断たれていた。彼は“鬼屋”とも運搬業者とも、すっぱりと手を切って。

「その男が、この“学園”に……？」
「正確には、ツネヒコの親族にあたる人間が、ってとこね。ここ数年がかりで調べたのだけれど、最近やっと少しだけ情報が入って」
「……じゃあ、その親戚の人間から辿ってツネヒコを探す気なんだな？」

駿の言葉に、ミクは静かに頷いた。漸く納得したのだろう、少年は腕を組み真剣な面持ちを浮かべる。

「見つかるのかよ、まだその“親族”だって誰だかわかってないんだろ？」
「もう手は打ってあるの。それより――」

先を越されては、困るのよ。
落とされた声は白刃のような、鋭利な冷たさを孕んでいた。

＊

ゆらり、揺らめく炎の紅。暖かな色合いとは裏腹に、その部屋の空気はどこかひんやりとしていた。

備え付けられていたランプを見つめた後、沙南はゆっくりと部屋の中に視線を移す。壁一面にはめ込まれた本棚と、それを埋め尽くす古書の群れ。仮に噂通りこの場所に何かが隠されているとしても、それを探すのは随分骨を折りそうだった。誇りを被ったこれらの本の、中身を確認するならば尚更。

「本の匂いがする」

部屋の真ん中にぽつんと置かれた、木製のテーブルに触れながらロアルが言う。指を這わせればすっと線が引かれた。どうやら、ここにも随分と埃が積もっているらしい。

「とりあえずまぁ、何か見てみる？」

その言葉に沙南と百瀬が頷いて、それぞれ目ぼしい本を手に取りはじめた。背表紙を眺めている沙南の後ろで、残る二人がそっと目配せする。沙南はそれに気付かぬまま、文字の剥がれていた一冊を棚から抜き取った。

「ねぇ、サナ」

ロアルの呼び掛けに振り向けば、四つの瞳が真直ぐにこちらを見つめている。沙南は一つ首を傾げ、手にした本をテーブルに下ろした。そこには既に百瀬が選んだのだろう、数冊の本が積まれている。

「ロア？　百瀬まで。どしたの」

「……あのね。私たちの担当してる、“黒髪の女の子”の話なんだけど」

……それか。思って沙南は眉を寄せた。どうにも好きになれない話

題だ。七不思議の中で一番、厄介な匂いがする。
それがどうしたの、と問い返せば、百瀬が僅かに逡巡した。彼女は一瞬だけ視線を彷徨わせ、次いで意を決したように口を開く。
「あなたはこの話、どう思う？」

第五章《迷霧》：さがしもの（4）

「どう、って……」

困惑して見つめ返した、その瞳は真剣で余計に戸惑う。ただならぬ空気を感じて沙南は、真直ぐ身体を残る二人の方へと向けた。彼女達の言葉は、何故だか真面目に聞かなければならないような気持ちになるのだ。

（そういえば）

この二人と自分、という組み合わせは異色だと沙南は思う。寮長のロアルとは事務連絡を兼ねた交流を行うことはあったが、たいてい彼女達と話す時は他数人が一緒だから。

ロアルと百瀬は、不思議な二人組だった。一年と少し前の中途半端な時期に転入してきた百瀬に対し、ロアルはかなりの古株だと聞く。二人は部屋こそ別々であるものの、何故か出会った翌日には既に行動を共にしていた。沙南の記憶では、少なくとも。

けして積極的な人付き合いを得意とするとは思えない百瀬と、日本人ですらないロアルでは、直ぐ様打ち解けるような共通点など見つからないはずである。沙南はずっと、それが不思議だった。

「やっぱ、幽霊とかじゃないの」

「……そう、だよねー」

沙南の返答に何故だろうか、二人は安堵の表情を浮かべた。それがどうしたの？　問えば、何でもないのだとロアルが笑う。

おそらくは“黒髪の少女”に関する調査が難航しているのだろう、沙南は勝手に思うことにした。幽霊相手に満足な証拠など出るはず

がなく、それは他の噂だってそうだ。もとより誰も、真実を突き止めることなど期待していない――要はそれらしい内容のレポートを完成させれば良いのである。

……ただし今彼女達がいる場所のように、確かな形が存在しているものもあるのだが。

「……さて、さっさと終わらせちゃいましょ」

今日は運良くカメラも無いし、と悪戯っぽくロアルが笑う。課外授業の関係で、いつも沙南達に張りついている映研の面々は出払ってしまっていた。レンズを向けられていない束の間の解放感を、どうしても嬉しいと感じてしまうのだ。

三人は再び本の山に視線を戻し、手近なものから捲り始める。中はたいていが小さな字でびっしりと埋め尽くされていて、それは日本語だったり英語であったり、沙南にはわからない国の文字のこともあった。

殆んどのものは解読不能で、読めるものでも全てに目を通すことはできない。開いて一瞥して閉じる、不毛な作業を少女たちは繰り返す。

「……変なもの、見つけた」

沙南が声を上げたのは、作業開始からそろそろ一時間が経過しようかという時であった。百瀬が顔を上げ、ロアルも席を立って沙南のもとへとやって来る。

――それは一見何の変哲もない冊子のように思われた。

しかしよくよく観察すれば、背表紙に沿って妙な綻びが見える。それが本の背を縫い合わせている糸だということに気付くのに時間はかからなかったが、同時に一つ疑問が持ち上がった。糸の様子はいかにも手作りのそれで、古いながらも完全な形で本を保管している

この書庫の中、その一冊だけは妙な違和感を孕んでいた。まるで、誰かが閉じ直したかのような。
ロアルが目を細め一言、変ねと呟いた。閉じられた本に不自然な隙間が見える。何か、挟まっているのだ。
訝しんで沙南が表紙に指を掛けた、その時だった。

「――――その本を、見るのですか」

突如聞こえた声に、三人は弾かれたように振り返る。疑問なのに語尾の上がらない、妙に落ち着いたトーンのそれ。
正体はすぐに知れた。部屋の端、壁にもたれるようにして見知らぬ少女が立っていたのである。

「……！　誰！？」

百瀬の握る懐中電灯の光が、その姿をはっきりと浮かび上がらせた。頭の高い位置で結い上げた髪を含めても、全体的に小柄な少女である。身に付ける制服は学校指定の物で、辛うじて生徒らしいという事だけは知れた。

「オミ、と言います」

律儀に質問に答えて一礼する。オミと名乗った彼女は、それ以上はこちらに近付いてこようとしない。

「いつから、ここに」
「たった今です」
「どこから入ってきたの？」
「……どこ？　もちろん入り口、ですが」

ことりと首を傾げ、オミは暗がりの中の扉を指差した。そこは沙南達の入ってきた通路とは違う――つまりは、禁書庫の正しい入り口だ。鍵がかけられていて、生徒はけして開けることができないはずの。

「どうやって――」

「それより。その本を見るのですか？」

ここで初めてオミは質問を遮った。黒目がちの大きな瞳が真直ぐに三人を捉えている。誰も口を開けないでいると、オミはゆるりと一度瞬きをした。

「この部屋は、“学園”の創始者且つ初代理事長の書室です。ここに在る物全てが彼の私物」

次いで落とされた言葉に三人は瞠目する。そんな話、聞いたことが無い。

沙南は改めて手にした本に視線を落とした。これもその、創始者とやらの物なのだろうか。

「それを開けばもう、貴女達は逃げられません」

「……何それ」

「もっとも、既にそちらのお二人はご自分の立場を理解してらっしゃるようですね。実質の選択権を持つのは貴女です――五十嵐、沙南さん」

どさり、と重い音がした。空気か揺れて誇りが舞い上がる。百瀬が手にしていた本を落としたのだ。ロアルは目を見開き、次いできゅっと唇を噛み締める。

状況が理解できていないのは沙南だけのようだった。目を白黒させている間に、その沈黙を破ったのは百瀬。

「――オミ、さん。あなた、“あそこ”の……？」

「オミ、で構いません」

淡々と言い切った後、オミはすっと瞳を細めた。

「ルカ様からの言伝です――」

時が来たのだ、と。

告げた少女に向かい、止めてとロアルが声を張り上げた。沙南は驚愕に目を見開く。彼女の叫び声など、初めて聞いた。

「こんなことして、どういうつもり……！？」

「ルカ様は貴女方に――正確にはロアルさん、百瀬さん、貴女たちお二人の“ご友人”に、一度だけ選ぶチャンスをお与えになりました。“私たち”と関わるかどうかの選択です」

「この子は、友達は関係ない。一般の生徒なのよ！？　巻き込まないで……！」

「それは彼女自身が決めることです」

言い切って、瞬きもせずに沙南を見つめる。オミの視線を痛いほどに感じながら、しかし何故だろうか、沙南の心は不思議なほどに凪いでいた。

「どうしますか？」

貴女のお好きなように、とオミは言う。止めてサナ、あなたは知らなくて良いこと。開けちゃダメだよ、沙南。ロアルと百瀬の声は、

何だか遠くに聞こえた。
沙南には未だ、自分の置かれた状況が把握し切れていない。それでもこの本には何かがあること、それが今“学園”を騒がせる事件に関係があること――そして他ならぬ自分が、選択を迫られていることは理解した。
それからもう一つ。ロアルと百瀬が何かを抱え込んでいたこと、それを周りには隠して過ごしてきたという事実にも。

（平和に過ごせれば、それで良かった）

もともと気乗りのしない話だったのだ。七不思議など調べても有益なことなど皆無で、厄介事を引き込む可能性のほうが高かった。それがこの“学園”だ。そして、案の定。

（……でも）

活発でお節介でトラブルメイカー、そんな自分のルームメイトを思い浮べる。何かに気付いて、もしくは巻き込まれて、それを隠し単独行動を続ける愛。あの馬鹿のことだ、もう深みにはまって取り返しが付かなくなっているかも知れない。あれを、無視できるだろうか。
そして今此処にいる二人も。例え背後に見え隠れするのが何であっても、この閉鎖された世界の中で出会った大切な。

（……友達を、放っておけるか？）

――答えは否に、決まっている。
沙南は初めて全てを受け入れた。心の何処かで拒んでいた事柄に、関わりたくないと思い続けたものに、正面から向かい合う覚悟を決めたのである。

腹を括るってこういうことかな。思いながら、沙南は手にしていた本を逆さまにした。そのまま勢い良く開けば、ページの合間に挟まっていた物がばらばらと床に零れ落ちる。

「これ……？」

それは、古びた数枚の写真と茶封筒だった。

第五章《迷霧》：間話

「――【コンタツ】の奴が派手に動いたらしいわね」

暗がりで人影が揺れる。彼らは光り一つ差し込まないこの場所と、同じ色の世界の住人だ。

「……随分と情報が遅いな【ジーザス】。“監視役”のはずのお前が」

「どーせあのハゲオヤジ、“目”への報告を忘れてんのさァ。ボケだよ、老ボケぇ」

きゃらきゃらと笑う声は随分と幼い。腹を抱えているその主を咎めるように、不機嫌な音が降った。

「……お前は黙れ【ミリアム】。語尾を伸ばすその口調をどうにかしろ――不快だ。消え去れ」

「うはぁ、【ペルソナ】ってば怖ッ！　こんな血も涙もない奴なのにィ……君を信じてるオトモダチが可哀想ー」

そのやり取りを見て、【ジーザス】と呼ばれた女はくすくすと笑みを零した。自分も含め、人の屍を糧に生きる世界の者とは思えぬ面々なのだから笑ってしまう、と彼女は思う。【ミリアム】も【ペルソナ】も、その容姿だけならまだまだどこかいとけない。だからこそ、生徒のフリなど出来ているのだが。

「あなただって十分、オトモダチを騙せてるわよ【ミリアム】。キャラクターが間逆ですもの」

「僕はうまーくやってんのさァ。【コンタツ】の馬鹿とは違って目

立たないところで殺ったからねェ。あのオヤジなんて、よりによって正面玄関だよォ？」

そりゃー目立つわなァ。

【ミリアム】はそう言ってまた一人笑い始める。声のボリュームを控える気などさらさら無い少年を一瞥し、無視することを決めたのだろう。【ペルソナ】は表情一つ変えず【ジーザス】に向き直った。

「ところで【ゴスペル】と【バプテスマ】は何をしているんだ？」

「やる気の感じられない二人だからねぇ……報告もないし、もしかしてもう死んでるかも」

「――ふん、良い気味だ」

一応とはいえ、仲間の行方が知れなくとも心配の色一つ見せないどころかあっさり切り捨てる。冷徹の“仮面（ペルソナ）”、その名は伊達じゃないと【ジーザス】はひとりごちた。

「まぁ良い――仕事に戻るぞ【ミリアム】」

「ふぁ～い」

いってらっしゃいと手を振りながら、【ジーザス】は口元に笑みを浮かべた。あの二人が真面目に仕事をするのだ、また誰かが犠牲になる。

彼女にとっては、赤の他人が何人消えようと同じ事だ。大切なのはただ一つ、任務の遂行のみ。追い求めてきた物はきっと、もうすぐ手に入る。

「……今宵の山羊に、安らかな死を」

そして犠牲者（スケープ・ゴート）の贄血を、あの山に捧げるのだ。

第五章《迷霧》：Ｕｎｋｎｏｗｎ-Ｕｎｋｎｏｗｎ（1）

色褪せた写真の中で初老の男が笑っている。白い歯を惜し気もなく見せて、目尻には柔らかな皺を刻んで。

その彼を取り巻くように並ぶ、幼さを残した子供たち。たった一度きりの瞬間に微笑みを浮かべていた、この子は誰？

＊

胸をかき乱す生温い風が吹いた、孤島の檻の深夜二時。

三人目の遺体が発見された時、沙南は仲間たちと共に談話室の一角を陣取っていた。各棟に一室ずつ存在する憩いの場には彼女たち以外誰もいない。時間が時間なので当たり前だろうが、今はそれが有り難くもあった。

集まっていたのは“七不思議”調査班である七人と、映画研究サークルを代表して山口うるき。

本来ならばここにいるのはリーダー格の渚であるべきだが、生憎彼女は明日の早朝練習――勿論バスケ部の――に備えて既に就寝してしまったらしい（ちなみに同じ部の愛は少ない睡眠時間でも十分活動できる、恵まれた身体の持ち主だ）。よって相談の結果一番頭の切れるであろう、うるきを呼んだのである。

「何があったの……？」

誰もが迂闊には口をきけないような空気のなか、口火を切ったのは鮎村絹華だった。彼女が集まりに顔を出したのは久しぶりだ。召集

がかかった時のただならぬ様子を察し、不安がるルームメイトを部屋に残してやってきたのである。

「皆に、話があるの。うるきも聞いて」

切り出した沙南の横にはロアルと百瀬が並ぶ。

その珍しい組み合わせに誰も疑問を抱かなかったのは、今日（時間的にはもう“昨日”になってしまっているが）彼女達三人が第二図書室の、あの閲覧禁止書庫に踏み入ったことを知っているからだ。

そして集まった全員がその場所で三人に“何か”があったことと、今から語られる内容がその“何か”についてであることを悟っていた。

沙南は一つ息を吸い込むと、自分の経験した全ての出来事を語り始める。

――本を開いて写真を見つけた後、三人はあのオミという少女から事の詳細を聞いていた。オミは生徒として“学園”に編入したが、実はある組織に所属している。その組織はこの島で“ある物”を探していて、その協力者として“学園”の謎を追っていた沙南たちの班が選ばれたこと。

「――ちょっと待って、」

ゆっくりと説明を続ける、沙南の言葉を遮ったのは翠子だった。とりあえず、あんまり信じられないけど、話の筋はわかった。言いながら少女はふと、不安げに眉をひそめた。

「清川さんと警備員のことは、その……“組織”の人と関係があるの？」

「それなんだけど……」

沙南は眉をひそめる。オミにそれを問うてはみたのだ。しかし返ってきたのは、間接的にはそうかもしれない、という何とも曖昧ないらえで。

そのままの言葉を伝えれば、翠子は小さく唸って腕を組んだ。

「間接的……？　じゃあ“組織”の人が直接――その、殺したり、したわけじゃないんだ？」

「“捜し物”とやらに関連する理由で、その“組織”以外の何者かが清川サン達を手に掛けた――って意味ですヨ」

口を開いたのはうるきで、全員がはっと顔を上げた。この少女は頭の回転が速い。確認する術はないが、この場にいる誰よりも先のことが見えているのかもしれなかった。

「アララ、皆さんそんな怖い顔しないでくださいヨ。可能性のお話なのに」

うるきはおどけたように首を竦めたが、誰も表情を緩めることはなかった。

小さく息を吐いてロアルが一歩、前に出る。

「……私とモモセは、ある事情があってその“組織”の幹部と面識があるの」

ここにいる皆だけの秘密にしてほしい。

その真剣な声色に、誰かが息をのむ音がした。銀灰色を湛えた瞳が真直ぐ少女達を見つめている。

「詳しいことなんて知らないけれど、かなり危険な集団よ。こちら

が協力すれば、私たちの命くらいは考慮してくれるでしょう――でも、危ないことに変わりはない」

保証ではなく考慮なのだと、呟かれた言葉の重みに少女たちは戦慄した。目の前に、非日常がぽっかりと口を開けて待っている。

「……だから皆、良く考えて」

百瀬が台詞を繋いだ。彼女の過去を知るものはこの中にいないのだと思っていたが、ロアルは違うのだろうか。

頭の隅で考えながら、沙南は途切れた言葉の続きを口にする。

「今ならまだ、私たち三人以外は逃げられる。班を抜けて、一切の関わりを断つの」

それが、何も知らない少女達を危険から遠ざける唯一の方法だった。“組織”への協力は確実に、潜み続ける殺人犯へ辿り着いてしまう可能性を秘めていた。正体の判らない相手への恐怖。自らの友に危害が及ぶ危険性。

それに思い至ったとき、沙南はようやく百瀬とロアルの言葉の意味を悟ったのだった。本を開くなと言った二人は、自分を危険から守るために。そして沙南もまた、怖くなったのである。大切な友達を危険に曝せるだろうか。

つくづくあたしは勝手だ、と内心沙南は苦笑する。自分は二人の気持ちを無駄にして飛び込んだというのに。

「勝手なこと言ってんな！」

「！」

心を読まれたかのようなタイミングで声が上がった。驚いた沙南の

視線の先、愛が仁王立ちになっている。

「友達見捨てて逃げろっての？　このあたしに！」

「でも愛、」

「馬鹿沙南！」

二の句が次げなくなって、口をぱくぱくさせる沙南に愛はずいと詰め寄った。胸ぐらを掴む勢いで顔を寄せ、正面から睨み付ける。

「何の為の友達？　だいたいアンタ、あたしのルームメイトだろ。いちれんたくしょーってヤツでしょう」

「……愛の言うとおりだよ、沙南」

私はやめないよ。言い切ったのは意外にも絹華で、沙南は目を見開いた。ここまできたら一蓮托生だよね、と少女は柔らかく笑う。その様子はあまりにも落ち着いていた。

「じゃあ、あたし達も」

「逃げるわけにはいかないわね」

交互に口にして双子が笑う。ちょっと怖いけど、みんなが一緒だもん。

「あ、なた達……」

ロアルがぽかんと口を開けた。その気抜けた様子に全員が笑って、最後にうるきが悪戯っぽい表情を浮かべる。

「こんな面白そうなコト、逃がす手はありませんねェ」

満場一致での可決だった。遊びではないのだと真剣に説くロアルを愛が一蹴し、沙南までもが肯定させられてしまう。止めるべきだと最後まで粘っていた、百瀬も結局は押し負けた。

話し合いにより、“組織”への接触の際はロアルと百瀬どちらかが必ず立ち合う形をとることを決めた。二人の他はここにいる誰もが、相手の容姿を知らないのだから（沙南はオミのみ見ているが）。それから、この話は他言無用とすること。つまりはうるき以外の映研部員には、当面の間伏せることにしたのだった。話は大きくしないほうがいい、という考えからである。

「それじゃあ……皆にも、これ見てもらおうかな」

言って沙南は机の中に隠していた、一枚の茶封筒を取り出した。

第五章《迷霧》：Ｕｎｋｎｏｗｎ-Ｕｎｋｎｏｗｎ（２）

＊　＊　＊

「――クッソ！」

一人悪態を吐いた男の声は、虚しく夜の校舎に吸い込まれてしまった。こんな夜中に呼び出されて、年下の同胞に偉そうに命を下されれば頭にもくる。しかし世は実力主義だ。逆らう権限を持たない自分が、最も腑甲斐ない。

男は仲間内では、【コンタツ】というコードネームで呼ばれていた。ロザリオを指す神聖な名であるが、どうにも響きが悪い。日本語の“ポンコツ”と音が似ている、そう言って嗤ったのは【ミリアム】の名を与えられた生意気な少年だった。思い出して、【コンタツ】は苛々と頭を掻く。あれは仲間内では最も技術に長けた人間だ。小憎たらしいことこの上ない。

（……さて、どうするか）

【コンタツ】は目を細めた。目の前には死体が一つ、今宵の犠牲者である。胸には小さな穴が一つ開いていて、他に絶命の原因は見当たらなかった。

弾丸はきっと体の中心、心臓に食い込んで止まっているのだろう。出血は最小限に押さえて最大のダメージを与える、この技術こそが【ミリアム】の強みだった。あの少年が重宝される所以だ。

対する【コンタツ】も先日一人始末したのだが、どうにもそちらは不格好であったように思う。派手な出血のわりには一撃で仕留めるに至らず、その場所も悪かった。全ての行動は仲間の一人である、“目”と呼ばれる監視役に報告することになっているのだが、気乗りはしないというものだ。

一つ伸びをして【コンタツ】は、死体の纏う服に手を掛けた。ずるずると引き摺り担ぎ上げれば、彼よりは小振りの体躯は床から完全に離れた。

これからこの気の毒な元・生物を、適度に人目につく場所に移動する。現在地は人気が余りにも少なくて、下手すれば死体がこのまま朽ちてしまうからだ（【コンタツ】はそれでも構わなかったのだが）。

どこにしようかと考えを巡らせる。先日彼が犯した失態のように、目立ちすぎる場所ではいけない。

――立ち去る彼の後ろ姿を見つめる瞳があったことに、【コンタツ】は終ぞ気付かなかった。

＊　＊　＊

「なにこれ……？」

少女たちが覗き込む中、テーブルの上に沙南は封筒の中身を広げていく。写真だ、と双子が声を合わせた。

「ずいぶん古いですねェ……」

誰でしょうコレ。言いながら、うるきが一枚の写真を摘み上げる。
沙南にもわからない、それに写っているのは一人の男だった。
燕尾服をかっちりと着込んだ彼の顔に笑みはない。モノクロの為にはっきりとはしないが、どこか建物が背景になっているようだった。

「こっちは……同じ人？」

愛がぺらりと写真を持ち上げる。同じ顔つきの男が少しだけ老けて、そこにはいた。隣には見知らぬ女性が立っているが二人とも無表情で、不機嫌にさえ見える。
その後も“男”の写真は何枚か続いた。それは単独であったり、誰かと一緒であったりと様々。男の年齢は写真ごとにばらばらで、年老いたり若返ったりしている。
――と、ふいに写真を検分していた絹華の手が止まった。

「……あの、これ」
「どれ？」

差し出された写真を目にした、全員が息を呑む。
それは今日初めて見る、人物の写っていない写真だった。一見風景画のようにも見える、セピアに色褪せた海。その中心にぽっかりと浮かぶ黒い影の正体を、少女達は瞬時に悟った。

「この島だ……」

その姿をはっきりと見たことはない。“学園”に入学する者は全て、フェリーの中から外を見ることなど無いまま島へと連れてこられたからだ。

それでもわかる、それは直感に似た確信だった。これは外から見たこの島だ。少女達の世界を形成する、孤島の檻。

「待って、裏に何か書いてある」

絹華の手の内から抜き取って裏返す、愛の眉が僅かに寄った。何これ。落とされた呟きを拾って、皆その裏面を覗き込んだ。消えかけた、滑らかな筆跡がアルファベットを紡いでいる。

“Ｅｒｉｎｙｅｓ‐Ｇｌｏｒｉａ”

読み取りづらい筆記体に皆が頭を悩ませる中、ロアルがぽつりとそれを読み上げた。

――エリニュエス＝グロリア、と。

「えにゅ……？」

聞き取れなかったのだろう、愛がしかめっ面で首を傾げた。それを見て小さく笑みを零し、ロアルは再び口を開く。

「“ｇｌｏｒｉａ”は聞いたことあるんじゃない？　良くミサとかで歌われてる」

「ああ、“栄光あれ”ってやつデスね」

グローリア、グローリア。軽く旋律を浮かべてみせるうるきにロアルが頷く。キリスト教徒でもなければミサに参列した経験もないその他のメンバーは、ただ目を白黒させるばかりだった。

「“Ｅｒｉｎｙｅｓ”はギリシャ神話の、復讐の女神のこと。一人ならエリニュス、複数ならエリニュエスと呼ぶの――だからこれは後者ね」

「……はぁ」

「復讐？」

「そう。蛇の頭髪で翼を持ち、鞭と炬火（たいまつ）で罪人を追求するの。【アレクト】【メガイラ】【ティシフォネ】の三姉妹を合わせて“エリニュエス”と呼び、彼女達は特に尊属殺人に対して厳しく報復する」

ぽかーん、という音の似合う顔を全員が浮かべていたことだろう。当たり前のことを語るようにすらすらと述べた、本人はどこか遠くを見つめていた。

「……良く知ってるね、そんなこと」

感心した様子の沙南に、ロアルは曖昧な笑みを浮かべる。どこか困ったような表情だった。

「うん――うち、こういうの詳しい家柄で」

「……そうなんだ」

沙南はぱちぱちと目を瞬いた。たった一言だが、ロアルが自らの生家について語ったのは初めてのことである。

そんぞくさつじん、って何。話について行けず目を回す愛の問いには、丁寧にうるきが答えをやっていた。殺人は殺人でも、血縁者を殺してしまうことデスよ。

「んでこの、エリなんたらってのは何なわけ」

「エリニュエス＝グロリア、ね」

面倒になったらしい愛の言葉を沙南が訂正する。質問に答えたのは、今度は百瀬であった。

「それなんだけど――たぶん、島の名前なんじゃないかしら」

「名前ぇ？」

首を傾げた愛の目の前でばさり、一冊の本が開かれる。分厚く古びたそれはあの禁書庫から持ち出したもので、唯一島に関するらしい記述を発見できた物だった。

英語で記されたそれを読み解いたのはロアルである。彼女の口からは昔この島が軍事施設として使用されていたこと、そして当時この場所ではある神を盛んに讃えていたらしいことが語られた。

「軍事施設とは言っても――最終的に、それに関する罪人を裁く場所になってたみたい。島に懲罰用の地下牢があったって」

「なーるほど、それで“報復の女神”なんですネェ」

「ち、ちょっと待ってよ！　“学園は元軍事施設”って本当だったの？」

嘘みたい、口を揃えて双子が呟く。沙南とて信じられない気持ちで一杯だったが、もう何だって受け入れるつもりでいた。

それにまだ写真は残っているのだ。おそらく本当に問題なのは、ここから。

「……次はこれ、見てくれる？」

事前に確認して一纏めにしていた、数枚の写真を差し出した。裏を向けて渡したのは、それを目にした瞬間の衝撃が未だ抜け切っていなかったからだ。

写真を表に返した瞬間、少女達の眼が限界まで見開かれる。小さな

悲鳴を上げたのは薫子だろうか。あとは全員、身動ぎ一つできない状態だった。

「なに、これ……」

五つぐらいだろうか。そこに写っていたのは一人の、まだ年端のいかない少女であった。色の無い写真でもはっきりとわかる漆黒の髪が肩の辺りまで伸びていて、瞳はそれと同じ色をしていた。白い肌と服と、その黒とのコントラストが目に痛い。

その少女の頬に黒い影が付着していた。もしこれがカラー写真ならば、鮮やかな紅をしていたに違いない。おとがいから首を伝って胸の辺りまでをべっとり染め上げた血液は、こちらを見据える彼女のものではないのだろう。小さな足を浸している血溜りは明らかに、人間一人分の致死量を越えていた。

「この子、何なの……？」

何故カメラの主はこんな写真を撮ったのだろうか。シャッターが切られた瞬間の、現場はどのような状況だったのか？　能面のように表情を失っている、少女の写真は何枚か続く。

妙な気分だった。

まるで一人の人間の成長を、早送りでみているかのような。写真の中の少女は少しずつ年を重ね、美しく成長してゆく。たいていの写真にはさっきまでよく見かけた正体不明の男が隣に立っていて、他何枚は彼女と年頃の近い、見知らぬ少年少女達と一緒である。切ったことが無いのだろうか、伸びることをやめないその髪は嫌でも目を引いた。

うち一枚などは日本の着物を身に着けていて、まるで市松人形のような風体である。日本人とは違う顔つきがどこか、幻想的でさえあった。

黒髪の少女が十歳前後まで成長してからは例の男の姿がぱったりと途絶えてしまい、何があったのだろうか、その後は終ぞ姿を確認できなくなる。現在の沙南達と同じ位の年齢まで成長した少女の姿は、誰もが知る一つの噂を連想させた。
腰の辺りまで伸びた長い髪とぬばたまの瞳。凝縮した闇を宿らせた、彼女は。

「少女の、亡霊――」

誰にともなく呟いた愛の、言葉の響きが全員を震わせた。絹華などは写真を凝視したまま、ぴくりとも動かない。

「……まさか」
「だってそんな――、」

口々に否定を並べながら、しかし全員が理解していた。ロアルと百瀬が無言を貫いていた、それが証拠だったのかもしれない。
“学園”を騒がせる“亡霊”は彼女なのだ。その存在は本当に霊魂の類なのか、はたまた。

「あれ？　まだ一枚残ってた」

沙南の手の動きに合わせて揺すられる、茶封筒からひらりと一枚落下する。そこに写っていたのはあの初老の男と、それを取り囲む六人の子供達だった。
幾分か前の写真なのだろう、例の少女も幼い。なぜかこれ一枚だけは鮮やかな色がついていて、モノクロとセピアの海の中では一際異彩を放っていた。
黒髪の少女は中央の椅子に腰掛けた件の男の膝の上、抱えられるよ

うに座っている。その左に銀髪の少年、右には金髪の少女が見事な対になって立っていた。その後ろに並ぶ三人のうち、両端の二人は若干年上のように見える。活力に溢れた笑顔を浮かべる大柄な少年と、淡く微笑む金の巻毛の少女だ。中央、椅子の真後ろに立つ少年は僅かに背が低い。

「この子、何だかマリリンに似てませんかネ？」

「まりりん？　……ああ、マリアのことね」

うるきの指差した右端の少女の、柔かなウェーブは確かに似ていた。映画研究サークルの部員の一人、マリア・ウィンチェスター。写真なので良くはわからないが、穏やかな顔立ちもどこか似通った部分を感じさせる。違うのは瞳の色で、写真の少女が深紫なのに対しマリアは波璃のような青だった。

「この男性は、どちらサンなんですかネェ？」

写真を検分しながら呟いた、うるきの声にロアルが顔を上げる。たぶんだけど、“学園”の初代理事長。彼女の言葉に今度は沙南が目を丸くする番だった。

「え、ええ！？　本当に？」

「オミが言っていたでしょう、あの部屋の物は全て彼の私物だって。だとしたら――」

「それは……そうかも」

「だとしたらこの子達、理事長殿のお子サンですかネ？」

「こんなに？　血縁だとしても年齢的には孫っぽくない？」

闇を切り裂くような甲高い音が聞こえたのはその時だった。一斉に顔を上げた少女達の耳が拾い上げる、それが悲鳴だと最初に気が付

いたのは絹華だ。
何かが起こった。今この状況でおとなしく布団を被っていられるほど、彼女達は呑気ではない。

「絶対一人にはならないで！」

ロアルの声に従って一塊に廊下へ飛び出す。乱雑に封筒へと詰め込んだ写真は胸に抱えたまま、沙南も皆の後を追う。
急いだせいで誰も気が付かなかった。最後の写真の裏には消えかけた、小さな文字が綴られていた。

“堕天使達に祝福を”

第五章《迷霧》：間話 - ある屋敷にて -

重低音を響かせて恰幅の良い男が退室する。すれ違いざまに恭しく礼をされ、思わずサブナックは眉を寄せた。

「……おい、ユリシーズ」

今の奴は何だ？

問い掛ければ室内の少年は不機嫌な面持ちのまま、ゴミさ、とぶっきらぼうないらえを返した。

そんなことを聞いているのではない、言ってもユリシーズはぷいと視線をそらしてしまう。どうにも苛々している、サブナックはそっと息を吐いた。

「……ダウマン子爵だな。三つも下の階級の者が何を？」

「ただおべっかを使いに来ただけだよ――サブは、気にしなくていいから」

柔らかく言い切ってみせた少年の口元はしかし、不自然に歪んでしまっていた。笑うことができていない。

実のことを言うのならば、少年とあの男の会話はほんの少しだけサブナックの耳にも入っていた。けして盗み聞きをしたかったわけじゃない、と声には出さず言い訳する。

「ウォルディ閣下が最近、姿を見せないらしいな――関係があるのか」

「――サブナック」

ぴしり、と空気が張り詰めた。硝子玉のような少年の瞳が、奥に確

かな怒りを滲ませて青年を見つめている。
機嫌を損ねることなど承知して話を進めた、サブナックは動じなかった。正面から向き合って、ユリシーズの呼吸を読むことに集中する。

「……僕も、君も、ただの一公爵に過ぎないんだから。僕がそんな上層部の話、知るわけ無いじゃないか」
「俺とお前の位は確かに等しくなったが……ユリシーズ、お前は特別だろう。“ファンダルス”の一族に関わることを許されているな、他でもない首領（ドン）直々の命によって――」
「……黙れ！！」

唇を噛んだ少年の周りを刹那灼熱が吹き荒れる。それは一瞬でその白い手に収束し、たなごころに紅蓮の炎が現れた。ちらちらと燃えるそれは、ユリシーズのなけなしの理性のお陰でぐっと握り潰される。

「それ以上口にしたらサブナック、君でも容赦しない。消し炭に変えてやる……」
「冷静さを欠くな、お前らしくもない。そんなに、気に食わないことがあったか」

ユリシーズ・ルインというこの少年が“カーマロカ”を作り上げる一族、ファンダルスに贔屓される要因。それこそが今彼が見せた“人ならざる力”にあるのだと、サブナックは知っていた。
戦闘能力は高くとも只の人間である自分と、能力者である少年では基盤からして違う。それ以上に注目すべきは、あのエネルギー密度の高い炎だ。
噂でしかないが、ファンダルスの一族に代々受け継がれる力は火炎（パイ）放射能力（ロキネシス）であるらしい。世の悪を焼き尽くす煉獄の焔。一族以外の

能力者が組織に存在しない中ユリシーズだけがそれを許されているのは、少年の中に一族の片鱗を見いだしたからなのだろうか。

（ユリシーズの中にファンダルスの血が……？）

まさかそれは無いだろう、考えて早々に止めてしまう。ファンダルスは代々然るべき相手を定めて世継を絶やさなかった名家だ。うっかり外にその能力を含む遺伝子が流れることなどあり得ない。

毛を逆立てた猫のように身体を強ばらせる、少年にサブナックはゆっくりと近づいた。頭に手を伸ばせば一度驚いたように震える。その柔らかな髪をくしゃくしゃと掻き回してやれば、だんだんと力を抜くのがわかった。黙ってそれを眺めながら、まだまだ子供だとサブナックは思う。

「……俺が信用できないか、ユリシーズ」

「え……？」

何を言っているのかわからない、といった様子で少年が目を瞬いた。歯痒い思いでそれを見つめた後、青年は腰を落としてユリシーズと目線をあわせる。まだまだサブナックに比べれば背が低いのだ。

「お前が話したくないことを聞き出すつもりはない――だが最初に言ったはずだ。俺は俺の正義にしか従わないが、お前にならついて行っても構わない」

ユリシーズと出会ってこの組織へやってきた。当初はサブナックも、爵位に準えた五つの階級のうち最下位からの始まりだったのだ。その頃既に公爵のポジションを務めていたこの少年に追い付いた、サブナック出世スピードは異例であったと言える。

とはいえサブナックは先日侯爵位（公爵の一つ下）から上がったば

かりだったので、ついこの前までは事実上ユリシーズは彼の上官だったのだが。

「階級が同じになっても、いつまでもお前は俺の上にいるんだよ。好きなように使えば良い――何なら、さっきの男も俺が消してやる」

今やサブナックが立つのは部下の一人や二人、どうにでもできる地位だった。半ば本気で告げれば帰ってきたのは、場違いに気の抜けた笑い声。

「……ふ、あはは」
「……何だ」
「あはははは！　う、うくく」

何が可笑しい。不機嫌な声で告げれば、ユリシーズの目にうっすらと涙が浮かんでいるのが見えた。泣くほど笑うか。げんなりと息を吐くサブナックの肩に、ぽんと手が置かれる。

「君には敵わないなぁ、サブ」
「お前、人の話を……」
「ふふ、下手くそな慰め方」
「悪かったな」
「違うんだ――ごめん」
「……ユリシーズ？」

顔を伏せてしまった少年が珍しく謝るものだから、柄にもなくサブナックは動揺した。
いつも飄々としているくせに、何なんだ一体？

「ごめん、詳しいことは君にも言えないんだ」

「……そうか」
「カーマロカは、もうすぐ波を迎える」
真剣な声が落とされた。それに敵かと問い返せば、単なる内輪揉めなのだという。おそらくダウマン子爵はそれ絡みの用件で少年の元を訪れたのだ、わかってもサブナックは口に出さなかった。微かに聞こえた、何かを渡せとユリシーズに詰め寄っていた、男の声ばかりを思い出す。
「ちなみに我らがウォルディ継嗣殿下は、現在ある組織を追って潜入捜査中だよ」
「な、んだと!?」
けろりと言い放たれた言葉にサブナックは目を見開いた。“継嗣（けいし）”とは即ち“お世継ぎ”を指す。カーマロカの次期当主にあたるのが現在の総帥ドン＝ファンダルスの息子、ダンカの第一子であるウォルディ（つまりは首領の孫）だ。本来正当継承者であるはずのダンカはある事故が原因で前線を退いたと聞いていた。
過保護なまでの体制でここまで育てられてきた、その継嗣殿下が任務？
「ちなみにこれ、ドンには内緒なんだ。サブも黙っててねー」
「馬鹿か！“世継ぎ”を外に出したってのか!?　……まさか護衛は、」
「アイジャが付いてる」
アイジャ？
首を捻りかけて思い出す、ドン＝ファンダルスの寵愛を受けている一人の少女。滅多に屋敷の奥から出てこないが、確かそんな名前だったような気がする。ユリシーズがよくその少女の遊び相手を務め

ているらしいことを、サブナックは知っていたがしかし。

「それのどこが護衛だッ！！」

あんまりだ。思わず眩暈を感じてサブナックは額に手を当てる。たかが少女一人、護衛どころか足手纏いにしかならないだろう。首領がアイジャに目を掛けている、それなりの理由はあるのかも知れないが。

「お前、自分が何をしているのかわかって――」

「こうするしか、なかった」

「……！」

ふと目を伏せた少年の、哀しげな顔に言葉を詰まらせる。サブナックはぐっと拳を握り締めた。

一体、何が起ころうとしている？

「……ウォルディ閣下は、何を相手に？」

問い掛けにユリシーズはゆっくりと顔を上げる。悪戯っぽく目を細め、にやりと笑ってみせた。それが何故かサブナックには、無理にそうしたように見えてしまう。

「――オリビア、だよ」

＊　＊　＊

「――先生」

呼び掛けられてぎょっと身体を強ばらせた。振り返れば小柄で、華奢な印象の女生徒が立っている。

「ど、どうしたのかな？」

この“学園”での自分の役割を思い出し、慌てて男は表情を作り替えた。手から滲む汗を白衣で拭う。

授業の質問だろうか？　考えて、違うなと首を傾げた。仮初めの自分が受け持つ物理の授業に、こんな子供はいなかった気がする。

「聞きたいことがあるの、先生」

「言ってごらん」

早く自室に帰ってシャワーを浴びたかったが、悟られないように笑みを浮かべる。今は優しい教師を演じるべき場面だった。

さっさと話を聞いて、この娘を部屋に戻らせなければいけない。それに今“あれ”が誰かに見つかれば面倒だ。

「先生、いままでどこにいってたの」

「……え」

少女の唇から零された質問は、男の予想だにしないものだった。後ろめたいものを抱えていた彼は思わず動揺を顕にしてしまう。

落ち着け。自分に言い聞かせ、にっこりと笑顔を浮かべた。

「職員室に、いましたよ」

「嘘。アイジャ、見てたもん」

「……何を」

生徒の名はアイジャ、と言うらしい。頼んでもいないのに情報を与えてくれた、相手を男は見据えた。見られていた、何を、どこから？　頭の中で警報が鳴り響く。

「ねぇ、先生。北の倉庫にいたでしょう」
「……」
「何をしてたの？」
「……」
「何を運んでいたの？」
「……お前、」
「先生が殺したの？」
「何者だ」
「　先生が　オリビア　なの？　」

少女が言い切ったのと同時、男は袖口に隠していたナイフを思い切り振り上げた。
目撃者は消さなければならない。ここで失敗すればまた、

（【ミリアム】の奴に馬鹿にされる）

しかし男の凶器が少女を貫くことはなかった。切っ先を振り下ろすその前に、彼は自分の身に起こった異変に気が付いたのである。

「……あ、ア、うあぁあぁあぁあ！！」

叫びは言葉にならなかった。男はただ、自分の身体を呆然と眺めることしかできない。

（……畜生、）

朧気な意識の中で甲高い悲鳴を聞いた気がした。誰かが“あれ”を見つけたのだろう――彼が骨を折って移動した、あの死体だ。

最後にどうにか視界に入ったのは、自分を殺した少女の瞳。

丸い丸いその奥に、男を包む炎が揺らめき映っていた。

第五章《迷霧》：合流（1）

腰が抜けてしまったのだろうか、へたりと床に座り込んでいる少女を立ち上がらせる。小刻みに震える彼女の肩を抱いて一先ず、藤野の双子が部屋へと連れていくことにした。

この時間に起きている者は他にいないのか、それとも皆恐れおののいて部屋に籠もっているのか。どちらかはわからないが、駆け付けた少女達以外現場には誰もいない。

不運な第一発見者が見つめていた先には一つ、小柄な人影が横たわっていた。そっと近付いて確認した、死んでいると、ロアルの唇が告げる。

――その女性は第二図書室の、司書だった。

「こんな……どうして、」

ほんの数時間前に生きている彼女を見た、沙南は口元に手を当てる。閲覧禁止の書室に入るため司書が帰るのを待っていた。生徒の中で彼女の姿を最後に確認したのは、おそらく沙南達三人だ。

俯せている外傷の見えない身体を丁寧に仰向けた、うるきが小さく呻いた。季肋部の僅かに左寄り、ちょうど心臓の辺りに小さな弾痕を見つけたからである。服にはほんの僅かに血が滲んでいた。おそらくは、たった一発で。

「撃たれてる……」

すっと屈み込んだロアルが胸の前で十字を切った。流れるような動作は余りにも自然で、逆に幻想めいて見える。

ロアルはさして動揺した様子など見せず、百瀬も、絹華までもが淡々と現状を見下ろしていた。まったく考えの読めないうるきを除け

ば、今この場で平静を欠いている――つまり一般的な反応を見せていたのは愛と沙南だけである。早鐘のように打ち続けている心臓を宥め、沙南はそっと愛に目をやった。騒いだりパニックに陥ったりはしていないが、顔が真っ青だ。

沙南は他三人を見つめて思う。どうして、こんな状況の中普通でいられるのだろうか？

「誰か人を呼んできましょうかネ？　警備員でも先生でも……」

「待って」

冷静なまま立ち上がる、うるきを呼び止めたのは絹華だった。ほぼ時を同じくしてこの場所へ戻ってきた、双子もその声に立ち止まる。

「誰か、いるよ」

「！？」

言われた全員がぎょっと身体を強ばらせた。双子ちゃんが戻ってきたからじゃないですか、うるきが問い掛ければ首を横に振る。違うと言い切った絹華の言葉に寒気を覚え、少女達は一ヶ所に固まった。誰がいるの、何処にいるの。気配に気付きもしなかった沙南は、瞳ばかりを闇の中へと彷徨わせる。司書の遺体は、ぽつりと寂しげに置かれたまま。

――コツ。

音が聞こえたのはその時だった。靴底が床を叩く響きだ。コツ、コツ、こちらへと近付いてくるのがわかる。薫子が叫びだしそうになるのを抱き締める、翠子は震えていた。冷えきった沙南の手は隣にいた愛に絡め取られている。

コツ、コツ、コツ。

（――――来る）

「――そんなに、怖がらなくて良いのに」

誰かが息を呑む音が聞こえた。
無意識に閉じてしまっていた目を、沙南はおそるおそる開けてみる。
知らないうちに涙が出たのだろうか。薄ら滲んでぼやけた視界の中に、すらりとした人影が見えた。

「はじめまして」

金色だ、と思った。流れるような直毛と碧い目が一瞬、非常灯の光に照らされて煌めく。無機質さを感じるほどに整った、人形のような顔立ちの少女だった。瞬きを繰り返しながら沙南はそれを見つめる。どこかで、見たような気が。

「あなた……！」

声を上げたのは百瀬だった。耐えかねたように一歩前に出る彼女を見て、金髪の来訪者はすっと目を細める。そのまま視線を移動させれば、髪と同じ色の睫毛が頬に影を落とした。見つめる先には、横たわる司書の女。

「その人を殺したのは、アナタですかネ？」

朗々とした声を出すうるきの、物騒な問い掛けに少女は笑った。声を上げずに微笑む様はこの場の空気と融け合って、いっそ不気味にすら感じる。
暫しの沈黙の後、いいえ、と少女はいらえを返した。

「それじゃあ、アナタの仲間が殺した？」
「いいえ」
「……ワタシ達の事を、殺す気は？」
「ないわ。……オミから話を聞いていると思ったのだけれど？」

挙げられた名に沙南は目を見開いた。慌ててロアルと百瀬を見れば、二人は小さく頷いてみせる。うるきもそれに気が付いたのだろう、軽く目を見開いていた。こんなに、早く対面することになるとは。

「あたしはミクっていうの。それから、そこにいるのが――」
「！？」

誰一人言葉を発することができなかった。驚愕だけが少女達を取り巻いて離さない。
もう一人の存在なんて、誰が予想できただろうか。

「――ルカ、よ」

噛み合った歯車が回りだす。

第五章《迷霧》：合流（2）（前書き）

今更ですが、黒沼家があった町は完結済み小説「最後の三日」の舞台となっている地です。
「最後の三日」は本作から約三年後の話。蛇足。

第五章《迷霧》：合流（2）

バサリ、音を立てて落下したのは沙南の持つファイルだった。拾い上げることもできぬまま凝視する視線の先、黒髪の少女が立っている。

さらりと絹糸のようなそれが揺れた。長い長い闇色。ルカだと紹介された彼女がこの“学園”で何と呼ばれているか、この場に知らないものはいない。

沙南は漸く、ミクと名乗ったほうの少女にも思い当たった。まだ幼い頃のものしか無かったが、先刻まで皆が見ていた写真に写っていたうちの一人に違いない。

ぽかんとしたままフリーズするうるきの横では双子もまた硬直している。絹華の表情は、沙南の位置からは伺えなかった。

黒髪の少女――ルカはそんな彼女達をちらりと見やった後、柔らかな笑みを浮かべてみせる。

「はじめまして――それから、久しぶりね」

ロアル、そしてモモセ。

次いでルカが視線を向けた、その先には二人が立ち尽くしていた。名を呼ばれても何の反応も返せていない。この二人にとってルカの存在は鬼門なのかと、今更沙南の脳裏に不安が過る。

当の二人、特に百瀬の方は、己の動揺っぷりを声一つ出せぬままに痛感していた。目の前にいる相手には、かれこれ一年と少し会っていない。顔を見るのも今回で二度目だった――つまり百瀬の妹が彼女の目の前からいなくなって以来、初めてのことになる。今回の件で一度“学園”内で顔を会わせているらしいロアルとは違い、自分

のほうが数段狼狽している自覚が百瀬にはあった。

「え、知り合い！？」

「二人の知ってる人って――この人、本人だったの！？」

百瀬達の告げた“組織の知り合い”がまさか自分達の探していた“亡霊”当人だとは思いもしなかった、少女達から次々に驚愕の声が上がる。

ロアルが曖昧な返事を返しているのが聞こえたが、百瀬にはフォローに入る余裕など無かった。ルカに尋ねたいことが沢山ある。

この一年、百瀬には妹の様子など何一つ知らされていなかった。どんなに気に掛けたところで、この孤島ではそれを知る術など存在しない。あの小さな町から一族が消えて以来、一度も妹には。

（……ロアルは）

何を思っているのだろう、と百瀬は考える。百瀬が身一つでここへやって来たとき、その世話役を買ってでたのが彼女だ。入学してからもう数年になるロアルもまた、百瀬と同じ立場の人間だと聞いた。

――つまり身内か知人かが、あの組織の構成員となっている。

「……それ、銃殺ね？」

司書の遺体を一瞥したミクが呟いた。急に現実に引き戻されて、少女達は気を引き締める。

「キヨカワメイコの殺され方と同じ……」

「え、」

そう、なんですか！？

同じ年頃の相手に話し掛けるのに迷った挙げ句、一先ず敬語を選択する。声を上げた沙南にミクは一つ頷いた。

一人目の犠牲者、清川芽衣子の死因は生徒には隠されたままである。驚愕の事実に皆目を見開いた。最初から殺人を疑っていたうるきとそれを聞いていた愛、同じく沙南だけが冷静だ。

やはりこの“学園”には、始めから殺人鬼が潜んでいた。警備員を殺めた人物と同一かはわからない。だが少なくとも、一人以上は。

「残念ながら、これをやった奴の正体はこっちにもわかってないのよね」

物言いたげな表情でも浮かべていたのだろうか。沙南の方を見て、小さくミクが笑った。

「――本題に入りましょうか」

ルカの声が静寂を生み出す。穏やかに落とされたそれはしかし、凛とした響きを孕んで空気に溶けた。ぴんと張るような緊張感の中、彼女はミクの隣に並ぶ。薄紅に色付いた唇を開いて、柔く言葉を紡ぎはじめた。

「――貴女達には、私達の仕事を手伝ってほしいの」

捜し物を見つけるのだ、とルカは告げる。皆それに小さく頷いた。大まかな内容は既に、オミから話を聞いた三人の口から語られていたからだ。

「実際のところ、“捜し物”自体は別ルートから見つけられそうなんだけれど」

「それじゃあ別に……」

「問題はこの、好き勝手に“学園”の人間を手に掛けている連中よ」

ルカの言葉を繋いで、ミクが小さく溜息を吐いた。心底迷惑しているという顔だ。

一度開いたその唇で彼女は続ける。あたし達の“捜し物”をそいつ等も探している可能性があるの、と。

「貴女達に頼みたいのは、私達が派手に動けない昼間の見張り」

「見張りって……相手もわからないのに？」

「生徒の動きを見ているだけで良い。少しでも不審に感じることがあれば、知らせてくれれば良いわ」

「……ちょっと、お待ちいただいて良いデスか？」

ストップの声を掛けた、うるきを全員が振り返る。彼女は僅かに眉を寄せた後、確かめるように呟いた。

「それは、アナタ方の“敵”にあたる件の殺人鬼が――生徒の中に混じっているという意味で？」

「えッ！？」

驚いて声を上げた薫子の横では翠子もまた、同じ驚愕の表情を浮かべている。マジかよ、呟いたのは愛だった。

「頭の回転が速いわね――そういう意味だと思ってくれて構わないわ」

「そんな……！」

思わず声を上げた沙南を、瞬間に愛が掴んで止める。この期に及んで何かを考え込んでいる様子の、愛を見て沙南は首を傾げた。

ミクは混乱する少女達を見つめて、実際使えるのは数人だろうと独

りごちる。彼女ははじめから一般人には期待などしていない。何故かルカがこの少女達を推すので、仕方なく従ったまでだった。

（……まぁ一人、一般人ではないのもいるのだけれど）

「連絡って？」

“学園”の中には生徒に扮した私達の仲間が何人かいるの。いずれ会うことになるだろうけれど、その子達に伝えてくれれば良いわ」

「えぇぇ……マジで」

げんなりと呟いた愛に、ルカはくすくすと笑ってみせる。こうしていると彼女も年相応の娘にしか見えなかった。何が亡霊だよ、と愛は心中そっと呟く。

ルカ達の言う“組織”の一員が生徒に紛れ込んでいるというのは、愛達からすれば余り穏やかな話ではなかった。一体偽りの姿の人間が、周りにはどれだけいるのだろうか。

（……つーか、）

既に一人知っている。思い浮かべて愛は頭を抱えた。死んだ清川芽衣子のルームメイトだ。不本意ながら彼女の仕事とやらに、愛は協力することになっている。

アイジャは一連の殺人の犯人を探していた。何故そんなことをするのかは聞いていない。しかしアイジャの探す相手と、このルカ達の敵はおそらく同一だ。

（……そしてたぶん、アイジャはこの人達の仲間じゃない）

今この孤島に潜む“影”は“ルシファー”を含めて三つ。現段階でそれを知るのはここにいる中で、東海林愛ただ一人だった。

「ミク……さん達は、昼はどうしてるんですか」

沙南の質問する声で我に返る。愛はアイジャの存在を告げるか迷って、まだ様子を見ることにした。何を信じれば良いかなんてわからない。ロアル達の知り合いとはいえ、このルカだって怪しい世界の住人だ。血に濡れたあの写真の様も、まだ愛の頭からは離れていなかった。

「待機かしら……とりあえず余り生徒には近付けないのよ。あたしは昼に出歩いても構わないんだけど……ルカがねぇ」

ちらりと寄越されたミクの視線を、我関せずと言った様子でルカは受け流した。それにまた溜息を吐く、ミクはもう諦めている。ルカにはどうも、常識というものが欠落しているらしい。目立たないようにと気を遣っていたミクに対し、彼女は今回の任務でもやりたい放題だった。気付けば今“学園”の中は、黒髪の少女――つまりルカを示す怪談話で持ちきりになってしまっている。白昼堂々行動など、起こせるはずはなかった。

せっかくあたしは接触相手の記憶を“忘却”させてきたのに。呟いたミクの声に沙南が首を傾げる。曖昧に誤魔化して、さっさと話を済ませてしまうことにした。

「取り敢えず、連絡は女子寮ならオミへ。今は第六棟に一応部屋を持ってるわ。男子寮の場合が近ければシュンのほうが良いかしら――」

「……“シュン”？」

「これもうちの組織員よ。近いうちに挨拶に行かせるけど、名前だけ覚えといてね。ムトウ　シュン、っていうの」

「はぁ……」

武藤ってどこかで聞いた名だな、とぼんやり沙南は思う。日本人のよくある名前だ、きっと気のせいなのだが。

「貴女達のことは簡単にだけど、全部報告をもらってるわ」

「ほ、報告？　誰から……」

「細かいことは気にしないの。でも一応確認させて」

この中に、“アサカ”という姓の人はいないわよね？

何故そんなことを聞くのかと誰もが疑問に思ったが、おとなしく頷くことにした。親戚にはいるかと問われても、正直わからないところが多い。一族ぐるみの付き合いを頻繁にするようなまっとうな家に生まれていたら、きっともっと違う人生を歩んでいた。

全員の答えを聞いて、ルカとミクは少しだけ残念そうな顔をする。

「……そろそろ人が来るわ」

ルカのその言葉を最後に、この場はいったん解散になった。どうしようかと迷って結局、司書の身体は一時置き去りにされる。心苦しいが仕方なかった。

「今夜は何だか、騒がしいね」

沙南の落とした写真を拾って呟いた、封筒を撫でていたルカの指先が目に焼き付く。

第五章《迷霧》：ラワンデルの香りを（1）

ラベンダーが揺れている。
濃い芳香と薄紫の絨毯、最初で最後の穏やかな記憶。
失ったものは、何？

＊

不機嫌を絵に書いたような顔だ。
駿を見た瞬間、ロザリーはそう思った。少年の背後には何故かラベンダー。茎を手折られた後に糸で縛り、逆さまに吊してある。ポプリでも作る気なのだろうか。
……駿が？

「ンなわけねーだろ」

心の声はどうやら外まで漏れていたらしい。眉間に深く皺を刻んだまま呟いて、駿はラベンダーに目をやった。嫌な匂いだ、呟けばロザリーが、そう？　と首を傾げる。

「……俺は嫌いだ」

あの家にはずっと、ラベンダーの芳香が満ちていたから。

「変なのー」

心底不思議そうに言うロザリーを黙らせる。二人が今いるのは寮内の駿の部屋で、播磨亮平は部活動のため留守にしていた。亮平とロザリーを会わせずに住むので、状況は丁度良い。この後部屋に来ることになっている千瀬とは、なおさら会わせるわけにはいかないのだが。

駿の不機嫌の原因はこの似合わないラベンダー（学校の庭に生えていたものを綺麗だと言ってウォルディが摘んだ）（あげく他人の部屋に吊して消えた）の他に、今から千瀬の持ってくるであろう知らせにあった。組織上層、つまりルカ達からの司令である。

嫌な匂いがした。

「来た」

ぴくり、ロザリーが顔を上げる。同時に駿のネクタイが、内蔵された感知機によってブルブルと振動した。程なくして小さなノックの後、ドアの隙間から見慣れた顔が覗く。

「入れよ」

「お邪魔しまーす……」

鍵を掛けろと言われるのに従って手を動かした後、千瀬は物珍しそうに部屋の中を見回した。生徒として正規の入学手続きをしていない、千瀬には部屋があてがわれていない。故に彼女がゆっくり寮を見るのは今回が初めてだ（アイジャの部屋を訪ねたときはそんな余裕無かった）。

「……で、上は何だって？」

「“予定通りに”って。……ルカとミクが、例の生徒達と接触したらしいの」

わお。声を上げたのはロザリーで、駿は苦い表情を浮かべただけだった。

事前にミクから話を聞かされてはいる。不穏分子の早期発見の為に、生徒を数人ルシファー側に抱き込もうというものだ。駿は反対派だったのだが、無論逆らう権限など持ち合わせていない。

「例の、ってアレか……七不思議を調べてるとかいう物好きな奴ら」

「ななふしぎ？」

「何だチトセ、お前知らねーの」

千瀬は首を傾げた。七不思議、と言う響き自体には覚えがある。それと今回選ばれた生徒達に何の関係があるのだろうか。

例の生徒というのは、千瀬がアイジャの部屋ですれ違った少女（後の調べで名前は判明した）を含むグループのことである。彼女達は清川芽衣子の死因を、その裏に潜む影を、探していたのでは？

「なんでも元々、“学園の七不思議”っつー妙なモンを調べて学園展で発表するつもりだったんだと」

「へぇ……」

「一年くらい前から“学園”に生徒として潜り込んでる奴が何人かいてさ、そいつから上には随分前から報告が行ってたらしい」

「そうなの！？」

では既にルカ達が目を付けていたグループと、今回千瀬が報告した人物の所在が偶々一致したというわけか。偶然て怖いな、千瀬は呟く。

それにしても、一年も前から組織員を派遣しているとは。ロヴの周

到さに恐れ入る、とこの場にいた誰もが考えた。

「……じゃあ、あたし達の知らない仲間がまだここにはいるんだ」

「帰還したらそいつら全員（ソルジャー）だって聞いたぜ」

「へぇ……あ、」

思い出した。言いながらぽんと手を打った千瀬を駿が見つめる。この少年に伝言が一つ、あったはずだ。

「えーと……『生徒達には連絡中継先として武藤駿を指定してあるのでヨロシク』ってミクが」

がん！

駿が机に額をしこたま打ち付けた音である。痛そう、と呟いたロザリーの横で瞬間がばりと顔を上げ、少年は叫んだ。

「ふっざけんな！！」

「暇が出来しだい挨拶に行ってね、とも」

「行くかァァァ！！」

俺は絶対会いたくない。言いながらぜぇぜぇと肩で息をする。落ち着かせるように少年の背を撫でながら、別に良いじゃん、とロザリーが呟いた。

「女の子と友達になれるかもよー」

「ばかやろー、ンなことどーだって良いんだよ。……お前等、俺が何で生徒巻き込むのに反対してたかわかんねェの？」

二人して首を傾げる様を見て、駿は長い溜息を吐いた。このぼんやり思考の少女達は、駿には些か荷が重い。

「あのさァ……考えてみろよ。一般人を巻き込む前に、もっと使えるやつがここにはいるだろ」
「どういう意味？」
「ルシファーの言いなりに動ける人間が、さ。少なくとも三人はいる」
「……あ」

自分達の姉妹の話をしているのだ。気付いた千瀬はロザリーと顔を見合わせた。何も知らない一般の生徒まで使おうという時に、貴重な駒を無視しておくルシファーではない。

「お前らの姉ちゃんにも俺の妹にも、もう協力命令が出てるんだろうな」
「そんな……」

姉を巻き込んでいる。気付いて千瀬は顔を青ざめさせた。それはロザリーも同じだったようで、灰色の瞳を限界まで見開いている。

「俺たちはこっちの都合で勝手に巻き込んだ相手を、更に危険な状況にぶち込んだ」
「で……でも、シュン。妹さんに会えるかもしれないじゃない」
「どのツラ下げて会えっての……」

お前たちは胸張って再会できるのか？
真っすぐな問い掛けに少女達は息を呑んだ。悩まなくてもわかっている、答えは否だ。
会いたいという気持ちはあるけれど、

（姉さんの世界を壊したのは、あたしだ）

千瀬はぎゅっと拳を握り締める。会えない。一年と少しの時間では、罪を償う術など見つからなかった。それどころか数多の人を殺め、血のうえに血を塗り固めて。

ちゃり、と金属の擦れる音がした。ロザリーが身に付けたブレスレットを、手首ごと握り締めている。

「……あたしもお姉ちゃんも、ルシファーに感謝してるよ。だって迎えが来なかったら、死んでた」

「ローザのとこはそうなんだろ。チトセだって。お前らは多少後ろめたくても姉貴達に会ってくれれば良いよ――俺は」

俺は、駄目だから。

ぽつりと落とされた言葉に顔を上げる。千瀬の視線の先、駿は何かを堪えるように俯いていた。

あいつはルシファーを恨んでる。俺になんて会わないほうが、幸せに生きていけるよ。

落とされた言葉には、哀しみが滲みだしていた。

「そんな……！　だって妹さんにとって、シュンはたった一人のお兄さんでしょう!?」

「一人じゃ、ねーよ。俺の上に二人いる。俺、実は三男だから」

突然の告白に目を見開いたのは千瀬だけではない。初耳だと呟いて、ロザリーは恐る恐る問い掛ける。

「その人達は……？」

ああ、と。

言いながらふと笑った駿が何を考えていたのか、少女達にはわから

ない。

「……俺が殺した。もう、三年も前の話だ」

ラベンダーの香りがする。部屋一杯に紫の霧を漂わせて、脳の奥を揺さ振って。

あの日泣いていたのは、誰だったのだろうか。

第五章《迷霧》：ラワンデルの香りを（2）

もうあれが何処だったのかは思い出せない、最初で最後の家族旅行。宿泊先は広大な大地を見渡せる、小高い山のコテージだった。直ぐ傍に輝いていた湖と澄んだ空気と、紫色の絨毯。ラベンダーを摘んで笑った母と、カメラのシャッターを切った父。二人の兄とはどんな会話をしただろうか。駿は、覚えていない。

駿は武藤家の三男としてこの世に生を受けた。年の離れた二人の兄には良い玩具にされつつ、それでも愛情を注がれて育ったように思う。

父は報道局勤務、母はガーデニングが趣味の専業主婦。そのせいだろうか、家の中には常に花の芳香で満ちていた。母が育てた植物を、自らの手でポプリに作り替えていたからかもしれない。

何の変哲もない、一般家庭の見本のような家。長女の誕生でその幸せは最高潮にまで上り詰める。男ばかりの家に生まれた末の娘は母親から、一輪だけ咲いた花を意味する名を与えられた。誰もが彼女を愛し、慈しんだ。けれどそれは、たった二年で終わりを迎える。

両親が死んだのは、ちょうど梅雨の辺りだった。連日続いていた雨が、その日もまだ降っていたと駿は記憶している。

飛行機の墜落事故だった。父の取材に同行した母もろとも、髪の毛一本残らず炎上したらしい。

空っぽの棺を二つ並べての葬儀には、ほんの僅かな知人だけが参列した。駿は知らないことだったが、父も母も理由あって親戚とは疎遠だったのである。

読経の声も線香の匂いも、降りしきる雨に溶けていった。高校三年と中学三年の兄、幼稚園に上がったばかりの駿と、何も知らない妹

が取り残された。

施設を拒んだのは二人の兄だ。駿と妹を自分達の手で引き取って、四人きりの生活が始まった。

長男は大学受験を、次男は高校受験を、それぞれ諦めて。

全てが少しずつ狂っていった。

穏やかだった長男が裏社会の、所謂ヤクザのような連中と関わりを持ちはじめたのはいつからだっただろう。自分の望む未来を断たれて投げ出された、兄達は緩やかに崩壊へと向かっていた。

ひょんなことから駿が家族に隠された真実を知ったのは、中学に入ってからのことである。あまりに歳の差のある兄達を疑問に思ったことはあった。予想は、確信に変わった。

兄弟達は半分しか繋がっていないらしい。長男は父の、次男は母の連れ子だった。再婚同士の両親から生まれたのが駿、そしてその妹である。

脆弱な繋がりしか持たない家族への不満もあったのだろう。次第に二人の兄は家へ帰って来なくなった。駿は中学時代教師に恵まれて進学させてもらっていたが、せっかく入った高校も一年を待たずにやめた。

そうこうしているうちに長男の知り合いだという、強面の男が家を出入りするようになる。次男の持ち物からは大量の薬物が出てくるようになり、彼の言動がおかしいと気付いたときには、症状は手遅れの域に到達していた。

そして、とうとうあの日。

「……シュン？」

突如黙り込んだ少年を見て、千瀬が不安げに顔を覗き込んだ。どうやらつい物思いに耽っていたらしい、駿は顔を上げると曖昧な笑みを浮かべた。
部の早朝練習に出た亮平がいつ帰ってくるかはわからない。のんびりしている場合ではないのだった、少年は独りごちる。
今、何を話していたんだっけ。

「大丈夫？」
「何が。……あぁそーだ、俺の兄貴の話な。まぁ経緯は省略するけど色々あって、最終的に下の兄貴はヤク中。俺と妹のことすらわかんなくなって――」
幻覚を、見ていたのかもしれなかった。それでも包丁を振り上げた兄から、妹を守る方法は一つしか思い浮かばなかった。

「殺るしかねーな、って」
やらなければ、やられていた。噛み締めるように少年は言う。

「そう……」
「上の兄貴は危ない連中に目ェ付けられててさ。薬はそれ程やってなかったんだけど、下の兄貴を殺した俺を見て錯乱して――まぁ無理もないか。俺たちと心中図ったんだけど」
お前等を殺して俺も死ぬ。三流ドラマのような台詞を吐いた兄の顔を、駿はまだ思い出すことが出来る。
結局それは未遂に終わり、死にたがっていた長男の生は駿の手で断ち切られた。

「シュンは妹を――カズサさんを、守ったんでしょ」
「どーだかな。結局俺は、あいつの自由を奪っただけだ」

カズサはルシファーを恨んでいる。もう一度駿は呟いた。
二人の兄を殺して、警察の目から逃げ続けた一週間。一度も離さなかった妹の手を、ついに駿は離した。
お兄ちゃんを連れていかないで。一人にしないで。嗚咽に混じった声がまだ、耳の奥で燻っている。
長男の関わっていた組織とルシファーを混同し、混乱した頭でルカとミクを罵った。
あんた達のせいだ。あんた達みたいなのがいるから、お兄ちゃんは。

「俺は、会えない。あいつにあわせる顔が無い」

守りたかった。両親から受け継いだ血を等しくする、たった一人の妹。
兄達の帰らない家で、たった二人で過ごしてきた。母の残したラベンダーのポプリの、匂いが染み付いた古い家。
もう二度と、帰ることはない。

＊

同時刻。
がちゃり、開いた扉に少女は身体を震わせた。頑なに耳を塞いでいた両手をずらし、布団の隙間から顔を出す。

「……絹ちゃん？」

ルームメイトの名を呼べば、ただいま、と返事が返った。やっと安心してベッドから這い出した、少女はもう暫くこの部屋から出ていない。

一人目の生徒、清川芽衣子が死んだ日から彼女は塞ぎ込んでばかりいた。一人にされる度にこうして布団を被り、殻に閉じこもる。

絹華はその理由を知っていた。本人に告げたことは、ないけれど。

「気分はどう？」

「別に、風邪引いたとかじゃないから。平気だよ」

ただ、怖いだけ。

呟いた少女を絹華は黙って見つめていた。これから忙しくなるという時に、このルームメイトはだいぶ厄介な状態に陥っている。それでもこの少女を放っておくことは、絹華には出来なかった。

「……大丈夫だよ、一咲」

絹華の声に小さく頷いた、少女の名は、武藤（むとう）一咲（かずさ）という。

第五章《迷霧》：間話

「――【コンタツ】が殺られたってマジィ？」

扉を開けるなり問い掛ける少年に、“監視役”は肩を竦めてみせた。顔を花のように綻ばせる、何故こんなにも楽しそうなのか。

「ええ、【ミリアム】。残念ながら」

「……ぷっ。あはッあはははははは！！」

堪えきれないように吹き出して、【ミリアム】が笑い転げる。あンのハゲオヤジ！！　一際大きく叫んでから気付いたように首を竦めた。声のボリュームを僅かに下げ、それでも喉の奥でくつくつと笑う。

「本当に死にやがった！」

「……貴様の責任だぞ【ミリアム】」

憮然とした声を上げたのは【ペルソナ】である。この二人が仕事として始末した、ゴミの片付けを【コンタツ】に命じたのはまだ記憶に新しい。

【コンタツ】と呼ばれる男はこの“学園”に一教師として潜入していた。立ち場上動きやすいポジションにあっただけに、その存在を失ったのは惜しいと言える――例え戦闘能力が、【ミリアム】の三分の一程度であったとしても。

「別にあんな奴いなくたって問題ないよォ」

「……戦力上はな。だが厄介なものを呼び寄せた――【コンタツ】

の死に方を見たか」
「いや？」
だって興味無かったし。ぼやいた【ミリアム】を一瞥し、あれは人間技ではない、と【ペルソナ】が呟く。
「全身が炭化していた――ただ火を放っただけでは、ああはならない」
「黒焦げってことォ？」
「まぁそうだな」
「だっせェ！！」
またきゃらきゃらと笑い声を上げる、能天気な少年はもう視界から追い出すことにした。【ペルソナ】は“監視役”に向き合って口を開く。
「お前はどう思う、【ジーザス】」
「そうね……この島には、何かいるんじゃないかしら」
私たち、以外に。
ゆっくりと含むように女は言う。少なくとも自分達の味方ではない何かが、ここには潜んでいるのだと。
「……“悪魔のデータ”が本物の悪魔を呼び寄せたか」
「どうかしらね。……それより【ペルソナ】、例の“仲介屋”はちゃんと始末できたの？」
「無論だ――その後片付けを【コンタツ】にやらせたんだが、失敗だったな」
まぁ良い。言って【ペルソナ】は懐から、厳重に封された小包みを

取り出した。司書の形をした仲介屋が、裏社会の情報売りより受け取ったものである。

この“情報”は【ジーザス】自身が手を回し、情報屋に依頼しておいたものだ。仲介料を支払う気など毛頭無かったので、受取人として利用した後本人は消した。この中に入っているのは彼女達の捜し求めた、ある貴重なデータの受け渡し記録である。裏社会の遺産と呼ぶべき人間兵器の実験記録。それを持ってすれば世界を牛耳ることさえ容易いのだと、手に入れたがる者は多い。

「……これは」

開封し中身を確認した、【ペルソナ】が呟きを落とした。僅かに見開かれた目の見つめる先にはワープロの細やかな時が並んでいる。

「“データ”の場所はわかったの？」

「ああ……場所と言うよりは、“保持者”だ」

くつり、喉の奥で笑った【ペルソナ】を見て【ミリアム】が驚いたような顔をする。鉄の仮面は滅多に笑顔など見せないからだ。勿論、演技は別として。

「まさかこう来るとはな……意外と近くにあったぞ【ミリアム】」

「へぇ？　……わーお」

覗き込んで歓声を上げる、【ミリアム】はきっと何も考えていない。彼はまだ子供で、力を奮うのが楽しいだけなのだ。命を摘み取る行為を、生きるか死ぬかの戦いを、ゲームの感覚でやり抜いている。ターゲットが仮初めの自分の身近な人物であったとしても、良心の呵責に苛まれるどころか罪悪感さえ持ち合わせていなかった。

呑気な奴だ、と【ペルソナ】は思う。

「……取りあえず、“データ”奪取に全力を挙げましょう。【コンタツ】が殺られた今、躊躇など必要ない――邪魔者は全て始末するわ。生徒だろうが、教師だろうが」
「具体的にはァ？」
「標的とその周囲の人間を【ゴスペル】と【バプテスマ】に襲わせる」

あれ、と【ミリアム】が声を上げた。
あいつら生きてたのかよ？
ええ、【コンタツ】が死んだのに驚いて連絡してきたのよ。
監視役と少年が笑い合う横で、一人【ペルソナ】が顔をしかめた。
今名を上げられた二人は随分前から“学園”に潜伏している。今更。

「白昼堂々か？　標的は一人だろう、わざわざそんなこと――」
「万が一、一度で仕留められなければ逃げられてしまうわ。撹乱させて確実に狙うの――忘れないで【ペルソナ】、ここにはアンノウンが潜んでるのよ。油断は出来ないし、勿論あなたにも働いてもらう」
「……たかが“データ”に随分な入れ込みようだな、うちの組織は」
「あれぇ、【ペルソナ】は“ルキフージュ”の素晴らしさがわかんねーのぉ？」

にっこりと微笑んだ【ミリアム】は胸の前で手を合わせる。天使のような容姿で数多の人間を騙してきた、彼は聖職者などではない。
その中身はどちらかといえば、悪魔の方に近かった。

「悪魔だって元を正せば神の生んだもの。神の元に、オリーブ山に還してあげるんだよぉ」

それでも神の名を語る。夢見るように呟く少年の唇がゆっくりと、美しい弧を描いた。

「アレの戦力は世界を一掃できるよ。更地に降り立つ使途は、僕達オリーブの子さ！」

「……くだらん神話に興味はない。だが良いだろう」

【ペルソナ】は真直ぐに【ミリアム】を見つめた。今この島にいる中で一番の戦闘能力を誇る二人である。これを持ってして仕事で失敗など、あり得ない。

「【ジーザス】の作戦には乗ってやる。何か起こったらまず動くのは私だ」

「えぇえぇーッ！？　何それずるいよ、」

「お前は最後まで例の気味悪いキャラクターをやり通せ、【ミリアム】」

仮の姿を暗に馬鹿にされている。気付いた【ミリアム】は思い切り相手を睨み付けたが効果はなかった。

自分の容姿を最大限に利用した【ミリアム】の隠れ蓑は、きっと誰にも見抜かれていないのだろう。せっかくだからそうしなさいな、【ジーザス】までもがそう言って笑う。

「けっ」

やさぐれた表情を浮かべた少年は、次の瞬間すっとそれを鎮めた。目には鋭利な光が宿る。獲物を、見定めた色。

「じゃあ僕は、悪魔の方を狩りにいこうかな」

少年は笑った。
それを見つめて頷く、【ジーザス】もまた瞳の色を変える。“神の目”と呼ばれる監視役の仕事を与えられた彼女が、キャリアならば一番長い。

「さぁ仕事よ――身体が残っていればターゲットの生死は問わない。失敗は許されないわ」

わかっているさ、【ジーザス＝アイ】。
返ったいらえは柔らかく、恍惚とした。

「“オリビア”の名にかけて」

第五章《迷霧》：日の出と幕開け（1）

その場は騒然としていた。

いまだかつて、ここまでの異常性を感じたことがあっただろうか。

生徒達は“それ”を取り囲み、恐怖と不安の入り混じった憶測を口々に述べた。

この“学園”には何かが取り憑いているのではないか。悪魔が住んでいるのではないか。そうでもないと説明がつかなかった。一日に二人も死ぬなんて、それもこんな死に方を、するなんて。

図書室の管理を任せられていた、司書の女の遺体が見つかったのはまだ夜も明けぬうちだった。“学園”側が運び去る前に何人もの生徒が目撃した、それは銃殺されていたという。

それから数時間としない同日の早朝、二人目は発見された。部活の朝練に向かう生徒達が最初に気が付いた、それは臭いだ。蛋白質や燐の焼け焦げた臭い。人気の無い廊下の端に放置された真っ黒な煤の固まりは、一目では人間だと判別出来ない程の有様だった。

「酷い……」

手で口元を押さえて沙南は呻く。

集まった沢山の生徒達に混じり、“七不思議”の面々も様子を見に来ていたのだ。全生徒は速やかに自室へ戻るよう、校内放送が流れているが無視である。集まった中にはうるきやマリアなど、映画研究サークル側の顔もあった。渚や亜梨沙までいる。もうじきここにも大人達がやってくるだろうが、それまで誰も動く気はなかった。

ロアルと百瀬はこれについて尋ねるためにルカを探しに行ったが、きっと見つからないだろう。彼女達は昼間は行方を眩ませている。

「おかしいデスねェ」
「……何が？」

誰にともなく呟いたうるきの声に顔を上げた。沙南の隣、彼女は熱心に焼死体を見つめている（結局映研側でルカ達のことを知るのは彼女一人だ）。
生徒達に取り囲まれたそれは、どう見てもただの炭だった。ここまで原型を留めていなければ恐怖も少ない。ただ気味の悪い臭いだけが充満する、この空間から沙南は早く抜け出したかった。

「……あッ」
「今度は何、」

声を上げたのはうるきではなく、その反対に立っていた愛だった。何を見つけたのか一点を凝視した後、急に人の輪から抜けようとする。

「ちょっとドコ行くの、愛！！」
「後で合流する！」

片手をひらひらさせたながら持ち前の運動神経で、あっと言う間に生徒達の合間をすり抜けて行く。姿が見えなくなって沙南は溜息を吐いた。また、単独行動。

「部屋に戻りなさい！」

とうとう現れた教師に強制撤退命令を出され、生徒達は渋々輪を崩しはじめる。
クラリスだ。志田渚が呟いたのを聞いて沙南も視線をやればその通

り、やって来たのはバスケットボール部顧問の女教師だった。それから、もう一人。

「あの人は？」
「サラですヨ」

肩までの金髪に、緑色の目をした女だった。うるきによれば、一番最後の“入れ替え”と同時に英語科に就任した新人教師なのだという。沙南は彼女の授業を受けたことが無かったが、気さくな人柄と分かりやすい指導が人気を博しているらしい――名を、サラ・ハリソンと言う。

彼女達に背中を押されるようにして、結局沙南達も自室へと戻ることになった。きっと今日の授業は中止に違いない。
何故かサラと目が合ったような気がして、沙南はそっと首を傾げる。

＊

後の調べであの焼死体は、ミハエル・ブリックマンのものと判明したらしい。
正確に言えば、まだ確定したわけではなかった。姿形など判別不能なまでに焼け焦げた、それ本体だけで見極めるなどどだい無理な話である。
物理教師であるミハエル・ブリックマンは、昨日の授業を最後に行方不明になっていた。全職員生徒のうち、未だ生死のわかっていないのは彼だけだ。よって、この焼死体こそがブリックマンではないかという考えに至ったらしい。

（……焼死体、か）

ぼんやりと考えを巡らせながら、駿は今一つの扉の前に立っていた。第三寮棟の一室である。

駿はこの部屋の主に用があった。死んだ（とされている）ブリックマンについて話を聞く、それが目的だ。

「武藤、ごめん――ウォルの奴帰ってきてねーや」

部屋の中から顔を出した柳原冬吾もまたこの部屋の主で、駿が呼び出すつもりだったウォルディのルームメイトにあたる。そうか、一つ頷きながら心中で駿は舌打ちした。こんな時に、どこへ行っている。

（あいつ――）

ウォルディ・レノ・ファンダルスは、ある理由でこの“学園”に潜入している謎の少年である。一般生徒でないという点では駿と同じだ。

ウォルディは“オリビア”という名の人間を追っていた。駿に協力を仰ぎ、また理不尽な約束を押しつけてもいる。

彼の存在は駿の口から直接、（やや簡略化して）ルシファー幹部に報告されていた。ルカ達の見解で一応は無害と判断され、ウォルディへの対応はまだされていない。現状では、そちらに力を割く余裕が無いのも一因だった。――ルシファーの探す“キー”を、同じように欲している組織が学園内に潜んでいる可能性があるのだ。

（あいつは、何か知ってる）

これは駿の直感だった。ブリックマンの変死について、ウォルディが関わっているのではないか。ブリックマンを、司書を、警備員を、そして清川芽衣子を殺した人間が同一なのだとしたら、それに一番近づいているのは彼なのではないだろうか。
そしてウォルディの追う“オリビア”は――同時にルシファーの敵でもあるのではないか？

「あの、さ。武藤」
「ん？」

礼を述べて回れ右、しかけたところを呼び止められる。冬吾は駿を真直ぐに見つめ、声を潜めて問い掛けた。

「“黒髪の女のユーレー”の話って、お前にしたっけ？」
「……は？」

余りにも真剣な声色が紡いだ内容とのギャップに、駿は一瞬言葉を詰まらせた。ついで冬吾の言う“ユーレー”が何を指すか、に気付く。
さっと駿の顔色が変わった。“学園”を騒がせる噂話は誰もが一度は耳にしているが、その正体は少年の上司である。深入りされては、非常にまずい。

「そういえばお前、前に一度何か……いやいや。お、覚えてねえ」
「うん、やっぱ話したよな？　俺、会ったことあるんだよ」
「え、えぇえええ！？」

駿の反応を素直な驚愕と勘違いしたらしい、冬吾は機嫌良さげに話を続ける。

「ほら、新入り歓迎の日。武藤の部屋に俺たちが泊まった日に話したやつだよ。喋ったんだ、ちっちゃくて色白で、」

綺麗だったんだよなぁ。うっとりと告げる冬吾の言葉など、駿には右から左に流れて消えた。冷や汗ばかりが流れている。
何だこの展開。やばくないか？

「考えれば考えるほど、あれが例の“ユーレー”だったんだと思うわけ。一目惚れってわけじゃーないんだけど気になってさ。知ってる？　女子の中に、“学園の七不思議”つって調べてるやつがいるんだって。五十嵐とか黒沼とかだって聞いたなぁ……」
「……くろ、ぬま？」

その名には心当たりがありすぎた。駿は思わず頭を抱える。
事態は彼らの予想よりずっと、先を転がっているのではないか。

「そいつらにユーレーの話、聞いてみようと思って。ウォルは信じてくれないんだけどさー」
「……はは、は。幽霊だろ、聞いてどーすんの」
「いや、噂ではユーレーだけどあの子は違うね。絶対生身の人間だった――だから見つけ出す！！」
「待てぇエエエエ！！」

絶叫を上げた駿を驚いたように見つめる、冬吾はどうやら本気らしい。
ルカの馬鹿野郎、心の中で呪文のように紡ぎながら駿は真直ぐ冬吾を見つめた。これ以上の厄介ごとは御免だ。

「良いか、幽霊なんてパチだンなもん。関わるな詮索するな女子の所にも行くんじゃねぇぞ悪いことは言わないから、な！！」

「え、え？　うん、えぇ？」
「約束だからな！」

バタン！　勢いに任せて扉を閉める。鼻でもぶつけたのだろうか、ドアの向こうでふぎゃっと哀れな声がした。無視する。
一体ルカはどれだけの生徒にその姿を目撃されたのだろうか、考えただけでも憂鬱だった。
何はともあれ、まずはウォルディである。探しに行こうと踵を返した、その場で駿は動きを止めた。

「……誰だ、テメェ」

いつから其処にいたのか。佇んでいる見知らぬ少年に、駿は低く問い掛けた。盗み聞きとは良い趣味をしている。
少年は能面のような顔を浮かべたまま、目を伏せ一つ会釈した。空気が常人のものではない。同業か敵か、駿は独りごちる。

「……“カイ”」

名乗った声は淡々としていた。

第五章《迷霧》：日の出と幕開け（2）

カイと名乗った、その瞳は恐ろしいほどに冷えきっていた。感情の色が浮かばない、濃い茶色の目。それと肌の色だけでは人種もわからない。日本語が話せる、イコール日本人ではないのがこの“学園”だ。

一応制服らしきものを身につけてはいるが、彼もまた生徒ではないに違いない――駿は自分の勘を信じた。

「シュン・ムトー？」

「……そーだよ」

だからなんだと先を促す。好戦的な態度になってしまうのは致し方ないことだった。常に気を張っている状態は苛立ちを募らせるし、敵か味方かもわからない相手に上品に接するつもりなど駿には毛頭無い。

軽く睨み付けていると、相手はおもむろに口を開いた。

「アイジャ」

「は？」

「――という人間を、調べるようにと」

命令が下っています。

平坦な声で告げた“カイ”に、思わず駿は眉を寄せた。意味が分からない。

「お前に命令される筋合いなんてねェんだけど」

「俺じゃない――ルカ様、から」

「何だルカの知り合いかよ……ルカ、様ぁ？」

仰々しい呼び名に首を傾げる。どうやら敵ではないらしいが、このカイという少年は何かおかしかった。
胡乱な眼差しを向ける駿を一瞥し、彼はまた口を開く。

「仲間が見張っていましたが、昨晩は見失いました。四人目の死に関係している可能性がある」

口調だけは丁寧に、しかし相手もその気はないのだろう。ぶっきらぼうな態度をひしひしと感じて駿は眉をひそめる。
確かアイジャとは、千瀬が一度接触した少女の名だった。清川芽衣子のルームメイト。カイの口振りからして、彼はルカの命令で動いているようだった。おそらくはアイジャを見張るために、独自に配置した監視役なのだろう。
聞いてねーよ、駿は唸る。カイとその“仲間”がルシファーの一員なのか、はたまたルカの個人的なコネクションによるものなのかもわからなかった。

「……とりあえず“命令”とやらは了解した。チトセじゃなくて俺なのか？」
「――確かに伝えた」
「はいシカトですかー」

ちょっと待てよ。
言うだけ言ってさっさと消えようとするカイを、げんなりしつつ呼び止める。何なのお前。問い掛ければ、カイ、と的外れな返答があった。名前を問うたわけではない。

「調べろって、そんだけ？　普通もっと詳細とか――」
「アイジャ・ラ・ファンダルス」

「だから名前だけじゃなくて！　……って、え？」

今、何だって？

駿は目を見開いた。それが“アイジャ”のフルネームなのかと問えば、カイは黙って一つ頷く。その少女に関するそれ以上の情報は、無いに等しかった。

「ファンダルス……」

聞き覚えのあるそれは、あの少年のものではなかっただろうか。自分が探そうとしていた人物――ウォルディのことが脳裏に過り、思わず駿は息を呑んだ。

とんでもない所に繋がりがあったものだ。アイジャは本当に、事件の渦中の人物かもしれない。

「……あの！」

武藤さんですか？

突如名を呼ばれたのはその時だった。男のものとは違うソプラノが緊張したように強ばっている。

咄嗟に声の方へ視線をやった、その瞬間にカイが消えたのを感じて駿は軽く舌打ちした。まだ問いただしたいことがあったのに。

仕方がないので新たな来訪者の方を向く。次から次へと、何だか今日は忙しい。

「……そーだけど？」

「よかった。あの、あたし」

駿の視線の先、三人の少女が立っていた。中央が代表して口を開く、その名を聞いて少年は腹を括る。

「あたし、東海林　愛っていいいます――」

嗚呼とうとう来たな、と。

＊

愛が自室へ帰ってきたのは、沙南がそうした一時間ほど後のことだった。教師であったブリックマンが謎の変死を遂げたことにより、本日の授業は全て取り止めになっている。生徒達は自室待機を決め付けられ、暫らくはこの状態が続くだろうと予想された。

こんな中、出歩こうとするのは沙南達くらいのものである。愛が帰ってきたときには、部屋を抜け出してやって来たうるきが沙南と共にいた。

どこへ行っていたのか。問い詰めた沙南に対して愛は答えず、ただ一言提案した。あの組織の人間に、会いに行こうと。

沙南とうるきをひっぱって、三人で部屋を出た。本当ならばオミを探すつもりでいたのだが、その名前しか知らない状態（ファミリーネームさえわからない）では部屋を突き止めることは難しかった。よってこうして、わざわざ男子寮までやって来たのである。

「聞いてほしいことがあって――」

「あー……。よくここがわかったなァ」

「あ、播磨君が教えてくれたんで」

「あぁそう……」

亮平に行き先など告げなければ良かった、こっそりと思う駿である。
面倒臭い。
東海林、という名には覚えがあった。千瀬がアイジャと接触した際に見かけたという、例のグループの一員だ。おそらく他の二人もその仲間なのだろう――つまり今回、ルシファーに巻き込まれた不運な人間だ。
目の前にいる少女達の用件は十中八九、ブリックマンの死についてだ。思って駿は溜息を吐いた。尋ねられてもわからないし、こっちが聞きたい。それを調べるためにウォルディを探していたのに。

その一方で愛は、目の前で葛藤を続ける少年を不思議な気分で眺めていた。
裏に生きる組織の一員なのだからどんな強面かと思いきや、この武藤という人間はどうだ。背が高く精悍な整った顔付きをしているが、一見すれば他の少年たちと何ら変わり無い。これでは生徒に混じってしまえばわからないだろう。
ルカやミクといい、この少年といい、そういう世界の住人だとは思えない。

「……ああ――――ッ！！」

突如響き渡った叫び声に仰天して首を捻った愛の視線の先、沙南が口をぱくぱくさせていた。何、何なの！？　わけがわからず問い掛ければ、沙南は目を丸くしたまま真直ぐに少年を指差してみせる。
失礼だからやめろ、と言う余裕は無かった。

「あの人！」
「え、俺？」

たじろいだ駿を見て我に返った、沙南がぱっと両手で口を覆う。沙南は彼を間接的にだが知っていた。見かけたこともある――そう、邑智亜梨沙（おおちありさ）の語った一目惚れの相手だったのだ。

（なんて、言えるはずが無い）

ややこしいことになった。思って沙南は頭を抱えた。亜梨沙は駿を、探しているのだ（沙南達は彼女――うるき以外の映研・その補佐メンバー達――には駿の組織について話していないのに）。当の駿はきょとんとした表情を浮かべながら眼を瞬かせていた。何なんだ一体、と誰に言うでもなく呟く。

「ルカ、とかミクって人、いないんですか」

「……此処にはな」

問い掛けて、最初から答えは予測していたのだろう。愛は一つ頷いた後、真直ぐに駿を見据えた。少年のほうが背が高い、見上げるような視線はそれでも揺るがない。

「……武藤、くん？」

「好きに呼べば」

「――武藤くんは、アイジャって子を知ってる？」

意を決して敬語も取り払われた、その問いに駿は眼を見開いた。なんてタイミングなのだろう。アイジャというその名は先刻耳にしたばかりである。

「それが？」

先を促せば愛は一度目を伏せ何か迷うような仕草を見せた後、やは

り顔を上げる。

「よく、わかんないんだけど。ブリックマンが死んだこととあの子、関係があるのかも知れない」

「……へぇ？」

ビンゴ、だ。

無表情を装って心中呟く、駿を少女達は神妙な面持ちで見つめていた。ルカの見立てはどうやら正しかったらしい。彼女達は駿よりもずっと、多くのことに気付いているのかもしれなかった。

「ブリックマンを殺したのは――アイジャなんじゃないかと思う」

「穏やかじゃねェな」

そう言えば愛は深く息を吐いた後、口を開いて語りはじめた。彼女の知っていることを――アイジャという少女についてを。

第五章《迷霧》：日の出と幕開け（3）

“入れ替えの後には、必ず死人が出る”

誰が投稿したかもわからない不気味な噂を、興味半分で確かめる為だった。清川芽衣子の死と噂の関連性の有無を確かめる為に、そのルームメイトに接触をはかることを提案したのはうるきである。二つ返事で引き受けた愛は自分が、踏み込んではならない領域にまで立ち入ったことに気付いていなかった。

アイジャ・ラ・ファンダルスは、ただの生徒ではないらしい。それを愛が知ったのは顔を会わせて二度目、本人からのカミングアウトによるものだった。

彼女は芽衣子を殺した人間を追い、この“学園”へとやってきたらしい。警察の人間なのかと問うたが少し違うようだった。アイジャはそれよりもっと大きな、しかし表には出ない組織の一員なのだという。彼女曰く、平和を護る。

愛は彼女から協力の要請を受けてはいたものの、これといった働きをしたことは一度もなかった。せいぜい話相手になったことぐらいだろうか。それでも構わないのだと、アイジャは笑った。

ミハエル・ブリックマンが死んだ時、彼を取り囲む人間の中から愛は彼女を見つけた。恐怖や不安や、僅かな興味の色を浮かべる生徒達の中で一人、凪いだ表情で遺体を見下ろしている。

それは愛の直感だ。踵を返した彼女を反射的に追いかけた。
胸騒ぎに似た、なんだろうあれは。硝子玉のような瞳だった。

「――アイジャ！」

少女に追い付いた時には現場からかなり離れた、人気の無い廊下まで来ていた。愛の運動能力を持ってしてもここまで時間のかかった、アイジャは呼ばれてゆるりと振り向く。汗一つかいてはいない――愛の方は大分、息切れさえ起こしているのに。
驚いた様子も見せずにこりと笑ったアイジャもう、全てわかっていたのだろう。わざわざ愛の到着を、此処で待っていたのかもしれなかった。

「アイちゃん、見た？」

小首を傾げて微笑む。何を、とは聞かずともはっきりしていた。

「……アンタが？」
「オリビア、ってゆーのよ」

問い掛けには答えず知らない名前を口にする、アイジャに向かって眉を寄せた。そんな愛を見て彼女はくすくすと笑う。

「女性だと思っていたのに、おじさんだったわ。それともオリビアは、複数の人間なのかなぁ」
「……それがアンタの言っていた、相手？」

笑顔は肯定の証だった。ぶるり、背筋が冷えるような感覚に愛は身体を震わせる。

「清川さんを殺したのは……？」
「メイコはきっと、オリビアの最初の山羊（いけにえ）だった」
スケープ・ゴート。呟いてアイジャはふと遠くを見つめる。澄んだ碧い瞳の奥で何を考えているのか、愛にはわからなかった。
「……ブリックマンは焼死だったみたいだけれど」
一呼吸置いて真直ぐに顔を上げる。問い掛ける愛と、相手の視線が絡み合った。
「もう一度聞くよ。――先生の死に方が他と違うのはアイジャ、アンタが殺したから？」
もしそうならば放ってはおけない、漠然と愛は思った。アイジャはルシファーとは別の危険因子、そして“オリビア”なるものはもっと危険度の高い――おそらくはルシファーの探していた相手である。ルカ達に報告することが、今の愛の義務だった。友人たちを護り、平穏な学園生活を取り戻すために。
「ひみつ」
柔く呟いてくすくすと笑う。アイジャは愛の手を握ると胸の前まで持ち上げた。温かい掌の温度が流れ込んでくる。子供体温だ、とぼんやり愛は思った。
「本当はアイちゃんのこと、利用しようと思ってた」
申し訳なさそうな突然の告白。愛は目をぱちくりさせる。

「アイちゃんを囮にして、オリビアを捕まえるつもりだったの」
「……え。えぇえええぇエェエ！？」

なんてことを！
思わず絶叫すればごめんね、と手を握り締められる。口を閉じて愛は、怪訝な面持ちで相手を見つめた。
なぜ今、こんなことを言うのだろう？

「逃げていいよ、アイちゃん」
「……な、に」
「オリビアは一人の人間だと思ってたけど、違うかも。アイジャと一緒だと危ないよ」

だから逃げていいよ。
本格的に残党を狩るつもりでいるのだ、悟って愛は目を見開いた。彼女の言う“危ない”道に、ルシファーの存在のお陰で両足揃えて踏み込んでいる愛である。一度関わったことだ、今更アイジャだけを切り離すなど微塵も考えていなかった。

「アンタ一人でどうする気！？」
「一人じゃ、ないよ」

アイジャには“お仕事仲間”がちゃんといるのよ。言いながら少女は微笑む。今からその“仲間”に会いに行くのだとも言った。

「だからもう、お話はおしまい」

さようなら、アイちゃん。
にこり、笑みを浮かべながら呟いた。声ははほんの少しだけの、寂しさを孕んでいるように聞こえた。

「学校ってはじめてだったから、楽しかった」

それきり愛は、少女の姿を見失う。

＊　＊　＊

「……一歩遅かったってことか」

愛の話と自らの情報を総合して答えを弾き出す。駿は小さく唸って眉を寄せた。

アイジャの言った“仕事仲間”とは十中八九、ウォルディのことだろう。同じ姓を持つ二人である、コードネームでなければ血縁者なのかもしれない。他に仲間がいるのかどうかは、まだわからないが。

愛の話によれば、アイジャという少女はその後部屋へも帰っていないのだという。おそらくはウォルディと行動を共にしているのだろうが、面倒なことになった、と駿は思った。これではカイの言っていた命令を遂行するどころではない。

「あのぅ、武藤サン」

考えを巡らせていた少年に声がかけられる。ちょっと気になることがあるんデスが、よろしいデスかネ？

妙な訛りのある敬語を話す少女だった。眼鏡の奥、瞳がすっと細められている。お前は、と目線だけで問えば駿の目の前にずいと白い紙が差し出された。名刺だ。

『映画研究会映像監督：山口　女』
駿は思い切り首を捻った。なにコレ。

「やまぐち……おんな？」
「うるき、と読ませるんスよ。星の名前からとったんデス、二十八宿の一つ、女宿（うるきぼし）」
「……そ……そうスか……」

難しい話はわからない。御免だとばかりに視線をそらした駿の反対側で、残る二人の少女が感嘆の声を上げている。彼女達もまた、うるきという名の由来は初耳だったのだろう。

「で、山口……さん？　何が気になるってぇの」
「先生の遺体についてデスよ」

愛が息を呑んだ。言葉が引き金になったかのように、突如不穏な空気が流れる。しかしその渦中にいるうるきは飄々と、自分の見解を語りはじめた。

「ブリックマン先生だと思われてる、アレを見ました？」
「……見たぜ、ちらっとだけど」
「違和感を、感じませんでしたかネ？」

うるきの言葉に首を傾げる。駿は脳裏にそれを思い描いたが、ただの黒焦げ死体だという認識以外は特筆すべきこともなかった。沙南も愛も同じなのだろう、二人揃って首を捻っている。
暫しの沈黙の後、うるきが笑った。

「床がね、焦げてないんデスヨ」
「……何、」

眉を寄せて、次の瞬間駿ははっと目を見開いた。その状態の異常性に気が付いたのである。
顔の骨格さえ曖昧になるほど燃やし尽くされた身体。あそこまで炭化させるには、さぞや強い火力が必要だっただろう。

「遺体は少しでも動かせば崩れてしまうくらい、脆くなっていたそうデス。燃やしてからあそこに運んだとは考えにくい」
「……あそこで燃えたってことだよな」
「なのに床には焦げ跡一つなかった。天井も見ましたが、溶けた跡も煤さえも見当たりません――ねぇ武藤サン、」

アレ本当に、ただの焼死体なんデスかネ？
お前は何か知っているのだろうと、細められた瞳に責められているような気がした。駿はこめかみを押さえて黙り込む。
周囲には一切影響を及ぼさず、目標とするもののみを焼き尽くす業火。高温度を長時間維持しながら火を灯し続けることなど、普通ならば不可能である。ましてや、煤も出さないなんて。
しかし駿にはたった一つ、不可能を可能にする心当たりがあった。
この世に眠る未知の片鱗を、少年は身近に知っている。

（能力者――？）

まさか、と思う。しかしそうでなければ説明が付かなかった。
ブリックマンを殺めたのがアイジャならば、彼女はその能力（ちから）を有する人間なのだろうか。

（“能力者”のいる“平和を護る組織”？）

まさか、ともう一度思う。

こんなところで、そんなはずは。アイジャがそうならば、ウォルディは？

「――とりあえずその、アイジャを探してみる」

ルカから命が下っていることも気掛かりだった。あのカイという少年についても、未だ詳細は謎のまま。

時は一刻を争うかもしれない――駿は意を決して顔を上げる。なおも話を続けようとする少女達を宥め、一度部屋へ帰るようにと説得をはじめた、その時だった。

『――シュン！』

突然響き渡った声に全員が仰天する。慌てて少年がネクタイを握り締めた、声はそこから聞こえたようだった。

細いソプラノの、何処か切羽詰まった響き。内蔵された無線機によるものだということは少女達にもすぐにわかった。駿がそういう世界の住人だと知らなければ、信じられなかっただろうが。

「音がでけェよ！　いきなり通信したらヤバいって知ってんだろ、聞かれたらどうする！」

この場にいたのが事情を知る人間でなければ大騒ぎになっていた。巡り合わせに感謝しながら駿は、ネクタイを口元に引き寄せて怒鳴り返す。

『そんなこと言ってる場合じゃないの馬鹿シュン！』

「な、」

負けじと言い返されてたじろいだ、駿の様子になど気が付いていな

いのだろう。無線の向こうの少女は小さく息を吸った後、一息に言い切った。

『ルシファーが協力を要請した、生徒達が狙われてる。急がないと殺されちゃうよ……！』

始業のベルが鳴っていた。

授業の中止になった誰もいない校舎の中で、はじまる長い一日。

鐘が鳴る。開始を告げる。

幾つもの糸が絡み合ったままで迎えた、それは幕開けの朝だった。

第五章《迷霧》：間話 - 水面下 -

「“継嗣”は何処にいる？」

彼はそれを探していた。この崩れかけた組織の中で、“継嗣”は自分の地位を確立する為の道具になる。存在そのものの排除を謀る、不逞の輩も現れているほどだ。

計画は内密に進められてきたはずだった。だがそれに、気が付いていた者がいたらしい。

「……あの小童めが」

“継嗣”がいない。広い広い屋敷の何処にもいない。危険を感じて逃げられるほど、あれは聡くない。

逃走を手引きした人物がいるはずだった。検討は、付いている。

「お前なんぞには譲らん」

成り上がりの分際で、これ以上良いようにされてはたまらない。

さぁ居場所を吐いてもらおうか。

二度のノック音、分厚い扉の奥からは一つの返り事。

男は紳士的な、仮初めの表情を貼りつける。優雅に一礼。形式上の挨拶。

「――どうも。ご機嫌は如何かな？　ユリシーズ公」

開け放たれた部屋の中で、一人の少年が笑った。

＊

この“学園”と呼ばれる建物には、使用されていない部屋がいくつもあるらしい。存在すら曖昧なそのうちの一つ、中に入って少女は独りごちた。

綺麗に伸ばされて二つに括った、髪の束の片方を触る。指先に絡めて解して、繰り返しても跡など付かなかった。生まれ持った緩やかな波が静かに揺れているだけ。この手触りを絹のようだと、誉めてくれたのは誰だったろう。ぼんやりと少女は考える。

「あ」

ふと顔を上げた。見知った気配が近づいてくる感覚。待ち人が、やってきたのだ。

「ウォルディ」

名前を呼べばゆっくりと部屋に入ってくる、この少年と少女は共にここへとやってきた。自分の家から遠く離れた場所で泊まりがけの任務。少女にとっては、初めての経験である。

「ねぇウォルディ、アイジャね、ちゃんと一人やっつけたのよ。“オリビア”」

「うん、見たよ」

一つ頭を撫でてやれば、くすぐったそうにアイジャは笑う。そんな様子を見て少年は目を細めた。
心の底から、見事だったと思う。少女は難なく仕事を果たした。言い換えればそれは、殺人と同義だった。
無邪気ゆえに、恐ろしい。

「それでね、“オリビア”はおじさん先生だったの。おかしいよね？」
「そうだね」
「アイジャはね、他にもいると思うの」

ウォルディは小さく頷いた。同感だ。
“オリビア”はその名から、一人の女であるとされてきた。しかし近年その活動は苛烈になる一方で、とても単独犯とは考え辛くなっている。
いくつもの裏組織を葬ってきた、“闇殺しのオリビア”。その通り名の主がこんなにあっさりと片付くはずがない。
――でも。

「そろそろこの島を、出ようと思う」

ウォルディの言葉に、丸い瞳がめいいっぱい見開かれた。

「……ど、どうして！？　まだお仕事は終わってない！」
「もとから俺たちが直々に来る必要なんてなかったのを、アイツが頼むから出てきてやったんだ。後は他の奴にやらせればいい」
「そんなの、いけないんだもん！」
「知らないね」

頬を膨らませるのを無視すれば、アイジャますますむくれたようだ

った。けれど、譲るわけにはいかない。
口先では面倒臭がっている風を装っていても、ウォルディの真意は別の所にあった。一ヶ所に長居しすぎたのだ。アイジャが納得するだけの結果を出すのに思いの外時間が掛かり、言われた期限などとうに過ぎてしまっている。
きっともう、手遅れだった。けれどせめて、形だけでも。

「嫌よ！　アイジャは最後までやるのっ！」
「……お前がユリシーズに与えられた仕事は何だった、アイジャ」
低い声で問い掛ければ、びくりと少女は震えた。俯けば小さくなって、長い睫毛が頬に影を落とす。
暫しの沈黙の後、薄桃色の唇が開かれた。

「ウォルディの“ごえい”を、すること……」

ウォルディは組織の“偉い人”だから。アイジャは、強いから。
少女が知っているのはそれだけだった。ウォルディは彼女の家が生業とする仕事を組織として続ける上で、重要なポストに付いている。正確には近いうちに、その地位に付くことを決められているのだ。
アイジャは詳しいことなどわからない。そう周りの人間が話しているのを、何となく飲み込んだだけである。
アイジャ自身にもある“別名”が与えられていたのだが、時が来るまで誰にも話してはいけないと言われていた。その約束は“カーマロカ”首領自身と結ばされたものなのだが、それが如何に重大なことかもわかっていなかった。

「そうだろう？　俺が移動すれば、アイジャはついて来なくちゃいけない」
「……でも、おじいさまには」

少女はなおも縋るように言葉を紡ぐ。小さな拳をきゅっと握り締めた。

「おじいさまには、最後までやらなくちゃ怒られちゃうもん。嫌だもん、だってアイジャは……」

言い淀んで唇を噛む。この少女にとって“おじいさま”は絶対だ。彼女の小さな世界を構築する枠組みとなる男、ドン＝ファンダルス。アイジャの言いたいことはウォルディにもよくわかる。しかし実を言えば今回の仕事は、ユリシーズ・ルインという少年が独断で斡旋したものであった。それに乗ったウォルディとその護衛という名目で同行したアイジャに関する詳細は、組織上部には知らされていない。ウォルディにとっては人生初の無断外出。アイジャにも同じ事が言えたが、こちらは本人もそれを知らないのだった。

「お仕事、頑張らないと……アイジャが、頑張らないと」

自らに言い聞かせるように呟く、少女は知らない。何も知らないのだ。自分を取り巻いていた世界が、人間達が、今どのような局面を迎えているのか。そして自分自身の立場でさえも――ウォルディはふと、それが歯痒くなる。黒い感情が込み上げる。

「――そこまで執務に執着するのは、お前が“ファンダルス”の異分子だからかい？　アイジャ」

「……！」

見開かれた目は動揺を顕にしていた。唇をわななかせたアイジャを少年は一瞥する。きっと今自分は冷たい目をしている。ウォルディ

に、自覚はあった。

「母は死に父には認知されず、祖父の加護と偽りの兄に育てられた“異例”の子だから？」

「いつわり、なんて……」

少女は“ファンダルス”に、そして“煉獄（カーマロカ）”に認められたがっている。

アイジャが唯一気に掛けて生きている事柄を、ウォルディは知っていた。ずっと傍にいたのだ。傍で、その成長を目の当たりにしてきた。その間に見えない壁が、高く聳え立っていたとしても。

傷付くことをわかっていて、その部分を抉る。自分の醜さを、少年自身が一番よく理解していた。

「わかってるだろう？　……ユリシーズのことをそう呼ぶのは勝手だけれどね。でもあれは義兄（あに）の看板を背負わされたお前の教育係に過ぎないのだから、本来住む世界は違う」

「そんなの……！」

そうじゃない、アイジャが細く叫んだ。

「ユーが本当のお兄さまじゃないって、知ってるわ！！　……知ってるもん、アイジャの本当のお兄さまは――」

「お前に兄なんていない！」

少女がびくりと身体を強ばらせる。その眼の淵が赤く滲み、涙を湛えているのをウォルディは見た。後悔の念が渦巻いて唇を噛み締めたが、もう遅い。

もうこれで最後かもしれないのに。こんなことを言う為に、あそこを出てきたわけじゃないのに。

「……それ以上は、言ってはいけない」
「……っ、ウォルディのばか！！」

前のめりになって叫ぶやいなや、アイジャは部屋を飛び出して行った。みるみる遠ざかる小さな背中は、扉が閉まった瞬間完全に少年の視界から消える。

「……馬鹿だなぁ、俺」

いとけない少女の願いを、知っていたのに。最後に見たのは綻ぶような笑みではなく、一雫の悲しみ。

愚かな自分には似合いの別れだったかもしれない。小さく自嘲の笑みを浮かべ、ウォルディもまた部屋を後にする。

決戦の時が迫っていた。ある意味では“オリビア”よりも手強い、ウォルディの“本当の敵”。結果は目に見えているが、それでも。

せめて護ってやることが、できたなら。

「なぁアイジャ。……異分子は、俺の方だよ」

あの屋敷へ帰れば、少女には一つの椅子が用意されている。権力に固められ、揺るがぬ地位を約束される。

それでもウォルディは、彼女に選ばせてやりたかった。

（飼い殺され続ける籠中での安全か、危険に溢れた世界での自由か）

――アイジャ、お前には。

第五章《迷霧》：洗礼と福音（1）

息を潜める。走りながら五感を研ぎ澄まして気配を探る、少女の目的地にはまだ遠い。“目的”そのものが移動しているのだ、無理もなかった。だから尚更、急ぐ必要がある。

いつも腰に提げている愛刀は、目立ちすぎて持ち運べない。生徒に紛れ込むため身に付けた制服のまま、慣れたブーツにだけは履きかえて疾走する。胸に隠した短刀だけでは心許ないが、時は一刻を争った。

連絡を入れたので、じきに少女の仲間もこちらに向かうだろう――間に合えば、良いのだが。

黒沼千瀬（くろぬまちとせ）の前に“彼女”が現れたのは、数刻前の事だった。身を隠していたにも関わらず居場所をあっさりと突き止め、知らせがあるのだと告げた、彼女の正体を千瀬は知らない。

襟足をかなり短く切り揃えた髪の、細い体躯の少女。年の頃は千瀬とそう変わらないだろう。服は簡素なシャツとパンツの組み合わせで、それで生徒ではないのだと知れた。名を問えばたった一言、“ラムダ”と告げる。

困惑する千瀬に“ラムダ”は、簡潔に用件のみを伝えた。曰く、現在進行形で数名の生徒が命の危険に晒されている、と。

その“生徒”達が、ルシファーの協力者であることは千瀬にもすぐ理解できた。全部で何人いるのかも、一度見かけた“ショウジ　アイ”以外はその顔と名前も千瀬は知らない。

「危険ってどういうことですか……？」

内情を知っているらしいその口振りから敵ではないと判断し、千瀬はラムダに向かい合った。感情の読めない瞳をしている、と声には出さず思う。その様子が誰かに似ているような気がした。

「わかりません。ですが、不穏な影が近付いているとのことです。私は貴女方にそれを伝えるよう、言われただけなので」

「それ、誰が……？」

淡々と敬語で話す、ラムダはどうやら何者かの使いらしい。見つめる千瀬の黒い瞳を、彼女は真直ぐに見つめ返した。

「――ルカ様です」

「ルカ、さま」

……あれ？

鸚鵡返しに呟いて首を傾げる、千瀬の脳裏を何かが過っていった。前にも一度、こんな会話をしたような気がする。はて誰だったか。考えている最中についと踵を返して立ち去ろうとした、ラムダを千瀬は慌てて呼び止める。

「ちょっと待って！！　ルカは何処に？」

「ルカ様は今、この“学園”内にはいらっしゃいません」

「え……？」

千瀬は目を見開いた。

こんな時に現場を離れているなんて。ルカは、今回の仕事のキーパーソンなのに。

「ある重要人物とコンタクトをとるためです。これ以上は申し上げられません」
「そんな……だってルカがいないと」
生徒達の位置さえ、わからないのに。
絶句した千瀬を一瞥して、今度こそラムダは背を向けた。去り際に一言、置き去りにして。
「“例の生徒達”の生死は実質ルシファーに影響ありませんが、ルカ様は貴女方に選択肢をお与えになりました。助けるのも見殺しにするのもお好きなように、と」
「――チトセ！」
廊下の角を曲がったところで走り出して来た少年と合流する。説明しろという言葉に促されて、足を止めることはないまま事の詳細を千瀬は語った。
大方聞き終わった後、袖口の仕込みナイフを確認しながら駿が小さく唸る。

「――じゃあその“ラムダ”って奴もルカの使いってことか」
「奴“も”？」
「……ちょっとこっちもな」

聞き咎めた千瀬に曖昧な返事だけ返して、駿はあのカイという少年のことを考えた。どうにも同じ匂いがする。ルカは自分の配下に、一体何を置いているのだろうか。

「つーかルカは？　何で本人が来ないんだよ、アイツが全員の位置を把握してるんだろ……！」

ルカは人間の気配を探って位置を把握する、探知機のような役割を担っている。千瀬は前に一度その能力について、ルードから聞いたことがあった。
彼女は自分を中心とした半径約五キロメートル以内にいる人間の動向を意識せずとも知ることができる。意図的に探れば、もっと広範囲でも可能だった。ただし、見ず知らずの人間に関してはその位置はわかっても、個人の特定はできない。一度接触した相手以外は“その他大勢”として一括りにされているため、あまり意識されることはないのである。
今まで死んだ者は全て、ルカが知らない人間だった。注意していなければ殺されるまで、その存在に意識を向けることもない。
しかし五十嵐沙南をはじめとする“七不思議班”のメンバーは全員、一度ルカと顔を会わせている。あの瞬間からルカは、彼女たち全員を監視下に置いていた。そして少女達に忍び寄る影に、いち早く気が付いたのだ。

「ルカは今、この島にいないんだって……！」
「なんだって!?　こんな時に……ッ」

「人に会いに行ってるって聞いた。とっても、重要な人だって」
「ンだそりゃ、」
舌打ちしたい衝動を堪え、駿は前を見据える。わからないことばかりだ。動くなと言い捨ててウォルディの部屋に押し込めてきた、あの三人の少女も気に掛かる（冬吾が仰天していたがそれは無視した）。
「ルカは助けるか見殺しにするか、あたし達に選べって――」
「馬鹿！　問答無用で助けに行かなきゃヤバいだろお前、あの中に自分の姉貴がいるってわかってんのか！？」
「――――！？」
知らなかったらしい。
動揺を顕にした千瀬を見て、失敗したなと後悔するがもう遅かった。気を紛らわすべく、話題を逸らすことを駿は試みる。
「……つーか、ルシファーの協力者がピンポイントで狙われるのっておかしいよな。俺たちの存在を相手は知ってんのか？」
その“相手”が“オリビア”なる者なのかはわからない。調べるにも情報はゼロに等しいし、唯一の手がかりは二人揃って行方不明だ。ルカにはオリビアという名前だけ、ウォルディの事を話した際に駿から同時報告されている。しかしルカ本人の反応は『ふぅん』と淡泊なもので、とても重要視しているとは思えなかった。“学園”に“異質なモノ”が入り込むことなど、よくある話なのだという。
「わかんないよ……」
へにゃりと情けない声を上げた千瀬を見て、ダメだこりゃ、と思う。

やはり姉の話は地雷だったのだろうか、少女にとってその存在は大きすぎるのだ。元より容量の小さい頭が一杯になって、この先の動きに支障をきたすようでは困る。

「……心配すんな。俺は無駄な死人が出ることには反対だ」
「うん……」
「お前だって、最初から助けるつもりで俺たちを呼んだんだろ」

駿が言い終わるのと同時、二人の視界に銀髪の少女が飛び出してきた。ロザリーは片手に使い込んだ銃を握っている。大丈夫だというように、千瀬に向かって微笑んだ。

「チトセ、お前刀は」
「隠してあるの、取りに行きたいんだけど――」

“学園”内にいくつもの仕掛け扉があることは駿も知っていた。千瀬の指差した方向には、微かだが人の気配があるように思える。ルカのいない今、生徒達の居場所を突き止めるには自分の感覚だけを頼るしかなかったが、間違いはないだろう。タイミングはギリギリに違いない、と駿は独りごちた。

「シャキっとしろよ、チトセ」
「――うん」

三人は走るスピードを加速させる。
何だか妙な心地だった。だって今回は、奪うほうではなくて。

第五章《迷霧》：洗礼と福音（2）

ルカ・ハーベントは見つからなかった。
一日に二人も殺される、それはどう見ても異常だった。闇に潜む殺人犯の活動が、活発化していることも想像される。ブリックマンの死からそんな観測を抱いたロアルと百瀬は、二人連れ立ってルカを探していたのだ。しかしそれは徒労に終わったらしい。ミクと名乗ったほうの少女でさえ、影も形も見当たらなかった。
こうなればオミを探すかもう一人、指定された少年の方に行くしかあるまい。一度部屋へ帰ると言う百瀬と別れて、ロアルは一人校舎の中を歩いていた。百瀬とは後でまた待ち合わせることになっている。

建物内は閑散としていた。授業が中止になっているのだ、普段なら辺りを賑わわせている生徒達も、教師陣でさえ自室に閉じこもっている。
嫌な感じだ、とロアルは思った。びりびりと痺れる、緊張感を孕んだ空気の流れ。何か、良からぬモノが動こうとしているのではないか。
それは勘ではなく確信だった。昔から少女は、この手のものに聡い。

上履きが動く足に合わせてぱたぱたと音を立てる。時折リノリウムの床を擦るゴム底の、きゅっという音が耳に付いた。
静かだ。生き物がいなくなってしまったような、この世に一人きりのような錯覚に囚われる。寮に帰ればきっと、大勢の生徒達がいるというのに。

「……？」

ふとロアルは顔を上げる。ほんの少しの、確かな違和感だった。

「だれ？」

疑問をそのまま声に出せば、ちょうど死角になっていた廊下の角からゆるり、一つの影が現れた。ロアルは首を傾げる。どこか見覚えのあるような顔は、彼女の記憶によれば二棟か三棟所属の男子生徒だった。

きっちり着崩されることもない制服と黒縁の眼鏡をかけている、一見あまりぱっとしない少年である。大勢の中にいれば目立つこともないだろうが、ロアルは今までに数回見かけていた。それも彼女の学園生活が長い故の結果だろう。

「第四棟の寮長ですね？」

「そうだけど……あなたは？」

話し掛けられて初めて知った、その声は存外に穏やかで低い。妙に老成した雰囲気に首を傾げる、ロアルの前で少年は続けた。

「内藤紀一（ないとうきいち）、と言います」

「はぁ」

「――――仲間からは、【ゴスペル】と」

……え？

唇だけ開いて硬直した、ロアルの眉間に銃口が突き付けられる。引き金に手を掛けているのは目の前の少年――内藤紀一、だった。

「仕事なんで。すいませんね」

頭の中が真っ白になる。何も考えられなくなったロアルを見つめな

がら、少年は申し訳なさそうに呟いた――その顔は、笑っていた。
しかし刹那、弧を描いていた彼の唇が不自然に歪められる。

「――！　チ、」

容姿には似合わぬぞんざいな仕草で舌打ちし、内藤――否、【ゴスペル】が身体を捻って飛び退った。次の瞬間今の今まで彼が立っていた位置に連続して三本、何処からか飛んできたナイフが甲高い音を立てて突き刺さる。
一体何が起こったのか。思考を放棄してしまった頭で必死に考えを巡らせるロアルの、背後から新たな人間の声が聞こえた。

「ちょっと邪魔するぜー」

不敵な笑みを浮かべて【ゴスペル】と対峙する、見知らぬ少年をロアルは見つめる。ひゅっと腕を振ればその掌には、平べったいスローイングナイフが現れた。おそらくは袖口に仕込まれていたそれが、先刻自分を救ったに違いない。
そこでようやくロアルは、彼の正体に思い至った。

「あなた、“ルシファー”の……？」
「ご名答。――チトセ！」

ロアルをちらりと見て笑った少年が次の瞬間、壁に埋め込まれていた非常灯の一つを蹴り壊した。何を、と問う間もなく連動したように床の一部が割れて、そこから黒い棒状の物が吐き出される。
目を見開いたロアルの視界のなか、それを掴んだのは黒髪の少女だった。何時の間に現れたのかはわからない、少女はそれの張り出した部分を親指の先で押し上げる。黒と黒の隙間から、煌めく白銀が覗いた。

（刀、だ）

ロアルが気付いたときにはもう、チトセと呼ばれた少女の手には完全な抜き身の刃があった。常人では目にも止まらぬ速さで一閃、切り掛かった少女の一太刀を【ゴスペル】は正面から受けとめる。鈍い音がして切っ先が、銃の縁にめり込んでいた。

（……マズイな）

一瞬の攻防を目の当たりにした駿は小さく唸る。千瀬の第一撃は決して悪いものではなかったのに、相手は何処か余裕を残しているように感じられた。

ＥＰＰＣのように、戦闘に特化したタイプの人間なのだろう。そしておそらくは一般人の出である駿や千瀬とは違う、特別な訓練を積んだ。

「アンタ、立てる？」

力を失って床に座り込んでいたロアルの腕を掴む。そのまま上へ引き上げて、駿は彼女を壁際へ押しやった。動くなよと念を押し、素早く“敵”へと視線を戻す。

全力でぶつかればこの人数差だ、息の根を止めることはできるだろう。しかしそれではいけないのだ、捕らえて口を割らせなければならない。殺さないほうが、ずっと難しいのである。

（だからこうしてフォーメーション組んでるんだろ）

独りごちてナイフを構える、駿の瞳に怜悧な光が宿った。千瀬の刀によって使い物にならなくなった銃を床に放り投げ、自称“内藤紀

一〟は短刀を構えている。何処に隠し持っていたのかはわからないが、千瀬が間合いを測っているのが駿にも良くわかった。
――あの千瀬が、飛び込んでいこうとしないほどの相手だ。

「……っ！」

刹那、息を呑む音が聞こえた。
力強く一撃、踏み込んできた相手に千瀬が応戦する。刃と刃の競り合う高い音が響いて弾けた。驚くべきことに力負けしたらしい、千瀬が僅かによろめいた隙を見て相手の少年がぱっと踵を返す。
しまった、思って駿の投擲したナイフは寸でのところで躱された。
このままでは逃げられてしまう――――わけには、いかない。

「――そっち行ったぞローザ！」

駿の声に合わせて影から躍り出た、ロザリーは敵の退路を塞ぐように立ちはだかった。馴染みのリボルバーが銀色に輝く。
銃口を真直ぐに向けられて一瞬たじろいだ少年を、取り押さえようと駿が駆け寄る。

異変が起こったのはその時だった。寸分違わぬ正確さで狙い定めていたはずの、銀の銃口が僅かにぶれを見せたのである。気付いたのは駿だけではなく、標的となっていた本人もだった。

「ローザ！？」
「……っ、」

少女の際限まで見開かれた、銀灰の瞳が揺れている。その視界には壁際で立ち尽くす、銀髪の少女が映っていた。同じ色の髪、同じ色の瞳。

駿の声で咄嗟に我に返って引き金を引くも、弾丸はロザリーが照準を合わせた位置からかなり外れて壁を割った。その隙に横を擦り抜けていく敵に、少女は一歩たりとも反応できない。

「待て！　――おい、チトセ！？」

逃げた相手を単身追って消えていく、千瀬の後ろ姿と駿の声。深追いするなと叫んだ、彼の声は届かなかったらしい。

「……ローザ、どうしたんだよ」

小さく息を吐いて怪訝な面持ちを浮かべる、駿の方を見ることはできなかった。ロザリーはただ一点を凝視したまま動かない。その様子を見て漸く駿は、少女の目が何を映しているのかを知った。

「おい……冗談だろ……？」

笑うことすらできない、禁断の邂逅。良く似た容姿が鏡のように向かい合って場の空気を止めていた。何度も我が目を疑ってついに、二人の少女はお互いの存在を認める。

チャリ、と小さな音を立てたのは銀のブレスレットだ――あの血の錆びに塗れた。

「……おねえ、ちゃん」

呼ばれて身体を震わせた少女を、駿は目を見開いて見つめた。まばゆいプラチナブロンドは、ロザリーにも見られる特徴だった。

――第四棟寮長の名は、ロアル・E・ウィルヘルムという。

彼女はロザリーの、実姉だった。

第五章《迷霧》：洗礼と福音（3）

「……ロザリーっ！！」

脱兎の如く踵を返しその場から逃走する、その後ろ姿に叫んだのは少女の姉だった。予期せぬ再会から怯えるように逃げ出した、妹をロアルは追い掛ける。

それに驚いたのは駿で、突然疾走を始めた少女二人をぽかんと見つめていた。はっと我に返ったときには銀色は二つとも、遠くに煌めくだけになってしまっている。

「……な、何なんだよッ！」

声を上げても応えるものはいない。舌打ちを一つ零して駿は、千瀬を追い掛けることにした。

（介入なんて、できない）

今は仕事中で、甘いことを言っている場合ではない。そんなことはわかっていた、けれど駿は。

二人きりで話をさせてやれたら良い、と思う。他人が触れることなどできない領域を、あの少女達は持っているから。

＊

人気の無い廊下を物音一つ立てずに疾走してゆく、その様に千瀬は舌を巻いた。相手はかなりの手練だ。追跡するのが精一杯の有様である。

【ゴスペル】と少年が名乗ったのを千瀬は聞いた。あの場に辿り着いた時ちょうど、そう彼が口にしたのだ。

聞き慣れぬ言葉である。その意味などわからないが、コードネームであることぐらいは想像できた。何らかの組織に所属している、千瀬達の敵。それが“ルキフージュのデータ”を欲している者と同一かは、定かではないけれど。

「……あ、れ？」

廊下の角を曲がって走り込んだ先、あるはずの姿が無くて千瀬は目を見開いた。次いでさっと血の気が引く。【ゴスペル】を見失ったのだ。

どうしようかと頭を抱えそうになったその瞬間、少女ははたと顔を上げた。耳が拾い上げた音に全神経を集中させる。か細く弱い、けれどあれは。

（――悲鳴、だ）

気付いた瞬間その方向目がけて走りだす。耳に微かに残る声を頼りに気配を探る、千瀬の第六感は確実に相手の居場所を突き止めていた。以前見せられて頭に叩き込んだ、建物の見取り図を思い浮べる。入り組んだ造りの最短ルートを弾き出したその時には、再び鯉口を切っていた。

千瀬の飛び込んだ教室の、壁にぴたりと背を合わせて二人の少女達が立っていた。寄り添うようにして固く手を結んだ彼女達の顔は瓜二つである。その完璧な造形に驚く間もなく、千瀬はもう一人を視界に入れた。そうして、目を見開く。

「……あなたは？」

部屋の隅に双子を追い詰めていたその人間が、千瀬に気付いてゆっくりと振り返る。捜し求めていたのと同じ、男物の制服姿。しかしこちらに向けられたその顔に、少女は表情を曇らせた。

――【ゴスペル】では、ない。

てっきりあの少年がこの場所に逃げ込んだと思っていた、千瀬は刹那嫌な予感に身を震わせた。

一体、何人が動いているのか。現状の把握が出来ないまま、少女は刀を下段に構えた。チャキ、と鍔鳴りのするそれを向けられた相手は喉の奥で嗤う。この二人目の少年を、千瀬は“敵”として認識した。間一髪のところでこの世に生を繋いでいる双子の少女も、おそらくは例の“協力者”なのだろう。誰もが恐怖を感じて自室から出てこようとしない、こんな日に出歩いていたのだから。

「――“俺”が“何”かって？」

云いながら双子に向けられていた短剣の切っ先が、ゆるりと千瀬のほうに移動した。常日頃から運動をしているのだろう腕に付いた逞しい筋肉が見える。【ゴスペル】とは違ったタイプの少年だ。

さっさと殺れば良かった、邪魔が入る前に。双子を一瞥し吐き捨てた後、彼は猟奇的な笑みを浮かべてみせる。

「俺のことはどーでもいーよ。ねぇそれより、アンタは何？」

アンタはあれの価値を知ってる人間か？
少年の紡いだ言葉に千瀬は目を見開いた。あれ、とは何を指すのか。たった一つだけ、心当たりがある。

「何で俺の邪魔すんの？　もしかしてアンタが、【ジーザス】の言っていた“アンノウン”？」
「ジーザス……？」

答えをよこそうとしない千瀬に矢継ぎ早に質問を浴びせかける、少年はどこか焦っているようだった。時折ちらりと時間を気にしては壁の掛け時計に目をやっている。千瀬のことを侮ってはいないのだろう、構えた白刃だけは微動だにしなかった。

「“目”の情報は確かだったってわけか。――アンタが“悪魔”そのものだったりして？　にしてはどうも可愛らしい……ねッ！」
「……っ！」

言葉を切ると同時、飛び掛かってきた相手の一撃を千瀬は紙一重で躱した。続け様に切り結ぶ甲高い音が教室に反響する。
速い、思って千瀬は強く柄を握り締めた。得物を捌く少年の動きはかなりのスピードで、気を抜けば腕ごと持っていかれてしまう。
幾度かの斬撃の隙を見て、千瀬は一度だけ壁ぎわに寄った。身体を強ばらせている少女達に逃げろと囁く。彼女達を庇いながら戦えるほど、千瀬に余裕は残されていなかった。

「……ミドリ、」

片方の少女が自分の半身を呼ぶ。二人手を繋いだまま真直ぐ教室の出口へと駆けていく、双子の足音を千瀬は聞いた。それを追おうと

する少年との間に割り込んで一閃、打ち込んだ太刀の力で食い止める。チッと短い舌打ちの音か少年から零された。

「あーあーあー！　逃げられちゃったじゃん、アンタ何してくれてんの！」

大切な獲物（ターゲット）だったのに！

叫んで少年は千瀬を睨み付ける。短剣をぽいと投げ捨てて懐から拳銃を取出した、彼の瞳には明らかな殺意が滲み出ていた。

「手ぶらでなんて帰れないじゃん。ウルサイ奴が来る前にアンタだけでも死んどいてよ」

「――――もう来ているがな」

突然の出来事だった。

第三者の声が聞こえた瞬間、千瀬は首筋に鋭い痛みを感じる。刹那、少年がこちらに向けていた銃口がぐんにゃりと歪んだ。……歪んだのは、千瀬の視界だ。

（……なに、？）

後ろから何者かに攻撃されたのだと気付いたときには、少女の身体は冷たい床に崩れ落ちていた。打ち付けられた頭が鈍い音を立てたが無痛で、代わりに首の一点が妙な熱を持っている。

ドク、ドク、心臓の鼓動がやけに耳に響いていた。指先が震えて冷たくなってゆく。力は、入らない。

「……げぇ、【ペルソナ】ったらもう来ちゃったの」

「貴様が愚鈍なのだろう。【バプテスマ】、ターゲットはどうした」

「……逃げられた」

愚図め、吐き捨てるような声を千瀬の耳は拾い上げた。それ以外の感覚器官は職務を放棄してしまったらしい。目を凝らしても霞む世界の中で、なんとか人影が二つ見えた。

「“どっち”が“それ”なのかわかんなくってさ、名前を聞こうとしてたら邪魔が入ったんだ」

唸るような声が聞こえた。千瀬の耳は徐々にその昨日を失いつつあるらしい。小さくぼんやりと、遠くの人間の会話のように感じる。どこか呼吸も苦しかった。

「……追うぞ。時間がない」
「そいつ、どうすんの」
「そのまま転がしておけ。――じきに死ぬ」

二人分の足音が遠くなる。聞き届けたのを最後に、とうとう千瀬は意識を手放した。

後には深い暗闇ばかりが、ぽっかりと口を開ける。

第五章《迷霧》：洗礼と福音（4）

待ち合わせの時刻を過ぎても相手はやってこなかった。嫌な胸騒ぎに襲われて、百瀬は元来た道を戻りはじめる。

こんなことならば、別行動などとるべきではなかった。ロアルの行方など心当たりがあるはずもない。ただ闇雲に探すよりは寮から見るべきだと考えて、とりあえずそちらの方向へと足を向ける。

学園の中は閑散としていた。本日の授業は全て休講なので、わざわざ出歩く物好きもいないのだろう。

――だからこそ“何か”が起こるのならば、人目に付きにくい今日だと少女は踏んでいた。

「――ッ！？」

寮棟への入り口を潜ろうとした瞬間だった。角から突然現れた白い手に掴まれて百瀬は小さく声を上げる。

ぐい、と引っ張り込まれて転がるように床に膝を付いた、態勢はそのままに少女は顔を上げた。自分を掴んでいた相手を認識して目を見開く。

「絹華……？」

鮎村絹華は唇の前に人差し指を立てて沈黙を求めた後、百瀬の肩を支えて立ち上がらせる。一体何なのだと問われる前に、絹華は小声で囁いた。

「……来た」

「何が、？」

小首を傾げた百瀬の目が、滑り込むように現れた少年を映したのはその瞬間だった。
どこでだって見かけそうな、眼鏡をかけた男子生徒である。一見すれば只の通行人ともとれる彼が、しかし確かな違和感を孕んでいることに百瀬は気が付いた。
きっちり着込まれていたのだろう、学園指定の制服が僅かにだが崩されている。弛んだシャツの隙間から覗く腰の辺り、妙な膨らみに気付いて目をやればその正体を知った。
――刃物、だ。

「――絹華ッ！」

危ない、そう叫んだ時にはもう動き始めた後だった。少年が短剣を抜いて真直ぐ絹華に向かってゆく。踏み込んだ彼の手元から一筋白い光が煌めいた、次の瞬間に崩折れる小さな身体。

「き、ぬ……っ」

ざわり。百瀬は己の体内の血が一瞬にして沸き立つのを感じた。戦わなければならないと本能が告げる。
少年の剣筋は見えていた。黒沼の剣術を受け継いだのは百瀬ではなく妹だが、その才が彼女に皆無であったわけではない。力を奮う事を厭うていただけで、本来の能力は百瀬も有していたのだ。ただし鍛練を積んだ妹――黒沼の神童と比べれば無力に等しいが。

（でも、やらなきゃ――）

百瀬は身体を強ばらせたまま、絹華のほうに視線をやった。横倒しになった体躯はぴくりとも動かない。百瀬の位置からはその細い背しか見えず、出血の度合いを確認することも叶わなかった。

今はまだ生きている。けれど、このままでは。

「……先刻、貴女にそっくりなお嬢さんに邪魔されました」

何か武器になるものを。探して視線を彷徨わせていた百瀬に、冷ややかな声が降り注いだ。口を開いたのは目の前の少年で、眼鏡の奥から温度の無い瞳がこちらを見据えている。

「何者だったのだろうね。まぁ、もう死んでいると思いますが」

ふ、と笑った少年に何を言われたのかわからなかった。首を傾げかけて刹那、少女の身体に戦慄が走る。

（誰、が？）

誰に似ていたと、言った？

「あの子が、」

あの子が来ているの？

自分にそっくりの容姿をした、最愛の妹を百瀬は思い出す。彼女が今、この地に来ているというのだろうか。ルシファーという組織が活動をしているのだから可能性は高かった。百瀬は妹の役目を何一つ、知らないけれど。

「それで、」

――百瀬の身体が小刻みに震える。理解してはいけないと、何処かで警報が鳴っていた。

死んだって、誰が？

「……っ、ぐ」

思考を停止した百瀬の目の前で刹那、異変が起こった。
少年が小さく唸ったかと思うと、ぼとりと短剣を床に落とす。カラカラと音を立てて回転するそれには目もくれず、彼はその場に肩膝を付いた。

「……ッ、げほ、」

「やっと効いたんですか」

鈴のように軽やかに響いた声に少年が目を見開いた。地に伏せていた少女がゆっくりと起き上がるのを、信じられない心地で百瀬も見つめる。
何事も無かったかのように立ち上がって絹華は、ことりとその場で首を傾げてみせた。

「肉弾戦じゃ勝ち目はなかったもので……ちょっと卑怯でしたか？　関係ないよね」

うん、と自己完結してみせた絹華の右手、その人差し指にはアンティーク調のシルバーリングがはめられていた。日本人形のような容姿をしている絹華とでは、それだけ何処か違う世界の物のようだ。
そのリングの淵から良く見なければわからない、細い細い針が突き出ている。

「毒、か……ッ」

「こんな初歩的な仕込みに引っ掛かってくれるなんて思いませんでした」

笑って、絹華はすっと目を細める。刃に貫かれたはずの身体には、僅かに服を切り裂いた後があるだけだった。衝撃を吸収した何かを、その下に隠していたのだろう。

ごぽり、肺の奥からせり上がってきた血を吐き出して少年はそのまま床に倒れ込んだ。

「ついさっき報告を受けたばかりですよ、内藤紀一さん……いえ、“福音（ゴスペル）”」

言いながら少年の傍らに屈み込んで、絹華はその黒い目を向ける。

「あなた、“オリビア”？」

問われたその言葉に少年――【ゴスペル】はくつりと喉を鳴らした。唇を歪めた次の瞬間、大量の紅がそこから零れ落ちる。

それは辺りの床をみるみる染め上げていった。次いで彼は喉の辺りを掻き毟る。大きく痙攣した後、ついにぱたりと動かなくなった。

「……あれ。死んじゃった」

事もなげに落とされた、少女の声は何の感情も孕んでいなかった。

そのまま絹華はくるりと振り返って百瀬に目を向ける。怪我はないかと問い掛けた、その様子は普段と何ら変わらない。

「……絹華、あなた一体……？」

瞠目したままの百瀬に向かって困ったように笑う。それから絹華は笑顔を引っ込めて、小さく一礼した。

その意味を百瀬が悟ったのは直後のことである。

「――キヌカ、来なさい」

突如現れた金髪碧目の少女は、百瀬やロアルが探していたうちの一人だった。少女達の苦労を無にするかのように簡単に現れてミクは、その両眼で屍となった少年を一瞥する。

「……アナタも来たほうが良いわ、モモセ・クロヌマ」

わけもわからず手を引かれる。逆らうことなどできないまま、百瀬は絹華と共に深紅に染まったその場所を後にした。

第五章《迷霧》：間話 - 真実と少年達の物語（1） -

開け放たれた扉の奥で少年が笑う。柔らかな巻毛を揺らす微風は細く開いた窓の隙間から吹き込んでいて、彼はそれの前に座っているのだった。貴族のように華美な衣服に身を包み、赤い皮張りのソファーに体躯を沈める少年は一枚の完成された絵のように見える。一瞬の間だけ猫のように細められた眼の、冷たい光が正面から男を射抜いた。

「どうも。ご機嫌如何かな？　ユリシーズ公」
「……何？　呼んだ覚えは無いよ、ギルヴィート伯爵」
「はは、相変わらずつれない御子だ」

この、糞餓鬼めが。
内心激しく毒吐きながら、男――カルノア・ギルヴィートは笑みを浮かべた。“カーマロカ”における彼の地位は《伯》である。華族の世襲的身分制度に使用される爵位を、この組織では階級の名としてそのまま用いていた。
爵位とは上から、公・侯・伯・子・男となる。ギルヴィートはけして下層の人間ではなかったが、目の前の少年――ユリシーズ・ルイン“公”爵と比べれば雲泥の差があった。彼はそれを、快くなど思っていない。

「なぁに、特にどうといったこともないのですが……ファンダルス殿下はお元気ですかな？　是非ご挨拶に伺いたい」
「首領（ドン）かい？　出かけてたんじゃないかなぁ……僕なんかに聞いても居場所はわからないよ」

さらりとはぐらかす、ユリシーズの狙いは読めていた。ギルヴィー

トはにやりと口角を引き上げる。

「――いえいえ。小生が申しておりますのは、ドン＝ファンダルスではなく……継嗣殿下ですよ」

男が言えば少年は興味などないように静かに目を伏せる。頬杖を付く仕草は眠たそうですらあり、それがどうしたと言わんばかりであった。

「ウォルディ太子は仕事で出ている。暫らくは帰らない」

「……くく、公はご冗談がお好きのようだ。よもや“本物”の継嗣を知らないとは言わせませぬよ」

くつくつと喉を鳴らす男の向かいで、ユリシーズが不快げに眉根を寄せた。ギルヴィートの狙いに気が付いたのだろう、身体を起こして真直ぐに彼を睨み上げる。

「――お前」

「アイジャ・ラ・ファンダルス殿下にお目通り願いたい。……どちらに隠されたのですかな？」

ぴくり、と少年の肩が動いた。

何処でそれを聞いた？　低く唸るような声が響き渡って、かかった、とギルヴィートはほくそ笑む。白を切り通せないあたり、やはりまだ子供なのだ。

――“カーマロカ”上層には、ダンカと言う名の男がいる。彼は組織の現総帥であるラディーニ・C・ロベリオ・ファンダルス――通称ドン＝ファンダルスの一人息子だ。

本来ならば組織の次期首領になるはずのダンカは数年前仕事の最中

に大怪我を負い、以来前線を退いている。そこで継嗣として白羽の矢が立ったのがダンカの子ウォルディ――つまり、ラディーニの孫であった。

しかしこの話には、裏が存在する。

「今この組織に何が起こっているか、知らない貴公ではありますまい。カーマロカには、頂点に君臨する新たな人材が必要なのです」

「知っているさ。お前には手の届かない高さの話だ。違う？」

少年の言葉は男に何の影響も及ぼさなかった。手が届かない、雲上の物語。確かに昔はそうだった、思ってギルヴィートは口角を引き上げる。

代々煉獄（カーマロカ）は、ファンダルス一族の独裁であった。その血を引かぬ人間はいくら足掻こうとも上層に触れることすらできない、不変の世界。

ファンダルスは天上人だ。その不文律が揺らぎはじめたのは数年前――ダンカが不慮の事故により後継者の座を降りたのが切っ掛けだった。隠居生活に入ろうとしていたラディーニが再び首領の座に腰を据え、まだ幼いウォルディが世継に選ばれたのである。

それまでウォルディ・レノ・ファンダルスは存在こそ明らかになってはいたものの、その姿を見たものはいないとされていた。ファンダルスの子は普通、幼くとも十を過ぎれば仕事に就く。当時のウォルディにそのような動きは一切見られず、継嗣の地位に着いてからも任務に入る様子はなかった。

形だけの即位。

その頃からだろうか、一部の人間がまことしやかに噂話を広め始めたのは。

ラディーニもダンカも、ウォルディを仕事から遠ざけ続けていた。寵愛といえば聞こえは良いが、その様は些か異様だったように思う。過保護なふりをして彼を軟禁し、人目に曝さぬようにするその様子

を見て、ある日誰かが言い出したのだ――ウォルディ太子は『欠陥品』である、と。

「ウォルディ閣下は“継嗣”のふりをしたまがい物」

ギルヴィートはその話を聞いた日の興奮を、まだ覚えている。

ファンダルスが絶えることなくカーマロカの頂点に君臨し続けた、その理由は彼らだけが持っている絶対的な“力”だった。人間である限りは決して越えられない圧倒的な差。ウォルディがその力を奮う瞬間を見た者は誰もいない。歴代のファンダルスがその身に受け継いだ奇跡を、彼は持っていないのではないか？

それを肯定するかのようにある日、ドン＝ファンダルスは何処からか一人の少女を引き取った。名をアイジャという、彼女の存在は公爵位以上の人間にしか知らされない機密事項になる。ギルヴィートがそれを耳にしたのは全くの偶然であったが、同時にそのアイジャが特殊能力者であるらしい事も知った。

今しか、ない。

カーマロカは波立った。どの組織にも野心家は存在する。己の地位を限界まで高めたいと願うのは通りだ。組織そのものを手にしたいと願う人間は、ごまんと存在した。

醜い欲による下剋上。今までカーマロカでは成されなかったそれは、絶対的な壁が崩れ始めたことによって動きを見せていた。ギルヴィートもそれを狙う一人である。

昨日から総帥は所用でファンダルスの屋敷を開けていた。今が絶好のチャンスなのだ。一月前同じ機会が訪れたときには、結局継嗣を発見できずじまいだったのである。昇進を狙うもの達には確実に、焦りの色が浮かんでいた。

「ファンダルスの天下は終わるのですよ、公。今この組織内には幾つかの派閥があることをご存じか？　大まかに分ければ二つ、革命の為に継嗣を“殺す”か“殺さないか”」

少年の瞳に鋭さが増した。欲のままに行動を起こそうとしている人間が、革命などと綺麗事を言うのか。

一重に下剋上と言っても方法は様々だが、最も簡単なのはその頂点の首を獲ることである。総帥ラディーニはもうかなりの年を重ねていて老い先短い。ダンカは権力を失った。ならば狙うは残された、年若い世継ぎだけだ。

「……無駄なことは考えるなよ、ギルヴィート。僕を誰だと思っている」

「わかっていますよ、嗚呼、義妹思いのルイン公。この屋敷から二人を出したのは貴公ですな？　お陰で随分と予定が押しているのですよ」

じり、と詰め寄っても少年は微動だにしなかった。意志の強い目がギルヴィートを捉えて揺るがない。

――この少年が組織にやってきたのは、アイジャよりも少し後だった。異例の早さで公爵位を得、なおかつファンダルスの中核と接点を持つ謎の子供。

「アイジャ殿下の存在を知るものは彼女の命を、知らぬ者はウォルディ太子のお命をそれぞれ狙っております。後者は無意味な行動ということになりますがな」

「……ギルヴィート」

冷えきった声だった。ざわりと揺らいだ空気に一瞬、ギルヴィート

は背が粟立つのを感じる。しかしその発生源に目をやっても、見えるのはただの少年だ。
深呼吸して男はユリシーズに向かい合った。たかが子供一人、地位に差はあれど優勢なのはこちらである。

「……僕はね、カーマロカの次期総帥が誰だろうがどうでも良いんだ。でも、あいつに手は出させない」

凛と声を響かせた少年は首領の命により、アイジャの義兄の役を務めている――ギルヴィートが聞いた噂は本当のことだった。だからユリシーズはファンダルスに近づくことを許されているのだろう。
たかが、そんな理由だけで。
アイジャを、継嗣を守ろうとする少年はギルヴィートにとって邪魔でしかなかった。その仕事ぶりを見たことはないが公爵なのだ、無力な偽物継嗣より戦闘能力は高いのだろう。目障りだ、と男は思う。

「こうしている間にも下賤の輩が殿下達のお命を虎視眈々と狙っているのでしょう。屋敷から逃がしたところで時間稼ぎにしかなりません――ならばいっそ小生に、」
「……ハッ、お前もその仲間だろうギルヴィート！！」

口を歪めて声を荒げる、ユリシーズの脳裏に一人の男が浮かんだ。
ダウマンという、先日少年を訪ねて来た人間だ。階級は《子》、彼はウォルディの居場所を知りたがっていた。あれはアイジャの存在を知らない、ウォルディの命を奪わんとするグループの人間だったのだ。
そろそろ潮時かもしれない。ユリシーズはとうに悟っていた。――それでも、選ぶ時間を与えてやりたかったから。

「かのような者と一緒にされては困ります、小生の一派は穏健派で

すよ。幼子の命を奪うなど正義に反する――ただ継嗣の存在を、手の内に収めようと言うだけ」

「……どうやって？」

胡乱な眼差しを向ける少年を嘲笑うかのようにギルヴィートは目を細めた。血を流さない大人のやり口は、まだ彼には理解できないかもしれない。

「なに、あと二年もすれば殿下も子を孕める年になる。カーマロカの実権をそのまま、我らへ戴くのですよ――長い目で見ることになりますが」

「……ッ、下種め！！」

吐き捨てた少年の肩にやんわりとギルヴィートは手を置いた。成長途中の身体はまだ細く華奢だ。

このまま一捻りに、できてしまいそうなくらい。

「――小生と穏便な取引をなさる気はありませぬか、無駄な犠牲が出る前に。不粋な連中はろくに頭も使わず、今頃偽の継嗣を追っているでしょう。ウォルディ太子のお命も危ぶまれますな！」

ははは、低く笑った男の声を合図とするかのように、ふらりとユリシーズが立ち上がった。声が壁に吸い込まれた後は、どうにも奇妙な沈黙が残る。

「……公？　どうなされた」

俯いたまま口を閉ざしている少年の、違和感に気付いて声を上げる。するとギルヴィートの手を肩から払い除け、ユリシーズはゆっくりと顔を上げた。

その瞳の奥で、何かが揺らめく。

「ギルヴィート伯爵。何故僕がアイジャの義兄を言い付かったか、教えて差し上げましょうか」

突如丁寧な口調になったのが、逆に気味が悪かった。悪寒に一歩退いたギルヴィートの眼にニコリと笑った少年の顔が映る。その白い腕がすっと前に差し伸べられた。瞬間、掌で爆ぜた何かにギルヴィートは目が眩む。痛いほどの鮮烈な光を帯びたそれが火花だと気付いたときには、渦巻く球体の火の玉に成長していた。

（これ、は？）

ギルヴィートは我が目を疑う。空気を巻き込んで大きく燃え上がる炎は、少年の手の内より生み出されたものであった。彼の意のままになる灼熱。この奇跡を、ギルヴィートは知っている。

……一度だけ、見たのだ。あのダンカがまだ戦地で功績を上げていた頃、彼の身体からほとばしった煉獄の焔を。

「何故だ……！」

何故この子供が、ファンダルスの力を。

疑問は声にならなかった。唇を開いたギルヴィートの、喉の奥から凄まじい熱気がせり上がってくる。身体の内部が焼かれる感覚。悲鳴は熱に飲まれて炭化した。

「これを見て生きているのはドンとウォルディ、アイジャ、それからサブナックと僕の部下二人だけですよ」

他は全員、死んだってこと。

言いながらユリシーズは天使のように微笑んだ。芝居がかった仕草で礼儀正しく一礼した、少年の姿はもうギルヴィートからは見えない。身体中火だるまになりながらそれでも意識を保っていられたのは、ユリシーズが絶妙な力加減で調整していたからだ。

「死にゆく貴男に敬意を、カルノア・ギルヴィート伯爵」

ごうごうと音を立てていた炎が瞬間、一層激しく燃え上がった。一気に上昇した熱気で空気が揺らぎ、ぱちんと何かが弾けて消える。

「……お前は、僕の炎で焼け死ぬに相応しい下郎だった」

徐々に勢いを失った火は、ふっと掻き消えるように消滅した。静かに閉じられた少年の掌には、無論火傷の跡などない。

天井も床も一切を汚さぬまま、黒々とした炭灰だけがその場には残る。窓から吹き込んだ風がそれを巻き上げたのを一瞥し、ユリシーズは部屋を後にした。

第五章《迷霧》：間話 - 真実と少年達の物語（2） -

裏合法的平和維持組織、煉獄（カーマロカ）を統括するファンダルスの血族。もし彼らの家系図を見ることができたならば、そこにある法則が存在することに気が付くだろう。ファンダルスはそれに則って、これまで変わらぬ繁栄を続けてきたのだ。

――彼らの持つ人知を超えた力を次世代に受け継がせる為には、ある特異な条件下でその子を成すことが必要であった。一つに、ファンダルスの血を引くものが男であった場合その妻も能力者でなければならない――即ち、異能者同士の婚姻のみを認める、というものがある。

ファンダルスの能力は強大で、それを持って生まれてくる次世代の子はやはり特別だった。人並み以上の力を有する能力者の女以外では、出産に耐え切れず皆死んでしまうのである。

また、一族は原則として一組の親につき一人ずつしか子をもうけない。これは、何人兄弟姉妹がいようともその能力が第一子にしか受け継がれなかった為である。特異さ故なのだろうが、詳しい理由はわかっていなかった。

例えば現総帥・ラディーニの父――つまり先代のドン＝ファンダルスだ――には弟がいたが、彼にはファンダルスの血族のような特殊能力は一切備わっておらず、ただびとより僅かに聡い程度の男であったという。その段階で一族の分家と認定された彼は、普通の人間の女を娶って家を出た。以来、死ぬまで一切組織とは関わりを持たなかったらしい。

不思議と一家に生まれる嫡子が尽く男児であったことは、この二つの決まりごとが異論無く守られ続ける要因となった。

そしてウォルディ・レノ・ファンダルスも、ルールに則ってこの世に生を受けたのだ。

「――ウォルディ・レノ・ファンダルスだな？」

突き付けられた銃口と低い声に少年はくすりと笑みを零した。見つかってしまった諦めと、よくもまぁこんな所まで来たものだ、という呆れにも似た感嘆。後ろ頭に当たる硬い無機物の感触がごりごりと擦り付けられて、返答を催促されていることを知る。

「そうだと言ったら？」

「そのお命、頂戴する」

だろうね。

呟いてウォルディは相手の死角で小指をくいと動かした。

途端、ぱちんと何かが弾ける音が響き渡る。

部屋にぴんと張り巡らされていた光を反射しないワイヤーが勢いを付けて飛び出した、瞬間ごとんと少年の背後で鈍く響いたものがあった。研ぎ澄まされた鋼鉄の糸で首を落とされたらしい、命を失った男の掌から拳銃が滑り落ちて床に身を投げ出す。カランと高らかに響いた時には、残る首から下もまた地に崩折れていた。

（こんなトラップでも役立つのか）

切断面から紅い液体を吐き出し続ける死体を一瞥する。そのままウォルディは部屋の外へと声をかけた。出ておいでよ。

暫しの沈黙の後、それに応えるかのように扉の向こうから人影が現れた。先頭の男は僅かに逡巡してから（おそらく第二トラップの発現を恐れたのだろう）部屋に踏み込んでくると、死体の傍に佇むウォルディを見て低い声を上げた。

「なんとも手厳しいご挨拶だ、ウォルディ閣下」

「知ってるかい？　こういうの、正当防衛って言うんだよ」

軽い調子で言い返してみせる、少年の目は感情を感じさせない。仲間が目の前で死んだというのに、男の方も仮面のような表情を浮かべたままである。

その彼の後ろには揃いも揃って黒いスーツに身を包んだ人間がぞろぞろと並列していた。男もいれば女もいる。黒ずくめの見た目はまるで、悪の秘密結社のそれのようだ。順々に眺めているうちにウォルディは笑いだしたいような気持ちになる。こんな連中が、

（こんな馬鹿な連中が、玉座を狙っているなんて！）

いつかこんな日が来ることはわかっていた。自分のこと、一族のこと、仕事のこと。何も知らなかった幼い頃。アイジャが屋敷に連れてこられた日と、ユリシーズの存在。

ウォルディの頭の中を様々な彩りと共に、目まぐるしく渦巻き駆け

抜ける記憶。それにそっと意識を乗せて、少年は僅かに目を伏せた。

――はじまりはきっと。

ウォルディは考える。全ての綻びは、自分がこの世に生を受けた瞬間にはじまったのだ。

ウォルディ・レノ・ファンダルスはダンカの一人息子として一族の純血をその身に受け継いだ。母親は念動力を得意とする、強い力の持ち主――つまりは能力者である。ファンダルスのまごうことなき後継者となる少年の誕生を、一族は皆祝福した。祝いの席には組織の人間も参列した。

……一体その日、誰が想像しただろうか。嫡男となるその赤子が、重大な欠陥と共に生まれてくるなんて。

「……ウォルディ閣下。貴殿にこの組織を、任せるわけにはいかない」

男の声に現実に引き戻される。顔を上げれば立ち並ぶ人間たちが、皆一様に何かを手にしていることにウォルディは気が付いた。その殆どはピラムと呼ばれる投擲用の槍で、中にはどうやって持ち込んだのか、七メートル以上にもなる長槍を持っている者もいる。

最もらしい理由を付けて立ちはだかる、この男は謀反を起こそうとしているのだった。革命という名の下剋上。組織の世継ぎを殺すためにわざわざここまでやって来たこの刺客こそが、ウォルディの真の敵だった。

男にとってはこの程度の重装備、当たり前のことなのだろう。彼は今から神を殺すのだ。ファンダルスと言う名の不文律を、ついにその手で壊そうとしている。

「――ダウマン子爵。俺を殺して、どうする」

自分の部下と仲間を引きつれて孤島くんだりまでやってきた、それに敬意を込めて呼んでやる。男はぱっと上げた顔を引き締めて、凛と声を張った。

「ファンダルス亡き後は我らの正義で、カーマロカを導くのみ。ウォルディ継嗣殿下には舞台を降りていただこう」

「……くっ」

「――？」

「……ふ、あは、ははははっ」

限界だった。ついに我慢できなくなってウォルディは、片手で顔を覆いながら笑い声を立てる。目尻に涙が浮かぶほど笑って笑って、ようやく治まった頃にはダウマンが気味悪げに少年を見つめていた。こんなに笑うのは初めてだ、とウォルディは思う。どうやら自分の一世一代の大仕事は、無事その役目を果たしていたらしい。

――自分こそが一族の継嗣だと思わせる、その芝居は。

「可哀想に。そうかお前、アイジャを知らないんだ」

「……何です、それは」

訝しげに問い掛けるダウマンの、瞳は動揺を隠し切れていなかった。ウォルディは少しだけ良い気分になって口元を綻ばせる。説明してやっても良いかもしれない、と思った。どうせ彼らはアイジャの所に辿り着く事など出来やしないのだ。わざわざ罠を張った部屋で待っていたウォルディが、その命に代えても始末するつもりだったから。

「……ドン＝ファンダルスが寵愛している娘を知っている？」

言いながら少年はその脳裏に、もう何百と見た光景を思い描いた。
煉獄が本陣を置いている古い洋館、ファンダルスの屋敷の奥。人目には触れない一族だけの秘密が、ある日その部屋にしまわれた。
アイジャ・ラ・ファンダルスは、ダンカとその愛人フローラとの間に生まれた子供だ。彼女が生まれると同時にフローラは死んだらしい。アイジャはダンカに引き取られ、祖父ラディーニの下で育てられることになった――ウォルディが、四つの時だ。

当時、一族は一つの問題を抱えていた。嫡子ウォルディが生まれ持ったはずの能力を、全く発現することができなかったのである。
影で欠陥と囁かれる毎日が続いた。アイジャの能力が判明したのは、そんなある日。

（ファンダルスにとっては、嬉しい誤算だったのだろう）

アイジャは一族が代々受け継いできた煉獄の炎をその身に宿していたのである。母フローラはただの人間で、力を持った赤子の出産に耐えきれなかったのだ。
――なんてことだ、と一族の人間は言った。
ヒトと能力者のハーフであるアイジャが能力（ちから）を持ち、身体に純血を巡らせるウォルディが“できそこない”なんて。

アイジャはウォルディに代わって世継ぎの役を言い渡された。余りにも幼かった本人は、ことの重大さに気付いてなどいないだろう。
反逆者の手を恐れた一族は、来たるべき時まで代役を立てることにした。ウォルディに偽者の継嗣を演じさせ、アイジャの存在を下の者に隠したのである。
同時にアイジャには、強力な“守護者”が与えられた。

「まさかその娘は――ルイン公爵の妹君か」

「そう、義妹（いもうと）さ」

ウォルディは軽やかに笑う。そう、アイジャの存在は極秘だった。例え知ったとしても、あの少年の妹という話で口裏を合わせてあったのだ。

――アイジャに与えられた“守護者”。それこそが、ユリシーズ・ルインである。まがい物の兄として、それから教育者として。総帥に命じられて以来ユリシーズはずっと、その役をこなして来た。……少年がカーマロカに従事している、唯一の理由だ。

「ユリシーズも可哀想な身の上でね。あれはアイジャの義兄（あに）だが、兄ではない」

「……は？」

困惑するダウマンに、そこまで説明してやる気は起きなかった。男から視線をそらし、そのままウォルディはどこか遠くを見つめる。ユリシーズもまた、哀れなファンダルスの異分子だった。彼の身体に流れるその血はたった八分の一。

前述したように現総帥の父には弟がいたが、彼もまた一族から分離した先で家庭を築いたのである。その家に生まれた一人息子ウィーノは、言うなれば総帥ラディーニの従兄弟（いとこ）だ。

そのウィーノが成長し妻を娶って子を成す。ダンカの“はとこ”にあたるその子はサロマと名付けられ、やがて美しい一人の娘になった。

――ユリシーズはそのサロマと、フレデリック・ルインという男との子である。

ファンダルスの直系から遠く離れたこの少年の誕生は、再び一族にとって予期せぬ事態を巻き起こした。

隔世遺伝、先祖返り、呼び名は様々だ。原因は一切不明だがユリシ

ーズには、人間には無い能力が備わっていたのである。――それは、全てを焼き尽くす業火だった。

（可哀想なユリシーズ）

ユリシーズとウォルディの関係は、はとこの子同士、ということになる。親戚と呼ぶにはもう、余りにも遠い。

母サロマはユリシーズの出産と共に死んだ。母親だけではなくその父も、特殊能力の片鱗すら見られないただびとだった。

仕事で家を空けてばかりの父親に育児などできるはずもない。生まれた子は名前すら与えられずに施設へと預けられた――少年がそこを根こそぎ燃やしてしまう、その日まで。

その後彼がカーマロカに出会うまでの経緯を、ウォルディは知らない。知っているのはファンダルスの力を認められ、アイジャを護ることを命じられたという事実だけ。

現カーマロカ首領・ラディーニは自分の父の名――ウリクセス、といった――をとって、少年にユリシーズと言う名を与えた。どちらもギリシアの英雄、オデュッセウスの意だ。

「アイツが本当の兄なら、良かったのにね」

類い稀なる力を持って生まれたユリシーズ。彼が本当にアイジャの兄ならば、カーマロカの後継者ならば、万事上手くいっただろうに。

「……先程から仰る意味がわかりませんが」

イライラと指先を擦るダウマンに、いっそ哀れみの感情すら抱くことが出来た。ウォルディは優しく諭すように唇を開く。

「“欠陥品”の俺が本当に、一族の継嗣だと思ってるのかい？」
「……、まさか」

目の前に立ち尽くす男の、みるみる色を失ってゆく顔を見ていた。
ウォルディの片眼鏡がきらりと光を反射する。
極度に偏った視力。これも自分が“欠陥品”だからなのだろうかと、
ウォルディは自嘲した。

「そのまさか、さ。ファンダルスの継嗣は俺じゃない」
「な……」
「アイジャなんだよ……っ、アイジャ・ラ・ファンダルス……！」

貴様！！
ダウマンが叫び声を上げた。騙していたのか、口汚く罵る男にウォ
ルディは冷ややかな視線を向ける。
騙されていたことに気付きもしない間抜けな連中。ファンダルスに
歯向かえば骨一つ残らないだろうに、その圧倒的な力量差を越えら
れると思っているのだ。

「もう貴様なんぞに用はない……！」
「俺のことは、殺していいよ」

本物の継嗣を探せ！　ダウマンが部下に命を飛ばすタイミングに被
せてウォルディは声を上げた。全員が弾かれたように少年を見つめ
返す。

「でも、お前たちも道連れだ」

がちゃり、鈍い音を立てて数多の槍が切っ先を少年に向けた。ウォ
ルディはそれを穏やかな心地で見やる。

予想よりも人数が多かった。けれど、失敗ることは出来ない。
――こんな時に、あの力があれば。何度も考えてきたことを、最後にもう一度だけウォルディは想う。ユリシーズのように、アイジャのように、全てを焼き尽くす炎があれば。こんな連中、相手になどならないだろうに。
何の力も受け継いではくれなかった己の身体が疎ましかった。純血を身に流すにも関わらずウォルディは、普通の人間と何ら変わらないのだから。

「――――殺せ！」

男の声が響く。煌めく刃の先が向かってくるのを感じながら、ウォルディは静かに目を閉じた。
くだらない争いに終止符を打とう。一族の行く末になど興味は無いが、これをきっかけに誰か気付けば良い。
正義も悪も表裏一体なのだ。紙一重の上に成り立つ関係を定義するのは難しい――正義を振りかざす組織でこんなことが起こるのだから。

（あとは頼むよ、ユリシーズ）

籠の鳥を、逃がしてあげて。

――――少年達のいる部屋から、轟音と共に火柱が上がった。

第五章《迷霧》：優幻挽歌（1）

何も見ていない、
聞いていない、
知らない、ふり。

でもたった一つ、
覚えていることがあるよ。

あれは子守唄じゃなくて、

柩を挽きながら謡う歌。

「でも、アイジャは好きよ」

この歌が好き。
ねぇ、おにいさま。

――――――ドォォォォォン、

低い大きな地響き。弾かれたように顔を上げた駿は咄嗟に辺りを見回すが、閉鎖された狭い校舎内ではどこが音源かもわからない。かなり大きい、と駿は思う。空気がびりびりと揺れる、地面も揺れる。地震が発生した時のようにカタカタと共鳴する壁に手をついて、焦る気持ちを落ち着かせた。

（……畜生、）

どこかで爆発でもあったのだろうか。駿が耳にしたそれはよくマフィア間抗争で使用される、手榴弾やバズーカ砲の爆音に良く似ていた。

悩んだ末、少年は音が聞こえた方向へと足を向ける。千瀬を見失ってからもう随分な時間が経っていたが、未だその姿は確認できないままだ。

――あの【ゴスペル】なる人間が爆弾を所持していたのかはわからない。けれど万が一そうなら。千瀬が爆発に巻き込まれていたとし

たら。

「……ヤバイな」

独りごちて駿は駆け出した。

時刻はもうじき正午を迎える。今日は時間が経つのが、やけに遅い。

＊

凄まじい轟音と共に地面が揺れて、ロアルは前につんのめった。一体何が起こったのかわからぬまま顔を上げれば、前方では同じ髪色の妹が派手に転んでいる。受け身をとってうまく床を転がったロザリーは目を丸くすると、ぱっと東に目を向けた。衝撃と混乱の中一瞬で音源を突き止めたのだろう、こういう感覚は昔から鋭いのだ。

「……お姉ちゃん、」

あたし、行かなきゃ。

逃げ続けていた妹がようやくロアルに向けた言葉はそれだった。銀色の瞳が見つめ合いお互いの姿を映す。

口を開けば飛び出しそうになる言葉が、ロアルには山ほどあった。思い止まることが出来たのは今の状況と、目の前の少女の意志を知っていたからだ。

ぎゅっと目を閉じてから、ロアルはゆっくりと唇を開いた。母国の言葉を話すのは久しぶりだ。声が震えなければ良いと、思いながら。

「……行っておいで」
「――――うん」

お姉ちゃんは部屋に、帰ってね。
指差されてはじめてロアルは、自分が寮棟のすぐ近くまで来ていたのだと知る。妹は逃げるふりをして結局、姉を安全な場所まで誘導していたのだ。

……いつも、そうだった。ロザリーは必ず、ロアルのことを第一に考える。

（……あの子、まだ“あれ”を持ってた）

身を翻して駆けてゆく、どんどん小さくなる背中を見つめながらロアルは思う。
――可哀想な妹。
まだあの忌まわしい儀式の呪縛から、解き放たれていないのだろうか。

＊

その場所には存外早く辿り着いた。――が、そこから先へはそう簡単に進むことはできないらしい。
駿は思わず眉を寄せた。目の前に広がる瓦礫の山は、きっと教室の壁だったものだ。立ち昇る煙は未だおさまっておらず、かなり視界が悪い。

（派手に壊しやがって）

威力調整済みの爆弾だったのだろうか、その部屋以外に損傷が見られないことだけが救いだった。下手すれば校舎ごと崩れ去っている所だ。

――考えながら目を凝らしていた駿は、刹那息を呑んだ。

「……チトセ！？」

土埃で霞むその先に、黒い人影が見えたのである。手足を地面に投げ出して俯せになる人間の形。

まさか。

額に汗が伝ったのを感じながら少年はそれの元へと近付いた。瓦礫を退かしながら進む作業に時間を食って舌打ちする。

「……違う、」

ようやく倒れている人間の傍まで寄って、駿は思わず安堵の息を吐いた。千瀬ではない。気付いて同時に顔をしかめたのは、それが死んでいることに気が付いたからだ。

なんだこれ。呟いた駿の声が響く。

「……マジで、なに」

死んでいたのは細身の女で、黒いスーツを身に纏っていた。色合いがルシファーの仕事着に酷似していて紛らわしい。落とそうとした溜め息を次の瞬間、少年は引っ込めることになる。ぎょっと目を見開いた。よくよく辺りを見回せば、その場に倒れているのは女一人だけではなかったのだ。

……屍累々。女と同じような出で立ちをした人間たちが、崩れて石塊となった物の合間に折り重なるように倒れている。若者から初老の男まで、その年齢は様々だった。爆風の為か腕がもげている者もある。

「……わけ、わかんね」

駿は呆然と声を落とした。何処からどう見ても生徒ではない、彼らは一体何者なのだろうか。

全ての人間が爆発の被害者なのかと思いきや、それも違うらしい。異なる死に方をしている一体を見つけ、駿はうぇ、と潰れたような音を洩らした。

完全に首が飛んでいる。すっぱりと切断されたそこは赤黒く変色していたが、刃物の切り口とは少し違う気がした。千瀬がやったわけではないのだろう。

――その死体を避けてまた一つ瓦礫を動かした、駿の身体が瞬間硬直した。

「……な、っ」

教室だったその場所の、一番奥。駿の目に映ったのは良く知った、探していたはずの少年だった。唯一形を留めていた奥の壁に背を預けて座り込む、その服がおびただしい真紅に染まっている。

「ウォルディ……ッ！！」

まるで身体から生えて来たかのように。

少年の腹部には、純白の槍が一本突き刺さっていた。

第五章《迷霧》：優幻挽歌（2）

――――“ウォルディ”

（だれ？）

短い夢の合間にふっと意識が浮上した。血を流しすぎたのだろう、目は霞み喉が焼けるように熱い。

ウォルディはゆるゆると瞬きを繰り返した。生理的な涙が零れて少しだけ、視界が明るくなる。瞳が目の前の人影を捉えて、少年の口元が僅かに弛んだ。

どうしてこんなところにいるのだろう。自分の名を繰り返し呼ぶこの少年が、最後の糸を繋ぎ止めているらしい。

「しゅん、……くん」

「ウォルディ！？」

捻り出した声はざらざらと擦れていた。ウォルディが意識を取り戻したことに気付いた、駿はもう一度その名を呼ぶ。少年の顔は青ざめていて、らしくないな、とぼんやりウォルディは思った。

「お……まえ、何やってんだよ……っ」

肩を掴んでいる手が弱い。朦朧とする意識をどうにか引き止めてウォルディは、目の前の少年に目をやった。

駿が何か喋っている。怒っているのだろうか。

「お前わけわかんない事ばっか言い逃げして、探しても見つかんねーし、やっと見つけたと思ったらなんで……っ、なんでこんな死にかけてんだよ」

しにかけて、いる。駿の言葉を頭の中だけで反芻して漸く、ウォルディは自分の置かれた状況を細部まで把握した。

嗚呼、と嘆息する。

（そうだ……ひとり逃がした）

自分に致命傷を負わせた人物を脳裏に描き、始末し損なったことを思い出した。だが、あれ一人だけならばどうにかなるだろう。役目は無事に果たせたのだ。

――なぁコレ抜いて良いの？

混乱しているのだろうか、震えるような声が聞こえた。これ、とはきっと槍のことだ。ウォルディの腹に深々と刺さったままの。

他人事のように考えるウォルディの一方で、駿は身体の末端から血の気が引いていくのを感じていた。突き付けられた事実に腕が強ばる。どうにかしなければ、その言葉ばかりが頭をぐるぐると回った。

「なぁ、どーすりゃ良いの？　止血とかってどーやんの、俺、こーゆー時どうするのか知らないんだ。殺すばっかで助けるやりかたなんて全然……っ」

「……いらない、よ」

シュン君。

呼ばれて駿はその目を際限まで見開いた。何言ってんだ馬鹿野郎！

飛んできた罵倒にウォルディは微笑みを浮かべる。

「ほっといたら死んじまうだろーが！」

「……ん。良い、もう……じゅうぶん、だから」

だから、最後に一つだけお願いを聞いて。

ゆっくりと言えば駿は開いていた口を閉じて押し黙る。納得したわけではなく、二の句が次げなくなったのだとウォルディにもわかった。

「ゲーム、を、したよね。約束……がまだ一つ、残って」

「なに……いってんだよ」

確かに二人は以前ゲームをした。なんて事のないチェスだ。駿が負けて、ウォルディの言うことを三つ聞くという“約束”を。

――でもこんな時に。そう続けたいだろう所を無視して、被せるようにウォルディは言葉を繋げる。聞いてくれるよね？　問えば駿は逡巡した後、俺に出来る範囲内なら、と小さく答えた。

十分だ。得た応えに満足してウォルディは笑う。

「い……と、が」

「え？」

「いもうと、が。いるんだ」

初めて口に出した響きは柔らかく、どこか切なかった。馬鹿だったなぁ、思いながらウォルディは微笑む。

さっきも夢を見ていた。兄と呼ばれる自分と、幸せそうに笑う彼女の情景だ。実際は見えない壁に阻まれて、あの娘がウォルディに笑いかけることなど滅多に無かったように思う。
ダンカの正妻アリアドネ――ウォルディの母だ――は愛人としてのフローラを快く思ってなどいなかった。当然娘であるアイジャにも冷たくあたり、継嗣の座が完全に移行してからはその態度もより酷いものになる。
アリアドネがアイジャに一度だけ歌ってやった子守歌は、挽歌だった。アイジャの知る歌は唯一それだけ。
可哀想な少女に対しウォルディは、兄と名乗ることを許されていなかった。

「伝えて、」
「……っ、なんて？」
「あいつ、何……も、知らないから。教えて、やって」

お前は生きなくちゃいけないんだ、って。
言い切った瞬間に肺が嫌な音を立てて鳴った。どうやら傷が達していたらしい。同時に血を吐くのを見て焦ったように声を上げた駿を、やんわりとウォルディは押し留めた。

「おい……ッ」
「兄、らし……ことなん、て、一度も」
「ウォルディ！」
「で、も、大切だった……」

半分しか血は繋がっていなかった。自分に無いものを全て、持っていた。憎く想った事は何度だってあるけれど、それでも。
たった一人の、大切な妹。

「ごめん、ね」

最後に泣かせてしまった少女と、巻き込んだ目の前の少年へ。二つ分の謝罪を唇に乗せてウォルディは瞼を下ろす。もう目を開けていたところで、白くぼやけて何も見えなかった。

駿が腕を掴んでいるが、感覚がひどく鈍い。神経の伝達が上手くいっていないのだろう。

「今日、は……少し、寒いね……」

それからぽつり、ぽつりと世間話のような他愛無い言葉を口にするウォルディを、随分長い間駿は見つめていた。時々相槌を打ちながら、その身体がどんどん冷たくなってゆくのを。

自分達が命を摘み取る時とは違う、緩やかな死には慣れていなかった。それでも駿が目を逸らさなかったのは、ウォルディ自身がそれを享受していることに気付いたからだ。

ウォルディは、死にたいとも生きたいとも言わなかった。そうしているうちに段々と会話の間隔が開いていって、ついには一言も喋らなくなって。

「……ウォルディ？」

途絶えた呼吸音と鼓動を確認して、駿はぎゅっと拳を握り締める。伏せられた儘の睫毛の先、かけられた片眼鏡には傷が入っていた。それをそっとはずして、ポケットにねじ込む。

突き刺さった状態の槍に手を掛けて力強く引き抜けば、鈍い音と共にずるりと抜けた。それを床に投げ捨てて立ち上がった駿の背後で刹那、ガラリと石の崩れる音がする。

「誰だ」

鋭く問うて振り返った駿は、自分と同じ背格好の人影を見とめて瞠目した。どうして、こんな所に、

「その声、武藤……ッ？　お前そこにいんの！？」

「播磨……！？」

第五章《迷霧》：優幻挽歌（3）

「ウォ、ル……？」

瓦礫の山を掻き分けながらやって来た播磨亮平（はりまりょうへい）は、一言呟くなり言葉を失った。彼の揺れる瞳にはたった今そな命を終えた、顔馴染みの少年が映っている。

「な、んだよ……！　何だよこれ……ッ！！」

少年が唇を震わせる。

この部屋が大破した瞬間の爆発音は孤島一帯を震わせ、勿論生徒達の耳にも届いていた。得体の知れない恐怖に怯えて皆部屋に閉じこもっている中、亮平は帰ってこないルームメイト――駿を捜しにやって来たのである。

校舎内のあらゆる所を捜索して、残るはここだけだった。まさかと、思ったのに。

「ウォルディ……ッ、助けなきゃ、武藤……血が、ウォルが……！」

「……播磨」

「保健医呼んで来る……！」

「播磨ッ！！」

鋭い声に亮平は身体を強ばらせた。駿を真直ぐ見つめる、目元が赤く滲んでいる。

爆発の跡も大量の血も、普通に生きていれば目にする機会など無いものだ。動揺を顕にする亮平の反応こそが通常なのだろう――思いながら駿は、静かに息を吸い込んだ。

「――もう、死んでる」
「嘘だ……っ」

ずるずると床に座り込んで俯く、亮平自身も本当は気付いていたのだろう。ウォルディがもう息をしていないこと。その身体から温もりが失われていること。

「何でだよ、こんな……説明して……武藤……！」

ぎゅっと拳を握り締める、亮平の瞳から一雫の涙が零れ落ちた。床に落ちたそれを駿は見つめる。
ことのあらましを全て亮平に話すことはできないし、情報量も圧倒的に足りなかった。悪ィ、と駿は呟く。説明はできないという意味と、自分にもわからない部分があるのだという意味を込めた謝罪だった。しかし亮平はそれに、ゆるゆると首を横に振って返す。

「……もう、隠さないでいーよ」

言って顔を上げた、亮平の瞳は赤く充血していた。その視線が何かを言うように真直ぐ向けられて駿は眉を寄せる。

「武藤は、何か知ってるんだろ……」
「播磨――？」
「だってお前もウォルも、本当はここの生徒じゃない……！」

駿は目を見開いた。どうして。擦れた声で問えば亮平は、ナメんなよと小さく笑う。

「この“学園”に中途入学するような奴はさぁ、どーにもなんねェ

事情を抱えてるか、何か別の目的があるかのどっちかなの。寝食共にしてんだぜ？　気付くだろフツー」

剣道の時のあの子も、そうなんだろう？

そこまで言われてしまっては、最早隠し立てする意味は無かった。

駿は深く息を吐き出すと、そーだよ、と投げ遣りに答える。

「やっと白状したな……」

「……いつから」

「最初に変だと思ったのはけっこー前。武藤、たまに夜中に部屋から出てただろ」

起きてたのかよ。呟いて駿は苦い顔をした。かなり初期の段階から、亮平は駿の動向を気にしていたらしい。

「あと、そのネクタイ。似てるけど、学園指定のと違うだろ？　変な厚みがあるし」

「……よく見てるな」

「実は武藤ってけっこー目立つんだぜ」

「肝に銘じとく……」

「はは」

笑って、直後亮平はぐっと言葉を詰まらせた。見渡してみれば周りには幾つもの死体が転がっているのである。込み上げた吐き気を掌で押さえるようにして少年は、ウォルディは、と呟いた。

「ウォルディのことは、冬吾から聞いてた」

「柳原？」

「ん。時々いなくなるんだって――そうだ冬吾――冬吾も、ウォルのこと捜してるんだよ……」

ここに来るかもしれない。亮平の言葉を聞いて駿は唇を噛んだ。これ以上この部屋の惨状を、一般生徒に見せるわけにはいかない。

上に連絡を取ることができれば、何とかこの惨状を片付けるために人員を割くことも出来るだろう。適当な遺体を一つ引き渡し、詳細を調べさせる必要もある。

考えるべきは、何を優先するかだ。無論駿にとって第一はルシファーだが、ウォルディとの約束も心に引っ掛かりを残していた。妹、とは誰のことを指すのだろうか。

……伝えて、やりたい。駿はそれを己の妹と重ね合わせて思う。

「……シュン！」

その瞬間だった。

ぱっと目に鮮やかな銀髪が飛び込んでくる。死体をひらりと飛び越えてやって来たロザリーは亮平の姿を認めて一瞬瞠目した後、慌てて口をつぐんだ。一般生徒がいるとは思っていなかったのだろう。

駿が首を横に振って隠す無いことを伝えると、少女はその唇を震わせる。ロザリーにしては珍しく呼吸が乱れていた。

「シュン、“地下牢”に戻って」

「？、“ゴスペル”とか言う奴はどうなったんだよ」

「わかんない、けど……っ、たった今連絡があって、大変なの、チトセが……！！」

「――――！？」

駿の身体からざあっと音を立てて血の気が引いた。姉と別れてここに辿り着くまでに召集を受けたのだという、ロザリーの顔色はすっかり青ざめている。泣き出しそうになりながら少女は、どうしよう、

と繰り返し呟いた。

「どうしよう、ねぇシュン、あたしのせいだ……！」
「落ち着け！　詳しい話は聞いてないのかよ」
「戦線を離脱させるって、それだけ……！　どうしよう、何かあったんだよ……っ」
「……ッ、すぐ行く」
「武藤っ！」

踵を返そうとした駿の背を追い掛けるように亮平が声を上げた。その切迫した響きに思わず立ち止まった、駿を二つの瞳が真直ぐに見つめている。

「俺も行く」
「……播磨ッ！　遊びじゃねぇんだよ、」
「知ってる！！」

キッと正面から見据えてくる亮平の表情を見れば、冗談ではないことなど容易に理解できた。それでも、連れて行くわけにはいかない。駿は断ち切るようにお前は戻れ、と言い放った。

「柳原と一緒に寮に帰ってろ。ウォルディの事はまだ言うなよ」
「何でだよ！　友達が死んでんだぞ、冬吾だって黙ってるもんか！！」
「これ以上ダチが死ぬのを見たくなけりゃすっこんでろって言ってんだよ！！」

とうとう怒鳴り声を上げた駿を見て亮平は身体を強ばらせる。唇を一度開いて閉じる、その隙に駿は追い打ちを掛けた。

「俺の仕事だ。――お前には、関係無い」
言い過ぎだ。わかっていても訂正はしなかった。冷たい言葉を吐く少年をいつもなら真っ先に諫める、ロザリーもただ黙って成り行きを見ている。それが正しい行為だとわかっていたからだ。本来ならば相容れることの無い世界の住人同士。仮初めの出会いに、情など必要ないのだから。

「……確かに、俺には何もわかんねー、けど」

諦めてくれるだろうと。思っていた駿は、次の亮平の言葉に目を見開いた。

「けど、武藤だって俺の友達（ダチ）じゃんか……！」

肩を震わせる亮平の、精一杯の叫び声に駿は身体の動きを止めた。一瞬脳内が真っ白になって、次いでじわじわと理解する。信じ難いことだった。目の前の少年が吐き出した言葉は駿にとって、無縁だと思っていた世界の。

（ああ、お前は）
「理由は何だろーと、ダチをほっとけるわけないじゃんか……！」
（そんな風に、言うんだな）

ずりぃよ。
ぽつりと落とされた呟きに、亮平はぱちぱちと目を瞬かせた。俯く駿を覗き込むようにすれば顔を逸らされてしまう。

「……武藤？」
「……から」
「え？」

「頼む、から」

頼むから、安全な場所に。

請うような響きに今度は亮平が目を見開いた。強気で時には高圧的でさえあった駿が、懇願するように手を握り締める。

どうしたの武藤。問われても駿は、首を横に振ることしか出来なかった。

（俺は、馬鹿だ）

この場限りの、赤の他人だと言い聞かせてきたのに。播磨亮平という人間に生きていてほしいと思う自分に、少年は気が付いてしまったのだ。

「……俺は、怖いんだ」

「武藤、」

「お前が死ぬのが怖いよ、播磨」

――それは亮平の聞く、初めての弱音。

他人なんてどうなっても構わないと思っていた。駿の根底には一咲（いもうと）がいて、その上をルシファーという組織が覆って一つの世界を形成している。自分の役目を果たして、いつか妹を迎えに行く。それさえ叶うのならば、例え組織の仲間が死のうとも構わなかった。自分が生き延びれば、それで。

けれど千瀬に何かあったと知った時、駿は自分の身体が抉られるような感覚に囚われた。サンドラが死んだ時、苦しくて仕方がなかった。脱け殻になったウォルディの身体を見れば本当は、心臓の辺りが締め付けられたように痛む。

レッド・ハンズと呼ばれる部隊に所属し、自らを人殺しの化け物だ

と称して生きてきた。けれど本当はずっと、駿は一人の少年であり続けていたのだ。あたし達は人間だと言った、千瀬の言葉を思い出す。冷徹になるにはまだ、あまりにも若すぎた。
駿は亮平を真直ぐに見つめる。こいつが死んだら俺は、きっと後悔する。きっと、悲しい。

「頼むよ、播磨」
「……しょーがねーなぁ」

諦めたように笑って立ち上がった亮平に、駿もふっと表情を緩める。次の瞬間には身を翻し、ロザリーと共に教室を飛び出した。千瀬の無事を願う駿の背を、亮平の声が追い掛ける。
帰ってこいよ“シュン”、俺たちの部屋で、待ってるから。

「良いの？　選ばれた“協力者”でもないのに、口止めしなくって」

音を立てずに疾走しながら少女が首を傾げる。揺れた銀髪に笑って、駿は静かにいらえを返した。

「良いんだ。……俺の、ダチだから」

第五章《迷霧》：謎を解いて（1）

ぷかり、ぷかり、
たゆたう、海中の水母のように。

『　約束を守って　』

柔らかな声が聞こえた。野原一面に咲き広がる黄色い花を、撫でるように揺らす風の中。
遠くで波立つ薄（すすき）も見える。尾花と呼ばれるに相応しい狐尾のような穂。それで漸く、季節は秋なのだと知った。

『　約束を、守って　』

もう一度聞こえた声に耳を澄ませる。誰、と問うても答えは返ってこなかった。この声の主を、知っている気がするのに。
黄金に輝く花絨毯の遥か向こう、一際大きく張り出した影は山だろうか。頂が白く化粧されている。雪だと気付いた、その青い裾とのコントラストに山の名を思い出した。
そうだ、あれは、

『　忘れまいぞ　』

（　な　、　に　？　）

『――この恨み、忘れまいぞ！！』

うわあぁぁぁぁ……ぁぁん、
一際大きな声が反響して空気を震わせた。脳を鷲掴んで揺らされている。ぐらぐら、世界が反転する。落ちていく。墜ち、て、

「――――――――――!!」

ぱか、と音がするほど勢い良く少女は目を開けた。長さなどわからない夢から唐突に引き戻された、視線の先には真っ白な天井が広がっている。
あれ？　思って首を傾げれば、自分がベッドの上にいるらしいことに気が付いてますます困惑した。
あたし、今まで何してたんだっけ。

「やぁ、目が覚めたかい？」
「……へ」

間抜け極まりない声を発しながら見つめた先、いつからそこにいたのだろうか、部屋の窓辺に一人の人間が腰掛けていた。逆光で良く見えないが声は若い。高くもなく低くもない、男か女か判別のし辛い澄んだアルトだった。

目を凝らせば段々とその輪郭が露になってくる。白人とも日本人のそれとも少し違う、褐色の肌は黒人ほどの濃さがあるわけでもない。瞳の色は黒だが、髪は相反するように色素が薄かった。ロザリーの髪色に似ている、とぼんやり思う。

見知らぬその人物は開いた足の間に手を置いて、にこりと少女に笑いかけた。丈の短いジャケットを黒のタートルネックの上に羽織っている。ポケットの沢山付いた緩いズボンを革のブーツに捻込んだ様は、傍から見ればまるで登山にでも行くように思えた。

「おーい、チトセ君？」

大丈夫？　どっか痛む？

名前を呼ばれたことに気が付いて、千瀬は慌てて顔を上げた。どうにも頭がぼんやりする。ひらひらと振られた手のひらを見ているうちに、視界だけははっきりとした。

「処置が早かったから、命に別状はないらしい。君の刀は僕が預かってるよ」

「かたな……？」

鸚鵡返しに呟けば、目の前の人物が背後から黒い物体を取り出した。かちゃかちゃと振られて、漸くそれが“刀”であることに気が付く。あ、どうも。礼を言いかけてふと千瀬は動きを止めた。一秒、二秒、三秒。

「……あ――――っ！」

叫んでしまってからばっと口を覆った。目を白黒させる千瀬を見て相手がクスクスと笑うが、それどころではない。
少女の脳裏に凄まじい勢いで記憶が舞い戻ってくる。
孤島の“学園”で任務に就いていた。【ゴスペル】なる少年を追って、駿とロザリーから離れたのだ。途中で見失ったが、代わりに新たな敵に遭遇した。敵、だとそう認識したのは、生徒が襲われていたからである。双子だった。戦いながら二人を逃がそうとして、それから、それから？

「あたし……何で」
「何で生きてるかって？」

割って入った声に思考を中断する。千瀬を見つめる二つの瞳が、すっと三日月の形に細められた。

「言ったろ、発見と処置が早かったんだ。あの島には“毒針”の娘がいたんだろう？　解毒薬があったんだろうね――運が良いじゃないか」
「毒……？」
「そう。君は速効性の毒を致死量ブチ込まれて、短時間だが生死の境を彷徨っていた」

事も無げに言われてぞっとする。確かに千瀬はあの瞬間、死の気配を感じていた。

「あぁ、心配はいらないよ？　もう体から有害物質は完全に抜けてるんだ。チトセ君の調子が戻れば、すぐにでも前線に帰してあげる」

ここは一応病院なんだけどね。言われて千瀬は納得する。白いシー

ツも天井も、どこか消毒薬の匂いがした。
帰らなくては、と思う。あの双子はどうなったのだろうか。敵は、仲間は、姉は？
手を開いて閉じて、繰り返し確認する。始めだけ僅かな痺れを感じたがそれもすぐに消えた。問題ない。
帰ります――――口にして顔を上げた刹那、千瀬はそのまま硬直した。

「……あの、」
「なんだい」
「ここ、何処ですか」
「だから病院だってば」
「そうじゃなくて……」

あの孤島に医療施設など、あるはずもない。意識を失っている間に搬送されたことなど、千瀬にも容易に理解できた。問題は、何処へ、ということだ。
千瀬の視界で含み笑いをする人物の奥、四角い窓に切り取られた景色が見える。墓石のように立ち並ぶ建物と遥か遠く、その高さ故に存在を主張する山があった。
白い帽子のような雪化粧。その名は千瀬でさえ知っている――そう、きっと日本人ならば誰でも。
まさか、と少女は呟く。

「まさか、あれ、富士山じゃ……」
「当たり前だろ、日本だもの」
「～～～～～っ！？」

しれっと投下された回答に、千瀬は声にならない悲鳴を上げた。何が、どうなって？

よもやこんな形で祖国に帰還するなどとは誰が考えるだろうか。絶句する少女の前からは、東京タワーのほうが良かった？　などと呑気な質問が降ってくる。いらえを返す気力などなかった。

富士山だ。頂上は雲よりも高い。考えてふと千瀬は首を傾げる。つい最近にもこの山を目にしたような、妙な錯覚に囚われた。

……そんなはずはない。思考を打ち消すかのように首を振って少女は顔を上げる。

「……あの、もう一つ良いですか……」

「ん？」

「……どちら様でしょうか」

「……。」

ぷッ。

風船から空気が漏れるような音の後、けらけらと盛大な笑い声が響き渡った。腹を抱えて身体を揺らす相手に、千瀬はますますわけがわからなくなる。

「あはははッ、マジ、今更ァ？」

「すいません……」

「別に良いけどー、ぷぷ」

ブラブラと足を揺らすので窓枠が鳴った。ひとしきり笑い転げた後、柔らかな形を維持したままの瞳が千瀬に向けられる。

「ルシファーの連中は、僕のことを“ゾラ”と呼ぶ――――情報屋さ」

第五章《迷霧》：謎を解いて（2）

「情報、屋？」

問い掛ければ、“ゾラ”と名乗ったその人物はにこりと頷いた。情報屋って何だろう、と千瀬は思う。八百屋とか酒屋とか、そういう類と同じなのだろうか。

「別に特殊な職業じゃないよ、名の通り“情報”を仕入れて売るんだ。時々はこうやって現場に出ることもある」

「はぁ……」

「一応これでも、腕は一流を自負してるんでね。どんなに金を積まれても気に入った仕事しか引き受けないけど――君の所属する組織は、僕のお得意さんなんだ」

「そう、なんですか？」

てっきりゾラもルシファーの組織員なのだと思い込んでいた、千瀬は目を瞬いた。

ではこの人物は、ルシファーから何か依頼を受けてこの場にいるということになる。言外に自分の仕事料が破格であることを匂わせる、ゾラは一見しただけでも只者ではない空気を纏っていた。

流石ロヴ、と千瀬は心の中だけで呟く。こんな人物まで、その懐に抱き込んでしまうとは。

「あ、言っとくけど僕が依頼を受けたのはお宅のボスの為じゃないから」

「え、」

「毎度毎度無茶な要求突き付けてくるのを、ルカの頼みだから仕方

なく聞いてやってるのさ」

心を見透かすようなタイミングできっぱりと言い切られた千瀬は、ぽかんとした表情を浮かべた。ロヴは関係ないんですか？　問えばゾラは顔を歪めて、さも憎々しげに吐き捨てた。

「当たり前だろう。僕はハーキンズの野郎が大ッッッ嫌いだ」

「そ、そうなんですか……」

誰があんな奴の為に働くかっての、さっさとくたばれハーキンズ。ぶつぶつと呪いの言葉を撒き散らしはじめたゾラから千瀬は心持ち、僅かだが距離を置いた。怖い。

一体何をしたんだロヴ……。あの男がこれほどまでに嫌われる理由を思い浮かべようとして、早々に千瀬は諦めた。心当たりは腐るほどある。大方余計なちょっかいでも掛けたのだろう――ロヴ・ハーキンズとは、そういう男だ。

「……さて、本題に入ろうか」

「本題？」

不意に引き締められた声のトーンに千瀬は顔を上げる。ゾラはその瞳をすっと細めていた。仕事をしようと、しているのだ。

「そう。あの島に帰る前に、君には僕の仕事に付き合ってもらうよ」

良いね？

有無を言わせぬ響きに押されるように、千瀬は一つ頷いた。

＊

「妹に会わせてください……っ！」

窓など一つもない閉鎖的な空間に連れてこられた途端、絹華とは引き離されてしまった。革張りのソファーで待たされて随分経つ。時計が無いのでわからないが、数時間はこの場所にいるような気がした。姿を消していたミクが戻ってきたのを確認した途端、百瀬は絞りだすような声を上げる。

この部屋は十中八九、ルシファーの仮住居となっているのだろう。ひんやりと流れ込む空気は牢のような嫌な湿り気を帯びていた。

「千瀬は、無事なんですか？　何処にいるんですか！？」

「……落ち着いてちょうだい」

あの眼鏡を掛けた男子生徒――の、フリをしていた者――に言われた言葉が脳裏を駆け巡っていた。焦燥と不安に押し潰されそうになる百瀬をミクは一瞥し、小さく息を吐く。

「私、あの子に何かあったら――っ」

「……ミク！！」

バァン、とけたたましい音を立てて開いた扉が百瀬の言葉を遮った。そこから勢い良く二人、少年少女が飛び込んで来る。驚いて目を見開く百瀬の前を少年のほうがつかつかと通過すると、ミクに掴み掛かりそうな勢いで詰め寄った。

チトセは？　少年の唇から紡がれた名前に百瀬は再度瞠目する。

「チトセに何があったんだよ」
「生きてるよね、ねぇっ？」

必死な様子の二人を見てふ、とミクは口元を緩めた。大丈夫よ。落とされた言葉に銀髪の少女が息を吐いて、そのまま床にへたりこんだ。

「そっちの彼女にも今から説明するけど――」
「そっちの？……げっ」

首を巡らせた少年と、百瀬の視線がかっちりと噛み合った。一瞬顔を引きつらせた彼の横では少女が目を瞬かせる。

「もしかしてアンタ……」
「チトセのお姉ちゃんだ……！」

そっくり！
目を輝かせて近付いてくる銀髪の少女は、見れば百瀬の知人に良く似ていた。まさか、と思う。けれど次の瞬間少女が自己紹介をはじめて、疑惑は確信へと変化した。姓が同じだったからだ。

「チトセのお姉ちゃん、お名前はなんてゆーの？　あたしはロザリー。ロザリー・E・ウィルヘルム。こっちはシュンって言うのよ」
「……ももせ、です」
「馬鹿、なに呑気に紹介し合ってんだよ」

鋭い駿の声でロザリーが引き下がる。少女の朗らかな空気に飲まれ掛けていた百瀬も本題を思い出した。

「説明、って」

「……まず紹介するわね」

入って、とミクが声を掛けたのと同時、奥の扉が小さく軋んだ。現れた見知らぬ人影に臨戦態勢をとる、駿とロザリーのそれは条件反射に近い。

「……誰だ？」

「絹華！」

短く問い掛けた駿に答えるように、その名を呼んだのは百瀬だ。静かに部屋に入ってきたのは数時間前に別れたきりの友人、鮎村絹華だったのである。

絹華は百瀬に笑顔を見せた後、駿とロザリーに向けて一つ頭を下げた。それでも駿はまだ険しい表情を浮かべているし、ロザリーは咄嗟に構えた拳銃を下ろせずにいる。

「銃をしまって。アンタもナイフから手を離しなさい、シュン」

「……ミク、こいつは？」

「チトセの命の恩人」

渋々腰の刃物から手を離した駿は、与えられた答えに目を見開いた。

「何だって？」

「この子はキヌカ。得意分野は毒薬の調合ね。今回の任務の為に一足先に“学園”へ潜入していた“擬似生徒”よ――階級は《ソルジャー》。アンタ達と同じ、ね」

驚いたのは駿だけではなかった。突如現れた新たな仲間にロザリーは目を白黒させていたし、百瀬は絹華という少女に添付されたプロフィールに絶句する。

もう、ただの生徒では無いことはわかっていた。けれど突き付けられた事実はやはり、何処か現実味に掛けている。
黙っていてごめんね。絹華の唇が、小さく動いたような気がした。

「……ちょっと待てよ。恩人？　毒薬って」

暫し放心していた駿がはたと声を上げる。漸く冷静に頭が回るようになった百瀬もまた、その事実に気付いて真っ青になった。

「薬にやられたのか？　チトセが！？」
「だから大丈夫だってば。毒を識るものは毒を制するの――すぐにキヌカが解毒にあたったから問題ない。でしょう？」
「ええ。直ぐにでも動けるようになるかと」

目だけで尋ねられて絹華は頷いた。それにほっと駿が息を吐く。しかしすぐにその表情はまた険しいものになってしまった。

「じゃあ何で戦線離脱なんて――つーかアイツ今どこにいんの」
「日本よ」
「日本！！？？」

何でそーなるんだ！？
驚愕に染まる駿の傍らで、百瀬もまた仰天した。日本、なんて。
一応この学園は日本の学校ということになっているが、所在地のあやふやな孤島では怪しいものだ。日本、と言い切るからには日本列島を――自分達の祖国として確立したあの場所を指すのだろう。二度と帰ることはないと、心に想っていた土地。

「日本でなにするっつーんだよ」
「ちょっと仕事を、ね」

「――それについては私から説明するわ」

それまで聞こえなかった、静かな声が降り注いだ。突如現れた人物に全員が視線を注ぐ。

ミクが呆れたように一つ笑った。

「また突然現れて――お帰り、ルカ。いつ戻ったの」

「ついさっきよ」

にっこりと、ルカ・ハーベントは淡い笑みを浮かべた。

第五章《迷霧》：謎を解いて（3）

状況を把握するために話をしたいのだと彼女は言った。それを叶えるために新たに数人、百瀬の“仲間”である女生徒達が呼び集められる。

駿とロザリーと絹華、三人で手分けして迎えに行った結果の一、飄々とした態度でやって来たうるきは“地下牢”を見ても動じなかった。それどころかこの珍妙な隠し部屋を面白がっている様子すら見える。先に来ていた百瀬を見てもありゃ、とおどけて笑うだけの彼女の背後からはしかし、緊張した面持ちの顔が二つ覗いていた。愛と沙南だ。一常識人である二人にとってこの空間は異界そのものなのだろう。

絹華に手を引かれてやって来たのは双子の片割れ、翠子だけだった。薫子は先の襲撃で精神が参ってしまったのだろうか、部屋で休んでいるらしい。彼女に付き添うと申し出たロアルの――ロザリーの姉の姿も、ここにはなかった。

「座って」

ミクの声に一同は視線を下にやったが、どう見ても人数分の椅子は無い。仕方があるまいと冷たい床に腰を下ろしかけた瞬間、がこん、と鈍い音が響き渡った。

――床が、動いている。

「！」

「わ」

「ぎゃっ」

「……嘘だろ」

驚愕と感嘆と、ほんの少し呆れの混じった声が上がった。ピシリと走った切れ目にそって綺麗に陥没してゆく床と、入れ替わるようにして椅子がせり上がって来たのだ。機械仕掛けの作動する重低音が響く中、完全に姿を現した時には立派な会議室が完成していた。美しく円を描く椅子と、中央に長テーブルが一つ。

ほら早く座んなさい、何事もなかったかのように促されて一同は着席した。うるきは輝かせた目を、駿はしかめた眉をそのままに。

一番始めに済された事は、鮎村絹華の正体を全員に知らせることだった。少女たちは次々に目を丸くしたが、最終的には納得した様子を見せた。浮世離れした様子から薄々、何処か違うのではと気付いていた者もいたらしい。やっぱりね、と誰かが呟いた。

「内緒にしてて、ごめんね」

「良いんだよ、絹は百瀬を守ってくれたんだもの」

申し訳なさそうに謝罪を述べる絹華に柔らかな言葉を掛ける、愛は言いながら百瀬のほうを盗み見た。

思い出したのだ――アイジャの部屋を訪ねた際に、一度だけ見た黒髪の少女がいる。誰かに似ていると思った。そう、この黒沼百瀬に。

（――アイジャ）

彼女に何があったのだろう。心臓の辺りが締め付けられるような心地がして、愛はぎゅっと掌を握り締める。

「……武藤サン、」

まだ会議らしい物の始まりは見えない状態だったので、ひそひそと

話し掛けられた駿は顔を上げた。意図した事ではないが、隣にはうるきが座っている（反対隣はロザリーだ）。うるきは眼鏡を一度ずり上げてから、心持ち顔を駿に近付けた。

「なに？」

「アイジャ、って子については何かわかったんデスかネ？」

「……」

……やっべ。

そこで漸く駿は当初の自分の目的を思い出した。ごたごたと様々なことに巻き込まれているうちに見失った、アイジャ・ラ・ファンダルスについて調べよとの命令である。

“カイ”なる人物から伝令を受けた後、このうるきと――主に東海林愛から、アイジャについての話を聞いたのだ。

怪しいかどうかで言えば、間違いなく黒。しかしルシファーの敵なのか、“オリビア”との関係は何なのかは掴めていない。

（……つーかルカは帰ってきてるし）

「どうだったんデス？」

「……それが、まぁ」

「ちょっと！　もしかしてなーんにもわかってないの!?」

うるきの向こうから愛の声が飛んだ。沙南がそれをたしなめるのも聞こえる。うるせェ忙しかったんだよ、言い返してやりたいのを堪えて駿は頭を押さえた。

後は自分がやるからと、有無を言わせず冬吾の部屋に三人閉じ込めていたのだ。その冬吾も爆発の際は少女達をおいてウォルディを捜しに出た。

彼女たちからしてみれば、動くに動けない状況を強いられてやきも

きしていたのだろう。悪かったとは思う。

「オリビア、って何なの？　アイジャは何処に行っちゃったの？」

「……わかんねー」

「どうしてあの子、先生を……」

どうして、殺したの。

すっかり混乱した様子の愛を宥める手立てはなかった。アイジャが行方知れずになって、そうこうしているうちに友人達が襲われ始めたのだ。落ち着いていられるはずはない。

「――――ブリックマンを殺したのは、アイジャなのね？」

突然割って入った声に、少女たちはぴたりと喋るのをやめた。波紋のように広がった静けさの向こう側で、問いを投げ掛けたルカが笑っている。

「……はい」

小さく、しかしはっきりと愛が返答をした。本当なの、と今度はミクが問い掛ける。愛はその場にいる全員に、自分の持ちうる全ての情報を語り聞かせた。駿は二度目になる。

「――そう、良かった」

解説の後ルカから洩らされた感想に、少女たちは目を見開いた。これで漸く繋がると、ミクも息を吐きながら言う。

「ルカ、どういうこと？」

「誰かさんにね、調べてもらうよう頼んでいたんだけれど。アイジ

ャという生徒がブリックマンを殺したんじゃないかって、私たちは考えていた。その裏付けが欲しかったの」

ロザリーの質問に朗らかな答えが返る。

駿は絶句した。それだけで良いのならば、報告などとうにできていたのに。

「ブリックマンはおそらく、“オリビア”と呼ばれる者だった。貴方たち生徒を襲った“オリビア”は私達の敵だわ。アイジャがブリックマンを殺したならば少なくとも、彼女は私達の敵ではない。ルシファーは戦力を、対オリビアの為だけに割くことができる」

「……待てよ、話を聞いてただろう？　アイジャって奴は“能力者”だ。それに平和を護る組織に所属してる。それってまさか、カ――」

「それについては今は言及しないわ。もちろん味方じゃない。けれど真っ先に排除する敵でもない、と言うこと」

言い掛けた駿の言葉をミクが遮った。ルカも表面上、気にも止めていないような様子を見せている。

のうりょくしゃ、って何？　翠子の呟く声が聞こえた。

「質問をさせてもらえませんかネ？」

すっと手が上げられた。無言で向けられたミクの碧い瞳を許可ととったのだろう、うるきが口を開く。

「さっきから仰る“オリビア”とは？　人の名のようですが、ブリックマンだけのコトではないみたいデスネ。複数犯で、何故あなた方の敵なんでショ？　なんで、百瀬さんやツインズが教われるンですか」

口調だけはいつも通り調子はずれの、しかし真剣味を帯びた声。皆がはっと息を呑む、うるきの質問こそが今一番の謎なのだ。何故オリビアは生徒を狙う。清川芽衣子や警備員、そして司書を殺したのもおそらくそうなのだろう。

「オリビア――それを知る為に、私は会いに行ったのよ」

音を立てずに立ち上がる、流れる黒髪に全員の視線が注がれた。ふわりと歌を紡ぐように、ルカは。

第五章《迷霧》：謎を解いて（4）

はい、退院手続きですね、はい、黒川さん。黒川千尋さん？　わかりました、はいおめでとうございます。

（……誰）

看護士の唇からにこやかに紡がれた名は少女のものではない。びみょーに違うんですけど、思いながら千瀬は頭を下げた。本名を語れるはずもない、大方はルシファー側の用意した偽名なのだろう。病院から返却された保険証も見事な捏造品で、その手際の良さに少女は溜息を吐いた。
背後では壁にもたれるようにしてゾラが待っている。一度も外されることのない視線を感じて、何だか見張られているような気分になった。

「お待たせしました、」
「退院オメデトー」

口だけの祝福をわざとらしく述べてからゾラは、さぁ行こうか、と千瀬の腕をとった。

病院から出るわけではないらしい。連れて行かれた先は内部に作られた小さなカフェテリアで、千瀬は僅かに首を傾げた。すぐ隣には患者達の利用する売店が並んでいる。こんなところで仕事などできるのだろうか。
ゾラは気にする様子も見せずに店内を通過すると、奥の席に陣取っ

た。まァ掛けなよ、とすすめられれば千瀬も座らないわけにはいかない。

「早速なんだけど。君にはルカの代わりをしてもらうから」

「はい、……て、え？」

聞こえた言葉はおかしかった。自分の耳が信用できなくて、千瀬は思わず聞き返す。すいませんもう一回。

「君にはルカの代わりをしてもらう」

「むむむ無理です！！」

聞き違いでは無かったらしい。ぶんぶんと首を横に振る千瀬をゾラは面白そうに見つめている。

何をするのか知らないが、自分に彼女の代わりなど出来るはずがなかった。ルカの事を思い浮べて千瀬は確信する。しかしゾラはそれに、大丈夫だと笑っただけ。

「なに、難しいことじゃないよ。僕の仕事を君に見届けてほしいだけさ」

「見届け、る……？」

「そう。《情報屋ゾラ》は気に入った依頼主からの仕事しか請け負わない代わりに、クライアントには完璧な結果を提供する――その証明として、仕事の仕上げ時に依頼した本人に立ち合ってもらうんだ。これは僕の中での決定事項」

「はぁ……」

ニコニコと上機嫌に微笑んでいるものの、ゾラの言葉には有無を言わせぬ響きがあった。

「ルカとは一度こっちで合ったんだけどね、ろくに情報提供も出来ないままあの島に帰ってった。敵サンの動きが予想外に早いって、ミクから連絡があったみたいだね」

そこでルカの代わりに選ばれたのが、戦線を離脱した千瀬というわけだ。納得しながらも千瀬は何だか申し訳ない気分になる。ルカが学園へ帰還する羽目に陥ったのは他でもない、自分がまんまと敵の手に倒れたせいだろう。戦力を欠いた状態で、気配を察知する力に長けたルカのいない状態で、生徒達を護るには限界があったのだ。

「先ずは、僕の仕入れた順にネタを聞いてもらおうか。始めの方はルカにも話したけどね――そして種明かしを、最後に」

「――はい」

真直ぐに見つめた瞳の奥で何かが揺れたような気がした。人々の喧騒が、遠く聞こえる。

＊

「ゾラ、という人がいる。その界隈で一の腕を謳われる情報屋。私の友人」

「情報屋？」

静かに口を開いたルカの言葉を、一句一語聞き逃さないように全員が耳を傾ける。情報屋って何、愛が呟いたが答えが帰ってくること

はなかった。

「ゾラって、キュースシェリング？」

「そうよ」

「俺は知らねーぞ」

どうやら一度だけ顔を見たことがあるらしい、ロザリーの言葉に駿は顔をしかめた。

“ゾラ”と呼ばれるその人間にルシファーが依頼したのは、例のデータを所持している者――つまり、アサカ　ツネヒコの血縁者を捜索することだ。それからもう一つ。

「“オリビア”と名乗る者の正体を確認すること？」

「ご名答」

言ってルカはその場に居た全員に、ゾラから得た情報を語り始める。

――ツネヒコの血縁者がこの学園に入学したらしいという事は、随分前から判明していた。元はと言えばその情報を持って来たのもゾラである。

その男の足取りを追っていたゾラはしかし、彼が学園に接触を図ったという事を突き止めた後に行き詰まった。天下に名を馳せる情報屋と言えど、学園の誇る世界最高レベルのセキュリティに立ち止まるをえなかったのだ。――セキュリティシステムを破壊する術は持っていた。けれど情報屋を生業にしているゾラにとって、そのリスクは無視できる大きさではなかったのである。

ツネヒコによって入学手続きが済されたその“生徒”の名は、わからないまま。

「――そこでゾラは一度“学園”から手を引いて、違う道を探すこ

とにしたの」

ゾラが目を付けたのは、ルシファー以外に“データ”を狙っている組織の存在だった。

ツネヒコは悪魔の報復を恐れ、ルシファーには、そしてルカだけには見つからないように逃亡を続けていた。しかしその為に他組織への対策は甘くなりがちで、ぽつぽつとではあるが目撃情報も残っていたのだ。特に彼の所属していた組織、“アドラ”側の人間はまだツネヒコの存在を見失ってはいなかった。

「私達、“アドラ”は解散したからと言って追跡を止めていたの。ツネヒコが運び人をやっていたあの“鬼屋（たまほめや）”ばかりに気をとられて――――けれどゾラは、“アドラ”と深く関わりを持っていて尚且つ、ツネヒコの事を記憶している人間を見つけた」

「見つけた、って……本当に？」

「ええ。“アドラ”と提携していた情報屋らしいわ。今は単独営業にかえて、実績はゾラの次――実質のナンバーツーね」

一位と二位の間にはかなりの差があるらしいのだが。心の中だけでルカは呟いた。

「その“元アドラの情報屋”の最近の依頼をゾラは調べてみることにしたの。教えてくれるはずなんて無いから、データバンクに侵入して……」

「犯罪じゃねーか」

思わず呟いた駿に何を今更、とミクが返す。ゾラからしてみれば、商売敵へ何を使用とも自分は痛くも痒くも無いのだから。

「それでゾラはその情報屋の所に、一つ気になる依頼が舞い込んで

いるのを見つけた。『“悪魔の子”調査資料の獲得』……報酬額のランクはＡＡＡ（トリプルエー）」
「それって――」
「……依頼主（クライアント）の署名には、“オリビア”とあった」

ごくり、と息を呑む音が聞こえた。ようやく道が一つに定まったのだ、はやる気持ちを言葉ごと嚥下して駿もまた顔を上げる。

「やっぱり“オリビア”が、そのデータを探してた張本人なんだな」

――そして、ウォルディが探していた相手。
頷いたルカを見ながら駿は思う。ウォルディの命を奪ったのもその、オリビアだったのだろうか。駿にはわからない、けれど。

（もしそうなら、俺は――）

しかし駿の思考は、次の瞬間ルカが落としたとんでもない発言によってかき消された。

「私がゾラから聞いたのって、ここまでなの」
「へ」
「……え」
「それだけ？」
「それだけ」
「ええ」
「他には」
「一切無し」
「えぇえぇえぇえぇ」

一様に声を上げた少女達にルカは、仕方ないでしょ、と事もなげに

言い切った。時間が足りなかったのだというが、これでは肝心な所が何もわからない。

「ツネヒコの血縁は？　データとその鍵、結局誰が持ってるんだよ」

「ゾラは直接会わないと情報の譲渡をしてくれないの」

「使えねぇ……！」

本人を前にしたら殺されそうな言葉を吐き捨てて駿は頭を抱えた。

結局、どうすれば良い？

「こいつらまでオリビアに目を付けられてるんだぞ、のんびりなんて出来ない」

「――それなんだけど」

集まった女生徒達を示せば、ミクが静かに声を上げた。彼女の碧い瞳が、一人一人の顔を静かに見つめる。

「この中に本当に、“朝霞恒彦”を知っている人はいないの？」

「え――？」

“オリビア”がわざわざ“ルシファー”に喧嘩を売るメリットなんて何処にも無いのよ。連中が貴女たちに狙いを定めていた理由は――」

ざわりと空気が揺れ動いた。まさかァ、うるきが声を上げたのを皮切りに、少女達は口々に否定を述べる。

「つねひこ、なんて人知らないし」

「データとか」

「キーとか」

「何って感じ、」

「持ってないし、知らないですよ……！」

騒めく少女達の中でただ一人、百瀬だけは冷静だった。こんな事があるのだろうか、と考える。ルシファーの探している人物が、既に協力者として集っていたなら。

――そんなウマイ話があるとは考え難いがしかし、筋は通る。

「……だったら俺達は、戦うだけだろ」

自分達が一連の殺人の、最終目標かもしれない。言い知れぬ恐怖で混乱していた少女達は、少年の言葉でぴたりと口を閉じた。強い意志の籠もった瞳は彼の上司に向けられているだけだったが、力強い声は彼女達にも届いていた。

「こいつらが殺られたら、俺達の負けって事だろ」

「確証はないけど――そういう事ね」

「だったら、」

音もなく動かした腕の、袖口からするりと刃物が滑り落ちる。仕込みのスローイングナイフとは違う大型。折畳み式のそれをパチンと開いて駿は、煌めく切っ先に視線を落とした。

「死なせねェよ」

これ以上は、誰一人。

第五章《迷霧》：謎を解いて（5）

「――とまぁ、ここまでがルカに話した内容なんだけど」
「……え」

殆ど導入の段階じゃないですか。言えばゾラはそのとーり、とカラカラ笑って返した。あっけらかんとした様子の情報屋を前に千瀬は頭を抱える。こんな中途半端な情報をルカが持ち帰ったのであれば、“学園”側はさぞ困惑しているだろう。

「結局、朝霞恒彦の血縁者ってあの島にいるんですか。本当に“データ”を持ってるんですか？」
「まァそう急ぐなって。チトセ君はさ、“データ”とか“調査結果”とか言うとどんな形の物を想像する？」
「……？　紙とか、」

レポート用紙を思い浮べて千瀬は言う。分厚くファイリングされた紙の束のイメージだ。
少女の答えにゾラは口元を釣り上げた。注文したブラックコーヒーをゆっくりと啜る、その行動は優雅でさえある。

「君、流行に乗り遅れてるよ」
「へ」
「今は何でも軽量化の時代だ。電気信号の羅列に変換すれば文章も数字も暗号も、小さくして持ち運べる。フロッピーからＣＤ、ＵＳＢ、マイクロチップまで」
「……あ」
「チップを体内に埋め込んであったら？」

そうか、と千瀬は瞬いた。もしそうならば、データを所持している人間は一見してもわからない――持っている本人でさえ、知らない可能性もある。
木の葉を隠すなら何処にするか？
そういう意味であの学園は、絶好の隠し場所なのだ。

「“アドラ”と提携していたその情報屋は、ツネヒコ本人とも接触したことがあったらしい。あの男の情報をツネヒコ自身が隠蔽する前に唯一手に入れた人間だ、身辺調査は容易かっただろうね」
「そんな――」
「情報屋というは生き物は、一度会った相手のことは絶対忘れない。膨大なネットワークに組み込んで、その一生を把握している」

だから君はこれからの人生、僕に全て筒抜けになる。
ぴっと指差されて千瀬は瞠目した。恐ろしい職業だ。声には出さずに思う。

「――さて、ここからが本題だ。“元アドラの情報屋”が掴んだツネヒコの行動履歴を、こっそり盗ませてもらった」
「盗……」
「あの情報屋は僕と違って、仲介人を使って依頼人に調査結果を渡してるんだ。そこのパイプに細工してちょいちょいと――しかもこの仲介人、“学園”に潜伏して司書をしていたんだとか」

千瀬は絶句する。それが殺されたあの司書だということは明白だった。“オリビア”は情報を受け取ってすぐ、用済みの仲介人を始末したのだ。
入手した情報には、データの持ち主が書かれていたのだろうか。だとすれば、司書が死んだ後に襲われた人物がそうだということにな

る。

（――――え？）

キヨカワメイコ。警備員。ミハエル・ブリックマン。司書の女。次は、誰だった？

「――アサカツネヒコ。１９ＸＸ年６月２１日生まれ、Ｂ型ＲＨ＋。生きてれば今年で四十八歳……家族構成は姉一人、両親とは死別。闇金融をやっていた親戚を経由して十八から危ない道に片足突っ込んで、二十三の時にドイツに渡ってる」

なかなかの生い立ちだね、純粋な称賛か皮肉か、言葉の裏に何かを含ませてゾラは笑う。

「十七年前に病弱だった姉も死んでツネヒコは天涯孤独――かと思いきや、当時一歳にも満たなかったその姉の娘を養子として引き取っている。良いところもあるじゃないか」

「娘……？」

「姉の死因は過労死、ね。夫は蒸発――碌でもないねェ」

フン、と嘲笑うように鼻を鳴らす。ゾラは手にしていた薄っぺらい紙――盗んだ情報をプリントアウトしたものらしい（不用心だ、と千瀬は思った）――をくるりと裏返してみせた。千瀬のほうにその文面が晒される。

びっしりと書き連ねられた英文の所々に、千瀬でも読める文字が挟まっていた。日本語で記された部分は人の名前なのだろう。

「読める？　死んだツネヒコの姉は名をミヨコというらしいけど。注目すべきはその前だ」

長くて白い指で示された部分には、明朝体の漢字がきっちりと五文字並んでいた。存外に美しく整えられた爪の先がなぞるのに合わせて、千瀬はそれを読み上げる。

「ふじ、の。藤野、美代子」

「旦那の姓なんだろうね」

聞き覚えの無い響きに千瀬は首を傾げた。もとより人の名を覚えるのは苦手なのだ。思い出そうとしても、そんな姓の知り合いはいなかったような気がする。

しかしゾラは喉の奥でくつりと一つ笑った。

「ルシファーの連中は皆、アサカという姓の人間を探してたんだ。でも、実際はフジノと名乗っている可能性だってあるってこと」

「はぁ」

「まぁ名前なんて単なる識別記号だからね。“学園”のセキュリティを相手にしちゃどうやっても生徒の名簿は見つからないし、あんまり関係ないけど」

さて続き。言いながらゾラはまた紙の印刷面を自分の方に向けた。見ていたところで千瀬は英語を読む能力を有していないので、正しい判断だ。

ロヴの“翻訳”の力を、おそらくはゾラも知っているのだろう。

「さて。実はこの“元アドラの情報屋”でさえ、ほんの僅かな間だけれどツネヒコの行方を見失った時期があるらしい。後の調べでそれはツネヒコが私的な交通事故を起こして、入院してたからだと判明してるんだけど」

「事故、ですか……」

「面白いことに、それってちょうど“アドラ”が解散した――ツネヒコがデータを持って逃げた、直ぐ後のことみたいなんだ」

――え？

声を上げた千瀬にゾラはにやりと笑ってみせる。スピード超過でハンドルを切り損ねた結果の、乗用車同士の追突事故だったらしい。そんなに慌てて何処へ行く気だったんだろうね？　全てを知ったような声音でゾラは言う。

「退院した直後に何故かツネヒコは姉の子を施設に預け、十五までそこで面倒を見るように頼んだらしい。そして施設を出た後の娘の行き先として、あの“学園”を選んだ」

「――――っ、」

「ツネヒコは死んだよ、五年も前にね。鬼屋（たまほめや）に雇われてダムダム弾の運び屋をやって、ルカ達に見つかった直後のことだ。……もう逃げられないと思ったんだろうね。“学園”に二人分の入学手続きと莫大な授業料の入金を済ませてから、自殺した」

「……待ってください、ふたり……？」

二人分？

息を呑んだ千瀬を真っ正面から見据える、ゾラの瞳に玲瓏な光が宿った。そうさ、といらえが返る。

「ここまでこの文書には“娘”の人数に関する記述は一度もなかった――が、どうやらツネヒコが学園に入学させた人間は二人いるらしい。“元アドラ情報屋”もここで初めて気付いたのかもしれないね」

「娘……姉妹？　同時に入学するって、年齢が同じなんですか？　そんなことが、」

そこまで言って千瀬は瞠目した。ただ一つの可能性に思い至る。

「まさか――」

「双子、だったら？」

ごう、と音が聞こえた。熱い血液が耳の中でどくどくと波打つのに合わせて、少女の脳裏を記憶が駆け巡る。

意識を失う前に千瀬が見た、何者かに襲われていた二人の少女。瓜二つの顔。

彼女達の名を千瀬は知らない、けれど。それは確信だった。

「――ッ、大変、ゾラさん……！」

「心当たりが？」

「どうしよう、大変……っ」

もう間に合わないかもしれない。何とかあの場から逃がしはしたが、その後彼女達はどうなったのだろうか。

双子。どちらが“データ”の持ち主かはわからない。わからない限り、二人とも狙われる。

「――慌てる必要はないよ、チトセ君」

「でも……っ」

「ここまでが“オリビア”に譲渡された情報。ここから先が、僕の腕の見せ所」

これ以上何をすると言うのだろうか。動揺の浮かぶ瞳を向けた先、ゾラは綺麗に笑っている。

――その時だった。突如千瀬の耳がゾラとは違う、別の声を拾い上げる。

「――ゾラさん。部屋の番号、わかりましたよ」
「!?」
「おー、ご苦労さん」

現れた人物に千瀬は目を白黒させた。少し伸びた栗色の髪を緩く束ねた、彼女の姿を見るのは久しぶりの事である。どうしてここにと問う前に、少女は千瀬に笑いかけた。

「元気だった？　チトセちゃん」
「スミ、レ……？」
「さぁ、行くよ二人とも。種明かしの時間だ」

栗原菫（くりはらすみれ）の頭を一つぽんと撫でて、ゾラはにっこりと微笑みを浮かべる。

「僕の実力のほうが上だってこと、連中（オリビア）に教えてやるよ」

第五章《迷霧》：謎を解いて（6）

栗原　菫は情報収集の能力に特化した少女である。ルシファー本部を離れサポート役に回るのだと、以前本人の口から千瀬は聞いた。組織での階級は千瀬と同じ《ソルジャー》。けして戦闘向きではない彼女はロヴの推薦で、ゾラの助手として活動していたのだという。

「そう、だったんだ……」

菫の案内で何処かへ向かうらしい。院内の廊下を進みながら会話する、千瀬達の十歩後ろをのんびりゾラは歩いていた。

「ゾラさんと一緒にいるのは勉強になるよ。彼女、自分で言う以上に凄い人だから……一流なんて言葉じゃ言い表わせないくらい」

「彼女、って……」

ちらりとゾラを振り返り、十分距離があることを確認する。声をひそめてこそりと千瀬は呟いた。

「ゾラさんて、女の人だったんだ……」

「あはは、判り辛いよねぇ。わざとそうしてるみたいだけど」

私も最初はわからなかった、言いながら菫はころころ笑う。

「コードネームみたいなのもいっぱい持っててね、別人になりきって仕事するの」

「“ゾラ”は？」

「それは一応本名。キュースシェリング・A・ゾラ・ヴィデルバントっていうのよ」

「長い……」

溜息を吐きそうになるのを飲み込んで、代わりに千瀬は肩を落とした。自分の周りには常識を逸した人物が多いとつくづく思う（千瀬自身もその同類にあたるのだが、本人に自覚症状は無かった）。

「――ここです」

菫がふと足を止める。振り返ってゾラに示した部屋の番号は、１８３２、とあった。入院患者用の病室に見えるが、それにしては随分と番号が大きい。部屋の位置も病院のかなり奥まった、人目に付きにくい場所だった。人気もない。

――隔離病棟、という言葉が千瀬の脳裏に浮かぶ。一般看護士でさえその姿は見当たらず、代わりに初老の女が一人、何やら器具を乗せた台車をゆっくり押して過ぎて行っただけだった。

「……ここは一般病棟と少し違ってね」

おもむろにゾラが口を開く。人種の違いもあるだろうが、女にしてはかなり背の高い彼女を千瀬は仰ぎ見るようにした。

「今から僕らは、この部屋に入院している“患者”と面会しようと思うんだけど――その前に、」

スミレ、と名を呼ばれて少女が頷く。携帯情報端末に形の似た掌サイズの機械を鞄から取り出すと、菫はパチンと画面を持ち上げた。手慣れた様子で十数桁の暗証番号を打ち込むのをあっけにとられた様子で千瀬は見つめていたが、その端末の画面に凄まじい勢いで細かい文字が流れ始めると目を見開いた。

「これはね、この病院にかかったことのある患者のリストとそのカルテだよ」

言いながら画面から目を離さない、菫の瞳に青白く光る文字が映っている。やがて激流の中から何かを見つけ出したらしい、少女の操作によって文字の動きは停止した。

「ありました、朝霞恒彦とその養女のカルテです」

「読んで」

「約十四年前、ですね。朝霞恒彦――交通事故で右手首を骨折、左大腿骨も損傷……本人はこの程度だけど、同乗していた養女が手術を必要とする重傷を負ったみたいです」

――手術、ねェ。

呟いてゾラはにやりと笑った。もし体内に異物を埋め込むのならば、それ相応の設備と時間が必要だった。本人にも知らぬ間に事を済ませるには、手術というイベントは一番自然な理由にできる。

「カモフラージュにはもってこいだな」

「オペを受けた子供は当時三歳になったばかりでした。名は朝霞翠子（あさかみどりこ）――旧姓は、藤野」

ミドリ、と。

片割れの名を呼んだ少女の声を千瀬は思い出した。翠子という名の娘は確かにあの時、あの場所にいたのだ。“オリビア”はそれを知っていた。データを保有する娘を、藤野という姓を頼りに捜し出したに違いない。双子ならば尚目立つ。

「それじゃあ、予備知識を得たところでご対面といこうか」

コンコンと軽い調子で白い引き戸をノックする。ゾラの示した扉の向こうにどのような人物がいるのか、現状と何の関係があるのか、千瀬には全く想像がつかなかった。

中から返答の無いその部屋には、どうやら鍵が掛かっているらしい。個室とはいえ、病院の中にしては奇妙な話である。ゾラはそれを気にする素振りなど見せずに、心得たように鍵穴へ掌を押し当てた。

数秒後、カチ、と小さな音が響く。鍵が開いたのだ。

「!?」

「まァ……僕は、ルカの“同胞”だから」

人間を超える者。進化を遂げたヒト。驚く千瀬にゾラは、自分もまたそうなのだと告げた。

彼女の持つ超人的な雰囲気に、そこで初めて千瀬は納得する。悪い意味ではなく文字通りの意味で、類は友を呼ぶとは良く言ったものだ。この広い世界の中で奇跡とも呼べる稀少な存在が、これだけ集まるのだから。やはりお互いに、わかるのだろうか。

「さぁ……入って」

ガラリと音を立てながら扉をスライドさせる。無論面会許可など無い他人の部屋に、千瀬は恐々と足を踏み入れた。プライバシーも何もあったものではない。

――病室の中には柔らかな光が降り注いでいた。カーテンの隙間から差し込むヴェールのような淡い白。陽溜りに照らされたベッドには、沈み込むようにした小柄な人影が見えた。

眠っているのだろうか。規則正しく上下する胸の上にかけられた布団もまた白い。呼吸音の合間には心電図の電子音が響いて、それだけが何処か冷たかった。

長く伸びた髪から少女であると判る。布団からはみ出した片腕に繋がる点滴のチューブを見た後はじめて目をやった、その顔に千瀬は息を呑んだ。

「――う、そ」

声が擦れる。

穏やかに眠るその顔は目を閉じていてもわかる、あの“学園”にいた双子とそっくり同じだった。思わず我が目を疑って、しかしそれが真実であると知る。千瀬の脳裏に焼き付いた二人の少女と、何から何まで同じなのだ。

「これ……は、誰なんですか？」

「翠子、だよ。事故で強く頭を打って、手術を受けたけれど今も意識が戻らない」

「嘘、違う……！」

これは翠子じゃない、千瀬はここが病室だということを忘れて大きく声を上げた。響き渡ったそれにはっと口をつぐんだが、眠る少女が目を覚ます様子はない。植物状態に似ているけれど少し違うの、と菫が呟いた。

「一時は危ない状態だったみたいですけど、今は安定してます。脳波も正常だし、自発呼吸もある――深く眠っているような状態、と言うのが医師の見解です。でも時々不思議なことに……夢を、見ているようなんですって」

通常夢をみることなど無い深い眠りの中にいながら、少女に取り付けた脳波測定器は確かな夢の波形を描く。レムとノンレムの境を漂ったまま、彼女は現つに帰ってこないのだ。

病院の中央コンピューターハッキングをかけたらしい。携帯端末に情報を移し取って読み上げながら、菫は千瀬に語り掛けた。
不思議だね、僅かに首を傾げながら呟く。

「十四年間眠り続けたまま、外部から投与される栄養を頼りに生きている。こんな状態だけれどちゃんと成長したのよ、勿論筋力なんかは無いだろうけれど」
「そんな――」
「治療費は恒彦が指定して遺した口座から毎月引き落とされているみたい。まだかなりの額が残ってるよ――翠子を生かしておいて、どうする気だったのかしら」
「翠子は、学園に……！」
「この娘は間違いなく“ミドリコ”だよ、チトセ君。アサカと呼ぶかフジノと呼ぶかは、悩むところだが」

眠る少女の頬にゆっくりと手を当てながらゾラは呟いた。優しい仕草でそのまま手を滑らせて、伸びっぱなしになっている髪を掻き上げる。少女の額横から後頭部のほうまで、大きな古い縫い傷があるのが見えた。

「どこに埋まってんのかなァ……」
「で、でも……！　あの島に翠子はいたんです、あたし、見たんです！！」

ここにいるのが翠子ならば、“学園”にいるのは誰だ。眠る少女は顔こそ酷似しているが、あちらにいる双子よりだいぶ髪が長くなっているように思える。
まさか本当に、十四年も？　この娘の体内に“データ”が隠されているならば、あちらの女生徒たちが襲われた理由が。ぐるぐると思考が混乱を始めた千瀬の横でゾラが笑う。

「つまり“オリビア”の奴ら、ツネヒコの策ににまんまとやられたのさ」
「策……？」
「そう。――良いかいチトセ君、今から僕の言う話をよーく聞いて、君はあの島に帰るんだ。それで、」
あのくだらない茶番劇を、終わらせるんだよ。

第五章《迷霧》：テンペスト（1）

一度目はクルーザーを使用した。夜の海を渡り水面の月を割って、あの島に到達した。

二度目となる今回は、情報屋の手配したヘリに乗せられている。ミリタリータイプの巨大な機体には、主要プロペラが二ヶ所に付いていた。

こんなものがあの島に着陸できるのだろうか、という千瀬の心配は杞憂に終わったらしい。そもそもエリニュエス＝グロリアは軍事施設だったのだ。隠されているだけで、ヘリポートは存在する。

（また会おう、チトセ君）

仕事があるからと別れを告げた、ゾラと董は同乗していない。時計の針は午後を回った真昼の空を飛びながら、千瀬は刀をぎゅっと握り締めた。

（心配はいらないよ）

ヘリに乗り込む寸前、千瀬の頭を軽く叩いてゾラは笑った。心配はいらない。先のことなど見えているかのように、そう彼女は繰り返した。

（君は何にも考えないで、やりたいことだけやればいい）

かちゃり、鍔鳴りがする。例えるならばこの刀は千瀬の半身だ。千瀬は生きるために、殺すために、この刃を振るう。

「非合法の改造型ですから、2時間もかからずに着きますよ。それ

まで休んでいてくださいね黒沼さん」

千瀬の他に唯一ヘリコプターに乗っている、パイロットの声がした。サン・ハッタと名乗る、そのインド人の男はルシファーから派遣されたらしい。話によれば七見月葉の直属で、デューイ・マクスウェルとも知り合いなのだという。

ロヴの能力が働いているのだろう、彼とも滞りなく会話ができた。

「……はい」

頷いて千瀬は目を閉じる。眠るわけではない。刀を抱き込むようにしながら、まだ遠いあの島を想った。

少女は今から敵を斬りに行く。

数多の命を奪った己の刃で今度は、仲間を、姉を、護るために。

＊

「……本当にここなの？」

「ああ――」

ミクとルカを引きつれて瓦礫の山に再度降り立った、駿は茫然と呟いた。この場所で起こった爆発と、命を落とした少年について。報告を兼ねて、二人の判断を仰ぐつもりだったのだ。

駿がこの場所を離れてから、そこまで時間は経過していない。“地下牢”でのミーティングは時間に換算すれば、一時間にも満たなか

ったろう。
現に今この場所には、まだ爆発の名残が色濃く残っていた。火薬の香と、折り重なった死体の血生臭さ。一般生徒はやはり自室に閉じ籠もったままなのだろう。誰かがこの現場を発見して騒ぎ立てた様子もなかった。なのに。

「どうして――――ッ」

見つからないのだ。ウォルディの遺体だけが、どこにもない。
播磨亮平が彼の身体を担いで移動したということはありえなかった。亮平自身はあの後すぐに柳原冬吾――ウォルディのルームメイトだ――の所に向かっているのだから。
では、誰が？

「本当に死んでたのね？」
「……ああ、」

死んだ。ミクの問い掛けに低く返しながら駿は目を瞑る。目蓋の裏に焼き付いたあの少年の死に際を、消えてゆく体温を思い浮べた。確かにあれは、目の前で起こった事実だったのに。まるでウォルディの死など無かったことのように、幻であるかのように感じてしまう。

（……いや、違うか）

駿は自嘲の笑みを浮かべた。幻であってほしかったと、思っているのは自分自身だ。

「……わかった。この様子を見る限り、その“ウォルディ”も放っておいて良い相手ではなさそうね」

「だから、ウォルディは……」
「本人が死んだのだとしてもまだ、“アイジャ”が残ってるわ」
静かに告げるルカの声にミクもまた同意を示した。“アイジャ”と“ウォルディ”の関連性はわからないが、無関係でないことは確かだ。
「彼女は私達（ルシファー）の敵じゃなくて“オリビア”を標的としてる――って考えが良いセン行ってそうだけど。現にこっちに被害はないし……ルカ、どう思う」
「そうね――でも、邪魔をされては困る」
ゆらりと一瞬ぬばたまの瞳の中の、闇が揺れ動いたのを駿は見た。いつも柔らかな笑みを浮かべているルカの様子は今日も変わらない。しかし日本から帰還して以来、どこか近寄り難い空気を纏っているのを駿は感じ取っていた。
“オリビア”はそれほど警戒するに値する相手なのだろうか、それともこの少女の“能力調査データ”はそれほどまでに奪還を急がなければならない物なのか。おそらくは、後者。
「ウォルディって子は、“オリビア”に殺されたんだと思う？　駿の話を聞く限りじゃ相討ちって感じだけど」
「……待てよ、じゃあこの辺の死体全部それの仲間ってことに」
今日は気温が低いお陰だろうか、まだ特有の臭いはしない屍を少年は渋い顔で見つめた。
ここにいる人間が全て“オリビア”だと言い切るには些か疑問が残った。死体の身につけている服は黒いスーツが殆どだが、数人奇妙な出で立ちの者がいる。華美に着飾った貴族のようなそれは、仮装パーティーにでも行くような格好に思えた。転がっている武器も大

きな槍で、駿の見た【ゴスペル】の様子とはだいぶかけ離れている。
そして、何よりも。

「“オリビア”は俺達三人がかりで仕留め損なうような相手だぜ。ウォルディ一人で、これだけ相手にしたってのか」
「さぁ……アンタ達が間抜けだったのかもよ」

碧い瞳にばっさりと切り捨てられて、駿はぐっと言葉を詰まらせた。確かにあの時は色んなことが重なって、かなり馬鹿なことをしたと思う。駿たちの逃がした【ゴスペル】は後に絹華が始末を付けたのだから尚更だ。
――ただ千瀬は、単身【ゴスペル】を追いかけた先で別の相手から攻撃を受けた。“オリビア”は数人以上から成るグループで、一対一ならば千瀬や駿達（ソルジャー）と同等かそれ以上の戦闘能力を持っている。それは、確かだった。

「とにかく、アイジャのことは念頭に置いて行動しましょう。向こうはもう動いてしまったんだもの、今日中に決着をつけてくる――配置はわかってるわね、シュン」
「――わかってるよ」

一つ息を吐いてから駿は頷いた。これからルシファーの一団は、決着を付けるべくある作戦に出る。
中途半端な情報を得ただけで進展のない彼らにできることなど多くはない。わかっているのは“協力者”として集めた中に“朝霞恒彦”の持ち去ったデータの所有者がいる可能性がある事と、彼女達が“オリビア”から狙われている、その二点のみである。
作戦といっても大したことができるわけでもなかった。駿たちはこれからあえて“協力者”達を学園内に点在させ、相手から向かってくるのを待つのだ。

無論、女生徒たちはルシファーの監視下にある。ルカが全員の居場所を把握していて、さらに駿やロザリーといった構成員がそれを影から追う形にした（絹華は“生徒”の役を続けることにしたらしい）。

「――勝負は今日中ね。これを逃したら次はいつ仕掛けてくるのか、予想ができない」

「今日中に決まるわ、きっと」

言いながら踵を返したルカの黒髪がふわりと綺麗な弧を描く。彼女はこれから先に一仕事、済ませなければならないのだ。

――“映研”側の人間も集めよう、そう提案したのはうるきだった。少女達がこの危険極まりない学園内をうろつく最も自然な理由は、“七不思議”に関する調査をする、というものである（もはや忘れられがちた、当初の目的はそれだったのだ）。

理由を作っておけば後始末が付けやすい。教師やその他の一般生徒に問われたとき、言い訳として使えるのはそれだけだった。

“調査”と言い切るならばこれまで通り“取材”陣が付き従うのが自然の流れというもの。つまりフルキャストで最後に一芝居、うってみようというわけだ。

（……まァ、それだけじゃないんだろうけど）

駿はうるきの顔を思い浮べた。眼鏡の奥に隠されていたのは二重、三重にも色を重ねた聡明な瞳だ。

わざわざ映画研究サークルの面々を危険な舞台に引きずり出した彼女の本心を、何となく駿は読み取っていた。ルシファーの“協力者”に接触していた者達と知られれば、映研の人間が狙われる可能性はかなり高かった。口封じ、証拠隠滅、理由ならいくらでもある。

東海林愛と志田渚が協力の約束を取り付けた段階で、もう“危険”

に足を踏み入れたも同然だったのだ――ならば。
同じ“危険”の中にいるのならば、ルシファーの監視下にに置いてしまったほうが安全性はぐっと高まる。少なくとも戦力が、こちらにはあるのだから。

（友達を守りたかった、ってとこか）

聡い奴だ、と駿は舌を巻く。
こうして急遽“作戦”に参加することになった少女達に、これからルカは会いに行くのだ。勿論正面から顔を会わせるわけではない。志田渚、邑智亜梨沙、マリア・ウィンチェスター、その他部員といった面々の姿形、それから気配を陰から眺めるだけだが。
……一度覚えてしまえばルカは、その気配を辿る事ができる。

「あたしも行くわ」

言ってミクが跡を追い駆けた。取り残されて仕方なく、駿は自分の持ち場を目指すことにする。
足場はかなり不安定。でも、やるしかないのだ。

（早く帰ってこい、馬鹿チトセ）

情報もその戦力も、全てが終わってからでは意味がない。

第五章《迷霧》：テンペスト（2）

真っ暗だった。何も見えない、聞こえない、自分の身体の輪郭さえわからない闇のなかに意識だけが浮かんでいる。
目を凝らしても一筋の明かりさえ見当たらなかったが、不思議と怖くはない。ぬるま湯に浸かっているような暖かさと、時折肌を撫でる僅かな風――ほっと息を吐いて初めて、自分に手足の感覚があることに気が付いた（けれどやはり、見えはしなかった）。

ふと掌に、包まれるような温もりを感じる。自分の体温と溶け合う、心地の良い温度。手を繋がれているのだ――気付いて、少し力を籠めた。
……同時。空いていたもう片方の手にも、同じ暖かさを感じる。

（嗚呼、）

息を吐き出した。吐いた、つもりになった。
そうだずっとこうして、一緒に居たかった。一緒だと思っていたのに。

（……だれ、と？）

＊

＊

＊

「あ、カオルが起きた」

勢い良く押し上げた目蓋の先で淡い銀色が揺れた。髪の毛と同じ色の瞳だ。丸いそれが鏡のように起き抜けの自分を映しているのを見て、少女は僅かに眉を寄せた。何これ。

「……ロア……近い。ちゅーしちゃいそう」

「してあげましょうか？」

「謹んで辞退させてイタダキマス……」

腕を伸ばせば、冗談よーと笑って視界からロアルが消えた。そうは言っても気は抜けない、と薫子は思う。その気になればロアルは抵抗など無く、目覚めのキスの一つや二つ落としていくだろう。異文化というやつだ。

「具合はどう？」

「平気……翠子は？」

自らの半身を探すことは、もう薫子の中で癖になっている。命の危険を身近に感じたストレスからか、酷い吐き気に襲われて布団に入って以来、翠子の姿は見ていなかった。

「起き上がれるなら皆のところに行きましょうか。ミドリもそっちだし」
「うん」

柔らかく言うロアルの笑顔の向こうに、隠された表情を薫子は知っていた。きっとまだ安穏とは程遠い状態なのだろう。直接尋ねるのは憚られて、薫子は唇を噛む。

あたし達の日常は、何処へ行ってしまったのだろうか。

（アサカ……、だっけ。ほんと迷惑な話）

薫子はルシファーの捜している物など知らされていない。けれど以前訊ねられた、アサカという人物が関わっていることだけは何となく理解していた。
見ず知らずの他人が起こした過去のことに振り回される身にもなってほしい。思いながら少女は溜め息を吐く。

「カオル？　どうかした？」
「何でもないよ、行こ」

――藤野薫子は、朝霞恒彦の事など知らない。無論それは翠子も同じである。
知らないのだ。少なくとも彼女達の記憶に、そのような男の存在はない。

＊

「悪い、お待たせ」
「おっそい」

片手を上げてみせた志田渚に、愛はぷぅと頬を膨らませてみせた。その顔を掌で両側から包み込まれてぐっと押されれば、唇から空気が漏れて間抜けな音がする。ガスの抜けるときのような、風船の萎むような。

「で、クラリスはいたわけ」
「うん」

ひとしきり愛の顔で遊んだ渚は満足そうに返事をする。教師に用がある場合でも、完全休校状態になっている本日の校舎内は職員室でさえもぬけの殻だ。故にわざわざ彼女達は教員専用の宿舎棟にまで出向いている。

「なんて？」
「部活はとりあえず中止だって。再開の目処もまだ立ってないみたい」
「だろうなァ」

そんな答えが返ってくるのは最初からわかっていた。それでも顧問に確認をとる渚は、大概真面目なのだと愛は思う。
――渚はスポーツの推薦を受けてこの学園に来たと、風の噂で聞いた。部活動を行うことがこの地における彼女の存在意義なのならば、仕方の無いことなのかもしれない。

「で、そっちの用はなんだっけ――ああ、“調査”の再開か」

一つ仕事を片付けたからだろうか、すっきりした様子の渚が愛の瞳を覗き込む。愛はそれに憮然とした表情を浮かべてみせた。

「忘れんな。うるきとか、マリアとかにはもう連絡がいってると思う。映研の他のメンバーはうるきが声かけてるし――あたしは志田を迎えに来る役ね。そーだアンタ、亜梨沙どこにいるか知らない？」

「亜梨沙？　部屋にいないの？　マリアと同室じゃん」

「それが出てったきりらしくてさぁ……」

首を竦める愛に渚は、ふぅんと相槌を返す。一人歩きは危ないのにね。呟いた声に愛も同意を示した。

「ま、良いか――東海林、とりあえず集合場所に行こ。ちゃんと調査やってくれんでしょ？」

「……まぁ、ね。ちゃんとアンタ達が映像にできるようなことはするつもり。今日なら他の生徒は出てこないし」

「フツーは出ないんだろ。東海林たちの班が度胸ありすぎるっつーか……酔狂ってゆーか。無鉄砲？」

渚の意見はもっともだったので、愛は視線を逸らすことで受け流した。本来ならばこんな危険な場所を、無防備に出歩こうとするはずない。けれど愛たちには、やらねばならない理由があるのだ。渚には告げていない、重大な理由。偽りの調査とその撮影現場を作り出す、本当の目的。

「どうせなら出てくれれば良いのにね、黒髪の亡霊とか」

考えていたことを見透かされたようで、愛はぎょっとした。少女は

もう、亡霊には出会っている。出会ったうえで、さらなる混沌に誘導されてしまった。

「……そのうちまた出てくるかもよ」

「え、何か言った？」

「何もー」

素知らぬ顔を見せて愛は歩き始める。それに一つ首を傾げた後、渚も従った。

教員宿舎を後にした二人が向かう先は、本校舎。

第五章《迷霧》：テンペスト（3）

愛はぐるりと辺りを見渡した。
集合場所になっていた本校舎二階、２０７号教室の前は他より少し広い廊下が通っている。集まったのはいつもの“七不思議調査班”である七人と、うるき率いる“取材陣”数名であった。
今までの調査方法通り作業は分担される。愛と沙南のペアには渚が、藤野の双子にはマリアとうるきが同行する事になり、邑智亜梨沙はロアルと百瀬の取材にあたるらしい。単独行動を避けるため、絹華もそこに加わることになった。

「ちわ」
「よろしくっス」

アシスタント兼用心棒と称してうるきが連れてきた少年二人が声を上げる。それぞれが後藤、原山と名乗った、彼らもまた映画研究サークルの一員だ。取材側の人数比を考えた結果後藤が渚のサポートへ、原山は亜梨沙のサポートへ付くことになった。
団体になりすぎても行動し辛い。人数は、ここまでが上限だった――準備は完了だ。

（……ぜんぜん、何処にいるのかわかんない）

愛は小さく息を吐く。辺りに目を走らせても自分たち以外は見当たらなかった。けれど、必ず傍にいる。あの黒髪の少女や武藤という少年が、自分達の動きを監視しているはずなのだ。
……見ていてくれなくては困る。愛たちは今からその身を囮として差し出すのだから――渚達には、結局何も告げてはいなかった。

隣に立つ沙南にもまた愛は目をやった。入学以来一日の殆どを共に過ごしてきた相棒は、少し堅い表情で遠くを見つめている。
――思えば沙南は最初から、この件に首を突っ込むことを渋っていた。彼女の勘はよく当たるのだ。愛が無理を押し通し、巻き込んだも当然――そう思うと急に申し訳ないような気持ちになる。

「……沙南、ごめん」
「は？」

突然がばりと頭を下げた愛を見て沙南は目を見開いた。反応を返せずにいると、愛はなおも言葉を紡ぐ。

「こんなことになるって、思わなかったんだ……沙南は、最初から嫌がってたのに」
「あ、ああ！　何よ今更、もう気にしなくていいってば」

漸く合点がいって沙南は声を上げた。愛なりに罪悪感感じたのだろうと思うと申し訳なく思うのが半分、それから――失礼な話だが――少しだけ、おかしかった。
悩んだり謝ったりする、そんなのは東海林愛らしくないと思うのだ。沙南の知っている愛はいつも真直ぐで無鉄砲、正義感は強いが鈍感。全て慣れれば愛しく感じる、そんなルームメイトだからこそ沙南はここまで付いて来た。

「後悔とか、愛のキャラじゃないじゃん。もしかして緊張してんの？　見てみなよ亜梨沙を」

言われて愛は少し笑った。名のあがった亜梨沙といえばつい先刻まで行方不明だった張本人だが、その間何をしていたのかというと、

この暇な時間を利用して彼女の想い人の部屋番号を調べていたのだという。
何も知らないとはいえ殺人の連発した校舎内。相当肝が座っているか、果てしなく呑気なのか――おそらくは後者だった。

「武藤くん、ってゆうの。知ってる？」
「あー、寮棟が違うんで喋ったことはねーっスけど。名前は知ってますよ、あいつ目立つし」

興奮した様子で話をする亜梨沙と聞き役に選ばれた原山の声が、愛の耳にも届いた。どうやらついに亜梨沙は、片思いの相手に辿り着いたらしい。

「やっぱり有名人なんだぁー！　播磨くんっているでしょ、彼と同じ部屋だったの！」
「ああ、亮平のやつも有名っちゃ有名っスから」
「部屋に行ったんだけどね、武藤くんいなくて……そしたら播磨くんが、『あいつのコトはほっといてやってくれ』とか言うんだよ！」
「はァ」
「どーしよ、もう武藤くん、追っかけとかファンクラブとかに付き纏われてるって意味かなぁ……」

ころころと表情を変える亜梨沙にどう対応したものか、すっかり原山は困っているらしい。そんな様子を見て沙南と愛は声を忍ばせて笑った。

「ちょっと沙南、“武藤くん”て……」
「あの“武藤くん”に決まってるでしょ」
「ひぇぇ」

捜し求めている“彼”が今どこかから自分を見ていると知ったら、亜梨沙は卒倒するかもしれない。その様が簡単に目に浮かんで、思わず愛は失笑した。

「さァ、皆サンそろそろ行きますヨー」

どこか気の抜けたうるきの一声で、ついに撮影が開始される。皆それぞれ手を振って、各々目的とする場所に向かうこととなった。

「……みんなまた、会えますように」

小さく呟いたのはロアルだ。愛はそれに頷いて、沙南と渚の背中を追う。

＊

「東海林さんと五十嵐さんの担当してる“七不思議”って何なの？」

後藤直純（ごとうなおずみ）は問い掛けた。彼は映画研究サークルに所属してはいるものの対して活動には加わったことのない、幽霊部員予備軍である。そんな後藤が今回の仕事に参加した理由はただ一つ、面白そうだったから、だ。

後藤は幽霊も悪魔も信じていないがしかし、この“学園”の謎には興味があった。きっと、誰もが一度はこの土地の不自然さに気が付く。

「愛が『寮棟の開かずの部屋』で、あたしが『第二図書室の閲覧禁止本棚』の話」

少し思い出すようにしながら沙南が答える。結局双方とも、これといった結果は出せなかったものだ。第二図書室のほうなどは藪を突いて蛇を出したばっかりに、当初の目的を忘れて違う流れに巻き込まれてしまったのだから。

「まーぶっちゃけ、寮棟探せば開かない部屋の一つや二つ見つかるんだよね」

苦笑を浮かべて愛が言う。今回の撮影は調査をした、というドキュメンタリーが撮れれば問題はないのだ。映る側も、それらしく振る舞いさえすれば良い。

「第二図書室にはちゃんと入っても良いけど――見つかるのは秘密じゃなくて、この島の歴史」

「エリニュエス＝グロリア……だっけ」

「なにそれ！　なにそれ！」

愛と沙南の会話にすっかり興奮した様子で、後藤はあれこれと問いをぶつけた。実は知らぬうちに様々な情報を集めていたらしい。二人とも自覚はなかったが、後藤の驚く様ではじめて気が付いた。もちろん二人とも、ルシファーについては一言たりとも語らなかったが。

「――志田、どしたの」

愛が渚に声をかけたのは、後藤との話が一段落ついてからだった。

四人で歩き続けた先、第二図書室の入り口が見えた頃のことである。
渚は僅かに目を細めどこか、ここではない遠くに耳を澄ませていた。
その様子に残る三人は首を傾げる。

「……悪い東海林、あたし用を思い出した」
「え、はい？　何？」

唐突に口を開いたかと思えばそんなことを言う。片手を上げた渚に
愛も沙南も、目を白黒させた。

「直ぐ終わるから、先に図書室入ってて」
「ちょっと待っ……」
「後藤、ちゃんとカメラ回せよ」
「りょーかい、志田センパイ」
「おい、志田ッ！！」

くるりと背を向けて駆け足で去ってゆく渚に、後藤だけがのんびり
と手を振った。沙南は表情を強ばらせ、愛は唇を噛み締める。
……一人では危ないから行くなと引き止めるには、理由を話さなく
てはならない。それが出来ないのだから、見送るしかなかったのだ。

「ちぇ、なんだよー、あいつ……」

焦燥を誤魔化すように愛は呟く。仕方ないから中へ入ろう、と残る
二人に合図をした。きっとああ言ったのだ、渚はすぐ帰ってくるだ
ろう。

――――――この時彼女を無理にでも引き止めなかったことを、後に

愛は心の底から後悔する。

志田渚が物言わぬ姿で発見されたのは、それから三十分後の事だった。

第五章《迷霧》：間話

数刻前の出来事である。

少女がそれに気が付いたのは必然だった。

がくん、と前のめりになる。急に体中の血が下がって、軽度の貧血を起こしたような心地になった。思わず壁に手を突いてそのまま背をもたれる。

「……ウォルディ？」

呟いた声は擦れていた。嫌な感じがする――これは予感ではなく確信だ。

カタカタと震えはじめた指先をぎゅっと握り締める。酷い悪寒。何かが起こった事とそれが何であるかを、この時既に少女は把握していた。

「ウォル、ディ……」

消えた。

消えた。

消えてしまった。

この世から失われた存在を知っている。どうして？　少女は誰にともなく問い掛けた。

その場所は、今彼女がいる場所からは遠い。彼女自身がそこから逃げるようにして、ここに身を隠していたのだから当たり前である。

その場所で、先刻大きな衝撃の波が発生したこともわかっていた。

人為的な爆発。それでもその時は、こんな感覚を覚えたりはしなか

ったのに。

「どうして」

頭の中が真っ白になる。何も考えられなくなる。
その場に蹲るようにした彼女は、思考を停止した状態である一つの本能に従った。抱え切れなくなった怒りと悲しみをを、発散させる術は何か？
少女にとってそれは、呼吸をするに等しく容易いことだった。

「どうして？」

少女の小さな身体が淡い光に包まれた。――否、少女そのものが発光したのだろうか。
冷たい床に触れた掌の先、接触している部分がぴしりと乾いた音を立てる。次の瞬間、浅く走った亀裂に沿って鮮やかな紅の炎が揺らめいた。

「ウォルディ……」

彼女は自分に秘められた能力を当たり前のものだと思っていたので、それの行使に戸惑いを感じたことはない。自分の“教育係り”に任命された仮初めの兄も同じ力を有していたし、何よりもその能力は彼女の祖父を喜ばせた。少女にとっての異端はむしろ、力を持たない人間たちのほうだったのだ。

「誰が、あなたを殺したの」

少女の怒りに同調するように勢いを得た炎は彼女の身体を中心に、ぐるりと渦を描いて広がった。床から壁へ、壁から天井へと蛇のよ

うに這い伝わってたちまち一面火の海となる。

「許さない……」

少女はふらりと立ち上がると、覚束ない足取りで廊下の奥へと進んでゆく。

彼女がその場から消えた瞬間、残された火炎が現実の熱を帯びて校舎を燃やし始めた。

＊　＊　＊

同時刻。

鬱蒼と生い茂る木々に覆い隠された島の裏側に小さな船が錨を下ろした。人々の目から隠れるよう明確な意志を持って停められたそれから一つの人影が降りてきたことに、この時まだ誰も気付かない。

その人物は単身島へと上陸すると、真直ぐに学園の内部へ入っていった。まるで中の様子など全てわかっているかのように、迷いの無い足取りで。

――エリニュエス＝グロリア全体の様子を把握する能力を持ったルカ・ハーベントが島に帰還したのは、奇しくもこの数分後の事であった。

第五章《迷霧》：テンペスト（4）

運命は絶えることのない川の流れに似ている。
時に緩やかに、時に急流となり、澄んだり濁ったりを繰り返す。雨によって水嵩を増し、日照りによって細くなり、その他の様々な要因に翻弄され形を変えながらもけして逆流することはない。そうして流れるままに辿り着いた先で、誰もが空へと還ってゆくのだ。そうしていつかまた雲から雫となって降り注ぎ、新たな流れの一部となる。
今自分達の上空には、分厚い灰色の雲が広がっているのだろう。いつからそこにあったのかはわからないけれど、それによって激しく掻き乱される——やがて嵐を呼ぶ暴風雨。

「テンペスト」

そう、ロアルは言った。
薄暗い廊下の壁にもたれて、彼女と百瀬は所在なく立っている。大切な撮影機材のうち一つを忘れたというどこか間抜けな亜梨沙と、それを取りに戻るため同行した絹華を待っているのだった。原山は二人から少し離れたところに居心地悪そうに腰を下ろしている。

「……私ね、妹に会ったの」

その待ち時間を利用して、ロアルが自らの身の上話を語り始めたのは突然のことだった。今まで自分の事となると頑なに口を閉ざしていたはずの彼女に、どういった心境の変化があったのかはわからない。百瀬は何も言わず、黙ってそれに耳を傾けた。

「会って直ぐ、逃げられちゃった」

「逃げられた？」
「そう――私あの子に、ひどい事をした。憎まれて当然なの」
そんな、と言い掛けて百瀬は口をつぐむ。
過去に何があったのかなど、他人には計り知れないことだとわかっていたからだ。かわりにあの“会議”の場で出会った、プラチナブロンドの少女を思い浮べた。目の前のロアルに似た、愛らしい娘であったと思う。素直で無邪気そうな――あのような組織に所属しているとは、到底思えない少女。ロザリーと名乗った彼女は、銀色の拳銃を携帯していた。
「私たちの生れ故郷には古くからの忌まわしい風習が残っていて――詳しくは、言えないんだけれど。決められた特定の人物を、この手で殺さなければいけなかった」
「殺す――」
「生け贄とか、そういうのに近い考えだったんだと思うわ」
くだらないけれど、絶対のルールだった。言いながらロアルは力無く笑う。
「私と妹の生まれた家はね、代々黒魔術を生業にしていたの」
「魔、術？」
「信じられないでしょ？　現代に生きる魔女よ――私もあの子も幼い頃から、鴉や髑髏や怪しいタロットやら……そういうのをオモチャ代わりに育って来たわけ」
魔法陣の中で鬼ごっこをしたり、水晶玉でサッカーしたり。
言いながら、きょとんとする百瀬を見てロアルは苦笑した。純和風の環境で生活してきた百瀬にとっては馴染みの無い単語ばかりで、現実味もかなり薄いのだろう。例えばそれは、ロアルが忍者という

職種の人間を知った時の感覚に似ていた。文化の差異は仕方の無いことである。

「とにかく……人を、殺める必要があって」

「うん」

「本当はその“役”は、長女である私がやらなくてはいけなかった――」

「……！」

その告白に百瀬は酷く驚いた。見開いた目が映すロアルは俯いて、きゅっと唇を噛み締めている。

「本当なら、あの組織に行くのは私だったの。あの子は罪を背負う必要なんて無かった、ロザリーは……」

「あたし、も」

やっとの思いで絞り出した百瀬の声に、ロアルも驚いて顔を上げる。見れば百瀬はその真っ黒な瞳を微かに揺らがせて、ロアルでは無い誰かを見つめていた。

「あたし、も。あたしも、自分の役目を妹に押しつけた……」

呟いて、自分で認めて、胸が押し潰されそうになる。

百瀬は逃げ出したのだ。自分に課せられた使命を全うしていればあの日、妹が罪を犯すことなどなかったのに。優しくて臆病な千瀬にあの時何が起こったのか、百瀬にはわからなかった。可哀相な妹。剣の才ばかりに恵まれて、精神の追い付かぬうちにあの道へ追い込まれた。退路を断ったのは他でもない、百瀬だ。

「……私達は、同じ過ちを犯して出会ったんだね」

静かに落とされたロアルの言葉に、百瀬は強く目を閉じた。これは必然の出会いだったのだろう。誰に決められたわけでもなく、贖罪を必要としていた自分達が望んだ。

『あなたも、“そう”なのね？』

はじめてロアルに出会った日のことを思い出す。身一つでこの島に投げ出された雨の日。世話役だと名乗って百瀬に手を差し伸べた、彼女の瞳は哀しみに満ちていた。
ロアルは知っていたのだろうか？

「ねぇ、モモセ。私の妹とあなたの妹は、良い友達になってると思わない？」
「ロア……」

暫しの沈黙の後、それを破ったロアルの声は場違いに明るく一瞬百瀬は瞠目した。けれど直ぐ口元を綻ばせる。ロアルの気遣いが、素直に暖かいと思った。

「うん、そうね――そうだと良い」
「そうだ、あなたの妹の名前を教えて？」

問われたそれに、百瀬は柔らかな笑顔を浮かべてみせた。噛み締めるように、その響きを。

「――――ちとせ」

「百瀬、ロア！」

パタパタと音をさせて駆け込んで来た少女二人の声に、がばりと原山が顔を上げた。頬に爪の食い込んだ跡がついている――どうやら、百瀬とロアルが話し込んでいる間に居眠りをしていたらしい。会話の内容を聞かれていなくて良かったと、百瀬は胸を撫で下ろした。もとより、ロアルはそれを知った上で話を切り出したのかもしれないが。

「そんな急がなくて良かったのに――」

息を切らした亜梨沙に言い掛けてふと、百瀬は違和感に気が付いた。二人の顔色が悪い。

「……どうしたの？　忘れ物は、」
「それはありました！　そうじゃなくて、」
「一咲がいないの」

亜梨沙の言葉を絹華が引き継いだ。この少女が“彼ら”の一員であるなどと、その目で見なければ百瀬は信じられなかったに違いない。絹華の指には内藤紀一の命を奪った、あのアンティーク調の指輪が今も輝いていた。

「かずさ？」
「絹華ちゃんのルームメイトなの。あたしもたまに喋ったりしてたんだけど」
「あの、最近部屋に閉じこもってた――」

「そう。今、亜梨沙の忘れ物を取りに行くついでに私の部屋にも寄ったの。様子が気になったから……そしたらもう、もぬけの殻で」

絹華の顔には焦燥が浮かんでいた。この学園内を一人出歩いているのだとしたら――その危険性は言うまでもない。

それに、何よりも。

「一咲を放って置くことはできない」

「絹華？」

「……一咲は、武藤　駿の妹です」

「――――ッ！！」

その一言で百瀬とロアルは、絹華の言わんとしている事を全て悟った。亜梨沙のいる手前“オリビア”という単語は口にしないが、ルシファーの関係者ならば厄介事に巻き込まれる確率が格段に跳ね上がる。命の危険も、言わずもがな。

（……これは、大変なことになったわね）

ロアルは心中で独りごちた。最近の混乱ですっかり一咲の存在を失念していたが、彼女のことは知っていた。原因はわからないが、武藤一咲はルシファーのことを快く思っていないのだ。何かあったとしても、彼らに助けを求めることはまずない。

彼女がここ数日引き籠もっていたのは、ルシファー組織員の来訪を耳にした為かもしれなかった。ならば何故今、わざわざ外に出たのだろうか――――ロアルの疑問は、次の亜梨沙の一言で解決されることとなる。

「妹……？　う、そ」

「亜梨沙？」

「どうしよう、あたし――あたしのせいだ」

一咲は駿に会いに行ったのだ。亜梨沙の言葉に一同は愕然とした。

「どういうこと……？」

「最近、一咲ちゃんが部屋から出てこないって聞いて。あたし、あの子に元気になってほしくて――話を、あたしの好きな人の話をしてたの……！」

ロアルは目を見開いた。武藤一咲はこの学園に、兄が来ていることを知ってしまったのだ。

亜梨沙が駿の名に辿り着いたのはつい最近のことだ。逐一それを一咲に報告していたのなら、今更になって彼女が行動を起こしたのにも納得がいく。

「一咲ちゃんきっと、家の事情で先に独りで入学してたんです――駿くんが来たのはつい最近だし、あたしが言うまで知らなかったんだと思う。学園がこんな状況になっちゃって……一咲ちゃん、怖かったんだ。お兄さんに会いたかったんだ」

（それは少し、違う）

ロアルはそっと呟いた。亜梨沙の考察は半分正解だ。おそらく一咲は自分の抱えた恐怖の為ではない――組織の一員として危険に身を投じている兄の身を案じたのだろう。その安否を知りたくて、いてもたってもいられなくなったのだ。

「捜しましょう」

手分けして――そうロアルが続けようとした、その瞬間だった。ピピピピピピピ、高い電子音が響き渡って皆ぎくりと身体を強ばらせ

る。

最初に動いたのは百瀬だった。着ていたブレザーの胸ポケットから小さな機械を取出して息を吐く。

「着信だわ」

それはミクから渡されたもので、携帯電話に良く似た形の無線機だった。電波の届かないこの島で使用できる特注品なのだという。緊急時用に三台与えられていて、各グループに一つずつ配ってあった。

「沙南だ……はい、百瀬だけど」

言いながら受話器を耳に当てた百瀬の、表情が次の瞬間硬直した。みるみる青ざめてゆく顔色を皆が不審に思っていると、次の瞬間その手から無線機が滑り落ちる。

「百瀬!?」

床に当たって砕け散る寸前、それを受けとめた絹華が代わりに受話器を耳に押しつける。無機質な冷たさとそこから聞こえた震える声に、絹華は全身の血の気が引いてゆくような錯覚にとらわれた。

『……ぇ、ねぇ、聞こえてる?』

『なぎ、さ……が。渚が、死んじゃった』

第五章《迷霧》：テンペスト（５）（前書き）

気付けば１５０話突破……お付き合いいただいている皆様には心から御礼申し上げます。章を重ねるごとに長くなってすみません……！！この第五章も漸く終結に向けて動き始めました。

第五章《迷霧》：テンペスト（5）

「ど……して……ッ」

引きつった喉の奥から絞り出された声は震えていた。膝から崩れ落ちたまま動くことのできない愛は、ただ目の前に横たわる少女を見つめている。

同じ部活動に所属し、良きライバルとして、友として親しかった彼女――志田　渚を。

事の起こりは数刻前に遡る。

用があるからといって単身何処かへ出かけた渚の言い残した言葉にしたがって、沙南と愛は先に図書室へ入ることにした。撮影を任された後藤は二人の後ろをぴったりついて行き、三人で準備を整えておくことにしたのである。

あの殺された司書が管理していた、第二図書室は今や閑散としていた。はじめてそうした時のように、沙南が抜け道を利用して禁書庫に入ってみせると後藤は子供のようにはしゃぐ。それに笑いながら、どの角度から映すのが一番良いのかを検証しつつ、三人は着々と撮影の準備を進めていったのである――そうして、二十分余りが過ぎた。

はじめに異変に気が付いたのは愛だった。すぐ戻る、という渚の言葉を信じるには、あまりにも時間が経ち過ぎていることに気が付い

たのである。
渚は行き先を三人に告げてはいなかったが、図書室から最も遠い寮棟へ戻ったのだとしても往復十分程度で済んでしまう。運動神経のかなり高い、足の速い渚ならばもっと短く済むだろう。

「探してくる」

言って、一人出ていこうとする愛を引き止めたのは沙南だ。説き伏せて結局、渚の捜索へは三人揃って向かうことになった。
――そうして、渚を見つけた。

「……志田、志田……っ」

愛の悲痛な叫びが廊下一帯にこだまする。あの図書室からそう離れてはいない、歴史系資料室の前だった。
床に顔を伏せるように倒れている渚の肌は蝋人形のように白い。僅かに触れただけで、凍り付くような冷たさが指先に伝わる。
――既に絶命していることは、一目瞭然だった。

（……これは、なに？）

沙南は手に持った無線機をぎゅっと握り締めた。たった今、これで渚の死を百瀬のグループに伝えたのだ。もう一つ、双子のいるほうへも連絡を試みたが繋がらなかった。電波が悪いところにいるのかもしれないが、些か気掛かりではある。

（これは、どういうこと）

もう一度無線機を握りなおしてから沙南は細く息を吐く。激しい動揺に飲み込まれてしまった愛、何も知らない後藤。自分がしっかりするしかないのだ。
極力落ち着こうと努力して、沙南はゆっくり横たわる渚へと視線を落とす。途端身体が震えたが、息を詰める事でなんとかやり過ごした。

（……どうして、死んでるの？）

渚の死に様は、素人目で見ても異常だった。健康的に色付いていたはずの、今は真っ白な手足に血の気は感じられない。しかし出血した様子はどこにも見られなかった。絞殺の可能性も考えて（勇気を振り絞って）首を確認したが、そのような跡もない。

「……かた、い」

渚の身体を抱き起こした愛の、茫然と呟く声が聞こえた。沙南はそれに目を見開く。

（死後硬直……？）

どう考えても渚がその命を失ってから、三十分以上の時間は経過していない。にも拘らず、もうその身体は節々から順に柔らかさを失い始めているのだ。
そんなことが？
混乱のあまり、一体何を考えれば良いのかもわからなくなる。沙南が言葉を失ったその時、我に返ったように後藤が声を上げた。

「お、俺、人を呼んでくる……！　せ、先生とか、とりあえず……っ」

すっかり放心していた後藤は震える膝を叱咤して立ち上がる。この場で自分一人男だという責任感が働いたのだろう、沙南と愛に近くの教室に入ってじっとしているように告げた。

「変な奴が来たらまずいから、隠れてて。俺がどうにか――」

「待ってください」

刹那、後藤の言葉を遮った声があった。小さな音であったがしかし、三人は身体を強ばらせる。恐る恐る振り返った先、目の前に突き付けられた銀色の銃口を見つけて後藤はついに悲鳴を上げた。

「ひ……っ！」

「静かに。騒がないで」

「あ、あなた……！！」

現れた少女は余りにも物騒な物をちらつかせていたが、沙南と愛とは顔馴染みである。ロザリーちゃん、沙南が呼べば少女はその銀髪を揺らし、困ったように小さく笑う。……その表情は姉に、良く似ていた。

「ごめんなさい、おとなしくして」

「な、」

「騒ぎを大きくされては困るの」

今にもこの場を飛び出していきそうだった後藤を強制的に銃で制止して、ロザリーはそう言った。何も知らない一般人には、いざとなれば脅しも辞さないということか。

ぼんやりそれを眺めていた沙南は、後藤の顔色が蒼白になっていることにだいぶ時間が経ってから気が付いた。あまりにも可哀想で助

け船を出してやる。

「あ、の。ロザリーちゃん。銃、下ろしてあげてくれない？　たぶんその人、もう逃げないと思うし」

「そう？」

首を傾げて、しかし次の瞬間にはロザリーはあっさりと銃口を後藤からはずした。命の危険から漸く解放された後藤はへなへなと床に座り込む。

「ごめんね？」

ロザリーに顔を覗き込まれ、慌てて後藤はこくこくと頷いた。

「ロザリーちゃん、どうしてここに？」

一段落ついてようやく沙南が疑問を口にする。問われた少女はすっと目を細目、渚のほうへと視線をやった。

「“サナ”、それから“アイ”。あなた達の監視があたしだったの。でも――その子が殺されたのに、気付けなかった」

ごめんなさい。言いながらロザリーは、どこか腑に落ちない顔をしていた。問えば、気付けなかったことが自分でも信じられなかったのだという。

この少女が、自分達には知り得ない感覚と実力を有しているのであろうことは沙南にもわかっていた。ではロザリーが出し抜かれるほどの相手に、渚は。

「その“ナギサ”のこともちゃんと見てたの。一人だけ別行動はじ

めたときも――あれ？」

説明をしていたロザリーがふと言葉を区切った。次の瞬間、渚と愛のもとへ少女は移動する。

「この、死に方……」

臆することなく屍となった少女の身体に触れながら、ロザリーはぽつりと呟いた。誰に聞かせるわけでもない独り言のような声が、愛と沙南の耳にも届く。

「これ、知ってる」

「どういうこと……？」

問えば、ロザリーは沙南の目を真っすぐに見つめ返した。無垢な瞳に見据えられて僅かに沙南は息を呑む。

「真っ白に、なってるでしょう？　死んだばかりなのに、もう冷たいでしょう？」

「……ええ」

「これはね、身体中の血を全て抜かれてしまっているから」

何でもない事のように落とされた言葉に沙南も、愛も瞠目した。すっかり耳を塞いでしまっている後藤には届いていないだろう。

「血を、抜く」

「そう。この殺し方を、見たことがある」

全身を巡る血液を、一滴のこらず抜き出してしまう。そんな事が可能なのだろうか？

吸血鬼みたいだ、混乱しきった頭で沙南は思う。そんなの、

「人間業じゃない……」

「うん、そうだね」

「見たことがあるって、どういう、こと」

虚無に包まれたような声で、けれどしっかりとそう問い掛けたのは愛だった。今まで抱き締めていた渚の身体からゆるゆると腕を放し、代わりにロザリーに強い視線を送る。

「見たことがある、って。誰がやったか、知ってるって事ね」

「……うん」

あたしもどういうことなのかわからない。僅かな困惑を滲ませてロザリーは言った。

「でもこんなことができる人を、あたしは一人しか知らない」

言いながらロザリーはゆっくりと一ヶ所、廊下の奥に身体を向ける。自然それにつられて同じように視線をやった、沙南の目に鮮やかな金色が映った。

――あれは。沙南の瞳が驚愕に見開かれる。

「ねぇ？　ミク」

廊下の奥にすらりと立つ、その人影にロザリーは声を掛けた。

「この子を殺したのは、ミクでしょ」

その声は確信を告げていた。

ミク・ロヴナスは黙って一つ、ゆるりと瞳を瞬かせる。

第五章《迷霧》：梔子の声を聞け（1）

志田渚が死んだ。
無線機を切った絹華は焦る気持ちを必死に押し込めた。ここで取り乱し判断を誤っては、今まで自分が行ってきたことが全て無意味なものになってしまう。
死んだとは即ち、殺されたと言うことだ。連絡を受けたこの場の人間は瞬時にそれを悟っていた。先刻は取り乱した百瀬も今は努めて冷静でいようとしているし、ロアルも息を潜めて絹華の指示を待っている。

（首領直属特殊部隊に妹を持つ二人、か）

おそらくは過去にそれなりの経験をしたのだろう、死を冷静に受けとめることのできる二人は絹華にとってやりやすい存在だ。問題は亜梨沙と原山だが、少年のほうは状況を把握しきれずぽかんとした顔を浮かべている。亜梨沙は“渚の死”という状況にのみ反応し軽いパニックを起こしていたので、余計な詮索はされずに済みそうだった。

「嘘、渚が、嘘……！」
「とりあえず、あっちのグループと合流しよう」

絹華の言葉に頷いて百瀬が立ち上がる。ロアルもそれに続こうとして、ふとその動きを止めた。絹華がはっと顔を上げる。
――少女達の前に姿を現したのは二人の少年だった。ロアルが一瞬身体を強ばらせたが、その見覚えのある顔に眉を寄せる。

「あれって、二棟の」

そう呟いた亜梨沙もまた彼らを知っているらしい。そのままの態勢で少年達の接近を待っていると、こちらに気付いたらしい片方がすっとんきょうな声を上げた。

「うわッ！　お前ら何してんのォ！？」

言いながら思い切り顔をしかめた彼の名を、山岡浩樹という。サッカー部に所属していて、実は駿や亮平と共に中庭で試合を行ったこともある（絹華達は知らないが亜梨沙は把握していることだ）。もう一人、その山岡と共に歩いてきた少年は鹿島（かしま）充という。部活は公式野球部だ。

「何って……」
「あのなァ、」

言い淀むロアルの言葉を待つ気は無かったらしい山岡が、些か焦ったように口にした言葉に次の瞬間一同は仰天する。

「ぼさっとしてないで早く逃げろよ。火事だぜ火事」
「え、」
「えぇえ！？」

声を張り上げた亜梨沙を宥めるように今度は鹿島が説明に回る。それを百瀬もロアルも、絹華でさえもぽかんと見つめていた。

「気付いてないのか、すぐここの裏だぜ？　景気良く燃えちまってる」
「そんな……」
「火災報知器、壊れてるみたいで。一応天井のセンサーが反応して

水は出てるけど、うまく消えるかどーか」

話によれば、外出禁止令の中どうしても外に出たくなった山岡と気紛れで付き合う気になった鹿島が二人ふらふらと歩いていたところ、火災現場に出くわしたということだった。本当は爆発のあった例の教室を見に行く気でいたらしい。

場所は何の変哲もない教室と教室の境で、火元は見当たらなかったという。放火かもな、と山岡がぼやいた。

「警備は出払ってるし、センセーは皆して引っ込んでるし。まぁ教室の一つや二つ燃えたところで俺は痛くも痒くもねんだけど」

「一応、人がいたらヤバイから見とこうってことになってさ……そしたら、お前らこんなトコにいんだもん」

びっくりするよな、と鹿島が笑う。

火事なんてまったく気が付かなかった——絹華は独りごちた。ここまではまだ煙も届いていないが、じっとしているわけにもいかないだろう。一体、いつ火災が発生したのか。静かに迫りくる火の手を想像して少女は眉をひそめた。人為的なものであることに間違いは無いだろう。狙いは？　放火は“オリビア”によるものなのか？

「今日外に出る馬鹿は俺らくらいかと思ってた——予想外。ちょっとまずいかもな」

他にも校舎をうろついてる奴がいるかもしれない、と山岡が呟く。そんな素振りは見せないが、この少年は正義感が強いのだ。今自分にできることは何かを理解したのだろう。

「誰か巻き込まれて死んだら、夢見悪ィし。俺、ちょっと見てくるわ」

お前ら早く逃げろよ！
そう言い残して山岡は少女達に背を向けた。持ち前の運動神経を発揮し、走り出せばあっという間に遠ざかってゆく。
しばらく皆と同様にそれを眺めていた百瀬はふと、この場にまだ鹿島がいることを思い出した。

「鹿島くんは？　逃げないの」
「ああ、うん」

ぼうっとしていたらしい、鹿島は不明瞭ないらえを返した。ゆっくり瞬きをしてから百瀬のほうを見る。

「お前らが、いなくなったら……」
「見張る気？　ちゃんと避難するわよ」
「あー、うん。そうなんだけど」

どうも要領を得ない。ぐずぐずしている暇はないのだと理解している、百瀬の口調は自然厳しいものになった。一刻も早くこの場所から離れなければならないし、沙南たちの元へも向かわねばならないのだから。

「だから、何」
「えっと……お茶でもしない？」
「ふざけてんの？」
「冗談だって」
「鹿島くん」

ついにはロアルまでもが声を上げた。その身に任された使命とはまた別に、第四棟寮長としての責任も彼女は負っている。

「……ちょっと鹿島くん、あなたまさか寮に戻る気ないの？　私、二棟の寮長に連絡する義務があるんだけど」

自分達のことは棚に上げて軽い脅しにかかったロアルに、しかし鹿島はへらりと笑っただけだった。

「……なんなの」

「いや、その……はい、ハイハイ！　わかった睨まないでって」

おどけたように両手をあげた鹿島に、少女達はどこか違和感を覚え始めた。あえて明るく振る舞おうとしているような彼は、どう見ても不自然だったのだ。早く逃げろと言いに来たはずの少年が、まだこの場所に居座っていることも。百瀬たちの避難を促す素振りさえ見せない。

「俺、お前らに聞きたいことがあってさァ……」

絹華がすっと目を細める。言葉の裏に含まれた何かを敏感に感じ取った、それは少女の経験から培われたものだ。何かが、おかしい。まるで、自分達をこの場に留めていたいかのようだ――思ってはたと絹華は少年を見据える。

（……時間稼ぎ）

何から？

「聞きたいこと？」

「そう。さっきの、山岡の質問の続きだよ――――お前らここで、何してんの？」

びくりと百瀬が身体を震わせたことがはた目にもわかった。ロアルがそれに近づいて、ぎゅっと百瀬の手を握る。
亜梨沙と原山だけがその緊張感を感じ取れず、馬鹿正直に答えを返した。

「撮影だよ？　学園展で発表するための課題作り」
「こっちの人らが調べてた“学園の七不思議”ってのを、俺ら映研が撮らしてもらおうって話で――」
「そうじゃない」

原山の言葉を遮った鹿島の声は、抑揚を失っていた。冷たいその響きに、誰もが事態の異常さを悟る。

「か、鹿島……？」
「一棟の原山だな？　お前、たぶん無関係意味ナシ。すっこんでろ」

一瞥されて、ひくりと原山は喉を震わせた。それっきり黙り込んでしまう彼を鹿島は満足そうに見つめ、再び口を開いた。

「お前らが“本当にやろうとしてること”を、聞きたいんだよ」
「――何者ですか」

絹華が静かな声を上げた時にはもう、ロアルも百瀬も理解していた。
恐れていた事態が起こってしまったのだ。
登場の仕方が仕方だけに、すっかり気を抜いてしまっていたのに――
――この、鹿島充という少年は。

「あなたは、何なんです」

ほぼわかっている回答を絹華は求めた。後ろに回した右手の、指で指輪を触りながら。
鹿島はニッと不敵な笑みを浮かべながら、右手を制服のポケットに突っ込んだ。

「言ったろ？　お前らが“いなくなれば”、俺も寮に帰るよ」

瞬間、亜梨沙が甲高い悲鳴を上げる。ポケットから再び現れた少年の手には、鋭利な刃物が握られていたのだ。小さいが、かなり丈夫な造りをしていることが見て取れる。

「帰るよ。俺がお前らを、綺麗に消してからさァ」

尻餅をついた亜梨沙はそのまま動くことができずに目を見開いていた。鹿島は一つ舌なめずりして、その腕を振り上げる。

「アリサ……ッ！」

叫んだのはロアルだったのか、百瀬だったのか。両方だったのかもしれない。
しかし、振りかざされた切っ先が邑智亜梨沙を貫くことは無かった。二人の叫び声と重なって聞こえた一発の銃声により、鹿島がその動きを止めた為である。
銃弾は鹿島の足元、僅か数センチずれた床にめり込んでいた。とっさに少年が避けなければ、確実にその足を抉っていただろう。

「――鹿島ァ、俺もお前に聞きたいことがあるんだ」

武藤駿は真っ黒な銃身をトントンと肩に二度叩きつけ、目を細めて笑ってみせた。

第五章《迷霧》：梔子の声を聞け（2）

「……武藤、駿」

茫然と落とされた声は亜梨沙のものだった。名を呼ばれた駿は少しだけ少女のほうに目をやると眉を寄せる（何で知ってんの？　と、その顔には書いてあるかのようだった）。しかし次の瞬間には真っすぐに鹿島を見据え、ガチャリと手に持った銃を鳴らす。

「よォ武藤。良いもん持ってんね？“ピースメーカー”かぁ」

「その呼び方はあんまり好きじゃねーんだけど」

銃口を真直ぐに持ち上げたまま駿は口角を引き上げた。

突然飛び出したわけのわからない単語に、亜梨沙や百瀬は目を白黒させる。

「ピースメーカー？　え、何？」

「……あの銃のことです。コルトＳＡＡ（シングル・アクション・アーミー）」

答えたのは絹華だ。彼女は百瀬とロアルを背後に庇うようにしながら、どうにか亜梨沙を鹿島から引き離せないかと考えていた。

原山は目の前の出来事が信じられないのだろう、放心してしまって役にはたたない。……同じ制服を着た友人が刃物やら銃やらを突然持ち出したのだから、無理もないのだろうが。

「装填弾数は六発――今撃ったから残り五だな？　シングルアクションってめんどくねェ？　俺はダブルのほうが好き」

「慣れればそうでもねーよ」

まるで携帯電話の新機種を買った友達に、使い心地を聞いているかのような口振りだった。いつ撃たれるかも知れぬ状況で鹿島はにこにこと笑ってみせる。
その様子を見て、場慣れしている、と絹華は思った。

「……さて、と」

戯れのような会話に暫し付き合った後、駿はすっと真顔になる。辺りを取り巻く空気が一気に張りつめた。

「この状況を説明してもらおうか、鹿島」
「……見てわかんねェ？」

問われた少年もまたふっと身に纏う空気を一変させる。膨れ上がったそれが殺気だということは、一度経験のある者ならば誰にでもわかることだった。

「わかるから、聞いてんだよ」
「……ぷっ。あははは、面白いなー武藤は。こう言えば良いのか？」

にたりと人の悪そうな笑みを浮かべて、鹿島充は言い放つ。

「お前等、皆殺し」

駿が二発目の弾丸を放ったのと鹿島が地を蹴ったのは同時だった。再び甲高い悲鳴を上げた亜梨沙の襟首を絹華が掴んで引きずり寄せる。一飛で駿の傍まで近付いた鹿島は手にしたナイフを振り上げたが、下ろすより先にその肘を掴まれ動きを止めた。
鹿島はそれに焦った様子など微塵も見せず、ぺろりと上唇を舐める。

「……ッ！」

刹那、極少量の紅が散った。鹿島がくいと手首を捻った瞬間、今まで三寸程しかなかったナイフの柄が勢い良く伸びたのだ。一瞬の変化を読んで飛び退った駿の、頬を僅かに切っ先が掠めて血が流れる。

「仕込みか、」

「良い動きすんね、さすが武藤。もうちょいで串刺しだったのに」

「……そいつはゾッとしねェな」

軽口を叩き合っているようにも聞こえる、二人の少年の目は本気だった。小振りのナイフから転じて腕よりも長い、剣のような物に変化した鹿島の得物を見て駿は舌打ちする。不意でも突かないかぎり銃弾を当てることは難しいし、駿の持つジャックナイフやスローイングナイフではリーチにかなりの差があった。

「俺は中距離戦が得意でね。これが本来のスタイルなわけ」

笑みを浮かべながら鹿島がにじり寄る。駿は頬の血を手の甲で強く拭うと、意を決したように袖口からナイフを滑り出させて持ちかえた。代わりにコルトＳＡＡは絹華に放り投げる。自分の身は自分で守れと言っているのだ。

「おや、刃物（そっち）で俺とやり合う気なんだ？　まぁ良い判断だな、弾の無駄遣いだし。その短い刀身でどのくらい対抗できるか見物だ」

「鹿島、お前随分とお喋りなんだな。……その軽ーい口で、ついでに答えてもらおうか」

胸の前まで引き上げた腕でナイフを正面に構える。駿はそのまま、真直ぐな視線を鹿島に送った。

「“オリビア”ってのはお前等のことか？」
「……良くご存じで」

くつくつと喉の億を鳴らしながら鹿島は首を竦める。冗談を言うようなその仕草の中でしかし、目だけは鋭利な光を帯びていた。

「“オリビア”は組織名か？　それとも、親玉の名前か」
「ご想像にお任せするよ」
「お前達の狙いは？」
「企業秘密につきノーコメント。――こっちからも質問だ」

鹿島は目を細めて周囲を一瞥した。鋭い視線に射ぬかれて亜梨沙と原山が身体を震わせる。百瀬とロアルは息を呑み、絹華だけは正面からそれを受けとめた。

「武藤こそ、どっからの回し者なわけ。もしかして【コンタツ】と【ゴスペル】を殺ってくれたのはお前？」
「……ゴスペル」

その名には聞き覚えがあったが、正確にはそれの始末をしたのは鮎村絹華であった。【コンタツ】なる人物のことはわからないが、間違いなく鹿島の仲間なのだろう。
駿が口に出さずに黙っていると、鹿島は大袈裟に溜め息をはく。

「はぁぁァァ、そっちはだんまりってワケ？　ひどいなァ、フェアじゃないぜぇ」

ふざけてめそめそと泣き真似をしてみせる鹿島を駿は睨み付けた。言われる筋合いではない、言い返してやろうとしてふと目を細める。

――涙する鹿島の姿が、駿の記憶の一場面と重なったのだ。

「……そうか」

「なにがー？」

けろっと顔を上げる鹿島に向かって駿は笑みを浮かべた。場の空気が凍り付くような冷たさを孕んだ笑顔に、思わず絹華でさえもぞっとする。

「思い出した――すっかり騙されたぜェ、鹿島。清川の死体を見つけたのは、お前だったな」

清川芽衣子が物言わぬ姿となって見つかったあの日。第一発見者は早朝から部活の為に部屋を出ていた、鹿島充であった。

動揺を顕に播磨亮平の部屋に駆け込んできた、その姿を駿は見ている。残虐さの欠片も見えない、ただの男子生徒のように見えていたのに。

「……ああ、メイコちゃんね。可哀想だったなぁ」

哀れむように呟いて鹿島は笑った。

「俺たちの仕事中に出くわしちゃったばっかりにさァ。ほら、“死人に口無し”って言うじゃん。余計なこと言われてもめんどいから」

「お前が殺ったんだな？」

「直接殺したのは俺じゃねーけど、まァそんな感じ」

あの日発見者を装って亮平を尋ねたのは、駿の反応を見るためだと鹿島は笑った。もとより鹿島らは武藤駿が、ただの生徒でないことに気が付いていたのだ。

“入れ替え”でやってくる生徒のうち、部屋の空きがある三棟ではなく特例で二棟へ入った。その異常なまでの運動神経の良さは目を引いただろう。暫らく見ていれば、時折不自然に姿を消すこともわかってくる。

「ま、結局武藤のバックに何がいるのかはわかんなかったけど」

至極残念そうに呟く少年に、そーかよと駿はいらえを返した。駿とて自分を見張る動きに気付かぬ程愚鈍ではない。相手を見つけようと思わなかったのは、極力余計な動きをせぬよう上から命令されていたためである。

動けばその分隙もできる。駿が耐えた甲斐あって、鹿島もルシファーまでは辿り着かなかったようだった。

「もう一つ聞きてェんだけど」

「なに？」

駿の問いに鹿島が首を傾げた。随分と余裕があるらしく、剣をぶらぶらと揺らしてみせる。

「ウォルディを殺ったのはテメーか？」

「さぁ、知らないな」

「……そうか」

その声を合図に二人は動いた。ガキィィィン、刃と刃のぶつかり合う高い音が響き渡る。こぜりあう刀身の隙間から火花が爆ぜた。

鹿島がぱっと身体を引いたかと思うと、次の瞬間激しい突きを繰り出した。電光石火の一太刀を躱して駿は相手の胸元に飛び込むが、上から降る刃に邪魔される。長さを利用した攻撃を短い刃で弾きながら駿は唇を噛んだ。

「き、絹華……！　助けてあげられないの！？」

たまらず百瀬が声を上げる。彼女は絹華の指にある輪が、速効性の毒であることを知っていた。

「駄目、悔しいけど――手を出す隙がない」

絹華もまた唇を噛む。得物の長さにあまりにも差がありすぎるのだ、駿が苦戦を強いられていることは明白だった。しかし男二人の拮抗した力によるコンマ数秒の攻防に何をすることも叶わない。絹華は己の戦闘力を把握していた。もとより専門は劇薬の取り扱いで、肉弾戦には向いていない。足手纏いになりこそすれ、助けになどなりようも無かった。所持しているのは仕掛け指輪と睡眠薬、青酸カリのカプセルと手榴弾二つ、それから駿の銃だけ――役には立たない。

「二人でかかってきても無駄だぜー」

余裕を滲ませた声で言う、鹿島の切っ先が駿の肩を切り裂いた。上手く急所は外したものの出血は押さえられず、駿はまた小さく舌打ちする。

「俺たちはさ、エキスパートなわけ。候補者七千人の中から才能がありそうな奴だけ選び出されて、六歳の時から訓練受けてんの」

「……は、そりゃすげーな。お前ホントに日本人か？」

「四分の一はドイツ人だぜ。いくら武藤がスポーツできてもなァ、武器（これ）の扱いに関しちゃ負ける気がしないね……っと！」

言いながらまた振り下ろされる鹿島の刃を避けて駿は息を吐いた。エキスパート、呟いて笑う。それに比べればルシファーの戦闘員、

ＥＰＰＣなど大半が元は素人だ。
入隊してから訓練を受けられるとはいえ、やはり戦闘は殆どを個々の持つセンスに頼ることになる。経験値だけで言えばかなり低いことになるのではないだろうか。

「……でもたまーに、いるんだぜ、うちにも」
「あん？」
「小さい頃から修業積んでるような奴が、さ」

勢い良く剣を振り回す鹿島には聞き取りづらかったらしい。首を傾げる少年に駿は小さく笑いながらその名を呼ぶことにする。
何故だろう、ともに戦い続けるうちに何かが繋がるのだろうか。駿には“それ”の近付いてくる気配が先刻からわかっていたのだ。

「やっぱ中距離戦は日本刀の領分だよな――なぁ、チトセ」
「――そうなの？」

笑うような声に駿以外の全員が驚愕する。
皆が振り返ったその先には、日本刀を携えた黒髪の少女が立っていた。

第五章《迷霧》：梔子の声を聞け（3）

まだあどけなさを残す顔立ちには不釣り合いな一振りの刀。鞘も鍔も柄も、全てが持ち主の髪と同じ艶やかな黒色をしていた。少女は一度だけ瞬きをすると、その白い手で刀の柄を握る。親指で押し上げるようにして鯉口を切り、流れるような動作でそのまま刃を引き抜いた。光の元に晒される白刃のしゃらんと唄う声が響き渡る。

「だれ……？」

呟くような亜梨沙の声と、百瀬が声を上げたのはほぼ同時。

「……ちと、せ」

ロアルがはっとして隣の少女を振り返った。百瀬はその眼を際限まで見開いて唇を震わせている。両の手をぎゅっと握り締め、叫び出しそうになるのを堪えているようだった。

チトセと呼ばれた新たな娘は、すらりとした細身の刃物を真直ぐ鹿島に向けて構える。ロアルの瞳に映ったその姿は、百瀬と酷似していた。

「ずいぶん遅かったじゃねーか、チトセ。どこで油売ってたんだ？」

「これでも色々忙しかったの。……シュンこそ大丈夫？　なんかずいぶんボロボロだけど」

「ほっとけ」

お互い心配もしただろうに、二人はそれをおくびにも出さなかった。軽口を叩き合うことによって相手の無事を確認する。

「よくここがわかったな」
「オミが、連れてきてくれたの」
「オミぃ？　その本人は今どこにいるんだよ、」
「火を消すって――なんか、ここの裏燃えてるの」

ああ、と駿は頷いた。すっかり忘れていたが、もたもたしていてはここまで火の手が届いてしまう。
千瀬の参戦によって状況はようやく五分。駿は辺りを見渡して冷静にそう判断する。
絹華が戦闘に不向きであることは上から聞いて知っていた。他の生徒に危害が加わらないように戦うのは骨が折れることだし、かといって逃げろと言うわけにもいかない。ルシファーの監視下から外れたところで別の敵に襲われては為す術が無いからだ。どうしても、二人目の戦力は必要だった。

「やり方はわかってんな？」
「大丈夫」

駿の問い掛けに迷わず千瀬は頷いた。普段の任務において、二人はチームを組んでいることが多い。相手の懐に飛び込み短刀で戦う接近戦向きの駿と、日本刀のリーチと自らの跳躍力を利用した広い間合いを持つ中距離型の千瀬。それに銃を用いる長距離戦用のロザリーを加えれば全ての事象に対応が可能だ。
ルシファーにおいて、この形式の戦闘訓練は何度も行った。千瀬は駿を、駿は千瀬をサポートする戦いに慣れている。

「……へぇ。君、生きてたんだ」

新たな来訪者を暫し見つめていた鹿島がぽつりと呟いた。酷くつまらなそうな口振りであったが、千瀬は少し笑って彼と目を合わせる。

「その節は、どうも」
「アレ、毒性のすっげー強いヤツだったんだけどな。どうやって生き延びたんだか知らないけど、時間の無駄だよ。君、俺に勝てなかったじゃない」

ハッと他人を馬鹿にするような笑い方をする鹿島に機嫌を損ねることもなく、千瀬はことりと首を傾げる。

「あの時は、あなたじゃなくて後ろからきた別の人にやられちゃったんですよ」
「……一対一なら勝てるとでも？」

ピキリと鹿島の眉間に青筋が立った。やってみなければわかりません、堂々と言い放つ千瀬に駿はピュウと口笛を吹く。やけに肝が座っている。

「その自信はどっからくるのさァ」

駿も疑問に思ったことを鹿島は問いとして口に出した。一度は仕留め損なった相手だ、千瀬に余裕があるとは思えない。

「別に、自信なんて無いですけど」

……でも負けられないから。
言い放った千瀬の背負う強い意志の正体に、そこで初めて駿は気が付いた。今この場には、千瀬の実姉がいるのだ。
黒沼百瀬――少女の戦う唯一の理由。

「それに、あなた達はもう終わりだよ」

「はァ？」

少女の聞き捨てならない台詞に鹿島が眉を寄せる。相手の怒りレヴェルを着々と引き上げていることにも気付かず、千瀬はのんびりと言葉を紡いだ。

「あなたの名前は、何ていうんですか」

「はぁぁ？」

「コードネームがあるんでしょ？」

「……良く知ってんじゃん」

クッと口元だけで笑って鹿島は答えてやることにする。このどこか風変わりな少女に興味が湧いたのだ。ほんの気紛れにすぎないが。

「――【洗礼（バプテスマ）】だよ」

「じゃあ、あなたを抜いてあと二人」

ますます意味のわからないことを言われてついに鹿島は笑顔を引っ込めた。内側に溜まっていた苛立ちが顔に表れはじめる。そのすぐ近くでは駿も目を白黒させていた。

「おいチトセ、お前少しはわかるように……」

「この島に来た“オリビア”の人間は全部で六人。それぞれにコンタツ、ゴスペル、バプテスマ、ペルソナ、ジーザス、ミリアムの名前がついてるの。違いますか？」

「……何故、それを？」

鹿島の瞳の色が変化した。先刻駿と戦っていた時のような明らかな殺気を帯びてゆらゆらと揺らめく。

千瀬はさして気にしたふうもなく、刀の鍔をするりと指先で一つ撫

でた。

「あなた達の雇った者より腕の良い情報屋が、この世にはいるってことですよ」

「俺達のコードを正確に割り出したって……？　そんなこと、」

「できてるじゃないですか。……とにかく、その中で生き残りはあなたを入れて三人です。あなたはここで死ぬから、あと二人」

「……はは、あははは！　言ってくれるじゃないかこのガキ！」

「――ッ、チトセ！」

ダンと音を立てて鹿島が跳躍した。床を蹴った位置から一瞬で移動し現れたのは千瀬の真上。振り下ろされた一太刀は重い音を響かせながら少女の刀に受けとめられる。ギリギリと微妙な均衡を保ち静止する二本の刃を挟んで、鹿島は千瀬を真っ正面から睨みつけた。千瀬の瞳には凪いだような静けさだけが浮かんでいる。

「一つ言っとこうか。引き算が間違ってるぜおじょーちゃん」

「どうして？」

「うちのメンバーでやられたのは【コンタツ】のハゲ親父と【ゴスペル】だけだ。残りは俺を入れて四人だよ」

「間違って、ませんよ」

キンと高い音を響かせて一度二人は距離をとる。白刃を正眼に構えた千瀬は静かに、淡々と事実だけを述べた。

「――【仮面（ペルソナ）】は先程こちらで始末しましたから」

第五章《迷霧》：梔子の声を聞け（4）

「この子を殺したのは、ミクでしょ」

金髪碧眼の少女は否定も肯定もしなかった。瞠目したまま動きを止めている沙南や愛に目をやって、ロザリーは僅かに逡巡する。そしてほんの少しの沈黙の後、やはり躊躇うように口を開いた。

「ずいぶん前だけど、見たことがあるの。ロヴにも教えてもらった……ミクは相手の正体を探る時、こういう殺し方をするのよね？」

「……ロザリーちゃん……？　なに、言って」

「相手の血を抜き取って調べるの。ミクにはそれを読み取る力がある――違う？」

困惑の声を上げる沙南には答えず、ロザリーは一息に言い切った。一滴残らず生き血を抜き取ったにもかかわらず死体が枯渇し干からびないのは、ミクが特殊能力者であるからだ。彼女は常人と異なる次元で生きている。ただびとの法則は、ミクには何の枷にもならない。

「ミクになら、できる。いいえ、ミクにしかできないんだよ。ロヴが言ってた、ミクはルカ達とは違う可能性を持ってるからって――」

「ちょっと待って……っ、待ってよ！」

皆まで言わせずに愛が勢い良く立ち上がった。渚の亡骸を床に再び横たえた、次の瞬間にはミクの目の前に立ちはだかる。

「意味わかんない……！　何なの、何言ってんの？」

「――――、」

「調べたって何を？　渚が何をしたって言うの！？　アンタが、アンタが……ッ」

今にもその胸ぐらを掴み上げる勢いで言葉を浴びせる愛を、ミクは冷ややかな目で見下ろしていた。あまりの剣幕に驚きを隠せないロザリーと、もはや頭の回転を放棄させてしまった沙南の前で愛は絶叫する。

「まさかアンタが本当に、志田を殺したの……っ！？」

「――――そうよ」

漸く口を開いたミクの、その言葉に愛と沙南は愕然とした。後藤はぽかんとした後、次の瞬間には小さく悲鳴を上げて後退る。――刹那、パァンと乾いた音が響き渡った。

「ふざけんな……！」

「愛！？」

「ミク……っ！」

沙南とロザリーの声が追って重なる。ミクの頬を平手で打った愛は激情のままに、その金の髪が流れる襟元に掴み掛かった。

「ふざ、けるな……ッ！　あたし達が何したっての！？」

「愛、少し話を聞こう！？」

「アンタ達の為に働いてたんじゃないか、アンタ達が巻き込んだんじゃないか！！　何で、何でなの、何で殺すの、護ってくれるんじゃなかったの！？　志田は無関係なのに！！」

激昂する愛にしばらくされるがままになっていたミクは、その言葉を聞いてすっと目を細めた。胸ぐらを掴み上げるスポーツで鍛えら

れた腕に自らの手を重ね、静かに愛と視線を合わせる。

「……手を、離しなさい」

「だ、れが……誰がアンタの命令なんか聞くもんですか」

「説明してあげるから、離してちょうだい」

「ざけんな、返せよ……志田を返せよ、この人殺し……！！」

瞬間、沙南は突如変化した空気を感じて背筋を粟立たせた。何か良くないものを呼び覚ましてしまった、わけのわからぬままそう思う。

「……は　な、せ」

「ミク、駄目！！」

ロザリーの叫び声が聞こえたような気がした、次の瞬間愛の身体は宙に放り出されていた。それに気付いた時には突風のようなものに巻き込まれ、勢い良く壁の方へ吹き飛ばされる。

（叩きつけられる――！）

愛は強く両の眼をつぶった。しかしいくら待っても予想した衝撃は訪れず、恐る恐る目を開けばぽかんとした顔の沙南が見える。

……何故なのだろうか、愛は両足でしっかりと床を踏みしめていた。

「もう、驚かせないでよ……」

「面倒だったのよ」

愛のいる位置から少し離れた所でロザリーとミクが会話をしている。

今のは何だ？

愛の疑問を代弁したのは同じ気持ちでいたのだろう、沙南だった。

「あの、どういうことですか。血を抜いて、調べる？　それに今の……今、愛の身体が浮いて……」
「あたしがやったの」
平淡な声で言い切るミクにますます沙南は困惑する。
「そんなのできるわけ……！　人間の力じゃ、こんな」
「あたしは人間じゃないもの」
「ちょっとミク、そんな言い方……」
諫めるような声を出すロザリーとは相反して、沙南と愛は二人揃って目を点にした。言われた意味が全くわからなかったのだ。
「人間じゃ、ない……？」
「そうよ。だからあたしは手を使わずに貴女を移動させることもできるし、人間の身体に傷を付けず血を抜き取ることができる。搾取した血液を使って様々な情報を読み取ることもできる。……まずここまで頭に叩き込みなさい」
有無を言わせぬ口振りだった。二人の少女は顔を見合わせた後恐る恐る頷く。
疑っては話が進まないし、何よりも今見たことはそれ以外で説明のしようが無かったのだ。
「……じゃあ、何故。どうして、志田を殺したんです」
漸く冷静さを取り戻したらしい、愛がまだふらつく頭に手をやりながら問い掛けた。
自分達を納得させられるだけの理由が欲しい。そう告げれば、ミクは静かに頷く。

「少し前、うちの組織からこの学園に派遣していた戦闘員が一人重傷を負った。その戦闘員をやった相手をあたしは探してたの」
「探す、って」
「さっきも言ったけど、あたしは貴女達の予想を超えるような――ちょっと特別なことができる。負傷した戦闘員から戦いの記憶を読み取って、その時の敵にあたる“気配”を探していた」

ミクは様々な物に残る記憶（メモリー）を読み取ることに長けた能力者である。あまり時間が経っていないものならば、それに触れただけである程度の情報を得ることができた。
古い情報を求める場合に限って、血液など読み取るものの成分を手に入れる必要がある。それも本当ならば一部だけでかまわない。――沙南達には告げないが、ミクが志田渚の全血液を抜き取ったのは最初から“彼女だ”とわかっていたからだ。殺す目的で、全て奪った。

「だからうちの戦闘員に手を出してくれた“そいつ”の、漠然とした“気配”はわかってた。でもね、本人に会うまで照合はできない。この学園にいる全員を見て回るなんてことはできないから、困ってたの。そしたら――」

最後の決着を付けるため、サポートの生徒に芝居を打たせた。事情を知り協力にあたっている“七不思議班”の女生徒達が、芝居の一貫として連れてきた新たな人間。映画研究サークルを中心とする“撮影班”の生徒達。
ミクは見つけたのだ。ルカと共に陰から、その場にいた全員の顔と名前を確認した――志田渚が、その中に。

「一目見てわかったわ。あたしの探していた“気配”はそこにいる『シダナギサ』のものだって」
「そ、そんな――！」
「うまく殺気を隠してはいたけれど、無駄なのよ。あたしが読み取る“気配”は本人の内側にある生命の色」
上辺で判断しているわけではないのだ、そう言うミクの言葉をしかし愛は信じられなかった。
「志田がそんなこと、できるわけない！　運動が得意なくらいの、フツーの女の子なんです、」
「できるんじゃないかしら？　うちの戦闘員は別の敵――たぶんこっちは男――と交戦中に、背後から不意打ちで毒を注入されたのよ」
「でも、志田はそんなふうには見えない！」
信じたくない。心の底から真実を否定する愛に、ミクは冷ややかな声を浴びせかけた。
「貴女は全てを見た目で判断するのね。うちのシュンに会ったでしょう、ただの生徒を演じてはいたけれど、あれだって武器を振るうのよ」
「それ、は……」
「そこにいるロザリーは十一の時に初めて人を殺した。その負傷した戦闘員っていうのは、黒沼百瀬の妹よ」
「……！！」
言葉を失った少女を無言で眺めてミクは小さく息を吐く。
「……とにかく、チトセをあんなふうにしてくれたのはそこのお嬢さんなわけ」

「だからミクは――」
「殺すわよ。当たり前でしょう？」
見上げてくるロザリーの頭を一撫でしながら、ミクはその形の良い唇をつり上げた。
「まぁ、向こうもあたしの存在には気付いてたんでしょ。後をつけてたら向こうから来てくれたわ」
その言葉に愛は最後に見た渚の姿を思い出した。突然用があると言って、一人あの場を離れた彼女。
……ミクは、嘘は吐いていない。
「『ナギサ』の正体がわかったのは殺した後。ぜーんぶ血を抜いて、過去から現在まで全部“教えて”もらったわ」
「正体――」
「ええ」
ミクは首を僅かに動かし、蝋人形のように横たわる渚に目をやった。金の睫毛に硝子玉のような瞳はただ有りのままを映すだけで、何の感情も浮かんではいない。
「間違いなく『ナギサ』は“オリビア”と呼ばれる団体の一員だわ。【ペルソナ】というコードネームで呼ばれ、かなり長い間学園に潜伏していた」
「仮面（ペルソナ）……」
「オリビアの目的はやっぱり“悪魔のデータ”みたいね。もう一つわかったのは、こいつらの中に全体を指揮する司令塔がいること。【ジーザス】と呼ばれている」

ジーザスは神の申し子、キリストのことだ。言いながらミクは真直ぐに愛に視線を落とした。茫然としていた少女は揺るぎない瞳に見つめられ、びくりと身体を震わせる。

「そこで、貴女に聞きたいのよアイ――『ナギサ』が頻繁にコンタクトをとっていた人物に心当たりはないかしら」

なるべく多く接触しても、不自然にならない相手が良い。ミクは柔らかく笑んで愛の頭上に手をかざす。何をしているのかはわからなかった。

「頻繁に……？」

しかしその言葉を聞いて、愛にはすぐにたった一人、思い浮かんだ人物があったのだ。渚が命を失う寸前まで、足繁く通っていた相手。愛自身何度もそれに付き合ったし、疑問になど思わなかったのだが。

「……クラリス？」

ジュリアナ・クラリセージ。バスケットボール部の顧問にあたる若い女である。愛や渚の慕ってやまない教師だ。まさか、と愛は思う。けれどそれ以外に思い付かない。

「決まりね」

ミクが軽い調子で呟いた。それにはっと顔を上げたのは沙南である。

「クラリセージ……？　ちょっと待って、彼女今日はハリソン先生と出掛けたって。たぶん渚が彼女に会いに行ったすぐ後からだよ」

沙南は同じ寮棟の友達から朝方たまたま聞いた話を思い出した。サラ・ハリソンは新任の、生徒にも人気の高い女教師である。そんな彼女がクラリセージと共に学校の裏手――森しかないような場所だ――に出掛けるのを見た生徒がいるのだ。

このような危険な時に、他の教師は姿さえ見せないというのに、一体何をするのか。沙南が出てくる前の第四棟はその話題で持ちきりだった。

「もしクラリセージ先生がミクさんの言う“オリビア”なんだったら、ハリソン先生が危ない……！」

沙南はさっと血の気が引いたような気持ちになった。しかしミクは何故なのか、楽しげに笑ってみせる。

「へぇ？　クラリスとやらは『サラ・ハリソン』と一緒なのね」

「ミク？」

「じゃあいいわ。【ジーザス】のことはサラに任せましょう」

「ち、ちょっとどういうこと!?」

声を上げた沙南に、ミクは悪戯っぽくひらひらと手を振った。未だ茫然とする愛の横を過ぎ去って、忘れていた渚の遺体の始末をどうしようかと悩みながら、ロザリーを手招きする。

首を傾げて近付いたロザリーの耳元に、ミクは唇を寄せて囁いた。

「……ローザ、チトセが帰ってきたわよ」

はじめからこれを教えてやるために来たのだと、ミクは笑う。

第五章《迷霧》：梔子の声を聞け（5）

「……ペルソナが、やられた？」

ほんの僅かに少年の眉が寄せられる。それからふっと息を吐き出して、鹿島は再び目の前の少女に切っ先を向けた。

「つまらない冗談だ」

「冗談じゃ、ありませんよ」

「おいチトセ、説明しろよ」

目の前で繰り広げられる展開についていけなくなったらしい、駿が困惑の声を上げた。千瀬はそれに困ったような笑みを浮かべる。一口に説明できるほど単純ではないし、なによりも今の状況では一刻の猶予も与えられないのだった。

少女は手にした刀を構えなおして考える。目の前の相手を倒す、うまい方法はないだろうか。一度やり合えばわかる――鹿島の戦闘センスは自分で言うだけあってかなり高い。

「……馬鹿を言うな。ペルソナはうちの中でも一、二を争う腕の持ち主なんだぜ。並大抵の奴にはやられないさ」

「相手が並じゃなかったんですよ」

いつ一歩を踏み出してくるか、鹿島の動きを慎重に見極めながら千瀬は言う。誰が殺ったんだ？　駿の問いかけには静かに、金髪の上司の名を答えた。

（ミクが動いたのか……？）

千瀬からの返答に駿はごくりと唾を飲み込む。なんだか無性に咽が渇いた。

あのミクが率先して動いたというのならば、その相手が“オリビア”の一人であったことに間違いはないだろう。あの少女はやたらと勘が良い――――その“勘”が、常人にはわからないところで働く何かに裏付けされたものであることを漠然と駿は知っていた。

「……今あたしが知ってるのは、“オリビア”と呼ばれるものに属する人間のコードネームとその性別」

言いながら千瀬が微かに目を細める。間合いを測っているのだと駿にはわかった。

「性別？」

「そう――ミクにもルカにも、これはもう知らせた」

【コンタツ】と【ゴスペル】は男。【バプテスマ】も男、【ペルソナ】は女。

順番を数えるように告げる、千瀬の言葉を聞いて鹿島は唇を歪める。反対に駿はぎょっと目を見開いた。一番腕が立つという件の【ペルソナ】が女だというのだ。今まで発見した相手が男ばかりであったためにその可能性を失念していたが――どこかですれ違ったことがあるのかもしれなかった。

「へえ……？　すごいね正解だよ。この分じゃ【ペルソナ】がやられたって話も本当なのかな」

「まだ信じられませんか」

「びっみょー。……ちなみに、残り二人の性別は？」

仲間の生死を危惧するどころか何処か面白がっているふしのある鹿

島は、クイズを出すような気軽さで問い掛ける。
千瀬はそれにゆるりと一つ瞬きをしてから口を開いた。

「【ジーザス】が女。【ミリアム】は男でしょう？」
「ぴーんぽーん！」

大・正・解！　言うなり鹿島はきゃらきゃらと大声で笑いはじめた。
何がおかしいのかさっぱりわからない。
笑い転げる少年とぼんやりそれを見つめる千瀬と。刃はお互いに向け合ったままである。緊迫した空気には似つかわしくない二人はいっそ不気味ですらあって、駿は思わず首を竦めた。
話に全くついてこれなくなっている女生徒たちは、端のほうで小さくなっている。

「教えてあげようか。【ジーザス】ってのは俺たちのいわば司令塔でさ、監視役を兼ねてる」

ひとしきり笑いこけた鹿島が突然話を始めたので、千瀬はことんと首を傾げた。

「奴は高みの見物が大好きでさ、教師のフリなんてしてるよ。俺達は“目”って呼んでる――」
「……待って」

声を上げたのはロアルだった。それまで黙り込んで話を懸命に聞いていたのだろう。銀色を湛えた瞳が零れ落ちそうなくらい見開かれている。

「教師……ジーザス、キリスト……の、目？」

まさか。言って、はっとロアルが息を呑んだ。クラリセージ。呟いた名前に驚いたように百瀬が顔を上げる。

「どうしてクラリスが出てくるの……？　ロア、どういうこと、」
「……“キリストの目”だわ、モモセ」
「何それ――」
「――アンタなかなか博識なんだね、ロアル・E・ウィルヘルム」

一体何に気が付いたのか。わけのわからないその他の面々を置き去りにして、ロアルはきっと鹿島を睨み付ける。

「いつから……！　まさか、ナギサを殺したのは……ッ」

ジュリアナ・クラリセージはバスケットボール部の顧問であった。志田渚に近付くのは容易かっただろう――そう思って問い掛けたロアルはしかし、きょとんとした鹿島の顔を目にすることとなる。

「は、肝心なところは見落としてるわけか」

鼻で笑って鹿島は首を横に振った。

「その“ナギサ”こそが【ペルソナ】だっつーの」
「……！！」
「ふぅん、マジであいつ死んだんか。いつの間に……」

絶句するロアルをよそに、鹿島は感慨深げに呟く。思わぬ所で全て繋がった。

「……なるほど。信じるよ」
「どうも」

ニヤリと笑ってみせれば千瀬も小さな笑みを見せる。しかしどちらもその瞳は笑っていなかった。玲瓏とした光だけが宿る。

「どうやら君の言う“情報屋”は本当に、うちのよりずっと優秀らしい――邪魔するからには知ってるんだよな？“アレ”のこと」

「知ってても、言いませんよ」

「死ぬ間際になったら気分が変わるかもしれないだろ？」

そう言うやいなや、鹿島はすっと左腕を振るった。今まで何も持っていなかった其処から少し長さの短い、もう一本の太刀が現れる。

「手加減はできないよ」

「……望むところです」

好戦的にな笑みを浮かべて地を蹴る寸前、鹿島はふと思い止まったように力を抜いた。そのままぺろりと唇を舐め上げる。

「始める前にもういっこだけ教えたげようか」

「……？」

「俺達の残り……【ミリアム】が何処で何をしてるか、だけどさ」

怪訝な顔を浮かべた千瀬の前で、少年は得意げに言い放つ。

「残念だけど、アンタらもう手遅れだよ」

＊

薄暗い廊下を横一列に並んで歩く。通行人の誰もいない今日は、それを咎める者も存在しなかった。

うるきの選んだ撮影場所は校舎の外れにある古びた倉庫である。映像監督を自称するだけあって、なかなかの拘りがあるようだった。

彼女の後には藤野の双子とサポート役のマリアが続く。ここは完全に女性のみから構成されたグループだった。

「小さい頃は、よく、怪我とか病気、してたんです」

たどたどしい日本語で話す、マリアの声が石の壁に吸い込まれてゆく。ここまで来る間に彼女と双子はすっかり意気投合したらしい。

他愛もない世間話から始まったお喋りは、いつしかお互いの身の上話をするまでに発展していた。

「家から出して、貰えなくて。ちゃんとした学校は、この学園が、はじめて」

「へぇ……！　箱入り娘」

「マリア、お嬢様って感じだもんねぇ」

感心したように言う双子にうるきは相槌を打つ。先刻からこのようなやり取りがずっと続いていた。

「うるきは？」

「一応、ちゃんと日本の中学までは出てますヨー」

曖昧な返答をしてふと口をつぐむ。うるきが先ほどから何かを考え込んでいることに、残る三人は気付いていないのだろう。

「あたし達はね、ずーっと二人きりで暮らしてた」

「施設に入ってたの」

そういえば、今まで誰にも話したことなかったけど。言いながら翠子が笑う。

「この学園に入学することは随分前から決まってたみたいでね、不思議なんだけど、誰かが入学金をもう納入してたんだって」

「誰だか、わからないんですか？」

マリアが首を傾げる。その瞳に隠しきれない好奇心を見て取って渋々、薫子が詳細を口にした。

「実はあたし達、小さな頃——三歳くらいかな——事故にあって。病院を退院したらもう施設に行くことが決まってたのよね」

「ご両親は？」

「顔も覚えてない。一番古い記憶は病院のベッドだからなぁ……ミドリが隣に寝てた」

自分達の名前と年齢だけを聞いて、二人手を繋いで施設に入った。迎えに来る人間はいなかった。

「お医者さんが言うには、事故の前までの記憶が抜けてるんだって」

「でもどうせそんなに小さな頃のこと、いつか忘れるだろうし影響ないんだけど」

親の記憶だけは欲しかった。言って、少しだけ淋しそうに双子は笑う。過去の傷跡に触れてしまったことを悔やんだのだろう、マリアが少しだけ悲しそうな顔をした。

「……マリリン」

そうこうするうちに目的の場所に辿り着いて、うるきはマリアに声を掛ける。撮影用の器材を準備していた少女は、なんですか、と顔を上げた。

「マリリン、他のグループからの連絡って来てないですかね？」

ずっと気になって仕方のなかったことを、極力自然を装ってうるきは問い掛けた。

この島でも通じる特殊な無線機は今マリアの手にある。本当はうるきが持っていたのだが、他の荷物――大量の撮影機材だ――を運ぶ関係で預けておいたのだ。

一定時刻が過ぎたらお互いに連絡を入れる。こっそりとそう約束してうるきは他のメンバーと別れた。しかし百瀬から連絡があるはずの時刻を過ぎても、無線機は何の声も上げない。

「さぁ……。きて、ないみたいですよ」

この時既に、うるきは嫌な予感を胸に抱いていた。違和感、と言うべきだろうか。

「無線機、貸して貰えますかネ？」

「荷物まだ、移動するでしょう？　まだ私、持ってます、大変だから」

気遣うように柔らかく笑んだマリアに、なぜそれを言う気になったのかはうるき自身にもわからなかった。この時うるきの心はまだそれを認めていなかったのである。凄まじい回転を見せる彼女の頭だけは、冷静だったのだ。

「……マリリン。あなた、無線の電源を切ったんですね？」

「――――――」

え、？

予期せぬ展開に双子が声を揃えたのと、どん、と言う音が響いたのは同時だった。腹部に鈍い衝撃を感じてうるきはよろめく。

「ど……して、」

触れた指先にぬるりとした液体が絡み付いた。次いで一点にだけ燃えるような熱を感じてうるきは目を見開く。

左下腹部に突き刺さったナイフが鈍く光っていた。マリアが笑ってそれをずるりと引き抜く。うるきの視界が暗転する。

「――可哀想な子。気付かなかったら、もう少し生きていられたのにねェ」

響き渡った甲高い悲鳴は双子のうちどちらのものだったのか。余韻の後に残ったのは、床に倒れてびくともしないうるきと豹変した少女だけだった。

「う、るき……うるきッ」

「マリア……どうして、何……なんなのこれ……っ？」

翠子が駆け寄って抱き起こした、うるきはまだ息をしていた。しか

し出血の量を見る限り長くは持たないだろう。顔が酷く青白い。

「賢いってのは良いことばっかじゃないんだねェ」

制服の袖を破って翠子が懸命に止血をする。それを守るように二人の前に立ちそれと対峙した、薫子の目は驚愕と恐怖で再現まで見開かれていた。

「……さーて“データ”を貰おうかなァ、アサカ家のお嬢さん」

一つ舌なめずりをしてから流暢に喋るその人間が、あのマリアであるとはとても信じられなかったのだ。

第五章《迷霧》：Ｂｒｅａｋ　ａ　ｓｅａｌ．（１）

「【バプテスマ】のヤツが失敗なんてするからさぁー」

こき、と首を回してマリアは笑った。妙に語尾の間延びした喋り方をする。

「双子の見分けがつかなかった、とか言うんだぜェ？　だったら聞きだせって話！」

まぁ僕は君たちのオトモダチだから、そんなの必要ないけどねぇー。言いながらじわりじわりと距離をつめる。天使のような容貌をした少女の手に握られた刃物から零れ落ちる紅は倒錯的で、薫子は眩暈を感じた。

信じられなかった。けれど、認める以外に為す術はない。無常な現実が横たわっている――畏れていた“敵”は、ずっと傍にいたのだ。

「マリア……あなた……ッ」

「中々の演技だったでしょお？　苦労したんだぜェこれ」

滴る血をぺろりと舐め上げてから、マリアはそっとナイフに口付けた。神聖な儀式のような、けれど狂気に満ちたその行為が全てを物語る。これがマリアの真の姿だ。

「……知らない、」

理解した瞬間、薫子は声を上げていた。

「知らないわよ！　データも、アサカなんて奴も、あたし達は知らない！！　止めてよ、何なのよ……あたし達には関係ない……ッ」
「へぇ……？　その反応見ると、全く知らないわけじゃあなさそうだ」
はっとして口をつぐんだ薫子を一瞥し、マリアは歌うように問い掛ける。
アンタ達のバックにいる“アンノウン”から聞いたのかな？
「うちのハゲを燃やしてくれた奴もさ、アンタらの後ろにいるわけ？」
「知ら……ない」
「……ふぅん？　まぁ良いや。データの持ち主はそこのアンタだ、アサカミドリコ――」
ずり、と足を引きずるようにしてまた一歩マリアが距離を詰める。
「……何、言って」
「自覚はなくても構わないよぉ。その身体、ちょーっと切り刻ませてほしいだけー」
うるきの身体を支えたまま硬直する、翠子の身体を薫子は抱き締めた。その脳裏を走馬灯のようにここ数日の記憶が駆け抜けてゆく。捜し物の手伝いをしてほしいのだと、そう言われた。アサカなる人物の、その血縁者を探していた黒髪の少女。何かを求めて学園にやってきた、彼らの敵。襲われた友達。データ。オリビア。
（何でなの……？）
いったい何が入っているのかはわからない。全ての根源にあたるそ

の“データ”の、持ち主として呼ばれたのは片割れの名だった。全く理解できない状況に襲われて一瞬、薫子の思考が停止する。頭の奥で警報が鳴っていた。

「本当に、知らないの……」

口にして、しかし心の何処かで薫子はわかっていた。失われた記憶と交通事故。自分達をここへ入学させた“誰か”の存在――双子の、二人だけの秘密。

「そろそろ黙ってくれる？」

バイバイ、双子ちゃん。

ぞっとするほど感情の籠もらない声だった。マリアはふわりと微笑みを浮かべた後、うるきを傷つけたその刃を二人の少女に向ける。薫子はぎゅっと目を閉じた。唯一の肉親がその手を伸ばして抱き締め返してくる、その温かさを感じた。

「終わったら二人仲良く、四棟寮の入り口にでも転がしといてやるよ」

「……っ」

「――――四棟は男子禁制よ？　マリア・ウィンチェスター」

瞬間響き渡った、凛とした声。

場の空気ががらりとかわる。予想していた痛みはいつまで経っても訪れず、目を開いた薫子は息を呑んだ。視界に映ったのはマリアの鮮やかな金髪ではなく、漆黒。

「【ミリアム】は男だって報告を受けてたんだけれど、驚いたわ。女装趣味があったのね」

「……アンタ、何ィ？」

瞬間的にその場を一歩飛び退っていたマリアが目を細める。現れた長い黒髪の少女を見て、それから小さく喉を鳴らした。

呼ばれたコードネームは正解だ。聖母のように柔らかで、愛くるしい笑みを持つ少女――――否、“少年”に与えられた名前。【ミリアム】とは聖母マリアの別名なのである。

「そうか――アンタが【ジーザス】の言ってた“アンノウン”ってわけェ？」

その容姿が学園中を騒がせる“亡霊”と合致していることに少年は気が付いた。こうして見ると皮肉なものだ、お互い近い存在だったのだから。

「アンタの本当の正体は何なのぉ、亡霊さん？」

問われて少女は笑みを浮かべる。白い頬をやわく引き上げて紡ぐ、その名の真実をマリアは知らない。

「――ルカ、よ。オリーブの子」

＊

もう、手遅れ。

その言葉の意味を悟り駿は眉をひそめる。未だ出会ったことのない“オリビア”からの刺客。今何処でどんな行動を取っているのかはわからないが、鹿島の口振りを聞く限りではルシファーに都合の悪い方向へ事態か流れていることは確かだった。

「まさか……他の皆の身にも」

何かが起こっているのだ。気が付いたのはそう呟いた絹華だけではなかった。さっと亜梨沙が顔を青ざめさせる。まだ一度も連絡がついていない、もう一つのグループのことが脳裏を駆け巡った。

「ま、マリアは!?」

真っ先に浮かんだルームメイトの名を亜梨沙は口にする。

「マリア達の所はどうなったの……っ？　うるきは、藤野さん達は!?」

「……ぶッ。あは、あっはははは！　こりゃ傑作だ!!」

あいつの“オトモダチ大作戦”はどうやら成功したらしい。腹を抱えて笑い転げながら鹿島は心中呟いた。駿が胡乱な眼差しを送るのを無視して、この分なら“本当のターゲット”の方は問題なくいきそうだと考える。鹿島本人はここでのんびりと足止めに興じていれば良い。

「……さっさとやろうぜ」

その狙いを読み取ったかのように駿が言い放ったので、鹿島はまた笑った。もう少しお喋りしていても構わなかったのだが、そう言われては仕方ない。

「良いよ、はじめようか」

言葉と同時に再び強く地を蹴る音がした。動いたのは駿ではなく千瀬だ。疾風のように相手の胸元へ飛び込んだ少女をいなして、鹿島もまた剣を振り下ろす。脳天を割る一撃を千瀬は横跳びに躱し振り向きざまに一閃を加えた。

「オイお前、銃使えるだろうな！？」

「基本動作なら」

駿の声が飛んで絹華は自らと手元を見た。ピースメーカーはシングルアクションだ。使い慣れてはいないが、やらなければいけない。今この場には通常長距離をカバーする役割にいる、銃使いの少女がいないのだ。ロザリーの腕前には遠く及ばない事を駿も知っている。四の五の言っている場合ではない。

「上等。援護しろよ」

言って構えを取った駿本人もまた、援護に回るつもりのようだった。目の前で切り合いを繰り広げる二人の動きは常識を大きく逸している。一見すれば殺陣を演じているようにも見えるが、切った張ったの大立ち回りとは比べものにならないスピードで攻防が行われていた。下手に間に入れば千瀬の邪魔になりかねない。

（くそ、）

心中毒吐いてから駿は呼吸を落ち着ける。隙を見て攻撃に入ってみても、鹿島は軽く躱してしまうのだった。

千瀬の動きは決して悪くはない。しかし決定打に欠けていて、相手

はダメージを受けていないように見える。

「そんなモンか？」

「……ッ！」

少なくとも千瀬のほうに軽口を叩く余裕は残されていなかった。それを悟ったのだろう、鹿島はにんまりと笑みを深める。長期戦になれば体力的な差で有利なのは彼の方だ。

（どうにか、しなくちゃ――）

発砲のタイミングを見つけられず絹華もまた歯痒い思いをする。この手にある毒針さえ打ち込めれば勝負は決まるのに――少女は己の無力さを痛感した。千瀬のように動くことが出来れば、それも叶うのだろうが。

「……おかしい、」

「……え？」

銃を構えていた絹華の背後からふいに声が聞こえたのはその時だった。振り返れば百瀬が、真剣な面持ちで少年達の戦いを見つめている。その視線の先にいるのは彼女の、ただ一人の肉親だった。

「百瀬？　おかしいって何が――」

「あの子、変なの。どうしちゃったの……？」

それが千瀬のことを指しているのだと気付いて絹華は慌てて視線を戻したが、そのような様子は見られなくて首を捻った。

前方は依然として激しい攻防の真っ最中だ。少女の刀が間一髪、鹿島の頭を掠めてゆく――勝負はまだつかない。

何がおかしいのか、もう一度問い掛けようとしたところで再び百瀬が口を開いた。その唇から落とされた言葉に、思わず絹華は目を見開く。

「おかしい、こんなことって――あの子、黒縄（こくじょう）を忘れてる」

第五章《迷霧》：Ｂｒｅａｋ　ａ　ｓｅａｌ．（２）

「忘れて、いる？」

百瀬の切迫した言葉に対し、絹華はただ首を傾げるしかできなかった。戦い方を忘れている、ともう一度百瀬が口にする。わけがわからなくなって視線を彷徨わせると、困惑したのは同じだったらしい駿に行き当たった。怪訝な色を瞳に湛えてじっとこちらのほうを見つめてくる。

「どういうことだ？」

構えは解かないまま、じりじりと駿は少女たちとの距離を縮めた。素早く問い掛ければ百瀬は僅かな逡巡を見せる。

「教えてくれ――アンタのしってるやり方と、今のアイツは違う？」

「……、違う」

小さな声で、しかし力強く少女は答えた。忘れているのか、あるいはあえて“それ”を封じているのかもしれない――と。その言葉に駿は眉をひそめる。

「そんな話は聞いたことねェよ。俺たちは戦場が職場だ――戦法を封じるメリットなんて無い。その“コクジョウ”ってのは？」

「剣の、型の名前よ。……黒沼の家に代々伝えられた奥義の名」

激しく繰り広げられる戦いの一端を担う少女は、その奥義の正当な継承者だ。常に剣客であれ。理由などわからないその教えを忠実に守り続けた一族の、要となるもの。それは一振りの刀と、その力を

最も発揮させるための術だ。
黒沼の人間ならば継承者でなくとも皆、それの正体を知っている。
知ったところで実現できるのは、黒沼の血に眠った才を引くものだけだ。

（どうしちゃったの……？）

その才を唯一受け継いだのが、目の前の妹だというのに。
百瀬は唇を噛み締めた。あれは人殺しの技だ。あんなもの無くなれば良いと思っていたし、千瀬が習得することを厭うてもいた。
けれど今は違う。均衡する戦いが長引けば妹の負けは目に見えていた。周りは手出しができない。状況を打開するにはどうしても、あれが必要なのだ。

「なーにこそこそしてんだよッ」
「……っ！」

キン、と高い金属音が響き渡る。飛んできた小刀を咄嗟に駿が弾き飛ばした。それを見て僅かに顔を曇らせながら千瀬が下段から切り付けるが、鹿島にはまだまだ余裕が見える。対する少女は肩から息をし始めていた。
息つく間もない切り合いは、既に十数分に及ぼうとしている。

「そろそろ諦めたらー？」
「っ、まだですよ……！」

ひゅんと風を切る音がした。腰から身体を捻った千瀬の頬を紙一枚の差で鹿島の刃が掠める。微かな鮮血が散り白い頬に一閃、赤い筋が走った。同時に切れてしまった黒髪が数本ぱらぱらと宙を舞う。

「そーら、頑張れよ」

鹿島が笑みを浮かべた。態勢を立て直せないままの少女の腹に勢い良く少年の足が打ち込まれて、百瀬は喉の奥から悲鳴を上げる。鈍い音とともに千瀬の小さな身体が軽がると飛んで、勢い良く壁に叩きつけられた。

「チトセッ！」

血相を変えて声を荒げた駿の横から絹華が二発、連続で発砲する。追い打ちをかけようとしていた鹿島はそれに阻まれ小さく舌打ちすると、一度千瀬から距離を置く。

「おいチトセ、大丈夫か！？」

「……けほ、」

小さな咳をして立ち上がった妹の、ぐらついた足元に百瀬は眩暈を覚えた。もうこれ以上は見ていられない――限界だった。

「刀を鞘にしまいなさい、千瀬……！」

突然声を上げた百瀬に、その場にいた全員が仰天した。モモセ？困惑の滲む声でロアルが呼ぶが返事はない。

「なに、してるの……！　やらなくちゃ死んじゃうのよ……っ」

「……お、おいアンタちょっと待てよ！」

焦ったように駿が声を上げる。刀をしまう？　それこそ自殺行為だ。しかし錯乱しているのだろうと覗き込んだ百瀬の瞳は真剣そのもので、思わず駿は息を呑む。

「姉さん……？」

ぽつりと千瀬が呟いた。姉に言われた言葉の意味を図りかねているらしい。

やはり“忘れて”いるのだ。確信して百瀬は一度目を瞑る。次に妹を目にした時、彼女の心は決まっていた。

最後の賭けだった。

「――“禊ぎの廻向、霊刃の病葉”」

「……え、」

「言って。“化野の左契”」

有無を言わせぬ響きに千瀬は瞠目した。いつも穏やかであった姉のこんな様子は初めて見る。

「えっと……み、みそぎの、えこう。れいじん……わくらば？」

「馬鹿チトセ、お前も呑気に何言って――」

「あだしの、の」

そこまで口にしたその瞬間、千瀬は頭を鈍器で殴られたような衝撃を覚えた。耳の奥でごうごうと音が鳴る。

鹿島への牽制を続けている駿と絹華の声が遠かった。聞こえたのはただ、姉の言葉だけ。

――知っている。

（禊ぎの廻向、霊刃の病葉、化野の左契、）

自分はこの言霊を知っているのだと、直観的に千瀬は悟った。嗚呼

そうだ。幼い頃からこれを毎日、身体に叩き込まれたのではなかったか。

（なんだ、こんなに簡単なこと）

何かがすとんと音を立てて少女の胸中に落下した。失くしたピースを見つけたような、外れた歯車が噛み合ったような感覚だ。するりと唇が音を紡ぐ。

「……化野の左契」

頭の奥にかかった靄がみるみる晴れてゆく。

続きの言葉も勿論、千瀬は知っていた。

「生は鞘に、死を切っ先に、黒き血は八つの獄に。八百万の神に梔の歌を――芙蓉の峰の邂逅で」

「……なんだいそりゃ。お呪い？」

クッと喉の奥を鳴らして鹿島が笑う。千瀬はそれに頬笑み返してみせながら、すらりと光る白刃を目の前に掲げた。駿の制止も無視しそのまま、涼やかな音を走らせ黒鞘に収めてしまう。

瞬間、百瀬は自分の賭けがうまくいったのだと言うことを知った。妹の身体は覚えていたに違いない。あの詩はちゃんと引き金になった。

「……いいえ。これは、子守歌」

それから罪の唄だ。声には出さず千瀬は思う。幼い頃から聞かされたこの言葉の、意味を教わったことはない。

けれど千瀬は知っていた。この言霊は罪の唄、受け継いだものはそ

の咎を償う為にあるのだと。漠然と、それが体内を廻っていることに気が付いていた。

（――思い出した。あたしには、まだできることがある）

少女は己の罪を思う。エリニュエス＝グロリア。

女神エリニュスは尊属殺人を許さない。この島の名前を聞いた日、その由来を教えられた時、戸惑わなかったと言えば嘘になる。罪を犯した自分は、けして赦されることの無い場所だから。それでも今、千瀬はこの地に立っていた。数多の血を吸い込んだ刀がその手にはある。

守りたいと思った。あの日凄惨な光景を生み出した二本の腕で、ただ一人の姉を。鈍く輝くこの刃で、仲間たちと世界を。

「……シュン、あたしから離れて」

「はァ！？」

深い思考に沈んでいたかと思いきや。戻ってきてすぐに少女が発した言葉に駿は目を剥いた。一体なんだというのかさっぱりわからない。

千瀬の刀はしっかりと鞘の中に納まってしまっていた。そんな状態で敵と対峙する神経が駿には信じられなかったのだが、そこでまた別方向から声がかかる。

「その子の間合いに入らないで！」

それは百瀬のもので、強い響きに駿は渋々千瀬から距離を置いた。あたしはもう、大丈夫。そばを離れる瞬間聞こえた声に少年は眉を寄せる。なんなんだよ畜生、駿が呟けばそれに答えるように百瀬が目を閉じた。

「あの子はもう、大丈夫」
「……何がだよ、」
「日本刀はね、世界で一番斬ることに特化した刃物だと言われてるわ。その日本刀の一番強い使い方――武藤くんは知ってる？」
お待たせしました、と柔らかく千瀬言うのが聞こえた。見物すら決め込む余裕のあった鹿島に向かって少女は笑う。
「これで、終わりです」
ひくりと口角を引きつらせた少年が次の瞬間、本気になったのが駿にもわかった。刀は腰に差したまま、丸腰も同然の千瀬に向かい鹿島が疾風の速さで跳躍する。
チトセ！　黙ってみていることなど出来ずに叫んだ駿の後ろから、冷静な百瀬の声だけが聞こえていた。
「一番はね、近間の飛び道具――――居合、よ」

「……バケモノ、め」

気が付いたときには全てが終わっていた。一言吐き捨てた鹿島の首筋にうっすら紅い筋が走ったと思えば刹那、それが雨垂れのように溢れ流れはじめる。

次の瞬間、少年の首は線に沿って音もなくスライドした。ごとん、鈍く響いて頭が落ちた後に身体が傾いで血に沈む。

千瀬は先刻の立ち位置から十メートル以上離れた場所で制止していた。腰の刀が鞘から抜かれた様子はない。

「なん……だよ、今の」

駿は我が目を疑った。

千瀬が抜刀して鹿島の首を刎ね、再び鞘に戻すまでの一動作全て。その僅かな破片でさえも、駿の目は見ることができなかったのである。駿だけではない――この場にいた誰もが、少女の動きを追うことなど叶わなかった。鹿島充――否、【バプテスマ】本人でさえも首のずれ落ちたその瞬間まで、自分が絶命したことに気付かなかっただろう。

「チトセ、」

「……【黒縄（コクジョウ）】は、あたしが絶対に習得しなければいけない居合の技だったの」

「お前、一体――」

「……どうして、忘れてたんだろう……」

死に絶えた一族と唯一の生存者。黒沼の血の真実、真の力と呪い。

その一端を、武藤駿が初めて目にした瞬間だった。

第五章《迷霧》：オリーブを見たか（1）

「一つ、消えた」

艶やかな黒髪が柔らかく靡く。あの子が勝った。言って少女はふわりと頬笑む。

「さすが呪われた血の一族。あとは貴方だけよ、マリア――【ミリアム】と呼んだほうが良いかしら」

「消えた、か――ふぅん？　アンタ、“わかる”人ォ？」

金の巻毛と青い瞳。童話『不思議の国のアリス』に登場する愛らしいヒロインのような姿をした“少年”は、その眼を細めて目の前の人間をじっと見据える。数分前に仮初めの友人を刺したナイフは未だ手に握ったままだ。

マリア――否、【ミリアム】はルカと名乗った少女が、只者ではないということをこの時既に悟っていた。頼りになるのは長年この世界で培ってきた勘だけ、しかしコレが何よりも正確に機能する。

「“オリーブの子”、か。そう言うってことはぁ、こっちの素性は既に割れてるってわけ？」

「好きなように解釈してくれて構わないわ」

「……はッ」

【ミリアム】は唇を歪めた。黒髪の少女は気負った様子もなく飄々と彼を見据えている。その表情からは何も読み取れなかった。

この世には他人の思念を読み取ることが出来たり、目を閉じていて

も周囲の人間の居場所が分かるといった、普通の人間より少しだけ特化した能力を持つ者がいることを風の噂で【ミリアム】は知っている。生憎“オリビア”内でそのような人間を見たことはないが、おそらくルカはその部類なのだろう。

『あとは貴方だけ』――そう少女が言うならばそうなのだろう。【ジーザス】も【バプテスマ】も、あるいは【ペルソナ】も、既にこの世にはいないのかもしれない。

（――それが、何だというのだ）

【ミリアム】は焦燥など感じなかった。もとより他メンバーとの連帯感は薄く、仲間意識など全く持ち合わせていない。【ミリアム】は今この場で、任務を遂行できさえすれば構わないのだ。

「別にいいや、アンタが“アンノウン”の正体でも、そうでなくても。僕はさァ、お仕事さえ終われば良いわけ――――そこの標的（ターゲット）殺して、バラして、ブツだけ持って帰る」

「あら奇遇ね。私も仕事なの」

ぬばたまの瞳が真直ぐに【ミリアム】を映した。その濁りない黒色を見て、良い色だ、と少年は独りごちる。

得体の知れない相手と向き合った瞬間の、独特の高揚感が彼を支配していた。次にルカが発した言葉に思わず【ミリアム】は顔を綻ばせる。

「私の仕事は、貴方に“あれ”を奪われないこと。残念だけど貴方は、私の敵」

「……そうこなくっちゃ」

少年は背筋を震わせた。けしてそれは畏れや寒さの為ではない。久

々に対峙する手応えのありそうな敵に対する、武者震い。
【ミリアム】は天才だった。彼の所属する組織は数多の人間から逸材のみを選び抜き、独自の養成プログラムで成熟させる。少年はエリート中のエリートで、その先頭技術は若くして既に超一流であった。
普通の相手では、つまらない。

「……う、るき。うるきッ！」

突然のルカの登場に茫然としていた薫子が、我に返ったように友の名を呼んだ。刺されたままのうるきは既に意識を失っていて、呼吸は消えそうに細い。顔色も蒼白を通り越してしまっていた。

「たすけて」

このままでは死んでしまう。自らも危険に曝されている状況で、薫子は座り込んだまま必死にルカを見上げた。翠子もまた縋るように顔を上げる。

「お願い、うるきを助けて……！」
「どうして？」

落とされた言葉に少女たちは愕然とした。ルカは感情の無い瞳で二人を見下ろすと、機械的に首を傾げる。

「その子が死んでも貴女たちは困らないでしょう」
「そ、んな」
「今は自分の命を心配するべきなんじゃなくて？」

さも当たり前のように少女は言い放つ。その様子を見て薫子は不意

に、自分達とルカの間に横たわる絶望的な溝に気が付いた。
物事の基準が違う。優先する物の順位が違う。ルカの生きる場所では、ひと一人の命の価値はとるに足らない些細なものなのだと。

「あなたには、そうでも」
「あたし達には、違う」

視線を逸らそうとしたルカに向かって双子は同時に声を上げた。黒髪をさらりと揺らして少しだけ、驚いたような反応が返ってくる。

「……人間は、いつか死ぬ」

確認するように呟いたルカに、そうだと翠子が頷いてみせた。それは真実だ、それでも。

「それでも、大切な人なら助けたいと思う。生きていてほしいと思うの」

きっとルカは人間が、自らの命と引き換えにしても構わないと思えるほど他人に愛しさを覚える事があるとは知らない。大切な友人に対する感情もわからない。自分は死にたくない、けれど目の前で消える命があれば繋ぎ止めたい、そんな考えは甘えと綺麗事にしか思えないのだろうと知りながら、双子はぎゅっと目を瞑った。
どう思われようと、今この場で縋れるのはルカだけなのだ。マリアの裏切りから目を背けようとする自分を奮い立たせて、少女たちは祈った。
これ以上、人が死ぬのは嫌だ。

「……グラモアみたいなこと、言うのね」
「――――え？」

ぽつり、と。落とされた言葉が弾けて消える。刹那ルカに浮かんだ表情がそれまでとは違う、しんみりと何かを慈しむような笑顔だったので、思わず薫子は翠子と顔を見合わせた。

「グラ、モア？」

どこかで聞いただろうか。記憶を辿り終えるより先に、思考はルカの声によって遮られる。

「ラムダ」
「はい、ルカ様」

一声かけるやいなや、柱の影から音もなく細身の少女が現れた。ぎょっとしたのは双子だけではなく【ミリアム】も同じだったようで、青い目を思わず見開いている。

「――救済措置を」
「了解致しました」

今までずっと身を潜めていたのだろうか。ラムダと呼ばれた少女は短髪で、黒いシャツに格式張ったネクタイをしめていた。ルカに何やら命令されるなり、ラムダは細い両腕で軽々とうるきの身体を抱え上げる。
助けて、くれるのか。翠子がそう気付いたときには既に、ラムダはうるきを連れてその場から離れようとしていた。

「ちょ、ちょーっと待てよー！？」

そこで漸く【ミリアム】も状況に気が付いたらしい。少年は思い切

り顔をしかめてルカをねめつけた。

「なーにしてくれちゃってんのォ？　せっかくほっとけば死ぬのにさ、助けたら口封じになんないだろー！」

邪魔立てが入ってすっかり憤慨した様子の【ミリアム】に、ルカは困ったように笑ってみせる。

「アンタだって見殺しにする気満々だったくせにさァ！」

「気が変わったの――思い出した、から」

「はァ？　何が？」

「何でもない……貴方の目的はあの子じゃないんだし、別に良いでしょ？」

そーなんだけどさァ……。

不満そうに呟く【ミリアム】は子供そのもので、とても殺しをするようには見えなかった。不思議な因果だ、とルカは思う。あの時自分から採取された沢山のデータと独り歩きする伝説が、こうして現在を作り出している。

それもあの人の――グラモアの、島の上で。

「ルールを決めようかァ。サシでやり合う？　それとも“悪魔のデータ”を先にとったほうが勝ち？」

「……死んだほうが、負けよ」

データを優先すると言うことは、必然的に双子の死の確率が上がるということだ。実の所ルカはデータさえ戻ってくれれば、所有者の生死など関係ないと思っていた。それをわざわざ自分の命を勝負の要にしたのは、ほんの気紛れ。

戦いを楽しむことを第一に考えるタイプの【ミリアム】は、ルール

を遵守するだろう。その間、双子の安全は確保される。

（隙を見て逃げろと言いたいところだけど、無理ね）

しっかり抱き合っている少女たちを見て、ルカは小さく息を吐いた。これから起こることを人間に見せるのは少し気が引ける。大切なデータの所有者なのだから、ショックで口がきけなくなっては困るのだ。

……とは言ってもその“所有者”を、ルカは先刻の【ミリアム】の話ではじめて知ったのだが。

（チトセはちゃんとゾラから、全て聞いたかしら）

ぼんやりそんな事を考えていると、少年から声がかかる。

「ねェ、いつまで待たせるのさー。もう僕、いくからね」

「……あれ？」

得物を構えた【ミリアム】は、黒髪の少女がきょとんと首を傾げたのを見た。次の瞬間自分の顔が、驚愕に染まる事など知りもせずに。

「もうとっくに“はじまって”いるわ」

「――――――!!」

己の身体に起こった変化に、【ミリアム】は直ぐには気付かなかった。

亡霊と呼ばれた少女の声ばかりが淡々と、壁に反響しては消える。

「わかるわ、【ミリアム】。貴方とっても“強い”のね」

「貴方に敵う人間なんていないのでしょう」

「でも」
「少し残念なお話」
「私は人間じゃない」

ぼとり、と何かが落ちる音がした。【ミリアム】はそれを見なかった。痛みはない。痛覚が麻痺しているのだということはすぐにわかる。
殺そうとしていた双子が自分を見つめ、声にならない叫びを上げているのに少年は気が付いた。

「特別に教えてあげる。私は“ルキフージュ”と呼ばれていたけれど、本当の“悪魔（ルキフージュ）”は私じゃないの」

唇を震わせた【ミリアム】の頬を、白い手がするりと撫でる。この時既に少年は自らの負けを受け入れていた。立つこともままならないのは、足が無いからだ。

「本当の悪魔は、私の中に。私はこれの入れ物にすぎない」
「――ふ、く。クク、あ、はは……、あははッ、アハハハハッ！！」

突如【ミリアム】は狂ったように笑い出す。自分が今どんなおぞましい格好をしているのか、考えただけで笑いが込み上げた。目の前にいた本当の“悪魔”に気付かず侮って、あまつさえそのデータを利用しようとしていたなんて。余りにも滑稽だ。

「あははは……！！　アンタ、最高だよ！　もう少し早く逢いたかったなぁ……オリーブよりきっと、面白かったのに」

まだ口は聞けるらしい。悟って【ミリアム】は唇を開いた。冥土の

土産にはこの、悪魔の物語がぴったりだ。

「ねェ、一つだけ教えてよ――――――」

「――――ルカ！！」

バタバタと慌ただしい足音がする。【ミリアム】がその質問を口にしたのと、刀を提げた少女を筆頭に何人かが飛び込んできたのは同時だった。

第五章《迷霧》：オリーブを見たか（2）

時間は少し遡る。

話があるから一緒に来てほしい。そう頼まれた新任教師サラ・ハリソンは、黙ってジュリアナの呼び出しに応じた。

「どこまで行くんです？」

尋ねればジュリアナはもう少し、と笑う。校舎を離れて人気の無い裏山へ、二人は足を運んでいた。

ジュリアナ・クラリセージ。クラリスのニックネームで親しまれる彼女はバスケットボール部の顧問であるが、それは表の顔だ。

サラはそれを知っていた。そしてジュリアナのほうもおそらくは、サラの聡さに気が付いている。だからこそこうして二人、人目を避けるような真似をしているのだ。

（そう、これは駆け引きだ）

一対一の対決。お互い口には出さなくとも、既にわかっていることだった。

「さて――ここまで来れば良いかしら」

くるりとサラの方を振り返ったジュリアナは、意味ありげに笑ってみせる。鬱蒼と生い茂る木々の他には何もないこの山は、過去この島が軍事施設であった頃にそれを隠す役割をしていた。

「単刀直入に言うわ、サラ。貴女、私に何か言いたいことがあるの

でしょう」

問い掛けるジュリアナの言葉は文字だけならば、同僚との間に起こりがちな関係問題の一部分のようだった。無論、そうではない。理解した上でサラも答えを返す。

「それは貴女に心当たりがあるんじゃないかしら、クラリス」

「――裏では随分私のこと、かぎ回ってくれたみたいだけれど」

貴女は一体何者なの。問われたそれはつい最近まで、サラのほうも知りたいと願っていた事だった。

サラはジュリアナ・クラリセージを調べていたのである。いつかそれが本人にバレることは想定の範囲内。こうして二人きりになる機会を、待ち望んでさえいたのだから。

「……えぇ、クラリス。私、貴女の本当の姿が知りたかったから」

「――――やはり、」

「でも、生憎もう必要ないのよね」

優秀な部下のおかげで全てわかったから、と。サラが笑えばジュリアナすっと目を細める。そこに浮かぶのは明らかな敵がい心だ。心地の良い緊張感を肌に感じながら、サラは全てを伝えるために口を開く。

「近頃動きを活発化させた“闇殺し”のオリビア。やっぱり狙いはあのデータだったのね」

「貴女、どこまで知って？」

「ほぼ全てじゃないかしら、クラリス――――いいえ、オリビアの監視塔、闇の目の【ジーザス】。素敵な偽名を考えたのね？　クラリセージ、なんて」

これにもう少し早く気付けていれば。思ってサラは苦笑した。クラリセージとは本来とあるハーブの名である。その別名は、『キリストの目』。

「……そこまで知られてしまったなんて。どこから漏れたのかしら」

「情報は然るべくして伝わるものよ――ねぇクラリス。私、貴女は大切な同僚だけれど。もっと優先しなくちゃいけないことがあるのよね」

「あら奇遇だわ。私もよ」

二人の女が向かい合わせに微笑みあう。次の瞬間、綺麗に声が重なった。

「生きて帰れるとは」

「思わないでね」

吹き抜けた突風を合図に両名共が動く。刹那のうちに距離をとり臨戦態勢に入った、お互いをお互いで誉め讃えた。

やはり只者ではなかった。それだけが判ればあとは戦いに集中するのみ、思って二人は口元を綻ばせる。このような世界に生きているもの同士、命を懸ける瞬間が楽しくないはずはない。

「……ああクラリス、記念に教えておくわ。私も偽名なのよね」

にこりと唇を引き上げてサラは微笑む。金の髪と翠色の瞳が木漏れ日を浴びて煌めいた。

「ジェミニカ、って言うの。ジェミニカ・アルファーナ」

ルシファーの命を受け一足先に教師として潜入した。実働部隊とは別に裏から活動を続け、どれだけ経っただろう。

（さぁ、解放してもらいましょうか）

堅苦しい隠密活動の終演を楽しむように、ジェミニカはぱちんと指を鳴らした。

――――爆音が、地を揺らす。

＊

ドォォォン、低く地を揺らす響きに駿ははっと顔を上げた。また爆発か、考えて僅かに眉を寄せる。余震の具合から察するに、ウォルディの時とは違い爆心地は遠いらしい。少なくとも今少年たちのいる校舎が損傷した様子はなかった。

（暴れてやがるのは、どこのどいつだ？）

戦況がさっぱりわからない。駿はとうにこと切れた鹿島の骸を見下ろした。

すぐにでも上官と連絡を取り合い状況確認をするのが最優先――しかし現在、駿の目の前には片付けなければいけない問題が横たわっている。

「……ちとせ」

よく似た面立ちの、少女が二人向かい合っている。伏し目がちの瞳や艶やかな黒髪は言われずとも同じ血の通いを思わせた。

「姉さん、」

治療の為に切られたのだろうか、髪の襟足が少し短くなった千瀬は困惑した様子で姉を見つめていた。ようやく果たされた再会の一場面はしかし、感動的な空気など微塵も感じられない。
その最たる原因は刀を抱えた少女の、その身に起こった異変だ。異変が起こっていたことに初めて、千瀬自身が気が付いたのである。
――――気が付いてしまった、と言うべきか。

「姉さん、あたし――――」
「チトセ――――っ！」

忘れて、いるの。
そう少女が呟いたのと、第三者の声が割って入ったのは同時だった。
はっと顔を上げた千瀬の視界に銀色の髪が踊る。
突如現れたロザリーは真っすぐこちらへ走ってくると、顔をくしゃりと歪めて勢い良く千瀬に飛び付いた。

「うわぁぁぁん、チトセ、チトセぇぇ……！」
「ろ、ローザ！」
「良かった生きてる、よかったよぉぉ……っ」

ぎゅうぎゅうと抱き締められて目を白黒させていた千瀬は、泣き声の混じったその声に小さく笑った。ごめんね、呟けば回された腕の力が一層強くなる。

「……おい、そんくらいにしとけ」
「あれシュン、いたのー？」
「最初からな！　つーか空気読めよお前！」

思い切り顔をしかめた駿にロザリーはこてりと首を傾げる。はぁ、と溜め息を吐かれても身に覚えはない。
不思議に思って辺りを見回せば、千瀬そっくりの顔がきょとんと自分を見つめていることに気が付いた。

「あ、チトセのおねーちゃん」
「どうも……」

気の抜けたやり取りに駿は、先刻の真剣な雰囲気はもう戻ってこないと言うことを悟った。あほローザめ。口の中で呟けばぱっと銀の瞳が少年を見る。
……地獄耳。思った瞬間に、どこかから涼やかな声が上がった。

「おかえり、チトセ」

まるで最初からそこにいたかのようにミクが笑う。唐突に現れた金髪の少女に一同が瞠目する中、ロザリーだけが平然としていた。聞けば一緒にここまで来たのだという。

「他の子も、一緒よ」
「他の子……？」

「――アイ！　サナ！」

驚いたようにロアルが声を上げる。ミクに導かれるように入ってきた、二人の少女はどこか憔悴していた。無理もない、と駿は思う。もう一人、彼女達と共にいたはずの後藤という少年はミクに強制的に部屋に帰らされてしまったらしい。

「……お前も帰れば？」

ようやくその存在を思い出して声をかければ、原山はコクコクと首を縦に振った。もはや声も出ないらしい。哀れに思って駿は彼の腕を掴んで立ち上がらせると、背中を一つ押してやる。

「……みんな、志田が……」
「聞いた、よ」
「その話は後にしましょう」

原山の退場を見届けたミクがさらりと言い放った。碧い瞳がすっと細まると、次の瞬間千瀬を見据える。

「生還早々悪いんだけど、チトセ――話してもらえるかしら？　ゾラから聞いたこと全て」
「……はい」

姿勢を正して千瀬はミクを見つめ返した。その身に起こった出来事については一旦遠くへ追い払って、少女は使命を果たすべく集中する。

“それ”、あなたが始末したのね。横たわった死体に走る刀傷を一瞥して呟いたミクに、千瀬は一つ頷いてみせた。

「ここへは島に着いてから真直ぐ来たの？」
「はい。――あ、ヘリポートにジェミニカがいたの。だから、知ってることを報告しました」
「彼女はなんて？」
「これから片付けをする、って――」
そう、とミクは笑った。ジェミニカはミクと同じ《マーダラー》、ルシファーの幹部が一人である。そして彼女もまた、ただの人間ではない。
――やはり、任せて正解だった。
「それからオミが迎えに来てくれて、一緒にここまで。……てあれ、そう言えばオミは？」
「ここにいます、チトセ」
「うわっ」
突如背後から声が聞こえて千瀬は飛び上がった。微動だにしないミクは最初から気付いていたのだろう。
「消火は完了、でも――あんなに消えにくい火は普通ではありません。能力者です、ミク、あなたのような」
「……やっぱり、ね」
ふっと口元を緩めてミクは独りごちる。“オリビア”ではありえない、もう一つの不穏因子。
今回の件においてルシファーの邪魔をするようでなければ放っておくつもりだった。しかし、学園を燃やされては黙っていられない。
（だってこれはグラモアの学園で、ロヴの物なんだから）

オリビアのほうが片付いた暁には、放火の犯人も探さなくてはならないだろう。大方の目星はついていた。

「あ」

――思考に耽るミクの傍らでふと、小さな声が零れ落ちる。見れば千瀬が思わずといったように口元を押さえていた。どうしたと問うたのは駿で、忘れてた、と少女のいらえが帰る。

「そういえばさっき、“そこの人”がもう手遅れとか何とか」

「――――あっ」

「……ちょっと何よそれ」

ミクの顔に張りついていた冷静の色が剥がれ落ちた。嫌な予感がして詰め寄れば、千瀬は急に焦りはじめた。

「……うわ、うわぁ。た、大変なんだった！」

「何がよ！」

「この学園に双子がいるはずなんです、あたしも見たし。オリビアは彼女が狙いだから、もう刺客が行っちゃったのかも――――アサカ、ミドリコって」

「なん、ですって……？」

肝心なところをすっかり失念していた千瀬の、相変わらずの天然っぷりに頭を抱える。見張りに当てたはずの駿も同罪だった。忘れるなんて余程、鹿島との戦いは余裕が無かったのだろうか。ミクが睨めば駿は、苦しい笑いを浮かべながら視線をそらす。

「ミドリコ、ってまさか――！」

絹華が細く声を上げた。驚愕の事実に打ちのめされ茫然とした、百瀬とロアルもそれに続く。

「双子なんて、あの子達しかいない――間違いないじゃない」

「でも本人達、そんなの知らないみたいだったのに……」

「え、え？　あの二人の苗字は“藤野”でしょ？」

事情のわからない亜梨沙が素っ頓狂な声を上げる。

「マリアとうるきが一緒にいるはずだ」

小さくはっきりと、呟いたのは愛だった。隣で頷いた沙南の顔は曇っている。

「たぶん本当に、何かあったんだと思う――あのグループ、連絡がつかないの」

「……！！」

その瞬間に残された全員が事の深刻さを理解した。鹿島と同等かそれ以上の力をもつオリビアの戦闘員。少女達が襲われればひとたまりもない。

一つ息を吐いて、ミクが一同を見渡した。

「……とにかく、その双子の所に行きましょうか。話の続きは移動しながらのほうが良いわね」

「はい」

「……急ぐぞ」

「あ、あたし案内します！　マリアから場所聞いたし、」

手を上げた亜梨沙の声はしかし、途中で掻き消えてしまった。全て

を否定する声が同時に落とされた為である。

「いけません」

「……え、」

「皆さんをアサカの双子の所へは、行かせられません」

驚愕に染められたいくつもの視線がたった一人、声の主を取り囲んだ。

「……どういうことだ、オミ」

低く唸るように言う駿を一瞥し、オミはゆるりと瞬いた。

「ルカ様の、邪魔になるから」

第五章《迷霧》：オリーブを見たか（3）

「貴方たちはルカ様の邪魔になる。あの空間を隔絶しておくことが、オミに下された命令です」

「隔絶、って――」

淡々と述べるオミを全員が凝視した。刹那の間だけ言葉に詰まって、駿は次の瞬間声を上げる。

「一般人を巻き込んで何が隔絶だ！」

「――そうよ、オミ」

静かにミクが同意する。首の動きに合わせて金の髪が弧を描いた。

「仮にルカがその刺客の相手をしていたとして、あの子達を巻き込まない方法を取るとは限らないわ――ルカの戦い方には限度ってものが存在しないのよ」

「そ、それにあたし翠子さんに会わないと！　ゾラさんに一つ、確認するよう言われてることがあるんです」

「関係ありません」

千瀬の訴えまでもをばっさりと切り捨てる、オミの意志は硬かった。

「理由などいらない。オミにはルカ様の命令が全てです。ルカ様が是といえば是。それが例え、世界の基準とは違っても」

「ルカ様ルカ様ってうるせェよ！」

ついに駿が声を荒げる。少年はつかつかと急速に距離を縮めると、

オミに掴み掛かる勢いで口を開いた。

「同じ上司の命令なら《マーダラー》にも従えよ！　《ハングマン》とたいした違いはねェだろうが！」

「いいえ。ルカ様の命令を、ミクが書き替えることはできません。ルカ様の言葉はルカ様だけのもの。例え同じ《ハングマン》であっても、オミはエヴィルには従わない」

「ふざ、けんな！　時間、がないってのに意味わかんねーことばっか、――っ！？」

駿の言葉尻が突然消えた。とうとうオミの襟元に手を伸ばした彼の、腕を突然掴んだ者がいたのだ。

その正体を知った瞬間、駿はきっと眉を釣り上げる。

「手、離せよ」

「……てめェ、カイとか言ったな」

どこから現れやがった。噛み付くように言う駿の事など全く気にせず、カイと呼ばれた少年は駿とオミを引き離した。

「シュン、知ってる人？」

「……一回会っただけだ。知らねぇ」

上からの命令を伝えると言う名目で、カイは一度だけ駿と接触している。ルシファー側の人間であることは確かだが、仲間と呼べるかはわからない相手だった。

ロザリーの問いに苦い顔を浮かべてから駿はカイを睨み付ける。当の本人は気にする素振りもなく、飄々と挨拶を述べてみせた。

「俺も、仕事。内容はこいつと同じ」

「オミと？　……って事は何だ。お前も行くなとか言うわけ――はッ、ナメてんじゃねーよ！」
「こちらは実力行使も厭わないが」
言ってカイが駿に拳銃を向けた瞬間、場の空気が凍り付いた。オミまでもがナイフを取り出したので、千瀬もロザリーも目を見開く。
「お前等……ッ！」
「やめましょうシュン、仲間内でなんて馬鹿みたいだわ――その二人は本当に、ルカの命令にしか従わない」
ミクの声に反応して駿が視線を反らせば、それにつられるように場の空気が緩和された。臨戦態勢を解いたオミとカイが、事の成り行きを黙って見つめている。
「二人はルカの直属なのよ。正確には、ルシファーとは違う機関の人間だけれど」
「はぁっ？　このヤローはともかくオミが！？」
「……こいつの正しい名前はオミなんかじゃない」
ヤロー呼ばわりされて不本意そうな表情を浮かべながら、カイが小さく呟いた。
――どういう、意味だよ。説明を求めて駿の目がミクを見、カイを見、最後にオミを映して停止する。
「お前、なんなの」
瞬間残る全員の視線もオミに集中した。
「……答えて、オミ」

千瀬の声にオミはまた、一つゆっくりと瞬きをした。
ほんの僅かな沈黙が流れる。

「……わたしは、正確にはオミではありません」

黙秘義務はありませんから。そう呟いて、少女は静かに口を開く。
感情の起伏を一切感じさせない声が響き渡った。

「諜報部隊『救世主代理人（エージェント・メシア）』登録ナンバー15、識別名称“オミクロン《o》”――オミ、はただの略称です」

ざわり、さざ波の立つように空気が揺れた。驚きを顕にする者達を一瞥し、続いてカイが言葉を発する。

「“救世主（メシア）”はルカ様に全権限の存在するルシファーのサポート部隊だ。過去にサンドラ・ジョーンズが収容されていた悪魔主義（ディアボリズム）という通称の研究開発施設をハーキンズが買い取って、諜報部員――要はスパイの育成を行っている」

「サンドラ、の」

超人類の開発を目的とした非道の施設。今は亡きサンドラの、その過去は千瀬も耳にしたことがあった。一度組織は潰して、立派だった建物は再利用する。ロヴがそうしたと言う話も聞いている。
――けれどここで、その先が繋がるなんて。

「あそこで訓練を積んだ者のうち成績優秀者、上位二十四人が『アルファ』から『オメガ』までの記号を与えられて、実働部隊としてルカ様の配下につく」

これでも俺たちは優秀なんだ、とカイは小さく笑った。

「活動内容は諜報活動が殆どだが、時には暗殺やルシファー本部の仕事も請け負う。ちなみに俺はナンバー２２の《χ》――カイ、は名前じゃなくて記号だ。今ここにはもう一人、識別名称『ラムダ』が来ている」

「ラムダ――あの人も、」

千瀬は一度だけ見た少女を思い出した。色白で短髪。ルカ様、そう言った声が耳に残っている。どこかで聞いたと思っていたが、オミと同じ呼び方だったのだ。

過去の研究施設では、ＡからＺまでの名を与えられた子供たちがいたと聞く。サンドラは“Ｓ”の子だった。

けして美しい物語ではない。けれど彼女の生きていた軌跡は今、ルシファーに近い所で存在し続けているのだ――考えて一つ、千瀬はぎゅっと目を閉じた。

「……わかったよオミ。でも、あなたの一番優先するものがルカなら――あなたはあたしを、ルカの所へ案内するべきだと思う」

静かに言って千瀬は、真っすぐにオミを見つめた。明るい特徴的な浅葱の髪が今は黒く染められている、オミクロンの娘。真剣さが通じたのだろう、真摯な視線が返ってくる。

「ミクは、言ったけれど。あたしはね、ルカは優しいと思うよ――余計な犠牲を出すのは、彼女の本意じゃない。だから早く教えてあげないと。この無駄な戦いを、終わらせないといけない」

「――“無駄”？」

「あたしは、ルカの“捜し物”の本当の在処を知ってるよ」

本当は最初から、この島になんて無い。言えばオミは僅かに瞳を大きくした。
なんだって？　駿の驚愕に染まった声が聞こえる。ミクも目を見開いて、話の続きに耳を傾けていた。

「オリビア――ううん、“オリーブ山”の話も聞いてきた。あたしはルカの代わり、ゾラさんから受け取ったもの全て、彼女の耳に届けるの。それが一番、ルカの為になると思わない？」

お願い、オミ。
ゆっくりと近づいて少女の手を取った。千瀬の行動に驚いてカイが目を見開く横、オミも困ったように視線を震わせる。

「……でも、邪魔に、なったら」
「そうだ。ルカ様といえど、オリビアは未知の相手――俺たちが行って足を引っ張るようなことがあってはならない」

なおも拒もうとするオミとカイに、千瀬はやんわりと笑ってみせた。それに関しては最初から心配などしていない。千瀬は、ゾラから言われた言葉を信じている。

「だいじょうぶ」
「――え？」
「ルカなら、大丈夫なの。あのひとの力はオミ達のほうがわかってるんじゃない？」
「……」
「何も心配はいらないよ。信じて、見たことを受け入れれば良い。あたし達は上官と部下、それ以前に仲間だから。……ゾラさんが言ってた」

――だから、行こう。

第五章《迷霧》：オリーブを見たか（4）

＊　＊　＊

「“オリビア”と呼ばれる連中の正体については知ってるんだっけ？」

「……いいえ」

真直ぐな問い掛けに少しだけ悩んで、千瀬は静かに首を横に振った。ゾラは満足気に笑って紅茶のカップに唇を寄せる。どんな時にもお茶を欠かさない優雅な振る舞いはロヴに通ずるものがあったが、それを口にするとどうなるかは目に見えていた。

出会ってから数時間、既にこの情報屋について学んだことは多い。千瀬はそれに従っておとなしく口を閉じ、彼女の言葉を待った。

「始まりはもう随分前の話になるかな。ルシファーと同じ界隈に生きる――要は“裏社会”の連中が、何者かの手によって次々と始末されるという事件が起きた」

カラン、砂糖を足して掻き混ぜるスプーンの音が静かに落ちる。意外やゾラはかなりの甘党だ。甘い紅茶の横に置かれた砂糖菓子は助手を勤める菫が用意したものらしいが、その甘さには千瀬も目を見張った。

「表には出られないような連中だ、潰したり潰されたりはお互い様。けれど一つ異常だったのは、消されていった組織が吸収された様子が何処にもなかったこと」

「吸収？」

「他の勢力に手を出す理由ってのは大抵、敵対関係であるか傘下に入れることを目的にするかのどっちかだよ」

欠けてゆく裏社会の一端。消えるだけで、それ以上の変化は何も起こらなかった。

――――正体不明のその集団に、一つの名がついて回るようになったのは何時からだったろうか。数多の組織を葬る実行犯の、その名前。

漠然とした影の中から、一人の女の姿が浮かび上がった。オリビア、それは見えないモノに形を与える入れ物だ。また一つ消えた組織の跡地、廃墟と化したその場所で偶々誰かが耳にした音。

「人々はそれをオリビアと呼んだ。――“闇殺し”、ともね」

始めは些細な、都市伝説のようなものだった。

“闇殺しのオリビアという女が、数々の裏組織を消して回っている”

「オリビアの目的は誰にも知れぬまま、また別の組織が消えた。そうまでされて黙っていられるほど裏の連中は穏やかじゃない。いつ自分達に火の粉が降り掛かるともしれない状況で隠れているほど臆病でもない――」

「どう、したんですか」

息を詰めて静かに問い掛ける、千瀬の目の前でゾラは唇を釣り上げた。

「オリビア狩りが始まった」

マフィアに闇商人、犯罪シンジケートにギャング団――人々は我先にとオリビア殲滅に乗り出した。オリビアの首には莫大な懸賞がか

けられたのだという。国境など関係無しに雇われた幾人もの情報屋がそれの居場所を突き止めるため、世界中を奔走した。

――しかし結局、オリビアはその潜伏先どころか正体も、確立された組織であるのかさえわからなかったのである。

「……表向きは、ね」

「え――――、」

どういう意味だ。問いかけようとした少女の唇をゾラの細い指が塞ぐ。秘め事を囁くように声を潜める、彼女の言葉に千瀬は目を見開くこととなった。

「その頃僕は――――」

世界中の情報屋が姿形のわからない女――であるかも不明なのだが――を追いかけているその最中にゾラもまた、その手腕を尽くしてオリビアを追っていた。とはいっても彼女の場合誰かに雇われたわけではなく、あくまでも趣味の範囲内で、だ（当時からゾラは滅多なことでは依頼を受けないことで有名であった）。

だからそれは本当に、本当に偶然だ。

形のない物ばかりを追うことに対し早々に見切りをつけていたゾラは、消し去られたほうの組織に着目した。興味があったのはオリビアの正体なんかじゃない、その目的のほうだ。ゾラは数日の間隠れ家に籠って大量のデータと顔を突き合わせていた。オリビアに狙われた者たちの詳細。組織発足から消滅を迎えたその日までの軌跡。

――――そして、見つけてしまったのだ。

「オリビアが狙った組織にはたった一つだけ、共通点があった。一見無作為に見えるそれにはちゃんと理由があったんだ、同じ道が、一つだけ」
「同じ、道」
「そう……消えた組織は全て過去に一度、同じ街に足を踏み入れた記録がある」

取引きの地として。他勢力との戦いの場として。身体を休める宿地として。荷物の運搬の為に、仕事先へ向かうために、通過した地点の一つとして。
組織の幹部クラスが直々にやってきたこともあれば、末端構成員がほんの少し立ち寄っただけのこともある。目的は違えども、過去に彼らはある街にやってきた。取るに足らない出来事であったことが殆どだ。
けれどそれが、たった一つの共通点。ゾラだけが気づいた、ゾラだから気にとめた、なぜならその街の名を彼女は良く知っていたからだ。

「訪れた連中は気付かなかっただろう。その街の地下には、巨大な研究施設が隠されていた。当時のそこは無法地帯だったけれど、地下はその比じゃない。その場所では一昼夜問わず人の道から外れた実験が行われてた――人間兵器の開発、っていうね」

胃の底に冷えた塊を投げ込まれた、千瀬はそんな気がした。それはどんどん重みを増して、同時に足もとからじわりと寒気が這い上がってくる。
――――少女は、その話を知っていた。
「ある日そこに、貴重な検体（サンプル）が持ち込まれた。生きた兵器だ。まだ

幼い子供で、うち数人は明らかに人外の能力を持っていた――研究者の奴ら、嬉しかっただろう。やっと手に入れた完全体だ、細かく解析にかければ生み出すことだって可能になる。でも、」

過剰な研究が、執拗な調査が、きっと裏目に出た。今になっては詳しい原因など誰にもわからない。

彼らが解析にあたったサンプルのうち一体は、他のどの個体よりも並はずれた力をその身に眠らせていた。それは世界をも凌ぐ力だ。あまりにも莫大なそれは、本人の意思では押さえつけられないくらいに膨れ上がって。

終わりは唐突だった。あっけなく、子供の能力は決壊した。

「一瞬で研究所は消滅した。地上の街も、跡形もなく吹き飛んだ」

「……トリクオーテ」

その名を紡げば、正解！　と朗らかな声が降った。千瀬はぎゅっと目を閉じる。

「オリビアは……、探して、いたんですね。『トリクオーテのレポート』を」

「ご明察。まだあの街が、研究所があった頃に一度でもトリクオーテに足を踏み入れた組織に連中、片っ端から目をつけては潰して行ったんだ。もう街は残っていないからね。データが事前に他へ譲渡された可能性に賭けたんだろうが――まあ見つからなくて結局、情報屋に頼ることにしたのさ。それが偶々上手くいったもんだから、奴ら今ハーキンズの島にいるんだけど」

ゆったりと足を組みかえてテーブルに頬杖をつく。ゾラの仕草には焦燥も憤りも感じられない。ただ淡々と、彼女は仕事をこなしているのだった。

「その事実に気付いて仕方なく――ほんとに仕方なく、僕はハーキンズの野郎に連絡をとった。あいつはどうでもいいんだけど……ルカ絡みとなっちゃ話は別だし」
「はあ」
ロヴのことを口にする時、ゾラは心底嫌そうな顔をする。本当に嫌いなんだな、突きつけられて千瀬は苦笑した。
「で、ヤローから引き続きオリビアについて探るように依頼を受けた。誰があいつの頼みなんか……じゃなくて、ルカの為だから。僕にしては珍しく本気で働いたね」
「それで――わかったんですか」
「勿論」
君、僕を誰だと思ってるんだい？
高らかに言い放ってゾラは立ち上がった。腰に下げた小振りな鞄から一枚の羊皮紙を取り出して、少女の目の前に突き付ける。
「同じ穴の狢だと思い込んでるから、みんな見つけられないのさ」
「これ、」
「オリーブという名の山がある。かのイエス・キリストが最後の祈りを捧げたとされるゲッセマネの園さ。真偽は定かじゃないが、そこを発祥だと自称する独自宗教組織が存在する――名を、【オリーブ＝アルファ】と」
“　Ｏｌｉｖｅ－α　”
「オリ、ビア……っ」

全ての始まりを示すアルファ。
小さく裂かれた羊皮紙に滲むインクの文字を読んだ、千瀬はそのまま言葉を失った。

「連中の目的はルキフージュを……ルカを、手中に収めることだ。オリビアは犯罪組織なんかじゃない、けれどこっちのほうがよっぽどタチが悪いかもね」

にこりと微笑んだゾラはそのまま、ただ一つの真実を言葉にして投下する。

「奴らの目的はね、『世直し』だよ。腐ったこの世界を悪魔の力で、一度更地に還したいのさ」

第五章《迷霧》：オリーブを見たか（5）

「君も一度不覚をとった経験からわかるだろう。オリーブ＝アルファの連中は他の犯罪組織とは違うけれど、かなりハイレベルな技術を持った戦闘員を所有している」

「……はい」

「世界を根底から壊すためには、それ相応の力が必要だからね。連中は、次の神になりたいんだ」

ゾラの話はまだ続いていた。明らかになったオリビアの正体は予想よりずっと厄介なもので、千瀬の表情は無意識に暗くなる。

最初からデータを狙い、求めていたオリビア。悪魔の正体がルカだと知らなかった点から見て、“カーマロカ”のようにルシファーから流出した情報――犯人は裏切り者の元副首領ジェイ・ハインリッヒだった――を知ったわけではないようだが。

「調べた所オリビアの戦闘員は、数多の人間の中から選び抜かれたエキスパートらしい。強かった？」

「……強かった、です」

強かった。歯が立たないというわけではなかった、けれど勝てる気配もなかった。思い出しながら千瀬は言う。

「特殊な訓練を積むという点ではルシファーの戦闘員――君たちより、ずっと本格的なプロセスを積んでるからね」

「それ、は」

確かにそうだ。思って千瀬は唇を噛み締めた。

もう随分と前の事のように思える、始まりの日。ミクから聞かされた、ＥＰＰＣの一員となる者達の選考基準は【分別ある殺戮者】だ。迅速かつ冷静にひとを殺める事のできる人間。上からの指示を決して裏切らない、必ず任務を遂行する人材。

スカウトを基本とするＥＰＰＣは、言うなれば才能型の集まりだ。偶々戦闘のセンスを持ち、かつ死を恐れない者。血の赤にも硝煙の匂いにも、奪うことも奪われることも千瀬達は慣れている――――けれど、やはりただのひとでしかない。

「踏んできた場数は同じくらいでも、下積みの段階が別だ。普通の人間じゃあ敵わないだろうな」

「……つまり、」

「うん。君ら《ソルジャー》ぐらいじゃやり合っても勝ち目はない。全滅を免れるだけで精一杯だろうね」

「そんな……！！」

薄々理解を始めていたことを突き付けられて、思わず千瀬は手で口元を覆った。

今“学園”にいる《ソルジャー》に、特別な訓練を受けてきた者はいない。忍家業の椿は本部に残っているし、圧倒的な戦闘力を誇っていたサンドラは死んだ。

――この時千瀬は、まだオミの本当の姿を知らない。また自分こそが“訓練を積み場数も踏んだ”唯一であることに、またその力が最早常識の範囲など超えていたことに、気が付いていなかった。

「――ゾラさん、」

声のした方を見れば、一度姿を消していた菫が小さな箱を抱えて立っていた。

「準備はできたかい、スミレ」

問い掛けに静かに頷いてみせた少女を見て、ゾラは満足気な笑みを浮かべる。千瀬が箱の正体を訊ねたが、詳しいことは秘密なのだと答えは返って来なかった。

「今から僕とスミレで、この病院に一時的な停電を起こす。その隙に院内のコンピューター全てをジャックして、アサカミドリコの情報を書き換える」

「え、」

「彼女にはこの病院から、ルシファーの所有する施設に移ってもらうのさ――体内に埋め込まれたデータを摘出するためにね。意識がなかろうと関係ない」

「えっと、」「それを見届けたら屋上にヘリがあるから、チトセ君は島へ帰る。ＯＫ？」

困惑する千瀬を突き放してさあ始めようとゾラは高らかに宣言した。

「ち、ちょっと待ってください！」

がたん！　少女の立ち上がった勢いで椅子は悲鳴を上げる。ぱちぱちと瞬きをするゾラを真直ぐ見つめて、千瀬は焦りを隠せないまま口を開いた。

「あの、あたし、今すぐ島に戻ります」

「えー？　最後まで付き合いなよ」

「ゾラさんからの情報は今までの話で全部ですよね？」

「そーだけど……何慌ててんの？」

不思議そうに訊ねられてだって、と千瀬は声を詰まらせた。

早く、帰らなければいけない。オリビアの危険性を伝えて、自分も加勢して、無意味な戦いを終わらせて。
データは学園になどないのだ。戦って勝ち目がないかもしれない敵と刃を交えて、今この瞬間にいくつの命が消えたかわからない。今この瞬間に新たな犠牲が出るやもしれず、駿やロザリーや百瀬に危機が迫っている可能性もある。
千瀬は、残してきた仲間が心配で仕方がなかった。

「……ははっ、バッカだねぇー」

しかし懸命に伝えた千瀬の言葉を、ゾラは鼻で笑い飛ばしたのである。

「良いかい？　僕はオリビアに、普通の人間なら勝てないだろうと言ったんだ」

その言葉は自信に満ちていた。呪文のように繰り返されて、じんわりと千瀬の心に浸透する。

「大丈夫。心配なんて、いらないよ」

＊

＊　＊

＊　＊　＊

『心配なんて、いらないんだよ』

広い廊下を仲間と共に駆け抜けながら、千瀬はゾラの言葉を思い出していた。
心配なんて、いらないよ。繰り返された音が頭の中で波打っている。
『普通の人間に勝ち目は無いだろう。奴らの戦闘力は桁違いだ』

『でもね、チトセ君』

『オリビアの連中もまた、人間なのさ』

酷く楽しそうに笑ったゾラの言葉が頭の中いっぱいに反響したのと、その場所に辿り着いたのは同時だ。
千瀬は信じていた。だから、目の前に広がる光景にも驚かなかった。

『人間なんて、あの子の相手じゃないんだよ』

「……な、んだ……これ……」

呆然と呟いたのは駿だ。自分の目が信じられなくて、少年はごしごしと目を擦る。ボト、と鈍い音がした。

オミとカイを宥めてやって来たその場所の、端で小さくなっていたのは二人の少女だ。双子はまだ生きていた。そこから少し離れた場所に、よく知った立ち姿がある。長い黒髪のうしろあたま。しかしそのルカの向かい側に一つ――その空間の中で明らかに異常な物体が存在していた。

「ル、カ……？」

声を掛けても振り返らない、少女の目の前にあるのは奇妙な形をした固まりだ。端の方からぐずぐずと崩れて溶けているそれは、遠目から見ればボーリングのピンのような形をしている。

……ボト、とまた音がした。肉の溶け落ちた音だった。

「……っ！？」

それが手足の無くなった人間であるということに気が付いてロザリーが声を上げそうになる。寸でのところで押さえ込むと、くつくつと低い笑い声が響いた。

――――その肉塊が、笑ったのだ。

「ハハ……あーあ。悪魔サン、お仲間が来ちゃったよォ」

「そうね」

冷えた声でのかえりごとはルカのものだ。

金の髪は殆ど溶け消え、首と胴だけの状態になった【ミリアム】は驚くべきことにまだ生きていた。

「アンタなら僕のこと、一瞬で始末できたんだろーに。こんな手間のかかるグロいやり方するからだぜェ？」

「色々と話が聞きたかったから」

「ハッ……悪趣味！」

痛覚がないのだろうか【ミリアム】は苦しむ素振りもせず、ただ溶解してゆく自分の身体を傍観していた。口振りからして、ルカと何やら話をした後らしい。

駿が目を凝らせば、双子は失神してしまっているようだった。

『ルカが人間なんかに遅れをとると思ってんの？』

ゾラに言われた言葉を千瀬は反芻する。答えはノーだ。目の当たりにして実感する、ルカは、ひとの定義とは異なる次元で生きているということ。

少女の足元が淡く発光しているのを千瀬は見た。ユリシーズと対峙したあの日と同じだ。【ミリアム】を溶かしてゆくこの現象はやはり、ルカの引き起こしたものなのである。

「ねぇ、最後に一つだけ聞いていーい？」

軽い調子で問い掛ける【ミリアム】にルカは頷いた。彼はもうとっくに自分の負けと、その死を受け入れてしまっている。

「僕さァ、自分で言うのも何だけど、巧く潜伏してたと思うんだよねェ」

「そうね――あなたがあの娘を刺したりしなければ、このまま見送ったかもしれない」

「でしょォ？」

ラムダに抱えられどこかへ運ばれていった、うるきの事をルカは考えた。彼女が生きているかは少女自身にもわからない。ルカの忠実な下僕は命令どおり、全力で救済措置にあたっているだろう。――あとはうるき自身の生命力が、どれほどのものかだ。

「つまり、だ。今日あの瞬間まで、僕はノーマークだったわけだろォ？　でも、アンタはここに来た。他の誰でもなくルキフージュ本人が――――どうして？」

少女達を見張るのが目的なのであれば、本来その役割はあのラムダが果たしているはずだった。幹部であるルカは直々に現場へ出る必要などなく、指示に回る立場である。

見透かしたような【ミリアム】の瞳がルカを射抜いた。ぐずぐずと崩れてゆく身体はもう下腹部のあたりまでが無い。溶け落ちた部分からは緩やかな蒸気が立ち上り、生温い風を吹かせていた。

「……――――から」

ぽつりと落とされた言葉が聞き取れず【ミリアム】は首を傾げる。

次の瞬間、ルカの丸い瞳がゆっくりと一つ瞬いた。

「……たまたま、よ。偶々、見ていただけ」
「そんな答えが聞きたいわけじゃ――」
「貴方のことは、一目見た瞬間から追っていたわ――――たぶん、無意識のうちに」
「え？　……あ、ァ」

刹那、少年はくぐもった声を上げた。突然【ミリアム】の身体の溶解するスピードが上がったのだ。ごぼりと沸騰するような音がして、みるみる小さくなってゆく。

「――だって貴方、サンドラに似てたから」
「……はッ、何、それ、」

意味、わかんないよ。
言った瞬間にはもう、【ミリアム】に残されたのは首だけだった。
それすらも侵食されてゆく感覚に少年は嗤う。
完敗だ。呟いて【ミリアム】は、大分見上げる形になってしまった黒髪の少女を見つめた。世界にはまだこんな力が眠っている。これが、欲しかった――思った瞬間本人と目が合って、少年はふっと口元を弛める。

「ねぇ、アンタ、泣いてるの？」

それが【ミリアム】の最後の言葉だった。口が消え眼球が溶け出してもの言わぬ肉塊になる。次の瞬間それがごぽごぽと激しく泡立って、白い煙が視界を覆い隠した。
蒸発している――千瀬がそう気付いたときには既にほとんどが終わったあと。開けた視界には肉塊の綺麗に消え去った床と、【ミリアム】の在ったその場所を見つめている黒髪の後ろ姿だけが見えた。
本当に、跡形もなかった。

「――――――いいえ」

最後の問いに答えを返した、ルカの声だけが響いて残る。

第五章《迷霧》：盲目のラバイ（1）

――Ｇｏｏｄ　ｂｙｅ，　Ｍｏｔｈｅｒ　Ｍａｒｙ.（　さよなら　聖母様　）

囁いたルカの声は謡うようだった。今し方目の前で起こった出来事を信じることができなくて、誰しもが言葉を失う。全てを知っているのであろうミクとルカ本人だけが、平然とその場に立っていた。

――――サンドラに、似てたから。

零れ落ちた一雫の本音は雨音のように響いて千瀬の胸を濡らした。千瀬はあの日ルシファーの“廃棄場”で見た光景を思い出す。ルカとエヴィル、白い指先が撫でた頬、黒い布、生温い風。消えたサンドラの遺体はあの日の空と同化した。

ルカが、消した。今のように。

（泣いてたんだよ）

覗き見てしまった千瀬の手を取り逃がしたルードに、そう話をしたのだ。彼は信じなかったけれど、今になって千瀬は確信する。

ルカは泣いていた。涙を流さずに慟哭していた。自ら手に掛けた親友であり、母のような愛しい存在を悼んで。今もきっと少女はその影を追っている。柔らかな笑顔の裏に隠した傷を、圧倒的な強さで塗り潰して。

「……終わった、のか」

一番に立ち直った駿が小さく声を上げる。忌まわしい記憶と彼女達の捜し物。この学園での戦いに、終止符が打たれたのか――そう問い掛けた駿にしかし、ルカはゆるゆると首を横に振った。

「まだよ」

「――――ッ!?　伏せろ!!」

ドォォォン！　鈍い爆音とともに火柱が上がる。咄嗟に叫んだ少年に従って床に這いつくばった、全員の頭上を何かの破片が掠めていった。

ルカだけは直立したまま音の方向を静かに見つめる。――爆発の瞬間少女を守る盾のように、薄い膜のようなものが広がったのを千瀬は見た。

「――――来たわね」

ミクが低く呟く。皆が見つめる中土煙は徐々に薄くなった。吹き飛んで穴の空いた壁の向こうから姿を現した小さな影に、駿が目を丸くする。

その名を茫然と呟いたのは、愛だった。

「――――――アイジャ、」

カラン、破片を踏みしめる小さな足と衣擦れの音。呼び声に応えることなく一歩前に出た、少女の姿はこの場においては異質であった。今までの彼女が身につけていた制服（もの）とは違う深紅のドレスには、胸元に厚みのある白いリボンがあしらわれている。丈がふくらはぎの辺りまであるスカートの、裾を縁取る数多のフリルが煌びやかだった。

まるで中世の貴族のような出で立ちである。そうでなければアンテ

ィーク・ドールのような。

「……お前、」

小さく声を上げた駿は、瞬時にそのただならぬ空気を感じ取っていた。しろい靴下に覆われた爪先を包む赤い靴が、また微かな音を立てて床の破片を踏みしめる――――今“彼女が”破壊した壁の残骸だ。

「……が、……たの？」

今にも擦れて消えてしまいそうな声だった。それがアイジャのものであるということにその場の人間が気付くまで、暫しの時間がかかる。

「誰が、ウォルディを殺したの？」

「――――ッ！」

待て！！

制止の声は届かなかった。駿が少女の言葉を理解したときには既に目の前が真っ赤に染まっていたのである。それが紅に発光する炎の塊だと気付いた瞬間襟の辺りを何かが捕まえて、駿の身体は思い切り後ろに引き倒された。

「ここから離れなさい！！」

女生徒達へ向けたミクの怒号は爆音に掻き消される。はっとして振り向いた先、駿を掠めた炎が壁に巨大な穴を開けたのが見えた。淵がおぞましく焦げているそれは一歩間違えれば自分の未来だ。ぞっとして駿は、咄嗟に自分を炎の軌道から動かしたロザリーの俊敏さ

に感謝した。

「こっちへ！」

「――ちとせ！」

少女達を立ち上がらせて避難させようとする、絹華に腕を捕まれて百瀬が絶叫した。手を伸ばしてもこちらを振り向かない、彼女の妹はその立ち姿そのものが抜き身の刀のようだった。

「……ッ行くよ、モモセ」

押し殺した声はロアルのもの。彼女もまたこの場に肉親を置き去りにする苦しみに身を裂かれそうになりながら、それでも静かに百瀬の肩を掴んだ。

オミとカイが気を失っている双子を一人ずつ抱え上げたのを合図に、少女たちは絹華の先導に従って走り出す。愛が一度だけ振り返ると、千瀬とロザリーがこちらを見ているのが見えた。視線は交錯して次の瞬間にはそらされてしまう。

「……マリ、ア」

今になって漸く言葉を思い出した亜梨沙を沙南が引っ張って出てゆく最後の後ろ姿を確認し、ミクは小さく頷いた。同時に千瀬とロザリーが地を蹴る。

しかし一歩近付いただけで火柱が上がり、二人はそれ以上アイジャに近寄ることができなかった。

「……の、なのに」

白い腕に巻き付くように炎が走る。肩から手のひらに到達したそれ

は蛇のように一度うねって巨大な塊になった。

「……アイジャの、お仕事なのに」
「オリビア」
「アイジャが、アイジャの……」
「ウォルディに、見せなきゃ」
「アイジャの頑張ったところ、なのに、ねぇ、」
「どうしてウォルディがいないの」
「どこにも、いないの」

錯乱している。思って駿は瞳の奥が真っ赤に燃えた少女を見据えた。彼女の言う“ウォルディ”は死んだ。駿がその目で見取ったのだ。
――刹那、アイジャが叫ぶ。

「――お前の、お前たちのせいだ！！」
「……ッ！」
「――ルカ！」

轟音と共に第二撃が襲い掛かった。放射状に飛び散った火炎が近くにいる少女たちに真直ぐ向かう。
避けろと名を叫ぶ暇さえ無かった。見開いた駿の瞳が映したのは炎に飲み込まれた千瀬とロザリーの影だけ。

「……な、」

少年の全身の血が音を立てて引いてゆく。
めらめらと燃え立つ校舎を背景に佇むアイジャは、恐ろしいほどに美しかった。ひと一人の命を容易く摘み取る力を持つ人間離れした存在。壮絶な威圧感はルカのそれと酷似していた。

「お前たちが、いけないの。横取りした！　オリビアはアイジャのお仕事だったのに、なのに！」

少女は表情を失っていた。能面のような顔で横取りしたと繰り返す、その執着の度合いは狂気を孕んでいる。

「ウォルディも、あなたが殺したんだわ。今みたいに――」

「……ッ違う！」

ルカの方を真直ぐ見つめて言い放ったアイジャに向かって、駿は思わず声を上げた。

アイジャは知らないのだ。ウォルディがどのような最期を迎えたか、最期に、何と言ったのか。

（ウォルディが言葉を伝えたかった相手は、こいつだ――）

“あの時”のことを思い出して唇を噛み締める。次の瞬間両サイドから派手な音がして、駿は慌てて顔を上げた。見れば立ち上る炎が揺らいで消えるその隙間から、千瀬とロザリーが軽く咳をして這い出してくる。

「お、おい！　お前ら大丈夫なのか！？」

慌てて二人に近付いた駿に二人は小さく笑ってみせた。頬の煤を軽く手の甲で拭って、ロザリーが首を傾げる。

「死んだかと思ったんだけど……見てこれ。銃のはしっこが溶けちゃった」

見れば銀の拳銃は銃口がどろりと溶解して塞がってしまっていた。

一瞬でこれだ。あの炎の温度が想像できて駿は顔を歪める。
その直撃を受けたはずの二人がほぼ無傷というのはあまりにも不自然であった。駿の表情を読み取ったように、千瀬がそっと口を開く。

「たぶん――ルカが助けてくれた」
「……うん」

ロザリーも硬い表情で頷く。炎に飲み込まれる瞬間ルカの名を呼んだのはミクだ。同時に己の身体を包んだ見えざる力の存在に、少女達は確かに気が付いていた。
咄嗟に身体に抱き込んだ千瀬の刀は無事だったらしい。ロザリーの銃は少しだけ、その保護下から外れていたのだ。

「……っか。ローザ、それもう使うなよ。暴発すんぞ」
「お気に入りだったのに……」

【ミリアム】が目の前で消えてゆく様子を見た駿が、ルカの力を疑う理由など存在しなかった。不満そうな顔を浮かべるロザリーの頭をくしゃりとかき回して駿は、代わりに自分の短剣を分け与える。
絹華に渡した銃を返してもらえば良かったか、と少しだけ後悔した。

「――――はなして！」

刹那響いた甲高い悲鳴にはっとして三人同時に振り返る。
未だ赤く染まる空間の中で、ミクが背後から小さな身体を拘束していた。自分を押さえ付ける腕から逃れようとアイジャが身を捩る。

「はなして、離してよッ！」
「はいそうですか、っていうわけ、ないでしょ……！」
「嫌、いやぁぁぁぁ！」

暴れ回るのを強制的に押さえ付けて、せめて正気を取り戻させる。
ミクの行ったことはけして間違ってはいなかった。
いやいやと駄々を捏ねるように泣き喚いていたアイジャがふっと肩の力を抜く。――しかし、

「悪い人は、やっつけなきゃいけないの」

色を失くした瞳がゆるりと瞬く。少女がそう呟いた瞬間、ミクがはっとして身体を引いた。

「だから、死んでよ」

アイジャの身体が橙色の閃光に包まれる。光は渦巻いて少女の胸の前で収束すると、次の瞬間凄まじい音を立てて炎上した。
――――ルカ！
名を叫んだのは誰だったのかわからない。火炎放射機から噴出するそれのように爆ぜた炎が、一直線に襲う先にいたのは。

（あれを食らったら、）

彼女といえども一溜まりもない――その結末が脳裏を掠めた駿はしかし次の瞬間、信じられないものを見た。

黒髪の少女が白い腕を横に振り払う。その指先に従うかのように、宙に見えない亀裂が入った。
みるみるうちに切り裂かれた空間がぱっくりと口を開けてブラックホールのような闇が現れる。何もなかった、今まで景色の一部でしかなかった場所に切り取ったような黒い影――――ごぽり、という水音を少年は聞いた。

次の瞬間、ルカの開けた“穴”から凄まじい勢いで何かが吹き出した。

「なん、だ!?」

太い柱のようなものが真一文字に突出する。一見水のように見えてジェル状に流動するそれは、生物のように蠢いてアイジャの放った火炎に激突した。

第五章《迷霧》：盲目のラバイ（2）

耳をつんざくような轟音が脳を揺さ振る。一瞬目の前が真っ白になったかと思うと突然凄まじい突風に身体を煽られた。地から足の離れる嫌な浮遊感を感じて駿は、咄嗟に両脇の二人を守るように抱え込む。

「わぷッ」
「ふぎゃ」

奇妙な悲鳴を上げた少女達と駿はそのまま一塊になって塵のように吹き飛ばされた。頭だけはどうにか守って固い床に墜落する。三人とも上手く受け身をとって、なんとか柱の影まで移動することに成功した。

「くそ、加減しろよ……」

目の前で繰り広げられる異常な光景に茫然とする暇さえ与えられず、遣る瀬ない気持ちになりながら駿は呟いた。“常識はずれ”は彼らの“常識”だ。しかし今現在起こっていることは、駿の想定する“異常”の遥か上を斜めに行っていた。

――――例えば巨大な火山が二つ並んでいたとして、それが双方同時に、しかも互いに向け合うように真横に噴火したら。ぶつかり合う二つの火柱はこんな風になるのだろうな、とぼんやり駿は思った。無論、そんな事などこの世の終わりにだってありはしないだろうが。

（……こんなん、アリかよ）

空気がビリビリと振動している。目を開けているのさえ辛い状況で、けれど三人の目はその光景を確かに捉えていた。
アイジャとルカ、放たれた二つの力がぶつかり合って拮抗する。互いに相手を打ち破ろうとするその中心からは激しく火花が飛び散っていた。鳴り止まない雷鳴のような音とそれにともなった熱気。どちらも引かない。

「……！？」

――突然のことだった。
ルカが微かに微笑んだのを駿は見た。次の瞬間、今までぎりぎりに保たれていた二つの力の均衡が崩れる。
ルカの放った“モノ”が突然大きく膨れ上がったかと思うと口を開けるように広がった。そのままばくんと音を立てて――アイジャの放出していた火の玉を飲み込んでしまったのである。

「ごちそうさま」

さらりと言い落として笑ったルカとは反対に、顔色を変えたのはアイジャだった。驚いたように目を瞬かせている、その奥には微かな怯えの色が浮かんでいた。

「ルカ……すごい、」
「あいつ余裕なのかよ……」

呆けたように呟いたロザリーの横で駿は顔をしかめる。ルカの隠し持っていた得体の知れない物体は未だ空間の歪みから突出したまま。しかし肩の力を抜いたルカとシンクロするように柔らかくなったかと思うと、端の方からどろりと床に溶け落ち始めた。
足元に広がってゆく水溜まりのようなものは澄み切っていて、先の

膨大なエネルギーを飲み込んだ後どこにいったのか皆目検討もつかない。時折ごぽりと泡立つ様は今にも爆発しそうで、見ていて気分の良いものではなかった。

「――――“あれ”はルシファーの最終兵器よ」

ふと響いた声のほうを見やれば、いつの間にこちらへ来たのかミクが腕を組んで立っている。兵器、と繰り返した千瀬に向かって彼女は小さく頷いた。

「あれはルカのものだけれど、ルカ自身が本来持つ力とは違う」

「え……？」

「……あれはね、意思を持ってるのよ」

全てが溶けて床一面に小さな湖ができる。ルカの足元で蠢くその液体を見つめながら、ミクはすっと目を細めた。

「あれはルカの身体を宿り木にした“悪魔”なのよ――あれは母体であるルカを護ろうとするし、あの子の意志には従うわ。でも――」

「……でも？」

「一線を越えればルカにも制御できなくなる。……暴走してトリクオーテを消したのは、あれよ」

幾度となく聞いた街の名前に千瀬ははっとして口をつぐむ。その一線が何を指すのかはわからないが、それが持つ危険性だけは嫌というほど理解できた。

変幻自在の未知の物質。恐らく先程少女たちを包み込んで炎から守ったそれは、触れたものを溶かし蒸発までさせることが可能である。向かってくるものを吸収し消滅させる力も有している、その実態は諸刃の剣だ。ルカはその体内に、爆弾のようなものを抱えている。

「……ま、大丈夫でしょ。もうあの頃とは違うし、相手もあの程度だから」

どういう意味だと低く問い掛けた、駿の眉間には深い皺が刻まれている。“その程度”の相手に右往左往していたのはこちらの方だ。ルカがそれを凌ぐ圧倒的な力を持っていたとしても、現状は変わらない。アイジャが再び暴れだせば、一帯は簡単に火の海になるだろう。

しかし次の瞬間、ミクは駿の疑問を無表情で放り捨てた。

「消してしまえば良いんだわ、」

「――――ッ、ちょっと待て！！」

ミクの言葉と同時に、ルカの足元にある【水溜まり】が激しい音を立てて吹き上がる。水柱は獲物を見つけた大蛇のように鎌首をもたげて。

考える前に身体が動いていた。パキパキと乾いた音を鳴らして氷のように硬化した、その鋭利な切っ先がアイジャを貫く前に少年は間に立ちはだかる。

「……ッばか、シュン――――！？」

聞こえた悲鳴はロザリーのもの。

――――ルカの刃（ちから）は駿の喉笛を切り裂く数センチ手前で、ぴたりと停止した。

「……何してるの、シュン」

「……見てのとーりだよ」

死にたいの？
心底不思議そうに問い掛けるルカに、駿は苦く笑ってみせた。やってしまったことは仕方がない。

「……ここでコイツを殺すのはお門違いじゃねーの。オリビアは消えてチトセが情報を持ち帰って任務完了だろ？　今回の仕事は余計な死人を出さねぇってのが条件で、コイツはここの生徒だ。……普通の生徒じゃないみたいだけど」

我ながらかなり苦しい言い訳だと駿は思う。けれど彼は、アイジャをこの場で死なせたくはなかったのだ。
――駿の目の前で死んでいった、少年の言葉がある。

「……もう、考えるの面倒なのよね」

何を馬鹿なことをと、叱責されるのだろうと思っていた。しかし聞こえたミクの言葉は。

「そこにいるアイジャが何者であろうと関係ないじゃない。面倒なものは消してしまえば良いし、あたし達にはそれができる――ずっと、そうしてきたのよ」

駿の予想などはるかに超えてしまっていた。

「ヒトとは違うあたし達には、あたし達のやり方がある」
「……ッ、ミク、」

碧い碧い瞳の奥に揺らいだ確固な意志を少年は見た。ミクやルカが生きてきた世界の根底を垣間見たような気持ちになる。
ミクの言うとおり最初から、全てをなくしてしまえば。他人を拒絶

し付け入る隙を与えてこなければ確かに、今日この瞬間のような事は起こらなかったに違いない。
――けれど、と駿は思うのだ。

「お前も、ルカも。否定すんなよ、」
「……？」
「お前ら確かにすげーよ、普通じゃねーよ。でもさ、」

人間だろ。
口から零れ落ちた言葉に一番驚いたのは駿自身だったかもしれない。
殺人に手を染め犯罪に加担する己を化け物と称してきたのは少年自身だった。けれど今は違う。人間だとそう言い切った、千瀬の気持ちがわかるような気がした。
沢山の葛藤を胸に抱えて生きる自分達は、皆。

「お前らは人間で、アイジャも人間だ。人間は自分で生き方の選択するし、人間同士ってのはさ、会話できるもんだろ」

俺は何を言っているんだ、と駿は自嘲する。少し離れた所からじっとこちらを見つめる千瀬の視線を感じながら、少年はそっと息を吐いた。
ただ一つ確かなのは、今ここでルカにアイジャを殺させてはならないということだ。

「わかり合えって言うわけじゃないんだ、ただ――」
「良いわよ、駿」

朗らかな声が響いた。従えた、聳え立つ凶器に身体を囲ませているルカが柔らかく笑う。

「アイジャに選ばせてあげる」
「ルカ！」

嗜めるようなミクの叱責に、ルカはゆるゆると首を横に振った。

「ミク――わたしね、人間は面白いと思うようになったわ」
「何言って……」
「グラモアの言いたかったことが最近、今更になってわかるような気がするの。どうしてだろう」

片手で金髪の少女を制してルカは、駿とその背後の少女に向き合った。
もし、わたしが人間だと言うならば。ルカは呟いて笑う。わざわざ不毛なことを行うのも、また一興なのだろうと。

「今死ぬか、このまま戦うか、何なら和解だって考えても良い。どうするかはアイジャに決めさせてあげる」
「……礼を言うよ、ルカ」
「でも――その子は死ぬ気満々ね」

ルカの言葉にはっとして振り返った、駿の頬を灼熱が叩いた。おとなしくしているとばかり思っていたアイジャの身体から太陽光のような閃光と熱気が立ち上っていた。

「……ッお前何して、！」

ぼっ、と発火の音がした。
怒鳴ろうとして刹那、年は口をつぐむ。見開いた眼が映したのはアイジャのスカートだ。今まで焦げ目一つなかったそれが、じりじりと端から燃えている。

――駿の身体から血の気が引いていった。この炎は、今までと違う。アイジャは自分自身をも焼いてしまう強大な力を、ルカに向けて放とうとしていた。

「この、バカ娘……ッ！」

ドレス襟首を掴みあげた手の平が燃えた。皮膚を焼く熱に顔を歪めて、しかし駿はアイジャを止めようとその身体を揺する。離れないと死ぬ、そうミクが叫んだのが聞こえた。

「俺はお前の兄貴の最後を見取った！　お前に、伝言があるんだ……ッ」

むせ返るような熱気に駿の頬を汗が伝う。渦巻く炎に包まれてゆくアイジャがふと顔をあげた。

――真っ赤に染まったその瞳にぽっかりと浮かぶ絶望を、駿は見る。

「アイジャには、兄、なんて、いないの」

「――――――――ッ！」

やめろ！！――――――叫んだ駿の声はアイジャに届いたのだろうか。確認はできなかった。収斂した熱が放出されるその寸前、聞こえた声に駿の意識は全て持っていかれてしまった為である。

「――――お兄ちゃん……っ！！！」

ここで聞こえるはずのない、その声に。

第五章《迷霧》：盲目のラバイ（3）

聞こえるはずのない声。いるはずのない人物。何故、どうして、そんなことを考えている暇など与えられないままただ駿は叫んだ。

「――――――カズサッ！」

視界が白く濁る。飛び込んできた柔らかい身体を抱き抱える。轟音と誰かの絶叫と冷たい感触、全てに包まれて何が何だかわからなくなった。

手放しかけた意識をギリギリのところでつなぎ止めて駿はぐっと両腕に力をこめる。掻き抱いたかいなの内側で、トクトクと温かな鼓動を感じた。

……生きている。

「おにいちゃん、」

どれほどの時が経ったのだろうか。訪れた静寂（しじま）に小さな声が降り注いだ。ゆっくりと目を開けた駿の視界いっぱいに、記憶より少し大人びた少女の顔が映る。

「一咲（かずさ）、」

「お兄ちゃん、お兄ちゃん……！」

何度も己を呼んでしがみ付く妹を身体からそっと離し、かわりに駿はその頭を撫でてやる。見渡せば辺り一面黒く焼け焦げていたが、駿と少女のまわりだけが綺麗に白く焼け残っていた。目を凝らして少し離れ対置に立つ、仲間たちの無事も確認する。

（……あれ、か）

あの冷たい、水のような感触。頬に触れたそれを思い出して駿はそっと息を吐きだした。
また、守られた。

「お兄ちゃん」
「うん」
「お兄ちゃん、ごめんなさい……ッ」

一咲の喉が引きつったような音を立てる。泣きじゃくりながら少女は、知っていた、と繰り返した。

「あたし、知ってたの。お兄ちゃんがここに来てることも、あの人たちと一緒にいることも、アイジャのことも、」
「アイジャ……？」

はっとして背後を振り返った駿の瞳に、茫然と立ち尽くすアイジャが映り込んだ。髪や服の端が焼け焦げてはいるがおおよそ無傷のその状態に、思わず駿は安堵の息を吐く。
おそらくは兄妹を守るために割って入ったルカの能力が、あの炎を相殺したのだろう。
かずさ、と。ぼんやり呟いたアイジャの言葉に駿はまた一つの真実に行き当たる。

「……知り合いか、」
「芽衣子は私の友達だった。アイジャがここに来て、あの子と同室になって、それからずっと私、私……」

小さく震えて一咲は俯く。昔から人一倍聡い子供だった、思い出し

て駿は静かに言葉の続きを待った。

「……私、本当はここに来ちゃ行けなかったの。何もしない約束で、全部見てた」

「約束――？」

「わ、私、手伝ったの。アイジャのお兄さんの、死んでしまった彼の、身体を運びだした……！」

「なん、だって？」

予期せぬ言葉にその場にいた誰もが驚愕を顕にする。

一咲は人知れず何者かと“約束”を交わし、ウォルディ・レノ・フアンダルスの遺体を動かす手助けをする代わりに真実を知らされていた。――今、この学園で起こっていることの全てを。

「何もしない約束で、ずっと見てた。お兄ちゃんが無事なら私はそれでよかった、でも、」

ついに耐えきれなくなった一咲の飛び出した場面は、兄を狙う炎の真っ正面だ。なんて無謀なことを、思って駿は恐ろしくなる。一歩間違えばこの唯一の肉親を永遠に失うところだったのだ。護りたいからこそ、一咲をこの島においたのに。

（一体、どこのどいつだ？）

その妹を前線に引きずりだした何処かの誰かを、一発殴ってやらなければ気が済まない。誓った駿の耳にまた、泣きそうな一咲の声が飛び込んでくる。

「アイジャ、アイジャ……お願い、もうやめよう？　これ以上は苦しいだけだよ」

名を呼ばれたアイジャの、虚ろな瞳が一咲を見る。白い手を伸ばしてそっと煤のついた頬に触れた、一咲の仕草は母親のそれに似ていた。

「ごめんね、アイジャ。私、知らないふりをしていたの。でもホントはね、全部聞いちゃった」

「ぜんぶ」

「あなたのお家のことや、お仕事のこと。不思議な力のこと、お兄さんのこと……」

「おにい、さん」

言葉を知らぬ幼子のように鸚鵡返しに呟いて、アイジャはことりと首を傾げる。力の限り熱を放出したその身体では、思考能力が低下しているようだった。

「……そのひとは」

やがてアイジャはゆっくりと瞬きをする。のろのろと腕が持ち上がり、手の平が何かを指差す形になった。小さく呟いた後その指を真直ぐ駿に向け、アイジャは問い掛ける。

「そのひとは、かずさの、たいせつなひと？」

「――うん」

私の、お兄ちゃんだよ。

一咲が呟いた瞬間、アイジャ顔がくしゃりと歪んだ。涙を零す一歩手前のその状態でアイジャは突然絶叫する。

「ちがう、ちがう違う違う！　アイジャにはお兄さまなんてい

ないの、最初からいないの！　誰かが死んでもそれはアイジャのお兄さまじゃない、知らない、知らない……ッ！」

「――でも、ウォルディはお前の兄貴だろう」

駿の喉から自分でも驚くほど、静かに澄んだ声が出た。

「お前たちに何があったかなんて知らない。けど違うって、お前は本当に思ってるのか？」

「……お兄ちゃん、」

静かに己を呼ぼう妹に、大丈夫だと頷いてみせる。今なら伝わる、その確信があった。

「少なくともあいつは――ウォルディは、お前のことを妹だと言っていた」

「……っ！」

兄妹の繋がり、温もり、その愛しさを駿は知っている。絆が引き裂かれることの苦しさを誰よりもわかっている。――伝えたいと、思った。

「お前に、生きろって。大切だったって、そう言ってた」

アイジャの瞳が大きく揺らいだのはその次の瞬間のことである。みるみる膨れ上がって決壊した、透明な涙が滑らかな頬を伝って落ちた。

うそつき、うそつき。呟いてアイジャは手の平で顔を覆う。

「うそつき、ウォルディの嘘つき。妹じゃないって、ゆったくせに」

床にぺたりと座り込んだまま、アイジャは涙を拭うこともしなかった。取り戻せない存在に痛んだ心を隠す必要は、もうない。

「ばか、だわ。ウォルディのばか、」

「ああ、そうだな」

小さく笑った駿の声はしかし、次の瞬間第三者のものによって掻き消される。

「――――もっと愚かなのは、僕達かもしれないけれどね」

「……ッ!?!?」

どこからか聞こえた、この場の誰のものでもない声に空気が凍り付いた。誰もが瞠目するなかでただ、アイジャだけが静かに頷く。

「……そうだね、ユー」

全ての駒が盤上に並んだことを、その時駿は理解した。ひらりと舞い降りるように現れてアイジャの手を取り立ち上がらせる少年の姿に、千瀬が声にならない声を上げる。

「さよなら、ウォルディ」

零れ落ちた最後の一雫と共にアイジャは全てを受け入れる。同時に決別をも行う小さな身体を、彼は寄り添うことで支えていた。

「……さよなら、わたしのお兄さま……――――」

少女の頬を濡らす水滴を袖口で拭ってやりながら、ユリシーズ・ルインが笑った。

慈しむように、わらった。

第五章《迷霧》：盲目のラバイ（4）

「――ユリ、シーズ」

その名を呟いた千瀬の声は途切れ途切れになる。彼を見たのはあの日以来だった。全ての歯車が狂い始めた日。偶然の重なりが悲劇を呼び、結果ルシファーは大勢の犠牲者を出した――千瀬の大切な仲間が、尊い命を失った。

「あのひと、」

小さく呟いた一咲の声で刹那、駿は全てを悟る。突然現れたその少年こそが、自分の妹をこの場へ引きずりだしたのだ。全てを一咲に伝えて利用し、自分は裏で。

「ユリシーズ、だって……？」
「お兄ちゃん、？」

妹を背後に庇うようにしながら、駿はふらりと立ち上がる。千瀬の呟いたその名には嫌というほど聞き覚えがあった。
実際に目にするのはこれが初めてだ。ロヴはあれを必然だと言い、レックスは少し時期が早まっただけだと言う。けれどそんなもの、駿は納得などしていない。あれ以来誰も言及はしなかったが、駿は心の奥底で発散できない思いを燻らせていたのだ。

（こいつさえ、余計なことをしなければ）

サンドラは死ななかった。

ルカがサンドラを殺す必要はなかった、のに。

「……ッてめえェ！！」

思考が脳裏に過った瞬間、頭の奥でかっと何かが発火した。激情に任せて腕を振るえば駿の掌に、隠し持ったスローイングナイフの最後の一本が躍り出る。

投げることはしないでそのまま直にナイフを握り締めた。

「シュン！？」

「お兄ちゃんッ」

千瀬と一咲の呼び声が重なるのを無視して少年は真直ぐユリシーズに刃を振り下ろす。

――――しかしそれはユリシーズの首筋を掻き切る前に、強制的に阻まれた。

「やめなさい、シュン」

「……どういうつもりだ、ルカ」

ぐぐ、と腕に力を込めるが全く動かない。駿の右手はナイフごと何かに絡め取られて拘束されていた。

――ルカの能力だ。時に水の包容力を持ち時に氷の鋭利さを持つ未知の物質は今、粘性と弾力を持つ触手のように形質を変え駿の腕を締め上げている。

「これは命令よ、シュン」

「――くそ、」

こうなってはどうすることもできない。小さく毒吐いて駿は肩の力

を抜いた。すると絡み付いていたものもするりと外れて地に落ちる。ずるずると床を張ってルカの影の中に戻ったそれは、気付いたときにはまた跡形もなく消え失せていた。

「――久しぶりね、ユリシーズ・ルイン」

「逢えて嬉しいよルキフージュ……僕、セカンドネームを名乗ったことあったかな？」

首を傾げる少年にくすくすとルカは笑ってみせる。その様子をしばし見つめていたユリシーズは、ああ、と息を吐いて頷いた。

「……なるほど。サブナックから色々読み取ったわけか」

「実際にやったのは私じゃないけれど」

ちらりとミクを見ながらルカは言う。ミクはその視線に気付かなかったようで、腕を組んだまま苦い表情でユリシーズを睨み付けていた。次から次へと嫌になる――その顔にはありありとそう書いてある。

「……もう貴方の前には現れないって、言ったのにね」

ふっと表情を和らげて困ったように笑うルカに、ユリシーズもまた笑い返す。

「その節はどうも。伝言はちゃんとサブナックから受け取ったよ――けれどお陰であの後しばらく、アイツ使い物にならなかったからね。何言ってもすぐ忘れるしボーッとしてるし、ボケちゃったのかって本気で心配したよ」

「あら……それはご愁傷さま」

二人が何の話をしているのかさっぱりわからない駿は眉を寄せた。
割って入っても無駄なことは経験済みだ。
一咲の腕を引いて端の方、千瀬やミクのいる場所に連れて行く。大丈夫かと尋ねてくるロザリーには小さく頷いて、駿は再びルカのほうに目を向けた。ユリシーズの背後にはまだアイジャが座り込んだままだ。

「……ねぇルキフージュ。僕を殺したいと思う？」
「いいえ」

小さな問い掛けにいらえを返したルカの声はあまりにも穏やかで、駿は思わず目を見開いた。
何故、と駿は呟く。自分を制止したのもルカがその手で、ユリシーズを仕留めるためだと思っていたのに。
驚いたのはユリシーズも同じだったようで、僅かに見開かれた瞳が困惑の色を湛えていた。

「……アタマ、おかしいんじゃないの。　君たちに僕が何したかわかってる？」
「貴方は何もしていないのよ、ユリシーズ。私たちの組織は何一つ変わらず動き続けている」
「――――ッ」

息を呑んだのは駿だけではなかった。千瀬もロザリーもはっとして口元を押さえている。
サンドラの件はもう終わったことだ。振り返るなと言われ続けた意味を少女たちは漸く知った。――――激情のままに流されては、任務など完遂できようはずもない。

「貴方こそ私を殺したいんでしょう、ユリシーズ」

ふいにルカの声のトーンが下がる。
皆が固唾を飲んで見守る中ユリシーズだけがぴくりと肩を震わせた、その瞬間を千瀬は見た。

「――あなた、フレデリックの子ね？」
「……そうとも。フレデリック・ルインは僕の父親だ」

囁くように言葉を紡いだユリシーズの、語尾に微かな怨嗟が滲んだ。
やっぱりそうなのね？　問い掛けたルカに少年はこれまでと一変した、卑屈な笑みを浮かべて答える。

「でもね、君の考えてることはたぶんハズレだよ――父（あのひと）は僕に名前すら与えてはくれなかった」
「お、いちょっと待てよ、意味わかんねー！」

声を上げたのは駿だった。どういうことだと問い詰めようとするのをミクが制する。

「おいルカ、」
「……貴方は、私を恨んでいるのでしょう？　私に執着するのは、」
「……、」
「父の仇を討ちたかったからじゃないの？」
「――違うよ」

黙り込んでいた少年が低く呟いた。ゆるゆると首を横に振る仕草を見て、ルカはことりと首を傾げる。

「……違うよ。父親のことで君を恨んだことなんて、一度だってない」

「おかしな人。貴方は私を恨む権利があるのに――――それどころか、私に殺されたがっているみたいだわ」

ルカの言葉に誰もが目を見開いた。殺され、たがっている？　そんな馬鹿な。駿が思ったところで、ありえない肯定の声が降った。

「……驚いたな。バレちゃってたんだ？」

「……ッ、ユリシーズ！？」

すぐ傍らから甲高い声が飛ぶ。力を使い果たしてぐったりと目を閉じていたはずの、アイジャの顔が恐怖に染まっていた。

「なに、ゆってるの、ユーってば。ねぇ、ユリシーズ、ねぇってば……ッ」

嫌……！！　叫んでアイジャがユリシーズの身体にしがみ付く。小さな背中でその姿をルカから隠そうと必死になった。嫌だ、嫌だと繰り返すアイジャをユリシーズは困ったように見つめている。

「……僕は、ただ」

「やだ、嫌だ、いなくならないで……っ！」

泣き叫ぶアイジャの顔を上げさせることになったのは、ルカの静かな声だった。言ったはずだ、と。言い切る少女の表情は凪いで何も読み取らせない。

「あの青年に頼んだ言伝（ことづて）を聞いたでしょう？　私は、仕事でしか殺さないのよ」

「……、」

「貴方の私情に付き合う気はない。貴方のシナリオ通りにはならな

い。殺してなんて、あげない」
「……どうして、」
最初から貴方は変だった。小さく零してルカは少し遠くを見るような仕草をする。
「貴方の目的はルシファーじゃなくて私一人。何を考えているのかは知らないけれど、私は自殺幇助も墓標代わりになるのもごめんだわ」
「……君はいじわるだね」
「そうかしら。――――貴方この子を迎えに来たんでしょう、ユリシーズ」
言外にここから早く立ち去れと言われているのに気が付いて、少年は目を瞬かせる。小さく震え続けるアイジャのつむじをそっと撫で付けて、ユリシーズは細く息を吐いた。
「そこまでわかっていて殺してくれないなんて、君はやっぱりいじわるだよ……」
まぁいいや、言ってゆっくりと少年は笑った。邪気のすっかり抜け落ちた笑みだ。
「本当に、君の手にかかって死にたかったんだよルキフージュ。……でもちょっとね、もう少し生きようかなって気分になった」
大切なものが出来たよ。
ユリシーズがそう呟いた瞬間、轟音を立てて火柱があがった。炎はユリシーズとアイジャを包み込みみるみるうちに膨れ上がってゆく。このまま二人が消えることを悟って駿が叫んだが、ルカは微動だに

しなかった。

『君に気付いてもらえたら、それでよかったんだ』

灼熱に包まれた深紅の世界で、直接頭に声が響く。いつかの日に千瀬が感じたものと同じ、テレパシーのようなもの――――その発信源が今は炎の向こうに消えた少年であることは、考えずともわかった。

『サンドラ・ジョーンズを殺すつもりはなかった……そう言ったら』

『君は信じないだろうね、ルカ』

膨れ上がった炎が一際まばゆく発光すると、刹那小さく収束してゆく。それに合わせてユリシーズの声も、気配とともに消え去った。

「サンドラを殺したのは私よ」

ルカの声だけが響いて石膏の壁に吸い込まれる。

「貴方じゃなくてね。ユリシーズ・ルイン」

駿が目を開けた時にはもう、アイジャの姿もユリシーズの姿もどこにも見えなかった。あの膨大な炎でさえ跡形もない。

「……アイツら逃がして良かったのかよ、ルカ」

ルカは駿の質問に答えなかった。かわりに淡く微笑んで、約束は守ったと独りごちる。

「約束？」

「グラモアとの、ね」

「……ハァ？　何だそれ」

「ルカ」

少年の疑問はミクの声によって掻き消されてしまう。僅かに煤を被った金髪を指先ではらうミクは、微かに眉をひそめていた。

「あの子供……ユリシーズの目的はやっぱり、“父親を殺した”あなたへの復讐？」

「そう思ってたけれど――」

ルカは心底不思議そうに首を傾げて呟いた。

「違ったみたい」

「……え？」

ねぇチトセがいないよー！　ロザリーの呑気な声だけが響いて、少しだけ涼しくなった風を呼ぶ。

第五章《迷霧》：盲目のラバイ（4）（後書き）

更新頻度が下がっていてすみません…（＜＿＞）学園編もようやく終わりに近づきました。ユリシーズの父親については次話で。

第五章《迷霧》：盲目のラバイ（5）

降り積もった憎しみも膨れあがった愛も、見えなかった盲目の僕等。
盲なら耳に唇よせて、聾ならやわく肌に触れて。
やっと伝えられる、優しい子守歌を君に。

『ねぇ、うたを、うたって』

日の落ちた海、水面を撫でる風が波を立てる。ぷかぷかと揺れるクルーザーは少年が単独で使用し乗り捨てていたものだ。岩陰に隠してあったそれは、数日前にそうしたのと変わらない姿をしている。ユリシーズはそっと安堵の息を吐いた。ウォルディやアイジャ、そして自分を追ってこの島にやってきた刺客はこの船に気付かなかったらしい。

「お前にしては随分と不用心だな、ユリシーズ」
「……！？」

船に乗り込もうとしたところに声をかけられて、ユリシーズは身体を飛び上がらせた。背中におぶったアイジャがずり落ちるのを慌てて支える。
声の方を見れば、船首の辺りにすらりとした人影があった。

「さ、」

――――サブナック。
カーマロカの屋敷に置き去りにしたはずの青年の名を、おそるおそるユリシーズは呼ぶ。
どうやってこの島を捜し当てたのか。従者にさえ追跡されぬよう、細心の注意を払って来たはずだったのに。

「どうしてここに」
「……馬鹿め」

問い掛ければ吐き捨てるような返答がある。どうやらサブナックはかなり虫の居所が悪いようだった。
――――長い時間を共にした人間が、何一つ告げず姿を消したのだ。青年の怒りは当然のことである。

「……」
「……殿下は」
「……え、？」
「眠っているのか」
「あぁ、……うん」

ユリシーズの背で目を閉じたままの少女をサブナックは見つめた。死んだように眠る小さな背中が微かに、呼吸とともに上下する。

「――ウォルディ殿下の御遺体は俺が引き取った」

一度揺すりあげてしっかりアイジャを支えなおしたユリシーズに、淡々とした声がかかる。サブナックの、通常と何ら変わらないそれに少年は安堵した。

「そう……」

「今は船室に」

カーマロカの世継争い。ファンダルスの一族の血を引く二人に差し向けられた刺客の残党を狩り、ユリシーズがこの島に着いたときには既にウォルディはこと切れた後だった。――それは、始めから予想されていた結末だ。

ユリシーズは自分の知る全ての情報と引き替えに、ウォルディの遺体を移動し隠すように命じた。その相手が武藤一咲だったのは偶然だ。キヨカワメイコの死後から、一咲はアイジャの行動を気に掛け共にいることが多かったから。

「……あんな小娘がひと一人の身体を遠くまで運べるわけがないだろう」

「そうだね……時間がなかったものだから」

サブナックがこの島にやって来たのは、実はユリシーズの到着とそう差の無い時間であった。布に包んだウォルディの身体をどうにか現場から動かした一咲を見つけたサブナックは、彼女から事情を聞き遺体を受け取ったのである。

ユリシーズの乗ってきたらしいクルーザーに遺体を運び込んで、そのままサブナックは動かなかった。少年の帰りを、待つことを選んだ。

「……お前、これからどうするつもりだ」

ユリシーズは甲板にひらりと飛び移ると、背の少女を静かにおろして壁に凭れさせる。震動を感じても目を覚ます気配の無いアイジャはすやすやと寝息を立てていた。

「君こそどうするつもり？　サブナック――――どうして僕なんかについて来た」

僕はもうカーマロカには帰れない。

言い切ったユリシーズの瞳は真っすぐに澄み切っていた。少年は世継を無断でそとの世界に連れ出し、カーマロカの存続を危ぶませている現行犯である。継嗣を巡る争いの最中で、大勢の元同僚を殺した。

「見逃してくれないか。……君は、帰れ」

真摯な視線を受けとめて、しかしサブナックは次の瞬間不敵な笑みを浮かべる。

「俺はお前について行く」

「な……ッ！？」

少年の瞳が際限まで見開かれだ。叫びだしそうになるのを堪えて、ユリシーズはぎゅっと拳を握り締めた。

「なんで、」

「俺とてもうあの屋敷には帰れない。……このクルーザーを追ってきたお前への刺客、殺してしまったからな。俺も立派な謀反人だ」

「なんでそんな馬鹿なこと！」

「馬鹿はお前だ、ユリシーズ」

低く言い放ったサブナックの表情が、刹那ふっと和らぐ。

彼はユリシーズについて何一つ知らない。けれどその存在は、かけがえのないものだった。

（いつ何時、何が起ころうとも）

サブナックにはただ一つ、決めたことがある。

「俺は俺の正義に従う。ただしそれは」

「……っ」

「必ず、お前の傍らで」

ユリシーズがいなければ今、サブナックは此処にいなかっただろう。絶望の淵にいな彼に気紛れな手を差し伸べた少年の、柔らかい笑みを忘れない。良いものを見つけたと喜んだ、機嫌の良い猫の瞳。存在を歓迎された瞬間の、名まで与えられたあの日の気持ちを、どうやって忘れればいい。

「お前あっての俺なんだ、ユリシーズ」

「……サブ、君は、」

本当に馬鹿だ。

呟いた言葉は聞こえなかったことにした。泣きそうに歪んだ子供のような顔は見ないふりをしてやるから、それでおあいこだと青年は思う。

「船を出すぞ」

柔らかな巻き毛をくしゃりと掻き混ぜてサブナックもまたクルーザーに乗り込んだ。低く唸る機械音と共に船体が海面を滑り、遠くなる島をぼんやりとユリシーズが見つめている。

「……ねぇ、」

生ぬるい風に潮の匂いが混じる。満ち欠けを繰り返す月は薄い雲に覆われて朧気に光っていた。――明日は雨だ。遠い昔誰かに聞いた、天気の読み方をサブナックは思い出す。

船は滞りなく進み、邪魔する者はもういない。歪な形に盛り上がった島が目ではわからないくらい遠ざかったところで、ぽつりとユリシーズが呟いた。

ねぇ、サブナック。

「――昔話を、聞いてくれる？」

＊　＊　＊

ユリシーズの父、フレデリック・ルインは一部の界隈で名の知れた科学者であった。彼には妻があったが、フレデリックは一日の全てを研究室に捧げていた。
家庭を顧みず仕事と夢ばかり追う人間の典型。しかし現実は、そのような可愛らしいものではなかった。
――フレデリック・ルインの専門分野は生物兵器開発。それもウイルスを使用した通常の兵器ではなく、生きた人間の開発を行っていた。
フレデリックは、世界を脅かす力を持った人間をその手で作り出したかったのである。トリクオーテと呼ばれていた、小さな街の地下で。

ユリシーズが生まれたその日、母親は死んだ。産まれてくる子供の強大な力に身体が耐えきれなかったのだ――――ただびとに、能力者は産み落とせない。

二人の間に愛があったのか、今となってはわからない。フレデリックは妻の死後も研究に没頭し、一度たりとも家へは帰ってこなかった。生まれた子供は名前さえ与えられぬまま施設に預けられ、幼少期の全てをそこで過ごした。

（いらない）

（こんな力いらない）

（どうして、）

（どうして僕が――――）

「施設の中である日、父が死んだと聞いた。結局顔もわからないままだった。天涯孤独の僕を施設の人間は哀れんでくれたけれど、僕は自分一人で生きていくことを選んだ」

その頃既にユリシーズは、自分の力の片鱗に気付いていたのだという。誰にも教えられていないのに知っていた。母を殺したのは、自分の身体に流れるこの血だと。

小さく息を吐いてユリシーズは、淋しそうに笑う。

「あのね、サブナック。僕の身体にはほんの少しだけれど、ファンダルスの血が混じっているんだよ。母方の血を辿ると――遠いんだけど確かに、ドンの血縁に当たるらしい。とうに薄まってしまったはずのカーマロカの炎が、僕には宿っていた」

だからなのか。少年の告白を聞いてサブナックは一人納得する。ユ

リシーズの持つ煉獄の炎は、ファンダルスの一族にのみ許された力なのだ。

「施設を出てしばらくは放浪生活をしてた。けど、ほんの些細なきっかけで僕の血筋を人から教えられて――」

少年はしずかに目を閉じる。あの日感じた憎しみはふつふつと沸き立って、胸の内を焦がしていった。

平和維持組織カーマロカ。組織を統括する、ある一族の話。

（憎い）

（炎の力が憎い）

（力の元凶になる一族が憎い）

（当たり前のように、今生きている奴らが憎い）

僕は、何も持っていないのに。最初からないから、奪われることすらしなかったのに。

「……本当は僕、アイジャを殺すつもりだった」

サブナックが僅かに目を見開いた。

長子ウォルディが欠陥と判明した当時のカーマロカは戦力を必要としていた。復讐のつもりで屋敷の扉を叩いたユリシーズを受け入れたファンダルスの一族。正統な血のもとに能力を有していることがわかったユリシーズを公爵の位に置き、まだあまりにも幼かったアイジャの教育係を命じたのはドン＝ファンダルス自身だ。

「本当は大嫌いだ、ひけらかす正義なんて。組織ごとめちゃめちゃにしてやろうと思ってた。でもアイジャは、」

少年の顔つきが穏やかなものになる。サブナックはアイジャが良く、ユリシーズに歌をねだっていたのを思い出した。
ユリシーズは歌など一つも知らない。ならば一緒に覚えようと、アイジャは笑った。

「一緒に過ごすうちにわかった。アイジャは何も知らない籠の鳥だ。僕がしたことは毎日顔を見せて、名前呼ばれて、返事して、そんだけ。……それだけなのにアイツ、笑うからさぁ」

細く、細くユリシーズは息を吐く。
少年の目的はいつしか、カーマロカ滅亡からアイジャを自由にすることに変わっていった。

「……嬉しそうに、笑うからさぁ」

大切なものができた。妹のようだった。けれどそれは少し、淡い恋にも似ていた。愛しいと思ったのは、認めてしまったのは、もうずっと前の話。
ユリシーズという名を与えてくれたドンを討つ気にはならなかった。代わりに、同じくアイジャの自由を望んでいたウォルディと手を組んだ。
――そう、これはウォルディの願った通りの結果だ。彼は死に、代わりにアイジャは自由になる。ユリシーズにはそれを見届ける義務がある。

「それからもう一つ……ずっと、僕が追いかけてたものがあるんだけど」

言えばサブナックは、心得たように一つ頷いた。

「……ルキフージュ＝ロフォカレ、か」

第五章《迷霧》：盲目のラバイ（6）

「あれに対するお前の執着は異常だったな。単なる伝説かもしれないのに」

ルキフージュの名を口内で転がして噛み締める。不思議な響きだ、とサブナックはひとりごちた。

「まだサブは存在を信じない？」

「……いや。お前が言うんだからいるんだろう」

サブナックの言葉を聞いて、ユリシーズは嬉しそうに大きく頷く。

「……ルキフージュに関するデータを手に入れたのは偶々だった。カーマロカが贔屓してる情報屋に流れてきたのを押さえたんだ。僕の独断だったから、ドンは知らない」

「悪い奴だな……」

少し肩を竦めてみせるユリシーズの仕草は、悪戯の見つかった子供のようだった。

「ルキフージュの噂は前から知っていたけれど、その情報――レポートみたいなやつだったんだ。それに書かれていたのは、驚くしかないような内容で」

レポートを手に入れたその日、ユリシーズはいまだかつて経験したことのないような衝撃を受けた。

そこに記されていたのはとある実験の記録である。ルキフージュという悪魔の通り名で呼ばれていた被験者は、あまりにも幼い少女だ

った。そしてその人体実験が行われていた、研究所は。

「驚いたさ。次の瞬間には笑いが込み上げてきて止まらなくなった！　僕の父は、ルキフージュを使った実験中に死んだんだ。幼い彼女の起こした爆発に巻き込まれて、街ごと消えた……！」

「ユリシーズ、お前……」

想像を遥かに超えた次元の話だった。サブナックは静かに問い掛ける。

「ルキフージュを恨んでいたのか？」

「恨む？　……まさか」

違うんだよサブナック。息を吐いてユリシーズは笑う。

「恨む謂われなんて僕には無いんだ。あんな男死んだところで、何一つ変わりやしない。僕はただ……」

「……、」

「ただ、どうして、もっと早く殺してくれなかったんだろうって思っただけだ。そうすれば僕がこの世に生まれてくることもなかったのに……！」

「……ッ！」

叫びが聞こえたような気がした。

こんな命いらなかった。母を殺してしまうくらいなら、最初から生まれなければ良かった。いらない、こんな能力（ちから）も何もかも、いらない。

サブナックはぐらりと自分の身体が傾ぐのを感じて踏み留まる。心の奥底で叫んだユリシーズはしかし、自嘲めいた笑みを静かに浮かべているだけだった。

「……羨ましかっただけなんだ。ルキフージュは僕達と同じような力がある。でもアイジャと違って、自分の力で自由になった――ずるいよ」
「……ユリシーズ」
「嫉みとか羨望とか憧れとか、汚いものがぐちゃぐちゃになっていつの間にか執着の対象になってた。それで、」
ぽつりと慈しむように呟く、少年は美しい。
美しくて、哀しい。
「ルキフージュの手に掛かって、死にたかった」
思わず伸ばした腕に絡めとられて、少年の身体が引き寄せられる。サブナックは抱き締めてやりたい衝動に駆られるのを堪え、色素の薄い柔らかな髪をぐしゃぐしゃと掻き混ぜた。
「ただのこじつけだったんだよ。ルキフージュは僕に何も与えてはくれないのに」
「――――っ、」
「……へんなの。どうして君が泣きそうな顔をするんだ」
「……うるさい」
小さく笑う少年を一蹴するが、その目頭が熱く熱を持っていたのも確かだった。感情をストレートに表現できるサブナックと、ユリシーズは違う。
馬鹿な子供だ。サブナックは小さく呟いた。
「……死ぬなんて、言うな。殿下がお泣きになる」
「うん」

乱れた髪の毛を撫で付けながらユリシーズは頷く。先刻よりは幾分しっかりしたその声に、サブナックはそっと息を吐いた。

「さっき……アイジャをおぶって此処まで来る途中にね、女の子に会ったんだ」

「女？」

「うん。綺麗な黒髪の日本人でね、年齢は僕と同じか少し下くらい。刀の使い手で――会うのは、二度目だった。彼女はルキフージュの仲間なんだ」

サブナックはぎょっとして顔を強ばらせる。少女とはいえ、そんな相手と顔を合わせれば戦う以外に道はない。

それでどうしたんだ、鋭く聞き返したサブナックに少年は笑った。

「その子、僕になんて言ったと思う？」

「……？」

「アイジャの手を、離すなって。大切にしてやれって、言うんだ」

失くしたあとではもう遅い。その重みにはきっと、手放した後に気付くから。ユリシーズに向かってそう少女は言ったのだという。

だから僕はもう少し、こいつの手を捕まえているよ。絶句するサブナックに向かって、ユリシーズは朗らかに言い放った。

「……その娘、何者だ？」

訝しむように問い掛けると、ユリシーズはふと目を細める。

「……彼女ね、名を“黒沼”と言うらしい」

「クロヌマ……？　……何処かで、」

「だから僕、“東洋の魔女”に気を付けろって教えてやったんだ。あいつは君を探してるよって――」

はっとしてサブナックは顔を上げた。東洋の魔女、そして黒沼。一部の界隈では伝説化された物語だ。

サブナック自身、朧気ではあるが耳にした覚えがある。

「その口振り――お前、知っているのか」

「あいつは輪廻転生を何度も繰り返して、今またこの世に生まれ出ている。僕が会ったときには“オミナエシ”と名乗っていた」

僕にカーマロカと血の繋がりがあることを教えたのが、オミナエシだよ。

ユリシーズの囁いた言葉に、サブナックは顔色を失った。

「僕のルキフージュへの執着心も、アイツの前では霞んでしまう」

「ユリシーズ、お前……ッ」

「なに？」

「そいつは、“魔女”は、危険だ……！」

てのひらに爪痕がつくほど拳を握り締め声を荒げてから、慌ててサブナックは口をつぐむ。アイジャが目を覚ました様子はない。わかってるよ。前を見据えてユリシーズが呟いた。

「黒沼、か……可哀想だけどあの子、逃げられないだろうね。ルキフージュのもとにいるのは運命なのかも知れない。僕がその事実を知っていることも、その運命の一つなんだ」

「……戦いの日が、来るのか」

「うん、きっと。僕にも、君にも、ルキフージュにも訪れたように……あの子にも選択の時が近付いているんだろう」

潮風が頬を撫でる。ベタつくそれが全ての未来を暗示しているようで、サブナックは静かに眉を寄せた。
それとは逆に、晴れやかでさえある表情を浮かべてユリシーズは空を仰ぐ。

「全ての出会いも別れも、定められた運命への歯車だ。黒沼の娘も、もちろん僕も――」
「――お前はこれからどうする、ユリシーズ」
「僕？　僕は……」

とりあえずダモンとピュティアスを迎えにいこう。何も告げずに置いてきた、今頃主人を血眼になって探しているであろう従者を思って少年は笑った。

「僕は大切なものを護るよ。その為の力だと今なら思える。それから、」

罪を償いに行くんだ。はっきりと意志を込めて少年が言うのをサブナックは聞く。彼がその声を忘れることは一生ないだろう。

「僕は僕に出来る事を――歯車としての役割を、全うしてやる」

風に擽られてふわりと髪が踊った。振り返って笑顔を見せる少年に迷いはない。
波音、風の匂い、ぬばたまの闇と泡沫（うたかた）、何処からか聞こえた子守歌。
現実と幻の狭間で揺れる星々の奏でた音は、物語の始まりと終わりを予感させた。

「――――世界は動くよ、サブナック」

第五章《迷霧》：忘れない空を（1）

あああああ、大きな声がして指を差される。驚いて固まった少女に向かって、

「てめ、こらチトセ！　どこ行ってやがった！」

という駿の怒声が飛んだ。

後始末と言う名の瓦礫拾いを一人エスケープしていた千瀬である。片付けを命じたのであろうルカとミクはのんびり腰掛けて動く気配はなく、ロザリーは遊び半分に壁片を蹴飛ばしている。真面目に働かされているのはどうやら、この場で駿だけのようだった。お前も手伝え、低く言われて千瀬は苦笑する。

「アイジャの奴、派手にぶっ壊しやがって……黒焦げじゃねーか。無理だろこれ。元に戻せるわけねーだろこれ」

「無理でしょうね。後でルシファーから修復部隊を入れるから何もしなくていいわよーチトセ」

「ちょーっと待てえぇぇエエ！」

しれっと吐いたミクに駿が絶叫した。どうやら自分のしていたことが全て無駄だったことに気付いたらしい。ミクは人の悪い笑みを浮かべてクスクスと笑った。

「シュンは素直ね。普通に考えればわかるでしょうに。上司命令だからって何でも聞いてると馬鹿を見るわよー」

「元凶お前だろーが！！」

ぎゃーぎゃーと喚き立てる駿を綺麗にスルーしてミクは立ち上がる。

そろそろ準備するわよ。言いながら彼女はその金髪についた煤を手櫛で梳き落とした。

「何の準備～？」

無邪気に尋ねるロザリーに向かって、決まってるでしょうとミクは微笑む。

そう、長かった仕事がやっと終わるのだ。

「ルシファー本部へ帰還するのよ」

ルカが何も言わず、じっとこちらを見つめているのに千瀬は気が付いていた。他人の気配を察知し監視することのできる彼女だ。千瀬がついさっきまで何処に誰といて何をしていたか、そんなこと言わずとも知れているに違いない。

結局、問いただされることなどなかった千瀬は何も言わなかった。問われてもきっと答えなかっただろう。あの少年と、何を話したかは。

＊

学園最下層、“牢獄”。地下深くに作られた室内に再び集った面々は、それぞれが土埃や血糊で薄汚れていた。

ルシファーの戦闘員は一人も欠けることなく集合し、教師サラ・ハリソンとして先んじて潜入していたジェミニカもまた顔を出した。

つまるところルシファーは、オリーブ＝αとの戦いに勝利を収めたのである。

「……おい、今何て言った……？」

任務完遂を喜ぶ空気の中で駿の、驚愕に満ちた声が響く。その原因を作った千瀬は小さく息を吐いて頷いた。

「だから、ね。アサカツネヒコの血縁者である藤野の娘は――そこにいる二人は、双子じゃなかったの」

部屋の隅、用意された椅子には今回の協力者である生徒達が身体を寄せ合いながら座っている。百瀬やロアル、駿の実妹である一咲。完全に巻き込まれた形となった愛や沙南の隣には、薫子と翠子――件（くだん）の双子が座っていた。

「双子じゃなくて、三つ子だったんです。……三人目の名前は、桜子」

「……！？」

さくらこ。呟いた二人の少女は小さく震えていた。

わけがわからない様子の一同に促されて、千瀬は少しずつ語りだす。傷を負って倒れた自分の行く先、そこで出会った情報屋。ルカの代わりとして彼女から受け取った事実、この戦いの根本と顛末を。

「……じゃあ何か、鹿島が――オリビアの連中がその双子を狙ったのは、例の“悪魔のデータ”を持っていると思ったからで」

「そう、その情報に間違いは無かったの。確かにルキフージュのデータは、ツネヒコの姪にあたる“翠子”の体内に埋め込まれていた――ただ一つオリビア側の誤算は」

この学園にいる“翠子”は、“翠子”ではなかったこと。

「そんなことって……」

茫然と呟いたのはロザリーである。察しの良いミクやルカはそれだけでわかったのだろう、白い顔をした双子――否、三つ子のうちの二人、を見つめていた。

「データを持ち運び逃げる最中だったんだと思う。交通事故に合ったツネヒコの車には、引き取ったばかりの幼い姪三人が同乗してた。そのうち一人は緊急手術を必要とする重体、残る二人も事故の前後が曖昧になる程度の軽い記憶障害を引き起こして……」

手術を受ける“翠子”の体内にチップ化したデータを埋め込んだのは、おそらくツネヒコの咄嗟の思い付きだ。それが巧くいったのは、その後の彼の巧妙な隠蔽工作の結果に他ならない。

――データの隠し場所を突き止められぬよう、ツネヒコは姪三人の名前を入れ替えて育てたのだ。意識の戻らなかった“翠子”を病院に預け、残る二人は施設を経て孤島の学園に入学させた。

「ここにいる“翠子”は、事故前までは“薫子”だったんです。ここにいる“薫子”の名前は、事故前は“桜子”だった」

「……ツネヒコのやつ、思い切ったわね」

感慨深げにミクが呟く。千瀬はゾラに言われたことを忠実に思い返しながら頷いた。

「事故のせいで記憶に混乱が起こっていた二、三歳の子供です。名

前が入れ替わってもその後の生活には影響が無かった。“桜子”と“薫子”は“薫子”と“翠子”になって、本物の“翠子”の存在を忘れてしまったまま双子として生きてきた――」

「――――――ッ！」

響き渡った、小さな悲鳴のようなもの。慟哭したのは同じ顔をした少女達だった。自分達の身に起こった事実を知らされた、自分の信じてきたものが偽物だった衝撃は言葉になどならないだろう。

気遣う声を掛けようとした千瀬にしかし、次の瞬間予想外の台詞が聞こえてくる。

「さいてい、だ……」

「最低だ、あたし達……っ」

忘れていたなんて。同じ血を分けたかけがえのない肉親を十数年、忘れて生きてきたなんて。

そう言って、二人は泣いた。

「かわいそう」

「みどりこ、が可哀想」

「あたし達本当は、」

「気付いてあげられたかもしれないんです」

「夢、を見てて」

「ずっと長い間……」

三人で手を繋ぐ夢だった。あたたかいぬくもりと泣きたくなるくらい切ない懐かしさ。忘れたくなかった、ずっと一緒にいたかった、目覚めるたびに溢れる涙を理由もわからぬままぬぐって。

すすり泣く声が語るのを、千瀬は何も言えないで見つめていた。うつむいた二人の少女に、瞬間柔らかな声が降る。

「会いに、行く？」

ルカだった。ふわりと微笑みを浮かべるその彼女を、悪魔だと言う者がいる。幼い頃から続く因果が今回の出来事をも呼んだのだ。巻き込んでごめんね。小さく呟いてルカは、少女たちに手を差し伸べる。

「ゾラから連絡が来たわ。本物の“翠子”は、ルシファー管轄の病院に搬送された。迎えに行きましょうか――――貴方達の眠り姫を」

少女たちがしっかり頷いたのを見届けてルカは笑う。

――これで本当に、この学園でやり残したことはなくなった。

第五章《迷霧》：忘れない空を（2）

山口うるきは一命をとりとめたらしい。
その知らせを運んできたラムダ――選び抜かれたルカをの為に存在するエージェントの一人だ――は一礼すると、素早く踵を返して奥へ消えてゆく。千瀬はそれを見送りながら、そっと安堵の息を吐いた。
こちらが巻き込んでしまった命だ。失われなくて本当に良かった、と少女は思う。

船の上である。ルシファーから派遣された黒塗りのそれは潜水艇で、今は隠れることもなく島の横に浮いていた。
ルシファーへの帰還はこの船で。島に滞在していた全ての構成員を乗せて出発するまでは、あと一時間ばかりある。

「……挨拶は良いのか、チトセ」

背後から控えめに掛けられた声は駿のものだ。伺うような声色に千瀬は小さく笑う。
ここで言う挨拶、は別れの言葉である。この島へ再び残していく肉親。次に会うのはいつになるかわからない。――もう二度と、会えないかもしれない。

「駿こそ。カズサさんには？」

自分は良いのだ、と言外に滲ませて千瀬は答える。なぜなら、姉百瀬とは近いうちに必ずまた会うことになるからだ。
……この時すでに、千瀬にはそれがわかっていた。

「俺は……」
「ちゃんと会って来なよ」
「あわせる顔が無いっていったろ……無理だ」
「ばあぁぁぁか」

言い放てば駿がぎょっと目を見開いた。
この男はまだそんな馬鹿な事を言っているのか。呆れ半分、怒り半分で千瀬は駿をねめつける。

「もう顔なんて見せちゃってるじゃない」
「アレは不可抗力だ！」
「あのごたごたの中でカズサさんは、シュンのことだけ考えてたんだよ。離れてもずっとあの子は、シュンを想ってた」

恨まれているはずがないのだ。確かに駿は彼女の手を離したけれど、それまで繋がれていた事に嘘はない。

「ルシファーの構成員としてじゃない。カズサさんの兄として会って来なよ」
「……、」
「大事な、ただ一人のお兄ちゃんなのよ。あたしなら、きっと会いたい」

姉という唯一の肉親をこの島に残す、“妹”としての千瀬の言葉には説得力があった。
しばらく押し黙った後、渋々駿が頷く。次の瞬間少年はぱっと踵を返すと、千瀬に背を向けて走り去った。おそらくは寮棟へ向かったのだろう。

「素直じゃないなぁ…」

いるだけで良い。生まれたときから一緒。離れて初めて、その存在のあたたかさを知るのだ。
きょーだいってそうなんだよね、誰に言うでもなく千瀬は呟く。

まだ姉には会えない、そう言って船室へ籠もってしまったロザリーを思った。
話を聞いたことはない。だがきっと、あの姉妹にも深く淀んだ過去の物語がまとわりついているのだろう。

人が前を向くのは難しい。向いているふりをするのすら、たいへんな努力が必要なこともある。
……時間が解決するものもあるのだろうか。
ぼんやりと、千瀬は考えた。

＊

「……貴方達に、お礼を」

頭を下げる動きに合わせてさらりと肩から滑り落ちる、美しい黒髪に目が奪われる。
出発まで２０分を切っていた。そんな船内にルカは件の“協力者”である少女達を集め、静かに首を垂れている。急に頭を下げられて、

当の少女達は目を白黒させていた。

「な……んですか、急に」

五十嵐沙南が困惑の声を上げる。隣の愛は眉を寄せて難しい顔をしていた。

今この場にいるのは二人の他に邑智亜梨沙だけだ。

藤野の双子――実際は三つ子だったわけだが――は“三人目”に会うため、ルシファーから派遣されたヘリに乗って一足先に島を出た。

山口うるきは日本の病院に搬送されてここにはいない。“オリビア”からの刺客であった志田渚とマリア・ウィンチェスターは死んだ。

鮎村絹華はもともとルシファーの人間である。

……あんなに沢山いたのに、これだけになってしまった。同じ班員として行動した仲間たちを想って沙南は息を吐く。

どういうわけか百瀬とロアルの姿はなかったので、よけい寂寥感に苛まれた。

「貴方たちには沢山迷惑をかけた。命を危険に晒してしまった。言い訳がましいけれど、本当は巻き込みたくなかったの」

貴方たちのような“一般人”は。

「え？」

小さく付け足された言葉を聞き取れず、沙南が首を傾げる。

ルカは何事もなかったかのように言葉を続けた。

「私たちに出来る事なら叶えるわ。何かある？」

“お礼”のつもりなのだろう。ルカが小首を傾げて尋ねた。
金銭を要求すればルシファーは簡単に言い値を出すだろうし、学園から出たいと望めばそれも叶えられる――元はと言えば学園はロヴの持ち物なのだから。その後の生活の保証だって、ルシファーなら容易にやってのけるだろう。

……しかし少女たちは一様に首を横に振った。

「い、良いです……！　その……」
「私たちも、結果的には助けてもらったわけですから」

おあいこで、と言いづらそうに沙南は笑った。亜梨沙も曖昧な笑みとともに頷く。
友人だと信じていた、否、確かに一度は友人であった渚やマリアと行動を共にしていた以上、必ず命を狙われる瞬間はあったのだろう。口に出して認めたくはないが、それは真実だった。ルシファーの協力者として保護下に入ったことは行幸だったとさえ言える。
三人とも、それをわかっていたのだ。

「だから、良いんです」
「そう……？」

はい、と少女たちは頷いた。

「そう。なら、そろそろお別れの時間ね」

そう言ってすっと立ち上がったのは、これまで黙って様子を見ていたミクであった。瞳を瞬かせる少女達に真直ぐ近づいてゆく、彼女のヒールの音が響く。

「……ありがとう。ごめんなさいね」

首を傾げた亜梨沙の額に、ミクの腕が伸ばされた。その白い人差し指の腹が亜梨沙に触れようとした――――その瞬間。

「……！」

パシン、と乾いた音が響き渡った。

部屋の隅から黙ってなりゆきを見ていた千瀬は目を見開く。

ぎょっとしたのは千瀬だけではない。ふらりと現れたロザリーも、一咲に（ついでにルームメイトであった播磨少年にも）別れを述べて戻ってきた駿も、その瞬間を目撃してしまったのだ。二人の口があんぐりと開く。

「――なに、しようとしたの」

ミクの手を亜梨沙の額前から叩き落として、東海林愛は言い放った。あいつ殺られんじゃねえの、小さく駿が呟く。

「失礼ね。殺したりしないわよ」

「地獄耳め！」

「こ、殺されてたまるもんですか！　そうじゃなくって……」

勢いを削がれて愛は息を吐く。ずっと何かを警戒していた彼女の肩がふっと軽くなった。

「……後藤が、志田が死んだことを忘れてた。アイツは親が迎えに来たから転校したんだろって、そう言うんだ」

吐き出すように愛は言う。

後藤とは映画研究サークルのメンバーで、山口うるきが“七不思議”撮影のサポートに選んだ例の男子生徒だ。もう一人の原山と同様、ショッキングな場面に出くわす羽目に陥った後は自室に引っ込んでいたはずなのだが。

「マリアのことは知らないって。最初からいなかったって。それどころか、あの連続殺人の犯人は捕まったって言うの。他の人に聞いてもそうだって……犯人はクラリス。うちの、バスケ部の顧問。そして」

一気に言い切ってまた息を吸い込む。愛は、逃がしはしないというようにミクを真っ正面から見据えた。

「クラリスは森で自殺したんだって」

「どう、いうこと、」

問い掛けた沙南の声は動揺を隠し切れていなかった。あたしだってわかんないんだ。言って愛は、でも、と言葉を繋げる。

「アンタ達に常識が通用しないのはもう知ってる。だから何言われたってあたしは受け入れる――――消したんでしょ、皆の記憶」

「そんなことが……！」

「……正確には、書き換えたってとこかしら」

突然、ミクのものではない声が答えを降らせた。

驚いて顔を上げた先、少女たちの目によく見知った顔がある。ミクのような金髪と、彼女とは違う翠色の瞳。

ジェミニカ、と小さくミクが呼んだ。少女たちの知ってる彼女は、違う名前だった。

「サラ……先生……」

サラ・ハリソン。少し前に学園に赴任した女教師で、生徒からの支持は高い。クラリスとも仲が良かった。

「アイ、サナ、それにアリサね。改めて自己紹介をしておくと、私はジェミニカ・アルファーナ。簡単に言えばこのルカ達の仲間」

「本当に……？」

「ええ。学園にサラと言う仮の姿で潜入し、不穏分子を叩くのが私の仕事。――そして、クラリスは……ジュリアナ・クラリセージは私が殺した」

はっと息を飲んだ少女たちに、ジェミニカは人好きのする笑みを向ける。そしてクラリスが敵の司令塔であったこと、後処理としてミクが記憶の改竄に回ったことを語った。

「改竄……？」

「そんなこと、」

「私は出来るの」

さすがにあの人数はきつかったけど、とミクが呟く。

それに目を細めながら、愛がじゃあ、と声を上げた。

「今ミクは……あたし達の記憶も換えようとしたわけね」

「え」

「嘘……ッ」

「あらら……バレてるのね」

そうよ、と。ちぎって投げるような素っ気なさで暴露されて、沙南と亜梨沙は悲鳴を上げた。

「今回のことは不幸な事件として学園の歴史に名を残す。私たちのこと、オリビアのこと、全て忘れてもらうわ。面倒だからアイジャの件もなかったことにしておいた」

沙南は唐突に、この場に百瀬とロアルがいない理由がわかった気がした。彼女達は忘れる必要が無いのだ。全てを抱えてまた、学園生活に戻ってゆく。

沙南はきっと今日までの出来事を忘れて、何事もなかったかのように二人に話し掛けて、そんな風に、そんなのは。

「嫌……っ！」

叫んだのは亜梨沙だった。てのひらに爪が食い込むほど拳を握り締めて少女は声を上げる。

「嫌、嫌です。あたしは忘れない。マリアは友達だったの。真実は違っても、楽しい思い出が沢山あるの。辛いことを乗り越えて今の自分になるんです。皆さんのことは、絶対他の人に喋ったりしないから……！」

「……全部を忘れるんじゃないわ。都合の悪いところだけ少し修正するの。貴方は貴方のままだし、また幸せな生活が帰ってくるだけよ」

諭すように言うミクに、亜梨沙は大きく首を横に振った。

「それでも、あなたたちを忘れたくない！　だ、だってあたし……あたし、武藤くんに恋をしていた、幸せな思い出も持っていたいから！！」

……一瞬、身を切るような沈黙が流れた。しかし次の瞬間、

「え、えええぇえええ！？！？」

というミクと千瀬とロザリーの見事な声の三重奏が部屋いっぱいに響き渡る。

駿は一人話の流れに置いていかれて目を白黒させていたが、じわじわ何かを感じ取ったのだろう、次の瞬間には何やら口をぱくぱくさせていた。声は出なかったらしい。

「……ぷッ。あははははっ！」

亜梨沙の告白に腹を押さえて笑い転げながら愛が立ち上がる。そのままミクに向かって、びしりと指を突き付けた。

「つまりだ。あたし達は忘れるとか改竄とか、断固拒否！」

「あたしからも、お願いします」

沙南も同時に頭を下げる。

ミクは困ったように眉を寄せた。ルカと視線が合うが、淡い笑みが帰ってくるだけ。

「……後悔するわよ。貴方たちの歳で殺人現場の記憶とか、普通はトラウマものなんじゃないの？」

「平気です。だって、独りじゃないもの」

「嫌な過去を見ないで済むようにしてあげるのに……」

「“過去を振り返らない”って言葉はさ、本当は振り返るのが怖いだけなんだよ。生きてれば時間は流れる。自然と前に進むの。過去も一緒に連れていったって、未来が隠れることなんて無いよ」

これ、ワタクシ論。そう言った愛の笑顔は柔らかかった。未来に向かう若い輝き。自分も一緒に行こう、そう沙南は思う。

「うーん……シュンどうする？」

やっぱ消しとかない？

含んだ笑いと共に問われて、駿は思いきり顔をしかめた。祈るようにこちらを見ている亜梨沙が目に入って、少年はハァと息を吐く。

「……好きにさせれば」

きゃあと言う歓声と、負けたわ、と呟くミクの声が重なった。

穏やかな波が揺れていた。夕焼けに染まる水平線。澄んだ空気を吸い込めば何処か懐かしい夕暮れの匂いと、潮騒が混じり合って溶けた。

ハッチを開いて潜水艇の中へ入る。千瀬が最後に見た景色の隅で、少女たちが懸命に手を振っていた。

忘れないよ。

少女たちの声が響く。

忘れてなんかあげないから。
だからまた、いつかどこかで。

日が沈むと同時に潜水艇もその姿を海中に沈めた。与えられた毛布にくるまってロザリーの隣、千瀬は静かに目を閉じる。
久々の休息で、ようやく身体は疲れを思い出したようだった。目蓋が重い。もう、眠たい。

――過去を振り返らないんじゃない。それは、怖くて振り返れないだけ。

千瀬は愛の言葉を反芻した。
自分の通ってきた道には数多の屍が積もっているのだと思う。とっくに受け入れてしまったことだ。
振り返れば怨嗟の念に追い掛けられそうで、怖い。怖いけれど千瀬はそれを乗り越えてなお前を向く。そうしないと始まりに――――
最初に手を掛けてしまった肉親たちに、何と言えば。

父は修行の結果が招いた事故だったのかもしれない。でも。

（どうして、母さんを切ろうと思ったんだっけ）

思い出さなくちゃ。

呟いて千瀬の意識は眠りに飲まれていった。胸に抱いた黒い刀が、かちゃりと鳴く。

第五章《迷霧》：忘れない空を（2）（後書き）

大変お待たせしました……。学園編、最終話です。次回からは第六章に突入します。最後の章になるかと思いますので、お付き合いいただければ幸いです＾＾

第六章《輪廻》：パニッシュ・パニック（1）

これはこの世のことならず
死出の山路の裾野なる
賽の河原の物語
聞くにつけても哀れなり

二つや三つや四つ五つ
十にも足らぬみどりごが
賽の河原に集まりて
父上恋し　母恋し
恋し恋しと泣く声は
この世の声とは事変わり
悲しき骨身を通すなり
かのみどりごの所作として
河原の石をとり集め
これにて回向の塔を積む

一重積んでは父のため
二重積んでは母のため
三重積んではふるさとの
兄弟我身と回向して
昼は独りで遊べども

日も入りあいのその頃は
地獄の鬼が現れて
やれ汝らは何をする
裟婆に残りし父母は
追善座禅の勤めなく
ただ明け暮れの嘆きには
酷や哀しや不憫やと
親の嘆きは汝らの
苦患を受くる種となる
我を恨むる事なかれ
くろがね棒をとりのべて
積みたる塔を押し崩す

その時能化の地蔵尊
ゆるぎ出でさせたまいつつ
汝ら命短くて
冥土の旅に来たるなり
裟婆と冥土はほど遠し
我を冥土の父母と
思うて明け暮れたのめよと
幼き者を御衣の
もすその内にかき入れて
哀れみたまうぞ有難き
いまだ歩まぬみどりごを
錫杖の柄に取りつかせ
忍辱慈悲の御肌へに
いだきかかえなでさすり
哀れみたまうぞ有難き

――“賽の河原の地蔵和賛”抜粋――

ねえ、きっと救われたかった。

永久（とこしえ）に続く苦しみにそっと手を差し伸べて。

どうか、貴方が終わらせて。

――男は走った。暗い建物の中を、壁に取り付けられた僅かな燭台による灯りを頼りに疾走する。

（畜生、畜生、畜生、）

これは命を懸けた追いかけっこだ。仲間は引き離され皆ばらばらになってしまった。振り返ったとしてもこの闇の中だ、一寸先を見ることすら叶わないが、きっと点々と血痕が続いているのだろう。見つかってしまう。せっかく、ここまで辿り着いたのに。

畜生！　とうとう声に出して男は吐き捨てた。自棄になって目の前に現れた扉を開けようと手を伸ばす。
しかし次の瞬間――――かちゃん、と無機質な音が響き渡った。音源は彼の背後から。嗚呼、と男は嘆息する。

「残念だったなァ。こんなトコまでよく頑張ったと思うぜ、でも」
「ゲームオーバーだよ、おじさん」

二つの冷えた銃口を背中に感じた。最早これまでだ。
男は振り返らなかった。かわりに目の前の扉を見据えていると、それが鈍い音を立てて開いてゆく。

「――だいじょうぶ」

開いた扉の向こうには小さな影が立っていて、柔らかな声を出した。口を聞いて初めて、男はそれがまだ少女であると知る。
汚れを知らぬような容貌をしていた。黒目がちの大きな瞳が幼く、同じ色の髪をしている。そして彼女は、身の丈に似合わぬ長刀を腰に差していた。

「大丈夫。すぐに終わる」

それが男への慰めだったのか、背後の仲間への声だったのかはわからない。しかし男は漠然と、自分の身体に巻いた爆弾の存在に気付かれていることを悟った。同時に起爆スイッチを押すことすら、もう間に合わないことを知る。

少女の白い手が鞘に納まったままの刀に触れた。
男はそれを、ぼんやり見つめていた。

＊

「レックスみーっけ！」

ぐぇ、と男の鈍い声が響く。飛び出してきた銀髪の少女に同色の銃口を向けられたレックスは、その弾丸をもろに食らって眉間を真っ赤に染める羽目になった。

「はーいレックスもアウトぉ！」

嬉しそうに笑うロザリーに向ってあーあ、とレックスは息を吐く。この少女の射撃の腕は十分に知っていた。出くわした時点でゲームオーバーだったのだ。

頭からだらだらと赤色を流しているもののレックスに怪我はない。それはこの大男が丈夫だから――ではなく（さすがに銃弾で頭部を打ち抜かれれば普通は死ぬ）、ロザリーの放ったそれが実弾を模したペイント弾であった為だ。

――現在、ルシファー首領直属部隊“ＥＰＰＣ”では訓練と言う名のゲームの真っ最中であった。

特戦隊を二分割して行うこのサバイバルゲームは、ペイント弾と電流感知式の模擬刀セットによって行われる。後者はセンサーを身体に取り付けて、急所に攻撃が当たると――つまり切られると大音量のブザーが鳴る。性能の良い玩具（おもちゃ）のようなものだ。

なまじ戦闘力の高い面々だけに、ゲームとは言えど気は抜けない。
下手をすれば大怪我の可能性もあるからだ。
なによりこのゲームの敗者には、ロヴ・ハーキンズ考案の罰ゲームが執行される――冗談ではなく命懸けである。

（……死にたくなるかもしれねぇ）

罰ゲーム内容によっては、羞恥で。
レックスはロヴの悪趣味っぷりを思い出して、人知れず頭を抱えた。

所変わってロヴ・ハーキンズの自室。

「観念しやがれルード！」
「やーだね！」

少年達の高揚した声が響き渡る。駿が銃を構えるとルードは窓の桟を乗り越えて、隣の部屋へと逃げ込んだ。ドアを蹴破ってそれを追い掛けた駿は、刹那ぎょっとして立ち止まる。

「な……なんだそのキモチ悪い生き物！！」

ンモオォォ。
空気を震わせて、その生き物は鳴いた。

「うし」

「知っとるわ！」

二人の移動したこの部屋もまたロヴの物である。が、今そこは異空間と化していた。

隣の部屋とは違って生活感の欠けらもないその場所には、床一面に乾草が敷き詰めてある。ぬるい室温と獣の匂い――。

駿がびしりとルードの背後を指差した。その先にいたのは、見事な体躯の牡牛だ。……ピンク色の。

「なんだその色！？」

実はこの牡牛、以前ロヴが焼肉をするために生きたままの“肉”を連れ込んだ事件の遺物である。

壮絶な追い駆けっこの末お役御免となった牛は、情の移ってしまったロザリーの懇願で飼い牛へと転向した。

……そう、この牡牛はルシファーで飼われている。それも（使っていない部屋とはいえ）ロヴの自室で、だ。

餌や糞尿の始末その他もろもろ、いったいどうやっているのか駿は知らない。怖くて聞けない。

「前回の訓練でペイント弾に染まっちゃったんだ。洗ったけど落ちなくてさー」

どうやら駿が長期任務についている間にも一度、この訓練が行われていたらしい。

あっけらかんとことの顛末を説明するルードに駿は頭を抱えたくなる。

「……もはや牛じゃねーよ」

「ロヴは可愛いって言ってたぜー……よっと！」
「――ッ！」

会話のどさくさに紛れて発砲するルードの攻撃を間一髪で避けながら、駿も再び銃を構える。狙いを定めて放てば真直ぐに弾がルードを追ったが、少年はにやりと笑って飛ぶように避けてみせた。
刹那、ルードはぐっと拳を握るような仕草を見せる。次の瞬間駿の撃った弾は、着弾前に空中で破裂した。

「あ」
「……て、め、ルードッ！」

コンマ数秒の嫌な沈黙。
二人の少年の視線の先――――ペイント弾の染料をひっかぶって頭が黄緑色になった牛が、そこにいた。あの頃の獰猛さが失われた牛は我関せずというようにもしゃもしゃと乾草を口にしているが、異様なカラーリングが毒々しい。

「あっははははは！　やべー！　カッコイイー！」
「笑えねーよ！」

駿は自棄になって銃口をルードに突き付けた。これでは後でロヴに何と言われるか。
しかし直後、少年の懸念を全て無に還す出来事が訪れる。

「虹色の牛って良くね？」

言いながらルードは牛の真上で、今度は鮮青色のペイント染料をぶちまけたのだった。

「……おい。牛が凄いことになってるぞ」

のんびりとティータイムを楽しむロヴに、冷ややかなエヴィルの声がかかる。

「ああ、オックスか？　今度は何色になるんだろうな」

隣室の惨状を知らぬわけではないだろうに、ロヴの態度はひどくのんびりとしている。

ちなみにオックスというのはあの牛の名前だ。牡牛だから“ｏｘ”……命名者のセンスを疑いたくなるほどそのままの名である。ロザリーなどは可愛らしくおーちゃん、と呼んでいるのだが。

「今度は一色じゃないみたいだ。コントラストが目に痛いね」

シュン君もちびちゃんも色彩感覚がなってないね。エヴィルと同時に部屋に入ってきた市原恭吾が笑って言う。

「お前達、二人一緒だったのか？　珍しいな」

エヴィルといえばその地位も関係しているのだろうが、たいていはルカと行動を共にしている。あまりない組み合わせにロヴが問い掛けると、恭吾は首を竦めてみせた。

「エヴィルに捕まってね。害虫駆除をしてた」

「……虫の羽音がしたんだ」

無感動にエヴィルが続ける。二人はおそらくこの建物に侵入した外敵の排除にあたっていたのだろう。

ルシファーに敵が入り込むのは良くあることだった。たいていは侵入と同時に“掃除”されてしまうし、そうでなくてもこの二人のような戦闘員が始末をつけてくる。これまで一度も、ロヴのもとまで辿り着いたことはない。

「一匹、違うルートを通ってた奴がいたみたいなんだけど？」

「ああ」

大丈夫だ、とロヴが頷く。隣室から響く激しい銃声と怒声に耳をすませて、青年たちは忍び笑いを洩らした。

「チトセが始末してくれたみたいだから」

報告に現れた駿は遊びに来たルードと鉢合わせて戦闘になってしまったけれど。

パァン、と一際大きな音が響いて同時に駿の叫び声が聞こえた。ルードがまた何かやったらしい。

「……今度は黄色だ」

エヴィルがぽつりと呟いた。

第六章《輪廻》：パニッシュ・パニック（2）

ルカ・ハーベントをはじめとした小隊が“学園”から帰還しはや一ヵ月。主要戦力の大部分を投入して望んだ任務は、一応ルシファー側の理想の形で終わりを迎えた。

奪われた〈ルキフージュのデータ〉は無事ルカの手元に戻り、それを利用しようと画策していた組織――オリーブ＝アルファの殲滅にも成功。小隊のメンバーはようやく本部へ帰り、束の間の安寧を満喫していた。

「そういえば、あの朝霞翠子だけど――目を覚ましたのよ。びっくりしちゃう」

「……え？」

《ソルジャー》達の居住空間になっている部屋の前であった。唐突に声をかけられて思わず振り返れば、そこにいたミクが笑う。

千瀬は件の“双子であった三つ子”を思い浮べた。ミクの言うほうは“本物の”翠子で、学園で生活していた人物とは違う――――そして〈データ〉の保有者でもあった彼女は、十余年も眠り続けていた。たった、独りで。

「目を覚ましたって……そんなことが？」

「医者も奇跡だって言ったわ」

あの後、朝霞翠子は情報屋・ゾラによってルシファー管轄の病院へと搬送された。

ミクの話によればルカに連れられて病院を訪ねた姉妹達、翠子と薫子――正確に言えば薫子と桜子である。ややこしい話だ――の目の

前で目を覚ましたのだと言う。
医者が言うには脳にこれといった後遺症も見られず、訓練さえすれば自由に動けるようにもなるらしい。十年以上の空白がある分もちろん知識は欠けているが、不思議なことに言葉に不自由はないのだという。

「翠子が退院したら、これから先は三人で暮らすんだって。翠子は“桜子”って名乗るみたいよ」
「へえ……」

名前を入れ替えられた三人である。特に“翠子”と“薫子”は、十年以上親しんだその名を今更元に戻すことなどできなかったのだろう。
本来の翠子が桜子と名乗ることは、彼女自身が提案したらしい。

「そうですか。でも、よかった」
「よく双子はお互い通じ合ってるって言うけど、あの三つ子もそうだったみたいね。翠子は……もう桜子だけど、あの子は眠っている間もずっと残る二人の意識を感じてたって。二人が夢を見ていたように」

これから桜子として生きる少女の体内からは、無事データの入ったマイクロチップが摘出された。
彼女達三人は学園には戻らず、日本で生活する道を選ぶらしい。ルシファーが援助するのだと聞いて千瀬は安堵の表情を浮かべた。

「……じゃあ、あたしはもう行くから。なんか厄介なのが来た」
「あ、はい。……え？」

一通り話し終わるとミクはくるりと踵を返した。なにやらよからぬ

ことを言い捨てて去ってゆく背中を千瀬はぼんやり見つめる。
一際大きな声が聞こえたのは次の瞬間だった。

「チートセぇぇはっけーん！！」
「ルード！　……って、」

何それ……ッ！？
千瀬は現れた少年を見て絶叫した。一体何が起こったのか、全身ペイント弾でべちゃべちゃに染まっている。それが一色ならまだしも、赤・青・黄緑・緑・黄・ピンクといった具合にかなりカラフルだ。
ルードと呼ばれた彼はこう見えても《マーダラー》、千瀬ら《ソルジャー》より一階級上の戦闘員である。

「匿って！　隠して！」
「え、何で！？」

今回ルードと千瀬は別チームだ。訓練においては敵のはずの彼が口にした言葉に、千瀬は驚いて模擬刀から手を離した。無論攻撃せねばならないと思っていたのだ。
しかしその直後、少女は少年の言葉の意味を知る。

「る〜〜〜うどぉぉオオオ！！！」

地を這うような声だった。ルードと同じように全身染料まみれの駿が現れる。
千瀬は目を見開いた。ついでに笑いが込み上げてくるのを必死で我慢した。

「し、シュンそのカッコ……」
「うげ、見つかっちった」

「もう逃がさねーぞルード……！！　その顔、黒のペイントで塗り潰してやるッ」

ルードが苦笑したのが気配でわかった。少年にとっては可愛いいたずらの範囲内だったのだろう。シュンは完璧にキレているらしい、冷静に考えて千瀬は静かに息を吐く。

「……てゆーか二人とも、もうアウトでしょ」

お互いペイント弾に当たりまくっているのだから。
しかし千瀬が呟いたその言葉は、ドオオォォォン、という巨大な爆音に掻き消された。

「な、なんだ？」

駿が目を白黒させる。ルードもびっくりしたように瞳を瞬かせた。
刹那、部屋のドアを蹴破ってレックスが入ってくる。

「今の音ァなんだ？」
「さあね。誰かが派手に――」
「本物と模擬を間違えて爆発させたんじゃねーの。始末書モンだな」

レックスに続いて入ってきた少年、日向ハルが面倒くさそうな面持ちで言った。
彼は頭を赤いペイントで染めているレックスを見上げると、

「なに、レックス。やられちまったの？　だっせぇ」

と笑う。レックスは小さく呻いたが、ハルのほうは無傷なので言い返すこともできないらしい。

そんな和やかな空気は次の瞬間、部屋に飛び込んできた女性陣によって一変させられることになった。

「侵入者ですって！」

「門が突破されたらしいわ」

シアン・エルフィールと李春憐。その後ろからロザリーも現れる。それから朝深、ツヅリ、椿、オミ、絹華といった面々が続々と部屋に入ってきた。《ソルジャー》久々の大集結である。

「侵入者だァ？　俺たちがさっき始末したばっかだけど」

「とりあえずシュンはその馬鹿みたいなナリをどーにかしろ」

首を傾げるカラフルな少年を一瞥してハルが鼻で笑うので、激昂した駿が掴み掛かろうとする。あわや殴り合いに発展しかけるのを引き剥がしたのはレックスだ。

朝深（アサミ）はそんな二人のことなどお構いなしに部屋の奥まで進むと、壁を一ヶ所拳で叩きつけた。するとその一角だけが反転し、代わりにモニターとパネルが現れる。

「……警備がやられてる」

低く呟いた青年の声に一同の顔つきが変わった。朝深の引き出したのはルシファー内部の監視映像である。画面に浮かぶ警告の文字。侵入者らしき人物の影を追って目まぐるしく映像が変化してゆく。

「なんだ、こりゃ……？」

「カメラが追い付いてないじゃないか」

「……速い、」

ただならぬ気配を感じ、千瀬は模擬刀を真剣に持ちかえた。敵は迷いもせず建物の奥深くへ進んでくる。一般警備員は目に求まらぬスピードでのされてゆき、止めることができないらしい。

警報も間に合っていない。一体なにが起こっているというのだろうか。

「何者だ……？」

小さな舌打ちの音が聞こえた。瞬間、天井から舞い降りた人影に誰もが目を見開く。

「イチハラ！？」

「わ、キョーゴだ」

駿とルードが口々に声を上げる。相変わらずどこから入ってきたのやら全くわからない。突如現れた《マーダラー》市原恭吾は、一同を見渡して不機嫌そうに口を開いた。

「全員いる？」

「ああ――敵か？」

問い掛けるレックスにさあね、と首を竦めてみせる。

刹那目付きを鋭くさせた恭吾は、モニター前の朝深に短く問い掛けた。

「全員武器を。状況確認、アサミ、侵入者の進行方向は？」

「北北東に直進、スピードは計測不能」

「北北東？」

「――この部屋だ！」

迎え撃つ、という恭吾の言葉に全員が頷いた。レックスが扉の前に立ち、残る面々も各自戦闘準備をする。

「俺たちの元に真直ぐ向かってくるなんて」

良い度胸じゃねーか。

不敵にハルが笑うと同時、気配に聡いルードが叫んだ。

「――――来た！」

バァァァン！！

吹き飛ぶ勢いで開けられたドアが壁に激突して悲鳴を上げる。蝶番の外れる音がした。

衝撃で巻き起こった塵風を裂くようにして部屋へ踏み込んだ人影は一つ。それは目にも止まらぬ速さで一番手近な相手――レックスに歩み寄ると、胸ぐらを掴みあげた挙げ句に銃口を突き付けた。

「レックス！」

「……待てッ！！」

助けに入ろうとした千瀬を止めたのは何故か、レックス本人の声。

不思議に思った少女は、レックスの眉間に銃を押しあてる人物を見て絶句することになる。

「5秒以内にハーキンズの糞野郎を呼んで来い、アレキサンダー・ウォール。そのドタマぶち抜かれたくなかったらな！！」

なぜなら千瀬はその人物を、良く知っていたからだ。

「ぞ……ッ、ゾラさん！？！？」

第六章《輪廻》：パニッシュ・パニック（3）（前書き）

お待たせしました……！

第六章《輪廻》：パニッシュ・パニック（3）

千瀬は目を見開いた。何故この人がここにいるのだろうか。褐色の肌と黒い瞳、それらと相反する色素の薄い白銀の髪。キュースシェリング・A・ゾラ・ヴィデルバント。一見男性のように振る舞う彼女は知る人ぞ知る、敏腕の情報屋である。

「僕の言うことが聞こえなかったのか？　アレキサンダー・ウォール。ロヴ・ハーキンズをこの場に引きずり出して来い、3秒あげるから」

「2秒減ってるぞ！！」

「なんだ聞こえてたんじゃないか」

ごり、と眉間に銃口を突き付けられたレックスが5秒でも無理だと叫ぶ。彼らの主君ロヴ・ハーキンズは気紛れで、いつ何処にいるのかはルカでさえ把握できていないらしいのだ（彼女は気配を“探知”できるので問題はないのだが）。

「あ、いたいた！　ゾラさぁん、置いていかないでくださいよぉ……」

緊迫した空気を破るかのようにぱたぱたと軽い足音が響いて、一人の少女が飛び込んでくる。千瀬には予想できていた事だが、他の面々はその姿を見て驚愕した。

「スミレじゃねーか」

素っ頓狂な声を上げたのは駿で、少女は苦笑するとお久しぶりです、と頭を下げる。

「スミレはゾラさんの所でサポートをやってるんだよ」
「ンだよチトセ、お前知ってたのか？　つーか“ゾラ”って……」
「例の情報屋さん……なんだけど……」

言葉を切って千瀬は首を傾げた。どういうことなのか全くわからない。ゾラは個人営業でルシファーの組織員ではない……ということは、ここには何らかの用があって来たことになる。私怨テロじゃなければ、だが。
ただ一つ理解できたのはロヴが“また”何かやらかしたのだと言うことだ。

（……何やったんだろう……）

思考に沈んでいた千瀬の周囲がその時ふと騒ついた。顔を上げた少女はすぐにその正体に気付く。
――扉の向こう側に何時の間に現れたのか、一人の男が立っていた。

「ロヴ！」

レックスが安堵の声を上げると、件の男はにこりと笑って部屋に入ってくる。

「やぁゾラ、よく来たね。ご機嫌如何かな？」
「最ッ悪だよハーキンズ。誰かさんの所為でね！」
「おやおや。迷惑なヤツがいたもんだな」

お前のことだよ……。
その場にいた誰もが心中で声を上げた。これ以上ゾラの神経を逆撫でするような真似は勘弁してほしい。

「話は聞くよ。……の前にまず、レックスを離してやってくれないか」

柔らかく頼まれてゾラは目尻を吊り上げたが、その後渋々手を離した。レックスは掴まれていた首元をやれやれと擦っている。

「うちの警備をこてんぱんにしてくれたのは君かい？」
「わかってる事を聞くなよ」
「まぁそう言うな。可哀想なことをしないでくれるかな、アレはただの人間でね」
「その“ただの人間風情”に警備を任せるのがいけないんだろ。甘いんだよルシファーは」

ゾラは目を細めてロヴを散々ねめつける。そのまま話がずれてひとしきり『ルシファーのどこがいけないか』について語った後、ゾラは漸く本題を切り出した。

「さァてハーキンズ。これを見てもらおうか」

言って彼女が取り出したのは膨大な紙の束だった。そのまま床に叩きつけられてべちりと可哀想な悲鳴を上げる。

「これは……」
「アンタが僕によこした依頼書と必要経費明細！」

千瀬は足元に墜落したそれを拾おうとして踏みとどまった。余計なことはしないほうが身のためだということはもう知っている。とくにそれがこの、ロヴという男に関連したことならばなおさらだった。一歩引いて傍観を決め込むことにする。他のメンバーは（レックス

以外は）すでにその体制であった。

「――何度も言ったはずだ。僕は僕のラボで仕事をするのが一番やりやすいって。出張は必要最低限だって知ってるはずなのにさァ、この依頼はどういうこと？」

ゾラの言う《依頼》とはどうやらあの学園での出来事とは別で、ロヴが人知れず彼女に話を通していたものらしい。

アンタからの依頼はいつも割がいいから受けてやってるだけなんだ、咬みつくようにゾラが言いつのる。

「でもこんなのルール違反だろ！　僕に仕事中ずっと日本で暮らせっていうのか！」

「場所は提供するとその書類にも書いてあるだろう？　お前のラボの機械は全部こっちで運んでやるし、スミレだって貸したままで言い。それに日本は食べ物がうまいと聞く」

「和食は身体に合わないんだ。美味しいけれど腹持ちが悪い」

「ちょ……ちょっと待ってよロヴ。いったい何の話？」

飄々とした男と未だ不機嫌な情報屋の会話は当人たちにしかわからないもので、とうとう恭吾が耐えきれず声を上げた。

「俺たちにもわかるように喋ってよ。日本で何かやるわけ？　聞いてないけど」

「言ってないからな」

「こーらロヴ……」

小さな子どもを叱るように呆れ半分でレックスが窘める。しかしロヴは軽く首を竦めて見せただけだった。

話はまだ終わってない、とゾラが再び口を開く。

「それにこれ！　情報の受け渡し場所。指定が全て日本だ。アンタ、組織ほっぽって毎度日本くんだりまで来る気かい？」
「ああ、それなら心配はいらない。俺も本部ごと日本へ移住するからな」
「へーえそうですか。……は？？？」

疑問の声を上げたのはゾラだけではなかった。恭吾もその場にいた≪ソルジャー≫たちも、皆口をぽかんと開いて男を見つめる。
あれ？　これも言ってなかったっけ？？　子供のような無邪気さでロヴが笑った。

「日本へ行くんだよ、皆で」
「つまり？」
「今抱えている山を片付けたら、ルシファーは一時的に本部の移動を行う。」
「移動って、丸ごと？　全員で？」
「無論だ。――――移転先は、日本」

男の言葉の意味を理解するのにかなりの時間が必要だった。日本へ、行く。誰が？　自分たちが、だ。
任務でもなんでもなく、本部丸ごと大移動。ルシファーの新天地は日本となる、と、いうわけで。

「……え？」

千瀬の頭の中でようやくそれが整理されたのと、その場にいた人間の絶叫したのはほぼ同時だった。

「「「ええええええぇぇぇっ！？」」」

＊　＊　＊

「馬鹿だッ、あいつ絶対馬鹿だ！」

身体中に付着したペイント弾を濡れた布巾で拭いながら駿が吠える。拭いた程度では落ちるものではないのでその行動は気休めだ。どちらにしろシャワーを浴びなくてはならないだろう。

馬鹿、と少年が言うのはもちろん――と言い切れてしまうのも困りものだが――ロヴのことである。どうやらあの男、重要な本部移動の話を誰にもしていなかったらしい。

それがわかったのはあの後、騒動に気付いたルカとエヴィルがやって来たからだ。

『……移動なんて聞いてないぞ』

『そうだったか？』

という頭の痛くなるようなやりとりは《ソルジャー》たちの脳裏に焼き付いてはなれない。あんなんで良いのかうちのボス、とは誰もが思ったことである。

「日本……か」

ゾラの乱入によって実戦訓練はドローになった。当のゾラはルカに

宥められてなんとか機嫌を直し、今はルカの部屋で軽食をふるまわれているらしい。

「日本に行ったら、言葉の心配はいらないけどね」

駿の独り言に気付いた千瀬が冗談めかして言う。

「迂闊に外には出られねーけどな」

「うん。あたし、行方不明で捜索されてるみたいだし」

「お前はまだマシだろ。俺なんて兄貴殺しで指名手配されてんだぞ」

あ、そっか。納得したふうの千瀬の頭を小突いて駿は笑った。どうもこの少女には緊張感がかけている気がする。そう見えるように振る舞っているだけ、かもしれないが。

「……久しぶりの日本だね」

その表情がどこか固いことに駿は気が付いていた。知っていて、見ないふりをした。

ロヴが何を考えて日本で活動するのかはわからない。けれど自分達は腹を括らなければならないのだろうな、ぼんやり駿は考える。

自分の罪と向き合う、覚悟を。

第六章《輪廻》：インソムニア！（1）

ルシファー本部を移動する。
ロヴがそんな爆弾発言を投下してから一月が経過しようとしていた。
〈ソルジャー〉達はまたそれぞれが任務を抱え、今は世界各国に分散している。ロヴの言った通り、本部移動の前にいくつかの仕事を片付けなければならなかったからだ。

駿はハルと共にイタリアへ。
ツヅリと春憐は絹華をつれて韓国に。
シアンはレックスと組んでドイツに滞在中である。ルカやエヴィル、ミクといった幹部メンバーもここ暫らくは姿を現していないから、何らかの仕事を抱えているのだろう。政治や商売の駆け引きでは戦力になれないルードは、侵入者の排除が専らの仕事だった。お目付け役として恭吾が一緒に行動しているらしいが。

「お待たせ、ローザ」

千瀬は二つの小規模な単独任務をこなした後、本部に帰還しまた次の仕事が与えられるのを待っていた。ここ数日留守にしていたはずのロヴから呼び出しをかけられたのはそんな時だ。

「じゃあ行こっか」
「目的地、どこだっけ？」
「フランスだったような……」

ロヴに呼び出されていたのはロザリーも同じで、その場で二人はペアを組むことを知らされた。

これから少女達は首領の命に従って任地へと赴く。移動手段はなんと自家用ジェットだ。

「事前にロヴが注文してた武器を《ポート》が引き取りに行ってるはずだから、それをあたし達が本部まで持ち帰るんだって」

ロザリーがロヴから渡された任務詳細を読み上げる。なんだか簡単に聞こえたその内容に、千瀬はことりと首を傾げた。

「それだけ？」

「うん。あ、でもこの武器商、ちょーっと怪しいんだって。何かあったら始末して良いよってロヴが」

「何か、って何？」

「さあー」

なんてアバウトなんだ。千瀬は眉を寄せたが、すぐにいつものことだと諦める。

「あ、それからね、今回の仕事の《ポート》側の責任者はチトセの知り合いだってロヴが言ってたよ。前に一度一緒だったのかな？七見女史の管轄で……」

「月葉さんの？　――ああ、」

千瀬はロザリーの持つ書類を覗き込んだ。その右下に書き込まれた名前には確かに見覚えがある。

「この人、とっても面白くて良い人だよ。でも」

過去の記憶を思い起こして、千瀬は小さく笑みを零した。

「ものすごいＥＰＰＣ信者だから。ローザを見たら感動しちゃうかも」

「あは、何それ？　――ふぅん……デューイ・マクスウェル、ね」

＊

落ち着きがない、とデューイは思った。もちろん自分が、ではない。彼の部下の話である。

「おーいテメェら、さっさと書類上げねーと休暇出ねーぞ」

「へーい」

「へいへい」

ゆるい返事が帰ってくるのはいつものこと。それはこの《ポート》の一団を取り仕切っているデューイ自身の性格と関連していたので、さした問題ではなかった（お気楽主義の彼の下には何故か、ノリの軽い人間が集まる）。

しかしもとを正せばデューイの一団は七見月葉――真面目で成績も優秀な日本人だ――の直属なので、けして勤務態度が怠惰なわけではない。

「チーフ、外の車の積載重量チェック完了しやしたァ」

「おうご苦労、……。」

これだ。この空気だ。

デューイはたった今外から戻ってきたばかりの部下を見て顔をしかめた。

端の方から綻ぶように表情が弛んでいる。同時に浮かぶ、にまにまとおかしな笑み。外のほうをしきりに気にするその男は通常強面の巨漢で、そわそわと落ち着きのないその様子は気持ちの悪いことこの上なかった。

――年甲斐もなく浮き足立つその様はまるで、初恋のような。思ってデューイはぶるりと身震いした。

「……おいガレ。お前、外担当誰とだった」

「え、えっとォー……ヴァリとユノ、それにジャッカさんッスね」

「他にもいるだろーが。吐けオラ」

「……、」

ガレと呼ばれた男はしばし目を泳がせていたが、デューイに睨まれると渋々口を開く。

「……ルーも一緒っス」

「はぁ……」

デューイはこめかみを押さえて溜め息を吐く。

“ルー”ことルイーズ・ベリオッドは、つい先日月葉からの紹介でデューイの下に配属された女である。（この組織に所属する者は皆そうだが）素性は一切知れず、年は二十歳かそこらなのだろう。見た目は女というより少女に近い。

華奢な体付きに黒髪（ブルネット）、しかし白人のように肌は透けた色をしている。仕事もてきぱきとこなす。滅多に表情は変わらないが、笑うと花が

綻びたようになるらしい（デューイは見たことがないが）。

「テメェら、弛むのも大概にしとけや」

表の世界の一般企業ならばいざ知らず、ここは天下のルシファーである。そのような見た目でも只者ではないのだろうが、デューイの部下は悉くこのルイーズに骨抜きにされてしまったのだった。実にくだらない。そして情けない。

「わかってんのか、この後はＥＰＰＣとの合同任務が控えてんだぞ！　隊員がもうこっちに向かってるって連絡が来た」

「わかってますよー」

「しかし特戦隊ってのは戦闘のエリートっしょ？　筋肉ムキムキのオッサンを拝んでもなァ」

「ルーのほうが良いよな」

「癒される」

癒されてんじゃねェェェ！

デューイは声を張り上げてだらしのない男どもに鉄槌を加えた。

“Ｃ．クロヌマ”と“Ｒ．Ｅ．ウィルヘルム”。書類になって送られてきた、今回こちらと合流するＥＰＰＣ隊員のうち一人をデューイは知っている。もう一人はどんな人間なのかわからないが、どちらかと言えば“筋肉ムキムキのオッサン”は今ここにいる連中の方だ。

（どうにかしねーと。チトセちゃんが来る前に……）

女性構成員の少ないルシファーの中では、さらに女旱りの《ポート≫である。ルイーズ一人でこれだ。チトセが来てしまったら仕事に

などならないに違いない。

「チーフ知ってるんスか？　ＥＰＰＣからどんな人が来るか」

「あ、いや……」

チトセのことは話さないでおこう。デューイは堅く心に誓った。

（とりあえず堅物のジャッカさんにでも相談するか……）

今夜は眠れそうにない。

第六章《輪廻》：インソムニア！（2）

「チーフ、七見女史から連絡が」
「あ？　わかった」

差し出された電話――といっても通信傍受を避けた特別製だ――を受け取りながら、デューイは声の主に目をやった。噂のルイーズである。

「サンキュ。あぁルイーズ、」
「例の書類ならジャッカさんに」
「そうか。昨日の、」
「頼まれていたものなら手配済みですよ」

言葉を尽く先読みされてデューイは小さく唸る。良く気の回る女だ。仕事も早く、その手腕もかなりのものだと聞く。ルシファーは実力主義なので、この若さでここまで来たのも頷けるだろう。
ルイーズと同じようにその能力の高さから今日の地位にいたったデューイである。その点は身を持って理解しているので、何一つ異論はない。ないのだが。

「……なまじっか顔が良いのがいけねぇな」
「何か？」
「いーや何でも」

小さく呟いた言葉は聞こえなかったようで、ルイーズは首を傾げただけだった。悪いのは彼女ではない。仕事に支障をきたすほど女に飢えた――というのは生々しすぎるが、とにかく薄弱な精神を持った彼の部下たちである。

「はい、電話かわりましたマクスウェルっす。ＩＤはＫ６２の５９２４７７……」
「例のＥＰＰＣの出迎え準備しときますね、チーフ」
電話を耳に当てた彼の背後からルイーズが声をかけた。それに片手をあげて答えると、デューイはそのまま上司との会話に専念する。
「……楽しみ」
だからそう言ってルイーズが笑ったのを、彼は知らない。

＊

スモークガラスに覆われたいかつい護送車から降り立った二人の少女は、ごく少人数によるささやかな出迎えを受けた。
黒いスーツに身を包んだ青年を見つけて、千瀬は顔を綻ばせる。
「デューイ！」
名を呼ばれた彼は少しだけはにかんで、次に恭しく礼をしてみせた。
「またお会いできて光栄です。……久しぶりっすね、チトセちゃん！」
一息にテンションの上がったデューイに千瀬は苦笑する。変わらな

いものだ。千瀬は彼の気安い人懐っこさが好きだった。以前の単独任務では、その性格にずいぶん救われたことを覚えている。

「ジャッカさんも。お久しぶりです」
「覚えておいでですか。これは嬉しい」

デューイの横に黙って控えていた年配の男もまた、千瀬を見て柔らかく笑った。
ジャッカ・ロッソ――彼もまた以前千瀬と仕事を共にこなした人物である。仕事熱心な芯の強い男で、デューイの軽率な、と言うよりは気安い発言を咎めるのはいつも彼だった。デューイから言わせれば頭の堅いのが玉に瑕、ということになる。

「一年半ぶり……いや、もっとですかな」
「そんなになりますか？」

ジャッカの言葉に千瀬は目を丸くした。時間の流れる感覚を忘れて久しいが、あれからもうそんなに経つらしい。どおりでこの刀も馴染むわけだ、少女はそっと腰のものに手をやる。

「そちらは？」
「あ、紹介が遅れました、今回の私のパートナーです。ローザ、」

思い出に浸っていた千瀬は問われてやっと、ロザリーが彼らと初対面であることを思い出した。
黙って様子を伺っていたロザリーはそこでようやく一歩前に出る。

「ロザリーです。ロザリー・エレクトラ・ウィルヘルム。よろしく」

笑顔で手を差し出せば、ぽかんとしていたデューイが慌てて握手に

応じた。ジャッカもまた目を瞬かせている。

「え、えぇと、七見女史直下の《ポート》K代表、デューイ・マクスウェルです。よろしくお願いします」

「同じく代表補佐のジャッカ・ロッソです。お世話になります」

二人と順に握手して、良い人そうね、とロザリーは笑った。デューイは人生で二人目に接触した〈ソルジャー〉を落ち着かなさそうに見つめて呟く。

「いやぁ、驚いた。ＥＰＰＣってチトセちゃんだけじゃなくて、みんなこんなに若いんスかね？」

今ここに出迎えに来ているのは、ジャッカと自分以外は一般警備員である。部下は未だ来ていない――――考えて、デューイは決意した。

部下（あいつら）に会わせるのやめとこう。本当に、仕事本番の寸前までは。

「じゃあ、宿泊先まで案内しますんで。ウチの空き部屋じゃ狭いんで、別に用意させてもらいました」

「え、わざわざ？」

「七見女史のお達しっスよ、チトセちゃん達には快適な環境を～って。俺たちにそのお情けの五分の一でもくれりゃあ……って、ナシ。今のナシ！」

聞かなかったことにしてください、とデューイはおどけた仕草で手の平を合わせた。それに少女達はくすくすと笑う。

まるで緊張感のないこの場の空気は心地よく、しかし奇妙でもあっ

た。

「じゃあ、逗留先のホテルまでお送りしますんで。行きながら仕事の詳細も確認しましょう」

超高級ホテルの最上階、その景色と部屋の豪華さにはしゃぐ少女二人を残してデューイとジャッカは仕事場に戻った。二人にはＳＰを付けてあるが、おそらく必要はないだろう。

仕事は明日。朝になったらまた迎えに行くと伝えてある。

「……チトセちゃん、いくつになりますかね」

帰路に着く車の中、葉巻をふかす横顔にデューイは問い掛けた。ジャッカは薄く窓を開けて煙を追い出し、目でその行方を追う。

「前の仕事の時に十四だっただろう。誕生月は知らないが、十五か……早ければ十六か」

「普通ならまだスクールに通ってますよね。ロザリーちゃんも似たようなもんかなァ」

信じられんな、とジャッカが呟いた。まだ子供だ。デューイも黙って頷く。

「楽しそうでしたけどね、ホテルも気に入ってもらえたみたいだし、夜はトランプやるんだって、はは、」

笑った自分の声が思いの外乾いていて、デューイはぞっとした。隣の席で何もいわないジャッカも気付いただろう。

この一年半、デューイはめざましいスピードで出世した。仕事の功績と人事異動のタイミングとが奇跡のようにうまく重なった結果だ。ジャッカもまたその恩恵を受けた一人であった。

《テトラコマンダー》である七見月葉の直属、しかも本人と直に話をできるような立場にまで足を踏み入れれば、見えなかったものが見えるようになってくる。例えばそれは上層部にしか知らされていない組織の秘密であったり、憧れの存在でしかなかった戦闘部隊の詳細であったりする。

「前までの俺は、何にも知らなかったんスよね。ＥＰＰＣを無敵のヒーローみたいに思ってた。ガキみたいに」

「……今は違うのか」

「あ、いや、憧れに変わりはねーですよ？　裏で生きていく限り力は絶対だし、ＥＰＰＣはルシファーの頂点だ。尊敬してるし、一緒に仕事ができて誇りに思う」

でも、一方的に崇拝して祭り上げて……そういうのじゃねーんです。そんな、簡単なものじゃなかったんスよね。

デューイの言葉をジャッカは無言で肯定した。

「ＥＰＰＣが出動するってことは、ひとを殺すってことだ」

「あんな子供でも、背負うのさ」

裏で生きていく人間が必ず抱えてゆく、憎悪や怨嗟の念を。あんなに綺麗に、無垢に見えるのに。

「末恐ろしいもんです」
「……そうだな」
「どうしてあの子らは、ＥＰＰＣにいるんですかね」

ジャッカが答える前に車は仕事場近くの路地裏へ滑り込んで停車した。商売敵に尾行されていると面倒なので、建物まではここから徒歩である。

「お帰りなさい。ＥＰＰＣの戦闘員、ちゃんと着きましたか？」

車を回収するために待ちかえていたルイーズが出迎えて問う。
デューイは車のキーを渡して、細い首を傾げている彼女に笑いかけた。

「おう。……お前と気が合いそうだよ」

若い女同士、集まれば賑やかになりそうだ。そうですかと彼女は笑って車に乗り込む。車庫はまた別の場所なので移動せねばならないのだ。

「じゃあ行ってきます」
「頼むわァ」

去りゆく黒塗りの車にデューイはひらひらと手を振った。喉元まで出かかった言葉は、結局最後まで言えなかった。
お前はどうしてこの仕事を選んだんだ、ルイーズ。

第六章《輪廻》：インソムニア！（3）

その翌日、千瀬はロザリーと共に朝早くからホテルを出た。冷えて澄んだ空気が吹き込むのを支給された黒コートで防いで、未だ人影の疎らな街を歩く。

二人の仕事は夕方から。それまでは自由時間、というのが少女たちに与えられた破格の待遇である。つまりは仕事前に、フランス観光をしてこいと言う意味だ。

（本当にこんなんで良いのかな、うち）

呆れ半分に考えたことを読まれて、今更でしょとロザリーが笑う。千瀬も頷いて、束の間の自由を楽しむこととなった。

前夜二人で行ったカードゲームが思いのほか盛り上がってしまって、今日は少し寝不足気味だ。ロザリーは初心者の千瀬に様々なゲームを教えてくれたが、最後に行った神経衰弱は千瀬に自分の頭の悪さを思い知らせるだけの結果となった。いつかリベンジしよう、と少女は密かに誓いを立てる。

名所をぐるぐると訪ね歩き、時にはルシファーの金で列車を乗り継ぎ、昼には現地の人間が好んで食べるという巨大なオムレツを二人で分け合って食べた。旅行すらしたことのなかった千瀬にとっては初めての経験ばかりである。

仕事のことを忘れていたわけでないが、すっかりはしゃいでいるうちにあっという間に時間は過ぎ去った。

「……つけられてるね」

そうロザリーが呟いた時、二人に残されていた時間は僅かなものと

なっていた。千瀬も小さく頷いてみせる。その視線の存在に、ずっと気が付いてはいたのだ。一定の距離を保っていたそれは半日以上何の行動も起こさず、ただ二人を見ていただけだった。それだけならばルシファーからの監視という可能性もある――害なしと判断して放っておいたが、【それ】がここになって急に距離を近づけ始めた。

「どうする？」

「困ったなぁ……」

もうデューイに連絡し、迎えの車を呼んでしまった。そろそろ現場に向かわなくては仕事に間に合わない。

「今日の取引相手だとおもう？」

「取引相手の雇った≪始末請負人≫かな……」

殺し屋のようなものだ。金で動く仕事人はこの世にごまんと存在する。相手はきっと自分たちがルシファーだとは思っていないに違いない。

もちろん千瀬たちもみすみすやられるわけにはいかないので、それ相応の対応が必要になる。

――少女たちの実力と二つ名を考えれば、勝敗はもう見えていた。問題は時間だけだ。

「いっそ現場まで連れて行く？」

「それはダメ。今日の取引は7割が火器だから……爆発しちゃうと困るし。いっそここで……」

「一般人が多すぎるよ」

ロザリーの提案に千瀬がダメ出ししたところで、二人の結論はほぼ

一つにまとまった。
始末するならばここから現場までの移動中で、だ。車に乗り込めば相手は間違いなく自分たちを追い、攻撃を仕掛けてくるだろう。現場に着くまでに事を終えてしまえばいい。

「運転手さんが可哀想だけど」
「どうにか逃がすしか……」

言いかけたロザリーの声を遮るかのように車のクラクションが聞こえた。黒塗りのバンが少女たちの傍へ滑り込んでくる。同時に、一発の銃声。

「乗って」

はっと顔を上げた千瀬の耳に車の中から短い声が飛んだ。ロザリーが千瀬の手首をつかんでバンに飛び乗る。ドアを閉めないうちに車は猛スピードで発進し、それを追うかのようにまた数発の銃声が轟いた。
道行く人々が何事かとあたりを見回す。そこに突進してくる車を認めて何人かが悲鳴を上げた。

「は、速い速い！！　スピード落して！！」

あまりの暴走に千瀬が叫ぶ。運転手に向かって懇願すると、

「だって止まったら追いつかれちゃうもの」

と、どこかのんびりした返答があった。その柔らかな高さをもつ声に、千瀬とロザリーの目が点になる。

「あ、え？」
「ど……ゆこと」

運転手は黒いスーツに身を包んで真っ直ぐ前を見据えていた。目深に被った黒いハンチング帽から、それより深い闇の色をした髪が流れ落ちている。見覚えのありすぎる白い横顔に少女たちは絶句し――――そして叫んだ。

「「ルカ――――――!?」」

久しぶり、でもないわね。楽しそうにルカは呟いて一層深くアクセルを踏み込んだ。がくんと車体が揺れて身体が前のめりになる。

「え、もうわかんない。何が何だか全然分かんない」

考えることを放棄したロザリーがぐったりと身体をシートに預けた。千瀬はちらりと後ろを確認してため息をつく。スモークガラス越しに、一台の乗用車がすごい速さで追いかけてきているのが見えた。

「今日の取引相手ね、武器とお金じゃなくて本当は、特戦隊（わたしたち）が目的だった」

巧みにハンドルを操りながら言うルカに、どういうことだと千瀬は問いかける。

「ＥＰＰＣを？」
「そう。最近は珍しくないのよね――ルシファーを支えているのは実質ロヴとＥＰＰＣ。とくにその戦闘力は他を抜きんでている。ルシファーを潰すためには、ＥＰＰＣを潰さなくてはならない。つまり今回の取引は、」

警護としてあたしたちを前線に誘き出す為のエサだったんだね。ロザリーが口を挟んだ。正解、笑いながらルカがハンドルを切る。マシンガンのように連射される銃弾の音が聞こえたが、たったそれだけで車は全ての銃弾を避けきったようだった。

「後ろの車の人たち、今日一日ずっとあなたたちを捕まえようとしてたんでしょうね。ＥＰＰＣを狙う輩の中にはひたすら殺して数を減らそうと考える組織もあるし、捕獲してその力を測ろうとする者もいる。彼らは後者」

「今はもう殺る気マンマンって感じだけど……」

「逃げられるよりはマシってことかぁ」

で、どうするんですか？

少女たちは真っ直ぐルカに目をやった。この神出鬼没な上司に改めて指示を仰ぐ。

「捕まえようかな。ちょっとお話がしたいから殺さないで……ね、ローザ」

「はぁい」

軽い返事をしたロザリーは上体を起こすと、腰から愛用の拳銃を取り出した。Ｓ＆Ｗ　Ｍ６０――銀色に輝くそれをくるくると弄びながら、同時に片手で車の窓をあける。

ぱんっと軽やかな音がした時にはもう、ロザリーは窓の隙間から後続車の前輪を打ち抜いていた。狙いを定める間もない早業である。

「すご……」

千瀬が称賛を口にしている間に弾丸を受けた車は大きく蛇行し、車

道からはみ出すような形で停車した。ルカも道の脇にバンを停車させ、のんびりとドアを開ける。
すると突然使い物にならなくなった後続車から男が二人、何やら叫んで飛び出してきた。千瀬には言葉がわからない。が、激昂していることだけは見て取れる。
男たちはその手に巨大な銃を持っていた。銃口がまっすぐルカに向けられている。

（……かわいそうな、ひとたち）

ぼんやりと千瀬は思った。彼らはわからないだろう。どうして次の瞬間、その銃口がどろどろと溶け落ち始めたのか。
ルカがロザリーと千瀬に生け取りを命じる。二人は車に積んであった荒縄を持って呆然とする男たちの背後に回った。ルカは自分では手を下さない。自分がやれば、死んでしまうから。
ルカがにこりと笑って男たちに近づいてゆく。ひっと息をのんだ彼らに、少女は淡い笑みを向けた。

「Ｂｏｎｊｏｕｒ.」

荒縄で縛った男二人の頭を刀の鞘で小突いて気絶させたのは千瀬だ。ルカが事前に呼んだのであろう別の車に乗せられて、彼らはいなくなった。

これからの男たちの運命はルカにしかわからないのだが、当のルカはというと先ほどからなにやら電話をかけている。

「チーフ？　ルイーズです。ＥＰＰＣ二名の送迎中に少々問題が発生しまして……いいえ、とるに足らないことです。二人は予定通り現場に到着しますので」

余所行きの声で電話を切ったルカを、少女たちの胡乱な瞳が見つめた。

「……ルイーズって？　予定通りって？」
「もう今からじゃ間に合わないですよ。遅刻確定です」
道に立つ時計を見上げて二人は言うが、ルカは心配ないと笑う。首を傾げる少女達を再びバンの後部座席に乗せると、自分も運転席に乗り込んだ。

「この先にルシファー専用の搬送路があるから大丈夫。かなり近道だし、全速力で行けば間に合うわ」
言ってキーを回せばエンジンの奮い立つ音がした。確かにさっきの猛スピードならば――正直もう経験したくないのだが――仕事には間に合うかもしれない。
そこでふと、千瀬は疑問に思ったことを口にした。
「そういえばルカって車運転できたんですね。いつ練習したの？」
「一昨日初めて乗ったの。案外いけるものね」
「「ぎゃ――――――!!!!」」

第六章《輪廻》：インソムニア！（3）（後書き）

久しぶりの更新です。続きます…（^＿＿^；）

第六章《輪廻》：インソムニア！（4）

――地獄を見た。

（二人の少女は後にそう語る。）

ルカの神がかりなドライビングテクニックに翻弄されて現場へ到着したときには、千瀬もロザリーも激しい車酔いで仕事どころではなくなっていた。戦闘の必要があったら一体どうするつもりだったのかわからないが（そうなればルカが働くほかにないのに）当の本人は車から降りるなり、二人を置いて自分はどこかへ消えてしまったのである。

ルカによる常識を激しく逸したスピード運転が幸じて、どうにか取引には間に合った。さらに幸いなことに、取引自体も滞りなく終了した。どうやら刺客は先ほど捕らえた連中だけだったらしい、と千瀬は安堵の息を吐く。

「お疲れ様っス、チトセちゃん」

いかにもこういう仕事に向きそうな、入り組んだ路地の一角である。薄暗い闇を街灯の明かりだけが所在なげに照らしていた。

仕事終了と同時に声をかけてきたデューイに、千瀬はやや青ざめた顔で笑いかける。その顔色に彼も気付いたのだろう、怪訝そうに大丈夫かと訪ねられた。

「具合でも悪いんスかね、風邪か？　休みます？」

「いや、何でもな……」

車酔いをしました、とは流石に言い辛い。苦笑いを浮かべる千瀬に

代わって、ロザリーが口を開いた。

「ねぇ、あたし達を車で迎えに来てくれた人は？」

「ん？　ああ、ルーのことか」

「“ルー”？」

「ええ」

女性構成員は珍しいっスか？　デューイは少女達に笑いかける。

「ルイーズ・ベリオッド。うちの直属の上司――七見女史のお気に入りでね、ちょっと前にこっちに異動してきたんス。気も利くし、よく働きますよ。ただうちって男ばっかで若い女の子なんて滅多に入ってこねーから……他のヤロー共が浮き足立っちまって困るんスよね」

はは、と乾いた笑いを漏らすデューイをよそに、少女達はめいいっぱい首を傾げていた。一体ルカはこんな所で何をしているのだろうか。しかも、

（偽名まで使って――――）

その瞬間だった。がしゃん、と派手な音がしてバラバラと何かが地面に降り注ぐ。街灯の硝子が割れたのだと気付いたのは、ふっと明かりが消えてしまったからだ。

「何だ――――！？」

咄嗟にデューイが二人を庇うように動く。本当はそんなもの必要ないのに、彼の体は自然と少女達の盾になろうとした。

誰かが、明かりを壊したのだ。少し距離のあるところから、銃で。

硝子の割れる音しか聞こえなかったのは、サイレンサーの付いたピ

ストルを使用したから。

「マクスウェル、あっち！」

「ユノ！　車だ」

銃撃戦にめっぽう強いロザリーが割られた街灯の位置から瞬時に弾道を弾き出し、真っ直ぐ一カ所を指さした。デューイが部下に合図を送ると、止めてあったトラックがライトを点灯させる。その明かりに照らされた先に、二つの人影があった。

「――――――なっ、」

黒い覆面の男が路地の奥に立っている。そのたくましい腕が、別の人間の首を抱え込んでいるのが見えた。細くて華奢な体つきの、女。白い肌と黒い長髪。

ルイーズ・ベリオッドが――否、ルカ・ハーベントが捕らえられている。

（……ほ、本当にあの人何してんの！？！？）

思わず叫び出しそうになったのを、すんでのところで千瀬は堪えた。謎の男に捕らわれた上、銃を頭に突きつけられているルカはしかし飄々として見えた。ただしほとんど無表情と変わらないその顔は彼女を良く知るものにしかわからないのであろう。千瀬とロザリー以外……デューイをはじめとした《ポート》の面々が血相を変える。

「る、ルイーズ！？」

「ルーッ！」

「てめぇ、何しやがる！」

口々にまくし立てるルシファー組織員達に向かって、件の男は不適な笑みを浮かべた。

「この女の命惜しくば、そこの娘二人を差し出せ」

千瀬達を指さし、何とも理不尽な要求を突きつける。どうやら先ほど片付けた連中の残党がいたらしい。見たところこの男だけはこの場所を張り込んで、少女達が来るのを待っていたようだった。

「ＥＰＰＣが狙いなのか……？」

眉をひそめてデューイが言う。

その通りだ、と千瀬は思った。相手はＥＰＰＣの価値を知っている。ただ惜しむらくは、

（ルカのことは、何も知らない）

ふっと息を吐いて、千瀬は腰の刀を鞘ごと抜き取った。それを丁寧に地面に横たえる。久々に経験する丸腰は、なんだかバランスが悪くて落ち着かない。

同時にロザリーも銃を地面に投げ捨てて、二人並んで前に出る。

「な、なにしてやがんだッ！」

少女達の行動に驚いたのはデューイだった。勢い良く二人の肩をつかんで振り向かせれば、迷いのない目とぶつかって息を呑む。

「ベリオッドさんを助けます」

「あたし達が行けば解放してもらえるでしょ」

「馬鹿言ってんじゃねェ！！」

千瀬とロザリーは、ルカのシナリオに従うつもりだった。彼女が何を考えているかはわからない。しかしルカがこの場で殺されることも、自分たちをこんなくだらない場面で捨て駒にする気がないことも知っている。
彼女には彼女の考えがあるのだろう。そう思ってこその行動だったが――――デューイは激昂した。

「ここで俺が優先すべきは、ルイーズじゃない」

デューイは震えていた。
拳を力いっぱい握りしめて何かに耐える。そうして、わななく唇を開いた。

「ＥＰＰＣ二人と俺の部下一人、その命は秤に掛けるまでもない。ルイーズか、あなた達なら、俺はルイーズを捨てる」
「デューイ、」

何を言うのだと、驚いて千瀬は彼を見上げた。デューイの瞳は真っ直ぐで、苦しそうで、しかし迷いは皆無である。
刹那、静寂を裂く柔らかな声が響きわたった。

「正解よ、デューイ・マクスウェル」

あなたは正しい選択をした。
ルカが綻んだような笑みを浮かべる。次の瞬間、ルカを拘束していた男が音もなく吹き飛んで路地の壁に叩きつけられた。溶けてぐにゃぐにゃになったピストルが遅れて落ちてくる。

「ルカ、」

千瀬が声をかけると彼女は、びっくりした？　とおどけて見せた。

「チトセ、ローザ、ありがとう。もう良いわ」

「もう、何考えてるんですか……」

「ほんと、びっくりしたぁ」

ぷうと頬を膨らませるロザリーにごめんとルカが謝って、二人の側までやって来る。彼女が歩く度にさらさらと黒髪が揺れて、いつ見ても綺麗だと千瀬は思う。

「ど……、どうゆう、ことだ。今のはいったい……」

漸く声を出したデューイの顔には訳が分からないと書いてある。無理もないことだ。到底、信じられないだろう。

「ルイーズ……いや、アンタ……？」

「……デューイ、この人は」

黙っていてごめんなさいね、言いながら笑うルカをぽかんとデューイは見つめていた。ちゃんと耳に入るかわからないな、思いながら千瀬は言葉を続ける。

「彼女の名前はルカ。あたし達と同じＥＰＰＣで階級は〈ハングマン〉……あたし達の上官にあたります」

嘘だろ、と叫んだのはデューイではなくその場にいた別の組織員――名はヴァリという――だった。デューイをはじめとするその場の人間は皆一様に目を見開いて――――次の瞬間地に片膝を付け首を垂れる。

「ご無礼を……！」

呻くように謝罪したのはジャッカだ。ルカはまた笑って、男達を柔らかく見下ろした。

「デューイ・マクスウェル」

「はい、」

「あなたはとても優秀です。ただしその優しさ故に、情に流され判断を見誤る危険性があった。……でも、ツキハの杞憂だったみたいね」

直属の上司、七見月葉の名を聞いたデューイの身体が僅かに動いた。

「ルシファーの総本部が移動する話は知っている？」

「存じております」

「ロヴは――いえ、我らが首領は、総本部の移転とともに日本へ連れて行く有望な人材を捜しています。わたしは、その引き抜き役としてここへ来たの」

「……、」

「さすが、ツキハが推すだけのことはある。ここから何人か連れて行こうと思うのだけど」

ルカはデューイの頭を上げさせ、目を合わせて微笑んだ。幼子のようなあどけない笑みの中で、瞳だけが深い闇の色をしていた。

「判断力と統括力、時には冷静な選択を可能にする冷徹さが欲しい。どんな地獄を目の当たりにしても理性を保ち、狂わず、それでも私（ルシファー）達について来る気はある？」

デューイ・マクスウェル。
名を呼ばれた青年は少女を見つめ、そして深く頭を垂れた。
「Ｙｅｓ，　ｍａ' ａｍ.」

第六章《輪廻》：いつかの影法師（1）

『……で、ルカの奴は碌にその場の収拾もせずいなくなったと』

通信機器の向こう側から電波に乗って、苦笑するような声が聞こえる。

『お前んトコだけじゃなかったみたいだぜ。うちはジェミニカとイチハラが“引き抜き”の為に視察に来た』

まぁお前等のトコは担当がルカってあたり運悪いけどな。駿がしみじみ言うのに千瀬は同意を示す。

あのあと――ルカがその正体を明かした後、現場は一時騒然とした。言いたいことだけ伝え終えるとさっさと行方を眩ました彼女に代わり、質問責めにあったのは千瀬達だ。

「ロヴも酷いよね。いきなり本部の移転を発表したかと思えば、日本へ行くのは一部だけだなんて……いつも知らされるのは後からだし。テキトーって感じ」

『違いねえ。いつものことだと思えばそれまでだけどな』

全ての頂点に君臨する男の愚痴を零すという行為に、最近はすっかり慣れてしまった。来たばかりの頃はどんなに周りから言われても、畏れ多くて口にはできなかったのだが――思い返して千瀬はひっそりと笑う。時間の流れを受け感じるのはこういう時だけだ。

『何笑ってんだよ？』
「いや、何も……それにしてもロヴは、日本で何をするのかな」
返ってきたのはわずかな沈黙だった。駿も同じコト考えていたのだろう。ルシファーの中ではかなり高い位置付けである自分達すら知らされていない、今回の移動目的。その先が日本――祖国であるということは尚更、千瀬たちの興味を引いた。
『……これはまだ噂でしかないんだけど』
しばしの沈黙の後、駿が言う。
『ロヴがあの情報屋に――ゾラに依頼してたのは人捜しだって話だ。イチハラもそんな事言ってたからそこに間違いはないんだろうな』
「ひと？」
人捜し、と聞いて千瀬が思い浮かべたのはあの、“悪魔のデータ”を持ち去った朝霞恒彦という男であった。その行方については確かにゾラが探していたし、千瀬自身も仕事を見届けている。しかしかの男についてはもう、あの孤島の学園で全て片が付いたはずだった。男の血縁に当たる三人の少女とデータの行方、それを狙っていたオリビアという一団のことは記憶に新しい。
「それって“アサカツネヒコ”とはまた別に？」
『ああ。なんでもルシファー設立当初からロヴが個人的に探し続けてきたとか何とか……』
「それが見つかったってこと？」
『そうなんじゃないか、って噂』
なんでも探し人については完全なロヴの独断で、ルカやミク、エヴ

ィルといった初期メンバーですらなぜ“その人物”を彼が探しているのかは知らされていないらしい。

『まぁ噂が本当だとしたら、相当力を入れてるんだろうな。なんつったって本部丸ごと移動だ』

「人数も絞って規模も縮小して……その人を捜すために」

『犯罪シンジケートらしい“仕事”もしばらくは休止みたいだな。これ以上利益上げても意味ないんだろうけど……取引も会社潰しも抗争もナシだ。俺達の出番ないんじゃね？』

不服そうに言う駿に千瀬は笑って、無線機を反対側に持ち替えた。どこからかロザリーが自分を呼ぶ声がする。

「暇になったら久しぶりに日本の街を見て回ればいいじゃない。あたしちょっとやりたいこともあるし、時間が貰えるのは嬉しい」

『ばっか、指名手配されてるんだっつの。……やりたいこと？』

「じゃあロザリーが呼んでるから、またね」

『あ、おいチト……』

プツ、と接続を断った音がして少年の声が聞こえなくなる。無線機の向こうで駿が怒りの声を上げたのが見える気がして、千瀬はくすくすと笑った。

「チトセ、撤収だよー！」

帰ろ、言いながらひょっこり顔を覗かせたロザリーに笑いかけ、千瀬はその場を後にする。

＊＊＊

それから二週間が経った頃には、世界各国に散り散りになっていたＥＰＰＣ達が各々の仕事を一通り終えて本部へ帰還した。そこから荷造り、情報供与、人選選抜、その他様々な事柄の最終確認を経てついにルシファー総本部が日本へと移転したのは、一ヶ月と半月後のことである。

総本部の移行に伴い日本へやってきたのは首領ロヴ・ハーキンズとＥＰＰＣに所属する全員、《テトラコマンダー》から七見月葉を含む二人と、その直属の部下が十数名。その中にはデューイ・マクスウェルやジャッカ・ロッソを始めとした、先日千瀬が顔を合わせた人間が何人か含まれていた。

実力だけを見ればそうそうたるメンバーが日本に集結したことになる。兵士のいなくなった旧ルシファー本館――今まで千瀬達が暮らしていた建物だ――は、オミ以外の“メシア”がその番をするらしい（“エージェント・メシア”はルカ直属の諜報部隊である。複数の子供たちからなる救世主代理人……その存在を千瀬は先日知った）。

しかし結局、そうまでして本部移転をする理由はロヴ以外誰も知らないままだった。

「チトセ、準備できたか？」

「もうちょっと！」

ばたばたと荷物を詰めながら千瀬は声を上げる。その背後には駿とハル、そして絹華が立っていた。

「刀は置いてけよ。銃刀法違反で捕まる」

「俺のナイフ貸してやろっか？」

ハルから差し出されたナイフをありがたく受け取って鞄に詰める。これから千瀬はこの少し異色な組み合わせで、日本を見て回ることになっていた。

本部移行後すぐさま暇になってしまった子供たちを見て、外に出てはどうだと言ったのはロヴだ。ミクは反対したが、自分の暮らしていた町から出たことがなかった千瀬の希望もあり。

「いいか、目立つことはしない。マジで緊急な時以外は発砲も刀傷沙汰も禁止だからな」

「はーい」

「わかりました」

「お前心配性だな、シュン」

「うるせェよ。じゃあ行くかァ」

日本人ならばすんなり人波に紛れ込むことができるだろう。

行きたいと食い下がったルードやどうしても人目を引くロザリーの変わりにハルと、学園での任務終了後ルシファーに帰還した絹華を連れて。

（……なにか、わかるかな）

一人誰にも悟られぬ決意を胸に秘めた千瀬は、駿の背を追いかけながら日本の地を、“表の世界”を踏みしめたのだった。

第六章《輪廻》：いつかの影法師（2）

＊

＊

＊

名は、と、問われたのだ。

『……クロヌマ。そう、君が……』

『――え？』

『――いや。君は、黒沼、というんだね。チトセ、千瀬か』

くろぬまちとせ。
少年の繰り返しつぶやいた音は、まるで知らない国の言葉のようだった。

『チトセ。迷惑をかけたお詫びとお礼に、教えてあげよう――魔女に、気をつけて』

『――――――、？』

『東洋の魔女だよ。あれは、君を探してる』

『どういう、意味ですか……？』

『そのときが来たらわかるだろう。君も、僕も、歯車の一つなんだから』

『待って、』

『良いね、　　に気を付けて』

待って。聞こえない。

待って。

……、

「待って」
「……なに」

真横から声が聞こえて千瀬はびくりと肩を跳ねさせた。それを見てハルが忍び笑いを漏らす。

「寝ぼけてんの？」
「……え、」

がたん、ごとん、カタタン、規則的な振動と堅い音。あたりを見渡してようやく、千瀬は自分が今電車に乗っていることに気が付いた。いつの間にか眠ってしまっていたらしい。心地よい揺れを座席から感じ、冷静さを取り戻した頭で考える。
平日の昼だ。都心といえど、方向によっては楽に座れる程度に空いている。現に同じ車両にいるのは連れと一般客数人であったが、そ

の目が皆自分を盗み見ていることに気が付いて千瀬はぱっと俯いた。恥ずかしい。

「珍しいものばかりで疲れちゃったんだよ」

「ガキそのものだな……」

絹華の労るような言葉に被せて駿がからかうが、反論する気にはならなかった。まさにその通り、だったので。

ルシファーはその総本部を日本の首都に置いた。大都市東京の街並みは突如現れた者達をその雑踏に隠し、何事もなかったかのように機能する。

ロヴの用意したのはある地下空間で、表面上は何の変哲もないビル街である。立ち並ぶどのビルにも属さないその地下シェルターをどうやって彼が手に入れたのかは知らないが、千瀬たちはそこで生活することになった。太陽光の差し込まない場所での暮らしには慣れている。

さすがに日本へやってきた全員が同じ建物で生活するわけにも行かず、月葉や他の構成員は東京を中心した四方に隠れ家を用意しそこに駐在中だ。

「まぁ東京はな……」

「私もびっくりしたもの、人の多さに」

つまり千瀬たちは地上に出るやいなや、大都会の真っ只中……という状況に置かれていたことになる。そのどこから沸いたのかまったくわからない大量の人間と空を狭めるビルに、千瀬はいきなり目を回しそうになったのだった。

「私は東北の生まれだから。こんなに人はいなかった……ハルは？」

「俺は一応東京育ち。生まれは違うけど」

補導の思い出を語るハルにつられて絹華が笑う。呑気な二人を駿がひきつった顔で見ていたが、千瀬は気付かなかったことにした。……今日のシュンは目深にニット帽を被り、度の入っていない四角い黒縁の眼鏡をかけている。それだけでかなり印象が変わって見えた。

「シュンもルシファーに来る寸前は東京暮らしだったんだろ？」

隠れるにはもってこいだもんな、言ってカラカラ笑うハルを駿が睨みつける。

「あァそうだとも。だから頼むから目立つことはしないでくんねーかな……！」

顔写真付きの手配所が発行されている身では、息苦しくて仕方ないのだろう。とくにチトセ！　小声で叫んだ駿に千瀬は苦笑した。……何せ千瀬は、ルシファーに来る前はあの町から出たことがなかったのだ。ビル街はおろか、電車すら見たこともなかったのである。それを目にしたときの反応たるや、田舎者も驚愕の驚き方であった。

「あれは上京したての田舎モンってレベルじゃねーな。現代に飛んで来ちまった原始人みたいな……」

「そ、そんなに？」

「私は他の星から来た人みたいって思った」

ハルと絹華に口々に言われ、千瀬は思わず顔を背ける。確かに周りから向けられた好奇の目と良い、自分はかなり変だったのだろう。駿がはらはらするのも仕方ない。

「ところでチトセはどこ出身？」
「え、あたし？」
「――おい、降りるぞ」

千瀬のいらえは目的地到着を知らせる、どこか癖のあるアナウンスに遮られた。

「……静かだね」

降車駅は時間帯のせいか閑散としている。人混みに疲れてしまった千瀬達にはちょうど良く、一息吐くような心地になった。
コンビニとかねーかな、とハルが言う。日本の煙草を購入したいらしい。

「自販機でも良いんだけど。ｔａｓｐｏ持ってるし」
「……なんでお前が持ってんだよ」
「ロヴに頼んだら偽造してくれた。バッチリ使えるぜ」
「……たすぽ？」

駿とハルの会話に千瀬は首を傾げる。日本はわからないことばかりだ。
切符とＳｕｉｃａ（こちらもロヴから与えられたものだ）の使い分けすらできなかった千瀬である。お前はわかんなくて良いんだよ、と駿が笑った。

「……お嬢さん、」

それは駿とハルがコンビニに入った後のこと。二人の帰りを外で絹華と待っていると、どこかからか嗄れた呼びかけが聞こえた。声の主を捜すと路地の奥まった一角に、簡素な店を構えた老婆が見える。

「……占い、ですか？」

いかにも怪しいその様子に先手を打って問いかけたのは絹華のほうだ。薄い布で顔を覆った老婆は僅かに笑い――と言ってもその表情はわからないので、笑ったような気配がしただけだが――二人に向かって手招きをした。

「なに、とって喰いやせん。金もいらぬ。話を一寸」

砕けたその語り口に、千瀬と絹華は顔を見合わせた。僅かに肩をすくめてからどちらからともなく老婆に歩み寄る。

占いなど毛頭信じる柄ではない。連れが戻ってくるまでの、ほんの暇つぶしのつもりだった。

「物騒なものをお持ちだね」

近寄るやいなや、老婆は二人を指さしてくつくつと笑う。小首を傾げた千瀬は、その指が自分の鞄――さらにその中にあるナイフを示しているのだと気付いてぞっとした。刹那身構えた絹華を、しかし老婆はのんびりと窘める。

「案ずることはないさ。長年ここに座っているとね、様々なものを

見る。しかしお嬢さん――特にそっち……あんたァのような面白いモノは、いつぶりだろうかね……」

老婆が千瀬を見て目を細める。

妙なことになった、と千瀬は思った。つくづく自分は、安寧というものに縁が薄いらしい。行く先々でなにか、まずいモノに出くわす。

「探し物は早いうちが良い。気にしていることがあるだろう？」

「……、」

「お前様の知らぬところですでに事は動いている」

今、この国に千瀬が帰ってきたこと。それは定められた運命だと老婆は言った。

千瀬は絶句する。自分の考えを見透かされているような、そんな気がした。老婆を取り巻く空気を知っているような、妙な気分にすらなってくる。

「あなたは……誰ですか」

ふっと老婆が煙を吐き出した。いつのまにか片手に煙管をくゆらせている。

「お前様の影法師を、追い続けている。覚えはなくとも、お前様の躯は知っている。夢は暗示。忘れてはならん」

「どういう意味ですか、」

「おーい、チトセぇ！？」

不意に聞こえた声にはっと千瀬は顔を上げた。聞こえた絹華と二人振り返れば、駿とハルが自分たちを探し近づいてくるのが見える。

「おーいたいた。じっとしてろっつったろー」
「だってこの人が……」
「この人って？」

誰の話？
心底不思議そうなハルの声が路地の壁に反響した。
老婆の姿は、跡形もなく消えていた。

第六章《輪廻》：いつかの影法師（3）

「……何なんだ？」

隠れ家へ帰還するなり与えられた部屋に籠もってしまった千瀬を見て、駿はただ首を傾げる。疲れただけかとも思ったが、どうにも様子がおかしい気がした。

原因は少女の出会ったという、謎の老婆。駿自身はその姿を見ていないが、何やら意味深なことを言われてそれを気にしているのでは、というのが絹華談である。

（いや、それよりもっと前か――、）

しかし駿は千瀬の様子が、今日より以前から僅かな異変を見せていることに気が付いていた。何か悩みがあるのだろうか。本人が話したくないならばそれで良いと、思っていたのだけれど。

（そういや、したい事があるとか言ってたな……関係あんのか？）

今現在のＥＰＰＣは、所謂待機という名の休暇状態である。ロヴからの指令が来るまではとくにやることもない。

当のロヴは個人的な行動を続けていて、しばらく姿を見ていなかった。噂によれば頻繁にゾラの元を訪ねているらしい。

うーん、と駿が唸ったところで、その気持ちを代弁するかのような声が聞こえた。

「暇だね～」

「……ローザ、」

「ルカもミクも遊んでくんないし、仕事はないし……」

ルカ達幹部勢は、前の仕事の後始末をするために交代で本部を空けていた。例の“悪魔のデータ”は無事保管場所となっていた少女の体内から摘出され、今度はそれを破棄するために動いているらしい。

「チトセは？」

「引きこもってる」

「……具合でも悪いの？」

「いや……」

銀色の睫毛に縁取られた丸い瞳が真っ直ぐ駿を見つめ、何があったのかと問いかける。

駿は首を竦め、自分にもよくわからないのだと言うことをアピールした。

「チトセー？　開けるよー？」

そのまま二人は千瀬の籠城する部屋の前に立つ。この新しい本部ではＥＰＰＣは全員で一つの大部屋を使うのではなく数名ずつの個室になっていて、千瀬はロザリーと同室だ。本来ならば相手を閉め出すことなどあってはならないのだが、

「……あいつ、鍵かけやがった」

僅かにドアノブが回ったきり、ぴくりともしない扉に駿は溜息を吐いた。銃やナイフで鍵を壊すこともできるが、移住早々で新居を傷つけることは本意ではない。

「どーすっかな……」

「合い鍵って誰が持ってるんだっけ」
「ロヴだろ。つーかそこまでして無理矢理開けるよりは出てくるのを待った方がいいんじゃね？」
それは確かにそうなんだけど。渋々ロザリーが頷いたその時、不意に第三者の声が響いた。
「俺が開けてやろっか？」
「――――ルード」
いつの間に現れたのだろうか。背後に立つ少年の名を呼んだ駿は、なるほどコイツならば、と考える。
このルード・エンデバーは駿ら〈ソルジャー〉より一つ上の階級に位置する〈マーダラー〉に所属している、すなわち“人ならざる能力”の持ち主だ。言うなれば超能力、のようなもの。
「ほら」
二人の返答も聞かずルードは一歩前に出ると、堅く閉ざされた扉の鍵に手をかざす。次の瞬間、カチリ、と解錠を知らせる音が聞こえた。
――瞬間、ドアが内側から勢いよく開く。
「うわッ」
「あ、ごめん」
「馬鹿、急に開けんな！」
ルードが鍵を開けると同時にドアに手をかけていたらしい千瀬が、半ば転がるように部屋の外に現れた。どうやら出てくる気ではいたらしい。

「ちょうど今開けるつもりだったのに……」
「ばーか、遅ェんだよ。……で？」
悩みは解決したのか？
瞳に強い意志を宿している少女に、駿はゆっくりと問いかけた。どうやら千瀬は僅かな時間で調子を取り戻したらしい。
「解決するために、色々やろうと思うの。……話、聞いてくれる？」
そうこなくっちゃ。答えた声は三つ、綺麗に重なった。

＊　＊　＊

四人はひとまず部屋の中に入ることにした。二人部屋故に二つしかないベッドに、千瀬とロザリー、駿とルードにそれぞれ分かれて座る。
何か飲むかと問われて、駿は首を横に振った。これから始まるのは悠長にお茶していられるほど気楽な話題ではないと、どこかでわかっていたからだ。
「……じゃあ、話すけど。笑わないでね」
「笑うような話なの？」

可笑しそうにロザリーが言う。千瀬は曖昧な返事をしてから一つ息を吸い込み、ゆっくりと口を開いた。

「……まずみんなに、聞きたいことがあって」

「うん」

「えっと……その……みんなは、自分がどうしてルシファーにいるのかちゃんとわかってる？」

どうしてって？

問われた三人は首を傾げる。肝心なところで口べたな千瀬の話は、要点がいまいちわかり辛かった。

「……ルシファーから迎えがきたからだろ？」

「ルカが“スカウト”して」

「なんだって、“分別ある殺人者”……だっけ？」

「あぁそれ。それに、俺たちが選ばれたからだろ」

口々に語る三人を、千瀬は瞬きもせず見つめている。

「じゃあ、みんなは“スカウト”される前のことは覚えてる？」

「は？」

「自分がどうして……なにをやって、ルシファーに来ることになったか。そのきっかけの行動を覚えてる？」

そりゃあ……答えようとして駿は口ごもる。あまり言いたくはなかった。

しかし少年は、自分の犯した罪を確かに覚えてる。というより、ずっとそれを背負ってきたのだから当たり前だ。

兄を殺して妹の手を引き、逃げ回った東京の街。良い思い出はない。

「もちろん、覚えてるよ。あたしの場合はそれでお姉ちゃんも学園に行くことになったわけだし」
「俺はきっかけってゆーか……前はなしたと思うけど、スラムで毎日悪さばっかしてたから」
ロザリーとルードが口々に答えるのに、千瀬は小さく頷いた。少女が何を思ったのかはこの時誰もわからなかったが、彼女の次の言葉に三者同時に顔を曇らせる。
「じゃあ、わざと忘れるようにしたりとか……ミクが、入隊した〈ソルジャー〉の記憶をいじることってあるのかな？」
「え？」
「――――おい、ちょっと待て」
どういうことだ？
雲行きが怪しくなってきたのを誰しもが感じ取っていた。問い詰められて千瀬は、真剣な顔を浮かべる。
「――あのね。あたしは、覚えてない」
薄く開いた唇から零れた言葉に、駿は目を見開いた。どういうことだ、と馬鹿のようにまた繰り返してしまう。
「あたし、どうしてルシファーに来たのかわからない。ずっと変だって思ってたけど、気にしないようにしてた」
「待てよ確かお前は、両親一族みんな……」
「うん、そうなんだけど。そのはずなんだけど……」
もともと、肉親を手に掛けたその瞬間の記憶がなかったのだと千瀬はいう。どうして殺してしまったのか、わからないのだと。

「それが最近、気付いたら他のことも良くわからなくなってて。ルカが迎えにきた時のことも、断片的にしか覚えてない。昔住んでいたあの家でどんな暮らしをしてたのか、殆ど思い出せなくて……それどころか、」

両親の顔が全く思い出せなくなっていた。それに気づいてぞっとした、と千瀬は呟いた。

「はっきり思い出せる、一番古い記憶は？」

「……初めて駿と会って、自己紹介したあたりかな。あとは昔、月葉さんと一緒に過ごした思い出が少し」

（……おいおい、）

笑い事じゃない、と駿は独りごちた。ロザリーとルードもすっかり深刻な顔をしている。

その中で本人だけが——悩み、そして開き直ったのであろう千瀬だけが、真っ直ぐな目をしていた。

「ミクを疑う気なんて最初からないよ。あたしの頭をいじるメリットなんてないもん——だからあたしは、変なのはあたし自信なんだと思う」

だから確かめたいと、笑って少女は。

第六章《輪廻》：原点へ（1）

「……にしても、この展開は予想してなかったんだけど」

車の窓越しに流れてゆく景色に目をやりながら駿は呟く。

決断してからの千瀬の行動は早かった。本部を探し回って唯一見つけた幹部、市原恭吾に今後の予定を尋ねる。当分出陣の予定がないことを確認して外出許可を取ると、今度は《テトラコマンダー》の元へ向かった。目的は、七見月葉である。

話を聞いた月葉は、千瀬の為に車を手配してくれた。それに駿、ロザリー、ルードと共に乗り込んで、ある場所へ向かっている。

「……必要なことだってのはわかるけど。良いの？」

「うん」

気遣うようなルードの問いかけに、千瀬は迷うことなく頷いた。少女達が向かっているのは、ここ日本に存在する小さな町である。名を上流町（かみずる）と言うその土地は――黒沼千瀬の、生まれ故郷であった。

自分の暮らしていた場所の記憶すら薄れつつあった千瀬は、まず月葉にその場所を尋ねた。自身も幼い頃を過ごした場所であり、また千瀬への「迎え」を派遣している彼女は正確にその位置を把握している。運転手付きの車を無線一つで用意した彼女は千瀬にただ一言、気を付けて、と言葉を送った。

「まず、自分について知らなきゃいけないと思うの。あたし、ルシファーでの生活を理由に見ないふりをしてきたけど……忘れていることが、多すぎて」

「……なぁ。思い出す必要って、本当にあるのか？　そりゃ、不安なのはわかるよ。でも今の生活には必要ないもんだろ？」

それに本当に記憶に障害が出ているのならば、それは医者の管轄だ。
それとなく体調を尋ねる駿に、いたって好調だよと千瀬は笑う。

「なんだろう、うまく言えないんだけど――覚えていなければいけなかったことが、ある気がして」

あたしだけの問題じゃない、そんな気がして。
言いながら窓の外を眺める少女を、駿は厳しい顔で見つめていた。
嫌な予感が、拭えない。

＊　＊　＊　＊　＊

話は数刻前に遡る。
駿がルードに呼び出された時、千瀬はまだ月葉のもとで協力要請を行っていた。遠出をするなら荷物をまとめると言って、ロザリーはいったん部屋へ帰っている。

「どう思う？」
「……どうって」
「チトセの記憶の話だよ」

口を開いたルードは、彼にしては珍しく真剣な表情をしていた。

「俺、難しいことはよくわかんないんだけどさ。チトセって、なんか特別っぽいんだ」
「……どういう意味だ？」
駿は眉を寄せる。さっと周りに目を走らせたルードは、他に人の気配が無いのを確認して駿に顔を近付けた。
「たぶん、これは俺が〈マーダラー〉だから聞けた話。チトセってね、入隊する時一部の幹部の中でかなり有名になったんだ。“クロヌマ”が見つかった。本物なのか？　って」
「な、んだよそれ」
駿にとっては全く聞き覚えのない話だった。あの頃の千瀬はただの子供で、駿にとっては身一つでこの世界に放り込まれた同胞である。親族を皆殺しにしてしまった、と言っていた。姉だけが助かった、とも。その理由を聞いたことはない。
ここの人間は誰だって、語り難い物語を胸に抱えている。だから駿も、それ以上は尋ねなかった。彼女の告白を聞くまで、記憶がないのだなんて知らなかったのだ。
「裏で生きてる奴だけが知ってる話で――でも、都市伝説みたいなもんで。“クロヌマ”は数十年か数百年に一度、表に出てくる。理由はよく分からないけど……それと同時に、“クロヌマ”が生まれている時代だけに、この世界に現れる奴がいるんだって」
「意味、わかんねー」
言いながら、駿は思い出していた。千瀬をルシファーで最初の集会に連れて行った日だ。
集まったたくさんの構成員。その中で一か所に纏まり、ロヴの言葉を聞いていたＥＰＰＣの隊員。あの日千瀬の姿を見て、その名を聞

いて、反応した者が確かにいた。

『クロ、ヌマ？』

――そう口にした、あれは誰だったのだろうか？

「ジェミニカとか、キョーゴとかは色々知ってるんだ。ってゆーのも“クロヌマを追って現れるそいつ”に、なんでかロヴが興味を持ってるみたいでさ。前から探してるって噂……俺以外の幹部は手伝わされたこともあるって」

「おい、まさか――」

「まだ、わかんないけど。ねぇ、俺達何で日本に来たんだと思う？　ロヴはあのゾラって情報屋に何を依頼してると思う？」

おれ、少し怖いよ。呟いたルードの瞳は、全てを見透かしたような色をしていた。

「最近ロヴは一人でいなくなる。ミクやルカ姉にも知らせないで、何してるのかな？」

「それは……」

「シュン、俺は――ロヴは、そいつを探してるんじゃないかって思うんだ。チトセの祖国に来て、他の仕事も全部蹴って、他に何すんの？」

「……っ」

「俺の考え過ぎならそれで良い……でも思うんだ。チトセが本当にみんなの言う“クロヌマ”なら、記憶がおかしいのは何か関係があるんじゃないかって」

作為的にすら感じられる、不自然に失われた少女の記憶。忘れているなんておかしい、そう彼女の姉も言っていた剣の技。

黒沼――それが個人を指すのか一族を指すのかすらわからない――を追って世界に現れるという、何者かの伝説。もしそれが本当なら。それにロヴが関わっていたとしたら、千瀬がルシファーに来たのは偶然だったのか？

「“オミナエシ”――ミクが前そう言ってた」

それを探し出してロヴどうしたいのかは、誰も知らないらしいけど。言ってルードは目を伏せる。

駿にもルードにも、それを千瀬本人に言うことはできなかった。腹の中に全て仕舞い込んで、ただ見ていることしか叶わないのだ。

己と向き合うことを決めた、少女の姿を。

第六章《輪廻》：原点へ（2）

千瀬には、未だ駿たちに話せていないことがある。
一つは“学園”でユリシーズから告げられた、「東洋の魔女」の話だ。気を付けろと忠告した彼。なぜユリシーズがあんな話をしたのかはわからないが、千瀬にはどういうわけか無視することができなかった。
二つ目は、入隊直後からよく見る夢の話である。最後にそれを見たのは“学園”での仕事で負傷し、病院へ搬送された時だ。
その夢は、なぜか鮮明な色が付いている。見る場面は毎回異なるけれど、共通しているものも一つだけある。それは――声、だった。

『約束を守って』

千瀬の脳裏に響くそれは女のもの。悲しく、美しい誰かの声。

『忘れまいぞ、黒沼……！』

夢の終わりは必ず、怨嗟の念を孕んだ叫びが締めくくる。
それが自分に向けられたものなのか、そうでないのかは千瀬にはわからない。けれど自分は無関係ではないと、それだけはわかっている。
悲痛な叫び声は夢というには鮮やか過ぎて、まるで誰かの記憶を覗き見ているようだった。忘却されてゆく思い出の中で、それだけをはっきり覚えていた。

自分の記憶。忘れていた剣の技。父、母、自分と姉を残して消してしまった一族。
夢の中の女と「東洋の魔女」――ユリシーズの言っていたそれは、

どこかで繋がっているのではないか。
あの占い師に告げられた言葉が、それを千瀬に確信させていたのだった。

「うわぁ、綺麗な所だねー」

両腕を空に向けて伸ばしながらロザリーが言う。
降り立った長閑な町は、懐かしい匂いを孕んでいた。上水流町――過去に千瀬がその人生の全てを過ごしていた場所だ。高校に通った姉とは違い、町から出たことは一度もない。かわりに千瀬は上水流のことならほとんどを知っていた。

「人がいないな」

時間帯も関係しているのだろうが、基本は住宅街のため人通りが極端に少ない。
遠くでチャイムの鳴る音がして、小学校の下校の合図だと千瀬が呟く。もうじき、子供たちが通りがかるのかもしれなかった。

「あたしの通ってた所が近くにあるの。……まぁ、ほとんど行ってなかったんだけど」
「へえー！　俺、学校って入ったことないや」

一応チトセも勉強とかしたんだなぁ。感心したように頷くルードに、いちおうって何、と千瀬は笑った。

（本当に、久しぶり）

この町を出てから三年以上経ったと、出発前に月葉に聞いている。時間感覚をすっかり失っていた千瀬は、もうそんなになるのかと驚いた。はじめよりずいぶんと背が伸びたルードや大人びたローザ見ると、確かにそうなのかもしれないと思う。特に駿などはもう、少年というよりは青年と呼ぶに相応しくなった。

ルシファーでの任務は短期で終了するものから、一度始まれば数か月を要する長期的なものまで様々だ。純粋な戦闘目的の仕事で戦争のように数日過ごすこともあれば、仕事が何も入らず一月以上が経過することもある。

そんなことをもう何度も千瀬は経験してきた。それだけの時間がいつの間にか、確かに流れていたのだろう。

自分の外見の変化はよく分からないけれど、とぼんやり千瀬は考える。

「……とりあえず、どこ行くんだ？」

お前に案内してもらわなきゃ困るんだぜ。ぼーっと突っ立っている千瀬の頭を困ったように駿が小突く。はっと我に返って、少女は一先ずの目的地を口にした。

「……家（うち）に、行ってみようと思うんだけど」

千瀬はちゃんと道順を覚えていた。今は誰も住んでいないはずのその場所へ向かう道すがら、この町は不思議だとロザリーが言う。風が吹いていない為、澄み切った空気は全く揺れることがなかった。そのせいだろうか、まるで時間が止まっているかのような錯覚に陥るのだ。

「黒沼（うち）は昔からこの町に住んでたみたいで、」

記憶にある限りの情報を、それが失われていないか確認しながら千瀬は口にする。ロザリーは相槌を打ちながら、駿とルードは黙ってそれを聞いていた。

「親戚もみんな、近くに住んでて」
「へぇ、うちもそんな感じだったよ。一族みんな同じ村で暮らしてた」
「そうなんだ」

談笑する少女達を見つめる駿の視線は厳しい。ルードもまた、この町に来てからずっと何かを警戒する素振りを見せていた。なんか、嫌な場所だ。彼がそう呟いたのを聞いたのは駿だけである。

「女の子が生まれると、“瀬”っていう字を必ず名前につけるんだ。男の子なら“剣”」
「ふぅん、どうして？」
「……覚えてないや」

或いは、最初から知らなかったのかもしれない。
持っている記憶の数を数えながら千瀬は思う。考えてみれば昔から、黒沼という一族はどこかがおかしかった。問答無用で嫡子に剣を習

わせるしきたり。その集大成が千瀬だ。
そして黒沼は、自らが生み出した刃によってその歴史を閉じた。

「――着いた」

ここ、です。
静かに示された場所を見て、ロザリーがうわぁと声を上げる。残る少年達もまた、無言で目を見開いた。
千瀬の家だったというそれは、典型的な日本家屋――平屋である。敷地面積がその他の家の比ではなく、桁外れに大きい。
こんな家初めて見た、と感心したのは外国人二人だ。ルードとロザリーは珍しい形の家そのものに驚いたようだが、駿の着眼は別の点にある。

「……お前って、お嬢様かなんか？」

これは広すぎるだろ。僅かに言葉を失ってから駿はぼやいた。
そうなの？　と千瀬本人は全く理解していないようだったが。

「まぁここは他よりちょっと大きいのかな、本家だから。ほら、周りの家もほとんどうちの親戚だったと思うけど……普通でしょ？」
「普通じゃねーよ」

この辺全部かよ？　げんなりしながら駿は辺りを見回す。全体的に暗色の木で建築された家は、どれもしんと静まり返っていた。雨風に晒されて色あせた、立ち入り禁止の張り紙だけが白く浮かんで見える。

「あの日からずっとこのままなんだね、きっと……、あーダメだ」
「どうした？」

突然自分で自分の頭をぽかりと殴りつけた千瀬に、駿がぎょっとして問いかける。
困ったように笑いながら少女は自らの暮らしていた家を指さした。

「ここまでしか、覚えてないみたい」
「え？」
「家の間取りとか――わかんなくなっちゃった」
「……そうか」

言いながら駿は眉をひそめる。きっと千瀬自身も気付いているのだろう――彼女が忘れているのは全て、“黒沼”という一族の存在に関連したものだった。
例えば千瀬は、小学校のことは覚えている。当時のクラスメイトについても、朧気ながら記憶はある。
町そのものは覚えていたし、その道順も頭に入っていた。しかし家の事が絡むとどういうわけか、ぼろぼろとその端から崩れていってしまう。
親の顔、生活していた場所、身につけていた剣の奥義。人の名や風習など、辛うじて覚えているものもあったが――それがいつまで保つかは、誰にもわからなかった。

「中入ってみる？」

何かわかるかもよ。ルードの提案に駿は頷いた。危ないことはしない主義の彼も、今回だけは別だった。家の中がどうなっているかわからない以上、心してかからなければならないだろうが。
よし、と駿が気合いを入れたその瞬間だった。

「あの、そこ、入るんですかー！？」

突然かけられた声に四人は飛び上がる。家にばかり気を取られていて、誰一人その存在に気付かなかった。何でわかんなかったんだろ、と人一倍敏いはずのルードが悔しそうに呟く。

「こんな時間に肝試しですか？　少し前はそういう人もいたみたいだけど……その家、築七十年以上の木造だから脆くなってるらしいんです。危ないですよ？」

ただの通行人だったらしい彼女は、駿らと同じくらいの年頃に見えた。親切にも忠告してくれたらしい。

「あ、そうなんスか……地元の人？」

「今は隣町に住んでるけど……まあ、そんな感じです」

人の良さそうな彼女は、そう言って笑った。

第六章《輪廻》：原点へ（3）

「もう三年以上前の話なんですけど。ここで一家……というより、一族惨殺事件が起こったんです。ここら一帯、全部その親戚の家だったらしいんですけど……」

当時を知るらしい彼女は通りすがりの身でありながら、ここで何があったのか、という駿の質問に丁寧な答えをよこした。

年の頃は駿と同じといったところか。柔いウェーブのかかった短い茶髪が良く似合う娘である。日本中どこにでもいそうな、普通の。

「確か、女の子が一人行方不明のままなんです。最初は一家のうち姉妹二人が見つからなかったんだけれど、お姉さんのほうは後日学校で亡くなったのがわかって。お姉さんだけ、家を出て寮暮らしだったそうで――焼死だったみたいです。寮が燃えたの」

「……詳しいな」

「この町じゃ、一大事でしたから」

小さく笑って彼女は続ける。

「お姉さんの焼死と殺された一家の関連はわからないまま。妹さんは、事件発覚時には行方不明に……きっとその子も殺されてしまったのだろうと警察は考えたけど、結局遺体は見つかってません」

一族の死者は合計で十九人。本家、分家代わらず全員が死んだ。犯人は未だ逮捕されず、その動機も不明。

一族全員が皆殺しにされていたこと、金品を盗まれた様子がなかったことから、警察は私怨による犯行ではないかと見たらしい。焼死した姉は事故だったのか、はたまた違うものなのかはわかっていな

い。

そこまでを一気に語りきって、彼女はようやく息をついた。

「この辺りは全部そのご一家の敷地だったので、今は誰も住んでません。近所付き合いとかもあんまりされてなかったようだから、詳しい家族構成とかは町の人も知らなくて――事件が発覚してはじめて知ったことも多かった。とにかく、当時は大騒ぎだったんですよ」

「……だろうな」

十九、という数に駿は身震いした。一族を手に掛けたとは聞いていたが、ここまでとは。それもまだルシファー所属前の、人殺しを知らなかったはずの少女が。

その“見つからない犯人”と“行方不明の妹”が同一人物で、しかも今目の前にいると知ったら。この女はどうするだろうか、と駿は考えてみる。無論、教えることなどできやしないのだが。

当の千瀬といえば、駿に無理やり被せられたニット帽を目深に引き下げたまま黙り込んでいた。心なしか顔が青白い。

「アン……あなたは何でこんなところに？」

アンタ、と言い掛けたのを思い直して変える。敬語や丁寧な言葉遣いをすっかり忘れていた駿には少しやり辛かったが、ここは日本。情報提供者の機嫌を損ねないためには、礼儀はわきまえた方が賢明であった。

「私ですか？」

「隣町に住んでるって、さっき」

問われた彼女はきょとんとして、それからふっと力を抜く。唇に柔

らかな笑みが浮かんだ。

「久しぶりに時間がとれたから墓参りに来たんです――友達の月命日なので」

「こんな所に墓地が？」

「いえ、もう少し移動するんですけど。……ここには、神社を見に来たの」

「……はあ」

妙な女だな、と駿は改めて彼女を上から下まで眺めてみる。一見何の変哲もないのだが。

（……神社マニア？）

いやそれはねーだろ。駿は自らの思考に突っ込みを入れた。

「……じゃあ、これ以上は入んない方が良さそうだな」

「だと思いますよ」

「その惨殺事件だけど。当時の記録とかってどっかに残ってないかな」

話を聞いた駿は、その内容に何か妙な引っかかりを感じていた。それが何なのかはわからない。千瀬の記憶について調べるためには、事件は重要な鍵だと考えられた。突き詰めるにはまだ、情報が足りない。

さして期待もせずに問いかけると、駿の予想を裏切って良い返答があった。

「あ、じゃあ町役場の資料庫見に行きます？」

「え」

「当時の新聞とかありますよ。私の知り合い、そこで事務のバイトしてて……今から会いに行くつもりだったんで」

一緒に行きます？

問いかけられて、駿は慌てて頷いた。

「じゃあ案内しますね。あ、私は千代田って言います。千代田梢（ちよだこずえ）」

「……武藤、です。よろしく」

当たり障りのない名字だけを述べた駿に、梢は嬉しそうに笑いかけた。

「こちらこそ」

＊　＊　＊

「兄弟？　……では、ないよねぇ」

駿の後ろを黙って歩く三人を見ながら梢が言う。己の素性を隠すため貝になり続ける千瀬に加え、残る二名は明らかに日本人ではない。

不思議に思うのも当たり前のことであるが、駿は曖昧に答えを濁して質問をやり過ごした。説明なんてできるはずがない。

「観光にしては、上水流（かみずる）は辺鄙すぎるでしょ。古き良き日本……の空気があると言えばあるけれど」

「長閑で良いとこだよ」

町役場までの道すがら、ぽつぽつと喋る梢にいらえを返しつつ駿は歩く。静かすぎて気味が悪いけどな。心中で呟いた言葉は無論彼女には届かなかった。

「お連れさんは日本語わかるの？　名前は？」

「あー、えっと……」

梢の問いかけにルードとロザリーが全く反応しないのを見て、駿はようやく一つの事実を思い出す。ロヴの“翻訳”が届かない梢の言葉は二人にはわからない、異国語なのだ。

「日本語は喋れないんだ。ちゃんとテキトーについて来るからお構いなく。銀髪のほうがロザリーで、隣のちっこいガキがルード」

「ちっこくねーよ！」

駿の言葉のみを理解してルードが叫んだが、少年の言葉は梢にとっても意味の分からないものだった。

「その子、今何て言ったの？」

「ただの独り言だ。で、そっちの髪黒いやつがチ……」

言いかけて駿ははっと口を噤んだ。今この場で千瀬の名を出すことは非常にまずい。

馬鹿をやった。思うと同時に、駿の背を嫌な汗が伝う。

「ちひろ、です」

意外や、助け舟を出したのは他でもない千瀬だった。以前の仕事で与えられた偽名を名乗って小さく会釈すると、梢は顔を綻ばせる。

「あなたは日本人なのね。ちひろちゃん」

かわいい名前、と梢が言う。千瀬は決まり悪そうに、はじめましてと今更の挨拶をした。ご迷惑おかけしてすいません、とも。

町役場に到着すると、梢は慣れた様子で裏口に回った。部外者が立ち入って良いのか疑問であったが、手招きされて駿達もあとに続く。

「チョコ、遅かったな」

扉を抜けた先には一人の青年が待っていた。
着崩したスーツ姿のまま非常階段に腰掛けている。飲みかけたペットボトルの蓋を閉めながら彼は、梢のことをひどく甘そうなあだ名

で呼んだ。苗字と名前双方の頭をとってつけられた呼び名なのだろうと推測できる。それはまるで小さな子供のような、可愛らしい響きを纏っていた。

「……って、そちらさんは？」

「タケ、この人達に資料庫見せてあげてよ。町の広報誌とか新聞とかとってあるじゃん？」

「いいけど。……ったく、お前はいつも急だな」

タケと呼ばれた彼は連絡ぐらいしろよと呟いて、困ったように笑う。それだけで梢とこの青年が、かなり親しい間柄であることは見て取れた。

「どうも。俺……自分は木内です。ここの事務担当してます。まぁバイトだけど」

青年は名乗りながら僅かに姿勢を正した。しかしその口調は親しみやすいもので、彼自身そんな性格なのだろう、鍵取ってくるんで待っててくれます？　と気さくに問いかけてくる。それに駿は一つ頷いて見せた。

「すぐ戻ってくるんで。悪いね」

「いや、こっちこそ……すいません急に」

きっとこの木内という青年は、これから梢と共に墓参りへ向かうのだろう。彼が小脇に抱えていた荷物の中に線香の箱が見えて、駿はなんだか申し訳ない気持ちになる。

「ついでに、この人達の探してる資料出してあげてねータケ」

「はいはい。ちなみに何？」

「アレ。三年ちょっと前の一家殺人」

梢からの要望に二つ返事で応えていた木内は、次の瞬間どういうわけか怪訝な表情を浮かべた。

「……あれって、アレか？」

「そうよ」

「何、もしかして今流行ってんの？」

予想外の木内の問いに駿は瞠目した。どういう意味だ、と思わず詰め寄ってしまう。

「流行るって？」

「違うんスか？　いや、」

何かまずいことを言ったのだろうかと思わず口ごもる彼の言葉の続きを、全員が無言で促した。しばしの間の後に、恐る恐るといった様子で木内が声を出す。

「俺、ついこないだも同じ事お客さんに聞かれて――資料庫も案内したばっかだったから」

「それ、どういう……」

話の内容がわからないルードが、説明しろと目で訴える。しかし、それに答えてやる余裕は駿にはない。

ただの偶然ならば問題ない。しかし駿達とは別に、黒沼について――千瀬について、調べている者がいたとしたら？

「その人――どんな、人でしたか」

小さな、けれど酷く切迫した声は千瀬のもの。
木内は僅かに眉を寄せた後、まだ真新しい記憶をたぐり寄せる。

「背の高い男だった。髪は暗い茶色で、眼も同じくらいの色で……」

四日ぐらい前だよ、と木内は言った。黒沼という家がいつからあの場所にあったのかを知りたがっていたらしい。それからあの事件についての資料庫をコピーし、上水流町そのものの歴史を綴った風土記を読んで行った。

「日本語はペラペラだったけど、あれ外国人だったなぁ」

第六章《輪廻》：原点へ（3）（後書き）

二人は作品を跨いでの登場。やっと繋げられました……。

第六章《輪廻》：Ｎｏｂｏｄｙ－Ｋｎｏｗｓ（１）

木内の言う特徴を持った人間など、この世にはごまんといる。しかしその瞬間、ルードと駿の脳裏にたった一人の存在が思い浮かんだことは事実だった。

そしておそらくはロザリーも、ゆっくりまばたきを繰り返した瞼の裏に同じ人間を描いている――すっと色をなくした少女の顔色が、何よりも雄弁にそれを物語っていた。

「え、外人さんですか？　男の人かぁ……」

当の千瀬はどこか拍子抜けした様子を見せた。少女が密かに思い描き探していたのは、ユリシーズに言われた“魔女”または夢で聞いた声の“女”だったからである。

「……帰るぞ、チトセ」

事の重大さに気付いていないのは、この場で千瀬だけ。駿はその細い肩を掴むと、半ば引きずるようにしてその場を後にした。慌てて木内と梢に感謝の言葉を述べる千瀬を一瞥し、駿はぐっと奥歯を噛む。

（……あいつ、何をする気だ）

＊　＊　＊

「ねぇ、どうしたのみんな――怖い顔して」

帰りは本部から迎えを寄越させた。たとえ私用で出かけていても、手空きの下位組織員を動かすくらいのことはＥＰＰＣなら容易である。

やって来た黒塗りのワゴン車に乗り込んでからというもの、一言たりとも喋らない面々に千瀬はすっかり困惑していた。何が皆の顔を曇らせているのか、少女は原因を必死に探る。

「あの、別にあたし気にしてないよ？　家（うち）が肝試しスポットになってても、立ち入り禁止でも……」

「……、」

無言の返答。重苦しさを増した空気に、千瀬の顔がひきつった。

「あ、あんな事件を起こしたんだもの。面白半分に調べようとする人だって、いてもおかしくないし！」

「……お前、木内って奴の説明聞いて何も思わなかったのか？」

え？

漸く口を開いた駿の言葉に千瀬はことりと首を傾げる。その様子を見て、はぁと息を吐いたのはルードだ。

「前から思ってたんだけど。チトセってさ、なーんか抜けてるって

ゆーか……脳天気ってゆーか」
「え、え？　ルードそれどういう意味？」
「あはは、あたしはしっかりしてるチトセってのも微妙だと思うけどー」
ロザリーも笑いながら口を挟む。やれやれ、という空気が流れたのを感じ取って、千瀬はますます困惑した。仕方ないなお前って、ほんと。駿が小さく苦笑する。
「ただの一般人が興味本位で、お前の起こした事件について嗅ぎ回ったりするか？　事件当初ならそれもあっただろうが、何年前の話だと思ってる」
「そうだけど……」
「しかも日本人じゃないって、あの木内って奴は言った。お前の家は外人の観光スポットになるほど有名なのか？」
「それはあたしも疑問に……、あ」
ふと何かの可能性に気付いたように千瀬は黙り込んだ。その顔色が心なしか青ざめてゆく。「同業者――？」
何か裏のありそうな事件を探求すること――それは、千瀬にも覚えのある仕事であった。ルシファーが身を置く世界においては、常に周りの動きを読んでおく必要がある。何か怪しい出来事があれば、裏社会の人間が絡んだと考えて探りを入れておく――その結果が時には、組織の命運を左右することすらあるからだ。
外国人というキーワードを考えれば、その手の仕事人が行動していた可能性は高い。千瀬の導き出した答えに駿は、何故か困ったように笑った。
「半分正解。まだ足りない」

「えー、ヒントは？」
「……俺達はみんな、心当たりがある。お前も良く知ってるはずだ」

外人。日本語。茶髪と、同じ色の瞳。男。そして同業者。
千瀬はゆっくりと思考を巡らせた。知っているはずだと駿が言うのだから、自分の脳内から少しずつ検索してゆく。ぽろぽろと端から崩れ続ける、頼りない記憶なのだけれど。

「――あ、れ？」

思い当たった人物の輪郭がじわりと浮かび上がった瞬間、千瀬は小さな声を漏らした。

「え、ちょっと待って」
「……わかったか？」

駿の瞳は真剣な色を帯びていた。真っ直ぐに見つめられて、嗚呼、と千瀬は思う。

「――――ロヴ、だよ」
「どう、して？」

どうしてロヴが？
組織のトップである男が千瀬の脳裏で笑った。本部が日本へ移動してからというもの、出かけていることばかりであまり顔を見ていない。
カリスマ性溢れる、ルシファーの若きリーダー。ルカやエヴィル、ミクといった幹部達から絶対の信頼を得ている男。それが千瀬の知

るロヴ・ハーキンズである。そんな彼がどうして、千瀬の家について調べる必要があるのだろうか。
入隊から三年以上が経過した、今になって。

「……聞きたいことがあるんだ、チトセ」
「シュン……？」
「お前、確か前に言ってたよな。ルカがお前を迎えに来たのは親類殺しの直後だった、って」
「そう、だよ」

朧気な記憶の底にある、あの日のことを思い返してみる。千瀬が父を、母を殺めたあの時、気付けばもうルカは傍らに立っていた。迎えに来たわ、と彼女は言った。帰宅した姉に、ルカと共に別れを告げた。

「――俺の時は一週間かかった。兄貴を殺した日からルカが来るまで毎日、人目を避けながらカズサを連れて逃げ回った」

「オレの場合は、オレのいたスラムまでルカが何度も来たよ。ルシファーに入るまで一ヶ月はかかった」
「……あたしの時は少し早かったけれど、それでも四日くらい」

皆が順に告げるのを千瀬はぼんやりと見つめていた。一体何が言いたいのだろうか。考えることを千瀬の頭が放棄する。

「ルシファーからの迎えは候補者が事件を起こしてから初めて動くのが通例だ。ルシファーが欲しいのは“分別ある殺戮者”だから、人を殺して狂わないか見極める期間が必要なんだよ。だから迎えまでに時間がかかる」
「それからね、ひとはみんな犯罪者になる可能性を持ってるから、

ルシファーが予め候補者を決めることもない。あたしもシュンも、人を殺して初めてルシファーの目に留まった」

「でも……、」

言いよどむ千瀬に、そうだ、と駿は頷いた。

「そう、チトセにはすぐ迎えがやってきた。初めは月葉の知り合いだからかとも思ったけど――そうじゃないんだ。これってまるで、」

お前が人を殺すことを、ルシファーは最初から知ってたみたいじゃないか？

がん、と頭を殴られたような衝撃を千瀬は感じた。

まさか。なぜ。本当に？　浮かぶのは無意味な言葉ばかりだ。あり得ることなのだろうか、と千瀬は懸命に思考する。ルシファーが、千瀬のことを知っていた？　千瀬が犯す罪を、はじめから？

（“ルシファー”が知ってたんじゃない、）

ぼんやり靄のかかったような不明瞭な頭で千瀬は思う。それをそのまま口に出して、正しいのだと悟った。

「ロヴ、が、知ってたんだ」

千瀬自身ですらわからない何かを、ロヴは知っているのではないか。気付いて千瀬はぞっとした。依然として険しい表情の駿らに向かって、小さく少女は問いかける。

「ねぇ、ロヴは何をしに日本に来たの……？」

「オレもそれが知りたい」

駿に代わって千瀬の目を真っ直ぐに覗き込んだのはルードだった。出会った頃より大きくなった手のひらで、少年は千瀬の肩を掴む。

「なぁ、チトセ。――オミナエシ、って知ってる？」

瞬間千瀬は酷い眩暈に襲われた。刹那の間だけ白くなった視界を切り捨てれば、脳裏に声が反響する。

『――気を付けて』

「……っ、」

それはあの日聞いたユリシーズの声だった。彼に言われた言葉をボイスレコーダーで繰り返し流しているかのように、鮮明に千瀬は思い出した。

『　オミナエシ　に、気を付けて』

あの少年は言ったのだ。確かにそう、言ったのだ。

『――きっとアレから逃げることは、できないからさ』

第六章《輪廻》：Ｎｏｂｏｄｙ－Ｋｎｏｗｓ（２）

「――ロヴ？　さぁ、知らないわね」

今朝から姿は見てないけど。呼び止められたミクは乞われるままに答えてやる。

金の髪が首を傾げる動作に合わせてさらりと滑り落ちた。ミクは自分を見上げる少年――これでも昔よりは随分背が伸びてきた――を見やって、心底不思議そうに続ける。

「あんたがロヴに用？　珍しいこともあるのねルード」

「……まぁね」

また問題を起こす気ではないか、と疑われているのをひしひし感じる。自業自得であるのを理解していたルードは、精一杯の笑顔で誤魔化した。

「で、いつ本部（ここ）に戻ってくるかもわかんないんだ？」

「ええ。常にロヴの行動を把握してるのなんてゾラくらいのものよ」

――千瀬の故郷から帰還してすぐ、ルードは駿と共にあることを実行した。それは大胆にもロヴの――ルシファー首領の行動を調べよう、というものである。

千瀬の相手はロザリーに任せ、その間に二人は手分けして幹部たちへの聞き込みを開始した。ルードがミクを捕まえたのもそういう理由からである。

「……いったい何処行ったんだろ、ロヴ」

しかし聞けども聞けども、ロヴの行動は一向に掴めなかった。ここ数日は単独で出歩いているしく、本部内で彼を見たというものは皆無である。

「……ちなみにさ、ミク。ミクはどーしてロヴが本部を日本に移したか、知ってんの？」

それとなく本題を切り出すと、ミクは僅かに押し黙った。

「……知らないわ」
「ホントに？」
「本当よ」

じっと顔をのぞき込んでみても、別段嘘を吐いている様子はない。むぅ、とルードは小さく唸った。
……一番知りたいのは本部移動とオミナエシ、そして千瀬との関係だ。しかしミクも知らないとなれば――――。

「……今回の移動は本当に、ロヴの独断だったのよ。ルカやエヴィルならもしかして、何か知ってるかもしれないけど……」

ルードの思考を読んだような正確さでミクは続けた。或いは本当に読んでいたのかもしれない。――ミクには隠し事ができない。己の不利を悟ってルードは、早々に退散することにした。

「あ、じゃあオレもう行くね！　変なこと聞いて悪かった！」
「……ルード」

ぱっと踵を返した少年の背に、静かな声がかけられる。おそるおそる振り返ったルードを、ミクの真っ青な瞳が見つめていた。

「あまり、余計なことはしないのよ」
「あははは、はーい！」

脱兎のごとく逃げ出したルードには、その後零れ落ちたミクの言葉は聞こえなかっただろう。
祈るように僅かに目を伏せて、彼女は呟いた。

「――何をする気なの、ロヴ」

＊＊＊＊＊

オミナエシって知ってる？
故郷からの帰路、ルードに問われた千瀬は身体を震わせた。そうして小さく頷くと、今まで一人胸に秘めていたことを洗いざらい吐露したのである。
夢のこと、それに現れる女の声のこと――そしてユリシーズの忠告。
千瀬の告白を聞いて駿は心底驚愕した。皆が少しずつ集めていた糸

の端がその瞬間、一本に繋がったのである。

“クロヌマ”を追うように世界へ舞い降りる“オミナエシ”。それを何らかの理由で探していたロヴが組織に引き入れた、“黒沼千瀬”。

オミナエシとは一体何者なのか、“クロヌマ”との関連は何なのか。そして何故、ロヴはオミナエシを探しているのか――根本はまだ解決に到っていない。しかしここで一致した符号は、一つの事実を導き出した。

――ロヴはおそらくこの日本で、オミナエシを探しているのだ。

（ユリシーズ……）

ふわふわした巻き毛の少年を駿は思い出す。では上品な身なりに底知れぬ狡猾さを秘め、人外の力で炎を操った。ルカに執着し、間接的にではあるがサンドラの死を招いた敵（かたき）。“学園”では駿の妹、一咲に情報を与えて取引をし、ウォルディの妹――アイジャを連れて消えた。しかしその際千瀬に、オミナエシという“魔女”に関する忠告をしたのだという。

（あいつ、何を知っている――？）

考え込みながら駿は回廊を進んでゆく。探しているのはルカだった。おそらくは、ロヴ以外で一番正解に近い人物。

数刻前に見つけたエヴィルに彼女の居場所は聞いている。放浪癖の気があるルカが、おとなしくその場にいてくれる可能性は低かったが。

「あ、」

角を曲がった所で見知った顔に出くわした。駿と同様、諜報活動に勤しんでいたはずのルードである。

「シュン。どーだった？」

「まぁ予想通りだな。そっちは？」

ルードは駿と並ぶと歩調を合わせて歩き出す。そのまま自分の活動成果――ミクに聞いたことの結果を話せば、駿は渋面を浮かべた。

「やっぱな。ミクも知らないか……」

「エヴィルも？」

「ん。ルカに聞いてみろって言われた。それから――」

無口で無愛想、朴念仁代表のようなエヴィルが珍しく質問に応じてくれたことが駿には不思議だった。ルードに聞かせるため、彼の話していた内容を思い出す。

エヴィル曰く、ロヴはもう何日も単独行動を続けているのだという。

『あいつが何をする気なのか、俺は知らない』

淡々と告げたエヴィルは僅かに眉根を寄せていた、ように見えた。駿の気のせいだろうか。

『オミナエシ、については？』

『――オミナエシを探してるのは本当だ』

単刀直入に尋ねた駿に、エヴィルはあっさりと答えを返した。驚いたのは駿の方である。てっきり機密事項だと思っていたのに。

『……俺に話していいの？』
『聞きたいんじゃないのか？　……言うなと言われた覚えはないし、一部ではもう知られている話だ。ロヴはもう何年も、オミナエシと呼ばれる者を探してる』
『それじゃあ……』
『オミナエシについて知りたければ、アサミやツヅリ、キョーゴあたりの方が詳しい。あれはこの日本を縄張りにしているみたいだからな』

お前たち、チトセのことを気にかけてるんだろう。
言い当てられた駿は二の句が接げなくなった。お前“たち”と言うことは駿と同じように、ルードがあちこち聞き回っているのもばれていたに違いない。

「……ってわけだから、ロヴについてはこれからルカに聞きに行く。オミナエシについてはイチハラ……は嫌だから、ツヅリあたりに――」
「俺が何だって？　シュン君」

突如声が聞こえたと同時、がしっと背後から頭を捕まれた。ぐえっという情けない声を二人は同時に出してしまう。

「い、イテテテ！　痛いよキョーゴ！」

頭を握る手にぐいぐいと力を込められてルードが悲鳴を上げる。駿はこの上なく苦々しい顔を作り上げ、嫌々背後を振り返った。
……この男はどうして、こういうタイミングで現れるのか。

「何だか面白そうな話をしてるね。仲間に入れてよ」
「……イチハラ。てめーいつか絶対泣かす」

ルシファーが幹部の一人、市原恭吾はさも愉しげに口角を上げて笑った。

第六章《輪廻》：Ｎｏｂｏｄｙ－Ｋｎｏｗｓ（３）

「……で、何の話をしてたわけ？」

ニヤニヤと笑みを浮かべる恭吾に不快を露わにした顔を隠さずぶつけても、全くの無意味だ。人をからかうのが生き甲斐のような男である。

よりにもよって厄介な相手に捕まった。駿は己の不運を心底嘆いた。

「……お前には関係ないだろ、」

「ふぅん？　オミナエシについて知りたくないんだー」

「な……ッ」

隣にいたルードが両手を上げて降参のポーズをとった。驚愕に染まっていた駿の表情が、みるみる苦虫を噛み潰したようになってゆく。

――恭吾はどうやら、始めから全部聞いていたらしい。

「……ほんっとに性格悪ィのな、お前」

「ありがとう」

シュン君程じゃないと思うけどね。言いながらこやかな笑みを浮かべる相手に駿はげんなりした。

「ま、何にせよ――――オミナエシはあまり良くない」

瞬間、恭吾は僅かに目を細める。場の空気が微弱に変化したのを感じ取ったルードが身じろいだ。

「良くない、っていうのは？」

「あまり首を突っ込まない方が良い相手、って意味だよ。知りたきゃ教えてあげるけどね」

別に機密事項でもなければ、口外を禁止された覚えもないし。エヴィルと同じようなことを飄々と言ってのける恭吾を見て、駿は一つ確信した。

市原恭吾やミク・ロヴナス、エヴィル・ブルータス――それからルード・エンデバー他数名。階級を〈マーダラー〉以上に置く彼ら幹部は、等しくある情報を共有している。それは組織のボスが探す人物の“ある程度の”情報と、ロヴがそれを探し求めている、という事実。

幹部達は長年それを知っていながら、何もしてこなかった。否、何もできなかったのだ。

（知っているのが、“それだけ”だから）

ロヴはオミナエシについて、それを知る幹部の誰にも口止めしていない。幹部達が知る情報など所詮その程度の物だということである。彼は肝心な部分を誰にも告げていないのだ。何故オミナエシを探しているのかという、その一点を。

「……その顔じゃもうわかったみたいだねェ、シュン君」

くつくつと恭吾は喉の奥を鳴らす。

「俺達に聞いたって無駄だよ。一番重要な部分を俺達は知らされていない」

誰も知らない。歌うように恭吾が続けるのを呆然と見ていたルード

が、ふと口を開いた。

「――ルカ姉は？」

「うん？」

「ルカ姉も、知らないのかな。ほら、幹部の中でもまた別でしょ」

ふむ、と恭吾は小さく唸る。顎先に指をついと当てて、僅かに考えるような仕草を見せた。

「ルカ、ねぇ……彼女については俺もイマイチわからないからな」

あの子、未知なんだよねぇ。

呟く声を拾って、やっぱり行こうとルードが声を上げた。

「行こう、ルカ姉の所。行って聞いてみよう――可能性が一番あるのはルカ姉だ」

「……まあ、ルカなら俺達が知らされてないことの一つや二つ握ってるかもねぇ」

「……そうだな」

「ルカならいないよ」

声が聞こえたのはその瞬間だった。再び歩み始めていた足を止め、目線を上げて愕然とする。恭吾ですら目を見開いて固まった。

いつの間にか、進行方向に男が立っている。どんなに探しても見つからなかった彼が。

「――ロヴ……。アンタいつからいたの」

流石と言うべきか、一番最初に立ち直ったのは恭吾であった。驚き

をきれいに隠すと、彼らしい気安い態度で現れた男に話しかける。

「ホントに神出鬼没だね。鮮やかすぎて不気味ですよ」

お前に言われたくはないだろう、と駿は心で突っ込みを入れた。心臓に悪い登場をするのはいつも恭吾のほうだ。

「――久しいな、キョーゴ」

屈託のない笑みで今更のように挨拶してから、ロヴは三人の方へ近付いてくる。強張った顔のまま、意を決したようにルードが口を開いた。

「あ、あのさロヴ。ルカ姉がいないってどういうこと？」

「言葉のままの意味だが？」

自分より低いルードの目線に合わせて屈み込み、柔らかく彼は言う。

「つい今し方、出ていってしまった。管轄の巡回でね」

「ホントに……？」

「おや、心外だなぁ。ルードは俺が嘘を吐くと思うのかい？」

にこにこと笑うロヴは、横から駿と恭吾に凝視されているのにまるで気付いていないらしい。

否、気付かないフリをしているのかもしれなかった。

「……ううん」

しばしの沈黙の後、ルードはゆっくりと首を横に振る。そうしてロヴの目を真っ直ぐに見つめた。

「ロヴは嘘を吐かない。でも、本当のことを全て話すこともしない。……違う？」

少年の言葉に含まれる物に誰もが気付いて、刹那の沈黙が流れる。己を真摯に見やる二つの眼をしばらく眺め、ロヴは満足げに唇をつり上げた。

「――上出来だ」

「……っ、待てよロヴ！」

そのままくるりと踵を返して立ち去ろうとする背中に、駿は慌てて声を投げる。

真実を暴くならこの際本人だって構わなかった。どうせ、駿達の行動などロヴにはお見通しだったのだろうから。

「ロヴ、お前は――……」

「――わからないよ、シュン」

口にしかけた言葉を遮られる。ロヴはゆっくりと振り返り、どこか怪しい光を湛えたその瞳で真っ直ぐに駿を見据えた。ふ、と口元が綻んで笑みの形になる。

「同じ人間でも、見える次元、見ている世界が違うことがある。特殊な力を持つ者だって千差万別だ。理解の及ばない範疇も存在する」

「……え、？」

ロヴの瞳がゆっくりと動き、恭吾とルードを順に映した。

「わからないよ、シュン。君には、君達には」

「……何が言いたいわけ？」

不機嫌な声で恭吾が問い詰める。その顔には気に入らない、という様子がありありと浮かんでいた。一括りにされたのが不満だったらしい。

「……不毛なことに時間をかけるのはやめておけ、ということだよ。詮無い行いよりもっと、有意義な事があるだろう」

「……無駄かどうかは、わかんないだろ」

憮然として駿が言うと、小さく声を上げてロヴは笑った。

「はは、……まぁ良いだろう。好きにしろ」

「どうせ諦めるだろうって顔だな」

「君達しだいだよ？　ただ、君が辿り着いたその時には――」

もう全て終わっているかもしれないけどね。

ぱちん、とロヴは指を鳴らす。途端に一塵の風が巻き起こり、刹那の間だけ回廊の照明が掻き消えた。

次に明かりが灯ったとき、ロヴ・ハーキンズの姿は何処にも見あたらなかった。三人だけが広い廊下の真ん中にぽつりと取り残される。

「あ、アイツはマジシャンか何かか……っ！」

逃げられた。悟った駿が悔し紛れの悪態を吐くと同時に、背後から鼻にかけたような笑い声が聞こえた。

ルードではない。となれば、残るは一人なのだが。

「……ふっ、ははは、ハハ」

「……イチハラ？」

その嘲笑にも似た冷たい声に駿は思わず眉を寄せた。恭吾の纏う空気がみるみるうちに怜悧なものに変わってゆく。

「ロヴ、あいつ、やってくれる……人を馬鹿にしやがって」

「お、おい」

攻撃的な目をしていた。愉しげに笑った彼は、いつもの恭吾とは明らかにどこか違う。

「君たちわかってる？　ロヴは釘を刺しに来たんだ、君らがこれ以上余計なことを嗅ぎ回らないように」

「そう、だな……」

「でも何もしなかった。外出禁止にするとかテキトーに遠征任務に出すとか、何でもできたのに。何もする必要がないって、判断されたんだ。どうせ辿り着かないだろうって――この俺も、含めてね」

ふふ、と愉快そうに腹を抱える恭吾を目の当たりにし、駿は背筋が冷えるのを感じた。いつも他人を食ったような顔をしているが、こんなに楽しそうなところは見たことがない。

ルードも同じ気持ちのようで、気味悪そうに一歩後ずさった。

「ルシファーでロヴに刃向かえば死罪。でもそれ以外の行動は自由だ。そして俺達は、彼自身から何の制限も受けなかった」

「おーいイチハラ……一体何を……」

「面白い。あの男、一回出し抜いてみたかったんだ」

にっこりと綺麗に笑って見せた恭吾が、駿には組織内の誰よりも悪人顔だと思った。今ならエヴィルだって優しく見える気がする。

「好きにしろって言ったこと、後悔させてやる――――さぁ、協力してあげようじゃないか、シュン君？」

第六章《輪廻》：間話ー漆黒と白銀ー

「――――ルカ！」

何重にも張り巡らされた鋼の扉を潜り抜けた途端、自分を呼ばう声が高らかに響いた。同時にどん、と軽い衝撃を身体に受け、ルカは小さく笑う。

「ルカ、ルカだ。やっと来てくれた」
「久しぶりね」

ルカにしがみついた子供は真っ白い髪をしている。雪の色をした睫毛に縁取られた目は血の色が透けて真っ赤だ。色素欠乏――所謂アルビノである。色味だけを見れば、ルカとは綺麗に真逆だった。

「どうしてしばらく来なかったんだ？」
「本部が移動したの。日本だから、ロヴのジェット機で来たけど結構かかったわ」
「ふぅん……またロヴの気まぐれか」

響く声は柔らかく高い少女のものだが、やけに老成した喋り方をする子供だった。背丈が自分の半分しかない彼女をあやすように、ルカは白い髪を撫でる。

「気まぐれ……そうかもね。探し物を見つけるためなんだけれど、ロヴの事だもの。また飽きて止めちゃうかも」
「どうでも良いよ。どうせ私の出番はないのだろう？」
「……そうね」

申し訳なさそうに苦笑するルカを見て、少女はにこりと笑う。

「良いんだ、私の仕事は無い方が良いから。でも最近は特に退屈だよ」

「退屈？」

「そう。“ラムダ”や“カイ”はいつ帰ってくるんだ？　“オミクロン”は仕方ないが、他のやつは戻ってきてくれないと……遊び相手がいない」

その瞬間だけ年相応の表情を見せる少女が何だか可愛く思えてルカはくすりと笑う。不思議だった。そんな顔をする彼女をこうして見るのは。

「“カイ”達にはまだ仕事の事後処理をやってもらってるのよ。でももうじき帰ってくるわ」

「本当か？」

「うん。昨日報告が来たから、必ず。“ベータ”や“ファイ”、“シグマ”も戻ってくるわよ――オミだけはまだ、こっちで働いてもらう予定だけど」

そう言えばぱっと少女が顔を輝かせる。嬉しげなその様子に、ルカも笑って頷いた。

「そうか、そうか。楽しみだ」

「これであなたの退屈が紛れれば良いけど」

「大丈夫だ。だから、ルカ――」

刹那、少女の瞳がすっと細められる。

「私を働かせるなよ、ルカ」
「……ふふ。あなたは一応、仕事上は私直属の部下なんだけど」
ルカは曖昧な笑みを浮かべた。サボタージュを希望する発言で無いことは明白だった。少女が何を言いたいかなど、彼女に課せられた使命を考えれば嫌でもわかる。
……わかるからこそ、ルカにはイエスと言い切ってやることができないのだが。

「ふざけてなどいないぞ？　私は“終焉”なんだ」
「わかってるよ。あなたは優しい子ね」
ルカは小さな身体を抱き寄せる。黙ってされるがままになる彼女の髪を指先で掬い上げ、そっと唇を寄せた。
「でもその時が来たら、ちゃんと働いてね」
「――、わかってる」
それは祈る仕草によく似ていた。
「……約束よ、“オメガ”」

第六章《輪廻》：機械仕掛けの神様（1）

「――――“学園”へ行く！？」
「声が大きいよシュン君」
その発言で駿を仰天させた恭吾は、唇の前に人差し指を立てて素早くそれを窘めた。
「だ、だってお前……自分が何言ってるか」
「わかってるとも。だからこそ、だよ」

ロヴが目の前から姿を消して数刻後には、駿は“オミナエシ”についての情報をあらかた恭吾から聞いていた。
――東洋の魔女。ロヴが長年捜していた相手。それは駿が既にルードから聞いていた内容とほぼ相違ないものであった。
……ただ一点を除いては。
「オミナエシと呼ばれる“魔女”は数十年、もしくは数百年ごとに現れてきた。これは俺たちみたいな裏社会の人間なら知ってる奴も少なくない」
「……どうして知ってるんだ？　あのロヴが捜しても見つからないような奴なんだろ」
「よくはわからないけれど、どうもオミナエシは時代の節目に現れては何らかの影響を周りに与えていくらしい。“裏”の勢力争いに

も時々絡んでは、時の情勢をひっくり返したりした」

俺が思うに、と恭吾は呟く。

「“魔女”と呼ばれるからには、オミナエシは何らかの力を持ってるんだ」

「“能力者”ってことか？　ロヴやルードや……イチハラ、お前みたいな」

遠慮がちに付け足された己の名を聞いて、恭吾はくすくすと笑った。人とは違う能力を疎ましく思う者もいるだろうが、恭吾は違う。むしろお陰で非平凡な人生を送れることを楽しんでいるのだが。

「そうだね。それもかなり強力な……ロヴや、下手すればルカ以上かもしれない。オミナエシが味方した組織には勝利が約束されたから、欲しがる者は多かった。けれど、オミナエシは常に歴史の表に出てくる訳じゃないんだ。いつの間にか消えていたりする」

「……。」

ルシファー以外の裏組織も、オミナエシを捜したことがあるのだろう。けれど見つからなかったに違いない。

（ルシファーが……ロヴが苦戦しているものを他が見つけ出せるはず無い）

ロヴには天下の情報屋、ゾラの力添えすらあるのだから。

話を聞きながら駿は脳内で少しずつ情報を整理していった。

「……ロヴがオミナエシを欲しがる理由も、戦力確保の為か？」

「わからない、としか言えない。ロヴはこの件に関してだけはずっ

と単独で動いてるから。ただ――俺は、違うと思う」

言い切って恭吾は悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「だって考えてみなよ。君たち〈ソルジャー〉のみの戦闘でもうちはほぼ負けなし。さらに上には能力者の俺たちがいて、最深部にはエヴィルとルカだよ。これ以上どんな戦力が必要なのさ」

「……だよなぁ」

駿は“学園”で見たものを脳裏に描く。アイジャという名の異能の少女が生み出した炎と、それを全て飲み込んだ水柱。あれこそが、ルカが体内に飼う悪魔の姿だった。

全てを消失させる水（の、ようなもの。あれが何だったのかは結局わからない）。物理攻撃を無効にし、触れればあらゆるものを溶かし、ルカが望めば硬化して刃となる。戦艦とてあれには叶わないかもしれない。

（あんなものを、どうやって、どうしてルカは……）

話を続けようか。考えに沈んでいた駿は恭吾に促され、ゆっくりと頷く。

「オミナエシが現れる背景には、必ず登場するある一族が存在する。それが“クロヌマ”だ。オミナエシはクロヌマ家が数代繁栄したころに現れ、一族の滅亡とともに姿を消す」

「――滅亡？」

共に話を聞いていたルードも目を丸くした。歴史を語るには些か不穏な単語である。

「“クロヌマ”と呼ばれる一族は元を辿れば、平安の時代から続く由緒正しい血筋だ。けれどそれはね、ずっと絶えず続いていたわけじゃない……いや、」

恭吾がすっと目を細める。鋭い眼光が刹那の間だけ煌めいた。

「“必ず絶える”んだ。何代か順調に続いたと思ったら、何の前触れもなく突然滅亡する。一族郎党、丸々死に絶えてしまうような事件が必ず起こる」

「……な、」

「けど不思議なことに、十年ほどの空白の後に必ず“クロヌマ”は蘇るんだ。死に絶えたはずなのに、子孫なんていないはずなのに、いつの間にかまた“クロヌマ”として生きる一族が現れる……不気味だろう？」

それが、その一族の血が、千瀬に流れているというのだろうか。問いかけた駿の声は掠れていた。

わからない、と恭吾は言う。

「黒沼千瀬が“クロヌマ”なのかはわからない。でもそうだと思ったから、ロヴが目を付けた」

「――やっぱりロヴは、わかってたのか」

「ロヴはチトセちゃんを見てたよ。彼女がルシファーに入るずっと前からね」

千瀬への“迎え”の速さは異例だった。やはり、と駿は呻く。

「……ロヴには“クロヌマ”が必要だったんだ、オミナエシに近付くために。その一族の終焉とオミナエシが現れる時期が、無関係のはずなかったから」

「まるで……」

小さくルードが声を上げた。自分の考えが正しいことを畏れるかのように、か細く言葉を紡ぐ。

「それじゃあまるで、オミナエシは“クロヌマ”を滅ぼすために現れるみたいだ……」

「――ルード、それって」

「真実はわからないけれど。でもさ、知ってるんじゃないかな？本当の“クロヌマ”の生き残りなら、何か少しくらい」

恭吾がにこりと笑う。けれど駿はしばしの間の後、ゆっくり首を横に振った。

「……駄目だ。チトセは、あいつはほとんど覚えてないんだ」

「みたいだねぇ」

知ってるよ、と恭吾はのんびり言い放つ。何でそんなに余裕なんだ。悩んでから駿ははっと顔を上げた。まさか。

「生き残りはまだいるだろう？　彼女の、実の姉がさ」

「黒沼、百瀬――――！」

「どうすれば良いかはわかってるね？　幸いにもロヴのお陰で最近暇だし。チトセも連れて行くよ」

――学園へ、ね。

こうして駿は冒頭の叫び声をあげることとなる。

突飛な提案に焦燥を感じる一方で、しかしこれしか方法はないのだと駿にはわかっていた。

（滅亡する、一族。全て死に絶えるような何らかの事件が起こって――）

“学園”へ出立する日取りを決め始めた恭吾とルードをぼんやり眺めながら、駿は一つ思い出していた。

それはもう薄れかけた記憶の中、初めて出会った時のこと。今思えば酷いことを問いかけた自分と、

『　親類……ほぼ全部　』

皆殺しにした。

そう答えた、あの日の千瀬を。

＊　＊　＊

――――足りない、と“彼女”は呟く。

力が足りない。何度も繰り返すうちに薄れていったのだ。でもまだ、やめるわけにはいけない。

――――赦すわけにはいけない。

何回だって消してやるのだ。滅びの苦しみを、絶える恐怖を与えてやるのだ。何度も何度も。生かしては殺すのだ。

――――どうして？

そんなこと、もう忘れた。憎怨の念だけが根深く残った。

「嗚呼、赦すまいぞ」

力が足りない。ならば、不足分は取り込んで補えば良い。ちょうど良い材料があることを“彼女”は知っていた。

「けして赦すまいぞ――黒沼」

否、と“彼女”は嘲う。懐かしい呼び名を唇に乗せて、冷え切った外気の中に吐き出した。

「――黒縄（こくじょう）よ……」

第六章《輪廻》：機会仕掛けの神様（2）

「……ロヴ」

人知れず去ろうとしている背中を見つけた。また誰にも言わずに姿を眩ませる気なのだろう――エヴィルはそっと息を吐いて、門を潜った彼を呼び止める。

「あぁ、エヴィルか」

振り返ってロヴは笑う。腹の中をさっぱり読ませない、彼お得意の笑い方だ。それを見たエヴィルは不機嫌さを隠しもせず眉を寄せる。

「――気付いていたくせに、白々しい」

ねめつけても男はにっこりと笑みを濃くするだけだ。誰が何を言おうと聞く耳持たないロヴには言うだけ無駄、ということをエヴィルもわかっていた。

――思えば、もうずいぶんと長い付き合いになる。

「で、お前はまた一人で何か企んでるわけか」

「察しがよくて嬉しいよ、エヴィル」

「馬鹿にしてるのか？　ロヴ、お前――ルカにも、行き先を言っていないな」

問えばロヴの纏う穏やかな空気は変わらぬまま、沈黙だけが流れる。それは無言の肯定だった。

「……お前が何をしようと俺は、“俺達”は構いやしない。お前について行くと決めたあの日から――でも、」
「……、」
「チトセは、どうだ。何も知らないあの娘をお前は一体――」
「珍しいな、エヴィル」
お前が“俺達”以外の人間を気にかけるなんて。言いながらロヴは酷く興味深げにエヴィルを見つめる。
「シュンやルードに何か言われたかい？」
「……それも、ある。けれど俺は――今回のことは、前から気にかかってたんだ。ルカにも教えないでお前、何をする気だ？」
エヴィルの猛禽類に似た金眼がすっと細められた。鋭い視線を送られても、ロヴは飄々としたままである。それは彼が、エヴィル・ブルータスの本質を全て理解しているからだった。
「“オミナエシ”を見つけて、何をするんだ――？」
誰よりも冷たく、誰よりも“狩る側”に相応しい性を持つ青年。けれど彼はけしてロヴに敵意を向けることはない。
「……約束を覚えているか、エヴィル」
そして幼い頃から共に育ったルカのことを、誰よりも案じているのがエヴィルである。そんな彼にロヴは気まぐれで、ほんの僅かなヒントを与えてやることにした。
「約束？」
「“最果て”の話だよ」

「――ああ」

エヴィルは一度目を閉じる。刹那の間、瞼の裏に赤い炎がちらついた。それは目の前の男が、エヴィルとルカに手を伸ばした日の情景。

「行こう」と言った彼。何処へ、と訊ねたのはルカ。二人の背を追うと決めた自分。

「お前が話したあの、子供騙しのまやかしを、ルカはまだ信じてるぞ」

「知ってるさ。あるいは信じたいと願っているだけだとも――でもな、エヴィル」

すっとロヴの口角がつり上がり、美しい三日月の形になる。それは、その瞬間だけは、彼の笑顔は紛い物ではなかった。

「俺はまだ、あれを叶えてやろうと思っている」

「は……？」

思わずエヴィルの口から気の抜けた音が漏れる。ロヴは気にせず言葉を続けた。

「見せてやりたいよ、あいつに沢山のものを。それには時間が足りないだろう」

「何言って――」

「お前も実は気付いているんじゃないか、エヴィル。タイムリミットは着実に近付いている」

その瞬間背筋に感じた悪寒は、きっと警告だ。言葉にならない何かを本能的に察知して、エヴィルは微かに顔を歪める。

「ロヴ……？」
「ま、心配はいらないよ。来るべき時にはちゃんと言うし、ルシファーにもお前たちにも何の問題もない」
増兵する必要はあるかもしれないが、とロヴは訳の分からないことをひとりごちた。エヴィルがそれを問い詰める前に、さっと踵を返してしまう。
「じゃあ留守は頼んだよ、エヴィル」
「……早く帰ってこい、この馬鹿ボスが」
投げつけられた悪態に笑ってロヴはひらひらと手を振った。
黒塗りのリムジンに乗り込んで何処かへと消えてゆくその姿を、今度こそエヴィルは見送った。
……そうして彼を送り出してしまったことを、この後エヴィルは後悔する。
それは人らしい感情をいくつか欠いていた彼が、生まれて初めて心に抱いた「後悔」だった。

＊＊＊

（まーたコレか……）

波音と浮遊感に包まれながら駿は溜め息を吐く。海を切り裂いて進むクルーザーはルシファーの物だが、勝手に恭吾が持ち出したのだ。乗り込んで目指すのはあの、忘れることなどできない島。エリニュエス＝グロリア――“孤島の学園”である。

朝霞恒彦という男と、彼が持ち去ったデータを求めて赴いたあの任務。犠牲になった命、データを狙った敵、そして想定外の人物の介入はまだ記憶に新しい。

（……まだ、あそこにいるんだろうか）

駿はぼんやり考える。あそこにいるのは自らの肉親だけではない。あれから月日が流れたとはいえ、学園で出会った多くの生徒たちはまだ在籍中のはずだった。

――例えば、播磨亮平。駿のことを「友」だと言い切った彼に、ろくな別れも告げられなかったことを、実は後ろめたく思っている駿である。あの時は最後まで必死でそれどころではなかったのだが。

（嗚呼、）

亮平のことと同時にもう一人思い出して、駿はそっと息を吐いた。亮平と同じくらい、あるいはそれ以上に、関わりを持った人物がいたな、と。

彼だけはもう学園にいない。否、この世にさえも。

――ウォルディ・レノ・ファンダルスは、あの場所で命を落とした者の中の一人だ。彼が誰に殺されたのか、結局駿にはわからないまま。理解できたのは彼もまた“普通の”生徒ではなかったことと、朧気な彼の素性のみである。

（カーマロカ、か）

異能の集う平和維持組織。現れたユリシーズと、彼が連れ帰った娘・アイジャ――そして彼女の実兄であったウォルディ。彼らの関係を統合してようやく、駿はウォルディもまたカーマロカに縁ある人物だったのだろうと思い至った。

……よもや彼がカーマロカを率いる一族の直系であったことなどは知る由もない。

ウォルディを殺したのはルシファーの敵でもあった“オリビア”だったのか、はたまた違う何かだったのか。駿に知る術はないが、彼の身を大きな災いが襲っていたことは確かだった。そしてウォルディはその身を呈し、争いの渦中にありながらたった一人の妹を守ったのだ。

（最後まで何かムカつくやつだった、）

心中で呟く。けれど何処かで己の立場と重ね、ウォルディを羨んだ自分がいたことを駿はわかっていた。

「なーにぼーっとしてるわけ、シュンくーん？」

「……っ」

はたと顔を上げた駿は自分の今いる場所を思い出した。すっかり思考の渦に飲み込まれていたらしい。

「何、現実逃避？　あの島に行くのは嫌かい？」

「ンなことは――いや、そうかもな」

珍しく素直な駿の様子に恭吾は片眉を上げる。

「……まぁ気持ちはわからなくもないけど。そこにいるお嬢さん二人のほうが、心情的には複雑でしょー」

恭吾は笑いながら後ろを指さした。そこには甲板に直に腰を下ろしている千瀬と、彼女を心配して付いて来たロザリーがいるのだった。しかし、同じく同行しているはずのルードは寝室に引っ込んで早々に寝息を立てている。

「で、さっきの話の続きだけど」

人差し指を立てて恭吾は言う。それで漸く、駿は今まで何をしていたのかを思い出した。情報の共有、だ。

「――その千代田って女は、黒沼百瀬は焼死だったって言ったんだね？」

駿は恭吾に、千瀬の実家を見に行ったあの日の話を聞かせていたのである。
通りすがりの娘に聞いた、あの家に降りかかった事件の全貌。凄惨な殺人事件の記録。

役所に残された長所や彼女の話には、事実とは異なっている部分がある。それは犯人に関する記述と黒沼百瀬の生死だ。
犯人に関しては、日本の警察は千瀬を疑いすらしていない。行方不明になった末の娘はおそらく殺されてしまったのだろう、と考えられているのである。
――しかし姉に関しては、その死に疑問の声も上がっていた。

「ああ。当時百瀬が通ってた学校の寮が燃えて……」

焼死はルシファーが人間の存在を秘匿したいときに使用する常套手段だ。焼けた死体からは個人の断定がしにくい。ダミーの死体があれば、社会的にこの世からその存在を消し去ることもできる。

「寮を燃やしたのは間違いなくルシファーだろうね。黒沼百瀬の社会的抹消。学園で保護するためにそうしたんだ」
「だろうな。俺の妹の時もローザの姉の時も、同じようにしたって聞いてる」
「問題はね、シュン君」

恭吾がにやんと笑う。

「なぜルシファーは偽の黒沼百瀬の焼死体を、実家でなく寮に用意したか、だ」
「――あ？」
「チトセが一家惨殺の事件を引き起こしたその日、百瀬は一時自宅

に帰ってきてたんだろう。不自然じゃないか」
「それは……」
「表世界の連中に疑念を残すようなアホな真似、普通ウチがすると思う？」はっと駿は顔を上げる。千瀬を見れば、恐る恐る頷いた。

「確かにあの日、姉さんは……うちに帰ってきた。……うん、覚えてる。姉さんの目の前でルカは、あたしをルシファーに連れて行くって言ったもの」
「つまりさ、」

恭吾の瞳がすっと細められる。
何か確信を孕んだその色に、駿は背筋が冷えるような気がした。

「ルシファーは……ロヴは、あの家でダミーの焼死体を作りたくなかったんだ」
「それは、……」
「あの家を燃やしたくなかったのさ。綺麗なまま保管して、調べたいことがあったんだろう」

やっぱり君の実家には何かあるよ、チトセ。
言いながら恭吾はにこりと笑う。

「ま、聞いてみればわかるんじゃないかな？　――君のお姉さんに、さ」

第六章《輪廻》：機会仕掛けの神様（3）

「一、女子寮に進入して攫ってくる。二、シュン君が制服着て、生徒のフリして会えるまで張り込む。三、銃で脅して正面から強行突破。さ、どれが良い？」

「どれも却下だボケ！！」

盛大なツッコミを入れて駿は嘆息した。

無事“学園”へ着いたものの、早々に問題が発生した。どうやって百瀬と話をするか、である。

正規の手続きと下準備があった前回とは異なり、此度の訪問は自分達の独断だ。身分を明かせぬ身の上では学園側に掛け合って呼び出してもらうことはできないし、女子寮に入るのも目立ちすぎる。

おまけに駿は、仮にも暫く生徒生活を送っていたのだ――顔だって割れている。

「え、駄目？」

何がいけないんだと言うように首を傾げ、ふむ、と恭吾は顎に手を当てる。

「うーん、じゃあどうしようか」

「俺とキョーゴが行くのは？　前の任務では来てないから顔もバレてないし」

ルードが提案するが、それは駄目、と恭吾は斬って捨てた。

「ちびちゃんじゃあ悪目立ちしちゃうよ。学業に従事するような品

性は欠片もないし」
「ちびちゃんって言うな！」
憤慨するルードに、怒るところはソコなの？　と小さく千瀬が呟く。
「それから、俺は行かない。メンドクサイから」
「お前なぁ……」
肩を落とした駿はぐりぐりと指でこめかみを揉む。頭が痛くなりそうだった。
言い出しっぺの恭吾は全くあてにならない。日本語の話せないロザリーを送り込むのも無謀であるし、まさか千瀬本人にいきなり姉のもとを訪ねろともいえなかった。
「ほんっと、どーすんだよ……」
寮棟はもうすぐ近くに見えていた。駿達が今いるのはあの、“箱庭”と呼ばれていた内グランドである。目的地を前にして、いつまでも隠れているわけにはいかないが――。
――その瞬間駿の思考は断絶した。木陰から突然、何かが飛び出してきたのである。
「――う、わッ」
「「「……っ！？」」」
駿が声を上げると同時に恭吾がホルダーから銃を抜いた。ロザリーとルードも同様に反応し、三人が一斉に“何か”へ銃口を向ける。
飛び出したモノはそのままの勢いで駿に激突し、彼の身体を羽交い締めにした。
――人間、だ。身に着けているものからここの生徒であることがわ

かる。

「――誰だ」

恭吾が一段低い声で鋭く問いかけた。不意を突かれたとはいえ、駿の自由を奪われているのは由々しき事態である。只でさえこの学園には怪しい輩が入り込みやすいのだから、ルシファーの敵である可能性は十分あった。

しかしその緊迫した空気を、突如千瀬が打ち破る。

「ま、待って！　この人――――！」

「……む～と～うぅぅぅ！」

地獄の底から響くような凄みある声で突然“それ”が喋った。

身体は拘束されたまま、背後から聞こえたその声の正体に駿も気付いたらしい。げっ、小さく声を上げた駿の顔は驚きと焦燥で歪んでいた。

「……は、はり……ま？」

「そうだよみんなの播磨君だよ～」

にこにこにこにこ。極上の笑みを浮かべながら播磨亮平は、駿に回した腕の力をより強くした。ミシ、と身体が軋む音がする。

「俺、もう一度武藤に会ったら絶対殴ろうって決めてたんだァ……」

「な、んで、だよ！」

うっとりと言う亮平の腕を無理やり引き剥がし、駿は漸く胸一杯に空気を吸い込んだ。

「だってお前何にも言わずいなくなるし、知らないうちに学校側に転出届出してるし！」
「あ、ああ……」
「あの後ホントに大変だったんだぞ！　ウォルディがし、死んじまって、なのに何にも残ってないし、冬悟は俺の話信じないでずっとウォルディ探すし、挙げ句学園側に聞いたらウォルディは入学すらしてないことになってるし、他にも……！」
「それも、あの……悪かったよ」
「本当、お前が無事で良かった……！　う、うぁぁぁあん武藤ぅぅ～！！」
「お、おお……」
怒りの形相から一変、今度は（本当なのかフリなのかわからないが）泣きだした亮平を困ったように駿が宥める。
……彼がこうも翻弄される様を見るのは、ルシファーメンバーからすれば酷く興味深かった。
「いや、マジ悪かったって。謝るから、だからまずお前は自分の置かれた状況を確認しろ？」
「へ？」
駿に宥められた亮平は顔を上げてぐるりと辺りを見回した。恭吾、ロザリー、ルード、そして最後に千瀬の顔を見てから漸く彼は自分に突きつけられたままの三つの銃口に気付いたらしい。そして、
「きゃー！」
という女子学生のような悲鳴を上げて駿の背に隠れたのだった。
「……で、コイツはなんなわけ？」

「えっと……シュンの友達、かな？」

ひそひそと問いかけてくるルードに行って千瀬もこっそり耳打ちする。

微かな囁きでしかなかったそれを聞き取ったのだろう。ふぅん、と怪しく恭吾が笑う。

「つーかお前何でこんな所に……」

駿が呆れたように問いかければ、やっと落ち着いたらしい亮平が笑う。

「あ、俺？　昨日野球やってさー」

「は？　野球？」

「ホームランを二本打ったんだけど両方ボールなくなっちって。みんなが『責任もって探せ！』って言うから」

「探してたのか」

駿はそれで納得した。今いる場所はグランドといってもその端の端で、木々が鬱蒼と生い茂っているような所である。駿達が身を隠すために選択したここは、普通生徒が好んで入るような場所ではない。

「いや、探してはみたけど諦めて寝てた。ぜんぜん見つかんないし」

「寝……、平和だな」

「声がするから起きたら、武藤が見えたんだもん。びっくりした」

成る程な、と話を聞いて千瀬も思う。いくら気を抜いていたって、誰かが入ってくれば自分達は気が付く。その点最初からここにいた亮平は警戒の範囲外だ。眠っていたとなればその気配もほぼ周囲と一体化していただろう。

ただし恭吾が気付かなかった理由は確実に――彼にやる気がなかった為である。

「で、武藤お前は？　何でここにいるの」
「えーっと……」

駿が言い淀めば、困ったように眉を寄せて亮平は笑う。

「いーよ、無理に言わないで。また何か訳アリなんだな」

お仕事ってやつかー。そうだよな、じゃなきゃ戻ってくるわけねーもんなー。
呟いた亮平の肩を突然、ポンと恭吾が叩いた。

「そうだよ、お仕事さ」
「おい、イチハラ……？」
「播磨君だっけ？　良いところに来てくれたじゃないか」

にっこりと笑った恭吾の目は捕食者の色をしていた。
あ、もう逃げらんないねー。のんびりとロザリーが言う。

「せっかくわざわざ来てくれたんだから利用……じゃないや、協力してもらおうか」
「今明らかに利用って……」
「播磨君。黒沼百瀬って知ってる？　知ってるよね。呼んできてくれるよね今すぐ。あと人がいない部屋用意して。余ってるでしょこの学園なら、ね？」

有無を言わせぬ口調はどう大目に見ても「お願い」ではなく「脅迫」だった。突然のことに亮平は目を白黒させる。

「は、え、黒沼？　何で？　つーか俺関係な……」
「お・へ・ん・じ・は？」
「はいィィィッ！！」

ゴリ、と眉間に銃を突きつけられて亮平はすっ飛んで行った。彼が真っ直ぐ女子寮に向かったのを見て、恭吾は満足気な表情を浮かべる。

「……おいイチハラ……あいつは完璧無関係の一般人だぞ」
「てゆーかシュン君、友達いたんだね。お兄さんは安心したよー」
「……。」

誰がお兄さんだ、と思う。しかし播磨亮平の存在が自分でも不思議な駿は、何も言い返せないのだった。

第六章《輪廻》：機械仕掛けの神様（4）（前書き）

更新期間があいて申し訳ないです。なんともうすぐ連載3年らしい。いつまでやる気だ自分w……ごめんなさい、頑張って終わらせます！

第六章《輪廻》：機械仕掛けの神様（4）

「授業が終わったら来るってさ」

程なくして戻ってきた亮平は一人であったが、言付けを預かってきたらしい。どうやら黒沼百瀬はこれから授業に出なければならず（正規の呼び出し理由がないのでサボらせるのは難しい）、もう暫く待つ必要があるようだった。

「お前は授業いいのか」

駿が問えば問題ないと亮平は笑う。

「今日はもう授業ないんだ」

「なんだ、サボりかと思ったぜ」

「あっははは、ひでー！」

特殊な教育カリキュラムを組んでいるこの学園では、必要最低限の必修単位を除けば生徒達が自由に選択して授業を受けられる。つまり個人でその日の時間割が異なっているのだ。

「ま、俺はサボリも常習だけどねッ」

「威張んな」

授業は一コマが一時間半。百瀬の授業が終わるまでの間、駿は恭吾から――彼なりの優しさ、ではなく十中八九気紛れで――亮平と話す時間を与えられた。

千瀬達を残して亮平と二人、少し離れた場所に移動する。そこで駿はあの日起こっていた出来事を――――度重なる生徒達の不審死や亡

霊と言われた“黒髪の少女”、そしてウォルディの最後についてを亮平に語り聞かせた。

駿が亮平に与えることのできる情報はあまりにも少ない。ルシファーや他の“裏世界”に関わる組織については何一つ教えてやれず、己の身の上すら語ることは叶わなかった。駿に出来たことはたった一つ、巻き込んだことへの懺悔のみである。

――それでも、

「そっか」

それでも亮平は、晴れ晴れとした顔つきで笑って見せた。

「話してくれてサンキュ、武藤」

「……、」

「俺はさ、馬鹿だし世間知らずだし、難しいことはわかんねー。だから、何にも気にしない。お前がどんなでも、何してても、俺は友達（ダチ）だと思ってるよ」

言葉を失った駿は俯いて一つ頷いた。喉の辺りまで出かかった問いかけは、ついに口にすることが出来なかった。

（――お前は同じ事が言えるのか？　播磨）

俺が、人殺しだと知っても。

＊＊＊

終業を知らせる鐘の音が聞こえてから暫し。待ち人は漸くその姿を現した。

「おー、来たね」

愉しげに言う恭吾につられて顔を上げれば、千瀬の目に懐かしいシルエットが飛び込んだ。

嗚呼、と思う。　最後に会ったときは悠長に眺める余裕などなかったが、少し痩せたかもしれない。

「姉さ……」

「お姉ちゃん！？」

しかし千瀬が彼女を呼ぶ前に、ロザリーがギクリと身体を強ばらせた。思わずあげてしまったらしい声は僅かに掠れている。

「……ローザ」

百瀬の隣を歩く彼女はこちらに気付くと、どこか少しだけ悲しげな

笑みを浮かべた。ロアル・E・ウィルヘルム――ロザリーの実姉である。

「おや、君も来たのか」

「……。」

ロアルは一歩前に出ると――それは百瀬を背に庇う仕草にも見えた――恭吾に向かって無言で頭を下げた。二人に面識があるのかどうか、その様子だけでは千瀬には判断つかない。恭吾のほうは明らかにロアルの素性を知っているようだが。

「お姉ちゃん、どうして」

どうして来たの？

問いかけたロザリーの声音は固い。小さく震えてぎゅっと左手首を押さえる彼女の様子を、不思議そうな面持ちで千瀬が見つめる。どう見てもロアルは百瀬の付き添いだ。ロザリーがそこまで過剰に反応するほどのことは無いように思えた。

「さて、モモセさん」

しかしロザリーの様子など恭吾には全く気にならなかったらしい。にこりと笑うと彼は単刀直入に話を切り出す。

「君に聞きたいことがあって来たんだ。悪いんだけどちょっと付き合ってくれるよね」

「――――うちの一族について、聞きたいんですか？」

「！？」

思わぬ百瀬の返答に皆揃って瞠目した。千瀬に良く似た黒目がちの

瞳が、確信を湛えて真っ直ぐ恭吾を見つめ返す。
ぴゅう、とルードが小さく口笛を吹いた。

「聡い子は嫌いじゃないよ。……わかってるなら話は早い。どうしてわかっているのかも含めて、ゆっくり教えてもらおうかな？」

すっと目を細めた恭吾は捕食者の顔で笑う。それに臆することなく百瀬は頷いた。

「話します――こちらの質問にも、答えていただけるなら」
「俺と対等に取り引きしようって言うのか。面白いお嬢さんだね、君のお姉さんは」
「き、キョーゴ……っ」

そこはかとなく不穏な空気の中で話を向けられた千瀬は狼狽えてしまう。何かを知っているらしい姉とそれを聞き出したい恭吾、いつになく真剣な面持ちのルード。千瀬だけが事の重大さにいまいち気付けぬまま、話ばかりが展開してゆく。

（え？　ええと、何コレ？）

そもそも今日この学園へ来たのだって、ろくに詳細もわからない状態での強制連行だったのた。拉致同然の勢いでクルーザーに乗せられ、「お前の姉に会いに行く」と言われた時の千瀬の驚きは想像に難くないだろう。

（でも、たぶん、あたしの記憶と関係あるんだよね？）

自分の周りを取り巻くように現れる“オミナエシ”の名を、ルードと駿が危険視していることはわかっていた。欠けている記憶と、夢

で聞いた声と、老婆やユリシーズの忠告が全てそれを示していることも。
ただどうしても千瀬には、百瀬がそこに一枚噛んでいるかもしれない、という状態に現実味を感じられなかった。

――――事が黒沼の血筋全てを巻き込んでいるということに、否、元凶こそがその血にあるということに、この時まだ千瀬は気付いていなかったのである。

「部屋を用意しました――案内します」

そう告げて先導するロアルに全員が従う。自然な動作で横に並んだ百瀬が己の頭をそっと撫でたので、千瀬はびくりと肩を震わせた。単純に驚いたのもあるがそれだけではない。嬉しいのに何処か、不安を感じたのだ。

「ごめんね、チトセ」

やっぱり、私の、せいだ。
吐息に溶ける微かな声で百瀬が呟く。

＊＊＊

亮平と別れてやって来た駿と途中合流し、案内された部屋はまずまずの広さを持っていた。
中へ全員を通してからロアルがしっかり内鍵をかける。

「この部屋は？」
「寮長の使う会議室です。鍵は今私が持っているこれだけ」
「ふぅん……」

コンコンと壁の厚みを拳で叩いて確認し、恭吾は一つ頷いた。

「いいだろう。――――さて、」

改まって視線を向けられた百瀬は僅かに表情を引き締めた。
まずは君の質問から聞こうか？　言いながら恭吾は室内の椅子を勝手に出してどかりと腰を下ろす。

「生憎こっちには言えないことも沢山あるんでねー。俺の口から言える範囲内なら答えよう」

言えない事って何？　陰でこそりとルードが訪ねる。ルシファー関連全般だろ、と返したのは駿で、千瀬とロザリーは固唾を飲んで恭

吾のことを見つめていた。

「……聞きたいのは一つだけです」

暫しの沈黙の後、百瀬は静かに口を開く。一度俯かせた顔を上げて真っ直ぐに恭吾を見据える彼女の、掌は固く握り締められていた。

「私が今から話す事によって、妹は――チトセは、どうなりますか」

危険な目に、合うんですか？

真摯に問いかける百瀬は、姉の顔をしていた。ただ一人になった肉親を、たった一人の妹を、心の底から案じる姉。百瀬はそれ以外の何者でもないのだ。

「――率直に言おう。どうなるかなんて、誰にもわからないよ」

君はもう気付いてるかもしれないけど。着席したままゆるりと足を組み替え、恭吾はどこか困ったように笑った。

「君の大事な妹は既に危険の真っ只中だ。君が俺達に情報を提供することによって、何かマイナスの要素を呼び込む可能性はもちろんある」

「……、」

「ただしそれは逆も然り、だ。俺達がより詳しく状況を把握できていれば、君の妹を護ってやることだってできるかもしれない。仲間だし、努力は惜しまないつもりだけど？」

どうする？

試すような問いかけに百瀬はぎゅっと目を閉じた。それから小さく息を吐き、瞼を押し上げて恭吾を見つめる。

――無言の、しかし確かな返答を受け取った恭吾は満足気な笑みを浮かべた。

「じゃあ、今度はこっちの番だ」

すっと椅子から立ち上がった恭吾は一歩前へ出る。己より低い位置にある百瀬の頭に合わせて腰を折り、その黒い瞳を覗き込んだ。

「黒沼百瀬――君は、“オミナエシ”を知っているか」

「……いいえ。けれど、」

「けれど？」

「――黒沼を陰から監視し支配する、何かがいることには気付いています。気付いて、しまった」

迷いなく告げた姉の顔を、千瀬はぽかんと眺めていた。

「――うちは、黒沼は、呪われている」

第六章《輪廻》：機械仕掛けの神様（5）

おかしい、と思ったのは一体何時だっただろう。
妹と“学園”で再会した時？
妹がその手で一族を殺めた時？
妹に剣の伝承資格が移行した時？

――――違う。違和感はもっと、もっとずっと昔に。あえて言葉にするなら“最初から”だと、百瀬は思う。

（わたしが、生まれた、その時から）

百瀬は剣が嫌いだった。平和な時代に生まれた以上その技術は伝統を嗜む程度にしか使い道はない。そうわかってはいたが、どうしても好きにはなれなかった。
刀を見ると殺しの道具という印象が浮かんで消えない。刃紋を伝う赤い血の幻影が、どういうわけか見えそうになる。
しかし黒沼の家に生を受けた以上、剣技の習得は必須であった。
男女問わず家の嫡子となる子には、刀を扱う術を。男児の名には“剣”の字を、女児ならば“瀬”を。
そんな奇妙な、由来すらわからない風習に取り憑かれた家が百瀬は苦手だった。

「小さな頃から思っていたんです。うちはおかしい、って」

静かに、しかし滔々と語る百瀬の声に皆耳を傾けていた。一言一句聞き漏らすまいとしているのだろう、誰も口を開く者はいない。

「代々変な習わしを忠実に守り続けていく。誰もそれを疑問に思わない。……見えないレールの上を走らされているような、嫌な感じがずっとしてた」

しかし当時の黒沼家では、異質なのは百瀬の方であった。剣を厭う娘に両親は手を焼いたが、やがては諦めたらしい。変わりに矛先が向いたのが、三つ離れて生まれた妹――千瀬である。

「私が六つの時――当時三歳の誕生日を迎えたばかりのチトセに、剣の伝承権が移行しました」

幸か不幸か、千瀬には才能があった。百瀬より――否、一族の誰よりも、だ。

以来両親の関心は全て千瀬へゆき、百瀬は黒沼という檻から僅かではあるが出ることになった。地方の高校を受けて寮に入ったのは、少しでも家から離れたかったからだ。百瀬を放任していた両親は何も言わなかった。

「うげ……三歳ってお前……」

んなチビの時からやってんのかよ。
思わず呟いた駿に千瀬は首を竦めてみせる。確かにそうだったような気はする。気はするがしかし、今の千瀬には思い出せない話だった。

「私は逃げた。けれどそれは、妹が代わりにレールの上を走り始めただけの事だった。……チトセがルシファーに連れて行かれたあの日、私、思ったんです――ああ、この日が来てしまったんだ、って」

これは罰なのかもしれない。ルカとミクが目の前に現れ“チトセを迎えに来た”と告げた時、百瀬はそう感じたのだった。
幼い頃から抱いていた漠然とした不安が形になる日。妹に己の役目を押し付けた罪。その精算をしなければならない瞬間がいつか必ず来ると、知っていた。

「ああいう事がいつか起きるって、わかっていた気がしたんです」

呟いて百瀬は一度目を伏せる。
恭吾がやんわりと話の続きを促した。

「わかっていた、とは？」
「漠然とそう感じてた、というのもあるんですけど……それだけじゃないの。夢を、見ていたから――」
「夢――」

恭吾の瞳がふと厳しい色を帯びる。それには気付かず百瀬は続けた。

「小さい頃によく見ていた夢があって……女の人が出てくるんです。ある時は彼女を正面から見ていて、ある時は私が彼女自身だったりする」

「……」

「彼女は決まってこう言うんです。『約束を守って』、『忘れるな』と」

ガタン！！

瞬間響いた音に皆揃って臨戦態勢を取った。が、正体に気付いて脱力する。

「……チトセ、大丈夫？」

よろめいた拍子に帯びていた刀を壁にぶつけたらしい。呆然としている千瀬を気遣ってロザリーが声をかけるが、当の本人には聞こえていないようだった。

「……その、夢……どうして……？」

千瀬が今までに見た夢の内容を知っているルードと駿も険しい表情になる。

妹の問いには答えず、一呼吸おいてから百瀬は再び口を開いた。

「――夢を見ると最後に残るのは必ず、強い憎しみの念だった。約束を守れ、忘れるな。そう言われる度に私は、刀を握るのが怖くなったんです。まるであの憎しみに、誰かを殺せと言われている気がして」

「その夢は、今も？」

「いいえ。――夢は、チトセが剣を始めると同時にぱったり見なくなりました。正直言えばそんな夢を見たこと、忘れてしまっていた……思い出したのはついこの前です」

「この前？」
「チトセが……この島へやって来て。私の目の前で刀を抜いて――――“黒縄”を忘れてる、って気付いたとき」
はっと駿が息を飲んだ。
黒縄（こくじょう）は千瀬が習得していた居合いの技名である。オリビアと戦闘になったあの時ルシファー勢が生き残ったのは、あれがあったからだと言っても過言ではない。
「“黒縄”は黒沼の剣士であれば必ず習得する奥義です。嫡子じゃなくてもその名ぐらいは知っている。千瀬が忘れているはずなんてなかった。おかしい、って思って、そして――昔見た夢を、思い出して」
『忘れまいぞ、黒沼』
『この怨み、必ず』
『――――忘れまいぞ、黒縄』
時代がかった口調で恨み言を叫ぶ女の、恐ろしいまでの声が百瀬の脳裏に蘇った。
夢の女が呪詛を吐いた相手、それが“黒縄”だ。そしてその黒縄と言う名が付けられた奥義を伝え続ける黒沼の一族。気味の悪い合致に百瀬は戦慄した。
夢を見ていた当時、百瀬はまだ五つかそこらの年齢である。剣の鍛錬から逃げていた彼女はまだ、黒縄という技の存在を知らなかったはずなのに。
「夢の中でその女性は、黒縄という名の相手を呪っていたんです。それを思い出して――――」
「偶然にしては出来過ぎているね」

「はい。だから私、あの後――チトセ達がルシファーへ帰った後、自分の記憶を整理してみたんです。うちの一族について、よく思い出してみようと……そしたら、気味の悪いことに気が付いてしまって」

これを見てもらえますか？

事前に用意したらしい、何かが書き付けてあるノートの切れ端を百瀬は取り出した。

準備が良いね、と感心したように恭吾が言う。

「あなた達が来たって聞いて……授業中にこっそり書いたんです」

誰かに見てもらいたくて。

ほんの少しだけ笑う余裕ができたらしい百瀬は、静かにそれを恭吾に手渡す。暫しそれを無言で眺めていた彼は、不意にクッと喉を鳴らした。

「――イチハラ？」

「くく、これは傑作だ……見てごらん」

皆に見えるよう紙を裏返した恭吾の顔は、その笑い声とは裏腹にどこか険しい。

促されるままにそれを覗き込んだ駿も、千瀬も、次の瞬間には言葉を失った。

「これは……」

そこにあったのは黒沼家の簡略な家系図であった。

曾祖父の代から始まり千瀬までで終わっている中央の流れが宗家。

そしてそれを取り囲むように数人分、分家の流れが描かれている―

―そこまでは、傍目にも普通の家系図であると言えた。問題はその後である。

「……ずいぶんと濃い血だな」

言い辛そうに呟いたのは駿であった。まずこの家系図で目に付くのは、配偶者同士の関連だったからだ。

――黒沼家の婚姻は殆どが身内同士で行われていたのである。無論全くの他人を配偶者に選んだ者もいるが、それは決まって分家の人間だった。宗家本流の者――つまり嫡子の配偶者は必ず、同一族の中から選ばれている。

「……私とチトセの両親は従兄弟同士でした。祖父母もそうです」

「黒沼は親族交配を意図的にやってたわけだ？」

「はい。……現に私には、許婚（いいなずけ）として定められた再従兄弟（はとこ）がいました」

え！？

姉の告白に驚いた千瀬が素っ頓狂な声を上げる。

（はとこ……って、どんな人だっけ……）

思い出すことはできなかった。おそらくはその姉の婚約者も、千瀬はその手に掛けている筈なのに。

「ただ、宗家は家をチトセに継がせることにしましたから……チトセにもそれなりの相手をと、分家の子供から候補を探していたはずです」

……ここで駿が物言いたげな視線を向けてきたが、千瀬は全力をも

って気付かないフリをした。

「それから、もう一つ気になるのは……」

「ああ。この数字だね？」

恭吾が指差したのは、家系図の所々に記入された数字であった。たいてい女性の名の下に書かれているそれはしかし、千瀬と百瀬の名の所には存在していない。

「母や祖母、従兄弟達の年齢を逆算して出しました。それは――――黒沼の女性が子を産んだ時の年齢です」

「！？」

その場の空気が凍り付いた。言われてから意識してみると、その異常さに背筋の冷える心地がする。

――書いてある数字は、全て「１６」。

黒沼家の女性は十六歳なると婚姻して子を孕み、一様に出産を迎えていたのだった。

十六歳、しかしそれは百瀬と――ルシファーで三年を過ごした千瀬ですら、越えてしまった年齢だ。

「……きもち、わるい」

確かに若い母親だった、気がする。思い返せば祖父母もまだ老いるには早く、曾祖父も健在だった。靄のかかった記憶を辿って、千瀬はその異質さに恐怖する。

（これは、何？）

早いサイクルで次世代を生み出し、呪われた血を受け継がせ、決められたシナリオの通りに生きてゆく一族。
百瀬の書いた家系図には不気味に思えるほど整然と、「剣」そして「瀬」の入った名が並ぶ。そこに何かの意図を感じない方がおかしい。

「……チトセ、」

そっと肩に乗せられたロザリーの手を感じながら千瀬は思考した。
黒沼をこうさせたのは一体何なのか。
このシナリオを書き上げたのは、誰？

（それが、“オミナエシ”――？）

まさか、と思う。こんな事が出来る者が、この世に存在するのだろうか？
混乱の渦に飲み込まれそうになった千瀬の耳に、しかし次の瞬間、澄んだ声が届いた。

「デウス・エクス・マキナ」

それは今まで沈黙していたロアルのもの。皆一様に顔を上げ、その耳慣れぬ言葉の真意を問う。

「何――？」
「ギリシャの古代劇です。機械仕掛けの神、と訳します」

かの劇では、収集のつかなくなった悲劇のシナリオを物語の最後に現れた「神」が無理矢理な解決を見せる。その不自然すぎる結末に、

人々は言いようのないわだかまりを心に抱いた。

「劇中では機械仕掛けに乗って突然神様が現れる……だから、そう呼ぶんだそうです」

不自然な結末を強引に与え、シナリオを完成させる絶対の神。ロアルの言わんとしていることは千瀬にも、何となくではあるが理解できた。

「そういう気味の悪さを、感じますね。この家系図の裏にいる絶対的な存在……」

「成る程ね。ただし“オミナエシ”は神ではないし、狂った劇を収拾させるわけじゃなく作り出した“作者”の側だ。ヤツの書くシナリオは完璧で――」

カチリ、と小さな音がした。

はっと言葉を区切った恭吾が袖口から拳銃を滑り出させてドアを向く。内鍵を掛けたはずのそこが、外側から開錠したのだ。

次の瞬間銃口を向けたドアが勢い良く蹴破られ、ブーツに包まれた一本の足が覗いた。

「――誰だ」

「まァ落ち着きなよ“毒針（アンタレス）”――あぁ、今はキョーゴって呼ぶべきなのかな」

鋭く訪ねた恭吾は、しかしすぐに乱入者の正体に気付いたらしい。褐色の肌と黒い瞳を持つその人物は、色素の薄い髪を無造作に掻き上げた。

「キュースシェリング……何でアンタが」

「ぞ、ゾラさん！」

千瀬もその人物に気付いて驚愕する。つくづく神出鬼没の御仁だ。
情報屋・ゾラはどこか固い表情のまま部屋へ入ってくると、ぐるりと辺りを見渡した。その視線が百瀬を見据えてピタリと止まる。

「残念だけど悠長に喋ってる暇はないから、僕は僕の仕事をさせてもらう。――黒沼百瀬、学園を出て僕と一緒に来てほしい」
「「「はぁッ!?」」」

その場にいた全員があまりの展開について行けず、目を白黒させた。
いち早く立ち直った恭吾が抗議の声を上げる。

「いきなり何を言い出すんだ!?　ルシファーが隔離してる人間をいくらアンタだからって、一介の情報屋が連れ出していいわけ――」
「黙れ！」

鬼気迫るゾラの様子に千瀬は息を飲んだ。こんなに余裕のない彼女を、未だかつて見たことがあっただろうか？

「キョーゴ。君はそこの彼らを連れて本部に戻れ。今すぐ、だ」
「何言って……」
「僕が言わなくてもじきに強制帰還の命令が出るだろう」

ゾラの瞳がギラついて、それを目の当たりにしてしまった千瀬は思わず足が竦んだ。眉をしかめたまま黙り込む恭吾に代わってルードが問う。

「……ただ事じゃないみたいだけど。何があったわけ？　ねぇ、ゾラ」

ゾラは一度だけ固く拳を握りしめた。苛立ちを押し隠し、彼女は告げる。

「――ロヴ・ハーキンズが消えた」

第六章《輪廻》：機械仕掛けの神様（6）

「ロヴが――なんだって？」

放たれた言の葉の意味を飲み込めず、ぽかんと問い返した駿をゾラが睨みつける。

「君の頭は振れば音がするのか？　簡単な情報伝達すらできなくなったのか」

「……っ、だァー！　ちげーよ！」

そう言う意味じゃなくて。珍しく苛立っている情報屋を宥めるように、駿は慎重に言葉を選んだ。

「消えた、って。ロヴが行方を眩ませるのはそう珍しい話でもないだろ？」

「……それは君達の中の常識で　、」

くしゃ。もどかしげに額に当てられた手のひらが前髪を握り潰した。ゾラは一つ息を吐いて、それから漸く頭が冷えたらしい。その場にいる全員に理解できるよう解説を始めた。

「いいかい？　僕は一度出会った人間からはけして目を離さない。僕の持つ能力（ちから）と情報網を駆使して、対象がどこで何をしているか、二十四時間監視している」

そういえばそんな話を聞いたことがある。皆が訝しむ中で千瀬だけは一人頷いた。これはゾラ最大の特徴でもあり、情報屋家業を続ける上で彼女の一番の強みになる部分だ。現に朝霞恒彦の持ち去った

データを探した際、決め手となったのはゾラの張る網であった。

「どこにいても、何をしてても、僕にはわかるようになってるんだ。今までヤツが行方を眩ました時だって、僕だけは知ってた。僕から逃げられるはずはないんだ、なのに……っ」

「……つまりそれは、」

僅かに逡巡してから口を開いた恭吾の、瞳に剣呑な色が宿る。

「ロヴが君の――ゾラの力が及ばない場所にいるってことかい？」

「……ああ。問題はそんなこと、ハーキンズにはできないって事だよ」

「どういう意味だよ」

駿が口を挟めば、はぁぁぁ、と長い溜息が洩らされた。ゾラと恭吾双方からである。

頭が悪いと言われているようでむっとしつつも、駿はおとなしく続きを請うた。実際のところ、まったく現状を把握できていなかったからだ。それは千瀬やロザリーも同じである。

「……まぁ君達には感覚的にわからない話なのかもしれないね。良いかい、僕は体内にレーダーを持ってるんだ。高性能で、標的（ターゲット）の動きを自動追尾する……そういう感じだと思ってもらえれば良い。わかる？」

「……ああ……まぁ、何となく」

「僕が追うのは標的の形や気配じゃない。生命そのものの、エネルギーみたいな……とにかく、生きていれば必ず存在するものがあるんだ。だから標的本人が意図的に消すことはできない。消えたとしたらそれは――」

「ち、ちょっと待ってください！」

悲鳴じみた声を上げたのは千瀬だ。同時に駿もその事に気がついて目を見開く。

「おいおい、そりゃないだろ……ロヴが、し――」

「……死んで、ないよ」

放たれる寸前の言葉をロザリーが遮った。

「ロヴは生きてる。その確証もある。だからキョーゴは、ロヴが“ゾラの力が及ばない範囲”に行ったって思うんでしょう？」

「……確証なんてどこにあるんだ、ローザ」

「馬鹿シュン」

「てめ……っ」

ロザリーはくすりと笑う。どこか自嘲めいたその顔は、かつての幼さを失っているように見えた。

「前に自分で言ったこと忘れたの？　あたし達は“シナルの地”にいるの。塔が崩れたら、ただの人間に戻るんだよ」

「――あ、」

バベルの塔。小さく千瀬は呟く。もうずっとずっと昔、その話を自分にしてくれたのは確かに駿だった。

「言葉が、通じなくなる――」

「そう。あたし達が喋れてるって事は、ロヴの“翻訳”が続いてるって事だよね」

「正解だよ、ロザリー」

ゾラが組んだ足を解いて立ち上がる。

「だからハーキンズの野郎は死んでない。僕の能力が届かない場所に行ったと考えるのが妥当だ」

「そんな場所――」

「ない、とは言い切れない。例えば僕のキャパを上回る能力者が、意図的に作った結界の中とか……ね」

恭吾の顔がよりいっそう険しくなる。ねぇ、ゾラ。問いかける声はいつもの彼とは異なり、淡々としていた。

「それが“オミナエシ”の仕業だって言いたいんだね？」

「ああ。僕の力が奴に、邪魔されてるんだ」

ロヴはオミナエシに会いに行ったんだよ。悔しそうに唇を噛んだゾラの発言に、その場にいた全員が、目を見開いた。

「会いに、って……オミナエシの居所を見つけたのか！？」

乗り出すように問いかける駿を一瞥したゾラは、吐き捨てるように答えをよこす。

「僕は、知らない」

「え、」

「ハーキンズから依頼を受けて調べていたのは事実だ。それが日本だと突き止めたのも僕」

「……、」

「でも肝心な所は見つからないままだった。“オミナエシ”は裏社会の伝説なんだ、簡単に見つかってたまるか――――それが、いつの間にかアイツが単独で調べ上げてたみたいだ。僕にも、ルカにさ

え教えなかった。そうやってアイツはいつも……！」

ぎしり、と骨の軋む音がした。強く握りしめられたゾラの拳が小刻みに震える。

千瀬はそっと彼女の顔を覗き込んだ。目を伏せ何かに耐えるような表情をしたゾラの、それでも堪えきれなかったものが言葉に乗って零れ落ちてゆく。

「いつだってアイツはそうだ、全部一人で片付けようとする！同朋に何も語らないで……抱え込んで、隠して、無理をする……だから、僕はアイツが嫌いなんだ……っ」

「……それが、君が長年ルシファーからの勧誘を蹴っている本当の理由かい？　ゾラ」

毒気を抜かれたように一瞬だけ、問いかける恭吾の声音が柔らかなものになる。それに我に返ったゾラは逆に険しく眉を寄せた。

「うるさいよ毒針（アンタレス）。詮索する余裕があるなら蠍の飼育でもすれば？」

「……その話を蒸し返すのやめてくれマス？　劇薬からは引退して技術は後輩に譲ったの。もういいの。これだから情報屋はねちっこくて嫌だね」

「何――」

「だァァァ！　お前らもうやめろ！」

一触即発の空気をどうにか破壊すべく声をあげた駿に、ゾラと恭吾両者の厳しい視線が降りかかった。刹那緊張が走ったが、その空気はやがて和らぐ。

「……っ、とにかく、僕は黒沼百瀬を連れて行くよ。何かしでかす前にハーキンズをとっつかまえる」

「でもオミナエシの居場所はわからないんでしょ？」
「――毒針、いや、キョーゴ。もう君は気付いてるんだろう？」
ゾラの瞳がすっと移動し、百瀬を、次いで千瀬を見据えた。それだけで千瀬の身体は金縛りにあったように動かなくなる。
「“オミナエシ”は“黒沼”を滅ぼすためだけにこの世に現れる。理由なんて知ったことか。その事実があれば十分だ」
「……囮に、する気？」
「ああ。生き延びたその娘を餌にして“オミナエシ”を誘き出す。奴は黒沼百瀬を殺したいだろうからね」
そんな！
小さく叫んだのは横に控えたロアルであった。何も言わない百瀬の手を握り、そんなの酷い、と耐えきれないように声を漏らす。
ロアルと百瀬が並ぶ様は、大きくなったロザリーと千瀬を見ているようで駿は奇妙な気持ちになった。何となく居心地が悪くなって視線を逸らしつつ、駿はゆっくり口を開く。
「……モモセじゃなくて、チトセじゃだめなのか？　チトセは戦う術だって持ってるし、囮にするとしてもモモセよりはリスクが少な――」
「ダメだね。“オミナエシ”はチトセへの興味を失っている。……というよりは、放って置いて構わないと思っている」
提案をにべもなく切り捨ててゾラは続けた。
「だってチトセは、放って置いても忘れるだけだから」
「！？」
「チトセ、君、記憶の消去が進んでるだろう？」

どうしてそれを？
千瀬の問いかけは声にならなかったが、ゾラは心得たように笑う。
やっぱりね、と呟いたその声は、どこか憐れむような音を孕んでいた。

「これこそが“オミナエシ”の描いた黒沼滅亡のシナリオだ。一族を手に掛けた本人は、最後の一人を殺した瞬間に忘却のスイッチが入る。自分が何をしたか、何者であったのかも忘れて終幕だ」
「……そんな、ことって」
「消去が始まっているなら、それは君のせいじゃない。黒沼の遺伝子内に“オミナエシ”が組み込んだ仕掛けが、正しく働いたんだよ」
「待ってよゾラ。だったらチトセはもう、家のことも自分のやったことも全部忘れてるはずじゃん」
口を挟んだルードを見て、ふっとゾラは口元を緩めた。
「はは、頭を使えるようになったんだな、ルード」
「……。」
「スイッチは押された。ただし、チトセの場合はまだ不完全なんだ」
「……どういう意味？」
近くに寄ったルードの頭をぽん、と叩くゾラの仕草はどこか優しい。
憮然としつつもそれを受け入れ、ルードが続きを促した。
「これは僕の憶測だけど――チトセは全員を殺したわけじゃない。姉という唯一の生き残りを拠り所に、まだ保っている部分がある。それに、今回は“オミナエシ”のシナリオが根本から狂った箇所があるだろう」
「……剣の伝承権が、移行した……？」

「ああ。本来正しいスイッチは、黒沼百瀬――君に、組み込まれていただろうね」

ゾラが百瀬を見つめる。百瀬も見つめ返す。

「――君が死ねば完璧だ。チトセの忘却も正しく働くだろう。物語は奴にとって理想通りの結末を迎え、リセットされる。“オミナエシ”の存在もまた消えるだろう……次の黒沼が、生まれるまで」

それは黒沼という一族の、完全なる終焉だった。オミナエシという存在が繰り返してきた破壊と再構築。

百瀬と千瀬が生み出した小さな綻びが、魔女のシナリオに狂いを生んだ。

「……行きます」

暫しの沈黙の後、小さく、しかしはっきりと百瀬は告げた。

「私が役に立つのなら、行きます。……私のせいで、色んな人を巻き込んでしまった」

「君のせいってわけじゃない。……ま、協力してくれると助かるよ」

「モモセ……っ」

縋るような目で自分を見つめるロアルに、大丈夫だと百瀬は笑いかける。

ロアルは諦めたように握っていた手を離し、俯いた。しかし次の瞬間彼女の口から吐き出された言葉に、その場にいた全員が度肝を抜かれることになる。

「私も、連れて行ってください」

「ロア！？」

驚愕した百瀬がロアルを凝視する。ゆっくりと顔を上げた彼女の瞳に、決意の色が浮かんでいた。

「私も行きたいんです。大切な友人が危険な目に遭うのに、ただ見送るなんてできない。それに――」

「ハァ？」

露骨に嫌そうな顔をして、恭吾は冷淡に言い放つ。

「仲良しごっこなら余所でやってくれない？　ローザの姉といっても君みたいな凡人、連れて行ったって足手まといなんだよ」

あっけなく切り捨てられて、しかしそれでもロアルは食い下がった。

「違うんです！　戦えないけれど私だって役に立てます、だって――」

「ダメっ、お姉ちゃん！！」

瞬間ロザリーが飛び出した。姉の身体に抱きついて、何かから守るように腕を回す。

今までロアルに対してよそよそしかったはずの彼女の行動に、どこか引っかかりを覚えたのだろう。微かに眉を寄せ、ゾラがロアルを検分した。

「ロアル・E・ウィルヘルム――“E”は“エレクトラ”。妹にも同じミドルネームがついてるね。君たち姉妹は確か……」

そこで不意にゾラは言葉を詰まらせた。何かに気付いたようにはっ

と目を見張ると、次の瞬間腕を伸ばしてロアルの頭を鷲掴みにする。

「やめて、ゾラ！　お願い！」

妹の懇願も無視して姉の方に意識を集中させる。次にロアルの頭から手を離した時には、ゾラの中に言いようのない可笑しさがこみ上げていた。

――あえて言葉にするなら、“してやられた”だろうか。

「これは――制御装置（リミッター）がついてるのか。……ははッ、うまく隠したもんだね。ロザリー。“鍵”は君か？」

「やめて……」

弱々しい願いは聞こえないふりをする。仕事に情は必要ない。

ゾラはよく似た姉妹を一瞥し、クッと口角を挙げて笑った。

「良いだろう。君も連れて行く」

「お、おい！」

どういう事だと声を荒げる駿を片手で制しながらゾラは思う。

本当に難儀な姉妹だ。二組とも。

「使いどころはあるかもしれない――――ロアルは能力者だ。戦闘ではなく“予見”に特化したタイプの、ね」

第六章《輪廻》：機械仕掛けの神様（6）（後書き）

やっとここまできました……。

恭吾から技術を譲り受けた後輩＝絹華です。一度ゾラに「“毒針”の娘」と呼ばれています。二人の過去については本編ではたぶんやりません……番外とか作れたらいいんですが……。以上、どうでもいい補足でした（笑）

第六章《輪廻》：ある姉妹の咎（1）（前書き）

1ヶ月以上開いていたなんて……びっくりしました。

第六章《輪廻》：ある姉妹の咎（1）

『お姉ちゃん、』

己を慕う妹の声が反響する。

嗚呼、ついて来ないで。あなたを、連れて行きたくない。いつもそう思うのに、声にならない。この喉を掻き切ったら、少しは何か変わるのだろうか？

『お姉ちゃん、あたしが』

違う。違うんだ。望んでるのはそんなことじゃない。

なのにどうしてその小さな手で、銃を握ったの？

引き金を引かせたのは、臆病な自分。

『あたしが、守るからね』

――――ただ、幸せな未来を見ていたかっただけなのに。

＊　＊　＊

鈍いエンジン音が耳朶を打つ。目を閉じて追憶しても、沸き上がるのは後悔ばかりだ。

ロアルは顔を上げ、あてがわれた部屋の窓から外を見る。水平線に消えてゆく太陽が水面を燈色に染め上げていた。

「――それで、」

ルシファー本部へ向かうクルーザーの中。視界の端に映る少年か耐えかねたように口を開いたのを、ぼんやりとロアルは眺める。シュン、という名前だったはずだ。武藤一咲の兄。優しすぎる兄。ロザリーに対しても自分よりよほど、その役目を果たしているように思う。

「そろそろ教えてほしいんだけど。意味わかんねーし、なぁ、ローザ……」

名を呼ばれた少女は片手で手首を押さえたまま、ふるふると首を横に動かす。はぁ、と駿は溜息を吐いて、助けを求めるように辺りを見回した。千瀬と目が合う。困ったような視線が返ってくる。

「仕方ないね。僕が掻い摘んで説明しよう」

ぱちん。手の中で折り畳み式のナイフを弄んでいたゾラがすっと立ち上がる。ロザリーの縋るような視線は綺麗に無視。まるでウィルヘルム姉妹に黙秘権はない、と言わんばかりの態度であった。

「世の中には三種類のタイプが存在する。常人（ただびと）――所謂“普通の人間”と、僕やルードのような異能者。それから、その“中間”」
「中間？」
アバウト過ぎる、と駿が不満げにぼやく。
「仕方ないだろう、本当に定義できないんだから。戦闘のエキスパートだという面から見れば、君たちだって“普通”だとは言い難い。チトセのように、存在の根底に“異能”が関与している特殊な例だってあるし――」
ゾラの瞳が千瀬を見、百瀬に移った。確かに黒沼の一族が普通かと言われれば、それは“否”だ。
……で、つまりさ。じれたように恭吾が口を開く。
「君はロアルも“中間”だと言いたいわけ？」
「そう。限りなく“異能”寄りの、ね――」
「その根拠は？」
曖昧な答えは許さない。言外にそう込めて恭吾が言えば、ゾラは心得たように笑う。
「まず一つ目。僕には触れた人間の本質を知る力があり、“同族”の判別が可能であること」
「……知ってる」
渋い顔で恭吾が呟いたが、千瀬からすればそれも驚きの事実であった。異能にも色々あるのだな、と今更ながら実感する。
ジェミニカのように物を爆ぜるものや、ロヴの“翻訳”。遠隔操作

を得意とするルード、記憶除去の可能なミク。ルカのようにその力の正体すら曖昧な場合もある。

（でも、ローザのお姉さんは……）

力を一概に定義付けることは難しい。しかしゾラは、ロアルのもつ力を“予見”だと言い切った。よけん、とは何なのだろうと千瀬は首を傾げる。

「二つ目。その姉妹がルシファーにやって来た経緯」

「――え？」

思考に飲み込まれていた千瀬は、ふと聞こえた単語に疑問の声を上げた。情報屋という仕事柄、ゾラは知っているのかもしれない。しかし千瀬は――今更だが――ロザリーから、己の過去の話を聞いたことがなかったのだ。

「三つ目。二人の、ミドルネーム」

――――エレクトラ。

ゾラがそう呟いたのと、ロアルが立ち上がったのは同時だった。

「私が、」

銀を湛えたような瞳が揺れる。ロアルは意を決したように一歩前へ踏み出すと、そのまま傍らの妹へ向き直り――その身体を力いっぱい抱きしめた。

「私が、話します。私――」

「おね、……ちゃん、」

ロザリーの瞳が驚愕に見開かれた。わななく唇で姉を呼ぶ。
妹の細い手首に巻かれていた銀のブレスレットを、ロアルはするりと外した。

「私、だったんです。あの日、ルシファーに来るべきだったのは――私の筈だったんです」

その告白に、やはりとゾラは頷いた。君も、そうだったんだね。

「――君も己の責務を、妹が負ったんだね。そこの二人のように」
「ど……っ、どういう事ですか！？」

がたん、と激しい音がした。百瀬が立ち上がりざまに椅子を倒したのだ。

「……モモセ、」

ロアルが静かに窘めるが、黒髪の少女は嫌だというように首を振る。

「ロアは“学園”の生徒です！　私よりもずっと前からそこにいて、右も左もわからなかった私の面倒を見てくれた。ルシファーに妹が……私と同じように、いるって、そう言って……っ」
「そうだよ、黒沼百瀬。君と“同じように”ね」
「違うわ！　ロアは何もしてない！　ルシファーに行く必要なんてないし、私みたいに、罪を背負ってなんかな――――」

そこで百瀬の言葉は不自然に途切れた。ロアルの腕がまっすぐに伸びて、百瀬の手のひらを握りしめている。
二人の少女の視線が絡み合い――解けた。目をそらしたのは百瀬だ。

ロアルの哀しげな表情を、見ていられなかったのだ。

「いいのよ、モモセ」

「だって、ロア――」

「私は確かに、何もしなかったの。何もしなかったことが咎なのよ」

その手を血で染めたのは、最愛の妹だった。

ゾラの言う通りだとロアルは思う。百瀬と自分は、悲しいほどに良く似ている。

「……私とロザリーは、ギリシャ地方の小さな村に生まれました」

ぽつりと零された言葉に、ゾラが満足げな表情を浮かべた。興味の対象をナイフから少女に移し、情報屋はゆったりとした仕草で席に着く。

「私達の村は――“魔女”の住処だと呼ばれていました。その土地に住む人々には不思議な力が受け継がれ、それが外部の人間に畏れられていたんです」

「それが――“予見”？」

恭吾が口を挟めば、ロアルは素直に肯いた。

「――予見とは未来観測（さきよみ）の事だ。未来を知る力――予知能力、って奴だよ、チトセ」

「！」

わかっていないのがバレバレだったらしい。ゾラがにんまりと笑って解説したので、千瀬は恥ずかしさに下を向いた。この様子だと、言葉の意味すら理解できていなかったのは千瀬のみのようだ。

「……村の中でも特に私の家は、予見能力を色濃く受け継いでいました。だから、私の家は村を統括する役割を担っていた。私達の言葉は村にとっての絶対で、信仰の対象だった――でも、」
「……でも？」
途切れた言葉の続きをゾラが促す。ロアルは困ったように小さく笑って見せた。
「あなたはもうご存知なんでしょう。……私の身体に眠る能力は、強力であるが故に制限がかかっていた。理由は私も知りません――」
「リミッターの詳しい内容までは僕も知らないさ。主に“儀式”のあたりとか――興味あるなァ」
黙って口を噤んでいたロザリーがきゅっと眉根を寄せる。
「……ゾラのばか。知ってるんじゃない」
「はは、良いじゃないか……みんなにも教えてあげようよ」
クッと口角を上げたゾラの顔に、愉しげな笑みが張り付いていた。そのままロアルの言葉を引き継いで彼女は言う。
「ウィルヘルム家の予見能力者には幾つかの決まり事があった。一つ、能力継承は女のみが行うこと」
「……だから“魔女”か」
「ああ。二つ、能力を発動する際には、鍵が必要であること。そして三つ目――」
ロアルがふと目を伏せた。その手にはロザリーが肌身放さず身に着けていた、銀のブレスレットが握られている。

ロザリーは空になった己の手首を、それでも癖のように握りしめていた。

「能力者になりうる娘の名には“エレクトラ”と名付け――エレクトラは、神話にのっとった儀式を行うこと」

第六章《輪廻》：ある姉妹の咎（2）

エレクトラ・コンプレックスを知っているだろうか。まだ幼い女児が自我を持つ過程で、父に強い情を抱き、母に対して嫉妬や憎しみといった感情を向ける――その念はファザー・コンプレックスを遙かに上回るとされている。

この現象は、古代ギリシャの悲劇『エレクトラ』から名付けられた。父を殺した母に対し、その娘と息子が復讐をする物語。

そしてウィルヘルム家は、この『エレクトラ女王』の血を引く一族として語り継がれていた。

（……ね……ちゃん）

（お姉ちゃん……）

（……あたしが、……て、あげる）

（　ころして、あげる　）

＊　　＊　　＊

「お姉ちゃん！」

「！」

うたた寝していたらしい。ぼんやりする頭を一度振ってから身体を起こせば、銀色の瞳と視線がかち合った。

自分に良く似た、水銀を湛えたような眼。そこだけではない、最愛の妹はその容姿全てがロアルに似ている。

「ロザリー……」

「お姉ちゃんが居眠りなんて珍しい……じゃなくて、ママが呼んでるよ」

「そう……何だろう。また村から要請があったのかしら」

憂鬱な面持ちでロアルは呟く。

彼女の家には代々、受け継がれている“役目”があった。その身体に眠る異能を用いて未来を読み、村を正しい方向へ導いてゆく。人々を統括し、村の象徴となるのが一家の仕事だ。

小さな村であるが、ロアルが生活に困ったことはない。村人はロア

ル達を敬い、頼みもしないのに供物を寄越す。代わりに、頼まれればいつだって村の為に働く――それが暗黙のルールだったからだ。

「“先読み”をするなら鍵を忘れちゃ駄目だよ、お姉ちゃん」
「うん――」
「あーあ、せっかくチェスの相手してもらおうと思ったのに……」
「ふふ、後でね、ローザ」

ぷぅと頬を膨らませた妹は、小脇に黒いチェス盤を抱えている。従来のものより大きなそれは、細部にまで装飾を施された特別品だ。広げれば盤上に魔法陣が彫り込まれているのがわかるし、駒は人骨からできている。端から見れば不気味なことこの上ないだろうが――ウィルヘルム家にとっては馴染みの深いものだった。

「行ってくるわね」

――ウィルヘルムの娘は魔女、と呼ばれる。
予見の力を強く受け継ぐのが女ばかりだということもあるが、その大半は家そのものに理由があるだろう。
ウィルヘルム家は……否、この村全体が、黒魔術を深く信仰しているのだ。

ロアルも妹も、妖しいタロットやら呪術やらを当たり前のように思って育った。髑髏の飾りもカラスの羽もイモリの死骸も、遊び道具の一つだと思っていた。周りの大人たちが拷問器具に吸わせる血の量と悪魔召喚の関連について熱心に話していたときも、狂かれているとは思わなかった。
後に世界のことを勉強するようになって初めて、ロアルは自分達こそが異端なのだと気付く。

「……嫌だなぁ」

独りごちたロアルは母親の元へ向かいつつ、そっと手首を握りしめた。そこには銀のブレスレットがかかっている。細い鎖の先についた髑髏の飾りがまるで、世を嘲っているかのよう。

（もし、これが無ければ……）

――このブレスレットは“鍵”だ。特殊な呪術がかけられていて、身につけることによって初めてウィルヘルムの女は予見ができるようになる。ロアルは十六歳の時、正式に予見役を母から引き継ぐ形になった。同時に“鍵”もロアルのものになり、こうして手元に置いている。

（……馬鹿みたい。予言者が居なくなれば、この村は駄目になる）

力が受け継がれるのは家の嫡子だと昔から決まっていた。だからロアルのミドルネームは“エレクトラ”だ。力を持つ子の証。

――かのエレクトラ女王は、父親を失った悲劇を二度と繰り返さぬように異能を身に付けたのだという。“鍵”はその時、弟オレステスの手によって生み出されたのだと聞いたが、審議の確かめようがない。

「……はぁ、」

溜め息を吐く。

自分の身体に流れているらしいエレクトラの血を、ロアルは疎んでいた。未来を見る力なんていらない。

――だって絶望が見えてしまったら、どうすればいい？

ロアルは自分が予見役になって以来、必要最低限の先読みしかしてこなかった。村人に請われるまま、幸せな未来だけを読んだ。いくつかの道標と、幸せな結末さえ用意されれば人は満足する。不幸せな将来が見えそうになれば、ロアルはそれを拒絶した。

もとより、ウィルヘルムの予見はそこまで精度の高いものではない。見えるのは近い未来で、数年先を見通すことはできないのだ。全ての未来を把握するには、連続的な予見が必要になる――ロアルはそれを、しなかった。

（このままで、いい）

それがこんな結末を呼ぶなんて、

（嫌なものは、見ないの）

その時のロアルは考えもしなかったのだ。

「――――――え？」

今、何て。

捻り出した声は掠れていた。深く皺を刻む、年老いた顔がロアルの

目の前に並ぶ。
村の重役達は一歩にじり寄ると、先刻と同じ言葉を放ってよこした。

「儀式を行うのです」
「儀式って……」
「お母様を殺すのです、エレクトラ」

重役の老婆はウィルヘルム家の人間をミドルネームで呼ぶ。
耳慣れたエレクトラという響きが、ぞっとするような冷たさを孕んでいた。

「そんな、儀式は――ずいぶん前に廃れてしまったって、そうなんでしょう？」
「仰る通りです、エレクトラ――だから今宵、再び」

理解できなかった。ロアルをここへ呼んだはずの母親は席を外している。重役との会合はエレクトラ本人だけが参加するしきたりだ。
己の命を刈り取るための談合だなんて、母は思いもしないだろう。

「エレクトラ。あなたの予見は正確だ」
「だが甘いのです、エレクトラ」
「あなたに見えるのは幸福ばかり」
「回避すべき絶望を読む力は、貴女にはない」

四人の重役達が交互にロアルを責める。それは違うのだと叫ぶことは、できなかった。
ロアルが嘘の未来を伝えたことは一度もない。だが、意図的に見なかったものは多くある。それは村に対する裏切りで、大罪だった。

「エレクトラ、貴女の力が弱いのは」

「純血ではないからだ」
「余所者の血が混じったからだ」
「……っ、関係ないわ！」

そこでロアルは漸く反論する。
ロアルとロザリーは、ギリシャの村に生まれながらロシア人の父を持つハーフだ。外から流れ着いた父と母は恋に落ち、結ばれた。女児が生まれれば異能は受け継がれる。ロアルも問題なく予見の力を身につけていたが、閉鎖的な村の重役にとっては由々しき事態だったのだろう。
ロアルの能力が不足している要因が父の血にあると、老人達は信じて疑わない。

「儀式なんていらないわ……！　ママを――先代のエレクトラを殺すなんて、あなた達何を考えてるの」
「構いませぬ。先代は先代、今は貴女がエレクトラだ」
「そんな――」

狂っている。重役達に恐怖を感じ、ロアルは一歩後ろへ後退った。しかしその程度では、老婆の狂気に満ちた目から逃れることは叶わない。

「村のためです、エレクトラ」
「かのエレクトラ女王のように、その手で母親を殺めるのです」
「そして力を完全なものにするのです」
「村を救うのです、エレクトラ」

自分の名ではない、けれど自分の名でもある言葉が次々に空中に吐き出されて弾ける。
エレクトラ、エレクトラ、エレクトラ、エレクトラ、エレクトラ。

「やめて！！！！！」

ロアルは両手で耳を塞いだ。頭がおかしくなりそうだ。
やはりこの村はおかしい。異能に依存して、在るべき姿を見失っているのだ――。

「何を恐れるのですか、エレクトラ」

問い掛ける声のトーンがすっと下がる。同時に空気すらひんやりと凍り始めた気がして、ロアルは頭(こうべ)を上げた。

「お母様を殺めることが恐ろしいか。では、事前に練習なさい。儀式は成功しなければ困るのです」
「れん、しゅう……？」
「しかし、守りの象徴であるエレクトラが村人を手に掛けたとあっては事だ。ですから――」

何を馬鹿なことを言っているのか。口を開きかけたロアルは、次の瞬間絶句する。

「エルダを殺めなさい」

エルダ。それはロアルの、可愛い妹のミドルネームだ。ロザリー・エルダ・ウィルヘルムを殺せと、目の前の人間は言っている。

ぷつん。
その時ロアルの中で何かが千切れた。激しい音を立てて椅子から立ち上がると、目の前の相手に掴みかかる。

「いい加減にして！」
「エレクトラ！！」
「ふざけないで！　私は、私達は、アンタ達のための道具じゃない！！」
「小娘めが、」
取り押さえろ！
老人が短く叫ぶと同時に扉が開き、会合に使用していた部屋の外から村人達が飛び込んでくる。最初から見張られていたのだと気付いた時には、ロアルの身体は床に組み伏せられていた。
ガチャリ、と嫌な音が聞こえる。頭に銃口が押し当てられていた。
「村の意に逆らう“エレクトラ”はいらぬ。これが死ねば、エルダの能力が開花するだろう」
「……妹に……近寄らないで……っ！」
精一杯睨みつけても、老人達の歪な笑みを崩すことは叶わなかった。ここで私は死ぬんだ、とロアルは思う。そして今度はロザリーが生贄になる。そんなことは耐えられなかった。
でも、もうどうにもならない。
――――――――――――パァン。

乾いた銃声が響いた時、ロアルの命は失われたはずだった。少なくともロアル自身はそう思っていた。
続けざまに数回の発砲音が聞こえて初めて、何かがおかしいとロアルは思う。

（生きて、る……？）

堅く閉じていた目をゆっくり開けたとき、初めにロアルが見たものは、今にも泣きそうな顔をしたロザリーだった。
小さな手は銀色の拳銃を堅く握りしめ、微かに震えている。

「ロザ、リー……？」
「お姉ちゃん、あたしが、あたしが……っ」

ぽろりと大粒の涙が妹の目から零れ落ちて、滑らかな肌を転がってゆく。
たった一滴の煌めき。ロザリーの涙を見たのは、それが最後だった。

「あたしが、守るから。あたしが代わりに、殺してあげるから」

第六章《輪廻》：ある姉妹の咎（3）

姉が村の重役に呼び出された時、暇を持て余していたロザリーはその後をつけることにした。いけないことだというのは勿論わかっている。ただ姉を自分から取り上げる会合への腹いせと、純粋な好奇心からの行動だ。

抜け道を使って、姉と重役の入った部屋の裏に回り込む。壁に耳をぴったりと押し当てれば、秘め事に対する高揚感で胸が震えた。

――だがそれは、“その話”が始まるまでのことだ。

（え……？）

姉に、母を殺せと迫る重役達。高ぶった気分は一瞬にして霧散した。どうやら重役達にとってはウィルヘルムの人間も、姉も、ロザリーも手駒の一つに過ぎないらしい。

部屋に押し寄せた村人達がロアルを捕らえようとしているのがわかった時には、ロザリーは無我夢中でその場を飛び出していた。父が護身用に隠していた拳銃をひっ掴んで部屋に走る。ロアルに突きつけられた銃口を見た瞬間、頭の中が真っ白になった。

「――はじめまして」
「……だ、れ」
「私はルカって言うの。ルカ・ハーベント」
黒髪の少女が目の前で笑う。年の頃は姉と同じか、少し上。白い陶磁器のような肌と漆黒の瞳のコントラストが美しく、幻想的ですらあった。
突然現れた少女をロザリーはぼんやりと虚ろな瞳で眺める。重役数人と村人を撃ち殺し、姉の手を引いて逃げ回って何日になるのだろうか。心身ともに疲れ切っていた。何もわからない。
「エレクトラ、って名前の子を迎えに来たんだけど……どっちかしら」
ロヴったら下調べが適当だわ……と、よくわからないことを少女はぼやく。
「迎え……」
「そうよ。私達はルシファーっていう、犯罪シンジケートから来たの。戦力になる人材を探して――」
分別ある殺戮者を求めているルシファーの話は、ロザリーの耳を通り抜けていった。頭が鈍く重い。けれどルカの澄んだ声で、少しずつ意識がはっきりしてくる。
「……で、この村の人が面白い力を持ってるって聞いたの。だから、エレクトラって子を連れて行きたいのだけれど」
どっち？
再びルカに尋ねられたとき、ロザリーの中にははっきりとした確信

があった。この少女が、誰を探しているのかという確信。そしてルカと名乗る彼女が、どういう人物なのか――ロザリーは聡い子供だった。異能の姉と過ごしてきたことで育まれた勘と、自身に少なからず流れる血が教えてくれる。
彼女もまた、『普通ではない』のだと。

「銃の腕も良いみたいだし。一緒に来ない？」

ルカが欲しているのは姉の異能だ。同時に、戦闘力。
そう悟った時にはもう、ロザリーの中に一つの答えが芽生えていた。

「……あたし、が」
「うん？」
「あたしが、エレクトラ、です――」

ここ数日声を出すこともできていない、茫然自失状態の姉の手首から、そっと“鍵”を取り外した。これでロアルはただびとだ。

「……フルネームは？」
「ロザリー……。ロザリー・エレクトラ・ウィルヘルム」

その瞬間、ロザリーは“エルダ”という己の名の一部を捨てた。同じ“E”だから、慣れればいい。忘れればいい。自分に言い聞かせながら少女は、震える足を叱咤してルカに歩み寄る。

「何でもします」

名にも口にしていない身体は悲鳴を上げていた。それでもロザリーは、真っ直ぐにルカを見上げて言い放つ。揺るがない視線を受けて、黒髪の少女は微かに笑った。

「この銃でみんなを撃ったのも、あたしです。何でもします。人殺しでも、盗みでも、何でも！　だから……っ」
「……」
「だから、姉さんを助けて。連れて行くのは、あたしだけにして。お願い、何でもするから、お願いします……！」

一息に言い切った所が限界だった。がくん、と膝から崩れ落ちたロザリーをルカが柔らかく受け止める。ぐにゃぐにゃと歪んだ視界の中で唯一働いたのは嗅覚。ルカからは、裏の世界を生きる少女には似つかわしくない、優しい香りがした。

「貴女が選んだんだよ。覚悟は、あるのね？」
「……っ」

声が出せず必死に頷いた。姉を守ることができれば、それで良い。それだけで良い。

「……わかったわ」
「――――ルカ、でも、その子は」

背後から第三者の声が割って入る。金の髪に青い瞳の彼女は、後にミクと言う名であることがわかるが――この時のロザリーは知らないことだ。

「良いのよ、ミク。ロヴは“エレクトラ”を連れておいでって言ったのだから、どっちでも」
「……能力の有無は、確かに問われてないけど」
「銃の腕は確かだわ。〈ソルジャー〉としての価値は十分ある」

「……ホント、仕方ないわね」

やれやれ、というような声が頭上から降ってくる。しかし酷い眠気に襲われていたロザリーには、二人の会話の内容を把握することなど無理だった。

「安心して。あなたの大切なお姉さんは、“学園”で預かっておくわ」

ロザリーはルシファーに嘘を吐いたのだ。途方もない嘘を。
そしてルカとミクは騙されたフリをしている。ずっと、騙されてくれている。

＊　＊　＊

「ふぅん……？　ロヴ・ハーキンズが予知能力者を取り込もうとしてたなんて初耳だ。野郎はそういう事には興味がないと思ってたよ」

テーブルにもたれて頬杖をつくゾラは体勢はそのままに、興味深げな表情を浮かべた。その横で溜め息を吐いた恭吾は、反対に呆れ顔

だ。

「ロヴは安全な未来なんてほしがらないよ。大方、面白い能力者の存在を知って見てみたかっただけでしょ……現にロザリーがルシファー入りした後、予見をしろって言われたことは一度だってない――」

――っていうか、ロヴ自身もロザリーが“偽物”だと知った上で側に置いてたんだろうね。

続いた恭吾の言葉に一同は揃って首を縦に振る。

「ああ。あの男が気付かないはずないよ」

「かと言って、もう一度姉を捕まえに行く気もなかったんだろうね。幸いローザはちゃんと戦力になってたし……」

「……適当なんだな……いつものことだけど」

脱力感したように駿が呟くのを聞いて、全くだと千瀬も思う。

けれど同時に二人は、けして杜撰なだけではないロヴの性格を思い出していた。その狭い懐に入れた人間には優しい男だ。例え予見が必要になったとしてもロザリーの願いを聞き届け、その姉には一切関与しなかったに違いない。

奇しくも学園で接触してしまったのは、彼の意図するところではない――不可抗力というものである。

「……学園の、あの島の名前を知った時」

「――？」

逃げられない、逃げちゃいけないんだって、思ったんです。

ぽつりと零すロアルに皆の視線が集中する。百瀬だけは友人を気遣うように、俯いたその顔を覗き込んで問うた。

「島って――“エリニュエス＝グロリア”？」

学園で起きた一連の事件に巻き込まれる形になった百瀬達が、あの島について調べる過程で判明した名前。確認すればロアルは一つ頷く。

「“エリニュス”は神話の中で、エレクトラとその弟に母親殺害を呼びかけた“復讐の女神”だから」

「え、」

「忘れるな、って……言われてるような気がしたわ」

島の名が持つ意味について、さらりと説明して見せたあの時のロアル。やけに詳しいと思ったらそういうことだったのか――百瀬は手のひらを握りしめた。

「だから私、次にルシファーの人に会ったら――ローザに会うことができたら、逃げないって決めていたんです。この子の助けになりたいんです」

「――じゃあ、ロアル。具体的にはどうやって僕らの力になってくれるんだい？」

予見と言っても“オミナエシ”と対等に渡り合うのは無理だろう。はっきりと言い切るゾラの言葉を、ロアルも肯定する。

「はい。私はルシファーのトップに会ったことはありませんから、彼個人の未来を読むこともできません。だから――モモセの、」

「私？」

「モモセのとるべき行動を予見します。少し先の未来しか見えないけれど、オミナエシが接触してくるなら効果はあるかもしれません」

――なるほどね。
腕を組んで考え込んだゾラは、やがて納得したらしい。やってみる価値はある、と独りごちた。
真っ直ぐ前を向く姉に対し、すっかり俯いてしまったロザリーに駿が徐に手を伸ばす。

「わっ！？」

がっしりと銀色の頭を掴めば小さな叫び声が上がったが、駿はお構いなしにそのままわしわしとロザリーの髪を掻きまわした。猫っ毛が絡まって1．5倍に膨らむ様を見て、駿は悪びれずくつくつと笑う。

「い、痛い痛い～！　何するの馬鹿シュン！」
「馬鹿はお前だ。頭空っぽのくせに、難しい顔してんじゃねーよ」

抗議の声を上げるロザリーの頭を今度は軽く叩いて言い放つ駿の傍に、ゆっくりと千瀬も歩み寄った。駿の突飛な行動の、その意図などわかっている。

「……エレクトラでもエルダでも、どーでも良いよ」
「うん、ローザはローザだよね」

笑う二人に不意を突かれ、ロザリーの表情が微かに崩れた。

「でも、あたし……」
「良いんだよ。ルカだってロヴだって、お前の銃の腕を買ってる。問題ないだろう？」

お前のやったことは、裏切りなんかじゃない。駿が言い聞かせてようやくロザリーも小さく笑う。
ロザリーが何に負い目を感じているのかは、千瀬にも理解できた。もしルシファーに最初からロアルがいたら、その能力で少なからず変わった未来があっただろう。千瀬やロザリーには守れなかったものが、失ったものが、まだ掌に残っていた可能性もあるだろう。たとえばそれは、もういない誰かの命。

「良いか。余計なことは考えるな。チトセ、お前もだ」

ロヴを見つけることと、姉貴を守ることだけに集中しろ。強く言われて少女たちは頷いた。そう、たとえ未来が見えていたとしても――それを変える術があったかどうかはわからない。誰にもわからない。
そしてルシファーは……ロヴ・ハーキンズは、そんな不確定の未来に左右されるような男ではないのだ。今ある現実と確実な利益を、己の手で掴み取りに行く。

「絶対捕まえてやる。首洗って待ってろ、ハーキンズ」

強い意志の籠った――籠りすぎて呪詛に似た言葉が、ゾラの口から吐き出された。

第六章《輪廻》：ある姉妹の咎（3）（後書き）

ロザリーの話を出すのにここまでかかるとは思っていませんでした……。これで役者は揃ったので次回、ようやく全面対決に向かって動ける……かも？

第六章《輪廻》：鼎の軽重（1）

ぽつり、と声が落ちる。

「……ああ、ロヴ、本当にいないんだ」

予定より人数を増やしての帰還。どうやら“学園”が絡むと、事が大きくなる傾向があるらしい。これ以上何もなければ良いのだが――ぼんやりとそんな事を考えていた駿は、隣から聞こえた声にふと意識を浮上させた。

「……なんだ、いきなり」

「いや、ただの感想……なんか、今やっと実感したから」

マジでロヴ、いなくなっちゃったんだな。しみじみとルードが呟くので、どう反応を返すべきか悩んでしまう。

ルシファー本部――というよりは、未だに“日本支部”という感覚だが――に到着後、ゾラは百瀬を連れてどこかへ行ってしまった。それに習うかのように皆が思い思いの行動をとったため、今ここにいるのはルードと駿だけだ。団体行動とは何か、ここの構成員は学ぶべきである。

「急にどうした。まさかゾラが嘘を吐いたと思ってたのか」

「まさか。でも、信じきれなかったのはホント」

「……まぁ何だかんだ言ってアイツ、ひょっこり帰って来そうだもんな」

はは、と二人の少年は声を上げて笑う。首領の破天荒な行動には誰もが慣れっこで、数週間消えることなど日常茶飯事だったからだ。

「……でもさ、この建物に戻ってきてやっとわかった。全然違うんだもん。本当に今回は、マジなんだって。コレは流石に戻ってこないかもって思っちゃうよな、ゾラが慌てるのもわかる」
「建物……？　何か違うか？」

駿はくるりと周囲を見渡した。移転後、ようやく見慣れてきた日本の高級ビル。あくまでも外見のみだが、洋館風だった以前の本部とは違い都心のオフィス街に溶け込んでいる。

「え、全然違うじゃん」
「何が？」
「だから……あー、そっか」

言葉を途切れさせたルードはまじまじと駿を見つめ、それから一人納得した様子を見せた。

「ロヴは何もしてないように見えて……前の本部も此処も、いつもちゃんと“護って”た。建物中にロヴの“気配”があるっていうか……言葉にし辛いんだけど」
「……は？」
「ロヴは本部にいないときも、それだけはやってた。ルカ姉とはまた少し違うけど、外敵を探知するレーダーみたいな力を働かせてた。だからアイツは帰ってくるって、みんな……幹部連中はみんな、わかってたと思う」
「それってロヴの“能力”か？　“翻訳”と同じような……」
「たぶん。今はね、それが全く無い。ロヴの力で包まれてたはずのこの建物が、剥き出しになってる」
「……俺には、わかんねーけどな」

ルードは駿を馬鹿にすることも、非難することもなかった。そうみたいだね、と感慨深げに呟く。

「俺にとっては当たり前のことだったんだけど。みんながわかってたわけじゃ無いのかァ」

「少なくとも〈ソルジャー〉はわかってないと思うぜ。……どんな気分だ？」

興味を抱いて駿が尋ねれば、ルードは微かにその表情を歪めた。年上であろうと上司であろうと変わらず、いつも生意気な態度をとる彼らしからぬ顔。驚く駿の前で、少年の口が動く。

「……こわい、よ」

「怖い？」

「うん」

ルードは天井を仰ぎ見た。つられて見上げた駿の目には、規則正しく敷き詰められた天板だけが見える。もしかしたらルードやその他の異能者の目には、何か他のものが映っているのかもしれなかった。

「ロヴの加護にあった本部が生身になってる。まるで身包み剥がされたみたいに寒くて、心許ない。アイツは馬鹿だし、ちゃらんぽらんだし、いつもどっか抜けてるけど……俺達の、ボスなんだ」

「……、」

「ルシファーは、ロヴがいないと駄目なんだ。きっとみんな気付くよ。今は、まだわからなくても」

駿はルードの言葉を反芻しながら窓のほうに目をやった。外ではスーツに身を包んだ構成員が、通常業務を続けている。そこには何の変化も見受けられなかった。

（……下の奴らは、ロヴの不在を知らないのか）

ルシファーは滞りなく機能していた。常からフラフラと出かけることの多い首領であるから、それを欠いた状態でも問題はないのだ。

――だがそれはあくまでも、表面上の話だった。ルードの言う通りだと駿が気付くのは、もう少し後のことになる。

＊＊＊

――――バンッ！

けたたましい音を立てて壁が悲鳴を上げる。百瀬を見るなり勢い良く伸ばされた手は、彼女の頬をギリギリ掠めて壁を叩いた。遅れてはらりと何本か、切れてしまった黒髪が舞い落ちる。

攻撃を受けたらしい。ルシファー本部に通されて早々の出来事に、百瀬は唖然とした。

「――――誰だ、」

低く低く問う相手の髪はロアルに似た銀色をしているが、どちらかと言えば白にも近い。緩やかなうねりを持つ頭髪の合間から、猛禽類のような金の瞳が覗いていた。

「離れろ、エヴィル」

「……ゾラ？」

エヴィルと呼ばれた青年と壁の間に挟まれ、百瀬は完全に動けなくなっている。青年は見慣れぬ人間を侵入者だと認識し、今にも“排除”しようとしていた。僅かに慌てたゾラが声をかけて初めてその存在に気付いたように、緩慢な動作で顔を上げる。

「この女は……」

「黒沼百瀬だよ、千瀬の姉の。」

「チトセの……？」

百瀬を睨みつけていた三白眼がゆるりと瞬きをくり返して、ふとその鋭さを和らげた。ああ、とエヴィルが細く息を漏らす。

「……似ている、な」

「気付いていなかったのか？　君らしくもない」

返事をしないエヴィルに小さく舌打ちして、ゾラは独りごちる。相当キてるな、と。

「オミナエシを――それからハーキンズの馬鹿野郎を捕まえるために連れて来たんだ。面通ししようと思ったんだけど……やめた方が良さそうだな」

今の君は仲間さえ殺してしまいそうだ。ゾラがそう呟くと同時に、ドアを叩く小さな音が聞こえた。

ゾラさーん、と己を呼ばう声に返事をすれば、遅れていた千瀬が入ってくる。その姿が完全に見える頃には、エヴィルは百瀬から身体を離していた。

「車、ちゃんと頼んできましたよ。デューイ・マクスウェルの直属から好きなだけ使って良いって許可が……何台貰いますか？」

ゾラは少しだけ休んだ後、千瀬と百瀬を連れて黒沼本家に向かうつもりだった。オミナエシかロヴ、どちらと接触するにしろ、相手がこちらに興味を持ってくれるのを待つほかない。黒沼家はキースポットだ。可能性は、僅かながらあった。

「乗用車と護送専用車、どっちが良いって聞かれたんですけど、……？」

ゾラから命じられたお使いをこなした千瀬は、場に流れる妙な空気を察して口を噤んだ。疑問に思って当たりを見回せば、追い詰められたように壁際に立つ姉の姿。その背後、頑丈な壁が僅かに凹んでいるような気がする。

「あの……？」

やれやれ、と首を竦めたゾラに対し、不自然に視線を反らしたのはエヴィルだ。彼がそんな仕草をすることは珍しい――と思うと同時に、千瀬は気付いた。実はとてつもなく危なかったのだ、と。

（姉さんが！）

殺されなくて良かった。エヴィルならやりかねない……笑えないことを考える千瀬は、すっかり感覚が麻痺している。
それと同時に、エヴィルの様子にも違和感を感じた。彼が本気なら百瀬の命など、（たとえゾラがいても）とうに散っていたに違いない。

「……悪かった」

見つめられることに耐えられなかったのか、エヴィルが謝罪を口にしたので千瀬はもっと驚いた。どうやらそれは百瀬にではなく、千瀬宛ての言葉らしいが。
エヴィルは目を伏せて長く息を吐き、背を向ける。そうして部屋に備え付けられたソファーに無言で腰を下ろした。その動作がやけに緩やかで——彼にしては、鈍い。

「エヴィル……寝てないの？」

思ったままを口にすると、エヴィルは驚いたように目を瞬いた。

「俺の身体は……保つんだ、寝なくても」
「ってことは、寝てないんですよね」
「……。」

返答に困ったように眉を寄せるエヴィルは、いつもより遥かに人間味が増していた——というと妙な心地がするが、実際彼に、いつもの人形めいた冷静さは残っていない。
たとえ眠りを必要としない身体でも（そんなものがあるとは俄かに信じがたいが）、起き続けていれば精神は疲弊し、摩耗する。
学園まではクルーザーで丸一昼夜かかる。実際百瀬とロアルを連れて帰るまでには往復二日、学園内で一日を消費した。ロヴが正確に

はいついなくなったのか千瀬はしらないが――エヴィルは三日以上、満足に休みを取っていないのだろう。

「他の幹部連中はどうした」

ゾラに問われ、エヴィルは微かに目を細めた。

「お前からロヴを見失ったという連絡が来て――ミクはずっと外を探している。アイツの気配が残ってないか見てるんだ」

「……僕が見つけられないのに、」

「本人もわかってる。……ジェミニカは下の連中にロヴの不在を気取られないよう、《テトラコマンダー》への指示にあたっている。キョーゴとルードは……、ああ、お前達と一緒だったな」

それじゃあ、と。一向に挙がらない一人の名に、じれたようにゾラは口を開く。

「ルカはどうしてる」

「……ルカ、は」

くしゃり、額に手を当てたエヴィルが己の髪を掴む、その仕草は何かに耐えているようだった。ぐっと力を込めて閉じられた瞳が再び見えた時、千瀬の胸に過ぎったのは、紛れもない“不安”。あのエヴィルが何故か、寄る辺をなくした子供のように見えたのだ。

「あいつは、冷静だ。怖いくらいに」

「……冗談だろ、」

ひくりとゾラは口角をひきつらせた。それこそ悪夢みたいだと嘲う彼女の意図が、千瀬にはわからない。

「ロヴが消えてすぐに日本を出た。何をしに行ったと思う――？」
「？」
「――“オメガ”に会いに行ったんだ」
聞いた途端、さっとゾラの顔色が変わった。彼女を取り巻く飄々とした雰囲気が一気に収束し、代わりに膨れ上がったのは殺気。
「何だって……？」
「……、」
「エヴィル・ブルータス……お前、止めなかったのか。何も言わずにルカを見送ったのか！？」
ふざけるな！！
激昂したゾラが凄まじい勢いでエヴィルの胸ぐらに手をかける。ぽかんとそれを眺めていた黒沼姉妹は――二人揃ってどこか抜けている――やっと事態の深刻さに気付いて慌てた。
「ち、チトセ……っ、これってまずいんじゃないの？　オメガって何？」
「わかんない、ああぁ、待って待ってゾラさん！！」
千瀬が割って入ろうとするも、その圧倒的な空気に近寄ることすら躊躇われる。
エヴィルは己の襟を掴みあげるゾラの掌に視線を落とすと、次の瞬間その手首を鷲掴みにした。ミシミシと骨が音を立て、その痛みにゾラが顔をしかめる。
「このまま腕を潰してやろうか」
「……その前に……っ、僕がその首、吹っ飛ばしてやる！」

不穏きわまりないやり取りに千瀬は眩暈を覚えた。二人とも本気だ。

「俺が――俺が何も思わずにルカを行かせたと、何も感じなかったと、」

「……っ」

「本気でそう思うのか……！」

「エヴィル、駄目！」

ゾラの手首が今にも折られてしまいそうで思わず千瀬は声を上げた。こういう時はどうすれば良いんだっけ？　考えてみても無駄だと言うことはすぐにわかった。エヴィルを止められるのはこの世でロヴかルカぐらいのものだ。

刹那、バン！　と激しい音を立てて外から部屋の戸が開かれる。

「……そこまでだ、エヴィー」

そこまでだ。

低く、しかし柔らかな声が聞こえた。開かれた扉――蝶番が外れている――を背を屈めながら潜り、入室を果たしたのは巨大な男。

――言いかえれば、エヴィルを止められる可能性のある最後の一人だった。

「レックス……」

「アレキサンダー・ウォール？　どうしてここに」

乱入者に毒気を抜かれたエヴィルがゆっくりとゾラの腕を解放した。腫れ上がった手首に舌打ちして、ゾラはそれをポケットに突っ込んで隠す。

「キョーゴに頼まれたんだ。厄介なことになりそうな予感がするから、止めろってな」

「キョーゴ？」

恭吾はルシファーに戻ってすぐ、現状把握をしたいと言って別行動となった。それ以来彼の姿を見ていない千瀬がきょとんとして訪ねれば、ああ、とレックスは笑う。

「酷い顔してる奴がいたって、恭吾にぶっ飛ばされた」

「ぶっ……？　なに、殴られたの？？」

「“飛ばされた”のさ」

「？？？」

疑問符をいっぱいに浮かべた千瀬の頭をポンポンと叩いて、レック

スはエヴィルに目を向ける。

「どうしたよ、エヴィル。お前らしくないな。キョーゴに心配されるくらいお前さんは、余裕のない顔をしてるぞ」

「……わかって、る」

エヴィルを纏う空気が漸く和らいだのを感じ、千瀬はほっと息を吐いた。幼少期から付き合っているだけあって、流石にレックスは手慣れている。恭吾が彼をここに寄越したことにも納得だ（飛ぶ云々の話は結局はぐらかされたままだった）。

「お前さんがしっかりせにゃ、いざという時に困る。ルカは――」

ふとレックスは遠くに目をやって、そこで言葉を切った。言いあぐねているように何度か口を開きかけ、そこから息だけを吐く。

「――ルカはもう、時間の問題かもしれねぇからなぁ」

漸くレックスの口から落とされた言葉に千瀬は眉を寄せる。どう解釈しても、良い意味には聞こえなかった。

「でもまだロヴは無事だ。お前自身がそれを一番良くわかってるだろ、なぁ、エヴィー」

「……ああ、」

宥めるようにレックスが手を伸ばす。エヴィルは微かに眉根を寄せただけで、後はされるがままになっていた。

レックスと並べば誰もが常よりずっと小さく見える。大きな手で背を撫でられているエヴィルを見て、千瀬はゆるゆると思考を働かせた。

（……ロヴが、いない）

個性的を通り越した、危険物の集まりであるこの一団を統括できる唯一の人物がいない。それがどんなに大きなことかは、空っぽに等しい千瀬の頭にだってわかることだ。

ルシファーの幹部たちはロヴに忠誠を誓い、彼の意志だけに従う。表面上、今のルシファーは裏社会に置いて無敵だ。けれど本当は彼がいないだけで、こんなに脆い。

（あたしたちのボスが。みんなの“絶対”が）

それは崩されることのない不文律だ。ロヴという存在は絶対で、それは千瀬にとっても同じこと。

だがエヴィルやルカ、ミク、そしてレックス――ルシファー創設より前から彼と共に生きた者にとっては、それを越える意味を持っている。依存という名の、絶対。ロヴの存在は、彼らの全てなのだから。

「……ロヴは生きてるし、少なくともまだぴんぴんしている。“あれ”が作動していないから、確かだ」

「そうだな。……エヴィル、お前のせいじゃない」

あいつが居なくなるのはいつものことだろう、レックスが笑って漸くエヴィルは頭が冷えてきたらしい。彼らしい無表情に戻り――戻る前の方が人間味に溢れていて良いのに、とこっそり千瀬は思った――ゆっくりと息を吐く。

そうして思い出したようにゾラを見た。

「……お前、手首は」

「はっ、余計なお世話だよ」

もう治った、言いながらゾラは手をひらひらと振ってみせる。不思議なことに、あれだけ酷かった腫れはもうひいていた。

「そうか――お前に何かあると、ルカがうるさい」

「自分でやったくせによく言うよ。僕は謝らないからな！」

「ああ」

「……でも、」

珍しく弱っている君の面白い顔免じて、ルカには黙っていてあげるよ。

ゾラがくすくすと笑うと、エヴィルの機嫌は一気に急降下したらしい。

「……それこそ余計なお世話、だ」

「はは、」

「ところで、」

レックスがのんびりと、しかし絶妙のタイミングで口をひらいたのは、おそらくエヴィルの気を逸らすためだろう。見事にそれは成功し、二人が大男を仰ぎ見る

「あいつは本当に“オミナエシ”の所に行ったんだろうな？」

これで単にいつもの“放浪”だったら笑えるんだけどな。冗談のように呟くレックスのそれは最後の確認で、同時に願望を孕んでいた。

「……そうなら、どんなに良かったか」

エヴィルがゆっくりと息を吐く。縋りたい気持ちを一緒に吐き出して、青年はすっと表情を引き締めた。

「前後の状況から見ても間違いない」

「そうか。ま、これでひょっこりロヴが帰ってきたら、俺達ァ心配損だもんなぁ。俺、殴っちまうかも」

首領に対しての発言とは到底思えないが、その場にいた誰もがレックスに同意した。

そうであってほしかった。

「……その時は、俺にやらせてくれ」

微かに笑ったエヴィルの頭をレックスは二度、軽く叩く。

ロヴに万が一の事があった場合、最初に影響が出るのはエヴィルだ。

そしてルカは、緩やかに破滅へと向かってゆく。

二人の〈ハングマン〉。ロヴに寄り添う二本の柱は、彼無しでは存在意義を失ってしまう。きっともう、事態は転がり始めているのだ。

（俺は、どうすればいい）

けれどレックスには、それを止める術がなかった。

ずっと側で見てきたのに、共に歩んできたのに、いつも絶対的に力が足りなかった。己がたたびとであることを、これほど歯痒く思ったことはない。

（お前なら、どうしただろうなァ……サンドラ、）

今はもういない同朋に問いかけて、レックスはその手のひらを握り締めた。

＊　＊　＊

ぱちり。

真っ暗闇の中で少女は目を開けた。この場所は恒常的に光を失っているが、辺りを見回すことくらい慣れた瞳には造作もないことだ。

ぎしり。

寝台から身体を起こした少女はひとつ伸びをすると、迷わず扉から外に出た。続く廊下も同じように暗いが、この闇は少女の為のものである。

「……そうか、ロヴが消えたのか」

少女は己の白い髪に指を通し、悪戯に絡めながら独りごちる。
寝汚い自分が自然と目覚めたのだから、何かおかしいと思ったのだ。
きっと、近付いてくる“彼女”の気配を眠りの淵で感じ取った為だろう。

「……良いよ、ルカ」

少女はゆっくりと足を進めた。裸足の踵が廊下を微かに擦れば、こぽ、と水音が響く。
こぽ、こぽ……ぽちゃん。少女を取り巻く水音は彼女を追いかけているようであり、或いは少女自身から聞こえるのかもしれなかった。

「その時は、ちゃんと私が働いてやろう……」

それが私の役目だから、と自身は呟く。

「私の母であり、私自身でもあるお前の為に――そうだろう、ルカ」

貴女だけの為に。
そう言って笑う白い少女の瞳は血を湛えたかのような赤だった。

第六章《輪廻》：Ｐａｔｒｉｎｉａ　ｓｃａｂｉｏｓａｅｆｏｌｉａ（１）（前

なんてこったい！２００話突破です。読んでくださる方、本当にありがとうございます。あと３０話くらいで終わるかな、どうかな…
…最後までお付き合いいただけたら幸せです。

第六章《輪廻》：Patrinia scabiosaefolia（1）

『　約束、を　』

嗚呼、これは夢だ。何度も見た夢だ。
いつの間にか自分は眠ってしまっているらしい、と千瀬は思う。車に乗っていたはずだから、この光景はおかしい。一面に広がる黄色の花畑。絨毯のようにゆらゆら揺れる、この花の名にはもう気付いている。遠く聳え立つ山の裾は、美しい藤色だ。

（……だれ？）

夢だとわかる夢を、明晰夢と言うらしい。そんなことをぼんやり考えながら、心の中で少女は問う。声に出さなくたって相手には伝わるだろう、夢なのだから。

『　約束を、守って　』

声の主はいつも同じことを言う。千瀬が忘れてしまった、過去に見たたくさんの夢の中で繰り返す。
忘れているのに繰り返しているとわかるのは、やはり夢だからだろうか。わからない。
わからない。

（どこに、いるの。教えて）

（わからないよ）

（約束って、何）

教えてほしい。どうすればいいのか。
教えてほしい。声の主が、自分に何を求めているのか。
千瀬はいつも見ているだけで動けない。この夢だってそうだ。流れる景色を、声を、只管に脳裏へ刻むだけ。のんびり屋の自分が事態を静観していたせいで、大切な人を巻き込んだ。たくさん巻き込んだ。そして、失おうとしているのかもしれない。

「あなたに、会いたいんです」

ついに千瀬は唇を動かした。夢の中でそう、はっきりと口にしたのは初めてのことだった。
千瀬はもう、全てを受け入れるだけの子供ではない。

『――――――……、』

ふと空気が揺らいだ。一方的に見せられるだけだったはずの夢が、こちらに呼応する。
声が聞こえた。何かを言っている。何か、これまでとは違う、何か重大な――。

『よかろう』

お前を　待っていてやろう

だから、

だから――――――

＊＊＊

かくん。

深い闇の中へ墜落する最中で、急に意識が浮上した。深海の中をたゆたう身体が誰かに腕を掴まれて、思い切り上へと引き上げられる感覚。言いようのない浮遊感にくらくらしながら目を開けると、じっとこちらを見つめている眼に気が付いた。黒目がちの美しい瞳。それが動揺しているように、微かに揺れている。

「……姉さん？」

どうしたの。こちらを凝視する姉の顔がどこか青白く見えて、千瀬は思わず声をかけた。寝起きで喉が渇く。

百瀬はしばし硬直していたが、漸く妹から視線をそらした。己を落ち着かせるように息を吐いて、車のシートにゆっくりと身体を預け直す。

……車。そう、車だ。黒沼姉妹は今、車の後部座席に並んで座っている。

“学園”から帰還した先の、ルシファーに主立った変化は見られなかった。しかしそれはあくまでも表面上の話で、上層部は消えた首領の行方を掴もうと必死になっている。

今、一部の事情を知る組織員のみで捜索部隊を構成している最中らしい。千瀬に車を手配してくれた青年、デューイ・マクスウェルはその一員になると言っていた。七見月葉の直属でＥＰＰＣの事を知

っており、ルカとも接触のある彼が選ばれたのは自然なことなのだろう。

『ボスは俺達が必ず見つけます。だから、』

チトセちゃんは心配しなくて良いっすよ。

そう笑ったデューイの表情が微かに陰っていたことに、聡い千瀬は気付いていた。けれど少女には、やらねばならないことがあるから——だから、黙って頷いた。

「……夢を、見て」

数刻前のやり取りを思い出していると、百瀬がぽつりと呟く。車を運転しているゾラには聞かせたくないのだろう。

「しばらく見てなかった、あの夢だったから驚いたの」

「あの夢って……まさか、」

姉の言わんとしていることに漸く気付き、千瀬は愕然とする。つい先程まで千瀬自身が沈んでいた、黄色花の夢。

「ただ、前に見たものと少し違って……チトセ、が」

「あたし？」

そこで百瀬は何かを言いよどみ、口を噤んだ。自分に良く似た横顔が頑なに一点を見据えている。それをじっと見つめ、千瀬は言葉の続きを促した。

「チトセが、誰かと喋っていたわ。だから驚いて——女、だった。あれはたぶん、」

黄金に輝く小花が千瀬の頭を過ぎる。百瀬が何を言いたいのかは、もう知っていた。あえて口に出して、これ以上傷つく必要はないだろう。そう考えて、少女は姉の言葉をやんわりと遮る。

「……うん……不思議だね。姉さんも、同じ夢を見たなんて」
「同じって……そんな、」
「――同調。共鳴。君達なら起こり得るだろう。偶然か必然かと問うならば、間違いなく後者だ」

突如第三者の声が割って入り、姉妹は目を見開いた。前方に目をやればミラー越しに、細められたゾラの眼がこちらを覗いている。この情報屋には、二人の会話など最初から聞こえていたのだろう。

「二人とも、よく眠っていたね。もう着くよ」
「あ、はい……すいません、寝ちゃって」
「構わないよ。言っただろう、君達の場合は必然だって……ま、彼の場合は素で寝てるみたいだから――そろそろ起こそうかな」

言うなりゾラは運転を続けたまま、左足を隣の席に向けてぐんと突き出した。刹那、ドスッ！という鈍い音が響く。

「うぐっ！？……げほッ」

助手席でうたた寝していた駿が低く呻いて跳ね起きた。余程の勢いがあったのか、そのまま何度か咳き込む。

「ゾ……ラ……、てめぇ」
「無防備。危機感の欠如。ルシファーの戦闘員にあるまじき醜態だよ、君。何のために来たんだい」

加害者に非難の視線を向けた駿は、しかしそれ以上は何も言わなかった。薄く涙を浮かべながら、情報屋に蹴られた脇腹をさする。

「君がどうしてもって言うから連れてきてやったんだ。足手纏いになるようなら、この場で放り捨てるからな。どうする」

「――っ、ならねぇよ。このまま行くに決まってる」

今、千瀬を乗せた車はまっすぐ上水流町に向かっている。黒沼の家がある、あの場所だ。

前回との一番の違いは百瀬が同行していることだ。そしてゾラと駿がいる。ごくごく一般的な乗用車に４人。異色の組み合わせではあるが、端から見ればそこまでおかしくもないだろう。

「アンタだけには任せられない。……アンタは、こいつらを見殺しにしても良いと思ってる」

「……はッ。生意気な餓鬼だ」

低く小さく呟いた駿とゾラの会話は、後部座席の二人には聞こえていない。

ゾラは小馬鹿にするような笑みを浮かべ、ちらりと駿に目をやった。先刻まで寝ぼけていたはずの少年は、微かに殺気を纏っている。

――ルシファーの一員ではないゾラを、けして信じていない眼だ。あくまでも情報屋は協力者で、商売相手。仲間ではない。

（……ちゃんとわかってるじゃないか。それで良い）

ゾラは常識人だが、仕事のためには冷徹にも残忍にもなる。何があっても遂行する。それがポリシーだ。

今ゾラがルシファーに協力しその首領を追っているのは、彼との契

約が――大変不本意ながら――完遂できていないから。それだけだ。黒沼姉妹はゾラにとって駒の一つにすぎない。ターゲットを誘き出せれば後はどうなろうとも構わない、というのが本音だった。駿はそれに気付いていて、自分が守る側に立つことを選んだのだろう。

（生意気だ。悪くは、ないけど）

ウィルヘルム姉妹は本部で待たせてある。姉のロアルには戦う術がないし、ロザリーは姉にばかり気をやって弱くなるからだ。

ロアルが精度の高い“予見”をするには、目標物にまつわる何かがあった方が良い。ゾラは黒沼家に行ってひとまず、適当に持ち帰れるものを見繕うつもりだった。

――百瀬を連れて行けば、或いはそれ以上の収穫があるかもしれないと、心の中で思いながら。

「――さ、到着だ」

静かなエンジン音を響かせて、黒沼家の門扉前に車が滑り込む。一庶民の家とは到底思えない、格式張った門構え。家というよりは武家屋敷のような印象を受ける、一番大きな建物が本家。近隣の家とは全て血縁関係にあったというのだから驚愕だ。

そして百瀬と千瀬はこの、由緒ある本家の人間である――だった、と言うのが正しい。

「……やっぱ、でかいなァ」

ゾラに促されて車を降りた駿は、聳え立つ家々を見て息を吐いた。
ここに来たのは二度目だが、やはり驚きは拭えない。
この家にずっと囚われていたのであれば、千瀬のような世間知らずができるのも当たり前のような気がした。
黒沼の敷地は広大で、しかし、その世界はあまりにも狭い。

「車は目立つから、裏に隠してくるよ。先に中に入ってるかい？」
「え、良いんですか？」
「誰もいないはずの家の門前で待たせて、通行人に見られたら面倒だからね」

ゾラの言葉に駿は同意を示す。前回そうして、まんまと一般人に見られてしまったことを思い出したからだ。あれはあれで成果があったのだが、あくまでも結果論にすぎない。

「……僕に見られたくないものがあったら、先に隠しておくと良い」

一瞬、百瀬が虚を突かれたような顔をした。
ゾラはひらりと手を振り、再び車に乗り込む。裏手の竹林にでも置きに行くのだろう。

「……姉さん？」
「……、行こうか。久しぶりに入るね、家の中」

にこりと笑う百瀬が何を考えたのか、千瀬にはわからない。

第六章《輪廻》：Patrinia scabiosaefolia（2）

慣れた様子で家の中へと足を進める百瀬の後ろを、駿と千瀬が着いて歩く。古びた木造家屋は三人の体重を受けとめながら、ぎしぎしと床を鳴らした。

千瀬は落ち着きなくきょろきょろと辺りを見回し、視界に少しでも見覚えのあるものはないか確認する。しかしいっそ清々しいまでの忘却の中では、記憶に残っているものは何一つ存在しなかった。

（……変なの。本当にあたし、ここに住んでたのかな？）

道場へ続いているらしい広い渡り廊下も、立派な床の間のある和室も、何一つわからない。

「……見覚え、ないのか」

「うん」

千瀬の様子に気付いていたらしい。小さく駿に問われたので、素直に肯定した。

「広い家だな」

「そうだね」

「お前、やっぱお嬢様？　みたいな感じだったのかな」

「違うと思うけど……箱入り、といえばそうだったのかも？」

「……あらゆる意味で、な」

一方駿は気軽な風を装って会話しながら、周囲に神経を張り巡らせている。何も言わずに先導を続ける百瀬の様子も気掛かりだったが、何よりこの家は何だか“よくない”。

無人になってから丸三年以上が経過しているはずの黒沼家からは、微かな腐臭と鉄錆の匂いがしていた。原因は分かっている。業者の手が入ってはいるのだろうが、床や壁のあちこちに黒い染みができていた。何か、なんて聞くまでもないだろう——血の跡だ。恐らくは千瀬が、その手で家族を手に掛けた時のもの。

すっかり忘れている本人は良いとして、百瀬には辛いものであるに違いない。しかし目の前の少女は凛と背筋を伸ばし、ただどこかへと足を進めていた。

（……そういえば、俺とこの女、同い年なのか）

以前千瀬やロザリーから聞いた情報を思い出し、駿は少しだけ複雑な気分になる。自分もこの姉妹も、ほんの少しの狂いがあれば、今とは違った人生を送っていただろうに。

そこまで考えて、いや、と駿は首を横に振った。この姉妹は“別格”だ。黒沼と、オミナエシ。その繋がりが本当なら、二人はこの運命を生まれながらに背負っていることになる。どう足掻いたところで同じ道を歩むことになっていた——絶対の、事象だ。

駿は脳裏に、オミナエシとやらの存在を思い描く。姉妹に重たい枷を嵌め続ける者。東洋の魔女。何故黒沼を滅ぼすのか、それほどまでに黒沼に固執する理由が知りたかった。

「で、今はどこに向かってるんだ？」

もう結構歩いてるぜ、と先頭に向かって声をかければ、百瀬は歩みを止めぬまま、軽く首だけで振り返った。

「父の書斎に行こうと思ってるの。この家の一番奥」

「何かあるのか？」

「……探し物を、したくて」

探し物？　鸚鵡返しに問いかける駿と千瀬は息がぴったりである。
それに少しだけ笑ってから、百瀬は小さく頷いた。

「家に……黒沼に、代々伝わってる物を探したくて。伝達の歴史が長ければ長いほど、何かわかるんじゃないかって思うの。……ゾラさんも、きっとそれが欲しいんだわ」
「ああ――なるほどな」

黒沼がもし本当にオミナエシの支配下にあるのならば、そこに脈々と受け継がれるものは「黒沼」でなく「オミナエシ」の意思だ。古い歴史を持つものほど、根幹の部分に触れている可能性はある。隠したければそうしても良いとゾラは言った。もし百瀬が実際にそうしても、彼女は責めたりしないだろう。しかし百瀬はもう意思を固めていた。ここまで多くの人を巻き込んで、自分だけ逃げるわけにはいけない。逃げてもきっと、逃げ切れない。ならば、せめて――――。

「その“物”に何か、心当たりでも？」
「――【黒縄】の術書なら、もしかして、と思って」

黒縄（こくじょう）。その名を聞いて、駿は僅かに眉を寄せる。それは千瀬の持つ居合の技名だ。黒沼家に代々伝わり、正当な継承者だけに習得が許される奥義であるという。
その威力は駿自身の目でも確認していた。モーションが速過ぎて、型の美しさを見せるものなどではないことが容易に知れる――人を殺すためだけに存在するような技。

「そういえばお前ら何か……変な呪文みたいなの唱えてたよな」
「あれは【黒縄】の術式なんです。居合いの前に“言わなければな

らない”とされている――意味なんて、ないと思ってた。精神統一の一環程度なのかと……でも」

「オミナエシに、“言わされていた”のかもしれない？」

百瀬は無言で肯定の意を示す。その術式が無意味な言葉の羅列でないとしたら、見てみる価値は十分にあった。黒沼家に受け継がれる呪文。まるで、「忘れるな」と言っているかのような。

そのまましばし歩を進め、漸く百瀬はある部屋の前で立ち止まった。目的の書斎に辿り着いたらしい。

「ここか」

「そう。……子供が入るのは禁じられてたから、緊張するわ」

襖付きの和室ばかりだった家の中で、そこだけは木の引き戸が着いていた。鍵がかかっていないことを確認し、百瀬がゆっくりと戸をスライドさせる。

しかし部屋の中が見えた瞬間、三人はぎょっと身体を強張らせた。

「――っ、な、」

長い間手入れされていないと一目でわかる、埃を被った本棚。塵の積もった沢山の書物。そして、古いどっしりとした机が部屋の中央に据えられている。その上に行儀悪く腰かけた、人――――ひと、だ。

「誰だ、テメェ……」

低く唸った駿は既に拳銃を構えている。今にも発砲しそうな殺気を向けられたにも関らず、人影はのんびりとこちらを向いた。片手で煙管を支えており、ぷか、と唇から紫煙を吐き出す。

「――ああ、お前様。来たんだね」

その声を聞いて千瀬は瞠目した。どこかで聞き覚えのある――老婆の、声だった。

＊＊＊

「キョーゴ」

名を呼ばれて振り返れば、腕を組んだ巨漢がこちらを見下ろしている。……近い。ここまで接近されていたことに気付かなかった自分を嗤うように首を竦めてから、青年は片手を上げた。

「何だい、レックス。――エヴィルはどうだった」

数刻前に対面した銀髪の男は、鉄仮面のような平常時とは随分異なる顔をしていた。ピリピリと殺気立って、触れた相手をそれだけで切り裂いてしまいそうなくらい。珍しいものを見たものだと、のんびり恭吾は回想する。

「ゾラが片腕をやられたが、黒髪の嬢ちゃんは無事だった。……あ

れが、チィの姉ちゃんか」
「うん、良く似てるよね。……そうか、情報屋は怪我したわけ。ざまぁ見ろ」
「もう治ってたがな」

チッと小さく舌打ちした恭吾をレックスが窘めた。

「お前、ゾラのことが嫌いなのか？」
「別に。気に食わないだけだよ」
「そうかい……」
「ま、モモセが無事なら君を送った甲斐があったよ。せっかく連れてきたのに、使う前に殺されちゃ話にならないからね」
「そのことだが、」

くすりと笑う青年の顔を、レックスはずいと覗きこんだ。突然の急接近に恭吾が微かにたじろぐ。

「な、何……近いんだけど」
「キョーゴ。お前、あんまり“アレ”はやるな。俺ァ、お前達みたいな奴のことはわかんねーが……負荷がかかってるんだろう」
「アレって……ああ、アンタを“飛ばした”こと？」

心配げなレックスを余所に、「何だそんなことか」と恭吾は呟いた。ちょうどエヴィルに会った後の話だ。自分にはやらなければならないことがあったので、エヴィルの暴走を止める余裕はない。そこで、一番効果的な相手を送り込んだ。恭吾がやったのはそれだけである。

「確かに疲れるよ、ちょっとだけね。俺の場合、自分が移動するより別のものを“飛ばす”ほうが大変に感じる。でも、そんなに差はないよ」

恭吾は異能の持ち主である。彼を知るものなら無論そのことも知っているだろう。そして市原恭吾という人間が、“突然現れたり消えたり”することも。

恭吾は空間の転移に秀でていた。謂わば、瞬間移動のようなものだ。一概にそうとは言い切れない様々な制約があるようだが、レックスは知らない。わかっているのは恭吾の場合、己のみでなく、他者の空間転移も可能だということくらいだ。

「だがお前さん……顔色が悪いぞ」

「気のせいだよ」

エヴィルがゾラと一触即発の空気を迎えていた時、恭吾は文字通りレックスを“ぶっ飛ばした”。本来彼がいた場所からエヴィルの部屋まで、無理やりレックスを移動させたのだ。

「ねぇ、アレキサンダー」

「……その呼び方はやめろ」

「何でも良いだろう、呼び名なんて。ねぇ、何を怖がってるんだい？」

今度はレックスがたじろぐ番だった。鋭く細められた青年の目に射抜かれるような心地がして、思わず一歩退きそうになる。

見透かされて、いるのか。悟ってレックスは息を吐く。恭吾は頭の回転が速いし、本当は誰より敏い。空気を読まない言動ばかりするのは単なるポーズだと、男は知っていた。

「能力者（おまえたち）は……、身を削っているように、見える。力を使う度に」

「ま、そうだろうね。能力は無尽蔵じゃない。俺たちだって一応、生物学上はホモ・サピエンスだよ。体力にも限界があるし、寿命だ

ってある」
「そんな壮大な話じゃねーんだが……とにかく最近お前らを見てると、早死にするんじゃないかって気がしてな。命をどんどん使ってるような、そんな気がして」
不安になる。その言葉を何とかレックスは飲み込んだが、相手には伝わったのだろう。はあ、と恭吾は深く息を吐いた。しかしそれはけして、呆れた様な音ではない。
「そんなにすぐ死んだりしないよ。少なくとも世の能力者ってのはさ、自分の力を呼吸に等しいものだと思ってるから」
「……」
「自分の力に耐えきれない奴は、生まれてきてもすぐ死ぬよ。ここまで生き残ってたら普通、平気」
「そういうもんなのか」
「力を使う度に消耗したら、ロヴなんて即死だよ？　ルカだってあんなに馬鹿でかいモノを飼ってるけど――ああ、でも」
ルカの場合は常に、綱渡りだよね。言ってから恭吾はようやく合点がいったらしい。なるほどね、と独りごちた。
「アンタは、ルカがタイトロープから落っこちることを心配してるのか。綱を支えていたロヴがいないから」
「……ルカは、自分から落ちるようなやつじゃねぇ」
「そうだね。でも、自分から綱を切る可能性はあるかもね。他ならぬロヴのためなら――そうだろう？」
「――ああ」
それっきり互いに口を噤んでしまったため、不自然な沈黙が流れる。レックスの懸念は恭吾にも良くわかっていた。エヴィルが荒れてい

た理由も大方同様のことなのだろう。彼らには、ルカを放っておけない理由がある。

ルシファー上層の人間は首領に依存している。恭吾ですら、不本意ながらその自覚がある。設立時のメンバーは特にそうだ。彼がいないと、切れてしまう糸がある――それはルシファーにとって唯一の死活問題だった。けれど誰もそれについて触れてこなかったのは、ロヴという男の強さによるところが大きい。

ロヴの持つ“力”は群を抜いていた。誰よりも“型破り”だった。常識を覆す為に存在していた、それ。だから恭吾はオミナエシが何をしようと、ロヴは無事に違いないと――心の中のどこかで、未だに信じている。

「……俺が疲れてるように見えるのなら、それはちょっと調べ物をしてたせいだよ」

沈黙を破ったのは恭吾が先だった。

「調べ物？　何をだ」

「ルカが最近頻繁に会っている、“白い子供”について」

「――っ！？」

さっとレックスの顔色が変わった。それを見て恭吾は一瞬、罠に引っ掛けた獲物を見るように狡猾な笑みを浮かべる。

「どうして、お前さんがそれを」

「はは、って事はレックスは知ってたわけだ」

「！」

「酷いよなぁ、隠しごとなんて。しかもアンタが知ってるのに、俺が知らないなんて。俺、一応上官なのにー」

初期メンバーの贔屓っぷりはやっぱりいただけないよね、と恭吾は笑う。レックスの反応を見てわかった。あの子供について知っているのはロヴと〈ハングマン〉の二人、そして〈マーダラー〉内ではミクのみ。そしてレックスと――――サンドラ、だけだったのだろう。

「……あの研究所に、あんなのがいたなんて。本当にロヴはめちゃくちゃだよ」

「どこまで、知った」

「八割ってとこかな。……言っとくけど、俺一人で辿り着いたわけじゃない」

言いながら恭吾はポケットに手を差し入れ、中から小さく折りたたまれたメモを取り出した。広げて見せれば、レックスの目に見慣れた筆記体で書きつけられた言葉が映る。――ロヴの、字だ。

「暗号化された所在地は、研究所の場所と一致。これはデータバンクの暗証番号。こっちが……」

「ロヴが――？　あいつ、何を考えて、」

「消える前に、ヒントだけ俺のところに残していった。好奇心旺盛でいつかアイツを出し抜いてやろうと思ってる俺が、“白い子供”に辿り着くように仕組んで……ま、俺もまんまとロヴの策に乗せられたわけだよ」

トントンとメモを叩いて見せる恭吾は、苦々しげな笑みを浮かべた。

「ロヴはたぶん、俺にこの子の存在を知らせておきたかったんだ。いざとなったら、躊躇なくこの“最終兵器”を使いそうな俺に――」

「……なんで、」

「君たちじゃ、踏み切れないからだろうね。ルカが綱から落ちた時

に、さ」

言葉に詰まったレックスは、唇を血が滲むほど強く噛みしめた。そんな大男の様子を見つめる恭吾の表情は読めない。

「アンタ達は誰よりも強くて、冷徹で、優しいよね」

「俺ァ――俺はもう、厭なんだ……！」

「だから、ロヴは俺を選んだんだよ。ねぇこの白い子さ、何て名前なの？」

幼子をあやすような恭吾の声音にいたたまれなくなって、レックスはぎゅっと目を瞑る。もう何も考えたくなかった。ロヴが早く帰ってくれれば良い。そうすればきっとまだ、ルカは大丈夫だ。あの子供を研究所から出す必要もないのに、なのに。

「――――オメガ、だ」

その終焉の名前を呟いて、叶わない願いなのだと思い知った。

第六章《輪廻》：Patrinia scabiosaefolia（3）（前）

アンケ設置。詳細はあとがきで＾＾

第六章《輪廻》：Patrinia scabiosaefolia（3）

＊＊＊

「――誰だ、テメェ……！」
「おや、血の気が多い童子（わらし）だ」
「黙れ」

駿を取り巻く殺気で場の気温がぐんと低下する。
無人の家に唐突に現れた老婆は、異端以外の何者でもなかった。頭から白い布を被っているため、はっきりとした表情は窺えない。布の下には見えるのは淡緑の着物。尼のような出で立ちに、煙管だけが不釣り合いだった。

「何者だ。三秒以内に答えないとドタマぶち抜くぞ、ババア」
「ほ、ほ、ほ。もう三秒経ったぞ」

言いながら老婆はふわりと舞い上がり、駿を飛び越えて千瀬の前へ降り立った。……どう見ても“老婆”の動きではない。
しかしそれを気にかけるよりも先に別のことに気が付いて、千瀬は驚愕の声を上げた。

「あ、あああ！！　この人っ！！　何か見たことあると思ったら……！」
「おや、お前様、今まで気が付いておらなんだか。悲しいの」
「この人だよ！　占い師のお婆さん！」

あぁ？　警戒心丸出しの声で問い返す駿に対し、千瀬は懸命に説明を試みる。
目の前の老婆は先日の日本探索中に、千瀬に何やら不可解なことを言って消えた人物だ。その時は占い師の格好をしていたが、間違いない。
その時共に姿を見たのは絹華だけであったが、駿にも話はしてあったため千瀬の言いたいことは比較的楽に伝わった。ただそれだけでは、気を緩める理由には至らない。

「お前様が来ると思うて、待っていた」

重い空気をものともせず、老婆は朗らかに言って歩み寄ってくる。
千瀬と同じく困惑の表情を浮かべている百瀬のほうを見て、ふむ、とそのまま手を伸ばした。

「これはまた……血が濃く出ておる」
「そいつらに触んなッ！」
「そう噛みつくでないよ、坊。そっちに隠れている娘っ子も、出ておいで」
「――っ！」

老婆がくつくつと笑って目をやった先に、憮然とした表情のゾラが立っていた。何時の間に追いついてきたのか、千瀬や駿が気付かなかったそれを容易く老婆は言い当てる。

「随分長い間潜んでおったな。とって喰いやせぬから、安心おし」
「……食えない婆さんだね」
「ほ、ほ。ほぅら、坊もその物騒な物をしまえ」
「……」

「まぁ、撃ちたければ構わんが。わしは、そんなもので死にやせぬ」

――ガゥン！　刹那轟いた発砲音に千瀬は飛び上がった。まさかと思って見てみても、駿は銃を構えたまま微動だにしておらず、銃口から煙が立ち昇る様子もない。

しかし銃声は本物だった。ならば――――。

「じゃ、遠慮なく」

恐る恐る千瀬が振り返った先で、ゾラが抜き身の拳銃をくるくると回していた。くらり、と千瀬は眩暈を覚える。

遠慮なくって……発砲した後に言う言葉じゃないです。

「……ふむ、容赦のない娘っ子だのう。死にやせんが、身体に穴が空くのは好かんのだ」

「――穴なんて空いてないだろうが、化け物」

結論から言おう。千瀬が呑気にゾラの発言云々を気にしていられるのは、老婆がぴんぴんしているからだ――ゾラの放った弾丸が、その眉間を確かに撃ち抜いていたにも関わらず。

「アンタ、人間じゃないな」

「そうさな」

飄々と言い放つ老婆の額はつるりと綺麗なままである。銃弾の触れた瞬間微かに抉れて、ずぶりと鉛玉を飲み込んだそこ。常人ならば今頃夥しい血が溢れ出ているであろう場所は、瞬きをする間だけぽっかりと穴が空いていた。それがみるみる塞がって、今は傷一つ残っていない。

「死ぬことはない。生きているとも言えぬ。わしらはそういうモノだ」

言いながら老婆はもごもごと口を動かす。何事かと見つめる四人の前でしばしその動作を繰り返していたかと思うと、ぺっ、と勢いよく口から銃弾を吐き出した。

「ほれ、弾、返してやろうか？」

「――ッ、ンなもんいるかァッ！！」

「ぞっゾラさん落ち着いて！」

ぷちんと音を立ててキレたゾラにしがみつき、千瀬はなんとか場を沈めようとする。そんな中漸く頭の冷えたらしい駿か、ゆっくりと口を開いた。

「……婆さんアンタ、チトセの“夢”について知ってるふうだったな」

『忘れてはならん』――目の前の相手から、忠告にも似た言葉を与えられたことを千瀬は重い出した。夢は暗示。影法師。探し物。今だからわかる――この老婆があの時語った“占い”は、黒沼家のことを示唆しているように思えてならない。

駿は何かを確認するかのように、老婆の頭からつま先までゆっくりと視線を動かした。そして意を決し、一つの疑問をぶつける。

「――アンタが、“オミナエシ”か？」

少年がその言葉を口にした瞬間、場の空気が張り詰めた。完全に想定の範囲外であった千瀬はまさか、と思う。オミナエシがこんなに好意的――と言えるかは微妙なラインだが――だろうか？

「ほ、ほ、ほ。坊は面白いことを言うの」

どこかワンテンポ外れた笑い声を上げながら、老婆はゆるりと口を歪めた。

「だが、勘は良いようだね」

「!?」

はっと息をのんだ一同の前で老婆はゆるりと右手を上げる。煙管がふっと揺らいで、美しい木製の扇になった。それをついと口元に当てて微笑む様が一瞬、持ち主を年老いた老婆でなく妖艶な“女”に見せる。

「――限りなく近いモノ、だ。わしは“女郎花（おみなえし）”ではなく、“尾花（おばな）”だからのう」

「……オバナ？」

全員の頭上に疑問符が飛んだ。その中で千瀬は、脳内の辞書をゆっくりと呼び出して検索をかける。

オバナ――“尾花”とは即ち、“薄（すすき）”のことだ。秋になれば獣の尾のような穂を揺らす、植物の名。それを名乗る老婆とオミナエシが「限りなく近い存在」だと言うならば、オミナエシは“女郎花”と書くのだろう。薄々気付いてはいたが、花の名である。

千瀬は何度も夢に見た、あの光景を思い返した。黄色い小花が揺れる場所。あの花が――女郎花だ。

（……“尾花”と“女郎花”……？）

その言葉の並びが、ちらりと千瀬の脳裏に引っかかった。何かこの

二つには……植物の名だということ以外にも、共通点があったような気がする。

（何だっけ……？）

千瀬がぐるぐると悩んでいる横で、駿が小さく舌打ちをした。答えになってねえよ、と老婆をねめつける。

「敵か味方か、どっちだよ」

「どちらでもない、と答えておこう。わしらは傍観者だ。だか、坊たちに危害を加えるつもりは毛頭ないよ」

「……その物言いだと、アンタみたいなのが複数いるようだね？」

探るように言葉を重ねるゾラを一瞥し、老婆は狐のように目を細めた。沈黙は肯定だ。

「もしアンタが自分で言うように傍観者なら、何で僕達と接触した？」

「ゾラさん……？」

「僕は情報屋だ。この世にはその移り変わりをただ観察するだけの、糞みたいな人間がいることは知ってる。アンタは人間じゃないけど――傍観者という存在は否定しない。ただそういう奴らはけして、時代の表面には現れないものだ。そうだろう？」

武器で脅しても無意味なことを悟ったゾラは、弾丸のように言葉を紡ぐことで老婆を囲い込んだ。同時にドアを背で塞ぎ、逃げ道をも断とうとする。その隙の無さはゾラの頭の良さを顕著に示していたが、果たしてこの老婆相手に通用するのかは謎であった。

「……一寸、話をしたかっただけだ。前にも言ったであろう」

ふと遠い目をした後、老婆はその手の扇をはらりと広げて見せた。
水平に翳されたその表面には何の模様もなく、真黒に塗りつぶされている。それを見た瞬間――ゾクリ、と千瀬の背に悪寒が走った。

（え――――？）

一瞬、何を感じたのかわからなくなる。それが紛れもない恐怖だと気付いて少女は愕然とした。何か“この世のものではない闇”がそこに塗りこめられているような、そこに堕ちてしまっては何もかもが終わってしまうような――そんな感覚。
千瀬はよく知る長髪の人物を思い浮かべた。ルカの持つ黒はどこか浮世離れした闇色だが、紛れもなくこの世に存在するものだ。だか、この扇の色は。

「わしらはずっと見ていた。同じことが何度も何度も繰り返されるのを。あやつが不毛なことを続け、幾度となくこの世に現れるのを見ていた。終わりはいつも同じだ。あやつが生まれ出でて、アレの血が絶える。何も変わらぬ」

得体のしれない“闇”を扇に宿したまま、老婆は滔々と語る。明確な名詞が出てこないせいで、何の事を話しているのか千瀬にはさっぱりわからない。

「だがの、今度は異なっていた。お前様が道を外れた」

ふとそこで言葉が途切れる。老婆は――“尾花”は真直ぐに百瀬を見ていた。そしてそのまま千瀬に視線を移し、笑う。

「あやつのシナリオが、初めて狂ったのだ。一族を絶やすはずだっ

た嫡子が剣を厭い、次女がその役目を負った。それも完全ではない。黒沼は、死に絶えなかった」

「……、その、“あやつ”って、」

「綻びが生まれておる。あやつの力が、弱まっているのかもしれぬ。のう、黒沼千瀬よ。お前様の周りには今、面白いほど美しく駒が並んでいることに気付いておるか？」

尾花の手が千瀬の頬を撫でる。人ではないはずのその身体から、微かなぬくもりが伝わってくることが不思議だった。

「黒縄（こくじょう）が“抜けて”から早数百年――――」

「……こく、じょう？　それって、」

「こんなことは起こらないと思っていた。だが、今なら可能性があるからのう――わしは見てみたい。無間（むけん）があの錆付いた鎖に気付く瞬間を。だから、こうしてお前様の傍に来た」

ムケン。また聞き覚えのない言葉が登場して、思わず千瀬は顔を顰めた。ただでさえ把握できていないというのに、これ以上ややこしくならないでほしい。だいたいこの尾花という人物、話したいことだけを話して先刻から全く質問に答えていないのだ。混乱が混乱を呼んでいく。

「コクジョウってのは、剣の技だと聞いてる」

言いながら、駿が一歩だけ尾花に歩み寄った。そこで漸く他者の言葉に耳を傾ける気になったのか、両手で千瀬の顔を包んでいる老婆は、頭だけを少年のほうへ向ける。

「さっきから言ってる“あやつ”ってのは、オミナエシのことだな？　婆さんの口ぶりだと、それとは別に黒縄って名前の人間がいる

のか。いや――人間じゃなくて、アンタみたいな奴だな。そいつと黒沼と、居合いの技名……どう関係してる？」

「ほ、ほ、ほ。坊は、ほんに鋭い」

尾花は楽しげに笑った。だがその表情からは、何を考えているのか読み取れない。

「だが、わしが教えられるのはここまでだ――残念だがの」

「……っ、この……！」

「落ち着け。過度な干渉は禁忌だ、仕方なかろうて……ほうら、わしはお前様達に、これをくれてやるために来た」

瞬間、すっと扇が老婆の掌に吸い込まれた。目を瞠る千瀬の前で尾花はくるりと手首を捩じる。するとまるで手品のように、今度は古ぼけた巻物が現れた。

「それ……！」

百瀬が小さく声を上げる。尾花は満足げに頷くと、巻物を千瀬に握らせた。

「お前様の探していた“黒縄”の指南書だ。術式はちゃんと中に書かれておる」

「どうして、あなたが」

「これはお前様が――黒縄の血をひく者が持たねば意味がないからの。ここが空き家になった後、わしが預かっていてやった」

「は、え、血？　……え？」

黒縄の血？？？

わけのわからない単語に千瀬は目を白黒させる。しかしその疑問を

解決する前に、尾花は追いうちのように言葉を被せた。

「お前様の所の、頂点に立つ男――何度もここに来ておったからの。これを盗られてあやつだけでなく、わしらの事が露見してはかなわん」

「男って――ロヴ！？」

一瞬前の疑問を忘れて千瀬は声を上げた。ロヴがこの家に来ていた、それはもう予想が付いていたことだ。恐らく女郎花を探す手掛かりを求めていたのだろう。なぜ、どうして、という疑問は尽きなかった。しかし千瀬にはそれよりもまず、確認したいことがあった。

「お婆さん、ロヴがどこにいるか知りませんか！？」

勢い込んで尋ねた千瀬に、しかし尾花は曖昧な頬笑みを浮かべるだけ。

「そうさな、それは――直接“女郎花”にお聞き」

「それができれば苦労は……っ！」

「あやつは答えるだろうよ」

ぴしゃりと言い切って老婆は背を向ける。そのまま思わず口を閉ざした千瀬に向かって、もう時間だ、と囁いた。

「わしらは期待しているのさ。皆傍観者だが、てんでばらばらに好き勝手しているものばかり。お前様に協力する者もいるだろう。探してみるといい――――予見（さきよみ）のできる知り合いができただろう？」

「！！」

何でそれを知って――！？

声を上げた千瀬は次の瞬間絶句した。ほんの瞬きをする間、それだけだ。たったそれだけの間に――――

尾花を名乗る老婆は、まるで最初からその存在などなかったかのように、忽然と姿を消していた。

第六章《輪廻》：Patrinia scabiosaefolia（3）（終）

最終回に向け、アンケートを設置しました。5月いっぱいくらいを目安に置いておく予定です。＊＊一か所「そ」って書いてあるのは「その他」の事ですｗｗｗなぜ消えたｗｗｗ　たいして時間のかからないものなので、よろしければご協力お願いします！

第六章《輪廻》：Patrinia scabiosaefolia（4）

「……くそったれ、」

汚い言葉を吐き捨てるゾラは目に見えて苛立っていた。くまなく周囲を見渡しても老婆の姿はなく、気配すら追えない。

「あの、化け物め。僕を、コケにしやがって、くそ、むかつく！」

怒りのために区切られた台詞には、思慮深く聡い彼女にしては幼稚な単語ばかりが並んでいた。

千瀬はそんなゾラを恐々と眺めていたが、ふと姉が動き出したのに気付いて意識をそちらへ向けた。

「姉さん、」

「……本物だわ」

老婆消失の衝撃から立ち直ったらしい百瀬は、手渡された巻物を検分し始める。雑に扱えば崩れてしまいそうなくらい紙が古い。脆くなった表面に注意を払いながら、百瀬はそれをゆっくりと広げた。

（――――嗚呼、）

それを見た瞬間、くらりと一瞬千瀬の意識が揺らぐ。身体の最深部に沈んで消えかかっていた記憶が、ふつりと音を立てて湧き上がった。

（しっている。そうだ、これが、）

秘伝【黒縄】の指南書。後世にその奥義を伝えんと書き残された、黒沼家の家宝だ。

マニュアルとしての役を果たすものだが記された文字は字体が古く、古典の知識がなければ読み解くことは殆どできない。事実千瀬が技を習得した時は、これを呼んでいたのは父だった。そうだった、と唐突に思い出した。

「……面倒だな。三割くらい意味が分からない」

漸く落ち着いたゾラが、百瀬の手元をひょいと覗き込んで言う。

「……七割は分かるんですか？　日本人にも難しいと思うんだけど」

「情報屋たるもの、そのくらいの学はあるよ。語学は得意だし――ただこれは、妙に……暗号化されてるのかな」

トントンとゾラが指差した部分に千瀬も視線を落とす。そこで、おや、と思った。筆で書かれているらしい流れるような文字が連なる中、すんなりと読める部分があったのだ。

「これ……この部分が、術式です……何か、わかる」

「は？　え、どれ」

ゾラが困惑の表情を浮かべたが、千瀬はそれ以上に混乱していた。文字は読めていないはずなのに、その意味だけが頭にすらすらと浮かぶ。響く。回る。まわる。まわる――。

（何、これ、きもちわるい……）

＊

＊

＊　＊

＊　＊

禊ぎの廻向

霊刃の病葉

化野の左契

生は鞘に、

死を切っ先に、

黒き血は八つの獄に。

八百万の神に栃の歌を。

芙蓉の峰の邂逅で――

＊

＊

＊

＊

＊

くるくる、くらくら。混濁する思考の中で懸命に千瀬は考える。

これは子守唄だった。幼い千瀬が眠るとき、母親が繰り返し聞かせ

た詩。黒縄習得に必要な言霊を、幼子の身体に染み込ませるように――何度も、何度も言い聞かせられた。
意味を考えたことはない。けれど千瀬は、意味がないと思ったこともなかった。

（何だろう、今になって気になる……芙蓉の、峰。……“ふようほう”って、確か――）

『――そうじゃ』

（――――――え、）

『約束の地を、お前は知っている』

（な、に、？）

『逢うてやっても良い。お前が望むなら』

頭を殴られたような衝撃を受け、千瀬は思わずその場にうずくまる。脳がぐわんぐわんと揺れているかのような感覚に襲われる中、遠くの方で、もう何度も聞いた声がした。女の、声。女郎花の声。
今までと唯一違うのは、それが夢や記憶の残滓に似たものではなく――こちらへ、語りかけている？

「――――せ、ちとせ、」
「……ぅ、あ？」
「おいチトセッ、どうした！？」

気付いた時には顔面蒼白の駿が、屈み込んだ千瀬の肩を抱き支えていた。

ぼやけていた視界が定まってくると、自分のおかれた状況が見えてくる。ゾラも百瀬も心配を隠しきれない顔で少女を見ていた。

「大丈夫かよ、どっか具合でも悪いのか」
「あー……ごめん、平気」
「……ったく、」

謝れば微かに、駿の顔に安堵が浮かぶ。少年の手を借りて立ち上がった千瀬の額に、今度はゾラがぴたりと手を当てた。

「……痛む？」
「いえ」
「そう。この巻物を見るのが辛いのかい？　悪いけど、この先君にどんな影響が出るのか僕にもわからない。嫌なことを思い出すかもしれない。ただ現状、精神面の辛さは耐えてもらうしかないんだ。ただ体調にも悪影響が出るなら休んで――」
「……大丈夫です、ゾラさん」

けして「逃げて良い」や「忘れたままで良い」とは言ってやれないゾラの、精一杯の気遣いを感じ取って千瀬は笑った。触れたままの手のひらは少し冷たく、優しい。熱を帯びた肌にはとても心地いい温度だ。

「声が聞こえたから、びっくりしたんです」
「声？」
「はい。女郎花の、声。姉さん、聞こえた？」
「……いえ。何も聞こえなかった」

姉が首を横に振ったのを確認し、千瀬は今し方の体験を語り始めた。しかし鮮明に聞こえた筈の声が何と言っていたかを思い出すことは

叶わず、仕方なく話題を変えて“黒縄の術式”の言葉も同時に教えてやる。しかし案の定、ゾラをもってしても、千瀬にその部分だけ読み取れた理由はわからなかった。

「一番可能性が高いのは、やっぱり女郎花の影響だろうね」
「あの尾花って婆さんといい、女郎花といい……何なんだ一体」
「そのヒントがこの“術式”にあると、僕は踏んでるんだけどね――」

渋顔を浮かべた駿の横で、情報屋は何かに思いを巡らせているようだった。
千瀬の暗唱した言葉を近代の日本語に書き換えたメモを、彼女はじっと見据えている（ゾラの書いた日本語は書き順まで完璧だった）。現代国語として見ても、術式の言葉は難解だ。意味をなさない単語の羅列にすら見える。

「……チトセ。君の見る“夢”の話だけど」
「はい」
「僕はその内容を全般的に信用する。そこで、その夢が――女郎花の記憶であると仮定しよう」
「え？」

戸惑う千瀬を手のひらで制し、ゾラは続ける。

「あの尾花という婆さんの口振りからして、“黒縄”は本来居合いの技なんかじゃない――人の名前だ。いや、人と言うには語弊があるか……尾花な女郎花と同じ、この世に在らざる存在だろう」
「……、」
「君の夢で女郎花とおぼしき女は、『忘れまい』と言う。それも相当恨みのこもった口調でね。怨念の対象は“黒沼”であり、“黒縄

”なんだよ。あの婆さんが、血がどうこう言ってただろう……黒縄なる存在は、君のご先祖かもね」

「え、えぇえぇ！？　だって人間じゃないって……」

「そこがわからないんだけどね。まぁ可能性の話だと思って聞いてよ――で、ここからが本題だ。女郎花が黒縄に対して何を『忘れない』と言っているのか」

僕だったら、と。わざと狂わせた一人称を唇に乗せ、ゾラは猫のように笑う。

「忘れたくない、忘れさせたくない事柄は、言葉に出して暗記する。人間がものを覚えるには、視覚より聴覚に働きかけた方が良い。何度も何度も繰り返して、ね」

「――――！　ってことは……」

「うん。つまり“術式”の内にこそ、女郎花が伝えたいことが含まれている可能性が高いんだよ。チトセ、君の記憶からこの言葉が消えていないことが、何よりの証拠にならないかい？」

ゾラの言い分は筋が通っていた。そこで千瀬は、改めて“術式”の内容と向き合ってみることにする。しかし見れば見るほど難解な文章だ。まずは単語の意味から調べる必要がありそうである。

「廻向（えこう）って何だ……？化野（あだしの）、もわかんねーし」

千瀬の横に立って解読を手伝い始めた駿は、ものの数秒で諦めモードに突入した。

しかしそこで思わぬことに、百瀬の助け船が入る。

「化野は地名ですよ。京都に実在している……火葬場があったことで有名な場所」

「……へぇ？」
「転じて今は、“墓場”の意味で言われることが多いと思う」
「やけに博識だねえ。助かるよ――日本古来の言葉は難解なものばかりでね。僕もいちいち調べないとわからないことが多いから」
面白いモノを見つけた時のように、上機嫌でゾラが言う。
「意味など無いと思っていた」はずの百瀬が、術式を自分なりに解読しようと足掻いた過去があったとしても、ゾラには関係のないことだ。その矛盾を言及するつもりもない。ただし有効に利用はするべきなので、黙って続きを促した。
「廻向は『死者の冥福を祈ること』。普通は簡単なほうの字を書きます」
ゾラから渡されたメモに“回向”と書き付けた百瀬は浮かない顔をしている。その様子は自分の発言によって解き明かされるものを、恐れているようにも見えた。
「左契（さけい）は、約束の証拠のこと。もともとは二つに分けた割り符の、左側のことを示してたみたいです」
「わくらば、っていう言葉が二回出てくるけど、これは？」
「“病葉”と“邂逅”ですね。前者は文字のまま、病気にかかって朽ちた葉。後者も漢字の通り、邂逅（かいこう）だと思います」
「ふうん。あとは？」
「それが……わからなくて。“八つの獄”とか、何かの例えなのかと思ったんですけど」
「八……八っていう数字は気になるね。日本や中国は数字に意味を持たせることが多いし……」
一度僕の事務所に帰って調べてみるか、とゾラは独りごちる。千瀬

は与えられた情報を必死に噛み砕いたが、やはりこの“術式”が何を述べようとしているのかはわからずじまいだった。

「それにしても……考えれば考えるほど、女郎花は化け物だ。尾花の同類だと考えればなおさら――しかもあの婆さんですら、女郎花の存在を持てあましていたようだし。……妙だな」

「妙？」

声をひそめるゾラにならって、千瀬も囁くように問いかける。

「そう。妙なんだ――ずっと気になってた。女郎花は危険だ。人ではない上に、次元を超えた異能を持っている。不死身かもしれない。どう考えても、接触を図る相手としてはリスクが高すぎるんだよ。あのむかつくほどに聡明な男が……ロヴ・ハーキンズがわざわざそんなことをするか？」

「……興味本位ってやつじゃねーの。あいつならあり得るぜ」

「ハーキンズは部下の前じゃ愚かな振る舞いばかりしているけれど、本当に馬鹿なことはしない男だよ。それがまた腹立たしいんだけど……これまでだって一部の例外を除けば、大事な組織を危険に晒すことはなかったはずだ。安全なラインをあいつは見極めてきた。けど、今回は――」

「……ロヴはずっと、女郎花を探してたんだろう？　ちょっと危険でも見つけたい相手だったから、安全なラインを自分から超えたんじゃないか。組織と目的を天秤にかけた時に、目的のほうが大きければ……あ、れ？」

はっと駿が目を見開く。事の重大さに漸く気付いた。まさか、と少年は思う。この想像が正しければルシファーという組織は今まさに、とんでもない局面を迎えていることになる。

「……そうだよ、シュン。僕らは根本的な考え違いをしていた。ハーキンズが女郎花を探していた理由が、気紛れや興味本位でなく、もっと大きな目的を持っていたら――」

ゾラの目がすっと細められた。

「例えば、“ルシファーという組織がそもそも、女郎花を探すために創られていたら”？」

「！」

「“ロヴ・ハーキンズの行動が全て、女郎花のためのものだったら”もしくは――“女郎花を利用して成し遂げたいこと”が、あの男の“本当の目的”なのかもしれない」

「そんな、」

「組織の存在と目的。その通常の順位は、ハーキンズの考えを知っていれば一目瞭然だ。あいつは何より仲間を大切にしてるんだよ。だから――その順位が入れ替わるとしたら、可能性は一つ。彼のルシファーという組織が、特定の目的のために存在していた場合だ」

千瀬と駿は二人揃って絶句した。

確かに千瀬は、ルシファーが“何をしているのか”を知らない。否、正確には――犯罪シンジケートとして膨大な金を集め、他者の領土を奪い、敵対組織を潰し、傘下を操って地位を高めたその先で“何がしたいのか”、を。深く考えたことなどなかった。ルシファーは千瀬の居場所で、それ以上でも以下でもない。一組織員に過ぎない少女にはそれで十分なのだ。

しかし全てを統括するロヴ・ハーキンズにとっては違う。ルシファーは彼の所有物だ。彼が目指す何かのために存在するべき、巨大な駒。

「こうなったら、ハーキンズの野郎がこれまでしてきた行動全てを

洗い出す必要があるかもしれない……面倒だけど……女郎花をやみくもに探すより、そのほうがあいつに辿り着く可能性が高い」
「今からそんなことして間に合うのか？」
「だから狙いを絞る。まずあの、外部アクセスが禁止されてる研究所――あれの運営目的がわかれば、何か掴めるかも」
ゾラが何気なく零した言葉に、きょとん、と二人は首を傾げる。
「……、研究所？」
「何だ？　君達知らないのか？そりゃ、僕でさえ簡単に探れないくらいだから、研究内容は機密事項なんだろうけど――存在くらい、」
「いや、俺も初耳だ」
「……はぁ？　無知にも程があるぞ……！　君達って馬鹿？　馬鹿なの？　ルシファーが犯罪シンジケートとして集めた金が、どこに使われてると思って――っ、！？」
ヒートアップしていたゾラがそこで、不意に言葉尻を途切れさせた。彼女の纏う空気がみるみるうちに剣呑になってゆく。
「……あり得ない。誰か、この家を目指して来る奴がいる」
「え、」
ピンポーン。
千瀬が驚きの言葉を口にした瞬間、その場にそぐわぬ間抜けな音が響き渡る。実に数年ぶりに稼働した、玄関先のチャイムの音だった。

第六章《輪廻》：Patrinia scabiosaefolia（5）

ピンポーン。
鳴り響くチャイムの音は平和そのもので、それが逆に気持ち悪い。
黒沼家は無人になって三年以上が経過しているし、廃墟と化した理由が理由なので、興味本位で訪ねる者も（一部のオカルト好きを除けば）まずいないはずなのだから。

「お客さん……かな？　あだっ」
「馬鹿、んなわけねーだろ」

呑気に千瀬が呟いた可能性の一つを、素早い駿の突っ込みが千瀬の頭ごと叩き潰した。

「無人の家に入るのに、チャイム鳴らすやつなんているかよ」
「あはは……だよね、」
「……僕らが中にいることを知ってて、鳴らしてるんだろう」

剣呑な目つきを浮かべてゾラが呟く。尾花の時と同様に拳銃を取り出し、あっさり発砲しそうな彼女の様子を注意深く伺いながら千瀬は質問を口にした。

「玄関、行きますか？」
「その必要はないよ。――入ってきた」
「！」

侵入者は返事がないのを良いことに、無断で屋敷内へ踏み入ったらしい。その気配を追いながらゾラは、駿と千瀬に武器の準備を促した。百瀬を一歩後方へ下がらせ、完全に迎え撃つ姿勢をとる。

相手がただの一般人である可能性は、この段階で完全に棄てていた。

「さん、に、」

この屋敷最奥の書斎まで到達するには暫し時間がかかる。四人は数分の間、息を潜めてそれを待っていた。

ゾラが小声でカウントを始めると同時に、駿は部屋の入り口へ真っ直ぐ銃の照準を合わせた。千瀬も静かに腰の刀へ手を這わせ、鯉口を切る。

「いち」

ぜろ。

そうゾラが数え終わると同時に扉の向こうから、ふらりと人影が現れた。瞬間的に場の空気が張りつめるが、襲いかかってくる気配はない。

駿は引き金に指をかけたまま目を凝らして相手を見分する。銃口が微かに揺らいだのは、躊躇ったからだ。現れた人間は、銃を突き付けるには違和感を拭えない風体をしていた。

「なんだ、お前――？」

戸惑ったような声を出したのはゾラである。見据える先の人物は、若い女の形をしていた。華奢な輪郭に、華美ではない黒のワンピース――どこか喪服のようにも見える――を身に付ける彼女の目は真っ直ぐ前を見ていた。その視線はゾラを、駿を、千瀬すらをも通り越してただ一点を見つめる。

「……百瀬、」

ぽつり。
その女の唇の隙間から、絞り出すような声が漏れた。名を呼ばれた百瀬はその瞳を限界まで見開く。

「恵子……？」

一つ名を呼んだ百瀬は信じられないと言うような面持ちを浮かべたまま、ふらりと前に歩み出た。
ケイコ。姉の言う名に聞き覚えがあった千瀬は、脳をフル稼働させてその正体を探り当てる。一人、いたはずだ。

（……ケイコ。ホンジョウ、ケイコ）

じわりと脳が思い出した人物――「本庄恵子」は百瀬の友人だ。顔は初めて見るがまず間違いないだろう。全寮制高校に通っていた百瀬の、同級生。実家の場所も近かったはずだ。長期休みに入ると帰ってくる彼女から、千瀬は何度かその名を聞いていた。

（高校って……）

何か重要なことを忘れている気がして千瀬は思考を巡らせる。
百瀬の通っていた高校。千瀬の知らなかった外の世界。けれど百瀬は、そこから――社会から存在を抹消された。他ならぬ千瀬のせいだ。
ルシファーの保護下、“学園”で生活するために偽の焼死体まで用意して――そう、百瀬は死んだのだ。高校の寮ごと、燃えたのだ。
表向きには。

（……！　まずい、）

“死んだはず”の黒沼百瀬が、同級生の前に現れている。三流ホラー映画のような状況が今目の前に繰り広げられていることに気付き、千瀬の顔からさっと血の気が引いた。姉を隠そうにも時既に遅し。本庄恵子は百瀬の姿を見て、叫び声を上げていた。

「やっぱり生きてたのね、百瀬……！」

驚愕と怒りと喜び。恵子の声にはその全てが均等に入り交じっていた。何も答えられずに口を噤む百瀬に駆け寄った彼女は、手を伸ばしてその身体を抱きしめる。

「私、ずっと探してたのよ。ずっとずっと――だってあの日、百瀬は家に帰ったんだもの。妹の誕生日プレゼントを、私と一緒に選んだのよ」

「……恵子、」

「放火にあった寮の焼け跡から、あなたの遺体が出るはずがなった。あなたのはずがなかった！　誰も信じてくれなかったけど――」

百瀬を腕の中に閉じこめたまま一気にまくし立てる恵子の、声が微かに震える。涙を堪えるその様子に、百瀬はくしゃりと顔を歪めた。

「ごめん、恵子。ごめんね……」

百瀬の腕が遠慮がちに恵子の背へ回された。その瞬間、悲しげな表情を浮かべた姉を見つめて千瀬は思う。

あの日、表の世界から突然消えた百瀬。彼女を失った世界はきっと、何事もなかったかのように回っただろう。けれど百瀬には千瀬と違い、他者との繋がりが存在していた。恵子のように、百瀬が欠けたことに傷つく人間がいたのだ――そんな当たり前のことに、今更気付く。

「百瀬……っ、」
「――感動の再会を邪魔して悪いけど」
カチャ。無機質な音と、一切の感情を感じさせない声が割って入った。はっと千瀬が目をやれば、ゾラが恵子の後頭部に拳銃を突きつけている。
「……！！　ゾラさんッ」
尾花の時とは訳が違う。しかし慌てて制止の声をあげた千瀬を、ゾラはちらりとも見なかった。
「……ゾラ。こいつは人間だろ？　知り合いみたいだし」
「ああ、そうだ」
駿が冷静に問いかける。それには肯定の返答があった。
「あの婆さんとは違って、気配もちゃんと人間のものだ。だからこそ解せない――あんた、名前は？」
ぐり、と後頭部に鉄の感触を感じたらしい恵子が震えた。ただならぬ空気から、その銃がモデルガンなどではないことには気付いたのだろう。恐怖の色を浮かべたまま、しかしはっきりと返答する。
「本庄、恵子」
「間違いない？」
「ほ、本当です」
「じゃあ“恵子”。君はどうしてこの家に来た」
「……どうして、って――？　……たまたま、」

ふと恵子は悩むように眉を寄せる。

「たまたま通りかかって、中に――」

「君はいつも、通りすがりに他人の家に入るのかい。しかも無人の、殺人現場に？」

「そんなことは……やだ、何でかしら」

恵子の返答が一気に不明瞭になる。ゾラはその様子にすっと目を細めた。まるで何かを暴き出そうとするような、瞳。

「答えられない？」

「……、」

「じゃあもう一つ質問だ。君は家に入ってから、真っ直ぐこの書斎を目指したね。僕らのいるこの場所に、迷わず。どうしてかな」

「……それは、」

「おい、ゾラ……」

流石におかしいと気付いた駿が名を呼ぶのを片手で制し、ゾラは辛抱強く問いかける。

「どうして？」

「それは、ここに」

「うん」

「ここに来なきゃ駄目だって、思って――」

「何のために」

「なん――違――――――、あ、」

「……答えて」

「……あ、あああ」

「ゾラ、止めろ！」

そいつおかしいぞ！　駿が鋭く声を上げる。同時に千瀬は百瀬の後ろに回り込み、恵子からその身体を引き剥がした。
がくんと脱力して膝をついた恵子をゾラは冷たい目で一瞥する。

「答えろ。何のために、ここに来た」
「――――に、」
「……何だって？」

俯いたまま恵子が何かを呟く。聞き取れずに聞き返した瞬間、その顔が勢いよく上を向いた。露わになった表情を見て千瀬の背筋に悪寒が走る。
恵子は、美しく笑ったのだ。

『逢うために』
「！」

瞬間、ゾラは己の勘に従って勢い良く飛び退った。ドッと鈍い連続音が聞こえたかと思うと、一瞬前までゾラの立っていた場所が歪に変形する。床から植物の根のような物が突き出ていた。少しでも反応が遅ければ、ゾラの身体を串刺しにしていたに違いない。

『――お前に、逢うために。逢うてやってもいいと、言ったであろう？』

にこりと笑って立ち上がった恵子の瞳は日本人離れした、沼地のような緑色に輝いていた。その唇から聞こえる声音は先刻までの彼女のものとは違い、口調も変化している。――そして、千瀬にとっては最早馴染みのある音をしていた。目の前にいるのは最早恵子では、ない。しかし「誰か」などと問うまでもなかった。

「……“女郎花（おみなえし）”」

信じられない思いで千瀬はその名を呼ばう。すると恵子の顔をした“それ”は、最早隠そうともせずにいらえを返した。

『ふ、ふふ……左様。おかしな子。わかっておるのに、何故問うのじゃ』

「……マジで出やがった、」

呟いた駿は真っ直ぐに銃を恵子――否、女郎花へと向ける。しかし意外なことに、それを今度はゾラが制した。

「シュン、安易に撃つなよ」

「でも、」

「問題は目の前の“身体が”、誰かって事だよ」

『ふふ……おや。情報屋は頭の回転も速いと見える』

口元に手を当て、女郎花は愉しげに笑った。その仕草は若い女のそれよりもどこか雅やかで、妖艶さを感じさせる。古風な口調は尾花のそれに似ているが、あの老婆よりずっと柔く、色香に富んでいる。

『察しの通りじゃ。この身体は“本庄恵子”という人間のもの。撃たれれば、死ぬだろうなぁ』

「……っ、糞が、」

罵る言葉をぶつけても、目の前の存在は涼しい顔をしている。女郎花は恵子が死んだところで痛くも痒くもないのだろう。飄々したその様子を見て、駿の背に言い知れぬ悪寒が走った。

（なんだ、これ。本当に化け物じゃねーか……っ）

駿には異能がない。だか長年ルシファーでその存在に触れてきたため、ある程度の知識はある。

だから駿は、異能は万能でないことを知っていた。誰にでも得手不得手があり、何でもできるわけではない。能力は体力と同じで消耗もする。

（こんな奴が、本当にいるなんて――）

本体がどこにいるのかは知らないが、他人の身体を乗っ取ったまま床を破壊し、あまつさえ黒沼家の根幹を操り続けている女郎花の力は、どう見ても別格だった。

『心に隙間が出来ている人間を操るのは容易いこと。撃ちたければ撃つが良い――話は出来ぬようになってしまうがのう』

「その身体から出て行く気はないってわけ？　……アンタがこちらと話をするつもりがあるなんて、驚きだね」

ゾラは苦虫を噛み潰したような顔を浮かべると、諦めて銃をおろした。駿も渋々それに倣う。

それを見て満足げに笑った女郎花は、くるりと向きを変えた。立ち尽くす黒沼姉妹に白い腕を伸ばし。最初に百瀬の頬を撫でる。

『……ようやっと、まみえたなぁ。黒沼の子。可愛くて、愛しくて、憎くて仕方ない子。妾（わらわ）のことはもう、知っておろう？』

女郎花の指がするりと顎を伝い、その感触に百瀬は震えた。

「あなた、は」

『女郎花、じゃ。お前達の命運を掌で転がす存在。嗚呼、本当はこうして口をきくこともなかっただろうに。お前が道から外れなければ――』

「！」

『わかっているのだろう？　黒沼の娘は皆十六で子を孕む。嫡子は刀で一族を切り刻む――お前が狂わせたのじゃ、百瀬。だが……』

女郎花は百瀬の側を離れると、千瀬にゆっくりと歩み寄った。距離が近付くにつれキィィン、と腰に帯びた刀が鍔鳴りを起こす。まるで何かに共鳴するかのようだ。

『……だが、許そう。長い時を経てしまったから、少々の歪みは仕方ない。代わりにお前がよく動いたから――多少余計なものを呼び込むことになったが、妾は甘んじて受け入れることにした。』

女郎花の手が頭を撫でた瞬間、千瀬は言い知れぬ恐怖を感じて叫びそうになった。

ずっとずっと探していた存在が今、信じられないほどあっさりと目の前に立っている。どうやら本人そのものではなく、他者の身体を借りているようだが――それでも、ようやく手の届く場所まで来ている。しかし千瀬は動くことができなかった。千瀬には刀があるしこの場には仲間もいるのに、怖いのだ。魂を握り潰されるような感覚にただ、怖いとだけ思う。しかし溢れ出す感情は何故か、全く声にならなかった。

「どうして――」

代わりに、積もり積もった疑問がするりと唇から吐き出される。

「どうして、黒沼を恨むんですか。あなたは何者で、何がしたくて、

なんで……繰り返すんですか。あの夢は、何ですか。約束って、黒縄って、」

『ふむ……面倒じゃ。どうせ時が経てば何もわからなくなるのに』

「……っ、それってまた、忘れるってこと？　どうして……！」

刹那、女郎花の指がすっと千瀬の唇に押し当てられた。何故かそれだけで、高ぶった感情が急速に静まってゆく。

『今日妾が此処へ来たのは、尾花の奴が余計なことをせぬように牽制するためじゃ。それからほんの気紛れで、ぬしらの顔を見ようと思うた。しかし、そうさな……せっかくじゃ。一つだけなら、質問に答えてやっても良い』

深緑の瞳を細めて笑う女郎花は、千瀬を試しているかのように見えた。

冷静さを取り戻した頭でその顔を見据えながら千瀬は考える。女郎花が恵子の身体を使っている以上、攻撃は出来ない。今この場で出来るのは、出来うる限りの情報を引き出すことだけだ。

ならば、何を問うべきか？　そう考えた時にはもう、千瀬の答えは決まっていた。

『何を知りたい。妾の正体か？　夢の真相か？　それとも、己の運命から逃れる方法か――？』

「……いいえ」

千瀬は真っ直ぐに女郎花を見据え、そして問う。

「ロヴ・ハーキンズの居場所を。彼を……私達のボスを、どうしたんですか」

その時の千瀬は無力な少女ではなく、犯罪シンジケート・ルシファーの構成員の顔をしていた。

第六章《輪廻》：Ｐａｔｒｉｎｉａ　ｓｃａｂｉｏｓａｅｆｏｌｉａ（５）（後）

恵子＝２話目でちょろっと出てきた人、です（笑）

第六章《輪廻》：Ｐａｔｒｉｎｉａ　ｓｃａｂｉｏｓａｅｆｏｌｉａ（６）

『……ロヴ・ハーキンズ？』

恵子の瞳が、女郎花の意思でついと細められる。問われた内容が意外だったのだろうか。暫し考える素振りを見せた後に魔女は漸く、

ああ、　と声を発した。

『あの、異能の男かえ。妾のことを随分と嗅ぎ回っていたらしいなぁ』

「その人に、会いましたか？　貴女のところに行った筈なんです」

『ああ……逢うたとも』

その言葉にぴくり、と千瀬は身体を震わせた。

ふふ、と軽やかな笑い声をあげる女郎花をゾラが剣呑な目つきで見据える。

『逢うた、逢うたなぁ。妾の居場所を自力で突き止めた人間はこれまで居らなんだ。面白いと思うて、逢うてやった。まっこと愉快な男じゃったが、はて……その後どうしたか』

「……っ」

『……ふ、はは。恐ろしい顔をするでない、ほんの冗談じゃ。強い力を持つ人間だったが、妾が使うには少々物足りなくてのう。餌にはなるだろうと思うたから、閉じ込めてやった。故に、ほうら、そなた等が釣れた。――生きておるぞ、今はまだ、な』

嬉しいかえ？

千瀬の頬を女郎花の指がするりと滑る。子猫の顎を撫でるような仕草に、思わず千瀬はその身を捩った。

「……っ、使う？　それってどういう……」
『お前には関係のないことじゃ。使えるものを利用するのは当然であろう？　現にあの男だって、妾を利用する為に探していた。げにまっこと、愉快な人間じゃ。妾を使うてやろうと考えるなど』
「……ハーキンズの野郎でさえ役者不足、か。アンタの舌は相当肥えてるんだね？　伊達に年は食ってないってことか」
皮肉たっぷりにゾラが言葉を浴びせても、女郎花は余裕の表情を全く崩さなかった。
『ああ、そうさな。妾を満足させるには、もっともっと強くなければならぬ。だから、連れておいで』
「え――？」
『あの男はその為に生かしている。強い力の持ち主が、いるのであろう……？』
連れておいで、と再び女郎花は口にする。蠱惑的な唇の動きに気を取られて一瞬、千瀬には言われたことが理解できなかった。
『連れて来れば、妾が使うてやる。それが出来ないならあの男に用はない――ちょんと殺してしまおう』
女郎花の指が鋏を形作り、開閉する。幼子が無邪気に動きを真似るのと何ら変わらない仕草の中に、隠しきれない残虐さが滲み出していた。
「殺……っ、待って！」
『芙蓉の峰へおいで、黒縄の子。次はちゃあんと、妾の身体で逢うてやろう。その時は――憎くて憎くて、殺めてしまうだろうがなぁ』

「――チトセ、モモセ、離れろッ！」

駿の声が聞こえたと思った次の瞬間、千瀬の身体がぶわりと浮き上がった。重い空気の層に包まれて息が吸えなくなる。

女郎花の立ち位置を取り囲むように竜巻が現れたのだと気付いた時には既に、千瀬は突風に巻かれて吹き飛ばされていた。

「――――待って！」

渦に飲まれながらもう一度、千瀬は必死に叫ぶ。しかしその声はあっという間に掻き消され、伸ばした手も届かない。

千瀬の身体は壁に叩きつけられる寸前で駿に抱き留められた。はっとして振り返れば、髪の乱れた百瀬が同様にゾラの腕に支えられている。

「……畜生、」

逃げられたな。耳のすぐ近くで呟かれた駿の言葉を、千瀬も理解した。

巻き起こった旋風の後には静寂と、床にくたりと横たわった娘の身体だけがある。ゾラが無言で近付き、その胸がゆるやかに上下していることを確かめた。――これは“本庄恵子”だ。女郎花はもう、この身体にはいないのだろう。

それがわかった途端ゾラは、だんっ！　と音を立てて拳で床を殴る。

「くそったれ！！」

その細腕で叩いたにしては派手すぎる音を立てて床が凹んだ。今更それに驚くような者は、この場にはいない。

「何だってんだよ、くそ、くそ……ッ、馬鹿ロヴ……！」

ハーキンズ、という他人行儀な呼び方をやめたのは無意識だったのか。かの人を馬鹿だと罵るゾラの声は、幼子のように素直な感情を滲ませていた。

「本当に気にくわない、何もかも……！」

女郎花も、ロヴも、無力な自分自身も。

彼女の言わんとしていることを悟った千瀬は一つ深呼吸すると、無言でゾラの肩に手を置く。振り返ったゾラの瞳は、美しい石のように澄んでいた。

「――チトセ」

「ロヴを取り返しましょう、ゾラさん。いえ……取り返してみせます、」

必ず。言いながら千瀬は固く拳を握り締める。身体の内で去り際、魔女が紡いだその言葉を何度も反芻しながら。

「――芙蓉の峰」

＊　＊　＊

「甘い！　甘すぎるよ本当に！」

帰路につく車の中。千瀬と駿は姿勢をただし、ぷんすかと腹を立てているゾラの説教を甘んじて受け入れていた。

「君達はそれでも本当にルシファーの一員なのか！？　裏社会の頂点に君臨し悪逆非道と名高いシンジケートの構成員なのか！？」

「あくぎゃくひどう……」

「俺らってそんな風に言われてんの？」

「こ……っの、ド無知コンビ！　そんなんだから自覚が足りないんだっ、あんな小娘一人始末できないなんて……！」

ぐぅの音もでないとはまさにこの事である。千瀬は何一つ反論できずに、ひたすら下を向いてやり過ごした。

本庄恵子は殺しておく。

女郎花が行方を眩ませた後、意識を失った娘を見下ろして当たり前のようにゾラは言った。それを何とか見逃してくれと頼んだのは千瀬で、駿も擁護に回った。

ルシファーの一員として生きている千瀬と、死んだはずの百瀬の姿

を見られたのだ。口封じは当然の行為である。
それでも千瀬には、できなかった。

「確かにあの娘に、女郎花に乗っ取られている間の記憶はないだろうさ。だけどその前は？　死んだ友人の家で目を覚ました彼女が、気を失う寸前の出来事を都合よく夢か何かだと思ってくれるのかい。それとも、幽霊でも見たと納得してくれるのか？」
「……すいません、本当に。何かあったら、私が責任……」
「責任取れるって？　君が？　〈ソルジャー〉風情に何ができるってのさ」
「……、」

わかっていても、どうしても。自分の、黒沼の事情でこれ以上の犠牲者を出すわけにはいかなかったのだ。そんな千瀬の気持ちにはゾラとて気付いている。だからこそ、あえて厳しく非難しているのだった。

「――――あら、お帰りなさい。ん？」
ゾラの説教は、四人を乗せた車が日本本部へ帰還するまで滔々と続けられた。ガレージでちょうど出くわしたミクが、挨拶と同時に怪訝な表情を浮かべる。どうやらゾラの機嫌の悪さを敏感に感じ取ったらしい。

「ゾラ？　どうしたの」
「何でもな……いや、ミク。この馬鹿共から話を聞いて、尻拭いに回った方が良いかもしれないよ。君なら記憶を消せるだろう」
「何の話？」
「少し休んだらロアルに“予見”をさせるから、指南書を持ってくること。僕は先に行くからな」

ミクの質問には一切答えず、千瀬への簡潔な指令を言い捨てるとゾラは足早にその場を去ってしまった。
立ち尽くす駿の頭を次の瞬間、ミクの手が鷲掴みにする。

「ぐわっ」
「ふぅん……？　目撃者を見逃して怒られたのね」
「……読むなよ」

抗議の視線を向けられても、ミクは涼しい顔を浮かべるだけだ。

「ま、心配ないわよ。いざとなれば本当に消してきてあげるわ」
「記憶を、だぞ」
「はいはい」

存在そのものを抹消しかねないミクに釘を刺し、駿は息を吐く。

「……けっ、何だよゾラの奴。自分はただの情報屋でルシファーに所属してるわけでもないのに、説教ばっか……」
「まあゾラは、ルシファーのこと大切にしてくれてるから」
「それは、ルカのいる組織だからですか？」

千瀬が問い返すと、ミクは少しだけ口を噤む。次いでふっと息を吐き、薄い笑みを浮かべた。どこか含みのある顔である。

「正確には……ロヴの作った組織だから、かしら」
「へっ？」

聞こえた言葉に耳を疑いそうになった。思わず千瀬は素っ頓狂な声を上げる。

「ゾラさんはルカのことは気に入ってるけど、ロヴのことは思い切り嫌ってますよね？　どうして――――それじゃまるで――――、」
「ゾラはロヴのことが大好きなのよ。もうずっと前から」
さらり。落とされた発言に今度こそ千瀬はひっくり返りそうになった。駿も同じ心地だったようで、思い切り驚愕の声を上げる。
「はぁぁぁぁァァァ！？」
「ゾラがルカを気に入ってるのは本当。ルカには借りもあるみたいだし、外見も好みだって……人形を愛でるような感覚で、好きみたい。でも……」
「……ロヴのことは？」
「恋愛感情ね、あれは」
駿が目を白黒させながら口を閉じた。何を言えばいいかわからなくなったらしい。
「ロヴって性格はアレだけど見た目は良いじゃない。あの若さで財力もある良い男よ。それに加えて頭も切れるし、カリスマ性もリーダーシップも備わってる。あたしもルカもロヴのことは好きだし、きっと“愛して”る。でもそれは……よくわからないけど、“家族愛”に近いんじゃないかしら」
「……、」
「その点、ゾラは家族ではなかった。でも出会ったときからロヴの圧倒的な力にずっと惹かれてるの。本人はそっちの方面に疎いみたいで、恋をしてることもわかってないのよね。男装し続けてるし……でもあれは恋愛感情よ。傍目から見てればわかるわよ」
「は、はぁ……そうなんですか……？」
「ロヴはそれに薄々気付いてて、わざとゾラをからかうのよねぇ」
「えええええ……」

なんて男だロヴ・ハーキンズ。千瀬は心中でひそりと呟く。

「しつこく繰り返すからゾラにももろに反感買われちゃって。だからゾラはロヴのこと好きだけど、大嫌いってのも本当じゃないかしら」

よくわかりません。

素直に千瀬が呟くと、ミクはコロコロと鈴を転がすように笑った。

「気にしなくていいわよ。馬鹿よね、ゾラをちゃんとルシファーに取り込めてれば、楽になった仕事はいくつものあったのに」

「そうでしょうね……」

「とにかく、ゾラはルシファーのこと心から気にかけてるし、本気でロヴのこと探してるのよ。多少のお小言は聞いてあげなさい」

「はい」

千瀬が頷いたのを見て、ミクも満足げな表情を浮かべる。

そこでようやく衝撃から立ち直った駿が、ぼそりと呟いた。

「ロヴの奴、せっかく見つかってもゾラに半殺しにされるんじゃないか……？」

……そうかもしれない。と、その場にいた誰もがそう思った。

第六章《輪廻》：神みつる場所（1）（前書き）

長く間が空いてしまいましたすみません…これからはラストまでテンポ良く進みたい所存。

第六章《輪廻》：神みつる場所（1）

――ロアル・エレクトラ・ウィルヘルムは制限型の能力者である。

その異能の発言に必要なのは、先祖代々伝えられる呪の込められたブレスレットだ。腕に感じる冷たい感触に意識を集中させれば、感覚が研ぎ澄まされていくのがよくわかる――これを身に付けて初めて、ロアルは先読みの力を使用することができるのだった。

先祖の教えに従っていただけの彼女に、ブレスレットがどうして必要なのかは最早わからない。ゾラによれば精神統一の効果と、特殊な金属が体内の気脈を整える役割を果たしている可能性があるらしいのだが。

「それじゃあ――はじめます」

千瀬と百瀬、駿、ゾラ、そしてロザリーが見守る中、ロアルはその白い手をすっと前に突き出した。

手首で輝く銀の鎖がしゃらんと音を立てると同時に、場の空気がぴんと張りつめる。

部屋の温度が下がったのを肌で感じて千瀬は息を飲んだ。ロアルがとても神聖で、不可侵な存在に思える。

「ローザ」

「うん」

姉の呼び声に応えたロザリーが音もなく立ち上がると、手にした小さなナイフの刃をロアルの手の甲に押し当てた。ぷつ、鈍い音と共にできた細い傷から、真っ赤な血液が一滴床へと零れ落ちる。

それを確認したロザリーは続けて己の腕にも躊躇いなく傷をつけた。

ぽたり、と滴る姉妹の血。

「な……っ、何してるんですか！？」

ウィルヘルム姉妹の行為に驚愕した千瀬が声を上げるが、それはゾラに押し止められる。

「黙ってて――予見には一族の血を媒体にする必要があるそうだよ。少量だから大丈夫。ただあの姉妹はロシア人の父を持つハーフなんだ。ギリシアの、一族の血は半分しか入ってない。だから予見の精度を上げるために、ロザリーの血も足して力を底上げしてる」

「だからってあんな痛そうなこと……あっ、」

瞬間、目の前に広がった光景に千瀬は言葉を途切れさせた。

二人の血が落下した場所を中心にして床が薄赤く発光する。目を凝らせばいつの間にかそこに、魔法陣のようなものが現れているのだとわかった。

「これで準備は完了です。……モモセ、」

ロアルに促され、百瀬は胸に抱えていたものを差し出した。実家から持ち帰った“黒縄の指南書”である。

女郎花について探るには、何か縁の強いものがあったほうが正しい情報に辿り着ける可能性が高い。指南書はそのために利用するのだ。

「……はい、これ……」

「うん、借りるわね。――ゾラさん」

「何だい」

指先で指南書を撫でるようにしながら、ロアルが静かに言葉を紡ぐ。

「私の力では、女郎花そのものの居場所を突き止めることはできません。“見る側”より“見られる側”の能力が大きい場合力は跳ね返されてしまうし、逆に相手にはこちらのことがわかってしまう。女郎花の支配下の領域にいるなら、ロヴさんの居場所を探知することも難しいかと――」

「ああ。だから今回は女郎花を直に探そうってわけじゃない……見つけたいのは“関係者”だ」

「関係者？」

首を傾げた千瀬にゾラは頷いてみせる。

「女郎花の口振りからして、奴と黒沼の因縁について知っている存在は他にも、複数いるんだよ。あの尾花って婆さんもそのうちの一人だろう。尾花は傍観者を気取ってたけど――僕達に協力してくれる奴だっているかもしれない」

「そんなにうまく…助けてくれるでしょうか……」

「可能性は高いと思うよ。尾花ですら己の存在を明るみにし、指南書を此方に渡してくれただろ？　たぶん――ずっと待ってたんだ。“黒縄”なる存在と女郎花の関係に決着がつくのを」

ゾラの言葉を聞いたロアルは静かに瞬きをすると、手にした指南書を額に押し付ける。

祈るような、願うような仕草。一つ、二つ、三つ、数えるように深く呼吸を繰り返し――――瞬間、彼女の身体は白い光に覆われた。

＊　＊　＊

「おい……おいおい。いい加減にしろよ」

腕を組んで車内に鎮座した駿は、額に青筋を浮かべかけている。この状況を見れば無理もないかもしれない。

「な……っんでまた逆戻り！？」

「うるさいわめくな」

捨てていくよ。ゾラに冷たく切り捨てられて渋々口を噤むも、駿の不服そうな表情は変わらない。そんな彼を見て千瀬は心の中で謝罪した。

――逆戻り、という駿の言は現状を言い表すに実に適切である。そう、一同は再び千瀬の生まれ育った地――上水流町へ向かっているのだ。それも全ては、ロアルの予見が齎した結果である。危険性を考え、ロアルと百瀬は本部へ置いてきた。その護衛としてロザリーも留守番だ。その代わりに車に乗り込んだのは――――

「良いじゃない。私は楽しいよ」

――と笑う、ルカ・ハーベントその人である。

「僕も前回よりは愉しいね。ルカとドライブができるのは悪くない」

「ふふ、ゾラったら」

「……アンタ等、何しに行くか覚えてるか」

げんなりした表情で駿が問えば、さらりと揺れる美しい黒髪。

「勿論。女郎花について知ってる人物に会いに行って、色々吐かせ

るんでしょう」

後半の表現がそこはかとなく不穏である。にこにこと口角を上げるルカの顔を覗き込みつつ、千瀬は小さく息を吐いた。

ルカがいるのだから、万が一にも戦力に問題はないだろう。でも、不安は消えない。

（どうしてまた、あの町なの？）

自分はいったいいくつの存在に見張られていたのだろうか。考えれば気が遠くなる。

今から会いに行く人物が味方とは限らない。いったいどうすればロヴが戻ってくるのか、未だ見当もつかない。

（あたしは…この人達に迷惑をかけている）

黒沼の血がルシファーに災厄をもたらしたのだと思えてならない。だとしたら、自分が――――――――……、

そこで不意に千瀬の思考が途切れた。横に腰を下ろしているルカの、白い手が触れてきたからだ。

「違うのよ、チトセ。ロヴが自分からこの状況を作ったの」

まるでそれは、千瀬の思考を読んだかのように。

「私達が、あなたに協力してもらってるだけ。だから余計なことは考えないで」

「……はい」

「――でさ、チトセ君。ロアルの予見した場所に心当たりはあるんだね？」

運転席から飛んできたゾラの声に、千瀬はしっかりと頷いた。

「――――かみずる神社に、向かってください」

第六章《輪廻》：神みつる場所（2）

＊　＊　＊

『――赤い柱。古い…この国の伝統家屋の、入り口に。門のように建っている……柱のようだけれど、少し違う…これは……？』

『……絵を描けるかい』

『やってみます。それから、白い――白い着物。大きな木。それからこれは、“言葉”としてのイメージなんですけど――』

――“優しい思い出”。

＊　＊　＊

エンジンの低い振動に身を委ねながら、ロアルが予見した言葉をゆっくりと千瀬は思い浮かべる。

“赤い柱”と表現された物体はあの後、絵に示されてその全貌が明らかになった。ロアルには馴染みないものだったのだろうが、日本人が見ればまず間違いなく気付く――神社の、鳥居だ。

上水流町に現存する神社は、数十年以上前からたった一つである。田舎町には似つかわしくない尊大な――否、田舎だからこそだろう

か――佇まいの其れは、不可解なことに神主の管理下に置かれていない。よって季節の節目などに、町の人間が手入れに来るだけの状態が続いていたはずだ。にも関わらず神社は神聖な空気を保ち続け、町人らも神の加護を疑わない。
正式な名を示す立て板や石碑すらないため、町の名をそのままとって、“かみずる神社”と呼ばれていた。

「御神木である大きな菩提樹が印象的で。あたしは年の瀬に一度、父と行ったきりだけど……何だか不思議な場所だった」
「神社の癖に管理者がいないってだけで十分妙な話だけどな」
千瀬の解説を聞きながら、駿は助手席で腕を組む。車は道を違えることなく真っ直ぐ目的地へと進んでいた。大通りから細い道へと入ったので、もう近いのだろう。

「あ、そこを左です」
「了解」

どうやら神社までの道は記憶に残っていたらしい。たどたどしくも正確な千瀬の案内に従って進んでいた車は、やがて小さな空き地で緩やかに停車した。
ゾラに続いて車を降りたルカが、すっと顎を上げる。その目線の先にある鳥居は古く、しかししっかりと聳え立っていた。

「……どうだい？」

ゾラの問い掛けに答えず、ルカはただ目を細める。ざあ。不意に吹いた風が彼女の髪を大きく乱して去ってゆく。

「行きましょうか」

ルカの声に従って、一同はゆっくりと鳥居をくぐり抜けた。
白い石畳が続く先の本殿。正面の扉は堅く閉じられていて、辺りをぐるりと一周しても内部へ入れそうにない。本殿裏は樫の木の林になっていて、それ以上の道は存在していなかった。
境内には他に目立った建造物はなく――ただ一本、樹齢百年はゆうに越しているであろう巨大な菩提樹が生えている。

「何かね、昔から言い伝えがあるんだ」

異質な存在感を放つ御神木を眺めながら、ふと思い出したことを千瀬は口にした。

「何だっけ……願いが叶う、とか何とか。言い伝えがあったような気がするんだけど……菩提樹が叶えてくれるんだっけ？」
「なんだそりゃ？」

突拍子もないことを言い出す少女に首を傾げた駿は、次の瞬間身体を硬直させる。

「――少し違いますよ」

くすり。漏れ出した笑い声と共に突如割って入った声に、千瀬と駿は飛び上がった。音源は死角になった菩提樹の向こうで、存外に近い。
無論ルカとゾラは最初から気付いていたのだろう。二人は目配せをし、どちらともなく囁く。――ただの人間だ、と。

「菩提樹は“永遠”をくれるんです。だからこの辺りの子供達は、仲の良い数人で夜中にここに集まったりする……まぁ、度胸試しも兼ねたりしながら」

「……あぁ？」
「あなたは――」
太い太い菩提樹の幹。その裏側に腰掛けていたらしい人物がひょこりと顔を出して、千瀬は目を瞬いた。
「あはは、また会っちゃいましたね」
良いながら微笑む娘の顔には見覚えがある。以前この町へ来たとき、役所まで案内してくれた人間だ。
「ええと…梢（こずえ）さん……？」
「はい」
「何でこんな所に……？」
千瀬の呼んだ名を書い聞いて、朧気だった駿の記憶も徐々にはっきりとしてくる。
（こいつ……）
「神社を見に来たんです」
（そう、神社マニアの女……）
間違ったままの印象を再び思い浮かべた駿は、梢というこの娘が前回も同じことを言っていたのを思い出した。
もしや前回も、梢はこの神社を見に来たのだろうか――考えて、その推察は正しいだろうと駿は思う。千瀬の話によれば、この町にある神社は一つだけなのだから。
「お一人……ですか？」
「あ、いえ。前役所で紹介した、タケ――木内って覚えてます？

彼と一緒ですよ。今は飲み物を買いにコンビニ行ってますけど」
「ああ…あの人……」
「ちひろちゃんと……武藤君、だっけ」

名を呼ばれてぎょっとした駿は、前回名字のみを名乗っていたことを思い出した。よもや再び会うことになるとは思っていなかったので、呼ばれるのは少し妙な心地になる。
千瀬のほうは偽名を貫くつもりらしく、“ちひろ”に笑顔で頷いた。

「二人はもしかしてアメリカンスクールか何かの生徒なの？」
「へ？」
「前も外人さんが一緒だったし……今も、前の子達とは違うけど」

梢が視線をやった先にいるのはゾラとルカだ。前回彼女と会った時にいたのはロザリーとルードだったので、梢の考えも無理なはい。よって駿は、適当に話を合わせてしまうことにする。

「あー、まぁ、そんなもん」
「あぁやっぱり」
「……ハッ、シュンみたいな低脳がスクール？　君って確か高校中退して――」
「あああぁあぁあぁ何でもないうるせーぞゾラ！！」

努力は情報屋によって一瞬で潰されそうになった（しかも名前まで呼ばれた）。突然の大声に梢は驚いたようだが、幸いにもゾラの声は聞こえなかったらしい。
ほっと息を吐いた後、駿が思い切りゾラを睨みつける。しかしゾラは微塵も怯むことなく、かえって強い視線を駿にぶつけ返した。

「僕らが何しに来たのか忘れてないだろうね？　君達いつまでもぐ

だぐだしてるなら、僕が進めるよ」
「進めるって――どうやって、」
「……そうか、君達にはわからないのか――――」
問われてゾラは暫し黙ると、すっと目を細める。
「この神社――――間違いなく、いるよ」
「……“いる”？」
「ああ。人間じゃないもの。尾花や女郎花と同じものの気配だ――――」
ゾラとルカには感じられるらしいそれが全くわからず駿は眉根を寄せた。それは千瀬も同様らしく、ただ成り行きを見守るばかりである。
するとゾラは数歩、菩提樹のそばに歩み寄った。その際に一瞬――ほんの一瞬だけ、偶然を装って梢の腕に触れる。人混み間のすれ違いでたまたま肩が触れ合うような、梢は気にもとめないような接触だ。
「コズエって言ったっけ？　君、ずいぶんこの神社に通い詰めてるみたいだけど――」
「えっ？」
刹那の間に彼女から何かを読みとったのか。ぽかんとする梢に向かってゾラは淡々と言葉を紡ぐ。
「どうして、君はここに来るの」
「それは……」
「君はここで、何を見たの？」
「……何を、みた？」

どうしてそんなことを聞くんですか。問いかけた梢の声は強ばっていた。

「教えてくれ」

「……。」

ゾラの有無を言わせぬ様子に梢は押し黙ってしまう。見ず知らずの外国人――日本語は堪能だが――にいきならそんなことを言われたのだから、無理もない反応ではあった。

「……ここは思い出の場所なんです。それだけですよ」

「その思い出は、普通の思い出？」

「……だから、どうしてそんなこと」

これでは不信感を煽るだけだ。思って駿が制止の声をかけようとすると、意外なことに千瀬が先に動いた。

「あの、梢さん。あたし達、人を捜してるんです」

「人……？」

「はい。それも、ちょっと普通じゃない人、を。ここにいるはずなんです。何か知りませんか？」

その瞬間、微かに梢の表示が変化した。

瞳の奥を現れたその、一瞬の動揺を見逃す千瀬ではない。直感的に、これはひょっとするかもしれない、と思う。

「普通じゃないって……まさか……でも……」

「知ってる……いえ、あったことが、あるんですね……？」

言いよどみ、視線をさまよわせるばかりの梢が再び口を開くまで、千瀬は辛抱強く待った。ゾラもルカも何も言わずに成り行きを見守っている。

「……4年前に、」

そうしてぽつりと彼女が呟いた時には、数分が経過していた。

「この場所で、不思議な男の人に会いました。白い着物をきていて……私達に、永遠をくれると」

「永遠……」

「いえ、正確には……永遠をくれるのはこの菩提樹で、サトマさんはその説明を」

サトマさん？

鸚鵡返しに駿が訪ねれば、梢は小さく頷いた。

「その人の名前です。彼自身がそう名乗って――」

「ねぇ」

そこで割って入ったルカの声は、鈴のように澄んでいた。振り返った梢の顔を真っ直ぐに、ぬばたまの瞳が覗き込む。

「永遠は、もらえたの？」

ルカの質問はひどく単純で、しかし確信的だった。

梢は暫し逡巡すると目を閉じる。そして、静かにそれを肯定した。

「貰えましたよ。確かな永遠を。きっと、あなた達にはわからない形で」

「そう」

ルカは頷くとゆっくり菩提樹に歩み寄った。そして、

「この木を根こそぎ枯らしてしまったら、どうなるかしら」

と恐ろしいことを言う。

「だっ…駄目だよ！」

仰天した千瀬は慌てて制止の声を上げたが、一方でゾラがルカに賛同した。

「どう考えてもそのサトマって奴がここの主だろ？　で、この菩提樹を宿り木にしてる――幽鬼の類（たぐい）がよくやることだ」

「幽鬼って何ですかそんなものいるんですか」

「少なくとも人じゃないものはいるだろ。とにかく僕たちはそのサトマって奴に会わなきゃ行けないんだから。出てこないなら引きずり出してやるしかない」

「変なことしたら協力なんてしてくれませんよ！　絶対！」

言い争う面々を前に、駿はやれやれと首をすくめる。すると、梢が控えめに声をかけた。

「あの…せめて夜まで待ってみたらどうですか？」

「……夜？」

ゾラがすっと目を細める。続きを促され、梢はおずおずと口を開いた。

「近所の子供たちはみんな夜にここへやってきます。肝試しを兼ねてるからなんですけど……でも、私も彼に会ったのは深夜でした。サトマさんは……昼間に現れるような人じゃない気がするんです。どこか不思議で……その、幽霊と見間違えましたから、最初」

「なるほどね、わかった」

ゾラが素直に承諾したので、千瀬はほっと息を吐く。しかし――次の彼女の発言に、思わず耳を疑った。

「じゃあ、今すぐ夜にしよう」

ど　ん。

瞬間、鈍い音とともに千瀬の身体は地面に倒れ込んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2371b/

『これが私の世界だから』

2011年8月3日14時18分発行